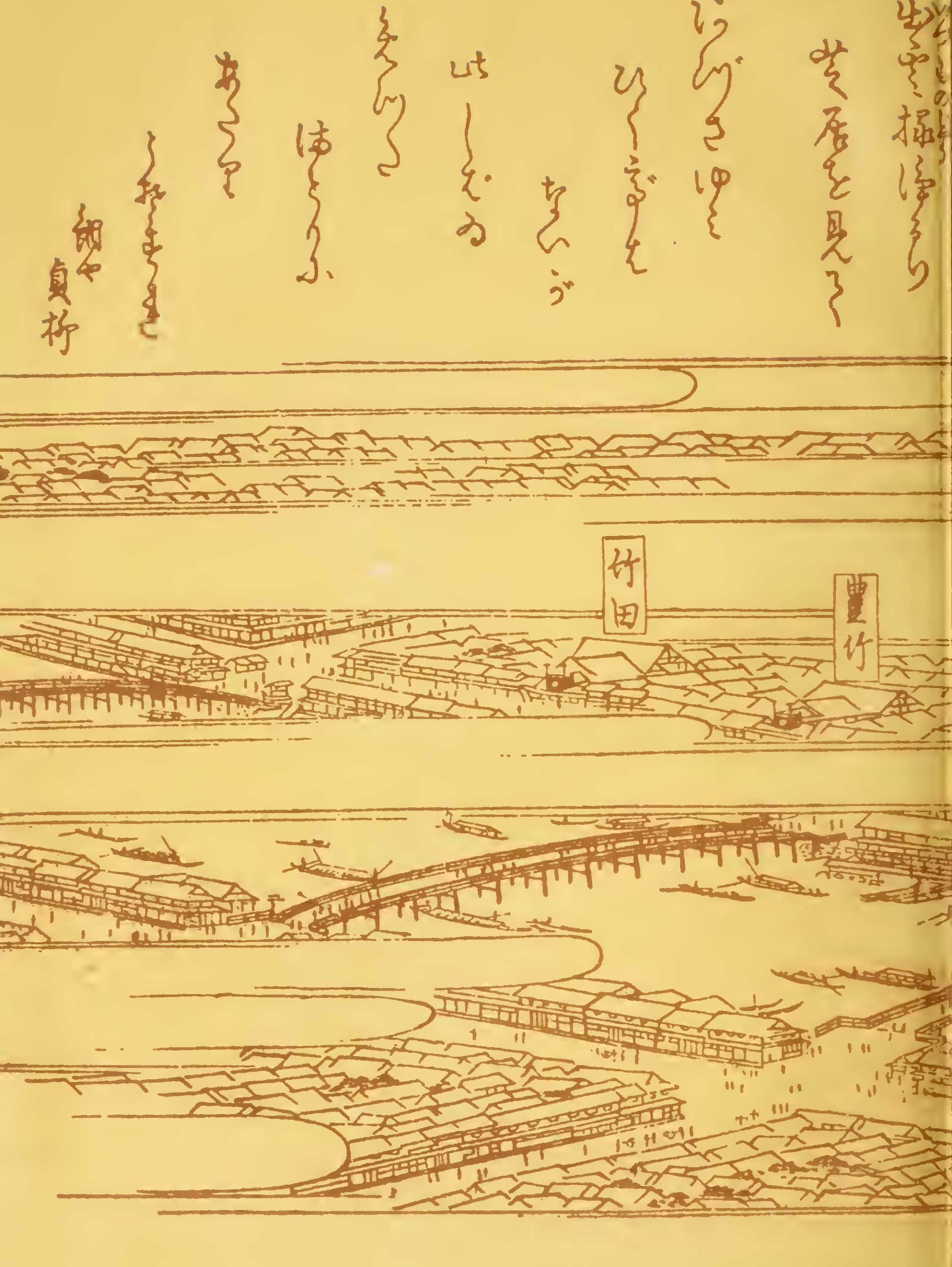



芝居を見て
鯛や
貞柳
竹田
豊竹

日本名著全集
江戸文藝之部第七巻

淨瑠璃名作集 下

この卷の裝幀――

背及表紙意匠　黒木勘藏氏案

見返し前附・後附　黒木勘藏氏案（系附、紋章覆刻）

背文字　渡邊新三郎氏筆（原本覆刻）

扉文字　近藤雪竹氏筆

箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

夏祭団七頭始篠尾
八之丞国性爺合戦の
和藤内ニ初メヨリ後
調法レテ三代前れ
文三郎
団七ニツカ
ワレシヨリ
是ヲ名ト
ヨビ大団七
小団七ニ通リ
アリ 近江源氏和田
兵衛 妹背山養七
ナツニツカウ頭是レナリ



同始弘三路頭
細工人篠尾八之丞
始国性爺安錦
人形頭ナリ
ひらかな盛衰記
ノ舩頭権四郎
杯ニモツカヒ白
スレハ市袋
市右衛門ニモ
モツカフナリ
桐竹勘十郎モツカフ



同三河屋儀兵衛次頭
細工人篠尾八之丞是
大塔宮曲孫太郎
たゞヨリ薄雪
伊賀守眉泉
ハミノ兵衛
忠臣蔵九太夫
杯ニモツカフハ是ナリ
三河屋儀平治
桐竹門三郎モツカフ



同手徳兵衛
細工人篠尾八之丞
是日本振袖の
始リ
リサノヨノ
尊の頭
ナリ
雁金文七
千本の忠信
武部源蔵
ニツ胴梶原杯ニモツカフ
古吉田才次モツカフ



浄瑠璃名作集 下巻 目録

（目錄をはり）

解題

黒木勘藏

淨瑠璃名作集上卷には、義太夫劇の創始時代から元祿の盛時を經ていよ〳〵その最盛期に向はうとするに至る迄の期間の代表的名作を年代順に收載して置いた。本卷はそのあとを受けて、義太夫劇の黄金時代の名篇傑作を始めとして、その後に出でたる代表的名作十九篇を年代順に收める事とした。

蓋し義太夫劇の黄金時代と稱すべきは延享・寛延前後であつたと謂つてよからう。「淨瑠璃譜」の延享二年七月「夏祭浪花鑑」の條に「操り段々流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟進物等數を知らず、東豐竹、西竹本と相撲の如く東西に別れ、町中近國贔屓をなし、操りの繁昌言はん方なし」とあるが、この前後が實に義太夫劇の極盛時代であつたと見て差支ないやうである。而してこれをその作品について見ても亦この期間が最も注目すべく、後世迄舞臺上の生命を有して、操りに歌舞伎に幾回となく繰返されて今日に及んで居る名篇傑作が次から次と作られた時であつた。殊に注目すべきは、從來豐竹座の作者として名聲の高かつた並木宗輔が、並木千柳と名のつて竹本座の作者として竹田出雲・三好松洛等と共に筆を執るに至つた延享二年以後の數年間であつた。卽ち本卷の始めに收めた「夏祭浪花鑑」以下の五篇はこの年間の代表作であつて、是等こそ淨瑠璃の名作中の名作と稱すべきものである。淨瑠璃として、はた又我が國戲曲として是等の諸篇は最も勝れて居る事は言ふに及ばないが、その後に於ても注目すべき作品は決して少くはない。今日

迄舞臺生命を有する作品はこの後、即ち寶曆以後に作られた物に却つて多いのである。自然本名作集中にはそれ等の作品中の代表的名作をも加へたのであるが、それが爲には題材に於ても、結構脚色に於ても、歴史的價値に於ても、又舞臺生命を有する上に於てもそれ〴〵特色を有して居ると見るべきものにして、しかも作者も作品も偏しないやうにと注意して採收するの方針をとつた。

思ふに義太夫淨瑠璃はその總數に於ては無慮六百八九十篇に上るであらう。尤もその中には外題名を傳へるのみで正本の傳はらぬもの、又は刊行されなかつたものもあつて、之を合せれば總數の約一割に達するであらう。而して又その中から近松巣林子の作約九十餘篇を除いた殘りの約五百篇内外について見るに、その中には飜案改作又は外題替などもある上に、愚作・拙作が甚だ多くして、眞に名篇佳作と稱すべきものは案外に尠いのに驚く程である。故に本名作集上下兩卷中に收めた篇數は、その總數に比しては一割にも滿たない程であるが、種々の意味に於て代表的の名作を、しかも年代的に見ても始より終迄に亘つて採集する事に努めた積りであるから、これによつて江戸時代文藝壇の一大異彩であり、又我が國近世戲曲の根幹たる義太夫淨瑠璃の眞髓を把握し、その年代的展開變遷を大觀し得られるであらうと信ずる。

以下、上卷に倣つて所收各篇の解題を試みようと思ふ。

夏祭浪花鑑（なつまつりなにはかゞみ）

延享二年七月十六日竹本座初日。作者並木千柳・三好松洛・竹田小出雲。

外題の角書に示してある團七九郎兵衞・釣船三婦・一寸德兵衞の三人及びその女房等を主要人物とし、これ

に敵役大鳥佐賀右衞門・三河屋義平次等を配して、主として大阪俠客の達引を描いたもので、九段から成つて居る。世話物九段續はこれを以て始めとする。

本曲の荒筋はかうである。泉州濱田の家中玉島兵太夫の伜磯之丞は堺の遊女琴浦に溺れて放埒を極めた結果勘當された。兵太夫の恩を受けた堺の魚賣團七九郎兵衞は磯之丞の世話をして琴浦と添はせようとする。然るに磯之丞の戀敵大鳥佐賀右衞門は琴浦を手に入れようとして奸策を弄し、且その後援者として俠客一寸德兵衞が居る。自然團七と德兵衞との達引となつたが、德兵衞も亦玉島家の恩顧を受けた者とわかり、二人は兄弟の誓をして磯之丞琴浦の爲に盡す事となり、德兵衞の舅釣船三婦の許に兩人をかくまふ。德兵衞の女房お辰は磯之丞を德兵衞の郷里備中玉島へ送り屆ける役目を果すために自ら美しい顏に燒鐵を當てて醜婦となつて世の疑惑を避ける用意をして旅立つ。然るに團七の舅三河屋義平次は琴浦を勾引して大鳥に渡して金にしようとする。團七はあらゆる侮辱を忍んで哀願したが聽入れぬので遂に舅を殺して一旦玉島に遁れたが自ら名のつて繩目にかゝり、大鳥は舊惡露顯し、磯之丞は歸參が叶ふといふに終る。六段目松屋町三婦内、七段目長町裏が全篇の山である。

さて本曲の主人公たる團七九郎兵衞の實說については明かでない。種彥の「雅俗隨筆」には、團七九郎兵衞の親殺しは元祿十四年九月廿六日、千日前にて曝さると見えて居るが、元祖片岡仁左衞門が、既に元祿十一年の一月から翌十二年春にかけて大阪の片岡座で「宿無團七」の芝居を演じて大當りを取つて居るのによつて見れば種彥の說も信じ難い。本曲初演當時の番附の口上書には次のやうにある。

魚賣團七高津祭宵宮(よみや)長町裏にて舅を殺し候は四拾年以前の儀に御座候是迄狂言には仕候へ共いまだ淨る

りには仕らず候ゆへ始終の實説を承合此度新作に取組申候(下略)

とある。本曲初演の延享二年から四十年以前といへば寶永三年であるが、これではいよ／＼年代が合はない、これより更に十年溯れば元祿九年となるのであるから、この四十年は恐らくは五十年の誤ではなからうか。それは兎に角、本曲は仁左衞門の「宿無團七」を本として新に脚色したものに相違ない事は、既にこの芝居に團七の外に德兵衞も三ぶも團七女房も出てゐるので推測されるが、この芝居を出さうとする動機を作つたのは、類似の事件があつた爲かと推察される材料がある。それは濱松歌國の「攝陽奇觀」巻六の長町裏舅殺事實と題する次の記事である。

延享元年の冬泉州堺の魚うり博奕の出入にて長町の惡漢を長町裏にて殺害す。折節其年は雪深く、殊に其頃は當世の如く人家もなき野原なれば死骸を雪に埋み置し故、此事誰あつて知る者なかりしが、翌年の春雪



初演の時の番附

解けて右の死骸出たれども、日數經し事なれば、誰が所爲とも相知れざりしが、天網遁れがたく、些かの事より露顯に及び、召捕れて死罪に行はれし、此事實を竹本座の淨瑠璃作者並木千柳筆作して舊冬の雪中の事を轉じて時候を夏とし、其年の秋芝居に夏祭浪花鑑と題し堺の魚うり團七九郎兵衞に舅の義理をからみて長町うらの段は高津祭の宵宮にて俄御輿に紛れ込みて札の辻八丁目へ歸る趣向はこれ作者の發明といふべし。

仁左衞門の「宿無團七」の筋が分らないから、件の事件がどの程度迄本曲に作り込まれて居るかを知る事は出來ないが、少くともこの事件が動機となつて本曲が作られたとは言ひ得るであらう。

また本曲第六册目德兵衞女房お辰燒鐵の趣向は了然禪尼が白翁和尚に從學せんが爲に自らその美しい面を焙いた話を轉用したのであり、八册目住吉の場で、德兵衞團七達引の間の文句に、其間拔きさいたる髭拔かうと床の床几に上足打煙草入から出す鑷なんぼうふときせんさくなりとあるのは、名古屋の南方鑷といふ名物の毛拔、これは孔明の出師表に深く不毛に入りて今南方を定むとあるのによつて近衞公が命名されたといふ由緒のある毛拔を利かせたのであると西澤一鳳は言つてゐる（脚色餘録三ノ下）

本曲は大好評であつて直に歌舞伎に入り同年八月、京都都萬太夫座で演じ、十二月には大阪の三座も競爭の形で出し、爾來操りでも歌舞伎でも幾回も繰返されて居る。それは作柄の勝れて居るのによるのは言ふ迄もないが、かく人氣を呼ぶに至つたのは、人形遣の吉田文三郎の演出上の新工夫に負ふ處も少くなつた。「淨瑠璃譜」の本曲の條には次のやうにある。

是當芝居はじまりてより世話物九段續はじめなり。頃しも暑氣の氣をとり、四つ目より八つ目迄始めて

人形衣裳帷子を着せる。これ三代前吉田文三郎趣向にて、七冊目長町裏の段本泥にて人形水をかくる事を思ひ付しは吉田文三郎なり。此人操りにかけては人形を持出れば人の如く、右狂言にては役團七九郎兵衞一寸女房おたつを使ひ、おたつ姿は今に歌舞伎にても桔梗の帷子黒繻子の前帶淺黃の綿帽子より外を着ればおたつのやうに見えぬも不思議、又團七九郎兵衞人形のわけ爰に記す。

筑後はじまりてより人形頭を打つ事名人にて鋌尾八兵衞といふ者あり。今も操りにて黑人ども能き頭を八兵衞といふが樂屋の符牒なり。此八兵衞一生の內國性爺の頭、安大人の頭、日本振袖始素盞嗚尊の頭其外新淨瑠璃によつて數多頭を作りし故、其狂言の名を以て記す。大塔宮齋藤の頭、鼎軍談にて孔明かしら、用明天皇檢非違使頭その外人形頭の異名數知れず。右夏祭團七の頭國性爺といふ敵役の頭を糸鬢となし、薄肉に塗らし、花色のぎん付の綿入、やげんの紋、三つ目床の內より大島佐賀右衞門の手を捻ぢ出る所新しく甚だ妙なり。六つ目より茶の碁盤縞を着せ、德兵衞頭は素盞嗚の頭を白塗厚鬢にて、紺の碁盤縞を着せし故、今に團七の狂言この通りの姿でなければ歌舞伎操りにても團七德兵衞と見えず。旅芝居津々浦々唐土迄も外の衣裳はやりつけになれど、此團七縞德兵衞の動かざるは、三代前吉田文三郎名人といふべし。釣舟の三婦は安大人の頭を白髮となし、赤小豆色に塗り、照柿の帷子、龍の爪にて玉をつかんで居る紋所舅義平次は齋頭の頭、黃色の帷子、今に於て替らざるは、定規の板に押したる如くなり。（この人形口繪參照）

名人文三郎の新工夫の後に及した影響の顯著な一例であると共に、人形に帷子を着せてこれを使ひこなした彼の手腕の非凡さに驚かずにはゐられぬ。

本曲は歌舞伎に入つて行はれたと共に、江戸に於ては後になつて、色々の書替へも作られたが、又一方大阪では、岩井風呂の湯女殺しを取入れて仕組まれた「宿無團七時雨傘」(並木正三作)が明和五年八月から道頓堀の竹田芝居で演じられ、これ亦名高い作の一つとなつたが、これは文化三年八月には道頓堀大西芝居で操りに仕立てて興行され、その後も數回繰返されてゐる。

作者並木千柳(宗輔)の小傳は上卷解題「苅萱桑門筑紫轢」の條に述べて置いた。

菅原傳授手習鑑（すがはらでんじゆてならひかゞみ）

延享三年八月廿一日から竹本座興行。作者竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲。

延寶九年(天和元年)六月刊行の宇治加賀掾の段物集「大竹集」の中に「虎卷」と題し「菅丞相　亂曲」と見出しをつけた短篇が載つてゐる。菅公が左大臣時平の爲に讒せられて筑紫に流され、恨をのんで太宰府に薨じ、遂に雷神となつて時平を取殺し、のち北野に天滿自在天神と祭られるまでの事を簡明に綴つてある。その中に菅公は父母共になき天降り人であることも、「梅は飛び櫻は枯るゝ」の歌も、飛梅の奇瑞も作り込まれて居り、殊に叡山性空坊の許の柘榴火の條は割合に詳しくて、ほゞ謠曲「雷電」を踏襲してゐる。短篇ながら纒つてゐる。同じく加賀掾の正本として「天神御本地」の外題が傳はつて居るが、未見の書であるから本曲との關

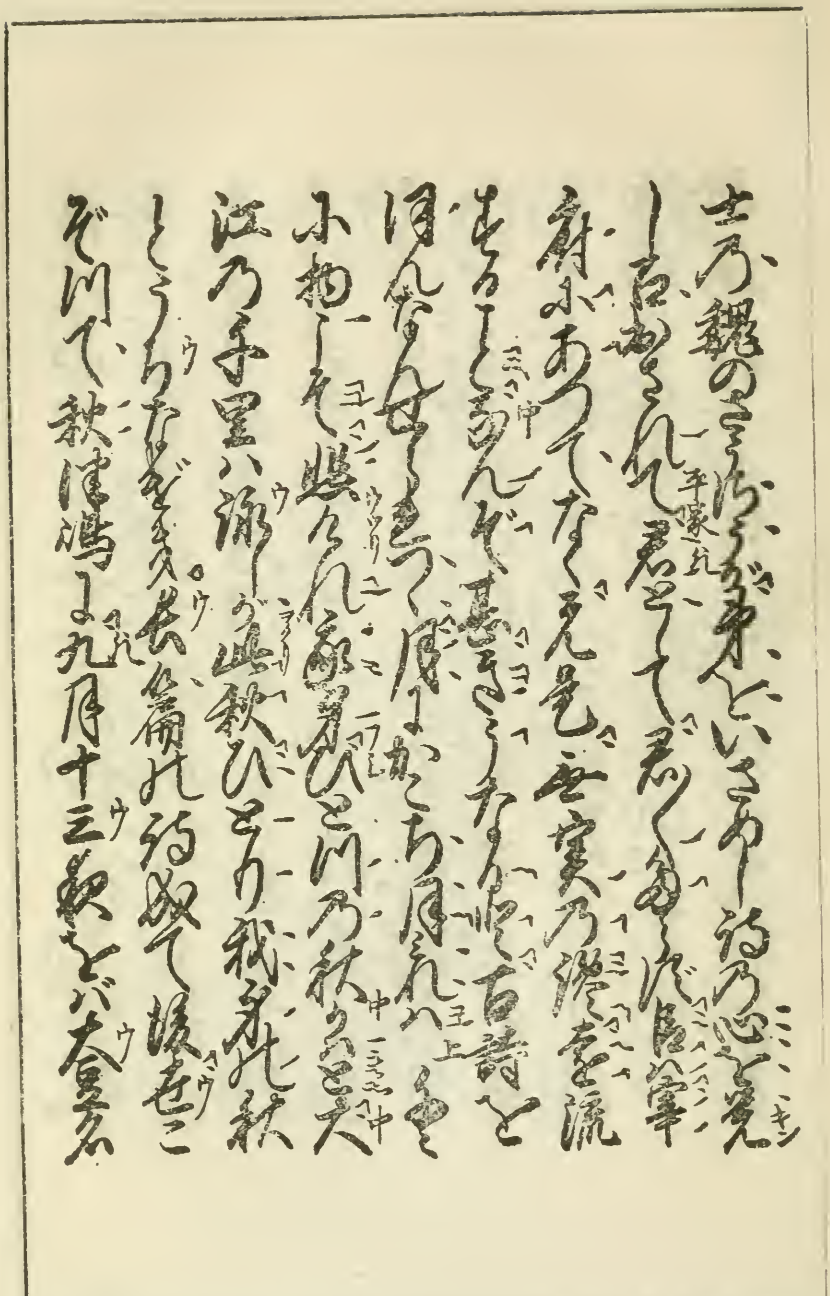
虎卷菅丞相　亂曲

夫我国ハ神国にて何事もお任せ候て、
かまへて天照天神ハ人神にして親
元来父母をなすきはめ人をそむきぬ
ゑいう原んじなく候ハゝ人間の様子
無御方さて人皇六十代醍醐てしよ
つまり御代右大臣に任ぜられ関白識
よ運して天下国家を治め給ふ。余力ある時ハ
詩文和哥管絃のミち学ひのことなる方
もなく国家を君の補佐無しよひ

二

おさぐ菅原乃時平と申ん者を申さこそ
神と浮世の讒奏上を流乃罪に
宇志川となかれ引き白波れ身の
うき思ひと君をかゝみを残してとゞめよし
うちながむる月乃東に都を出衛月
、十三日に太宰府小男の陽宝れ露や
かあらさやかひしく梅ゐ神無にをを
てその一ひある残乃君るめどられ
枕きまぎくて梅乃盛き秋更て花れ

ゆふ暮に吹風の波のあらむしの声とかや
まして見えし西の海のひはうくしとして新艶
たそかれ波の上に月の夕影の霜洞とひ
四方にあらてさき浦にもかあはれくらさ
てまりも何とかの御縁のゆく之友にぞ
蜑さへもあはれしか郷に植おく松の
とかひて見せはさてもまた苦屋さいの
思召ほ便へて秋もそかしおもりにちりき
観音寺れ建にたえしと称せん尼屋



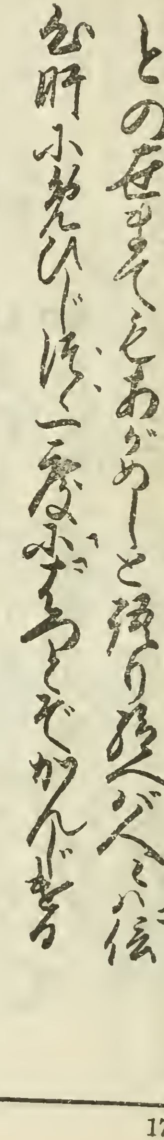
月はさやけさし寄を讀習と催し襟意を
まじし見なす詠て黄葉なづらしれ秋の
夜も早過乃門庭も遠くまへ實れ彩
ざにきなくあつにておくいろく雪は家に
ぞなしろ空まくらふかの東風吹く匂
ひをこ世よ梅の花おうだ家さそ春まず
まそし詠じ古風へ不思議や家さまの
梅は庭上小島徒しきび香梅へと
び梅はかつし去れ中に何とて松はほまと

なまうんとれ伝哥に書も老すれ来乃花
来社と説ひまもりかさざひと後ちて
後者の根と報ぜんし大いぞく乃法を邕
七月七夜天帝に歓会と寺ちまらし
かんあんそぞ表こせひあかされ木致を
みてぞして延喜三年二月廿五日にハ左
遷れ君し消まふ魔のりせ先は身を甚
随ひえいハ山延暦寺の和尚法性坊は徳に
もそて貴き人おかしましし人ハ三状の夌の

殷五音を未修めざらん人は九位の窓前にせゞ
此床の急不経の法水と盛へて三密
乃障をも除しかんかに書店人と別しくも
ぞらぬかうすは諸なりんと思ひ書人と衆
喜貝人の人へ急に一障や五日五音を
思ふを閑へし菅丞相めておりし面をあ
きやしと思ひ清し入れり源氏の御気院
何事にりもありしうべ菅丞相参しのてまて
濁るを世に生して世の業を発を弘めし

ぶんしんれあらと報ぜん事ある雷となん
時ぜんしん針すなしらう治てさかへ以の
ろう勅使ありとても内裏ハ急り御も
びへ仕まさせても小畑座とおりしかハ報せずらへ
驚此御門なりきさハそとも侍もある旨しから
ろう勅使なりけたる二茂臣ハ急ぎおかず勅使
度ふ及けて淳天乃下平出れ因王土に
あらずと云まなかさふのをハめゆと宣へや
當座相乃御門を又ハ浅かすと瑶つまつ翁すれ

御前ふざくるを書きとりしとお聞ありにて
合てならし他かみてござさ書置ふまつと
まきやうく成家わきだくろかぬちぬちに火焔と
成て書置小三尺計りへあがり侍正月あひ
忘やふれし平とむすんでぢんしれ體を忘る
世しらバ火焔ハまごにまの消しとや元まよりも
ぐふなりの神れおござ時平を元穀しまふ裏れ
生化度て也帝の寛小恩百天暦の秋れ
未都小野ふ弘をと立天満自在天神と



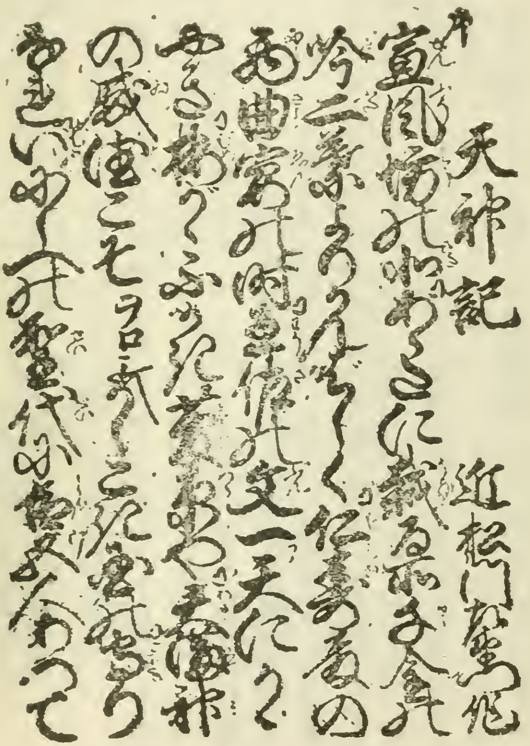
係は明かでない。で、管見の範圍では、菅公關係の史譚や傳説や信仰を本として作られた淨瑠璃としては本曲が最も古いやうである。

この菅丞相亂曲に次いで作られたのが近松の「天神記」である。正德三年二月廿五日から竹本座に上場された。左大臣時平が唐の使者斐文藉と謀つて道眞が夢裡に唐土へ渡つて詩を賦して唐帝から裝束を賜つたとは僞にて、實は數年前から彼の國の大臣と內通して日本を滅して彼の屬國としようとの逆臣であると讒奏して太宰府へ流す。時平はその執權笠見藏人をして左遷の途上菅公を失はせようとしたが、公の御臺の恩を受けた時平の隨身秦の兼竹及びその妻十六夜の働によつて難を遁れる。太宰府では白太夫の宮仕を受け、又公に危害を加へようとする惡漢荒藤太(白太夫の總領)は兼竹に取挫かれ、兼竹は白太夫の乙娘小梅と夫婦の契を結ぶ事となると、尼が崎の沖で菅公の爲に藏人の矢先にかゝつた姉の十六夜の亡靈が現れる夢幻的の場面などがあつて、天拜山の祈禱から雷神となつて時平一味を震死させ北野に祀られるに終る。前の加賀掾の菅丞相亂曲によつた點もあるが、その他渡唐天神、左遷天神、綱敷天神、柘榴天神等の傳説や信仰を主として、これを近松一流の想と筆とで作り上げたもので、その題名の示す如く菅公とその御臺中心の作であるが、白

太夫及びその子荒藤太小松（十六夜）小梅及び時平傘竹などが主要人物として活動して居る。

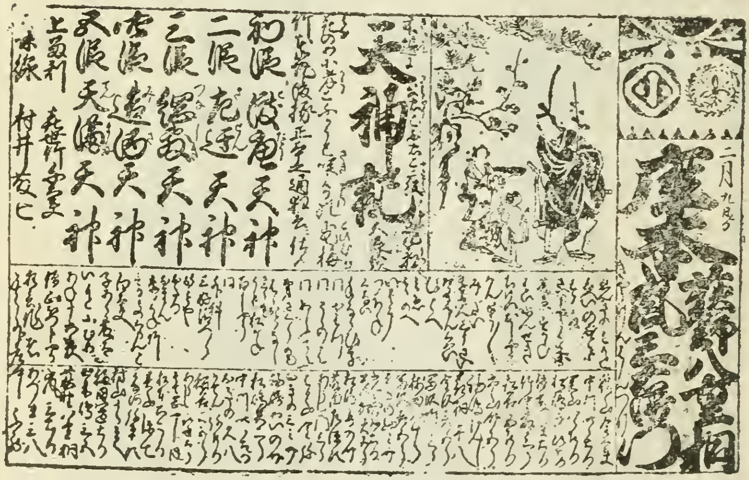
本曲は翌正徳四年二月九日から大阪の荻野八重桐・嵐三右衛門座に於て「竹本筑後掾正本之通狂言に仕候」と斷り書迄つけて興行して居る。參考としてその番附をこゝに揭げて置く。

さて此の「天神記」を藍本として更に種々の傳說を取入れて趣向を立て技巧を凝して、作り上げられたのが「菅原傳授手習鑑」である。今兩作中の主要人物についてみるに、白太夫は性格の相違はあるが共通の名である。然るにその子供である此の作に於ける松王・梅王・櫻丸は、彼の作の荒藤太・小松・小梅を轉化させたのであらうが、三つ兒としたのには、當時大阪の天滿で三つ兒を生んでお上から五十貫文の鳥目を下さつたのを當込んで、「梅は飛び」の歌によつて想を構へて人物を描き別けたものと思はれる。而して彼の傘竹が是の松王に振替へられ、是の松王に當る彼



天　神　記

の荒藤太はこれの宿禰太郎に轉じ替へられて居る。そして松王の女房に千代、梅王に春、櫻丸に八重を配したのなどは頗る凝つた命名法である。武部源藏は傳内流を開いた江戸の書家建部傳内から思ひ付いたのであらうが、不義をした彼等夫婦が丞相の御臺の庇護を受けて深くその恩義を思ふのは、「天神記」で兼竹と十六夜との間の不義の兒を御臺が拾ひ上げた恩に感じて丞相の爲に命を捧げるといふ趣向の飜案である。斯の如く兩作を仔細に比較すれば、その關係は決して淺くない。而も本曲は「天神記」の如く作意を菅公を中心とせずして、その關係者の活動を主としたのは、既に「天神記」がある以上は當然の行き方であるが、その構想は頗る勝れて居る。殊に作者三人が相談の上で持場を定めて、松洛は二段目の切で菅公と苅屋姫との生き別れ、千柳は三段目の切で白太夫と櫻丸との死別、出雲は三段目の切で松王と小太郎との首の別れと、から肉身の生別死別を三樣に描き別けて、しかも互に趣向が侵し合ふ事がなく、それ〴〵特色を發



天神記番附（正德四年興行）

揮して居るのは他に類例を見ない處である。

全篇を場割りにして見れば、大序大内の段から、口賀茂堤の段で齋世親王と苅屋姫との濡事が後の波瀾の伏線となり、切の筆道傳授の段が四段目の寺子屋へ照應を保つ。跡は門外。二段目は道行、口汐待の段、切は道明寺で杖折檻、八幡鷄、丞相名殘の各場から成る。三段目は口が車曳、切は佐田村の賀の祝で、茶筅酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開する。四段目は筑紫配所の場、天拜山飛梅、北嵯峨の隱れ家、寺子屋とから別れて居り、今日行はれる松王屋敷の段は後の蛇足である。五段目は大内の場で時平一味の最期を中心とする。

本曲に於ては、四段目の切寺子屋が最も有名であり、又最も勝れて居る事は言ふ迄もない事で、淨瑠璃の時代物を通じて一大系統をなす身代り首實檢の趣向の代表的のもので、近松以來の諸作者によつて幾回となく試みられたこの趣向が、こゝに至つてその頂點を示したものといつてよい。それと共に又この場の名セリフや名文句にも、前の諸作に負ふものが少くない。例へば「人形かく子はあたまかく、敎ゆる人は取分けて世話をかくとぞ見えにける」は近松の「釋迦如來誕生會」第三段槃特手習の條の「覺えぬくせにあて字書く、敎ゆる人は頭かく、世話をかくとぞ見えにける」から來てゐる。又首實檢の場は大體に於て近松の「吉野都女楠」の第三段目口東寺尊氏本陣の場の小山田前司の首實檢の場の飜案であつて、「眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て」は「近々と立寄り右へ廻り左へ向き、ためつすがめつ見れば見る程、疑もなき我が子の高家」といふ句の作りかへであり、「生顏と死顏は相好が變るなどと、身代りの贋首、それもたべぬ、古手な事して後悔すな」は「これ前司殿、生顏と死貌とは相好の變るもの」といふ大森の詞の燒直してある。そして源藏夫婦の「五色の息」は「天神記」の白太夫の「五色の涙」から來たのであるらしく、段切れのいろは送りの名

文句は並木宗助（千柳）作の「藤原秀郷俵系圖」（享保十四年）の第四段目の切の一賢女の手本我がいろは、ちりぬるからだをかき抱き、見送る夫の契りはあさき、ゆめみし心地立酒にゑひも、せず京都路に母と、妹は立歸る」の改作といつて差支ならう。

此淨瑠璃は非常な好評で翌四年三月迄打續けたが、これは作柄の勝れて居る上に、人形遣の吉田文三郎の考案が與つて力あつた事は淨瑠璃譜の記事が之を證して居る。彼が工夫した菅丞相や、松王・梅王・櫻丸の衣裳などは後迄もその樣式が守られた程であつた。江戸の豐竹肥前掾座に於ては翌延享四年二月十八日から興行し、江戸町中の手習師匠



菅原繪番附（寶暦六年八月）

方へ切落札を配つて人氣を煽つたので、これ亦大當りで、秋迄打通した。

歌舞伎で始めて演じられたのは、延享三年十月京都淺尾元五郎座であり、大阪中の芝居では延享四年八月江戸では、中村、市村兩座とも延享四年五月から演じられ、その後度々繰返されて居る。こゝには寶暦六年八月中村座で演じられて好評であつた時の繪番附を示して置く。

淨瑠璃の方面での飜案物としては、「振袖天神記」がある。明和六年正月竹本座上場で、作者は近松半二・近松桃南・松田才二・三好松洛である。菅丞相の生立ちに紀名虎・橘宗岡の叛逆を取合せたものである。歌舞伎の方面では並木正三の「天滿宮菜種御供」(安永六年)が名高いものである。

義經千本櫻（よしつねせんぼんざくら）

延享四年十一月十六日から竹本座興行。作者竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

數ある判官物の戯曲中最も名高いもので、前に述べた菅原や後の忠臣藏と相並んで最も世に知られて居り、又最も受けのよい作である。外題は「義經千本櫻」となつて居るが、內容は壇浦に於て沒落した平家の後日譚といふ方が當つてゐる。賴朝の使者川越太郎が義經に尋問した三ヶ條の不審の第一として、「平家の首の內、新中納言知盛、三位中將維盛能登守敎經この三人の首は贋物云々」と言つてゐる。この言葉は實に全篇の伏線を敷いたものである。されば之に應じて屋島の陣を拔出でて高野に登り熊野に詣でた三位中將維盛を吉野下市の鮨屋彌助に、碇を負つて壇の浦に入水した新中納言知盛を大物浦の渡海屋銀平に、內侍の局を銀平女房に、少女實は安德帝、橫河覺範實は能登守敎經と、からいづれも變名變裝させて世を忍び人目をくらまし

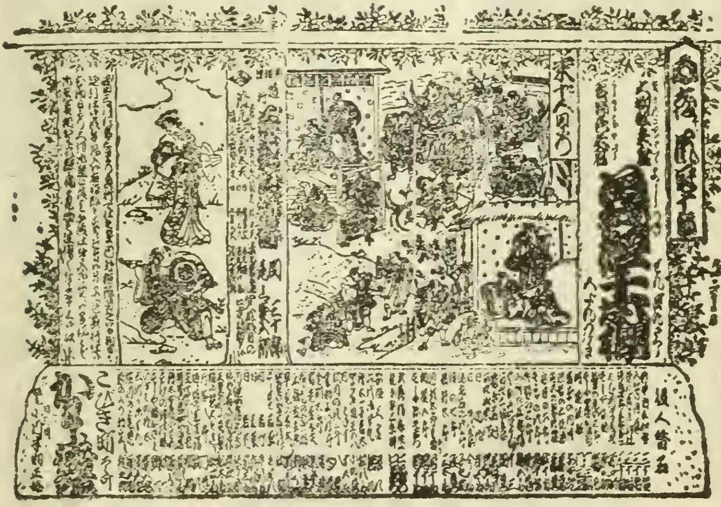
つゝ、義經を討取り源氏に復讐しようとする。こゝに當代民衆の探求的興味を喚起すると共に、花と散つた平家の末路を悼む同情の念に或種の滿足を與へようとし、併せて血あり涙ある名將義經の面影を浮出させようと企てて居るやうに思はれる。但し作全體を通して見れば、人物の上では義經はワキ役格で、源氏方では忠信と、その姿を借りた狐忠信とが最も重要な役をつとめて居る。發端序詞の「忠なる哉忠、信なるかな信」といふ句も何となくそれを暗示して居るやうにも取れる。

全篇五段の梗概を示せば、第一段大序は「大内の場」で、平家を滅して後白河法皇に復命した義經は、左大臣朝方から、勅諚の名の下に、兄賴朝を討てとの謎をかけて初音の鼓を賜る。止むを得ず一生鼓は打たぬ決心で拜領して退出する。中は「北嵯峨庵室の場」で、世を忍ぶ維盛の御臺若葉の內侍は、夫が高野山にあると聞いて六代君と共に主馬の小金吾を供に出立する。これは三段目への照應をなして居る。切は「川連上使の場」である。歌舞伎では大抵こゝから出す。二段目口「伏見稻荷の段」は靜が義經から形見として初音の鼓と着背長を賜る場で、四段目の狐忠信の伏線を敷いたものである。中渡海屋から、切大物浦船車の場。三段目口椎の木から切鮓屋の段。四段目は「道行初音の旅」から吉野藏王堂の評議の場があつて、中「狐忠信の段」から、切の横河覺範實は能登守敎經と義經との出會となる。五段目は「吉野山の段」で、忠信が義經と名のつて鎌倉方の者と戰つて居る處へ覺範が現れると、忠信は屋島に於ける兄繼信の敵と打つてかゝり、雙方互角の働き、殊に忠信には源九郎狐が附添つて居るので通力自在である。こゝへ河越太郎が元兇朝方に繩をかけて出ると、平家に取つても敵であると覺範の敎經がその首を討ち、覺範は忠信に討たれる。

本曲では三段目の渡海屋と四段目の切から五段目の吉野山の段とへかけてが眼目であるから外題にも「大

物船矢倉」＝「吉野花矢倉」と角をつけてある。而して渡海屋から碇知盛の段はいふ迄もなく謠曲の「船辨慶」の飜案であるが、この趣向を立てる爲にヒントを得たのは「ひらがな盛衰記」の三段目の船頭權四郎内から逆艪の趣向ではなからうかと思ふ。

次に狐忠信の原據は何か。これより以前に源九郎狐の傳說があつたといふ事は聞かない。寧ろ源九郎狐の名は彌助鮨と共にこの作に基いたものらしい。愚見では近松の「天鼓」(祿十四年)から想を得たものではあるまいかと思ふ。何となれば「天鼓」では伶人富士丸の家に傳はる名高い天鼓は丹州四松の白狐の御臺狐なる千年劫經たる女狐の革で張つたもので、これを守る多くの狐の中に伊賀の上野の古狐彌左衞門狐とその子彌助狐とがあつて、この二つの狐が働くといふ仕組になつて居る。處が本曲の初音の鼓は桓武天皇の御宇に内裏で雨乞の時に打つ目的で大和國に千年劫經たる牝狐牡狐の革で張つたものである。そして子狐がその鼓の音に引かれて忠信の姿を借り

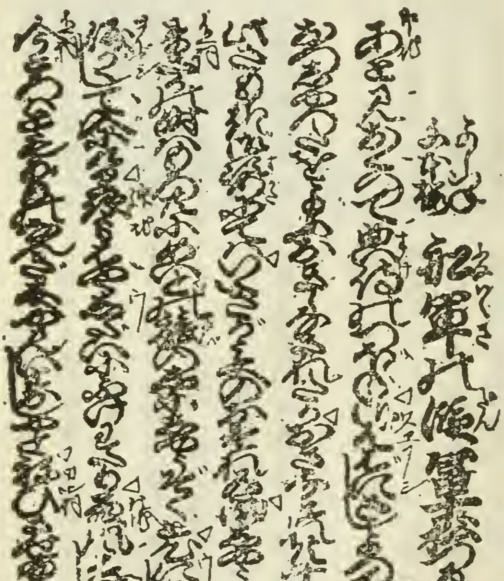


千本櫻番附(文政十一年)

て現れて靜の手にあるこの鼓を守るといふ仕組で彼此相通ずる想である。のみならず彌左衛門・彌助親子の名は彼にあつては狐の名であつたのが、此に於ては鮨屋親子の名であるなど、兩作の間に關係を求めても無理ではあるまいと思ふ。それ故初音の鼓は天鼓から生れたもので、彌左衛門彌助親子狐の名は鮨屋の方へ振替へられた代りに、こゝへ葛の葉と狐葛の葉の趣向を飜案して取合せ、忠信と狐忠信とを働かせたものであると考へる。

　この淨るりも大當りであつたが、その功勞者の一人たる吉田文三郎の働きについて例の淨瑠璃譜は次のやうに言つて居る、

此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮨屋彌左衛門・佐藤忠信三役なり、源九郎狐の人形廣袖にて、是に源氏車の模様だんだらの丸絎、人形頭素盞嗚にて、此時はじめて耳の働く仕掛を思ひつきしなり。源九郎ゆゑ源氏車の模様を付けしにはあらず。此趣向最初より狐と見せざる事故玉もつけられず。色々に工夫をなし、右



船軍の段

狐場を勤むる政太夫の紋所源氏車ゆゑ、源氏のゆかりにて源氏車の模様つけし故、今も歌舞伎などには、長上下にて仕れども、どこぞのはづみでは此姿にならねば源九郎狐めかず、是も三代前吉田文三郎仕始めて何國でも此姿でなければ源九郎狐は出來ぬ／＼。

本曲はその後操芝居に於ても幾度となく繰返して演じられたが、又歌舞伎へも移入されて今日迄も舞臺に生命を有してゐる。而して歌舞伎としては、本曲が竹本座で初めて興行された翌年の寛延元年正月伊勢の芝居で山本小平次の忠信、片岡仁左衞門の銀平と覺範で演じられたのが始めであるといふ。次に同年五月五日初日で江戸の中村座で上演、主役は、銀平中村傳九郎、權太・忠信・源九郎狐澤村長十郎、彌左衞門・覺範市川海老藏であつた。一ケ月後れて同年一月森田座では、銀平・權太中島勘左衞門、辨慶・覺範大谷龍左衞門、忠信・源九郎狐芳澤あやめ等の役割、更に同年八月には大阪中の芝居で銀平・川連市川團藏、靜芳澤崎之助、忠信・源九郎狐川越嵐三十郎、彌左衞門・覺範姉川新四郎等の役割で演じられ、それより三都を始め地方迄も盛んに上演されるに至つた。

江戸では、道行だけは單調を避けて豐後節を用ひた。その主要なるものを左に年代順に列擧する。

明和四年七月　市村座　道行初音旅　常磐津若太夫　狐忠信(市村羽左衞門)　靜(瀨川菊之丞)

安永三年八月　市村座　道行初音旅　富士岡若太夫　狐忠信(嵐　三五郎)　靜(瀨川富三郎)

安永六年四月　森田座　雪颪卯花籬(ゆきおろしうのはなまがき)　常磐津兼太夫　狐忠信(松本幸四郎)　靜(岩井半四郎)

(この曲は好評で、「古忠信」と稱へて後迄行はれた)

天明元年七月　森田座　友音經初音旅裝(ともぎつねはつれのたびね)　常磐津芳太夫　源九郎狐(岩井粂次郎)　靜(山下松之丞)

寛政六年五月　河原崎座　時鳥花有里（ほととぎすはなあるさと）　常磐津文字太夫　狐忠信（岩井半四郎）　靜（小佐川常世）
（作者は増山金八。寛政十年六月中村座再演）



新曲初音旅

享和三年八月　市村座　戀中車初音の旅（こひちうしゃ）
常磐津喜代太夫　狐忠信（市川八百藏）
靜（瀬川路之助）
（作者は福森久助。好評、「忠信」と稱へられて後迄行はれた）

文化五年五月　中村座　幾菊蝶初音道行（いつもきくてふはつねのみちゆき）
富本豐前太夫　狐忠信（中村歌右衞門）
靜（瀬川路考）
（好評、富本名曲の一、通稱「忠信」）

文化八年九月　市村座　道行初音旅
常磐津小文字太夫

文政八年五月　市村座　新曲初音旅
常磐津小文字太夫　狐忠信（坂東三津五郎）　靜（瀬川菊之丞）

文政十一年三月　河原崎座　菊鷄闘初音（きくにとりせきのはつね）　清元延壽太夫　狐忠信（関三十郎）　靜（尾上菊五郎）

その他詳しく擧げる煩に堪へない程多い。この中で最も著名なのは、名人二代目富本豐前太夫によつて語り

出された「幾菊蝶初音道行」である。これは後に外題も詞章もそのまゝ清元に移されて、同流によつても語られてゐる。文章は原作「道行初音旅」を多少改めてあるがその語り出しの「戀と忠義はいづれが重い」の名文句はそのまゝ踏襲されて居る。

假名手本忠臣藏（かなでほんちゅうしんぐら）

寛延元年八月十四日から竹本座上場。作者竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

今更解題を加へる必要もない程知れ渡つた作であるが、また書き出せば際限もない程材料も多のであるから、他との釣合上大體を述べるに止めようと思ふ。

先づ義士戲曲の系統を概觀しよう。元祿十五年十二月十四日の夜赤穗の義士が復讐の本懐をとげ、翌十六年二月四日一同に切腹を仰付けられた。この絶好の材題を先づ劇化して演じたのは、それより十二日目の事であつた。「古今いろは評林」所引の其角から大阪の某氏へ宛てた手紙の一節に曰く、

此程の一件も二月四日に片付候て甚噂とり〴〵花やかなる說も多く候て無上忠臣と取沙汰此節其事ばかりに候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致候て十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事遠慮も有るべき由とて三日にして相止候云々

即ち元祿十六年二月十六日から江戸の中村座で曾我の夜討狂言に托して、この復讐を仕組み、十郎は元祖中村七三郎、五郎には宮崎傳吉が扮したが、僅か三日で差止められたのである。次に出たのが近松の作「碁盤太平記」で、事件より五年目の寶永三年六月である。これについては近松名作集上卷に本文を収め、解題も

添へて置いた。次は寶永七年に大阪篠塚庄松座で興行された「鬼鹿毛武藏鐙」である。作者は吾妻三八、小栗横山の世界で、篠塚次郎右衛門大岸宮内、佐野川万菊力彌大當りであつた。續いて京の夷屋座も萬太夫座も大阪の榊山座も相競つてこれを上演した。のみならず紀海音はこれを藍本として淨瑠璃「鬼鹿毛無佐志鐙」を作つて、正德三年十二月一日から豐竹座で興行した。これは本名作集上卷に收めてある。このあとを受けて出た淨るりは「忠臣金短册」で同じく豐竹座に上場されたもので、作者は並木宗輔を主として小川丈助と安田蛙文が加はつて居る。「碁盤太平記」と「鬼鹿毛無佐志鐙」を折衷して更に新工夫を



初代宗十郎の由良之助

施した作である。又正本は見ないが、元文三年七月には京都の宇治加賀の操芝居では「忠臣いろは夜討」を出して居る。

轉じて歌舞伎の方面を見ると、淨るりの方面よりは更にその興行は頻繁であつた。「古今いろは評林」に次のやうにある。

其後享保二酉年大阪にて故澤村長十郎大岸となりて、姉川新四郎寺岡平右衛門の役をぞ勤め大當りを得て同十一午年の秋大阪嵐三右衛門座にて又も澤長此役をなせど、此時は狂言少し變りて、不破數右衛門に嵐勘四郎勤めしなり。享保廿卯年四月大阪にて中村十藏則ち座本にて大岸宮内の役をなして、此時堀部安兵衛に藤川平九郎、夫より後狂言いろ〳〵とかはり作る。或は大岸に姉川新四郎などの勤めし事もあり。後延享四年京都中村粂太郎座本の時、大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎大岸役にて六月朔日より初日出して大入を取りしなり、其矢聲大阪にひゞき同じ外題にて市山助五郎宮内の役にて狂言勤めたり。今の假名手本七つ目は此時澤村宗十郎が形と成りて、凡そ其俤を手本と成し來れり。

斯の如く操りに歌舞伎に屢々新作が上演されて、名人の型も出來たあとを受けて元祿十五年の討入より丁度四十七年に當つて作られたのが、「假名手本忠臣藏」である。大體淨るり系統の諸作の長を取つて更に新工夫を施したのであるが、又歌舞伎の「大矢數四十七本」に負ふ處多く、殊に七段目の大星は澤村宗十郎の藝をモデルとした事は「古今いろは評林」の藝評の部にも詳述されて居る事である。かういふ次第で、いはゞ忠臣藏はこれ迄の義士劇の集大成されたものである。それと共に、後の數多くの改作飜案物に對して直接間接影響を及して居る。今この忠臣藏を中心として、その前後に如何に多くの義士劇があるかを概觀する便宜上、

西澤一鳳の「忠藏類聚大成」の序の中に擧げてある年表を左に引用する。

淨瑠璃	碁盤太平記	上下	寶永三戌年五月五日より竹本座作者近松門左衛門
同	忠臣金短册	三段續	享保十八丑年十月朔日より豐竹座作者並木宗助
歌舞伎	鎧櫻故鄕錦	八段物	享保廿年三月十一日より江戸中村座作者澤村訥子
同	忠臣いろは軍記	九段物	享保廿卯年九月十八日より江戸市村座作者津打治兵衛
淨瑠璃	忠臣いろは夜討	五段續	元文三年七月十五日より京都芝居作者宇治加賀掾
歌舞伎	粧武者(けはいむしや)いろは合戰	九段物	寛保元酉年九月九日より中の芝居作者並木丈助
同	大矢數四拾七本	九段續	延享五寅年七月七日より角の芝居作者並木永助
淨瑠璃	假名手本忠臣藏	十一幕	寛延元辰年八月十四日より竹本座作者竹田出雲掾
歌舞伎	泰平いろは行列	十段續	寶曆十二午年極月十二日より角の芝居作者並木正三
淨瑠璃	難波丸金雞(なにはまるこがねのにはとり)	十三段	寶曆九卯年五月十四日より豐竹座作者中村阿契
同	いろは歌義臣鏊(ぎしんかぶと)	十一段	明和元申年臘月十五日豐竹座作者中村阿契
同	太平記忠臣講釋	讀切十一册	明和三戌年十月十六日より竹本座作者近松半二
同	通矢數四十七本	十段續	明和七寅年十月三日より竹本座講釋忠臣藏寄物
歌舞伎	小袖藏いろは配(てくばり)	七册物	明和八卯年四月十一日より京東芝居いろは／＼寄物
淨瑠璃	忠臣後日噺	上下	安永元辰年四月七日より堀江豐竹座作者北脇素人
同	躾方武士鑑	十幕	安永元辰年四月廿八日より竹本座作者近松半二

淨瑠璃　いろは藏三組盃　續　十　幕
安永二巳年七月廿八日より曾根崎
竹本座作者近松半二

歌舞伎　僞討（うつたりや）日本一　忠臣鎾七册物
安永三午年霜月八日より京因幡藥
師作者辰岡万作

淨瑠璃　忠臣いろは實記　續　十　一　段
安永四未年七月十五日より江戸豐
竹座作者福内鬼外

歌舞伎　日本花赤城鹽竈（はなはさくらぎあこのしほがま）　いろは文字四十七段續
安永七戌年正月四日より角の芝居
作者並木五瓶

淨瑠璃　合詞四拾七文字　十　一　段
安永九子年九月廿三日より堀江此
太夫座いろ〳〵寄物

歌舞伎　敵討四十有七人（しじふしちにん）　十　一　幕
天明二寅年正月十九日より京早雲



座作者並木正三

淨瑠璃　太平記義臣礎（たいへいきぎしんのいしずゑ）　十冊物
天明四辰年正月二日より堀江此太
夫座作者黑藏主

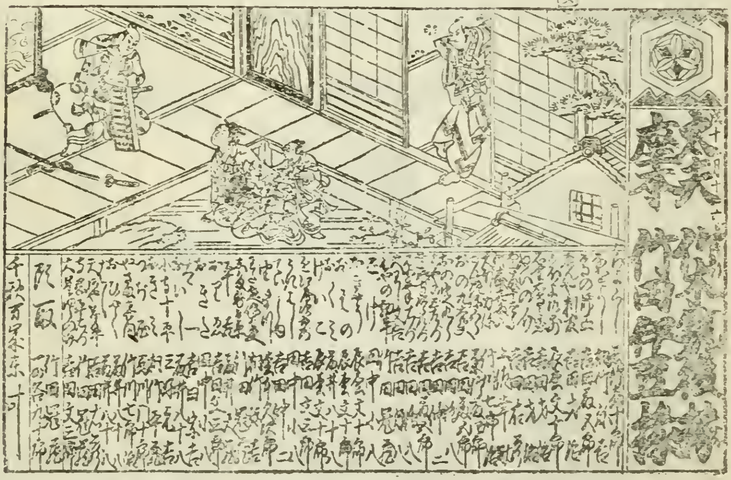
同　廓景色雪の茶會（さと　ちやのゆ）　十一段
天明七未年九月廿一日より豐竹座
作者梅の下風

歌舞伎　いろは假名四十七訓（なゝよみ）　十一冊
寛政三亥年九月十一日より角の芝
居作者奈河七五三助

淨瑠璃　鼻手本給金藏（はなてほんきふきんぐら）　九幕
寛政五丑年九月晦日より堀江此太
夫座いろ〳〵寄物

歌舞伎　忠臣双葉藏　清書九冊
寛政五丑年十一月七日より中の芝
居作者辰岡万作

同　義臣傳讀切講釋　十一冊



臣講釋)

寛政六寅年十一　廿二日より中の芝居作者並木五瓶

淨瑠璃　扇矢數四拾七本　いろは假名四十七段續　寛政九巳年三月十五日より中の芝居作者辰岡万作

同　忠臣兩國織　十一幕　寛政十午年五月五日より江戸森田座作者櫻田治助

淨瑠璃　忠臣二度目清書　續十一段　寛政十午年三月十一日より江戸豐竹座作者鳥亭焉馬

歌舞伎　名產赤穗花鹽　十一冊　寛政十午年九月十三日より江戸市村座作者福森久助

淨瑠璃　忠臣一力祇園曙　九冊物　寛政十午年八月十五日より堀江此太夫座作者芝屋芝叟

歌舞伎　繪本忠臣藏　十冊物　享和三亥年七月廿二日より大西芝居作者近松德三

淨瑠璃　假名手本義士の書添　十三段　享和三亥年八月十九日より堀江此太夫座作者屏風裏形

歌舞伎　いろは歌譽櫻花（ほまれのめいぼく）　四十七冊　文化三寅年正月廿一日より角の芝居作者近松德三

同　以呂波歌櫻秀逸（はなのしういつ）　十一首　文化七午年五月九日より曾根崎芝居作者奈河晴助

同　大石摺櫻花（さくらの）短册　拔萃十三枚　文政五午年三月十日より中の芝居作者奈河晴助

同　太平記十一鑑（さならひかゞみ）　十一幕　天保六未年十月三日より角の芝居作者西澤一鳳

同　花菖蒲（あやめ）いろは連歌　四十七段　天保十二丑年五月十日より江戸市村座作者西澤一鳳

同　紅楓（からにしき）いろは文庫　十一段　天保十三寅年七月廿一日より角の芝居西澤一鳳

同　いろは藏双合鑑（あはせかゞみ）　十冊物　天保六未年三月四日より伊勢古市芝居いろ／＼寄物

同　裏表忠臣藏　幕なし廿二段　天保十一年三月七日より江戸河原崎座作者三升屋二三治

同　大石摺義士法帖　十一冊　天保年間未不出淨るり近々出版作者西澤一鳳

同　増補裏表忠臣藏　幕ありなし廿二段
天保十五辰年三月七日より角の芝
居作者西澤一鳳

淨瑠璃忠臣國字(いろは)譬(たとへ)　四十七枚
天保年間の作讀淨るり近々出版作
者西澤一鳳

以上は強ひて義士の數に因んで四十七篇を選び、且つその中へ自分の作を多く加へようとした爲に、漏れて居る作も少くない。例へば淨るりの「鬼鹿毛無佐志鐙」の如き、歌舞伎の「太平記さゞれ石」「豐年榮代藏」の如きこの一例である。而して又歌舞伎に於ては天保以後に於て新作されたものも亦勿論少くなく、これを拾つたならば二十篇以上になるかも知れない。今更ながらその數の多いのに驚かされる。この中淨るりとしては「碁盤太平記」「忠臣金短册」「假名手本忠臣藏」「太平記忠臣講釋」が勝れて居り、殊に忠臣藏が群を拔いて歡迎される事は言ふ迄もない。大阪の主要な操りで慶應末年迄に繰返されただけでも七



忠臣藏おかげ參り番附

十餘回である、全國に於て今日迄に果して何回繰返された事であらう。



寛延二年夏中村座興行番附

忠臣藏が斯く迄世に歡迎された原因としては種々の條件を擧げ得るであらうが、その第一は作柄の勝れて居る事であると思ふ。義士の顚末は大抵の人が知つてゐるので、その中から成るべく劇化して成功しさうな部分を巧に抽き出し、又この忠臣藏より前に興行された諸作を土臺として、一般觀衆の有つその豫備知識を利用し、筋の推移は成るべく陰に置いて、一見聯絡の無ささうな異る場面を示して、しかもその間に隱微の有機的關係を保たせて居る。卽ち大序は大時代風の莊麗な鶴が岡の場に始まり、次に大名生活の一斑を示す松伐諫言から、刄傷、切腹といふ物凄い場面に移り、それより一轉して山科街道の二つ玉から寂れた山科の農家に於けるおかるの身賣、勘平の切腹といふ悲劇的場面が展開されたかと思ふと、次は忽然と轉じて華やかな祇園一力の揚屋の紅燈綠酒の場となり、こゝに義士の棟梁大星を繞る色々の人物を配して、その強烈な色彩の間に底光りのする大星といふ大人物の片鱗を示し、又々轉じて旅路の嫁入より、義

のために夢のやうな青春の可憐なる戀を捨てねばならぬ悲しき場面から、子を思ふ慈父としての本藏の最期となり、更に轉じて天川屋の場から討入迄が十一段に仕組まれて居る。かくして當代社會に於ける各階級各方面の生活相が次から次へと展開されて行く間に、大星を始めとして義士の面々を廣汎なる範圍に亙つて活動させると共に、怒り易い大名氣質の人物や、地位と特權とを利用して放恣貪慾の限りを盡す奸物を配し、その思慮分別に富み只管主家を大切に思ひ、又その血氣に逸るを止めようとして却つて誤解されて非業に終る地味な人物も大切な役目をつとめ、夫のために身を賣る女、忠義の爲に身の卑賤を顧ずに働く健氣な足輕、男と見込まれて然諾を重んじ妻子を犧牲とするも厭はない町人などのやうな種々異る人物を活動せしめて、結局復讐の大目的へと步一步進ませてゐる。かくして有機的にして、しかも各場面每に特殊の價値を有つ作柄となり、對照の妙を示し、重疊たる波瀾を描いてゐる。これが忠臣藏の一特徵であつて、や



「落　人」の正本繪表紙

がて實演して一般に歡迎される一原因であらうと考へる。

此淨瑠璃は大當りで興行を續けたが、その年の十月になつて、九段目山科閑居の場を受持つて好評を博して居た竹本此太夫と人形遣の吉田文三郎との間に演出上の意見の相違の爲に衝突を來して、此太夫は島太夫百合太夫等と共に退座したので、その代りに內匠太夫(豐竹上野少掾)長門太夫・千賀太夫等を入れて十一月迄興行を繼續した。歌舞伎では同年十一月一日大阪の嵐座で由良之助・勘平嵐三十郎、石堂・義平姉川新四郎本藏・九太夫片岡仁左衞門等の役割で演じたのが始めである。江戶ではその翌寬延二年夏三座競爭の形で上演していづれも大入であつた。

淸元で行はれる「道行旅路の嫁入」俗に「八段目」又は「おかげ參り」と呼ばれる淨るりは、原作の八段目道行へおかげ參りと女商人とをからませたもので、三升屋二三治の添削で天保元年四月十九日から市村座で上演された。又同流の「道行旅路の花聟」は天保四年三月五日から河原崎座で興行の裏表忠臣藏の三段目裏のおかる勘平の道行で、俗に「落人」と呼ばれる。これ亦三升屋二三治の作で、今日も行はれてゐる。その他の豐後節で道行を語られたものも色々あつたが略する。

雙蝶々曲輪日記（かたつてふ〳〵くるわにつき）

寬延二年七月廿四日から竹本座上場。作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

外題の角書に「關取の濡髮、名取の放駒」とあつて、外題にも「雙蝶々」とつけてあるのでも推測し得られるやうに、濡髮長五郎と放駒の長吉とを主要人物として、これに山崎與次兵衞親子、傾城あづま、南與兵衞

等を取合せて脚色した淨瑠璃である。

濡髪長五郎の實說については、武攝雙蝶祕錄（攝陽奇觀所引）に次のやうに見えてゐる。

上州沼田城主土岐丹後守殿（享保中大阪御城代なり）江戸家來岩村長右衞門といふもの故あつて浪人して城州八幡に蟄居し、都倉與惣兵衞と改名して手跡の指南を業とす、其子長五郎生得角力を好み、同所荒石斧右衞門といふ角力取の養子と相成り、荒石長五郎と名乘りけり（八幡の荒石斧右衞門は其頃角力仲間の親仁分のよし）此長五郎は若氣の血氣に喧嘩口論を好み、平常に紙を水にて浸し、頭を手拭にて捲く、尤もこれ用意の宜しきなり。濡れたる紙は刄物とても通る事なし、異國にては紙具足とて水にて數枚の紙を身に張りける由、此理を以て長五郎も常に濡紙を額にあつる故に荒石といふ名乘はあれども、諸人ぬれがみ〳〵とぞ呼びける（濡髪にあらずぬれ紙なり）土岐丹後守殿大阪御城代の節濡紙長五郎難波裏にて服部惣左衞門といへる侍と喧嘩をなしつるに、右惣左衞門を殺して親里八幡に身を潛みけれども天網遁れがたく入牢に及ぶこれ享保中の事なり。

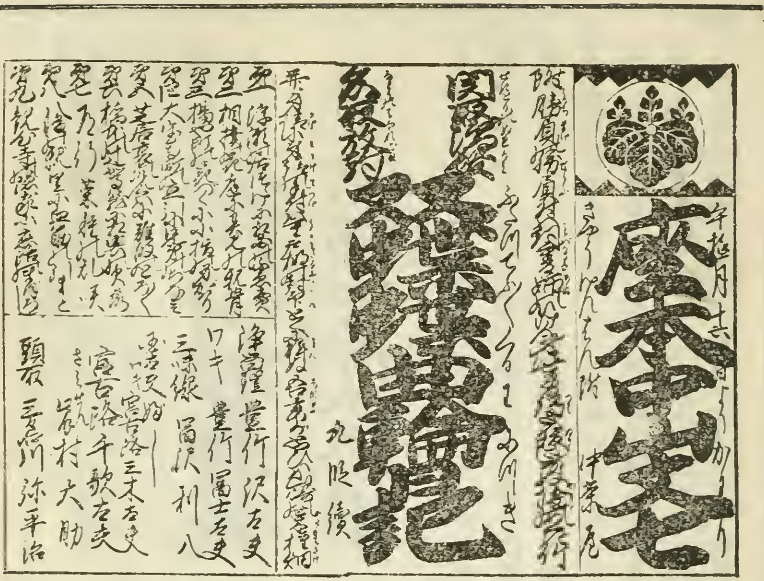
次に放駒長吉の實說は明かとはいへないが、大阪大寶寺町の搗米屋丸屋仁左衞門の養子で、養女のお長と許嫁の仲であつたが、家業を顧ずに男達の仲間入りをして居たものであらう。そしてその實父が果して正徳享保頃大阪市中で持囃された小野屋膏藥を賣つた道頓堀中橋北詰の作兵衞といふ者であつたといふのが事實かどうかは解らないが、兎に角長吉をかういふ關係の者として、前の力士長五郎と共に主要人物として先づ淨るりに仕組まれたのは「昔米万石通」（むかしごめまんごくどほし）である。

「昔米万石通」は西澤一風・田中千柳の合作で、享保十年正月二日から「女蟬丸」の切として豐竹座で興行され

た上中下三巻より成る世話物である。「雙蝶々曲輪日記」の成立を知る上に於て必要な作であるからその梗概を簡單に述べて置く。大阪で評判の小野屋膏藥賣の老爺作兵衞の子で大寶寺町の搗米屋仁左衞門の養子となつた長吉は親の意見も耳に入れず男達の仲間に入つて放駒長吉と名乘つてゐる。彼は小つま屋甚藏の依頼で長崎の客の爲に力士濡髪長五郎と深い仲の新町越川屋千歳を靡かせようとした爲に濡髪との達引となつたが喧嘩屋五郎右衞門の取成しで和解し兄弟の盟をなし、却つて甚藏等を懲らした。相手の甚藏等三人は太郎助橋で長五郎等三人に仕返しを企てたが、反對に殺された。長五郎長吉は其場で刺違へようとするを、五郎右衞門の氣轉で濡髪は前髪を落して河内の幻竹右衞門の方へ、長吉は堺の方へと落ちて行く、こゝ迄が上卷。中卷は大寶寺町の搗米屋の場で、非人にやつして餘所ながら暇乞に來た長吉は、親の慈悲に動かされて自ら名乘り出でて捕手の繩にかゝる。下卷は河内の勸心寺で幻竹右衞門と五郎右衞門の働で長五郎は思ふ女と伊勢路へ落され、五郎右衞門が長五郎と名乘つて捕縛されるといふに終る。

系統上から見れば、「雙蝶々」は此淨瑠璃の改作と見て差支ない。而してその改作に當つて取合せられて大切な素材となつたのは近松の「壽門松」である。濡がみ長五郎が山崎の人である事は、院本作者に取つては、山崎與次兵衞に關係を持たせる上には至極好都合であり、又「壽門松」が近松の世話物中では特に俠客的色彩に富むといふ點も亦兩者の取合せには便宜があつたと思はれる（壽門松については近松名作集下卷の同曲解題を參看せられ度し）

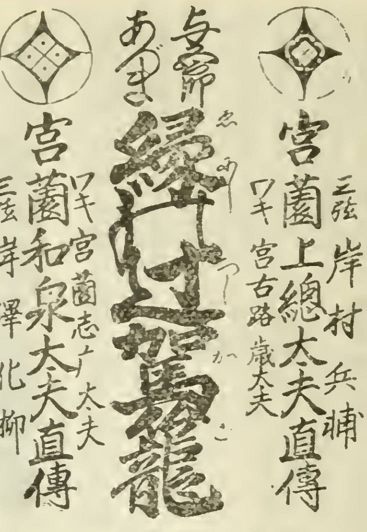
かくして作られた本曲に於ては、「壽門松」の與次兵衞は父となつてその子の與五郎があづまに溺れる人物となり、濡髪は與次兵衞の恩を受けて居るといふ關係にし、そして「万石通」に於ける長崎の客と濡髪と遊女



「双蝶々曲輪日記」番附　寶暦十二年十二月角座興行

千歳との關係を西國武士平岡郷右衞門と與五郎とあづまとの關係に作りかへ、濡髪は與五郎のために働き放駒長吉は平岡に賴まれて雙方の達引となる仕組とし、南與兵衞は長五郎とは義理ある兄弟といふ關係を持たせて更に又「万石通」の長吉とお蝶との關係を長吉の姉お關と長吉との關係に轉じて趣向をこらしたのである。

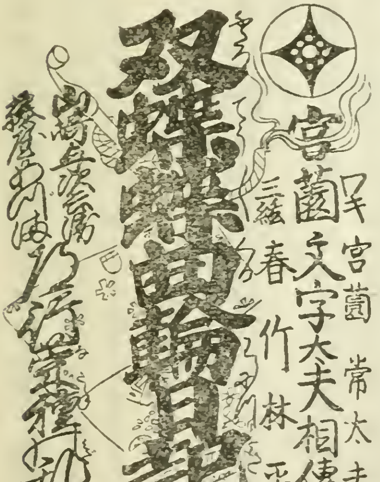
全篇九段より成り、第一浮む瀬の段、第二相撲の段、第三揚屋の段、第四大寶寺の段、第五難波裏の段、第六橋本の段、第七道行菜種の亂咲、第八八幡の段、第九觀心寺の段に分れて居る。この中第三段であづまが與兵衞の難を救ふ趣向、第五段の喧嘩の場、第六段の駈落の趣向等はいづれも「壽門松」からの飜案であり、第四の大寶寺の米屋の場は「万石通」の中卷の脱化、第八八幡の親里での髪剃りは「万石通」の上の卷の切から來て居る。而して全體の上から見てこの第八段が山であり、殊に引窓の趣向は舞



縁の辻駕籠

臺技巧として巧妙を極めて居る。尤もこの一段は以前は第二段の相撲の場程持囃されなかつたが、近年になつて度々上演を見るやうになつた。

此淨瑠璃初演の時は頗る不評で「夏祭浪花鑑」の團七九郎兵衛と一寸徳兵衛を前髪にして長五郎長吉としたやうであるといはれたとの事であるが、兩作を比較して見れば如何にもさう思はれる點もある。作者が双方共に同じ三人で、材題も亦同じく遊里に於ける俠客の達引である爲もあらうが、類型の部分の多い作である。併し歌舞伎に移入されてからは好評であり、後には操でもしば〳〵繰返されて居る。因に初めて歌舞伎で演じられたのでは、同じく寛延二年の八月京都の布袋屋座で中山新九郎の濡髪長五郎が大當りであつたといひ、大阪では寶曆十二年十二月角座興行の中山文七の濡髪が好評で翌年四月下旬迄



道行菜種の亂咲

續けた。これは文七の出世藝であつたと言つてもよい。今その時の番附を參考として掲げて置く。江戸で演じられたのはずつと後れて、安永三年九月中村座興行が始めらしい。

他流の語り物としては宮薗節の詞章が二段殘つて居る。「緣の辻駕籠」は原作の第六段の駕舁甚兵衞とあづまとの親子の名乘り合ひの場を取つたのである。「道行菜種の亂咲」は原作の第七段を轉用したのである。又文化以後に於ては江戸の歌舞伎では、豐後節の地で演じられた與五郎あづまの道行も多いが、それは大抵書替物であつて、例へば風鈴蕎麥屋の娘殺しを取入れた「常穐八幡祭」(できあきはちまんまつり)の道行である常磐津の「千種花色世盛」(ちぐさのはないろのよざかり)（文化七年八月市村座）の如く夜そば賣や大和團子賣をからませたり、「梅柳春道行」(うめやなぎはるのみちゆき)（文政元年正月中村座）の如く梅野由兵衞との綯ひ交ぜになつてゐたり、清元の「壯訥子色成田屋」(わかいざしいろになりたや)（弘化二年五月河原崎座）の如く女夫團子賣をあしらつたりしたやうな趣向のものが多いが、今それを一々列擧するの煩に堪へない。

一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)

寶曆元年十二月十一日から豐竹座興行。作者としては、淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木正三・難波三藏・豐竹甚六等五人の名を連ねて居る上に、故人並木宗輔の名をも掲げて居る。本來豐竹座の作者であつた並木宗輔は延享二年並木千柳と名乘つて竹本座の作者に列し、上掲諸篇の外合せて十一篇に筆を執つたが、七年目の寶曆元年再び豐竹座に歸り、並木宗輔の名で、十月興行の「日蓮聖人御法海」の添削をなし、更に本曲の第三段目迄を作つてこの年九月に物故した。よつてそのあとを他の淺川一鳥等が追加して一篇に纏め上げてこゝに上場を見るに至つたのであるといふ。但し三段目迄の全部が宗輔の筆であるかどうかは斷言し得ないが、少く

とも三段目は彼の作と見て差支ないであらう。

平家物語以來愛好せられて居る國民的史譚ともいふべき一の谷に於ける熊谷敦盛、忠度六彌太の物語を主材とした作で、本名作集上卷に收めた「須磨都源平躑躅」とほゞ共通の材題を扱つて居て、この作に負ふ所もあるが、その趣向の立て方に於て頗る相違して、一段と技巧をこらしてをる。二つの大きな事件を綯ひ交ぜたために筋は隨分複雜になつて居る。全篇五段の場割を表示すれば次のやうになる。

初段
- 大序……堀川御所（熊谷六彌太出陣）
- 中……北野天神の場（卿の君の自害）
- 切……經盛館（敦盛出陣）

二段目
- 口……一の谷陣門（小次郎先陣）
- 中……組打（敦盛最期）
- 切……菟原の里林住家（太五平出陣、六彌太忠度へ櫻の枝渡し）

三段目
- 口……彌陀六内の場（小雪と若衆實は敦盛との濡事）
- 中……御影の松原（青葉の笛渡し、寶引）
- 切……熊谷陣屋

四段目
- 道行……（菊の前と乳母林との鎌倉への道行）
- 口……鶴が岡八幡の場（菊の前が危難を救はれた深編笠の侍から忠度の敵は六彌太と敎へられる）
- 切……六彌太館（樂人齋事太五平の述懷）

五段目

（大内の場（義經賴朝牒し合せ時忠より寶劍を取返す）
扇谷平山陣所（六彌太叛逆人平山を討つ）

大序堀川御所の場に於て大將義經は辨慶の書いた「一枝を伐らば一指を切るべし」云々の制札を熊谷に渡して一の谷の敦盛の陣に向はせ、六彌太には「さゞ波や志賀の都は荒れにしを……」の短册を附けた山櫻の枝を渡して忠度に屆けよと言ひ含める。これが全篇に亘る大切な伏線となつて居る。熊谷は若木の櫻をいたはれとの義經の心を汲んで一の谷で我が子の小次郎の首を討つて、後に陣屋で義經の實檢に供へる時「敦盛卿は院の御胤、此花江南の所無は、則ち南面の嫩、一枝を切らば一子を切るべし、花に準へし制札の面、察し申して討つたる此首、御賢慮に叶ひしか、但しは直實過りしか御批判いかに」と言ふのである。救はれた敦盛の爲に供養の石塔を建立した彌陀六は、梶原の爲にこの陣屋に引かれて來て居たが、義經はそれが昔自分達が伏見の里で雪の夜に救はれた宗淸であると觀破して舊恩を感謝する、そして彼が大切に育てる娘の小雪（重盛の女）への贈物として鎧櫃を與へる、中には敦盛が忍んで居る。有爲轉變の世の無常を悟つた熊谷は出家する、三段目の切で全篇の山である。

菟原の里の隱家で櫻の枝を受取つて我が歌の勅撰集に入れられたのを知つた忠度は、義に感じて須磨の浦で六彌太に首を授ける。六彌太が大力無雙の忠度の首級をあげ得たのは、旗持が忠度の右腕を斬落した爲であつた。その功で旗持太五平は樂人齋と名のつて六彌太から舅として敬はれる身分となつた。併し樂人齋は實は重衡の臣後藤兵衛守長と菊の前の乳母林との仲の子である。父の汚名を雪がうとして、夕暮の亂軍中誤つて六彌太と思つて忠度を斬つたのである。菊の前が林と共に六彌太を討たうと館へ入込んだ時わざと菊の

前に斬られて一切を告白する、しかもこゝへ來會せて居た六彌太の馴染の京九條の遊女菅原はその妹であるといふ持つて廻つた仕組みで、こゝに太五平親子兄妹の邂逅と死別とを見せて居る。



「蓮生物語」その一

この四段目の切に後に西澤一鳳が加筆して、「一流しの枝」といふ琴唄を入れ、佐々木市藏が作曲し、弘化三年正月大阪の角座で市川海老藏の獨吟で大當りであつた。嘉永二年に八代目團十郎が下阪した時これを習つ



その二



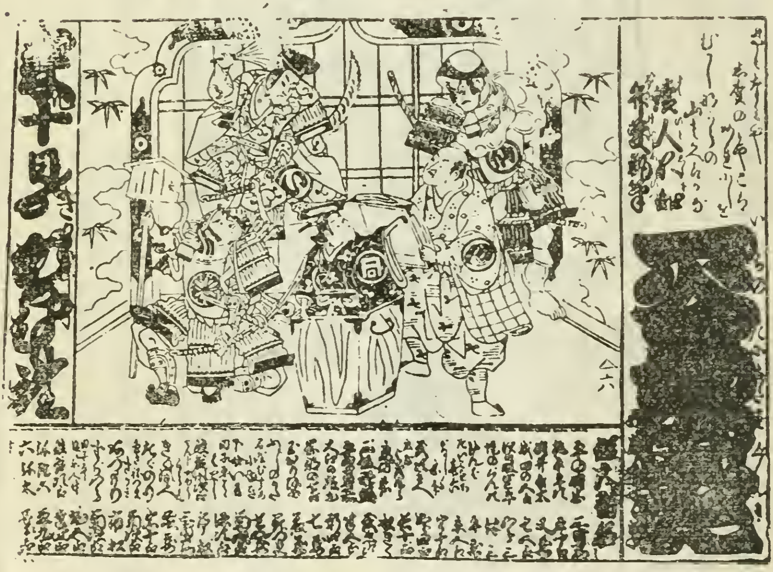
その三

て歸り、八月から河原崎座で「一谷武者畫土産（いへづと）」と題して土産狂言として演じた。（傳奇作書拾遺下）

又後に新歌舞伎十八番の一として演ぜられた「蓮生物語」は本曲の第三段目切から脱化した蓮生の後日譚である。天保十二年四月中村座で「堺開帳二升花衣」と題して、蓮生坊海老藏、玉織姫榮三郎、盛久彦三郎で演じたのが始めで、嘉永五年三月河原崎座再演の時「新十八番の内蓮生物語」と銘を打つて出した。

この嫩軍記は大當り大入りで、翌寶暦二年の春から夏を打通し、盆から大切に操り踊を附けて興行した程であつた。操りで好評であつた爲に歌舞伎へも直に移入され、寶暦二年五月には江戸の中村座森田座が相共、に上場し、同年十一月には大阪の中の芝居でも演ぜられ、以後操りでも歌舞伎でも何回となく繰返されて今日に及んで居る。

奥州安達原（あうしうあだちがはら）



寶暦二年五月中村座上演番附

寶暦十二年九月十日から竹本座興行。作者は竹田和泉・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衛。

前九年の奥州攻を世界とした淨るりは少くないが、本曲は前九年の合戰後の安倍貞任・宗任兄弟を中心としての一族家臣等の再擧の爲の苦心を主材とし、之を脚色するに、奥州に縁故のある古來の傳說として既に謠曲にも作られて居る善知鳥の傳說と安達原の鬼女の傳說とを利用して傳奇的の色彩に富む趣向を凝らしてある。その場割りと梗概とをいへば、第一段大序「鶴が岡假屋の場」で義家は金札をつけた鶴を放つ、二段目への伏線である。次の「吉田の神前の場」で皇弟環の宮が傅の內侍と共に行方不明となる。切「義家館の場」義家は環の宮失踪の當の責任者たる志賀崎生駒之介を勘當する。その情人傾城戀絹が貞任の妹たるを知り共々に一つの功を立てよと言ひ含める。第二段目は「外が濱の場」と「善知鳥文治住家の場」とに分れ、貞任の一子千代童の藥代の爲に禁制の鶴の金札を取つた善知鳥文治は訴へられる事となつた。併しその訴人たる外が濱の南兵衛とは主從の間柄、卽ち南兵衛は宗任である事が分ると、南兵衛は文治に代つて科人となつて都に引か



「諸鞋奥州黒」より

れる、義家に一矢を報いんとの心からである。第三段口は「朱雀の堤の場」で、義家の男で環の宮の傅たる傔仗直方が不義の廉で勘當した長女の袖萩が非人となつて居るのに會ふ條、切は名高い「傔仗館」で、袖萩の祭文から傔仗の切腹、僞勅使桂中納言と名乘つた貞任と妻の袖萩及び鶴殺しの南兵衛との絶えて久しき夫婦兄弟の對面。第四段口「奥州白河の關の場」で、環の宮の行方を尋ねさまよふ生駒之介と戀絹とは惡人の難を遁れて安達原の一つ家に辿りつく。切「一つ家の段」、貞任宗任兄弟の母岩手御前は一つ家に住んで環の宮をかくまひつゝ強盜を働いて軍用金を作つて居る。宮の止聲病を平癒させる爲にと折柄泊り合せた戀絹の腹を割いて胎兒の生血を取つたが、女の血が亡夫の髑髏ににじんだので我が娘と知るのみでなく、環の宮とは實は義家の子八つ若、匣の内侍は實は新羅三郎で、いづれも義家が裏の裏へと手を廻して、神の如き明察を以て計つて置いた事が漸く明かになる。故に第五段に於て貞任は豫て奪つて隱匿して置いた十握の寶劍を義家に渡し宗任の後事を托して自害しこゝに萬事は解決するといふ筋である。

貞任の子千代童を守り育てて再擧を計る趣向は、是より先、元文二年正月豐竹座興行の並木宗輔の作「安倍宗任松浦簦（まつらきぬかさ）」に仕組まれて居るのを取つて善知鳥の傳説を取合せて趣向を立てたのは巧妙であり、安達原の一つ家も如何にも器用に飜案されて、一切の祕術はこの家の正體を發いて初めて解るやうに仕組んである。誠に技巧の極といへばいふべきであらうが、何といつても割合に劇的に勝れて居るのは三段目の切である。

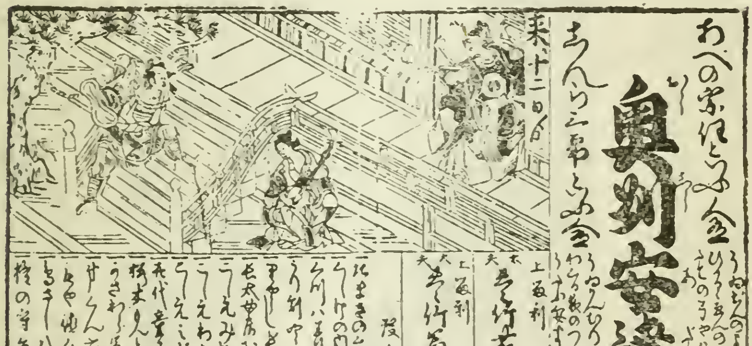
例の南兵衛の宗任の「我が國の梅の花とは見たれども大宮人は何といふらん」の歌話は既に平家物語の劍の卷などにも見えて居る程で相當に古いものであらうが、これを劇に仕組んだのも本曲よりは前であつた。ここに掲げる寶暦二年秋江戸の中村座で興行された「諸鞚（もろたづな）奥州黑（くろ）」の繪づくしの一部などもその一例となるで

あらう。

本曲が初めて歌舞伎に移入されたのは、寶暦十三年二月十日からの江戸森田座の興行の時である。こゝに揭げたのはその時の紋番附面であるが、終りの日附に寶暦十二年とあるのは、いくら番附でも十三年の誤である事は言ふ迄もない。書面も操りの番附面のものをほゞそのまま取つて居る事は兩者を比較すれば明かである。

作者として名を連ねて居る四人の中では主なるは近松半二、次いでは竹本三郎兵衛である。

近松半二　近松門左衛門の友人で「難浪土產」の著者として知られた大阪の學者穗積以貫の子。少くして放逸、竹田出雲の門に入つて淨瑠璃作者となる。寶暦元年十月の作「役行者大峯櫻」に作者として始めて名を列ねてから作者生活三十三年天明三年二月五十九歳を以て歿した。その作は總計五十四篇に及ぶが大部分は合作物である。本名作中に收めた諸篇がその代表的名作である。大阪に於ける操芝居衰退期に出でてよく人氣を保持し得たのは



「森田座初演の

彼の力が與つて多い。舞臺技巧に長けて居り、その作品には、今なほ歌舞伎に於ても異彩を放つものが少くない。

竹本三郎兵衞は人形遣二代目吉田三郎兵衞のことである。名人吉田文三郎の子で、初め吉田文吾と稱へ竹本座へ出勤して居た。寶暦九年閏七月父と共に一時竹本座を退いたが、同年九月自分だけ復歸し、吉田三郎兵衞と改めて出座し、同時に竹本三郎兵衞と稱へて作者をも兼ねた。安永元年十二月の「艶容女舞衣」以後の正本にはその名が見えない。歿年未詳。

本朝廿四孝（ほんてうにじふしかう）

明和三年正月十四日から竹本座上場。作者としては、近松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衞等六人の名を連ねて居るが主なるは半二である事は言ふ迄もない。

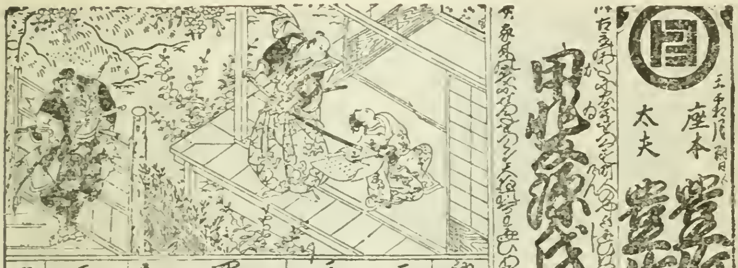
信玄と謙信との確執を材題とした淨瑠璃としては、近松の「信州川中島合戰」（近松名作集下卷所收）を始めとし



時の番附

て、次に出たのが延享二年正月曾根崎の明石越後掾座上演の「三軍桔梗原」で、作者は櫻井頼母・戸田采女等である。又紀海音の「甲陽軍鑑今様姿」（享保二年の作）の系統を引いたものに寶暦六年閏十一月一日から豊竹座で興行された「甲斐源氏櫻軍配」がある。淺田一鳥等の作で、諏訪法性の兜ゝ探索のために國を出で、好色に身を持崩すと見せて、實は謀將勇士を語らふ武田晴信の働きに村上義清の奸策を取合せ、武田上杉の合戰は村上の離間策による仕組として、その間に山本勘助を働かせて居る。斯様に色々の作があるが、その中で勝れて居るのは「信州川中島合戰」である。「本朝廿四孝」は藍本としてこの作を採り、傍らその他の前記諸作の作意をも參酌した上に更に半二式の技巧を凝らして作り上げたもので、筋が複雜を極めて居る上に、裏面の人物や疑問の曲者を澤山に働かせてある點に於て、恐らくは技巧澤山の院本中の典型といつてよからうと思ふ。

本曲の仕組は非常に入込んで居るが、筋をほぐして要



「甲斐源氏」

點をいへば次のやうである。種が島の一發で將軍義晴を射殺して逐電した井上新左衞門、諏訪明神鳥居前の力石の下より顯れる曲者、上杉家の花作り關兵衞と、斯う姿を變へて足利家を滅し天下を覆さうと企てて居る美濃の齋藤道三が本曲に於ける事件紛糾の黑幕で、これに腹黑き北條氏時と村上左衞門とを取合せて、彼等の奸計によつて、諏訪法性の兜の事で不和の武田上杉の確執はいよ〱高まると共に、將軍暗殺者を捕へ得なければ三年後には切腹とその兩親によつて誓はれた勝賴と景勝は拔差ならぬ羽目になつて行く。兩人共に身代りの必要に迫られた。景勝と慈悲藏の直江山城とは、慈悲藏の兄横藏を召抱へて身代りにしようとしたが、横藏はそれには餘りに深慮大望の士であつた。義晴が暗殺された時にその胤を懷姙して居る賤の方を奪ひ去つた覆面の人物は彼であつた。諏訪明神の力石で勇力を示して曲者から蓑を得たのも彼であつた。彼は夙に武田信玄と肝膽相照らし、その内命によつて足利家の若君を我が子として育てて居た山



標　軍　記

本勘介であつた。扨又一方に於て武田家に於ては、勝頼の傅坂垣兵部は主家横領の底意を以て勝頼と我が子とを取代へて置いたが、天運といはうか、苦心した身代りの蓑作は間に合はずに我が子が切腹した。かくて勝頼ならぬ勝頼は偶然身代りの役をつとめて、眞の勝頼なる蓑作は却つて上杉の館に花作りとなつて入込む事となる。そしてこの間に二人の勝頼をめぐつて濡衣と八重垣姫との戀が展開され、結局濡衣は義晴の御臺を狙つて居る己が實父道三の僞に御臺の身代りに立ち、法性の兜は八重垣姫の働で武田家に戻り、事件の口火を切つた道三は萬事休して切腹し、北條村上も捕へられて兩家は和解するといふ恐ろしく入組んだ趣向である。

山本勘介が關兵衛の正體を觀破したのは、諏訪明神の力石の下から顯はれた時に「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき」といふ歌と共にその身につけた菅蓑を後日再會の證にと渡されたので、この歌の作者たる太田道灌の後裔であつて領國美濃を足利氏に奪



「本朝廿四」

はれたのを怨んで居る齋藤道三たる事は「みの一つだになきぞ悲しき」によつて覺つたとは、恐らく院本作者の味噌の上乘なるものであらう。題名は本曲の山たる勘介住家の筍掘りに基くことは言ふ迄もあるまい。金鑄の場割りを表示すれば次のやうになる。

初段

口……室町館の場（賤の方懐胎の祝、武田上杉確執が問題となる。義晴の上意で勝頼と八重垣姫との婚約をさせる――四段目への伏線）

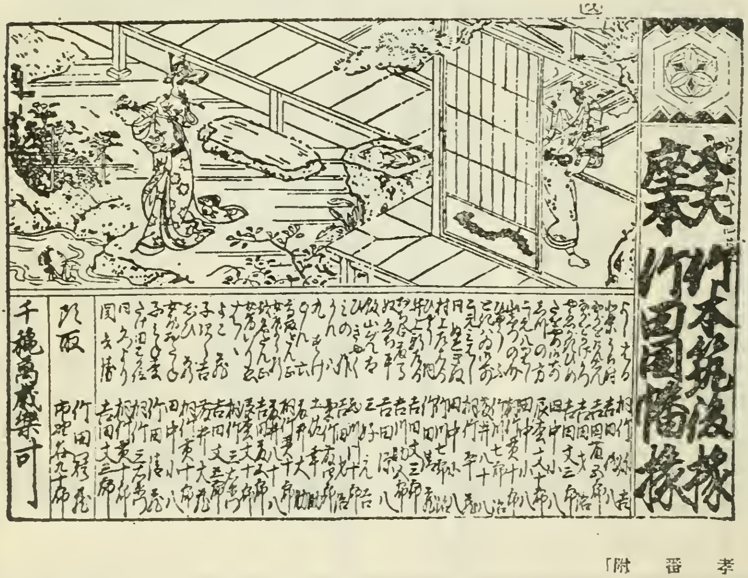
中……誓願寺茶店の場（直江山城と賤の方の腰元八つ橋の不義問題）

切……室町奥御殿（義晴の暗殺、賤の方の奪取、曲者の投げた小柄が三段目伏線。直江八つ橋の追放、これも三段目へ聯絡、上杉武田の誓言）

二段目

口……下諏訪明神の場（兵部蓑作召抱、濡衣百度參り、横藏曲者出會）

切……信玄館の場（勝頼の切腹）



孝番附

三段目
口……桔梗ガ原の場（境目爭ひ、捨兒）
切……勘介住家（景勝下駄の場、筍掘り、横藏の物語）
道行（裝作と濡衣との信濃への藥賣となつての道行）

四段目
口……和田山村上館（百物語、村上狐にばかさる）
切……謙信館（十種香、狐火、道三最期）

五段目……大團圓

三段目の口の桔梗原に於ける境界爭は近松の「津國女夫池」の第二段の境界爭からの脫化らしく、勘介住家は「川中島合戰」の輝虎配膳の場の飜案たることは明かである。

此の淨瑠璃興行の際、第四段目に於て見物席をはずに引割御殿をせり上げ、古今の大道具で、大入であつた。その後操りでも度々繰り返されたのみでなく、同じく明和三年五月大阪の中座で初めて上演されて以來歌舞伎でも長く屢々演ぜられるに至つた。

關取千兩幟（せきとりせんりやうのぼり）

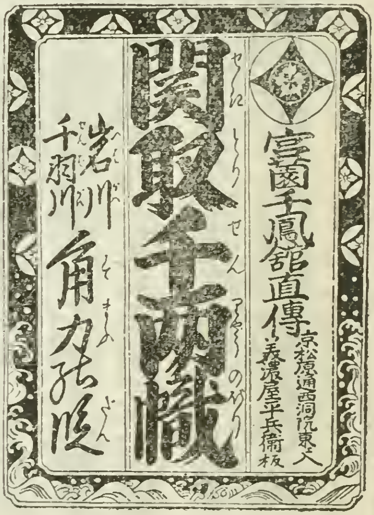
明和四年八月四日から「花軍壽永春」の後芝居として竹本座興行。

作者は近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七・竹本三郎兵衞。

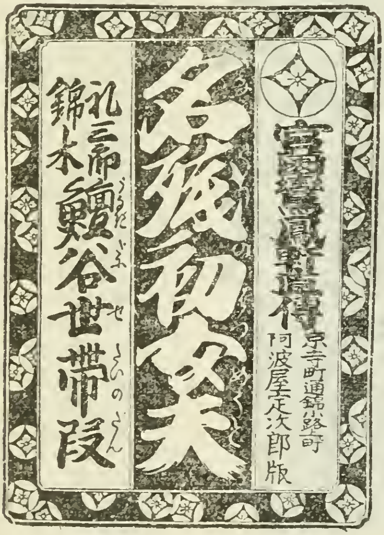
此の當時大阪で人氣力士として贔負の血を湧かせた稻川千田川をモデルとして「雙蝶々曲輪日記」の力士

達引の趣向を飜案して想を構へた作である。

江州彦根藩の御用を勤める大阪の鶴屋淨久の忰禮三郎は大阪屋抱へ錦木に溺れて、その身請金才覺の事から戀敵たる彦根の浪人村岡團右衛門及びその一味の徒から贋金をつかまされて親の勘當を受ける。丁度この時彦根藩物頭役三島彌太夫の女おさいが許嫁の男ある身で禮三郎と密通して居た事が顯れて、これも勘當されて禮三郎をたよつて來る。禮三郎は進退に窮する。淨久に恩のある池田の關取岩川が禮三と錦木を預り、おさいは力士千羽川の女房が預る。これが事件の發端で、團右衛門の手先には力士鐵ガ嶽が居る。自然岩川との達引となり岩川は先方の錦木身請の猶豫を乞ふ爲に千番に一番といふ大切な土俵の勝負を鐵ガ嶽に讓らうとするを、岩川の女房おとわが身を賣つて危機一髮の際に之を救つた。併し錦木はおとわの義に感じて再び身を賣る、一方禮三は鐵ガ嶽殺しの嫌疑を受けて前途を悲み、錦木と情死を企てたが人々の盡力によつて目出度く納るといふのが大筋で、こ



關取千兩幟



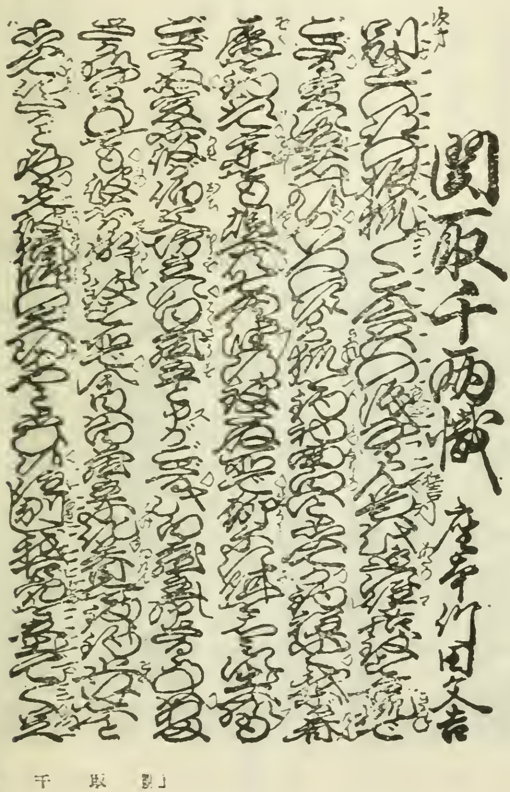
名殘初女夫

れにおさいの許婚に當る丹波の家中津田雨助が抱への力士鐵ガ嶽殺しの詮議人として千羽川の許なる禮三おさいの隠れ家へ來る筋をからませ、又村岡のおさいの父彌太夫に對する惡事などを取合せて九段に仕立ててある。併しその中では第二段の岩川内の場が最も名高い。第七段の鱣谷禮三隠家の場は「新口村」の飜案ではないかと思はれるやうな趣向であるが、餘りに技巧的である。

力士の岩川を猪名川と改めたのは、操りの方では文政九年二月座　境内の興行の時からである。

歌舞伎での初演は、明和六年春江戸の森田座で岩川三津五郎、千羽川鐵ケ嶽半右衛門、岩川女房半四郎等の顔振での興行であらう。

本曲の書替物としては「關取二代勝負附」がある。明和五年九月繪谷芝居で興行されたもので、作者は八民平七・並木正三等で、千雨幟の秋津島鬼ガ嶽の達引に六角家の家督定めの相撲の事を取合せた趣向である。「關取一鳥居」

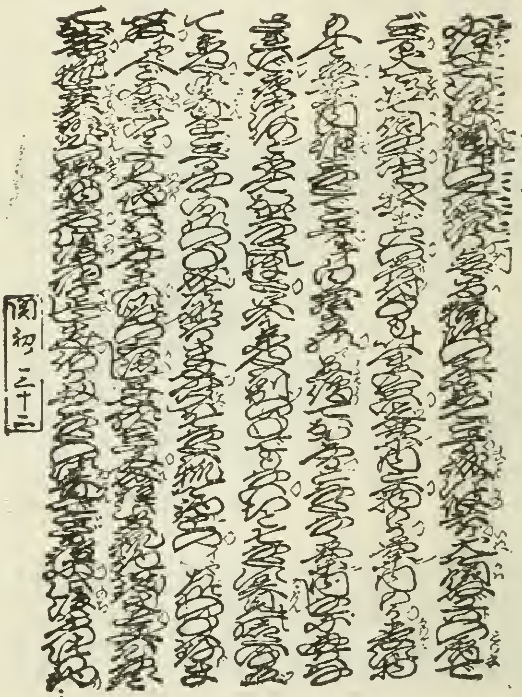


「關取千兩

（明和八年作）はこの改作であり「關取二代鑑」は改題である。

本曲が轉用された他流の語り物としては詞章の殘つて居るものに宮薗節の「角力の段」及び七段目鐘谷を取つた「名殘初女夫」がある。又「猪名川内の段」は新内では今も行はれて居るのは周知の事であり、又常磐津にもある。常磐津の岩川内の段は天保六年六月市村座で興行されてゐる。

序に正本について一言して置き度い。



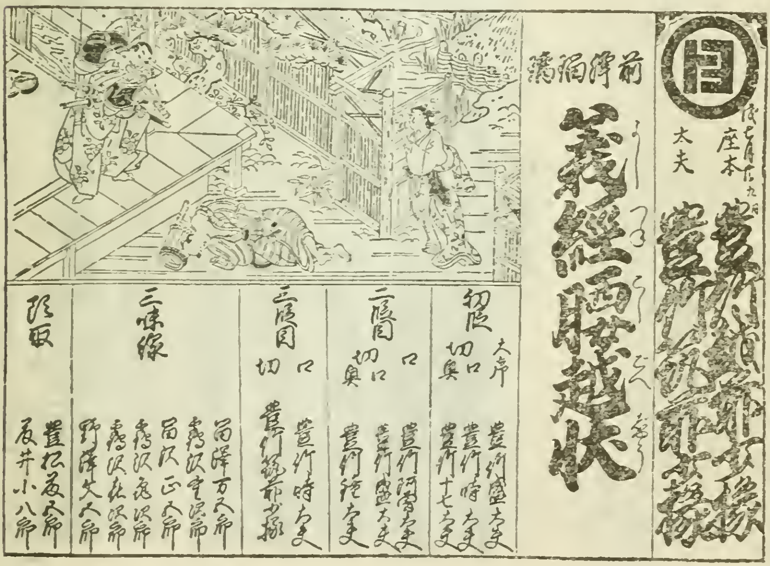
「幟再板本

現存の正本に「花軍壽永春」と合綴のものと單行のものとの二種ある。合綴の方が原作で、之は三十一丁の裏から起してあるのに、單行のものは三十二丁表から起してあるので、原作の三十一丁裏と三十二丁、卽ち三頁に亘る文を三十二丁の二頁に縮約してある。あとは同文。單行本の丁附の初めに「關初ノ三十二」とあるはこれが爲である。

近江源氏先陣館（あふみげんじせんじんやかた）

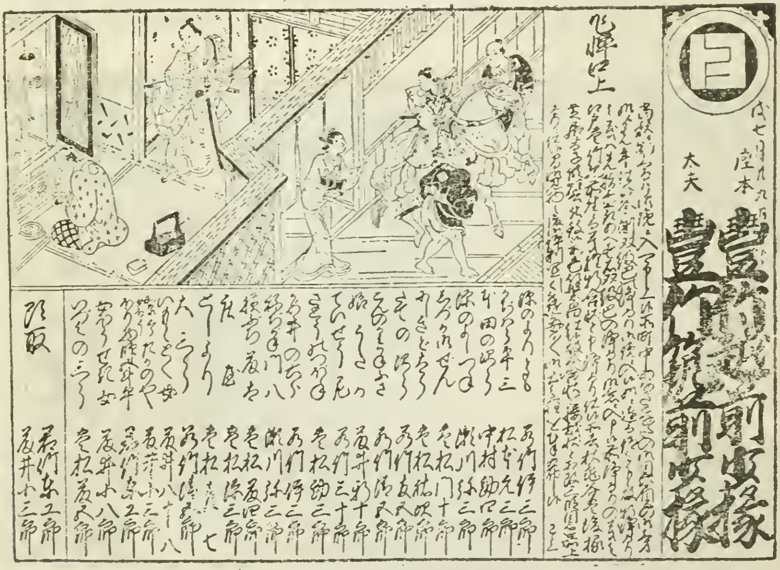
明和六年十二月九日から再興の竹本座興行。作者としては近松半二を筆頭に八民平七・松田才二・三好松洛・竹田新松・近松東南・竹本三郎兵衛等の名を連ねて居るが、再版の正本には半二・半七・三郎兵衛の名を掲げて居るのみである。この中半二が立作者たるは言ふ迄もない。

史劇の絶好材題の一つともいふべき豊臣氏の末路が劇に仕組まれるに至つたのは、江戸の後期からの事であつた。それとても難波戰記などのやうな、これに關する戰記などに基く脚色でも露骨な人名を以てしては其筋から容易に許されない。そこで忠臣藏や島原合戰や、又は由井正雪などと同じく世界を昔に取つた。寶永七年正月（?）豊竹座上場と傳へられる紀海音の作「頼光新跡目論」は井上播磨の正本であつた頼光の跡目論に假托して、關ケ原の役を仕組み、頼光を秀吉、頼信



義經

を家康、義親を秀賴、松名道成を石田三成、その臣幾島左近を島左近にあてて、賴光の歿後松名が遺命と稱して義親を擁立して賴信を滅さうとする仕組にした。これが豐臣氏の末路を淨瑠璃に作り込んだ嚆矢であらう。次いで享保三年正月から豐竹座で上場された紀海音の作「義經新高館」が出た。大阪落城の顚末を義經主從の高館の沒落に假托して脚色したもので、頗る大膽に露骨に仕組まれて居る。賴朝は家康に、義經は秀賴に、權頭兼房は片桐且元に、和泉三郎は眞田幸村に、龜井六郎は木村重成に當てたのであるが、これが豐臣德川の不和を賴朝義經の不和に假托する始めである。この系統を引いて更に大膽露骨な描寫を試みたのが並木宗輔の「南蠻鐵後藤目貫」（なんばんてつごとうめぬき）(享保二十年二月豐竹座上場)である。この作は世界を南北朝時代に取り、足利尊氏を德川家康に、新田義興を豐臣秀賴に、舟田利村を眞田幸村にあて　江州に住む大酒漢にして目貫の名工後藤又治を後藤基次によそへ、この醉漢が舟田の切なる推擧



原　題　狀「切　浚　の　番　附

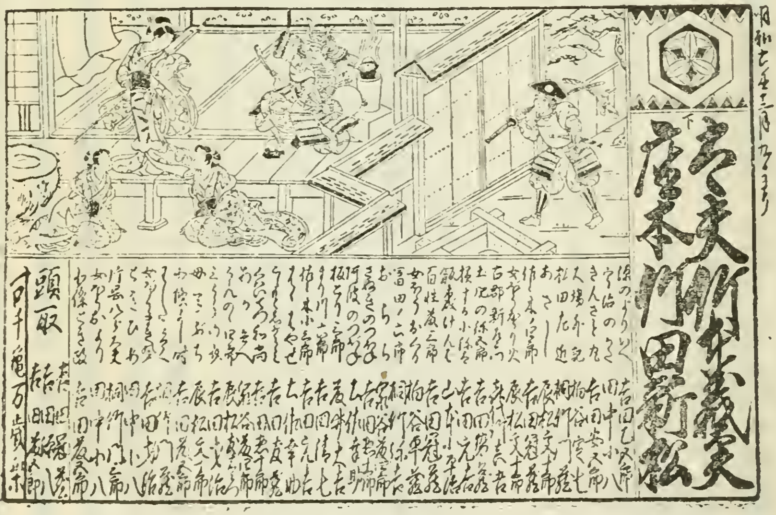
に動かされて軍師として大阪城に入る事とし、舟田が空砲によつて後藤の本性を試みる事、後藤の妻謡女が尊氏を砲撃する事などを山として仕組んである。その描寫が頗る赤裸々にして大膽であつた爲に、その筋の忌憚に觸れて出版を禁止された。然るに十年後の延享元年三月江戸の肥前座に於てこの作を「義經新含狀」と改題して興行し、併せて正本をも出版した。南北朝の世界を頼朝時代に改め、文章に多少の修正を施したが、大體に於て原作と同物である。外題替に「後藤伊達目貫」「泉三郎伊達目貫」などがある。而して更に十一年後の寶暦四年七月豐竹座でこの改作たる「義經腰越狀」(並木宗輔の補筆)が興行された處が、四段目は上演を禁止され、正本も亦辛じて三段目迄を出版し得た。これは四段目の口鶴が岡の場で家康にあてた頼朝を謡女が狙撃する條が問題となつたのである。但し本曲は操りでこの後屢々繰返されたのみでなく、歌舞伎にも入つて、五斗兵衛は永く劇壇を賑して居る。

斯の如く、大阪陣を材題として、豐臣氏に同情を寄せて



太平頭鑑

作られた戯曲は、相當にその筋の壓迫を蒙つたに拘らず手を代へ品を代へて舞臺に現れた。そのあとを受けて作られ、そして又名作として後迄も持囃されたのは實にこゝに收めた「近江源氏先陣館」である。本曲は上記の諸篇を藍本として技巧をこらしたものである。世界を鎌倉時代に取り近江の坂本城を大阪城に擬し、近江源氏の嫡流たる佐々木三郎盛綱と弟四郎高綱とが敵味方と相分れ、義によつて骨肉相戰ふ處に山を設けて、これに片岡造酒之頭が源氏と北條とを結ぶ爲に時政の女時姫と頼家とを縁組させようとする苦心、時姫は三浦之助吉村を戀して居る事、坂本城に於ては大江入道藤澤藏人等が宇治の方と頼家母子を亡き者にしようと奸計をめぐらして造酒之頭を斥ける事、造酒之頭の志を繼ぐ三浦之助は四斗兵衞と呼ばれる大酒漢、實は和田兵衞秀盛といふ智勇兼備の豪傑を坂本城の軍師に招聘し、彼はその意氣に感じて働く事などを取合せて九段に仕立ててある。その場割は次の通りである。第一鎌倉御殿の段、第二東大寺の段、第三頼家館の段、第四道行旅路のぬれ衣、



頭巾番附

第五高宮茶屋の段、第六四斗兵衛住家の段、第七坂本城の段、第八盛綱陣屋の段、第九佐々木船長より和睦迄。この中で名高いのは第六と第八との兩段であつて、第六段は「南蠻鐵後藤目貫」以來の豪快な場面を以て勝れ、第八段は身代り首實檢の最も技巧を凝されたるものとして、作者の技倆を窺ふに足る場面である。

本曲が始めて歌舞伎で演じられたのは、明和七年五月十三日からの大阪中座の興行で、盛綱三桝大五郎、三浦之助小川吉太郎、四斗兵衞藤川八藏、高綱・時政中山文七等の顏ぶれであつた。

本曲初演の翌年なる明和七年五月廿二日から同じく竹田新松座に於て「太平頭盔飾」（たいへいかぶとのかざり）を上場した處が興行禁止を命ぜられて六月十六日限りで中止した。爲に正本も出版されなかつたが、番附によつて見れば「近江源氏先陣館」の改作らしく思はれる。なほ又これより後に作られた「鎌倉三代記」（天明元年三月）や「日本賢女鑑」（寛政六年十月）や「鴉湖高名硯」等も亦同じく豐臣氏の末路を材題としたもので、共に「近江源氏先陣館」の影響を少からず受けて居る。

神靈矢口渡（しんれいやぐちのわたし）

明和七年正月十六日から江戸外記座興行。作者は福内鬼外。補助、吉田冠子・玉泉堂・吉田二一。

新田義興が竹澤良衛江戸高重等に謀られて武藏の矢口渡に於て横死をとげ、その怨念が雷電となつて江戸高重を悶死せしめ、のち同所に新田明神として祀られたといふ事は、太平記第三十三卷の「新田左兵衞佐義興自害の事」の條に詳しい。これ即ち矢口明神緣起の原據であるが、材題をこゝに求めて脚色したのが「神靈矢口渡」である。作者が本曲を作るに至つたのは、矢口明神の神主の依囑によつたとか、紀上太郎の慫慂

に基くとか、吉田冠子の發意であるとかいふやうに、色々の宣傳めいた言傳へもあり、又舞臺に上せても江戸の民衆から喝采された程で頗る有名な淨瑠璃である。併し一代の才人平賀源内の作品として見れば、彼特有の辛辣なる諷刺も皮肉もなく、平凡な類型的の構想と趣向とに墮した淨瑠璃たるに止つて居る。併し淨瑠璃作者福内鬼外の作としては代表作である。自然江戸作者の淨瑠璃中の名作であるのみならず、義太夫淨瑠璃といへば大阪中心であつたのに對して、場所も出來事もその重要なる部分は江戸附近である上に、江戸の作者の手によつて、所謂江戸前の呼吸で綴られたものとして注目すべき作品であると謂つてよい。

本曲は新田義興の横死後のその遺族遺臣の活動を主眼として居るが、これを義興の遺孤徳壽丸を守立てる遺臣の苦衷と、義興の弟義峯をめぐる悲劇との二つの大筋の組合せとし、それが爲に二ケ所に大きな山を設けてある。その仕組の要點をいへばからである。新田義興は心中深く覺悟する處があつて、小手指原で足利尊氏と戰ひ老臣由良兵庫之助の諫を用ひずして竹澤監物の言に從つて輕々しく尊氏追撃を企てて矢口渡に於て監物の奸計にかゝつて自刄する。遺臣南瀬六郎は新田城なる幼君徳壽丸を伴うて六十六部に身をやつして敵の追跡を遁れたに、兵庫之助はおめ／＼と足利に降參した。但しこれは表面で、實は南瀬と兵庫之助とは腹を合せて、徳壽丸と兵庫の子とを取換へ置き、兵庫は足利の祿を食みつゝ徳壽丸を我が子として養育して居る。年經てこゝへ六郎が竹澤の部下に追跡されて避難し、兵庫は竹澤への申譯として、彼が徳壽丸と目をつけた我が子を身代りに立て、折柄來會せた先君の御臺や我が妻に本心を明かすといふ三段目の兵庫館の場が一つの山となつてゐる。そのあとを受けて四段目の頓兵衛内の場に於ては、義峯に戀した頓兵衛の娘お舟が、身を捨てて義峯を助ける條に更に大きな山を設けてある。かくて結局義峯は義興の怨靈と水破兵破の二

神矢の加護とによつて竹澤一味の敵を滅し、新田足利は玆に和睦し義興は矢口明神と祀られるに終る。

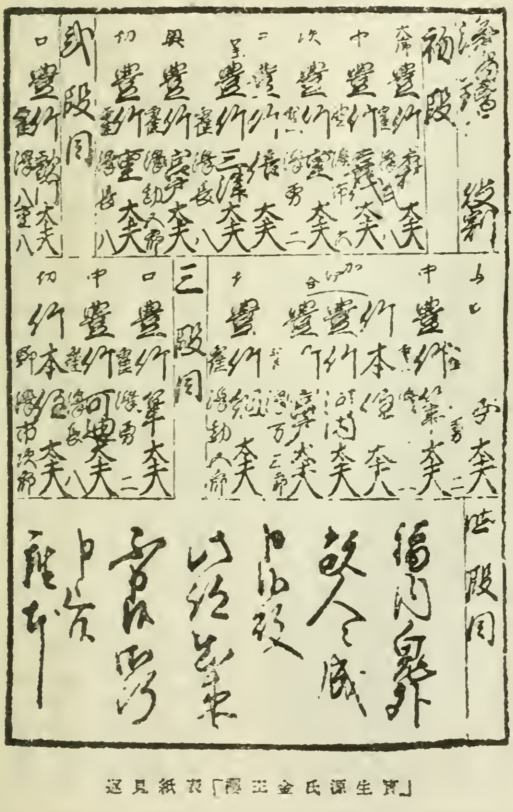
作中最も特色ある人物は言ふ迄もなく矢口の渡守頓兵衞で、金の爲には義理も人情も顧みない惡に徹した圖太い人物として描かれて居るが、この類型の人物としては近松の「栬狩劍本地」の三段目艾屋の場に出て來る惡に徹した久作を擧げる事が出來ると思ふ。

作者福內鬼外　平賀源內の淨瑠璃作者としての戲號。讃岐志度の浦の人。名は國倫、字は士彝、鳩溪と號し、又戲名を風來山人・天竺浪人・森羅萬象などともいつた。彼の傳記、彼の多方面に亘つての活動については世に知られて居る事故、こゝには特に彼の筆になる淨瑠璃の外題名と、その興行座及び初日を左に列擧するに止めて置く。

神靈矢口渡
明和七年正月十六日　外記座

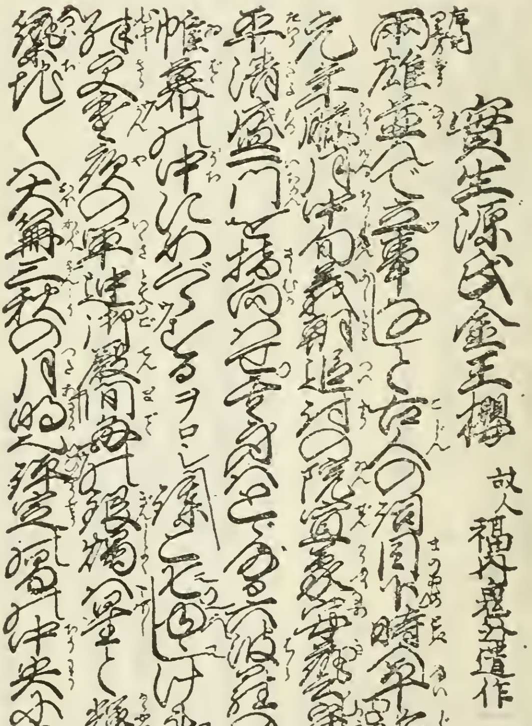
源氏大草紙
明和七年八月十九日　肥前座

弓勢智勇湊



「實生源氏金王櫻」表紙見返

明和八年正月廿日　肥前座
嫩桑葉相生源氏（わかばのみどりあいおいげんじ）
安永二年四月卅日　肥前座
前太平記古跡鑑
安永三年正月十二日　結城座
忠臣伊呂波實記
安永四年七月十五日　肥前座
矢口後日荒御靈新田神德（あらみたまにつたのしんとく）
安永八年二月八日　結城座
靈驗宮戸川
安永九年三月三日　肥前座
實生源氏金王櫻（みばえげんじ）
寛政十一年正月　肥前座



以上の九篇がある。中には吉田仲二（二一と同人か）や二世森羅萬象（源平藤橘）が手傳つたのもあるが、大部分は鬼外の筆である。而して鬼外が歿したのは安永八年十二月十八日であるとも、又は安永九年二月十八日であるとも傳へられて居るが、兎に角「靈驗宮戸川」は彼の歿後に興行されたものといふべきである。殊に「實生源氏金王櫻」に至つては、ずつと後になつて興行されると共に正本も刊行されたもので、「故人

福内鬼外遺作」として、三段目迄を出し、その正本表紙見返しの太夫役割附の四段目以下の空白欄に「福内鬼外故人に成申候故此跡出來不申候御斷申上候　座本」と記入してある。

妹脊山婦女庭訓

明和八年正月廿八日から竹本座興行。作者としては近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南の名を連ね、後見として三好松洛が控へて居るが、これも半二が中心たる事は言ふ迄もない。

初代義太夫が旗上げをしてから八十餘年連綿として續いた竹本座が明和四年に一度退轉し、明和六年十二月竹田新松が座本として再興し「近江源氏先陣館」を出したが、それ以來も兎角振はずして、窮餘の策として、明和七年秋三代目吉田文三郎冠子を江戸から呼下し、江戸で好評のあつた「矢口渡」を出したが、これもさしたる反響もなく、竹本座も又々廢座の運命に迫つた時に、半二が一生の智惠を絞つてこの妹脊山を作り、特に山の段の定香を當時賣出しの春太夫に、大判事を名人の聞えある染太夫に語らせて大好評を博し、四五年來の不入を一時に取返して、座の旗色が立直つた淨瑠璃であつたといはれる。それゆゑ故篁村翁は曰く、「此の作は半二一代の手柄のみにあらず、竹本座再興の獨參湯ともいふべきなり」と。

思ふに本曲は結構の雄大にして、種々の傳説趣向の巧みに利用せられ、巧妙複雜なる技巧の極致を示して居る點に於て、正に淨瑠璃王代物中の雄篇名作の一つと謂つて差支ないであらう。

鎌足が入鹿を滅した事件及び珠取海士の傳説を材とした戯曲としては、古くは謠曲の「海士」、幸若の「たいしよくわん」があり、古淨瑠璃にも、山本角太夫の「大しよくわん」（延寶八年）井上播磨の「大職冠知略

玉取」、岡本文彌の「大職冠方便玉」、松本治太夫の「大伽藍寶物鏡」等があり、更に近松の「大織冠」（正徳二年春）から竹田出雲の「入鹿大臣皇都諍」（寛保三年四月）と次第に後になる程技巧的となつた作が現れ、又歌舞伎に於ても夙に元祿六年京都の早雲座では「面向不背玉」（白石彦兵衛作）が興行され、元祿十四年正月は江戸の中村座で「傾城王昭君」（市川團十郎作）が上演されて居る。半二は如上の大織冠物の中から、特に入鹿討伐の方面の材料を求めた上に、更に大和に於て古來有名な傳説で既に淨瑠璃や歌舞伎にも仕組まれた事のある釆女の絹掛柳の傳説、神鹿殺しの科としての石子詰の十三鐘の説話及び謠曲「三輪」の苧環の傳説等を巧に取入れて一篇の趣向をこらして居る。而して是等の多くの説話傳説を活用するために、作者は先づ、筋立の必要上から惡の權化ともいふべき超人間的の力を有する入鹿の生立について次のやうな宿命的の因縁を與へて居る。彼の父蘇我の蝦夷が齡傾く頃迄も一子なきを憂へて時の博士に占はせ、白き牡鹿の生血を取り、之を母に與へたその驗として健かなる男子が出生した、鹿の生血が胎内に入つたによつて入鹿と名づけたのであるといふ。それ故彼が心をとらかして、その所持する寶劍を奪還してその上で彼を誅伐するには、爪黑の鹿の血汐と疑著の相ある女の生血とを混じて鹿笛に注ぎかけて吹く時は秋鹿が妻戀ふ如く自然と鹿の性質が顯れて、その色音を感じて正體が無くなるのである。それ故入鹿討伐に粉骨する淡海とその腹心の者とは、この最後の目的を達する爲に働いた。即ち獵師芝六は我が子の三作が石子詰になるのも厭はずに禁を犯して爪黑の鹿の血汐を得た。漁師鱶七の金輪五郎は戀に狂ふ可憐なるお三輪を疑著の相ある女として殺した。而して淡海を中心として戀を爭ふ橘姫とお三輪との三人を入鹿の館にたぐり寄せて二女の犧牲によつて宿志を遂げさせるべきの機縁を作る爲に苧環の糸は繰られるといふ趣向になつて居るのである。の

みならず天智天皇と釆女とを入鹿の毒手から救ふ爲に絹掛柳の傳説の飜案が用ひられて居る。そしてこれが一つの動機となつて相愛の久我之助と雛鳥とは、その親と親との和解し難き爭を象徴するかの如き越え難き吉野川を隔てて侍の體面と女の操との爲に自害して彼等の悲しき戀を蓄のまゝで永久に吉野の川瀬に流し去るのである。

かういふ複雜な趣向が、尙その上に補助的の筋立や挿話が伴ひつゝ、第一段第二段のそれ〲の場面の間に適宜に伏せられて、それが三段目四段目の葛藤の山を越えて次第にほぐれて最後に至つて漸く全部が明かされるといふ仕組であるから、筋を辿る上に於ては隨分厄介千萬である。その場割りを簡單に表示すれば次のやうである。

- 初段
  - 大序……大内の場
  - 中……春日野小松原の場（久我之助と雛鳥との濡れの場、三段目切への伏線）
  - 詰
    - 口……蝦夷自害の場
    - 切……入鹿入定の場（入鹿の本心明し）
- 二段目
  - 口……猿澤池の場（絹掛柳）
  - 中……つゞら山鹿殺しの場
  - 切……芝六住家の段（かけ乞、萬歳、十三鐘）
- 三段目
  - 口……定香館
  - 中……花渡し

四段目

切•……山の段
口•……井戸がへの場
次•……杉酒屋の場
道•行•
奥•……御殿の段（橋姫歸館、鱶七上使、竹に雀、奥御殿）
跡•……入鹿退治

五段目…大團圓

本曲に於ては三段目切山の段が最も舞臺技巧を弄した有名な場面であるが、これは近松の「信州川中島合戰」（享保六年）の第四段目山の段から脱化したものであらうかと考へられる。

歌舞伎で始めて演じられたのは操での初演と同じ年に大阪の小川座で興行したのであり、江戸では安永七年春森田座で初めて興行された。道行は竹本であつたが、文政十一年八月中村座興行の時、その道行を富本にして「柳糸戀苧環」と題して、富本豐前太夫等が語つた。富本で行はれる「お三輪」はこれで、詞章には筆を加へられて居る。その後天保四年七月河原崎座で演じられた時にはその道行を常磐津で語つた。外題は「願絲緣苧環（ねがひのいとえにしのをだまき）」といひ、詞章は寶田壽助が補綴した。これが常磐津の「お三輪」である。

攝州合邦辻（せつしうがつはうがつじ）

安永二年二月五日から北堀江座興行。作者菅專助・若竹笛躬。

大阪の天王寺の西門の傍に閻魔堂建立のために勸化を事とする合邦は、元は鎌倉の大名青砥藤綱の子であつたが、佞人に讒せられて世を捨てたものである。その娘お辻は河内の大名高安左衞門の館に仕へ、その寵を得て正妻に引上げられて玉手御前と呼ばれた。先妻の子に世繼俊德丸があり、外戚腹に次郎丸といふのがある。次郎丸は惡人壺井平馬等と謀つて世繼の綸旨を竊取し、又俊德丸を殺して家を奪はうと企てた。俊德丸には和泉の蔭山長者の女淺香姫といふ許嫁があつて、二人は相思の仲であつた。然るに玉手御前は義理ある子の俊德丸に深く戀慕して、その戀の叶はぬ怨みに俊德丸に毒酒をすゝめて癩病にかゝらせた。俊德丸は家出して天王寺の非人小屋に身を寄せたが、淺香姫が尋ねて來て連歸らうとする。こゝへ次郎丸一味の者が襲ひ寄せて既に危かつた處を合邦に助けられてその家にかくまはれた。執念深く俊德丸の跡を追ふ玉手御前にこゝで逢ふ。合邦は娘の不倫を憤つて之を刺すと、玉手御前は始めて本心を告白した。俊德丸への道ならぬ戀慕は惡人の難を避けさせる計略であつた。寅の年月日揃つた自分の生血を絞つて飮ませると俊德丸は平癒した。かくて玉手御前は繼母としての義理を立て、寵愛された高安左衞門への報恩を全うした。

からいふ筋を上下二卷に分けて、上卷あられの松原毒酒の場、中高安館、切綸旨取戻しの場、下卷口天王寺西門の場、切合邦内の段に分けて脚色してある。

本曲は弱法師(よろはつし)の傳說を主材とした事は言ふ迄もない。故吉田東伍博士の說では、太平記卷五の「相模入道田樂を弄ぶ事」の條の「天王寺のやようれぼしを見ばや」といふ田樂の新座本座の者共の囃し言葉の中なる「ようれぼし」は妖靈星といふ惡星ではなく、弱法師(よろほふし)の訛語であらうといふ。然りとすれば既に北條高時頃に大いに行はれた田樂に弱法師といふ曲名があつたものであらう。その内容が明かでないから斷言は出來ない

が、或はこの弱法師が謠曲の「弱法師」の原據であるかも知れない。謠曲の「弱法師」は河内の高安の里の左衞門尉通俊が讒言を信じて一子俊德丸を追放した。俊德丸は盲目の非人となつて弱法師と呼ばれる悲慘な境涯に沈んだが、天王寺に於ける父の施行の滿願の日に邂逅して救はれるといふ筋である。而してこの說話は更に一方に於て說經の「しんとく丸」となつて世に弘まつて名高くなり、古淨瑠璃に於てもこれを轉用して語つた。寛文元年九月刊行の山本九兵衞板の「しんとく丸」がそれである。この說經系の古淨瑠璃「しんとく丸」に謠曲の構想と詞章とをも取入れて作つたのが初代義太夫の正本「弱法師」である。本曲は元祿七年九月の作と考定されるが、高安左衞門の嫡子俊德丸が父の死後繼母の呪詛によりて惡疾を得て盲目となり、流浪して弱法師と呼ばれたが、その情人たる陰山中納言信之の女露の前の情と善光寺如來の功力とによりて病氣本復し忠臣柳井中光等と共に天王寺に於ける善光寺如來の出開帳の際、異母弟二郎丸を始め惡人共を捕へるといふ筋で、第三段目は謠曲「弱法師」によつて居る。

「合邦辻」はこの義太夫の「弱法師」を根幹とし居る事は明かであるが、併しこゝに注目すべき事は、この「弱法師」及びその原作となつた古淨瑠璃や說經に於ては、俊德丸は繼母に惡まれて苦楚を嘗めるのであつて、繼母が俊德丸に戀慕したが叶はぬ爲であるといふ想はどれにもない。併し合邦辻に於てはこれが極めて大切な想である事は言ふ迄もない。然らばこれは何によつたかといふに、「しんとく丸」と同じく說經として名高い「愛護若」の系統を引くものである。蓋し年若き繼母が左程年齡の差の無い美しい繼子に戀して、それが悲劇の動機となるといふ說話の原據をなすものは、今昔物語卷四の「狗拏羅太子眼を抉り法力に依りて眼を得る語」であらう。この物語は天竺の阿育王の太子狗拏羅が繼母の戀を斥けたために讒せられて父王から追放

された上に、更に奸計にかゝつて兩眼を抉り去るべく餘儀なくされ、盲目となつて流浪した末それと知らずに父王の庭に迷ひ來て琴を彈いたので、こゝに父王に邂逅し得て身の明りが立ち、且つ大阿羅漢の法力で再び眼を得たといふ話である。この說話が分れて一方には弱法師系のものとなり、他方に於ては愛護若系の說話となつたとも考へられるが、愛護若物としては說經が古く、これによつて古淨瑠璃の「あいごの若」が作られ、更に初代義太夫の正本「都の富士」(元祿六年)となり、更にこの作から海音の「愛護若塒箱」(正德四年)や辰松幸助の「愛護若都の富士」や近松半二等の「愛護若名歌勝鬨」(寳曆六年)などのやうな諸作が生れ出るのであるが、要するにこの系統のものに於ては、二條清平の子愛護若が繼母の戀を拒絶したために父に讒せられて家を追放され、身の置き處なきまゝに大津濱に入水したが、山王權現の利益によつて助かるといふのが主想である。この繼母繼子の道ならぬ戀、それは例へば「都の富士」などの構想のやうに不自然の結婚の爲に犧牲となつた名目上の繼母が、若き繼子に對して自然の人情に萠す戀となつて顯れてこゝに悲劇を釀すといふ風に脚色されると頗る意味のある作柄となるのであるが、本曲のやうにそれが計略であつたと知れては技巧の弊を苦笑せずには居られない。因に愛護若系の淨瑠璃については、本名作集上卷「愛護若塒箱」の解題御參照を乞ふ。

尙本曲構成の大切な一素材となつたものとして見遁すべからざるは「莠伶人吾妻雛形（ふたばれいじんあづまのひながた）」である。これは享保十八年七月十六日から豐竹座で興行されたもので、作者は並木宗輔・同丈助の二人である。前に述べた義太夫正本の「弱法師」の書替物である。北條貞時が先祖時政の法會に高安通俊の子俊德丸に萬秋樂を舞はせようとした處が、高津兼則の子次郎丸が之を妬んで、俊德丸を欺いて毒酒を飮ませて癩病患者とし、又己の舞

樂の師淺間左衛門をして俊徳丸の師富士右京を暗殺させて萬秋樂の祕書を奪つた。俊徳丸を戀して居た右京の女初花が、寅の年月日揃つた生れである故に、自ら胸を割いてその生血を俊徳丸に飲ませたので、さしもの難病も平癒して、忠臣と共に惡人を滅すといふ筋であるが、この中で、第一段の住吉の濱邊の汐干狩の場で俊徳丸が毒酒を飲まされる場と、三段目切の天王寺の場で初花が生血を俊徳丸に飲ませる場とは合邦辻に影響を及して居る事を見遁してはならぬと思ふ。

また合邦内の段で玉手御前が兩親の許へ辿りついて、戸外から母を呼んで「こゝ明けて」と叩く條は近松の「傾城島原蛙合戰」の三段目手塚浪宅の場で、娘の更科が立歸つて戸外から兩親を呼ぶのを父は紛らさうとして讀經し、母は明けて入れようとしてあせる場面からの脫化である。

絲櫻本町育（いとざくらほんてうそだち）

安永六年三月十一日から江戸の外記座（座本豐竹新太夫）上場。作者紀上太郎、補助達田辨二。

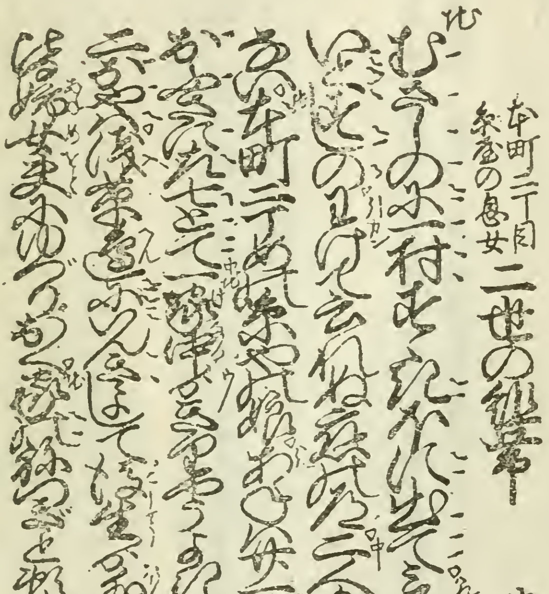
元祿十七年（寶永元年）三月刊行の「落葉集」卷四、古來中興當流踊歌百番中の六十六に「絲屋娘踊」と題して次の歌が載つてゐる。

二上り本町二丁目をとん／＼とん／＼とことん、とことん／＼とんとことん／＼通りたうはないが、絲屋娘は廿一二十（はたち）、やつしつし／＼、姉に望みは少しもないが、妹見る目はしんとろ／＼とんと、親を見る目は猿眼（さるまなこ）え、さる／＼さる／＼猿眼え　へ姉に望み　返し

これが「姉は廿一妹は二十」と角書をつけた「絲櫻本町育」の原據となつた歌であらうと思ふ。この歌で本町二

丁目といふのは江戸であらうが（大阪にもある）、この歌の主として歌はれたのは上方であらう。處でこの絲屋の姉娘をお房妹娘を小糸と呼び、相手の男を左七といふに至つたのはいつからの事か、實説にはかう呼ばれた人物があつたのを、歌にはその名が出なかつたものかも明かでない。而して管見の範圍ではこの歌の想が元となつて始めて淨瑠璃に仕組まれたのは、宮古路豊後の正本「二世の組帯」である。これは七行十六枚（異版十三枚）の短篇であるが、これだけのものと思はれる。版式から見れば、享保末か元文頃かと考へられる。荒筋はかうである。

本町二丁目の絲屋の姉娘おふさに親類から左七といふ聟を取つて兩親は淺草邊に隱居した。處が左七は妹の小糸と深い仲となり、遂に連れ立つて家を拔出て小石川の駒込の裏借屋で手鍋を提げる暮しをする事となり、相借屋の人々に宿酒（やざさけ）を振舞ふ。長屋連中はいゝ氣に醉つて騒いで引上げた跡へ左七の父（おふさの伯父）が



「二世の組帯」巻頭

目を泣きはらしたお房をつれて尋ねて來た。左七はあはてて小糸を炬燵に隱して二人に應對して（重井筒の格）、小糸は御殿女中にやつたから、思ひ切つてお房と添ふと言つて一先づ二人を歸した跡で、小糸と共に、山の奥でも添ひとげよう、それが出來なければ心中して未來で添はうといつて又こゝを出るといふ筋である。

歌舞伎では寶暦六年春市村座「皐需曾我橘（さつきまつそがのたちばな）」の二番目に絲屋姉娘おふさ菊次郎、妹小いと粂太郎、左七菊五郎の役割で演じて居る。

右此本者依小子之懇望附秘密
音節之口傳等具相記遂校合
令開板者也

宮古路豊後

宮古路文字太夫
宮古路大輔
宮古路大学
宮古路宮八

知恩院門お石橋上ル町　江嶋屋源右板
高倉町通せいぐわんじ下ル町　八文字屋八左板

同奥附

この次に出たのが本曲である。荒筋を言へば次のやうである。赤城家の臣神原左五郎は悪人山住五平次に主家の重寶定家筆小倉の色紙を窃取された責任者として浪人となり、それを捜索するために吉原で幇間左七と名のつて居る。そして本町二丁目の中根屋綱五郎の人物を見込み、その馴染の遊女三浦屋の花咲が五平太に身請されようとした場を救ひ、それを緣に綱五郎に一身上の大事を打明けて助力を頼んだ。綱五郎は姉お房の聟として左七を入れ、自分は係累を遁れて命づくで色紙を奪還する

覺悟を極めた。處がお房と左七との祝言の翌日お房の妹小糸は養家から戻された。この小糸は赤城家へ出仕中に左五郎と私通して懷胎したのでお暇となり、養父の手から更に實家へと渡されたのである。左七と小糸は奇遇に驚くと共に相携へて出奔し、小石川に潜んで居たが、結局綱五郎の力によつて色紙も手に入り、一同世に出て目出たく納る。八册物で、淺草地内の段、赤城屋敷の段、吉原仲の町の段、本町糸屋の段、道行妹脊の組糸、淺草駒形の段、下總行德の段、小石川隱家の段に分れて居る。この中二册目の赤城屋敷の段は尾上岩藤の詰開きの原作であり、行德に於ける岩藤の花咲松葉いぶしは照天姫の松葉いぶしのやつしである。小石川の段は前に擧げた宮古路豐後の「二世の組帶」によつて居り、長屋振舞の條の書出しは同文である。

本曲の上演と同じ安永六年三月から江戸の肥前座に於て同じく小糸佐七の淨瑠璃「江戸自慢戀商人」を出して居る。作者は友三郎・鬼眼の二人である。「本町育」には正本に三月十一日とあるのに、この方は只三月とあるのみで日附が無いので、その作られた前後に迷ふが、雙方を讀み較べて見れば「戀商人」の方が後で、「本町育」を飜案して假作りにした事は明かで、作柄も遙かに劣つて居る。

本曲は同じ安永六年秋中村座で「本町育浮名花聟」と題して演じられた。主なる役は左七三五郎、小糸いろは、おふさ里好、綱五郎廣次、母三津五郎、十兵衞長十郎、五平太津太右衞門。

書替物としては、鶴屋南北と二世櫻田治助との合作「心謎解白糸（こゝろのなぞとけてしらいと）」が文化七年正月市村座で上場された。これが有名であるが、その他にもいろ／＼あり、殊に「江戸育お祭佐七」は名高い。

作者紀上太郎　南家三井の主人。名は治郎右衞門高業、字は公勒。鯛屋貞柳の門下で仙果亭嘉栗と號し、別に四貫・由平等の號がある。浪華に生れて江戸に出た。和漢の學に通じ、書畫をよくし、狂歌に堪能であつ

た。幕府の爲替用達を勤めて江戸駿河町に住んだ。紀上太郎と號して淨瑠璃を作つた。その中では「志賀敵討」「糸櫻本町育」「碁太平記白石噺」などが知られてゐる。寛政十一年四月歿す、年五十三。

新版歌祭文

安永九年九月廿八日から竹本座上場。作者は近松半二。

お染久松の情死事件の實說やその戲曲の系統については、既に本名作集上卷「袂の白しぼり」の解題の條下に述べて置いた。本曲はその「袂の白しぼり」及び改作たる「染模樣妹背門松」を粉本として作つたもので、半二の作中でも名高いものの一である。半二は原作に於ては單に野崎村の百姓久作の子となつて居る久松に對して次のやうな素生を持たせた。

和泉の石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は主君の重寶吉光の短刀を預つて居たのを盜まれたので、阿房拂に逢ふのが無念さに切腹してその家來三平が介錯し、三平は追腹を切つた。その時文太夫には六つになる孤兒があつた。三平の妻でこの兒の乳母であつたお庄は、その兒である野崎村の久作にその兒の養育を賴んだ。久松と呼ばれたその子は十歲の年行儀見習のために大阪瓦屋橋の油屋へ奉公に行つた。久作は後妻の連れ兒のお光と久松とを夫婦にさせようと思つて居た。久松を兄に托したお庄は吉光の短刀を手に入れるを條件として、主家再興を月々に家老に歎願して刀の捜索に憂き身をやつして居る。

㊂かういふ境遇にあつた久松が父の横死後十三年目の暮にお染と情死する事件を脚色したのが本曲である。原作よりは背景が複雜であり、出て來る人物の間にからくりの糸がそれからそれへと引掛けられて居つて、

半二式の技巧澤山の世話物の特長が最もよく出て居る作である。場面としては野崎村の段が勝れて居る事はいふ迄もなく、こゝには半二の舞臺藝術家としての手腕が最もよくあらはれて居る。

佐川魚麿の改作した「増補新板歌祭文」（文化元年八月十五日）は筋立も文章も相違してゐる。

伊賀越道中雙六（いがごえだうちうすごろく）

天明三年四月廿七日から竹本座興行。作者近松半二・近松加作。

寛永七年七月備前岡山の家士渡邊數馬の弟源太夫は川合又五郎主從四人のために殺された。又五郎は江戸に逃れて旗本の士久世三四郎・阿部四郎五郎等庇護の下に他國に潜んでゐた。一方源太夫の兄渡邊數馬は、大和郡山に仕へてゐる姉婿荒木又右衛門と謀り、又右衛門は仕官を辭して數馬と共に又五郎の踪迹を尋ねた。而して遂に寛永十一年十月、又五郎が伯父河合甚左衛門の妻子の居地奈良に入り、十一月奈良を出て江戸に下る事を知り、伊賀上野小田町に要撃して又五郎を



「伊賀越乘掛合羽」草雙紙表紙

始めとして、河合勘左衛門及び姉婿櫻井半兵衛等二十人を討つて多年の望みを達した。これが德川實記・德川太平記などに見える伊賀越の敵討の概要である。

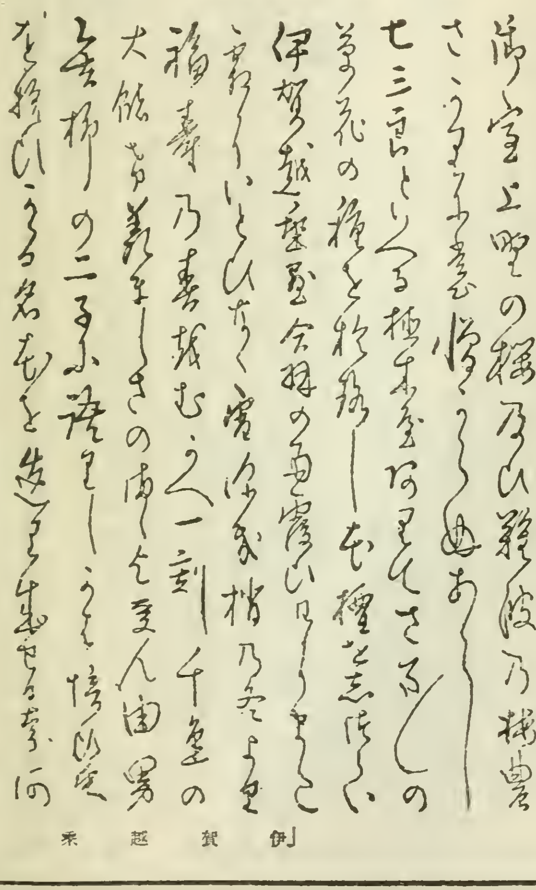
而してこの敵討が後に戯曲に仕組まれるに及んでは、弟の敵を討つのを父の敵を討つ事とし、忠臣藏と曾我兄弟と併せて天下の三大敵討と呼ばれるに至つた。

始めて劇に仕組まれたのはいつか明かでないが、寬保元年江戸の市村座で「敵討三組盃」と題して、この伊賀越と赤穗義士復讐と嚴柳島とを取合せたのなどは古い方であらう。淨瑠璃では安永五年八月一日から江戸の外記座で興行した「志賀の敵討」が始めらしい。これは紀上太郎の作で、伊賀越に芭蕉が俳諧に身を捧げるに至つた動機を取合せた作である。備前生田侯の家臣渡邊數馬太夫が瓦井有鱗同政五郎の爲に暗殺されたのを、數馬太夫の遺子東之助が蘭(あらぎ)又右衛門の助太刀の下に江州志賀の濱邊で復讐の素懷を遂げた。折しも兄の敵として瓦井を尋ねて來た松尾藤七郎は、渡邊に先んじられたのを見て、大小を捨てて芭蕉と改めて俳道に入り、家來の寶井晉介も亦其角と改めて弟子となるといふ筋で、荒唐無稽を極めて居るが、伊賀越を素材とした事は明かである。

同じく安永五年の十二月二日から顔見世狂言として大阪中の座に於て「伊賀越乘掛合羽」が上場された。奈河龜助の作で非常に好評を博し、四月十八日迄興行を續けた。この大當りを見て北堀江の豐竹此吉座では、近松東南がこれを淨瑠璃に仕立てて、同じ外題を以て興行した。この正本は十册に分れて次のやうに見出しをつけてある。第一鎌倉山の櫻がりに大名の鋤鍬(東山櫻狩の段)第二正宗の名作に恩を讐なる非道の心(なかご)(行家屋敷―股五郎の行家殺し、八丁畷松原)第三上杉の出陣に立雛の御上使(上杉館の段―秋定出陣)第四聞覺

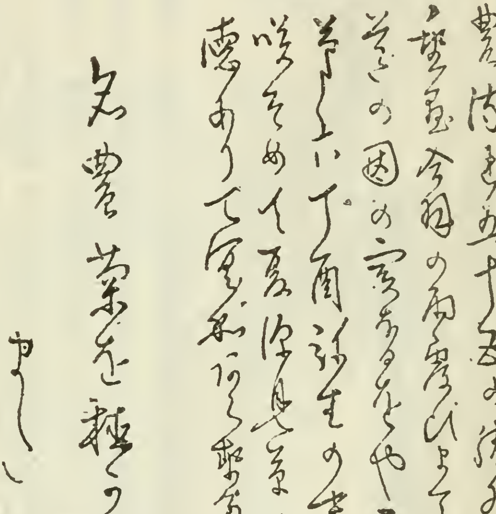
寺の會合に茶の湯の祝言（圓覺寺の段）第五道行胡蝶の猫、第六木辻の居續けに御意打の餞別（木辻の揚屋譽田内記政右衞門に助太刀を許す）第七般若坂の隱れ家に身代りの妙薬（般若坂癩病村に於ける股五部の醫者殺し）第八長町宿屋に磨立（みがきたて）た眞珠の貞心（長町傳法屋の段―お袖身賣、靜馬眼病平癒）第九借座敷の晦日（つごもり）蕎麥は打つて替へた貞女の諫言（伏見の櫻田林左衞門旅宿、股五郎女房おその夫に意見して自害）第十千秋萬歳樂叶うたりな敵討。

この乘掛合羽は操りでも受けて後にも度々繰返されて居るが、本曲の初演より七年後に於て近松半二はこれを土臺として「伊賀越道中雙六」を作つたのである。これも十段から成り、第一鶴が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段に分れて居る。而して雙方を比較して見



例　賀　越　乘

るに、これは彼の改作たる事は明かで、第一の櫻狩は鶴が岡となり行家屋敷はあるが松原はなく、第三の上杉館はなくて第四の圓覺寺が第三に配され、第六の木辻の揚屋が郡山の宮居から郡山屋敷と飜案され、般若坂はなく、沼津と關所が新に加へられて大切な場面となり、長町傳法屋から伏見の借座敷が岡崎から伏見の船宿と改められ、敵討は雙方同じであるのみか文句迄も不用意にその踏襲のあとを示して居る箇所さへある。併し



掛合羽」の序文

大體に於て道中雙六の方が作柄は勝れて居り、乗掛合羽の第一段櫻狩で若殿上杉春太郎が傾城大橋に惑溺する代りに鶴が岡で瀬川と志津馬との假屋の出會としたのも後の沼津への大切な伏線となつて非常に利いて居る。殊に乗掛合羽では端役である呉服屋十兵衞が重要な人物となり、また平作や幸兵衞などが新に加へられてそれ〴〵大切な役をつとめて居るために全く違つた作柄となつて居る。こゝに半二の手腕があらはれて居

ると見られ得る。本曲も好評で、直に歌舞伎にも入り、同じく天明三年九月十三日から大阪中座で興行され爾來三都の劇壇を賑はすに至つた。

乘掛合羽と道中雙六とは操芝居でも相並んで時々繰返されたが、文政元年四月五日から堀江市の側の操芝居で「伊賀越乘掛合羽」の外題で般若坂までは原作の場割りで、そのあとへ沼津、關所、岡崎、伏見、敵討を道中雙六の方から取つて演じて居る。即ち外題は乘掛合羽であるが事實上兩作の接合はこの時に行はれたのである。それが文政七年八月稻荷の文樂座での興行には外題も「乘掛合羽道中雙六」と割書にして「伊賀越」と題して居る。後には「伊賀越乘掛合羽」の代りにこの外題が操では長く繰返された。尤も「伊賀越道中雙六」の外題でも繰返されるが、これでも、內容は乘掛合羽とのつき合せになつて居り、時によつて場割りに多少の相違はあるが、上杉館や般若坂は大抵の場合に加へられたやうである。但し今日ではまた道中雙六の本筋に歸つて居る。

伽羅先代萩

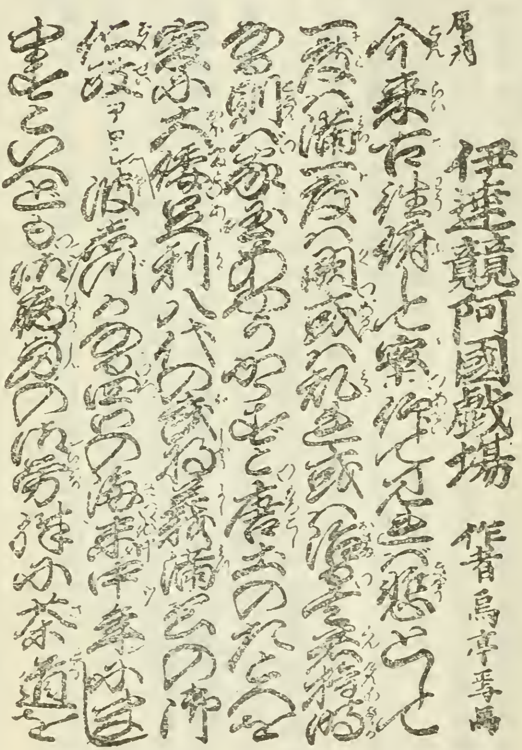
天明五年正月江戸結城座上場。作者松貫四・高橋武兵衛・吉田角丸。

有名なる伊達騷動を仕組んだ戯曲中最も名高いもので、今尚舞臺生命を有する作。

伊達騷動を始めて劇に演じたのはいつからか明かでない。渥美清太郎氏は延享元年五月市村座に上演された「開闢今川状」ではないかと言つて居られる。年代記の役割を見ると山名宗全・赤松彈正・歌舞伎の座元お國祇園のお梶・關取雷鉄之助などが出、又二番目に累與右衛門が仕組まれて居るのによれば如何にもさうらしく

思はれるが、筋が分らないので斷言は出來ない。次に延享三年十一月森田座興行の「大鳥毛五十四郡」もさうだといはれるが、やはり筋が知れない。降つて安永元年七月森田座興行の「けいせい紅葉襠(もみぢのうちかけ)」は芝居年代記に伊達騷動の狂言なりとある通り、伊達騷動を信田の世界にして女淸玄を取合せて仕組んである。信田左衞門(富十郎)が綱宗、澤田縫殿(團十郎)が直則、この縫殿が實惡で大出來であつた。そして淸玄を取入れた二人淺間では、淨瑠璃は富士岡若太夫等の地で、「淸玄亡魂團十郎、高尾幽魂中村のしほで、これも大當りであつたといふ。

上方に於ては、明和四年正月廿日から大阪中座で興行した並木十助の作「けいせい陸玉川(むつのたまがは)」が名高いもので、近江の佐々木騷動の世界になつて居る。次いで安永六年四月廿日から「伽羅先代萩」が上演された。作者は同座のこの前の當り狂言「伊賀越乘掛合羽」を書いた奈河龜助であつた。「奥州秀衡跡目爭論」と角外題を置



「伊達競阿國戲場」正本巻頭

いて、世界を頼朝時代とし、梶原景時（酒井雅樂頭）に中村歌右衞門、秩父重忠（板倉内膳）に中山文七、常陸坊海存（原田甲斐）淺尾爲十郎、伊達治郎秋衡（伊達安藝）中山來助、泉小次郎親衡（片倉小十郎）中山文七、乳母政岡中山來助、榮御前中村治郎三、沖の井花桐豐松、八汐桐山紋治といふ役割で、九段續であつた。而して今日のものとは相違するが、この作に於て始めて政岡の飯焚きから床下が出來たのである。

この作は大好評で四月から六月迄打續け、そして翌安永七年京都の竹本春太夫座に於ては、これをそのまま淨瑠璃に仕立てて御殿の場迄院本として出版したと西澤一鳳の傳奇作書殘篇中に見えて居る。

處が江戸では安永七年の秋中村座で、櫻田治助の作「伊達競阿國戲場（だてくらべおくにかぶき）」が上演された。これは應仁記の世界に累與右衞門を取合せたもので、足利賴兼を綱宗に、山名宗全を酒井雅樂頭に、仁木彈正を原田甲斐に、渡邊民部を伊達安藝に、荒獅子男之助を鐵之助にあてて脚色して居るが、それには飯焚はない。この作を烏亭焉馬・達田辨二・吉田鬼眼の三人が淨るりに仕立てて、同一の外題で安永八年から江戸の豐竹東治座（肥前座）で興行した。三つ目の伏見京橋の絹川谷藏高尾殺しの場は、今日行はれる花水橋の藍本である。又この作では累與右衞門の筋が却つて名高くて四つ目豆腐屋、八つ目埴生村、九つ目土橋の段等は今でも殘つて居る。

以上に列擧したやうな種々の作のあとに出たのが、こゝに收めた淨るりの「伽羅先代萩」であつて、要するに上記諸篇の影響を受けて居るのであるが、殊に歌舞伎の「伽羅先代萩」に依つたもので、やはり賴朝時代の世界である。只殘念な事には、京都の竹本春太夫座に於て淨るりに仕立てたといふ院本の現存する事を耳にしないから比較し得ないが、本曲が、京都及びその附近殊に江州などを主要な場所としてをるのによつて見れば、江戸作者の手によつて創作されたものではなくて、上方系のものに多少手を加へたに過ぎないもので、

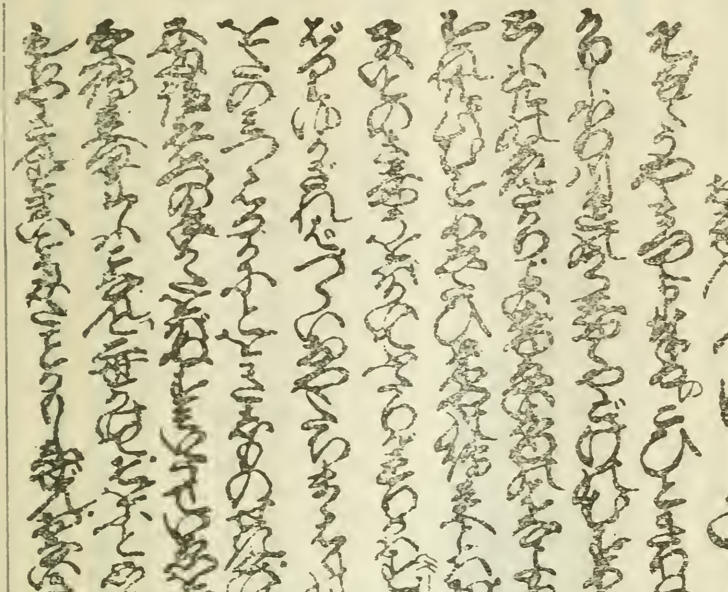
大體に於て歌舞伎の「伽羅先代萩」が淨るりに仕立てられたものかと考へられる。場割りをいへば、第一舟岡山、躑躅山、第二伊達義綱上屋敷門外、第三貝田屋敷、第四浮世渡平住家、豆腐屋、第五近江堅田浦、道行、第六御殿、第七明衡屋敷の上使、第八定倉屋敷、第九對決となつて居る。この中では第六の御殿が最も名高く、後に操りで繰返される場合にもこの場だけが出るのが普通で、全體を出した事は稀である。而して全體を出す場合には「阿國戲場」の埴生村の段や土橋の段が取合せられた例もある。尤も御殿の段と雖も、今日歌舞伎で演じられる床下のあの勝れた場面は、淨るりから歌舞伎に入つて、名優等の工夫によつて大成されたものである。

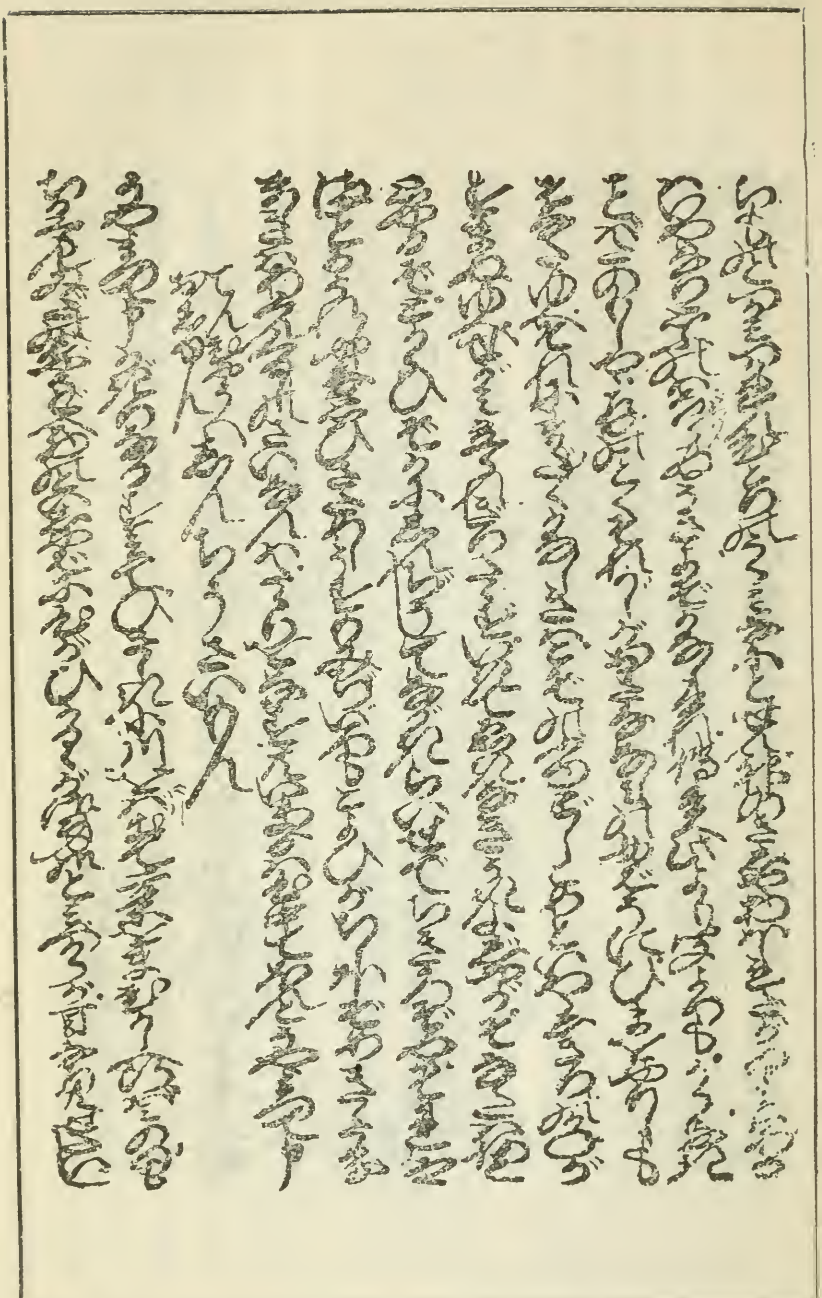
近頃河原達引（ちかごろかはらのたてひき）

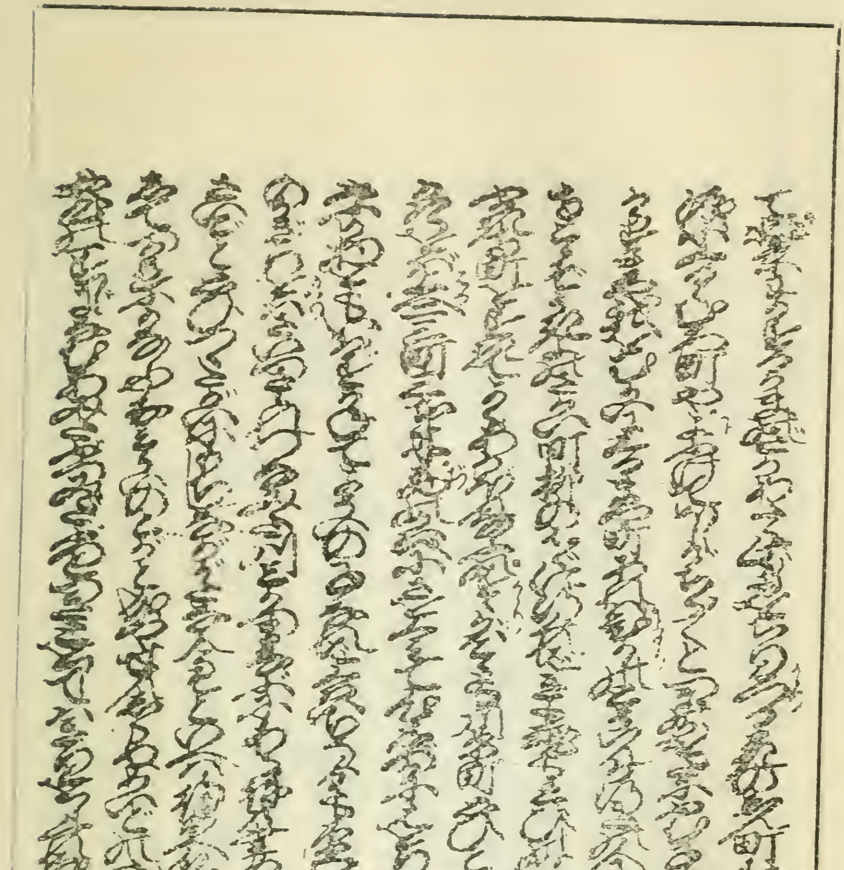
正本に二種ある。一は天明五年五月五日から江戸肥前座に於て興行された時のもので、作者として爲川宗輔・筒川半二・奈河七五三助の名を連ねてゐる。他の一は同年九月九日の刊行で、中村重助再撰とあり、卷末に豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居に於て語つた時正本を出し得なかつたのを今出版するといふ旨が記してある。內容は同一である。又一說には作者として近松半二を擧げて居るといふやうな次第で、成立についても確說がない。

のみならずその原據についても疑問があつて、解題者に取つては厄介な淨瑠璃である。松村操の實事譚のおしゆん傳兵衞の實說によれば、京都鳥部山日蓮宗本壽寺の境內におしゆん傳兵衞情死の墳墓がある。而して二人の情死は元文三年十一月十六日の朝の事で、男は釜座姉小路下ル呉服屋井筒屋傳兵衞、女は川端四條

（おしゆん傳兵衛歎祭文）





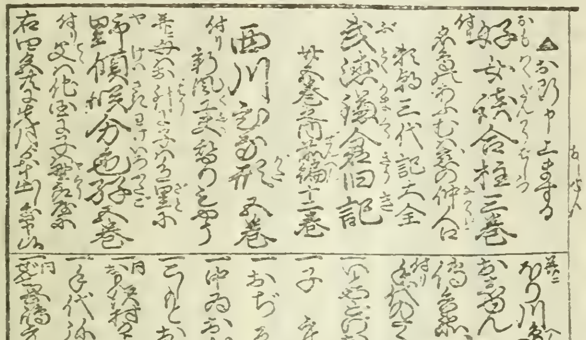


上ル先斗町近江屋金七抱へのおやまお俊といふもので、傳兵衞はお俊を受出す金もなし、緣も切り得ずといふので聖護院の杜で心中したのである。而して「河原の達引」と題したのは、同年十一月十三日德大寺家の家來中村主水と下部音吉及び久我家の家來秦野伊織との三人が四條東の芝居見物に行き所司代の下部五人と芝居歸りに河原で喧嘩刄傷に及んだ事を取合せたからであり、又猿廻し與次郎といふのは、東堀川一條上ル富田町の丹後屋佐吉といふ猿廻しが盲目の母親に孝養をつくして同じく元文三年九月廿七日に其筋から表彰されたのを、享保の末に名高かつた叩きの與次郎の名を借りてお俊の兄とし、この三事件を取合せて「近頃河原の達引」と題したのであるといふ。

併し元文三年の事件を四十八年も後の天明五年に仕組んで「近頃」といふも隨分間の拔けた事である上に、お俊傳兵衞の情死事件は既にこれより以前に人口に膾炙された名高い巷說で戲曲にも作られてゐるのであるから、よしや前記のやうな情死事件が元文三年にあつて、それが本曲構成の一素材となつたとしても、念のために一應古いお俊傳兵衞の情死事件について顧る必要があらう。

享保三年京夷屋座興行の「おしゆん傳兵衞十七年忌」を以て假りに二人の心中の正當の十七年忌を當込んだものとして逆算すれば、その心中は元祿十五年の事となる。蓋し二人の心中はその頃の事であつたらう。寶永元年刊行の「心中大鑑」の「東河原は夜明けの紅」と題する米屋庄兵衞と八百屋おしゆんとの心中の話は、歌祭文の「二條河原心中」にも綴られて居る。おしゆんと庄兵衞は深く契つて居たが、おしゆんの母親がお俊を金で賣る事となり、庄兵衞はそれに對抗するだけの金力がないので二人は連立つて卯月五日二條河原で心中するといふのである。この筋は歌祭文の「京おしゆん傳兵衞心中」と同一であつて、米屋の庄兵衞が米屋の傳

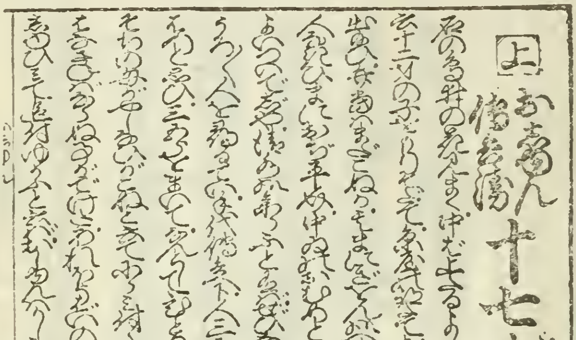
兵衛と變つて居るだけである。雙方を比較して見るに、「二條河原心中」が原作で、これに少し手を入れたのが「おしゆん傳兵衛心中」の歌祭文で、違つた種によつて出來たものとは考へられない。都一中の正本に、「おしゆん傳兵衛河原心中」といふのがあると外題年鑑に見えて居るが未見であるから斷言は憚るが、恐らくはこの歌祭文を材題として綴つたものであらう。次に「おしゆん傳兵衛十七年忌」も亦件の歌祭文が素材となつて、これに多少の技巧が加へられたものである。即ち筋は極めて單純で、糸屋の手代傳兵衛は堀川邊の裏借屋の後家の娘おしゆんと契つて居たが朋輩の彌兵衛の奸計にかゝつて主家重代の刀を盜んだ濡衣をきせられた上に、お俊は母の一存で傳兵衛の實父と實兄との爲にその仕へて居る阿波の殿様に買はれて行く事が分つて進退に窮し、二條河原で情死を企てたが未遂のまゝで人々に救はれると



お俊傳兵衛

いふのである。宮古路豐後の語物に「傳兵衞おしゆん十七年忌道行」といふのがある。文章から見ると、この十七年忌興行の際に語つたものとしては、二人の最期の模樣が作意に合はないのによつて考へれば、別に出來たものかも知れない。

斯の如くおしゆん傳兵衞の情死は既に元文三年以前に於て世に流布した名高い巷說であつたから、私は前の實事譚にあるお俊傳兵衞の情死を今强ひて否定しようとはしないが、「河原達引」にも古いお俊傳兵衞の系統をも引いて居ると見ても差支なくはあるまいかと思ふのである。

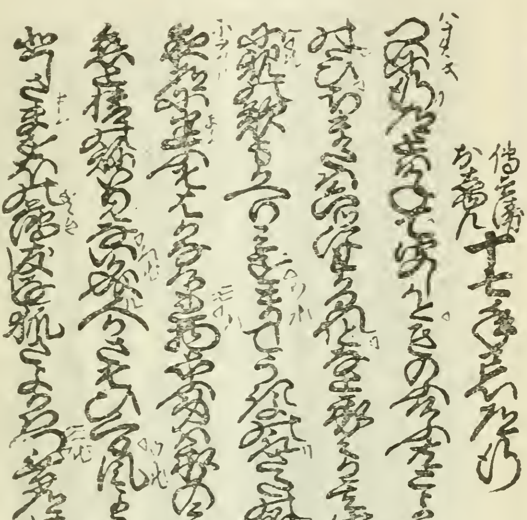


十七年忌狂言本

又一方に於ては天明二年二月十八日から江戸の市村座では常磐津兼太夫等の地で「近頃戀世語(ちかごろこひのよがたり)」を出し、お俊を岩井半四郎、傳兵衞を松本幸四郎が勤めて居り、その翌年の春は中村座で富本豐前太夫等の淨るりで

有名な櫻田治助作の「身替お俊」が半四郎（おしゆん）八百藏（傳兵衞）門之助（白藤源太）等によつて演じられ、又竹本八重太夫は天明二年正月江戸の薩摩座でお俊傳兵衞の猿廻しの段を語つて大喝采を得たと「俗耳鼓吹」に載せてあるのなどによつて見れば、本曲の成立年代に關しては尚研究の餘地があるやうに思はれる。

堀川の段の稽古唄としてうたはれる「鳥邊山」は、寶永三年正月京都の都萬太夫座で興行した「鳥邊山心中」の道行がその原作である。而してこの道行の少し改作されたのが上方唄の「鳥邊山」で、「歌系圖」には近松門左衞門の作となつてゐる。本曲に引かれたのはその歌である。



宮古路豐後正本

繪本太功記

寛政十一年七月十二日から道頓堀若太夫芝居興行。作者は近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒。

出世奴の世界、卽ち太閤記系統の眞書太閤記・繪本太閤記等を材題とした戯曲は非常に多い。近松の「本朝

三國志」(享保四年)出雲の「出世握虎稚物語」(享保十年)等を始めとして、淨るりだけでも十數篇に達する。殊に明和以後操芝居の衰頽期に入り、新作淨るりの振はない時代になつては、敵討物と大閤記種の物とが目立つて多くなつた。その大閤記種の多くの作品中最も世に知られて居るのが本曲である。

本曲はその題名の示す通り、讀本の「繪本太閤記」によつたものである。本書は岡田玉山が寛政九年から享和二年に亘つて完成したもので、文化元年に絶版を命ぜられたのであるが、まだ完結しない間に、特に光秀の弑逆事件を中心とした前後の事柄を素材として脚色したものである。卽ち武智光秀は主君小田春長に妙國寺の蘇鐵を返すやうにと諫め、又寵臣森蘭丸と爭つた爲に春長より散々に侮辱された積憤抑へ難く、遂に意を決して本能寺を襲うて春長父子を弑した。中國に出征して高松城水攻中の眞柴久吉は安國寺惠瓊、城將清水宗治の妹玉露等の力によりて郡家と和し、軍を旋して主君の弔合戰をしようとする。妙心寺に在つた光秀は母の皐月の苦諫に心を動かされて自害しようとしたが、四王天但馬に諫止されて久吉と戰ひ慘敗して小栗栖土民の竹槍にかゝつて命を殞すといふ筋を六月一日から同十三日に分けて十三册に仕組んで、それに別に發端蘇鐵の諫言を添へてある。

その中では二册目本能寺の段、五册目高松城水責の段、六册目妙心寺の段、七册目孫市切腹の段、十册目尼ケ崎の段等が勝れて居て世に知られてゐる。殊に誰でも知つて居る夕顏棚の尼ケ崎の段は、近松の「用明天皇職人鑑」の第二段目佐渡の兵藤太内の段に於ける母の身代りの趣向の飜案である。

本曲の人物としては光秀の母や妻子はいづれも世の義理人情に照して同情される人柄であるが、それ以外に於て、小田春長は暴君であり、眞柴久吉は智勇兼備の天成の名將として扱はれて居るに對して、主人公た

る光秀は特に光つて居る。作者にそれ迄の自覺があつて作り上げたものかどうかは斷言し得ないが、頗る色彩を異にして居る。といふのは、武智光秀といふその姓名が表象するやうに、彼は仁智勇兼備の立派な人物であつたが、暴君のためにその武將としての面目を蹂躪されて感情を極度に激怒させられたので、自覺しつつもとう〳〵逆賊の汚名を受けるを餘儀なくさせられるやうになつた。そして遂に運命と道義とに殉ずるといふ風な、いはゞ頗る近代的の悲劇の主人公たる素質を有する人物として描き出されて居るのは、動ともすれば類型に墮する院本の人物中に於て頗る異彩を放つて居るやうに思はれる。

（をはり）

昭和三年十二月

團七九郎兵衛
釣船三婦
一寸德兵衛

夏祭浪花鑑

第一 色の水上汲分けた 御鯛茶屋の鹽竈

序詞諸行無常と響きつゝ。菩提を知らする遠寺の鐘。生者必滅四季轉變の花の色定なきは娑婆世界。爰に六孫王の御孫多田の滿仲の御嫡子。攝津の守源の賴光とて。オロシへ智勇尊き。大將あり。地然るに如何なる御宿運にや。御心地例ならねば渡邊の綱。坂田公時卜部季武臼井定光。其外殘る諸大名思ひ〳〵に相詰めて フシ御機嫌如何と窺ひ居る。詞中にも渡邊進み出で申すやう如何に方々。此度君の御病氣は御心の結ぼほれと覺ゆるなり。地御慰を催して御心を晴しなば然るべしと述べければ。人々頭を傾けて フシ未だ詞も出さゞるに。地公時やがて進み出で。詞先づ某がな候は。夫人の心をいさむる事。酒宴に增したる事候はず。唐土の樂天が酒功讃を學び。御庭前に酒の泉を湛へ美女を揃へ。今樣朗詠さま〴〵に。音聲微妙を盡さん事如何あらんと申さるる。地渡邊綱是を聞き。詞尤も面白くは候へどもそれは異國の諺なり。地近き我が朝の風景を申すべし。嵯峨の天皇の御宇かとよ融の大臣といひし人。思ひや空に陸奥の。千賀の鹽竈を堪へ忍び。六條河原の院や鹽竈を移し。難波の三津の浦よりも。潮を汲ませ遊興有りしは。何とやらん妙なる樣に存ずれば。御庭前に鹽屋の體を飾り。美女を集め蜑乙女に作り。汐汲む體の遊景は如何あらんさりながら。兎角書付を以て言上然るべしと。やがて一々相記させ。扨人々を召具して。フシオクリ御前をへさしてぞ出でらるゝ。ハルフシ御前になれば。地右の次第を言上有る。詞賴光御覽じ先づ以て某が病中を悲みて。精誠を盡さるの段。誠に以て祝著せり。地いづれも宜しき事ながら。中にも此千賀の鹽竈の事は。吾盛の古陸奥へ下りし時。少しは見物申して有り。昔の體一入懷しく思ふ間。先づ鹽竈の風景望みなりと。御機嫌宣しく宣へは俄に ハル三重用意と。地聞えける。フシ心も詞も。及ばれず。上下洒落たる遊びとて。フシさざめき渡る海景色。地目元に汐を汲む海士は。千賀の鹽竈引きかへて。痴話のフシ鹽がま是や此。君が心を汲みて知る。賤が手業のしをらしき。色と情の二人連。舞なるかならぬか鳴尾崎。今日打解けて淡路嶋。通ふ乳守の廓にて。幾夜重ねん香田の端花の顏ばせ吹付ける。それ〳〵。

こはい東風かぜのぱつと吹井の。フシ浦かとよ。フシ我名を問はば琴浦が。里にありしは昨日今日。興も一入増さるらん。いざ〳〵汐を汲むべし。サアなう汐を汲まうよう。たんぶ。〳〵と汲み分けて 詞持つや田子の浦。東からげの汐衣。二月の。雪と見なせば。フシ消えまじき壽。なりと祝ひける。詞時に紀州熊野の別當惶急しく參上し。百合オツト待つて貰はう。此扱も若王寺の。百合ハテサテ淨瑠璃待つたてや。ヤイ茶平そりやどうぢやい。別當の裝束袈裟衣を忘れたか。昨日の役割儕醉うて覺えぬな。玉嶋磯之丞は源の頼光役。此大鳥佐賀右衞門は渡邊の綱。公時は此御鯛茶屋の亭主。八百屋の末武久三の定光琴浦すの汐汲で。跡目論の淨瑠璃狂言。是まで鹽梅がよかつたに。頭取。何と言ひ付けるぞいと。地叱られて公時も。詞茶平何と狼狽へてぢや。衣裝著て出なほした。いや〳〵〳〵出なほし所ぢやないわいの。頼親の調伏より大きな事が出來て來た。ムウ來たとは何が。來ました〳〵。しかも歴々。ムウ又磯之丞貴樣の迎ひか。面倒な去なしてしまやれ。地いなせ〳〵と放埓の。腰押す惡事の佐賀右衞門にさがなやふはと乘せられて。詞コリヤ去ねと言へ〳〵。去なずばはやうぼい去なせと。地酒がいはする我儘八百。イヤ〳〵詞いつものとは違ひまする。泉州濱田のお屋敷から。御傍輩の介松主計樣。堺のお鯛茶屋は是か。玉嶋兵太夫殿子息。同苗磯之丞殿。明暮是に居申さる由承り使者に參つたと。乘物でぐわつたひし。ヤア何ぢや主計がわせられた。そりやマア何しにわせられた。エエひよんな所へわせる和郎と。地驚く頼光慌てる綱。肘取られし顔つきでも口は利口にエヽコレ 詞磯之丞何をうろ〳〵。主計がそれ程お身は怖いか。堅い自慢の尤顔意見に來たに違ひは有るまい。畏つたのぬらりくらり當分遁れに間に合はした。地身どもはそつと拔けて去ぬと立上れば。詞アヽこれ佐賀右氣の悪い。貴樣が執成言うてくれねば仕舞がつかぬ。イヤサつからうがつくまいが身どもは主計に逢うては濟まぬと。地我が身勝手の爭合なかば。それもう爰へお通りなさるゝ。跡目論取り置けと手々に衣裝著代へるやら。譯も何やら知らねどもいひ交したる夫の爲。疎な事ではあるまいとそぞろ涙に汐汲のコレ太夫さん。詞エヽこれ〳〵泣く所ぢやない。お前は奥へ禿衆奥へ連れましてと。地氣を揉む身内の冷汗に。紅粉の剝げたる公時が顔は斑の飛入椿。首が落ちはしよまいかと騷ぐ末武八百屋物。蔦田の見世へ出やせぬか。旦那樣申し聞えませぬやつぱり久三が役相

應米踏む臼井がましぢやのに。定光尻がくるであろと。口合やら泣事やら引かれ者の歌同前。夢中になるを踏みとばし。どうであらうとおりや去ぬると。難儀を人に塗り付けて。去ぬる大鳥佐賀右衛門フシ悪事と後に知られたり。地酒に亂れても武士は武士礒之丞は著る物著代へ。詞コリヤ亭主茶平。汝等も皆勝手へ行け〳〵。主計に逢うた其上はどうした事が出來うも知れぬ。必ず騒ぐな出まいぞよ。地太夫も必ず出やるなと覺悟極めた詞の端。聞く氣遣は有りながら早や次の間の足音に。短氣を出して下さんすなと。心ならずも打連れてオクリ奥の。ヘ一間に潜み居る。フシ次の間も。嘸驚きつ主計とは。長地女の名にも付くなれどそれにはあらぬ打かけは町と屋敷を合せ帶。骨牌結びの折目高。フシ下座に著けば。地礒之丞喰違うたる使者設け。襠姿に合點

行かず。詞そなたが介松主計殿な。介松氏とは懇意にいたせば奥方も存じて居る。但し主計はいつ女になられた。何用有つての只今のお出で。地まづあれへお通りと慇懃にあしらへば。詞主計樣とはお目にかゝらうばつかりの作り名。お袋様からお使に。言ふな〳〵。殿樣お歸りなさるゝ故。お留守に行てゐる親兵太夫も屋敷へ戻らるゝによつて。戻らぬ先に俺に戻つて居よとの使か。戻られうがどうせうが去んでから又出にくい。去ぬまいと云ふからは。母者人が蜻蛉返り仕やらうが。親仁が目玉むかるゝたけはむきやつても去ぬ事ならぬ。勘當は御勝手次第といんで言へ。又しても〳〵戻れ〳〵と。役にも立たぬ使おこしやんな。遊びの邪魔に成ると言へ。何ぢや異類異形な者が來てあへさがす。地きり〳〵いねと腹立聲。アヽ詞お見忘れも御尤も。前か

どお屋敷に御奉公申しましたおかちと申す者。サアおかちであらうがおまけであらうが去ぬる事ならぬ〳〵。ならずばお歸りなされいでも大事ない。お使の御口上は殿樣明日お歸りの筈なれど。大井川で三日の逗留。阿部川で又五日の川留。道中八日のお隙入りお歸りもそれほど延びる。お留守の內はお館に御用もなし。お歸り迄はゆるりつとお遊びなされてござりませと。お袋樣の粹なお使。誰が來てもお迎かと思召してお逢ひなされぬ。折から私もお願あつてお袋樣へ參りました。出合頭のお使者の御用承つた私が作り。主計様と言うたりやこそ。お逢ひなさるゝ樣にも成るホヽヽヽお嬉しう存じまする。御口上は此通りと。地思ひの外に性悪の。フシ腰押す母の御意はよし。地下地は好きなり。詞ムウ川留で戻りが遲い。それ迄はゆるりつと愛で遊べと言

はるゝか。そりやほんにか。アイアおれを産んだ和郎程有る。いかう粋になられたの。さうとは知らず麁相申した。そんならばついちよつと。狀おこされりや濟む事を。地あつたら肝を冷やさした茶平勘六來い〱〱。おつと障子を引明けていそ〱ひよこ〱。詞オイデ〱。どうぢや聞いたか。承りました氣疎い段か。お袋様は日本一の粋大明神。浦様も追付け 地見だい明神にお成りなさるゝ瑞相めでたし〱と。そゝり立つればコリヤおかち。詞汝への今日の褒美には人は見せぬ取つて置き。乳守の里から琴浦といふ根引の鬼灯。丸貌を拜まさう。太夫々と地呼び立てられ。つい爰には居るけれど。行ても大事ないかへと フシ面はゆげに立出づれば。地おかちは會釋し手をつかへ。詞おまへが琴浦様かいの。若旦那のおいとしがり。ほんに御無理と

申されぬ。お目元なら口元なら。殊にあなたをいとしをがつて下さります。ほんにお嬉しうござりますと。地やさしい詞の貌つく〴〵。詞ほんに汝や前屋敷にゐたおかち。義平次とやらが娘ぢやな。さつきには腹の立つと氣の揉めたのでとんと見忘れ。コレ太夫。あれも嫌ひでないぞいの。色事で屋敷を出たがマアどうして出入をハアお赦しはなけれども。お願あつてムウ成程知つた〱。去年の寶の市に。中間と口論して牢舍した。アイアイ其團七殿事について。ヲヽサ氣遣すな〱。喧嘩の相手の中間が。主の大鳥佐賀右衞門は俺が友達。たつた今迄爰に居た。主計と云ふ名で聞き怯ぢ迯げて去んだは。弱いやつ。おれが味よう言ひ聞かせ。佐賀右衞門が申しおろせばつい濟む事。追付け事なう濟してやろ。地そんならどうぞお世話しておかち様の氣休

め。佐賀様へ人やつてと女の事は女同士。名にも引くかた琴浦が裏なき詞に牽頭の茶平。詞サア〱目出度い埓明いた。此悅びに今日の趣向。跡目論のさつきの殘り。地見物にはおかち様始めうでは有るまいか。但しそれより飲にして大きな物で始めましよ。お銚子早うと叩く手の。返事も長き春の日の。濱邊の礒な踏みあらし。地見るめけやけき非人の喧嘩。取りさへ人も友褴褸。待てよ放せと聲かけ造りの下の騷は。こりや一興跡目論より乞食論。賴光ぢやない囉ひこう。様子を聞かうと緣先から。見をろす下にぶち叩き。詞ヤアこつぱとめな。コリヤ八よ待て。イヤサ邪魔すなイヤサマヽ待て。コリヤわれも仲間で口利者。譯も云はずにぶち擲き。どうした出入ぢや言うてからせい。ヲヽ理窟がなうてせうか。コレ此奴めは此頃の新米。見れば骨も堅し。

仲間に入れて大事ないと思ひの外横道者。天下茶屋から廿町餘り。一文の錢囉はうとて追うて來た旦那衆の巾着。儕が切つてよう俺に難儀させたなア。大掏摸め。大盗人め。コリヤヤイ此堺街道は夜・よなか銀持つて通らうが。指さす乞食ひつとりもない。儕が樣なやつ生けて置きや。仲間の者の足が上る。地其處退け彼奴打殺すと摑みかゝるをマヽ、待て。詞コリヤ新米よ。なまの八が云ふ通り。己りやちよこ〳〵腰な物ひぢるな。そんなら手よう盗人せい。但し盗まぬといふ言譯有らば。サアこつき出せまき出せと。地こつぱの權にきめられて。頰も心もしよげ〳〵と。詞こなた衆が皆尤も。盗まうと思うてした事ぢやない。帶の間から落ちかゝつてあつたを。ちよつと持つたらずるりと抜けたが。盗み始めの盗みをさめ。殺したか殺せ。をれが段々なり下つた懺悔を聞いて下はりませと。地詫ぶれば上にはコリヤけうとい。したが非人の言譯とは。靑江下坂ぢや有るまいか。旦那それから御覽じませと。幇間が惡口耳にもかけず。詞まあコレ二人ながら聞いて下はれ。わしが親は太物問屋。大名の掛屋もして。羽がひの下で人の百も養うた者。それ程に仕出した和郎ぢやによつて。何もかも始末しられたやら。四十過ぎての一人子。おれとは違うてよい衆付合させにやならぬと言うて。謠を習ふ舞を習ふ。鼓の茶の湯の何のかのと付合に錢の入る事ばつかり。伽羅かける外秤とやら手に取つた事もない。綿が高いの。錢が安いの手代共が寄合うて。勘定が合はぬの引くの山の。そんな事は空吹く風。噎しても人參三昧。物心覺えるとのら友達に誘はれて。此堺の乳守へ來初め。太夫が傍では恥かしうて爪銜へて居た者が。二度になり。三度になり。四度めは面白し。五度めは可愛うなり。それから連も邪魔になり。十日も廿日も居續けのたわいなし。寄障る者皆追從。旦那くわつとに乘せ上げられ粋と言はるゝが嬉しさに。來ぬ日の紋日も貰ふ樣に成つて來ると。始には似ざりけり。のらめ〳〵と親父の意見絲瓜の皮とも思はゞこそ。親を親ともせぬ俺を母者人はまだ抱へて。陰へなり日南になり幾度か女夫喧嘩。其母者人へは義理はなく。得手勝手の義理ぢやのしやばるの。それからは身請穿鑿。親方が高ばる。手代が困る此方はしこる親父は叱る。ひつ捉まへて二月ほど座敷牢同然一寸も動かさず。物ほしい時分に無理に嫁呼んであてがふ。何が親父が孔明をやられても此韓信跨は潛らず。蹴飛して置く故に五日歸りに直ぐに去狀。孔明が死んでから三國志の亂口。

一七日立たぬ内彼の色を請出して女房に持つと。家の手代は見限つて引く様になつて來る。主が主なら家來も家來。新季の手代は引負する田舍の客も餘所へ行く。仕様事なしに商賣變へてマア請酒屋と出て見れば。よその飲人は一人もなく。家内して飲上げる。當分いらぬ衣裝道具。質屋へ飛んで月の切れたも理の前。流れの者を女房に持つた因果。まだ奇特にもお眞向様は入殘の取賣で女夫暮す中。盗人に遭ひ火事に遭ひ。ぼんやしても猪口才でてらの錢皆はり込み。分散した賽の目で。死んだ親父が草葉の蔭から睨まれた。親の罰銀の罰身の程忘れた罰で。襤褸著る様になつたとは今では合點がいても跡の間。人の餘り喰ふ様になつて。くれぬ物つい取る氣になつたのは。榮耀榮華に戯へ過ごし。罰の當りたい程當つた骸。擲きなりと殺しなりと。存分にしてくれと。地命惜まぬ悔泣。欷り上げ〳〵。涙に亂が身の上は。二人が身にも外ならず。めんつに餘る囉泣貰にも。フシ乞食の涙なる。地こつぱも涙押拭ひ。詞エイハ聞きや素性もよい者なりなまよ。堪忍してやれ。ヲヽ汝が言ふ事なりや赦してやる。重ねて盗ひろいだらほで打折るが合點か。中直りに醬油囉うてきすほ燒かう。板お造酒でも振舞へと。地腹の酒樽詰めかけるは。伊丹にあらぬ薦被り フシ打連れてこそ急ぎ行く。地始終を聞いて礒之丞。物をも言はず片隅の刀提げ立上れば。詞申しおまへは何なさるどこへお出で遊ばすと。地琴浦に咎められ。詞イヤ何處へも行かぬ俺や去ぬる。去ぬとは旦那そりや何故に。どうぢや知らぬが俺や去にたい。おまへがお歸り遊ばすと今日の私が使の口上。お袋様の御内意を無下になさるゝ同然。イヤサ無下にならうが如何せうが。今の新米乞食が言分。俺が身持に違ひない。胸にひつしと應へて來て。爰にはどうも居られぬ〳〵。内の首尾見て又來う太夫。アイナそれもお袋様のお心休めぢや近しいに又お出で。松屋の門迄送つてたも。おかちは別に戻れよと。地居浸れ客に去神の憑いては其處に堪られず。サアお歸りに漸と。息の出でたるたいこ持。爰は一番さつぱりと サハリいなう峠の孫ぢやくしときたわいな。唆るたいこが拍子には。あはぬ玉嶋礒之丞フシ送られ館に歸りけり。地おかちも跡を見送りしが小戻りして縁先に。手を五つ六つ打鳴らせば。ざわ〳〵〳〵と フシ立戻り。地濱邊に蹲ふ以前の乞食。詞お家様お首尾は好ござりましたか。首尾は好いとも〳〵。其方達が身の上咄で。唐の孔子の意見よりあなたお一人御合點いて。館へお歸りなされたはいかい働。

お袋様のお悦びおかちが今日の身の面目。地禮をいはうと勝手より取寄せ置きし挾箱。蓋押明けて夫々にちはる布子の裄尺も。荒男には大島と目利手利の仕立際。手々に戴き戴いて。詞コリヤお金まで下さりまする。お袋様から當座の御褒美。お有難うござりまする。さらば。地〳〵の悦びは。おめでたい茶屋戎嶋おかちは。屋敷へ。三重へ急ぎ行く

第二　殿の諚意を巻込んだ おやま繪の拝領物

地治まる御代は國民にハルフシ惠も深き。和泉の國。地濱田の御城主東より御歸國と。上下賑ふ家中町。フシ表美々しき一構。地お國詰の諸子頭玉嶋兵太夫。今日御上使の御入と中間小者が掃き掃除。庭の盛砂箒目に武家のフシ行儀を顯はせり。詞なんと角內。お屋敷は此様にお客設で混ぜ返すに。若旦那礒之丞様は乳守の傾城に腰打抜かし。一昨日からづつと出られた。さればいの。今朝から七度半の呼使でもお歸りない。あのお身持が親旦那の耳へ入らば。久離が物はぶらつく。仕舞はあなたの身の上を。歌祭文でやりをろと。地さがなき下の口の端に。かゝる折節礒之丞三日醉を乘物に。揺られ〳〵て戎嶋お鯛茶屋より立歸れば。おかちも後より息急と走り付き。コレお乘物すぐにフシすぐにと舁き入れさせ。地音なふ間もなく奥方は稚子の手を引きて。疾しや遅しと一間を出で。詞ヲヽおかち戻りやつたか大儀々々。奥様にも腕白者で嘸おやかましう思召そ。イヤなう其方の育ちが良さに年よりはおとなしい。此様な子を持つは親の大きな氣助り。それにつき。今奥で礒之丞が顔を見て。嬉しい中にも腹が立つ。是迄の放埒は若い者の有る習ひと。父御の手前は愼みしが。今日は殿様より仰せ渡さるゝ子細有つて。俄に御家老介松主計様の御出。此御用にはづれては再び屋敷へ歸る事も叶はず。地品によらば夫にも如何なるお咎が有らうも知れず。其憂目を見る悲しさに。心一つで兎や角と案じ暮し。親子の縁も今日限りかと。其方がスヱテ便を聞く迄は。なんぼう胸をフシ痛めしぞや。詞ア、それはお道理。嘸お待兼なされうと私も心急いたれど。何が御遊興の最中なればほつかりとも行かれず。御家老主計様のお名を借つて。どうやらかうやら若旦那のお目にかゝつたれば。お聞き遊ばせかちではないかと。それは〳〵お目角強く。迎に來たか意見に來たか。アイと申上げたらば。歸らぬお心推量して。お歸りのかの字も言はず。遠合からの御意見がお耳にとまり。早速お歸り遊ばした。ヲヽ夫は出かしやつた。礒之丞が此家を相續する

も。偏に其方が働返す〳〵も忘れはせじ。ア、勿體ない事御意遊ばせ。扨私がお使の役目も是迄。お借り申した此お小袖。地 奥樣御免遊ばせと裲上著脱ぎ置けば。下は晴著の木綿物疊さはりもしとやかに。親子諸共座を押しさがり手をつかへ。詞 憚りながら奥樣に。お願ひ申上げたきは夫の身の上。今さら改め申すには及ばねども。私がお家に御奉公の中。お屋敷へお出入の堺の魚賣。團七殿と不義致したる誤にて直にお暇下され。それより堺の南の店で夫婦共挊の魚商賣。何とぞ御恩のお主樣へお詫申しに。今日よ明日よと思ふ中に此子は出來る。世帶の世話に絡まれ思はず御無沙汰。所に此度夫團七の難儀定めてお聞及び遊ばさう。去年の九月十三日寶の市の歸るさに。此御家中のお草履取と乳守の中で口論仕出し。相手は主人をかうにきて 酒機嫌の刃物三味。何が夫もきかぬ氣なれば。先の相手に手を負せ歸りしを。喧嘩兩成敗と有つて。相手も俱に牢舍仰付けられ。事の濟む迄大阪の長町。三河屋の義平次と申す私が親元へ。此子を連れ歸つて居ても。主の難儀を思ひやつては有るにもあられず。泣いて計りをりませしが。地 殿樣御入國のお悅びに。數多の科人を御赦さるゝと。聞くや否や此子を連れて出牢のお願ひ。何卒此度のお目出度に。夫團七の科を御赦免有る樣に。旦那樣や奥樣のお取りなしなされ下さらば。此上もなき御慈悲とフシ涙と俱に賴むにぞ。詞 ヲ、夫ならば道理々々。今も言ふ通り。今日は御家老主計樣も御出なれば願うてもない幸ひ。親子連れでお願ひ申しや。夫兵太夫殿へは自がお話し申す。地 上使のお出に間も有るまい。其間勝手へ行て休息しや。後に〳〵と入り給へば。かちもいそ〳〵市松をヲクリ連れて勝手へ入りにける。

ハルフシ 直きは武士の。常なれや。地 和泉の國の執權職介松主計。跡に續いて大鳥佐賀右衛門。御用の長櫃家來に持たせ徐徐と入り來れば。館の主玉嶋兵太夫同苗磯之丞。其外組下の役人召連れ出迎ひ。詞 先づ以て今日は御兩所共に御苦勞。いざ先づあれへ。地 然らば左樣と上座に通り。フシ 各席を改むれば。地 主計諸士に打向ひ。詞 扨何れも仰せ渡さるゝ子細といつば。此度殿御入國の御悅びに。お國詰の諸役人へ御土產を下さるゝ。目錄に引合せ頂戴有れ。地 それ〳〵と有れば佐賀右衛門目錄ひかへ。詞 組頭玉嶋兵太夫殿是へ〳〵。扨貴殿には御在京の間役儀怠なく勤められ。非番の折々は組下の諸士を集め。武藝を專ら勵まれしと上聞に達し。殿にも殊の外御滿足遊ばされ。長船の刀一腰御土產に下しおかれ。御折

紙に新地二百石の御加增。有難う思召されよと。地渡せば退つて頂戴し。コハ冥加もなき仕合。武士の面目此上なし。御前宜しく御推擧賴み奉ると。一禮 フシ述べて控ゆれば。詞組下駒形杢兵衞殿。地ハツト答へて立出づる。詞承れば其方には。晝夜碁將棊の稽古に精魂を盡さるゝと。お上にも御沙汰あつて碁盤一面遣さる。尤も盤將は。軍の法に同しけれど云はゞ遊藝。武士は武藝を勵むが肝要。此後とても心得のあるべき事と。地詞の中手入れられて不首尾千萬將棊盤。碁盤かへて杢兵衞は隅に目を持ち控へゐる。同しく音羽浪之進。髮のかゝりも四座風に。歩むも三ツ地長地の間。のつし熨斗目の袖捌して畏る。詞其許には此間小鼓をよく鍛錬せられしとあつて。此度の御土產に小鼓一挺下し置かるゝ有難いと頂戴あれ。惣別大名高家には。猿樂を召抱へお慰になさるゝを。武士は打囃しせねば叶はぬと心得。武具馬具も代なし。小鼓に金銀を鏤めても。其鼓がまさかの時お馬の先の御用に立たず。遊藝に身を擲つは町人の業。重ねてきつと嗜み召されと。地やり込められて浪之進ちつともホウとも返答なく。生れ付いたる薄皮の。顏を赤めて猩々舞 フシまひ〳〵してぞ入りにける。地跡へ出でたる大男年は四十七八手。名さへ羽根倉闘右衞門 フシ相撲好とぞ知られける。詞御自分は先達上聞に達せし相撲好。戰場での組打に勝利を得るも相撲の手。武士の上では遊藝よりはるかに勝り。まさかの御用に立つべき業と。緞子三本化粧紙お心付いたる下され物。此主計も茹鮹百ぱい花に進上仕らん。と。地家老職の戲言に フシ時の興をぞ催しける。詞次は玉嶋礒之丞。委細は只今見らるゝ通り。銘々好む業によつて御土產を賜はる。取分け其方は御親父兵太夫殿の役儀を大切にめさるゝ故。御懇情淺からず此一軸を下さるゝ。殿の御思慮を廻らされし掛物。有難う思ひ 地拜見あれと差出せば。父のみならず拙者に迄重々深き御厚恩と。押戴き〳〵。定めて殿のお物好なれば墨跡の類ならん。何にもせよ拜見とさら〳〵と押開けば。大和繪師西川が筆を揮うて畫いたる傾城の姿繪。こは如何に フシ〳〵と惘れ。果てたる計りなり。詞イヤサ驚かれな。聞けば其方當所乳守の傾城に身命を擲ち。晝夜を分かず通ひめさるゝ事。上聞に達し此掛繪を遣さる。覺なくは明白に言譯々々。ア、成程身に覺なき御不審を蒙れども。差當つて申譯致すべき樣なければ誓言を仕らん。コレ〳〵礒殿。目前に誓言の罰が當らぬとて。此佐賀右衞門が聞く前で。ぬけ〳〵とした事云はれな。とは何故々々

とは白々しい。乳守の傾城琴浦を請出して。毎日々々歌舞伎狂言しらるゝを。誰知らぬ者がない。イヤそれは御自分も。ヲヲサ手前も此間住吉へ社参の時。戎嶋のお鯛茶屋で。傾城集めてどら打たるゝを黒い眼で慥かに見た。争ふ事なるまいと。地さす戀の意趣晴し汝が科を塗り隱せど。誤りある身は返答もせん方。スヱテなうぞ見えにける。地父は始終默然として居たりしが。ずんど立つて磯之丞を白洲へはつたと蹴落し。刀すらりと拔放し。振上ぐる手をしかと取り。詞兵太夫殿こりやどう召さるゝ。イヤサ不所存な悴の地眞二つにぶち放す。お退きなされと怒の面色。詞イヤ／＼それは了簡違ひ。お上にも様々と御賢慮を廻らされ。お慈悲を以て下し置かるゝ此掛物は。則ち殿の御折檻も同然。それに御自分が子息を手にかけられては。殿のお心が無足になる。地とくと分別あられよと。主計の詞骨身にしみ。父もはつと頭を下げ恭涙にくれゐたる。詞ア、これ／＼御親父御立腹は尤なれども。傾城の梅花の香鼻の先へ滲込んでは。天から釣つた意見でもいつかないかぬ。此佐賀右衛門が申す通り微塵も違ひはあるまいと。地いへど上使は親と子の心を察し返答も。なく／＼父は白洲に飛びおり。磯之丞が襟掻い掴みぐつと引寄せ。詞只今身が手にかくる奴なれど。殿のお慈悲を以て命を助け勘當。武士でも杭でもない奴に。地刀脇差無用ぞと大小捥取り。詞ホ、ウよいざま／＼。傾城に魂を奪はるゝ根性から恥かしうも思ふまい。他人になつても兵太夫は。何れもに面目なうて此皺面を得上げぬ。汝が恥は身共が恥。今日賜つたる二百石の御加増を。汝が申請けたらば。親の身ではな何ぼう嬉しかるべきぞ。不忠不孝の祿盗人。地憎い奴めと齒をくひしめ。目には憎めど恩愛の。スヱテ涙先立つばかりなり。地かくと聞くより奥方は一間の内を轉び出で。詞コレ磯之丞。心がらとは言ひながら淺ましい形になりやつたの。此悲しい目を見まい爲。父御の手前は陰になり陽となり。母が意見を聞入れなく。勘當の身になつて今思ひ知りやつたか。地生れ落ちて今日の日まで憂いめ辛いめ知らぬ身で。京大坂へ行たとても。どこに一日半日の彳みがなるべきぞ。不便の者やとばかりにて。人目も恥ぢずかつぱと伏しフシ身を悶。えてぞ歎かるゝ。詞コリヤ女房。未練な繰言見苦しい。ヤイ／＼家來共。彼奴門外より阿房拂ひ。情をかくれば同罪と。地嚴しき詞におぢ恐れ。遠慮會釋も荒子どもに引つ立てられて磯之丞。先非を悔いても歎きても。再び返らぬ館の名殘親に名殘の惜まれて。見やれ

ば共に奥方も。見送り〳〵のび上りわつと叫び入り給ふを。腰元婢介抱し伴ひ奥へ入りければ。母の歎も。父の怒も我が誤としを〳〵。館を出でて行く。地取次の侍罷出で。詞最前より女一人稚き者を召連れ。御訴訟ありとて玄關に控へ候。通し申さんやと伺へば。地兵太夫打點頭き。詞先達より其願の事聞及ぶ。幸ひ御上使もお出なれば。地此方へ通せの聲につれ。フシかちは我が子の手を引いて。居馴れし屋敷も心から空恐ろしくおづ〳〵と。白洲へ出づれば佐賀右衛門。詞願とあるは汝か。何事なるぞ早々申せ。恐れながら私は。堺南の棚に居ります。魚屋團七と申す者の女房子。此度のお悦ひに數多の科人を御赦さるゝと承り。親子が願の趣此一通に認め參りしが。女子の書いた物なれば釘の折れやら釣針やら。讀めぬ所はよい様に御覧なされて下さりませと。地願の一通差出せば主計取上げ押開き。詞何れも御覧ぜ。是は去年乳守の中で口論仕出し。相手に手疵を負ふせしによつて雙方牢舎言付けしを。出牢さしてくれとある妻子共の願書と。地聞きもあへず佐賀右衛門。詞其相手は身が草履取。ほてふりの分として。武士の家來に手を負ふせたる暴れ者。科を赦し出牢させてくれよとは。のぶとい奴等此願叶はぬ〳〵。イヤ〳〵これさう仰有るな。此兵太夫が存ずるには。先づ彼等が願ふ一通を聞いた上ハテ。赦さうが赦すまいが其時の評議。イヤサ評議も絲瓜も入り申さぬ。身が家來は手疵が重つて今朝牢死致したからは。其團七めを下手人。品によつて汝等親子共牢へぶち込み。縛首の相伴さする。地覺悟しをろと睨付くれば。はつとばかりに女房は。頼みも力も落ち果てゝせんかた涙にくれけれど。まだ稚き市松は。親の歎も白洲の小石フシ拾ひ集めて手惡戯。詞コリヤ市松今のを聞かぬか。先の相手が死んだによつて父様の首切るといの。地お詫申しや〳〵と押出せば手を合せ。詞コレ殿様。私を代りに牢へ入れて。父様の首切らずに怺へて進ぜて下されと。地あどなき願に兵太夫。目をしばたゝき居たりしが。詞御上使何と思召す。相手が手疵で相果てなば團七も極めて死罪。何にもせよ囚人を引出し。死骸の吟味遂げた上。彼等が願も決著致さん。成程々々ヤイ〳〵家來共。獄屋へ參つて二人の囚人連れ來れ。地早う〳〵と追つ立てやり。詞コリヤ〳〵女。詞最前より幼い者が親に代つて牢舎の願。訴狀の表も其通り。囚人を引出し死骸吟味の其上。父親が科を赦し倅を牢舎さする事もありなん。願書相違はないか。地そちが所存も聞きたしと。念を押されて母の親。

詞憚りながらお聞きなさてれ下さりませ。圍七殿が牢の中で。様々憂き目に逢はつしやる話のそしりはしりを聞き。五つや六つの子心にも悲しいやら。父親に代り牢へ入らうと。毎日々々此母を泣きわめいてせがみますれば。女子の愚癡な心から。あれが魂に神佛が入代つておつしやるかと。地それ故のお願なれど夫なり我が子なり。どちらをどうとも悲しいものは私一人。何卒夫が此度の科を御赦免下さらは。生々世々の御慈悲と。白洲にかつぱと フシ身を投伏し泣きわぶる。こそ不便なる。地佐賀右衛門せゝら笑ひ。ハヽ、ハヽ、テ 詞よい工面をやり居つた。子を持つた者はどれ共にあの手にははまらにやならぬ。あれは豫て小悴にいひふくめた拵物。子供ごかしに親めが命助からうといふ事か。地エヽ、けち太い女め巧い事ほざきあがれと。やりこむれば兵太夫。イヤ〳〵 詞それは一途の了簡。既にもつて漢の楊修孔融は。五歳六歳で才智勝れしと聞けば。いはんや日の本正直を本とする神の國。子供に孝行な者あるまいとも言はれず。コリヤ〳〵幼い者。地物とらせうと招き寄せ。かけ盤にうづ高く盛り上げし菓子取上げ。地身共がいふ事よつく聞け。父親の代りに其方が首を切らするか。この菓子が欲しいか望み次第と。地問へばそばから母親が。それ〳〵市松父様に替りませうとお願ひ申しや。やいの〳〵とあせりもがけば佐賀右衛門。詞ヤア女め云ひ教へるか。退れ〳〵とねめつくる。地市松は會釋もなく。首切らるゝ事おりや厭ぢや。菓子がほしい殿様と手を差出せば。フウ 詞牢へならば代つて入る氣。首切らるゝは厭ぢや迄。ヲヽ、よういうたな菓子とらせう。何と佐賀右殿アレ見られたか。親に代つて切られうより。菓子欲しいと云うたのはいひふくめぬ是證據。どうでも子供は正直なと。地落つる所を兩人が引上げ〳〵云廻せば。佐賀右衛門はむしやくしや腹。フシ頬ふくらしてゐたりける。地程なく牢屋の役人ども。見るもいぶせき牢死の囚人。畚に指荷はせ肩肘怒らし引添うたり。後へ引出す繩付は日影見ぬ目の色青さめ。月代延びて顔付も。變り果たるフシ有様に。アレ 詞市松父様ぢや圍七殿か懐かしや。常々に此方の短氣を意見しても聞入れなく。地今此様な憂き目を見る。此子は可愛うない事かと聲を上げかき口説き。涙ながらに駈寄るを。寄るな〳〵と役人ども突退け〳〵白洲にどつかと引据ゆれば。佐賀右衛門縁より飛びおり。詞エヽ、汝憎いやつ。あの通り身が家來を切り殺したれば下手人は遁れぬ。地見るも中々腹立やと。立蹴にどうと踏倒し。惡

者作なしやつ面と。いうては蹴飛し踏飛し。眉間肩骨鐵脚にて。ぐつくつと踏付くるを。見る女房の其悲しさ我が身も共に踏まるゝ心地。短氣の團七ぐつとせき上げ。繩取ひつ立て立上るを役人ども立ちかゝり引据ゆれば。詞ヤア其態になり上つても此佐賀右衞門に手向ふ氣か。地しやらくさい娑婆ふさぎと。ずはと拔いて刀の背打。アヽこれ／＼聊爾あられなと駈け寄つて止むれば。詞コレ兵太夫殿科人の肩持たるゝか。イヤサ拙者がお止め申すも。いはゞ未だ落居せぬ科人。萬一貴殿のお手が廻り。過ち有つてはお爲にならぬ。いかに若いとてちと御麁相に存ずると。地理窟に詰められ拔いたる刀。フシ手持無沙汰に見えにけり。詞コリヤ／＼牢屋の役人ども。死骸をそれへ引出して御上使のお目にかけよ。御苦勞ながら主計殿。地成程々々一所に檢分仕らんと兩人立合ひ。詞コレ見られよ兵太夫殿。此疵は二十日も以前に癒えた金瘡。成程左樣。全く病死に極つたれば。地團七に構ひなしと言はせも果てず佐賀右衞門。詞疵はともあれかくもあれ。人をあやめた科人を構ひなしといはれては。國の政道立つまい／＼。イヤそれはいはれぬ指圖。今日殿のお眼識を以て。役儀勤むる此主計國の掟は背かぬ。病死したは彼奴が不運。相手の疵平癒なれば團七に科はないと申したが誤りか。殊に以てお身の家來。御法跡の傾城町へ入込み酒狂からの口論。道をいはゞ貴殿が糺明しらるゝ筈。但し其方がかの色里へお供に連れられ。同じ穴の狐と思ひ非を理に枉げて贔屓の沙汰をせらるゝかと。地只一口に大鳥も。いひこめられてしよげ鳥のまぢ／＼としてフシ閉口す。地兵太夫女に向ひ。詞幼い者が孝心を感じ入り。汝等が願の通り。團七が科を赦し明日當所をお拂ひ有難う存ぜよと。地聞くより親子は飛立つ計り。伏拜み／＼フシ嬉し涙にくれければ。地何がな彼奴に面あてと。佐賀右衞門しやくり出で。詞エヽ汝命冥加な奴。さりながら家財を闕所して當地をお拂ひ。重ねて當所へ入込むと急度曲事に言付ける。それ／＼役人ども彼奴脚腰の立たぬ程國境より叩拂ひ。イヤ先づ待たれよ。彼が科とてさのみ掟を背いたといふでもなし。口論の事なれば家財闕所には及ぶまい。かういへばとて兵太夫が私の依怙ならず殿の御慈悲。御政道の筋を以て科を御赦免なさるゝ間。有難う存じ重ねて心を改めよ。身が悴礒之丞不所存故に今日勘當。定めて方々を彷徨ひ歩き。果は野末か橋の下のたれ死をし居らう。萬一大坂で遇うたりとも。身が恩を受けたなんどゝ思ひ。必ず／＼情をかくるな。ナ

ナ。合點か情をかくれば恨むるぞと。地口は立派にいひなせど。フシ心は頼む詞の色。地上使は見ぬ顔聞かぬ顔。早お暇と座を立てば。詞最早お出なさるゝか先づ以て今日は御苦勞千萬。イヤサ貴殿にも子息の儀に就きお心遣ひ。イヤもう其儀は御沙汰なし。成程々々。地御內證へも宜しくお頼み存ずると。挨拶すれば佐賀右衞門。詞アヽ御亭主段々の御馳走忝い。お禮は重ねて急度申さう。地〳〵と歪む大鳥直なる主計。いはねどそれとしらすの警護割竹打立て立ちかゝり。引立つれば團七も居所の辛に引代へて。命助かり廻り合ひ。親子の絆縛繩引かれ。出づるぞ 三重へ 惠ある

第三 出入の數をつまぐつた 珠數三昧の男作

地住吉のハルフシ濱邊を春の。名に高き。そればかりでは並木の蔭。新家の貳賣髮結床。櫛の齒をひく往來も自由な堺海道を。大坂の方からひよこ〳〵と來るは撥鬢糟毛の親仁。釣船の三ぶとては。人の厭がるぶら〳〵も。年が意見で直つたか。片手には珠數片手には。だつまの樣な小ぢよつぽがヲクリ冗談歩き持てあぐむ。母のおかちが付添うて。フシ道々機嫌鳥居前。詞マア市ちつと爰で休みや。三ぶ樣も休ましやんせ。ヲヽサテ此坊主はよう歩いたの。大方天下茶屋邊で慥かに駄々けうと思うて。廿五文が駕籠相輿で振舞ふ所を。三文が地黃煎玉でまじなうた。昨日此方が戻つて。今日團七が牢から出ると聞いた故。嬉しうて夜が寐られず。夜の明けるを待ち兼ねた。コリヤ坊主。追つ付け父に逢はしてやらう。イヤしたがもつと隙がいらう。祝うて明神樣へお禮がてら。連れて參らしやれんかい。間違のない樣におりや爰に待つて居よ。ほんに三ぶ樣こちの團七殿念頃な中ぢやとて。いかい世話でござんす。何のいのしたが言ふぢやないが此方の親父。三河屋の義平次が迎ひに來て遣りやる筈。今日は又なぜ來ぬの。今朝から腰が痛いと言うて。サア〳〵サア〳〵作病ぢやて。殊に直にも無い和郎ぢやもの。こんな事誰も來とむながる。マ參つてござれ。アイそんならさう致しませう。コレがんがへ參つて來やんしよと 地いやいのと。口うつしいふ鸚鵡の鳥。親子は宮へ三ぶは火打石に腰かけすつぱ〳〵。フシ茶の錢始末と見えにける。詞ハイ〳〵〳〵賴みませう。杖せんか。地ヲ大小路のあたりから持つて來て。息杖の先にぶらりと駕籠突張り。詞旦那申し。後の立場の駕籠と代へます錢やつて下はんせと。地願へば垂の內よりも。詞極めたは大坂迄着けてから先で渡さう。イヤサそれぢやちと

勝手がわるごんす。後の駕籠と代へねばならぬ。どうぢやあろと爰でやつて下さりませ。サアやる事は易けれど。錢を爰に持合さぬ。大坂で慥に渡す。ハア相棒聞いたか。勿怪なものぢやな。イヤ受取らにや勝手が悪いが。大坂は何處へ着けるのぢやナ。長町邊で尋ねたらば。ムウ先は知れぬのでござりますか。イヤモそんならいよ〱爰で渡して下さりませ。ハテ執拗い爰には錢がないといふのに。ムウそんならおいらを衒るのかと地フシいがみかくれば。詞ア、コリヤ麁相いふな。武士に向つてヤどこへ武士。有様は丸腰エイそれで衒の手め上げた。こんな奴はヤアかうせいと。地思ひ合つたる悪者同士。駕籠をくるりと打返され。内より出たは礒之丞。落ちたるはずみに膝摺り剝き。くわつとせく氣も身の恥をハルフシさしうつ。むいて怺へゐる。詞コリヤ棒組。何でなと爰迄の駕籠代。算用して取つてしまへ。下著なりと上著なりと。地手繰つて算用濟まさうとフシ立ちかゝらんとする所を。詞コリヤ〱〱滅多な事して。後悔すなと地横合から三ぶが聲。詞ヤ何も知らいでそこな親爺何いはるぞい。ホホ知つてゐる〱。コリヤいがむなやい〱。サア足元の明い中にとつ走らいで。なこな様若いがア温順しいよう堪忍さつしやるぞ。シテ駕籠代は何ぼの極め。直なしたは二百五十か。ても高い駕籠ぢやの。からしやつたこな様もこな様ぢやて。由縁かゝりはなけれどもコレ此親父がヲ尻持。ヤアわり様が尻持つか。ヲ此釣船の三ぶが尻持つた達引。此珠數で數へて見りや。丁度九百九十九出入ある。前なら汝疊んで仕舞ひ。千人投の數に合すけれど。地堪忍して去なしてやると。啖切る顔をじろりとながめ。詞ホ、釣船面白い。どうして去なしやる。地サア見ようと。摑みかゝるを身をかはし。ころりと投げたは百の錢。高い極めは此方の損。了簡して半分やる。此格でいがんだら大きな目に逢ひをろと。丸う捌いた男作。美しいので氣味悪く錢受取るも怖々に。尻こそばうて雲助はフシ駕籠引つかたげ歸りける。地礒之丞は靜々と。三ぶに一禮。詞狼藉者に出合ひ難儀の所。其許のお世話にて事なく納まり大慶致す。只今拙者流浪の身。時を得てお禮を申す爲なれば。お在所は何所承りたい。イヤさうあつては此親父所は申さぬ。長町邊とある故に。わしもちよつちよとあのあたりへ行きます者。長町は何町目。イヤ何町目かは存ぜねど。三河屋の義平次を尋ねて參る者。ムウあの義平次に用があるとは。テモ變つた者にお近付ぢやの。イヤ近付ではござらねど其娘のおかち。

へエ。そんならおまへはてつきり。礒之丞様とやらでござりますか。とは又よく御存じ。サアかうでごんす。今日團七が出牢迎ひにおかちと息子と。わしが連れて來てやりました。道々お前の話聞きましてお笑止に存じますが。團七がよい様にしませうぞ氣遣ひをさしやますな。おかちは宮へ参られたが戻りの遅いは。エイてつきりとコリヤ坊主がだゝけて新家の輩食。あつちやから行て昆布屋に居ましよ。三ぶに聞いたと言はしやませ。是は重疊。昨日は堺で日を暮し。今日は大坂へ参る所。よい所で其許のお目にかゝり。ア、其挨拶もゆるりと〳〵。マアちやつちやと行かしやませ。地然らば後程御意得んと。フシ昆布屋をさして急ぎ行く。詞アあの人よい所で俺に逢うたぞ。イヤ逢うたは逢うたが此團七。もう來さうな者ではある。地爰で問ふと暖簾をひらり。詞床の衆今日のお拂ひ者いかう遅うござるの。わしや大坂から迎ひに來た。地來るまで爰を借りませうと フシ待つ間程なくざわ〳〵。そりや科人ぢやと見る人も十が九つ歪んだ世に。直なる道を引かれ來るは兵太夫が情にて。助かる恩と頼みの詞。本フシ身にしみ〴〵と忘られず。地我が營みの生洲の魚。フシ沖に出でたる心地なり。地警固の役目は其日の當番。御法の如く囚人が繩解かせ。詞コリヤサ團七。詳しくは屋敷にて介松主計。玉嶋兵太夫兩人申渡さるゝ通り。去年九月十三日。御家中大鳥佐賀右衛門が家來に手を負ふせ。雙方ともに牢舎の所。手疵は癒えて相手は牢死。其故死罪を御赦免なされ。和泉堺をお構ひなさる。ありがたう存じ奉れと。地言渡す事言ひ仕舞ひオクリすぐ様。〽屋敷へフシ歸らるゝ。地後見送つて團七は故郷の方を伏拜み。詞ア、忝い。佐賀右衛門が中間づれの。下手人に取らるゝかと思へば無念で口惜かつた。兵太夫様お禮は申さぬ。其代り礒之丞殿身の上。地命にかへても微塵さら〳〵御難儀はさせませぬと。ひとり呟く後から團七。々々と呼んだはどこ。イヤ床からと。ずつと出るはヤア三ぶ殿。詞ても珍しい息災にござつたの。ヲ、テヤ。おりや大坂から堺へ通ふ。わりや堺から大坂へ通ふ。商賣は違うても心は變らぬ懇意。了簡強い汝があゝした事。よく〳〵聞かれぬ事があつてと思うて。扨案じたは出かした〳〵。必ず恥ぢやと思ふなよ。江戸見ぬと牢へ入らぬとは男の中ぢやないといふ。今朝から嚊衆も坊主めも。連立つて迎ひに來て待つて居た。エちやつと顔見せてやりやぢやが。テモ長い月代。ムウ臭い着物。ぢやな。着替一つ持て來た。幸ひな此床で月代剃つて明神様へもお禮

申せ。おりや昆布屋へ行て落着かそ。アそりや大い世話でやした。貴様見ぬ中にきつう珠數ぢやの〳〵。サア今はとんとこれ。腹が立つても南無阿彌陀。笑ひ〳〵も南無阿彌陀。念佛講で忙がしい頼母子がはやる。扨と序に。汝が贔屓の片岡仁左衛門。扨當つた。顔見世へ持越して今に日向丸をしてゐるわ。コレ〳〵こちらの辻札。竹本義太夫曾根崎の心中で打破つたの。マア一日見に行けやい。イヤこんな事いや日が暮れるが。一ついはにやならぬ事あるわい。おかたが話で詳しう聞いた。礒之丞殿にたつた今逢うた故。一所に昆布屋へやつて置いた。ソリヤわしが大事の人。サア〳〵〳〵其譯も聞いて居るてや〳〵。とかく昆布屋でゆるりと話そ。地おりや先へ行て居ると風呂敷包手に渡し。詞中にや錢も入れてある。月代剃つて早うおぢや。コレ床の衆一つしてやつて。地頼みまするを氣を付けて フシ内と新家へ別れ行く。地我故にいとし男の身の難儀。聞く悲しさの跡追うて大坂へと計りあてどなく。走り躓き琴浦は痞を撫でて。詞アヽ爰は何所ぢやほんに住吉様。礒様と連立つて難波屋へもよう來たが。地もしやあそこにぢやあるまいかと。見返る後に憎い奴。佐賀右衛門が爰へ來る見付けられたら捉へをろ。どこへ隠れう フシ間もあらせず。詞アコリヤ〳〵見付けたぞ逃げまい〳〵。お鯛茶屋からよう抜けそをやつたなア。俺がいふ事何と聞くぞ。元來貴様には此佐賀右衛門が行て居たを。アノ礒めが身請して。お鯛茶屋の箱入。指もさゝせず賞翫しをる。そこで我等が幇間を持ち。獄道者に拵へ立て。勘當させた骨折も皆そ様から起る事。風來人に心が殘ると。仕舞のはては鳶田へ曝され。情所を犬や烏がヲ思ひ出すも身が顫ふ。まだ其上にひよつとすると。男は助つて女は死損。そんな危ない事せうよりさらりと氣を變へ。サアまあ難波屋で 地祝言の盃せうと フシ手を取れば。詞エヽ嫌らしい聞きとむない。コレ爰をマア放さんせと。もがく程猶しつかと握り。詞ハテびんしやんしても此大鳥が摑んでからは放さぬ〳〵。エヽ憎てらしいあれエ。〳〵。ハテはしたない聲が高い。高うても私や嫌ぢや〳〵。厭であらうが如何であろが。連れて行んで女房にすると。地合點せぬ者無理無體。引摺る意地張る床の前。ハテおぢやいのと引立てる。佐賀右衛門が利腕ぐつと暖簾ごし捻上ぐればアイタヽ。詞こりやどいつぢや何ひろぐ。イヤ何もせぬ俺でえすと。地ずつと出でたる剃立の糸鬢頭青月代。詞ヤア汝や今日牢から出をつた。ヲヽ鷲くまいへヽヽ。團七でえすわいな。さ

つきにから出來まするよ。れつきとした侍が女童を掴まへて。マヽ此手を放してやらうてやと。地拳痛めて突退くれば。イヤ詞汝いらざる所へ出しやばつて。邪魔ひろぐか何とすると。地いうても相手にならばこそ。詞こな様があの。お鯛茶屋に居やしやつた琴浦様ぢやの。シテ礒之丞様に逢はんしたか。いゝやか。さうしてマア供はどこに居るぞ。地イヽエ誰もないわいなと。話の半へ騙し打。團七二つと斬付くるを引つぱづしてフシ翻斗打たせ。詞ハテ大膽な。そんな事ぢやさかいに。あんな惡魔が魅入りたがる。コレ私は礒様を世話にする。團七といふ者で。エイそんならお前がおかち様のお連合かえ。地アイ〳〵。挨拶と刀のあしらひ兩方を。受けつ答へつ又切る腕。柄と拳を一握り。詞ムウそんならおまへ此方の嬶。アイ知つて居りますとも。是はしたりと踏みのめし。ワリヤマアどこでは脊骨に膝。サイナア。お鯛茶屋へお迎ひにござんしてナ。始めて逢うて間もなく。礒様も私故に。コレ氣遣しよまい。礒様もつい其所にぢや。そこにとはどれ何所にヱ。何處はツイそこの。コレ耳おこした。コレナア何と嬉しかろが。サヽちやつと早う行かしやんせ。地早う〳〵と礒之丞が。在所を囁き教へられフシいそ〳〵として急ぎ行く。地ヤアあの女郎やる事ならぬと跳返して駈け行くを。首筋掴んで是はいな。詞コレ東側ぢやぞへ。此時宜必ずいふまいぞ。三ぶといふ者が居る程に。よう賴んで置かしやんせえと。地底の底迄氣を付けて。世話やく隙に刀を鞘。納めた思案か佐賀右衞門。フシ飛ぶが如くに立歸る。地とは知らずお侍。もう去にやらいでと振返り。詞これはしたり。何所へ失せた。てつきり新家の香嗅いで。先へはよもや廻るまい。地とはいへ道が氣づかひな。宮へはいつでも參らるゝと。心は急いて行く跡からおゝい。〳〵。詞ハアテ呼ぶのにこな男。地待つて貰うと三人づれ。中に二人は以前の駕籠舁。縕袍布子のフシ懐手。詞ムウ俺に待てとは何ぞ用か。ハテ用がなうて呼ぼかいの。こつぱよなまよそろ〳〵と仕懸けやい〳〵。汝等でいかざ助けてやろ。地其間に抜きさいた髭抜かうと。床の床几に上足打ち。煙草入から出す鑷もフシなんぼう太き詮索なり。地いがみと早う見て取る團七。詞コリヤ出入でもする氣かなア。いらぬ事ぢやおけやい。イヤおくまいわい。名は言はいでも賴まれたと言や合點ぢやあろ。ハテ高が先きの女中貰ひに來た。口手間いらずと請取ろかい。ムウ聞えたが。そんな事いはぬものぢや。いはぬものとは。ハテサ渡すまいと言うた時に

や。ハヽヽ、どうもなるまいがな。コレこれで貰ふ。〳〵わい。此腕で。こつぱの權。なまの八が受取るわい。イヤ此奴が避けて通せば方圖がない。もうきかぬぞよ〳〵。ヤきかぬというて如何しやる。地イヤかう〳〵すると右左。フシばたり〳〵と蹴倒せば。詞イヤこいつ脚出したぞ。疊んでしまへ合點ぢやと。地床に凭せし開帳札。手々に提げ〳〵て。滅多無性に擲きかゝれば身を躱して搔摑み。引つたくつたる後よりこつぱ微塵に打付くるを。挑いだる札にて打落され。怯む所を續打にばた〳〵〳〵。數も回向も二萬日。弓矢八幡壺井の札。こらへぬ我武者に打据ゑられ。二人ははふ〳〵片息に。後を賴むと云捨てゝフシ命から〳〵迯げて行く。地見てゐた奴は大膽者。髭抜きしまひ鑷を納め。詞へヽヽ、テモ弱い奴等ぢや。あれでも人に賴まれるぢや迄。と

いうて退けても居られまい。俺賴んだが無理ぢやない。ドリヤ地出て逢はうとのつし〳〵。詞團七ちよと下に居て貰ひませうわい。同し棒組賴むに退かず。一寸も後へは寄らぬ一寸德兵衞が。ちよつとマアへヽヽ、かうして見ようかいと。地帶の前側ぢつと取る。詞ホヽヽ、こりやまた身があつて面白いわい。そんなら指詰斯うせうかい。ムウさう仕やりや。コレ。ヤかうする。ムウかうする。イヤおりやかうする。地イヤかうするわと打つ手。止むる手右左。片手にりんとフシ尻ひつからげ。地出入花さく折も折。餘り遅さに新家から。迎ひにおかちが唯一人。來ればうたてや又喧嘩か。コレもう了簡さつしやれといふをもきかぬ掴合ひ。打つつ打たれつ止めても踏飛すやら蹴飛すやら。止めぬ仕様も雙び立つ辻札取つて二人が中へ。横に仆した機轉の枷。止まる夫

止まらぬ。相手の布子見知ある顔はヤア。詞汝や此中の乞食め下れ。此方の人に何で手向ひ非人めが。人でなしめと地叱られて詞コリヤお家様でござりますかと。地誤り入つた顔付で。フシ出入の腰は。折れにけり。詞コリヤ女房。俺やずんど合點がいかぬ。彼奴どうして見知つて居る。見知つて居いで何とせう。短うい へば礒之丞様。お鯛茶屋からお歸りなされぬ其時の思ひ付。お遊びなさる濱先で。非人の喧嘩身の上話。こいらを賴んでいはしたがお耳へ留つてお歸り。お袋様のお悅び。其御褒美にあの布子。まだ其上にお金もあり。それから止めた其形ぢやな。ムウそんなら重々憎い奴。玉嶋の御恩を著て。礒之丞殿に仇をする。佐賀右衞門が尻持つ恩知らずの畜生め。もう赦さぬと飛びかゝれば地飛びしさつてアヽ待つた〳〵。詞其礒之丞殿といふは備州

出のお侍。玉嶋兵太夫殿の御子息か。ハア知らなんだ／＼。此徳兵衛も備中の玉嶋生れ。少しの科で追拂はれ。國を出た時殘して置いた女房へ釣つてもお主。俺が爲にも親方筋。其思はく琴浦殿に。横戀慕する佐賀右衛門に頼まれた。傍輩の尻持つたは大きな間違。達引く所か俺も倶々 地お世話さして下されと。ほつくり折れる吉野尺。一寸徳兵衛が一分の フシ立初とこそ知られけり。地團七始終をとつくと聞き。詞縁につるれば遠の物と。こりや珍しい出合ぢやな。其詞違はずば。何ぞ慥な固をせうわい。ヲそりや何なりと望み次第。コレお内儀。此辻札の綸を見さしやれ。曾根崎心中の徳兵衛が。生玉で叩かれて恥面かいて居る所。其徳兵衛の看板で。此徳兵衛が出入を留め。かう打明けて融合うたは。明神の引合せ。エイ忝い／＼したが。俺やちつとの間も薦被つたで。煩さがつて下さんなヤ。したが餘り物は喰はなんだぞい。あのお人のいはしやること。地寺へ行た折聞きやんした。百人一首の天智天皇様も乞食の相があつた故。木の丸殿にござつたげな。浮沈はある習ひと會釋に團七心付き。詞女房共。この二人の衆は昆布屋にか。サイナ三ぶ様のいはしやるはな。舅の所へ戻りがけ。掛人二人連で行んだら氣に入るまい。今夜は此方へ連れて往んで。女中一人は引請けう。磯之丞様はゆく／＼は。大事ない奉公でもさせましたらよからうと。地市松と四人連先へ往んでござんしたわいの。詞ヲヽそりや慥々。慥な序に固はどうする。ヲヽ腕ひかうか。血を呑まうか。イヤ／＼腕ひいたとて如何したとて。コレ肝心の爰が据らにや役に立たぬ。がわが性根見据ゑた故。固の印渡さうかい。何なりとも請取らう。地コリャ是を渡そと肌襦袢の袖引 フシ切つて差出し。詞コリャ是は團七が身に付けた片袖。磯之丞殿を世話にする。片腕にする證據の袖。とつくりと請取れよ。ヲヽ面白い。互に心底包まず隠さぬ徳兵衛が。證據も又かうちぎつて渡すは。磯之丞殿を袖にせぬといふ印。どんな事があらうとも。御難儀になる事なりやそでないといひぬく證據。サア請取れ。サア請取れ。ヲヽ請取つた。／＼と。地互に取替へ手に通し。詞俺が此袖かう肩に引きかけて世話したらなう徳兵衛。ヲヽ俺もかう引きかけりや。ヲヽ氣遣は微塵もない。俺も大坂へすぐに出よう。そんならばサア連立たう。サアいかう／＼と。地裏表なき氣の廣袖。固はしやんと住吉の。亡者の袖よりたしかな袖。引連れてこそ 三重へいそぎ行く

第四 手代が戀を掘出した浮牡丹の箱入娘

ハルフシ難波津に。地爰も眼の内本町通筋を竪横に引廻したる角屋敷。道具屋の孫右衛門とて手廣う商ふ大商人。表には茶の湯の道具時代蒔繪の道具類。ハルフシ和漢の器物を店一ぱいに取廣げ。フシ人も羨む居なしなり。地重手代の傳八は埃叩きを斜に構へ。掃いつ拭うつ代物に。花を飾るは此家の娘。嫁入盛のぼつとり者と小オクリ人も。心をよせ敷の。スヱテ暖簾の陰よりコレ傳八。詞清七は其所に居やらぬか。ハアお中様。清七は今藏へ道具出しに參りました。何の用でござりますえ。ヲヽそれならわがみでも大事ない。此五十兩の金は屋敷の爲替。伏見町の加賀屋へ渡しやと父様の云付。エヽ其用ならば俺が請取つても濟む事を。新參の清七ばかりしなつこらしう物いうて。聞えませぬお中様。地幸ひ外に人もなし。かね〳〵のお返事を。ちよつと爰でとしなだれかかれば後より。詞傳八〳〵。旦那殿の呼ばつしやる。ホウ清七か。地何の用ぢや知らぬ迄と云捨て立つて入りければ。詞コレお中様。さつきにから傳八とぢやらくら〳〵。又清七のあられもない疑ひ。地私が心を知らぬか何ぞの様に。フシ聞えぬ人ぢやと寄添へば。詞コリヤ〳〵清七見付けたぞ。エヽわれは横著者よう嘘をついたなア。旦那が汝を呼ばつしやる。地きり〳〵行けと傳八が。どつちやう聲にびつくりし。フシこそ〳〵〳〵と入りにける。詞コレ其様に何くはぬ顔さしやつても。如何でもきやつと合點がいかぬと。地いひも果てぬに傳八々々。詞コリヤ手の惡い嗜め〳〵。今こそ旦那が眞實呼んでぢや。イヤ〳〵嘘。俺を取るのぢや。ハテ嘘か誠か行て見りや知れる。地ハアそれならば行てこまそ。フシけたいな事ぢやと走り行く。詞コレ清七。今言うた通り。疑うてたもんなや。地死なしやつた母様の言置なればこの中が氣に入つた男でなけりや私や持たぬ。殊にそなたの氏素性なら器量なら。どこに一つ難癖のないも理り。玉島礒之丞様。〳〵〳〵といふ口抑へて。アヽわつけもない。詞そんな事いはぬものと。地人目を忍びひそ〳〵と。呟き囁く其中へ。得意廻りの肴屋が。詞御用ござりませぬかと地門口から音なへば。ちやつと飛退きけんによもなう。詞ホウ九郎兵衛精が出ます。ソレ魚屋が來て居らるゝと。お乳母にさういはしやませ。地早う〳〵を鹽にして。フシお中は勝手へ走り行く。地どれ〳〵肴見ようかと此家の狡猾乳母。煙管片手に表へ出で。詞今日は旦那様の病氣本復の内祝。鱠でもせうかと思ふが。もやすい

物があるかいの。されば此間の栗花落上りで。雑魚場にも物が少うて。篩にさらりと見えた通り。マア此鯛がぶりばんどう。ヲヽ俺やそんな事知りませぬ。おつと。知らでは二匁八分。ヲヽそりや高いそれなら江鮒が十で八分。さればなう。地秋口から段々に名の變るが江鮒の出世。祝ひ事によからうか。詞イヤ名の變る序に團七殿も。前堺から見えた時と。今は名も變つたげなが。どうした事で變へさしやつた。されば〳〵。去年えらい難儀に遭うて。大坂へ引越し心も入れ替へ。名も九郎兵衞と變へたれど言ひつけた名なれば。今に於て團七九郎兵衞といひまする。イヤもう次第〳〵に豆の數が重なる程。心もひとり直るもの。爰に居さしやる清七殿も。俺が請に立つて手代奉公におこしたが。死なねばならぬ程の事でも。堪忍するが若い者の嗜。奉公する身は猶もつて。物事怺へさつしやれ。まだ嗜むのが色の道。イヤ色で思ひ出した。鱠の子には此赤貝がよからう。なうお乳母様。ヲヽとでもない大口いはしやる。地内祝なれば軽うても事が濟む。どうなと此方よい様に拵へて下されと。勝手へ行けば聲をひそめ。詞申し礒之丞様。なされも付けぬ奉公でさぞ御難儀。お國へ歸參なさるゝ迄は。隨分辛抱なされませ。ヲヽさうぢやとも。何かにつけて其方のいかい心づかひ。ハテやくたいもない。そんな事ぐづ〳〵思うて。煩うて下さりますな。地後に〳〵と團七は。フシ荷を引擔げ入りにける。地かゝる折節表の方へ一僕つれたる田舎侍。道具見物致さうかと店先へ立寄れば。清七庭に飛んで下り。詞ようお出でなされましたサア〳〵あれへ。暫くお腰掛けられませと。地挨拶すれば傳八も奥より出で。ソレお煙草盆お、茶持て來いと。埃叩で揚り口叩き立つるも商旦那へ フシ馳走ぶりとぞ見えにける。イヤ苦しうない構はれな。何と昨日見た浮牡丹の香爐。五十兩にまけ申さぬか。されば私も段々申して見ましたれど。八十兩の口が一歩缺けてもならぬと申す。畢竟手前の道具なれば。又御相談の致し様もあれど。と申して私が。かはくな口錢を取るでもなし。重ねて御用も承りたさに力一ぱいなう傳八。ヲヽさうぢや。後々が大事なれば。買損な物お勸め申さず。見る所が正眞の。浮牡丹にまがひなければ。五十兩には強い掘出し。此頃も一休の正筆に。坊主になるな魚を食へ。地獄へ行て鬼に負けるなとある假名物を。紙屑買が十九文に買うて來て。大分金を儲けたと。大坂中の評判なれば。地少々は思ひはづして。どうぞお求めなされませ。清七も隨分とお肝煎申しや。

詞成程拙者も正眞と見申した故。五十兩に付け申した。國元より申して參つた殿の御用なれば。是非求めではなり申さぬ。地是に預り召されたらば今一度見申さうと。詞の中に箱取出し。フシ袋を開きさし寄すれば。地成程是々。浮牡丹に違ひない。かう致そ。マア五兩付けておくりやれ。直がなつたらば明日屋敷から。金子持參致させう。同じくならば今日中に。なるならぬを聞き切つて歸りたい。それならば追つつけ仲買も參る筈。地見苦しくとも暫しが中。あれへござつて御休息なされませ。詞それは幸ひ。然らば少しの間。座敷御無心申さう地御免々々と傳八が。フシ案内に連れて入りにける。地待つ間程なく仲買彌市。詞ヲヽよい所へわせられた。幸ひ香爐を求めたがるお侍も來てなれば。今日埒を明きやらぬか。埒と言うてどの位ぢや。ハテ今朝いうた通りに負けやいの。イヤ／＼氣もない事。所方々の開帳へ貸しても。損料はそれ程取れる。八十兩といふ發句から安ければ。負けぬ／＼。それなら俺が取る口錢を打込んで。も一兩で手を打たう。さればなう。急に小判にしたいのなれば。先へ問はずと負けもせう。さらり地／＼と手を打つて。詞扨いはぬ事は惡いが。明日でなければ金が渡らぬ。其時香爐と引換へ。ヤアそれでは此方の工面が違ふ。百兩の代物を五十兩に賣拂ふも。今日金子にしたさ故。所詮こりや埒が明くまい。人の大事の道具ぢや。香爐を此方へ戻して貰ふ。エヽ埒もない事に足手を引いて悔しい。コレ彌市。さう沒義道にいはれな。向うも堅い武士なれば。明日金を渡さうといふ議定はちつとも違ふまい。ハテひちくどい。明日というてはならぬと云ふに同じ事をぐづ／＼と。自體和御僚が埒明かず。明かぬも道理か。やう／＼此頃これの内へ奉公に來て。道具の道も知らず五十兩といふ香爐を。夢に見た事もあるまいに肝煎かきやるが大きな違ひ。ムウあぢな云分。道を知らうが知るまいが。香爐を肝煎つて買はしたら何とする。ハヽヽヽうまい事いはれな。五十兩といふ金。盜せうば知らぬ事。溫かによう出ようぞと。地氣を持たすれば猶急上げ。出して見せうが汝や見るか。イヤなるまいとフシ角目立つて爭へば。地傳八も出て横突張り。詞あゝ言はれては淸七立つまい。傍輩迄の面汚しなれば。旦那から請取つた屋敷の爲替五十兩。地傳八が貸してやる。此金渡して男を立てい。誠にさうぢや忝いと。封押切つて五十兩。香爐の代金サア請取れ。も一度頬桁叩かいでなと。フシ小判ぐわらりと投付くれば。地彌市はにこ／＼拾ひ上げ。詞畢竟今の樣に云うた

も。今日金が請取りたさ。商人は相身互。耳に障つたら了簡さしやれ。仲間同士はいらねども。素人から出た道具なれば。念の爲ぢや賣上書かう。ドレ硯貸さつしやれ。イヤモウさういやれば言分がしたうもない。それなら嬉しい。地又掘出しがあるならば持つて來ませう。さらば〳〵もそこ〳〵に。フシ金受取つて立歸る。地一間の中より最前の侍。刀提げ立出で。詞扨お手代衆。先づ以て今日は忝い。座敷を御無心申した上。色々馳走に預り思はず一睡。地さらばお暇仕らうといふを清七暫しと止め。詞扨お頼のかの香爐。どうやら斯うやら五十兩にさらりと埒は明きながら。氣の毒は今日中に金請取らうと申して。私とやつつかへしつ。詰開の上で。當分手前の金子お取換申したれば。明日中に香爐の代金。地お渡しなされて下さりませと。聞きもあへず。

イヤコレ若い者。手前其方を頼みて。香爐買うた覺えがない。ハヽヽ御座興も事による。イヤ座興でない眞實ぢや。エヽ昨日も今日も香爐を見て。金五十兩に直段をお付けなされたを傍輩どもも聞いて居る。それでも覺えないぢやまで。ムウこれお侍。いかに口先の契約ぢやとて。今更さうは言はれまい。衒と見たりや猶以て。首筋抑へて買はさにやおかぬ。イヤ此奴慮外者。身に覺えのない事を云ひかけるさへあるに。武士を捕へて衒とは。素町人めどの頰桁でぬかした。サア地今一度いうて見よ眞二つにぶち放す。イヤ〳〵詞いふまい。俺も腹からの町人でなければ知つて居る。さうした武士の性根で人が切るゝ物でない。ヲヽ切つて見せう動くなと。地刀の柄に手をかくれば。傳八中へ割つて入りアヽお前のが御尤。まづ暫くと押しとゞめ。コリヤ詞清七。

今の金戻して貰ふ。イヤサ其金は此侍に請取つて戻さう。此香爐をそれまでの質物。アヽ言ふな。明日渡す爲替金に。質物取つてよいものか。扨は彌市めとぐるに成つて此傳八を衒つたか。親方への面晴ぢや。地覺悟し居ろと飛びかゝり。髻摑んで投付くる強力者。脊骨にぐつと乘つかゝり大盜人の生衒と。握拳で滅多打ちそこ退け傳八。惡口ぬかした其頰桁。蹴裂いてくれんと踏付け〳〵相ずりどもが責め殺生。かよわき清七手ざしもせずスヱテ無念。々々の聲に驚き親方孫右衛門團七も走り出で。傳八が首筋摑み引擒ぎ取つて投げ。踏付くれば侍がずはと引拔き切りかくる。利腕取つてぐつと捻上げ顏見れば。我が舅三河屋義平次。ヤアこなたは。ナニ御自分は。はてな。〳〵お侍ぢや迄。御仁體に似合ひませぬ地嗜まれよと突放せば。舅も俄に力みを止め。

悪い所に聟が居て贋侍の手め上りと。水浅黄の帷子をフシ汗にひたして尻ごみす。地親方は斯くとも知らず。詞段々御立腹御尤。とかく憎い奴は手前の家來。たとへ香爐を求めうと仰しやつたにしてから。篤とあなたに折極めもせず。金お取換申したは清七めが不調法。殊に其彌市といふ者仲買で聞及ばず。何にもせよ胡亂な事。地マア此浮牡丹の香爐から。合點がいかぬと袋を開き手に取上げ。ヤアこりや贋物。もの丶見事に衒られたと。地聞くより清七ずんど立つて。駈出すをこりや何所へ。詞彌市めをほつかけて衒られた金取返す。ハ、、、甘い事いはれな。これ程の事仕出す奴が。此邊にまひ〳〵と狼狽へて居てよいものか。氣づかひせまいもう是から此團七が。どいつもこいつも詮議して。衒られた金取返す。コレお侍。御自分には猶以て。ぐつと言分のある人なれど。心があつて今はいはぬ。足元の明いうち疾と丶早う去なれいと。地突飛せどびくともせず。詞身の證明さへ立つたれば。居よというても此所には居ぬ。町人めらを相手には猶せぬ。親方もどいつもこいつも。言分はないぢや迄とフシ立上るを。詞コレお侍マア待つた。待てとは身共に用あるか。ヲヽ九郎兵衛がいふ事ある。エ、こなたはの。見るも中々腹が立つがようござつた。地ヲヽ歸るわとしらばけに。フシ家來引連れ立歸る。地孫右衛門眉をしわめ。詞何をいふも彼をいふも皆こつちの不調法。手前の用心ようすれば盗人にもあはず。巾著切に取られもせぬ。ヤイ淸七。汝も是迄奉公も仕つけず。惡う育たぬやつと思ひ。不便をかけて使うたれど。大枚の金を衒られたは引負同然。金の濟む迄請人なれば九郎兵衛に急度預ける。ア、成程。そりやもう請に立つからは覺悟の前。衒られた金の行端。詮議しぬいて御損はかけぬ。サア清七殿立つた〳〵。イヤ〳〵まだ明い内に其形で去なしては。此孫右衛門も名が出る。地此編笠をと親方の。御恩を戴く目堰笠。言ひ甲斐もなき不屆者とお憎しみもあるべきに。お情深き御詞有難し忝し。詞私とても金を衒られ打擲にあひ。どう存へてゐられうぞ。地清七が心の內。御推量なされ下されと。悔涙に顏をも上げず。もうお暇と團七が預る重荷と肴の荷。一荷にしやんと打擔げ。フシ表に出で。詞ア、これ大事ないい〳〵。此九郎兵衛が居ますわいの。サア〳〵きな〳〵思はずと早うごんせ。エ、殘り多いさつきの時。あいつ等が脚骨へぼつきぼきと折つてやりたい。鯛フンや。鱧ヲコウ生イ鱸や。より物コウより物。車海老。地賣り〳〵連れて出でて行く。もはや

世間も店さし時分。傳八表に氣を付けて。とつくりと錠おろせ。ア、一日も苦の止む間がないとオクリ呟き。へ〳〵奥に入る。ハルフシあるにもあられず。娘のお中人のない間を窺ひ。表の方へ走出で。ヤア詞淸七はもう行きやつたさうな。互に詞は交さずともせめて顏を見てなりとも暇乞と思うたにひよんな事してのけた。あの金の濟む迄は逢見る事も。地フシなるまいし。地淸七の今の詞を聞くに。生き存へては居ぬ心。詞わしも後から追付いて。地死なば一所と駈出で。表を見れば錠おりたり。ア、悲しやどうせうぞと。フシ立つたり居たり狂氣の如く身を揉み。あせり歎きしが。詞ヲ、それよ。地あの人より一時も。長地早う先立ち二心なき心底見せんと娘心で。半太夫一筋に。思ひ詰めたる手箱より。取出すは珠數剃刀。此世の。緣は薄くともフシ未來は一つ。蓮ぞと柏ノ山涙。ながらに繰る珠數の。詞いとほしや父樣の。わしが死んだら悲しかろ。此淸七も今頃は。どこにどうして居やるぞい。地も一度顏が見て死にたいと聲をも立てずさめ〳〵とスヱテ忍び。涙にくれゐたる。地乳母は娘の形素振心を付けて居たりしが。後より何氣もなうお中樣何してぞと。聲をかくれば悔りし。詞ヲ、乳母とした事が。きよと〳〵しい聲わいの。今宵は。アノ母樣の逮夜なれば。それで珠數をくつてゐると。地權輿もない顏付を。乳母はつれ〳〵打眺め。エ、詞こなたは聞えませぬ。生れ落ちさしやると。十七年の今日まで育て上げた此乳母に。なぜ物を隱さしやる。ヲ、あの人の。隱すとは何を隱す。あれまだあらがうてぢや。其顏鏡で見たがよい。ソレ目が泣きはらしてあるわいの。それでも物を隱さぬのか。地とうから此方と淸七と。わけある事知つてゐる。ア、よしない事ぢやと思うたれど。獨子の事なればどうで聟御を取らねばならず。氣に好いた事ならば。詞ア、どうなりと行く〳〵は。旦那の耳へ入れうと思うてゐた中に思ひも寄らぬ。淸七殿の仕損ひ。地金の濟む迄請人に預けたをこなたの氣では。萬劫末代逢ひ見る事もなるまいかと。思ひ詰めてさつきにから。詞死ぬる覺悟であらうがの。地萬一其身にもしもの事があつたらば。詞後に殘つた父御の身では。なんぼ程地フシ悲しからうぞ。地殊に此春の大病から。あの弱りが目に見えぬか。こんな事聞かしたら。先へ死んでのけさしやろ。いふさへ涙がこぼるゝと歎けば一間の内よりも。親孫右衛門の聲として。詞乳母よ〳〵。用がある早う來い。ア、アそこへ參りますと。地鼻打ちかみて聲を潛め。それのみならずお袋樣御臨終の枕

元へ。此乳母を呼付け。詞何にも心にかゝらねど黄泉の障は此娘。汝母になりかはりて育てゝくれとの一言が。耳に殘つて忘れねば。地乳母はコレ此樣に。皺も白髮も厭はず。こなたの脊丈の伸びるのを。蝶よ花よとフシ樂みて詞おのれやがて聟御を取り。玉の樣な子を產まして。乳母が死んだ其時に。冥土にござるお家樣に。土產にせうと思うてゐるに。病でもある事か。地美しい其肌に。刃をあてゝ死なうとは未來の母御を奈落へ沈め。アレ詞此世の父御や。コレ此乳母にも。泣死に死ねとの事か。地あんまりむごい胴慾なと聲をも立てずかきくどけば娘も倶に正體なく。詞乳母誤つたこらへてたも。やいの。地〳〵と手を合せかつぱとフシ伏して。泣き居たる。詞乳母よ〳〵。さつきにから呼ぶに埒の明かぬ。お中もきり〳〵寢ぬかいやい。アイ〳〵もう其所へ參ります。コレ乳母。地呼んでぢやにマア行きやいの。詞いや〳〵行かれぬ。おれが行た後で。こなたが此剃刀で是々せうでぢやの。ヲヽ怖しや。コレよう聞かつしやれ。今はやる心中も。金と不孝に名を流す。淸七の誤りも。五十兩あればつくらはるゝ。地爰な身代から見ては輕い事。たとへ千兩萬兩でも。我が子にかへる寶はない。詞此乳母が金とてはなけれども。氣遣ひさしやるな。どうぞして金調へ。地淸七殿さへ歸參しやれば添はれまいものでもないと。フシ力を付ける折こそあれ。詞乳母よ〳〵。用があるになぜ來ぬぞと。地孫右衞門は息急き立出で。詞俺も今日のもや〳〵で。きつう氣が上つたやら。戶棚の鍵の置所をとんと忘れた。乳母。わが鍵を貸してくれ。ヲヽそれはひよんな事やの。わしがのは長持と簞笥と。數もない二つの鍵。ハテ二つぢやとて合ふまいものか。あはねばもと〳〵。アイ成程どれ〳〵と。地吹散りさうな巾着より。鍵取出せばヲヽこれ〳〵とフシ提げて行く。詞お中樣あれ見さしやれ。時時はあの樣に。金戶棚の吟味があつては。思ふ樣になりにくい。地アヽどうしたらよからうと。思案とり〴〵樣々に。フシ二人は胸を痛めける。詞乳母よ〳〵。今の鍵がよう合うたぞ。金戶棚を明けて見たれば。中にきよろりと入れて置いた。アア年寄れば物忘れ。ソレ鍵戾そ。宵から是が氣にかゝつて。むしやくしやと寐られなんだに。是でさつぱりと夜が寐よからう。お中も寐冷せぬ樣によう着て寐よ。もしわれが煩うたらばおりや何とせうぞいやい。地乳母も休めと孫右衞門。フシ心を殘して入りにける。詞さつても不思議ぢや。まへお家樣のござつた時。丁度此樣に金戶棚の鍵が見えいで。此鍵を合し

て見たれど。氣もない事合はなんだに。地今此鍵の合うたのは合點がいかぬとよく／＼見て。詞コレお中樣。今迄二つあつた鍵が。三つになつたはこりや如何ぢや。ほんにの。此鍵は父樣が。不斷提げて居さつしやる。金戸棚の鍵ぢやわいの。エイそれなれば此鍵で。戸棚を開けて金取れと。口では言はれず心の謎々地ハアア忝なや尊とやな。是皆親のお慈悲ぢやぞや。マアコレちやつと拜まつしやれと。いへば娘も後影。伏拜み／＼フシ嬉し。涙に暮れ居たる。地乳母は悅びサアお中樣。一時も早う／＼と氣をいらてば。イヤ／＼待ちや。父樣はまだ寐ずにてあろ。咎められたらどうしやる。ア、愚な事いうてぢや。コレ親の慈悲にはの。目を明いて寐てござる。地おれ次第にしてサアござれとオクリ打連れ納戸に入りにけるハルフシ夜も早四つのかねてより。思ひ定めて淸七は。頰被りに一腰ぼつ込み内の樣子を窺はんと門に耳寄せフシ聞くぞとも。知らずお中は今宵の首尾。淸七に知らさんと戀には太き抱帶。引きしめ／＼表に出で。詞エ、ひよんなまだ錠が下りてあると。地呟く聲を表に聞取り。詞お中樣ぢやないか。さういやるは淸七か。地なうなつかしや顏見たやと思へど叶はぬ此錠前と。潜にひしと身を寄せてフシ聲をも。立てず歎きしが。地扨も／＼そなた故。今日一日の物思ひ。詞イヤ私とても金を衒られ。團七に預けられのめ／＼としてゐられず。拙者が難儀の元はといへば。おまへの事を妬に持つ傳八が皆する業。彼奴を今夜人知れず。ぶち放して仕舞ふ合點と。地いふをお中は聞取つてイヤ其思案は止しにしや。それに及ばず悅ばす事がある。コレよう聞きや。口でこそおつしやらねそなたにやれとて父樣が。金五十兩下さつたと。聞くより淸七手を合せ。主人のお情有難しと。戸に耳を寄せ口を寄せフシ咄す折から内よりも。詞お中樣／＼と地呼ぶ聲に。そりやこそ人よと淸七は。四辻の番屋の戸。フシ引明け内に忍び入る。詞エ、お中樣。旦那殿の呼んでぢやに爰に何して居さつしやる。惣體今夜はそは／＼と合點のいかぬ身振。それで此傳八が戸口に錠を下したれど。地俺がゐれば氣づかひないと。鍵取出し潜戸押開け。お中をほうど引抱へ。旦那の呼ばしやるは噓。俺が此方に逢ひたい故。ちよつとござれと口に手を當て。無體に表へ引きずり出し。詞コレよう聞かつしやれ。淸七めをほひ捲つたは此方に贔いて貰ひたさ。地所詮親方の內では自言辭があらうと思ひ。此方をぐつすり入れて置く。どや迄仕覺してあれば。是非今夜擔げて退く。も一返り内へ行て臍繰

銀取つて來る間。爰に待てといふたとて待つてぢやあるまい。詞イヤ幸ひな入所と。地泣沈むを無理やりに。番屋へ押込み手盛を食うて傳八が。外からしやんと閉括り。扨どうしてかうしてと胸算用の胴中へ。提燈さげて仲買彌市。詞これは〱。よい所で傳八殿。今日は互に上首尾上首尾。晝の儲の五十兩。三河屋の義平次と。こなたとおれと三つ割。金渡す請取らしやれ。地ヲヽ成程々々。早速ながら頼みたいは彼のお娘。今夜連れて退く工面で番屋へ入れて置いたれど。俺が今動かれぬ。大儀ながら彼のどや迄連れて行て。詞傳八が行く迄動かすなと言うてたも。地頼む〱と言捨て内へはひればヲヽ合點。生物を預るからは油斷がならぬと尻引からげ。サアお娘出られいと。何心なく番屋の戸。ぐわらりと開けるを灯影に透し。詞彌市めか。ヤア淸七か。

地こりや叶はぬと迯け行くをぼつ駈けぼつ詰め拔打に。肩先より脊骨迄。大袈裟に切り放せば。其儘息は提燈と倶に消えたる フシ戀慕の闇。かくとも知らず傳八は。彌市。々々と闇黑を。探り廻つてハア爰にかと。淸七が手をぢつと取り。詞今取つて來たこの金と。配け口の金と二包。其方に渡す。是でよい様にどやの支覺してたも。命金ぢや落すまいぞ。地追付け其所へ行く程に早う〱。お娘もめろ〱泣くまいと。いふ中に傳八々々。早う〱と呼立つれば。アヽせはしや是では何をいふ間もないと。一度ならず傳八が。二度の手盛にうまい。〱と舌打して入りければ。詞コレ淸七。お中様。地サアござれと手を引立て行方も。知らず 三重へ走り行く

第五　道行妹脊の走書

○詞ヲヽウイ。△〱。○これ早う來てたもいの。△アヽ嬉しや今のは追手ではなかつたさうな。○ヤアあの二人ハルフシ鐘は九つ心も。戀路の闇に。迷へど道はフシ迷はじと。松屋町筋一筋に。長地思ひ染めたる紅桔梗お中が振の目立つにぞ見えつ隱れつ軒傳ひ。戀の道には主從のわけも隔ても夏の夜に。本フシ空の暑さは凌げども。越すに越されぬ人目の關は。よに大坂の町續き。フシオクリ行けどユリへ歩めどフシ果敢なきは。人を殺めて狹き世の。憂身を何と淸七も心の覺悟書き殘す。スヱテ筆の歩みも道筋も。倶にあやなき矢立の墨。薄き此世の契りと知らで。わしと其方はあの常盤町。サハリ千歳の末までと。戀ゆゑつくる罪科を。かけて見せばやナホスフシ雨替町。露の命の價さへ オクリ見

ろ影。ほそき貢貢の灯。假初ならぬ身の上か。さら／＼／＼と走り書。饂飩蕎麥切きり／＼と。フシ急げば跡は。暗きより暗きに迷ふ墨衣。後の世照らす提燈のヲクリ影に。立寄る二人連。死にに行く身か痛はしやと。回向の聲も松虫の鐘細々と打鳴らし南無阿彌陀。／＼／＼南無阿彌陀／＼／＼。いつか フシ火宅を和泉町。我が故郷の名に愛でて。影はづかしき朝日の宮。逆櫓の神も古の武士の身ならば祈るべき。今一腰とくづをれて遂にセツヱリ此身の尾張坂ハルフシ登りつ下り。つしやな／＼と。三下リ歌思ひ合うたる。二人が中は。陰と日向の。二つ紋。來たわいな／＼。忍ぶ戀路は。闇こそよけれ。顔が見たさに。又傍へ。來たわいな／＼。いとしかはいと。ナホスフシしめ合うて。變るな變らじ瓦屋橋。我を尋ぬる返せにあらで禁鳴らしの。へ太鼓鉦現か夢か夢ならで。フシ極樂橋も早渡る。短き緣も長町裏三下リタ、キ稻葉そよ／＼吹く風に。連れて聞ゆる寺町の。鐘も幾つか四つ五つ。六つの御手に愛敬を願ふも ナホスフシ嬉し勝曼坂。此世からきへ浮む瀬に。騒ぐ火影のほの見えて。歌思切れとは死ねとの事か死ねば野山の私や土となる。ハルフシ死ぬる覺悟と。死ぬる氣と心々の野邊の露。長地今宵限りの命ぞと書き置く筆の藻汐草世の浮草や道草に。急ぐ先さへ的どなく夜道はいとゞ身も疲れ。心づくしの天滿神を。スヱテ爰にも移す神垣や。安居の。フシ森にぞ着きにけり。

地お中はあどなき娘氣にてコレなう淸七。詞かう思ひ合うて出たからは。云ふに及ばず眞の女夫。殊には二人暮す程。貯へに事缺かねば。夜明けぬ中に其方の故郷。和泉へ行て一日なりとも。地二人一所に暮したいと心 フシいそ／＼急ぐにぞ。詞ヲ、成程。所存をわけて咄さねばそれも理さりながら。金を衒つた彌市めなれども。殺した科は遁れぬ／＼。たとへ隱れ忍ぶとも遂には探し出され。縛首討たれては。親一門の面汚し。物の見事に切腹せんと。道すがら淸七が覺悟極めた此書置と。地聞くよりわつと泣出し。常々もいふ通り死ぬるとも生きるとも。一つ所と云ひ交したに親に代へた大事の男。のめ／＼と殺して生き存へて。ゐられうか。ほんに聞えぬ胴慾なとフシ恨み。託ちて泣きゐたる。ヲ、詞其志は過分なれども。よう物を合點さつしやれ。二人一所に死んではの。安居の宮の心中と。大坂中の口の端にかゝつていよ／＼恥の上塗。地イヤどうあつても一所に死ぬる。死んでの後は笑はれても恥かいても大事ない。所詮ながらへ果てぬ身を。早う殺して／＼と。最期を急ぐ心の中思ひやら

れてハルフシ痛はしき。地かゝる折節向うより。野道畔道ぶら〳〵とふらつき廻る小提燈。振上げてヤア礒之丞様か。詞三ぶ殿か。三ぶ殿所ぢやござるまい。九郎兵衛が留守の間に行方が知れぬ故。預り人を取迯すといひ。萬一こな様の身に過あつては九郎兵衛が男が立たぬと日頃のあれが氣。上を下へまぜかへし。川崎北野梅田堤の北方角は。九郎兵衛と一寸徳兵衛と二人づれで尋ねに出る。此女中は聞及うだ道具やの娘御ぢやの。かうあらうと思うて。此釣船も難波今宮生玉勝鬘。心中くさい所を目利して尋廻り。今爰で逢うたのも。願ひ込んだ珠數のお蔭忝いが。二人共に嗜ましやれ。僅な金を衒られたとて。心中して死なうとは無分別の花盛。娘御の内もさぞ騒動。世間へばつとならぬ中。地サア〳〵早うとフシ氣をせいたり。詞ア丶お世話忝い。知らる

る通り清七も以前は武士。色に溺れ心中する所存でなし。我が心底くど〳〵いふに及ばず。地此一通に認め置くと渡せば取つて押開き。提燈さし寄せ。詞フウ何ぢや。書置の事。仲買彌市に意趣あつて今宵手にかけ切殺し。ハア南無阿彌陀佛〳〵。さるによつて安居にて相果つる者なり。扨は其衒めをお前が殺してしまつたか。したり。それで死ぬる覺悟ぢやまで。コリヤ尤も。〳〵。したがよう切らしやつた。後生一遍に取入つて居る此三ぶでも切らねばならぬ。ア丶切ります。誓文切る氣ぢやが。死ぬるには及ばぬ。何故といはしやれ。マア第一に彌市めはどすごかしの大衒。殺すが世界の爲なれば。根深う切人の御詮議もあるまい。たとへあるにしてから。暫しが間蔭をしてござれば濟む。此釣船が呑込んでからは。大船に乗つたと思うて。地氣遣せまいと

頼もしき詞にハルフシ二人も安堵せり。詞アレ見さしやれ。他にも此手がはやるやら。無上に人を呼びますぞやと。地いふ間に近付く呼聲は慥にお中と聞える〳〵。何にもせよ此體を見付けられじと提燈吹消し。三人諸共かしこの木蔭にフシ忍びゐる。地清水の方より迷子のお中様。迷娘のお中様と呼び〳〵來るは道具屋傳八。出入の男が手ん手に提燈棒つき散らし。淨瑠璃やら物眞似やら身にかゝらねば半分は。雜口まじり聲々に我もフシ〳〵と呼立つる。地傳八ほうどくはぬかし。詞どう因果な娘にかゝつて。土用の中に駈歩き身體は斑枝花。男共もさぞ草臥。イヤもう草臥も大概。かう打揃うて歩いても。祭の俄と違ひ所望がなうて淋しいな。ハレわつけもない。こちとらにはせいめきめ尋ねまはらして。てつきりとお中様はどこぞの蚊帳へぐすと入り。兩面子を見

る様にひつ付いて居さつしやろ。イヤさうい はれぬ。ことしの様に爰かしこで。切つたの突いたのが流行る時は。上になり下になりつかれて死んでであらうも知れまい。序に茶臼も尋ねて見よう。ヲヽそりやよい氣の付けやう。十が九つ清七めが連れて退いたに極まつた。傳八は休んでゐる。大儀ながら尋ねてくれい。地心得太郎兵衛の婆様ではない娘御と。フシ仇口々に急ぎ行く。地お中は木蔭を走り出で。詞どこぞそこらに清七は居やらぬか。清七。地々々と尋廻るを傳八が。熊鷹眼見付けたぞと鷲摑み。なう傳八か悲しやな。情にどうぞ見遁して死なしてたもと泣詫ぶれど。びつくとも動かさず。此方にかゝつて大勢が亂離忽敗。それ程に死にたくば見遁してやりもせうが。エエこなたは聞えぬぞや／＼。ようおれを出しぬいて駈落さしやつた。此清七めは何所にをる。されば。今夜清七と死ぬる覺悟で來たれども。俄に心が變つたやら私を捨てて胴欲な。あの人に見捨てられ片時も生きて居ぬと。地駈出すを又抱止め。詞それ見てか。俺に酷う當つた罰。今から傳八がおか様になる氣なら。旦那の手前はよしなに云はう。地どうぢや／＼と懐へ無理無體。イヤ／＼放して殺してたもといふも聞かず手を差入れ。肌に付けたる金財布に探り當るも欲垢煩惱。色も戀も投げやつて欲に目のない傳八。金せしめうと分別しかへ。詞ハテそれ程に死にたくば見遁さうが。よもやよう死にやさしやるまい。イヤ／＼死ぬる。冥土から此恨清七にいはいでは。とはいふものの刄物はなし。竟に死んで見た事なければ。どう死んだがよからう覺えてなら敎へてたも。ハテ滅相な。誰ぢやてゝ死んで見た者何所にあろ。刄物がなくば無いやうに。世間通用の首くゝり。サア其首はどうして締める。そなた何卒教へてたも。これは迷惑。明日からは首しめの。指南の看板を出さずはなるまい。こなたは己が首くゝりの一の弟子と。地三尺手拭かゝへ帶。ひとつにじやんと引結び傍なる枝にしつかと括り。詞扨これからが首しめの習ひ事。よう見ようぞや。此喉の佛様を。かうぐつとしめつけて。アイタヽ、、アアいかう術ないものぢや。此切株へかう上り。ひらりと飛んで見せ度けれどそれでは己が堪らぬ。何と合點か地／＼と足を爪立て教へるを。三ぶ後より傳八が兩足どうど踏落せば。うんとばかりに虚空を摑み七顚八倒目を見出し。手足を煽ち身を藻搔き狂ひ死に死したるは フシ心地よくこそ見えにける。地清七も走出でお中様出來ました。工面の通り行きをつた は己が罪己を責める天の罰。詞ヲヽさう

とも〳〵。最前の書置に。宛名のないがこれ幸ひ。仲買彌市を殺したを此奴が科にする仕樣。三ぶが分別して置いたと。地淸七の書置を死骸の傍に直し置き。詞これでお前に難儀がかゝらぬ。夜明けぬ中に一時も。地早う〳〵と釣船が。兩手に若木の花紅葉上キオヒ打連れてこそ三重へ立歸る

第六　男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作

鹿ヲドリ賑はしき。難波高津の夏神樂。練込む振込むナホスフシ荷ひ込む。地てうさようさの伊達提燈門の揃へは地下町の。印を見世に伊豫簾。フシ竝ぶ家居の其中に。地釣船の三ぶが內。客は內證預りの乳守の太夫琴浦と。結び合うたる礒之丞見世を揚屋の祭見に。口說しかけて拗合うて炎の煙管打叩き。煙くらへのぴんしやんはフシ火皿も湯になるばかりなり。地三ぶが女房は料理拵へ火鉢にかけし燒物を。媚ぐ片手にコレ琴浦樣。詞もう好い加減に仲直つたらよかろがの。道具屋の娘お中殿とやらを三ぶ殿が送つて行たも。悋氣辛氣な顏が厭さに。それに何ぞや柴食た樣にお前も粋の樣にもない。男に勤奉公を地さしたと思うたがよいわいなと。挨拶すれば。詞アノおつぎ樣のいはんす事わいの。お中殿と心中に出た淸七男。仲直つたとて面白うもござんせぬ。じたい娘のある內へ奉公にやらんした。九郎兵衞樣が聞えませぬ。アコリヤ九郎兵衞に恨いふ氣なら此淸七男にいへ。三ぶの世話してたもるのも九郎兵衞の賴みから。サ其恩のある人を恨みさするはお前の業。いふなやい。据膳と河豚汁を喰はぬは男の內ではない。ソレ其口が猶憎いと。地せり合ふ中へ主の三ぶフシ珠數爪繰つて門口よけ。詞女房ども今戾つた。祭の料理出來てあるかと。地內入よきにお次もほれ〴〵。詞出來てある〳〵。誂への鯵の燒物。摺立汁に皮鱠。ヲツトそれで喰へる〳〵。シテ道具屋の娘女は戾して來てか。ハテ人の大事の娘勾引したといはれては。礒殿の男が立たぬ。首くゝつた傳八めに何もかも負せ金の事もさらりと濟み。仲買の彌市を殺した事は。かの書置てしてやつたりと思うたが。厭な風說がある。お二人も聞かしやませ。その書置の手が傳八が手でないと。一門共が言出し御詮議を願ふとの噂。スリヤ礒之丞樣を大坂の地には置かれまいと。○九郎兵衞もいふ俺も思ふ。マア當分立退かす相談というて當途無しにやられもせまい。よつ程な痃癖。マア端近へ出て人に顏見せるも惡い。殊に琴浦殿は目かける奴のある身の上。女房どもも女房ども。何故表へ出しまするぞと。地呵り廻せば

ソレ見さんせの。詞榮耀らしい悋氣どころか。事によつたら二年三年別れ〳〵にござろも知れぬ。地暇乞と仲直りの汗を一度にかいて置かんせ。うぢ〳〵せずと琴浦様連れまして行かんせと。粋な女房の挨拶もよい折口とコレ礒様。いふ事がたんとある。サアござんせと手を取れば。ふいと振り切り不行儀せまい。詞三ぶがきつと見て居やると。地お道化をしほに二人連。手を引。フシ合うて入りにける。地ドリヤ燒物を燒立てて祭進じよと立つ女房。表へ二十六七な フシ所目馴れぬ笠の中。地そこか爰かと見廻して。詞下り荷物の世話なさんす。三ぶさんといふお方は。地爰らではないかえと。問ふ門内より爰でござんす。詞どなたぢや。わしぢや。わしとはえ。ヲヽようござつた。アリヤ德兵衛のお内儀ぢや。これはしたり。サアマアこちへと 地 挨拶を馴染にして打上り。詞三ぶ様には先程九郎兵衛様でお目にかゝり。何かのお禮を申しましたがお前には始めて。私は備中の玉嶋に居りまする辰と申して。德兵衛女房でござんする。コレハ〳〵よう上らんしたな。アアイまあ連合德兵衛殿事は。僅な科で。國を立退かれまして。和泉とやらに居られましたを。皆さん方が世話にして暫く大坂の住居。生れ付きがあらこましい喧嘩といへば一番駈。肌刀差いた様な人。地定めて何角お世話がちと。一禮いへばア他がましい何のお禮。詞イヤもうあらこましいは何方にも覺のある事。手前の人もナ五六年以前までは。それは〳〵喧嘩好でな。假初にもちよつと橋詰へ出て貰ふが毎日毎晩。それも又直れば直るもの。今では虫も踏殺さぬ佛性。アレあの様に片時も珠數を放さず。腹の立つ事があれば念佛で消して居られます。嚊がいふ通り常住これぢや〳〵。ハテナアそれは結構な事。イヤお内儀德兵衛も同道で下られますか。サイナア女房の思ふ様にもない聞いて下んせ。お國の咎も赦りて迎ひに來たを。ヤレ嬉しやといふ氣もなうて。マア四五日も跡から下ろ先へ下れとひつしよなさ。地未練さうに付きはつても居られず。是非なう先へ下りますと。咄の内に三ぶが女房思ひついたる一つの頼み。言出すしほに茶を差出し。詞イヤ申しお辰様。馴々しいがお前へちつとお頼み申したい事がござんす。地何と私に頼まれて下んすまいかと裏問へば。立直つて襟かき合せ。詞玉島の田舍に住んでも一寸德兵衛女房辰でござんす。頼むとあるを一寸でも跡へ寄らぬが夫のしにせ。引きはせまいマアいうて見さんせ。マア添いお禮から申します。定めて德兵衛様の咄で聞いて御ざんせう。和泉の國濱田

の御家中。玉嶋兵太夫様といふお方の御子息磯之丞様と云ふが。様子あつて町奉公なされてござつた所に。若氣の至りで人を。マア大坂に置かれぬ首尾。今も今とてかけさせまする相談。此お方を何卒マア。私が方へ預りましよ。アノ預つて下んすか。そこを引かぬが一寸が女房。殊に其親御の兵太夫様へ釣つてはちつとこつちに由緣もあり。預つて連れまして歸りましよ。そんならさうして下さんせア落着いた〳〵。地テエ呼びまして來ませうと立つを釣船コリヤ待て女房。女賢しうて牛賣られぬと入らざる儕が差配。頼んでよけりや俺が頼む。磯之丞をお辰殿へ預けては此三ぶが顔が立たぬ。サアそこを外へ預けるがあなたのお爲。マダぬかす男の一分捨てさすか。面汚さすか癡呆めと。地呵り飛ばされもぢ〳〵うぢ〳〵。徳兵衛女房聞咎め。詞イヤ三ぶ様。無理に頼まれ度うていふではないが。私が其人預ればお前の男の立たぬは如何して。但し女でまさかの時役に立たぬと見するてか。まんざらひぢりかすりを喰ふ様なアイ女子でもござんせぬ。一旦頼むの頼まれたのと云うたからは。三日でも預からねば私も立たぬぞえ。立てて下んせ親仁さんと。地辛い女房の詞の山椒フシ茶びんあたまを動かする。詞イヤどういうても預けては此三ぶが男が立たぬ。サア其立たぬ譯聞かう。いかさまそれには様子がある。そりやマアどうして立ちませぬ。ホ立たぬといふ譯は。内儀の顔に色氣がある故。徳兵衛が思はうにも。三ぶといふ者はよい年をして不遠慮な。身に火の付いたが切ないとて。若い女房に若い男を預けてやつたは聞えぬと。思ひはせまいか又思ふまいものでもない。あながち此方に限つて。さうした事はあるまいけれど。分別の外といふ事がある。によつて又疑ふまいものでもないが。ない事ぢや〳〵。ない事ぢやによつて結句戸が立てられぬ。腹立つまいぞや〳〵。いつそ此方の顔が歪んであるか半分削げてもあつたら。徳兵衛もなんとも思ふまい又世間も濟む。俺や誓文コレ此珠數にかけ預けたい〳〵。此方の根性を見据ゑたによつて。が萬々が一徳兵衛が立たぬ事が出來ると。俺は勿論九郎兵衛までが。男が廢る。といふ事はあるまいけれど。外といふ字で預けにくい。マアさう思うて下あれと。地事を分けたる一言に連添ふ女房も理に伏し。お辰は元より詞も出ず。フシさしうつむいて居たりしが。地何思ひけん立直り火鉢にかけし鐵橋の。火になつたのをおつ取つて。我と我が手に我が顔へ。べつたり當てる燒鐵にうんとばかりに反り返る。これは何故何事と夫

ぬは慌て抱きかゝへスエテ藥よ水よと痛はれば。地正氣付きしかむつくと起き。詞なんと三ぶ樣。此顔でも分別の外といふ字の色氣があらうかな。出來た。お内儀。礒之丞殿事を頼みます。スリヤ預けて下さんすか。唐までなりと連れ立つて下され。ア、嬉しうござんすそれで私も立つた。礒之丞樣の親御兵太夫樣は備中の玉島が御生國。徳兵衛殿の爲にも。私が爲にも親方筋。其御子息樣を預からいではナ連合の男も立たず。わしも主へ立たぬによつて。親の產付けた滿足な顔へ疵付けて預る心。地推量して下さんせと。語るを聞いてお次も涙三ぶも涙の横手を打ち。詞ハテ徳兵衛は頼もしい女房を持つたなア。なぜ男には生れてこぬぞ。あつたら物を落してきた。ソレ女房ども。奥へ伴ひ礒殿にも引合せ備中へ下す心拵へ。お内儀。疵は痛みはしませぬか。何のいな我が手にした事 地ヲ恥しと フシ袖覆ふ。地惜しや盛を散らせしと。三ぶが女房はいたはりて オクリ一間へへこそは連れて行く フシ早暮近く。生なれの立てるでもなし横に出る。男仲間のはね出されこつぱの權なまの八。獅子に雇はれ赤頭。フシせんまの形を其儘に。詞三ぶ殿内にか宿にかと。地つき聲やり聲躍り込む。ホ詞こりや二人ながら祭の形。まだ仕舞はずか。飲みに來たのか。今看經しかけて珠數の手が放されぬ。そこらに樽があろ一杯せい。南無阿彌陀〳〵。膳棚・に餡があろぞ。南無阿彌陀佛〳〵。地それを看と口ではぶつ〳〵。爪繰る珠數と挨拶を取交ぜ後生佛性。此方は牛頭馬頭惡鬼株フシ膝打叩いて。詞八よ親仁に今のを言をかい。ハテぶつ〳〵を聞いて居より言出せ〳〵。コレ三ぶ殿。二人が連立つて來たは。こなたに貰ふ物があつて來た花が欲しい花下はれ。ヤア〳〵何ぢや花をくれい。ヘエ扨は留守の間へ山車でも持てきたな。ヲ獅子持つて來て美しい花を見付けて置いた。さる侍に頼まれその花を貰ひに來た。ナ八よ。夫々つい掴んで來て進じようというて。お侍を宮の内に待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど。白髪の生えた人をさうもなるまい。但しこみずいうて見る氣か。金にでもする氣かと。地しかける喧嘩を珠數で紛し。詞エ若い者といふものはずは〳〵と嗜め〳〵。わいらは住吉で始めて逢うてそれからの出合。もう根性が直つたと思うたが。フム其侍といふは。大鳥佐賀右衛門といふわろであらうがな。マアそんなもの。コリヤ去んで云はうには。琴浦には礒之丞というて。歷とした男がござると去んでいうてくれ。コナ親仁は。俺らを子供の樣に思ふさうな。ヲ俺が日

からはいなごの様に思ふ。ドリヤそんなら掴んで去のかと。地立上つて兩人が奥をめがけ駈入る所に。襖さつと押開け脇差提げて三ぶが女房。詞コレ此方の人私やさつきにから聞いて居たが。こな様もう堪忍がなるまいがの。嗅五六年願うた後生を無にして。いつそ斬つて仕舞はざなるまい。ヲそんな事もよござんしよ。が。あんまりそれも不便な事でもあり。イヤこんな時斬らざ斬る時もあるまいと。地いふに二人はうぢ／＼きよろ／＼。性根を据ゑて身を固め。詞面白い斬られう。脚腰立たぬ老耄斬りはづさして臺座御光。地しまうてくれうと兩方よりサア斬れ／＼とせがみ立て。フシ入身になつて待ちかくれば。地三ぶはすつくり立身になり。詞嗅モウ是非がない切つてしまを。ヤそれはイヤ俺が斬るは此珠數と。地ふつつり切つて後へ投げ。サア是からが元の釣船。汝らに刃物がいらうかとはつし／＼と踏倒しフシ尻ひつからげ。詞ドレ其脇差。ハテもう刃物はいらぬでないか。イヤ此がらくたは爪にも足らぬ。根ざしの侍めをばらして仕舞ふ。男の丸腰も見苦しいと。地大だら腰にぼつ込む所を。どつこいさうはと右左掴み付く腕ぐつと捻上げ。詞嗅侍に逢うて來う。地ヲいてごんせとやる女房行く男より氣の強さ。外へ押出し門ぴつしやり。三ぶは二人を引立て宮の フシ内へと。連れて行く。ハルフシ奥は暫しの。別れぞと。地琴浦に呑込ませ。フシ酒汲みかはす折からに。地表へ來るは九郎兵衛が舅三河屋の義平次が。駕籠釣らして戸をこと／＼。誰ぢやと云うて開けに出る。詞ホ三ぶ殿の御内室此中は逢ひませぬ。いつ見てもまめさうな。おまへも達者で珍らしい何と思うて。サ年寄ると子に使はれます。九郎兵衛が云ふには。此中から惡者共が頼まれて。琴浦殿を盗まんと念がける。定めて三ぶも心づかひ。四五日此方へ取込んで置いたら。燈臺下暗しと氣が付くまい。女夫の衆の氣休めに。迎うて來いというて駕籠までおこしました。地これまではいかい世話と取繕へばナンノお禮に及ぶ事。詞今も今とていけず達がわつぱさつぱ。連合は其出入に行かれました。いかさま二三日此家をあらけ。あいつらに鼻あかすも魂膽。九郎兵衛樣も其胸で俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡すは慥。奥にぢや呼んで來ませうとつい立入れば義平次は。駕籠の衆待つて貰はうと。門につつぼり人顔の フシ見えぬを首尾と待ち居たり。地奥は盃取納め伴ひ出でて琴浦が。そんなら私も三ぶ樣や九郎兵衛樣に譯いふて。跡から行くが合點か。ハテそりや其時私が又迎ひに來ると辰が挨拶。

礒之丞も共々に一時には目立つ故。猶以て連れては行かれぬ兎角あの衆のいふ様にと。宥めて別れ女郎は駕籠礒とお辰は船場へと。表へ出れば三ぶが女房。詞義平次様渡したぞ。お二人様も御無事でと。長地暇乞も挨拶も互の思ひ暮過ぎて又の便を松屋町。南と北へ引別れ。フシ足早にこそ歩み行く地宮には喧嘩々々と騒ぐうち若い者ども聲々に。詞親仁殿もうよい〳〵。高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない。マア去なれい戻られと。地徳兵衛九郎兵衛諸共に三ぶを宥めて歸る店先。女房立つてコレ皆様。詞出入の濟口どうぢや〳〵。こちのがひけではごんせぬか。地年寄だけで氣遣なと問へば徳兵衛いかな〳〵。詞昔に變らぬ達者な和郎。八と權とを蓮池へ何の苦も無うどんぶりいはせ。侍はふけつた〳〵。ヲヽそんなら入らんせ。祝うてわつと酒にせう。コリヤ女房氣が付いた。徳兵衛には取分けて內儀の事を咄さにやならぬ。九郎兵衛にも安堵さそ。地サアまあ奥へと先に立つ。どりや內儀の御馳走を食べて去のかと徳兵衛は フシ伴ひ一間へ入りにける。跡に九郎兵衛立留り詞お內儀琴浦殿や礒殿が見えぬが。何處へぞ行かれたか。さればいなどうやらそぶ〳〵いふによつて。お辰さんに預け礒様は備中へやる。琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに來た。ソリヤ誰が。ハテ親仁様が見えて九郎兵衛が云ひまする。四五日戻して下されと駕籠まで持たして迎ひにお出。ヤア〳〵アノ此九郎兵衛がいふというて。舅の親仁か連れて去んだか。ヲイノ。シテ〳〵其駕籠はどつちへ。たしか南の方へ。地それやつてはと駈け出すをコレ待つた氣づかひな。詞迎ひに來た事おまへは知らずか。知つた知らぬは跡での事。イヤそれ聞かぬ內は。地エ面倒なと跳飛ばし。舅の跡を九郎兵衛は息をはかりに 三重へ追ひかくる

第七　舅が慾を止め兼ねた　紅粉絞の色入帷子

百合地神と佛を荷ひ物囃し立てたる下寺町。高津宵宮の賑ひに紛れて急ぐ舅義平次。駕籠の簾を細引でぐる〳〵巻の俄綱。追つ立て行くを跡よりも。政ヲヽイ〳〵呼びかけ飛來る聟の九郎兵衛。百合南無三寶と横切れに畔道行けば追ひつゞき。政駕籠の棒摑んで畠中どうど打据ゑどつかと坐りフシほつと一息つきあへず。コレ詞申し親仁様。此女中は知つての通り恩ある方からの預り人。これを此方が何處へ連れてござる。こりやてつきりと惡者に頼まれ金にする氣であらうが。さうしられては此九郎兵衛が顔が立たぬ。惡いぞえ〳〵。此中も內本町の道具屋で田舍

侍に出立ち。贋香爐を以て五十兩の衒事。ヘエ、見下け果てた。重ねて急度と云うてからが嗜む心もあるまい。コレ駕籠の衆。大儀ながら其かご地跡へ戻してと舁上げさすれば。百合詞コリヤ待て九郎兵衛。嗜む心があるまい見下け果てたとは忝い。其愛想づかしを待つて居たわい。六年以來おれが娘を女房にして。慰み者にしてゐるサア揚代囉ふ。ヤイ。爰な恩知らずめ。汝は元宿なし團七というて。粋方仲間の小あるき。貰ひ喰ひで暮して居つたを引上げて。堺の濱で魚賣させ。まだ其上に娘のおかちをてゝくり。市松といふ子迄へり出さし居つた。月々のあてがひ取るがよさに。日を眠つて居る中。乳守の町で喧嘩仕出し。和泉の牢へかまつて。百日の上女房子を誰が養うたと思ふ。政サアそれは皆其許様のお世話。百合ぬかすな。せめて其入目を入合はさうと思うて。儲け事にかゝれば。汝が道具屋する氣。政イヤサそれでは顔が。百合立たの内にをつて。ようぼく上げさしたなア。ぬか。アノ長々頤を養うてゐた此。此。政イヤそれは其場のつい。百合またぬかす此顔が立たぬか。但し此方の此。此。此か。今日琴浦をちよろまかして來たのは。頬桁が立たぬかと。地立蹴にはつたと蹴惚れて居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金にられても。政舅は親と無念を堪へ。齒を



喰ひしばり居たりしが。とかく詫びるにしくはなしと。揉手の上に膝折り屈め。段々の仰せ。一つとして返す詞もござりませぬ。長々のお世話の上又しては金儲を妨げ。お腹の立つは御尤。もうふつつりとお邪魔は致しますまいが。あの女中の事計りは。百合イヤならぬ。政サア素手でお詫びも申しますまい。友達共が頼母子を致してくれまして。爰に三十兩ござりますれば是をお前へ渡しましよ。身の代に取つたと思召し。琴浦殿を三ぶが方へ戻して下され。外へやつては此九郎兵衛が顔がどうも立ちませぬ。情ぢや慈悲ぢや親仁様。一生の御無心。申し〳〵。コレ申しと。地手引き袖引き膝を突き無念涙のフシ男泣き親と。いふ字は是非もなや。百合地義平次も三十兩當分取るに少しは柔ぎ。詞琴浦をあつちへ渡せば百兩が物惜にあれども。かゝりや繋がる娘の緣。たゞやつたと思ひ三十兩で戻してやろ。ヤコレ駕籠の衆。今乘つて來た所迄駕籠を戻して。駕籠代も存分先で取れいと。政地悪氣付くればこんな時よい強請取サアこいと。競ひ勇みの駕籠の者フシ來た道へ又荷ひ行く。百合詞サア約束の三十兩受取ろ。地渡せの催促に。政詞イヤ其金爰にはござりませぬ。地宿へ歸つて才覺と立たんとするを百合飛びかゝり髮束摑んで引仆し。詞エ、腹の立つ。〳〵〳〵〳〵。うま〳〵と一ぱい。政



寶暦七年七月蛭子屋吉郎兵衛座興行の番附

何の申し左様ではござりませぬ。内へ歸れば心當がまあ〳〵〳〵爰を放して。百合ヤアどこへ〳〵。うぬが樣な賣僧めはかうして腹癒ようか。イヤかうしてくれうかと。地捻廻し。引廻し。踏んだり蹴たり舉句には。砂に摺付け石に打付け フシ引廻し〳〵。政地引廻されても手向ひのならぬも無念さ口惜しさ。堪へかぬれば百合詞其面つき何ぢや。肩肘張つて其眼付何ぢや。コリヤヤイ。舅は親。ア、慮外ながら。親に向つて白眼。蹴潰すぞよ。無念なか口惜しいか。ム、、、泣くか。可愛やなア。擦歪めてやらう。この雪駄の皮喰へと。政地躙り付けられ齒ぎしみ齒ぎり。百合透し眺めて。詞おのりや脇差さいてぴこつくか。面白い。斬られう。どこへ跡へ寄りをると。地付け廻して引つ捉へ。詞見事此赤鰯でやつて地見るかと持添へ引拔き。サア詞是で斬れ〳〵。サア〳〵斬らぬかやい。政何の私がお前を。百合イヤ斬る氣であらう。〳〵〳〵。斬られう斬つて貰ふ。一寸斬つたら一尺の竹鋸で挽返す。サア斬つて見よ突いて見よと。地差付け突付け挑取らん〳〵とせり合ふ中。政思はず舅が耳の根ずつかり。百合ヤレ人殺しよ親殺しと。地叫はる聲に折よくも。二人祇園囃子の太鼓鉦。政九郎兵衛は殺す氣もないに因果と舅が大聲。百合切つた〳〵と人寄せの。政聲を留めんと又ざつぷり。あたりほとりを見廻してうろつく中に百合摑み付き。政横に拂へば又すつぱり。人は來ぬかと氣もそゞろ。二人松の内行く提燈の。あかりが厭さにどつさりの。音は囃子に。百合地へ紛れても紛れぬ命の終り際。うんと反れば是非なくも取つて抑へて止めの刄。ぐつと差込む其内に間近く聞える御輿の太鼓。死骸を池へ投込み〳〵。フシ血汐を流す桔槹。地汲む水則ち三途八難。我が身にかゝる罪科を洗ひ落せど濁り井の。水より淸き夏神樂ちやうさようさの御輿の俄。これ幸。と紛れ込み遁れ出でたる千歲樂。萬歲樂や極樂橋。命の瀨戸の札の辻八町。目へとぞ 三重へ紛れ行く

第八　友達に心を碎いた 石割雪踏の合印

地日數さへ。ハルフシ早一七日田嶋町魚屋商賣鰭のある。主は團七九郎兵衛とて昔と今の名を合せ。手強き業も五人前高津祭の其夜より。内へ歸りてゆつくりと何知らぬ顏。せぬふりに。人はそれぞと氣も付かず油斷枕の高鼾。子は友達と惡あがき切つつはつつも親に似て。フシ負けぬ性根ぞ逞しき。長地妻のおかちは父親の。敢なき最期常からの。心ゆるとはいひながらオクリ悲しさ。餘り今日も亦。フシ

墓参りして立歸る。地子供遊びのわやく同士アレ市松の擲きやつた。私も打たれた切られたと泣く〳〵表へ駈出づれば。おかちはやがて抱きとゞめ。詞又こりや市松がせぶらかしたか。堪忍しや〳〵。エヽ憎い奴ぢやの。地私が擲きかへしてやらと宥めすかせば子供共。詞此方の町へ來をつたら寄つてかゝつて縛つてやろと。地口々いひて歸るのもフシ物が知らすか氣にかゝる。地汝其口止めてやろと竹提げて市松が。追つ駈け出づるをおかちは押止め。詞ヤレこな子よ。杖棒持つてあの子供に。怪我さしたら何とする。眞に〳〵親に似ぬ子は鬼子と。九郎兵衛殿の一徹によう似たなア。祖父様が七日後に。長町裏で殺され其切人を御詮議。意趣ある者の覺えはないかと。嬶は毎日御前へ呼ばれ。地心も心ならぬに。いかに子供ぢやというてあんまりな。詞そしてマア父様は。そなたばかりを置いて何處ぞへぞござつたか。よもやさうでもあるまいが。留守かや。イヤあの屏風の内に父様は寢てぢや。俺は敵討の芝居事してゐたれば彼奴等が。親の敵というて擲き居つたによつて。祖父様の敵というて擲き返した。母様祖父様を斬つた奴が知れたら俺が殺してやるぞやと。地いふを寢て居る九郎兵衛は。聞くに付けてもハルフシ胸ふさがり是非も。涙にくれ居たる。地おかちは堰き來る涙を押へ。詞そなたさへそれ程に祖父様の事思やるに。私は常から愛想が盡き。疊の上ではエ死にはさつしやるまい。ひよんな死をする人と思うた故。斬つた奴を金輪際とも思はなんだ。思へば私は不孝な者。地惡い人でも親は親。澤山さうに思つたのが今では悔しい。ハルフシ悲しいと口說き。涙の折からに。地心の合うた友烏。なきに立寄る一寸德兵衛肩に貫錢フシ引懸けて。詞九郎兵衛内にか。玉嶋へ下る故暇乞に。地ちよつと來たと菅笠取つて内に入る。おかちはちやつと泣顏隱し。詞ホこりや今下らんすか。暑い時分に大儀な事や。したが日和續きもよござんしよ。コレ〳〵お辰様へよう心得て下さんせ。イヤモウ言傳受取つても死人同然。ついに云うた事がない。ヤ其死人で思ひ出した。親仁を殺した者は未だ知れぬか。サお上にも御詮議が強いけれどまだ知れませぬ。さうであろ〳〵。あれが殺して物を取つたといふか。其晩に大きな出入でもあつたら詮議の手懸りもあらう。あの親仁に意趣ある者といへば。大坂中に殘る者がないすりや知れぬ筈。定めて其事で九郎兵衛も心遣ひでござらう。推量して下さんせ。主もほつとしたかして寢てばつかり居られます。どうで斬つた者は知れまい

し地いとしや犬死でござんしよ詞アレヌ泣かしやる。犬死でも馬死でも時刻ぢや〳〵。モウ諦めたがよいわいの。俺も九郎兵衛にちよつと逢うて行きたいものぢやが。ほんに起しませう。アコレ〳〵もうよござるわ。可愛さうによう寝て居るものを。イヤ又後で呵られましよ。地ソレ市松起しましやと。いふに立寄り屏風押明け。詞コレ父様。伯父様が逢ひにきてぢや。コレノウこれなうと。地ゆすり起され目を擦り〳〵。詞伯父様とは。エ徳兵衛か。旅立の装で船にでも乗るのか。ハレ起さずと置きはせいで。ヤ此間の取込みで嘸草臥であらう。推量してたも。舅太夫が悪い死をしられた故。アヽフヽ身中がぶき〳〵いふ程草臥れた。ヲ道理道理。イヤモウ主の大い氣扱ひわしにかゝつて。ハテそりや其筈の事。舅は親。九郎兵衛が世話仕内の事。したがそんな事はいかう氣が揉める物ぢや。何と氣休めにいつそ俺と連立つて下へ行きやらぬか。イヤ何のいの。ハテさうでないぞや。そんなもや〳〵した事のあつた上では。必ず大煩が出るもの。俺がいふ様におぢや下へ行こ。何をやくたいもない備中三界何しに行く物で。イヤまんざら用がないでもあるまい。俺が女房に礒之丞殿を預けて遣つたれば。見舞がてら下つても大事あるまい。ホ顔に焼鐵迄當てて預つて去んだ内儀。覺束なさうに見舞にも行かれまい。コレそりや大事ない。イヤ殊に俺は海船は嫌ひぢや。板一枚下は地獄。今年は取分け川船さへ怪我するに。海上は俺や厭ぢや怖い。ムウスリヤあり様は海船が怖いか。アノ海船が。ハヽヽヽヽこりやをかしい。イヤこりや怖かろ。道理ぢや〳〵。ハテ人といふ物は見かけによらぬ命は惜しい物ぢやの。ヲ取分け此九郎兵衛は男ぢやによつて命が惜しい。大恩受けた兵太夫殿がよそながら。頼むといはれた一言。礒之丞殿の歸參が叶ひ。親御の手へ渡す迄は大事の命。サア其大事の命ぢやによつて。かの大煩の起らぬ中に下りやらぬかといふ事。ナウお内儀。さうでござんすとも。主が煩はれますと。私や市松が狼狽へまする。こりや徳兵衛様のいはんす通りに。何ぬかす。大坂を放れては和泉の様子。礒之丞殿の歸參の程が知れぬ。女の出過ぎたすつこんでけつかれと。地呵り飛ばせば徳兵衛引つ取り。ア詞コレお内儀。地お茶一つ下されと茶で紛らかす主の機嫌。アイと返事を立つしほの。常の辛いを呑込んで。ブシ勝手へこそは汲みに行く。地徳兵衛重ねてあたりを眺め。舅が最期の場にありし雪踏片足腰より出し。詞コレ此山形に丸印の雪踏。地見知りがあるかと差出す。ぎ

よつとせしが。詞ヲこれは俺が雪踏。それが又何とぞしたか。サア是がそなたの雪踏ぢやによつて。下へ行きやらぬかといふ事。ムウそれが又俺が雪踏なれば。何で下へ行く事ぞ。イヤコレ九郎兵衛。此雪踏を味な所で拾うたの。長町裏の畠中で。ぢやによつて下へ行きやらいでといふ事。ムウイヤ其雪踏は。此中練物見ようと思ひ。小間物屋店へ上つたれば片足犬に取られた。定めてそれを畠中へ銜へて行た物であろ。仰々しい何ぞ事もある様にと。地けんもほろゝに顔色もフシ人を殺せし體もなし。地徳兵衛は目も潤み流るゝ汗と倶に拭き取り。ヘエ、聞えぬぞや九郎兵衛。詞そなたとは住吉で。腕引く代ぢや片腕ぢやと取交した片袖。おりや大事にかけて持つて居るぞや。有様は雑巾にがなしたであろ。これまで兄弟同然に心底あかす友達中。なぜ物を隠してたもる。其方には市松といふ子もある。しかもいたいけ盛り。伯父様〳〵といへば。追從でないおれも不便な。もしもの事があつたらば女房子迄引出され。どんな憂目に逢ふも知れず。其方一人の命は三人にかゝると思ひ。コレこれを見や。俺が雪踏も山形に丸印。片足見えぬがお上へまはり詮議の種になつた時。この徳兵衛でござると身に引受ける覺悟。地これ程までに思ふ俺に。隠し包みは曲がない。なぜ明かして共々に相談してたもらぬ。但しこの徳兵衛が性根魂が氣遣なか。腮叩くと思うていはぬか。そりやあんまり聞えぬ。詞おれも男ぢや。〳〵。〳〵〳〵と。地肩振りいがめ肱張つて。親の時さへ泣かぬ目に恨の涙。スヱテはら〳〵とフシ保ち。兼ねたる殊勝さよ。地九郎兵衛も身の大事麁忽にも明かされず差俯いて居たりしが。詞段々の志。悪うは受けぬ過分な〳〵。さういやれば其雪踏が悪い所にあつた物でがなあろ。マアよう思うて見や。泣くと喰はうといふ子はあり。女房は若し。身を仕舞ふ様な事仕出してよい物かいの。サアそこがあるによつて。身に引受ける覺悟の雪踏。サア其引受けさして。見て居るやうな九郎兵衛でもないわいの。元より身に覺えのない事。必ず氣遣ひせずともう船も出る時分。早う下つて礒殿の事世話してたも。それが眞の命を貰うた同然。スリヤどういうても明していはぬの。ハテ何にもいふ事はないてや。日のたけぬ中早う行きや。地俺も見さした夢見ると。入らんとするを思ひがけなく。詞九郎兵衛取つたと地聲かくる。はつと目を据ゑ見廻し〳〵。詞徳兵衛何ぢや。何を取つた。イヤ今爰で蚤を取つた。ハテ仰山な。コレ見や〳〵。蚤といふ物は愚な物ぢや。忽ち命を取ら

る丶事を知らいで。骸の内を。ノウコレ内を得放れぬ。なんぼ飛ぶ程の術を得ても。天下の息のかゝつた此指で。ドウ押へられては叶はぬ〳〵。　捉へられぬ内に此蚤めも高飛し居つたらよかつたにナウ九郎兵衛。詞何をいふやらきよろ〳〵と。其蚤もぢつと縫目の内に居れば。捉へられる事もない。なま中にうぢついて飛びあるく故押へられた。それも又其蚤に。コレ此劒の様な針があると。切つて〳〵切拂ひ。唐天竺へも一飛び。一寸の虫にも五分の魂。一寸の虫にも。な。徳兵衛。其中逢はう　地オクリさらば。〳〵と。フシいうてぞ入りにける。地茶を入れかへて女房が。持ち出る此方は捨扶持で。去にかけるのをコレ茶を一つまゐらぬか。端香一つとフシ差出す。詞イヤモウ茶も水もアお内儀面白うごんせぬ。我等が志水の泡となつたぢや。せめて此方なと悦んで下んせ。ヲ、何ぢや知らぬが。常からお前の志私や嬉しう思うて居るわいな。ハテ九郎兵衛と懇するも。堺の戎島で此方様と出合うてからふつと其時。テモあの女房は可愛らしい。それも何の役に立たぬ事であつた。地ハルフシ去んで來ましよと立出づる。詞アこれ徳兵衛様。ソレお前の帷子は。何處も彼處も綻びて裾廻りがばら〳〵。地それ著て船へは乗れまいといふに身内をほんになア。詞綻びた所を括つて置いたが皆ほどけた。一針やつて下んせぬか。ヲ易い事ちやつと脱がんせ。イヤついかうして。ヲ辛氣。さうしてそれが縫はれるものか。デモ内證北國ぢや。ム、自慢で加賀の下帯か。地イヤ其隣の越中ぢやと。袖無し繻袢一つになり。脱いで渡せば針刺しのオクリ糸の。結ぼれフシ緣の端。もつれかゝるや　サハリ咽の下。穴のあく程顔打眺め。詞いつ見ても〳〵美しい御面相。九郎兵衛が大坂を離れぬも道理。憎い程靨がある。地ヲ何ぢやいのじやら〳〵と。國へ去んでお辰様にさういうて悦ばさんせ。詞イヤモウそげめが頬は見たうもない。下地の杓子に燒鐵で。革足袋の焦げた様な。地デモ久しぶりでしつぽりと面白かろ。詞ムウ面白けりや何とぞ思ふ氣か。アノ爰なすつとの皮めが。ヲ何さんす痛いわいな。何の痛かろ。おりや此方の綻べた所が縫うてやりたい。コレ悪い事さんすと針で突くぞ。ア、危い〳〵。地エ卑怯な男ではあると。フシカヽリ悪戯高じる其中に。表へは釣船の三ぶが來かゝり内よりは。夫が出かけて見るとも知らず。詞有りやうは九郎兵衛を下へ下した跡での事と。思うたが圖へいかぬ。ソレ戎島で頼んだ時の約束。サア其時はさう思うたけれど。地けれどで濟むかと抱付くを。九郎兵衛

飛出で取つて引退け。女房が持つたる帷子捥取つて。どうど打付け中にすつくり。ハツトおかちは氣も上り。德兵衞はうぢ〳〵もぢ〳〵。そつとフシ帷子引取つて。ハルフシ著る中もまだへらずロ。詞ア、去んでくりよ〳〵。大坂に居たとて花實の咲く事もあるまい。ア、去んで女房の顏なと見て樂しまうわい。エ、疾うに船に乘るものを。あた鈍臭い。綻べ一つ縫うて貰ふで帶解いた。俺が著る物俺がでに俺が著るから地俺次第ぢやと。フシ滅多無上に帶引廻し。地船が遲なる去んでくれうと行かんとするをコリヤ待て德兵衞。詞とつくりと帶しめて。そこへ直れと聲かけられ。地行くも行かれぬ命の際。破れかぶれと性根を据ゑ。詞何ぢや用があるか九郎兵衞。內儀との事ならぐづ〳〵いふに及ばぬ。疾うから俺が惚れてゐれども。友達の義理を思ひ齒節へも出さなんだ。時節もあらうものぢや。其方から隔てる樣になつて今では義理も瓢簞もない。サアいつそ內儀をおれにくれるか。さもなくば胸にある事そこへまき出せ。ホヽヽヽ賴もしさうにいふと思うたが。女房欲しがる根性で樣子がさらりと知れた。欲しか女房もやらう。聞きたか大事もいうて聞かさう。見事われ聞いたり貰うたりせいよ。ハテ二色共に望んだ事聞いたり貰うたりせうわい。ヲやろ。ヲもらを。云をわい。聞こわい。サア。サア。地さあ來いと身拵する表にも。三ぶも身構まさかの時走り込まんとフシ控へゐる。地女房おかちはあ〳〵と氣を揉みあせれど女業何とせんかたなき內に。九郎兵衞は袂より。取りかはしたる片袖出し寸々に引裂けば。德兵衞も持合せ共に引裂き一度に投付け。詞互の固を破つたからは心は殘らぬ。ヲそれ〳〵。サア出い。地出いとコハリ搖ぎ出で。ずつと立寄り額と額。目先三寸肩先四寸。ぢつと體を小疊に。たゝんで互にナホスフシ膝摺合ひ。詞思へばちつとの間の懇であつたなア德兵衞。ヲ是迄はいかい世話。ソリヤ互に。サア貰ひかけうか。どうして貰ふ。地ヲまづかうしてと切りかける。丁ど受止め受流しばつし〳〵と討合ふ刃音。コレ待つてと女房が支へる中に三ぶは駈入り。詞コリヤ待て〳〵と制しても。地逸り切つたる二人が勢。どつこいさせぬはこりやさせぬと。彼方を突退け此方をフシ跳ねしてこい止めたと支へたり。詞ヤア邪魔せまい危い〳〵。地怪我せぬ中に退かれいと引退けても駈入り〳〵。詞コリヤ斬れ〳〵堪忍ならざ俺を斬れ。サア此三ぶを斬れ〳〵〳〵。コリヤ。コリヤ。斬れ〳〵〳〵と。地胸打叩き膝叩き拔身をびくとも思はねども。思ひ切

つたる刄にあぐみ枕屛風を追つ取つてつ合せた劒の眞中を押へて直に骸を重り。どうど坐れば二人もべつたり。詞コレ親仁。邪魔しやるのは徳兵衛が肩持つ心かサ、、、どうぢや〳〵。肩を持つも背を持つも様子知らぬ上の事。知つて非道に與せうか。最前よりひかへて居たも了簡思案を見ようばかり。討果さうとは若い〳〵。ヤ女房を盗まれ男が立たうか。若うても年寄でも此方は堪忍するかヲ堪忍するとも。コレ九郎兵衛。世界に堪忍のならぬといふは。腹寒いより外堪忍のならぬ事はないものぢや。此三ぶが此年迄見來りて來た中。密夫の行ひ様に上中下三段あり。若いによつて知るまい〳〵。先づ其中下の了簡といふは。今其方がする様に討果すか。重ねて置いて四つにするを。極々下の下の思案。何故といへ。男らしい事をしたと言はれうとすると。盗まれた鼻毛の恥が世間へぱつと立つ。そこを思うて内證で耳を削ぎ。鼻を削ぎ。坊主にするをよい様に思へども是がまだ第二番めの中の思案。極上々の思案といふは。堪忍の胸を擦つて。世間へも知らさぬ様に内證で。さらりつと隙やつて仕舞ふが。大極上々箱人の思案といふ。元より不義があつたではなし口先の戯談。それをいひ立て討果すは彼の。極々悪い下の下の思案。そこを思うてこの出入貰ひに出た。サア俺にたも〳〵。地白髪にたもと一向に。貰ひかけられ九郎兵衛も。本フシ思ひ廻せば



寶暦七年七月蛭子屋吉郎兵衛座興行の番附

我が身にも。地大事抱へて是しきに命を果す様なしと。ハルフシ傍に立つて。硯箱。さら〳〵さつとフシ書認め。詞コレ三ぶ殿。此方を立てて何にもいはぬ。地それ渡して下されと書いた一通投付けて。フシ一間へこそは入りにけり。地女房取上げ開き見て。ヤア詞こりや去狀暇の狀地ハはつと。スヱテ計りに泣き沈む。地三ぶは突立ち何めろ〳〵。詞覺えがあらうが有るまいが此家に置かれず立つた〳〵と。引立てられて。地ナウ悲しや。せめて別れに市松に。一目合せて下さんせ。市松何處にぢや市松と呼ぶ聲慕ひ走り來る。ヤア面倒なと突退け〳〵。詞一寸には此三ぶが相手になつて存分いふ。地サア來いうせいと片手におかち。片手に徳兵衛引立てて。詞九郎兵衛見てか。腹癒に頬恥かゝして先つかうと。門へ投出し跡びつしやり。地ナウコレ母様々々と駈出づる市松引つ捉へ。詞畜生の親慕ふからは。此奴が性根も見えた〳〵。九郎兵衛がためには猶足手纏ひ。犬の母めと一所にうせい。地父親とは縁切つたと共に突出しフシ門口引閉め。詞何と九郎兵衛腹が癒たか。其代り俺は草臥れた。地いつそ爰に寐て去のと。我が身を横にやつころり。フシ肘を枕の一休み。ハルフシ表に親子は。泣仆れ。徳兵衛もフシ打萎れ暫し。詞もなかりしが。地思ひ合つたか三人がぢつと顔上げフシあたりを眺め三ぶがそろ〳〵立寄る戸口。表におかちは涙聲。ナウ詞三ぶ様。徳兵衛様。お前方のいはんす通りに。連合を騙し暇の狀を取つたれば舅は親。九郎兵衛殿は親殺しに。地なりはせぬかとフシどうと伏し前後。不覺に取亂す。ユリ地三ぶもせきくる涙を押へ。詞舅は親。聟は子。親殺しになつた時は市松と此方が。竹鋸でひかねばならぬ。それが悲しいばつかりに徳兵衛に不義しかけさせ。俺も共々口叩き。暇の狀を書かしました。此上に捕へられ殺さるとも一思ひ。他人同士の喧嘩になつて。苦しい死はせぬではあろが。今日や顯れ捕へに來るか。明日や縄目に及ぶかと。案じて夜の目も合ひませぬ。こんな氣ではなかつたが。エヽ年寄つたれば心まで。地たゞの親父になりましたとしやくり上ぐれば徳兵衛も。詞どうぞ備中へ連れて行くか。明していはゞ去狀も。相談づくで書かさうと。思うて問へど根深う隠す。戰法盡きていひ合せた通り。心に思はぬ不義淫奔。さぞ腹が立と。憎からう。どうした緣か。兄弟より親しうしてたもつた人に。人でなしと思はるゝおれも因果。内儀も因果。地因果フシ同士の寄り集り。地成程さうでござんすとも。取分け女子は去られまい。隙取るまいとする筈を。愛想

づかしは九郎兵衞殿。皆こなさんの爲ぢやぞや。コレ市松もよう聞いてたも。わしは親を殺されても。憎いとも聞えぬとも。思ふ心は微塵もない。地よく〳〵腹の立つ事があつての事と思へども。情ないはお上の咎。詞今日も御前でお代官様が。コリヤ氣遣ひするな。今の間に詮議仕出して下手人を。取つてやるぞと仰しやつた。其時の私が悲しさ。泣いてばつかり居たればの。お町衆が腰押してソレ有難いとお禮申せ。お禮申せとせり立てられ。地連添ふ夫を殺すとあるを。有難うござりまするというた時の其苦しさ。死なれるものなら其場で直に。死にたかつたとせき上げて歎けば立聞く九郎兵衞が。胸に磐石熱鐵を。呑むよりつらき血の涙。妻の心。三ぶが情。徳兵衞が實氣をも。聞いて遙にハルフシ手を合せ泣いて。禮いふばかりなり。地盡きぬ歎きと三ぶは手を

取り。詞此方が此家に居ては。夫婦の縁の切れぬも同然。萬一の時言譯も喧ましい。とかく九郎兵衞が親殺しにならぬ樣。地夫に名殘も惜しかろけれど。俺が所へサアござれと。引立てられておかちは猶。しやくり上げ〳〵。歎けば共に市松が。詞母樣どこへも行く事いや。惡い事もしますまい。父樣と一所に地内に居て下されと。縋れば思はず聲上げてわつとばかりに取亂す。三ぶも徳兵衞も諸共に。ヲヲ道理ぢや〳〵フシ道理々々と泣沈む。ハルフシ罪科遁れぬ。天の網四方を取卷く人聲足音。徳兵衞はつと三ぶも悄り。詞コリヤ泣いて居る所でない。アレ〳〵捕手と見えて大勢の人聲。地まづ九郎兵衞を落さうか裏表を閉めうかと。騷ぎ廻れば女房も市松連れて氣もそゞろ。徳兵衞思案し。詞暫しの間は隙どらん。其間に早う落したく〳〵。地合點がてんと釣船は。

親子の者を引連れてノシ奥へ行く間に程なく。地所の代官捕手の大勢ばら〳〵と亂れ入り。詞九郎兵衞はいづくにをる。舅義平次を殺したる科明白に顯れたり。是へ出よと呼ばはつたり。地徳兵衞やがて差出で。詞コハ思ひよらぬ仰せ。それには何ぞ慥な證據。ヤアぬかすまい。其節泥の中に。山形に丸印の雪踏片足殘りあつたを。段々詮議をすれば九郎兵衞が雪踏なる由。遁れぬ所是へ出せと。地仰せの中より。イヤ其印は私とてもかくの通りとぬいで見せれば。イヤサ詞そればかりでない。義平次九郎兵衞喧嘩の場所より。女を乘せたる駕籠の者。立歸るふりにて見屆けたと只今役所へ訴へ。地何とそれでも諍ふかと退引ならぬ訴人には。言句も出でず赤面しながら。詞さほど慥な證據ござれば九郎兵衞は科人。しかし。荒立てては中々お手に廻りますま

い。私に仰付けられませうならば。騙し捕りに捕つて上げませう。地それともお疑ひあらば フシ御勝手次第と言放せば。詞ヲ聞及んだる強力者迂濶には踏込まれず。地其方も共々にお上の奉公働けと。言付けて奥に目を付け。ヤア詞裏道へ行くが慥に九郎兵衞。地それ逃すなと大勢がフシ捕つた／＼と亂れ入る。地ハツト德兵衞見やる中三ぶは妻子を引つ抱へ。走出でてモウ叶はぬ。詞もし此市松を擒にしられては。氣がおくれて九郎兵衞が思ふ樣に働きなるまい。地親子の者を何方へぞ預けて來る中跡を賴む。合點ぢやござれと三人を見送る中に奥の騷動。詞それ／＼九郎兵衞が屋根へ逃げたぞ。突いて捕れ卷いて捕れ。地突棒よ刺叉よと騷ぎにつれて德兵衞も。何とせんかと思ひ廻して表へ駈出で。梯子追つ取りおだれに打掛け。登るも心板屋葺重ね重ぬる 三重へ身の科も。地爰ぞ絶體絶命と。九郎兵衞は屋根の上力士の如く拔身を提げ。フシ寄らば斬らんづ共勢。詞ノリ捕手の人數は後より駈上つて右左。捕つたとかゝるを唐竹梨割車切はらり／＼と薙倒す。地德兵衞が捕繩は擔げて來る路錢の貫ざし。手繰つて向うへ立廻り。詞ヤア卑怯なり九郎兵衞。とても遁れぬ身の大罪。尋常に繩かゝれと高聲に呼ばはれば。ホヽ德兵衞か逢ひたかつた。何かの樣子は皆聞いた。コリヤ何にもいはぬ。禮もいはぬ。サアならば隨分捕つて見よ。ヲ捕つて見しよこりや捕つたと。地貫ざし肩へ打ちかけて。落ちよ逃げよと突きやり捩ぢ合ふ屋根の上。踏みぬくばかりめり／＼／＼。詞どつこいさせぬ。こりやさせぬと。拔身を取つたり取られたり。地下には捕手が取りまいて落ちば括らん十手早繩。一足突きやり二足步み。詞遁れば摑んで引戻し。又駈け行くも七足八足。地十足の貫ざし首に懸けさせせり合ひ行くも角屋敷。横町こして隣町。下は隱居の座敷前人なき所へコリヤ爰で。捕つたはやいと九郎兵衞を。おだれの上より突落し。詞コリヤ／＼落着く所は備中の玉島合點か。地合點ぢや過分と九郎兵衞はキオヒ飛ぶが如くに 三重へ遁れ行く

第九 親と子の緣を繫いだ貫ざしの捕繩

地名物は刃物燒物唐海月。備前備中兩國で骨といはれし一寸德兵衞。命にかけて九郎兵衞を隱し遂げれば今日も亦。庄屋代官の呼使フシ是非なく行つて留守の內。地飛脚と思しき撥鬢男門口より聲高に。詞一寸屋の德兵衞殿は爰かの。大坂から來ましたと地踏込む足も草鞋がけ。お辰は駈出で是は／＼。詞遠々の所ようこそようこそ。シテ大坂は何處。地どなたと

問へば男はあたりを見廻し。詞大坂は高津町釣船の三ぶ殿からの使。夫婦ともいはるゝには。永々九郎兵衛殿を匿まうて下はつて過分にえんす。したが此間は其邊へもづきが廻り。ごろつくと聞いたによつて。九郎兵衛殿を迎ひにやります。此者と連れもつて戻してくつさんせと。地いへてゞえんすと常言付けぬ口上を。フシ言廻はすれば。地目高な女房打頷いて成程々々。詞則ち隣の明家に忍ばして置きました。地連れまして去んで下さんせ。大儀ながらと頼むに幸ひ。詞そんなら釣船も待つて居る筈。連立つて去にましよ。地隣の明家はドレどこと。門口出るを跡ひつしやり鐶かけて。詞コレ大坂飛脚おいて貰はう。此國の御詮議は昨夜からのもめ出し。それが聞えて迎ひに來たとは。アノ五十里隔てた大坂へ鳥が觸れたか風がいうたか。もとより此方に匿まはねば構はぬ事。地ちやが都合が悪い出かけ直してござんせと。ずつかりいはされ飛脚はきよろり。フシ立ちはだかつて居る所へ。地どうぢや／＼様子はどうぢやと尋ね寄るはなまの八。詞ア、失敗つてのけて様子は知れぬ。あの體ならば九郎兵衛は此内に居らぬであろ。ナ。ナ。地と耳に口寄せ。詞コレかうぢやによつて居らぬであろ。頼まれた佐賀右衛門殿へ申上げ。濱邊の方を詮議せうと。地いうては囁き頷き合ひフシ何處ともなく立歸る。地様子を立聞きお辰は安堵。詞扨こそ飛脚は廻し者徳兵衛殿の内になら。地鼻削いで去なさうにと。いひつゝ立寄り戸棚を叩き。詞九郎兵衛様今の飛脚は廻し者。お前をかうした所に忍ばして置きまするも。あんな事もあらうかと主の利勘。地ちつとの間暢氣させましよかと。錠押明くれば戸を開き。手足を伸して團七九郎兵衛。詞テモだるや／＼窮屈や。起きればつかへる寐ればすくばる。胄提燈のやうになつて。足も腰もめり／＼。ア、退屈な事。おか様。磯之丞殿は何所ぞへぞ行かれましたか。アイ出の口の小座敷に本讀んでござんする。ア又氣がつけうが。最前來た飛脚めは慥か。こつぱの權めが聲ぢやが。アそんな事でもごんしよかえ。佐賀右衛門に頼まれ嗅ぎ歩くと見えた。あいつらに恐れこんな窮屈な目して居よより。早う名乗つて出て仕舞がつけたい。ア、又そんな事いはんすかいな。磯之丞様の先途を見屆けさせんと。連合徳兵衛殿の心遣ひそれを無にして早う死にたいか。イヤサそればつかりで九郎兵衛程の者が逃げ隠れる。殊に徳兵衛の志破るは。人でも杖でもないと堪へては居れども。最前の様な赤犬めがうせると。飛出て骨がひしぎ度なる。これが私が病

でえす。コレそんな時にはな。大坂に居やんすおかち樣や。市松の事思ひ出したがよいわいなと。地いはれて又も故鄕の事。スエテ思ひ出する折からに。地表へ歸る主の德兵衞。詞こりや何で門口閉めたと地いひつゝしやくる潛戶の。音に驚きそりや又人よと九郞兵衞を。無理に戶棚へ押入れて。錠下す音蔵く音紛れてヲイと答さへフシ聲どまくれて明けに出る。詞ハテ扨。貲中に閉めて置くと猶人が不思議立てる。大い阿房ではあるわいのと。地いひつゝ入ればされぱいな。詞こな樣の留守の內。大坂からぢや いうて赤犬が來てな。ソリヤこつぱの權めであろ。ムウ知つてかえ。ヲヽサ今日代官所で樣子を聞けば。大坂表より九郞兵衞が生國和泉の國へ訴あつて。大鳥佐賀右衞門といふ奴。詮議に下りしとの噂。こいつ根深い惡者。犬に犬を入れて嗅ぎ歩かすと聞

いた。縱へ一家であらうが。女房子であらうが。肌の赦されぬ時節。礒之丞殿も內にゐやるか。地出步かれぬ樣にいへと心を。フシ付ける折からに。地所目馴れぬ侍の編笠取つて內に入り。詞卒爾ながらお身が此家の亭主。一寸德兵衞といふのであらう。身共は泉州濱田の家中。介松主計といふ者。初對面でおぢやる。地赦しめされと座を占むれば。お辰はきよろ〳〵德兵衞は。聞及んだる名苗字に上足下し座を下り。詞成程拙者が一寸德兵衞。外珍しきお尋ね何の御用と手をつけば。外の儀でもない。此家に玉嶋兵太夫子息。礒之丞がお居やるであらう。迎に參つた逢せておくりやれ。これは思ひ寄らぬ仰。シテ御迎の筋は。善でござりまするか惡でござりまするか。ヲヽサ惡とも〳〵。礒之丞には盜賊といふ御不審が立つた。エそりや又どうして〳〵と。女房諸共仰

天すれば。戶棚の內にも身を揉む音。一間に立聞く礒之丞堪へ兼ねて飛んで出で。詞お久しや主計殿。シテ此礒之丞を盜賊とは何を以ておつしやる。御返答によつて浪人の切れ味。お目にかけると切刃を廻し急きに急いて詰めかくれば。ホヲまだ侍の性根殘つて珍重々々。盜賊の筋は御自分。國方でお預りの。千手院力王のお刀お藏の內にて紛失。ヒヤア。大鳥佐賀右衞門申上げるには。礒之丞が殿のお刀を盜んで賣代なし。傾城を受出したと惡說を言出し。お耳に入つて親兵太夫殿は物頭へお預け。拙者には御自分の有所を尋ね。急度詮議を糺せよと御上意。よもや左樣な不所存はあるまいなれども一生懸命。地サア返答あれといひかけられ。ハツト當惑さしもの德兵衞。礒之丞は猶赤面の覺えなき身の氣はうろ〳〵フシせんかた。盡きて切腹と。脇差拔くをお辰は

押止め。詞コレお前は狼狽(うろた)へてか。但しお身に覺えがあるか。言譯なされ言譯をと。地あせれば無念の齒を噛みしめ。詞わが傾城狂ひももと佐賀右衛門めがすゝめ。地とはいへ今更侍の武具馬具(ぶぐばぐ)を代(しろ)なして。身請したと言譯がどうなるものぞお内儀。これ皆お主と親の罰。思ひ知つての切腹と挩ぎ放すを主計は聲かけ。詞ヤア覺えなき身が切腹して。親迄恥辱を與へるかと 地一句で止(と)められ死もならず。ハツト フシばかりに忍び泣く心を察し。ホヲ 詞兎角力王のお刀。尋ね出すが身の言譯。まづそれ迄は貴殿は科人。其儘には差置かれず。イサ旅宿へ同道致さん。お立(たち)あれと引立てられ。地是非なくすご〳〵フシ立出づるを。地徳兵衛立寄り挩ぎ離し。詞コレお侍樣。此礒之丞殿は手前の客人(きやくじん)。詮議があらば此場でなされ。旅宿へやる事なりませぬと。地强(こは)ばりかゝれば柔(やはら)を入れ。詞ホ尤もさりながら。詮議を遂(と)ぐるは胡亂(うろん)の沙汰。礒之丞殿限りよもや左樣な不所存は。サ無いと思はゞ同道御無用。イヤサ。そこが主命。一旦御不審かゝりし者。見遁し置いてはお上(かみ)へ不忠。イヤそりやそつちの御勝手ばかり。友達どもより預つた若い人に無實をいひかけ。其證明(あかり)の立つ迄と連立つて貰うては。マヽ此徳兵衛が男が立たぬ。サアそこが了簡。お身は高が町人。身共は武士サ。其武士ぢやによつて猶ならぬ。何故々々。徳兵衛が町人か百姓ならば渡しもせまい。小見ずもいはうが相手が侍。ぢやによつて預つた人を渡した。刀が怖(こは)さといはれては。此男一生が廢(すた)る。それとも是非受取つて歸りたくば。コレ此首と一所に。ハテ一度死んで二度死なんと。地臺座据ゑたる大胡座(あぐら)命を塵とフシ投出したり。地流石の主計も道理には。當てる刃の刃金(はがね)もなまり。スヱテ暫し。思案し差したる刀鞘とも投出し。詞コレ徳兵衛。ハテ其方は性根魂の据(すわ)りし男。見込んで武士の一腰を預ける。コレ差添(さしぞへ)ばかりになつたれば身は町人。何と町人ぢやが。礒之丞を預けくれまいか。ムウすりや此一腰を。ハテ刀に恐れぬ其方(そち)が言譯。シタリ。御勝手に連れましてござりませ。スリヤ得心の召さつたの。ソレ女房ども日が暮れさうな小提燈でも上げませい。イヤそれには及ばぬ。地過分々々とハルフシ引連れ出づれば門まで見送り。詞申しお侍樣。ちと御無心がござりまする。何か〳〵。さる方から頼まれました。アノ此刀お買ひなされて下さりませ。ハテ此刀は其方へ。イヤ代物には礒之丞樣の。お力になつて地下さりませとフシ渡す心のしをらしさ。地いかな武士でもほろりと折れ。詞氣遣ひ召されな請取つたと。地あいた

腰をば塞ぎ行く。互の心丸鍔の。金の目貫に銀の緣。よい拵への鞘持と オクリ 頼みて。〽こそは別れ行く。ヘルフシ 黄昏過ぎて。とぼ／＼と女子供を引連れて。慥か爰らと釣船は門口そつとエ爰ぢや。詞 九郎兵衛の女房や息子の市松連れて下つた。徳兵衛マア悦びや。磯之丞殿がずかとやられた。かの仲買の彌市めは根がお尋ね者で。傳八が書置の手が違うたも何にもなしに。さらりつと事が濟む。小道具屋の孫右衛門殿の悦び。娘のお中と琴浦殿とを兄弟分にして。磯殿の出世を待つて居らるゝ。また此二人も何やかやで連れて下つた。おか様まめにあつたのと。地 取りまぜ咄せば女房お辰。詞 コレマアよう連れまして下らんした。おかち様市松殿も大きう成つて。ヤレ久しや珍しや。地 サアマアこちへと挨拶も スヱテ 身に付く様に思はれて。詞 ほんにマア何からお禮申しませうやら。連合九郎兵衛殿のお世話。詞では言盡されませぬ。そしてマアいよ／＼まめで居られますかな。まめなとも／＼マアちよつと逢はせませうと。地 立つを徳兵衛コリヤ待て女房。詞 逢はすとは誰にあはす。ハテ九郎コリヤ九郎兵衛は北國へ下つて爰には居ぬが。エいやさ假令居るにもせよ。一旦隙やつた女房に逢ふ様な未練者でない。元より此内には居ぬ。ナ居ぬ。いぬといふに氣を付けよと。地 呵り廻せばお辰も氣が付き。詞 ほんに私とした事が麁相々々。天に口とやらいへばナウ徳兵衛殿。それがすぐに壁に耳。ソレイナ。何にもいはれぬおかち様。アレあの戸棚の物いふ世の中ぢやわいなア。エそんならあの戸棚。コレ内儀デモ逢ふ事はならぬ此所には居ぬと。地 いはれておかちは遥々と逢ひに下りしかひもなく スヱテ 涙も。胸に迫りしが。地 緣を切つたは表向心の緣は切らねども。去り狀取つたが誤なら。詞 成程わたしは逢ひますまい。其代りに市松に逢つてやつて下さんせ。主も定めて逢ひたかろ。地 顔見せて下さんせ。お世話の上のお情と。歎けば三ぶも フシ しをれながら。詞 アレあの通りに常住泣いて居らるゝ。内儀はまだ得心もさせよいが。難儀をするは此坊主め。父様に逢ひたい／＼と泣いてばつかり居つて。此間は物も得喰ひ居らぬ。あんまり見る目が痛々しうて跡先思はず連れて下つた。内儀に逢はす事ならざ。此奴ばかりに逢うてやつてたもらぬか。ア、コレらつちもない此方までが同じ様に。その逢ひたい見たいを堪へるが。天の責網の代りに辛抱さしたがよい。イヤ徳兵衛。もう天の網がかゝつたわいの。ソリヤどうして。地 コレ是見てたもと市松が肌を脱がせば懐手錠。ヒ

ヤアこりや忰に手枷か。いとしや此子を下手人かと。お辰が泣聲漏れ聞く戸棚。九郎兵衛は身も世もあられず。我が子に憂目をかきよりはと戸を押破るをコリヤコリヤ〳〵。詞爰を堪へるが男づくの義理合。この徳兵衛が志を破るのかと。地聲かけられて出もならず。是非もなき身の悔泣き。フシ胸に。涙ぞせきのぼす。地お辰は市松撫でさすり。詞いとしやの不自由にあらう。他人の私さへ悲しいもの二親の心はどの様にあらうぞ。徳兵衛殿了簡付けてたつた一目。イヤその手枷猶合點がいかぬ。舅殺しにさすまい爲女房と縁切らした。スリヤ義平次とはあかの他人。他人を殺した九郎兵衛が子までに難儀がかゝるとは。三ぶ殿此方縁切つた事申上げずか。申上げた段ではないが。下司の智慧は跡の悔。義平次を殺したは六月の十一日の夜。暇の狀は七日後。やつぱり舅殺しになつて市松へ手錠。あんまり見る目がかはいさに。忰を媒鳥にして九郎兵衛を尋出しませうとお願ひ申して。連れて下つた共心は。いつそ親子三人連れで筑紫の果へもやる思案。預つて來た俺が難儀はコレ白髮首一つ。願うた後生はなし是も慈悲。そなたも慈悲どうぞ逢はしてやつてたも〳〵。地頼む〳〵と親子と倶に餘儀なくいふに徳兵衛は。ずつと立つて幸ひと湯玉の立つ茶びん提げ。詞コレおかち殿三ぶ殿。此内に九郎兵衛が居ぬといふ證據。見て疑を晴らされよと。地たぎりし沸湯を縁側へざつと流せば下よりも。あつや〳〵と迯げ出るこつぱ。すかさず駈け寄りそつ首掴み。詞コレ見られたか三ぶ殿。最前から蟲の音が止つた故睨み付けて置いた。飛脚にうせたも此奴であろと。地引つ擔いて門柱へ打付けんとする所へ。又も飛出るなまの八。コリヤさせぬはと取付くを汝も踞んで居つたかと。揉合ふ内にこつぱは遁れ。九郎兵衛が有所は慥に戸棚の内と呼ばはつて駈け行くを。それいはしてはと八を蹴飛ばし。追駈け行けば遣るまじと續いて走るなまの八。それ又やらじと釣船も フシカヽリ跡を慕うて駈け行く。二人の女房はあぶ〳〵とお辰は猶も夫が氣遣。おかち樣留守頼むと言捨て小褄引つ挾み。フシ飛ぶが如くに行く跡に。地おかちはうろ〳〵あたりを見廻し。人影なきを幸ひと市松連れて戸棚の戸を。開けんとすれば錠下りたり。エあんまりな用心と。戸をこと〳〵打叩き。詞九郎兵衛殿まめで居て下んしたの。此子も元より逢ひたがる。わしも逢うて一通り言譯せねば心が濟まぬ。地あたりに人もござんせぬ。戸棚の戸を引放し顏見せて下んせと。フシいふも涙のしやくり聲。地戸棚の

内には泣く音を隠し。詞市松よ。汝や父が代りに手がねを打たれ。さぞ腕が抜ける様にあらうな。さういふ難儀がかゝろと知つたら何で大坂を立退かうぞ。今では徳兵衛への義理があつて。薄紙一重の戸も破られず。此家で命を捨てる事もならぬ。とゝが顔が見たくば。獄門にかゝつて見るか。縄かゝつて逢ふより外逢ふ事もあるまい。おかち坊主めが手は腫れはせぬか。イエ〳〵。ちつとばかり水ぶくれに。かはいや喰ひ入る様にあらう。きつう痛むとはいはぬか。次第に緊つて痛むかして。此中はしく〳〵泣いてばつかり居ます。ソレ市松父様にちやつと物を言やいのと。地戸棚の傍へ押しやれば。詞コレとゝ様かゝ様と一所に内へ戻つて下され。マア顔見せて下されと。地戸棚に縋れど手は叶はず。あせり歎くを二親は内と外との諸涙。堪へ兼ねて思はずもわつとばかりに泣き叫ぶ。地早廻りくる知らせの刻限こつぱが知らせに捕手の人数。表口より所の代官。裏口よりは大鳥佐賀右衛門。捕つた〳〵と亂れ入り。詞脇は構はず戸棚を圍ひ。九郎兵衛が在所はこの内。地戸を打ちめげと玄翁掛矢。ナウコレ待つてと駈け寄る女房。家來の大勢手ごめにし情なくも打碎く。二枚戸碎けてはら〳〵とすはやと思へば内は明きがら。詞南無三寶後を切つて迯げたるぞ。地續けや來れと佐賀右衛門。追ひ駈け行けば女房も死なば夫と諸共と。市松連れて跡に付き裏道さして 三重へ駈けり行く 地裏は大藪十重二十重。追つ取り巻きし中にもこつぱ。なまの八が待ちかけて遁れぬ覺悟と捕りかけたり。九郎兵衛は得手に帆。儕等二人を待兼ねしと左手と右手に引受けて。小枕返しにどつさりどさり。加勢が捕つたと取付くを何ひろぐと捻上げて。弱腰ぽんと命の蹴上げ。其間にかゝる惡者二人。嬲殺しと眉間肩先斬られて土手をころ〳〵。這上れば切付くる。むしやぶり付けば薙仆す訴人の褒美に此世の暇。冥土へうせいと兩人を削いだり切つたりはつつたり。嬲殺しと止めの刀其間に大勢立ちかゝるを。薙ぎ立て〳〵切りまくり フシ藪の内へぞ身を忍ぶ。地かゝる騒ぎの折も折引かれ來る礒之丞。言譯立たず縛り繩後にしを〳〵徳兵衛釣船。願ひの揉手も聞入れず。詞國へ引いた上の事主計が力に及ばずと。地引立て通るを佐賀右衛門それと見つけて小指出で。詞是は〳〵主計殿。お刀の盗人召捕られしは重疊々々。しかし遙々と國方まで引連れらるゝは國土の費。地首にしてお歸りと。フシ日比の意趣を持ちかける。詞イヤまだ盗賊の筋治定致さず。さるによつて召連れると。地いは

せも立てずイヤサそれは手緩し〳〵。詞盗人たけ〴〵しいといつまでも諍ふもの。コリヤ拙者にお任せと地藪蔭へ引据ゑさせ。詞こんな奴は手ばしかう。臺座離して仕舞ふがよいと。地刀するりと抜放し振上げ丁ど討つ所を。主計はすかさず其腕捻上げ抜身捥取り。ソレ礒之丞其刀吟味あれと。地いふにはつと空繩はづし明りに透して。詞ヒヤアこれこそ千手院力王のお刀。扨こそ知れた盗賊めと。地引擶いてのめらすれば。徳兵衛釣船踏付け〳〵。小うまう手盛をまゐつたと。フシ三寸繩に締上げる。地主計はやがて聲張上げ。詞ヤア〳〵團七九郎兵衛。藪内にて様子は見るべし。殿のお刀尋出したる功に依つて。礒之丞は先知に歸る。さすれば其方が願ひもあるまじ。サア尋常に繩かゝれと。地呼ばはる聲を聞くより九郎兵衛。妻子を引連れ揺ぎ出で。詞

ア、忝き御差配。もはや浮世に心も殘らず。地急いで繩と兩手を廻せばヲさもあらん。詞幸ひ繩かける役人地是にありと立寄つて。市松が手がねを赦し。詞コリヤ徳兵衛。伜は女房に付け離縁致したと申上げても。日限の相違にてお上の疑ひ晴れず。申譯の爲母が代りに。市松に繩かけさせよ。コリヤ〳〵ヤイ但しは竹鋸を持たするかと。地是非なき仰に目顔をしかめ。詞コリヤ市松父に繩かけてお目にかけい。ほんの是が親子の別れと。地涙ながらに捕繩持たせばおかちはわつと泣くばかり。市松はうろ〳〵と。詞おりやそんな事いや〳〵〳〵。父様と連立つて早う去にたい母様と。地縋り歎けばしやくり上げ。詞それが叶ふ程ならば私に如才があろかいのと。地親子の歎き九郎兵衛が身にしみ渡り人々も。フシ堪へ兼ねたるばかりなり。地時刻延びると徳兵衛は

無理に市松引立てて。繩を手繰つて後より兩手を持添へ。詞サア九郎兵衛。これが親子の因果の瀬戸。かすり疵でも負せる程に働くが縁切つた印。此方にも遠慮はない。地サアこいやつと捕りかけたり。詞ヲ、これも過去の約束事。廻る報は親子の絆。切つた印を是見よと。地抜身を振上げ見交はす顏。父様怖い伯父様爰をはなしてと。身を揉みあせるは修羅道のフシ苦患もかくやとあさまし。地隙間を見て無理やりにしがみ付かせば九郎兵衛も。程よくどつかと大地に仆れ。抑へて繩をかけるも涙わつと取付く女房を。押退け突退け介松主計。詞佐賀右衛門と諸共に國へ引いての采配と。地引立てさせる天の網かゝりや繫がる礒之丞。我が身にかへて命乞追付けめでたき吉左右と。情も深き備中の。玉嶋にて徳兵衛が團七九郎兵衛捕つたりしと。言傳へしは義理

の縄。情の縄と怨の縄。皆引連れて和泉の國濱田の。館へ立歸る

延享第二孟秋十六日

作者　並木千柳
竹田小出雲
三好松洛

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鉞弟子如縷因吾儕所傳泝先師之源幸甚

竹本義太夫高弟

予以著述之原本校合一過可爲正本者也

竹田出雲掾淸定

京二條通寺町西へ入丁

正本屋　山本九兵衞版

大坂高麗橋二丁目出店

山本九右衞門版

菅原傳授手習鑑

竹田出雲作

序詞蒼々たる姑射の松化して綽約の美人と顯はれ。珊々たる羅浮山の梅。夢に清麗の佳人となる。皆これ擬議して變化をなす。豈誠の木精ならんや。唐土ばかりか日の本にも人を以て名付くるに。松と呼び。梅といひ。或は櫻に准ふれば花にも情天滿つる。大自在天神の御自愛ありし御神詠。オロシへ末世に傳へて。有難し。地神いまだ人臣にまします時。菅原の道眞と申し奉り。文學に達し筆道の奥儀を極め給へば。才學智德兼備はり右大臣に推任あり。權威にはびこる左大臣。藤原の時平に座を列ね。菅丞相と敬はれ。君を守護し奉らる フシ延喜の。御代ぞ豐なる。地然るに主上この程より。御風の心地とて病の床に臥し給ふ。天顏を伺ひ奉らんと。御弟宮無品齋世親王。參內の御共には院の廳の官人。判官代輝國 フシ階下に。伺候仕れば。地席を正して丞相に打向はせ給ひ。詞今朝院參致せし所法皇仰せある樣は。當今の御惱日を追つて快然ならず。急ぎ齋世に參內し龍顏を拜し御樣子。ありの儘に告知らせよと判官代を相添へらる。御容躰いかゞ渡らせ給ふやらん。地菅丞相正笏あり。詞さして御變りもなく候。委しくは道眞に御尋ねあらんよりは。直に天機を伺ひ給へ然らば左樣に致さんと。時平にも挨拶ありオクリ常寧殿に入り給ふ。地かゝる所へ式部省の下司。春藤玄番允友景罷出で庭上に頭を下げ。詞今度渤海國より來朝せし唐僧天蘭敬が願ひには。唐土の徽宗皇帝。當今の聖德を傳へ聞き。何卒天顏を拜し奉り。御姿を畵に寫し歸國せよ。その畵を則ち日本の帝と思ひ對面せんとの望みにつき。數々の饋物。地則ちこれに候と庭上に フシ飾らすれば。地菅丞相聞き給ひ。詞コハ珍らかなる唐僧が願ひ。當今延喜の帝。聖王にてまします事隱れなく。御姿を拜せんと唐の帝の望みは。直にわが國の譽なれども。地折惡しき天子の御惱ありの儘に云聞かせ。音物も唐僧も唐土へ歸されんや。時平の了簡ましますかと仰せに冠打振つて。詞さうでない道眞。御病氣と申し聞かしてもよも實には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも。跛か瞎か缺居か塞か。天皇らしうない形故。病氣といふは間に合ひといはるゝは日本の疵。面倒な事いはさんより。御形代を

拵へ天皇と僞つて。唐僧に拝さすれば何事なら事は濟む。誰彼といはんよりこの時平が代りを勤め。地袞龍の御衣を着し。天子になつて對面せんと一口に言ひ放す フシ謀叛の。兆ぞ恐ろしき。地判官代輝國階の下にづつと寄り。詞こと新しき嚴命。唐土の天蘭敬は。時平公の御姿を寫しには參るまじ。眥上つて頤廣く。頬骨高き延喜の帝。唐僧がよも呑込むまい。神武以來ひとりの惡王。武烈天皇の名代ならば時平公が最究竟。地當今の御代りとは鹿を馬との出そこない。ハハ、、、御無用と嘲笑ふ。詞ヤア舌長し輝國退去れやつと呵りつけ。ヤア／＼玄番。天蘭敬を内裏へ伴へ。地天子にはこの時平用意せんと立つ所を。菅丞相とゞめ給ひ。詞時平の仰せは天下のため御形代とはさる事なれども。もしはかの僧相人にて。君臣の相をよく見るならば。王孫にあらぬ臣下と知るべし。地其時いかゞ仕らんと。理窟に時平行當れば三善の淸行進み出で。詞菅丞相の詞とも覺えず。かの坊主を相人とは。あんまりな先ぐり念に念が入過ぎる。左中辨希世殿さうぢやないかと差出口。イヤこれ念に念を入れてさへ過ち仕落ちはあるならひ。假初ならぬ唐土人御對面の事なれば。地輕々しく計らはれずと。フシ暫しが間御思案あり。詞所詮天子の御かはり人臣はなりがたし。幸ひ御同腹の御弟宮。齋世の親王を今日一日天子と仰ぎ。御姿書を唐土まで傳へて恥じぬ御粧ひ。此儀いかゞと理にかなふ。詞に違ふ時平が謀計目と目を三善の淸行も。フシ口あんごりと開き居たる。ハルフシ玉簾深き。一間より。伊豫の内侍立出で給ひ。詞兩臣の御諍ひ我が君委しく聞召され。朕が代りは齋世の宮と直々の勅諚にて。地只今御衣を召替へ給ふ。此由申し傳へよとの仰せにて候とフシ内侍は奥に入り給ふ。地時平は俄にむつと顔輝國が悦喜の眉ひらく扉は日花門。玄番允が案内にて。渤海國の僧天蘭敬。倭朝にかはる衣の衫。フシ庭に覆ひて畏まる。詞ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな。龍顔を寫し奉らんとの願ひ。叶ふは汝が身の大慶有難く存じ奉れと。地時平が指圖に警蹕の聲諸共に高々と。御簾巻上ぐる其内には。弟宮齋世の親王金巾子の冠を正し。御衣さわやかに見え給ふ實に王孫のしるしとて。唐僧はじめ座列の官人 フシあつと。平伏し敬へり。地天蘭敬やう／＼頭を上げ。玉體をつく／＼と拜し奉り。詞ハ、ア天晴聖主候や。我が國の徽宗皇帝慕はるゝも理なり。地三十二相備はつていはん方なき御形。詞勿體なくも僕が筆に寫し奉らんと。ハルフシ用意の畫絹硯箱。檜木燒筆さら／＼と。眉

のかゝり額際見ては寫し。小オクリ書いては拜し。御笏の持たせやう御衣の召ぶり違ひなく。卽席書の速かさ顏輝が子孫かたゞならぬ フシ畫筆の妙を顯はせり。地判官代は差心得捧物取納むれば。重ねて俸祿賜びてんぞ旅館に歸れと道眞の。下知を請繼ぐ春藤玄番。お暇申させ唐僧をオクリ伴ひてこそ退出す。地歸るを待つて時平大臣玉座に駈け寄り。齋世の宮の肩先摑んで引摺り出し。御衣も冠もかなぐり〳〵。詞唐人が歸つたれば暫くも着せては置かれぬ。九位でもない無位無官に。着せた裝束この冠穢れた同然。內裏に置かず我が預かる。今日の次第は右大臣奏聞せられよ身は退出。地罷り歸ると御衣冠奪取つて行かんとす。道眞立つて引取り給ひ。詞聊爾なり時平。勅もなき御衣冠 私に持歸り。過つて謀叛の名を取り給ふやと。地何心なく身の爲をいは

るゝ身には胸に釘。フシ頭ゆがめて閉口す。地齋世の宮菅丞相に向はせ給ひ。詞天子序の勅諚には。老少不定極りなし。何時しらぬ世の中に名ばかり殘すは其身の爲。道を殘すは末世の爲。妙を得たる筆の道傳ふべき總領は女子なれば是非に及ばず。稚ければ弟の菅秀才にも傳 ふまじ。弟子數多ある菅丞相器量を擇みて。地筆道の奧儀を授け長き世の。寶とせよとの御事と。仰せの中に左中辨宮の前へずつと出で。菅丞相の弟子のうち位とい ひ器用といひ。希世に上越す手書はなし。地幸ひ是にて傳授あれと。御申付け下さるべしと言はせも敢ず。菅丞相につこと打笑み。詞內裏にある時は我が傍輩。筆法は我が弟子なれば。此道において師匠を差置き。我儘の願ひ致されなと。地誡の詞嚴々と襟を繕ひ勅答には。詞有難き君の惠み。我が筆法の大事には。神代の文字

を傳ふる故七日の 齋 七座の幣。神道加持に唐倭。文字は何萬何千にも 地我が筆道に。フシ洩らしはなし。詞それとも知らず此處かしこに手習ふ子供も皆我が弟子。詞今日より私宅に閉籠り。擇出して器量の弟子に。筆傳授け申すべしと。地宣ふ詞は今の世に傳へて殘る筆道の。道は御名に顯はれて。眞なるかな誠なる君が。御代こそ大三重へ豐なれ。地引捨つる ヘルフシ車は松に輪を休め。フシ舍人二人は肘枕。地二輛並べし御所車かたへは藤原かたへは菅原。道眞公の名代は左中辨希世。時平公の代參は三善の淸行。加茂明神へ御惱の祈願。神子が湯立の其間眠るむまさは加茂堤。フシ夢に夢をや結ぶらん。地松吹く風に菅原の舍人。梅王丸目を覺し。詞コリヤやい松王丸。そちが主の時平公は短氣者でも根が大鳥。名代にわせた淸行殿は短いくせに根が惡者。

呼び使を請けぬ内目を覺して往かいでな。ホウ梅王のいはるゝ事わいの。こなたの主の名代に來た希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫もすき〴〵とあの和郎を弟子にしたり。代參におこしたりなさるゝ。菅丞相のお心が知りたい。イヤそりや其方達が小い了簡とは違ふ。聖人の胸の廣さは。此方等が身にも覺えのある事。齋世の宮樣の車を挽く。櫻丸と汝とおれと三人は。世に稀な三つ子。顏と心はかはつても着物は三人一緒。ひよんな者產んだと親父が氣の毒に思うたをお聞きなされ。三つ子は天下泰平の相。舍人にすれば天子の守りとなる。成人さして牛飼に差上げよと。菅丞相樣のお執成で御扶持まで下されꓸ親四郎九郎殿は今佐太村の御領分に。御寵愛の梅櫻松を預り。安樂に暮して居らるゝ。其御寵愛の三木の名を我々にお付けなされ。おれを兄のお心でか梅王丸とお呼びなされて召使はる。其方は松王丸櫻丸は宮の舍人。烏帽子親といふ御恩のお方。地家を隔て奉公するとも。必ず徒疎かに思はぬがよいぞよ。詞ア、ぐど〳〵と長談義說く人。もう齋世の宮もお參りなされ。牛休めに櫻丸も來さうなもの。何ぞ用があるか。ハテ佐太村の親父殿から。來月は七十の賀を祝ふ程に。三女夫連で來いと人おこされた。其事いはうと思うて。ソリヤ銘々に人が來てよう知つてゐる。思へば親父殿は負はず借らずに子三人と。地果報な人ではあるわいなアと。フシ兄弟㖨の其中へ。地同じ胤腹一時に生れて年も同年。どれが兄とも弟とも梅と松とに櫻丸。三幅對の車ひき小陰に一輛引捨てて。堤の上から是は〳〵。詞二人ともゆつくりとして居らるゝ。御神事も早や半過き。呼立てられぬうちに往たらよかろと。地眞顏でいへば梅王丸。詞御神事が濟んだら宮樣からお立であろが。其方や又爰へ何しにきた。イヤ此方の宮樣は神司の方で。御休息ある故お立の程がしれぬ。此方衆の乘せて來た御名代の衆は。禁廷の御用があるとて立騷いで居たぞや。地油斷して呵られまいといふに松王いか樣。詞役なしの宮樣と時平公のお眼鑑で。御用繁き淸行樣とは違ふ。何時知れぬいざ往こと。地車にかゝればヤレ待て松王。詞淸行樣がお立あれば。此梅王がお供した希世の卿も同然。萬一お立でない時は。あの大勢の群集の中へ二輛の車を引きかけて。怪我さしても損ねても。不調法は舍人の誤り。地一走り往て樣子を見て取りに歸る迄の事。休んだ代りぢやサア來いと。引連れ立つて兩人はフシ宮居の方へ走り行く。地跡見送りて櫻丸。詞ハ、、、一ぱい食うて往たわ〳〵と。地獨言して

相圖の手拍手。招けば招かれ戀草の。露踏分けて十五六。フシ被の風の。やさしきは。地菅丞相の御娘。スヱテ刈屋姫とて色も小オクリ香も文は。父御のお家柄。長地ロ説き落して宮様に逢せませんと跡につく供は八重とて花めきし。櫻丸が自慢の女房先へ廻りてコレこちのお人。首尾はよいかと問へば點頭き。詞よいとも〳〵。今日此加茂堤はお車の休所。人どめして一人も通さぬ鼠の子もない所と思ひ。宮様をそびき出して來た所に。梅王丸や松王がどんぐり目玉にほつと草臥れ。一生につかぬ嘘をまた吐いてまんまと散らして仕まうた。地姫君様耻しさうな顔せずともお出で〳〵。詞ドリヤ開帳仕らうと。地車の御簾を引上ぐれば。齋世の宮は面はゆげに。姫は猶しも顔見合せ。フシにつと笑うて袖覆ふ。詞サアこゝらが下々と違うて。飛付かして輕業もさせにくい。

女房ども。暗闇にしたいなア。何のいな晝ぢやとて結構な車の內。エ、すばやい奴ではあるぞ。地我等は暫しお暇と。フシ木蔭へはいればそれ〳〵。こんな時には男は邪魔。サお姫様。申上げたい事あらば遠慮なしにおつしやれと。突き遣られて刈屋姫。千束の文のお返事に首尾あらばとの御すさみ有難いやら嬉しいやら今日の此首尾待兼ねて。お叱り受けに參りしと フシ袂くはへて宣へば。地齋世の宮も十七のいとまだ若き初戀に。何と言寄る品もなう。詞櫻丸がいかい世話。文見る度にいやまさり逢ひたかつたによう こそ〳〵。地撫春風で寒かろと。仰せは姫の身にこたへ春風よりも戀風が フシぞつと身にしむばかりなり。地車の陰より櫻丸ぬつと首出しコリヤ女房。詞我が身抓つて人の痛さ。おりや先刻にから死脈が打つ。地早う配劑しをらぬかとせり立

てられてヲそれ〳〵。春風でお寒いとおつしやる。憚りながら御車を暫しの内の風凌ぎ。御免ありてと姫君を。無理に抱上げ押入るれば。詞アコレ是は何しやる。地勿體ないと云ひつゝも車の內へ入り給へば。差心得て櫻丸 フシさらば閉帳と御簾おろす。地內には宮の御聲にて嬉しいぞやとのお詞と。詞神詣の御車で罸が當ろとシヤ儘よの 地睦言聞いて夫婦は飛退き。詞女房ども。たまらぬ〳〵。隣り嚴しうてひよんな 地寶を儲けたと フシ身もだえすれば。詞ヲこれ聞えるわいの。お二人共に御機嫌よう嬉しい事ではごんせんか。イヤもうあんまり御機嫌がよ過ぎて近所まで雛儀がかゝつた。とはいふものの有様はそちが働き。ようマア尋ね逢うたな。こなさんの敎の通り內裏上﨟の形にやつし。社家の內へずつといて姫君のお傍へ通り。櫻丸が女房八重でご

さりまするとФ申上げたれば。彼方にも待兼ねてござつたかして。ようおぢやつたもういこかと。地腰元衆を待たして置いて裏道から忍んでお出。ヲ、詞其筈其筈。此中から手耦して。菅丞相様の筆法傳授に取籠つてござるを幸ひ。お袋様へ神參りと願はせ。お供の衆には口薬水撒くやうに飲まして置いた。ヤ其水で思ひ出した。追付お手洗水がいろぞよ。何いはんすやら。あのおぼこなお二人。うまいやつではある。手洗は愚かお行水がいろも知れぬ。そんならつい此川水をア、イヤコリヤ。雨あがりで堤が滑る。怪我さしては晩から俺が不自由な。神前の水汲んで來い。ソリヤまあどうやら勿躰ない大事ない〳〵。王は十善神は九善。其王様の弟御九善半ちや往て來いと。地せり立てられて女房はオクリ神前へさして汲みに行く。地跡は氣休め一休みと思ふ所へ三善の清行。官人仕丁に十手持たせ裝束卷上げ駈來り。ヤア詞それにをる櫻丸。おのれ最前齋世の宮を奉幣も濟まぬうち連退いたとの風聞。何處へ供したサア吐かせと。地せちがひかゝれば存ぜぬ〳〵。詞下として上の事。其方をとつくと地お尋ねと言はせも立てずヤア吐かすまい。詞豫て汝が取持にて物くさい事聞いて居る。取分け今日は御惱平癒の神いさめ。其場所へ來て不淨があると。親王でも東宮でも急度捕へて罪に行ふ。有様にぬかさずば引捕へて拷問するそれ。地繩かけよと下知の下おつ取卷くを身構し。詞知らぬというたら金輪際。奈落の底から天まで知らぬ。聊爾召さると片つぱし。下手のお鞠の蹴て〳〵蹴踏む。地足の鹽梅見せうかとぐつと踏出す兩足はフシ顏に似合はぬ古木なり。地シヤ下郎めが味をやる。最前から見る所が車の内に人こそあれ。御簾引斷り檢めよといふに隨ひ立寄るところを。首筋摑んで投退け投退け。詞車は舍人が預り物命があらば寄つて見よと。地かゝるを蹴飛ばし跳飛ばし十手捥取り片つぱしフシ薙立て〳〵追うて行く。地其間に宮と姫君は人に見られて叶はじと。車の内より飛び下り〳〵さすが若氣の一筋に。迯れて旅のかり衣フシ何國ともなく落ち給ふ。地隙間を見て淸行が取つて返して車の内。引明け見れば内は空殼。詞南無三寶見違へた。舍人めが戻つたら大抵では地あるまいと。下道さして逃ぐる跡。間もなく駈來る櫻丸。御二方の見えぬに悑り。車を見れば宮の書置。詞何々。見付けられて辱を受けうより立退くとある文章に。地ハツト驚き胸は板イデ。追付いて御供と駈行く向うへ女房八重。詞サアこれお手洗汲んで來たと地見せるを撥退けナニ手洗どこ

ろか。詞清行めが車の内詮議せんと來りし故。見付けられじと二方は何國ともなう落ちなされた。ヤア 地そりやマア眞かと女房はびつくりぐわつたり水桶落し。詞シテまあ此方はこりやどこへ。ヤア何處どころか元姫君は菅家の御養子。實母は河内土師の里。菅丞相の御伯母君。先づ此方へ志し跡を慕ひ奉る。汝はあの御車を宮の御所へ引いて行け。捨置いては後日の咎め。成程さうぢやこな様の。地姿に扮して引いて行こ。ドレ白張と受取つて。詞跡案じずとも行かしやんせ。地ヲヲ合點と白砂蹴立て フシ飛ぶが如くに駈り行く。地八重は頓て夫の姿白張肩に引つかけて。車の牛を引直し。させいほうせい精一ぱい。引けども遲き牛の足。エどんくさいと後から。押せば車もくるくると。詞廻る月日は不成就日か。お二人樣の凶會日か夫の爲には十方暮。地鬼宿車を押しかけて。天赦天一天上のお首尾もよかれ神よしと。祈る心は八專の。黑日に間日の斑牛。追立ててこそ三重へ立歸る。上根とハルフシ地稽古と好と三つの中。好きこそ物の上手とは。藝能修行教への金言。公務の暇明暮に好ませ給へる道眞公。堂上堂下はいふに及ばず。武家町人に至る迄。風儀を慕ふ御門人 フシ數も限りもなき中に。地左中辨平の希世手習稽古ふる兄弟子。今度筆法御傳授は指詰我等に極りしと。勝手覺えし御殿の眞中。朝の夜から机を直し フシ烟草よ茶よと呼立つる。地聲も屆かぬ奥勤め女中頭が聞咎め。詞コレお次に誰も居やらぬか。希世樣の御用があると地呼次ぐ局に不足顏。コレ詞手の皮がひりつく程叩いてもしゝらしん。ムウ合點。顏出しせぬは每日來るを面倒がり。言合せて鼻あかすのか。今日で七日此手習。おれが爲ばかりぢやない。御子息の菅秀才は年弱七つ。傳授所へ行かぬによつて。此希世が傳授して。菅秀才の成人以後。身共から又傳授さすれば主の奉公も同じ事。ハツポというて廻る筈。總じてこなたが生溫こい。コレ勝野よう心得や。そなた衆の不調法。こける所は局が迷惑。何おつしやろとあい〳〵とナ。申し希世樣。成程さうぢやよい了簡。每日々々氣を詰めるも菅原の家の爲。地今日も亦此清書 フシお目にかけてと差出す。詞イヤ今日は御赦され。赦せとはなぜ〳〵。ハアテ幾度お目にかけましても。丞相樣の氣に入らねは。お手の業ではござるまい。取次の仕樣の惡さ手がはりに今日は勝野。イヤこれさうはならぬ。筆法傳授も神道の秘密事。學問所の注連が目に見えぬか。油こい女子はやられぬ。昨日迄は氣に入らずと。此清書は格別筆先に肉を持たせ。天晴

骨髓を書き得たれば。地傳授はする〳〵伸切つて往てたもれと。フシ頼むに是非なく立つて行く。詞コレ勝野。局のいはれたあい〳〵を合點か。地アイ心得てをりまする。詞エ、忝い幸ひ邊に人もなし福德の三年め。地屏風の陰でついちよこ〳〵と。取る手を振切りエ、いやらしい。無體な事なさるゝと聲立てるが合點か。詞ヲ、合點ぢや。聲立てるが怖いとて。しかけた戀人叶ひをれと。地ほうど抱へて連れて行く。アレ〳〵申し。詞申しとは誰に申し。ア、御臺様や若君様申し〳〵といふ聲の。フシ洩れ聞えてや。菅丞相の御臺所。若君の御手を引立て出で給へば。希世は仰天是は〳〵惡い所へよう御出と手持不沙汰も減らず口。詞勝野に癪の療治を頼まれ。取りにかゝつて斯くの仕合。御臺にも御存じの如く萬能に達せし某。世に希な器用者とて。希世と付けたは親共が自慢の名。其例は此若君年よりは御發明。菅秀才と呼び給ふも。秀はひいづる。才は才智の才を取つて。菅家の公達菅秀才。地あら〳〵謂フシかくの如し。地我等はあんまり器用過ぎ。取損うた按摩のしだら。御臺所の思召が。詞アアその言譯に及びませぬ。日頃の行儀知つて居る。地そんな疑ひ何のいなと。フシ物に障らぬ御挨拶。詞ア、それ聞いて落付いた。今のしだらの序ながらお尋ね申す事がある。御息女の刈屋姫。齋世の君とにやほやした世間の取沙汰。今日で七日相詰める。御所には何の沙汰もない虛說かと存ずれば。刈屋姫の御殿は明家。御詮議もなされぬは親御達も合點の上。駈落でがなござるかと。地問はるゝ辛さは御臺所スヱテ暫し。返事もなかりしが。地隱しても隱されぬさがなき人の口の端に。かゝるも是非なき刈屋姫。齋世の君はなほ以て大切なお身の上。互に忍ぶ戀路の車廻り逢瀬もそこ〳〵に。事顯はれしを恥かしく思召され。詞御所へお歸りなされぬものとあつて常の御方ならねば。宮様附々の人々がそれなりけりにして置くまい。又此方の娘の事は希世様も知つての通り。ほんの母様は河内國。土師村の覺壽様とて。連合の爲には伯母御様。菅秀才を設けぬさき乞請けて養子娘。此御所へ戻られず伯母様方へと心づき。自ら內證で尋ねに人を遣はした。此一落は今日が日迄わざと父御へ。フシ知らしませぬ。地それも何故勅諚にて筆法傳授七日のうち。參內やめて取籠り世の取沙汰は何にも知らず。傳授も過ぎて聞き給はゞ憮やびつくりし給はんと。彼方此方を思ひやる心を推量してたべと フシ案じ給ふぞ理なる。地內玄關の奏者番一間此方に畏り。詞先年お館に相勤めし武部

源藏定胤。尋ね參れとの仰せにより。此間所々方々吟味致して。漸う只今夫婦一所に參りたり。是へ通し申さんやと 地伺へば御臺所。詞ヲ、待兼ねし源藏夫婦。早々此處へ參れといへ。コレ菅秀才。源藏に逢ふ間爰にゐては氣が盡けう。勝野を奥へ連れて往て機嫌よう遊ばしやれ。希世樣にも暫しが間。ヲ、此處にゐて邪魔にならば。地所替仕らんとヲクリ續いて。ヘ奥にぞ入りにける。地人知れずとハルフシ思ひ初めしが主親の。不興を請ける種となり。夫婦が二世の契より三世の御恩辨へぬ。不義より御所を追出されさむい暮しを素浪人。尾羽打枯れし武部夫婦。今日のお召は心の優曇華開く襖の内外まで。勝手は今に忘れねど身の誤りに氣おくれし。本フシ膝もわな〱窺ひ足。御臺の御座を見るよりも。ハツト畏れて飛びしさりフシ蹲りたるばかりなり。地ヤア珍らしや源藏夫婦。詞連合の氣に背き。此御所を出やつたを數へればもう四年。日頃人を捨て給はず。慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切つてはいかな事見返らぬ夫のお心。叶はぬ事と思ひの外。源藏に參れとある御用の樣子。何かは知らぬか氣遣な事ではあるまい定めて吉左右。ヤア自らがいふ事ばかり。さぞ待兼ねでござるであろ。地源藏夫婦が參りしと誰そ奥へお知らせ申しや。サア詞二人共に顔も上げ近う寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ近う〱。年月の浪人住居。渡世が苦になつたか昔の面影どこへやら。地源藏が着てゐやるは荒々しき下々の着物。戸浪はそれに引きかへて。小袖縫箔さすがに女子の嗜か。二人の中に子も出來たかと問はれて戸浪は。フシ有がた涙。詞冥加至極もないお詞。主人のお目をくらませし罰が當つて苦勞の世渡。地夫婦が着替も一つ賣り二つも三つも朝夕の。煙の代に成果てし。やう〱殘せし此小袖は。御臺樣の下されし御恩を忘れぬ賣殘。地髮の飾りの鼈甲もいつかは柞の引櫛と變りはてたる共稼。詞連合は布子の上。糊立たぬ麻上下もけふ一日の損料借。ア、おはもじ。お上に御存じない事まで。身の耻顯はす錆刀。今日まで人手に渡さぬ武士の冥加。アイ。女房が申上げます通り。この態になりさがれば。地一入昔の不義放埒。思ひ廻せば主人の罰悔むに詮方なき仕合と。夫婦諸共おろ〱涙。地折から局は奥より立出で。詞お學問所へ召しますは源藏殿只一人。御用濟んでお手の鳴るまで。御臺樣にもお出はならぬとの仰せられでござります。成程々々心得た。フシ源藏は局と同道。地戸浪はこちへとフシ入り給ふ。地只今御前へ召出さるゝ源藏が身の嬉しさ怖さ。局はかくと申上げ立

たる障子明け渡せば。恭しく注連引きはへ。常に變りし白木の机。欣然として坐し給ふ。凡人ならざる御有様畏れ敬ふ源藏が。五體の汗は布子を通し フシ肩衣絞るばかりなり。地や丶あつて仰せには。詞さりがたき仔細ありて汝が行方を尋ねしに。住所さだかならず。やう〳〵昨日在所を求め。今の對面滿足せり。その方儀は幼少より我が膝元に奉公し。地天性好いたる筆の道。詞好くに上り習ふに覺え。古き弟子ども追拔き。あつぱれ手書になるべしと。思ひの外に主從の緣まで切つてその風體。筆取る事も忘れつらんと。地仰せに猶も恐れ入り。詞御返答申すは憚りながら。前髮立の時分よりお傍近う召使はれ。手を書くことは藝の司。書けよ習へと御意なされ。御奉公の間々書き覺えたと申すも慮外。蚯蚓ののたくつたやうに書く手でも藝は身を助けるとやら。浪人の生業鳴瀧村で子供を集め。手習指南仕り今日まで。夫婦が命毛筆先に助けられ。淸書の直し字毎日書けども上らぬ手跡。御尋ねに預かる程身の不器用と御勘當。悔むに詮方なき仕合せと地歎くをつら〳〵聞し召し。詞子供に指南致すとは。賤しからざる世の營み。筆の冥加藝の德。申すところに僞なくば。手跡もかはらじ改むるに及ばねども。爰にて書かせ道眞が所存は後にて言ひ聞かさん。認め置いたる眞字と假名。詩歌を手本に寫し見よと。地白木の机御手づから差寄せ給へばハアはつと先へは フシ出でず。跡ずさり。地志根惡の左中辨物陰よりずつと出で。詞コリヤ源藏樣子殘らずあれから立聞く。師匠の指圖は兎も角も。辭退申して出る筈が。兩手をついて目をましくし。蟇の所作がらするは。書いても見ようと思ふ氣かそれはの太い叶はぬ事。ハアお馴染とあつて忝い。希世樣のお詞に一つも違はぬ役に立たず。併し身の分際を顧みぬ。源藏めでもござりませぬ。只今これにて書けとあるお手本。書いて可いやら惡いやら。跡先の樣子も存ぜず。四年以來在所住居。くさ墨に三文筆。書出しや反古の裏に書けならば場打もせまい。其結構な机に墨筆。大高檀紙の位に負け。一字一點いかな〳〵。ホヽ、好い了簡。いかぬと知つて何故立たぬ。サアそこでござります。御勘當の私。御意にあまえた身の願ひ。お執成頼み上げまする。ムウそれで聞えた。詮言はしてやろが今はならぬ。といふ其仔細ひつ摘んで咄して聞けう。此度帝の仰せには。存命不定の世の中。生死の道には老若差別はなけれども。マア年寄から死ぬるが順道。菅丞相は當年五十二。天命を知るといふ。齡も過ぎ寄る年を惜ませ給ひ。

て唐まで學むる菅原の一流。これまで傳授の弟子もなし。一代限で絶やすは殘念。手を選んで傳授せいと。勅諚で七日の齋戒殊の外お取込み事濟んでから願うてやろ。ハア樣子段々承れば御大慶な勅諚。サア其勅諚も大慶も知れた事いはずとも。早々歸れとせり立つる。イヤ立つな源藏。いひつけた手本只今書けと。地仰せは武部が身の大慶。希世は偏執むしやくしや腹。立寄る源藏睨み付け。詞わりや兄弟子に遠慮もせず。書かうと思うて出しやばるか。ホヽお笑ひあつても恥しからず。地御免なれと机にかゝり。手本を取つて押戴き。ハルフシ心臆せず摺る墨の。色も匂も馨しき。フシ筆の冥加ぞ有難き。地希世傍へすり寄つて。詞わが樣な横着者は手本の上を透寫し。その手目は身がさせぬ。恥と頭はかき次第。身のざまの恥煩わりや何とも思はぬか。溫袍の上に汚れ袴。机に直つて居るざまは。貧乏寺の講中奉加場の帳付に其儘。無緣法界を書くなよと。地惡口たら〳〵言ひちらし。怪我のふりにて机を動かし。肘に觸つて邪魔するも構はず咎めず手本の詩歌。心よく書き終せ机も共に御前に直しフシ退つて。頭を下げゐたる。地丞相淸書を取上げ給ひ。詞鑽沙草只三分計。跨樹霞纔半段餘。是は我が作れる詩。昨日こそ。年は暮れしか春霞。春日の山に早や立ちにけり。是は又人丸の詠歌。何れも早春の心を詠みかなへり。假名といひ。眞字といひ是に勝れし筆やあらん。地出來したり〳〵。詞惣じて筆の傳授といつぱ。永字の八法筆格の十六點。名をそれ〴〵にいふに及ばず人々の知る所。菅原の一流は心を傳ふる神道口傳。七日も滿つる今日只今。地神慮にも叶ひし源藏とフシ御悅びは限りなし。詞ハア有難や忝い。筆法御傳授あるからは。御勘當も赦され前にかはらぬ御主人樣。ヤア主人とは誰を主人。傳授は傳授勘當は勘當。格別の沙汰なれば。不屆なる汝なれども。能書なれば捨置かれず。私の意趣は意趣。筆は筆の道を立つる。道眞が心の潔白叡聞に達しても。地依怙とは思召されまい。詞希世にも疑はれな。勘當は前の如く主でなし家來でなし。この以後對面かなはじと地銳き御聲源藏が肝に燒鐵刺さるる心地。道理を分けての御意なれども傳授は外へ遊ばされ勘當。スエテ御免と泣き詫ぶる。詞コリヤ源藏が歎くが道理勘當を赦されねば。傳授しても規模がない。彼が願ひも希世が望みも立つやうの了簡は。傳授と勘當かへ〴〵にして遣はされたら。よささうなもののやうに地存じまするとフシいふ折から。地當番の諸太夫罷出で。詞俄の御用これある間只今參內

遊ばされよと。瀧口の官人參られしと 地 申上ぐれば御不審顏。 詞 七日の齋戒過ぎざるうち。御用とは何事。隨身仕丁の 地 用意せよと フシ 裝束の。間に入り給ふ。 地 參内と聞召し立出で給ふ御臺所。裲の下に戸浪を押隱し人目つゝみも餘所ながら。お顏をせめて拜ませんと心づかひは希世が手前。 詞 傳授の樣子承れば。お前には殘り多からう。仕合は源藏さりながら。御勘當は赦りぬげな。 地 館の出入も今日限りかなたこなたを思ひやり。御參内を見送りがてら。それで〳〵と裲の下をしらする御目遣ひ。夫婦は重々お情の身にしみ渡る忝涙。束帶氣高き菅丞相。一間の内より立出で給ひ。神道秘文の傳授の一卷源藏に賜はりける。當座の面目御流義末世に傳へる寺小屋の敬ひ申し奉る フシ 因緣かくとぞ知られける。 詞 サア傳授濟むからは對面これまで。罷り歸

れ立てよ〳〵と頻の御諚。 コリャ源藏。吠頬かいてももう叶はぬ。腰が拔けて得立たずば。 地 引摺り出さんと立寄る希世。なう荒氣なくし給ふな。 詞 三世の緣の切目ぢやもの。 地 立てぬも理歎くも道理涙とゞめて御暇乞。見奉れと裲の褄より覗かす戸浪が顏。それぞと推し給へども知らず顏にて立出で給ふ。何としてかは召されたる御冠のおのづから。落つるを御手に受留め給ひ。 詞 物にも觸らず脱げたるは。ハアはつとばかりに御氣がかり。イヤそれは源藏が願ひ叶はず落涙いたす。落は落つると訓むなれば。其驗でがなイヤ〳〵左にてはよもあらじ。參内の後知れる事。源藏早く歸されよ 地 冠正して。參内ある。 地 希世はこは〴〵御見送り。御勘當の身の悲しさは。行くに行かれず伸上り。見やり見送る御後影。御簾に障へられ衝立の邪魔になるのも天罰と。

五體を投伏し男泣き。戸浪が悔みは夫の百倍。こなたは御前のお詞かゝり。直にお顏を見さしやつた。私はやう〳〵御臺樣の後に隱れてあんじりと。お顏も拜まぬ女房の心。思ひやつても下されぬまんがちな一人泣。同じ科でもこなたは仕合。女子は罪が深いといふどうした謂でなぜ深い。鈍な女子に生れしと。御臺のお傍も憚りなく フシ 果し。涙ぞいぢらしゝ。 地 希世のさ〳〵立戻り。 詞 ヤア源藏を歸されぬは。御臺樣御油斷〳〵。一刻も早くぼいまくれと。重ねて仰付けられたそこを少し身が了簡。そのかはりには傳授の卷物。讀んで見る望みはない筆の冥加にあやかる爲。ちよと戴かしてくれんかと。 地 望むに是非なく懷より。取出すを引手繰り逸足出して迯行くを。どつこいやらぬと源藏がほつかけぼつ詰め襟がみ摑み。引摺り戻して擲き投げ。大の男

に一泡吹かせ。傳授の一卷取返し。詞これをおのれが引掛けうで直垂の羽繕ひ。晝鳶の骨張め。びくともせば打殺すと。地刀四五寸拔きかくる。詞コリヤ源藏聊爾すな。地戸浪過さするなとお詞かゝれば。詞エ、。エ、。おのれエ、エ。おのれをな。只助けるも殘念な。地寺子屋の折檻の机はこいつが責道具。女房此處へと取るより早く背中に机おほげなし。兩手を引張る机の脚。裝束の紐引拔き雁字搦に括りつけ。盜ひろいだ師匠の躾。竹篦の代り扇の親骨。頬に見せしめひりつかせんと打立て〱突飛ばせば。痛さも無念も命の代りフシ恥を背負うて歸りける。地源藏夫婦手をつかへ。詞禁裏の樣子承り歸りたく存ずれども長居は恐れ。御臺樣此上ながら夫婦が事。お捨てなされて下さりますな。ヲ、それは心得たが。今行くといふを聞捨に。せめて一夜といはれもせぬ命が物種。緣も盡きずば又逢はう

もう行きやるか。アイ。アイ地參りませねばなりませぬでござりますと戸浪が涙フシ長汐に乾く。間もなき袖の海。見る目いぢらし夫婦が姿泣く〱。御門を 三重 へ出でて行く。地源藏と引違へ歸る梅王あを息吐息。門の臺木に足蹟きかつぱと轉けて起きる間も待たれぬ〱侍衆。詞御大事が發つて來た。科の樣子は何かは知らず使の廳の官人共。丞相樣を取廻し。鐵棒破竹アレ〱爰へ。地御臺樣へ此樣子をと館の騷動門外には。鐵棒打振り警固の役人。輿にも召させ奉らず。菅丞相の前後を圍み。先に進むは時平が方人三善の淸行。門外に立ちはだかり。詞ノリ癖世親王刈屋姫。加茂堤より行方知れず。仔細御詮議なされし所。親王を位に卽け娘を后に立てんとする。菅丞相が豫ての工。其罪遠島に相極り。流罪の場所は追つての沙汰。それまでは押込め置き出口々々に大貫錠。門の警固は身が家來。荒島主税を付置くと。地呼ばはる聲を聞くつらさ。御臺は警固の人目も恥ぢず走り寄つて道眞公。コハそもいかなる御事ぞや。齋戒の間の事姫が身の上御存じない言譯は何故なされぬ。科もない身を左遷との仰せは聞えぬギンフシ恨めしやと歎き。給へばハア。愚か〱。道眞虚命蒙れども。君を恨み奉らず。漸く齡傾きし臣が拙き筆跡迄。惜ませ給ふ傳授の勅諚。地昨日迄は叡慮に叶ひ。詞今日は逆鱗蒙るとも。地皆天命の爲す所。詞先程冠の落ちたるは殿上の簡を削られ。無位無官の身となる知らせ。今さら悔むは愚か〱。地これより配所へ行くにもあらず。見苦し〱歎かれなとフシ御臺を。遠ざけ給ひける。地希世は道より取つて返し。詞淸行殿御苦勞千萬。此和郎の樣子承はり。弟子の

方から師匠をあげ向後頼むは時平公。菅丞相と一つでない執成宜しく頼み入る。氣遣ひあられな呑込んだ。作法の通り菅丞相。内へ追込み門を打て。地畏つたと荒島主税割竹振上げ立ちかゝる。コレ待つた其役目希世が代つて仕ると。割竹受取りコレ謀叛人殿。詞今迄とは當が違ふ。時平公へ宗旨をかへた手見せの働き。地割竹一つと振上ぐれば血氣の梅王ずつと寄り。希世を四五間突飛ばす。詞ヤア下司の慮外者自滅したうて出しやばつたな。ハレヤレ知れてある下司呼ばはり。こなたの口から慮外とは。ハ、、、腸がよれ返る。其割竹振上げて誰を／＼ヲ、サ謀叛人の此わちよを。ヤア謀叛とは誰を謀叛。御恩を忘れし人非人。菅丞相にはお構ひなくとおのれに罰は身が當てると。地又飛掛る梅王丸御手を指延べ引寄せ給ひ。詞ヤア小賢しい汝が振舞。勅諚に依つてかくなる道眞。希世はさておき。其外へも手向ひするは上への恐れ。汝は勿論館の者共我が詞を用ひずば。七生迄の勘當ぞと。地聞いて希世がこはげも抜け。詞コリヤ梅王。して見ぬかい。頬桁ばかりの腕なしめと。地のさばる無念怺へる梅王。是非も情も荒島主税。官人ばらに追立てられ。すご／＼館に入り給ふ オクリ御有フシへ様こそ痛はしき。地サア／＼用意の大貫錣。表と裏へ手分の人數築地の穴門樋の口まで。暫時の間に打付けしは フシ物忌はしく見えにけり。地清行見廻しハレよい氣味。詞出口々々の締りもよいが。築地の屋根も越さうも知れぬ。主税万端油斷すな。暮に及べば希世殿。地いざ歸らんと打連れて六七間も打過ぐる。築地の陰に待居たる武部源藏ぬつと出で。希世を一當悶絶させあわてる清行相伴投。スハ狼藉者打ちのめせ殺せ縛れとひしめいたり。武部は戸浪に指添渡し フシ寄らば切らんず勢ひなり。地希世は漸う人心地。立上つてヤアうぬは源藏め。詞一度ならず二度ならずひどいめに合したな。うぬがする狼藉菅相丞がさしたになつて。流罪の仕置が死罪になろと。云はせも果てず高笑ひ女房アレ聞け。物覺えのない拔作殿。傳授は受けても勘當ゆりぬ。この源藏には主人がない。梅王は主持でおのれめを責まず。怺へてゐるかはいさに名代に投げてこました。名代次手に皆撫切と。女房諸共拔放しめつたなぐりの太刀風に。小糠侍鋸屑公家 フシ吹立てられて散り失せけり。地敵なければ立歸る時節も幸ひ黄昏時。門の扉をとん／＼とん扣けば内より咎むる聲。詞聞き覺えた梅王か。さいふは武部源藏殿か。殿どころかい若い者油斷してゐる所でない。扉の釘付踏破り。御主人達の御供し此場を

退くは易けれど。おことが今も聞く通り仁義を守る道眞公。とあつて讒者が計ひにて。お家の斷絶覺束なし。御幼少の御若君夫婦が預り奉らん。所存を立つるはコレ梅王。若君をこつそりと。築地の上からできた〳〵源藏殿。お上へいうては得心あるまい盗み出すがお家の爲。さうぢや〳〵能い了簡。一刻一歩も早や退きたし。地 頼む〳〵といふ間もなく築地のオクリ へ上から ハルフシ 梅王が心の早咲き勝色見せたる花の顔ばせ。大事の若君怪我さしますまい。心得高き築地の屋根。伸上つても届かぬ背丈。とやせん戸浪を抱上ぐれば。軒に手届く心もとゞく若君請取り抱下し。外と内とに忠臣二人胸は開けど フシ ひらかぬ御門。地 荒島主税目早く見つけ。詞 ヤア盗人の隙はあれど守人の隙がない。宵覗めを手引する内と外との相盗めら。菅秀才を盗んだ此旨。地 注進せんとけ出す先に源藏が。立塞つてどこへ〳〵。おのれを遣つてよいものかと。討つて掛れば抜合せ切結び切解き。追つつ返しつ二人が勝負。屋根の上から見てゐる梅王。棧敷正面眞向二つ。破れて命は荒島主税。とゞめに及ばぬ切捨て〳〵。危い場所を盗人夫婦。行末榮ゆる菅秀才。若君頼む夫婦の衆。館の父君母君を頼むぞ梅王心得たと。互に頼み頼まるゝ。忠義々々を書き傳ゆる筆の傳授は寺子屋が一藝。一能名も高き人の。手本となりにけり

第二　道行詞の甘替

詞 サア〳〵子供衆買うたり〳〵。飴の鳥ぢや飴の鳥。それがいやならしる飴鑿切泣く子の口へは地黄煎玉。扨その外平野飴桂の里には桂飴。西の宮には飴の金その品々は往て買うたり。拙者が自慢で賣弘める。櫻飴を買はつしやい櫻飴々々。ハルフシ 櫻々と。おのが名を。いへども包む頬かぶり。木綿頭巾に袖なしの。羽織は輕き フシ 身なれども。忠義は重き牛飼の櫻丸はいつぞやより。賀茂の川浪立出でし。齋世の宮と姫君に。漸うと廻り逢ひ。一日二日は我が家にも。忍ぶに何と菅原の。伯母君頼み參らせんと。行くは車の供ならで 小オクリ 跡と。先とに打荷ふ飴の荷箱のかた〳〵に。御二方を入れ參らせ浮世を土師の里へ とて。飴の とり〳〵賣りて行く。フシ こゝろ オク へづかひぞ。せつなけれ。フシ 都をば夜を深。草に。出でても道はあやなくて。スヱテ 御香の宮に明け渡る。道を芹川淀も越え。町を過ぐれば爰ぞよし。誰かは何と石 フシ 清水。サア〳〵お出でと荷をおろし。箱を開けば堆高き姿あらはに刈屋姫。暫く拜む日の影に。目なれぬ山や知らぬ里。

思ひなくてぞ見まほしゝ。なう宮様とありければ。地されぱとよ。そなたの父菅丞相いかなる事の誤りにや。押籠の身となりけるも我々出でし跡なる故。正しくは知らねども。やがて赦され フシありぬべし。兎にも角にも我が身は今賣る飴の如くにて。詞傘に覆へる日かげの身。地いつかとけなん心ぞと。御仰せに櫻丸。詞左様にては候はず御忍びましますも。飴をば上に君を下。取りも直さずあめが下しろしめす瑞相にて候ふと。地中上ぐるに宮は猶勿體なしと身をすべる野路の。畔道。フシそろ〱と。蕨が裾に手を入れて フシハル褄ひるがへす。裏模様とめ木に草も芳しき。春の野面に群れる蝶。ヘズミ袖にとまらば。羽摺りて鏡絶やせし。フシ化粧せん。爰に我が名をかりやの里。今苗代の時を得て。民の手業も遠目には。いと珍らかに。引鶴の聲に千歳も變らじと。地契りし今の閨の内宥よりしめて寝る夜さは。月は出るやら曇るやら。三下り唄枕とる手に。寝て解く帶の。いかいお世話。〱。枕とる手に。寝てとく帶の。いかいお世話。〱。結ばぬ夢を覺せとや。フシ春の風。ぬるみし空の快く。行手の森の人音に。見付けられじと手ばしかく。又忍ばする飴賣が。片手に太鼓片手に撥。聲をかしくも拍子とり。三下り拍子こんりや〱〱〱。是が天子の始めなされた神武飴とて。合神武天皇は飴がお好きで練らしやりましたる名物飴をば。こちも仕習て嚊等や嫁等が。紅絹の襷をしんどろもんどろかけて。合しんとろり。合もんとろりと練りやりましたを買ほなら今ぢや〱と。フシナホス賣る聲の。フシハル子供あつめに子の親が。袖の土産を買ひに來て認める間の取沙汰に。惜しや都の菅丞相筑紫へ流され給ふ故。津の國安井に風待しておはしますはいたはしと フシ所縁と知らず告げて行く。ハルフシ跡の驚き。悲しみは箱を細目に顔ばかり。なに道眞は左遷とや。父上安井にましますとや。せめてお顔が拜みたい。何卒お船の出ぬ先に。逢はせてたも櫻丸頼む〱もしどろにて フシわつとばかりに泣き給ふ。ハルフシ聲をも人に知らせじと喇叭の笛に紛らして。それより道を横切れに。一荷の涙擔ひ行く。先は何處ぞ津の國の安井の岸の安からぬ思ひ重ぬる 三重へ哀れさよ。地世につれて海の面も風さわぐ。湊に御船とゞめしは菅原の道眞公。終には讒者の舌強く覺えなき身に。罪極まり。筑紫宰府へ流罪の籠船津の國安井に着きしかば。警固の武士は法皇の舊臣院の廳判官代輝國。逢坂増井に陣幕打たせ見るめ嚴しき鑓長刀。數多の官人四方を圍ひ出船を松の下かげに フシ日和。見合せゐたり

ける。地判官代輝國海の面を見渡し。幕絞らせて丞相のおはします。箯輿の下に手をつかへ。詞沖の様子を窺ふ所に。五三日も御出船の日和とも相見え申さず。この所に御逗留あらうより。河内の國土師の里へお越しあつて。伯母君覺壽公とも御暇乞ひ候へかしと。地中上ぐれば菅丞相面やつれたる御顔ばせ。物見より現はし給ひ。詞院の御所に使はるれば。上を學ぶ下々まで情ある武士よ。地かく囚人となりし身を。赦し送らば我よりも。おことが罪はいかにせん。フシ思ひ寄らずと宣へば。詞こは有難き御仁心。左程尊き御方の。お爲になつて咎めにあはば死後の面目子孫の譽。殊に私わざならず法皇豫ての仰せには。土師の里に伯母ありと聞き及ぶ。もし津の國にて汐待の隙あらば。暇乞させよと密々の御仰せ。何憚る事もなし御心置きなく土師の里へ御出と。地勸め申せば菅丞相。都の方をうち詠めさせ給ひ。詞世に有難き法皇の御心や。天子に父母なしと雖も現在の御父君。其御力に及ばずして斯く囚人となる事は。地如何なる罪の報ぞや。はかなの浮世や淺ましの身の果やと。三世を悟る御身にも。世をつらしとの御述懷。フシ哀れにも又いたはしゝ。地日和見の船頭罷出で。詞今朝の天氣相まだ二三日も御逗留と存ぜしに。思ひの外立直り風治まり候へば。地御出船の御用意といふより輝國ヤア默りをろ。詞立直るまじき日和立直つたと吐かすからは。よき日和の惡しくなるもおのれが眼にかゝるまい。イエ／＼左様ぢや御座りませぬ。二八月は船頭のあぐみ時。得ては手の裏返します。ソレまだ吐かす。左様な手の裏返す日和に。大切な流人の船出さるゝものか。イエサこれは慥に。ヤア狼狽者。向う山に雲がかゝつてまだ四五日も御出船の日和はない。いらざるおのれが奉公ぶりと。地呵りつくれば悔りし。いかな巧者な船頭でも。この暴風には仕様がないとハズミフシ呟き／＼入りにける。菅丞相は輝國が志法皇の。御心の有難さに。河内の國へ赴かんと。仰せゆたかに安々と御輿とゞまる所とて。井の字を居ると書きかへて。安居の宮と末の世に仰ぐも神の威徳かや。かゝる折から櫻丸宮姫君を御供申し。さきに進んで馳來り。詞菅丞相御流罪と承はり。縁類の者暇乞の願ひ。また一つには科の様子も承はりたし。地御役人へ直談と立寄るを數多の官人。ヤア直談とは慮外者暇乞とは無法者。油斷ならずと取卷くを。それと悟りて輝國。ヤレ聊爾すなと押鎭め。詞科の様子聞きたくば云うて聞かさう。上より咎めの條條具にいひ開き給へども。齋世の宮と刈

屋姫密通の言譯。御存じなきとて證立たず是非なく科に落ち給ふと。地聞いて悲しく刈屋姫宮諸共に駈出で給ひ。なに我我故囚れとや。情なや淺ましや不義は二人が誤りぞ。流しなりとも切るなりとも罪に行ひ丞相を助け得させよ父上に逢はせてたべ助けてたべ。對面させよと二方は泣き叫び スヱテ給ふにぞ。地輝國途に頭を下げ。詞恐れながら御對面あつては。彌々丞相の罪重くなる道理。元此おこりは去る頃。君天子に成り代り御姿を唐僧に寫させしは菅丞相の計ひ。唐土まで天子と思はせ我が娘を后に立て外戚とならん下工と。讒者の舌にかゝるうち宮姫を連れ御出奔。いよ〳〵それと叡聞に達し罪なくして罪に沈む。殊に姫君とは親子の中。これ天子への畏れあればよもや對面候ふまじ。地とかく此上菅丞相の爲を思召さば。これより刈屋姫と御縁を切られ。再び禁廷へお歸りあつて。詞謀叛なき趣を仰せ分けられ。丞相歸洛を御願ひ候へかしと。地申上ぐれば齋世の宮。我ゆゑ罪に沈むも悲し。又我をのみ戀慕ひ付添ひ來る契りをば。見捨てて何と去なれうぞと喞ち給へば姫は猶更。父の爲には怨敵我を罪して御流罪を。赦してたべ人々と伏沈み〳〵。消え入るばかりに泣き給へば。媒したる身に取つて。辛さ苦しさ櫻丸。骨にも身にもしみ渡り。思へば〳〵我なくば此戀誰か取持たん。科人は外ならずと悔めど今更詮方も。涙先立つ計りにてとかう。フシ詞もなかりしが。地立直つて宮のお傍に恐れ入り。詞私もとは土百姓の悴。御扶持を下され君の舍人を勸めるも皆菅丞相様のお蔭。其恩ある方を流罪させのめ〳〵見てはゐられず。と申してから我々風情の及ばぬ所。輝國殿の仰せの如く。これより姫君と御縁をお切りなされ。他人となつてお願ひあらばよもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相様御歸洛あつて後。表向の御縁結び。地暫しの間のお別れお聞入れ下されよ。と身にかゝつたるせつなさに。スヱテ土に平伏し願ふにぞ。齋世の宮は猶涙。一旦館を出でし身の面恥かし二度の恥と。仰せに輝國詞を返し。詞御館へこそお歸りなくとも。法皇の御所へお越しあらば猶以て御願ひのよき便り。地ひらに是非にと勸むるにぞ。とかく涙にくれながら姫君に差向ひ。我が戀草の思ひに迷ひ。丞相の歸洛を願はずば天道怒り給ふべし。契りは盡きず變らねども親の爲と諦めて。別れてたも刈屋姫と涙と共にフシ宣へば。詞こは勿體ない。お歎きをかけるも元は自ら故いつそ焦れて死んだらば今の思ひはあるまいに。地お名殘惜しやと御顏を。見るも涙見らるゝも。ハルフシ

涙。片手に。詞又逢ふまでは隨分まめで。おまへ様にも御機嫌でと。地跡は涙のすがり泣きわつと フシ絶え入り給ひける。ハルフシかゝる折節。何れとも知らぬ女中の乗物つらせ。怖めず臆せず判官代に差向ひ。詞私事は土師の里立田と申して。菅丞相の伯母の娘と。地聞くに嬉しき刈屋姫。コレ姉様ナウ立田様かいのと。取付き給ふを突き退け刎ね退け。詞母の覺壽左遷の様子を聞き及び。年寄つての悲しみ御推量下さりませと。地いふうちに又姫は取付き。そのお歎きが身に取つて猶悲しいと。歎くを振切り。詞何卒此所の汐待を土師の里にて御一宿あらば。心よく暇乞も致し度き願ひ。明日をも知らぬ老の身の。少しは歎きも留めたく無體の御訴訟。夫宿彌太郎が參る筈なれども。郡役も勤める身で身勝手な事申すも如何。女の慮外は常の事と。不調法も顧みずお願ひに參りし。地お役人の御了簡偏に頼み上げますと。願へば輝國。詞イヤ一家の願ひ叶はぬこと。大切な囚人浪打際の一宿心許なく。只今用心のため土師の里へ立越える。一宿は覺壽の許と。地聞いて嬉しく。詞エ、それはマア結構な御用心と。地悦び勇む立田が袖。姫は控へてコレ申し。とてもの事に父上にお目にかゝるお願ひと。頼む袂を振放し。詞恐れ多い。丞相様へどの顔さげて逢はうと思召すぞ。もとあなたに菅秀才といふお子のない先。母様がお前をば藁の上より遣はされ。私が爲に妹でも今は菅原の姫君様。勿體ない宮様へ戀仕かけて今この大事になつたでないか。戀は心のほかでもな。これはあんまり外過ぎて姉のわしまで人々へ顔が出されぬ。地恥かしと呵る心も姉妹の。フシさすが誼と知られける。地輿の内には菅丞相わざと詞をかけ給はず。事を計るは判官代。ヤア詞立田殿今さら御意見益なき事。コリヤやい櫻丸何をうつかり。一時も早く宮を法皇の御所へ御供申せ。立田殿は刈屋姫を御同道は必ず無用。ナ合點か。コレサ土師の里の親元へ。急度お預けなされよと表を立てて。地フシ心は情。地立田が持たせし乗物へ菅丞相を召しかへさせ。後と先とは警固でかため御乗物はゆるやかに。常の旅行同然に輝國が引添うて フシ土師の里へと急ぎ行く。地ナウこれ父上。丞相と宮諸共に驅け行き給ふを櫻丸が引留め。立田が押さへて フシ引きわくる。地名殘盡きせぬ妹脊の別れ。おふぎの別れとさすが又。姉が情で引合はす。いとゞ思ひは增井の濱目は泣き。腫らす赤井の水。いつか安居と逢坂の。水のあはれや泣別れ。さらば。さらばと 三重へ聲殘る。地菅丞相の御別れ對面ありたき覺壽の願ひ。

流人預かる判官代輝國の用捨を以て。河内の屋敷へ入り給へば。老の悦び大方ならず馳走の役人夜晝の。フシ分ちも知らぬ忙しさ。地立田の前は船場にて思はず逢うたる刈屋姫。密かに伴ひ歸れども家來も多くは知らぬがち。隱し置いたる小座敷の襖をそつと押開き。詞無淋しからう精も盡けう。顏見に來たいは山々なれど。さりとては何やかや用事の多さ。母樣の傍離されねばえ參らぬ。今がよい隙誰も來ぬ氣晴しにサア爰へと。地心遣ひも姉妹の姉の情を刈屋姫。一間を出づるフシ目は涙。地齋世樣に別れてより段々お世話に預かる上。父上樣にもお目にかゝりせめて不孝の申譯。それも叶はぬ物ならばと。我が身の覺悟極めても。生の母樣覺壽樣。今の母樣都の弟親王樣の御事は。猶しも忘れぬ得忘れぬ。心を推量してフシたべと歎けば。共に涙ぐみ。詞悲しいは道理々々。さりながら丞相樣に逢はぬとて。短氣な事などかんまへて思ひ出しても下さんすな。母樣のお願ひ立つて此屋敷に御逗留。どうぞ首尾を見繕ひ母樣のお耳へ入れ。お指圖請けてと餘所ながら。口むしりかけて見たればな。こちの思うた坪へはいかず母樣の堅くろしさ。お果てなされた郡領樣に少しもかはらぬ行儀作法。我が産んだ子でも人にやれば。先こそ親なれこちは他人。地それを親ぢやの娘ぢやと思ふは町人百姓の。譯をば知らぬ子に甘さと。幸先惡い訴訟もならず。外の事に言ひ紛らし其場は濟んでも始終が濟まぬ。詞お宿申すも今日で三日。暴風空も吹き晴れて。下り日和に直つたと船場から注進故。今宵八つがお立とて。輝國殿の旅宿より知らせによつてお立ちの用意。今やなんどと思ひの外手詰になつたがどうして好からう。地膝とも談合コレ泣かずと。よい智恵出して下さんせと。フシ取つつ置いつの胸算用。地後にすつくと宿禰太郎。詞よい分別者これにあり。ヤア太郎樣いつの間に。ムム何時の間にとはコレ立田。連れ添ふ男の目を拔いてこつそりと取込んで。だいそれた身の上咄。刈屋姫はそなたが妹。藁の上から養子の仔細。知つてはゐれど京と河內。武家と公家とは位も格別。菅丞相の伯母風吹かし。聟めかしてもいつかなめかれぬ位負。名計り聞いて逢うたは今てんと御器量。齋世とやら樣とやらが現樣にならしやつたも道理ぢや〳〵。姫の顏見ぬ先はおれが楊貴妃ぢやと思うたが。較べて見れば無楊貴妃。そなたの名も變へねばならぬ。ソリヤ又何とへ。ハテ知れたお次の前。エ、ずは〳〵と出放題。地母樣へも隱してゐる。この譯何ともいはしやんすな。詞それは氣遣ひし

給ふべからず。明日のお立知らされし輝國の旅宿へ参り。此間御逗留心づかひの一禮申し。いよ〳〵刻限相違なく一番鷄の鳴くのが相圖。申し合せに往て來いと覺壽の云付。只今参る道でよい思案が出たら。コレ戻つていはうお次の前。地アレまだじやら〳〵惡戯ロ。ヲツト閉口往て來うと フシ表の方へ出でて行く。地後を見やりて刈屋姫。彼方がお前のお連合身の上の事に取紛れ。御挨拶も得申さぬ。詞ア、これ挨拶はいつでもなる事。こちの願ひは延されぬ。地ア、どうがなと案じ煩ひヲ、それ〳〵。詞所詮母様にいうたとて埒のあかぬは知れてある。連合も留守。母様もお傍にござらぬ折柄なれば。お前を私が連れて往て。地叱られうがどうならうが後は儘いな。サアこなたへと フシ姫の手を取る後より。詞不孝者どつちへ行くと。地襖ぐわらりと母の覺壽杖振上げて飛びかゝるを。立田ははつと抱きとめ。お前に明けていはなんだ隱したお腹が立つならばこの立田。打ちも擲きもなされませ。この中も宣はぬか。詞人にやれば我が子でないと仰しやつての折檻は。母様とも覺えませぬ。地丞相様の御秘藏姫杖棒あててよいものか。サア自らを〳〵と姫に代つて身を厭はず。イヤお前に科はない不孝な自ら打ち給へと。立田を押遣る杖の下イヤ〳〵お前は打たされぬ。イヤこな樣はと折檻の杖を爭ふ フシ姉妹思ひ。地老母は猶も怒りの顔色。詞コリヤ立田おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相殿はおれが爲には甥の殿。子にやつた姫は甥孫。親も赦さぬいたづらして。大事の〳〵甥の殿流され給ふは誰が業。憎うて〳〵コレこの杖折れる程擲かねば丞相殿へ言譯立たぬ。地六十に餘つて白髪天窓。連合に別れた時剃るを剃らさぬ立田の前。詞尼になつては便りがない。力がないと留められて法名ばかり覺壽と呼ばれ。邪魔に思うたこの白髪今日といふ今日役に立田。天窓を剃つて衣を着れば打擲の杖は持たれぬわい。地傍杖望む立田からと走り寄つてちやう〳〵〳〵。打たるゝ姉妹打つ母もスヱ共に。涙の荒折檻。詞ア、これ〳〵伯母御前率爾の折檻し給ふな。齋世の君の御不便ある娘に疵ばし付け給ふな。父をゆかしく慕ひ來る。刈屋姫に對面せん。地これへ伴ひ給はれと障子の内より丞相の。御聲高く聞ゆるにぞ。老母は杖をからりと投げ捨て。わつと叫んで伏し轉び暫し。答もなかりしが。詞生の親の打擲は養ひ親へ立つる義理。地養ひ親の慈悲心は生の親へ立つる義理。あまき詞も打擲も。子に迷う フシたる親心。地逢うてやろとは姫よりも母が悦び。詞には言ひ

盡されぬ。詞刈屋姫。結構な親持つた。地持つた〳〵と目に持つた涙の限り聲限り。二人の娘は何事もお慈悲〳〵とばかりにてフシ泣くより外の事ぞなき。コレ詞なう爰から禮をいはうより。來いとあればいざ傍へと。地隔ての襖押明くれば菅丞相は見え給はず。逗留のうち作られし主の姿のフシ木像ばかり。地コハそもいかにと刈屋姫。逢うてやらうと宣ひしは母様の折檻を留めん爲。とにかく不孝な自ら故お逢ひなされて下されぬか。詞今物を仰しやつたは父上に違ひはないに。木で作りし父上様が但しは物を宣ひしか。地又は何所ぞへ隠れてかと。立つて見居て見フシうろ〳〵〳〵。詞なう騒がしい刈屋姫。丞相の逗留中。御馳走申すは奥座敷爰へは餘程間數も隔たり。さき程聲のかゝつた時爰へはどうしてござつたと思ひながら。嬉しさに辨へなく見れば此木像ばかり。次手ながら刈屋姫咄して聞かさう。逗留の中に主の像。描いてなりとも作つてなりと。伯母が形見に下されと願うた口から取りかゝり。初手に出來たは打破り捨て二度目に作り立てられしを。同じく是も打砕き。地三度目に此木像作り上げて仰しやるには。詞前の二つは形ばかり。精魂もなき木偶人。是は又丞相が。魂殘す筐とて下されし主の姿。地物をいふまいともいはれず。帝への恐れあれば。逢ひたうても逢はれぬ親子。木とな思ひそ刈屋姫。地物仰しやつた父上に逢やつて嘸嬉しかろ。母も本望遂げましたと親子三人悦びの。中へのさ〳〵フシ立歸る。地太郎が爺親土師の兵衛。詞覺壽これにおはするか。お客人のお立も明朝出立の拵へさぞ取込。役に立たずとお見舞申し手傳ひでも仕らうと。參りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付屆け。悴が幸ひ居り合せ。用意も大かた出來たと聞き先づは大慶。左右するうちもう暮相。一先づ歸つてお立の時分又參るのも老足なれば。お邪魔ながらこれにをろ。心づかひなし下されな。詞兵衛殿の義理々々しい。嫁子の所は内同然斷りに及ぶ事か。用があらば遠慮なく仰しやつたがよいわいの。刻限迄はコレ立田。そなたの部屋にお寐間をとりや。地後程お目にかゝらんとフシ姫を連立ち入り給へば。地後は親子が小聲になり。詞コリヤ道々牒し合した通り太郎ぬかるな。氣遣ひなさるな親人と。地奥と部屋とへ別れ行く座敷々々は燭臺照らし。今宵限りの御奔走とり〳〵騒ぐへばかりなり。地土師の兵衛は一間よりそつと拔出で前栽の。勝手覺えし切戸口錠捻ぢ切つて押開けば。外から相圖の挾箱差出す中間徒若黨。詞コリヤやい言付けた人數の裝束。

丞相を迎ひの張輿。すはといふ時間に合せと。地家來共先へ歸し挾箱引ん抱へ。月影漏る丶木の間〳〵うそ〳〵窺ふ同腹中。詞親人お首尾は。件の物は參りしか。悴氣遣ひ仕るな。コリヤ此中に計略のかの一物。地大事の談合爰へ〳〵と大庭の。池の邊でさ丶やく親子。宵から素振に氣をつけて。宿禰太郎に目放せず。立田の前が物陰より聞くとも知らず宿禰太郎。詞先程お聞きなさる丶通り。判官代輝國迎ひに參るは八つの上刻。時平公よりお頼みの。菅丞相殺す工面。贋物仕立て迎ひと僞り。受取つて途中でぐつ。とはいふものの。一番鷄がうたはねば。姑の片意地名殘惜んで渡されまい。地八つ鷄の鳴かぬさきに宵鳴する鷄。これにあるかと挾箱より取出し。詞ホ、皮膚のよい白相國。地とかうするうちもう夜半。一調子はり上げ存分にうたうてくれ。一聲聞かねば落付かぬ。親人なぜ鳴きませぬの。詞イヤ其分では鳴かぬ筈。宵鳴は天然自然極めては鳴かぬもの。それを鳴かすが秘密事。大竹の中へ熱湯を入れ。其上にとまらすれば。陽氣の廻るを時節と心得時をつくる。留竹も挾箱に入れて來た。地臺子の湯も沸つてあろ。釜ぐちそつと取つて來い。詞ホ、取つて來るは易い事。湯を仕かけて鳴かぬ時は。ハテぐど〳〵。地鳴かぬ時は又分別と親子が巧計。南無三寶一大事。先へ廻つて母様へお知らせ申してイヤさうしては。イヤいはいでは又こちらが。いうてはあちらがこちらがと。心迷ひしフシ胸撫下し。詞宿禰様。太郎様は何處にと。地尋ぬる聲にはつと二人が廢忘怪顚。鷄隱す挾箱。あたふた締めて左あらぬ風情。詞ヤア事々しう呼立つるは。何ぞ急な用でもあるか。さもない事なら不遠慮千萬。親人もこの宿禰も。肝にこたへて悔りしたと。地いふ顔つれ〴〵打眺め。詞お前方の悔りより。わしに悔りさ丶しやんした。地聞えぬ連合舅君。聟迎ひを拵へて菅丞相様殺さうとは。あなたに何ぞ恨みがあるか。但しは時平に頼まれし欲には馴染の女房も捨て。母様の義理も思はずか。お前捨てる心でもわしや得捨てぬ太郎様。コレ申し親父様思ひ止つて下さりませと。舅を拜み夫を拜み。聲も得立てぬ貞女フシの思ひ涙。操を顯はせり。地兵衞は宿禰に眴し。詞いやはや親身の意見に逢うて。親も悴も面目ない。向後心改める。嫁女此事聞流しにア、勿體ない。聞き流さいでよいものか。地御得心とあるからは。此世ばかりか未來迄かはらぬ夫婦舅君。まだ二月の餘寒も烈し。炬燵に膚溫め酒。一つ上げたいサアお出でと。先に立田がそれそこを。心得太郎が

後袈裟肩先四五寸切られながら。振返つて摑み付き。詞エ、これ人でなし卑怯者。一人の手にも足らぬもの。欺し殺しが本望か。地色女の義理を立て過ごし悔しや無念と罵る聲。おとぼね立てなと宿禰が下着。褄元口へ押込み捻伏せ肝先ぐつと。フシ一刳り。地兵衛は前後に心を配り。詞悴息は絶えたか。氣遣ひ召すな只今とゝめ。さて此死骸は。問ふに及ばぬこの大池。地骸を浮さぬ手ごろの石袂や帶に括り添へ。深みへやれと二人して投込む死骸は紅の。血汐に染まる池までも フシ立田が名をや流すらん。コレ 詞親人。これはこれでも濟まぬは鷄。臺子の湯を取つて參らう。太郎それにはもう及ばぬ。鳴かす仕樣は身共 に任せと。地武士の嗜む懷中松明手ばしかく燈し立て。池の中へ明を見せ。挾箱の蓋あをのけ鷄を上に乘せ浮める池の水の面 刀の鐺差延ばす腕一ぱいに押遣れば。動かぬ水も夜嵐に立つや小波のうねりにつれ フシ半段ばかり流れ行く。詞親人何をなさるゝ事。挾箱の蓋を船にして。子供のする業おとなげない。あれが何の役に立つハ、、、。譯を知らずば言うて聞けう。總別淵川へ沈んで知れぬ死骸は。鷄を船に乘せて尋ぬれば。其死骸のある所で時をつくる。鷄の一德思ひ出し。池へ沈めた立田が死骸。今一役に立てて見るうまい手番。拍子まんが直つて來た。地あれ〳〵太郎羽たゝきするは死骸の上か。そりやこそ鳴いたは東天紅アリヤ又うたふは東天紅。八つにもならぬ宵鳴の聲さえかへる春の夜や。庭木の塒に羽たゝきして一鷄鳴けば萬鷄うたふ。函谷關の關の戶も フシ開く。心地に親子が悅び。詞これから急ぐは菅丞相。迎ひの拵へ氣がせくと。地兵衛は出て行く切戶口。宿禰太郎はたくみの仕殘し オクリだめを。フシへ聞かして入りにけり。地早や刻限ぞと御膳の拵へ。銚子土器熨斗昆布腰元共に島臺持たせ。伯母御 フシ座敷へ出で給ひ。詞百日千夜留めたりとも。別るゝ時は變らぬ辛さ。地此上賴むは御免の勅諚。歸洛をまつのこの島臺行末祝ふ熨斗昆布。菅丞相も此間心遣ひの御一禮。スヱテ互に盡きぬ御名殘。地宿禰太郎罷り出で。詞御立の刻限とて早や門前まで迎ひの官人。判官代輝國は路次の用心辻固め。只今旅宿を立ち申され。輿舁の官人に譜代の家來を相添へられ。地色只今これへ參上と怪しの張輿舁入れて。時刻移るとせり立つる。菅丞相は悠悠と大廣間より出でさせ給ひ。輿に召すまで見送る老母。人前作つてにこ〳〵と。フシ泣かぬ別れぞ哀れなる。地宿禰太郎も御見立て門送りして立歸り。詞ヤレ嬉しや仕舞が付いた。覺壽樣もお氣休め。

寐間へござつてイヤ寐たうても寐られぬわいの。寐られぬとは御氣色でもアレまたいの。客を立てて嬉しいと。一道な聟殿の悦び。一つ屋敷にゐながらの暇乞も得せいでの。刈屋姫が悲しかろ。人の逢ふのも羨かろと。かけ構はぬ立田さへそれで態と呼出さなんだが。機嫌よう立たしやつたを悦びにはなぜ來ぬぞ。誰ぞ行て見てこいと。地いふにきよろつく宿禰太郎。フシ腰元どもは立戻り。詞奥にござるは刈屋姫只お一人。立田様はござりませぬ。何ぢやいぬ。内を放れてどこへいきやろ。地今一度見てこい座敷の隅々かくれ〳〵。尋ね〳〵と吟味の嚴しさ。提燈手ん手に若黨中間幾人あつても行き屆かぬ。花壇築山手分けして尋ぬる奥の池の端。芝に溜つた生血を見つけ コリヤ〳〵此血の流れ込む。池を捜せと聲々に。水心得た奴共飛込み〳〵水底より。

かづき上げたる立田が死骸。フシ驚き騒ぐ家内の騒動。地太郎は鼻も動かさず。詞殺した奴は内にあろ詮議濟む迄門打つて。家來共動かすなと。地喚きちらせば母覺壽姫もかしこへ轉び出で。コハ誰人の所爲ぞや。先からお顔を見なんだは。伯母様のお傍にと思ひ設けぬこの死骸。父上には生別れお前には死別れ。時もかはらず日もかはらず。悲しさつらさ一時に。かゝる例もある事かと スヱテ老母に取付き。悔泣。ヲヽ、詞道理々々。そなたはおれが傍にと思ひ。おれはそなたが傍に居ると思ひ違ひが娘が不運。地母が因果でおぢやるわとかつぱと伏して正體なし。太郎傍へ立寄つて。詞涙が死人の爲にはならぬ。女房どもへの追善には殺した奴をひつぱり切り。地これにて詮議仕らんと緣端に大胡座。男女に限らず家來のやつばら片端から詮議する。マアとつ

付にをる宅內め。身が前へ出あがらう。ナイ〳〵ないと 地御前にかつ蹲ひ。詞人は知らず拙者めにお疑ひはござない筈。お死骸を取上げた。御褒美を下されうで一番にお呼出し。忝い義でござりまするでござります。ヤア禍々しい褒美とは横着者め。立田が死骸池にあるを汝はどうして知りをつたそれ吐かせ。イヤあの尻も天窓も見やう筈はござりませぬ。池の深みへ芝から傳うた血を證據にヤアぬかすな。提燈の灯明で。それがそれと知れるものか。うぬが殺して沈めた池。外の者がどうして知らう。血の分では言譯立たぬ。これはお旦那無理おつしやる。言譯立たうが立つまいが。池が血へ流れ込んだ其外は存じませぬ。ヤア池が血へ流れたとは。血迷うて何ほざく。きやつ詮議場で水くらはせ。白狀さするそれ引立てと。地宿禰も續いて立つ所を老母押

止め。詞イヤ責めるに及ばぬ詞のてんでん。嬉しや娘の敵が知れた。ハア責めなとは天晴お目高。地科極つた罪人。女共へ手向ける成敗大袈裟に打放す。腕を左右へ引張れと刀提げ立寄る宿禰。詞イヤ成敗は常の科人袈裟に切つてはたゞ一思ひ。苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀はこの母。跡は聟殿刀を借ると。地かひ〳〵しくも褄引上げ向ふ目當は奴にあらず。油斷太郎が弓手の肋骨突込む刀に宅内は。フシ命拾うて逃げて行く。地宿禰太郎は急所を刺され悶躁き苦しむ息の下。身どもに何の科あつて老耄めがと言はせも果てず。詞覺えないとはいはさぬ〳〵。わが科を人に塗り。成敗をして見せだて。裾はせ折つた下着の褄先切れてある。その切れはコリヤ立田が口に聲立てさせぬ無理殺し。歯を嚙みしめ放さぬ褄先。切つた事を打忘れ。おのれが科をおのれが顯はす極重惡人。地死骸の前で敵を取る母が娘へ手向の刀。肝先へこたへたかと大の男を仕とめる老女。流石に河內郡領の。武藝の筐殘されし フシ後室とこそ知られけれ。地やゝ時移れば判官輝國只今これへ御出と。家來が申すに老母は驚き。詞丞相は先程お立ち誰を迎ひに。心得ぬ事ながら此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや。こいつはまちつと苦痛をさすと。地刀を其儘骸押退け フシ出迎へば。地輝國も早や入來り。詞お迎ひの刻限。御用意よくば早やお立ちと。地申す詞の先折つて。詞輝國殿何おつしやる。丞相の迎ひには足下の家來が先程見え。請取つて歸られたはもう一時も先の事。ヤアこれ〳〵伯母御。身が家來に渡したとは旁以て心得ず。鷄の聲に刻限量り。只今鳴いた旅宿の鷄八つに參る迎ひの約束。家來とはいうが。直に身共が參つたとて。刻限も來らず鷄も鳴かぬ先。渡したというては濟むまい。船がかりの其間伯母御に逢はすはこの輝國が情の容赦。今日の今になつて名殘も一倍。島へはやらぬ渡したといへばそれで濟むと。鼻の先な女子の了簡。菅丞相の仇にこそなれ爲にはならぬ。僞りな申されそ。イヤ僞りは申さぬ。庭で鳴いた鷄の聲。そこへごさつた迎ひの衆。渡したに違ひはないが。請取らぬとおつしやるので。娘が最期聟めがあのざま。思ひ合せば先刻に來たは贋迎ひ。コレ伯母御。内の騷動死人のあるうへ贋迎ひ嘘ではあるまい。讒者どもの所爲であらう。地一時違へば三里の後れ。追付いて取返さんと急きにせいてかけ出す輝國。詞ヤア〳〵判官先づ待たれよ。菅丞相はこれにありと 地一間より出で給ふ。覺壽は恟りさつきに別れた菅丞相。そこにはどうして〳〵と フシ

不審の立つも道理なり。地判官輝國打笑ひ。ぬけ〳〵とした伯母御の僞り暫時の仰天。丞相これにましませば輝國が安堵々々。詞見え渡つたこの御難儀。譯も聞きたし力になつて進ぜたけれど。私ならぬ警固の役目。地はや刻限も移りぬればいさ御立と勸むる所に。詞先程見えた警固の役人。たつた今門前まで。何ぢや警固がハテよい所へ戻られた。嘘つかぬ覺壽か證據これへ通し。輝國殿へ見せませう。イヤ身が名を衒つた贋役人。直に逢うては惡しかるべし。地忍んで樣子を窺はんと丞相諸共一間の障子。フシ引立て内に隱れゐる。地輿にさき立つ警固が大聲。詞コレ老母。輝國の名代とけ侮り。とでもない物身どもに渡しようぬつけりさゝれたの。これは迷惑。菅丞相を請取りながら。とでもないとは何おつしやる。アレまだぬつぺり。丞相は丞相でも。木で作つたは此方に入らぬ。肉付の菅丞相。替へる氣で持つて來た木像。コリヤ此輿にと地いふに覺壽も心付きエヽ忝い。さては魂を籠められし木像であつたかい。猶も證據を見屆けんと心の悦び押隱し。詞此方の言分合點がいかぬ。其木像見せさつしやれ。ヲヽしやちこばつた荒木作り。地サア今見せうと明ける戸の輿に召したは木像ならぬ。優美の姿菅丞相につこと笑うて立出で給へば。警固はぎよつと呆れ顏。覺壽も違ひし心當障子の内と今見る姿。心どきまぎ疑ひながら。詞ア、よう戻して下さつた。慥に伯母が請取りました。ヤアどこへ〳〵そりやならぬ。ならぬとはいふものの。連れて歸つて見たのは木像。すりかへられたと氣がついて。かへに戻つた爰ではほんの菅丞相。おれが目の惡いのか。見所によつて變るかい。地イヤ變らうがかはるまいが戻された菅丞相。いざ此方へと立寄る覺壽。ヤアのぶといと突飛ばし丞相を又輿に乘せ。戸を引立てて家來に向ひ。詞わいらも樣子を見る通り。いかにしても怪しい事ども。此分では歸られず地念のため家搜しすると。蹈込む先に宿禰太郎。半死半生のた打つ苦しみ。南無三寶太郎樣が切られてござる。旦那々々と呼ぶ聲に警固の中から親兵衞。前後も更に辨へず走り寄つて引起し。コリヤ悴。この深手はどいつが所爲。フシ相手を知らせと氣をせいたり。詞なう兵衞殿相手は姑ア、私が手にかけた。ヤア聟を手にかけ落着き自慢。何科あつて身が悴をヤアとぼけさしやんな姫殿。そいつが立田を殺した時。こなたも手傳ひ仕やろがの。娘の敵切つたが何と。贋迎ひの棟梁殿。何もかも顯はれ時。さつぱりといふた〳〵。エヽ殘念々々。悴めが出世を思

ひ。時平公に一味して菅丞相を殺さん爲。鷄に宵鳴させ。十が九つ仕終せた兵衛が方便。地獨り婆めに嗅ぎ出され殺された悴が敵。覺悟ひろげと飛びかゝるをヤアさはさせじと判官輝國。小蔭より顯はれ出で覺壽を圍うて突つ立つたり。ヤアどなたが出てもびくともせぬ。兵衛がたくみの破れかぶれ死物狂ひの働き見よと。切つてかゝればかいくゞり持つたる刀踏み落し。利腕摑んで引つくりかへし。足下に踏付け大音上げ。詞ヤア輝國が家來共。贋者めらを片端から括れ〳〵といふ聲に。地始の擬勢ねけ〳〵にフシ一人も殘らず逃失せたり。地覺壽はとつかは輿の戸の明くる間さぞやお氣詰りと。內を見ればこはいかに筐の木像又恟り。これはいかにと立歸りこなたの障子押明くれば。伯母御騷がせ給ふなと。菅丞相の御詞。爰でも恟り彼處でも。恟りびくりに心の迷ひ。どちらがどうぢや輝國殿目利なされて下されと。問はるゝ人も問ふ人もフシ呆れ果てたるばかりなり。地丞相重ねて。詞輝國の迎ひ遲參故。睡むともなく暫時の間。物騷しく聞えし故窺ひ見れば。兵衛がたくみ太郎が所爲。地立田の前ははかなき最期是非もなし。伯母御の心底さこそ〳〵。某これへ來らずばかゝる歎きもあるまじと今更悔みの御涙。詞イヤ娘が命百人にも。替へ難き大事のお身。怪我過ちのなかつたを悅びこそすれ何の泣こ。何の。〳〵と地いふ目に涙。なう輝國殿。惡事の元はその兵衛。此世の暇を早う〳〵。太郎も共にと立寄つて髻引上げ。丞相の堅固の有樣。おのれ親子に見せたが本望。娘が恨みも晴れつらんとフシ刀を拔けば息絕えたり。詞ヘエ憎いながらも不便な死ざま。地有爲轉變の世のならひ。娘が最期も此刀。聟が最期も此刀。母が罪業消滅の白髮も同じく此刀と。取直す手に髻拂ひ。詞初孫を見る迄と。貯ひ過した耻白髮。孫は得見いで憂目を見る。娘が菩提。地逆緣ながら弔ふこの尼。種々因緣而求佛道。南無阿彌陀佛と唱ふれば。菅丞相も唱名の。聲も涙にフシ回向ある。地判官輝國大きに感じ。伯母御前に先とられ跡に退つたおのれが成敗。强欲非道の皺頭と水もたまらず打落す。覺壽は木像抱き拘へ菅丞相の右手の方。御座を並べて直し置き。詞兵衛親子がたくみも顯はれ。何も彼も納まりし。地この木像の不思議な働き。かるゝ例もフシある事かや。詞いやとよ最前もいふ如く。匹夫々々がたくみも顯はれ。我が急難を遁れしも暫時の睡眠前後を知らず。木に彫み筆に書く。例は本朝名高き繪師。巨勢の金岡が書いたる馬は。夜な〳〵出でて萩の戸の萩を喰ひ。

地唐土にも名畫の譽。呉道子が畫繪の雲龍雨を降らせし例もあり。また神の尊像木佛などの。人の命に代らせ給ふ例はかぞへ盡されず。詞菅相丞が三度まで作り直せし物なれば。木にも魂備はつて我を助けしものやらん。表具詞讒者の爲に罪せられ。地身は荒磯の。ギン島守と。朽ち果つる後の世まで形見と思し召されよと。ナホス仰せは外に荒木の天神。河内の土師村道明寺に フシ殘る威德ぞ有難き。地輝國四方を打眺め。詞思はざる儀に際を取り。夜も明けはなれ候へば御立ぞふと申すにぞ。ハルフシ又改むる。暇乞。伯母が寸志の餞別せん用意の物こなたへと。刈屋姫の上着の小袖かけたる伏籠諸共に。フシ御傍近く取直させ。地浪風荒き楫枕餘寒を凌がせ申さん爲。伯母が心をたきしめた小袖を島まで召さるゝ様に。輝國のお世話ながら スヱテ頼み。まする

とありければ。詞これは宜しき進ぜ物。地苫の香防ぐとめ木の小袖家來に持たせ參らんと。立寄り伏籠に手をかくる。丞相しばしと止め給ひ。詞御恩を厚く籠め給ふ伏籠にかけし此小袖。中なる香はきかねども。名は大方伏屋か刈屋。伯母御前より道眞が。申請けし女子の小袖。我が身にはあはぬ筈。地身幅も狭き罪人が此儘にお預け申す。わが小袖と思しめし。立田の前が追善の。佛事も共にと伯母御前の心を悟る御詞。骨身にこたへ忍びかね思はずわつと聲立てて。歎くに扠はと フシ輝國も心を。感じ萎れ入る。地覺壽の心は伏籠の內。泣いたは結句あの子が爲。別れにちよつと只一目伯母が願ひを叶へてと。立寄る袖を引止め。詞お年故のそら耳か。今鳴いたは慥に鷄。あの聲は子鳥の音。子鳥が鳴けば親鳥も。地鳴くは生あるならひぞと。心の歎きを

隱し歌。詞鳴けばこそ。別れを急げ鷄の音の。地聞えぬ里の。曉もがなと フシ詠じ捨て。地名殘はつきずお暇と立出で給ふ御詠歌より。今この里に鷄無く羽たゝきもせぬ世の中。や伏籠の內をもれ出づる。姫の思ひは羽ぬけ鳥。前後左右を圍まれて。父は元より籠の鳥。雲井の昔。忍ばるゝ。左遷の身の御歎き。夜は明けたれど心の闇路。照すは法の御誓ひ。道明らけき寺の名も。道明寺とて今も猶榮えまします御神の生けるが如き御姿爰に殘れる物語。盡きぬ思ひにせきかねる涙の。玉の、木槵樹。珠數の數々くりかへし。歎きの聲に只一目見返り給ふ御顏ばせ。これぞ此世の別れとは知らで。別るゝ別れなり

第三

地鳥の子の巣に放れ魚陸に上るとは。浪

人の身の喩種。菅丞相の舎人梅王丸。主君流罪なされてより都の事ども取賄ひ。御臺のお行方尋ねんと笠ふかぐ\と深綠。フシ土手の並木にさしかゝれば。地向うからも深編笠我に違はぬその扮裝。互にそれぞと近く寄り。詞梅王丸か。これは\櫻丸。ヤレそちに逢ひたかつた。マア咄す事聞く事ありと 地兄弟木蔭に笠傾け。詞扨先づ問はう其方は日外加茂堤より。宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと。内方八重の物語。何とお二方に尋ね逢うたか。成程道にて追付き奉り。菅丞相御流罪と聞くより對面なさしめ奉らんと。安居の岸迄御供せしに御對面叶はず。詞國殿の計ひにて。御歸洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ。姫君は土師の里伯母君の方へ御出で。齋世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひながら。納まらぬは我が身の上。冥加に叶ひお車を引くそのあり難い事打忘れ。賤しい身にて戀の取持終には御身の仇となり。宮御謀叛と讒言の種拵へ。地御恩請けたる菅丞相様流罪にならせ給ひしも。皆この櫻丸がなす業と思へば胸も張裂く如く。今日や切腹。明日や命を捨てうかと。思ひ詰めは詰めたれど。詞佐太におはする一人の親人。今年七十の賀を祝ひ。兄弟三人嫁三人。並べて見ると當春より悦び勇みおはするに。地我一人缺けるならば不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝うた上と詮なき命けふ迄も。ながらへる面目なさ推量あれ梅王と。拳を握り齒を喰ひしめ。先非を悔いたるその有様梅王も理と フシ暫し詞もなかりしが。ヲ、詞道理々々。我とても主君流罪に逢ひ給ふ上は。都に留まる筈なけれど。御館沒落以後御臺様のお行方知れず先づ此方を尋ねうか筑紫の配所へ行かうかと取つ置いつ心は逸れど。其方が言ふ如く。年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの月。これも心にかゝる故思はず延引。地互に思ひは須彌大海。是非もなき世の有様と。兄弟顏を フシ見合せて涙。催す折からに。地鐵棒引いて先拂ひ先退いて片寄れと雜色がいかつ聲。詞梅王立寄り何人ぞと尋ぬれば。本院の左大臣時平公吉田への御參詣。地出しやばつて鐵棒くらふなと フシ言捨てて急ぎ行く。詞何と聞いたか櫻丸。齋世の宮菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣。存分いはうちやあるまいか成程々々。よい所で出つくはしたと。地兄弟道の左右に別れ。尻引褰げ身構へし フシ今や來ると待ち居たる。地程なく轟く車の音。商人旅人も道をよぎる時平の大臣が路次の行粧。さながら天子の御幸のごとく。隨身靑侍前後に列し大路。狹しと フシ輾せたり。地兩人木蔭を

飛んで出で車やらぬと立塞がる。詞ヤア何者なれば狼藉すると顏を見れば松王が兄弟。梅王丸櫻丸。ム、聞えた。主に離れ扶持に離れ。氣が違うての狼藉か。但しは又此車時平公と知つてとめたか知らいでとめたか。返答次第兄弟とて容赦はせぬと。白張の袖まくり上げ掴みひしがん其勢。地梅王丸似非笑ひ。ヤア詞いふな〳〵。氣も違はねばこの車見違へもせぬ時平の大臣。齋世親王菅丞相讒言によつて御沈落。その無念骨髓に徹し。出逢ふ所が百年目と思ひ設けし今日只今。櫻丸とこの梅王牛に手馴れし牛追竹。位自慢で喰ひ肥えた時平殿の臏二つ三つ五六百くらはさねば堪忍ならぬ。いはれぬ主の肩持顏出しやばつて怪我ひろぐな。ヤア法に過ぎた案外者。アレぶちのめせ引括れと。地供の侍聲々に前後左右に追取巻く。兄弟は事ともせず。取つては投退け掴んではぶち付け〳〵投付くれば フシ傍に近付く者もなし。地松王焦つて。ヤア。詞命知らずのあばれ者。いづれもはお構ひあるな。御主人の目通り御奉公は此時節。兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけん。コリヤやい。松王が引きかけたこの車とめらるゝなら留めて地見よと。鼻づら取つて引出す車。ホ、ウ詞櫻丸梅王丸爰になくばいさ知らず。一寸なりとやつて見よと。地兩人轅に手をかけてエイ〳〵〳〵と押戻せば。牛も四足を立兼ねて跡へ〳〵と フシカ、リ退り行く。松王車の後方へ廻り。兩



手をかけて力足やらんやらじの諍ひは。世にも希なる三つ子の舍人互に劣らぬ主思ひ。ナホス命限り根限り遣つつ戻しつ引合ふ車。大地は藥研と掘穿ち土ににえ込む車の轍。ヤア面倒な畜生めと。軛を放せば逸散に牛は離れて フシ馳けり行く。地 車の内ゆるぐと見えしが。御簾も飾りも踏折り〳〵踏破り。顯はれ出でたる時平の大臣。金巾子の冠を着し天子にかはらぬその粧ひ。赫々たる面色にて。ヤア 詞 牛扶持くらふ青蠅めら。轅にとまつて邪魔ひろがば。轍にかけて敷殺せ。ヤアさいふ大臣を敷殺さんと。地 二人が力に車を宙だめ。引繰りかへすを返されじと。捻合ふ松王右へ押せば左へ押し。上げつおろしつ二三度四五度。爰を先途と揉合ひしは フシ祭の神輿に異ならず。地 時平は上より金剛力。どうど踏んだる其響。車も心木も粉微塵。碎けし轅を銘々提げ

大臣を打たんと振上ぐる。ヤア 詞 時平に向ひ推參なりと。地 䁳と睨みし眼の光。三千世界の千日月一度に照すが如くにて。遉の梅王櫻丸。思はず跡へたぢ〳〵〳〵五躰すくんで働かず スエテ無念。々々と計りなり。詞 何とわが君の御威勢見たか。此上に手向ひすると御目通りで一討と。刀の柄に手をかくればヤア松王待て〳〵と。地 車より飛んでおり。詞 金巾子の冠を着すれば天子同然。太政大臣となつて天下の政を執行ふ時平が。眼前血をあへすは社參の穢れ。助けにくい奴なれども下郎に似合はぬ松王が働き。忠義に免じて助けてくれる。地 ハレ命冥加な蛆虫めらと フシ邊を。睨んで進み行き 地 振返つて松王丸。詞 よい兄弟を持つて兩人共に仕合者。命を拾うた有難い忝いと三拜せよと。地 いはれて兩人くわつとせき上げ。詞 エ、汝にも言分あれども。親人の七

十の賀祝儀濟む迄。ナウ梅王。ヲ、其上では松の枝々切折つて敵の根を斷ち葉を枯らさん。ヲ、それは此松王も親父の賀を祝うた跡で。梅も櫻も落花微塵。足元の明い中早く去れ〳〵。ヤア推參な歸るをおのれに習はうかと。地 詰寄り〳〵兄弟三人。互に殘す意趣遺恨睨んで。左右へ 三重 別れ行く。ハルフシ 春さきは。在々の鋤鍬迄も樂々と。遊びがちなる一農。一番村では年古き人に知られし四郎九郎。律義一遍取得にて菅丞相の御領分。佐太に手輕き下屋敷お庭の掃除承はり。松梅櫻御愛樹に培ひ水の養ひも。根が農りの鍬仕事我が身の老木厭ひなく。幹をこやしの百姓業 クシ 畑の世話より氣樂なり。地 堤端の十作が 鍬打ちかたげ門口から。四郎九郎殿内にかと這入るを見付けこりや十作畑へか。イヤ 詞 今仕舞うて戻つたりや嬶がいふには。何やら目出たい祝ひ

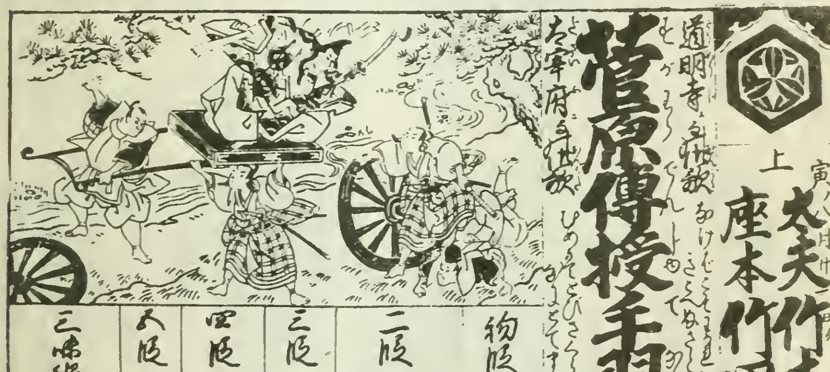
ちやてて。大きな重箱に眼へはひるやうな餅七つ。朝茶の鹽にも喰足らねど貰はぬよりも忝い。禮もいひたし。祝ひとはマア何でござる。サイノ。菅丞相樣のふつて湧いた御難儀。お下に住むおらゝが身祝ひ所ぢやなけれど。爲にやならぬさかいで爲るは爲るが。世間へも遠慮があつて。彼岸團子程な餅七つ宛配つたは。この四郎九郎丁七十。この春年頭のお禮に上つた時おらが年をお尋ね。七十と申したりや。古來稀な長生。其上珍らしい三つ子の爺親。禁裏から御扶持下され。悴共は御所の舍人目出たい〳〵。産れ月産れ日。産れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ。其日から名も更へとて。ナウ聞かしやれ。伊勢の御師か何ぞの樣に白大夫とおつけなされた。則ち今日が誕生日。白黒まんだらかいは掃溜へ投つて退け。地今日から 白大夫といふ程に さう 心得

て下され。詞それは目出たい。序ながら問ひましよ。三つ子産むと扶持下さる。其謂も聞かしやつたか。サイノ死んだ女房が産んだ時は邊り隣りの外聞。ひよんな事ぢやと思うたが勿怪の幸ひ。三つ子の爺親一代は作り取りの田地三反。日本ばかりぢやないげな。唐迄もさうぢやてて。男の子なりや御所の牛飼。女郎なれば東童とやら是も御所でつかはるゝ。法式は忝いもの。旦那殿は流罪なれど。おらは所も追立てられず下された田地は其儘。そちの嬶も若い程に。地産ますならおらに肖りやと ハルフシ咄の中道。辿り來るは櫻丸が女房八重。今日は舅の祝ひ日とて風呂敷包片手に提げ。フシ嬉しや爰ぢやと笠取れば。詞ホヽ、櫻丸が女房八重か。早かつた〳〵。外の嫁御も揃うてくるか。マア上つて抱へも解きや。アイアイまだ皆樣はお出でないか。遅かろと氣

がせいて。淀堤から三十石の飛乘り。地船の足の早いので草臥もせず早よ來たか仕合せでござんする。詞コレ四郎九殿。お客さうなもう往にましよ。エヽ四郎九郎とは物覺えがない十作。白大夫はや忘りやつたかいの。イヤ忘れはせぬわいの。餅の祝ひとは格別。名酒呑まねば何時迄も四郎九郎。ハレヤレ盛つた酒を呑まぬとは。但しはまだ呑足らぬか。合ぬけ〳〵と嘘いふわちよ。おらに酒いつ盛つた。ヲヽさつきに盛つた。樽や徳利は目に立つ故。餅の上へ茶筅の先で。酒鹽打つて地やつたので二度の祝ひ濟んだぢやないか。詞エ、それで聞えた。嗅が酒くさい餅ぢやというた。外へは遠慮でさう仕やろと。地おらは 懇だけ。晩に來て寢酒一ぱい。フシお客これにと出でて行く。詞嫁女アレ聞きやつたか。今の世の人はきめごまかで。おらが始末の手目

見付けて。晩にきて寐酒たべう。ハ、、ハ、ア、せち貿い懇ぶり。イヤ又お前も餘りな地聞きも及ばぬ茶筅酒ホ、、、ホ。ハ、、、、と。フシ嫁と舅の睦しさ。地梅王松王兄弟の。女房が來る道草も。女子の小オクリ手業笠に。摘込む蒲公英嫁菜。枸杞の垣根を目印に。サア詞叉ちお春様マア先へ。イヤお千代さんからと。地相嫁同士が門での辭宜合。白大夫可笑しがり。詞一時に產れた三つ子の嫁ども。先の後の所かい。八重がとうから待つて居やる。どちこちなしに這入れ〳〵。ほんに八重様早かつた。ござんする道なれば。春が所へ誘うても下さんしよかと。地待つた程が遅なはつて心せきな道すがら。千代様に行合うて連立つてくる道惡戲。今日の祝ひの浸にと嫁菜蒲公英二人の仕業。詞それはよう氣がついた。春様誘ふ約束も。日脚の長けたに氣ぜ

さして寄る事も忘れたに。お千代様とはよいお出合ひ。サイナ地お春様に逢うたはわしが仕合せ。賑やかな道連れ。詞それはそれぢやが親父様。料理の拵へ出來てあるかえ。イヤ出來てない。和御女達にさす合點。こて〳〵とむつかしい事はいらぬ。今朝搗いた餅で雑煮仕や。上置はしれた昆布。隙の入らぬ様に茹でて置いた。大根も芋もそこに有る。勝手は知るまい。地ヤアえい〳〵と立上れば。イヤ申し。今日の祝ひはお前が目當。料理方の出來るまで。何にも構はず一寐入りなされませ。勝手し



延享三年八月竹

らねど三人寄つて何も彼も取出す。詞さうちやてて立つた序棚な物下してやろ。コレ〳〵これ見や。祖父の代から傳はつた根來椀ぢや。折敷も拾枚。おらが息災なもこの椀折敷。堅地なとてかんまへて手荒う當るな嫁女達。このマア悴どもはなぜ遅い。地來るまでに一鼾と。體を横に差枕 フシ堅地作りの親父なり。コレ詞皆様。何ぼうあのやうに仰有つても。雑煮ばかりでは置かれぬ。地飯も焚かざなるまいし何はせいでも鰹鱠。道草の嫁菜お汁によかろ。八重さん千代さん頼みます。此春は飯仕かけうと手ん手に組板擂粉鉢。米炊桶に量り込み水入らずの相嫁同士。菜刀取つて切刻み。ちよきき〳〵と手品よく。味噌擂る音も フシ賑はしゝ。地白大夫目を覺し。詞こりや悴どもはまだ來ぬか。正月から知れてあるおらが祝ひ日。油断せう筈はないが。

ア、この中誰やら。オ、それ〳〵。今去んだ十作が咄には。時平殿の車先で三人の子供が大喧嘩。聞いてかと知らしてくれた。喧嘩の様子嬶達は知つて居よ。車先での事とあれば。時平殿に奉公する松王が女房。爰へ來て様子をいやと。地名指しに逢うたは千代が迷惑。お祝ひ事の濟むまではお前の耳へ入れぬがよいと。三人ながらその心。いらぬ事饒舌られて隠されねば申します。詞梅王様櫻丸様。二人の相手にこちの人。日頃の短氣いひ上つて兄弟喧嘩。したが氣遣ひなされますな。三人ながら怪我も



本座興行の番附

なく。其場はそれで濟んだれども。もちやくちや云うてゐられます。春さん八重さんお前方もさうであろ。氣の毒な男の不機嫌。成程々々。千代さんのいはんす通り。今日の祝ひをいひ立てて兄弟御の中直し。地親御のお詞かゝらいではと。フシ男思ひの壁訴訟。エヽ詞和御寮達に問うたらば知れうと思うた。喧嘩の筋知つてゐてもいはぬか。同じ胤腹。一時に生れた悴でも心は別々。よう似た顔を孖といへど。それもそれには極まらぬ。女夫子もあり又顔の似ぬ子ある。マア大概顔が似れば心もよう似て、兄弟の中もよいものぢや。おらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ。生ぬるこい櫻丸が顔付。理窟めいた梅王が人相。見るからどうやら根性の悪さうな松王が面構。ヤ千代が傍で麁相いうた。氣にかけてたもんな。マア怪我がなうて嬉しうをりやる。怪我の序に。孫めは健なか。連れて來て顔見せいで。ヤアとかういふ中もう七つぢや地おれが生れたは申の刻限。料理も大かた出來たであろ。詞嫁たち膳を出さぬかい。アイ／＼。地刻限の過ぎるまで連合衆はなぜ見えぬ。千代さん八重さん道まで往て見て來まいか。爰で待つより三人ながらござんせ往かう。詞ヤア嗅たち何いふぞい。子供どもは來てゐるわい。アノ來てぢやとは何處に／＼。エヽ鈍な嫁共。そこに居るを得知らぬかい。コレ三本のあの木が子供等。梅王松王櫻丸。顔は殘らず揃うてある。勿體ない菅丞相様。くゝめるやうにいはしやました。生れ日の刻限が違や悪い。祝儀には陰の膳も据ゑる習ひ。サア／＼地早うと白大夫が。いふに猶豫もなり難く俄に盛るやら箸打つやら。椀の向うの小皿に鱓。先づ一番に親父様これでお坐りなされませと。給仕は元よりならはねど見馴れ聞馴れ立振舞フシ八重が配膳御所めけり。詞イヤおれも彼處へいこ。イヤ土間では冷えが上ります。地やつぱり爰でと押供へ。これから面々夫の給仕膳を捧げて庭に下り。この梅の木が梅王殿。枝ぶりずんと日頃の氣質。八重が連添ふ男ぶり。フシ木ぶりも吉野の櫻丸。ハルフシこれは千代まで添遂げる。女夫が中の若緑色も艶々勢よい。詞松王殿で子達も揃ふ。サア親父様地目出たうお箸。フシなされませ。ホヽ詞なされうとも／＼。親がひに座が高い。子供どもへドレ挨拶。地ハテもうそれには及びませぬお加減のさめぬうち。詞イヤ／＼お春そでおちやらぬ。親でも子でも地極まつた辭宜作法と。庭に下りるも健やかに樹の前に畏り。詞子供衆。何も御座らずとも斯うまゐつて下されい。親が折角おりての辭宜。辭宜返

したうても動かれぬは知れてある。爰で〳〵。地ハヽヽ嬶たち餅を替やいのとフシ尻もちついて悦び笑ひ。地わが膳に押直り箸を取るより。ムウ〳〵詞塩梅ぢや味し〳〵。三人の嫁女達。給仕も偏いきせぬ様に。三杯は喰ふ合點で。唄おぢやらしまするぢやなんよえ。ハヽヽ詞こりや新しい三方土器誰が持つて來ましたぞ。イヤそれは八重さんの。ハテ氣が付いて忝い。春も何ぞくれるかい。地ほんに忘れてをりましたと扇三本袖土産。中の繪は梅松櫻お子達の數を祝うて。三本ながら末廣がり目出たう祝うて上げまする。詞コリヤめでたい忝い。中の繪も咄で知れた。明けて見るに及ばぬ此儘此儘。戴きますると地機嫌に千代が袂から。これは切の有合で私が縫うた手づつ頭巾。頭に合はずば縫直さう。お召しなされて下さんせ。詞ヲヽどれも〳〵不足もない心付なおくりやり物。サア盃も濟んだわ。おれが膳から上げてたも。子供等が膳は盛つた儘。冷えたであらう盛直してコレ嬶達。地二人前宛喰てたもや。詞イエ〳〵私等はまそつと待つて。主達が見えてから打並んで祝ひましよ。そんならそれよ。おれは村の氏神様へ參つて來ませう。そんならお參りなされませ。ヲヽ〳〵往きましよ。拵へて置いた十二銅そこにあろ取つてたも。三本のこの扇末廣うに。子供の生先氏神へ地賴んだり見せたりせう。ヤア八重はまだ參るまい。次手ながら連立たう。サア〳〵こちへと機嫌ようオクリ表を。へさしてフシ出でて行く。詞コレ千代さん。年寄らしやつても物覺えがよい事。こな様やこの春は氏神様知つてゐる。八重さんは今が始め。いはしやんすりや其通り。物覺えのよい親御に違ひ。物忘れする子供達。地松王殿何故遲いぞ。こちの夫もなぜ見えぬ但しは來ぬ氣か。詞今日見えいでよい物かいな。それこそ其處へ松王殿。エヽこれ女房を立つそに立たして。刻限過ぎたを知らずかい。ヤアべり〳〵と喧しい。時平様の御用あつてそれ仕舞はねば動かれぬ。先へ參つて其譯いへと云付けたを忘れたか。梅王も櫻丸もまだ來ぬさうな。親父殿も内にござらぬ。サアその親父様は八重様を同道で。地もちつと先に氏神參り。兄弟衆はまだ見えぬ。詞ソレ見いな。遲いといふおれは主持ち。梅王も櫻丸も主なしの扶持放され。用もない和郎達が遲いのが眞の遲いの。お春殿そぢやないかと。地詞の端にもフシ殘る意趣。地梅王も日脚はたける急いで來かゝり突つかゝり。松王には顔ふり背け。詞お千代殿今日は大儀。コリヤ女ども。親人と櫻丸。八重も爰にはなぜ居やらぬ。イヤ

今も松玉様のお尋ね。櫻丸様はまだ見えぬお二人は宮參り。ム、櫻丸はどうして來ぬなア。待兼ねる者は來いで。胸のわるい見とむない頬がまへと。地梅王に當てこすられ。松王が一徹短慮。詞あたぶの惡いねすり言いひ分あらば直にいやれ。何のわれに遠慮せう。わが頬がまへを見る度々ゲイ〳〵と虫唾が出る。ハ、ハ、、ハレ申したり腹の皮。この松王は生れついて涙もろい。櫻丸や其方がやうに扶持放されの痩頤。ひだるからうと思うてやるが兄弟のよしみだけ。ホ、扶持放されと笑ふ奴が。喰ふ扶持がろくな扶持か。鐵丸を食すといへども。心穢れたる人の物を請けずとは。八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時平が扶持有難う思ふはな。人でなしの猫畜生。ヤア畜生とは舌長な梅王。今一言いうて見い。ホ、望みなら安い事。畜生々々どう畜生。地もう赦されぬと松王丸刀の柄に手をかくれば。梅王も反打返し詰寄り詰めよる二人の女房。詞これはマアおとましい氣が違うたか松王殿と。地千代が夫を抱きとむれば。七十の賀を祝ひに來て親父様に逢ひもせず。反打つてどうさしやる。祝ひ日に拔いてよいかこちの人梅王殿と。刀の柄にしがみつく。女房春を取つて突退け。詞七十の賀でも祝ひ日でも。堪忍袋のやぶれかぶれ留立して怪我するな。コリヤ松王おくれたな。女房が留めるを幸ひに頬げたに似ぬ腕なしめ。ヲ、留めらるゝを幸ひとは。わが心に引較べて松王には慮外の雜言。身が女房が留めたより其方が女房が。親にもまだとの一言。肝先へきつと中り。怺へ〳〵〳〵たがもう堪らぬ。地眞劍の勝負は親人に逢つての後。それ迄の腹癒に砂かぶらせねば堪忍ならぬ。千代にこれを預けると兩腰拔いて投り出し。フシ裾引褰げて身拵へ。詞ホ、畜生めがこりやよい了簡。櫻丸が來る迄は松王が命松王に預けると。地同じく兩腰投り捨て。刄物を渡せば血はあやさぬ。女房共邪魔するなとつつと寄つて縁より下へ踏落せば。早速の松王落ちさまに諸足かけば梅王丸眞逆様に落ちかさなり。詞摑みあひ擲きあひ。組んでは放れ。離れては又組合ひ。捻付け引伏せ蹴つつ。踏んづ。コハリ双方力も同いどし血氣盛りの根競。地千代と春とは二人の兩腰。取られもせうかと氣づかひ半分傍へも寄られず。ハア〳〵〳〵と心をあせり氣をもみ上げ。詞どちらが勝も負もせず擲き合うたが二人の存分。梅王殿もうよいわいな。松王殿もう置かしやんせ。地やめて〳〵といふをも聞かず。詞勝負つかではむだ働き。投げてくれんと松王丸。嵩にかゝつて押す力。詞ひるまぬ梅王つつ

かくる。肩先ひねつてがつくりさせ。横に抱へる松の木腕。地劣らぬ肘骨詞ノリ梅の木腕。絡みもぢつて押合ふ力。地双方一度にこけかゝり。もたるゝ拍子に櫻の立木。土際四五寸殘る木の上はほつきりぐわつさりと。地折れたに驚く相嫁同士。二人が勝負も破れ角力 フシ倶に。呆れて手を打拂ひ。うろつく中へ早下向。詞アレ親父樣のお歸りぢや。白大夫樣のといふ聲に。地二人は肩入れ裾おろし。腰刀差す間もあらず戻られし。年は寄つても怖いは親。上へも上らず犬蹲踞。詞今日の御祝儀お目出たいと。地祝儀は述べても赤面し フシ塵を捻らぬばかりなり。地親はほや〳〵機嫌顏。詞婢達が先へ來て七十の賀を祝うてくれたで。今日の祝ひはさらりと仕舞うた。知れてある刻限遲いは何ぞ障りがあつて來ぬに極めた。梅王松王ようこそ〳〵來てくれた。コレ二嫁女。煮くちたであらうが雜煮祝はしてたもつたかと。地折れた櫻は見ながらも誰が所爲ぞと咎もせず。呵る所を呵らぬ親 フシ一物。ありと知られたり。地梅王丸懷中より用意の一通取出し。詞祝儀すんで候へば私の所存の願ひ。これに書付け候ふと親の前に差出せば。地松王も亦一通身の上の願ひ是にありと。同じ所へ直せしは フシいひ合せ。たる如くなり。地白大夫打笑ひ。詞心やすいは親子兄弟夫婦。かう並んだ中願ひあらば口ではいはいで。ぎつとした此書付。さらばおらもぎつとして代官所の格で捌くと。地願書手に取上げつぶ〳〵讀むも口の中。願ひは何やら聞えねど。春と千代とは夫の心知つてゐる筈跡先を。知らねば案じるは八重一人。三人の兄弟諍ひ親父樣お頼み申し。今日中直しと云合はした。千代さん春さんこりや何ぞい。何をいうてもこちの人。櫻丸殿ござらぬ故心當が皆違うた。道で眩暈が發つたかと見えぬ男を案じるやら。二人の願ひも氣にかゝり。スエテ小首傾け案じゐる。親父は二通讀み了ひ。詞コリヤ梅王。そちが願ひに旅へ立つ隙くれとは。ムヽ推量するに外でもあるまい。菅丞相のござる島か。成程成程。結構な御殿に引かへ。埴生の小屋の御住居。御用聞く人なければ。梅王下つて御奉公仕らん。身のお暇と申しける。ム、恩を知らねば人面獸心というてな。顏は人でも心は畜生。島へ參つて御奉公がしたいとは。まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリヤヤイ。御臺樣や若君樣お變りも遊ばされず。ござる所も知れた上旅立の願ひぢやな。イヤ御臺樣は其以來お目にもかゝらず。御座所も存じませぬ。併し女儀の御事なれば。若君樣とは又格別。地菅秀才の御事は憐にとい

はんとせしが。松王を尻目にかけ。詞惜に所は存ぜねども息災に御座ある噂。ヤイ馬鹿者。大切な菅秀才様。息災なを聞いたばかりお目にもかゝらず在家も知らず。それでおのれ忠義が濟むか。女儀の身と吐かしをる御臺様は主ぢやないか。コリヤやい。尤も御不自由な配所のお住居。お傍へ參つて御用を聞く。膝行役の奉公はこの白大夫がよい役ぢやわい血氣盛り奉公盛り。菅丞相の所緣とあれば。根掘り葉掘り絕やさんとて鵜の目鷹の目。油斷ならぬ讒者の所爲。すはといふ時身を惜ます。御用に立つ所存はなうて。膝行役を願ふは命が惜しいか。敵が怖いか。旅立の願ひ叶はぬ〳〵取上げぬと。地願書顔へ打付けてはつたと睨む老の腹立。道理至極に梅王夫婦 フシ誤り入つたる風情なり。詞ヤイ松王。そちが此願ひを見れば。勘當を請けたいとな。ハア。ハ、神武天皇様以來珍しい願ぢやな。ハ、、、不孝といはゞ譬のないやつ。餘り珍しい願ひなれば 地聞屆けてくれるぞと親の了簡。ハ、ハア忝しと悦ぶ松王勇み立ち。親子兄弟の緣を切る所存も問はず赦されしは。この松王が主人へ忠義。推量あつての事なるべし。ハ、、、詞いかさま口は調法な物ぢやな。主人への道立て臍がくねる。道も道によつてな。横に取つて行く道を。蟹忠義といふわいやい。甲に似せて穴を掘ると。勘當請ければ兄弟の緣も離れ。時平殿へ敵對はば切つても捨てん所存よな。尤も善惡差別なく主へ義は立つにもせい。親の心に背くをな。天道に背くといふわい。望み叶へてとらする上は人外め早や歸れ。地隙どらば親子の別れ竹箒くらはさうと筋骨立てて怒る聲。松王は思ひの儘女房來いと引立て行く。千代はさすがに親兄弟名殘も惜しき相嫁の。顔を見る目もあかれぬ涙 フシ袂絞つて出でて行く。ハレヤレ詞嬉しや面倒な奴片付けた。そこな馬鹿者。御臺若君の御行方尋ねにいかぬか。地うせぬかと。これも手强うきめ付けられ。詞そんなら島へは。サア行く所へはおれが行くわい。地出て行け〳〵をこはがるお春。八重様後でよいやうに。お詫言をと云捨てて。夫婦は門へ白大夫はフシ唾を。呑込んで奥へ行く。地兄弟夫婦に引別れ取殘されし八重が身の。仕廻もつかぬ。フシ物思ひ門へ立つそに待つ夫。思ひがけなき納戸口刀片手に莞爾と笑ひ。詞女房共待ちつらんと。地聲にびつくり走りより。ヤアいつの間にやら來たともいはず。案じる女房を思はぬ仕方。兄弟衆の事について親父様のお腹立。其場へは出もせいで。詞マアなんで此方様は納戸の内に。エ、これナア。地譯を聞かし

てノ＼と。フシ聞きたがるこそ道理なれ。地暫くあつて白大夫。食出鍔の小脇差。三方に乗せしを〳〵と。出づるも フシ老の足弱車。地舎人櫻が前に置き。用意よくばとく〳〵といふに女房が又悑り。詞コリヤ何ぢや親父樣。櫻丸殿どうぞいなア。何で死ぬのぢや 地腹切るのぢや 上スヘリ切らねばならぬ譯ならば。未練な根性さぎやしませぬ。こなさんが云はれずば親父樣の只一言。案じる胸を休めてたべ。お慈悲〳〵と ハルフシ手を合せ泣くより。外の事ぞなき。詞ヤア親人に何御苦勞。地是迄馴染む夫婦の中所存殘さず言聞かさん。詞某が主人と申すもお畏れ多き齋世の君樣。百姓の悴なれども。菅丞相の御不便を加へられ。親人へは御扶持方。御愛樹の松梅櫻。兄弟が名に象り。松王梅王櫻丸 地悍りありや。フシ冥加なや 地烏帽子子になし下され御恩は上なき築地の勤め。三人の其中に櫻丸が身の幸ひ。人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公。下々の下々たる牛飼舎人。勿躰なくも身近く召され。菅丞相の姫君とわりなき中の御文使。仕了せたが仇となつて讒者の舌に御身の浮名。終には謀叛と云立てられ。菅原の御家沒落。是非もなき次第なれば。宮姫君の安堵を見屆け。義心を顯はすわが生害。詞今朝早々爰迄來て右の段々。生きてゐられぬ最期の願ひ。聞屆けて切腹刀。親の手づから下されたわい女共。地我に代つてお禮も申し死後の孝行賴むぞと義を立て守る夫の詞。女房わつと聲を上げ。仇なる戀路のお媒介親王樣の御惡名。丞相樣の流され給ふその言譯に切る腹なら。この八重も生きてはゐられぬ。私は殘つて孝行せいと胴慾にもよういはれた。それよりはまだむごい腹切る禮を申せとは。それが何の禮どころ無理な事いふ手間で。一緒に死ねとコレ申し女房の願ひ立ててたべ。親父樣の思案はないか俯向いてばかりござらずとも。よい智惠出して下さりませ。夫の命生死は親父樣のお詞次第。お前は悲しうござりませぬか。親の手づからこの三方。腹切刀は何事ぞと。恨みつ賴みつ身を フシ投伏し悶え。こがるゝ有樣は。ハルフシ物狂はしき風情なり。地白大夫顏ふり上げ。子に死ねといふ腹切刀。むごい親と思ふ言譯ではなけれどな。詞この曉はわが身の祝ひ。いつもより早く起き門の戸明くれば櫻丸。ヤレ早う來てくれた。陸ならば夜通し。但しは船か。まア此方へと呼入れて樣子を聞けば右の次第。白大夫づれが悴には驚き入つた健氣者。とゞめても聞入れず。今日の祝儀しまひ迄。女房が來ても逢はしはせぬ。おれが出いといふ迄は納戸の内に隱れて居いと。地一寸延し

に命をかばひ。助けてよいか悪いかはおらが了簡に及ばず。神明の加護に任さんと。詞最前祝儀にくれた扇三本。幸ひ繪には梅松櫻。子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置き。信を取つて御鬮の立願。櫻丸が命乞ひ。中の繪は上から見えぬ三本の此扇。初手に櫻をとらしてたべ上らせ給へと再拜祈念取上げた扇開けば梅の花。南無三これは叶はぬ告か。神の心を疑ふ御鬮の取直しせぬものなれども。助けたいが一ぱいで取直す次の扇。今度も違うて又松の繪。地頼みも力も落ち果てて下向すりや折れた櫻。定業と諦めて腹切刀渡す親。詞思ひ切つておりや泣かぬ。そなたも泣きやんな。ヤ。ヤ。、、、アレ聞いたか女房共地櫻丸が命惜まれて老人の心遣ひ。御恩も送らず先立つ不孝。御赦されて。フシ下されい。地下郎ながら恥を知り義の爲に相果つると。三方取つて戴くにぞ。もうコレ今が別れかとスヱテ泣くに泣かれぬ夫の覺悟。白大夫目をしばたゝき。詞潔い悴が切腹。介錯は親がする。地その刀コレ見やれと懐から取出すは。願ひ込んだる鉦撞木。コレ詞この刀で介錯すれば。未來永劫迷はぬ功力。地利劒卽是彌陀號と。撞木を取つて打鳴らす。ハルフシ鉦もしどろに。南無あみだ〳〵。南無あみだ。〳〵。南無あみだ〳〵〳〵。地念佛の聲と諸共に襟押寛げ九寸五分。左手の脇へ突立つれば。八重が泣く聲打つ鉦も。拍子亂れて。南無あみだ〳〵〳〵〳〵。地右の肋へフシ引廻し。詞悍りながら御介錯。ヲヲ地介錯と後へ廻り撞木振上げ。南無阿彌陀佛と。打つや此世の別れの念佛。九寸五分取直し吭のくさりを刎切つて。フシかつぱと伏して息絶えたり。地八重が覺悟もこの場を去らず夫の血刀取上ぐる。枳殼の陰より梅王夫婦走り寄つて。こりや何事と九寸五分捥取り捨て親の前に畏り。詞先程歸れとありし時表へは出たれど。櫻丸が來ぬ不思議と。丞相様の御秘藏ありし。櫻の折れたを詮議もなされぬ。彼是不審に存ずるから裏より忍び立戻り。始終の様子は承はつた。地是非に及ばぬあの樹と共に枯れし命の櫻丸。兄弟の最期餘所に見て。親人の鉦鼓に合せ。女夫の者が忍びの念佛。あつたら若者殺せしと。悔む夫婦も聞く親も。八重も死なれぬ身の繰言スヱテ是非も涙に。南無阿彌陀佛と。ハルフシ鉦打納め。撞木とかはる杖と笠。白大夫は片時も早く。菅丞相の御跡慕ひ島へ赴く現世の旅立。櫻丸が魂魄は未來へ旅立。この亡骸梅王夫婦頼むぞと。八重が事迄つど〳〵に頼む詞の置土産。冥途のみやげは只念佛。南無阿彌陀佛。〳〵。南無あみだ

佛〳〵。地南無あみだ笠打被り。カヽリ西へ。行く足。十萬億土。亡骸送る親送る。生きての忠義死したる義臣。一樹は枯れし無常の櫻。殘る二樹は松王梅王。三つ子の親が住所。末世にそれと白大夫。佐太の社の舊跡も神の。恵と知られける

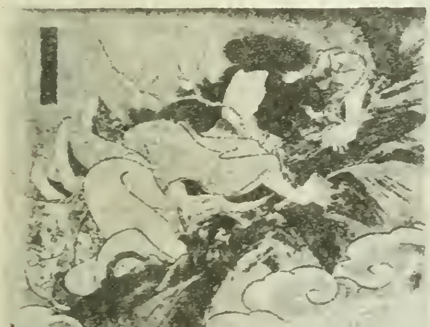
第四

三下り唄 君を思へばよやヨホイホ結ばれ糸のハリナ。とけぬ心がつろござるいよ辛ござる。つらき筑紫にナホスフシ立つ年月。ハルフシ 御いたはしや。菅丞相。地讒者の業に罪せられ。埴生の小家の起臥も。本フシ 昨日と暮れて今日は早や。地延喜三年如月半。空も春めく野山の眺めオクリ野飼に。召させ奉る。わが樂みは在郷唄。唄君を思へばよやヨホイホ。詞ハ、、、ハア何をがなお氣晴し。しはらくさいどつてう聲。牛殿の手前も面目ない。エ、見れば見る程見事な毛並。角の構へ眼の備へ。頭持の様子骨組肉合。地惣毛一色眞黒々牛。渡り繻子も及ばぬ色艶。天角地眼一黒直頭耳小歯違。天晴御牛候よちよくらのちよせいと。フシ譽めにける。地菅丞相は めづらかに。スヱテ聞馴れ給はぬ譽詞。詞ヤイ白大夫。地春は耕へし。秋は刈穂の稲を負ほせ。耕作の助けとなる牛の善悪よく知る筈。詞天角地眼と申せしは。角と眼の備への事。一石六斗二升とは。地牛を買取るその價升目を積るものやらん。フシ語れ聞かんと仰せける。詞さつてもしたり。天下にありとあらゆる事ども。餘さず漏さず知つてござる丞相様。牛の事は御存じなく。お尋ねに預かるは。百姓に生れた一德。お慮外ながら。牛の講釋聴かしやりませ。一黒と申すは。俵物の石目ではござりませぬ。毛色を吟味する時は。黒いが極上それで一黒。次に直頭とは天窓の見所。頭とは頭。どつちへも傾かず。まんろくながよいさかいで直頭と申します。耳小の耳は耳。小はちひさし。随分耳はちひさいを好みます。歯違とは。きやつがおねおねにれを嚙む。上下の歯先揃ふは悪し。五一に生えたが歯違の歯の見所。地次第を上から云立つれば。いちこくろくとうにせうはちがふ。牛の講釋もう。フシ仕舞でござまする。詞誠に性は道に依つて賢し。白大夫が咄を聞き。地一つの徳を得たるわと。仰せにひよこ〳〵小躍りして。詞こりやマアあんたる仰せぞい。親の代から御領分の百姓。三つ子の事迄お世話になされ。御恩に御恩有難うて。寝た間も忘れぬこの親と違うて。三人の悴ども。一人は死ぬる。跡二人は氣も揃はず。面倒な奴等打放つて。此太宰府へ参つたは去年の三月。うそ淋しい不自由な

お住居。一年の日數は經てど。月見花見に出もなされず。今日は何と思召し。牛引けとある御意が出て。私が皺も腰も。ア、延びやかな春の野面。安樂寺へお參詣は。御歸洛の御立願でござりませう。否とよ我に科なければ。佛に苦勞かけ奉り。身の上祈る心はなし。地讒者の業としろし召さば罪なき事も世に顯はれ。歸洛の勅諚下るべし。それ迄は菅丞相。長地月にも花にも目はふれず私なき臣が心帝はしろし召されずとも。天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは此曉ふしぎの靈夢。詞菅丞相が愛樹の梅。今如月の花盛り。地都の住居思ひ寐の枕の硯引寄せて。筆に任せて斯くばかり。東風吹かば。匂ひおこせよ梅の花。主なしとて。春な忘れそと。心を述べて。睡みしに。地妙なる天童わが枕に立たせ給ひ。詞汝憐愍の心深く。仁義を守る忠臣の功。心なき草木まで情を受けし主を慕ひ。地花ものいはねど其驗安樂寺へ詣で見よと。示現に依つて宣ふ所へ。安樂寺の住僧杖を賴りに老の足。それぞと見奉りしより。小腰を屈め立寄れば。丞相鞍より。ハルフシ下ルりさせ給ひ。詞住侶の步行は何處へぞ。我は貴院へ行く折から。これにて對面祝着々。ハア愚僧儀も外ならず。公の御目にかゝりたく參る仔細餘の義にあらず。夜前ふしぎの靈夢の告。御慈愛の梅一樹。配所の主に見せよとある。地示現にかはらぬ觀音堂の左の方。一夜に生出づる不思議さよと。語るも聞くも正夢の割符を合せし如くなり。これより寺へは程近しと オクリ住侶へ伴ひ御步路。地安樂寺に入り給へば。それぞとしるき梅花の薫袖に フシ留木の心地せり。地暫くこれにて御詠と。床几直させ褥を設け。御菓子小竹筒と住持の饗應。白大夫はこつてこて梅の土際覗き廻り。詞こりや不思議。イヤ希代ぢや。申し丞相樣。道すがらお住持の夢咄。へ、何をやらるゝやら。そんな事がようあらうと。誠しない事疑うてをりましたが。來て見て恟り。此木の枝ぶり花の匂ひ。佐太のお下屋敷に預かつてをりました。それぢや／＼。其梅でござりまする。ア、神佛の告は爭はれぬ。おらが爰へ來た跡では。水一杯飮まし人もあるまいに。ぶき／＼とした木の色艶。芽立の氣條がつういつい。花はうざる程付いたれば。梅漬の時分二三斗は慥に生らう。地四五升は地を借つた年貢代。お寺へも進ぜます。跡は此方の實入り／＼。詞今は先づ腹の實入り。御馳走酒下さりましよ。ア、これお酌。白大夫が盃は。いつつでも此天目。立酒は氣にかゝると。地床几の傍にちよつ踞ひ。口も心も有の儘。フシ見えた通りの律義

者。地花の眺めに一入の興を催しおはする所に。そりや喧嘩よアリヤ拔いた。切合うてそりや來るわ。寺内へ入れな門打てといふ間あらせず踏込み〳〵。打合ひ戰ふ侍二人。寺僧は驚き白大夫。御座を圍うてア・これ〳〵。詞見れば双方旅装束。喧嘩はふり物とあつてから。爰で仕舞は付けさせぬ。地出やれ〳〵といふをも聽かず。切合ふ一人はわが子の梅王。コリヤまあ其方は何として。ハア〳〵ひあいな切られなと。氣をもみ焦る親心。詞聲の助太刀相手の刀。梅王に打落され逃ぐるを遁さず飛びかゝり。片手摑みに筋斗打たせ。地膝にかためしフシ健氣の振舞。詞ヤレ〳〵出かした手柄々々。ヤ手柄はしたが喧嘩の次第。次には其方が下つた樣子。都の事を案じてござます。幸ひこれに丞相樣樣子一々申上げい。ハツハア恐れながら梅王が念願達し。變らせ給はぬ御尊體。見奉るは生涯の本望。都に御座あるお二人樣。世を忍ぶお身なれば一所には置きまされず。若君樣は武部源藏に預け置き。私が妻。櫻丸が女房。八重と春とは御臺樣の御介抱。お身の上は差置かれ。配所の樣子見て參れと。仰せに幸ひ出船の手番。地天運に叶ひ日和まん。千里一跳ね日數も込めず。夜前この地へ筑紫船。乘合ひの中に時平が家來鷲塚平馬。詞この梅王を見知らぬ馬鹿者。ふづくりかけて樣子を問へば。菅丞相を殺しに來たと。おのれが口から最期を急ぐ。地寺にござるをよう知つて直に仕かける不敵者。梅王が御土產と早繩かけてぐつと締め上げ。緣柱に猿繋ぎハズミフシ心地よくこそ見えにける。地丞相御悅喜淺からず。戀しき都の樣子を知らす。忠義の花は有情の梅王。示現によつて飛來る花は非情の此梅の木。有情非情も隔てなく菅丞相を慕ひ來る。梅に褒美の御言の葉。梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に。何とて松の情なかるらん。〳〵松王は時平が舍人。枯れし櫻は宮の舍人。梅王はわが舍人。花の榮えは安樂寺その名も高き飛梅のフシ不思議は今に隱れなし。詞ヤイ梅王。有難い今の御歌。この梅に准へ其方をお譽め遊ばし。櫻は枯るゝ世の中とは。死んだ悴を御悔み。つれなかるらんとある松王めは。時平に追從してをろな。ホ、親人の推量違はず。兄弟といふも穢はしい。畜生めは差置いて。さす敵は此鷲塚。地サア時平がたくみ白狀せい。いやといへば刀の引導。どうぢや〳〵と立ちかゝる。詞アこれ聊爾あるな。主從の義を立てぬき。命にかへていはぬ古風。いはして置いて殺すも古風。新らしう助かる樣に殘らず申す。時平殿は王位の望み。邪魔になる菅丞相首取つて立歸

れ。軍陣の血祭して大望の旗を上げ。天皇親王院の御所。片端了うて天下を一呑。身共も公家になる樂み。空悦びの裏ヵ來て。恥を晒す縛り繩。早う解いて下さりませと。地時平が叛逆一々殘らず。聞し召されし菅丞相。柔和の形相忽ち變り。御背に血をそゝぎ。眉毛逆立ち御憤り。都の方を睨みつけ物狂はしく フシ立ち給へり。地白大夫悔りし。詞知れてある時平がたくみ。今聞いたか何ぞの樣に。ついど覺えぬ怖いお顔。爰から睨ましやましても。都へは屆きなせぬ。御持病の痞が發れば。地ゼヘン悲しうござりますとスヱテ老のぐど〳〵物案じ。詞やをれ梅王白大夫。時平の大臣が謀叛の企て。聞捨てられぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず。王位を望む朝敵と。しろし召されぬ玉體危し。地臣が忠義徒らに。此所に朽果つる。骸は虚命蒙るとも死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立歸り帝を守護し奉らん。天に誓のわが願ひ驗は目の前白梅の。氣條ぽつきと折取り給ひ。詞朝敵一味の佞人輩。退治の手始めこれ見よと。地枝にてちやうど打ち給へば。平馬が首は飛梅の氣條も花の亂れ焼。眞の劒も及びなき梅の名作御手の中。フシ親子は恐るゝばかりなり。詞ヤア汝等。かかる大事を聞くからは片時も早く都に上り時平がたくみ奏聞せよ。色我は見上ぐるこの高山絶頂に三日三夜。立行荒行根氣を碎き。梵天帝釋閻羅王三天王に誓を立て。魂魄雲井に鳴雷十六萬八千の。首領となつて眷屬引連れ都に上り。詞謀叛の奴輩引裂き捨てん。現世の對面これ迄なり急ぶれやつと地御聲も。コハリ共に烈しきはやち風。蔀吹立て〳〵本堂の甍破れて庫裡方丈。遣戸は木の葉の如く。庭の立木も飛梅も。ナホスフシ花も砂も吹きしきる。地親子も住寺も大きに驚き。詞期も來らざる御身を捨て。天帝へ祈誓ある。御本意は達するとも。地御臺姫君若君の御歎きはいかばかり。とゞまり給へと御袖に。取付



く梅王白大夫。弓手馬手へ撥飛ばし。詞ノリ佳僧いたくな留め給ひそ。早や天帝の恵みによつて。形は此儘鳴神の。地ふしぎを見せんと散り殘る。梅花を取つて口に含み天に向つて白梅花。渦く花びら火焔となつて。雲井遥に行末は怪し。恐ろし三重へ夢破る。地門山伏が螺の貝吹立て〱北嵯峨の。サハリ在も山家も抜目なく。役の行者の跡を追ひ。朝夕してやる五器膳器。五器の實 フシ修行と知られたり。詞ア、やかまし御奉禮殿貝吹いて下さんな。頼うだ方のお氣結ぼれ夜はろくに御寢ならず。今とろ〱とお睡み。アレまだいの斷りいうても聞入れぬ。無法禮殿止めやらぬかそしてから無遠慮な。笠も脱がずに内へ這入り。うそ〱と何見やる。女子ばかりと思やつたら當の槌が違ひましよ。サア出やらぬか往にやらぬかと。地呵りこかされ御奉禮門へは出れど目は後に。フシ心残して立歸る。地エ、どんな奴がうせをつて御機嫌は如何ぞと。障子の此方に手をつかへ。思ひがけない螺の貝お目も覺めう。お痞はのぼらぬか。八重さんいかがと尋ぬれば。詞サレバイナ。いつにない御臺様すや〱と寐入ばな。貝に驚きなされたか總身に冷汗。思へば憎い山伏づら。サア私も腹が立つて。入れる手の中もやらなんだと。地二人が咄に御臺所。イヤなう山伏の業ではない恐ろしい夢



を見て。動氣が今に納まらぬ。その夢の物語。春も八重も聞いてたも。詞所は宰府安樂寺。連合の御秘藏が筑紫へ飛梅。梅王丸も一時に下り合せた御悦び。梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に。地何とて松のつれなかるらんと即座の御詠歌。一字も忘れず覺えしは。物の知らせのフシ正夢か。地まだ其上に時平の家來。詞丞相樣を殺すたくみ。事顯はれて都の樣子。王位を奪ふ敵の企て白狀するをお聞きなされ。以ての外なお腹立ち。地赦免なければ歸洛も叶はず。危いは天皇のお身の上。帝釋天へ祈誓をかけ鳴雷の神となつて。時平に與せし同類ども。蹴殺し捨てんとお憤り。その凄まじさ恐ろしさ。夢とはさらに思はれずと語り給へば二人の女房。詞お案じなさるは御尤もさりながら。逆夢と申しますれば却てめでたき御吉左右。なう春さんさうでないか。成程さうぢや。追付け御歸洛なされませう。したが今來た山伏づら。編笠で顏も見せず物もいはず。うそ〳〵覗いて去にをつたが如何にしても氣にかゝる。夫梅王殿の指圖にてこの嵯峨に人知れず。御臺樣のござりまするを嗅出しに來た敵の犬。地白大夫樣梅王殿も。筑紫へ下つて我々ばかり。もう爰にも置かれませぬ。幸ひ此頃承はれば。詞法性坊の阿闍梨樣。下嵯峨へ來てぢやげな。丞相樣とは師弟の約束。右の樣子を申上げ御臺樣の御事を。お賴み申して今日中に。早う所が替へましたい。わしや一走り往て來やんしよ。八重さん萬に心を付け。油斷して下さんすな。ヲ、春さんのよう氣が付いた地太儀ながら往て下さんせ。跡は氣遣ひさしやんすなと男勝りのかひ〴〵しさ。御臺もことなう御悦び。詞コレ春。僧正樣に逢やつたら。夢の事もお話し申し。善惡の譯聞いてたも。アイ〳〵。何も彼も心得てをりまする。地兎角は緩りとしてゐられぬと。抱するやら笠取るやら。追付け吉左右お知らせと。フシこつ〳〵してこそ急ぎ行く。地程もあらせず時平が家來星坂源吾。あれこそ丞相の御臺よと手の者連れて駈け入るを。手早く八重は長押の長刀。御臺を奥へと目で知らせ。詞何者なれば踏込んで狼藉。目に物見せんと振廻す。ヤア小ざかしい女め。時平公の仰せを請け御臺を迎へに來つたり。地邪魔ひろがば討取れと。下知に隨ひ茅花の穗先切立て〳〵三重へ追ひまくれど。地多勢に無勢數ケ所の疵。長刀杖に立歸り。詞ナウ御臺樣もう叶はぬ。はやう退いて下さりませ。春樣はまだ歸らずか。エ、口惜しい〳〵。地無念々々と云ひ死に。はかなき八重が最期の有樣。御臺は前後も辨へずスヱテ死骸に取付き御歎き。

ら私が呼びに參りましよ。いえ〳〵幸ひ私も參つて來る所があれば。そのうちにはお歸りでござりませう。コレ三助。其持つて來た物あなたの傍へ上げませ。アツと地答へて堺重。框に乘せたる一包。フシ內儀の傍へ差出す。詞これはまあ〳〵いはれぬ事を。イヤおはもじながらこの子が參つた印。此堺重は子達への土產。地取弘めて下さりませといはねど知れし蒸物煮染。わが子に世話を燒豆腐。粒椎茸の入つたるは フシ奔走子とこそ見えにけれ。詞是はマア何から何まで取揃へて御念の入つた事。地戾られたら見せませう。詞イヤモほんの心ばかり宜しうお賴み申上げます。コレ小太郎。ちよつと隣村まで往て來る程に。おとなしうして待つて居や。惡あがきせまいぞ。御內證樣往て參じましよと。地表へ出づれば母樣わしも行きたいと。縋り付くを振放し。地嗜めよ。大きな形して跡追ふのか。御覽じませまだ頑是がござりませぬ。ソリヤ道理いなドリヤ小母がよい物やりましよ。地つい戾つてやらんせと。目で知らすればアイ〳〵ついちよつと一走りと。跡追ふ子にも引かさるゝ振返り見返りてオクリ下部へ引連れ急ぎ行く。地どりやこちの子と近付にと若君の傍へ寄せ。機嫌紛らす折からに。立歸る主の源藏常に變りて色蒼ざめ。內入り惡く子供を見廻し。詞エヽ氏より育ちといふに。繁華の地と違ひ。いづれを見ても山家育ち。世話がひもなき役に立たずと。地フシ思ひありげに見えければ。地心ならず女房立寄り。詞いつにない顏色も惡し。振舞の酒機嫌かは知らぬが。山家育ちは知れてある子供。憎躰口は聞えも惡い。殊に今日は約束の子が寺入して居まする。地性惡い人と思ふも氣の毒。機嫌直して逢うてやつて下されと。小太郎連れて引合せど差俯向いて思案の躰。いたいけに手をつかへ。詞お師匠樣今から賴み上げますと。地いふに思はず振仰向き急度見るより暫くは。打守り居たりしが。忽ち面色和らぎ。詞扨々器量勝れて氣高い生れつき。公家高家の御子息と云うてもおそらく恥かしからず。ハテ扨そなたはよい子ぢやなうと。地機嫌直れば女房も。詞何とよい子よい弟子で。ござんしよが。好いとも〳〵上々吉。シテその連れて來たお袋は何處に。サお前の留守なら其間に隣村まで往て來というて。ヲヽそれもよし〳〵大極上先づ子供と奧へやり機嫌よう遊ばし召され。それ皆お暇が出た。小太郎共に奧へ〳〵と。地若君諸共誘はせ。フシ跡先見廻し夫に向ひ。詞最前の顏色は常ならぬ氣相。合點の行かぬと思うた所に。今又あの子を見て打つてかへての機嫌

地星坂透さず走りより引立て行かんとせし所に。以前の山伏のつさ〳〵と顯はれ出で。いで其御臺を齋料と。飛掛つて源吾が首筋。掴んで目より高く差上げ。冥途の旅へうせをれと泥田の中へ頭轉倒。直に御臺を引抱へ。石原砂道嫌ひなく飛ぶが如くに。三重へ進み行く。地一字千金二千金フシ三千世界の。寶ぞと。敎へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才。武部源藏夫婦の者いたはり傅きわが子ぞと。人目に見せて片山家。スエテ芹生の里へ所替。子供集めて讀書の器用不器用清書を。顔に書く子と手に書くと人形書く子は天窓掻く。敎ゆる人は取分けてフシ世話をかくとぞ見えにける。地中に年かさ五作が息子コレ見なこれ見や。詞お師匠様の留主の間に手習ひするは大きな損。おりや坊主天窓の清書したと。地見せるは十五の涎くり若君はおとなしく。詞一日に一字學べば三百六十字との敎。そんなこと書かずとも本の清書したがよいと。地八つになる子に呵られて。ませよ〳〵と指さしてフシ誂戯かゝるを殘りの子供。詞兄弟子に口過す涎くりめをいがめてやろと。地手ん手に硯尺振廻はす自然天然肩持つもフシ傳ふる筆の威徳かや。地主の女房奥より立出で。詞又こりや例の鬪諍かおとましや〳〵。今日に限つて連合の源藏殿。振舞に往てなれば戻りも知れぬ。ほんに〳〵こなた衆で一時の間も待兼ねる。今日は取分け寺入もある筈。晝から休ます程に。皆精出して習た〳〵。地ソリヤ又嬉しや休みぢやと。ハズミフシ筆より先に讀む聲高く。詞いろはに。此中は御人被下。一筆啓上地とり〳〵のハルフシ男が肩に堺重。文庫机を擔はせてホオクリ利發らしき女房の七つばかりな子を連れて。賴みませうと云ひ入るゝ。内にもそれと早や悟り。此方へお入り遊ばせと。いふもしとやかアイ〳〵と愛に愛持つ女同士フシ來た女房は猶笑顔。詞私事は此村端に。輕う暮してをる者でござりまする。此わんぱく者をお世話なされて下さりよかと。お尋ね申しにおこしましたれば。おこせ世話してやろと結構なお詞にあまへ。早速連れて參じました。内方にも。御子息様がござりますげなが。どのお子でござりますぞ。アイこれが源藏殿の跡取でござります。コレハ〳〵よいお子様や。外にも大勢の子達いかいお世話でござりましよ。アイ御推量なされて下さりませ。シテ寺入は此お子でござりますか。名は何と申します。アイ小太郎と申しまして。わんぱく者でござります。イ、ヤイヤ。氣高いよいお子や。折惡う今日は連合源藏も。振舞に參られました。これはマアお留守かいな。お待遠な

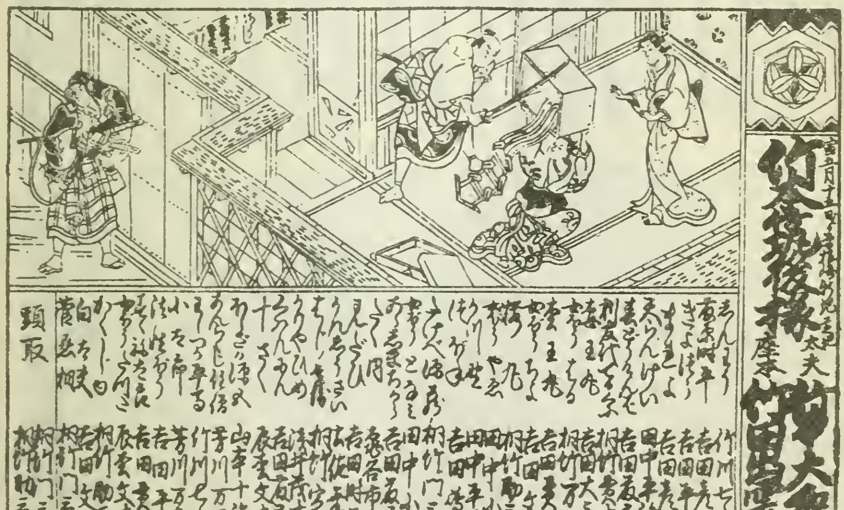
顔。猶以て合點行かずどうやら様子がありさうな氣遣ひな。聞かしてと問へば源藏。詞ホヽウ氣遣ひな筈。今日村の饗應と僞り某を庄屋の方へ呼付け。時平が家來春藤玄番。今一人は菅丞相の御恩を被ながら。時平に隨ふ松王丸。此奴病み耄けながら檢分の役と見え數百人にて追取卷き。汝が方に菅丞相の一子菅秀才。わが子として匿ふ出訴人あつて明白。急ぎ首討つて出すや否や。但し踏込み請取らうや。返答如何にと退引ならぬ手詰。是非に及ばず首討つて渡さうと請合うた心は。數多ある寺子の內。いづれなりとも身代りと思うて歸る道すがら。あれかこれかと指折つても。玉簾の中の誕生と。孤垂の中で育つたとは似ても似付かず。所詮御運の末なるかいたはしや淺ましやと。地屠所の歩みで歸りしが天道のひかへ强きにや。詞あの寺入の子を見れば。まんざら烏を鷺ともいはれぬ器量。地一旦身代りで欺き此場さへ遁れたらば。直に河內へお供する思案。今暫くが大事の場所と語れば女房待たんせや。詞其松王といふ奴は三つ子の內の惡者。若君の顏はよう見知つてゐるぞえ。サアそこが一かばちか。生顏と死顏は相好の變るもの。おもざし似たる小太郎が首よもや贋とは思ふまじ。よし又それと顯はれたらば松王めを眞二つ。殘る奴輩切つて捨て。叶はぬ時は若君諸共。死出三途の御供と胸を据ゑたが一つの難儀。今にも小太郎が母親迎ひに來たらば何とせん。地此儀に當惑差當つたはこの難儀。詞イヤ其事は氣遣ひあるな。女子同士の口先でちよつぼくさ欺して見よ。イヤその手では行くまい大事は小事より顯はるゝ。事によつたら母諸共。エヽイ。こりやゝい。若君には替へられぬお主の爲を辨へよと。地いふに胸すゑ左樣でござんす。氣弱うては仕損ぜん。鬼になつてと夫婦は突立ち。互に顏を見合せて。詞弟子子といへば我が子も同然。サ今日に限つて寺入したはあの子が業か母御の因果か。報いは此方が火の車。追付け廻つて來ませうと。地妻が歎けば夫も目をすり。せまじきものは宮仕へとスエテ共に。涙にくれ居たる。地かゝる所へ春藤玄番首見る役は松王丸。病苦を助くる駕乘物フシ門口に舁据ゆれば。地跡には大勢村の者附隨うて申上げます。詞皆これにをる者の子供が手習に參つてをります。若し取違へ首討たれては取返しが成りませぬ。何卒お戾し下されと地願へば玄番ヤアかしましい蠅虫奴等。詞うぬらが忰の事まで身どもが知つたことか。勝手次第に連れ失せうと。地叱りつくれば松王丸ヤレお待ちなされ暫くと。駕より出るも刀を杖。詞悍りなが

ら。彼等とても油斷はならぬ。病中ながら拙者めが檢分の役勤むるも。外に菅秀才の顏見知りし者なき故。今日の役目仕畢すれば。病身の願ひ御暇下さるべしと。有難き御意の趣疎かには致されず。菅丞相の所縁の者この村に置くからは。百姓どももぐるになつて。銘々が悴に仕立て助けて歸る術も有る事。コリヤやい百姓めら。さわ〳〵と吐かさずとも一人づつ呼出せ。面改めて戻してくりよと。地退引させぬ釘鎹。打てば響けの内には夫婦。豫て覺悟も今更に フシ胸轟かすばかりなり。地表はそれとも白髮の親父門口より聲高に。長松よ〳〵と呼出だせば。ヲツト答へて出て來るは腕白顏に墨べつたり。似ても似付かぬ雪と墨これではないと赦してやる。詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に。地祖父樣何ぢやと敏捷で。出で來る子供の頑是なき。顏は丸顏 フシ木みしり茄子。地詮議に及ばぬ連れうせうと睨付けられヲ怖や。詞嫁にもくはさぬ此孫を命の花落ち遁れしと。地フシ祖父が抱へて走り行く。地次は十五の涎くり坊よ〳〵と親父が手招き。詞父よおれはもう爰から抱かれて往のと。地あまへる顏は馬顏で。聲蛬ヲ泣くな。抱いてやらうと干鮭を。猫なでフシ親がくはへ行く。詞私が悴は器量よしお見違へ下さるなと。地斷り云うて呼出すは。色白々と瓜實顏こいつ胡亂と引捕へ。見れば首筋眞黑々墨か痣かは知らねども。こいつでないと突放す。その外山家奥在所の子供殘らず呼出して。見せても〳〵似ぬこそ道理土が産した計芋。フシ子ばかりよつて立歸る。地スハ身の上と源藏も妻の戸浪も胴を据ゑ。待つ間程なく入來る兩人。詞ヤア源藏。此玄番が目の前で討つて渡そと請合うた。菅秀才が首サア請取らう。地早く渡せと手詰の催促ちつとも臆せず。詞假初ならぬ右大臣の若君。掻き首捻ぢ首にも致されず。地暫くは御容赦と立上るを松王丸。詞ヤア其術はくはぬ。暫しの容赦と隙どらせ迯支度しても。裏道へは數百人を付置き。蟻の這出る所もない。生顏と死顏は相好が變るなどと。身替りの贋首それもたべぬ。地古手な事して後悔すなと云はれてぐつとせき上げ。詞ヤアいらざる馬鹿念。病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り。逆樣眼で見やうは知らず。紛れもなき菅秀才の首追付け見せう。ヲ其舌の根の乾かぬ内に早く討て。地とく切れと玄番が權柄。ハツトばかりに源藏は胸を。フシ据ゑてぞ入りにける。地傍に聞きゐる女房は爰ぞ大事と心も空。檢使は四方八方に眼を配る中にも松王。机文庫の數を見廻し。詞ヤア合點の行かぬ。先だつて往んだ餓鬼等は以上八人。

机の數が一脚多い。その悴は何所にをるぞと。地見咎められて戸浪ははつと。詞イヤこりや今日始めて寺イヤ寺參りした子がござんす。なに馬鹿な。ヲヽそれ〳〵。これが則ち菅秀才のお机文庫と。地木地を隱した塗机 フシざつとさばいていひ拔ける。詞何にもせよ隙とらすが油斷の元と。地玄番諸共突立ち上るこなたは手詰命の瀨戸際。奥にはばつたり首討つ音。はつと女房胸を抱き フシ踏込む足もけしとむ内。地武部源藏白臺に首桶乘せてしづ〳〵出で。目通りに差置き。詞是非に及ばず菅秀才の御首討ち奉る。いはば大切ない御首。(いはば大切なお首十行本)性根をすゑてサア松王丸。しつかりと檢分せよと。地忍びの鍔元くつろげて。虚といはば切付けん實といはば助けんと フシ堅唾を。呑んで扣へゐる。詞ハヽヽヽ何のこれしきに性根どころか。今淨玻璃の鏡にかけ。鐵札か金札か地獄極樂の境。家來衆。源藏夫婦を取卷きめされ。地畏つたと捕手の人數十手振つて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め夫は元より一生懸命。サア實檢せよ檢分といふ一言も命がけ。後は捕手向うは曲者玄番は始終眼を配り。こゝぞ絶體絶命と思ふ内早や首桶引寄せ。蓋引明けた首は小太郎。贋というたら一討と早や拔きかける戸浪は祈願。天道樣佛神樣憐み給へと女の念力。眼力光らす松王がためつすがめつ窺ひ見て。詞ムウこりや菅秀才の首討つたは。紛ひなし相違なしと地いふにも悑り源藏夫婦。フシ傍きよろ〳〵見合せり。地檢使の玄番は檢分の詞證據に出かした〳〵よく討つた。詞褒美にはかくまうた科赦してくれる。イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん。いかさま隙取つてはお咎もいかゞ。拙者はこれよりお暇賜はり病氣保養致したし。ヲヽ役目は濟んだ 地勝手にせよと首請取り。玄番は館へ松王は フシ駕にゆられて立歸る。地夫婦は門の戸ひつしやりしめ。物も得いはず靑息吐息。五色の息を一時に フシほつと。吹出すばかりなり。地胸撫でおろし源藏は天を拜し地を拜し。詞ハアヽ有難や忝や。凡人ならぬ我が君の御聖德が顯はれて。松王めが眼がかすみ若君と見定めて歸つたは。地天成不思議のなす所。御壽命は萬々年悅べ女房。詞イヤもう〳〵大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の玉へ菅丞相樣が入つてござつたか。但し首が黃金佛ではなかつたか。似たというても瓦と金。寶の花の御運開きとあんまり嬉しうて淚がこぼれる。地ハアヽ有難や尊やと フシ悅びいさむ折柄に。地小太郎が母いきせきと。迎ひと見えて門の戸叩き。詞寺入の子の母でござんす。今漸う歸りました

と。地いふ聲聞くより又悔り。一つ逝れて又一つこりやマア何とどうせうと。妻が騒げば夫は胴する。詞コリヤ最前言うたは爰の事。地若君には替へられぬ狼狽者めと戸浪を引退け。フシ門の戸ぐわらりと引明くれば女は會釋し。詞これはまあ〳〵お師匠樣でござりますか。惡さをお頼み申します。地何處に居やるぞお邪魔であろにと。いふを幸ひ。詞イヤ奥に子供と遊んで居ます。地連立つて歸られよと眞顏でいへば。詞ヲヽそんなら連れて歸りましよと。地ずつと通るを後より只一討と切付くる。女もしれものひつぱづし逃げても逃がさぬ源藏が。刄するどに切付くるをわが子の文庫ではつしと請けとめ。詞コレ待つた待たんせこりやどうぢやと。地撥ねる刄も容赦なく又切付くる文庫は二つ。中よりばらりと經帷子。南無阿彌陀佛の六字の幡顯はれ出でしは

コハいかにと。不思議の思ひに劒も鈍り フシ進み兼ねてぞ見えにける。地小太郎が母涙ながら。詞若君菅秀才のお身がはり。お役に立てて下さつたか。地まだか樣子が聞きたいといふに悔り。詞シテ〳〵それは得心か。得心なりやこそ。この經帷子六字の幡。ムウして其許は何人の御内證と。地尋ぬる内に門口より。詞梅は飛び。櫻はかるゝ世の中に。何とて松のつれなかるらん。女房悅べ、悴はお役に立つたぞと。地聞くよりわつとせき上げてスヱテ前後。不覺に取亂す。地ヤア未練者めと叩りつけ。ずつと通



「寺小屋」寶暦八年五月竹本座二度目の興行の番附

るは松王丸。見るに夫婦は二度悔り。夢か現か夫婦かと フシ呆れて。詞もなかりしが。地武部源藏威儀を正し。詞一禮は先づ後の事。是迄敵と思ひし松王打つて變つた所存は如何に訝しさよと尋ぬれば。ヲヽ御不審尤も。存知の通り我々兄弟三人は。銘々に別れて奉公。情なや此松王は。時平公に隨ひ。親兄弟とも肉縁切り。御恩請けた丞相樣へ敵對。主命とはいひながら皆これ此身の因果。何とぞ主從の縁切らんと。作病構へ暇の願ひ。菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども身がはりに立つべき一子なくば如何せん。爰ぞ御恩報ずる時と。女房千代と云合せ。二人の中の悴をば。地先へ廻してこの身がはり。詞机の數を改めしも。わが子は來たかと心の賽。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ。何とて松のつれなからうぞとの御歌を松はつれない〱と。世上の口にかゝる悔しさ。地推量あれ源藏殿。悴がなくばいつまでも。人でなしといはれんに。持つべきものは子なるぞやと。いふに女房猶せき上げ。草葉の陰で小太郎が聞いて嬉しう思ひましよ。詞持つべきものは子なるとはあの子が爲によい手向。思へば最前別れた時。いつにない跡追うたを。呵つた時の其悲しさ。冥途の旅へ寺入と早蟲が知らせたか。隣村へ行くというて。道まで往んで見たれども。子を殺さしにおこして置いて。どうマア家へ往なるゝものぞ。死顏なりとも今一度見たさに未練と。地笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香奠。四十九日の蒸物まで持つて寺入さすといふ。悲しい事が世にあらうか育ちも生れも賤しくば。殺す心もあるまいに。死ぬる子は眉目よしと美しう生れたが。可愛やその身の不仕合せ。何の因果に疱瘡迄。しまうた事ぢやとせき上げてかつぱと。フシ伏して泣きければ。地共に悲しむ戸浪は立寄り。詞最前にナ。連合の身代りと思ひついた傍へ往て。お師匠樣今から頼み上げますと。いうた時の事思ひ出せば。他人の私さへ骨身が碎ける。地親御の身ではお道理と涙添ゆればイ これ御內證。詞コリヤ女房も何でほえる。覺悟した御身代り。內で存分ほえたでないか。御夫婦の手前もある。イヤなに源藏殿。申付けてはおこしたれども。定めて最期の節。未練な死を致したで御座らう。イヤ若君菅秀才の御身がはりと云聞かしたれば。潔う首さし延べ。アノ迯げ隱れも致さずにナ。につこりと笑うて。ムヽヽムヽヽ（ハヽヽヽヽ十行本）出かしをりました。利口な奴立派な奴。健氣な 地八つや九つで親に代つて恩おくり。お役に

立つは孝行者手柄者と思ふから。思ひ出すは櫻丸。御恩も送らず先だちし嘸や草葉の陰よりも。羨しかろけなりかろ。悴が事を思ふに付け思ひ出さるゝ〳〵と。流石同腹同姓を スヱ忘れ兼ねたる悲歎の涙詞なうその伯父御に小太郎が。詞逢ひますわいのと取付いて スヱわつとばかりに泣き沈む。歎きも漏れて菅秀才一間の内より立出で給ひ。我に代ると知るならば此悲しみはさすまいに。可愛の者やと御袖をしぼり給へば夫婦ははつと。共に浸するフシ有難涙。地序ながら若君様へ御土産と松王つつ立ち。申付けた用意の乘物。早く〳〵と呼ばはるにぞ。ハツと答へて家來共 フシ御目通りに舁据ゆる。地早や御出でと戸を開けば菅丞相の御臺所。ナウ母様かわが子かと御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち。詞方々と御行方尋ねしに。何處にか御座なされし。サレバ〳〵。北嵯峨の御隱家。時平の家來が聞き出し召捕りに向ふと聞き。某山伏の姿となり危い所奪取つたり。地急ぎ河内の國へ御供なされ。姫君にも御對面コリヤ〳〵女房。詞小太郎が死骸あの乘物へ移し入れ。野邊の送り營まん。地アイと返事のそのうちに戸浪が心得抱いて來る。死骸を網代の乘物へ。乘せて夫婦が上着を取れば。哀れや内より覺悟の用意。フシ下に白無垢麻上下。地心を察して源藏夫婦。野邊の送りに親の身で子を送る法はなし。地我々夫婦が代らんと立寄れば松王丸。詞イヤ〳〵これはわが子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。地いづれもは門火〳〵と門火を。フシ頼み頼まるゝ。地御臺若君諸共にしやくり上げたる御涙。冥土の旅へ寺入の。師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛。六道能化の弟子になり賽の川原で砂手本。いろは書く子をあへなくも。ちりぬる命。フシ是非もなや。あす夜たれか添乳せん。らむ憂目見る親心。合劍と死出のやまけこえ。合あさき夢見し心地して跡は。門火にゑひもせず。京は故郷と立別れ鳥邊野。さして連れ歸る

第五

地雲井長閑き大内山はや立ちかはる水無月下旬。日毎々々に時違へず電光雷火霹靂。打續いての天變只事ならず。玉躰安全雷除の加持あらんと勅使三度の召に應じ。法性坊の阿闍梨參内あり。紫宸殿に壇を構へ幣帛押立て。獨鈷三鈷鈴錫杖ふり立て〳〵祈らるゝ。フシ擁護も嘸と知られける。地寛平法皇の御使として判官輝國。齋世親王刈屋姫菅秀才を伴ひ御階のもとに フシ伺候する。詞僧正壇より下り給ひよくこそ參内ましませしと。地親

王の御手を取り上座に移し參らすれば。輝國階下に頭をさげ。詞豫て法皇貴僧に談じ給ひし通り菅秀才に菅原の家相續。天機宜しき次手を以て御沙汰あつて給はりしか。地承はつて參れとの使さふと述べければ。親王も僧正に向はせ給ひ。詞此度の天變察する所。無實の罪に沈んだる菅丞相の所爲なるべし。この靈魂を鎭めんには法皇の仰せの如く。菅秀才が勅勘を赦され。菅家再び取立て給はば亡魂も恨みを晴らし。地天下萬民の悦びこれにしかじ偏へに貴僧を頼み入る。次には麿が虚命の逆鱗。申し晴らして給はれとスヱテ事叮嚀に述べ給へば。詞仰せの如く菅丞相恨みは晴れぬ天變不順。地愚僧元より菅丞相とは師弟の中。靈魂の怒りをやすむる菅原の家相續。地宜しく奏し奉らん法皇御所へも此通り。輝國申上げらるべし各は此方へと。打連れ奥に入り給へば

判官代大きに悦び。僧正の御請合法皇に申上げ。追付け參上仕らんと フシ心いそ〳〵立歸る。地齋世親王菅家の兄弟密に參内致せしと。春藤玄番が知らせによつて。時平の大臣大きに驚き。希世淸行前後に隨へ逸散に駈來り。寢殿遙に窺ひ見れば。詞實にも玄番が申すに違はす。時平が怨となる奴ばら片端打殺し。天皇法皇遠島させ我萬乘の位に卽かん。地淸行希世ぬかるなと八方へ眼を配り。事を窺ひ待つとも知らず。判官代は歸りしかと。奥より出づる菅秀才ソレと時平が掛聲に。左中辨つつと寄り小腕取つて捻伏せたり。時平の大臣から〳〵と打笑ひ。詞蠅同然の小悴なれども生け置いては後日の仇。首討つたると思ひしに小ざかしくも我を謀り。今日まで存命せしは松王めが計ひよな。贋首喰うたうつそりめと。地春藤玄番が肩骨つかみ不忠油斷の見せ

しめと。首引拔いてかしこへ投捨て。詞ヤア〳〵兩人。此小悴は麿に任せ。齋世親王刈屋姫引立て參れと下知するにぞ。地淸行希世心得しと奥をさして行く所に。俄に晴天かき曇りコハリ風雨發つて絕間なく電光虚空に閃めき渡り。天地も崩るゝ大雷ぱち〳〵〳〵〳〵ぐわら〳〵〳〵。二人はがち〳〵胴ぶるひ色靑ざめて迯げ惑ふ。地時平の大臣はびくともせず。詞ヤア臆病な腰拔共。鳴れば鳴れ落ちば落ちよ。雷神雷火も足下にかけ。地踏み消してくれんずものと菅秀才を小脇に搔込み。虚空を睨んで突立つたり。猶もはためく震動雷電希世は生きたる心地なく。御階の下に屈みゐる頭の上に車輪の火の玉。落つると見えしが左中辨五體炎に燃え爛れ。天罰目の前師匠の罰 フシ心地よかりし最期なり。地これにも屈せぬ强氣の時平。詞三善の淸行いづくにある

靡に敵する雷神なし。怖くば爰へ來れよと。地呼ぶを力に立寄る淸行。あはやと三善も雷火に打たれ フシ即時に息は絕え果てたり。地二人が最期にさしもの時平。心臆して膝わな／＼。擒にしたる菅秀才オクリ迯げて。ヘ行方も知らばこそ。地此上頼むは法力と壇上に駈上り。兩手を覆うて踞る。左右の耳より尺餘の小蛇。顯はれ出づれば悶絕しうんとのつけにフシ反りかへれば。二疋の小蛇は拔出でて壇に立つたる幣帛に。入るよと見えしが忽ちに。此世を去りし櫻丸夫婦が姿と顯はれ出で。影の如く壇上にすつくと立ち。詠歌腹立ちや恨めしや。汝故に菅丞相。無實の罪に浮き沈み。心筑紫に果てナホス二人給ふ。スエ其怨念は。フシ晴れやらぬ。ハルフシ空に轟き。鳴神の炎變じて紅と。櫻共に散らさん來れや來れとハズミ頭を。摑んで フシ引立つる。地音に驚き法性

坊紫宸殿に駈出でて見給へば。物の怪の姿あり／＼ フシ有明櫻。地祈加持して退けんずものと。珠數さら／＼押揉んで。千手の陀羅尼くりかけ／＼。地祈り祈れば時平は夢とも現とも。思はず知らず立上れど櫻夫婦が妄執の。雲霧に隔てられフシ形は。見えて手に取られず。フシ迯げんとするを。迯がさじと向ふにたちまち八重一重。双にかゝりこの世を去り。骸は終に呵責の火櫻。此身を焦す フシ鹽竈櫻。詞いかに僧正祈るとも。此怨念は何時迄も。付き纏はつて糸櫻。サハリ退かじ放れじ幻は。打てども去らぬ犬櫻。コハリ死靈を去らさで置くべきかと。揉みかけ／＼祈り給へば夫婦が靈魂。イヤ／＼／＼／＼いか程祈るとも。我々諸共冥途の苦患見すべしと寄れば。詞祈り。祈れば二人形は見えつ隱れつ九重の。彼岸櫻とちり。／＼に僧正の珠數先へ フシ恐

れて寄らぬぞ不思議なる。地紫宸殿に僧正あれば。弘徽殿に夫婦の姿。弘徽殿に移り給へば。淸涼殿に死靈の形。淸涼殿に移り給へば。梨壺。梅壺。夜の御殿晝の御座。行違ひ行廻り。祈るは僧正去らぬは怨靈揉合ひ／＼。ナホス祈り伏せられ櫻丸。詞ヤア／＼僧正。菅丞相を讒言し。帝位を奪ふ時平を助け給ふは心得ず。扨は貴僧も朝敵に力を添へ給ふかと。地聞くより僧正大きに驚き。ヤアかゝる天下の仇とも知らで。珠數を穢せし勿體なやとフシ法座を立去り入り給へば。地時平も恐れ諸共に御座の間さして迯入るを。髻を取つて引戻し。今こそは思ひの儘。冥途の闇路に伴はんと。櫻の枝の笞を振上げ追立て。／＼追廻し笞を持つてちやう／＼／＼。打たれてうつゝ空蟬の フシ蛻の骸。さてこそ恨み晴れたりと死靈は時平を庭上に。どうど蹴落し嬉しげに。形

は花の散るごとく。消えて見えねば丞相の。靈もしづまり空晴れてフシ日輪。光り輝けり。地かくと見るより菅秀才刈屋姫庭上に走り出で。詞父上の敵遁さじと用意の懐劍拔き放し。恨みの刀思ひ知れと。地刺し通し〱悦び給ふフシ折こそあれ。地宮御夫婦若君の安否いかゞと松王丸。輝國伴ひ參內すれば。白大夫梅王も宰府より立歸り御階の下に伺候して。櫻丸夫婦が怨念時平が惡事を顯はせし仔細を聞くより人々喜悦。共に悦び法相坊親王を伴ひ立出で給ひ。詞人々の願ひの如く。菅秀才には菅原の遺跡を立てさせ。菅丞相に正一位の贈官あり。右近の馬場に社を築き。南無天滿大自在天神と崇め。地皇居の守護神たるべしとの宣旨なりと述べ給へば。皆一同に悦びをきくに北野の千本松。榮え榮ゆる御社は千年萬年朽ちせぬコハリ宮殿。錦の帳玻璃の柱。瑪瑙の梁瑠璃の垂木。廻廊拜殿あり〱と拜まれさせ給ひける。京に北野雛波に天滿神徳奇瑞並びなく。榮えましますこの御神緣起をあら〱書き殘す筆の冥加や御傳授の。傳はる和國にいちじるき威德を。崇め奉る

延享三年寅八月廿一日　　作者連名　　並木千柳
三好松洛
竹田小出雲

大物船矢倉
吉野花矢倉

義經千本櫻

序詞忠なるかな忠。信なるかな信。勾踐の本意を達す陶朱公。功成り名遂げて身退く。五湖の一葉の浪枕。西施の美女を伴ひし。例を爰に唐倭。四海漸く穩かに壽永き年號も。短く立つて元暦と詔も革り。戸ざさぬ垣根卯の花も。皆白旗と時めきて。オロシへ武威はます〳〵。盛んなり。地寶祚八十一代の天子安德帝。八島の波に沈み給へば。後白河の法皇政を執行はせ給ふ。昵近の公卿は左大臣の左大將藤原の朝方。君の御覺えよきまゝに已に諂ふ者には。官位昇進申下し。依估贔屓の沙汰大方ならず。群臣これを如何ともいはゞ叡慮に背かんかと フシおの〳〵。舌を巻筆や。地大内記御日次に硯取添へ座列する。瀧口に案内して源氏の大將。源九郎判官義經院參のその粧ひ。五位の雜袍善盡し派手をつくせし太刀飾り。供の飾りは三國一西塔の武藏坊辨慶。大紋の袖立烏帽子僧衣を憚る扮裝は。フシ實にも由々しく見えにける。地大内記取次にて源氏の武士參上と。申上ぐれば左大將いかに義經。詞此度八島の合戰の樣子。法皇委しく聞召さず。天皇の入水一門の最期。御日次に記されん申上げよとある。義經はつと承り。さん候今度の戰。平家は千騎ばかりと見え。八島の磯に陣を張る。義經が勢は四百餘騎。只事にては勝つことなしと。不時に寄せたる鬨聲に。周章狼狽き平家の勢船に取乗り沖中へ。天皇を フシ具し奉る。コハリ その時城に火を放ち。明りに眼覺せしやらん。能登守教經小船に乘移り。稀代の弓力引詰め差詰め。射たる矢先は義經が。詞馬の先に立塞がる佐藤繼信胸に受け。馬より下にどうど落つる。その首取らんと菊王丸。船より磯邊に上るところ。弟佐藤忠信が射返す矢先に敵味方。互に不便の武士を討たせし供養と相引に。その日の軍はフシさつと退く。ヘルフシ明くれば敵より出す扇。與市宗高射て落す。ギン箕尾谷景淸錣引。敵が感ずる味方が譽むるされども。源氏は勝軍。平家は軍兵討ちなされ能登守教經。詞安藝の太郎。同じく次郎。二人を左右に引挾み海へかつぱと飛入つたり。地これを冥途の門脇教盛。同じく經盛。資盛有盛。行盛なんど我も〳〵と續いて入る。詞新中納言知盛は。御所の御船の御供と進んで海にざんぶと入る。

地天皇の御事はやはかと存ぜし油斷の間に。二位の尼上御供し。詞海へ入りしと聞いたるばかり御骸をも求め得ず。女院ばかり助かり給ふ。生捕つたる輩は先達て一紙に認め。叡覽に供へ奉れば。地申上ぐるに及ばずと事こまやかに述べらるゝ。その辯舌を其儘にフシ日次に。記しとゞめける。地朝方苦つたる氣色にて。詞それ程の功ある義經。賴朝に對面叶はず腰越より追返された。その科をいへ聞かんと。地聞くより辨慶進み出で。詞我が君の御爲には御兄なれども。蒲冠者範賴卿緩いお生れ。手柄が無さに義經公にしなずを付け。彼方の手柄にせうために。附從ふ佞人ばらが讒言と。地氣のつかぬは鎌倉殿の無詮議といはぜも果てず。詞ヤアだまれ辨慶。假令讒者の業にもせよ。一旦の兄の命中開かず。腰越よりすごく/\と歸りしは。弟の義經さへあの通りと世上の見懲し。理非辨へぬ麁忽の雑言。地尾籠至極と誠の詞。詞ホヽウ神妙なり義經。軍の次第を奏聞して。御前宜しく計はんと。地表面はぬつぺり取持顏。痳鳥さゝんと底巧大内記引連れて。フシ御殿間深に入りにける。地小蔀の陰より左大將朝方の諸太夫。主に劣らぬ人畜の苗字も猪熊大之進。詞コレ/\義經殿御油斷/\。治つたとはいひながら平家の殘黨。小松の三位維盛の簾中若葉の內侍。その儘に置かずとも何故片付けて了はれぬ。ホヽウ何事と存ぜしに女童の事よな。何萬人あるとても天下の妨にならぬこと。そのまゝで事は濟む。ムウこと濟むとは。どうなりと成り次第ならこつちも勝手。身が主人朝方公。若葉の內侍に御執心と。地皆までいはせず武藏坊。詞ヤアならぬ/\。鎌倉殿のお指圖で緣組は兎も角も。平家方の女房を私に引入るるは味方も同然。ならぬことといひほぐせば。ヤアしやらくさいおけ/\。左いふ義經。平大納言時忠の聟ならずや。いはいでもそれで知れた。若葉の內侍もちえ/\くつたな。ヤアちえ/\くつたとは我が君を。雀の樣にぬかしたりな。コリヤ此方が鳥ならおのれは蝿。地ぶうぶうぬかさずすつこめと。ひつ摑んでちよいと拋る音はどつさり。アイタヽヽヤレ荒立つるな武藏坊。しされ/\とフシ制する折から。地御座の間の御簾捲上げ左大將朝方。怪しの箱引抱へくわん/\たるその風情。詞ヤア/\義經敬つて承れ。桓武天皇雨乞の時より。禁廷にとゞめ置く初音と名づけたる鼓。義經豫て望む由聞召し及ばれ。此度の御恩賞に院宣に添へ賜るぞ。拜見せよと差出す。地義經はつと頭を下げ。詞數ならぬ身に及びなき願ひ。雨乞に用ゆる鼓軍の爲にと存

する所。地有難し〳〵と箱押戴き〳〵。相添へられし院宣とは如何なる勅命。いで拝見と箱の蓋開けば内には鼓ばかり。詞ホ、ウ院宣とて外になし。其鼓が則ち院宣。惣じて二つある物を陰陽に取り。兄弟に像る。鼓の裏皮表皮。同じ育ちの乳ぶくらにかけ合はされしはこれ兄弟。裏は義經。表は頼朝。准へて其鼓を打てとあるが地院宣なりと聞きもあへず。詞ハアア其鼓が院宣ならば頼朝義經打和らぎ。睦じく禁廷の守護致せとの勅候ふや。イヤさうでない〳〵。君に忠勤を抽づる義經を。科ありと追返せし頼朝は。法皇へ敵對ふ所存。兄頼朝を打てとある追討の院宣と。地理を押枉げて兄弟中。同志討させて了はんたくみ。義經はつと當惑しフシ差うつむいて居給ひしが。詞コハ日頃に異る法皇の勅命。假令叡慮に背くとも兄を討つ事存じも寄らず。頼朝に科あらは。義經も御刑罰に罪せらるゝが弟の道。地所詮此初音の鼓申請けねば院宣も承らずと差戻せば。朝方いよ〳〵したり顔。詞綸言は汗の如し。勅命を背けば義經。朝敵なるが合點かと。地無理と非道にいひ枉ぐる巧と知つても勅命と。いふに返答恐れあり。フシ只ハツ〳〵とばかりなり。地堪り兼ねて武藏坊ずつと出で。詞コレサ左大將殿とやら。王樣は天下の鑑。無理いはしやれば天下中が。皆無理いふが合點か。無理があるなら傍に居る公家の役で何故鎭めぬ。大敵にも怯まぬ大將よう一言でやりこめたなア。言負けさせては此腹の虫が堪忍せぬ。地サア出直して謝罪りやと腹立つ儘の傍若無人。義經はつたと睨ませ給ひ。詞やをれ辨慶。高位高官に對しての惡口。最前より無禮の段々言語道斷其所立ちされ。我が目通りは叶はずと。地以ての外の御機嫌に。詮方もなく立端なく。フシカヽリ誤り猪熊よい氣味とほくそづくを目もかけず。朝方に打向ひ。詞日頃の懇望却つて仇となる鼓。申請けねば君に背く。申受くれば兄に敵對。二つの命を背かぬ了簡。打てとある院宣の鼓。たとへ拝領申しても打ちさへせねば義經が。身の誤にもならぬ鼓。地拝領申奉ると鼓を取つて退出す。御手の中に朝方が惡事を調のしめくゝり實にも名高き大將と。末世に仰ぐ篤實の。強く優なる其姿。一度に開く千本櫻榮え。久しき三重君が代や。地蘭省の花の時錦帳の内にかしづかれし。小松の三位維盛の御臺若菜の内侍。若君六代御前平家都を落ちしより。今は廬山の隱れ里。北嵯峨の草庵に。スヱ親子諸共身を忍び。仕馴れぬ業も佛の行と小オクリ谷の。流れを水桶に主の尼と差荷ひ。フシ庵の内に立歸り。詞コレ申し御臺樣。わしが一日たが〳〵

するを笑止がつて。荷の片端お手傳ひなされ。それ〳〵お肩が痛さうな。地下々のする業は夢に見もなされまい。時世とておいとしぼや。詞アレ何聞いてやら六代様の莞爾と笑うてちや能うお留守なされたなうと。地ほた〳〵いうてあしらへば。御臺所も打萎れ。詞知りやる通り夫の維盛様。御一門と諸共。安徳天皇を供奉し。都を開き給ひしより。此庵に親子諸共。永々の世話になるも。そなたが昔お館に。奉公しやつた少しの所縁。地維盛様も西海の軍に海へ沈みお果なされたとも。又生きてござるとも様々の噂なれども。詞都をお立ちなされた日を。御命日と思うて居る。殊に今日は舅君重盛様の御命日なれば。心ばかりの香花取つて。閼伽の水も供へん爲。手づから水を汲みました。取分け此月はお祥月。昔の形で回向せば。地せめて佛へ追善と。狭布の細布身せばなるオクリさもしき。小袖ぬぎ捨てて卯の花色の二つ襟。うきに憂身の數々は。十二單の薄紅梅思ひの。冷泉色や緋の袴。いでそよ元は大内に。ハルフシ宮仕へせし。ナホスフシ はれの衣。引繕ひ。地繪すつたる手箱より重盛公の。繪像を取出しさら〳〵と。ホフシ佛間にかけて手を合せ。小松の内府淨蓮大居士。佛果 フシ菩提と回向して。詞コレ六代。そなたの爲には祖父君。稚けれども平家の嫡流。よう手を合して拜みやいの。取分けて此繪像。親子御とて維盛様に生きうつし。ほんに扨重盛様が今迄生きてござらうなら。地平家はよもや亡びはせじ。孫子の爲にもよからうに彼方がござらぬばつかりで。此憂目を見るわいのと。繪像に向ひ在すが如く。くどき立て〳〵かつぱと伏して。スヱ泣き給ふ。地折節表へ來る足音。ちやつと心得主の尼。枕屏風を引廻し。フシお姿隠す間もなく。扉引明けずつと入り。詞コレ〳〵庄屋殿へ判持てごんせ。ハアアそれは合點がいかぬ。今迄は一年に一度。宗旨の改より外に判のいらぬ獨尼。殊に此方も月別取りに來る歩行殿とは違うた。マア何事ぢや聞かさつしやれ。イヤされば。爰らの事ではありそもないが。此嵯峨の庵室に珠數の實で過ぎるは付けたり。表向には佛を見せかけ。内證へ取り入ると。小眉目の美い髪長を出しかけて。御所出尼出圍者。大海小海と名をつけ。一屏風を何ぼ宛と。佛前の線香を立て。暗商ひをするといの。是といふも。祇王祇女。佛などといふ白拍子のしやの果が。尼になつて此嵯峨に居る故に。それで所がみだらになつたとて。人別の判形。此庵にも其様な。じだらくはござらぬかや。ヲヽあのいはしやる事わいの。佛様は見通し。そんなじだらくな事何で

せう。聞くも汚れる住んで下され。ハテ往にます。地早う印判おこさつしやれと。フシ家内を見廻し立歸る。地お氣が詰まろと主の尼枕屛風を押しのけて。今のをお聞きなされたか。詞覺えもない事いうて來て。そしてマア氣味の惡い。家內をひつた見廻して。ヲ、是はしたり。今の奴めにお前のお草履ちよろり一足せしめられた。エ、小盗人であつたもの。氣がつかいで取られたと。地いへば御臺も涙ぐみ。世を忍ぶ身の上は何角につけて案じが絕えぬ。扨も〳〵情なき。親子の身ではあるぞいのと內は。スヱ歎きに曇れども。地外は春めく物賣聲。詞菅笠加賀笠。地ゆす〳〵一荷打擔げ笠をお召しなされぬかと。フシ門口より差覗けば。詞ヲ、とでもない。尼の內に菅笠が何でいろ。地胡散な和郎ぢやと呵られて。地イヤお氣づかひな者でなし。地私でござると笠取つて入るを見れば小金吾武里。御臺所は飛立つ計り。此間は便も聞かずどうかかうかと案ぜしに。サア〳〵フシ爰へとありければ。地小金吾も手をさげて。詞先づは御臺所にも御健勝。ホ、ウ若君も御機嫌よき御容顏を拜し。拙者も大悅仕る。いか樣にも今日は。先君重盛公の御祥月御命日なれば。御裝束を改め御回向をなされしよなと。地佛間に向ひ手を合せ。此君お一人ましまさぬ故御一門はいふに及ばず。我々迄も憂艱苦とスヱ暫し。涙にくれけるが。詞拙者めも御貢の爲。思ひついたる笠商賣。前髮立の此小金吾。何が仕付けぬ商賣なれば。御推量下さるべし。扨先づ申上げたきは。主君維盛卿の御身の上。未だ御存命にて高野山に御入りと。慥なる都の噂。何とぞ拙者も。若君のお供をして高野に登り。御親子の御對面、一つには小金吾も。再び主君の御顏を拜し申度き願ひ。それ故旅の用意を致し只今參り候と。地聞くより御臺も夢見しごとく。なに我が夫の高野とやらんに生存へてござるとや。それは嬉しや有難や六代ばかりと言はずとも。女子の上らぬ山ならば。麓まで自も同道せよや武里とフシ悅び涙にくれ給へば。詞ヲ、お嬉しいはお道理〳〵。わしもお供したけれど。足手まとひな年寄尼。それならば日のたけぬ內一時も早いのが。ヲ、成程寸善尺魔のなき中に。御親子共に御用意早う。地笠は私が手の物早速ながら御用に立てんと。倶に用意のフシ折こそあれ。地表の方に人音足音。尼は心得いつもの通り佛壇の下戶棚へ。御臺親子御押入れつきやる共間もなく。朝方の諸大夫猪熊大之進。家來引具し柴の戶踏みのけどや〳〵と亂れ入り。詞此庵室に維盛の御臺若葉の內侍。忰六代諸共にかくまひ置く由。

注進によつて召取りに向うたり。何處に隱せし有様に白狀せよと 地星をさゝれて主の尼。はつと思へど素知らぬ顔。 詞これは又御難題維盛の御臺とは所縁かゝりの無ければ。かくまふ筈もなしと。 地いふに傍から小金吾武里。 詞それは定めて庵室違ひ。外を御詮議遊ばせと聞きもあへず。ヤア前髮めが小差出た指圖。先づうぬは何奴。イヤ私菅笠賣。ヤア商人ならばとつとと歸れと。 地家來に持たせし絹緒の草履取出し。 詞コリヤ諍はすまい爲に家來を所の步行にして入込ませ。證據の爲に取つたる草履。年寄尼めが赤たれた履物穿きはせまい。サア是でもあらがふか。奥へ連行き責めさいなみ白狀させんと。 地主の尼が小肘取つてぐつと捻上げソレ家來ども。拷問せよとあらけなく。引立て〱 フシ一間の中へ入りにける。 地小金吾は氣も氣ならず何とせん彼とせんと。奥口覗ひ隙間を見て。御臺親子を出し參らせ幸ひの菅笠荷と。細引かなぐり蓋押明け。荷底に二人を入れ參らせ。旅の用意の風呂敷包。重盛公の繪像迄。取つては押込みさらへ込み。あたふたしつらふ其中に。尼を一間に縛り上げ立出づる大之進。 詞察する所風を食うてふけらしたもので有ろ。菅笠屋め存ぜぬか。ア、いか樣。それならば此庵の裏傳ひを。氣高い女が子を連れて。迯げたのはたつた今と。 地聞くより猪熊目を光らし。ヲヲそれに極つた。高が女の足なればぼつかけて搦め取らん。家來二人はこれに殘り奥の尼めを取迯すなと。フシ跡を慕うて追掛け行く。 地してやつたりと小金吾はハルフシ心も空に荷を打かたげ。行かんとするを二人の家來。兩方より小金吾が棒端取つてどつかと引据ゑ動かさねば。 詞コリヤどうなさる。ヤアどうするとは胡亂者。此荷底に挾まれたは女の着物。イヤこれは誂へ笠のいたゞき。ヤアぬけ〱と吐すまい。御臺親子に極つた。ぶち明けて詮議せんと。 地立ちかゝる兩人が。肩骨つかんで引退くる。詮議させぬは曲者とすらりと拔いて切りかくる。 詞引つぱづし引つぱづし朸を振上げ。 地弓手馬手へ叩き伏せ。急所々々を力に任せ。叩きのめせば二人の家來。目鼻より血を出しフシのた打ち廻つて死してげり。地敵の歸らぬ其中にと。荷を打擔げ聲張上げ。 詞菅笠加賀笠。かさ編笠。キホヒ網を遁れて。三重へ出でて行く。 舞花の姿も引きかへて。主從七騎。駒のはな。 詞たむろの岡で返り咲。再び御運開かれし。かの賴義の。奥州攻。君は八島の勝軍。國も靜が。ナホスフシ舞扇。 地いや〱どつと譽むる聲。鬨聲とは打ちかはり賑ふ御所は二條堀川。九郎義經の奥方勇めの御催し。中座の御殿

は卿の君新殿は九郎義經。一方女中が取卷けば。かたへに並ぶは駿河の次郎。次は功ある龜井の六郎。陪臣外樣に至る迄舞の樣子は知らねども。やつちや名人お上手と。靜譽めるも君譽める フシ色めきてこそ見えにけれ。地御殿から御殿への女中の使此方より。龜井が使者の御口上互にめでたい面白い。お氣はつきぬか好い慰みと。御夫婦中でも禮儀式事終れば樂屋より。ハルフシ裝束改め。靜御前。廣庇に立出で。駿河龜井に會釋して。御臺所の御前に向ひ。詞御望とある故 地拙き舞ひぶり御目にかけ。おはもじさよと フシ述べければ。詞イヤナウ始めて見ましたが面白い事。此間より醫の助けを請けても。心惡しく暮せしに。地我が君樣のお勸めで今日は思はぬ好い慰み。そもじには御大儀と仰せにはつと辭儀に餘り。詞其御機嫌に甘え申上げたいお願ひ有り。地お取上げ下されうかと フシ物々しげに言上ぐる。詞ナウ其お尋ねに及ばぬ事願ひとは餘所々々しい。地近う寄つて物語りと仰せに猶も恐入り。詞お願ひと申すは外でもなし。氣の毒は武藏坊辨慶殿。何か大きな仕損ひしたとて。樂屋へ來て大づけない。ほろ／＼泣いて私を賴み。つき詰つた氣の細いお人さうで餘りと申せばいぢらしゝ。何とぞお詞添へられ。我が君樣の御機嫌も直る樣。地此事ひたすらお願ひと。申上ぐれば御臺はをかしく君にも笑ひ。駿河の次郎佛頂顏。詞いやはやかゝつた事ではない。六郎お聞きやつたか。武藏坊辨慶ともいはるゝ者が。女中を賴んでお詫言樂屋へ往て泣くといの。ホウちつとさうであろ／＼。彼めと馬の合うた伊勢片岡。熊井鷲尾軍治まつてより休息のお暇で國々へ歸る。賴みに思ふ佐藤忠信は。母の病氣とあつて出羽の國へ往ぬる。貴殿と某は相手にならず。どこ打つて舞はうで舞ひから取入つて詫言。まそつと懲していつその事。坊主天窓を奴にせうと。地いうて見たらば猶よかろと。フシ內證評議も猶をかしく。地御臺は笑ひの內よりも如何なる仕損じせし事ぞ。笑止をかしい執成と仰あれば義經公。詞過ぎつる參內の折から禁廷にての我儘。左大臣朝方公への惡口。御家來を踏打擲。其場で急度呵付け。我が目通りへ叶はぬと申付けたがそれ故ならん。手綱赦すと人喰馬。公家でも武家でもたまらさぬ。地持てあぐんだ鯱坊主め。まそつと懲せと御上意に。駿河の次郎圖に乘つて。詞自體あの七ツ道具が大きな邪魔。源氏には坊主の大工があるとお家の名折。此儀も急度止める樣。仰付けられ然るべしと。地申上ぐれば龜井の六郎。詞イヤまだ七ツ道具は御普請の役にも立つが。難儀な物

は彼の大長刀。柄も四尺。刄も四尺。八尺の物を振廻すによつて。傍邊の鼻がたまらぬ。太平の代には役に立たぬ人間。地兎角當分押込めて置くがよかろと フシ詮議區々。地御臺は笑止とヤレ其樣に譏るを聞いたら又怒ろ。共々お詫と執成しあれば義經公。詞性懲もなき坊主め。急度意見し重ねて荒氣を出さぬ樣。地靜も共にと座を立ち給ひ。駿河龜井と引連れて フシ一間へこそは入り給ふ。地靜は嬉しくサア急いで武藏殿を呼びましてと女中を走らせ。御前のお詞添うた故。有難う存じますと フシ挨拶すれば。詞イヤそもじのお願ひ故と地互の辭儀も戀の義理。悋氣嫉妬の角もなく丸い天窓の武藏坊。腰元婢に引立てられこはい〳〵で七尺の體も三尺八九寸。四尺に餘る大太刀を。フシ引ずらしてぞ這出づる。地腰元ども口々に。詞さりとては片意地な坊樣。アレ御覽じませ。跡退りばかり致されますと。地告口いへば是さ〳〵。詞其樣に惡くいはぬもの。弱身へ付込んで慘い和郎達。地人には報があるぞよと見廻す目玉に。詞アレ又睨まれます。コレサ細目だ〳〵と地目顏しかめて。フシ身を縮む。地靜は手を取り御前へ連出で。モウ堪忍しておやりなされて下さりませと。半分笑ひの執成に。卿の君はしとやかに。詞君は船なり臣は水。浪立つ時はおのづから。君のお船を覆へす。家來の業とて言譯ないぞ。重ねて急度荒氣をやめ。おとなしうなつたらよかろと地子供意見に辨慶は。たゞアイ〳〵と揉手して フシ誤り入りし風情なり。地然る所へ遠見の役人。篠原藤内あわたゞしく罷出で。詞ノリ今日大津坂本の邊を巡見致せしに。忍び〳〵に鎌倉武士都へ入込み候中にも。土佐坊正尊海野の太郎行永。熊野詣と僞り我が君の討手に向ふと專らの風聞。殊に只今鎌倉の大老川越太郎重頼。我が君へ直談とてお次に控へ罷在り。地如何計らひ申さんやと尋ね申せば卿の君。詞心得ぬ事どもや。其川越太郎は自とは故ある人。土佐坊海野が討手の樣子。知らさん爲に來りしか。何にもせよ緣あれば苦しうなし通し申せ。其旨君へも申上げん。地序でに武藏もお目見えと。フシ座を立ち給へば武藏坊。詞討手とはうまし〳〵我等が世盛忝い。土佐坊でも海野でも。たつた一呑一摑。地首引拔いて參らんと。駈出すを靜は押とめ。詞ソレそれがもう惡い。お上の御意も待たずおとましの坊樣やと。地無理に引立て御臺と共に。義經公のおはします オクリ奥の殿へぞ急ぎ行く。地程なく入來る武士は。鎌倉評定の役人川越太郎重頼。大紋烏帽子爽に。年も五十路の分別盛り。フシ廂に入來れば。地

御主九郎判官。御裝束を改められ。しづ〱と立出で給ひ。詞ヤア珍しや重賴。兄賴朝にも御變りなく。百侯百司も 地恙なしやと仰にはつと頭をさげ。詞先づは御健躰を拜し恐悦至極。右大將にも安全に渡らせられ。諸大名も每日の出勤。地賢慮安んじ下さるべしと申上ぐれば義經公。詞シテ其方は海野土佐坊同役にて上りつらん。但しは外に 地用事ありやと尋ねに重賴されぱの儀。詞君に御不審三ケ條。一々お尋ね申上げ。御返答によつて海野土佐坊と同役。恐れながら過言は御赦免なされ。訊ぬる仔細御返答と申上ぐれば ホ 面白し。此義經に不審あらば。兄賴朝に成り代り過言は赦す。訊ねて見よ申開かん遠慮無用と。地仰に猶も平伏し。詞冥加に餘る仕合せ。とても事に御座改め下されよと。地席を立てば大將も末座へさがつて川越を。フシ上座へこそは請ぜらる。地

席改つて川越太郎いかに義經。詞平家の大敵を亡ぼし軍功を立てながら。腰越より追つかへされ無念にあらん。但しさもなかりしか。地はつと義經袖かき合せ。詞親兄の禮を重んずれば無念なとも存ぜず。ヤア其詞虛言々々。親兄の禮を重んずる者が平家の首の內新中納言知盛。三位中將惟盛。能登守教經。此三人の首は贋物。何故僞つて渡したぞ。先づ此通りの御立腹。サア御返答はと訊ぬれば。ホヲ、。地其言譯いと安し。詞贋首を以て眞とし。實を以て贋とするは軍慮の奧義。平家は二十四年の榮華。亡び失せても舊臣陪臣國々へ分散し。赤旗の飜翩する時を待つ。一門の中にも三位中將惟盛は。小松の嫡子で平家の嫡流。地殊に親重盛仁を以て人をなつけ。厚恩の者其數知らず。維盛存へ有りと知らば殘黨再び取立つるに治定。詞又新中納言知盛。能登守教

經は古今獨歩のえせ者。大將の器量ありと招きに從ひ馳集る者多からん。地さすれば天下穩ならず。何れも入水討死と世上の風聞幸ひに。一門殘らず討取りしと。贋首を以て欺きしは。詞一旦天下を靜謐させん義經が計略。と有つて捨置かれぬ大敵故。熊井鷲尾伊勢片岡。究竟の輩を休息と僞り國々へ分け遣し。地忍び〱に討取る手筈。かく都に安座すれども。心は今に戰場の苦しみ。詞兄賴朝は鎌倉山の星月夜と。諸大名に傅かれ。月雪花の翫び。同じ淸和の胤ながら。晨には禁廷に膝を屈し。夕には御代長久の基を謀る。何時か枕を安んぜん 地淺ましの身の上と。スヱ打悄れ。給ふにぞ。地實に理と重賴も。思ひながらも役目の切羽。詞ムウ扨は其述懷ある故御謀叛思し立たれしかと。地いはせも立てず𢘅とせき上げ。詞ヤア穢らはし。謀叛とは何を以て何を

日當と。地御氣色變れどちつとも恐れず。詞君鎌倉を亡さんと院宣を乞ひ給ひしに。初音の鼓を以て裹皮は義經。表皮は賴朝打てといふ聲あるとて頂戴ありしとは。左大臣朝方公より急の知らせと。地聞いて義經。詞扨は朝方が讒言せしな。其鼓の事は豫ての懇望。下し置かるゝ場になつて反逆によせたる詞の品。是朝方の計ひとは思へども。地院中より下さるゝ恩物。請納めずば綸命に背く。受けては兄賴朝へ孝心立たずと。望みに望みし一挺なれども。詞打てば鼓に聲ありとアレあの如く。床に飾りて眺むるばかり。地神明佛陀も照覽あれ。打ちもせず手にも觸れずと仰に川越ハ、、はつと三拜し。詞其御誓言の上何疑ひ奉らん。二つの仰分けられさつぱり明白さりながら。情なきは今一つ。御簾中卿の君は平大納言時忠の娘。平家に御緣組まれし心はいかに。

ヤア愚かな尋ね。兄賴朝の御臺政子は北條が娘。時政氏は平家にあらずや。イヤそれは主君賴朝。伊豆の伊東に御座ある時。北條一家を味方につけん計略の御緣組。ヤアいふな〳〵。もと卿の君は汝が娘。平大納言へ貰はれ育てたは時忠。肉身血を分けた親は其方。なぜそれ程の事鎌倉にて言譯せざるや。但し義經と緣あると思はれては。身の瑕瑾と思ひ隱し包んだか。地卑怯至極と仰を聞くより川越太郎。居たる所をどつかと居直り。詞ヤアお情ない義經公。淸和天皇の末流。九郎義經を聟に持つたは恐らく日本の舅頭。五十に餘る川越が。名を惜んで祿を貪らうや。今肉緣をあかせば。此方の言譯するも暗く。緣者の證據となる故に。ヲ鎌倉では隱した包んだ。陰になり日向になり。言ひくろむれども御前には讒者の舌は強くなり。智者といはれし秩父さへ力に及ばぬ平家と緣組。今になつて川越が娘というて得心あらうか。卑怯至極と思召す御心根も面目なし。皺腹一つが御土產と。地差添手早に拔放す。ナウ是待つてと卿の君駈出でて手に縋り。其言譯は自と刄物もぎ取り我が咽へ。ぐつと突立てどうど伏す。是はと驚く義經公靜も駈出で抱起し。藥よ。水よと狼狽へてフシ淚より外詞なし。地川越は見向もせず。詞出かされた時忠の娘。さうなうては御兄弟。御和睦の願ひも叶はず。とくに呼出し我が手にかけんと思ひしが地我と最期を遂げさして死後に貞女といはせたく。詞わざと自滅と見せかけし。よう拔身を奪取つた。あつぱれ健氣な女中やと地餘所に譽むるも。フシ心は淚。地義經間近く立寄り給ひ。詞かくあらんと思ひし故。わざと川越が血筋を顯はし。平家の緣を除かんと。思ひし甲斐もなき最期。地淺まし

の身の果よしなき契をかはせしと。御目に餘る涙の色靜御前も諸共に。彼方此方を思ひやり。スヱテ泣きしづみ給ふにぞ。地手負は君を戀しげに。打眺め。フシ打眺め。詞一つならず二つまで大切な言譯立ち。殘る一つは平家と縁組。地其科わたしが皆なす業。戀慕ふ身をお見捨なう。是迄は甚いお情。世につれないとはかないは。明日を定めぬ人の命。短うお別れ申します。詞靜殿。我が君樣を大切に。地頼むぞやいのとせき上げてわつとばかりに。泣きけるが。詞サア川越殿。平大納言時忠が娘の首。頼朝樣へお目にかけ。御兄弟の御和睦。それが冥途へよい土産と。地首さしのばす心根を。思ひやる程川越太郎。胸に滿ちくる涙をば呑みこみ〳〵傍に立寄り。似合はさる喩なれども。詞玄宗の后楊貴妃は馬嵬が原にて。歌舒翰に討たれ。天下の煩ひを拂ふ。御兄弟確執とならば萬民の歎き。淸き最期も天下の爲。出かされた遖々。あかの他人の某が 地介錯して進ぜうと。刀するりと拔放す。詞ナウ其あかの他人の。お手をかるも深き御縁。とてものことに。たつた一言。親子の名乘は未來でせう。さらば〳〵。さらば。地〳〵と討つ首よりも骸は先へ川越が。どうど坐してぞしをれ居る心ぞ。フシ思ひやられたり。地靜御前も義經も歎に沈み給ふ折から。耳を突拔く鐘太鼓。フシ鬨をどつとぞ上げにける。地コハ如何にと靜は仰天君も驚き。扨は海野土佐坊めが攻めかけしと覺えたり。地龜井駿河と仰せの內より押取刀で兩人が。表をさして駈出づるを。詞ヤレ待たれよと太郎は呼留め。仰分を聞く迄はと留置きしを攻めかけたは。彼等も謀者と一味の輩。地とはいへ兩人鎌倉殿の名代。過あつては敵對するも同然。只速かに追返すか。威の遠矢で防がれよ。さないと忽ち義經の仇と。いひ含むれば兩人は。尤も道理と呑込んで フシ表をさしてかけり行く。地義經公を川越が詞至極と猶も氣を付け。詞無分別の辨慶が心許なし。武藏々々と 地呼び給へば腰元立出で。詞武藏殿は最前より打悄れ居られしが。鯨波を聞くと早。悦び勇んで行かれしと。地聞くより此奴事仕出さん。靜參つて急ぎ制せよ。矢先危しソレ鎧。はつと腰元持出づる。フシ其間に長押の長刀かい込み。表へ走る女武者。堀川夜討に靜が働き フシ末世にいふも是ならん。地如何と案じ給ふ所へ龜井駿河馳戻り。詞ノウ我々味方を制して的矢を射させ。追歸さんと存ぜし所。武藏坊の無法者。玄翁掛矢を以て敵をみしやぎ。大鋸にて人を引切り。討手の大將海野の太郎を。てつぺいから爪先迄搗き碎いて候と。地中上ぐれ

ば大將呆れ。川越太郎ははつとばかり。詞討手の大將討取つては御連枝和睦の願も叶はず。不便や娘も詮なき犬死。地是非もなき世の有様と。悔涙に義經公。詞古人は人を恨みず。傾く運のなすわざと思へば恨も悔もなし。武藏が不骨を幸ひに。都を開かば綸命も背かず。兄頼朝の怒も休まる。地是を思へば卿の君が最期。殘り多やと御涙皆夢の世の有爲轉變。我も浮世に捨てられて驛路の鈴の音聞かん。龜井駿河供せよと フシ立出で給へば。地川越太郎しをれながら暫しと留め。床に飾りし鼓携へ。詞君多年御懇望ありし重寶殘し置かれては。取落されしと申すも殘念。院勅に打つといふ聲ありとは。皮より穢れし讒者の詞。打つを拙者が調べ換へ。地再び御速枝ぐはいの取持。長路の旅の御物忘れと フシ心を。こめて差出す。地義經御

手にふれ給ひ。詞親しき兄弟の因をば打切らるゝも運の盡き。結び返せよ川越と。地駿河龜井を御供にてすご〳〵館を出で給ふ。御心根のいたはしさ見送る。人も鎌倉へ是非なく〳〵も立歸る世の成行ぞ。フシ是非もなき。地跡は貝鉦鬨聲震動するも理や。武藏坊辨慶が海野の太郎を討取つて。序に土佐坊せしめてくれんと。追駈け廻つて正尊が。乘つたる馬の尻邊に乘り。ぼつ立て蹴立て白洲の庭。館もゆるぐ撞鐘聲。詞ノリヤア〳〵我が君やおはする。討手に向ひし海野は粉にして土佐坊めを生捕つたり。龜井駿河は何國に居る。武藏が料理の喰殘し賞翫せぬかと呼ばはつても。地館はひつそと靜まつて。答へる人もなきふしぎ。不思議〳〵と フシ見廻す内。地坂東一の土佐坊か腰の上帶引切つて。馬より飛下り大聲上げ。者ども來れと下知の内。兵具の 兵 數百人ソ

レ。討取れと押取りまく。武藏も馬より一足飛。太刀も刀も鷲づかみ。鵰づかみの首の骨。握るときれる數萬力雨か霰か人礫。隙間を見て土佐坊が武藏が弱腰しつかと抱く。詞ノリシヤ小僧めが味をやる。腰の療治で捻るか揉むか。地擦つておけろの フシぶり〳〵どさり。地尻餅ついても怯まぬ曲者。四尺に餘る大刀物。詞ノリ討つてかゝれば閃りとはづし。江戸てうど切れば柄先で。しやんと請けとめ。詞ホホ、、出かす〳〵。腰をさすつた其代り。地ぱつしとはねて身をかはし。大太刀蹴落し素首摑み フシぐつと引寄せ。地腰にひつ付け。詞我が君様。御臺様。龜井やい。駿河やいと 地引ずり廻り呼廻り尋ね廻れど人々の御行方も見えされば。扨は此家を落ち給ふか。コハ何ゆゑと身の科と思ひよらねば言ふ人も。答ゆる人も梢の烏泣いて詫する土

佐坊を。右をフシ左へ持直し。詞白體此奴が逃廻り。隙取つた故お供におくれた。おのれが首の飛ぶ方が我が君様の御行方。よい投算と引摑み。ちよつぺい天窓を頭巾越し。すぽりと拔いて空へ投げ。詞蹶けたる方は巽の間。詞菟原小原の方でもあるまい。元は牛若丑の方。巳午もよしや吉野も氣づかひ。詞爰に戌亥や酉ならで。程はあるまい追付かんと。地忠義と思ひ爲し事も。今になつては未申。思ひ違ひの荒者が。あら砂蹴立つる響はどう〳〵どろ〳〵〳〵。踏みしめ〳〵踏みならし。義經の。跡を寅の刻風を。起して追うて行く

第二

地吹く風にフシつれて聞ゆる。鬨聲。物すさまじきフシ氣色かな。地昨日は北闕の守護今日は都を落人の。身となり給ふ九郎義經。數多の武士もちり〴〵になり龜井六郎駿河の次郎。主從三人大和路へ夜深に急ぐ旅の空。跡振返れば堀川の御所も一時の雲煙。浮世は夢の伏見道。フシ稲荷の宮居にさしかゝれば。地龜井の六郎後馳せに驅付け。詞正しくあの鬨聲は鎌倉勢。後を見するも無念なり。地御赦を蒙つて一合戰仕らんと。申上ぐればいやとよ重清。詞都にて舅川越太郎が言つし鎌倉殿の憤り。明白に言開き。卿の君のあへなき最期も。義經が身の言譯なるに。早まつて辨慶が海野の太郎を討つたる故。止む事を得ず都をひらくは。地親兄の禮を思ふ故此後は猶以て。鎌倉勢に刄向はば。主從の緣もそれ限りと。仰に二人も腕撫でさすり。フシ拳を握つて扣ゆる折から。地義經の御跡を慕ひこがれて靜御前。蹶つ。轉びつ來りしが。それと見るより縋りつき。胴慾な我が君と誓し。涙に咽びしが。武蔵殿を制せよとわしをやつた共跡で。早御所をお退と聞き二里三里後れうとも。追付くは女の念力。ようも〳〵惨たらしう。この靜を捨置いて二人の衆も聞えませぬ。私も一所に行くやうに執成言うて下さんせと。スヱ歎けば共に義經も。情にフシ弱る御心。地見て取つて駿河の次郎。詞ヲヽ主君も途すがら噂なきにはあらねども。行く道筋も敵の中。取分けて落行く先は多武の峯の十字坊。女義を同道なされては寺中の思はく如何なりと。地諫し宥むる時しもあれ。武蔵坊辨慶息を切つて馳着き。詞土佐坊海野を仕舞うてのけんと。都に殘り思はず遲參仕ると。地言ひもあへぬに御大將。扇を以て丁々と。なぐり情も荒法師を。目鼻も分かず叩き立て。坊主びくとも動いて見よ。義經が手討にすると。御怒の顏色に思ひがけなき武蔵坊。フシはつと恐れ入りける

が。詞此間大内にて。朝方殿に惡口せしとて御勘當。永々出仕もせざりしが靜樣の詫言で御免あつたは昨日今日。其勘當のぬくもりが手の中にほの〲と。まださめ切らぬ其中に地又候や御機嫌を損うたさうなれど。辨慶が身に取つて不調法せし覺なし。詞ヤア覺なしとはいはれまい。鎌倉殿と義經が。兄弟の不和を取結ばんと川越が實義。卿の君が最期を無下にして。義經が討手に上りし。鎌倉勢をなぜ切つた。是でも汝が誤であるまいか。サア返答せよ坊主めと。地はつたと睨んで宣へば。武藏は返す詞もなく。フシ頭も上げず居たりしが。詞憚りながら其事を存ぜぬにてはあらねども。正しく御所の討手として上つたる土佐坊。地いかに御意が重いとて主君を狙ふをまじ〱と。見て居る者のあるべきか。さある時は日本に忠義の武士は絶果てなん。誤りならば幾

重にもお詫言仕らん。いかに御家來なればとて餘り慘い呵りやう。是といふも我が君の漂泊より起つた事。無念々々と拳を握り。竟に泣かぬ辨慶がたしない涙をこぼせしは。フシ忠義故とぞ知られける。地靜も武藏が心を察しあれ程にいうてぢやのに。どうぞまあ御了簡と。柔かな詫言の。其尾について龜井駿河。スエテ御免御免と詫びければ。義經面を和げ給ひ。詞母が病氣で故郷へ歸りし。四郎兵衞忠信を。我が供に召連れなば武藏が詫は聞かねども。行先が敵となつて。一人でもよき郎等を力にする時節なれば。此度は赦し置くと。地仰に辨慶はつとばかりに頭を下げ。坊主頭を撫廻し。これに懲りよ武藏坊。ア、靜樣は重々の詫言。フシいかいお世話と悅べば。地マアお詫がすんでめでたい。是からは此靜が君のお供をする樣に。執成頼む武藏殿と。フシ思ひ詰め

たる其風情。詞今詫言頼んだとて當り眼な返報。義理でもあつと申したけれど此辨慶其意を得ぬ。御家來さへ跡先に引別れて行く忍びの旅。落着く所は豫て聞き置く多武の峯。是以て女は叶はず。夕に變る人心なれば。十字坊の所存も量りがたし。是より道を引違へ。山崎越に津の國尼が崎。大物の浦よりお船に召し。豐前の尾形を御頼み有らうも知れず。それなれば長の船路。猶以てお供はなるまい。地ふつつりと思ひ切つて都に止り。君の御左右を待給へと。言ふにわつと泣出し。今迄お傍に居た時さへ片時お目にかゝらねば。身も世もあられぬ此靜何時又逢はれる事ぢややら。行先知れぬ長の旅跡に殘つて一日も。何と待つて居られうぞ。如何なる憂目に逢ふとても。ちつとも厭はぬ武藏殿。連れていて下さんせと涙ながら我が君に。ひし〱と抱付き。フシ

離れ。がたなき風情なり。地靜が別れに判官も目をしばたゝきおはせしが。詞只今武藏が言ふ通り行先知れぬ旅なれば。都に殘り義經が迎ひの船を待つべしと。地龜井に持たせし錦の袋。それ此方へと取出し。詞是こそ年來義經が望をかけし初音の鼓。此度法皇より下し賜はり。我が手には入りながら。一手も打つ事なりがたきは。兄賴朝を討てと有る院宣の此鼓。地打たねば違勅の科遁れず。打てば正しく鎌倉殿に敵對も同然。二つの是非を分け兼ねたる此鼓。身をも離さず持つたれども。又逢ふ迄の形見とも。思うて朝夕慰めと。ハルフシ渡し給へば。地手に取上げ今迄はさりともと思ふ願も綱も斷れ鼓をひしと身に添へて。スヱかつぱと伏して泣き居たる。地龜井の六郎進み出で。詞長詮議に時移り土佐坊が殘黨輩。討つて來らば御大事と。地重清に諫められ涙と共に立給へば。靜は其儘我が君の御袖に縋りつき。わし一人振捨てられ焦死に死なんより。淵川へも身を投げて。死ぬる／＼と泣叫べば。人々も持餘し。詞過ち有つては我が君の御名の疵。地何とせん方駿河の次郎。立寄つて會釋もなく取つて引追け。幸ひの縛り繩と鼓の調引きほどき。靜の小腕手ばしかく。過ちさせぬ小手縛。道の枯木に鼓と共に。雁子絡に括りつけ。詞サア邪魔は拂うたり。地いささせ給へと諸共に フシ道を早めて急ぎ行く。ハルフシ跡に靜は。身をもがき。地我が君の後影見ては泣き泣いては見。エエ胴慾な駿河殿。情にてかけられた縛繩が恨めしい。引けば悲しやお形見の鼓が損ねう何とせう。ほどいて死なせて下されと。聲をばかりに泣叫ぶは フシ目も當てられぬ次第なり。地落行く義經遁さじと土佐が郎等逸見の藤太。數多の雜兵めいく松明腰挑燈。道を照らして追つかけしが。枯木の蔭に女の泣く聲。何者ならんと立寄つて。詞ヤア此奴こそ音に聞く義經が妾靜といふ白拍子繩迄かけて。あてがうたはうまし／＼。此鼓も義經が重寶せし初音といふ鼓ならん。此道筋に判官も隱れ居るに疑なし。地福德の三年目と。藤太手早く繩切りほどき。鼓を奪取り フシ引立て行かんとする所へ。地四郎兵衛忠信。君の御跡慕ひ來て。斯くと見るより飛びかゝり。藤太が肩骨ひつ摑み。初音の鼓を奪返し宙に提げ二三間。取つて投退け靜を圍ひ。ふんぢかつて フシ立つたるは心地よくこそ見えにけれ。詞ヤア忠信殿好い所へ。地能う見えたと悅べば。逸見の藤太。詞扨は忠信よき敵。地搦捕つて高名せんと。ばら／＼と追取りまく。詞ヤアしをらしいうんさいめら。ならば手柄に搦めて見よと。地いはせも

立てず双方より。詞捕つたとかゝるを引外し。首筋攫んでえいやつと。地右と左へ筋斗打たせ隙間もなく後より。大勢抜き連れ切つてかゝれば。心得たりと抜合せ。茅花の穂先と閃めく刀を。飛鳥のごとく飛越え跳越え駈け廻り。眉間髆雑廻れば フシわつとばかりに逃退いたり。地後れて逃ぐる逸見の藤太が。素首つかんでどうど投げ足下に踏へ。詞汝等が分際で此鼓を取らんとは。胴より厚き面の皮。打破つてくれんずと。地ぽん／＼と踏みのめせば。ぎやつとばかりを最期にて。フシ其儘息は絶果てたり。地鳥居の本の木蔭より義經主從かけ出で／＼。珍しや忠信と。仰を聞くよりはつとばかり。こは存じよらぬ見參と。飛びしさつて手をつけば。龜井駿河武藏坊。フシ互に無事を語りあふ。地忠信かさねて頭を下げ。詞先づは變らぬ君の尊顔。拝し申して拙者も安堵。某も母が病氣見舞の爲お暇賜はり。生國出羽に罷下り永々の介抱。程なく母も本復致し。罷上らんと存ずる中。君腰越より追返され。鎌倉殿御兄弟御中不和と承るより。取る物も取敢へず都へ歸る道すがら。地土佐坊君の討手と聞き夜を日に次いで堀川の。御所へ今晩駈着けしに。詞早や都を開かせ給ふと。聞くより是迄御跡慕ひ。思ひがけなき靜様の御難儀を救ひしは。地我が存念の届きし所と。申上ぐれば御悦喜有り。詞我も當社へ參詣して今の働き委しくも見届けたり。鎌倉武士に刄向ふなと堅く申付けたれど。土佐坊討たれし上からは其家來を。忠信が討つたるとて構ひなし。地今に始めぬ汝が手柄遖々取り分けて。詞兄繼信も我が矢面に立つて討死したるは稀代の忠臣。其弟の忠信なれば。我が腹心を分けしも同然。地今より我が姓名を讓り淸和天皇の後胤。源の九郎義經と名乗り。まさかの時は判官に成代つて敵を欺き。後代に名を止めよ。是は當座の褒美とて家來に持たせし御着長。フシ忠信にたびければ。地はつとばかりに押戴き。頭を土にすり付け／＼。詞土佐坊づれが家來を追散せしと有つて。御着長を下し賜はる其上に。地御姓名まで賜はるは生々世世の面目。武士の冥加に叶ひしと。天を禮し地を拝し。フシ悦涙にくれければ。地判官重ねて。詞我は是より九州へ立越え。豐前の尾形に心を寄せん。地汝は靜を同道して都にとゞまり。萬事宜しく計へと。長地君は靜に別れを惜み便もあらば音信れんさらば／＼と立ち給へば。今が實の別れかと立寄る靜を武藏坊。龜井駿河立隔て押隔つれば忠信も。フシ我が君に暇乞ヒロヒ互に。無事をうなづき合ひ。心強くも主從四

人。山崎越に尼が崎。フシ大物さして出で給ふ。地コレなう暫し待つてたべと。行くを制し止むれば。御行方を打守り。御容顔を見るやうで。戀しいわいのと地に平伏し。スヱ正躰もなく泣きければ。詞ヲ、道理々々さりながら。地別れも暫し此鼓。君の形見とあるからは。君と思うて肌身に添へ。憂さを晴らさせ給へやと。下し賜はる御着長。ゆらりと肩に引つかたげ。ハルフシ宥め〳〵て。手を取れば。ヒロヒ靜は泣く〳〵形見の鼓肌身に添へ。盡きぬ名殘に咽せかへり。涙と。共に道筋をたどり〳〵て。三重へ行く空の。地夜毎日毎の入船に濱邊賑ふ尼が崎。大物の浦に隱れなき渡海屋銀平。海を抱へて船商賣店は碇帆木綿。上り下りの積荷物。運ぶ船頭水主の者人絕のなき船問屋 フシ世をゆるがせに暮しける。地夫は積荷の問屋廻り。内をまかなふ女房おりう。宿借り客の料理拵へ。所柄とて網の物塩辛な塩梅も。甘う育ちし一人娘。お安がついの轉寢にオクリ風ひか。さじと裾に物奥の襖をぐわらりと明け。風呂敷わいがけ旅の僧によき〳〵と立出づれば。詞是はマアお客僧様。今御膳を出しますに何處へお出なさるゝぞ。されば〳〵西國への出日和待つて。連ども迄もほつと退屈。只居よよりは西町へ往て買物をして來ませう。是は〳〵殘り多い。外のお客へは鳥貝鱠。御出家には精進料理分だつて拵へたに。ついあがつてござらぬか。イヤ〳〵。愚僧は山伏なれば精進せぬ。鳥貝鱠よかろぞや。それでもお前。今日は二十八日で不動様の御緣日。ほんにさうぢや。大事の精進。ハテなんとしよしよ事がない。地往て來ませうとふいと立ちあいたあいた〳〵。詞ハアお客僧様何となされた。イヤ別のことでもないが。寢て居るは爰のお娘か。此子の上を踏越えたれば。俄に足がすくばつて。エ、聞えた小さうても女子なれば。虫が知らしてしやきばつた物であろ。ヤア大降のせぬ中に。地往て來ませうと武藏坊。ばつてふ笠引冠りフシ何處ともなく急ぎ行く。地母は娘の傍に寄りコレお安。詞其様に轉寢して。風ひいてたもるなやと。地抱き起せば目を擦り〳〵。詞ヲ、母様。お前のなさるる事見て居て。ついとろ〳〵と一寢入。ヲ、それならば目を覺して。今朝習うた清書を。とつくりとよう書いて。父様のお目にかきやと。地子には目のなき親心。フシ手を引き納戸に入りにける。地かゝる所へ誰とも知らぬ鎌倉武士家來引具し。亭主に逢はうと內に入れば。女房驚き走り出で夫は他行何の御用と尋ぬれば。詞身は北條が家來相模五郎といふ者。此度義經尾形を賴み。九州へ迯下るとの

風聞によつて。鎌倉殿の仰を請け。主人時政の名代として。討手に只今下れども。打續く雨風にて船一艘も調はず。幸ひ此家に借り置いたる船。日和次第出船と聞く願ふ所なれば。其船身どもが借請け艫を押切つて下らんず。旅人あらばぼいまくり座敷を明けて休息させい。地早う早うと權威を。フシ見せて延し上れば。地女房はつと返答に當惑しながら傍に寄り。詞御大切な御用に船がなうて嘸御難儀。手前のお客も二三日以前より。日和待して御逗留。今更船を斷いうて。お前の御用にも立てがたし。殊に先樣も武士方なれば。御同船とも申されず。何とぞ御了簡あつて。今夜の所をお待ちなされて下さらば。地其中には日和も直り何艘も〱。入船の中を借り調へて上げませう黙れ女。詞逗留がなれば汝等にはいひつけぬ所の守護へ權付にいひつくる。奥の侍が怖うて汝らが口から言難くば。身どもが直に言ふべいと。地ずんど立つ袂にすがり。詞おせきなさるは御尤なれども。お前を奥へやりまして。直に御相對さしましては船宿の難儀。何分夫の歸らるゝ迄。地お待ちなされて下されと手を擦り詫びれどヤアしちくどい女郎奴。詞奥の武士に逢はさぬは。察する所平家の餘類か。義經の所縁の者。地家來ぬかるな油斷すなと。止むる女房を撥退け突退け。又取付くをあらけなく踏倒し蹴倒すを。戻りかゝつて見る夫。走り入つてかの侍が手を取つて。詞眞平御免下さるべし。則ち私此家の亭主渡海屋銀平。御立腹の樣子地我等に仰下さるべしと膝を折り手をつけば。詞ムウ汝亭主なら言つて聞かさん。身は北條の家來なるが。義經の討手を蒙り。奥の武士が借つたる船此方へ借らんため。奥へ踏込み身が直に其武士に逢はうといへば。わが女房が遮つて止むる故に今此仕儀。へエ憚りながら。そりやお前が。御無理な樣に存じられます。何故と仰しやりませ。人の借つて置いた船を。無理に借らうと仰しやりますは。ナア御無理ぢやござりませぬか。其上にまだ。宿かりの座敷へ踏込まうとなされたを。やらんとおつしやつて女房どもを踏んだり蹴たりなさるゝは。お侍樣には似合ひませぬ樣に存じます。此家に一夜でも宿致しますれば商旦那樣。座敷の中へ踏込ましましては。どうも私がお客人へ立ちませぬ。何うぞ御了簡なされて。お歸りなされて下さりませ。イヤ素町人め。鎌倉武士に對つて歸れとは推參。地是非奥へ踏込むと反打返してひしめけば。詞ア、お侍樣。それはお前の御短氣でござりましよ。私も船問屋はして居ますれど。聞きはつつてをりますが。惣別

分脇差では。人切る物ぢやないげにござります。お侍様方の二腰は身の要害。人の麁忽狼藉を防ぐ道具ぢやとやら承りました。さるによつて武士の武の字は戈を止むるとやら。書きますげにござります。ヤア小癪な奴め。地嘲ける頬げた切裂かんと抜打ちに切付くる。引外して相模が利腕むずと取り。詞コリヤもう了簡がならぬわい町人の家は武士の城郭。敷居の內へ泥臑を切り込むさへあるに。此刀で誰を切る。其上に平家の餘類の。イヤ義經の所緣なんどと。旅人を威嚇すのか。よし又。判官殿にもせよ。大物に隱れなき。眞綱の銀平がお匿ひ申したら何とする。サア眞綱が控へた。ならばびくとも動いて見よ。素頭微塵にはしらかし命を取楫此世の出船と。刀もぎ取り宙に提げ持つて出で。門の敷居にもんどり打たせば。死に入るばかりの痛をこらへ頬をしかめて起上り。詞亭主め能く覺えて居よ。此返報にはうぬが首さらへ落す覺悟せよ。また頬げた叩くかと庭なる碇をぐつと差上げ。微塵になさんと投付くれば。疾風に遭うたる小船の如く。尻に帆かけて主從はフシ跡を見ずして迯失せける。地ホヽウよいざま／＼と烟草盆引奇せ。詞何と女房。奧のお客人も今のもやくやお聞きなさつたで有らうなと。地女夫が私語く咄し聲。ハルフシ漏れ聞えてや。一間の襖押開き義經公。旅の艱苦に窶れ果てたる。フシ御容顏。地駿河龜井も跡に從ひ立出づる。こは存じよりなやと。夫も俄に膝立直し夫婦諸共手を下ぐれば。詞隱すより顯るゝはなしと。兄頼朝の不與を受け世を忍ぶ義經。尾形を頼み下らんと此所に一宿せしに。其方よくも量り知つて。時政が家來を追退け。今の難儀を救うたるは業に似ぬうい働き。我一の谷を攻めし時。鷲尾といへる木樵の童に。山道の案內させしに。山樵には剛なる者故。武士となして召使ひしがそれに優つた汝が働き。あつぱれ昔の義經ならば。地武士に引上げ召使はんに。あるに甲斐なき漂泊の身と。武勇烈しき大將の。身を悔みたる御詞。駿河龜井も諸共にスヱ無念の拳を。握りける。詞是は／＼有難い御仰。私も此界隈では。眞綱の銀平とて。人に知られて居ますれど高が町人。今日の働きも畢竟申さば竈將軍。些細な事がお目にとまつて。地我々連に御褒美の御詞冥加に餘る仕合せ。詞殊に君を見覺え奉るは八島へ赴き給ふ時。渡邊福島より兵船の役にさゝれ。拙者が手船も御用に達し。一度ならず此度も。不思議にお宿仕るも深き御緣。さるによつてお爲を存じ申上げたきは。北條が家來取つて返さば御大事。一刻も早く御乘船然る

べしと。地いひもあへぬに駿河の次郎。詞我々も其心。此天氣にて御出船は如何あらん。ア、それをぬかつてよござりましよか。弓矢打物はお前方の業。船と日和を見る事は舟問屋の商賣。昨日今日は辰巳。夜半には雨も上り。明方には朝嵐に變つて。御出船には引拔の上々日和。數年の功にて見置いたと。地見透す様にいひけるは フシ其道々と知られける。地龜井の六郎ずんど立ちヲ、銀平出かしたり。詞其方が詞について雨の晴間に片時も早く。地主君の御供仕らんと申上ぐれば義經公。船中の事は銀平が宜しく計ひ。詞只得させよと。仰にはつと頭をさげ。今も申す通り。幼少より船の事はよく鍛錬仕れば。御見送りのため拙者も手船で。須磨明石の邊迄參らん。地元船の在所は五町あまり沖の方。舟は卽ち日吉丸思ひ立つ日が吉日吉祥。我も雨具の用意を致し跡より追着き奉らん女房。君を御見立て申せと言捨て フシ納戸に入りければ。地妻は心得御身をば隱れ蓑笠參らする。ヲ、心遣ひ忘れじと。龜井駿河諸共に蓑笠取つて被せ參らせ。二人も手早く紐引きしめいささせ給へと主從三人。打連立つて濱邊に出で豫て用意の艀舟に フシ召し給へば。地兩人も飛乘り〳〵。サア〳〵船頭仕れと。纜解けば女房。門送りして舟場に下り。御武運目出度くましまして。御緣もあらば重ねて御目にかゝるべしさらば。〳〵に艪を押立て沖へ出船女房は。フシいきせき内へ入相時。地ア、心せかれやと。本フシ火燈。ならして油さし神棚お上に灯をてらし。娘々お安〳〵と呼出し。詞暮方に手習もおきやらいで。今夜は父様侍衆を。元船迄送つてなれば。和女も寢る迄爰に居や。ほんに主とした事が。地千里萬里も行く様に身拵へ。もう日も暮れた。用意がよくばいかしやんせと。呼べどぐつとも答なし。もし晝の草臥で轉寢ではあるまいか。詞銀平殿〳〵と呼立つれば。詮抑是は桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽靈なり。ナホス詞ノリ渡海屋銀平とは假の名。新中納言知盛と實名を顯はす上は。地畏ありと娘の手を取り。上座に移し奉り。詞君は正しく八十一代の帝。安德天皇にて渡らせ給へど。源氏に世をせばめられ。所詮勝つべき軍ならねば。玉體は二位の尼抱き奉り。知盛諸共海底に沈みしと欺き。某供奉して此年月。お乳の人を女房といひ。一天の君を我が子と呼び。時節を待ちしかひ有つて。地九郎大夫義經を今宵の中に討取り。年來の本望を遂せんは。ハア、悦ばしや嬉しやな。典侍の局も悦ばれよと。勇める顏色威あつて猛く。平家の大將知盛とは其骨柄に フシ顯れし。地扨は常々の

御願ひ。今夜と思し立ち給ふな。詞わきて九郎はすゝどき男。仕損じばしし給ふな。ヲ、それにこそ術あり。北條が家來相模五郎といひしは。我が手下の船頭ども。討手と僞り狼藉させ。某義經に加擔人の體を見せ心をゆるさせ。今夜の難風を日和と僞り。船中にて討取る術なれども。知盛こそ生殘つて。義經を討たんなりと。地沙汰あつては末々君を御養育もならず。重ねて頼朝に仇も報はれず。詞さるによつて某人數を手配り。艀にて跡よりぼつ着き。地義經と海上にて戰はば。西海にて亡びたる平家の惡靈。知盛が怨靈なりと雨風を幸ひに。彼等が眼を眩ません爲。我が形もこの如く。怪しく見する白糸緘。此白柄の長刀にて。九郎が首取り立歸らん勝負の合圖は大物の沖に方つて。地挑燈松明一度に消えなば。知盛が討死と心得。君にも御覺悟させまし。

御骸見苦しなき様に。ヲ、跡氣づかはずと好き左右を知らせてたべ。知盛早うと勅 こは有がたしと龍顏を。拜し申せばおとなしき。フシ八つの太鼓も御年の。數を象る合圖のしらせ。はやお暇と謡ゆふなみに。長刀取直し。巴波の紋あたりを拂ひ。砂を蹴立て。早風につれて。ナホス地眼をくらまし飛ふが如くに 三重へ かけり行く。地跡見送つて典侍の局。御傍に差寄つて。詞今知盛の仰しやつたをようお聞きなされたか。稚けれども十善の君。このさもしき御姿にては軍神への恐れ有り。御裝束と立上り。地まさかの時は諸共に。冥途の旅の死裝束と心に籠めし納戸口。フシ涙隱して入りにける。ヘルフシ夜もはや次第に。更け渡り。雨風烈しく聞ゆれば。今頃は知盛の難儀しやらんいとほしやと。ねびさせ給へば只管に。スヱ案じ侘びたる御氣色。程なく局

は山鳩色の御衣冠。恭しく臺に載せ。其身も共に衣服を更め一間を出で。片時も早く御裝束と御傍に立寄り。賤の上着を脫ぎかへて。詞下の衣上の衣。ヘルフシ御衣冠に。至る迄召さしかゆれば綺麗に。始の御姿引きかへて神の御末の御粧ひ。フシいと尊くも見え給ふ。地サア是からは知盛の吉左右を待つばかりと。そよとの音も知らせかと胸とゞろかす太鼓鐘。すはや軍眞最中と君のお傍に引添うて。知らせを今やと待つ折から。知盛の郎等相模五郎。息つきあへず馳着けば樣子は如何に。早う聞かせよ〳〵とフシ局もせきにせき立つたり。詞されば豫ての術の通り。暮過より味方の。小船を乘出し〳〵。義經が乘つたる元船間近く漕寄せしに。地折しも烈しき武庫山颪に連れて降りくる雨雷。時こそ來れと水練得たる味方の勢。皆海中に飛込み〳〵。詞西國にて亡

びし平家の一門。義經に恨をなさんと聲聲に呼ばはれば。敵に用意やしたりけん挑燈松明ばら〳〵と味方の船に乘移り。爰を先途と戰へば味方のかり武者大半討たれ。事危ふく見え候。地某は取つて返し。主君知盛の御先途を見屆けんと。フシ申すもあへず駈けり行く。詞サア〳〵大事が起つて來た。さるにても知盛の御身の上氣遣はし。地沖の樣子は如何ならんと一間の戸障子押明くれば。挑燈松明星のごとく。コハリ天を焦せば漫々たる海も一目に見え渡り。數多の小船遣り違へ〳〵。船櫓を小楯に取り。敵も味方も入亂れ舟を。飛越え跳越えで。追つ捲つつえい〳〵聲にて切結ぶ。人影までもあり〳〵と戰ふ聲々風に連れ。ハズミ手に取るやうに聞ゆるにぞ。詞あれ〳〵御覽ぜあの中に知盛のおはすらん。地やよいづくにと伸上り。見給ふ中に挑燈松明。次第

次第に消失せて フシ沖も。ひつそと鎭まれば。地是こそ知盛の討死の合圖かと。餘り呆れて泣かれもせず スヱ途方に。くれて立つたる所に。入江の丹藏朱になつて立歸り。詞義經主從手いたく働き。味方殘らず討死まつた主君知盛も。大勢に取りまかれ既に危く見えけるが。かいくれに御行方知れず。必定海に飛込んで御最期と存ずれば。地冥途の御供仕らんといひもあへず諸肌くつろげ。持つたる刀腹に突立て汐の深みへ飛込めば。ヤア扨は知盛もあへなく討たれ給ひしか。はつとばかりにどうど伏し前後も知らず泣きければ。君も見る事聞く事の。悲しさフシ怖さを取りまぜて共に。涙にくれ給ふ。地局は數の中よりも君を膝に抱き上げ。御顏つく〴〵と打守り。二歳餘りは此見苦しき荒屋を。玉の臺と思召しての御住居。朝夕の供御迄も。詞下々と同じ樣に

さもしい物。それさへ君の心では。殿上にての榮華とも思うてお暮しなされしに。地知盛お果てなされては賤が伏屋に御身一つ。置き奉る事さへもならぬやうに成果てて。終には此浦の土と成り。フシ給ふかや。地上もなき御身の上に悲しい事の數々が。續けば續くものかいのと。フシくどき立て〳〵身も浮く。ばかり歎きしが。詞ア、よしなき悔みごと御覺悟急がんと。地涙ながら御手を取り。フシオクリ泣く〳〵濱邊に出でけれど。いと尋常なる御姿此海に沈めんかと。思へば目もくれ心もくれ スヱ身もわな〳〵とぞ顫ひける。地君はさかしくましませど。死する事とは露知り給はずコレなう乳母。詞覺悟々というて。いづく〳〵連れて行くのぢやや。ヲ、さう思召すは理。コレようよ聞き遊ばせや。この日本にはな。源氏の武士蔓りて恐ろしい國。此波の下にこ

そ。極樂淨土というて結構な都がござります。其都には。祖母君二位の尼御を始め。平家の一門知盛もおはすれば。君も其處へ御幸あつて。物憂き世界の苦しみを。免がれさせ給へやと。地宥め申せば打俯れ給ひ。あの恐ろしい波の下へ。只一人行くのかや。詞ア、勿體ない。此お乳が美しう育上げたる玉體を。あのなん〳〵たる千尋の底へ遣りまして。何と身も世もあられうぞ。此お乳もお供する。いとし可愛の養君。何とお一人やられうぞ。地それなら嬉しい。詞そなたさへ往きやるならば。何國へなりとも往くわいの。地ヲ、ようい うて給はつたと。引寄せ〳〵抱きしめ。火に入り水に溺るゝも前の世の約束なれば。未來の誓ひましまして。詞天照大神へ御暇乞と。地東に向はせ參らすれば。平家美しき御手を合せ。伏拜み給ふ御有樣。見奉れば氣も消え〳〵。ナホス詞ヲ、ようお暇乞なされたなう。佛の御國は此方ぞと。平家指さす方に。向はせ給ひ。今ぞ知る。御裳川の流には。波の底にも。都ありとは ナホスフシ と詠じ給へば。詞ヲ、お出かしなされた。ようお詠み遊ばした。其昔月花の御遊の折から。斯樣に歌を詠み給はば。父帝は申すに及ばず。祖父淸盛公二位の尼君。取りわけて母門院樣。なんぼう悦び給はんに。地今はの際に是がマア。言ふにかひなき御製やとかきくどき〳〵涙の限り聲限り フシ歎きくどくぞ道理なる。地局は涙の隙よりも。御髮搔上げ搔撫でて今ははや。平家極樂への御門出を急がんと。帝をしつかと抱上げて。磯打つ波に裳を浸し。海の面を見渡し〳〵。詞いかに八大龍王恒河の鱗。安徳帝の御幸なるぞや。地守護し給へとうづまく波に。飛入らんとする所に。何時の間にかは九郎義經。駈寄つて抱留め給へばなう悲しや。見殺して死なせてたべと。振返つてヤア此方は。聲立てなと帝を小腕にひん抱へ。局の小腕ぐつと捻上げ。無理無體に引立て〳〵 オクリ 一間の内に入り給ふ ヘルフシ かゝる所へ。地知盛は大童に戰ひなし。鎧に立つ矢は蓑毛の如く。緘も朱に染めなして。我が家の内に立歸れば。跡を慕うて武藏坊表の方に立聞くとも。しらず知盛聲を上げ。詞天皇はいづくにまします。お乳の人。典侍の局と呼ばはり〳〵どうど伏し。詞エ、無念口惜しや。是程の傷に弱りはせじと。長刀杖に立上り。お乳の人。我が君と。地よろぼひ〳〵駈廻れば。一間を踏明け九郎判官帝を左手の小脇にひん抱き局を引付け フシ 突立ち給へば。地あら珍しやいかに義經。詞思ひぞ出づる浦浪に。知盛が沈みし其有樣に。又義經も微塵になさんと。ナホス長

刀。取直し。詞サア〳〵勝負と詰寄れば。地義經も少しも騒ぎ給はず。詞ヤア知盛さなせかれそ。義經がいふ事ありと。地帝を典侍の局に渡し。フシしづ〳〵と歩み出で。詞其方西海にて入水と僞り。帝を供奉し此所に忍び。一門の仇を報はんとはあつぱれ〳〵。地我此家に逗留せしより。凡々ならぬ人相骨柄察する所平家の落人。詞辨慶に言含め帝を探る計略。過つて踏越えしに。果して武藏が五躰のしびれ。其上我に加擔人の躰を見せ。心をゆるさせ討取る術。我其事を量知り。艀の船頭を海へ切込み。裏海へ船を廻し疾より是へ入込んで。地始終委しく見屆け帝も我が手に入れたれども。日の本をしろしめす萬乘の君。何條義經が擒にするいはれあらん。一旦の御艱難は平家に血を引き給ふ故。今某が助け奉つたるとて不和なる兄頼朝も。我が誤とはよも言ふまじ。必ず〳〵帝の事は氣づかはれそ知盛と。聞く嬉しさは典侍の局。詞ヲ、あの詞に違ひなく先程より義經殿。段々の情にて天皇の御身の上は。知邊の方へ渡さうと武士の堅い誓言。悦んでたべ知盛卿と。地聞くに凝つたる氣も逆立ち局を取つて突退け。詞エ、無念口惜しや。我一門の仇を報はんと。心魂を碎きしに。地今夜暫時に術顯れ。身の上迄知られしは天命々々。まつた義經帝を助け奉るは。天恩を思ふ故是以て知盛が。恩にきるべきいはれなし。詞サア只今こそ汝を一太刀。亡魂へ手向けんと。地痛手によろめく足踏みしめ。長刀押取り立向ふ。辨慶押隔て。打物わざにて叶ふまじと。珠數さら〳〵と押揉んでいかに知盛。詞かく有らんと期したる故。我も今朝より船手に廻り。計略の裏をかいたれば。最早惡念發起せよと。地持つたる苛高知盛の。フシ首にひらりと投げかくれば。詞ム、扨は此珠數をかけたのは。知盛に出家とな。エ、汚らはし〳〵。地抑四姓始つて。討つては討たれ。討たれては討つは源平の習ひ。生き變り死にかはり。恨をなさで置くべきかと。思込んだる無念の顏色。眼血ばしり髪逆立ち。此世から惡靈のフシ相を顯はすばかりなり。地かくと聞くより龜井駿河主君の身の上氣遣しと。追々駈付け取廻せば。御幼稚なれども天皇は始終の分ちを聞召し。知盛に向はせ給ひ。詞朕を供奉し。永々の介抱は其方が情。今日又麿を助けしは。義經が情なれば。仇に思ふな知盛と。地勿體なくも御涙を浮め給へば典侍の局共に涙にくれながら。詞ヲ、能うおつしやつた。何時迄も義經の志必ず忘れ給ふなや。地源氏は平家の仇敵と。後々迄も此お乳が。帝様にあだし心も付かうかと人々に疑はれん。さあれ

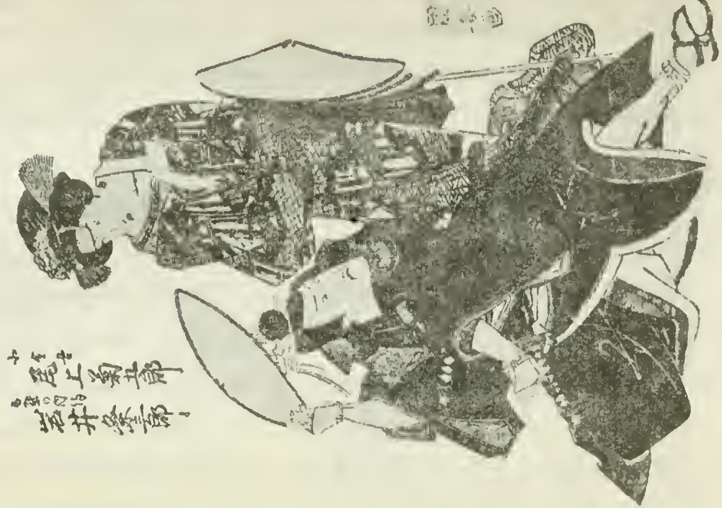
ば生きてお爲にならぬ。詞君の御事くれ〳〵も。頼み置くは義經殿と。地用意の懷劍咽に突立て名殘惜げに御顏を。打守り〳〵さらばとばかりを此世の暇。フシあへなく息はたえにける。地思ひ設けぬ局の最期。君は猶更知盛も。重なる憂目に勇氣も碎け暫し詞もなかりしが。天皇の御座近く涙をはら〳〵と流し。詞果報はいみじく一天の主と生れ給へども。地西海の波に漂ひ海に。臨めども汐にて。水に渴せしはこれ餓鬼道。ある時は風波に遭ひ。お召の船を。荒磯に吹上げられ。今も命を失はんかと。多くの官女が泣き叫ぶは。阿鼻叫喚。陸に源平戰ふは。取りも直さず修羅道の苦み。又は源氏の陣所陣所に數多駒の嘶くはフシ畜生道。今賤しき御身となり人間の憂艱難。目前に六道の苦みを受け給ふ。是といふも父淸盛。外戚の望あるによつて。詞姫宮を御男宮といひふらし。權威を以て御位に卽け。天道を欺き。天照大神に僞り申せし其惡逆。積り〳〵て一門我が子の身に報うたか。フシ是非もなや。地我かく深手を負うたれば。存へ果てぬ此知盛。只今此海に沈んで末代に名を殘さん。大物の沖にて判官に。仇をなせしは知盛が怨靈なりと傳へよや。詞サア〳〵息ある其中に。片時も早く帝の供奉を。地頼む〳〵とフシよろぼひ立てば地ヲ、我は是より九州の尾形方へ赴くなり。帝の御身は義經が何國迄も供奉せんと。御手を取りて出で給へば



亀井駿河武蔵坊。フシ御後に引添うたり。地知盛莞爾と打笑みて。昨日の仇は今日の味方。あら心安や嬉しやな。是ぞ此世の暇乞と振返つて龍顔を。見奉るも目に涙今はの名残に天皇も。見返り給ふ別れの門出。止まる此方は冥途の出船。コハリ三途の海の瀬踏せんと碇を取つて頭にかづき。さらば／＼も聲ばかり。渦卷く波に飛入つてハルフシあへなく消えたる忠臣義心。其亡骸は大物の。千尋の底に朽果て て。名は引汐にゆられ流れ。／＼て跡しら波とぞなりにける

第三

歌三芳野は丹後武蔵に大和路やわけて。名高きナホスフシ金峯山。地藏王彌勒の御寶物。御開帳とて野も山もオクリ賑ふ。道の傍に。長地茶店構へて出端くむ青前垂の入端は。女房盛りの器量よし。五つか六つの男の子。傍に付添ひ母様と。フシいう出端香もさめにけれ。地枯れ残る。ハルフシ身はいとゞ猶。枝をりや。若葉の内侍若君は。主馬の小金吾武里が。嵯峨を遁れて維盛の。もしや高野と心ざしギンオクリ旅の用意の小風呂敷。脊に忍海吉野なるフシ下市。村に着きけるが。地若君六代癇疾に悩み給へば幸ひの茶店。暫く床几へお休みと。内侍を誘ひ其身も脊負ひし包をおろし。お茶と指圖にあい／＼と。フシ愛想こぼれて差出す。地内侍つく／＼見給ひ。詞コリヤ此方も子持よの。自らも連合の忘れ形見を伴ひしに。道よりなやみて貯へし。薬を残らず飲みきらし俄の難儀。地子持つた者は相見互。嗜みあらば所望したしと仰に女房。詞それは



マア甚い御難儀。私が子は生れてより腹痛一つ起しませねば。何の用意もござりませぬ。ハテそれは氣の毒や。イヤ申しほんにそれ〳〵。幸ひ此村の寺の門前に洞呂川の陀羅助を。請賣る人がござりますれば。お供の前髪様つい一走り。イヤイヤ身どもは當所不案内。大儀ながら其方調へてくれまいか。ヲ、それもお安い事。わたしが調へて來て上げませう。善太留守しや。但しは行くか。地おれもと慕ふ子を連れて。器量よければ心まで尊い寺の門前へ フシ藥を買ひに急ぎ行く。地ハテ心よい女中やと内侍は見やり。詞コレ六代爰に大分木の實があるが。拾うて遊ぶ氣はないか。金吾が拾ふが大事ないかと。地勇めの詞に引立てられ。おれも拾をと若君の病もわやく半分の。起立ち給へば内侍も共々。サア〳〵拾を。詞イヤ拙者めがと小金吾が。地二十歳に近い大前髪大人氣ないも若君の。機嫌取り榧栃の實を。フシ拾ひ集むる折柄に。地若き男の草臥足 小オクリ 是も。旅立ち風呂敷包。脊負うてぶら〳〵茶店を見付け。どりや休んで一服と包をどつかり床几に下し。御免なりませ火を一つと烟草吸ひつけ。詞コリヤ皆様方は開帳參りでござりますか。和子様は道草か。わしらが在所の子供と違ひ。御奇麗な生れつきやと。地譽めても咄しかけても。心置く身はそこ〳〵に。フシ詞數なく拾ひ居る。地暫く休んでかの男。詞コレ〳〵其落ちた木の實は虫入りで。見かけがようても皆空虚。木にあるをお取りなされと。いふに金吾は。こな男何をいふ。二丈餘りの高木。駈上る蹴爪は持たぬ。サそれを心安う取りやうがござります。そりやどうして。さらば鍛錬お目にかけうと。地小石拾うて打つ礫。枝に當つてばら〳〵〳〵。若君悦び腦も忘れ。小金吾拾への御機嫌に内侍も嬉しく。詞ヲ、よい事して貰やつた。地過分々々と一禮も。冥加に餘ると知らざりし。旅の男は自慢顔。詞何と手の内御覽じたか。まそつと打つて進ぜたいが。遠道かゝへお伽申しても居られず。地我等は參ると包を脊負ひ。御縁あらば重ねてと。フシいうて其場を行き過ぐる。地小金吾木の實を拾ひ了ひ。詞サア是で堪忍なされ。扨々今の男は氣轉者と。地見やる床几の風呂敷包。同じ色でもどこやらが違うた樣なと走り寄り。内改むれば覺えなきしかも是は張皮籠。こちは衣類の藤行李。扨は木の實に氣を奪はせ。取換へうせたか但しは麁相か。何にもせよ追つかけて取返さんと駈出す所へ。向うよりあたふた戻る以前の男。麁相致した御免々々といひつゝ包を差出し。詞日暮も近し心はせく。同し色の風呂敷ゆゑ。

重い輕いに氣もつかず取りちがへた龜相。道にてふつと心付き取つてかへしてお詫言。地眞平御免下されと。顔に似合はぬフシ手すりたいぼう。地小金吾は胸落着き。詞龜相とあれば言分もをりないが。萬一紛失の物あると赦さぬが合點か。何が扨相違あらば臺座の別れ。御存分になされませ。ムウ其一言なら疑ふに及ばねども。地中改めて請取らんと包を開き。改め見れば相違もなし。詞實に龜相に極つた。申分なし其方の。荷物も持つてお行きやれと。地床几に殘る風呂敷包。渡せば請取り不思議顔。詞此中括の解けたは。イヤそれは最前變つた樣には思へども。もしやとちよつと見たばかりと。地いふ間に開く張皮籠。引散らけて袷の袖。浴衣の間を探し見て。びつくり仰天行李打ちふるひ。コリヤどうぢやコリヤ無いわ。無いわ〳〵ときよろ〳〵目玉。何がない

何見えぬと。傍も氣の毒目をくばれば。豫てたくみのいがみ男。腕まくりしてコレ前髮殿。詞此皮籠の中に人に賴まれて高野へ上げる祠堂金。二十兩入れ置いた。コリヤくすねたな〳〵。サア出した〳〵〳〵。サ出しやいのと。地取つてもつかぬ難題に。小金吾むつと反打ちかけ。詞此奴下郎め武士に向つて何がなんと。今一言いうて見よと。地氣相變れどびくともせず。詞盜人たけ〴〵しいと。その高ゆすりくはぬ〳〵。赤鰯をひねりかけ威嚇して此場をぬけるのか。ほろうまいそんな事春永になされ。僅か二十兩で首綱のかゝらぬ中。四の五のいはずに出した〳〵と。地もがりいがみの强請者。モウ堪忍がと拔きかけしが。お二方の姿を見てじつとこたへて胸撫でおろし。詞コレサ若い人そりや其許の覺違ひ。見らるゝ通り足弱をお供したれば。たとへ何萬兩落散つて

あつても。目をかける所存はなし。地篤と其方を吟味召されと。いはせも果てず。詞コレ其足弱連れた。が盜する付目ぢや。よもやと思はせしてやるが當世の流行物。何萬兩は入らぬたつた二十兩。スリヤどうしても身が盜んだとな。ハテ知れた事。ムウして其盜んだ證據は。コレ此皮籠の中紐何故解いた。あり樣の荷物に紛失があると赦さぬというたでないか。理詰めぢやぞや。出しやいの〳〵と。地せり詰められて小金吾も。もう是迄と拔放す。内侍はあわて抱きとめ。詞尤ぢや道理ぢや。短氣な事をしやつては。わしも此子も共に難儀。無念にあらうと堪忍して。あの者のいふ樣に了簡つけてやつてたも。地足弱連れたを災難と思ひ。胸をしつめてたもいのと。涙にくれて宣ふにぞ。血氣にはやる小金吾も見るに忍びず。詞世が世の時でござらうなら。ずた〳〵に

試しても厭き足らぬ奴なれども。何をいうても茅花の穂にも怯ぢる身の上。御意の通りに致しましよ。ヘエ、口惜しうごさりますると。地こなたは大事の二方を。お供の身なれば無念を堪へ。奥齒嚙む程つきあがり。詞二十兩といふ金溫まつて置いて。其頬何ぢや。ホウ怖いわ〳〵。此赤鰯で切るか。此目で嚇すか。前髪を一筋づつ抜くぞよ。但しもう金はふけらしたか。地連の女郎から穿鑿と。弱みへかゝるを首筋つかんで引戻し。用意の路金いふ程出して睨みつけ。詞大切なお方をお供した故街取らるゝ廿兩。地持つてうせいと打付くれば。街の習ひ金見ると目に佛なく手ばしかく。拾ひ集めて耳よみ揃へ。詞テモ恐ろしい此金を那智若衆めにすつての事。地ひじり取らりよと致したと減ず口。其顯をと立寄る金吾を内侍は押へ。事ない中と若君引連れ。立出で給へば是非もなく跡に引添ひ小金吾も。無念をこたへ上市の　フシ宿ある。方へと急ぎ行く。地たとへ百度睨まれても。一度が一歩に付きやせまい。うまい仕事といがみの權太。金懐に押入れて。盆屋へ急ぐ向うへずつと。茶屋の女房が立塞がり。詞コレ權太殿。こりや何處へ。ホ小せんか。わりや店明けて何處へいた。わしや旅人のお頼で坂本へ藥を買ひに。ヲそりやよい手筈。われが居たら又邪魔しように。外して居たでましましと。地いふ胸ぐらを取つて引すゑ。詞コレこなたに街さす氣で外しては居ぬぞや。最前戻りかゝつた所にわつぱさつぱ。差出たら街の正銘顯はれ。どんな事にならうも知れぬと。あの松陰から聞いて居た。ヘエ、こなさんは恐しいたくみする人ぢや。姿は生めども心は生まぬと。親御は釣瓶鮓屋の彌助の彌左衛門様というて。此村で口も利くお方。見限られ勘當同然。御所の町に居た時こそ道も隔たれ。跡の月から同し此下市に住んでも。嫁か孫かと お近付にもならぬはの。皆此方様の心から。いがみの權に衣きせて。街の權といはうぞや。



此善太郎は可愛うないか。地博奕の資本が入るならば此子やわしを賣つてなりと。重ねて止めて下さんせ。何の因果で其樣な恐ろしい氣にならしやつたと。取付き歎けば突飛し。詞ヤア引きさかれめが又しては世迷言。おれが盜衒の根元は。皆うぬから起つた事。ホこりや大それた事聞かねばならぬ。そりや又どうして。どうしてとは覺えがあらう。おりや十五の年元服して。親父の言付けで御所の町へ鮓商。隱し女の中に汝が振袖。見込んだが鯱。鱶程寢入る佛師達の。膀くりを盜出し。店の溜り花客先。身代半分了うてやつた。ナ聞えたか。所で親父がほり出した。無理な和郎の。其時因果と此餓鬼が腹にあつて。親方はねだる。年貢米を盜んで立銀。其尻が來て首が飛ぶのを。庄屋の阿呆が年賦にして。毎日の催促。其金濟そで博奕にかゝり。出世して小強請衒此中も親父の所の家尻を切つて見たれど。妹のお里めと。内の男めと夜通しの鼻聲でとんとまんが損ねた。又今日のまんのよさ此勢に母の鼻毛をゆすりかけ。二三貫目いぢめてくる。酒買うて待つてをれ。善太よ。日の暮から寢をんな。地夜通しせねばおれが商賣は譲られぬと。いひつゝ立てば女房取付き。まだ此上に親御の物まで瞞し取ろとは勿體ない。マア内へ戻つて下されと。縋れど聞かず跳飛すを。コリヤやい善太よ留めてくれと。母の敎に利口者父



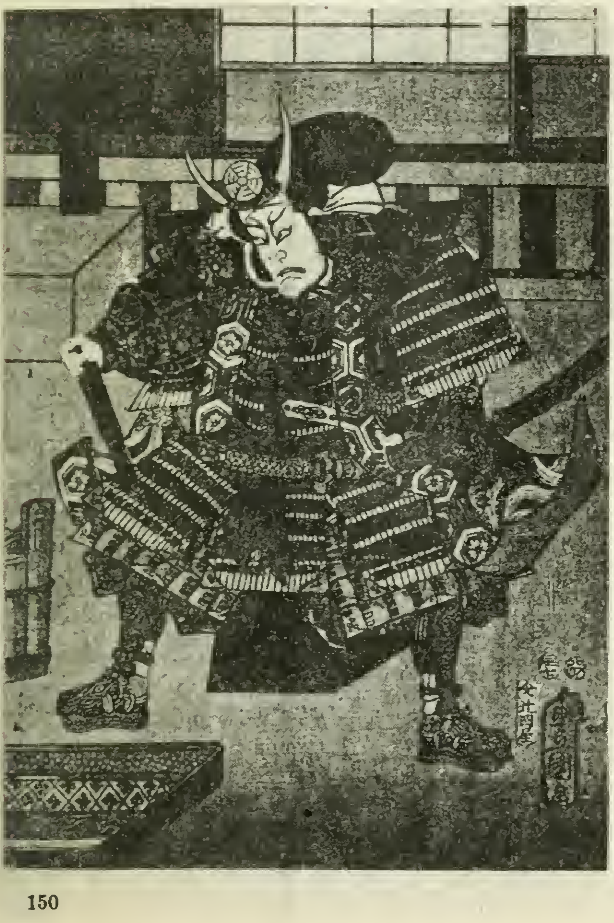
様内へサアござれと手に纒ひ付く蔦葛子が跡追へば惡者は。小手縛とてうたてがる。しかも血筋の糸縄で。きびたが惡い出直そと。鬼でも子には引かさるゝ。テモ扨も冷い手ぢやと手を引いて　オクリ女房。ヘ諸共立歸る。ハルフシ夕陽西へ入る折から。地主馬の小金吾武里は上市村にて朝方が。追手の人數に取巻かれ。數ヶ所の疵を負ひながら内侍若君御供申し。一先づ都へ立歸るを。跡に續いて數百人。遁さぬやらぬと追つかけたり。手疵は負へども氣は鐵石の武里が。死物狂と思ひの刄。爰に三人彼處に七人はらり／＼と三重へ薙倒しフシ其身は秋の。花紅葉敵は木の葉の共跡へ。追手の大將猪熊大之進後ればせに駈け來り。詞ヤア死損ひめ何處へ行く。先頃嵯峨の奥にて取逃し。主人朝方公の御機嫌以の外。すご／＼館へ歸られず。庵坊主めに白状させ付廻したる此

街道。サア維盛の御臺若君を渡し。地腹かつさばけとフシ呼ばはつたり。地手負は流るゝ血汐をぐつと一飲み息をつぎ。詞主馬の判官が忰小金吾武里。息ある中はいつかな／＼ヲ其一言が絶命と。地躍上つて討つ太刀をちやうど請留めはつしと撥ね。詞ひらりと見せてはくるりと外し手練を盡せどさすがは手負。地内侍若君あぶ／＼ひや／＼。小石を拾ひ砂打付け及び腰なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が眼に入つて目當は暗闇。隙間に切込む太刀に眉間を割られて。頭轉倒。乘りかゝるを下よりも突く鋩は肋骨。金吾も仰向に反返る。あなたが起きれば石礫。猪熊切られ小金吾も。共に深手の四苦八苦フシ修羅の巷ぞ危けれ。地忠義の天性小金吾が難なく相手を取つて押へ。ぐつと突込む止めの刀。サア仕了せし嬉しやと。思ふ心のたるみにや。うんと　フシ其身も倒

れ伏す。ナウ地悲しやと内侍若君勞り抱へ抱起し。詞コレなう金吾々々氣をはつきりと持つてたも。其方が死んで自や此子は何となる物ぞ。地情なや悲しやと泣入り給ふ御聲の。耳に通つて手負は顔を上げ。詞コレ内侍様六代様。諦めて下さりませ。心は彌猛に逸れどももう叶はぬ。我が君維盛様は。豫て御出家のお望。熊野浦にて逢ひ奉りしといふ者ある故。高野山へと志しお二方をお供したれど。なか／＼此傷では一足も行かれず。コレ若君様。ようお聞き遊ばせや。御臺様を伴ひ紙谷の宿といふ所に。内侍様を殘し。お前は人を頼んで山へ登り。父様のお名はいはれぬ。今道心の御出家と尋ねてお逢ひ遊ばせ。西も東も敵の中。平家の公達と悟られぬ様。お命目出度う御成人の後。地憚りながら金吾めが事思召し出されなば。一滴の水一枝の花。それが卽ち冥途

へ御知行。御成長待つてをります。お名殘惜しいお別れと。いふもせつなき息づかひ。六代君は取縋り。死んでくれな小金吾。其方が死ぬると父樣に逢ふ事がならぬわと。地泣入り給へば内侍はせき上げ。詞アレ聞いてたも子心でも。其方一人を力にする。維盛樣に逢ふ迄は。死ぬまいぞ〳〵と何故思うてはたもらぬ。地御一門は殘らず亡び廣い世界を敵に持ち。何時迄存へ居られうぞ。共に殺して フシ 給へば。フシ 理と。地手負はいとゞ涙にくれ。詞先君小松の重盛樣は日本の聖人。若君は其孫君諸神諸菩薩の。惠のない事もござりますまい。末頼みを思召して必ず短氣をお出しなされな。あれ〳〵向うへ挑燈の火影。又も追手の來るも知れず。若君伴ひ此場を早く〳〵。イヤ〳〵深手の其方を見捨て置いて。何國を當に行くものぞ。死なば共にと坐し給へば。詞エ、腑甲斐ない六代樣は大事にないか。此傷で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞入れなければ直に切腹。コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら。成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや。お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ跡より參ろ。必ず待つて居るぞやと。地言ふ間も近付く挑燈の。火かげに恐れ是非なくも若君。フシ 連れて落ち給ふ。御心根の悼はしさ。手負は御跡見送り〳〵。詞死なぬと申せしは僞り。三千世界の運借つても。何の此傷で生きられませう。内侍樣。六代樣。これが此世のお別れでござりますと。地思ふ心も斷末魔。知死期も六つの暮過ぎて フシ 朝の露と消えにける。地程なく來る挑燈は此村の五人組。何やらざわ〳〵話し合ひ。山坂の別れ途に庄屋作が立留り。詞コレ彌助の彌左衛門殿。貴樣は鮓商賣故。念押す上におしかける。今いひつけた鎌倉の侍は聞及んだ蚰蜒。何やらこなたの耳を甜つて兀げる程いひつけたら。畏つた〳〵と滅多無性に請合うたが。何と覺のある事かや。ハテ知れた事。此方衆も常からおれが性根を知らぬか。血を分けた悴でも見限つたら。門端も踏まさぬ彌左衛門。膝ぶしが碎けても。畏つたら痺も切らさぬ。したが跡からのいひつけがもつけ。嵯峨の奥から逃げて來た。子を連れた女と大前髮。此村へ入込んだと追手からの知らせ。所で蚰殿が甜りかけて。捕へたら褒美とある。こりや又格別よい仕事。地皆も油斷をせまいぞやヲそれ〳〵。こんな時こなたの息子の。いがみの權太を頼んで置かうと五人組。ハルフシ 山道行けば。地彌左衛門坂へおりしも行先の手負にばつたり行當りはつと飛び退き。氣味惡ながら挑燈振上げ。そろ〳〵立寄り。詞テモむごた

らしう切つたは／＼。旅人さうなが。追剝の所爲ならば丸裸にしさうなもの。路銀を當に惡者の所爲かと。地惡い子を持つ親の身は。案じ過して。詞コレ／＼手負殿／＼と。地呼ぶも答もなき骸に。扨は最早息絕えたか。詞いとしや何國の人なるぞ。見ればふけた角前髮。袖振合ふも他生の緣。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀南無阿彌陀佛と地回向して。兎角浮世は老少不定。哀れを見るも佛の意見。人は曲まず眞直に後生の種が大事ぞとフシ思ひ續けて行過ぎしが。地何思ひけん立止り。取つつ置いつの俄の思案。そろり／＼と立戻り。邊見廻し／＼て拔身を拾ひ取るより早く。死首ぱつしと打落し。挑燈吹消し首提げ。添いと彌左衛門。直なる道も橫飛に我が家をさして。三重へ立歸る。二上り歌春は來ねども花咲かす。娘が漬けた鮓ならば。なれがよかろと。買ひにくる。ナホスハル



フシ風味も吉野。下市に賣弘めたる釣瓶鮓御鮓所の彌左衛門。留守の内にも商賣に拔目も内儀が早漬に。娘お里が片襷。小オクリ裾に。前垂ほや／＼と愛に愛持つ鮎の鮓。長地押へてしめてなれさする。味い盛りの振袖が。釣瓶鮓とは。フシ物らしし。地〆木に栓を打込んで。桶片付けて串し母様。詞昨日父様のいはしやるには。明日の晩には内の彌助と祝言さす程に。世間晴れて女夫になれと仰しやつたが。

日が暮れてもお歸りないは嘘かいな。ヲあの言やる事わいの。何の嘘であろぞ。器量のよいを見込みに。熊野参りから連れて戻つて。氣も心も知ると彌助といふ我が名を譲り。主は彌左衞門と改めて内の事任せて置かしやるは。和女と娶はす豫ての心。今日は俄に役所から。親父殿を呼びに來て思はぬ隙入。迎ひに遣ろにも人はなし。サイナ折惡う彌助殿も方々から鮓の誂へ。仕込の桶が足るまいと明桶取りにいかれました。地もう戻らるゝでござんしよと。フシ噂半へ。明桶荷ひ戻る男のとりなりも。利口で伊達で。色も香も知る人ぞ知る優男。娘が好いた厚鬢に冠着せても フシ憎からず。地内へ入る間も待兼ねて。お里は嬉しく。アレ彌助様の戻らんした。詞待兼ねた遲かつた。もしや何處ぞへ寄つてかと。氣が廻つた地案じたと。女房顔して言うて見る。サヘリ流石鮓屋の娘とて。フシ早い馴とぞ見えにける。地母は莞爾笑ひを含み。詞彌助殿氣にかけて下さんな。この吉野郷は辨財天の教によつて。夫を神とも佛とも。戴いて居よとある天女の掟。其代り程恪氣も深い。又有様は親の孫。瓜の蔓に地ではござらぬといひくろむれば。詞是はまあ却つて迷惑。段々お世話の上。大切なお娘御まで下され。お禮の申し様もござりませぬ。さりながら兎角お前には。彌助殿彌



助殿と。殿付をなされてさりとては氣の毒。やつぱり彌助どう爲い斯う爲いとお心安う。ナ申し。イヤ〳〵それは赦して下され。そりや又何故でござりますえ。されぱいの。彌助といふ名はこれ迄連合の呼名。殿付せずにどう爲いから爲いとは。勿躰なうて言憎い。言馴れた通り殿付さして下されと。地實に夫をば大切に。思ふ掟を幸ひに娘へこれを聞けがしの。フシ母の慈悲とぞ聞えける。地お里彌助は明桶を板間へ並べて居る所へ。此家の惣領いがみの權太門口より乙聲で。母者人〳〵と。いひつゝ入ればお里はびつくり。又兄様かようお出でと揉手する。詞きよと〳〵しい其面何ぢや。よう來たがびつくりか。わりや彌助と味い事して居るさうなが。コリヤ彌助もよう聞け。今追出されて居ても。竈の下の灰迄おれが物。今日は親父の毛虫が。役所へ往たと聞いたによつて。ちと母者人にいふ事があつて來た。二人ながら奥へ失せうと地睨み廻されうぢ〳〵と是にというて立つ彌助。娘も跡に引添うて フシ一間へこそは入りにけれ。地跡に母親溜息つぎ。詞コリヤ又留守を考へ無心に來たか。性懲もない腕白者。其汝が心から嫁子があつても。足踏み一つさす事ならぬ。聞きや此村へ來て居るげなが。地互に知らねば摺合うても。嫁姑の明盲目。眼つぶれと人々にいはれるが面目ない。ヘヱ、不孝者めと目に角を。立て變つたる機嫌にぐんにやり。直ではいかぬといがみの權太。思案しかへて。詞申し母者人。今晩參つたは無心ではござりませぬ。お暇乞に參りました。そりや何で。私は遠い所へ參ります程に。親父様にもお前にも。地隨分お健で〳〵としをれかければ母は驚き。詞遠い所とはそりや何所へ。地どうした譯で何しに行くと。根問は親の瞞され小口。サアしてやつたと。フシ目をしばたゝき。詞親の物は子の物と。お前へこそ無心申せ。竟に人の物箸一本。曲んだ事も致しませぬに。不孝の罰か。夜前私は大盗人に遭ひました。ヒヤア。其中に代官所へ上げる年貢銀。三貫目といふもの盗み取られ。言譯もなく仕様もなく。お處刑にあはうよりはと覺悟極めてをりまする。地情ない目に遭ひましたと。かます袖をば顔に當て。しやくり上げても出ぬ涙。鼻が邪魔して目の緣へとゞかぬ舌ぞ フシうらめしき。地甘い中にも分けて母親。實と思ひ倶に目をすり。詞鬼神に横道なしと。年貢の銀を盗まれ死なうと覺悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰よう思ひ知れよ。アイ〳〵思ひ知つてはをりますけれど。どうで死なねばなりますまい。コリヤやい。あい〳〵。

常の汝が性根故これも衒か知らねども。しやうぶ分にと思うた銀。親父殿に隱してやろ。是でほつとり根性直せと。地そろ〳〵戸棚へ子の陰で。親も盜をする母の甘い錠さへ明け兼ぬる。詞つい雁首でこち〳〵が地よござりまするとし馴れたるおのが手技を教ゆる不孝。親は我が子が可愛さに地獄の種の三貫目。跡をくろめて持つて出で。何ぞに包んで遣りたいがと。限りない程甘い親。味いわろちやといがみの權太鮓の明桶よい入れ物。是へ。〳〵と親子して銀を漬けたる金鮓。蓋しめ栓しめサアよいわ。これで目立たぬ提げて去ねと親子が工合の最中へ。苦い爺親彌左衛門これも疵持つ足の裏。あたふたとして門口を。戻つた明けいと打叩く。南無三親父と内に轉倒狼狽へ廻り其桶を。爰へ〳〵と明桶と共に並べて親子はひそ〳〵。奥と口とへ引別れ。息を詰めてぞ フシ入りにける。なぜ明けぬ〳〵と。頻に叩けば奥より彌助。ハズミフシ走り出でて戸を明ける。地内入り惡く傍を見廻し。詞コリヤ又何奴も寢てをるか。いひつけた鮓共は。地仕込んであるかと鮓桶を提げたり明けたりぐわつた〳〵。詞コリヤ思ふ程仕事が出來ぬ。女房どもやお里めは何してをるぞ。イヤ只今奥へ地呼びましよと行く彌助をば引き止め。内外見廻し表をしめ。上座へ直し。フシ手をつかへ。詞君の親御。小松の内府重盛公の御恩を請けたる某。何卒御子維盛卿の御行方をと。思ふ折柄熊野浦にて出合ひ。御月代をすゝめ此家へお供申したれども。人目を憚り下部の奉公。餘りと申せば勿體なさ。女房ばかりに仔細を語り今宵祝言と申すも。心は娘を御宮仕へ。彌助々々と。賤しき我が名をお讓り申したも。彌助くるといふ文字の緣起。人は知らじと存ぜしに。今日鎌倉より。梶原平三景時來つて。維盛卿をかくまへあると退引させぬ詮議。烏を鷺と云ひ拔けては歸れども。邪智深い梶原。もしや吟味に參ろも知れずと。心工は致して置けども油斷は怪我の基。明日からでも我が隱居上市村へお越しあれと。地申上ぐれば維盛卿。詞父重盛の厚恩を請けたる者は幾萬人。數限りなき其中に。お事が樣な者あらうか。地昔はいかなる者なるぞと。フシ尋ね給へば。詞私めは平家御代盛りの折柄。唐土育王山へ。祠堂金お渡しなさるゝ時音戸の瀬戸にて三千兩の金盜取られ。役目の難儀切腹にも及ばん所。有難いは重盛樣。日本の金唐土へ渡す我こそは。日の本の盜賊と御身の上を悔み給ひ。重ねて何の祟もなく御暇を下され。親里へ立歸つて由緒ある鮓商賣。今日を安樂にくらせども。倅權太郎めが盜衒。殺

生の報ぞと。地思ひ知つたる身の懺悔。お恥しうござりますと。語るにつけて維盛も。汲具榮華の昔父の事思ひ出され御膝に。スヱ落つる涙ぞいたはしき、地娘お里は今宵待つ月の柱の殿設け。寐道具抱へ立出づれば。主ははつと泣目を隱し。詞コリヤ彌助。今いひ聞かした通り。上市村へ行く事を。必ず〳〵忘れまいぞ。地今宵はお里と爰にゆるり。嫁と俺とは離座敷遠いが花の。詞香がなうて。地氣樂にあらうと打笑ひ。ハルフシ奥へ行くのも娘は嬉しく。テモ粹な父さん離座敷は隣知らず。餅つきせうとヲをかし。こちらは爰に天井拔け。寢て花やろと フシ蒲團敷く。地維盛卿はつく〴〵と身の上又は都の空。若葉の内侍や若君の事のみ思ひ出されて。スヱテ心も濟まず氣も浮かず。フシ打ちしをれ給ひしを。地田ゞはせぶりとお里は立寄り。詞コレサこれなア。ヲしんき。

何初心な地案じてぞ。二世も三世も固めの枕。詞二つ竝べた此方や寐よと。地先へころりと轉寐は。フシ戀の畏とぞ見えにけり。地維盛枕に寄添ひ給ひ。詞是迄こそ假の情夫婦となれば二世の緣。地結ぶにつらき一つの言譯。詞何を隱さう某は。國に殘せし妻子あり。貞女兩夫に見えずの掟は夫も同じ事。地二世の固めは赦してと。流石小松の嫡子とて解けたやうでも何處やらに フシ親御の氣風殘りける。地神ならず佛ならねばそれぞとも。知らぬ道をば行迷ふ。地若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き。手負の事も賴まんと思ひ寄る身も緣のはし。此家を見かけハルフシ戸を打叩き。詞一夜の宿と乞ひ給へば。地維盛はよい退きしほと表の方。叩く樞に聲を寄せ。詞此内は鮓商賣。宿屋ではござらぬと地愛想のないが フシ愛想となり。詞イヤこれ申し。稚を連れた

地旅の女。スヱ是非に一夜と宣ふにぞ。地斷いうて歸さんと。戸を押開き月影に。見れば内侍と六代君。はつと戸をさし内の樣子。娘の手前もいぶかしくそろ〳〵立寄り見給へば。フシ早くも結ぶ夢の體。地表に内侍は不思議の思ひ。詞今のはどうやら我が夫に。地似たと思へど形容。頭も青き下男よもやと思ひ給ふ中。戸を押開いて維盛卿。詞若葉の内侍か。六代かと。地宣ふ聲にヒヤア扨は我が夫。父樣か。ナウなつかしやと取縋り。詞はなくて三人は。フシ泣くより外の事ぞなき。地先づ〳〵内へと密に伴ひ。詞今宵は取分け都の事。思ひ暮して居たりしが。親子共に息災で不思議の對面さりながら。某此家に居る事を誰が知らせしぞ。殊に又。地遙々の旅の空供連れぬも心得ずと。尋ね給へば若葉の君。都でお別れ申してより須磨や八島の軍を案じ。一門殘らず

討死と聞く。悲しさも嵯峨の奥。泣いてばつかり暮せしに。高野とやらんにおはするといふ者のある故に。小金吾召連れお行方を心ざす道追手に出合ひ。可愛や金吾は深手の別れ頼みも力もない中に。廻り逢うたは嬉しいが。三位中將維盛樣が。このお姿は何事ぞ。袖の無い此羽織に。このお頭はと フシ取付いて咽び。絕入り給ふにぞ。地面目なさに維盛も。額に手を當て袖を當て フシ伏し。沈みてぞおはします。地涙の內にも若葉の君臥したる娘に目をつけ給ひ。詞若い女中の寢入ばな。殊に枕も二つあり。定めてお伽の人ならん。地斯くゆるかしきお暮しなら都の事も思召し。風の便もあるべきに。打捨て給ふは胴慾と恨み給へば。詞ホヲ、それも心にかゝりしかど。文の落ち散る恐れあり。わけて此家の彌左衞門。父重盛への恩報じと。我を助けて是迄に。重々厚き夫婦が情。何がな一禮返禮と。思ふ折柄娘の戀路。つれなくいはゞ過あらん。却つて恩が仇なりと假の契は結べども。女は嫉妬に大事も漏すと。彌左衞門にも口留して我が身の上を明さず。地仇な枕も親どもへ義理に是迄契りしと。地語り給へば臥したる娘。堪へ兼ねしか聲上げてわつとばかりに泣出す。コハ何故と驚く內侍若君引連れ迯げのかんとし給へば詞ナウこれお待ち下されと。地涙と共にお里は駈け寄り。先づ／＼これへと內侍若君上座へ直し。詞私はお里と申して此家の娘。淫者憎い奴と。思召されん申譯。地過ぎつる春の頃色めづらしい草中へ。繪にあるやうな殿御のお出で。維盛樣とは露しらず女の淺い心から。可愛らしいいとしらしいと思ひそめたが戀のもと。詞父も聞えず。母樣も。地夢にも知らして下さつたら。サハリ縱へ焦れて死ぬればとて。雲井に近き御方へ鮓屋の娘が惚れられうか。一生連添ふ殿御ぢやと。思ひ込んで居るものを。二世の固めは叶はぬ。親への義理に契つたとは。情ないお情に。預りましたとどうど伏し フシ身をふるはして泣きければ。地維盛卿は氣の毒の。內侍も道理の詫涙。フシかはく間もなき折柄に。地村の役人駈來り戶を叩いて。詞コレ／＼爰へ梶原樣が見えまする。地內掃除しておかれいと言捨てて立歸る。人々はつと泣く目も晴れ。スヱ如何は。せんと俄の仰天。お里は早速に心付き。詞先づ／＼親の隱居屋敷 地フシ上市村へと氣をあせる。詞實に其事は彌左衞門我にも敎へ置きしかど。最早開かぬ平家の運命。地檢使を引請け潔う腹かき切らんと身拵へ內侍は悲しく。コレ此若のいたいけ盛を思召し。一先づ爰をと無理やッに引立て給へば維盛も。子に引かさ

る丶後髪。是非なく其場を落ち給ふ。フシ御運の程ぞ危けれ。地様子を聞いたかいがみの權太勝手口より躍出で。詞お觸のあつた内侍六代。地維盛彌助め ハズミフシせしめてくれんと尻引褰げ駈出すを。コレ待つてとお里は取付き。詞兄様これは一生の妾が願ひ。見赦して下されと。地賴めど聞かず跳飛ばし。大金になる大仕事邪魔ひろぐなと縋るを蹴倒し撲飛ばし。最前置きし銀の鮓桶。これ忘れてはと提げてフシ跡を慕うて追うて行く。詞ナウ父様母様と。地お里が呼ぶ聲彌左衛門。母も駈出で何事と問へば娘はコレ〱〱。詞都から維盛様の御臺若君尋ねさまよひお出であり。積る話の其中へ詮議に來ると知らせを聞き。三人連で上市へ落しましたを情ない。兄様が聞いて居て討取るか生捕つて。褒美にするとたつた今追駈けてと。地いふよりびつくり彌左衛門。ソレ一大事と嗜の朱鞘の脇差腰にぼつこみ駈出す向うへ。ハイ〱〱と。矢筈の挑燈梶原平三景時。家來數多に十手持たせ道を塞いで。詞ヤア老耄め何處へ行く。迯ぐるとて迯がさうかと。地追取りまかれてはつと吐胸。先も氣遣ひ。妾も遁れず七轉八倒心は早鐘。フシ時に時撞く如くなり。詞ヤア此奴横道者。汝に今日維盛が事詮議すれば。存ぜぬ知らぬといひぬける。其儘にして歸せしは。思ひ寄らず踏込まう爲。此家に維盛がくまひある事。所の者より地頭へ訴へ。早速鎌倉へ早打取る物も取りあへず來れども。油斷の體は汝を取迯すまい爲。サア首討つて渡すか。但し違背に及ぶか。返答せいと責付けられ。地叶はぬ所と胸をすゑ。詞成程一旦は匿ひ無いとは申したれども。餘り御詮議强き故隱しても隱されず。はや先達て首討つたり。地御覧に入れんお通りと伴ひ入れば母娘。どうなる事と氣遣ふ中。鮓桶提げ彌左衛門しづしづ出でて向うに直し。詞三位維盛の首。御受取下されよと。地蓋を取らんとする所を。女房駈寄りちやつと押へ。詞コレ親父殿。此桶の内には妾が些と大事の物を入れて置いた。此方さん明けてどうするぞ。ホ汝は知るまい此桶には。最前維盛卿のお首を討つて入れ置いた。イヤ〱〱此桶には此方に見せぬ物があると。地引寄すれば引戻し。詞汝が何にも知らぬ故。イヤ此方が知らぬ故と。地妻は銀と心得て フシ爭ひ果てねば。地梶原平三。詞扨は此奴等言ひ合せ。地縛れ〱丶れと下知の下。捕つた〱と フシ取りまく所に。詞ノリ維盛夫婦餓鬼奴まで。いがみの權太が生捕つたり討取つたりと呼ばはる聲。地はつとばかりに彌左衛門女房娘も氣は狂亂。いがみの權太は嚴めしく

若君内侍を猿縛り。宙に引立て目通りにどつかと引すゑ。詞親父の賣僧が。三位維盛を熊野浦より連れ歸り。道にて頭を剃りこぼち。靑二才にして彌助と名を變へ。此間はほてくろしき聟詮鑿。生捕つて頰恥と存じたに。思ひの外手強い奴。村の者の手をかつてやう〳〵と討取り。首に致して持參御實檢と差出す。ヲ、成程。剃りこぼち彌助といふとは存じながら。先達ていはぬは彌左衞門めに。思ひ違ひを爲さう爲。聞及んだいがみの權太。惡者と聞いたがお上へ對しては忠義の者。出來いた〳〵内侍六代生捕つたな。ハテよい器量。地夢野の鹿で思はずも。女鹿子鹿の手に入るはあつぱれの働き。詞褒美には親の彌左衞門めが命赦してくれう。イヤ〳〵申し。親の命ぐらゐを救して貰をと思うて。此働は致しませぬ。スリヤ親の命は取られても褒美が欲しいか。ハテあの和郎の命はあの和郎と相對。地私には兎角お銀と願へば梶原。詞ハテ小氣味のよい奴。詞褒美くれんと着せし羽織。脫いで渡せば佛頂頰。詞コリヤ〳〵。其羽織は賴朝公のお召換。何時でも鎌倉へ持來らば金銀と釣換。地囑託の合紋と聞くより戴き出來た〳〵。詞當世衒が流行によつて。二重取をさせぬ分別。地ようしたものと引換に。縄付渡せば請取つてフシ首を器に納めさせ。詞コリヤ權太。彌左衞門一家の奴等暫く汝に預くる。お氣遣ひなされますな。貧乏ゆるぎもさせませぬ。地ハテ扱健氣な男めと。譽めそやして梶原平三 オクリ縄付。 フシへ引立て立歸る。詞ア、これ〳〵其序に褒美の銀忘れまいぞと地見送る隙間。油斷見合せ彌左衞門。憎さも憎しと引抱へぐつと突込む恨の刄。うんと仰向に反りかへる。見るに親子はハアはつと。憎いながらも悲しさの。母は思はず駈寄つて。天命知れや不孝の罪思ひ知れやといひながら。先立つものは淚にて伏沈み。スヱテぞ。泣き居たる。地彌左衞門齒嚙をなし。詞泣くな女房。何吠える。不便なの可愛のというて。こんな奴を生け置くは世界の人の大きな難儀ぢやわい。門端も踏ますなといひつけ置いたに内へ引入れ。大事の大事の維盛樣を殺し。内侍樣や若君をよう鎌倉へ渡したな。腹が立つて〳〵淚がこぼれて胸が裂くるわい。地三千世界に子を殺す。親といふのはおればかり。適れ手柄な因果者に。よう仕をつたと拔身の柄。碎くるばかりに握り詰め。剝りかけるも心は淚。いがみにいがみし權太郞刄物押へて。詞コレ親父殿。何ぢやれ。こなたの力で維盛を助ける事は。叶はぬ〳〵。コリヤいふな。今日幸ひと別れ道の傍らに手負の死人。よい身代りと首討つ

て戻り此中に隠し置く　地コリヤこれを見をれと鮓桶取つて打明くれば。ぐわらりと出でたる三貫目。詞ヒヤアこりや銀ぢや。こりやどうぢやと。地フシ呆れ。果てたるばかりなり。ハルフシ手負は顔を。打眺め。詞おいとしや親父様。私が性根が惡るさに。御相談の相手もなく。前髪の首を總髪にして渡さうとは。了簡違ひのあぶない所。梶原程の侍が。彌助というて青二才の男に仕立てある事を。知らいで討手に來ませうか。それといはぬは彼方もたくみ維盛樣御夫婦の。路銀にせんと盗んだ銀。重いを證據に取違へた鮓桶。明けて見たれば中には首。はつと思へどこれ幸ひ。月代剃つて突きつけたは。やつぱりお前の仕込みの首。ムウ其又根性で。御臺若君に繩をかけ。何故鎌倉へ渡したぞ。ホそのお二人と見えたのは。この權太郎が女房伜。ヤアして〳〵。維盛樣御

夫婦若君は何處に。ヲヽ逢はせませうと地袖より出す一文笛。吹立つれば。折よしと維盛卿内侍は茶汲の姿となり。若君連れて駈着け給ひ。詞彌左衛門夫婦の衆。權太郎へ一禮を。地ヤア傷を負うたかと驚くも。お變りないかとびつくりも　スヱ一度に。興をぞさましける。地母は悲しさ手負に取付き。か程正しき性根にて人に疎まれ譏らるゝ。身持はなぜにしてくれた。常が常なら連合がむざと手疵も負せまい。むごい事をとせき上げて悔み歎けば權太郎。詞ヤレ其お悔み無用々々。常が常なら梶原が。身代り喰うては歸りませぬ。まだそれさへも疑うて。親の命を褒美にくれう。忝いといふと早や。詮議に詮議をかける所存。いがみと見た故油斷して。一ぱい喰うて歸りしは。地禍も三年と惡い性根の年の明時。生れついて諸勝負に魂奪はれ。今日も彼方を二十兩。

詞騙取つたる荷物の内に。恭しき高位の繪姿。彌助が顔に生寫し。合點がいかぬと母人へ。銀の無心を囮に入込み。忍んで聞けば維盛卿。御身に迫る難儀の段々。地此度性根改めずば何時親人の御機嫌に。預る時節もあるまいと折つて代へたる惡事の裏。維盛樣の首はあつても。内侍若君の代りに立つる人もなく。途方にくれし折からに。詞女房小せんが伜を連れ。親御の勘當古主へ忠義。何狼狽へる事がある。私と善太をコレかうと。地手を廻すれば伜めも。母様と一所にと共に廻して縛り繩。かけても〳〵手が外れ。結んだ繩もしやらほどけ。いがんだおれが直な子を。持つたは何の因果ぢやと。思うては泣き。しめては泣き。後手にした其時の。心は鬼でも蛇心でも。こたへ兼ねたる血の涙可愛や不便や女房も。わつと一聲其時に血を吐きましたと語るにぞ。カ

み返つて彌左衛門。詞聞えぬぞい權太郎。孫めに繩をかける時。血を吐く程の悲しさを。常に持つてはなぜくれぬ。地廣い世界に嫁一人。孫といふのも彼奴一人。詞子供大勢遊んで居れば。親の顏を目印に。苦味のはしつた子があるかと。尋ねて見てはコレ〳〵子供衆。權太が息子は居ませぬかと。問へど子供はどの權太。家名は何とと尋ねられ。おれが口からまんざらに。いがみの權太とはえ言はず。地惡者の子ぢや故に。はね出されてをるであろと思ふ程猶そちが憎さ。今直る根性が半年前に直つたら。詞ナウ婆。親父殿。嫁女や。地孫の顏見覺えて置かうのに。ヲ、〳〵おれもそればつかりと咽せ返りわつとばかり。フシ伏し沈む心ぞ。思ひやられたり。地内侍は始終御涙。維盛卿は身にせまる。いとゞ思ひにかきくれ給ひ。詞彌左衛門が歎きさる事なれども。

逢うて別れ。逢はで死ぬるも皆因縁。汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて。内侍が供せし譜代の家來。地生きて盡せし忠義は薄く。死して身代る忠勤厚し。これも不思議の因縁と語り給へば。詞テモ扨もそんなら是も鎌倉の。追手の奴等が皆所爲。ヲ、いふにや及ぶ。右大將賴朝が。威勢にはびこる無得心。地一太刀恨みぬ殘念と。スヱ怒に交る御涙。實にお道理と彌左衛門。梶原が預けたる陣羽織を取出し。詞これは賴朝が着替とて。褒美の合紋に殘し置きし。ずだ〳〵に引裂いても。御一門の數には足らねど。一裂づつの御手向。地サア遊ばせと差出す。詞なに賴朝が着替とや。晋の豫讓が例を引き。衣を刺いて一門の。恨を晴さん思ひ知れと。地御佩刀に手をかけて羽織を取つて引上げ給へば。裏に模樣か歌の下の句。詞内や床しき。内ぞ床しきと。二

つならべて書いたるは。アラ心得ず。此歌は小町が詠歌。雲の上はありし昔にかはらねど。見し玉簾の内や床しきとありけるを。その返しとて人も知つたる此詠を。物々しう書いたは不思議。殊に梶原は和歌に心を寄せし武士。内や床しきは此羽織の。地縫目の内ぞ床しきと。襟際附際切りほどき。見れば内には袈裟衣。珠數まで添へて入れ置いたは。詞コリヤどうぢや。地コハいかにと呆れる人々維盛卿。詞ホウさもさうずさもあらん。保元平治の其昔。我が父小松の重盛池の禪尼と言合せ。死罪に極まる賴朝を命助けて伊東へ流人。其恩報じに維盛を。助けて出家させよとの。鸚鵡返しか恩返しか。ハア、敵ながらも賴朝はあつぱれの大將。地見し玉簾の内よりも心の内の床しやと。衣を取つて是とても父重盛の御蔭と フシ戴き給ふぞ道理なる。地人々はつと悅び

泪。手負の權太還出で指寄り。詞及ばぬ智惠で梶原を。謀つたと思うたが。あつちが何にも皆合點。地思へば是迄衒つたも。後は命を衒らるゝ。種と知らざる。フシ淺ましと。地悔みに近き終り際。維盛卿も是迄は佛を衒つて輪廻を離れず。離るゝ時は今此時と髻ふつつと切り給へは。内侍若君お里は縋り共に尼とも姿をかへ。宮仕を致してと願へど叶はず打拂ひ〳〵。詞内侍は高尾の文覺へ六代が事頼まれよ。地お里は兄に成り代り親へ孝行肝要と。立出で給へば彌左衞門。詞女中の供は年寄の。地役と諸共旅用意。手負をいたはる母親が。詞ナウこれつれない親父殿權太郎が最期も近し。地死目に逢うて下されと。留むるにせき上げ彌左衞門。詞現在血を分けた倅を手にかけ。どう死目に逢はれうぞ。死んだを見ては一足も歩かるゝものかいの。息ある内は叶はぬ迄も地助かる事もあらうかと。思ふがせめての力草。留める和女が胴慾というて泣出す父親に母は取分け娘は猶。不便々々と維盛の。首には輪袈裟手に衣。手向の文も阿耨多羅。三藐三菩提の門出。高尾高野へ引分くる。夫婦の別れに親子の名殘。手負は見送る顏と顏。思ひはいづれ大和路や。芳野に殘る名物に維盛彌助といふ鮓屋。今に榮ふる花の里其名も。高くあらはせり

第四　道行初音の旅

歌戀と。忠義はいづれが重い。かけてナホス思ひは フシはかりなや。忠と信の武士に。スヱ君が情と預けられ。靜に忍ぶ都をば。後に見捨てて旅立ちて。作らぬ形も義經の御行末は難波津の。波にゆられて。フシ漂ひて。今は芳野と人傳の噂を道の栞にて。フシオクリ大和路 ユリオクリへさして慕ひ。行く野路も ハルフシ馴れぬ緊の。まがひ道。左手も右手も若草を。分けつゝ行けば。あさる雉子のパット立つてはほろゝけん〳〵ほろゝうつ。汝は子ゆゑに身を焦す我は。戀路に。迷ふ身のア、うらやまし フシ妬ましや。タヽキ初雁がねの女夫つれ。夫持顏の羽ばかま。フシ人よりましの眞柴さす。稻倉魂の御社は。いと尊くも。神々と霞の中にみかの原わきて形見の鼓のかはい〳〵〳〵。の睦言を人にはつゝむ袱紗物。本フシそれを便につく杖も心。小オクリ細野を打過ぎて。見渡せば。四方の梢もほころびて。梅が枝うたふ歌姫の里の男が聲々に。三ドリ歌我が妻が。合天井ぬけてすゑる膳。聟の枕はつがもなや。合天井ぬけてすゑる膳。ひろの枕はつがもなや ナホスフシヲ、つがもなや。ハルフシをかし鳥の一節に。人も藥屋の育にも。春は羽子つく。手鞠一二つく

づくとナホス聞けば。東風風音添へて去年の氷を。萬歳徳若に御萬歳と君も栄えまします。合ありけう有りや頼もしや。ナホスさぞな大和の人ならば フシ御隠。家をいざ問はん ハルフシ我も初音の。この鼓君の栄を壽きて。昔を今になすよしもがな。三下り歌谷の鶯ナ。中ギン初音の鼓〱。調べあやなす音に連れて。つれてまねくさ。合遅ればせなる忠信が旅姿。合背に風呂敷をしかと背撓負うて。野道畔道ゆらり。合〱。合軽い ナホスフシとりなりいそ〱と。地目立たぬやうに道隔て。女中の足と侮つて。詞憮お待兼ね。爰幸ひの人目なしと。地姓名添へて賜りし。スエ御着長を取出し君と。フシ敬ひ奉る。静は鼓を御顔とよそへて上におきの石。長地人こそ知らね西國へ御下向の御海上。波風荒く御船を。表具住吉浦に吹上げられ。それより芳野にましまず由。二人やがてぞ参り候はんと互に形見をナホスフシ取納め。地げにこの鎧を賜りしも。兄繼信が フシ忠勤なり。八島の戦ひ我が君の。御馬の矢面に駒をかけする立塞がる。ヲ、聞き及ぶ其時に。合平家の方には名高き强弓。合能登守教経と名乗りもあへずよつぴいて放つ。合矢先はうらめしや。兄繼信が胸板にたまりもあへず眞逆様。二人あへなき最期は武士の忠臣義死の名を残す。思出づるも涙にて袖は乾かぬ筒井筒。



ハルフシいつか御身も。のびやかに春の柳生の糸長く。枝を連ぬる御契などかはくちしかるべきと互に。諫め諫められ急ぐとすれど捗らぬ。蘆原峠からの里。土田六田も遠からぬ野路の。春風吹き拂ひ雲と。見まがふ三芳野の麓の。里にぞ 三重 〽着きにける

地 丈六忿怒の御像も花に和らぐ吉野山。軒は霞に埋れて。殊勝さ勝る藏王堂。櫻はまだし枝々の梢淋しき初春の空。一山の衆徒。詞 評定始と知行下の百姓等。お髭の塵取はき掃除靈驗あらたな佛より。ノシ 衆徒の罰をや恐れけん。地 名ばかりはハル ノシ 靜といへど。急ぐ道。忠信が介抱にて義經の御跡を。長地 やう〳〵爰に慕ひ來て彌生なかばといひながら。見渡す景もフシ 吉野山。地 百姓どもロ々に。詞 何と美しい京女臈。花見にはまだ早いなア。何の花見であろぞい。男と女子と二人づれ。腹がはらみでせう事なう。ついとしてごさつたかと 地 問ひかけられてア、いやそんな者でなし。詞 河連法眼殿へ用事あつて參る者。是からどういきますと。地 皆まで聞かず早合點。詞 エ、こんだ〳〵。妾奉公にやらしやるの。ヲ往かしやればよい仕合せ。河連法眼様といふはこの一山の衆徒頭。芳野中は立てうと伏せうと儘な上に。女房持つて魚や鳥は喰ひ次第。自墮落坊主の樣なれど。妻帶といへば格が重い。どうぞ首尾して仕合さしやれ。アこな樣は目高ぢやの。が其法眼樣には大切なお客でもござりますか。イヤそんな事は知りませぬ。毎日琴三味線で賑かなとは聞きました。コレ此道をかう往てこつちやの方が子守明神。女子の參らにやならぬ所。それより手前の一筋道左の方について見える。地 大きな門のある所と。敎に靜があい〳〵。忝うござんすと氣のせく道をとつかはとナクリ 打連れて〽こそ急ぎ行く。ハルフシ 早や參會と喚び鐘に。山科の法橋坊。無道不敵の一字を冢り。荒法橋と名を呼ばれ。のつか〳〵と來る跡に。鬼と名乘るは違はぬ惡者。梅本の鬼佐渡坊返り坂の藥醫坊。フシ 淸僧ながら大太刀佩き。大口の裾踏みちらし。道具屋 今日の評定眞先かけ。ない智惠ふるはんナホスフシ 面付なり。地 今迄のふずな百姓ども逆樣に這ひかゞめば。鬼佐渡傍を睨み廻し。詞 まだ掃除了はぬな。先達いひ渡すにのらかはいて隙入れる。年貢時分に待つてをろと 地 呵付けられハイ〳〵〳〵。當眼に手ん手に箒どつさくさ。風上から掃き廻せば袈裟も衣も土埃。獄道めらこりや何しをると。呵る程猶遠慮なう。掃除しますと無二無三 フシ 埃かづけて逃げ歸る。地 爰に河連法眼とて一山の檢挍職。華美を好まぬ萠黄の法服。褐

地を着たる指貫もしめくゝりある仁體。ホ、ウ 詞いづれも早かりつと。地互に前後の挨拶あり。各々圓座に フシ列れり。地やゝあつて河連法眼。詞先達て回状を以て申せし所。早々の參會近頃祝着。今日の談合餘の義にあらずと。地懐中より一通を取出し。詞鎌倉殿の家臣。我が小舅茨左衛門より斯の如き書状到來。文言を讀み聞かさば申さずとも樣子は明白。先づ聞かれよと押廣げ。飛札を以て申し達す。九郎判官義經の事弟の身として。舍兄頼朝追討の院宣を蒙り。剰へ土佐坊正尊を討取り都を立退き。大和路に徘徊の由。其聞えあるによつて。鎌倉殿御憤り大方ならず。早く討つて出すべきの旨。國々へ配符を廻らし畢んぬ。討取つて恩賞申し請け奉らるべく候。隱し置くに於ては一山の滅亡此時に候也。正月十三日河連法眼殿。茨左衛門判。聞かれたかいづれも。談合とは此事。元來科なき判官殿。大和路に徘徊とあれば。一山の衆徒を頼め來られんは必定なり。其時は方々頼まれ申して匿ふ氣か。又は討つて出す所存か。心々で濟まぬ事。銘々に遠慮なく評議あれと。地聞きもあへず荒法橋。詞實に尤もさりながら。我々が評定お尋ね迄なく。一山の仕置頭。法眼殿から了簡を定め申さるれば。誰あつて詞を背かず一統せん。先づ御所存はと問返す。ホ、ウ了簡は胸にあり。まつ斯々といひ聞かさば。縱へ心に合はずとも。よもやいやとは申されまじ。さあれば却つて不覺の基。我が所存は跡でいはん先づ各々の思ふ所。眞直に 地申されよと。いへども互に心置き フシ暫し返答怠りしが。地返り坂の藥醫坊遠慮なくぬつと出で。詞先づ愚僧が存ずるは。義經を匿ふは二年三年。乃至十年二十年。其間立て養ひ。一人ばかりは僅でも辨慶といふ喰抜けの候へば。いか程喰ひ込まんも知れず。とあつて匿ふまいといはば。かの辨慶滅相者。七つ道具の鋸で家尻切らんも知れ申さず。どかと盗まれ申さんより。一山の出し前にて。茶粥を食はせ養ふが。地勘定ならんと サハリフシ申すにぞ。地法眼をかしく思ひながら。詞ムウそれも肝要。地扨雨人はといはせもあへずされば〳〵。詞此事に於て勘定も何にも入らず。人を救ふが沙門の役。科なき義經隱匿ふとて鎌倉より討手來らば。地忍辱の袈裟引代へ。降魔の鎧に身を固め。逆寄に押寄せ討取り。直ぐに鎌倉へ追上り御身に覺えなき條々。申開いて讒者輩一々に切並べ。それも叶はぬものならば理非辨へぬ頼朝を討取つて。判官殿の天下とせん。我々が所存此通り。法眼殿の御了簡 ノシ承らんと申しける。詞イヤ〳〵まだ申されぬ。

法橋殿の御懇意ある近頃の客僧。横川の禪師覺範此場へ参り合さず。此了簡も聞かねば言はれず。地などや遲きぞ待久しと ハルフシ云ふ間程なく山道を。靜々歩み來る法師は名にし合ひたる横川の覺範。衣のつゆ高く取り三尺五寸の太刀佩き反し。末座に坐れど丈高く僧柄。フシゆゝしく見えにける。詞ヤア待兼し覺範殿。地近う〳〵と招き寄せ。法眼ずんど立上り。詞コレ〳〵覺範。アレ見られよ。霞の中に朧なる。二つの山は妹脊山。是合體の歌名所。川を隔てて西は妹山。東は脊山。山は二つに別れたり。妹は 妹 弟の義。脊山は元より兄頼朝。地義經兄弟の中。吉野川引わかれし。姿は山に異らずされば歌にも流れては。妹脊の山の フシ中に落つる。地吉野の川の。よしや世の中と詠みたれば。世を捨人の我々でも。詞頼むに引かぬか但しは又。浪の白刄で討取る氣か。手短き返答聞かん。申されやつと言ひければ。地思案に及ばずずつと立ち打點いて。藏王堂に掛け奉る。奉納の弓と矢取つて弦響し。詞河連殿御覽あれ手短き我が返答。地山と山との目通りに立つたる二木は勝負の目當。返答御覽と弦打ちつがひ。かたむる迄なく發矢と放す。白矢は脊山の印の木根深にゆつて フシ立つたりけり。地法眼きつと見。頼朝に准へたる脊の山に弓引かれしは。頼朝に敵對うて義經の味方よな。ムウ〳〵とばかり以前の狀。ぐる〳〵巻いて懐中し。詞山科法橋梅本坊藥醫坊も共通り。地や皆一同に義經の味方々々と呼ばはれば。詞ムウそれならば法眼が所存も是にて明かさんと。地同じく弓矢手に取上げ引堅めたはいづれを的。どちらにつくぞと見る中に。かつきと放すは義經に名さす妹山弟の山。詞ヤア扨は法眼頼朝方。義經に弓彎かるゝよな。いかにも。落人に與せんより。世に連れて一山の。破滅にせぬが仕置の役目。しかとさうや。イヤ覺範味な所に念が入る。義經此山を頼みなば引つかけて匿はれよ。金輪際此法眼。捜出して討つて見せう。其時は敵味方。無分別なる衆徒輩に談合せし隙惜しや。今日の参會是迄々々。さらば。地〳〵と言捨に。駕を待たずして立歸る所存の。フシ程ぞ訝しき。地跡に鬼佐渡口あんごり。詞アリヤ何の事どう云ふ事。言合せたは皆すまた。覺範はどう思ふぞと。地山科諸共尋ぬれば覺範ふつと吹出し。詞其淺い了簡故。法眼が底意を知らぬ。今の詞でとつくりと。義經をかくまひ居る底の底迄皆智れた。法眼も我が所存。義經の味方とは嘘と睨んで歸つた眼中。事延々計らはゞ。落しやらんも計られず。今宵八つの手筈を定め。夜討に入つて討つて

取り。鎌倉殿の恩賞に預れ旁。覺範が夜討の懸引催促を。地聞けや〳〵と大木の朽根にどつかと フシ腰打かけ。詞我釋門のより〳〵に。孫呉が兵書諳じたり。我が詞を過たず。地荒法橋は下兜十騎餘り。燈籠が辻より一文字に。彼が館にひたひたと押寄せて。喚鐘三つ四つ亂聲せよ。詞ノリ鬼佐渡は又如意輪寺の裏の手を眞直に。六地藏の橋を引き。地敵逃ぐる時を待ちさん〴〵に射て留めよ。詞此覺範は新坊谷の。地坊に火をかけ。コハリ火を上げて聖天山より。ナホス無二無三にかけちらして勝利を得ん。今夜の勝つ事手裏にありフシ勇め〳〵といひければ。地藥醫坊頭を打掉り。詞それは味方の思ふ儘。敵强うして荒法橋が手勢を投退け。駈散らし驀直に討つて出で。勝手の宮を陣所として。門をひつしと打たばいかに。地ホ、ウ理にも咎めたり。其時は八王寺金剛藏王の袖振る山。峰に上つて眞下りに引詰め。差詰め射るならば其處もたまらず逃失せん。詞ヲ、其時はまだ地咲かぬ櫻の木隱れ枝隱れ。木の間〳〵の細道を。逃行く先は天皇橋。大將軍の多寶塔。時に取つての角櫓。追ひくる衆徒を待ちかけて射かくる矢先は扨いかに。詞ノリ小ざかしゝ荒法橋。何條射るとも落人が。持つたる矢種は數知れたり。彎いては寄せ。寄せては彎き。矢種盡くさせ討取るに何の手間隙入るべきぞ。恐れな音すな用意せよ。いそふれ方々共昔。地天武の軍有りし時。少女下つて舞奏づ。詞これ反閇の始めなり。いざ勝軍の義を取つて。たう〳〵とろ〳〵踏みならす。左に七足。右七足。左右合して十四足。はた〳〵はつしと踏治め。サア行け進めと逸散に。地勇み足して立歸る。横川の禪師覺範が勇氣。稀なる三重 二上り歌 鶯の。合聲なかりせば。雪消えぬ。山里。いかで。春をしらまし。

ナホスハルフシ春は來ながら。春ならぬ。地九郎判官義經を御慰めの琴三味や。河連法眼が奥座敷。音じめも フシ世上忍び駒。琴柱に立つる鴈がねも。春を見捨てぬ志 フシ實に賴。もしきもてなしなり。地今朝より他出の法眼心に一物あり顔に。フシ悠々と立歸れば。地妻の飛鳥は出向ひ。詞ヲ、異ない早いお歸り。今日の御評定一山のお仕置か。但しは又奥のお客。地義經樣の御事かはと尋ぬれば。詞ヲ、サ〳〵。義經の事とも〳〵。ム、ウ扨は吉野一山殘らずお味方と云ふ樣な品にもや。成程成程。衆徒の中にも返坂の藥醫坊。山科の荒法橋。梅本の鬼佐渡等。別しては横川の覺範。一端立つて義經の味方といふは。我が心を搜し見ると知つたる故。此法眼は鎌倉方と言放つて歸つたり。ムウ鎌倉方とおつしやるは。衆徒の心をこちか

らも。捜して見る御了簡。イヤ〳〵。法眼今日より心を改め。義經とは敵味方。エ、イ。あのお前は義經樣を。ヲ鎌倉殿へ討つて出す氣。合點行かずは是見よと。地懷中の書翰投出せば手に取上げ。文言殘らず讀み終り。詞ムウ義經公此山に御忍びまします事。鎌倉へ知れたやうな文體。ヲ、いかにも汝が云ふ如く。天に口なし人を以て言はしむる。告知らせた者なくて小男の茨左衞門。斯くいうて越すべきや。內通せられて知れたる上は遁れなき判官殿。人に手柄させんより。我が手にかけて討つ所存。ヤア夫は眞實か。おう。イヤ本々に此方樣は。義經を切る心かくどい〳〵。地ハアはつと。スヱ吐胸も突詰めし夫が刀拔くより早く。自害と見ゆる女房が。持つたる刄物引たくつり。詞こりや何とする何で死ぬと。地言ふ顏きつと打守り。詞エ、聞えぬぞや法眼殿。なぜ隔てては下さるぞ。恩賞の御下し文。千通萬通來たとても。一旦の契約變ずる。此方の氣質ぢやない。鎌倉殿の忠臣茨左衞門が妹の飛鳥。義經公の御隱家。兄の方へ知らせたかと此狀が來た故に疑うての心ちやの。地覺えない言譯をまだ〳〵として居られぬ。疑ふよりは一思に殺して下されフシ法眼殿と恨み。淚ぞ實なる。地法眼始終を聞きすまし。以前の一通取るより早く。ずん〳〵に引裂き〳〵。詞僞りに命は捨てまじ。女房を疑ふは未練には似たれども。義經公へ拔目なき我が忠節。衆徒等の胸中探りし序で。心引見るこの僞狀。引裂き捨つれば安堵して。地自害を止まれ女房と。解くる詞は春の雪恨も消えてフシなかりけり。詞ヤア法眼歸られしな。地面談と義經公。奧の間よりフシ出でさせ給ひ。地鞍馬山の誼を忘れず。一々の御厚志祝着詞に述べがたし。詞豫て申し談ぜし通り。今日の衆徒の評定委細あれにて承知せりと。地御諚にはつと頭を下げ。詞師の坊の命といひ只ならぬ御方。疎略なき心底御存じの上は身に餘る悅び此上や候べき。武藏坊は奧州秀衡方へ遣はされ。御家臣とて少ければ龜井駿河なんどが如く。地思召し下されよと申す詞のうち使罷出で。詞佐藤四郎兵衞忠信殿。君の御行方を尋ね御出なり。通し申さんやと伺ふにぞ。扨は無事にて有りつるな。此方へ通せ對面せんと。地仰傳ふる次の間へフシ法眼夫婦は立つて行く。ハルフシ案內に連れて入來る。四郎兵衞忠信。御座の間の此方に出で。絕えて久しき主君の顏。見るも無念のフシあら淚差しうつ。伏いて詞なし。地大將御機嫌斜めならず。詞汝に別れてこゝかしこ鎌倉殿の御詮議强く。身の置所なかりしに。東光坊の弟子。河連法眼

にかくまはれ。地心ならざる春を迎へ。暫くの命をつぐ。詞我が姓名を譲りし其方。命全く有る事我が運のまだ盡きざる所。地頼もし悦ばし。其砌預けたる靜は如何なりしぞと。御尋ねありければ忠信訝しげに承はり。詞コハ存じかけなき御仰。八島の平家一時に亡び。天下一統の凱歌を上げ給ふ折から。告げ來る母が病氣聞召し及ばれ。御暇賜つて本國出羽へ歸りしは去年三月。程なく別れし母が中陰。忌中に合戰の疵口おこづき。破傷風と云ふ病と成り。既に命も危き半。御兄弟の御中裂け堀川の御所沒落と承はる口惜しさ。胸を煎る程重る病氣無念さ餘つて。腹切らんと存ぜしかど。せめて主君の御容顔。今一度拜し奉らんと。念願叶ひて本復遂げ。初立の長旅忍びの道中恙なく。此館に御入りと承り。只今參つた忠信に姓名賜りし。靜御前を預けし

なんぞ御諚の趣。且つ以て身に覺え候はずと。地いはせもあへず氣早の大將。詞ヤアとぼけな忠信。堀川の館を立退きし時。折よく汝國より歸り。靜が難儀を救ひし故。我が長着を汝に與へ。九郎義經といふ姓名を讓り。靜を預け別れし其方。世になき我を見限つて。靜を鎌倉へ渡せしな。義經が所在搜しに來たか。只今國より歸りしとは。まさ〳〵しき僞り表裏。漂泊してもうつけぬ義經。謀らんとは推參なり。地不忠二心の人外。アレ引つ括つて面縛させよ。龜井駿河と腹立の。地聲にかくる二人の勇士。裾はせ折つて忠信が。弓手馬手に反打ちかけ。詞委細あれにて皆聞いた。サア腕廻せ四郎兵衞。靜御前の御行方。サア明白に白狀せよ。踏付けて繩かけうか。拷問していはせうかサアどうぢや。地サアどうぢやとせりかけられてせん刀。指添共に投出し兩人

待つた麁忽すな。詞待てとは但し言譯あるか。サア聞かうサアなんと。地なんと〳〵に難儀の最中。詞靜御前の御供申し。四郎兵衞忠信殿御出なりと。地奏者が聲に人々仰天。何忠信が又來たとは。合點行かずと聞きもあへず。以前の忠信立上り。詞我が名をかたるは何でも曲者。地引つ括つて大將への面晴せんと駈行くを。詞ヤアならぬ〳〵。詮議の濟む迄は動かさぬと龜井が向うを フシ支へたり。詞ヤアさなせそ六郎。忠信これにある上に。又忠信が靜を同道。何にもせよ仔細ぞあらん。片時も早くこれへ通せ。地あつと龜井は次の間へ。我が身あやぶむ忠信は フシ默して。樣子を窺へば。ハルフシ別れ程經し君が顔見たさ逢ひたさとつかはと。河連が奥の亭。歩み來る間もとけしなくナウ我が君か懷しやと。人目厭はず縋りつき戀しゆかしの溜々を フシ涙の色に知らせ

けり。詞ヲヽ女心に歎くは尤も。別れし時言ひ聞かせし如く。人の情に預かる義經。輪廻きたなき擧動ならねば。つれなくはもてなしたり。地忠信を同道とや。何處に有ると尋ね給へば。詞たつた今次の間迄連立つて參りしが。地爰へはまだかと見廻し〳〵それ〳〵〳〵。ても早う爰へ來てぢや。一所にお目にかゝるものを。ちつとの間に先へ拔けがけ。まだ軍場かと思うてか。まんがちな人ではあると恨口なる詞に不審。一倍晴れぬ四郎忠信。詞我が君も其如く覺えなき御尋ね。拙者めは今の先き。出羽の國から戻りがけ。去年お暇申してからお目にかゝるは只今初めて。地エヽあの人のじやら〳〵と惡戯な事ばかり。詞惡戯でなし大眞實。地アレまだ眞顏で欺すのかと。フシ何氣もなまめく詞の中。立戻る龜井の六郎。詞靜様同道の忠信引立て來らんと存ぜし所。次の間にも在合さず。玄關長屋所所方々尋ねても知れず候と。地申すに心迷はせ給ひ。詞コレ靜。爰に居るは其方を預けたる忠信ならず。只今國より歸りしと物語りする中。忠信靜を同道との案内。二人有る中にも見えざるは不審者。面體似たる贋者ならずや。地靜心はつかざるかと。仰の中に忠信を。つれ〳〵と打眺め。詞ハアどうやらさうおつしやれば。小袖も形も違うてある。ア、お待ち



遊ばせや。ハツアそれか。ヲ、さうぢや。地フシ思ひ當る事がある。地君が形見と別れし時賜はりし初音の鼓。御覽遊ばせ此樣に。肌身も放さず手にふれて。忠信の介抱受け。八幡山崎小倉の里所々に身を忍び居たりしに。折々の留守の中。君戀しさの此鼓。打つて慰む度々。詞忠信歸らぬ事もなく其音を感に堪ゆる事。ほんに酒の過ぎた人同然。打止めばきよろりつと何氣ない地顔付は。よく／＼鼓が好きさうなと初手は思ひ二度三度。四度目にはテモ變つた事。又五度めは不思議立ち。六度めには怖氣立ち。それよりは打たざりしが。君は爰にと聞付けて。心せく道忠信にはぐれた時。鼓の事思ひ出し。打てば不思議や目の前に。來るともなく見えたるは。女心の迷目かと思うて連立ち。フシ來りしに。地又此仕儀はどうぞいのと申上ぐれば義經公。詞ムウ鼓を打てば歸り來るとは。それぞよき詮議の近道。靜其方に言ひつけるその鼓を以て同道した忠信を詮議せよ。地怪しい事あらば此分でと投出し。我が手で討たれぬ鼓の妙音。それを肴に一献酌まん。早々鼓打て／＼といひ捨て奥に入り給へば。龜井駿河も忠信に引添ひ オクリへてこそ入りにけれ。地靜は君の仰を受け。手に取上げて引結ぶ辛氣眞紅をないまぜの。長地調べ結んで胴かけて手の中しめて肩に上げ。手



品もゆらに打鳴らす。聲清々と澄み渡り。心耳を澄ます妙音は。本フシ世に類なき初音の鼓。江戸ギンかの。洛陽に聞えたる。會稽城門の越の鼓。かくやと思ふ春風に。ナホス誘はれ來る佐藤忠信。靜が前に兩手をつき。音に聞きとれし其風情。すはやと見れど打止まず。猶も様子を。詞調の音色。聞入り聞き居る餘念の體。怪しき者とは見て取る靜。折よしと鼓を止め。詞遅かつた忠信殿。我が君様のお待兼ね。地サア〳〵奥へと何氣なき。詞にはつとは言ひながら。座を立ちおくれ差俯向く。油斷を見すまし切付くるを。ひらりと飛びのき飛びしさり。詞コハ何となさるゝぞと。地咎められて氣轉の笑ひ。詞ホヽヽホ、ヲ、あの人の氣疎い顏。久し振りの靜が舞。見ようと御意遊ばす故。地八島の軍物語を。舞の稽古と鼓を早め。舞かくて源平入亂れ。船は陸路へ陸は磯へ。漕寄せ打出で打鳴す。ナホス地鼓に又も聞入りて餘念他愛もなき所を。詞忠信やらぬと又切掛くる。太刀筋かはしてかいくゞるを付入る柄元しつかと取り。何科あつて欺し打ちに。切らるゝ覺え嘗つてなしと。地刀たぐつて投捨つれば。詞忠信のサア白狀。仰を請けた靜が詮議。いはずば斯うしていはすると鼓押取りはた〳〵〳〵。女のかよわき腕先に打立てられてハアはつと。誤り入つたる忠信に鼓打付けサア白狀。サア〳〵〳〵さあと詰寄せられ。一句一答詞なく フシたゞ平。伏して居たりしが。地漸々に頭を擡げ。初音の鼓手に取上げ。スヱさも恭しく。押戴き〳〵。靜の前に直し置き。ハルフシしづ〳〵立つて。廣庭へ下りる姿もしを〳〵と。みすぼらしげに。フシ手をつかへ。地今日が日まで隱しおゝせ人に知られぬ身の上なれども。今日國より歸つたる誠の忠信に御不審かゝり。難儀となる故據なく。身の上を申上ぐる始りは。それなる初音の鼓。詞桓武天皇の御宇。內裏に雨乞ありし時。此大和國に。千年劫經る牝狐牡狐。二疋の狐を狩出し。其狐の生皮を以て拵へたる其鼓。雨の神をいさめの神樂。日に向うて是を打てば。鼓は元來波の音。狐は陰の獸故。水を起して降る雨に。民百姓は悦の聲を初めて上げしより。初音の鼓と號け給ふ。其鼓は私が親。私めは其鼓の子でござりますと。地語るにぞつと怖氣立ち。騒ぐ心を押鎭め。詞ム、そなたの親は此鼓。鼓の子ぢやといやるからは。扨は其方は狐ぢやの。ハツア成程。雨の祈りに二親の狐を取られ。殺された其時は。親子の差別も悲しいおも。辨へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け。鳥居の數も重なれど。一日親をも養はず。産の恩を送らねば。豚狼にも

劣りし故。六萬四千の狐の下座に着き。只野狐と輕蔑まれ。官上の願も叶はず。親に不幸な子があれば。畜生よ野良狐と。人間ではおつしやれども。地鳩の子は親鳥より枝を下つて禮義を述べ。烏の親の養ひを。育み返すも皆孝行。鳥でさへ其通り。況て人の詞に通じ。人の情も知る狐。詞何ぼ愚痴無智の畜生でも。孝行と云ふ事を。知らいで何と致しませう。とは云ふ物の親はなし。まだも頼みは其鼓。千年劫ふる威徳には。皮に魂とゞまつて性根入れたは則ち親。付添うて守護するは。まだ此上の孝行と。地思へども淺ましや禁中に留置き給へば。八百萬神宿直の御番。恐れ有れば寄付かれず。頼も綱も切れ果てしは。詞前世に誰を罪せしぞ。人の爲に仇する者。狐と生れ來るといふ。因果の經文恨めしく。日に三度。夜に三度。地五臟を絞る血の涙。文彌火焔と見ゆる狐

火は胸を。焦する フシ炎ぞや。ナホス詞かほど業因深き身も。天道樣の御惠みで。地不思儀にも初音の鼓。義經公の御手に入り。內裏を出づれば恐もなし。ハツア嬉しや悅ばしやと。其日より付添ふは義經公のお蔭。詞稻荷の森にて忠信が。在合はさばとの御悔み。せめて御恩を送らんと。其忠信に成り代り。靜樣の御難儀を。救ひました御褒美とあつて。勿體なや畜生に。淸和天皇の後胤。源九郎義經といふ。御姓名を賜りしは。そら恐ろしき身の冥加。地是といふも我が親に孝行が盡したい。親大事〱と思ひ込んだ心が屆き。大將の御名を下されしは人間の果を受けたる同然。いよ〱親が猶大切。片時も離れず付添ふ鼓。靜樣は又我が君を。戀慕ふ調の音。變らぬ音色と聞ゆれども。詞此耳へは二親が物いふ聲と聞ゆる故。呼び返されて幾度か。戾つた事もござり

ました。只今の鼓の音は。私故に忠信殿君の御不審蒙つて。暫くも忠臣を。苦しますは汝が科。早々歸れと父母が。敎の詞に力なく。元の古栖へ歸りまする。今迄は大將の御目を掠めし段。お情には靜樣。お詫びなされて下さりませと。地緣の下より延上り。我が親鼓に打向ひ。かはす詞のしり聲も涙。ながらの暇乞人間よりは。フシ睦じく。詞親父樣。母樣。お詞を背きませず。私はもうお暇申しまする。とはいひながら。御名殘惜しかるまいか。二親に別れた折は何にも知らず。一日々々經つにつけ。暫くもお傍に居たい。產の恩が送りたいと。思ひくらし。泣き明し。焦れた月日は四百年。雨乞故に殺されしと。思へば照る日が恨めしく。地上サハリ曇らぬ雨は我が涙。詞願ひ叶ふが嬉しさに。年月馴れし妻狐。中に儲けし我が子狐。不便さ餘つて幾度か。引かる

る心を胴慾に。荒野に捨てゝ出でながら。飢ゑはせぬか。凍えはせぬか。もし獵人に取られはせぬか。我が親を慕ふ程。我が子も丁度此様に我を慕はうがと。案じ過しがせらるゝは。地切つても切れぬサハリ輪廻のきづな愛着の鎖に繋ぎ留められて。詞肉も骨身も砕くる程。悲しい妻子をふり捨てゝ。去年の春から付添うて。丸一年經つや經たず。去ねとあるとて何とまあ。あつと申して去なれましよかいの〳〵。お詞背かば不孝となり。盡した心も水の泡せつなさが餘つて歸る。この身は何たる業。まだせめてもの思ひ出に。大將の賜つたる。源九郎を我が名にして。地末世末代呼ばるゝとも。この悲しさは何とせん。心を推量し給へと泣いつ口説いつ身もだえし。どうど伏して泣き叫ぶは。大和の國の源九郎狐と フシいひ傳。へしも哀れなり。ノルフシ靜はさすが。女子氣の。彼が誠に目もうるみ一間の方に打向ひ。詞我が君それにましますかと地申すうちより障子を開き。ヲ、委しく聞居けし。扨は人にてなかりしな。詞今迄は義經も。狐とは知らざりし。地不便の心とありければ。頭をうなだれ禮をなし。サハリ御大將を伏拜み〳〵。座を立ちは立ちながら。鼓の方をなつかしげにヲクリ見返り。〳〵行くとなく。消ゆるともなき春霞人目朧に見えざれば。大將哀れと思召しアレ呼び返せ鼓打て。音に連れ又も歸りこん。フシ鼓々とありけるにぞ。地靜は又も取上げて打てば不思議や音は出でず。是は〳〵と取直し。打てども〳〵こは如何に。上とも平とも音せぬは。詞ハア扨は魂残す此鼓。親子の別れを悲しんで音を止めたよな。地人ならぬ身もそれ程に。子故に物を思ふかと。打萎るれば義經公。詞ヲ、我とても生類の。恩愛の節義身に迫る。地一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ。日かげ鞍馬に成長りせめては兄の賴朝にと。身を西海の浮き沈み忠勤仇なる御憎しみ。親とも思ふ兄親に見捨てられし義經が。名を讓つたる源



九郎は。前世の業我も業。そも何時の世の宿酬にて。かゝる業因なりけるぞと身につまさる〻御涙に。靜はわつと泣出せば。目にこそ見えね庭の面我が身の上と大將の。御身の上を一口には勿體涙に源九郎。保ち兼ねたる大聲にわつと叫べば我と我が。姿を包む春霞晴れて形を現はせり。地義經御座を立ち給ひ。手づから鼓を取上げて。ヤイ源九郎。詞靜を預り長々の介抱詞には述べがたし。禁裏より賜り大切の物なれども。地是を汝に得さすると差出し給へば。詞なに其鼓を下されんとや。ハア〳〵〳〵 地有難や忝や。焦れ慕うた親鼓。御辭退申さず頂戴せん。重々深き御恩のお禮今より君の影身に添ひ。御身の危き其時は一方を防ぎ奉らん。詞返すぐも嬉しやな。亂舞ヲ、それよそれ。身の上に取紛れ。申す事怠つたり。一山の悪僧ばら。今夜此館を夜討にせんと企てたり。押寄せさする迄もなし。我が天變の通力にて。衆徒を殘らず誑つて。此館へ引入れ〳〵。合ノリ眞向立割車切。又一時にかゝつし時。蜘手かくなは十文字。合或は右袈裟左袈裟。上を拂へば沈んで受け。裾を拂はゞひらりと飛び。合輕捷祕術は得たりや得たり。御手に入れて亡すべし。必ずぬからせ給ふなと。亂舞鼓を取つて禮をなし。飛ぶが如くに行末の跡をくらまし失せにける。地始終の樣子詳かに。聞いて驚く四郎兵衞。龜井駿河諸共に御



前に進み出で。詞生類の誠ある辯舌にて。大將の御疑ひも某が心も晴れて。此世の大慶上なしと。地申す詞も終らぬ所へ河連法眼罷出で。詞怪力亂神を語らずといへども。かの源九郎が申せしは一山の衆徒、今宵夜討に來る條。先達て忍びを入れ候所。恰も符節を合するごとし。地敵を引受け戰はんか討つて出で申すべきや。賢慮如何と伺へば四郎兵衛忠信よき計略ごさんなれ。詞狐に譲り給ひしも。元は拙者に賜る姓名。君に代つて討死せば。一旦事は鎭まらん。地平更御免を蒙り度く存奉り候と。餘儀なき願に御大將。詞我思ふ仔細あれば。暫く此場は立退かれず。我が名を名乘り衆徒等を謀れ。地汝死すれば我も死ぬ必ず討死すべからずと。御帶刀を賜びてける。仁德厚き御詞に出行く跡を見送つて。靜來れと打連れ奥にぞ入りへ給ふ。地時も移さず入來るは山科の荒法橋。我慢の大太刀ヲシ指しこはらし。地案内に及ばずずつと通り。詞コレ〳〵法眼殿。只今は直の御出近頃祝着。義經搦め置かれしとやお手柄といひお使がら。早速ながら參つたと。地詞に人々目を見合せ。扨は鼓の返禮に彼奴を誑り寄せたるよと。心に點頭きいかにも〳〵。奥の殿に搦め置くサアいざ〳〵と先に立ち。龜井に目はじき間もあらせず。得たりと利腕取る手も早く床も碎けとずでんどう。起しも立てず踏付け〳〵早繩たぐつてくゝり上げ。宙に引立て大將の見參に入れんと勇み行く。義經



延享四年十一月

ならぬ源九郎が。フシ計略とこそしられたり。地 次へ來るは梅本の鬼佐渡。何でもつかみ喰はん面付。見えぬ源九郎に。つま丶れ來るとは白衣の。袖押しまくつて屋敷の隈々睨み廻し。詞 イヤ法眼殿只今は早々の仕合せ。まだ歸られじと思うたに。何もかも手ばしかい。地 シテ四人はと出來し顔なる鼻の下。長廊下をやり過し蹴返す板間踏みすべり。する〳〵駿河に踏みのめされ。無念〳〵の手間隙いらず フシ 同じく奥へ引立て行く。地 扨三番めは返り坂の藥醫坊。くる〳〵道も佛頂面。詞 ヤレせはし。ハテせはし。行くわいやい。マア待てやい。コリヤ其樣に引摺るな。衣や着物が破れるわい。扨々無禮な使ぢやと。地 源九郎に化されて何をいふやら譯もなき。フシ 中にしわざはこもりける。地 ヲ、待兼し藥醫坊。サア〳〵こちへと寄る顔で。小腕ぐつと捻上ぐれば。アイタ、、、こりや何とする。ヲ、斯うするとそれながら大の法師を引きかづき。貴殿ばかりは法眼が手料理の馳走ぶり。義經公の献立を待つて切り方致さんと。笑うて奥に入りにける フシ 勇氣の程ぞ類なき。地 斯としら刃の大長刀。鐏。土に突き鳴らし。衣の下は海老胴鎖。フシ 頭は袈裟に。ひん纏ひゆらり。〳〵と入りたるは ハズミ 唯者ならぬ横川の覺範。詞ノリ 大庭に仁王立ち。河連殿はいづくにある客僧これへ參入せり。奥へ推參申さんか。地 とく〳〵對面々々と フシ 呼ばはり。ながら歩み行く。地 後の障子の



竹本座興行の番附

内よりも。詞平家の大將能登守。教經待てと聲かけられ。地思はずきつと見かへりしが。詞ムウ聲あつて形なきは。我を呼ぶにはあらざりし。覺えなき名に驚きて思はぬ氣おくれ。ハ、、、人なくて地恥かゝざりしと獨言して行く所を。詞ヤア卑怯な教經能登守。九郎判官義經がとくより是に待ちかけたりと。地障子をさつと押開く見るより覺範望む所。長刀柄長くかい込んで飛びかゝらんず顔色に。ちつとも臆せず莞爾と笑ひ。詞げに紅の旗印は衆徒にやつせど隱れなし。水練に名高き教經。八島の沖に入水と見せ。底を潜つて浮み出で。此世にあるとは。疾くより知つてまがひなき面體。諍がはれなと優美の詞。ホ、さかしくも言つたりな。教經にもせよ誰にもせよ。汝に敵對ふ覺範に物具もせず出合ふは。此場を助けて貰いたさの追從。地命惜しさに骨折

るはフシ苦勞。九郎とあざ笑へば。詞ヤア我は顔なる言事かな。弓勢には及ばずとも。太刀打つ手練は負くべきや。天命に盡きたる平家の刄。義經が身に立たば。サア立てゝ見られよ能登守と。地いはせもあへず上段に薙いでかゝるを小太刀にて。からり丁々はつしと受け。詞ノリもどく長刀鐏にて。胴腹ぬかんと突つかかるを。はつたと蹴させて付入るにぞ。地あしらひ兼て義經はフシ詞にも似ず逃げて入る。地逃さじやらじと奥の間の隔の障子蹴放し〳〵。駈行く向うには如何に。玉座を設け安徳帝﨟たげなる御姿。コハ〳〵勿體なや淺間しや。何とて爰にましますと。フシ胸打。騒ぎ奏問す。君は氣高き御聲にて。詞尼上を始め一門殘らず。海に沈むと聞きつるに。教經はさはなかりしな。地はつと勅答黒髪を隱せし頭巾かなぐり捨て。鎧の袖かき合せ。

詞臣が乳母子讃岐の六郎と云ふ者。能登守教經と名乘り。安藝の太郎兄弟を左右に挟み。海へ飛び入り空しくなる。又この教經は人知らぬ磯邊に上り。祈禱坊主の山科法橋。頼んで扮す姿は覺範。地義經に仇を報はんと駈入る此間に。玉體のまします事。擒れさせ給ひしか。恐れながら勅諚にスヱテ明かさせ給へと。奏すれば。地まだ幼き天皇も。御涙にフシくれさせ給ひ。地教經も知る如く。詞八島の内裏を遁れ出で。頼みなき世を待ちつるに。義經に廻り逢ひ。源氏の武士の情ある。心に恥ぢて知盛は。我が事をくれ〴〵と。頼みて海へ入りたるぞ。地それより丸も茲に來て今教經に逢ふ事も。皆義經が計らひ。日の本の主とは生るれども。天照神に背きしか。我が治めしる。我が國の我が國人に悩され。我が國狹き身の上にも。只母君がフシ戀しいぞ。地都に在

りし其時は富士の白雪吉野の春。見まくほしさと慕へども大原の里におはします。母上戀しと慕ふ身は。文弥花も吉野も何かせん。ナホスあぢきなの身の上を思ひやれとばかりにて スヱテ伏し轉びてぞ。泣き給ふ。フシ御いたはしさ勿體なさ。地エ、しなしたり〳〵。詞ノリ知盛も教經もあつぱれ巧みし計略智謀。義經に見さがされしは。地よつく武運に盡きたるな。ヘツエ是非もなや口惜しやとの無念の奥歯に血をそゝぎ握り詰めたる掌裏に。爪も通らん其氣色。數百斤の瞼の重り フシ怺へ。兼ねて居たりしが。地萎れし眼くわつと見ひらき。詞ハア我ながら誤つたり。八島の戰。義經を組みとめんとせし所。船八艘を飛越え。味方の船へ引いたるは。計略の底を探らん爲。卑怯ではなかりしか。今又奥へ逃込みしも。我が計略を知つたる故。龍顔に逢はせ奉るは。

武士の情であつたよなア。ウム今は助くる。勝負は重ねていで歸らん。それ迄は教經が隱家へ還幸あれ。地再び廣き世となして御母君にも逢はせません。いざや御幸の御供とかき抱き奉る。馬手は長柄の大長刀。浮世を牛の車とも フシ知しめされと奏しつゝ。地立出でんとする所に曳と切る聲三振の太刀音。すはやと長刀引そばめ見返る間もなくかけ出づる。龜井駿河河連法眼。面々血刀首引つかゝへ。詞卑怯に候能登殿。一味の衆徒等一々に此如く討取つたり。天皇を囮にして後穢き逃げ足。門打つたれば遁れなし。サア勝負あるか降參あるか。二つに一つの返答と。地詞を揃へていはせも果てずぐつと睨付け。詞頤のあがく儘降參とは。汝等が性根に較べてぬかしたりな。汝等が首一々提げて往なん事。何の手間隙入るべきや。帝を我に渡したる義經が寸志を

思ひ助け置くを。有難いとはぬかさいで。逃ぐるなどとは案外千萬。供奉の穢れ思はずば睨殺してくれんず奴輩。飛びしさつて三拜せよ。ヤア人もなげなる廣言。組留めて鼻あかさんと。地三人五の手(ぐの手イ)に追取り巻き砂踏みちらして詰寄れば。コハリ上に教經韋駄天立瞰下す眼角立つて。睨合ひたる其中に。ナホス帝は怖さ玉の緒も フシ消ゆるばかりの御風情。詞ヤア待て汝等麁忽すなと聲をかけて義經公。地烏帽子狩衣引繕ひ フシ物の具ならぬ御出立。詞行幸の道を支へ。君臣の禮を亂る其憚り少からず。鎮まれ方々いざ義經も。天皇を御見送り奉らん。用意の裝束斯の如し。教經一人歸せしとて。天に入る德もなく。地に入る術もあらばこそ。何條遁れなき命。汝等が手にかけず。此所に在合さぬ。忠信に討たすれば。兄繼信が敵を討ち。修羅の妄執散ずる道理。教經

は世狭き身。義經も世を憚る身。地互に城も楯もなき戰場吉野の花櫓に。勝負々々を決すべし。詞天皇入水と披露して内裏表済んだれば。縱へ勝つとも負くるとも。君に過致されな。ホ神妙の詞滿足せり。些細の事にかゝはらぬ教經。義經ばかりを狙ひはせじ。天下に祟とる頼朝が素頭取つて。君が代に飜さん。其時は義經には莊園を中下して得さすべし。ヤア言くどし教經。義經を狙はゞ其儘。兄頼朝に敵對ふとは。地聞捨てならずと御大將御佩刀に手をかけて。すはやと見ゆる腹心に。分入り宥むる源九郎狐名をかりの恩忠信が。本意なき思ひ鎭むるとは目にこそ見えね君の守護。詞さらばよ義經さるにても。帝のお命助けたる情の禮には教經とも。能登守とも名乘りては敵たはぬは我が返報。再會の名は横川の覺範。吉野山にて忠信に出つくわして勝負せん。互の命は其時々々。三重詞行幸なるぞ雜人輩。路次の警固と呼ばはつて。地又抱上ぐるフシ安徳帝。地君々たれど君たらず。臣々たれど臣たらぬ横川の覺範供奉の役敵々ながら義經が。警蹕の聲高々と威儀あり。意趣あり情あり。コハリ河蓮法眼先驅の役。駿河の仕丁龜井の六位。官人ならぬ堪忍の二字を守つて控ゆれど。布衣なさ餘つて鯉口のくつろぐ光り銀魚袋。ナホス供奉は門前人目あり。赦させ給へと敬つて頭は下げても顏と顏。睨んで別るゝ兩大將。源九郎義經の義と。いふ字を訓と音。源九郎義經附添ひし。大和言葉の物語其名は。高く。聞えける

第五

三重一セイ山々は。皆白妙に白雪の。梢するどき。氣色かな。ナホス地佐藤忠信大音上げ。詞ノリ清和天皇の後胤。檢非違使五位の尉源の義經なり。兄頼朝が家來の汝等。現在我に敵するは。主に刄向ふ無道人。地天狗に習ひし妙術にて。一々に蹴殺して。谷の水屑としてくれん。フシ觀念せよと呼ばはつたり。地右往左往に取卷いたる。讒者一味の鎌倉勢聲々に。詞ヤア主從とは事をかし。主か主であらさるか。討取つて見せつけん。地かゝれや蒐れと一面に。打つてかゝるを事ともせず。右へ薙立て左へ拂ひ。切立て〳〵切立つれば。一先づ引けと鎌倉勢。逃ぐるをやらじと岨道を足に任せて。フシ追つかくる。江戸平家の大將能登守。忠信に出合はんと。約束違へぬ衆徒頭巾。形も横川の覺範を。フシ歩みくる。ナホス地山端岩角けしとます。追散らして立歸る佐藤忠信。豫て期したる約束の。敵は向うに待ちかけたり。鎌倉勢の返さぬ内に。名乘合はして

勝負せんと。立寄る相手をにつこりと。笑うて待つたる。コハリ勇將義士。互に招かれ招き合ひ。詞ノリ去年三月八島の磯にて。大將軍の御馬の先に立塞がり。忠心に矢を受けとめたる。佐藤三郎兵衛繼信が弟。四郎兵衛忠信。兄の敵平家の大將能登守教經。恨の刄參らするとぞ名乘りける。ヲヽしをらしや忠信。兄の敵と名のるからは。討たれてやるが本意なれども。安德帝を守り奉り再び天下を覆す敎經。不便ながら返討。冥途で兄に言譯せよ。地横川の禪師覺範が。引導してくれんずと。長刀杖につき反し フシかんらからとぞ打笑ふ。地詞戰終つて後。眞向かさしに忠信が。討つてかゝる大太刀を。かはしてはた〳〵はつしとあふ。合ひつぱづして忠信が。切身に入つたる太刀先を。もどいて拂ふ長刀の薙手。合打手に事ともせず。詞ノリ右にかゝれば左へ踊り。合地左に乘せんと取直す白刄。鎺ていから〳〵。唐紅の緋縅や。互に勝色分かざりしに。覺範頻に打ちかくれば。ひらりと飛んで大木の。櫻の梢に身をたもつ。追取直して櫻木の フシ拐にすつかと切りかけて。詞ノリ足に任せて踏放せば木は。めり〳〵〳〵と中絕し。地向うの岸に忠信が。木に迯られて渡り越す。合跡は架橋丸木橋。これ究竟と踏みしめ〳〵。渡る不敵の勇猛將。過つて踏止めし。足場すべつて谷底へ。落つれど落ちず諸足に。枝を繆うて眞逆樣。只一刀と打ちかくる。地四郎兵衛が太刀先を拂ふ長刀水車。草摺の音鍔の音。ちりゝんはた〳〵。合しつてう〳〵實に。目覺しき働なり。地追散されし鎌倉勢。忠信遣らぬと取つて返し。詞ノリ又ばら〳〵と討ちかゝるを。南無三寶邪魔と渡りあひ。打合ふ隙に覺範が。地櫻にかけし諸足を。切らんとかゝれば木を放れ。落つるを見捨て鎌倉勢ハヅミ鏖殺にと追うて行く。地谷には敎經手練の早速。ひるまず巖に長刀を。突立て〳〵駈上れど。雪に凍てたる土碎け。氷柱に岩石滑らかに。上れば滑りすべつても。合岨の梅が枝足代に。半上りし岩の上。フシ鎌倉勢を追散し。詞ノリ弓手の方へかけ來る佐藤忠信。地覺範爰へと招かれて。上るに隙のあら遲し。忠信それへと言捨てゝ。さしもに高き頂上よりふはと飛んだは飛鳥より。遙に輕き其勢。我もと覺範つゞいて飛び。あはや高紐總角が枝にかゝつてぶら〳〵〳〵。合稚な遊びに鞦韆の。フシ戲なんど見るごとく。地身動きならぬを忠信が。切付くるを身を背け。くるりと廻れば枝ずつかり。切放されしは天命に。盡きぬ所と大手をひろげ。かゝる相手も太刀投捨て。互にえいやと引組んだり。合詞ノリこりや〳〵と忠信が。

毘沙門腰にて押しかくれば。ひらりと外してどつこいと。踏みとまつたる摩利支天。地雪踏みちらして。フシ争ひしが。地何とかしけん忠信が。組んだる小手先捥ぎ放され。又組寄らんとする所を。ぐつと摑みかつぱと投げ。膝に引敷く折こそあれ。不思議や又も駈けくる忠信。のつかかつたる覺範が。具足の隙間をてうど切る。切られて怯まず振返り。見るよりびつくり。詞コリヤ忠信こいつ何ぢやと引敷いたる。地高紐摑んで引上ぐれば。忠信ならぬ義經の。御着長の鎧ばかり フシ是はと。呆るゝ虚を窺ひ切付け／＼切付くる。深手にさしもの能登守。詞サア寄つて首取れと。地いふより早く義經公駈着け給ひ。詞いかに敎經。安德帝は大原の里にて御出家遂げ。御母君の御弟子とせん。あつぱれ名高き敎經なれども。通力自在の源九郎狐。忠信に力を添へたる鎧。軍術にも裏かゝずと。地仰もあへぬ出合頭河越太郎重頼。左大将朝方を高手小手に縛め。詞久しう候義經公。賜る鼓に事を寄せ。頼朝追討の院宣と號けしは。朝方が業と事現れ。義經に計はせよと綸命を請けて參つたりと。地聞くより敎經座を立上り。詞ホウ平家追討の院宣も。朝方が所爲と聞く。地彼奴を殺すが一門への言譯と。いふより早く首打落し。詞サア／＼義經敎經が首取れといはせも果てず。ヤア能登守敎經は。八島の沖にて入水せり。横川の覺範が首は忠信にと。地仰の中に振り上げて。兄の敵を討ち納め打治つたる君が代に。奥州へ行く大原へ行く。平家の一類討亡し。四海太平民安全。五穀豐饒の時を得て。穗に穗榮ゆる秋津國繁昌ならびなかりけり

延享四丁卯年

霜月十六日

作者 竹田出雲

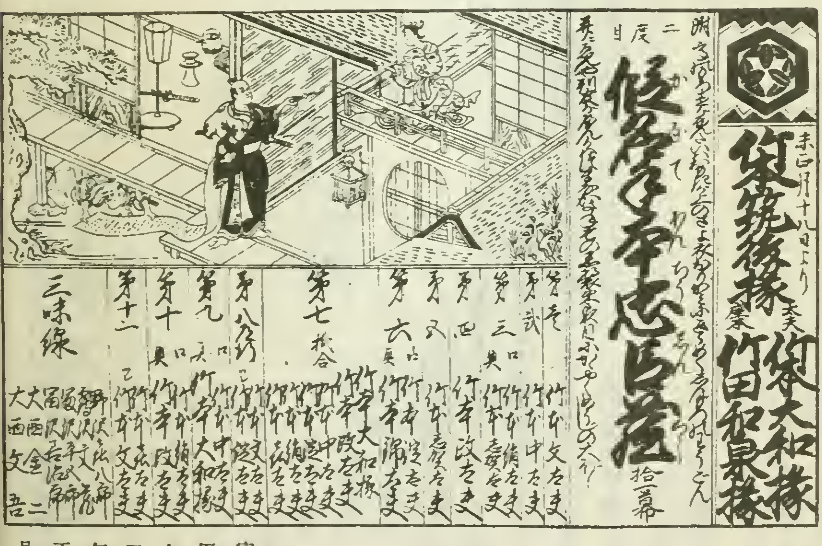
三好松洛

並木千柳

假名手本忠臣藏

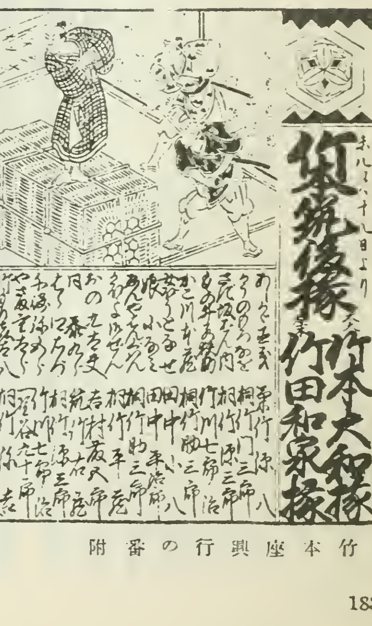
地嘉肴ありと雖も食せざればその味を知らずとは。國治つてよき武士の忠も武勇も隠るゝに。たとへば星の晝見えず夜は亂れて顯はるゝ。例を爰に假名書の　オロシ　へ太平の代の。政。　地頃は暦應元年二月下旬。足利将軍尊氏公新田義貞を討亡し。京都に御所を構へ徳風四方に普く。萬民草の如くにて靡き從ふ御威勢。　地國に羽をのす鶴ケ岡八幡宮御造營成就し。御代參として御舎弟足利左兵衛督直義公。鎌倉に下着なりければ。在鎌倉の執事高武蔵守師直。御膝下に人を見下す權柄眼。御馳走の役人は。桃井播磨守が弟若狭助安近。伯州の城主鹽冶判官高定。馬場先に幕打廻し　フシ　威儀を正して相詰むる。　地直義仰せ出さるゝはいかに師直。　詞此唐櫃に入れ置きしは。兄尊氏に亡されし新田義貞。後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流。着棄の兜と云ひながら。その儘にも打置かれず。　地當社の御藏に納める條その心得あるべしとの嚴命なりと宣へば。武蔵守承り。　詞是は思ひも寄らざる御事。新田が清和が末なりとて着せし兜を尊敬せば。御旗下の大小名清和源氏はいくらもある。　地奉納の儀然るべからず候と。遠慮なく言上す。　詞イヤ左様にては候まじ。この若狭助が存ずるは。是は全く尊氏公の御計略。新田に徒黨の討洩され御仁徳を感心し。攻めずして降參さする御方便と存じ奉れば。無用との御評議卒爾なりと。　地云はせもはてず。　詞イヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死したる時は大童。死骸の傍に落散つたる兜の數は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと思ふのを。奉納したその後でさうでなければ大きな恥。なま若輩な形をしてお尋ねもなき評議。　地すつこんでお居やれと御前よき儘出る儘に。杭とも思はぬ詞の大槌。打込まれてせき立つ色目鹽冶引取つて。　詞コハ御尤なる御評議ながら。桃井殿の申さるゝも治まる代の軍法。　地是もつて捨てられず双方全き直義公の。御賢慮仰ぎ奉ると。申上ぐれば御機嫌よく。　詞ホヽさ云はんと思ひし故。所存あつて鹽冶が婦妻を召連れよと云付けし。是へ招けとありければ。　地はつと答の程もなく。馬場の白砂素足にて裾で庭掃く裲襠は。　長地神の御

前の玉箒玉も欺く薄化粧。鹽冶が妻の顔世御前はるか下つて畏る。地女好きの師直その傍聲かけ。詞鹽冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠御大儀〱。地御前の御召近う〱と取持顔。直義御覧じ。詞召出す事外ならず。往んじ元弘の亂に。後醍醐帝都にて召されし兜を。義貞に賜つたれば最期の時に着つらん事疑ひはなけれども。その兜を誰あつて見知る人外になし。その頃は鹽冶が妻。十二の内侍のその内にて。兵庫司の女官なりしと聞及ぶ。さぞ見知あらんず。覺えあらば兜の本阿彌。地目利き〱と女には。嚴命さへも和らかに。フシお受申すも亦なよやか。詞冥加に餘る君の仰せ。それこそは私が。明暮手馴れし御着の兜。義貞殿拜領にて。蘭奢待といふ名香を添へて賜はる。御取次は則ち顔世。その時の勅答には。人は一代名は末代。すは討死せん時。此蘭奢待を思ふまゝ。内兜に炷きしめ着るならば。地鬢の髮に香を留めて。名香かをる首取りしといふ者あらば。義貞が最期と思召されよとの。詞はよもや違ふまじと申上げたる口元に。下心ある師直は。小鼻いからし聞居たる。地直義詳しく聞し召し。詞ヲヽ審かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故。落散つたる兜四十七。此唐櫃に入れ置いたり。地見分けさせよと御上意の下侍。屈む腰の海老鎖を。あける間遲し



寶曆十三年正月

と取出すを。おめず臆せず立寄つて。ハルフシ見れば所も。名にし負ふ鎌倉山の星兜。とつぱい頭獅子頭。さて指物は家家の。流義々々によるぞかし。地或は直平筋兜。錣のなきは。弓のため。その主主の好みとて數々多きその中にも。五枚兜の龍頭是ぞと云はぬその内に。ぱつとかをりし名香は。顔世が馴れし義貞の兜にてござ候と フシ差出せば。地左様ならめと一決し鹽冶桃井兩人は。寶藏へ納むべしこなたへ來れと御座を立ち。顔世にお暇賜りて段かづらを過ぎ給へば。鹽冶桃井兩人も オクリ 打連れてこそ入りにける。地後に顔世はつきほなく。師直様は今暫し。御苦勞ながらお役目を。お仕舞あつてお靜に。詞お暇の出たこの顔世。長居は恐れおさらばと。地立上る袖摺寄つてじつかと控へ。詞コレマアお待ち待ち給へ。今日の御用仕舞ひ次第。その許へ推參してお目にかける物がある。幸ひのよい所召出された直義公は我が爲には結の神。御存の如く我等歌道に心を寄せ。吉田の兼好を師範と頼み日々の狀通。その許へ屆けくれよと問合せのこの書狀。いかにもとのお返事は。口上でも苦しうないと。地袂から袂へ入るゝ結び文。顔に似合はぬ様參る武藏鐙と書いたるを。見るよりはつと思へども。はしたなう恥しめては却つて夫の名の出る事。持歸つて夫に見せうか。



竹本座興行の番附

いや／＼それでは鹽冶殿。憎しと思ふ心から怪我過にもならうかと。フシ物をもいはず投返す。人に見せじと手に取上げ。詞戻すさへ手に觸れたりと思ふにぞ我が文ながら捨ても置かれず。くどうは云はぬ。よい返事聞くまでは。口說いて／＼口說きぬく。天下を立てうと伏せうとも儘な師直。鹽冶を生けうと殺さうとも。顏世の心たつた一つ。何とさうではあるまいかと。地聞くに顏世が返答も。フシ淚ぐみたるばかりなり。地折から來合す若狹助。例の非道と見てとる氣轉。詞顏世殿まだ退出なされぬか。お暇出でて隙取るは。地却つて上への恐れ フシ早お歸りと追立つれば。地彼奴扨はけどりしと。弱身を食はぬ高師直。詞ヤア又してもいはれぬ出過。立つてよければ身が立たす。此度のお役目。首尾よう勤めさせくれよと。鹽冶が內證顏世が賴み。さうなうては叶はぬ筈。大名でさへあの通り。小身者に捨知行誰が蔭で取らする。師直が口一つで御器提げうも知れぬあぶない身代。それでも武士と思ふぢやまでと。地邪魔の返報にくて口くわつとせきたつ若狹助。刀の鯉口碎ける程 スヱテ握り。つめはつめたれども。神前なり御前なりと一旦の堪忍も。今一言の生死の。詞の先手還御ぞと。御先を拂ふ聲々に詮方なくも期を延ばす。無念は胸に忘られず。惡事悖つて運强く切られぬ高師直を。明日の我が身の敵とも。知らぬ鹽冶が後押へ。直義公は悠々と步御なり給ふ御威勢。人の兜の龍頭御藏に入るゝ數々も。四十七字のいろは分け假名の兜を和らげて。兜頭巾の綻びぬ國の。掟ぞ 三重へ久方の

第　二

ハルフシ空も彌生の黃昏時。地桃井若狹助安近の。館の行儀はき掃除。お庭の松も幾千代を守る館の執權職。加古川本藏行國。年も五十の分別盛り。フシ上下ためつけ書院先。地步み來るとも白洲の下人。詞ナント鬪內この間はお上にはでつかちないお拵。都からのお客人。昨日は鶴ケ岡の八幡へ御社參。夥しいお物入ア、その銀の入目が欲しい。その銀があつたらこの可介。名を改めて樂しむになア。何ぢや名を改めて樂しむとは珍しい。そりや又何と變へる。ハテ角助と改めて胴を取つてみる氣。ナニ馬鹿面なわりや知らないか。昨日鶴ケ岡で。此旦那若狹助樣いかう不首尾であつたげな。仔細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めて又無理をぬかして。お旦那をやりこめ地をつたであろと フシさがなき口々。詞ヤイ／＼何をざわ／＼とやかましいお上の取沙汰。殊に御前の御病

氣。お家の恥辱になる事あらばこの本藏聞流しおくべきや。禍は下部の嗜み。掃除の役目了うたら。皆行け 地 行けと和らかに。女小性が持ち出づる。煙草輪を吹く雲を吹く。本フシ 廊下音なふ衣の香や。地 本藏がほんそうの一人娘の小浪御寮。母の戸無瀬諸共にしとやかに立出づれば。詞 是は〳〵兩人とも御前のお伽は申さいで。自身の遊か不行儀萬千。イエ〳〵今日は御前樣殊の外の御機嫌。今すや〳〵とお休みそれでナア母樣。イヤ申し本藏殿。先程御前の御物語。昨日小浪が鶴ケ岡へ御代參の歸るさ。殿若狹助樣。高師直殿詞爭ひ遊ばせしとのお噂。誰が云ふとなくお耳に入りそれはそれはきついお案じ。夫本藏仔細詳しく知りながら。自に隱すのかやとお尋ね遊ばす故。小浪に樣子を尋ぬれば。是も私と同じ事。地 何にも樣子は存じませぬとのお返事。

御病氣の障りお家の恥になる事なら。詞 ア、これ〳〵戸無瀬。それ程のお返事なぜ取繕うて申上げぬ。主人は生得御短慮なるお生附。なんの詞爭ひなどとは。女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより身を果すが刀の役目。武士の妻でないか。それ程の事に氣がつかぬか嗜めさ〳〵。ナニ娘。汝は又御代參の道すがら。左樣の噂はなかりしか。但しあつたか。ナニないヲ、その筈〳〵。ハヽヽヽ何のべしてもない事を。よし〳〵奥方のお心休め。地 直にお目にかゝらんとフシ 立上る折こそあれ。地 當番の役人罷り出で。詞 大星由良之助樣の御子息。大星力彌樣御出なりと申し上ぐる。ムヽお客御馳走の申合せ。判官殿よりのお使ならんこなたへ通せ。コレ戸無瀬其方は御口上受け殿樣へその通り申上げられよ。お使者は力彌。娘小浪と許嫁の婿殿御馳走申しや

れ。地 まづ奥方へ御對面とオクリ 云ひ捨てへ一間へ入りにける。地 戸無瀬は娘を傍近くなう小浪。詞 父樣の堅苦しいは常なれども。今おつしやつた御口上。受取る役は其方にとありそな所を。戸無瀬にとは母が心ときつい違ひ。そもじも亦力彌殿の顏も見たかろ逢ひたかろ。母に代つて出迎やや。詞 いやか〳〵と問返せば。あいともいやとも返答はフシ 赤らむ顏のおぼこさよ。地 母は娘の心をくみアイタタヽ。娘背を押してたも。是は何と遊ばせしとうろたへ騷げばイヤなう。詞 今朝からの心遣ひ又持病の癪が差込んだ。是ではどうもお使者に逢はれぬ。アイタヽタ娘。大儀ながら御口上も受取り。御馳走を申してたも。お主と持病には勝たれぬ。地 勝たれぬとそろ〳〵と立上り。詞 娘や隨分御馳走申しやや。したが餘り馳走すぎ。大事の口上忘れまいぞ。わしも

婿殿にアイタヽ。地あいたからうの奥様は。フシ氣は通してぞ奥へ行く。地小浪はお後伏拜み／＼。詞添い母様。日頃戀しゆかしい力彌様。逢はゞどう云をかう云をと。地娘心のとき／＼と。フシ胸に小浪を打寄する。地疊觸りも故實を正し入來る大星力彌。まだ十七の角髪や。二つ巴の定紋に フシ大小。立派爽かに。地流石大星由良之助が子息と見えしその器量。しづ／＼と座に直り。詞誰そお取次頼み奉ると 地慇懃に相述ぶる。小浪ははつと手をつかへぢつと見かはす顔と顔。互の胸に戀人と。物の得云はぬ赤面は。梅と櫻の花相撲に フシ枕の行司なかりけり。地小浪やう／＼胸押鎮め。詞是は／＼御苦勞千萬にようこそお出で。只今の御口上受取る役は私。御口上の趣を。お前の口から私が口へ。地直におつしやつて下さりませと摺寄れば身をひかへ。詞ハア是は／＼無作法千萬。惣じて口上受取り渡しは。行儀作法第一と。地疊を下り手をつかへ。詞主人鹽冶判官より若狹助様への御口上。明日は管領直義公へ未明より相詰むる筈の所。定めてお客人も早早にお出あらん。然れば判官若狹助兩人は。正七ツ時にきつと御前へ相詰めよと師直様より御仰せ。萬事間違のなきやうに今一應御使者に參れと。主人判官申付け候故右の仕合この通り若狹助様へ御申上げ下さるべしと。地水を流せる口上に。小浪はうつかり顔見惚れフシとかう。答もなかりけり。地ヲヽ聞いた／＼使大儀と若狹助。一間より立出で。詞昨日お別れ申してより。判官殿間違うてお目にかゝらず。成程正七ツ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千萬と。宜しく申傳へてくれられよ。お使者大儀。然らばお暇申上げん。ナニお取次の女中御苦勞と。地しづ／＼立つて見向きもせず衣紋繕ひ立歸る。地本藏一間より立代り。詞ハア殿は是に御入り。いよいよ明朝は。正七ツ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九ツ。暫く御睡眠遊ばされよ。成程／＼。イヤナニ本藏。其方にちと用事あり密々の事。小浪を奥へ／＼。ハアコリヤ／＼娘。用事あらば手を打たう奥へ 地奥へと娘を追ひやり。合點のゆかぬ主人の顔色とお側へ立寄り。詞先程よりお伺ひ申さんと存ぜし處。委細つぶさに御仰せ。地下さるべしと差寄ればにじり寄り。地本藏今此若狹助が云出す一言。何によらず畏り奉ると二言と返さぬ誓言聞かう。ハア是は／＼改つた御詞。畏り入り奉るではござれども。武士の誓言は。ならぬと云ふのか。イヤ左にあらず。先づ委細とつくと承り。仔細を云はせ後で意見か。イヤそれは。詞を背くか。

サア何と。ハツ地はつとばかりにさしうつむきフシ暫く。詞なかりしが。地胸を極めて差添抜き。片手に刀抜出し。てう〳〵と金打し。地本藏が心底かくの通り。留めも致さず他言もせぬ。先づ思召の一通りおせきなされずと。本藏めが胃の腑に。落付くやうにとつくりと承らんと相述ぶる。ム、一通り語つて聞かせん此度管領足利左兵衛督直義公。鶴ケ岡造營故。此鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽冶判官。某兩人承る所に。尊氏將軍よりの仰せにて。高師直を御添人。萬事彼が下知に任せ御馳走申上げよ。年配といひ諸事物馴れたる侍と。御意に隨ひ勝に乘つて日頃の我儘十倍增し。都の諸武士並居る中。若年の某を見込み雜言過言眞二つにと思へども。お上の仰せを憚り。堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早了簡ならず。御前に於て恥面かゝせる武士の意地。その上にて討つて棄つる必ず留めるな。日頃某を短慮なりと奥を始め其方が意見。幾度か胸にとつくと合點なれども。無念重る武士の性根。家の断絶奥が歎き。思はんにてはなけれども。刀の役目弓矢神への恐れ。地戰場にて討死はせずとも。師直一人討つて棄つれば天下の爲。家の恥辱には代へられぬ。必ず〳〵短慮故に身を果す若狭助。猪武者よ狼狽者と。世の人口を思ふ故。汝にとつくと打明すと。思込んだる無念の涙。スエテ五臓を貫く思ひなる。地横手を打つ



てしたり〳〵。詞ム、よう譯をおつしやつた。よう御了簡なされた。この本藏なら今迄了簡はならぬ所。ヤイ本藏ナ、何と云つた。今迄はよう了簡した堪忍したとは。わりやこの若狭助をさみするか。迚はお詞とも覺えず。冬は日蔭夏は日面。よけて通れば門中にて。行逢の喧嘩口論ないと申すは町人の譬。武士の家では杓子定規。よけて通せばはうづがないと申すのが本藏めが誤りか。お詞さみ致さぬ心底。地御覧に入れんと御傍の。小刀抜くより早く書院なる。召替草履かたし片手の早ねた刄。とつくと合せ絲先の松の片枝ずつぱと切つて手ばしかく。フシ鞘に納め。詞サア殿。まつこの通りにさつぱりと遊ばせ〳〵。云ふにや及ぶ。地人や聞くとあたりに氣をつけ。今夜は未だ九ツくつたりと一休み。枕時計の目覺し本藏めがしかけ置く早く〳〵。詞ヲ、聞入れあつて満足せり。奥にも逢つて餘所ながらの暇乞。モウ逢はぬぞよ本藏地さらばさらばと云捨てて。奥の一間に入給ふフシ武士の。意氣地は是非もなし。地御後影見送り見送り勝手口へ走り出で。詞本藏が家來ども馬牽け早くと云ふ間もなく。地股立しやんと凛々しげにフシ御庭に引出せば。地緣よりひらりと打乗つて師直が舘迄。續けや續けと乗り出す。詞轡にすがつて戸無瀬小浪コレ〳〵何處へ。始終の様子は聞きました年にこそよれ本藏殿。主人に御意見も申さず。合點ゆか



ぬ留めますと。地母と娘がぶら〳〵。轡にすがり留むれば。詞ヤアこ差出た。主人のお命お家のため思ふ故にこの時宜。必ずこの事殿へ御沙汰致すな。お耳へ入つたら娘は勘當。戸無瀬は夫婦の縁を切る。地家來共道にて諸事を云付けん。そこ退け兩人イヤ〳〵。シヤ面倒なと鐙の端。一當はつしと當てられて。うんとばかりにのつけに反るを見向きもせず。家來續けと馬煙追立て打立て力足。踏みたててこそ　三重へかけり行く

第　三

地足利左兵衛督直義公。關八州の管領と新に建てし御殿の結構。大名小名美麗を飾る晴裝束。鎌倉山の星月夜と袖を列ぬる御馳走に。お能役者は裏門口。表御門はお客人御饗應の役人衆。正七ツ時の御成フシ武家の威光ぞ輝きける。地西の御門の見附の方。ハイ〳〵〳〵といかめしく。提燈照らし入來るは。武藏守師直。權威をあらはす鼻高々。花色模樣の大紋に。胸に我慢の立烏帽子。家來共を役所役所に殘し置き。下部僅に先を拂はせ主の威光の召おろし。鶴の眞似する鷺坂伴内。肩臂いからし申しお旦那。詞今日の御前表も上首尾々々々。鹽冶で候の。イヤ桃井で候のと。日頃はとつぱさつぱとどしめけど。行儀作法は狗を。屋根へ上げたやうでさりとは〳〵腹の皮。イヤそれにつきかね〳〵鹽冶が妻顔世御前。未



だ殿へ御返事致さぬ由。お氣にはさへられな。器量はよけれど氣が叶はぬ。何の鹽冶づれと。當時出頭の師直様と。ヤイ〳〵聲高に口きくな。主ある顔世。度々歌の師範に事寄せ。口説けども今に叶はぬ。即ち彼が召使かるといふ腰元新參と聞き。彼奴をこまづけ頼んで見ん。さてまだとりえがある。顔世が誠に否ならば。夫鹽冶に仔細をぐわらりと打明ける。所を云はぬは樂と。地四足門の片陰に主從點頭話し合ふ フシ折もあれ。地見付に控へし侍あわたゞしく走出で。詞我々見付のお腰掛に控へし所へ。桃井若狭助家來加古川本藏。師直様へ直にお目にかゝらんため。早馬にてお屋敷へ參つたれども早御登城。是非御意得奉らんと家來も大勢召連れたる體。地如何計らひ申さんやと聞くより伴内騒ぎ出し。詞今日御用のある師直様へ。直に對面とは推參なり。地某直談と走行くを。詞待て〳〵伴内仔細は知れた。一昨日鶴ケ岡にての意趣晴し。我が手を出さず本藏めに云付け。この師直が威光の鼻をひしがんため。ハヽヽ、伴内ぬかるな 地七ツにはまだ間もあらん。是へ呼出せ仕舞うてくれん。成程成程家來ども氣を配れと。主從刀の目釘を濕し。手ぐすね引いて フシ待ちかけ居る。地詞に從ひ加古川本藏。衣紋繕ひ悠々と打通り。下部に持たせし進物ども。師直が目通りに並べさせ フシ遙か下つて畏り。詞ハア憚りながら師直様へ申上げ奉る。この度主人若狭助。尊氏將軍より御大役仰付けられ下さる段武士の面目身に餘る幸福。若輩の若狭助。何の作法も覺束なく。如何あらんと存ずる所に。師直様萬事御師範遊ばされ。諸事をお引廻し下され候故。首尾よく御用相勤むるも全く主人が手柄にあらず。皆師直様のお執成と。主人を始め奥方一家中。我々迄も大慶この上や候べき。さるによつて近頃些少の至りに候へども。右御禮のため一家中よりの贈り物。お受け遊ばされ下さらば。生前の面目一入願ひ奉る。地則ち目録お取次と伴内に差出せば不思議さうにそつと取り押開き。詞目録一ツ巻物卅本黄金卅枚若狭助奥方。一ツ黄金廿枚家老加古川本藏。同十枚番頭同十枚侍中。地右の通りと讀上ぐれば。師直はあいた口塞がれもせずうつとりと。主從顔を見合せて。氣拔けのやうにきよろりつと。祭の延びた六月の晦日見るが如くにて。フシ手持無沙汰に見えにける。地俄に詞改めて。詞是は〳〵痛み入つたる仕合。伴内こりやどうしたもの。ハテさて〳〵。ハアお辭儀申さばお志背くといひ。第一は大きな無禮。エヽ式作法を教ゆるも。こんな折にはとんと困るナニ物ぢやわ。イ

ヤハヤ本藏殿。何の師範致す程の事もないが。とかくマア若狹助殿は器用者。師範の拙者及ばぬ〳〵。コリヤ伴內進物ども皆取納め。エヽ不行儀な。途中でお茶さへ得進ぜぬと。地手の裏返す挨拶に本藏が胸算用してやつたりと猶も手をつき。詞最早七ツの刻限はやお暇。殊に今日はなほ晴のお座敷。いよ〳〵主人の儀お引廻し賴み存ずると。地立たんとする袂を控へ。詞ハテえいわいの。貴殿も今日のお座敷の座次。拜見なされぬか。イヤ陪臣の某御前の恐れ。大事ない大事ない。この師直が同道するに。誰がくつとも云ふ者ない。殊に又若狹助殿も。何ぞれかぞれ小用のあるもの。平に〳〵と勸められ。地然らばお供仕らん。詞御意を背くは却つて無禮。地先づお先へと行くにつき。金で面撲る算用に。主人の命も買うて取る。二一天作算盤の。桁を違へぬ白鼠。忠義忠臣忠孝の。道は一筋眞直にフシ打連れ御門に入りにける。ハルフシ程もあらさず入來るは。鹽冶判官高定。是も家來を殘し置き。乘物道に立てさせ。譜代の侍早野勘平。朽葉小紋の新袴。ざは〳〵ざはつく御門前。詞鹽冶判官高定登城なりと音なひける。門番罷り出で。先程桃井樣御城登遊ばされ御尋ね。唯今又師直樣御越にて御尋ね。早御入と相述ぶる。ナニ勘平最早皆々御入とや。地遅なはりし殘念と。勘平一人お供にてフシ御前へこそは急ぎ行く。地奥の御殿は御馳走の。地謡の聲播磨潟　謡高砂の浦に着きにけり〳〵。ナホス地謡ふ聲々門外へ。ハルフシ風が持て來る柳かげ。その柳より風俗は。まけぬ所體の。小オクリ十八九松の。綠の細眉も堅い屋敷に物馴れし。奇特帽子の後帶。供の奴が提燈はフシ鹽冶が家の紋所。地御門前に立休らひ。詞コレ奴殿。やがてもう夜も明ける。こなた衆は門內へは叶はぬ。こゝから往んで休んでやと。地詞に從ひナイ〳〵と。フシ供の下部は歸りける。地內を覗いて勘平殿は何してぞ。どうぞ逢ひたい用があると。見廻す折から後影。ちらと見附け。詞おかるぢやないか。勘平さん逢ひたかつたにようこそ〳〵。ムヽ合點のゆかぬ夜中といひ。供をも連れず只一人。さいなあ。こゝ迄送りし供の奴は先へ返した。わし一人殘りしは。奧樣からのお使。どうぞ勘平に逢うてこの文箱。判官樣のお手に渡し。お慮外ながらこの返歌をお前のお手から直に師直樣へ。お渡しなされ下さりませと傳へよ。然しお取込の中間違ふまい物でなし。マア今宵はよしにせうとのお詞。地私はお前に逢ひたい望み。何のこの歌の一首や二首。お屆けなさるゝ程の間のない事はあるまいと。つい一走

りに走つて來た。フシアヽしんどやと吐息つく。詞然らばこの文箱旦那の手から師直様へ渡せばよいぢやまで地どりや渡して來う待つて居いと云ふ中に門内より。詞勘平々々々々判官様が召しまする。勘平々々。ハイ/\只今それへ。地エヽ忙しないとフシ袖振切つて行く後へ。地鯲踏む足つき鷺坂伴内。詞何とおかる戀の智惠は又格別。勘平めとせゝくつてゐる所を。勘平々々旦那がお召しと呼んだはきついか/\。師直様がそもじに頼みたい事があるとおつしやる。我等はそさまにたつた一度。地君よ君よと抱附くを突飛ばし。詞コレみだらな事を遊ばすな式作法のお家に居ながら狼藉千萬。あた無作法なあた不行儀と。地突退くればそれは情ない。くらがり紛れについちよこ/\と。手を取り爭ふその中に。詞伴内様伴内様師直様の急御用。伴内様伴内様と。地奴二人がうろ/\眼玉で是はしたり伴内様。詞最前から師直様がお尋ね。式作法のお家に居ながら。女を捕へあた不行儀な。あた無作法と。地下部が口々。エヽ同じやうに何ぬかすと。フシ面ふくらして連立ち行く。地勘平後へ入代り。詞何と今の働き見たか。伴内めが一杯食うて往せをつた。俺が來て旦那が呼ばしやると云ふと。おけ古いとぬかすが面倒さに。奴共に酒飲ませ。古いと云はさぬこの術。ハヽヽヽヽまんまと首尾はしおふせた。サアその首尾序にな。地ちよつと/\と手を取れば。詞ハテさてはずんだマア待ちやいの。何云はんすやら。何の待つ事があるぞいな。もうやがて夜が明けるわいな。地是非に/\に是非なくも下地は好きなり御意はよし。詞それでもこゝは人の出入。地奥は謡の聲高砂。詞松根に倚つて腰を摩ればナホス詞アノ謡で思付いた。地イザ腰掛でと手を引合ひ打連れて行く。地脇能過ぎて御樂屋に鼓の調太鼓の音。天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公。御機嫌フシなゝめならざりける。地若狭助はかねて待つ師直遲しと御殿の內。奥を覗ふ長袴の紐締めくゝり氣配し。おのれ師直眞二つと刀の鯉口息をつめ。フシ待つとも知らぬ地師直主從遠目に見付け。詞是は/\若狭助殿。さて/\お早い御登城。イヤハヤ我折りました。我等閉口閉口。イヤ閉口序に貴殿に言譯致し。お詫申す事があると。地雨腰くわらりと投出し。詞若狭助殿。改めて申さねばならぬ一通。いつぞや鶴ケ岡で。拙者より申した過言。ヲヽお腹が立つたであらう尤ぢや。がそこをお詫び。その時はどうやらした詞の間違でつい申した。我ら一生の粗忽。武士がコレ手をさげる眞平々々。假令貴殿が物馴れたお人なりやこそ。外

外の狼狽者で見さつしやれ。この師直眞二つこはや〱。ありやうはその節貴殿の後影。手を合して拜みましたアハヽヽ。ア、年寄るとやくたい〱。年に免じて御免々々。是さ〱武士が刀を投出し手を合す。是程に申すのを聞入れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも誤り〱。伴内共々に。地お詫〱と。金が云はする追從とは夢にも知らぬ若狹助。力みし腕も拍子拔け。今更拔くに拔かれもせず。寐刄合せし刀の手前差俯向きし思案顏。小柴の蔭には本藏が。瞬もせず。フシ守り居る。詞ナニ伴内この鹽冶はなぜ遲い。若狹助殿とはきつい違ひ扨々不行儀者。今に於いて面出しせぬ。主が主なれば家老で候とて。諸事に細心のつく奴が一人もない。いざ〱若狹殿御前へお供致そ。サアお立ちなされ。サアササア師直めあやまつてをるぞ。コリヤ妥な粋め粋め。

粋様め。イヤ若狹助最前から。ちと心惡うござる。マア先へ。何とした〱腹痛か。コレサ伴内お背中をお背中を。お藥進じよかな。イヤ〱それ程にもござらぬ。然らば少しの内お寛ぎ。御前の首尾は我等がよいやうに申し上ぐる。伴内一間へ御供申せと地主從寄つてお手車に迷惑ながら若狹助。是はと思へど是非なくも奥の一間へ入りければ。アヽもう樂ぢやと。本藏は。天を拜し地を拜し。フシお次の間に控へ居る。地程もあらさず鹽冶判官。御前へ通る長廊下師直呼掛け遲し遲し。詞何と心得てござる。今日は正七ツ時と。先刻から申渡したではないか。成程遲なはりしは不調法さりながら。御前へ出るはまだ間もあらんと。地袂より文箱取出し。詞最前手前の家來が。貴公へお渡し申しくれよ。則ち奥顏世方より參りしと。地渡せば受取り成程々々。詞イヤ其許の御内方は扨々心懸がござるわ。手前が和歌の道に心を寄するを聞き。添削を頼むとある。地定めてその事ならんと押拔き。詞さなきだに。重きが上のさよ衣。我がつまならぬつまな重ねそ。ハア是は新古今の歌。この古歌に添削とはム、。地ム、と思案の中。我が戀のかなはぬ驗。扨は夫に打明けしと思ふ怒をさあらぬ顏。詞判官殿。この歌御覽じたでござらう。イヤ只今見ました。ム、手前が讀むのを。アヽ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ歌が是ぢや。つまならぬつまな重ねそ。アヽ貞女々々。ア其許はあやかり者。登城も遲なはる筈の事。家にばかりへばり着いてござるによつて。御前の方はお構ひないぢやと。地あてこする雜言過言。あちらの喧嘩の間違とは。判官更に合點ゆかず。むつとせしが押鎮め。詞ハヽヽヽヽ

是は〳〵師直殿には御酒機嫌か。御酒參つたの。イヤ何時飲ました。御酒下されても飲まないでも。勤むる所はきつと勤むる。貴公はなぜ遲かつたの。御酒參つたか。イヤ家にへばりついてござつたか。貴殿より若狹助殿ア、格別勤められます。イヤ又其許の奥方は貞女といひ。御器量と申し。手跡は見事。御自慢なされ。むつとなされな嘘ではないわさ。今日御前にはお取込。手前とても同然。その中へ鼻毛らしい。イヤ是は手前が奥が歌でござる。それ程家が大切なら御出仕無用。總體貴樣のやうな。家にばかり居る者を。井の鮒ぢやといふ譬がある。聞いておかつしやれ。かの鮒めが僅か三尺か四尺に井の中を。天にも地にもないやうに思うて。不斷外を見る事がない。所にかの井がへの釣瓶について上ります。それを川へ放してやると。何が內にばかり居る奴ぢやによつて。喜んで途を失ひ。橋杭で鼻を打つて。即座にびり〳〵〳〵〳〵と死にます。貴樣も丁度鮒と同じ事ハ、、、地フシと出放題。地判官腹に据ゑかね。詞こりやこなた狂氣めさつたか。イヤ氣が狂うたか師直。シヤ此奴。武士を捉へて氣違とは。出頭第一の高師直。ム、すりや今の惡言は本性よな。くどい〳〵。又本性ならどうする。地ヲ、かうすると拔討に。眞向に切付ける眉間の大傷。是はと沈む身の翻し。烏帽子の頭二つに切れ。又切りかけるを拔けつ潜りつ逃げ廻る折ものれ。お次に控へし本藏走出て押留め。詞コレ判官樣御短慮と。地抱きとむる其隙に師直は。舘をさしてこけつ轉びつ逃げ行けば。おのれ師直眞二つ。放せ本藏放しやれとせり合ふ中。舘も俄に騷出し。家中の諸武士大名小名。押へて刀もぎ取るやら。師直を介抱やら上を下へと。三重へ立騷ぐ。地表御門裏御門。兩方打ちたる舘の騷動提灯ひらめく大騷ぎ。早野勘平うろ〳〵眼走り歸つて裏御門。碎けよ破れよと打叩き大音上げ。詞鹽冶判官の御內早野勘平主人の安否心許なしこゝ開けてたべ地早く〳〵とフシ呼ばはつたり。地門內よりも聲高々。詞御用あらば表へ廻れこゝは裏門。成程裏門合點。表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず。喧嘩の樣子は何と何と。喧嘩の次第相濟んだ。出頭の師直樣へ慮外致せし科によつて。鹽冶判官は閉門仰付けられ。網乘物にてたつた今地歸られしと聞くよりハア南無三寶。お屋敷へと走りかゝつてイヤ〳〵〳〵。閉門ならば舘へは猶歸られじと行きつ。戻りつ思案最中。腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿。詞樣子は殘らず聞きました。地こりや何としようどうせうと。スヱテ取付き。歎くを取つ

て突退け。詞エ、めろ〳〵とほえ面。コリヤ勘平が武士は廢つたわやい。地もう是迄と刀の柄コレ待つて下され。詞こりやうろたへてか勘平殿。ヲ、うろたへた。これがうろたへずに居られようか。主人一所懸命の場にも在り合さず剰へ。四人同然の網乗物お屋敷は閉門。その家來は色に耽りお供に外れしと人中へ。兩腰差して出られうか爰を放せマ、、待つて下さんせ。尤ぢや道理ぢやが。その狼狽武士には誰がした。皆私が心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢやと褒めまする。爰をとつくりと聞分けて私が親里へ一先づ來て下さんせ。父樣も母樣も在所でこそあれ頼もしい人。もうかうなつた因果ぢやと思うて女房の云ふ事も。聞いて下され勘平殿と スヱテ わつとばかりに。泣き沈む。地さうぢや尤もそらは新参なれば委細の事はえ知るまい。お家の執權大星由良之助殿。まだ本國より歸られず。歸國を待つてお詫せん。サア 地一時なりとも急がんと身拵へする所へ。地鷺坂伴内家來引連れ駈出て。詞ノリヤア勘平うぬが主人判官師直樣へ慮外を働き。かすり傷負はせし科によつて屋敷は閉門。追付首が飛ぶは知れた事。サア腕廻せ。地連歸つてなぶり切り覺悟ひろげとひしめけば。詞ノリヤアよい所へ鷺坂伴内。汝一羽で食足らねど。勘平が腕の細葱。料理鹽梅食うて見よ。地イヤ物な云はせそ家來ども畏つたと兩方より。捕つたとかかるをまつかせとかいくゞり。兩手に兩腕捻上げはつし。フシはつしと蹴返せば。地代つて切込む切先を刀の鞘にて丁ど受け。廻つて來るを鐺と柄にて仰向にそらし。四人一所に切りかゝるを右と左へ一時に。田樂返しにばた〳〵〳〵と打据ゑられ。皆散々に行く後へ。伴内いらつて切りかくる引放しそつ首握り。大地へどうどもんどり打たせしつかと踏付け。詞サアどうしようと此方の儘。突かうか切らうか 地なぶり殺しと振上ぐる刀にすがつて。詞コレ〳〵其奴殺すとお詫の邪魔。地もうよいわいのと留める間に足の下をばこそ〳〵と。尻に尾のない鷺坂は。命から〴〵逃げて行く。地エ、殘念〻〻さりながら。彼奴をばらさば不忠の不忠。一先づ夫婦が身を隠し時節を。待つて願うて見ん。最早明六ツ東が白む横雲に塒を離れ飛ぶ鴉。かはい〳〵の女夫連道は。急げど後へ引く。主人の安否如何ぞと案じ。行くこそ。三重へ浮世なれ

第　四

地鹽冶判官閉居によつて扇ヶ谷の上屋敷。大竹にて門戸を閉ぢ。家中の外は出

入を留め。ハルフシ事嚴重に見えにける。ハルフシかゝる折にも。花やかにホオクリ奥は。媚く女中の遊び。御臺所顔世御前。お側には大星力彌。殿のお氣を慰めんと。鎌倉山の八重九重色々櫻。花籠に。活けらるる花よりも。フシ生ける人こそ花紅葉。地柳の間の廊下を傳ひ諸士頭原郷右衛門。後に續いて斧九太夫。詞是は〳〵力彌殿早い御出仕。イヤ某も國許より親どもが參る迄。晝夜相詰め罷在る。地それは御奇特千萬と郷右衛門兩手をつき。詞今日殿の御機嫌は。如何お渡り遊ばさるゝと。地中上ぐれば顔世御前。詞ヲヽ二人とも大儀々々。この度は判官様お氣詰りに思召し。お失例も出ようかと案じたとは格別。明暮築山の花盛り御覽じて。御機嫌のよいお顔ばせ。地それ故に自もお慰みに差上げうと。名ある櫻を取寄せて見やる通りの花拵へ。詞ア、如何様にも仰の通り。花は開くものなれば御門も開き。閉門をお赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何がなと存ずれど。かやうな事の思付は。不調法なる郷右衛門。ヤア肝心の事申上げん。今日御上使のお出と承りしが。定めて殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん。何と九太夫殿。さうは思召されぬか。ハヽヽヽコレ郷右衛門殿。この花といふものも。當分人の目を喜ばすばかり。風が吹けば散り失せる。こなたの詞もまつその如く。人の心を喜ばさうとて。武士に似合ぬ。ぬらりくらりと後からはける正月詞。何故と云やれ。この度殿の御越度は。饗應の御役儀を崇りながら。執事たる人に手を負ふせ館を騒がせし科。輕うて流罪。重うて切腹。自體又師直公に。敵對は殿の御不覺と。地聞きもあへず郷右衛門。詞扨は其方殿の流罪切腹を願はるゝか。イヤ願ひは致さねど詞を飾らず眞實を申すのぢや。もとはと云へば郷右衛門殿。こなたの吝嗇しはさから起つた事。金銀をもつて面を撲りめさるれば。かやうな事は出來申さぬと。地己が心に引當てて。欲面打消す郷右衛門。詞人に媚び諂ふは侍ではない武士でないなう力彌殿。地何とさうではあるまいかと。詞の角をなだむる御臺。二人ともに爭ひ無用。詞この度夫の御難儀なさる。元の起りはこの顔世。いつぞや鶴ヶ岡で饗應の折柄。道知らずの師直。主のある自に無體な戀をいひかけ。様々と口說きしが。恥を與へ懲りさせんと。判官様にも知らさず。地歌の點に事よせ。さよ衣の歌を書き恥ぢしめてやつたれば。詞戀のかなはぬ意趣ばらしに判官様に惡口。元來短氣なお生附。地え堪忍なされぬはお道理でないかいのと。語り給へば郷右衛門力彌も共に御主君の。御憤を察し

入り。フシ心外面にあらはせり。地早御上使の御出と玄關廣間ひしめけば。奥へかくと通じさせ。御臺所も座を下り三人出迎ふ間もなく。入來る上使は石堂右馬之丞。師直が昵近藥師寺次郎左衞門。役目ならば罷り通ると會釋もなく上座につけば。一間の内より鹽冶判官しづ〳〵と立出で。詞是は〳〵御上使とあつて石堂殿御苦勞千萬。まづお盃の用意せよ。地御上使の趣承り。いづれもと一獻酌み。積欝をはらし申さん。詞ヲヽそれようござろ。藥師寺もお相致さう。したが上意を聞かれたら酒も咽へ通るまいと。地嘲笑へば右馬之丞。詞我々今日。上使に立つたる趣。具に承知せられよと。地懐中より御書取出し。押開けば判官もスヱテ席を。改め承るその文言。この度鹽冶判官高定。私の宿意を以て執事高師直を刄傷に及び。館を騒がせし科によつて。國郡を沒收し。切腹申付くるものなり。地聞くよりはつと驚く御臺。並居る諸士も顏見合せフシあきれはてたるばかりなり。地判官動ずる氣色もなく。御上意の趣委細承知仕る。詞扨是からは各の御苦勞休めに。打寛いで御酒一つ。コレ〳〵判官だまり召され。其方が今度の科は。縛り首にも及ぶべき處。お上の慈悲をもつて。切腹仰付けらるゝを有難く思ひ。早速用意もすべき筈殊に以て切腹には定つた法のあるもの。それに何ぞや。當世樣の長羽織。ぞべら〳〵としらるゝは。酒興か但し血迷うたか。詞上使に立つたる石堂殿。この藥師寺へ不作法と。きめつくればにつこと笑ひ。詞この判官酒興もせず血迷ひもせぬ。今日上使と聞くよりも。かくあらんと期したる故。豫ての覺悟見すべしと。地大小羽織を脱ぎすつれば。下には用意の白小袖無紋の上下死裝束。皆々是はと驚けば。藥師寺は言句も出でず。フシ顏ふくらして閉口す。地右馬之丞さし寄つて。詞御心底察し入る。即ち拙者檢使の役。心靜に御覺悟。ア御親切忝し。刄傷に及びしより。かくあらんとは豫ての覺悟。恨むらくは舘にて。加古川本藏に抱留められ。地師直を討洩らし無念骨髓に徹つて忘れがたし。詞湊川にて楠正成。最期の一念によつて生を引くと云ひし如く。生きかはり死にかはり。欝憤をはらさんと。地怒の聲と諸共に。お次の襖打叩き。詞一家中の者ども。殿の御存生に御尊顏を拜したき願。御前へ推參致さんや。郷右衞門殿お取次と。地家中の聲々聞ゆれば。郷右衞門御前に向ひ。詞如何はからひ候はん。フウ尤なる願なれども。由良之助が參る迄無用〳〵。地はつとばかりに一間に向ひ。詞聞かるゝ通りの御意なれば。一人も叶はぬ〳〵

地諸士は返す詞もなく一間もひつそと。フシしづまりける。地力彌御意をうけたまはり。かねて用意の腹切刀御前に直すれば。心靜に肩衣取りのけ座をくつろげ。詞コレ〳〵御檢使。御見屆け下さるべしと。地三方引寄せ九寸五分押戴き。詞力彌力彌。ハア。由良之助は。未だ參上仕りませぬ。フウ。エ、存生に對面せで殘念。ハテ殘り多やな。是非に及ばぬ是迄と。地刀逆手に取直し。弓手に突立て引廻す。御臺二目と見もやらず口に稱名目に涙。廊下の襖踏開き駈込む大星由良之助。主君の有樣見るよりも。はつとばかりにどうと伏す。後に續いて千崎矢間。その外の一家中 フシばら〳〵と駈入つたり。詞ヤレ由良之助待兼ねたわやい。ハア御存生の御尊顏を拜し。身に取つて何程か。ヲ、我も滿足々々。定めて仔細聞いたであろ。エ、無念口惜しいわやい。



委細承知仕る。この期に及び。申上ぐる詞もなし。只御最期の尋常を。願はしう存じまする。地ヲ、云ふにや及ぶと諸手をかけ。ぐつ〳〵と引廻し。苦しき息をほつとつき。詞由良之助。この九寸五分は汝へ形見。我が欝憤を晴させよと。地切先にて氣管はね切り。血刀投出しうつぶせに。どうと轉び息絶ゆれば。御臺を始め並居る家中。眼を閉ぢ息をつめ齒を食ひしばり控ゆれば。由良之助にじり寄り刀取上げ押戴き。血に染まる切先を打守り打守り拳を握り。無念の涙はらはら

假名手本忠臣藏

はら。判官の末期の一句五臓六腑にしみ渡り。扨こそ末世に大星が。忠臣義心の名を上げし フシ根ざしは。かくと知られける。地藥師寺はつつ立上り。詞判官がくたばるからは早々屋敷を明渡せ。イヤさは云はれな藥師寺。いはゞ一國一城の主。ヤ方々。葬送の儀式取賄ひ。心靜に立退かれよ。この石堂は檢使の役目。切腹を見屆けたれば。この旨を言上せん。ナヽ由良之助殿。御愁傷察し入る。地用事あらば承らん必ず心おかれなと。並居る諸士に目禮し。フシ悠々として立歸る。詞この藥師寺も死骸片附けるその間。奥の間で休息せう。地家來參れと呼出し。詞家中共がらくた道具門前へ投り出せ。判官が所持の道具。俄浪人にまけられなと。地館の四方をねめ廻し。フシ一間の内へ入りにけり。地御臺はわつと聲を上げ。扨もく武士の身の上程悲しいもののあるべきか。今夫の御最期に云ひたい事は山山なれど。未練なと御上使のさげしみが恥かしさに。今まで怺へてゐたわいの。いとほしの有様やと。亡骸に抱付き フシ前後も。分かず泣給ふ。詞力彌參れ。亡君の御骸を。御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良之助も後より追付き。葬送の儀式取行はん。堀矢間小寺間。その外の一家中道の警護致されよと。地詞の下よりお乘物手舁に舁き据ゑ戸を開き。皆立寄つて御死骸 フシ涙と共に。乘せ奉りしづくと舁き上ぐれば。御臺所は正體なく歎き給ふを慰めて。諸士の面々我一と。お乘物に引添ひ引添ひ オクリ 御菩提所へと急ぎ行く。地人々御骸見送つて。座につけば斧九太夫。詞何と大星殿。其許は御親父八幡六郎殿よりの家老職。拙者とてもその右には坐せども今日より浪人となり。妻子をはごくむ術なし。殿の貯へ置き給ふ御用金を配分し。早屋敷を渡さずば。藥師寺殿へ無禮ならん。イヤ千崎が存ずるには。さす敵の高師直。存命なるが我々が鬱憤。討手を引受け館を枕として。アヽこれこれ。討死とは惡い了簡。親九太夫の申さるゝ通り屋敷を渡して金銀を分けて取るが上分別と。地評議の中に由良之助。默然として居たりしが。詞只今の評定に。彌五郎殿の所存と。我が胸中一致せり。いはゞ亡君の御爲に。我我殉死すべき筈むざくと腹切らうより。足利の討手を待受け。討死と一決せり。ヤア何と云はるゝ。よい評定かと思へば。浪人の痩顔はり。足利殿へ弓引かう。アヽそれは無分別。マアこの九太夫合點がゆかぬ。ヲヽ親父殿さうぢやさうぢや。この定九郎もその意を得ぬ。地この談合には省いて貰はう。長居は無益お歸りなされ。詞それよかろ。地いづれもは

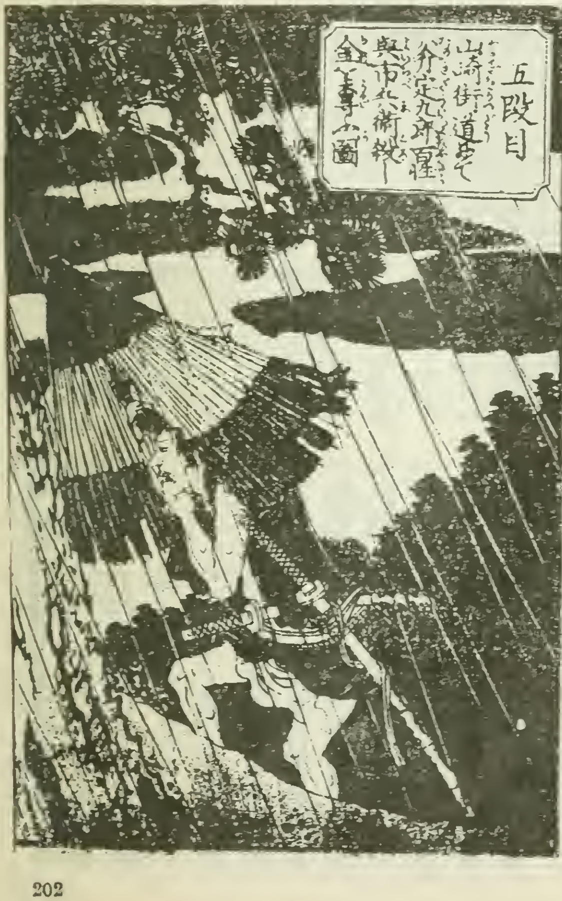
ゆるりと居めされと。フシ親子打連れ立歸る。地ヤア欲面の斧親子。討死を聞きおぢして逃歸つたる臆病者。彼奴構はずと大星殿。討手を待つ御用意御用意。詞アア騒がれな彌五郎。足利殿へなに恨あつて弓引くべき。彼等親子の心底を探らんための計略。藥師寺に屋敷を渡し。思ひ〳〵に當所を立退き。地都山科にて再會し。胸中殘らず打明けて。評議をしめんと云ふ間もあらせず。次郎左衛門一間を立出で。詞ハテべん〳〵と長詮議。死骸片付けたら。早く屋敷を明渡せと。地いがみかゝれば郷右衛門。地ア、成程お待兼。亡君所持のお道具。その外の武具馬具迄よく〳〵改め受取られよ。サア由良之助殿退散あれ。地ヲヽ心得たりとしづ〳〵と立上り。詞御先祖代々我々も代々。地晝夜詰めたる舘の中。今日を限りと思ふにぞ。名殘り惜しげに見返り。見返り御門外へ立出づれば。地御骸送り奉り。力彌矢間堀小寺追々に馳歸り。詞扨は屋敷をお渡しあつたか。この上は直義の。地討手を引受け討死せんと。はやり立てば由良之助。詞イヤ〳〵今死すべき所にあらず。是を見よ方々と。地亡君のお形見を抜放し。詞この切先には。我が君の御血をあやし。御無念の魂を殘されし九寸五分。この刀にて師直が。首かき切つて本意を遂げん。地げに尤と諸武士の勇。屋敷の內には藥師寺次郎。門の貫の木はつしと立てさせ。詞師直公の罰があたり。さてよいざま〳〵と。地家來一度に手をたゝき。どつと笑ふ。フシ鬨の聲。地あれ聞かれよと若侍取つて返すを由良之助。詞先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか。地はつと一度に立出でしが。思へば無念と舘のコハリ內を。振返り振返り。はつたと睨んで。三重へ立出づる

第五

地鷹は死しても穗はつまずと譬に洩れず入る月や。日數も積る山崎の邊に近き侘住居。早野勘平若氣の誤り世渡る元手細道傳ひ。この山中の鹿猿を撃つて商ふ種ケ島も。用意に持つや秋まで鐵砲雨のしだらでん。誰が水無月と白雨の。霽間をフシこゝに松の蔭。地向ふより來る小提燈是も昔は弓張オクリの灯。消さじ濡らさじと。合羽の裾に大雨を凌いで急ぐ夜の道。詞イヤ申し〳〵。卒爾ながら火を地一つ御無心と立寄れば。旅人もちやくと身構へし。詞ム、この街道は不用心と知つて合點の一人旅。見れば飛道具の一口商。地えこそは借さじ出直せと。びくと動かば一討と。フシ眼を配れば。詞イヤア成程。盜賊とのお目違ひ御尤も千萬。我等この邊の狩人なるが。先程の大雨にほくちも

しめり難儀至極。サア鉄砲をそれへお渡し申す。地自身に火をつけ御借しと。他事なき詞顔付を。きつと眺めて。詞和殿は早野勘平ならずや。さ云ふ貴殿は千崎彌五郎。是は堅固で御無事でと。地絶えて久しき對面に。主人のお家沒落の。胸に忘れぬ無念の思スヱテ互に。拳を握り合ふ。地勘平はさしうつむき。暫し詞もなかりしが。詞エ、面目もなき我が身の上。古朋輩の貴殿にも。地顔もえ上げぬこの仕合。武士の冥加に盡きたるか。詞殿判官公のお供先。お家の大事起りしは是非に及ばぬ我が不運。その場にも在合はさず。お屋敷へは歸られず所詮。時節を待つて御詫と。思の外の御切腹南無三寳。皆師直めがなす業。せめて冥途の御供と刀に手はかけたれど。地何を手柄に御供と。どの面さげて言譯せんと心を碎く折柄。詞密に様子承れば。由良殿御親子郷右衛門殿を始めとして。故殿の鬱憤散ぜんため。寄々の思召ありとの噂。我等とても御勘當の身と云ふではなし。手掛り求め由良殿に對面とげ。御企の連判に御加へ下さらば地生々世々の面目。貴殿に逢ふも優曇華の。花を咲かせて侍の。一分立てて給はれかし。古朋輩の誼武士の情。お頼み申すと兩手をつき。先非を悔ひし男泣フシ理。せめて不便なる。地彌五郎も朋輩の悔み道理とは思へども。大事をむざと明かさじと。詞コレサコレサ勘平。はてさて。お手前は身の言譯にとりまぜて。お企のイヤ連判などとは何の謠言。左様の噂かつてなし。某は由良殿より郷右衛門殿へ急の使。先君の御廟所へ。御石碑を建立せんとの催し。然し我我とても浪人の身の上。是こそ鹽冶判官殿の御石塔と。末の世までも人の口の端にかゝるもの故。御用金を集むるそのお使。先君の御恩を思ふ人を選り出すため。わざと大事を明かされず。先君の御恩を思はゞナゝ合點か合點かと。地石碑になぞらへ大星の。企を餘所に知らせしは。フシげに朋輩の誼なり。詞ハア、忝い彌五郎殿。成程石碑と云立て。御用金の御拵へある事とつくに承り及び。某も何卒して用金を調へ。それを力に御詫と心は千千に碎けども彌五郎殿。恥づかしや主人の御罰で今この態。誰にかうと便もなし。されどもかるが親。與市兵衛と申すは賴もしい百姓。我々夫婦が判官公へ。不奉公を悔み歎き。何とぞして元の武士に立返れと。地翁媼共に歎き悲しむ。是幸ひ御邊に逢ひし物語。段々の仔細を語り。元の武士に立返ると言ひ聞かさば。僅かの田地も我が子のため何しに否は得も云はじ。御用金を手掛りに郷右衛門殿迄お取次。一入頼み存ずると餘儀なき詞にム

ム成程。詞然らば是より郷右衛門殿迄右の譯をも話し。由良殿へ願うて見ん。明明日必ずきつと御返事。則ち郷右衛門殿の旅宿の所書と。地渡せば取つて押戴き。重々のお世話忝し。地何卒急に御用金を拵へ。明々日お目にかゝらん。某が在所お尋ねあらば。この山崎の渡場を左へ取り。與市兵衛とお尋ねあれば。早速相知れ申すべし。夜更けぬ中に早くもお出で。コレこの行先はなほ物騒。隨分ぬかるな合點／＼。石碑成就する迄は。蚤にも食はさぬこの身體。御邊も堅固で。御用金の便を待つぞ。地さらばさらばと兩方へ。オクリ 立別れてぞ急ぎ行く。地又も降り來る雨の足人の足音とぼ／＼と。道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も。すぐなる心堅親父一筋道の後から。詞オ、イオ、イ親父殿。地よい道連と呼ばはつて。斧九太夫が伜定九郎。身の置所白浪や。



此街道の夜働。だんびら物を落し差し。詞先刻にから呼ぶ聲が。貴様の耳へははひらぬか。この物騒な街道を。よい年をして大膽々々。地連にならうと向うへ廻り。ぎょろつく眼玉ぎょつとせしが流石は老人。詞是は／＼お若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして。一人旅はいやなれど。サア何處の浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰り。この中から一家中の在所へ行たれば。是も鐚牛錢才覺ならず。すご／＼一人戻る道と。地半分云はさずヤイやかましい。詞ありやうが

年貢の納まらぬ相談を聞きには來ぬ。コレ親父殿。俺が云ふ事とくと聞かしやれや。マアかうぢやわ。こなたの懷に金なら四五十兩のかさ。縞の財布にあるのを。とつくりと見付けて來たのぢや。借して下され。男が手を合す。定めて貴樣も何ぞつまらぬ事か。子が難儀に及ぶによつてと云ふやうな。ある格な事ぢやあろけれど。俺が見込んだらハテしよ事がないと諦めて。貸して下され 地下されと懷へ手を差入れ引ずり出す縞の財布。詞アヽ申しそれは。それはとは。是程爰にあるものと。地引つたくる手に縋り付き。詞イエ〳〵この財布は後の在所で草鞋買ふとて端錢を出しましたが。後に殘るは晝食の握飯。霍亂せんやうにと娘が呉れた和中散。反魂丹でござります。お赦しなされて下さりませと。地ひつたくり逃行く先へ立廻り。詞エヽ聞分けのない。むごい料理するが嫌さに。手ぬるう云へばつけ上る。サアその金爰へまき出せ。遲いとたつた一討と。地二尺八寸拜み討ちなう悲しやと云ふ間もなくから竹割りと切付ける。刀の廻りか手の廻りか。はづれる拔身を兩手にしつかとつかみ付き。詞どうでもこなた殺さつしやるの。オヽ知れた事。金のあるを見てする仕事。小言はかずと地くたばれと。肝先へ差付くれば。詞マヽヽマア待つて下さりませハア是非に及ばぬ。成程々々。是は金でござります。けれどもこの金は。私がたつ



た一人の娘がござる。その娘が命にも代へぬ。大事の男がござりまする。その男のために要る金。ちと譯ある事故浪人して居まする。娘が申しまするは。あのお人の浪人も元は私故。何卒して元の武士にして進ぜたい〳〵と。嬶と私とへ毎宵頼み。ア身貧にはござりまする。どうもしがくのしようもなく。婆と種々談合して。娘にも呑込ませ。婿へは必ず沙汰なしと穩し合せ。ほんに〳〵親子三人が血の流れる金。それをお前に取られて娘はなんとなりませう。コレ拜みます助けて下されませ。お前もお侍の果さうなが。武士は相身互。この金がなければ。娘も婿も人樣に顔が出されぬ。たつた一人の娘に連添ふ婿ぢやもの。不便にござる可愛ござる。了簡してお助けなされて下さりませ。エヽお前は若いによつてまだお子もござるまいが。やんがてお子を持つて御覧じませ。親父が云ひ居つたは尤ぢやと思召して。この場を助けさしやつて下さりませ。マア一里行けば私が在所。金を婿に渡してから殺されましよ。申し〳〵娘が喜ぶ顔見てから死にたうござります。コレ申しア、。あれ。あれ。あれと呼ばはれど後先遠く フシ山彦の谺に。哀催せり。詞オヽ悲しいこつちやわ。まつととこぼえ。ヤイ老耄め。その金で俺が出世すりや。その恵で汝が伜も出世するわやい。人に慈悲すりや惡うは報はぬ。ア、可愛いやと。地ぐつと突く。うんと手足の七轉八倒。のたくり廻るを脚にて蹴返し。詞オヽいとしや。痛かろけれども俺に恨はないぞや。金がありやこそ殺せ。金がなけりやならんのいの。金が敵ぢやいとしぼや。南無阿彌陀。南無妙法蓮華經。地どちらへなりと失せをろと。刀も抜かぬ芋刺し抉り。草葉も朱に置く露や。年も六十四苦八苦 フシあへなく息は絶えにけり。地しすましたりと件の財布。くらがり耳の摑みよみ。詞ヒヤ五十兩。エヽ久振りの御對面。地忝しと首にひつかけ死骸をすぐに谷底へ。はね込み蹴込み泥まぶれ。はねは我が身にかゝるとも知らず立つたる後より。逸散に來る手負猪。是はならぬと身をよぎる。駈來る猪は一文字。フシ木の根岩角踏立て。蹴立て鼻いからして泥もナホス草木も一まくりに飛行けば。あはやと見送る定九郎が。脊骨へかけてどつさりと肋へ抜ける二つ玉。うんともぎやつとも云ふ間もなく。ふすぼり返りて死したるは フシ心地よくこそ見えにけれ。地猪撃留めしと勘平は。鐵砲提げ此處彼處探り廻りて扨こそと。引立つれば猪にはあらず。詞ヤア〳〵こりや人ぢや南無三寶。地し損じたりと思へど暗き眞の闇。誰人なるぞと問はれも

せず。まだ息あらんと抱起せば手にあたる金財布。掴んで見れば四五十兩。天の與へと押戴き押戴き。猪より先へ逸散に飛ぶが如くに。三重へ急ぎける。

第　六

三下り歌みさき踊がしゆんだる程に。親父出て見やばゝんつ。ばゝん連れて親父出て見やばゝんつ。ナホス麥かつ　フシ音の在郷歌。地所も名に負ふ山崎の小百姓。與市兵衛が埴生の住家。今は早野勘平が。浪々の身の隱れ里。女房おかるはスヱテ寢亂れし。髮取上げんと櫛箱の。あかつきかけて戻らぬ夫。待つ間もとけし投島田。ゆふに云はれぬ身の上を誰にか。黄楊の水櫛に。髮の色艶梳き返し。品よくしやんと結ひ立てしは　フシ在所に惜しき姿なり。詞オゝ娘髮結ひやつたか。美しうようできた。イヤもう在所はどこもかも麥秋時分で忙しい。今も藪際で若い衆が麥かつ歌に。親父出て見やばゝんつれてと唄ふを聞き。親父殿の遅いが氣にかゝり。在口迄行たれどようなら影も形も見えぬ。サイナこりやまあどうして遅い事ぢや。わし一走り見て來やんしよ。イヤなう若い女の一人歩くは入らぬ事。殊にそなたは少さい時から。在所を歩く事さへ嫌ひで。鹽冶樣へ御奉公にやつたれど。どうでも草深い所に縁があるやら戻りやつたが。勘平殿と二人居やればおとましい顔も出ぬ。オゝかゝ樣のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの。在所はおろか貧しい暮しでも苦にならぬ。やんがて盆になつてと樣出て見やかゝんつ。地かゝん連れてといふ唄の通り。詞勘平殿とたつた二人。踊見に行きやんしよ。地お前も若い時覺えがあろと指合くらぬぐはら娘。フシ氣もわさ〳〵と見えにける。詞なんぼそのやうに面白うをかしう云やつても。心の中はの。イエ〳〵すんでござんす。主の爲に祇園町へ。勤奉公に行くは豫て覺悟の前なれど。地年寄つて父樣の世話やかしやんすが。そりや云やんな。詞小身者なれど兄も鹽冶樣の御家來なれば。外の世話するやうにもないと。地親子話のフシ中道傳ひ。地駕籠を舁かせて急ぎ來るは祇園町の一文字屋。此處ぢや此處ぢやと門口から。與市兵衛殿内にかと云ひつゝはひれば。地是はまあ〳〵遠い所を。ソレ娘煙草盆。地お茶上げましやと親子して。槌でおいへを白人屋の亭主。扨昨夜はこゝの親仁殿もいかい大儀。別條なう戻られましたか。エゝ扨は親父殿と連立つて來はなされませぬか。是はしたり。お前へ行てから今において。ヤア戻られぬか。ハテめんえうな。ハア若し稲荷前をぶらついてかの玉殿につまゝりや

せぬかいの。コレこの中此處へ見に來て極めた通り。お娘の年も丸五年限。給銀は金百兩。さらりと手を打つた。此處の親父が云はるゝには。今夜中に渡さねばならぬ金あれば。今晩證文を認め。百兩の金子お借しなされて下されと。涙をこぼしての賴み故。證文の上で半金渡し。殘りは奉公人と引替の契約。何がその五十兩渡すと喜んで戴き。ほた〳〵云うて戻られたはもう四ツでもあらうかい。夜道をひとり金持つて行かぬものと留めても聞かず戻られたが。但しは道にイヱ〳〵寄らしやる所はなう母樣。無いとも無いとも。殊に一時も早うそなたやわしに金見せて。喜ばさうとていきせきと戻らしやる筈ぢやに合點がいかぬ。イヤこれ合點のいくいかぬはそちの穿鑿。こちはさがりの金渡して。奉公人連れて往のと。懷より金取出し跡金の五十兩。是で都合百兩。地サア渡す受取らしやれ。お前それでも親父殿の戻られぬ中はなうかる。わがみはやられぬ。ハテぐづ〳〵と埒の明かぬ。コレぐつともすつとも云はれぬ與市兵衛の印形。證文がもの云ふ。今日から金で買切つた身體一日違へばれこづつ違ふ。地どうでかうせざすむまいと手を取つて引立つる。マア〳〵待つてと取付く母親突退けはね退け。無體に駕籠へ押込み押込み舁き上ぐる門の口。鐵砲に蓑笠打掛け戻りかゝつて見る勘平。つか〳〵と內に入り。詞駕籠の中なは女房どもこりやマア何處へ。ヲヽ勘平殿よい所へよう戻つて下さつたと。地母の喜



びその意を得ず。詞どうでも深い譯がある。母じや人女房ども。地様子聞かうとおいへの眞中どつかと坐れば文字の亭主。詞オウ扨はこなたが奉公人の御亭ぢやの。たとへ夫でも何でも。號の夫などと脇より違亂妨げ申す者無之候と。親父の印形あるからはこちには構はぬ。早う奉公人を受取らう。オヽ婿殿合點がいくまい。かねてこなたに金の要る樣子娘の話で聞いた故。地どうぞ調へて進ぜたいと。云うたばかりで一錢のあてもなし。詞そこで親父殿の云はしやるには。ひよつとこなたの氣に女房賣つて金調ようと。よもや思うてではあるまいけれど。もし兩親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの與市兵衛が婿殿に知らさず娘を賣らう。まさかの時は切取りするも侍の習。女房賣つても恥にはならぬ。お主の役に立てる金。調へておましたらまんざら腹も立つまいと。昨日から祇園町へ折極めに行て今に戻らしやれぬ故。親子案じて居る中へ親方殿が見えて。昨夜親父殿に半金渡し。跡金の五十兩と引替に娘を連れて行なうと云うてなれど。親父殿に逢うての上と譯を云うても聞入れず。今連れていなしやる處どうせうぞ勘平殿。是は〳〵まづ以つて舅殿の心遣ひ添い。したがこちにもちつとよい事があれどもそれはおつて。親父殿も戻られぬに女房どもは渡されまい。とはなぜに。ハテいはゞ親なり判がかり。尤も昨夜半金の五十兩渡されたでもあらうけれど。イヤこれ京大坂を股に



かけ。女護島程奉公人を抱へる一文字屋。渡さぬ金を渡したと云うてすむものかいの。まだその上にたしかな事があるてや。此處の親父がかの五十兩といふ金を。手拭にぐる〳〵と卷いて懐へ入れらるゝ。そりやあぶない是に入れて首へかけさつしやれと。俺が着てゐるこの單物の縞の切で拵へた金財布貸したれば。やんがて首にかけて戻られうヤア何と。こなたが着てゐるこの縞の金財布か。ヲヽてや。あのこの縞でや。何とたしかな證據であらうが。地聞くよりはつと勘平が肝先にひしとこたへ。傍あたりに目を配り袂の財布見合せば。寸分違はぬ糸入り縞南無三寶。扨は昨夜鐵砲で撃殺したは舅であつたか。ハアはつと我が胸板を二つ玉で撃ちぬかるゝよりせつなき思ひ。とは知らずして女房。詞コレこちの人そは〳〵せずと。やるものかやらぬものか。分別して下さんせ。オヽ成程。ハテもうあのやうに確に云はるゝからは行きやらずばなるまいか。アノ父様に逢はいでもかえ。イヤ〳〵親父殿にも今朝一寸逢つたが戻りは知れまい。フウそりや父様に逢つてかえ。地それならさうと云ひもせで母様にもわしにも。案じさしてばつかりと云ふに文字も闇に乘つて。詞七度尋ねて人を疑へぢや。親父の在所知れたのでそつちもこつちも心がよい。まだこの上にも四の五のあらばいや共にでんど沙汰。マア〳〵さらりとすんでめでたい。お袋も御亭も六條參りしてちと寄らしやれ。サア〳〵駕籠に早く乘りや。アイ〳〵これ勘平殿もうあつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達。どうでこな様のみんな世話。取分けて父様はきつい持病。氣をつけて下さんせと。地親の死目を露知らず。頼む不便さいぢらしさ。いつそ打明けありの儘話さんにも他人ありとスヱテ心を。痛め耐へ居る。詞ヲヽ婿殿。夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど。そなたに未練な氣も出よかと思うての事であらう。イエ〳〵なんぼ別れても。主の爲に身を賣れば悲しうも何ともない。わしや勇んで行く母様。したが父様に逢はずに行くのが。ヲヽそれも戻らしやつたらつい逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬやう灸すゑて。息災な顔見せに來てたも。鼻紙扇もなけりや不自由。何にもよいか。どばついて怪我しやんなと。地駕籠に乘る迄心をつけさらばや。さらば。何の因果で人並な娘を持ち。この悲しい目を見る事ぢやと。歯を食ひしばり泣きければ娘は駕籠にしがみつき。泣くを知らさじ聞かさじと聲をも。立てずむせかへる。地情なくも駕籠舁上げフシ道を早めて急ぎ行く。地母は後を見送り見送り。アヽよしない事云う

て娘もさぞ悲しかろ。詞ヲヽ、こな人わいの。親の身でさへ思切りがよいに。女房の事ぐづ〳〵思うて。煩うて下さんな。この親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいなう。こなた逢つたと云はしやつたの。アア成程。そりやマアどこで逢はしやつて。どこへ別れていかしやつた。されば別れたその所は。鳥羽か伏見か淀竹田と。地口から出次第めつぽふ彌八。種ケ島の六狸の角兵衛。所の狩人三人連。親父の死骸に簑打着せて戸板に乗せ。どや〳〵と内に入り。詞夜山しまうて戻りがけこゝの親父殿が殺されて居られた故。狩人仲間が連れて來たと。地聞くよりはつと驚く母。何者の所爲。コレ婿殿殺した奴は何者ぢや敵をとつて下されなう。詞コレ親父殿〳〵と。地呼べど叫へどフシ其甲斐も泣くより。外の事ぞなき。地狩人共口々に。詞ヲヽ、お袋悲しかろ。代官所へ願うて詮議して貰はしやれ。地笑止々々と打連れてフシ皆々我が家へ立歸るフシ母は涙の。隙よりも勘平が傍へ差寄つて。詞コレ婿殿。よもや〳〵〳〵とは思へども合點がいかぬ。なんぼ以前が武士ぢやとて。舅の死目見やしやつたら。びつくりもしやる筈。こなた道で逢つた時。金受取りはさつしやれぬか。親父殿が何と云はれた。サア云はつしやれ。サア何と。どうも返事があるまいがの。ない證據はコレ。地こゝにと勘平が懐へ手を差入れて引出すは。先刻にちらりと見ておいたこの財布。詞コレ血のついてあるからは。こなたが親父を殺したの。イヤそれは。それはとは。エヽ、わごりよはなう。隱されぬ天道様が明らかな。親父殿を殺して取つた。その金にや誰にやる金ぢや。ムウ聞えた身貧な舅、娘を賣つたその金を。中で半分くすねておいて。皆やるまいかと思うて。コリヤ殺して取つたのぢやな。今といふ今迄も。律氣な人ぢやと思うて。欺されたが腹が立つわいやい。エヽ、こゝな人でなし。あんまり呆れて涙さへ出ぬわいやい。地なういとしや與市兵衛殿。畜生のやうな婿とは知らず。どうぞ元の侍にしてやりたいと。年寄つて夜も寢ずに京三界を駈歩き。珍財を擲つて世話さしやつたも。却つてこなたの身の仇となつたるか。詞飼ひかふ犬に手を食はるゝと。ようも〳〵このやうにむごたらしう殺された事ぢやまで。コリヤここな鬼よ蛇よ。父様をかへせ。親父殿を生けて戻せやいと。地遠慮會釋もあら男の。髻をつかんで引寄せ〳〵叩き付け。ずた〳〵に切りさいなんだとて是で何の腹が癒よと。恨の數々くどきたてスエテかつぱと伏して。泣居たる。地身の誤りに勘平も。五體に熱湯の汗を流し。疊に喰

付き天罰と。フシ思ひ知つたる折こそあれ。地深編笠の侍二人早野勘平在宿をしめさるか。原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしとおとなへば。折惡けれども勘平は。腰ふさぎ脇挾んで出迎ひ。詞コレハ〳〵御兩所共に。見苦しき埴生へ御出忝しと。頭を下ぐれば郷右衛門。詞見れば家内に取込みもあるさうな。イヤもう些細な内證事。お構ひなくともいざ先づあれへ。地然らば左様に致さんとずつと通り座に着けば。二人が前に兩手をつき。詞この度殿の御大事に外るゝは。拙者が重々の誤り。申開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り。亡君の御年忌。諸家中諸共相勤むるやうに御兩所の御執成地偏に頼み奉るとフシ身をへり下り述べければ。地郷右衛門取り敢ず。詞先づ以つて其方貯へなき浪人の身として。多くの金子御石碑料として調達せられし故。由良之助殿甚だ感じ入られしが。石碑を營むは亡君の御菩提。殿に不忠不義をせし其方の金子を以つて。御石碑料に用ひられんは。御尊靈の御心にも叶ふまじとあつて。金子は封の儘相戻さると。地詞の中より彌五郎懷中より金取出し。勘平が前にさし置けば。はつとばかりに氣も轉倒母は涙と諸共に。詞コリヤ爰な惡人づら。今といふ今親の罰思知つたか。皆様も聞いて下され。親父殿が年寄つて後生の事は思はず婿殿の爲に娘を賣り。金調へて戻らしやるを待伏して。あのやうに殺して取つた金ぢやもの。天道様がなくば知らず。なんで御用に立つものぞ。地親殺しのいき盗人に。罰をあてて下されぬは。神や佛も聞えぬ。詞あの不孝者お前方の手にかけて。嬲り殺しにして下され。地わしや腹が立つわいのと。スヱテ身を投げ。伏して泣居たる。地聞くに驚く兩人刀押取り。弓手馬手に詰めかけ〳〵。彌五郎聲を荒らげ。詞ヤイ勘平。非義非道の金取つて。身の科の詫せよとは云はぬぞよ。わがやうな人非人武士の道は耳に入るまい。親同然の舅を殺し金を盗んだ重罪人は。大身槍の田樂ざし。拙者が手料理振舞はんと。地はつたと睨めば郷右衛門。詞渇しても盗泉の水を飮まずとは義者の訓誡。舅を殺し取つたる金。亡君の御用金に相成るべきか。生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察あつて。つき戻されたる由良之助の眼力天晴々々。さりながら。ハア情なきはこの事世上に流布あつて。鹽冶判官の家來早野勘平。非義非道を行ひしと言はば。汝ばかりが恥ならず。亡君の御恥辱と知らざるかうつけ者。左程の事の辨なき汝にてはなかりしが。いかなる天魔が魅入れしと。地するどき眼に涙を浮かめ事をわけ理を責むれ

ば。堪りかねて勘平。諸肌押脱ぎ脇差を。
抜くより早く腹にぐつと突立て。詞ア、
いづれもの手前面目もなき仕合。拙者が
望み叶はぬ時は切腹と豫ての覺悟。我舅
を殺せし事亡君の御恥辱とあれば一通り
申開かん。兩人ともに聞いてたべ。夜前
彌五郎殿の御目にかゝり。別れて歸る暗
まぎれ山越す猪に出合ひ。二ツ玉にて撃
ちとめ。駈寄つて探り見れば。猪にはあ
らで旅人。南無三寶過つたり。藥はなき
かと懷中を探し見れば。財布に入つたる
この金。道ならぬ事なれども天より我に
與ふる金と。直ぐに馳せ行き彌五郎殿に
かの金を渡し。立歸つて樣子を聞けば。
撃ち止めたるは我が舅。金は女房を賣つ
た金。地かほど迄する事なす事。鵤の嘴
ほど違ふといふも。武運に盡きたる勘平
が。身の成行推量あれとスヱテ血走る眼に
無念の涙。地仔細を聞くより彌五郎ずん

ど立上り。死骸引上げ打返しムウ〳〵と
疵口改め。詞郷右衛門殿これ見られよ。
鐵砲疵に似たれども。是は刀で抉つた疵。
エ、勘平早まりしと。地云ふに手負も見
てびつくり。フシ母も驚くばかりなり。地
郷右衛門心づき。詞イヤコレ千崎殿。ア
ア是にて思ひ當つたり。御自分も見られ
し通り。是へ來る道端に鐵砲受けたる旅
人の死骸。立寄り見れば斧定九郎。强慾
な親九太夫さへ。見限つて勘當したる惡
黨者。身のたゝずみなき故に。山賊する
と聞きたるが疑ひもなく勘平が。舅を討
つたは彼奴が業ヱ、そんなりや。あの親
父殿を殺したは。外の者でござりますか
え。ハアはつと。地母は手負に縋り。詞コ
レ手を合して拜みます。年寄の愚痴な心
から恨言うたは皆誤り。地恢へて下され
勘平殿。必ず死んで下さるなと。泣き詫
ぶれば顏ふり上げ。詞只今母の疑ひも。

我が惡名も晴れたれば。是を冥途の思出
とし。後より追付き舅殿。死出三途を伴
はんと。地突込む刀引廻せばア、暫く暫
く。詞思はずも其方が舅の敵討つたるは。
未だ武運に盡きざる所。地弓矢神の御惠
にて。一功立てたる勘平。息のある中鄕
右衛門が密に見する物ありと。地懷中よ
り一卷を取出し。さら〳〵と押開き。詞
この度亡君の敵。高師直を討取らんと神
文を取りかはし。一味徒黨の連判かくの
如しと。地讀みも終らず苦痛の勘平。そ
の姓名は誰々なるぞや。詞徒黨の人數は
四十五人。汝が心底見屆けたれば。其方
を差加へ一味の義士四十六人。是を冥途
の土產にせよと。地懷中の矢立取出し姓
名を書記し。詞勘平血判地心得たりと腹
十文字にかき切り。臟腑を摑んでしつか
と押し。詞サア血判仕つた。ア、忝や有
難や。我が望み達したり。母人歎いて下

さるな。舅の最期も女房の奉公も。反古にはならぬこの金。一味徒黨の御用金と。地 云ふに母も涙ながら。財布と共に二包二人が前に差出し。詞 勘平殿の魂の入つたこの財布。地 婿殿ぢやと思うて。敵討の御供にフシ 連れてござつて下さりませ。詞 ヲヽ成程尤なりと郷右衛門金取納め。地 思へば思へばこの金は縞の財布の紫摩黄金佛果を得よと云ひければ。詞 アヽ佛果とは穢らはし死なぬ／＼。魂魄この土に留つて。敵討のお供すると。地 云ふ聲もはや四苦八苦。母は涙にかきくれながらナウ勘平殿。この事を娘に知らし。せめて死目に逢はしてやりたい。詞 イヤ／＼親の最期は格別。勘平が死んだ事必ず知らして下さるな。お主の爲に貢つたる女房。この事聞いて不奉公せば。お主に不忠するも同然。只その儘にさし置かれよ。サア思ひ置く事なしと。地 刀の切先咽にぐつとさし貫き。フシ かつぱと伏して息絶えたり。詞 ヤアもう婿殿は死なしやつた。地 扨も／＼世の中に俺がやうな因果な者が又と一人あらうか。親父殿は死なしやる賴みに思ふ婿を先立て。いとし可愛の娘には生別れ。年寄つたるこの母が一人殘つて是がマア。何と生きてをられうぞ。詞 コレ親父殿與市兵衛殿。地 俺も一緒に連れて行て下されと。取付いては泣叫び。又立上つてコレ婿殿。母も倶にと縋付いては伏沈み。あちらでは泣きこちらでは泣きわつとばかりにどうど伏し。聲をばかりに フシ 歎きしは目もあてられぬ次第なり。地 郷右衛門つつ立ち上り。詞 ヤアこれ／＼老母。歎かるゝは理なれども。勘平が最期の樣子。大星殿に委しく語り。入用金手渡しせば滿足あらん。地 首にかけたるこの金は。婿と舅の七々日。四十九日や五十兩。合せて百兩百ケ日の追善供養跡懇ろに弔はれよさらば／＼。おさらばと見送る涙見返る涙涙の。浪の立返る人も。はかなき三重。

第七

歌 花に遊ばば祇園あたりの色揃へ。東方南方北方西方。彌陀の淨土か塗りに塗りたてぴつかりぴか／＼。光りかゞやく白や藝妓にいかな粋めも。現ぬかして。ぐどんどろつくどろつくや ワイワイノ ワイトサ ナホス 詞 誰そ頼まう。亭主は居ぬか。亭主々々。是はいそがしいわ。どいつ樣ぢや。誰方樣ぢや。エ斧九太樣。御案内とはけうとい／＼。イヤ初めてのお方を同道申した。きつう取込みさうに見えるが。一つ上げます座敷があるか。ござりますとも。今晩はかの由良大盡の御趣向で。名ある色達を掴込み。下座敷はふさがつてござり

ますれど。亭座敷があいてござります。そりや又蜘蛛の巣だらけであらう。又惡口を。イヤサよい年をして。女郎の蜘蛛の巣にかゝるまい用心。コリヤきついわ。下に置かれぬ二階座敷。ソレ灯をともせ仲居ども。お盃お煙草盆と。高い調子にかせかけて奥は騒ぎの太鼓三味。詞ナント伴内殿。由良之助が體御覽じたか。九太夫殿。ありやいつそ氣違ひでござる。段々貴様より御内通あつても。あれ程にあらうとは。主人師直も存ぜず。拙者に罷り上つて見屆け。心得ぬ事あらば。早速に知らせよと申付けましたが。さて〳〵〳〵我もへんしも折れましてござる。忰力彌めは何と致したな。此奴も折節この所へ參り倶に放埓。指合くらゐが不思議の一つ。今晩は底の底を探り見んと心巧を致して參つた。衒々にお話申さう。いざ二階へ。まづ〳〵。然らばかう

お出。三下り歌實は心に。思ひはせいで。あだな惚れた惚れたの口先はいかい。つやではあるわいな。詞彌五郎殿。喜多八殿。是が由良之助殿の遊び茶屋。一力と申すのでござる。コレサ平右衛門。よい時分に呼出さう。勝手に控へておゐやれ。畏りました宜しう頼上げまする。誰ぞちよと頼みたい。アイ〳〵誰方様ぢやえ。イヤ我々は由良殿に用事あつて參つた。奥へ行て云はうには。矢間十太郎。千崎彌五郎。竹森喜多八でござる。此間より節々迎ひの人を遣しますれども。お歸りのなき故。三人連で參りました。ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に。お逢ひなされて下されときつと申してくれ。それはなんとも氣の毒でござんす。由良様は三日以來飲み續け。お逢ひなされてから他愛はあるまい。本性はないぞえ。ハテ扨まあさう云うておくりやれ。

アイ〳〵。彌五郎殿お聞きなされたか。承つて驚入りました。初めの程は敵へ聞かする計略と存じましたが。いかう遊びに實が入りすぎまして。合點が參らぬ。何とこの喜多八が申した通り魂が入替つてござらうがの。いつそ一間へ踏込み。イヤ〳〵とくと面談致した上。成程。然らば是に待ちませう。手の鳴る方へ。手の鳴る方へ。手の鳴る方へ。とらまよ。とらまよ。由良鬼やまたい。由良おにやまたい。捕らまへて酒飲まそ。捕らまへて酒飲まそ。コリヤ捕らまへたわ。サア酒々。銚子持て銚子持て。イヤコレ由良之助殿。矢間十太郎でござる。こりや何となさるゝ。南無三寶しまうた。ヲヽ氣の毒何と榮さん。ふしくたやうなお侍様方。お連様かいな。さあれば。お三人ともこはい顔して。イヤコレ女郎達。我は大星殿へ用事あつて參つた。暫く座

を立つて貰ひたい。そんな事でありそなもの。由良様奥へ行くぞえ。お前も早うお出で。皆様是にえ。由良之助殿。矢間十太郎でござる。竹森喜多八でござる。千崎彌五郎御意得に參つた。お目覺まされませう。是は打揃うてようお出でなされた。何と思うて。鎌倉へ打立つ時候はいつ頃でござるな。さればこそ。大事の事をお尋ねなれ。丹波與作が歌に 〽江戸三界へ行かんして ナホス詞ハ、、、御免候へ他愛々々。三人ヤア酒の醉本性違はず。性根がつかずば三人が。酒の醉を覺さしませうかな。ヤレ聊爾なされまするな。憚りながら平右衛門めが。一言申上げたい儀がござります。暫くお控へ下されませう。由良之助様。寺岡平右衛門めでござります。御機嫌の體を拜しまして。いかばかり大悦に存じ奉ります。フウ寺岡平右衛門とは。エ、何でえすか。前かど北國へお飛脚に行かれた。足の輕い足輕殿か。左様でござります。殿様の御切腹を北國にて承りまして。南無三寶と宙を飛んで歸りまする道にて。お家も召上げられ。一家中は散々と。承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ。御恩は變らぬお主の仇。師直めを一討と鎌倉へ立越え。三ケ月が間非人となつて附狙ひましたれども。敵は用心嚴しく近寄る事も叶ひませず。所詮腹かつさばかんと存じましたが。國許の親の事を思出しまして。すご〳〵歸りました。所に。天道様のお知らせにや。いづれも様方の一味連判の様子承りますると。ヤレ嬉しやありがたやと。取る物も取りあへず。あなた方の旅宿を訪ね。ひたすらお頼み申上げましたれば。でかしたうい奴ちや。お頭へ願うてやろとお詞にすがり。是迄推參仕りました。師直屋敷の。アこれ〳〵。ア其許は足輕ではなうて。大きな口輕ぢやの。何と幇間なされぬか。尤もみたくしも。蚤の頭を斧で割つた程無念なとも存じて。四五十人一味を拵へて見たが。アあじな事の。よう思うて見



れば。仕損じたら此方の首がころり。仕果せたら後で切腹。どちらでも死なねばならぬ。といふは人参飲んで首くゝるやうなもの。殊に其許は五兩に三人扶持の足輕。お腹は立てられな。はつち坊主の報謝米程取つてゐて。命を捨てて敵討しようとは。そりや青海苔貰うた禮に。太太神樂を打つやうなもの。我等知行千五百石。貴樣と比べると。敵の首を斗桝ではかる程取つても釣合はぬ釣合はぬ。所でやめた。ナ聞えたか。とかく浮世は（音頭）かうしたものぢや。ツヽテンツヽテンツツテン。（ナホス詞）なぞと彈きかけた所はたまらぬ〳〵。是は由良之助樣のお詞とも覺えませぬ。僅か三人扶持取る拙者めでも。千五百石の御自分樣でも。繋ぎました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押すに押されぬはお家の筋目。殿の御名代もなされまする。歴々樣方の中へ見る影もない私めが。差加へてとお願ひ申すは憚りとも慮外とも。ほんの猿が人眞似。お草履をつかんでなりとも。お荷物をかついでなりとも參じませう。お供に召連れられて。ナ申し。コレ申し〳〵。是はしたり寢てござるさうな。コレサ平右衞門。あつたら口に風ひかすまい。由良之助は死人も同然。矢間殿。千崎殿。もう本心は見えましたか。申合せた通り計ひませうか。いかさま。一味連判の者共へのみせしめ。いざいづ



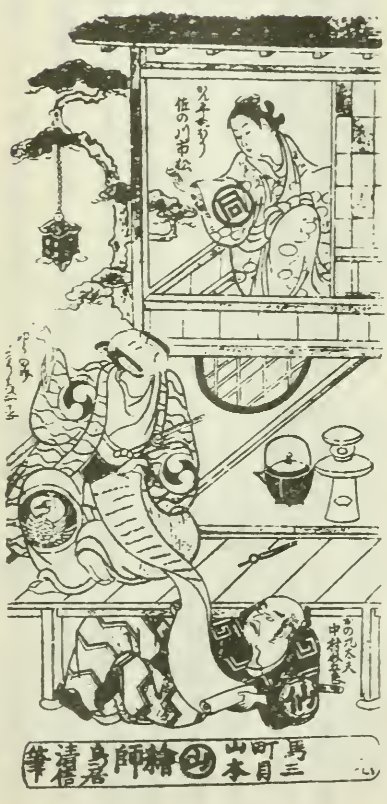
れもと立寄るを。地ヤレ暫くと平右衛門押しなだめ傍へ寄り。詞つく〴〵思廻しますれば。主君にお別れなされてより。仇を報はんと種々の艱難。木にも茅にも心を置き。人の誹無念をば。ぢつと怺へてござるからは。酒でも無理に参らずば。是迄命も續きますまい。地醒めての上の御分別と。無理に押へて三人を伴ふ一間は善惡の。明りを照らす障子の内影を隱すや・三重へ月の入る。地山科よりは一里半息を切つたる嫡子力彌。内をすかして正體なき父が寢姿。起すも人の耳近しと枕元に立寄つて。轡に代る刀の鍔音。鯉口ちやんと打鳴らせば。むつくと起きてヤア力彌か。詞鯉口の音響かせしは急用あつてか。密に〳〵。只今御臺顔世様より。急の御飛脚密事の御狀。外に御口上はなかつたか。敵高師直歸國の願叶ひ。近々本國へ罷歸る。委細の儀はお文との

御口上。よし〳〵。其方は宿へ歸り。夜の中に迎ひの駕籠行け〳〵。地はつとためらふ隙もなくフシ山科さして引返す。地まづ様子氣遣ひと狀の封じを切る所へ。詞大星殿。由良殿。斧九太夫でござる。地御意得ませうと聲かけられ。詞是は久しや久しや。一年も逢はぬ中寄つたぞや寄つたぞや。額にその皺のばしにお出でか。アノこゝな莚破りめが。イヤ由良殿。大功は細瑾を顧ずと申すが。人の誹も構はず遊里の遊び。大功を立つる基。天晴大丈夫末頼もしう存ずる。ホヽヲ是は堅いわ堅いわ。石火矢とでかけた。さりとてはおかれい。イヤア由良之助殿とぼけまい。誠貴殿の放埒は。敵討つ術をと見えるか。おんでもない事。忝い。四十に餘つて色狂ひ。馬鹿者よ。氣違よと。笑はれうかと思うたに。敵討つ術をとは九太夫殿。ホヽヲ嬉しい嬉しい。スリヤ其

許は。主人鹽冶の仇を報ずる所存はないか。けもない事けちない事。家國を渡す折から。城を枕に討死と言うたのは。御臺様への追従。時に貴様が。上へ對して朝敵同然と。其場をついと立つた。我等は後にと。しやちばつてゐた。いかいたわけの。所でしまひはつかず。御墓へ参つて切腹と。裏門からこそ〳〵。今この安樂の樂みするも貴殿のお蔭。昔のよしみは忘れぬ忘れぬ。堅みをやめて碎けをれ碎けをれ。いかさまこの九太夫も。昔思へば信太の狐。ばけ顯して一獻酌まうか。サア由良殿。久しぶりだお盃。又頂戴と會所めくのか。さしをれ飲むわ。飲みをれさすわ。てうど受けをれ地肴をするわと傍に在合ふ蛸肴。はさんでフシずつと差出せば。詞手を出して。足を戴く蛸肴。地忝いと戴いて食はんとする。手をじつと捕へ。詞コレ由良之助殿。明日

は主君塩冶判官の御命日。取分け逮夜が大切と申すが。見事その肴貴殿は食ふか。食べる〳〵。但し主君塩冶殿が。鮹になられたといふ便宜があつたか。エ愚痴な人ではある。こなたや俺が浪人したは。判官殿が無分別から。スリヤ恨こそあれ精進する氣微塵もごあらぬ。お志の肴賞玩致すと。地何氣もなく。只一口に味ふ風情。邪智深き九太夫もフシあきれて。詞もなかりける。詞扨この肴では飲めぬ飲めぬ。鶏しめさせ鍋焼させん。其許も奥へお出で。女郎ども歌へ〳〵と。謠足許もしどろもどろの浮拍子テレツク〳〵ツツテン〳〵。地おのれ末社ども。めれんになさで置くべきかと騒ぎに。紛れ入りにける。地始終を見屆け鷺坂伴内。二階より下り立ち。詞九太夫殿仔細とつくと見屆け申した。主の命日に精進をさへせぬ根性で。敵討存じもよらず。この通り主人師直へ申聞け。用心の門を開かせませう。成程最早用心にも及ばぬ事。コレサまだ此處に。刀を忘れて置きました。ほんに誠に大馬鹿者の證據。嗜みの魂見ましよ。扨錆びたりな赤鰯。ハヽヽヽ。いよ〳〵本心顯れ御安堵御安堵。ソレ九太夫が家來迎ひの駕籠。地はつと答へて持出る。詞サア伴内殿お召しなされ。まづ。御自分は老體。平に〳〵。フシ然らば御免と乗り移る。詞イヤ九太殿。承ればこの所に。勘平が女房が勤めてをると聞きました。貴殿には御存じないか。九太夫殿。地九太夫殿と云へど答へずコハ不思議と。駕籠の簾を引き開くれば。内には手頃の庭の飛石。詞コリヤどうぢや。九太夫は松浦さよ姫をやられたと。地見廻すこなたの緣の下より。詞コレ〳〵伴內殿。九太夫が駕籠ぬけの計略は。最前力彌が持參せし書翰が心許なし。様子見屆け後より知らさん。矢張り我らが歸る體にて。貴殿はその駕籠に引添うて。地合點々々とうなづき合ひ。駕籠には人のある體に フシ見せてしづ〳〵立歸る。ハルフシ折に二階へ。勘平が妻のおかるは醉ざまし。はや廓なれて吹く風に。フシうさをはらして居る所へ。詞ちよと行て來る。由良之助ともあらう侍が。大事の刀を忘れて置いた。つい取つて來るその間に掛物もかけ直し。爐の炭もついでおきや。ア、それ〳〵〳〵。こちらの三味線踏折るまいぞ。是はしたり。九太は去なれたさうな。三下り歌父よ母よとなく聲聞けば。妻に鸚鵡の。うつせし言の葉。エエ何ぢやいなおかしやんせ。ハルフシあたり見廻し由良之助。釣燈籠の明を照らし。讀む長文は御臺より敵の様子細々と。女の文の後や先。フシまゐらせそろではかどらず。よその戀よと羨しくおかるは上より見お

ろせど。夜目遠目なりフシ字性もおぼろ。思付いたるのべ鏡。フシ出して寫して讀みとる文章。下家よりは九太夫が。繰りおろす文月影に。すかし讀むとは。神ならずほどけかゝりしおかるが釵。ばつたり落つれば。下にははつと見上げて後へ隱す文。椽の下には猶ゑつぼ。上には鏡の影隱し。詞由良さんか。おかるか。そもじはそこに何してぞ。わたしやお前にもりつぶされ。あんまり辛さの醉ざまし。風に吹かれてゐるわいな。ムウ。ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる。ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは云はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか。話したいとは頼みたい事かえ。まあそんなもの。廻つて來やんしよ。いや／＼。段梯子へおりたらば。仲居が見付けて酒にせう。ア、どうせうな。ア、コレ／＼幸ひこゝに九ツ梯子。地これをふまへて下りてたもと。フシ小屋根にかければ。詞この梯子は勝手が違うて。ヲヽこは。どうやら是は危いもの。大事ない。大事ない。危いこはいは昔の事。三間づつまたげても赤膏薬も要らぬ年ばい。阿呆云はんすな。船に乗つたやうでこはいわいな。道理で舟玉様が見える。ヲヽのぞかんすないな。洞庭の秋の月様を拝み奉るぢや。イヤモウそんなら下りやせぬぞえ。下りざ下ろしてやらう。ア



レ又悪い事を。やかましい生娘かなんぞのやうに。地逆縁ながらと後よりぢつと。抱きしめフシ抱きおろし詞なんとそもじは御覧じたか。アイいゝえ。見たであらう見たであらう。アイ何ぢややら面白さうな文。あの上から皆讀んだか。ヲヽくど。ア、身の上の大事とこそはなりにけり。何の事ぢやぞいな。何の事とはおかる。古いが惚れた。女房になつてたもらぬか。おかんせ嘘ぢや。サ嘘から出た實でなけ

れば根がとけぬ。おうと云やおうと云や。イヤ云ふまい。なぜ。お前のは嘘から出た實ぢやない。實から出た嘘ぢや。おかる請出さう。エヽ。嘘でない證據に。今宵の中に身請せう。ムウいやわしには。情夫があるなら添はしてやろ。そりやマアほんかえ。侍冥利。三日なりとも圍うたらそれからは勝手次第。ハアヽ嬉しうざざんすと云はしておいて笑をでの。いや直ぐに亭主に金渡し。今の間に埒さゝう。氣遣ひせずと待つてゐや。そんなら必ず待つてをるぞえ。金渡して來る間。どつちへも行きやるな。女房ぢやぞ。それもたつた三日。それ合點。添うござんす。三下り歌 世にも因果なものならわしが身ぢや。可愛い男に。いくせの思ひ。エヽなんぢやいなおかしやんせ。忍び音になく小夜千鳥。地奥で歌ふもフシ身の上とおかるは。思案とりどりの。地折に出合ふ平右衛門。詞妹でないか。マア兄樣か。地恥かしい所で逢ひましたと顏を隱せば。詞苦しうない。關東より戻りがけ。母人に逢つて委しく聞いた。夫の爲お主の爲。よく賣られたでかしたでかした。地さう思うて下さんすりやわしや嬉しい。詞したがまあ喜んで下さんせ。思掛けなう今宵請出される筈。それが重疊。何人のお世話で。お前も御存じの大星由良之助樣のお世話で。何ぢや由良之助殿に請出される。それは下地からの馴染か。何のいな。この中より二三度酒の相手。夫があらば添はしてやろ。暇が欲しくば暇やろと。結構すぎた身請。扨は其方を。早野勘平が女房と。イエ知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば明かして何の云ひませう。ムウすりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存はないに極つたな。イエイエこれ兄樣。あるぞえあるぞえ。高うは云はれぬ。地コレかうかうと囁けば。詞ムウすりやその文をたしかに見たな。殘らず讀んだその後で。互ひに見合す顏と顏。それからぢやらつき出してつい身請けの相談。アノその文殘らず讀んだ後で。アイナ。ムウそれで聞えた。妹とてものがれぬ命。地身どもにくれよと拔打にはつしと切れば。詞ちやつと飛退き。コレ兄樣。わしにはなに誤り。勘平といふ夫もあり。きつと兩親あるからはこな樣の儘にもなるまい。地請出されて親夫に。逢はうと思ふがわしや樂み。どんな事でも謝らう。地赦して下んせ赦してと。手を合はすれば。平右衛門。拔身を捨てフシどうど伏し悲歎の涙にくれけるが。詞可愛や妹何にも知らぬな。親與市兵衛殿は六月廿九日の夜。人に切られてお果てなされた。ヤアそれはまあ。コリヤまだびつくりすな。請出されて添はうと思ふ勘平も。腹

切つて死んだはやい。地ヤア〳〵〳〵それはまあほんかいの。コレなう〳〵と取付いてスヱテわつとばかりに泣沈む。詞ヲヲ道理々々。様子話せば長い事。おいたはしいは母者人。云出しては泣き。思出しては泣き。娘かるに聞かしたら泣死するであらう。必ず云うてくれるなとのお頼み。云ふまいと思へども。とても遁れぬ汝が命。その譯は。忠義一途にこりかたまつた由良之助殿。勘平が女房と知らねば請出す義理もなし。元來色には猶ふけらず。見られた狀が一大事請出し刺殺す。思案の底と確かに見えた。よしさうなうても壁に耳。外より洩れても汝が科。密書を覗き見たるが誤り殺さにやならぬ。人手にかきようより我が手にかけ。大事を知つたる女。妹とて赦されずと。それを功に連判の數に入つてお供に立たん。地少身者の悲しさは人に勝れた心底を。見せねば數に入れられぬ。聞分けて命をくれ死んでくれ妹と。事を分けたる兄の詞。おかるは始終せきあげせきあげ。便りのないは身の代を。役に立てての旅立か。暇乞にも見えそなものと。恨んでばつかりをりました。勿體ないが父様は非業の死でもお年の上。勘平殿は三十になるやならずに死ぬるのはさぞ悲しかろ口惜しかろ。逢ひたかつだてあらうのに。なぜ逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬ私が身の因果。何の生きてをりませう。お手にかゝらば母様がお前をお恨みなされましよ。自害したその後で。首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。地さらばでござる兄様と云ひつゝ刀取上ぐる。詞やれ待てしばしと地とゞむる人は由良之助。はつと驚く平右衛門。おかるは放して殺してと。あせるを押へて。詞ホウ兄弟とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を赦す。妹はながらへて。未來の追善。地サアその追善は冥途の供と。もぎ取る刀をしつかと持添へ。詞夫勘平連判には加へしかど。敵一人も討取らず。未來で主君に言



譯あるまじ。その言譯はコリヤこゝにと。地ぐつと突込む疊の隙間。下には九太夫肩先縫はれて七轉八倒。詞それ引出せの。地下知より早く緣先飛下り平右衛門。朱に染んだ身體をば無二無三に引ずり出し。ヒヤア九太夫めハテよい氣持と引立て目通りへ投付ければ。起立たせもせず由良之助。髻つかんでぐつと引寄せ。詞獅子身中の虫とは汝が事。我が君より高知を戴き。莫大の御恩をきながら。敵師直が間者となつてある事ない事よう內通ひろいだな。四十餘人の者どもは。親に別れ子に離れ。一生連添ふ女房を君傾城の勤めをさするも。亡君の仇を報じたさ。寝覺めにも現にも。御切腹の折からを思出して無念の涙。地五臟六腑をしぼりしぞや。詞取分け今宵は殿の逮夜。口にもろ〳〵の不淨を云うても。愼みに愼みを重ぬる由良之助に。よう魚肉をつきつけたなア。いやと云はれずおうと云はれぬ胸の苦しさ。三代相恩のお主の逮夜に。喉を通したその時の心どのやうにあらうと思ふ。五體も一度に惱亂し。四十四の骨々も碎くるやうにあつたわやい。地へヱヱ獄卒め魔王めと。土に摺付け捻ぢつけてスヱテ無念涙にくれけるが。詞コリヤ平右衛門。最前錆刀を忘れおいたは此奴めを嬲殺しといふ知らせ。命取らずと苦痛させよ。地畏つたと抜くより早く躍上り飛上り。切れども僅か二



三寸。明所もなしに疵だらけ。のたうち廻つて。詞平右殿。おかる殿。地詫してたべと手を合せ。以前は足輕づれなりと。目にもかけざる寺岡に フシ三拜するぞ見苦しき。詞この場で殺さば言譯むづかし。食ひ醉うた體にして。地館へ連れよと羽織打着せ疵の口。隱れ聞いたる矢間千崎竹森が。障子ぐわらりと引開け。詞由良之助殿段々謝り入りましてござりまする。それ平右衛門。食ひ醉うたその客に。加茂川で水雜炊を食はせい。ハア。行け。

第八　道行旅路の嫁入り

浮世とは。誰がいひ初めて。飛鳥川。ふちも知行も瀨とかはり。スエテよるべも浪の下人に。結ぶ塩冶の誤りは。戀のかせ杭加古川の。娘小浪が許婚オクリ結納も。取らずその儘にふりすてられし物思ひ。長地母の思ひは 山科の 婿の力彌を力にて住家へ押して嫁入りも。世にありなしの義理遠慮腰元連れず乘物も。やめて親子の二人連都の。オクリエリ へ空に。志す。ハルフシ雪の肌も。寒空は。寒紅梅の色添ひて。手先覺えず凍え坂。ハズミ薩埵峠にさしかゝり見返れば。富士の煙の。サハリ空に消え行方も知れぬ思ひをば。ナホス晴らす嫁入の フシ門火ぞと。祝うて三保の松原に 小オクリつゞく。並松街道を狹しと打つたる行列は。誰と知らねど羨し。地アヽ世が世ならあの如く。一世の晴と花かざり。伊達をするがの府中過ぎ。城下。過ぐれば氣散じに。フシ母の心もいそ〳〵と。二世の盃濟んで後。本フシ閨の睦言私語。親知らず子知らずと。蔦の細道。もつれ合ひ。フシ嬉しからうと手を引けば。アノ地母様の差合ひを盼へこかして鞠子川。宇津の山邊の現にも。殿御初めの新枕。瀨戸の染飯こはいやら。恥しいやら嬉しいやら案じて胸も大井川。水の流と人心。もしや心は變らぬか。日陰に花は咲かぬかと。フシいうて島田のうさはらし。二人ハルフシ我が身の上を。かくとだに。人しらすかの橋越えて行けば吉田や赤坂の。招く女の聲揃へ。二上り歌緣を結ばゝ清水寺へ參らんせ。音羽の瀧にざんぶりざ毎日さう云うて拜まんせさうぢやいな。しゝきがんかうがかいれいにうきう。神樂太鼓にヨイコノエイ。こちの晝寢を覺まされた。都殿御に逢うて辛さが語りたやソウトモソウトモ。もしも女夫とかゝさまならば伊勢さんのひきあはせ。ナホスハルフシ鄙びた顏も。身にとつて。よい吉左右になるみ潟。熱田の社 フシあれかとよ。七里の渡し帆を上げて艪拍子揃へてヤッシッシ。舵取る音は。鈴虫かいや。ヒロヒきりぎりす。なくや霜夜と詠みたるは。小夜更けてこそくれ迄と。限

りある舟急がんと母が走れば。娘も走りオクリ空の霞に笠覆ひ。ヘルフシ舟路の友の。後や先庄野龜山せきとむる。伊勢と吾妻の別れ道。驛路の鈴の鈴鹿越え。間の土山。雨が降る水口の葉に。云ひはやす。石部石場で大石や。小石拾うて我が夫となでつ。さすりつ手に据ゑて。やがて大津や三井寺の。麓を越えて山科へ程なき。里へ。三重いそぎ行く。

第　九

地風雅でもなく。洒落でなく。しよう事なしの山科に。由良之助が侘住居。祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し朝戻り。幇間仲居に送られて酒が。ほたえる雪轉し雪はこけいで雪こかされ。仁體捨てし遊びなり。詞旦那。申し旦那。お座敷の景ようござります。お庭の藪に雪持つてトなつた所。とんと繪に畫いた通り。けうといぢやないかなうお品。サアこの景を見て。外へはどつちへも行きたうござりますまいがな。ヘツ朝夕に見ればこそあれ住吉の。岸の向ひの淡路島山といふ事知らぬか。自慢の庭でも家の酒は飲めぬ飲めぬ。エヽ通らぬ奴〳〵サア〳〵奥へ奥へ。地奥はどこにぞお客があると。先に立つて飛石の。詞もしどろ足取りもオクリしどろに。見ゆる酒機嫌。お戻りさうなと女房のお石が輕う汲んで出る茶屋の茶よりも氣の端香。お寒からうと悋氣せぬ詞の鹽茶醉ざまし。地一口飲んであとうちあけ。詞エヽ奥無粋なぞや無粋なぞや。折角面白う醉うた酒さませとは。アヽア、降つたる雪かな。文彌詞いかによそのわろ達がさぞ悋氣とや見給ふやらん。地それ雪は打綿に似て飛んで中入りとなり。詞奥はかゝ様と云へばとつと世帶じむと云へり。地加賀の二布へお見舞のナオス詞遅いは御用捨。伊勢海老と盃。穴の稻荷の玉垣は。朱うなければ信がさめるといふやうなものかい。オイこれ〳〵。こぶら返りぢや足の大指折つた折つた。おつとよし〳〵。地序にかうぢやと足先で。詞アヽこれほたへさしやんすな嗜ましやんせ。酒がすぎると他愛がない。地ほんに世話でござらうのとフシ物和かにあひしらふ。地力彌が心得奥より立出で。詞申し〳〵母人。親父樣は御寢なつたか。地是上げられいと差出す親子が所作を塗分けても。下地は同じ桐枕。ヲヽヲヽおうは夢現。詞イヤもう皆去にやれ。ハイ〳〵〳〵。そんならば旦那へ宜しう。地若旦那ちと御出でを目遣ひでフシ去際惡う歸りける。地聲聞えぬ迄行過ぎさせ。由良之助枕を上げ。詞ヤア力彌。遊興に事寄せ丸めたこの雪。所存あつての事ぢやが何と心得たぞ。ハツ雪と申す

物は。降る時には少しの風にも散り。輕い身でござりませうとも。あの如く一致して丸まつた時は。峰の吹雪に岩をも碎く大石同然。重いは忠義。その重い忠義を思ひ丸めた雪も。餘り日數を。延しすごしてはと思召しての。イヤ〳〵。由良之助親子。原郷右衛門などと四十七人連判の人數は。皆主なしの日陰者。日陰にさへ置けばとけぬ雪。せく事はないといふ事。こゝは日當り奥の小庭へ入れて置け。螢を集め雪を積むも學者の心ながき例。地女ども。切戸內から開けてやりやれ。地堺への狀認めん。詞飛脚が來たらば知らせいよ。アイ〳〵。地間の切戸の內。雪轉かし込み戸をたつるヲクリ襖へ引立て入りにける。地人の心の奥深き山科の隱家を。訪ねてこゝに來る人は。加古川本藏行國が女房戸無瀨。道の案內の乘物をかたへに待たせ只一人。刀脇差さすが實に行儀亂さず。ハルフシ庵の戸口。地頼みませう頼みませうといふ聲に。地襷はづして飛んで出る。昔の奏者今のりん。フシどうれと云ふもつかうどなる。詞ハツ大星由良之助樣お宅は是かな。左樣ならば加古川本藏が女房戸無瀨でござります。誠にその後は打絕えました。ちとお目にかゝりたい樣子につきはる〴〵參りました。傳へられて下されと地云入れさせて表の方。フシ乘物是へと舁寄せさせ。地娘こゝへと呼出せば。谷の戸あけて鶯の梅見付けたるほゝ笑顏ヲクリ目深に。着たる帽子の內。詞アノ力彌樣のお屋敷はもうこゝかえ。フシわしや恥かしいと媚かし。地取散らす物片付けて。まづお通りなされませと。下女が傳へる口上に。詞駕籠の者は皆歸れ。地御案內頼みますと云ふもいそ〳〵娘の小浪。フシ母に付添ひ座に直れば。地お石しとやかに出迎ひ。地是は〳〵。お二方ともよふぞやお出で。とくよりお目にかゝる筈。お聞及びの今の身の上。お訪ねに預りお恥かしい。詞あの改つたお詞。お目にかゝるは今日初めなれど。先だつて御子息力彌殿に。娘小浪を許婚致したからは。お前なり私なり。地姬同士御遠慮には及ばぬ事。詞是は〳〵痛入る御挨拶。殊に御用繁い本藏樣の奥方。寒空といひ思掛けなき御上京。戸無瀨樣はともあれ小浪御寮。さぞ都珍しからう。祇園淸水智恩院。大佛樣御覽じたか。金閣寺拜見あらばよい傳手があるぞえと。地心置きなき挨拶に。只あい〳〵ち口の內。フシ帽子まばゆき風情なり。地戸無瀨は行儀改めて。詞今日參る事餘の儀に非ず。是なる娘小浪許婚致して。後御主人鹽冶殿不慮の儀につき。由良之助樣。力彌殿。御在所も定かならず。地移り變るは世の習。變らぬは親心

とやかくと聞合せ。詞この山科にござる由承りました故。此方にも時分の娘早うお渡し申したさ。近頃押付けがましいが。夫も參る筈なれど出仕に隙のない身の上。この二腰は夫が魂。是を差せば即ち夫本藏が名代。私が役の二人前。由良之助樣にも御意得まし。祝言させて落付きたい。地幸ひ今日は日柄もよし。御用意なされフシ下さりませと相述ぶる。詞是は思ひも寄らぬ仰せ。折惡う夫由良之助は他行。さりながらもし宿にをりましてお目にかゝり申さうならば。御親切の段千萬忝う存じまする。許婚致した時は。故殿樣の御恩にあづかり。御知行頂戴致し罷りある故。本藏樣の娘御を貰ひませう。然らばくれうと云ひ約束は申したれども。只今は浪人。人使ひとてもござらぬ內へ。いかに約束なればとて。大身な加古川殿の御息女。世話に申す提燈に釣鐘釣合はぬは不緣のもと。ハテ結納を遣したと申すではなし。どれへなりと外々へ。御遠慮なう遣はされませと申さるゝでござりませうと。地聞いてはつと思ひながら。詞アノまあお石樣のおつしやる事。いかに卑下なされうとて。本藏と由良之助樣。身上が釣合はぬとな。そんならば申しませう。手前の主人は小身故。家老を勤むる本藏は五百石。鹽冶殿は大名。御家老の由良之助樣は千五百石。すりや本藏が知行とは。千石違ふを合點で許婚はなされぬか。只今は御浪人。本藏が知行とは皆違うてからが五百石。イヤそのお詞違ひまする。五百石は扨置き。一萬石違うても。心と心が釣合へば大身の娘でも嫁にとるまいものでもない。こりや聞きどころお石樣。心と心が釣合はぬとおつしやるは。どの心ぢやサア聞かう。主人鹽冶判官樣の御生害御短慮とは云ひながら。正直を本とするお心から發りし事。それにひきかへ師直に金銀を以てこびへつらふ。追從武士の祿を取る本藏殿と。地二君に仕へぬ由良之助が大事の子に。釣合はぬ女房は持たされぬと。聞きもあへず膝立直し。詞諂武士とは誰が事。樣子によつては聞捨てられぬそこを赦すが娘の可愛さ。夫に負けるは女房の常。地祝言あらうがあるまいが。許婚とあるからは天下晴れての力彌が女房。詞ムヽ面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つてこの母が去つた。地去つたと云放し。心隔ての唐紙を フシはたと。引立て入りにける。地娘はわつと泣出し。折角思ひ思はれて許婚した力彌樣に。逢はせてやろとのお詞を便りに思うて來たものを。姑御の胴慾に。詞去られる覺えわたしやない。地母樣どうぞ詫言して。祝言させて下さりませとスヱテすがり。歎けば母親

は。娘の顔をつく〴〵と。打眺め〳〵。親の慾目か知らねどもほんに其方の器量なら。十人並にも勝つた娘。よい婿をがなと詮議して許婚した力彌殿。訪ねて來た甲斐もなう。婿に知らさず去つたとは。義理にも云はれぬお石殿。姑去りは心得ぬ。詞ムウ〳〵扨は浪人の身のよるべなう筋目を云立て。有徳な町人の婿になつて。義理も法も忘れたな。チウ小浪。今云ふ通りの男の性根。去つたといふ面欲しがる所は山々。外へ嫁入りする氣はないか。コレ大事の所泣かずともしつかりと返事しや。地コレどうぢや〳〵と。尋ぬる親の氣は張弓。アノ母様の胴慾な事おつしやります。國を出る折父樣のおしやつたは。浪人しても大星力彌。行儀といひ器量といひ。幸な婿を取つた。貞女兩夫に見えず。サハリたとへ夫に別れても又の夫を設けなよ。主ある女の不義同

然。必ず〳〵寢覺めにも殿御大事を忘るるな。由良之助夫婦の衆へ孝行盡し夫婦仲。睦じいとてあじやらにも。悋氣ばしして ナホスフシ去らるゝな。地案ぜうかとて隱さずと懐姙になつたら早速に。知らせてくれとおつしやつたをわたしやよう覺えてゐる。去られていんで父樣に。苦に苦をかけてどう云うてどう言譯があらうとも。力彌樣より外に餘の殿御。わしやいや〳〵と一筋に フシ戀を立貫く心根を。地サハリ聞くに堪えかね母親の。涙一途に突詰めし。覺悟の刀抜放せば。母樣是は何事と押留められて顏を上げ。詞何事とは曲がない。今もそなたが云ふ通り。一時も早う祝言させ。初孫の顏見たいと。娘に甘いは父の習ひ。地喜んでござる中へまだ祝言もせぬ先に。去られて戻りましたとてどう連れていなれうぞ。と云うて先に合點せにや フシしやう。もやうも

ないわいの。地殊にそなたは先妻の子。わしとは生さぬ仲ぢや故およそにしたかと思はれては。どうも生きてはゐられぬ義理。この通り死んだ後で父御へ言譯してたもや。詞アノ勿體ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死すべき筈。地生きてお世話になる上に苦を見せまする不孝者。母樣の手にかけて私を殺して下さりませ。去られても殿御の家こゝで死ぬれば本望ぢや。早う殺して下さりませ。詞ヲヽよう云やつたでかしやつた。そなたばかり殺しはせぬ。この母も三途の友。そなたをおれが手にかけて。母も追付け後から行く。地覺悟はよいかと立派にも涙。とゞめて立ちかゝり。詞コレ小浪。アレあれを聞きや。表に虚無僧の尺八。鶴の巣籠り。地鳥類でさへ子を思ふに科もない子を手にかけるは。因果と因果の寄合と。思へば足も立ちかねて。

震ふ拳をやう〳〵に。振上ぐる刄の下。尋常に座を占め手を合せ。詞南無阿彌陀佛と。地唱ふる中より御無用と。聲かけられて思はずも。たるみし拳も尺八もフシともに。ひつそと靜まりしが。詞ヲヽさうぢや。今御無用と留めたは。虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で。無用といふに氣おくれし。未練なと笑はれな。地娘覺悟はよいかやと又振上ぐる又吹出す。とたんの拍子に又御無用。詞ムヽ又御無用と留めたは。修行者の手の內か。振上げた手の中か。イウ刀の手の中御無用。倅力彌に祝言させう。エヽさう云ふ聲はお石樣。地そりや眞實か誠かと尋ぬる襖の內よりも。謡あひに相生の。松こそめでたかりけれと。地祝儀の小謡白木の小四方。フシ目八分に携へ出で。詞義理ある仲の一人娘。殺さうと迄思詰めた戸無瀨樣の心底。小浪殿の貞女。志がいと

ほしさにさせ惡い祝言さすその代り。世の常ならぬ嫁の盃。地受取るはこの三方。フシ御用意あらばと差置けば。地少しは心休まりて拔いたる刀鞘に納め。詞世の常ならぬ盃とは。引出物の御所望ならん。この二腰は夫が重代。刀は正宗。差添は波の平行安。家にも身にも代へぬ重寶。詞浪人と侮つて價の高い二腰。まさかの時に賣拂へと云はぬばかりの婿引出。御所望申すは是ではない。ムヽそんなら何が御所望ぞ。この三方へは加古川本藏殿の。お首を乘せて貰ひたい。エヽそりや又なぜな。御主人鹽冶判官樣高師直にお恨あつて。鎌倉殿で一刀に切りかけ給ふ。その時こなたの夫加古川本藏。その座にあつて抱留め。殿を支へたばつかりに御本望も遂げられず。敵は漸く薄手ばかり。殿はやみ〳〵御切腹。口へこそ出し給はね。そ

の時の御無念は。本藏殿に憎しみがかゝるまいか。あるまいか。家來が身として加古川が娘。安閑と女房にするやうな力彌ぢやと。思うての祝言ならば。この三方へ本藏殿の白髮首。いやとあればどなたでも。首を並べる尉と姥。それ見た上で盃させう。サヽサアいやか。地おうかの返答をと。銳き詞の理屈詰。親子ははつと フシさしうつむき途方に。くれし折柄に。詞加古川本藏が首進上申す。お受取りなされよと地表に控へし虚無僧の。笠脫捨ててしづ〳〵と內へ入るは。詞ヤアお前は父樣。本藏樣。地こゝにはどうしてこの形は。合點がいかぬこりやどうぢやと咎むる女房。詞ヤアざは〳〵と見苦しい。始終の仔細皆聞いた。そち達に知らさずこゝへ來た樣子は追つて。まづ默れ。其許が由良之助殿御內證お石殿よな。今日の時宜かくあらんと思ひ。妻子

にも知らせず。樣子を窺ふ加古川本藏。案に違はず拙者が首。婿引出に欲しいとな。ハヽヽヽ。いやはやそりや侍の云ふ事。主人の仇を報はんといふ所存もなく。遊興に耽り大酒に性根を亂し。放埒なる身持日本一の阿呆の鑑。蛙の子は蛙になる。親に劣らぬ力彌めが大だはけ。狼狽武士のなまくら鋼。この本藏が首は切れぬ。馬鹿つくすなと踏碎く。地破三方のふち放れ。こつちから婿に取らぬちよこざいな女めと云はせも果てず。詞ヤア過言なぞ本藏殿。浪人の錆刀切れるか切れぬか鹽梅見せう。不肖ながら由良之助が女房。地望む相手ぢやサア勝負。勝負々々と裾引上げ。長押にかけたる槍押取り。突きかゝらんずその氣色。これ御短慮なマア待つてと留め隔つる女房娘。詞邪魔ひろぐなと荒けなく。右と左へ引退くる。間もあらせず突掛くる槍のしほ首引摑みもぢつて拂へば身を背け。諸足縫はんとひらめかす。刃背を蹴つて蹴上ぐれば。拳放れて取落す。地槍奪はれじと走り寄る。腰際帶際引摑み。どうと打付け動かせず。膝に引敷く强氣の本藏。敷かれてお石が無念の齒がみ。親子ははあ〳〵フシあやぶむ中へ。地駈出る大星力彌。捨てたる槍を取る手も見せず本藏が。右手の肋左手へ通れと突通す。うんとばかりにかつぱと伏す。コハ情なやと母娘スヱテ取付き。歎くに目もかけず。止め刺さんと取直す。詞ヤア待て力彌早まるなと。地槍引留めて由良之助手負に向ひ。詞一別以來珍らしし本藏殿。御計略の念願届き。婿力彌が手にかゝつて。さぞ本望でござらうのと。地星をさいたる大星が。詞に本藏目を見開き。詞主人の欝憤を晴さんとこの程の心遣ひ。遊所の出合に氣をゆるませ。徒黨の人數は揃ひつらん。思へば貴殿の身の上は。本藏が身にあるべき筈。當春鶴ケ岡造營の砌。主人桃井若狹之助。高師直に恥しめられ。以ての外憤り。某を密に召され。まつかう〳〵の物語。明日御殿にて出會せ。一刀に討留むると思詰めたる御顏色。地留めても留まらぬ若氣の短慮。詞小身故に師直に。賄賂薄きを根に持つて。恥しめたると知つたる故。主人に知らせず不相應の金銀衣服臺の物。師直へ持參して。心に染まぬ諂ひも主人を大事と存ずるから。賄賂畢せあつちから謝つて出た故に。切るに切られぬ拍子抜け。主人が恨もさらりと晴れ。地相手代つて鹽冶殿の。難儀となつたは即ちその日。詞相手死せずば切腹にも及ぶまじと。抱留めたは思過した本藏が。地一生の誤りは娘が難儀と白髮のこの首。婿殿にフシ進ぜたさ。女房娘を先へ上し。こび諂ひしを身の科にお

暇を願うてな。道を變へて汝達より二日前に京着。若い折の遊藝が役に立つた四日の中。こなたの所存を見拔いた本藏。手にかゝれば恨を晴れ。約束の通りこの娘。地力彌に添はせて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ。詞コレ手を合せて頼入る。地忠義にならでは捨てぬ命。子故に捨つる親心推量あれ由良之助殿と云ふも涙にむせ返れば。妻や娘はあるにもあられず。ほんにかうとはつゆ知らず死遅れたばつかりに。お命捨つるはあんまりな。冥加の程が恐ろしい。赦して下され父上とスエテかつぱと伏して。泣叫ぶ。地親子が心思遣り大星親子三人も。フシ倶にしをれてゐたりしが。地ヤア／＼本藏殿。君子は其罪を憎んで其人を憎まずと云へば。縁は縁恨は恨と。格別の沙汰もあるべきにとさぞお恨に思はれんが。所詮この世を去る人。底意を明けて見せ申さんと。地未然を察して奥庭の障子さらりと引開くれば。雪を束ねて石塔の五輪の形を二つ迄。造り立てしは大星が。フシ成り行く果をあらはせり。地戸無瀬はさかしく。詞ムヽ、御主人の仇を討つて後。二君に仕へず消ゆるといふお心のあの雪。力彌殿もその心で娘を去つたの胴慾は。御不便餘つてお石様。恨んだがわしや悲しい。戸無瀬様のおつしやる事。玉椿の八千代迄とも祝はれず。後家になる嫁取つた。地このやうなめでたい悲しい。フシ事はない。詞ノリかういふ事が厭さに。むごう辛う云うたのが。さぞ憎かつたでござんしよなう。イヽエイナ。私こそ腹立つまゝ。町人の婿になつて義理も法も忘れたかといふたのが。恥かしいやら悲しいやらどうも顔が上げられぬお石様。戸無瀬様。氏も器量も勝れた子何としてこのやうに。地果報拙い生れやとフシ聲も。涙にせき上ぐる。地本藏熱き涙を押へ。ハツアヽ嬉しや本望や。詞呉王を諫めて誅せられ。辱めを笑ひし呉子胥が忠義取るに足らず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓。日本の大星。昔より今に至る迄。唐と日本にたつた二人。地その一人を親に持つ。力彌が妻となつたるは。女御更衣に供るより。百倍勝つて汝が身は武士の娘の手柄者。手柄な娘が婿殿へ。お引の目錄進上と懐中より取出すを。力彌取つて押戴き披き見ればコハいかに。目錄ならぬ師直が屋敷の案内一々に。玄關長屋侍部屋。水門物置柴部屋まで繪圖に委しく書付けたり。由良之助はつと押戴き。詞ヘツエ有難し有難し。徒黨の人數は揃へども。敵地の案内知れざる故發足も延引せり。この繪圖こそは孫呉が祕書。我が爲の六韜三略。地兼て夜討と定めたれば。繼梯子にて塀を越え忍入るには縁側の。

雨戸はづせば直ぐに居間。こゝを仕切つてかう攻めてと フシ親子が喜び。地手負ながらもぬからぬ本藏。詞イヤ〳〵それは僻言ならん。用心嚴しき高師直。障子襖は皆尻差し。雨戸に合栓合樞。こぢて外れず大槌にて。毀たば音して用意せんそれ如何。地ヲ、それにこそ術あれ。詞凝つては思案に能はずと遊所よりの歸るさ。思寄つたる前栽の雪持つ竹。雨戸をはづす我が工夫。地仕様をこゝに見せ申さんオクリと庭に。折しも雪深くさしもに強き大竹も雪の重さに。ひいはりとしはりし竹を。引廻して鴨居にはめ。雪にたはむは弓同然。詞この如く弓を拵へ弦を張り。鴨居と敷居にはめ置きて。一度に切つて放つ時は。地まつこのやうにと。積つたる枝打拂へば雪散つて。伸びるは直なる竹の力鴨居撓んで溝はづれ。障子殘らずばた〳〵。本藏苦しさ打忘れ。ハヽアしたり〳〵。詞計略といひ義心といひか程の家來を持ちながら了簡もあるべきに。地淺きたくみの鹽冶殿。ロ惜しき振舞やと。悔むを聞くに御主人の短慮なる御所業。今の忠義を戰場のお馬先にて盡くさばと。思へば無念に閉ぢふさがる。胸は七重の門の戸を洩るゝは涙ばかりなり。地力彌はしづ〳〵下り立ちて父が前に手をつかへ。詞本藏殿の寸志により。敵地の案内知つたる上は。泉州堺の天河屋義平方へも通達し。荷物の工面仕らんと聞きもあへず何さ〳〵。山科にある事隱れなき由良之助。人數集めは人目あり。一先づ堺へ下つて後あれからすぐに發足せん。其方は母嫁戸無瀨殿と諸共に。後の片着き諸事萬事何もかも。心殘のなきやうに。ナ。ナ。地コリヤ明日の夜舟に下るべし。我は幸ひ。本藏殿の忍び姿を我が姿と。袈裟打かけて編笠に。恩を戴く報謝返し未來の迷晴らさん爲。詞今宵一夜は嫁御寮へ舅が情の 地戀慕流し。歌口しめして立出れば。豫て覺悟のお石が歎き。御本望をとばかりにて名殘り惜しさの山々を云はぬ心の フシいぢらしさ。地手負は今を知死期時。父樣申し父樣と呼べど。答へぬ斷末魔。親子の縁も玉の緒も切れて一世の。フシカヽりうき別れわつと泣く母泣く娘。倶に死骸に向ひ地の。回向念佛は戀無常。出行く足も立留り。六字の御名を笛の音に。詞南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀これや尺八煩惱の枕並ぶる追善供養。閨の契りは一夜きり心。殘して。三重へ立出る

第十

地津の國と和泉河内を引受けて。餘所の國まで舟寄せる三國一の大湊。堺というて人の氣も賢しき町に疵もなき。天河屋

の義平とて金から金を儲けため。見かけは輕く內證は重い生計に重荷をば。手づから店でしめくゝり大船の船頭。詞是で丁度七竿。地受取りましたとさし荷ひ。行くも黃昏亭主はほつと。日和もよしよい出船と。云ひつゝ煙草煙管筒。フシ喫付けにこそ入りにけれ。地家の世繼は今年四つ守りは十九の丸額。親方よりも我が遊び。詞サア始りぢや。面白い事面白い事。泣き辨慶の信太妻。東西々々。文彌ハルフシこゝに哀を。とゞめしは。この由松にとゞめたり。詞元來その身は父ばかり。母は去られて。いなれたで。フシ泣き辨慶と申すなり。詞コリヤ伊五よ。もう人形廻しいやいや。母樣を呼んでくれいやい。ソレそのやうに無理云はしやると。旦那樣に云うてこなさんも追出すぞ。後の月からお釜が割れて。手代は手代で鼠の子か何ぞのやうに。目が明かぬと云うて追出し。飯焚きは大きな欠伸したと云うて暇やり。今ではこなはんと。わしと旦那はんとばつかり。どうでこの家を拔けそけするのかして。ちよこ〳〵と船へ荷物が行く。駈落するなら人形箱持つて行かうぞや。イヤ人形廻しよりおりやもう寢たい。アレもう俺までをそゝのかす程にの。宜ござるわ俺が抱いて寢てやろ。いやぢや。われには乳が無いものおりやいやぢや。アレ又無理云はしやる。こなたが女の子なら。乳よりよいものがあるけれど。何というても相婿同士。フシ是も淚の種ぞかし。地折節表へ侍二人誰そ賴まう義平殿はお宿にかと。云ふもひそめく內からつこど。詞旦那樣は家に。我等。サハリ人形廻しで忙がしい。ナホス詞用があらば入つた〳〵。イヤ案內致さぬも無禮。原郷右衛門大星力彌。密に御意得たしと申しておくりやれ。何ぢや腹へり右衛門大飯食や。こりやたまらぬアレ旦那樣大きな健氣人が見えましたと。地叫ぶ由松引連れてフシ奥へ入れば。地亭主義平。詞又阿呆めがしやなり聲と。地云ひつゝ出でて。詞エ郷右衛門樣力彌樣。サアまあ是へ。地御免あれと座を占めて郷右衛門。詞段々貴公のお世話萬事相調ひ。由良之助も御禮に參る筈なれども。鎌倉へ出立も今明日。なにかと取込み悴力彌を名代として失禮のお斷り。是は〳〵御念の入つた儀。急の御發足とござりますれば。なにかお取込みでござりませうに。成程郷右衛門殿の仰せの通り。明早々出立の取込み。自由ながら私に參りお禮も申し。又お賴み申した殘荷物も。いよ〳〵今晚で積みじまひか。お尋ね申せと申渡しましてござります。成程お誂へのかの道具一まき。段々大廻しで遣はし小手脛當小道具の類は。長持に仕込み以下

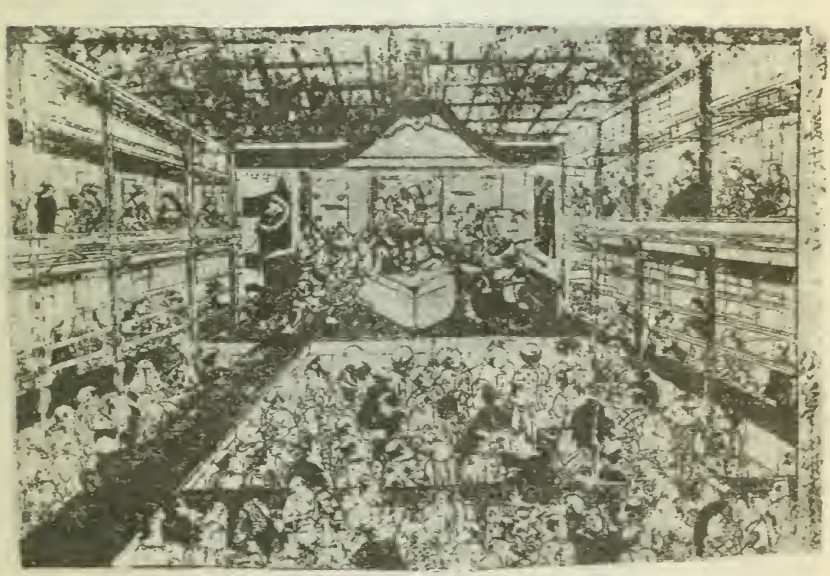
七竿。今晩出船を幸ひ船頭へ渡し。殘る繻提燈鎖鉢卷。是は後より陸荷で遣す心算でござります。郷右衛門様お聞きなされましたか。いかいお世話でござりまする。いかさま主人鹽冶公の御恩を受けた町人も多くござれども。天河屋の義平は。武士も及ばぬ男氣な者と。由良殿が見込み大事をお頼み申されたも尤も。然し槍長刀は格別鎖帷子の繼梯子のと申すものは常ならぬ道具。お買ひなさるゝに不思議は立ちませなんだか。イヤその儀は。細工人へ手前の所を申さず。手附けを渡し金と引替に仕る故。何國の誰と先様には存じませぬ。成程尤も。序に力彌めもお尋ね申しましよ。家へ荷物を取込み荷物の跡へ御家來中の見る目はどうしてお忍びなされましたな。ホウそれも御尤ものお尋ね。この儀を頼まれまする と。女房は親里へ歸し。召使はたりひづみを付けて段々に暇遣はし。殘るは阿呆と四つになる悴。洩るゝ筋はござりませぬ。扨々驚き入りましてござりまする。その旨を親どもへ申聞かして安堵させませう。郷右衛門殿お立ちなされませぬか。いかさま出立に心せきまする。義平殿お暇申しませう。然らば由良之助様へも。宜しう申聞かしませう。おさらば。

地 さらばと引別れ フシ 二人は旅宿へ立歸る。地 表閉めんとする所へこの家の舅太田了竹。詞 オツト閉めまい宿にかと。地 ずつと通つてきよろ／＼眼。詞 是は親父様ようこそお出で。扨この間は女房そのを養生がてら遣はし置きさぞお世話お藥でもたべまするかな。ア藥も飲みまする食も食ひます。それは重疊。イヤ重疊ではござらぬ。手前も國許に居た時は。斧九太夫から扶持も貰ひ相應な身代。今は一僕さへ召使はぬ所へさしてもない病氣な養生さしてくれよとさし越されたは。仔細こそあらん。がそれはともあれ。なま若い女不埒があつては貴殿も立たず。身共も皺腹でも切らねばならぬ。所で一つの相談。先づ世間は暇やり分。暇の狀をおこしておいて。ハテ何時でもこゝの勝手に呼戻すまでの事。たつた一筆つい書いて下されと。地 輕う云ふのも物工。一物ありと知りながら。厭と云はば女房をすぐに戻さん戻りては。頼まれた人々へ詞も立たずとつおいつ思案する程。詞 厭かどうぢや不得心なら此方にも。片時おかれず戻すからはこの了竹もにじり込みへたばつて倶に厄介厭か應かの返答と。地 込付けられて流石の義平。計に乘るが口惜しやと。思へどこちらの一大事見出されてはかけ硯。取つて引寄せさら／＼と。フシ 書認め。詞 是やるからは了竹殿親でなし子でなし。重ねて足

踏みおしやんな。底工ある暇の狀。弱身を食うてやるが殘念。持つていきやれと投付くれば。地手早く取つて懐中し。詞ヲヽよい推量。聞けばこの間より浪人共が入込みひそめくより。そのめに問へども知らぬとぬかす。何仕出さうも知れぬ婿。娘を添はして置くが氣遣ひ。幸ひさる歴々から貰ひかけられ。去狀取るとすぐに嫁入さする相談。一杯まゐつて重疊重疊。ホウたとへ去狀なきとても子までなしたる夫を捨て。外へ嫁入する性根なら心は殘らぬ勝手々々。ヲヽ勝手にするは親のこうけ。今宵の中に嫁らする。ヤア細事はかずと早歸れと。地肩先つかんで門口より。外へ蹴出してあとぴつしやり。ほう／＼起きて詞コリヤ義平なんぼ摑んでほり出しても。嫁らす先から仕拵へ金。還つて蹴られたりや。どうやら疝氣が直つたと。地口は達者に足腰をなでつさすりつ逃吠に。オクリつぶやき〳〵つぶやき立歸る。地月の暈に影隱す隣家も寝入る亥の刻過ぎ。この家を目がけて捕手の人數十手早繩腰提燈。灯かげ隱して窺ひ窺ひ間者とおぼしき家來を招き。耳打すればさし心得門の戸せはしく打叩く。誰ぢや〳〵も及び腰。詞イヤ宵に來た大船の船頭でござる。舟賃の算用が違うた。ちよつと開けて下され。ハテ仰山な僣な事であろ明日來た明日來た。イヤ今夜浮



ける船。仕切つて貰はにや出されませぬと。地云ふも聲高近所の聞えと。義平立出で何心なく門の戸を。開くるとその儘捕つた捕つた。動くな上意と押取卷く。コハ何故と四方八方。眼を配れば捕手の兩人。詞ヤア何故とは横道者。汝鹽冶判官が家來大星由良之助に頼まれ。武具馬具を買調へ大廻しにて鎌倉へ遣はす條。急ぎ召捕り拷問せよとの御上意。遁れぬ所ぢや腕廻せ。是は思ひも寄らぬお咎め。さやうの覺え聊かなし。地定めてそれは人違へと云はせもたてず。詞ヤアぬかすまい爭はれぬ證據あり。ソレ家來ども。はつと心得持來たる。宵に積んだる莞莚荷の長持。見るより義平は心も空。ソレ動かすなと四方の十手。その間に荷物切解き。長持開けんとする所を。飛びかゝつて下部を蹴退け。蓋の上にどつかと坐り。詞ヤア麁忽千萬。この長持の中に入置いたは。さる大名の奥方より。お誂へのお手道具。お具足櫃の笑ひ本。笑ひ道具の注文までその名を記し置いたれば。開けさしては歴々のお家のお名の出る事。御覽あつてはいづれものお身の上にもかゝはりませうぞ。ヤアいよ／＼胡亂者。なか／＼大抵では白狀致すまい。ソレ申合せた通り。地合點でござると一間へ駈入り。一子由松を引立て出で。詞サア義平。長持の中はともあれ。鹽冶浪人一統にかたまり。師直を討つ密事の段々。汝よく知つらん。ありやう



に云へばよし。云はぬと忽ち忰が身の上。地コリヤ是を見よと拔刀。稚き咽に差付けられ。はつとは思へど色も變ぜず。詞ハヽヽヽ女童を責めるやうに。人質取つての御詮議。天河屋の義平は男でござるぞ。子にほだされ存ぜぬ事を。存じたとは得申さぬ。嘗て何にも存ぜぬ。知らぬ。知らぬと云うたら金輪奈落。憎しと思はゞその身體。我が見る前で殺した殺した。テモ胴性骨の強い奴。管槍鐵砲鎖帷子。四十六本の印迄調へやつたる汝が。知らぬと云うて云はしておかうか。白狀せぬと一寸試し一分刻みに刻むが何と。ヲ、面白い刻まれう。武具は勿論。公家武家の冠烏帽子下女小者が藁沓まで。買調へて賣る商人。それ不思議とて御詮議あらば。日本に人種はあるまい。一寸試しも三寸繩も。商賣故に取らるゝ命。惜しいとも思はぬサア殺せ。忰も目の前突け〳〵。地一寸試しは腕から切るか胸から裂くか。肩骨脊骨も望み次第と。さし付けつき付け我が子をもぎ取り。子にほだされぬ性根を見よと。締殺すべきその氣相。詞ヤレ聊爾せまい義平殿。暫し〳〵と長持より。地大星由良之助義金。立出づる體見てびつくり。捕手の人人一時に。十手取繩打捨てて フシ迯か。下つて座を占むる。地威儀を正して由良之助義平に向ひ手をつかへ。詞扨々驚入つたる御心底。地泥中の蓮。砂の中の金とは貴公の御事。さもあらんさもさうずと。見込んで頼んだ一大事。この由良之助は微塵聊か。お疑ひ申さねども。詞馴染近付きでなきこの人々。四十人餘の中にも。天河屋の義平は生れながらの町人。今にも捕へられ詮議に逢はば。如何あらん。何とか云はん。殊に寵愛の子もあれば。子に迷ふ親心と評議區々。案じに胸も休まらず。地所詮一心の定めし所を見せ。古朋輩の者どもへ安堵させん爲。せまじき事とは存じながら右の仕合。麁忽の段は眞平々々。詞花は櫻木。人は武士と申せども地いつかな〳〵武士も及ばぬ御所存。百萬騎の强敵は防ぐとも。左程に性根はすはらぬもの。貴公の心を借受け我我が手本とし。敵師直を討つならばたとへ。巖石の中に籠り。鐵洞の内に隱るゝともやはか仕損じ申すべき。詞人ある中にも人なしと申せども。町家の中にもあればあるもの。地一味徒黨の者どもの爲には。產土とも。氏神とも尊み奉らずんば。御恩の冥加に。盡果てませう。詞靜謐の世には賢者も顯はれず。ヘエ、惜しい哉。地亡君御存生の折ならば。一方の旗大將。一國の政道。お預け申したとて惜しからぬ御器量。詞是に並ぶ大鷲文吾矢間十太郎を始め。小寺高松堀尾板倉片

山等潰れし眼を開かする。地妙薬名醫の心魂。有難し〳〵と退つて三拜人々も。無骨の段眞平と覺に。頭をすり付くる。詞ヤレそれは御迷惑。お手上げられて下さりませ。惣體人と馬には。乘つて見よ添うて見よと申せば。お馴染ないお方々は氣遣ひに思召すも尤も。私もとは輕い者。お國の御用承つてより。經上つたこの身代。判官様の様子承つて倶に無念。何卒この恥辱雪ぎやうはないかと。力んで見ても秦鼈のじだんだ。及ばぬ所と存じた所へ。由良之助様のお頼みこそ心得たと向ふ見ず。倶にお力付けるばかり。地情ないは町人の身の上。手一合でも御扶持を戴きましたらば。この度の思し立。袖褄に取付いてなりともお供し。いづれも様へ息つぎの。茶水でも汲みませうに。詞それも叶はぬは。よく〳〵町人はあさましいもの。是を思へば御主の御恩。刀の威光は有難いもの。地それ故にこそお命捨てらるゝ。お羨しう存じまする。猶も冥途で御奉公お序に義平めが。志もお取成と篤き詞に人々も。思はず涙催して奥齒かみ割るばかりなり。地由良之助とりあへず。詞今晩鎌倉へ出立。本望遂ぐるも百日とは過すまじ。承れば御内證まで省き給ふ由重々のお志。追付けそれも呼返させ申さん。地御不自由も今暫くフシはやお暇と立上がる。地ヤレ申さばめでたい旅立。いづれも様へ御酒一つ。詞いやそれは。ハテ祝うて手打の蕎麥切。ヤ手打とは吉左右。然らば大鷲矢間の御兩人は後へ殘り。先手組の人々は。鄕右衛門力彌を誘ひ。佐太の森迄お先へ。地いざこなたへ亭主が案内。御辭儀は無禮と由良之助オクリ二人を伴ひ入る月と。ハルフシ又出る月と。二つ輪の親と夫との中に立つ。長地おそのは一人小提燈暗き思ひも子故の闇。あやなき門を打叩き。詞伊五よ伊五よと呼ぶ聲が。地寢耳にふつと阿呆は駈出で。詞俺呼んだは誰ぢや。化生の者か迷ひの者か。イヤそのぢやここ開けて呉れ。さう云うても氣味が惡い。必ずばあと云ふまいぞと。地云ひつゝ門の戸押開き。エヽ詞おえさんかようござんしたの。一人歩きをするとナ。病犬が嚙むぞえヲヽ犬になりとも嚙まれて死んだら。今の思ひはあるまいに。おりや去られたわいやい。どんな事にならんしたなア。旦那殿は寢てか。イヽエ。留守か。イヽエ。何の事ぢやぞやい。何の事やらわしも知らぬが。宵の口に猫が鼠を取つたかして。捕つた〳〵と大勢來たが。ちやつと俺は蒲團被つたればつひ寢入つた。今そのわろ達と奥で酒盛。ざゝんざやつてござんす。ハテヱ合點のいかぬさうして坊は寢たか。アイ是はよう寢てござんす。旦那殿

と寢たか。イヽエ。われと寢たか。イヽエ。つひ一人ころりと。なぜ伽して寢さしてくれぬ。それでもわしにも旦那様にも。乳がないと云うて泣いてばつかり。ヘエヽ可愛やさうであろさうであろ。地それればつかりがほんの事と フシわつと泣出す門の口。空に知られぬ フシ雨の足かはく。袂もなかりける。詞ヤイ〱伊五め何處にをると。地呼立て出づる主の義平。アイアイ此處にと駈入る後。尻目にかけてたはけめが。詞奥へいて給仕ひろげと。叱り追ひやり門の戸を。さすを押へて。コレ旦那殿。云ふ事があるこゝ開けて。地イヤ聞く事もなし云ふ事も。內證一つの畜生め。穢らはしいそこ退かう。詞イヤ親と一所でない證據。それ見て疑ひ晴れてたべと。地戸の際よりも投込む一通。拾ひ取る間に付込む女房。夫は書物一目見て。詞コリヤ最前やつた暇の狀。是戻してどうするのぢや。どうするとは聞えませぬ。親了竹が惡計は。常からよう知つての事。たとへどのやうな事があるとて。なぜ暇狀は下さんした。詞持つて戻ると嫁らすと。思ひも寄らぬ拵へ。嬉しい顏で油斷させ鼻紙袋の去狀を。盜んでわしは逃げて來ました。お前は由松可愛ないか。去つてあの子を繼母に。かける氣かいの胴慾なと。すがり歎けば。詞ヤアその恨逆ねぢ。この家を去なす折。言含めたを何と聞いた。樣子あつて其方に暇やるでなし。暫しの間親里へ歸つて居よ。地心解け舅了竹。もと九太夫が扶持人。心解けねば仔細は云はぬ。病氣の體にもてなし。起臥も自由にすな。櫛も取るなと言付けやつた事なぜ忘れた。詞さんばら髮でをる者を。嫁に取ろとは云はぬはやい。地なんの汝が由松が可愛かろ。詞晝は一日阿呆めが。欺しすかせど夜になると。母様々々と尋ねをる。母は追付けもうこゝへと。地欺して寢かせどよう寢入らず。叱つて寢かそと擲付け。恐い顏すりや聲上げず。詞しく〱泣いてをるを見て。身節が碎けて堪へられるものぢやない。地是を思へば親の恩子を持つて知るといふ。不孝の罰と我が身をば。悔んで夜ともフシ泣明かす。詞昨夜も三度抱上げて。もう連れていこ。抱いていこと。門口迄出たれども。一夜で堪能するでもなし。五十日ひまどるやら。百日隔てて置かうやら。知れぬ事に馴染ましては。後の難儀と五町三町。地搖り歩いて擲付け。寢さしてはそつとこかし。我が肌付くれば現にも。乳を探してしがみ付き。僅かな時の別れでさへ。戀焦るゝもの一生を。引分けうとは思はねども。詞是非に及ばず暇の狀。了竹へ渡せしを。內證にて受取つては。親の赦さぬ不義の科。心よか

らず持つて歸れ。これ迄の緣。約束事。死んだと思へば事すむと。地切離れよき男氣は。常を知る程フシ猶悲しく。詞この家に居るとお前が立たず。家へいぬると嫁入らにやならず。地悲しいものは私一人。詞是が別れにならうも知れぬ。地由松を起して一寸逢はして下さんせ。詞イヤそれはならぬ。今逢うて今別るゝその身。後の思ひが猶不便な。地わけて今宵はお客もある。くど／＼云はずと早くおいきやれ。それでも一寸由松に。詞ハテ扨未練な。後の難儀を思はずやと。地無理に引立て去狀も倶に渡して門口へ心强くも突出し。子が可愛くば了竹へ詫言たてて春迄も。隱まひ貰はゞ思案もあらん。地それ叶はずば是限りと門の戸しめて內フシに入る。地ナウそれが叶ふ程なれば。この思ひはござんせぬ。情ないぞや我が夫。詞科もない身を去るのみか。我が子にまで逢はさぬは。あんまりむごい胴慾な。顏見る迄はなんぼでも。いなぬ／＼と門打叩き。詞情ぢや。慈悲ぢや。こゝ開けて。地寢顏なりとも見せてたべ。詞レ手を合せ拜みます。むごいわいのとフシどうど伏し前後不覺に。泣きけるが。地ハア恨むまい歎くまい。詞なまなかに顏見たら。母樣かと取付いて。離しもせまいし離れもなるまい。地今宵いぬれば今宵の嫁入。明日迄待たれぬわしが命。さらばでござるさらばやと。云うては戸口へ耳を寄せ。もしや我が子の聲するか。顏でも見せてくれるかと。窺ひ聞けど音もせず。アヽ是非もなや是迄と思切つて駈出す向うへ。目ばかり出した六男道を塞いで引捕へ。是はと云ふ間も情なやすらりと拔いて島田髷。根よりふつと切取つて懷迄をひつさらへ。いづくともなく逃行きしハズミフシ無法無意氣ぞ是非もなき。

地ナウ憎や腹立や。何物かむごたらしう髮切つて。書いた物まで持つていんだ。櫛笄の盜人なら。いつそ殺して／＼と泣叫ぶ。聲に驚き義平は思はず駈出ししが。ハアこゝが男の魂の亂口よとくひしばり。躊躇ふ中に奧よりも。詞御亭主御亭主。地義平殿と立出づる由良之助。詞段段御親切の御馳走。お禮は鎌倉より申越さん。猶跡荷物の儀。早飛脚をもつてお賴み申す。夜の明けぬ中はやお暇。いかさま。今暫しと申されぬ刻限。道中御健勝で。御吉左右相待ちまする。着致さば早速書翰をもつてお知らせ申さう。返す／＼もこの度のお世話。詞でお禮は云盡くされませぬ。ソレ矢間大鷲御亭主へ置土產。地はつと文吾重太郞。扇を時の白臺と乘せて出したる一包。詞是は貴公へ是は又。御內室おその殿へ。些少ながらと差出す。地義平はむつと顏色變り。詞

詞で云はれぬ禮とあれば。イヤコレ禮物受けうと存じ。命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り。小判の耳で面はるのか。イヤ我々は裟婆の暇。貴殿は殘るこの世の宿縁。御臺顔世御前の儀もお頼み申さんため。地寸志ばかりと云殘し。フシ表へ出づれば猶むつと。詞性根魂を見違へたか。踏付けた仕方あた忌々し。地穢らはしいと包みし進物蹴飛せば。包解けて中よりばらり女房駈寄り。詞コレわしが櫛笄切られた髮。ヤア／＼この一包は去狀。ホイ扨は最前切つたのは。ホウこの由良之助が大鷲文吾を裏道より廻らせ。根よりふつつと切らした心は。いかな親でも尼法師を。嫁入らさうとも云ふまいし。嫁に取る者なほあるまい。その髮の延びる間も凡そ百日。我々本望を遂げるも百日は過ごさじ。討果せた後めでたく祝言。その時には櫛笄。その切髮を添に入れ。地笄髷の三國一まづそれ迄は尼の乳母。詞一季半季の奉公人。その肝煎は大鷲文吾同じく矢間重太郎。地この兩人が連中へ大事に洩れぬといふ請判。由良之助は冥途から仲人致さん義平殿。詞ハア、重々のお志。お禮申せ女房。地私がためには命の親。詞イヤお禮に及ばす。返禮と申すも九牛が一毛。義平殿にも町人ならずば。倶に出立とのお望幸ひかな。豫て夜討と存ずれば。敵中へ入込む時。貴殿の家名の天河屋を直に夜討の合詞。天とかけなば河と答へ。地四十人餘の者共が。天よ。河よと申すなら。詞貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字。平はたいらかたやすく本望。地はやお暇と。立出づる。末世に天を山と云ふ。由良之助が孫呉の術。忠臣藏ともいひはやす。裟婆の詞の定めなき別れ／＼て。三重へ出でて行く

第十一

地柔能く剛を制し弱よく強を制するとは。張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高定の家臣。大星由良之助之を守つて。既に一味の勇士四十餘騎漁船に打乘つて。苫深々と稻村が崎の油斷を頼みにて。フシ岸の岩根に漕寄せて。コハリまづ一番に打上ぐるは。大星由良之助義金。二番目には原郷右衛門。第三番目は大星力彌。ナホス後に續いて竹森喜多八片山源太。先手後船段々に列を亂さずコハリ立出づる。奥山孫七須田五郎。着たる羽織の合印。いろはにほへとフシと立並ぶ。地勝田早見遠の森。音に聞えし片山源太。大鷲源吾かけやの大槌提げ／＼。詞吉田岡崎ちりぬるをわか手は小寺立川甚兵衛。不破前原深川彌次郎。地得たる半弓手挾んで。上るは川瀨忠太夫フシ空に輝く。大星瀨平。

よたれ。そつねならむうゐの。奥村岡崎小寺が嫡子。中村矢島牧平賀やまけふこえて。朝霧のフシ立並びたる薗野や菅野。千葉に村松村橋傳治。鹽田赤根は長刀構へ。江戸ハル中にも磯川十文字。遠松杉野三村の次郎。木村は用意の繩梯子。千崎彌五郎ナホス堀井の彌惣。同彌九郎遊所の酒にゑひもせぬ。コハリ由良之助が智略にて八尺ばかりの大竹に。弦をかけてぞ持ちたりける。後陣は矢間重太郎。はるか後より身を卑下し。出づるは寺岡平右衛門。假名實名袖印。フシその數四十六人なり。地鎖袴に黒羽織忠義の胸當。打揃ふ。實に忠臣の假名手本義心の手本義平が家名。詞天と河との合詞忘るな豫ての云合せ。矢間千崎小寺の面々。倅力彌を始めとし表門より入れ〳〵。郷右衛門と某は裏門より込入つて。地相圖の笛を吹くならば時分はよしと乗込めよ。

取るべき首は只一つと。由良之助に下知せられ怒りの眼一時に。館をはるかに睨付け裏と表へ三重へ別れ行く。フシかくとは知らず。地高武藏守師直は。由良之助が放埓に心もゆるむ油斷酒。藝妓遊女に舞ひ歌はせ。藥師寺を上客にて身の程知らぬ大騒ぎ。はては雜魚寢の不行儀に前後も知らぬ寢入りばな。非常を守る番人のフシ拍子木のみぞ殘りける。地表裏一度に手筈を極め。矢間千崎不敵の二人。表門に忍寄り内の様子を窺へば。夜廻りとおぼしき拍子木遠音をさせばよい折と。例の嗜む繩梯子。高塀に打掛け打掛け雲井までもとさゝがにの登り了せた塀の屋根。早拍子木の近づく音ひらりと下りるを見付けし番人。スハ何者と駈寄るを取つて引伏せ高手小手。よい案内と息をとめ繩先腰にひつかけて。拍子木奪ひかつちかち。役所々々を打廻り窺ひ廻るぞ。フシ不敵なる。地早裏門に呼子の笛。時分はよしと兩人は。拍子木合せて天河と。貫の木はづして大門をくわらりと開けば力彌を始め。杉野木村三村の一黨我も我もと込入つて。見れば一面雨戸の固め父が敎へし雪折は。こゝぞと下知して丸竹



に弦をかけたを雨戸の鴨居。敷居にはさんで一時に。ひいふう三つの拍子にてかけたる弦をてうど切れば。鴨居は上り敷居は下り雨戸はづれてばた〳〵〳〵。そ

乗込めと天河の フシ聲響かして亂れ入る。地スハ夜討ぞと松明提燈裏門よりも込入つて。一方は鄕右衛門一方は由良之助。床几にかゝつて下知をなす。小勢なれども寄手は今宵必死の勇者。祕術を盡くせば由良之助。詞餘の者に目なかけそたゞ師直を討取れと。地鄕右衛門諸共に八方に下知すれば。はやりをの若者ども揉みたて揉みたて。三重ヘ切結ぶ。地北隣は仁木播磨守南隣は石堂右馬之丞。兩隣より何事かと家の棟に武者を上げ フシ提燈星の如くにて。詞ヤア〳〵御屋敷騷動の聲太刀音矢叫び事騷がしく。狼藉者か盜賊か。地但し非常の沙汰なるか。承り届けよと。主人申付けられしと フシ高らかに呼ばはつたり。地由良之助とりあへず。詞是は鹽冶判官が家來の者ども。主人の仇を報はんため。四十餘人の者どもが千變萬化の戰。かく申すは大星由良之助原鄕右衛門。尊氏御兄弟へお恨なし。もとより兩隣仁木石堂殿へは何の遺恨も候はねば。卒爾致さんやうもなし。火の用心は堅く申付けたれば。是もつて御用心には及ばぬ事。只穏便に捨ておかれよ。それとても隣家の事聞捨てならず加勢あらば。力なく一矢仕らんと高聲に答へたり。地兩家の人々聞届け御神妙御神妙。我人主人持つたる身は



もつとも斯くこそあるべけれ。御用あらば承らん。提燈引けと一時に。靜まり返つて控へける。地一時ばかりの戰に寄手は僅か三四人。薄手負ふたるばかりにて。敵の手負は數知れず。されども大將師直とおぼしき者もなき所に。足輕寺岡平右衛門。舘の内を飛廻り。詞部屋々々は勿論上は天井下は簀子。井の中迄槍を入れて探せども師直が行方知れず。寢間とおぼしき所を見れば夜着蒲團の温り。この寒夜にさめざるは逃げて間なしと覺えたり。地表の方が氣遣はしと駈行くを。ヤレ平右衛門待て／＼と。矢間重太郎重行師直を宙に引立てコレ／＼いづれも。詞柴部屋に隠れしを見付け出して生捕しと。地聞くより大勢花に露。いき／＼勇んで由良之助。詞ヤレでかされた手柄々々。さりながらうかつに殺すな。かりにも天下の執事職殺すにも禮儀ありと。地受取つて上座に据ゑ。詞我々陪臣の身として。御舘へ踏込み。狼藉仕るも主君の仇を報じたさ。慮外の程はお赦し下され。御尋常に御首を賜はるべしと相述ぶれば師直も流石にゑせ者わろびれもせず。ヲヽ尤も／＼。詞覺悟は豫てサア首取れと。地油斷さして拔討にはつしと切る引つぱづして腕ねぢ上げ。詞ハア、しをらしき御手向ひ。サアいづれも。日頃の欝憤この時と。地由良之助が初太刀にて四十餘人が聲聲に。浮木に逢へる盲龜は是。三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと。躍上り飛上り形見の刀で首かき落し。喜び勇んで舞ふもあり。妻を捨て子に別れ老いたる親を失ひしも。この首一つ見ん爲よ今日はいかなる吉日ぞと。首を擲いつ食付きつ一同にわつと嬉し泣き理すぎて哀なり。地由良之助は懐中より亡君の位牌を出し。床の間の卓に乘せ奉り。師直が首血潮を清め手向け申し。兜に入れし香を焚き。フシ退つて三拜九拜し。地恐れながら。亡君尊靈蓮性院見利大居士へ申上げ奉る。詞去る御切腹のその折から。跡弔へと下されし九寸五分にて師直が首かき落し。御位牌に手向け奉る。地草葉の蔭にて御受取り下さるべしとスヱテ涙とともに禮拜し。詞いざ／＼お一人づつ御燒香。まづ惣大將なれば御自分樣より。イヤ拙者よりまづ先へ。矢間重太郎殿御燒香なされ。イヤ／＼それは存じもよらず。いづれもの手前と申し。御最屓は却つて迷惑。イヤ最屓でござらぬ。四十人餘の衆中が師直の首取らんと。一身を抛つ中に貴殿一人。柴部屋より見付け出し生捕になされたは。よく／＼主君鹽冶尊靈の。お心に叶ひし矢間殿。お羨しう存ずる。何といづれも。御尤もに存じまする。それは何とも。ハテ扨刻限が延びます。地

然らば御免とフシ一の燒香。地二番目は由良殿。いざ御立と勸むれば。詞イヤまだ外に燒香の致し手あり。そりや何者誰人と。地問へば大星懷中より碁盤縞の財布取出し。詞是が忠臣二番目の燒香。早野勘平が成れの果。その身は不義の誤りから一味同心も叶はず。せめては石碑の連中にと女房賣つて金調へ。その金故に舅は討たれ金戻され。詮方なく腹切つて相果てし。その時の勘平が心さぞ無念にあらう口惜しからう金戻したは由良之助が一生の誤り。不便な最期とげさしたと。片時忘れず肌離さず。今宵夜討も財布と同道。平右衛門汝が爲には妹婿。地燒香させよと投げやれば。ハヽヽヽはつと押戴き〱。草葉の蔭よりさぞ有難う存じましよ。冥加に餘る仕合と。財布を香爐の上に着せ。詞二番の燒香早野勘平重氏と。地高らかに呼ばはり。聲も涙に震はすれば。列座の人も殘念のフシ胸も。張裂くばかりなり。詞思ひがけなや人馬の音。山谷に響く攻太鼓フシ關をどつとぞ上げにける。地由良之助ちつとも騒がず。詞扨は師直が一家の武士取りかけしと覺えたり。地罪つくりに何かせんと覺悟の所へ。桃井若狹之助遅ればせに駈付け給ひ。詞ヤア〱大星。今表門より攻めかけたは。師直が弟師安。この所で腹切つては。敵に恐れしと後代迄の譏。鹽冶の御菩提所光明寺へ立退くべしと。地仰せにはつと由良之助。詞いかさま最期をとぐるとも亡君の墓の前。仰せに隨ひ立退き申さん。御しつぱらひ賴み上ぐると。地云ふ間もあらせずいづくに忍び居たりけん。藥師寺次郎鷺坂伴内。おのれ大星遁さじと右往左往に討つてかゝる。力彌すかさず受流し〱。詞暫時が中は討合ひしが。はずみを打つて討つ太刀に。地袈裟にかけられ藥師寺最期。かはす二の太刀足切られ尾にもつがれず鷺坂伴内。その儘息は絶えにける。地チヽ手柄々々と賞美の詞。末世末代傳ふる義臣。是も偏に君が代の。久しき例竹の葉の榮を。こゝに書殘す

寛延元年辰八月十四日

作者　竹田出雲
　　　三好松洛
　　　並木千柳

双蝶蝶曲輪日記

第一　浮瀬の居續に相圖の笛賣

歌 爰に一つの望がござる。京の女郎に長崎衣裳着せて。ちゝやちん／＼ちつくり江戸の張を持たせて。大阪の揚屋で遊びたい。ほんにそれもよかろかい。飲めや謠へや一寸先は闇の夜の花を見るのもナホス ノシ 一趣向と。地 浮瀬が奥庭の梅花の枝に蠟燭釣り夜の。花見を夜通に。飲み明かすは山崎與五郎。藤屋の吾妻姉女郎の都諸共居續けに 小オクリ 彈いつ。歌うつ幇間の佐渡七。御機嫌をとり邊山かはい。／＼の鳥の聲。ノシ 夜明け前とぞ知られける。詞 コレ旦那。お目がとろ／＼致します。吾妻樣や都樣は御酒が足らぬか睡氣が見えぬ。浮瀬で朝座と出掛けう。コレ中居衆。輕いお肴早う／＼。いかさま其方がいふ通り。此方ばかりが醉うたとて上客の都殿に。酒が足らいで氣の毒。殊に追付勤をお引きなさるゝげな。番頭の權九郎がきつい執心。女房になつてやる氣はないかえ。したが八幡の南與兵衛と深い中と聞き及べば。定めて工面がしてあらう。地 何にもせよ目出度いお仕舞。吾妻も太夫にあやかれ／＼。詞 ほんに私も都樣にあやかつて。廓の苦患が遁れたい。そりやもう纔ての事いな。地 與五郎樣へ嫁入の時この都は仲人役。イヤ／＼ 詞 其嫁入の風が變つて氣の毒。吾妻樣は知つてござらうが。旦那はお聞きなされまい。それは氣掛り佐渡七聞かせい。されば彼の西國のお侍。平岡郷左衞門樣が吾妻樣を請出すとて。井筒屋で昨日から。揉みに揉んで手附金の御才覺。何程二腰極付けてござつても。つい金は出來難いやら。今に於て沙汰がない。たとへ沙汰があつたとて此吾妻は。郷左衞門樣に身請しらるゝことは嫌々。そりや御道理。今でも旦那から三百兩といふ手附が渡れば。最早今日から山崎の奥樣。彼のお侍が。あをちやつても指さす事もなりませぬ。地 半時でも早う手附の渡つた方へ相談が極れば。今日一日が夫婦になるかならぬの境。詞 いはゞたつた三百兩何處ぞに積んであらうのに。ア、金が欲しいな。歌 二八十六で文付けられて。二九の ナホス詞 エ、佐渡七樣何ぢやいな。吾妻が顏も知らず。面白さうにおかしやんせ。ノル イヤ／＼イヤ今日お金が調はねばお前はお侍に添はねばならぬ。ア、ひつこいわいな。地 ヲツト心得。詞 最早座敷に佐渡七が飲みさう

な肴はないか。ヲ、それよ。酒故には花を貰うた末社もある。我は賤しき幇間なれども。酒飲むことは誰に劣らんと。地酒飲柄杓追取り此。詞冷し物鉢を前に置き。栗にもせよ。梨にもせよ。志す所は我が肴。明日は腹が損ねうとも。だんない／＼大事ない。コリヤ／＼佐渡七。もう見度うないつくしを罷めい。今我が手附の話を聞いては暫しが間も待たれぬわい。此度おれも權九郎連れて。屋敷の爲替三百兩請取りに下つたれば。幸ひ其金を手附に渡し其侍めに鼻明かせう。佐渡七は大儀ながら石町の宿屋へ往て。手代の權九郎に金子請取り。直に藤屋の親方に渡し。手附の請取取つて來い。エ、味な事が氣に障つて酒がとんと醒果てた。地所をかへて飲み直さう。君達此方へと手を引いて。ハルフシ奥へ入れば佐渡七は。何でもして來いよい銀儲。無間の鐘を撞當てたと心も空に飛石傳ひ表へ出で。向うを見れば野道よりいつこかはと手代



殿。詞ヤア權九郎様。今逢ひに參る所。それは幸ひ。都が事が首尾ようなつたか。イエ／＼そんな事ぢやない。お前も御存じの彼の屋敷のお侍が。吾妻様を身請するとて。今日明日の中に手附金を渡す筈。それで旦那が以ての外急が來て。半時も

早うお前から金三百兩請取つて。手附に渡せといはるゝか。こりや面白い。都をば手に入る金子の蔓に取付いたぞ。とは又どうぢやな。されば。汝にも常々話して置く通り。かうした事もあらうと思ふて。これを見よ。これは昨日請取つた爲替金三百兩。此又三百兩はおれが豫て拵へ置いた眞鍮小判。是はしやんと掏替へて銅脈包に與五郎の印判押させ。向うから尻が來るか。あのたわいなしに科を負はせる權九が計略。扨もしたり。首尾よう往たらばコリヤ佐渡七。地葭原か阿波座にて三間口を買うてやろ。こりや忝い。それならば奥へ往て。默れ〱。贋包に印判をでつかりさしたら此方の物と。牒合せて權九郎。フシ佐渡七伴ひ入りにける。地生業はフシ草の種とて。樣々に。世の憂きふしの笛細工。傘に小笛をぶら〱と子供たらしの荷ひ賣。淸水邊を吹き歩行き。詞サア〱買うたり。横笛鹿笛唐人笛。鼻で吹くのが猪笛。地喇叭ちやるめら笙の笛とフシ吹立て〱賣立つる。歌笛の音による鹿ならで。ナホス合圖の笛と聞くよりも。都は竊と座敷を脱出で見れば紛はぬ其人と。フシ路次下駄横に走出で。詞ヲ、南與兵衞樣。よう逢ひに來て下さんした。さればいの。俺も我が身の文見ると。昨夕來うと思うたれど。此浮瀨は揚屋と違うて。夜はちよつとも逢はれまいと地思うて商の出がけに來たと。いふ顏つれ〲打眺め。以前は八幡で南方與兵衞樣とて。人に人を使うた身の上。仕付もせぬ商でア、いとしぼや甚う顏に窶れが見える。詞アノそれいはうとて呼寄せたか。ア、譯もない。詞イエさうでない外に話す事がある。地よし又お前の顏が見たさに。呼寄せたら科になるかえ。詞話したいといふは與五郎樣の手代權九郎。幇間の佐渡七諸共に。昨日から段々と。私にいふのを聞かしやんせ。追付年も明くげなれば。何かにつけて心に叶はぬ事があろ。借錢萬事を請込まう。何卒逢うてくれんかと。あの佐渡七面めが同じやうにあた憎てらしい。何處で聞いたやらお前の事迄いひくさる。そりや死際に樂しうなると。よい鳥が掛かつて幸福。逢うて遣つたがよいわいの。逢ふ氣ならお前にやいはぬ。地もし疑の心もあろかと。思うていふに胴慾なとスヱ恨み。つらみもフシ人目を忍び。詞ア、誰やら來るわいなと。地隱るゝ間もなく幇間の佐渡七。詞ハア都樣爰には何して。さればいな。あの笛の音が面白さに爰迄聞きに來たわいな。ア、大人氣ない。今日中に返事聞切るとて。權九郎樣も待つてござる。我等は又吾妻樣の身請の手附。今持つて參ります。地後に御見と言捨てて。

フシ曲輪を指して急ぎ行く。地エ、ひよんな者が來て。話の邪魔と立寄れば。都様々々と座敷より仲居が聲。詞ヲ、忙しな。あれでは何も話されぬ。地私が來る迄切戸の陰に待つてゐて下さんせ。やいの／＼の返事さへ頷き／＼南與兵衛。荷を打擔げ物陰に フシ暫し忍んで待ちゐたる。地師走の日脚忙しきに。世事に構はぬ西國武士平岡鄕左衛門。我が取立の諂武士三原有右衛門。勝蔓坂より徐々と供の奴が摺火燧に。煙草燻らせなう有右殿。詞あの騒は山崎の與五郎。成程々々是程の騒に。彼の聲高な幇間の聲が致さぬと。地噂牛へ息を切つて駈戻る幇間の佐渡七。それと見るより小腰を屈め。詞是は／＼鄕左衛門様有右衛門様。お珍らし所にてア、合點々々。太夫様方が此浮瀨へお出での様子をお聞きなされ。跡を慕うて來たとはきつい心中者め。扨はお聞かせ申したらお腹の立つことがある。今朝俄に與五郎様が吾妻様の身請なさるゝに相談。則ち我等が手附金三百兩持つて參りしに。幸ひに藤屋の亭主が勝蔓の絹屋へ。汁に來てゐられた故金渡して歸りがけ。何いふさ。身共を急かさうと思うて。イヤ誓文でござります。地コレ此一札御覽じませと手に渡せば鄕左衛門。披いて見るよりくわつと急上げ。飛掛つて佐渡七が胸づくしをしかととり。詞扨々うぬは憎い奴與五郎と一つになつて。身が武士を捨てさすか。斯様な事もあらうかと。常々汝に物取らせ賴み置いたは何の爲。手附渡さぬ其中に早速身共へ何故知らさぬと。地二人が中に引挾み。鯉口ちやんといはすれば佐渡七は身を縮め。詞ア、成程御尤も。私も其氣が付かぬではなけれども。事急なればお報知も得申さず。そこで我等が分別出して。吾妻様をお手に入れる。仕様をさらばお目に掛けう。コレ此手附請取に。宛名を取らぬが我等の工夫。今でもお金が調へば。宛名をお前に書替へる。何とよござりますか。こりや出來した。それならば此手附の請取に。鄕左衛門が宛名を書いて持つてゐる。三百兩調ひ次第われに渡せばよいではないか。成程々々この褒美にはずつしりと。地うゝ合點ぢやと紙入より。ひらりとはずむは淸水の。花も及ばぬほん山吹。地黄色になつて曲輪の亭主。息つぎあへず。詞ヤア佐渡七殿爰にか。扨まあ何かは差置いて。吾妻を身請なさるゝお客に。今お目に掛りたい。そりや幸ひぢや。則ち彼方が身請なさるゝ鄕左衛門様。是は／＼。私は太夫が親方。ちと密々にお話し申したい事がござります。只今遣はされた手附金。早速百兩封を切つて見ましたれば中は銅。地これ御覽じませと財布

より取出せば。二人もはつと呆れ顔。佐渡七も空驚き。詞私が持つて参つたれど。明けねば知らう筈もなし。エ、憎い奴ぢや。屹度御詮議なされませ。イヤサ出所が知れてあれば詮議もしよい。其方は浮瀬へ往て山崎與五郎殿に。平岡郷左衛門と申す者。それへ参つて御意得うとゆつてくれ。地はつとはいへど底氣味悪く。どうしたらよからうと。胸に思案は浮瀬のフシ路次より外へはづしけり。地曲輪の亭主手をついて。詞金の御詮議なさるゝならばお隙がいるでござりましよ。金をお返し申したれば。最前の手附の請取。お戻しなされて下さりませ。成程々々一札戻さうと投返し重ねて此方より手附持たして遣さう。然らば左様。地太夫が身分宜しくと。挨拶述べて立歸る。地二人打連れ路次より直に。フシ座敷に上り。郷左殿。詞與五郎は出ませぬの。イヤサ町人風情でしや勿體。與五郎逢はうと呼ぶ聲に。地何事やらんとあわてふためき奥より出で。詞ハアどなた。山崎與五郎とはお手前ぢやの。身は平岡郷左衛門。先達つて幇間めにいつて遣せしになぜ出ぬぞ。イヤ其儀は何とも承りませぬ。フウ逢ひたいといふは別儀でない。今日殿の御用につき金子三百兩請取り。披いて見れば殘らず贋金。其包には其方の封印。コレ見られよと投出す。地與五郎驚き手に取上げ。見れば手附に打つたる金。使ひに遣つたる佐渡七が所爲か。どう廻つて手に入りしと。不審晴れねど打明けていはれもせず。返答にあぐみしが。暫く思案し手をついて。詞成程包は手前の封印。併し金銀の取捌は手代共に申し付け。拙者は曾て存ぜぬ儀。地立歸つて手代共を篤と詮議仕らんと。いはせも果てず。詞コリヤ與五郎。郷左衛門は武士ぢやぞよ。お身が詮議をする間殿の御用を缺くべきか。なう有右殿成程々々。殊に贋金は天下の大罪。穏便に事を濟すが武士の情。ア、左様ではござれども爰元は他所の事。旅宿へ歸つて金子調達仕らんと。地行くを兩人前後につつ立ち。詞イヤサかうい掛つてはいつかないかな待つ事ならぬと。地金に事寄せ郷左衛門が。無體も戀の意趣晴し。とやせんかくやと與五郎も。權九郎佐渡七と。呼べども出でず動かさず。難儀の折から南與兵衛。つつと出でて フシ二人を突退け。詞コレお侍。よい加減にもう往なれい。此奴何奴なれば。横合から出しやばつて慮外を働く推參者。ハアハ、、こりやをかしい。其横合はわごりよ達。何で身共等が横合。ハハア置かれい。そんなりや其金。何處の誰から請取つたそれ聞こわい。イヤそれは。ヲ、さうぢやあろ。コレ其金の。これなる

與五郎殿より。曲輪へ手附に渡つた金。幇間めと同類になつての。何と胸に應へるか。よう知つてゐる此笛賣。ひつとでもいうて見や。ア、手むさい侍ぢや。イヤサおのれが様な無理いふ奴には相手にならぬ。コリヤ與五郎。あの様な金銀を通用する科に依つて。身が屋敷へ連歸り。縛首打つ覺悟せよと。地立寄る二人が首筋攫み左手右手へ踏据ゑ蹴据ゑ。詞縛り首とは汝等が事とフシ極付くれば。詞汝投げたぞよ。地堪忍ならぬと切掛くるを煙草盆にて丁ど受け。又切付くるを搔潜り二人が腕首しつかと取り。詞見りや大事もない侍さうなが。こんな事に刀拔いても可いか。扶持を戴く主の事も。身の事も思はぬの。扨も揃うた智惠なしぢやと。地突飛ばされて顏見合せ。詞いかさま爰は所が惡い。重ねて汝酷い目に逢はしてくれう。地よい往にしほと兩人は。フシこそ／＼と立歸る。地吾妻都は走り出で。私や今のもや／＼で癪が上つた私もと。胸撫下せば與五郎。扨マア禮は笛賣殿。詞何のお禮に及びませう。私はお前の父御與次兵衛様に。一字を貰うて其昔は。八幡で人に知られたる南與兵衛と申す者。フウ扨は聞及ぶ南方の與兵衛殿か。是は／＼。それなれば與五郎とも緣者同然。殊に又都殿と譯あると聞いたれば。是以てのかぬ中。地就いては與五郎が。心入にもなる爲なれば。詞佐渡七に遣はせし手附金三百兩。鄕左衛門が手に入つた様子は。ア、成程併し爰は端近。旅宿へ參つて密々にお咄申さん。それならば御酒一ツ。イエ／＼只今はかつ以て。ヲ、堅くろし。與五郎様もあの様にいうてぢやのによいわいな。イヤ／＼都さうでない。今日は一日のらかわいたれば。まつと商せにやならぬ。笛が賣れぬと往んでから咽がぴい／＼鳴るわいの。來たこそ幸ひ清水の觀音へ參つて歸りましよ。地皆様さらばと南與兵衛。荷を打擔げ別るれば。三人打連れ浮瀨のフシ元の座敷へ入りにける。地始終立聞く手代の權九郎。幇間の佐渡七小手招き。詞今のを聞いたか。扨憎い笛賣め。彼奴が大方都がきだん。南與兵衛めに極つた。何處に何時からをつたやら何もかも皆知つてをる。地あの位なら此方等が事も親方へ吐すであろが。どうしたらよかろうぞ。詞コレ權九様氣遣ひせまい。此上の浮瀨に今の侍衆がゐらるゝ。賴んでばらして貰はうか。よかろ／＼サア來いと。尻引搦げ清水の坂をしどろにへ上り行く。フシかくとも知らず南與兵衛。觀音へ參詣し賣殘りの笛賣つて往のと。舞臺の上に荷を下し。子供集める曲笛の高音も風もひいやひや。ひしいでくれんと權九郎佐渡七。つ

つと寄つて南與兵衛が。兩の小腕しつかと取る。詞最前おのれは侍衆によう慮外ひろいだな。地目に物見せんと捻付くる。心得たりとはり退け打据ゑ。詞又立上つて取付く二人が腕捻上げ。右と左へもんどり打たせ。朸追取り脊骨肩骨 フシ薙立つれば。地思ひ掛けなき後より郷左衛門有右衛門。物をもいはず切付くる身を掻沈み持つたる朸で丁ど受け。詞ヤアだまし斬りとは卑怯者と。拂へば付入り付込むをぱつしと彈き。地飛んづ跳ねつ働けども相手は四人に我一人。朸も難なく切折られ。笛を釣つたる傘追取り拔けつ。潜つつ受流しては後退り。詞隙を窺ひ勾欄に。飛上ればどつこい遣らぬと切込む拍子。地舞臺をひらりと一飛びに飛んだる傘に。風持つて。コハリ次第に下ればナホス舞臺には。二人の者が口あんごり。傘を力に南與兵衛畠の中に下り立つて。舞臺を見上げ。うつそりども。それにゆるりと。けつかれとどつと笑うて畔道を長町指。して 三重ヘ立歸る

第二 相撲の花扇に異見の親骨

詞茶を參れ〳〵〳〵。中入迄の勝負附。かちまけの勝負附〳〵と。地重言多き。賣聲も。地高臺橋の南詰。今日七日目の大相撲贔屓々々の玉の汗。濡髮贔屓打混ぜて芝居張裂く繁昌に。扇の花は雨と降り。羽織もぽいと堀江中。佛浮出る阿彌陀池。フシ人の浮氣は嘸あらん。地フシ濱端へ。掛出す茶店札賣場。コハリ川は御座船幾何艘。地木戸は大入明日御出の張紙や餘る見物横町筋。竹の行馬に立留り。編笠着たる七賢人。殘り多げに寄集り。詞何と甚い大入。今の鬨聲が中入さうな。どうでも濡髮勝ちますの。七日が間土付かず三ケの津の前髮。第一立身取。左でも右でも指したが最期。こりや〳〵と持つて出る。留めると。捻るか 地或は無双と フシ仕方話に連の男。詞何と大山と相引は何方が强かろぞいの。いや今日は關同士取らぬげな。ア、何方にやら痛みが出來た其代りに。下の屋敷の抱相撲。濡髮ととらしてくれと。どれやら大身な侍衆の所望故。勸進元頭取方が濡髮へ段々の賴み故。是非なう一番取るげなの。ヤ是は見たい勝たしたい。あれ〳〵辨當口が透いて來た。地此間に割込も押込もと オクリ皆々へ打連れ フシ急ぎ行く。地 川風に フシ 天幕閃く石疊。堅い約束變らじと。本フシ吾妻都が フシ物思ひ。浮かぬ君達勸め込む。長地船の一字の讀聲や 皆 一様の襠は是ぞ龍頭鷁首と。フシ橋行く人も行き悩む。地引舟外山が上調子。詞爰らがよかろ舟留めて。まだ相撲は果てまいか。太夫主一つ上りませ。市彌お銚子〳〵。

あいの返事も。ヲ、それ手元見や口からぢよろ〳〵出ろわいの。一つ上れ氣が浮かぬと地いへど吾妻は浮かぬ顔。詞イエ〳〵洒置いて貰ひませう。それはさうと都さん。與兵衛様はどうぢやいな。日外浮瀬のやつさもつさ。皆貴方のいかいお世話。あの様な男氣な立派なお方に五郎様をあやからしたい。今日も首尾してちよつとお出でと文に委しう知せしに。今において便がない。それで可笑しも何ともない。地但しは舟で來てゞはないかと。見廻す向うの紅梅に。ちらりと見えし與五郎を。都は見るより小手招き早う〳〵。詞コレ外山主五郎様の舟へ吾妻様を貸しまして。ちやつと〳〵に地氣轉して。詞サア吾妻様御越と。地呼ばれての戸山。舳先に立つて舟の綱。フシ結び合嬉しさ機嫌も直り。五郎様何故に遲かつたと。問はれて與五郎されば〳〵。詞先刻にから此舟へもう往かうか〳〵と思うては居たれども。惡者の郷左衛門。有右衛門めが家來共を見え隱れに付置いて。浮瀬の意越晴し。サア弱い者は歩に取らるゝ。とかういふ中にも氣味が惡い。長五郎が相撲しまひ次第來るであろ。彼が來れば千人力。あの濡髮は此方の親父の大氣にいり。地體は家來筋なれば身請の相談



諸事萬事。此中から頼んで置いた。追付け芝居も果てるであろ。委しい事は明日の晩。地見付けぬ中に早う往にた〳〵いと。元來正氣おぼこ育に氣の急く都。詞コレ吾妻主。あの舟へちやつとお乗り。それから恨みなり拗ねなりと。地早う〳〵に外山も共に。詞あれ〳〵相撲が始まるやら柝が鳴る。お仕舞ひ次第に早うお歸し。それ〳〵此方等は酒にせう。此都が行司人。西は五郎様。東は吾妻主。地やつと取つたり障子をぴつしやり。さすが曲輪の手なれども。フシ惡所仲間ぞ頼もしき。地芝居はさわ〳〵賑ふ聲 フシ風が物いふ名乗聲。詞小松山〳〵〳〵。此方神樂々々神樂。地どよみを作る見物に フシ札賣る男も走り行く。地東の方からいきせきと歩み來るは與五郎が父親。東からげの山崎與次兵衛。年は六十二か三か始末親父のかたくな者。荷持丁稚も遅れ足趁跛ち



が〳〵泣面抱へ。詞申し〳〵親旦那様。些お休みなされませぬか。肩も足も堪りませぬ。エ、きたない奴ら。道なら只七八里山崎から一息。晝休みは北濱のお屋敷これも立ちながらつい爰迄。それにちよこ〳〵休んだら茶の錢も堪らぬ。幸ひ爰に茶店些の間休まさうと フシ床几に掛かればアイお茶上りませう。詞イヤ飲

みたうござらぬ火を借るばかりぢやぞ。わいら渇くなら飲め。徒茶飲むな腹が損ねるぞ。イヤ亭主相撲はきつい繁昌追付け果てますか。イエ／＼今面白い最中。今日は濡髪と。ア、どれやら屋敷方の抱相撲との所望ある筈。ちと御見物。札一枚が六十八文。中木戸が七十八文。おつと待つたり。ドレそこな十露盤貸したり。サアいうたり。エ、札が六十八文。これが三人で二百十二文よ。中木戸が七十八文。これが又三人で二百四十二文。中棧敷が七百六十。ヲイ七百六十。上棧敷が一貫八百。ホイ。一貫八百。これに酒が小半。マア三十よと。蛸の足一本が八文。三太めが小豆餅が十で十文。コリヤ久三わりや下戸か。ハイ酒も餅もよござります仕舞うた。此奴がかいぜで二十よ。惣〆三貫八十二文。これに目が四文こりや目が出るよしにせう。わいらもよう心得て錢徒に使ふな。三貫八十六文大抵では儲けられぬぞいやい。此錢を使はずに一つにして濡髪に遣れば。結構な正月ごが出來る。ま些休んで評判聞けば見たも同然地フシどれ茶一つといふ折から。地忙しさうに白臺に卷物十本靑緡十貫樽肴。進上札の立派な手代。やれ往け／＼えいさつさ笹まめこと。行過ぐるをば目早の與次兵衞。早くも見付け。詞こりや／＼／＼庄八。々々と地呼掛けられて喫驚り敗亡。詞ハイ親旦那與次兵衞樣。お駕籠にも召しませず何處へお越し遊しますと。地大地に三つ指氣の毒顏。詞ハ、ア遣るわ／＼。笹まめこ。味やるわ、ヤイ與五郎めは何處にをるサア。有樣に吐しをれ。地體此番頭の權九郎めがうつそり。此度の爲替銀の事につき。おれが直に來る筈なれど折節惡う持病の疝氣。それ故にこりや權九郎倅ばかりは心元ない。其方が屋敷々々の勝手も知る。萬事氣を付け見習はせよ埒明き次第連歸れ。隙がいる程大阪の水に味が出來ると。底の底まで念を入れ。今日戻るか。明日は歸るかと待てども／＼いかな事。此月で丁度足掛け三月。人をおこせばイヤ屋敷々々に御用が出來た。イヤ爲替銀が埒明かぬ。明かずは明かぬやうの議定をしてなぜ歸らぬと。地目先の舟。見ても見ぬ顏そ知らぬ風。詞コリヤやい此樣に隙のいるのは尤も。新町の傾城共に。鼻毛讀まれる與五郎め。權九郎めも汝めも。踊り狂うて笹まめこ。コリヤ。山崎から爰迄一人前三十で乘合に乘せる。三人で九十。それ程の錢惜むではなけれどな。一文でも費な事に遣ひ果せば銀の冥加といふもので。思ひばかが行かぬものと。皆悴めが不便さに始末するわい。内に居ればうそ高い金魚だらけ。あの金魚が何の役に立つ。喰はれはせず

沙魚より劣り。外へ出づれば手放かけ。其大分の進物ども大抵の銀目ぢやない。錢三十の乗合にさへ得乗らぬ親。御子息は大方あの様な屋形舟に乗り散らし。お山と一つ所に酒を飲み。笹まめこうで 地あらうがなと。舟を睨めつけ〳〵て。詞サ與五郎め連れて來い。サア往け失せろと迫立つる。地舟の内に吾妻がハア〳〵。與五郎はフシ夢になれとぞ踊み居る。地庄八見るより卽座の間に合ひ。詞イヤ若旦那は先程中入まで見物遊ばされ。いかう頭痛して目が眩ふ様な。是では堪らぬ。定めて。親父様もお待兼ね。兎角親父様に早うお目に掛かりたいと。駕籠に乘つて直ぐに山崎へお歸り。私も御供と存じたれば。いや〳〵汝は此進物どもおれが遣るのではない。藏屋敷より託つた。長五郎へ渡し請取とつて屋敷へ渡し。地跡から追付けでござりますとフシ間に合はすれば。詞ム、何ぢや。與五郎は病氣故山崎へ歸る。其進物は屋敷のぢや。ハイ。左様でござります。ム、それならそれにして置く。慥にさうか。いやモロも腐れ。えいわ病氣とあれば是非がない。幼少い時からの虫が直らぬものであろ。是から夜通に遣つてくりよ。したが此奴等が足が立たぬ道から辻駕籠でぼつ立てう。コリヤ庄八。長五郎に逢うたらおれも些用事があつて下つたけれど。與五郎が病氣故折歸りに往ぬ。相撲しまひ次第見舞ひがてら來いといへ。今日も下つた序に中風の藥で。相撲も見たけれど錢がたんと入りもする何やかで往ぬ。此方へ來たら村中の若い者共寄せて。錢要らずに取らして見よ。嫁のお照も喫驚せう。權九郎に逢うたら。銀の事首尾して早う歸れと地いへと。かきたくる程いひつけて。詞ハアまだ忘れた。其進物の序に此扇一本。今朝卸した十二本の加賀骨。要は象牙花ぢやというて長五郎に遣つてくれ。いよ〳〵悴は病氣ぢやな。ハイ。いよ〳〵藏屋敷のぢやな。ハイ。地慥にさうと舟の内。肝腎要の所をばいはぬ心の親骨は フシ疊み込んでぞ歸りける。地庄八ほつと吐息つき。若旦那お聞き遊ばしたか。聞いた段ではない發明々々。ほんにまあ庄八主いかい働き。もう私や怖うて顫うてばつかり居たわいなア。何卒庄八濡髮に逢うて。太夫が身請の事頼んで。今夜中に往なずは又喧しかろが何とせう。そこらは庄八呑込んでをります。先づ此進物を濡髮へ。あれ〳〵名乘の聲がする。地諸事は後程々々とフシ大木戸指して行く内に。詞濡髮〳〵〳〵。放駒〳〵〳〵。是今日の結びの闘と。地内外の評判とり〴〵に。何方が勝つか知らねども一度にどつと鬨聲。木戸はもやつく果太鼓明日も疾うからどんからの。

音に揉まれて諸見物潮の湧くが三重如くにて。フシもやつく中に。詞サア〱吾妻様ちやつと〱。鄕左衛門有右衛門様追付け爰へ。地見付けられては大不首尾。早う〱に綱解きフシ舟遠ざけてゐる所へ。地見物群集に打交り平岡鄕左衛門三原有右衛門。問屋の手代が御供にて跡に附添ふ角前髮は。大寶寺町の一番息子放駒の長吉。數多の見物押合ひへし合ひ。あれが屋敷の抱の相撲。よう關取樣。見事な勝出來た〱に煽ぎ立てフシ濱際。さして送り來る。地鄕左衛門舟よりも。詞コレ〱放駒關取々々と地招かれ船へ飛び乘れば有右衛門。詞長吉きつい勝。鄕左殿。吾妻殿の身請の儀も。金の工面埒明く瑞相。與五郎めが腰押の濡髮に勝つたは目出度い一つ飲も。イヤ此鄕左衛門が思ふ壺。飛入りといはゞ長五郎めが立合はぬは定の物。其所を拔からず町人の長吉を抱の角力放駒と僞り名乘上げたればこそ。今の角力勝つたは手柄。いよ〱太夫が身請の世話も賴入る。いや爰は船中。地諸事は座敷で船遣れ〱。はつと心得フシ船押出せば。地與五郎吾妻互に。頷く顏と顏。遠ざかつても離れぬ思。契りも深き堀江川。フシ別れてこそは行過ぐる。地與五郎も氣詰りと船より上り跡見送り。詞コレ船頭。おれは徒歩で往ぬ程に迎をおこせと。九軒の井筒屋迄いうてたも地ハア、心得ましたにオクリ船押へ切つてフシ別れ行く。地木戸口よりも濡髮長五郎。評判一の角前髮。大郡内のふとり肉鮫鞘さすが關取と。フシ一際目立つ。男振り。地與五郎見るより。詞長五郎〱まあ〱爰へと。地茶屋の床几に招かれて。詞ホ、若旦那爰にお出で。コレ茶店の一寸賴まう。あれ〱〱向うへ行く船に追付いておれが名はいはずに長吉殿に急に一寸お目にかゝりたいと。誰やら待つてござるというて返事聞かして下され。近頃大儀に地はい〱とフシ其儘走り行く跡に。地濡髮贔屓の與五郎。マ、腰掛きやかゝつた事ぢやない今日の角力おれは力がとんと落ちた。太夫も今迄彼の客と船にゐたが。力落して今往んだ。鄕左衛門や有右衛門めが放駒を譽めくさる胸の惡さ。吾妻身請の事埒明く吉左右と悅びくさる。おれも船へ飛込んで存分いはうと思へども彼方は强しおれは弱し。兎角吾妻が事が苦になる上。其方は負けるこりやまあ如何せうと。地むしやくしや腹の詞を押へ。詞イヤお氣遣なされますな。相撲は放れ物。負けたが負け。先程庄八殿のお目にかゝり。親旦那の噂殘らず聞きました。先づお前は宿迄お歸り遊ばされ。金の工面なされませ。五日や十日隙いつても濡髮呑込んでをりま

す。脇の手へやる事ぢやござりませぬ。改めて申すに及ばねども。私が母者人はお前のお袋様の召使。私は八幡邊から養子に貰はれたげにござります其お袋様もお果て遊ばす。母も病死其上段々お世話に預りし大恩の與次兵衛様。その若旦那のお前長五郎めが命のあるうちは。吾妻様の事世話致さいで何と致しませうと。地詞半へ茶店の亭主。詞申し長五郎様。長吉様がそれへ參るとでござりますおつと合點。サア／＼お歸り。コレ亭主。又賴も。此お方新町まで送つて上げまして。追付けそれへ參ります。地隨分早うと與五郎は。フシ亭主打連れ歸りける。地早や暮近き濱側の。茶店日當に放駒。慥かこゝらとフシ見廻せば。地濡髪見るより。詞イヤこれは御苦勞。サア／＼爰へ／＼と。地招かれて放駒。詞エ、一寸逢ひたいとのお使は濡髪殿。こなんでえすか。成程々々此長五郎。些其許へお賴み申度い事もあり。又外にお話致さねばならぬ事サ、サ是へ／＼。いかにもと。地互におれそれ床几に並び。腰打掛ける前髮同士。四角な十の二枚物。フシすは事こそと見えにけり。詞イヤ長吉殿。お名は節々聞及べどしみ／＼逢ふは今日の相撲。扨きつい身鹽梅小手の利様。へゝ何とごんすか。イヤモけうとい達者。イヤ／＼。コレ長五郎殿。何やら話したい事があると人をこしたは其事でえすか。いや／＼。賴む事は外の事でもない。今日の棧敷のお客ナ。お侍さうな。アイ。さうでえす。それが何とぞしたかな。イヤ何ともせねども其お客が。此間新町の藤屋の吾妻を身請の談合。其吾妻殿には。先からの馴染。卽ち我等が親方筋。若い人なり殊には部屋住み故身請の金ごと。我が物で我が儘ならず。此金のたんぞくする間も今四五日。其中に貴殿の方のかのお客に請出されてはと其所が今の若い同士なり。何ぞ言交した詞が立たぬとやらいふやうなむちやくちやした事があるさうなぢや。そこで私は家來筋の事なり。コリヤ長五郎。彼方へ遣つてはおれが立たぬ。汝どうぞ先の客に逢うて斷いうて。此方へ請出さして下されとほんの子供のやうな若い人。私ちやというて近付ではなし。何とせうと思ふ折柄貴殿と今日の立會。これは幸ひ大阪同士若い同士。其お客のお氣に立たぬ様にそこらをなコレどうぞ。イヤこれ。／＼／＼長五郎殿。詞半ぢやが。こなんのいはんす親方筋とは。山崎の與五郎殿の事でえすか。いかにもよく知つてぢやなア。知つてゐやんす。其與五郎殿の事について。吾妻殿の身請の相談。私も又成程侍衆に賴まれ。金の工面するうち。與五郎に請出されては立たぬ程に長吉賴

む。金の才覺する間脇へ遣るな。殊に向うには濡髪が肩持つ程に。汝を頼むと頼まれます。私も亦與五郎殿とやらと吾妻殿ばかりなりや。侍衆に斷いうて。イヤそんな世話はいやでござるといふまい物でもないてや。慾か濡髪が肩持つと聞いたによつて。どうやら長吉が濡髪が怖さにへり口いうと思はれるも面倒なり。又友達仲間もそんな物ナ。さうぢやごんせんか。ム、。天晴男。ぢやが。其所ぢやてえ。何處でえす。イヤ其所が男同士。平押しに頼みたい事あればこそ今日の相撲。放駒と名乘を上げた。見れば長吉殿こなんぢや。これはよい所と否應なしに立合うたはア、置かしやれ言はしやんな。そんなりや。この長吉に此事を頼みたいと思うて今日の相撲をえいやうにしたといふのか。イヤさうではない。イヤ〳〵。ふつたのぢや。おれがめんような貴様は評判の取出し。どうで子供弄るやうにするであろ。おのれ左指いたら。喰付いてなと遣つてくれうと思ひの外。ヤツトいふとずる〳〵持つて出た。其中に團扇は上る。合點行かぬと思ふたがふつたのぢやの。投げるなら投殺して置いて。又改めて頼む事なら面白い引きはせぬ。其様な人に物遣つて跡から金の無心いふやうな。むさい長吉ぢやごんせぬ。めい〳〵の心に引較べ。へゝそりやもう慮外ながら。お關取には似合ひませぬ。イヤ長吉殿。さういはんすりやいから爰で喧しなるぞえ。喧しなつたら何とするえ。さればさ。與五郎殿と其侍衆とが。めつきしやつきになる所で貴様と私とが立譯。まだ半分道も行かぬ中爰で互に言ひ合うたり。打つたり蹈んだりするは喧嘩の地取するやうな物。其方の身請も今日明日に埒明くでもなささうな。今四五日の事此方も二三日には埒する筈。どうぞ。ナ貴様を頼む其方の。金の隙いるやうに。エ、どびつこい。其樣な工面仕か邪曲者のいふやうな事はいやぢや。叶はぬ迄も其時になつたら腕づく〳〵。邪曲商賣いやでえす。イヤ長吉殿。長吉よ。餘り頤があがき過ぎるぞよ。與五郎殿の事については。長五郎が命でも差上げにやならぬ筋があればこそ。男の手を下けていふのぢやないか。それをおれが知つたかやい。サ知らぬによつていうて聞かすのぢや。モウえい頼まん。聞分のない者に物いふは放駒の耳に風。隨分侍の腰おせ。そりや知れた事。是から内の商も構はず。姉者人が勘當しらりよと儘よ。隨分貴樣の邪魔せうわい。ホ、侍が拔いて切掛けうが。何奴が拔いて掛からうが。額に濡髪。鎖鉢卷より慥かな請人。ハ、切惡かろ。ム、まだ鞍味知らぬ放駒。人中で馬

乘に逢うた事がない珍らしう蹈まれて見よわい。見るか。ヲ、見る。地見せうと互に。惡口睨合ひ。思はず立つたる茶碗と茶碗。フシ手に持ちながら。コリヤ長吉。詞此茶碗のやうに物事がナア圓う往けば重疊。長五郎。長吉と。此樣に破れたれば。ハテ繼がれぬ角ひし。重ねて。〳〵。地別れて。こそは 三重へ歸りけれ

第三 揚屋町の意氣づくに小指の身がはり

地寂光の都は爰ぞ。四筋町九軒常夜の闇を照らす。フシ井筒が元の賑しさ。地數の菩薩の來迎と五百羅漢の末社ども。紫磨黃金の肌を目がけ。我も〳〵と入來れば。客は卽身成佛の フシ帶紐解いて大騷ぎ。飲めや唄への責念佛願以此功德醉ひつぶれ。屛風の涅槃に入るもあり。實に新町を西々と彌陀の。御國をいふ如く。救ひ取られて粹となり悟。フシ開かぬ人もなし。地騷の內に吾妻と都。領き合うて座敷を拔出で。詞コレ吾妻樣。私が身には難儀が掛つた。せつないことが出來たわいな。アノ嫌な權九郎が。請出すというて親方と相談。年も僅か一年足らず。談合しめて二百兩。今宵持つて來たといな。マア如何したらよからうぞ。地思案して下さんせ。詞思案というて急な事。與兵衞樣は知つてかえ。サア昨日八幡へ飛脚を遣つて今日見える筈。用が出來たか今に見えぬ。スリヤ差詰め駈落ぢやわいな。何いはんすやら。お前程駈落々々と。駈落して後がつまるかいな。サア詰らぬからの駈落。私も鄕左衞門が放駒を連れて來て。百兩の手附を渡そといふ。これも與五郎樣から。今夜手附の渡るを聞いて。僅か渡して邪魔する思案。ひよつと山崎から今宵中に見えさ。どうせうぞいな都樣。ヲ、あの樣は。私が事を相談すりや。お前の事をまんがちな。ハテ悲しければ身一心。餘所の事には手が屆かぬ。此與五郎樣は遲い事。地此まあ與兵衞樣は何してぞと。フシ同じ思も限り前。地帮間仲間に大事と廓中は上を下。騷ぐ中より駈戻る亭主利八。詞コレ〳〵太夫樣方。大きな事が出來た。大門で帮間の佐渡七が切られた。そりや誰にえ。誰を知つてよいものか。さすがの我等も存ぜぬ〳〵。さりながら。追付け捕へるよい手がかり。お前方にもいうておこ。佐渡七めは大摑。死ぬるというても只は死なぬ。相手の小指を一寸程喰切つて銜えてをる。檢使のお役人の仰には。是は大抵の惡者でない。相手は殺すまいと思うてか。いづれも微傷。指に喰付かれた故是非なう殺した物と。それは〳〵細い見やう。とかく指の無い者が殺人と。廓中を指改

め。地此方の客も。何時詮議に見ようも知れぬ。詞ヤア夫に就いて都様。奥にごさる權九郎様のお頼で。お前の身請さつぱりと埒明けて置きました。今夜でも。手を引合うてお出なされ。祝うて一つ食べましよかい。ヲ、利八様の嫌らしい事いはんす。アノ權九郎のどぶつに。請出される事嫌ぢやぞえ。イヤそれでは濟まぬ。地體權九郎様どいふお方は。吾妻様のお客の。與五郎様のお手代。親方と違うて大ねだり者。いつぞや浮瀨で。何やらもや〳〵した事もあつたげな。それから滅多に請出す相談。それは格別。今いやと仰しやつてもいはしては置くまい。斯うなされぬか。幸ひ吾妻様の事について。郷左衞門様や放駒殿が。親方を呼びに遣つて置かれた。密かに親方に逢うて。一年足らずの年を。二年にもしませう程に。請出さして下さるなと頼んだら。呑込むまいものでもない。つい嫌とばかりではすまぬぞえ〳〵。いか様さうぢやわいな。そんなら往て頼まうかい。一時も早うお出で。我等も傍から相槌。地サアござんせとフシ引連れる。詞コレ都様。序に私が事も頼むぞえ。ヲ、それも合點と行く跡に。地同じ思の吾妻が案じ。あの身になつたらどうせうと。スヱ思ひ惱みてフシゐる所へ。地頰冠にて顏隱し。駈來る男は南與兵衞。息を切つて。詞コレ其所なは吾妻殿ではないか。誰ぢや與兵衞様か。テモよい所へござんした。都様が待兼ねて。イヤコレそこ所でない。幇間の佐渡七めが。大勢の非人を頼み待伏せ。とつて抑へる拍子。小指をくはれて是非なう手に掛け。逃出ようも門は締めたり。何卒暫く忍ばせやうはあるまいか。ヤレ聲が高い　奥へ郷左衞門や放駒も來てゐる。お前と敵同志の權九郎。皆佐渡七贔屓の惡者。とはいへ氣遣ひさんすな。地清水での恩もあり。私が隱匿うて上げませう。市彌來いよ。あいと返事も長々と。走り來れば。詞コレつい爰へ床取りや。エ。はて貴方と二人ねるわいの。あい地とはいへど子供氣に。フシ不思議立ててぞ入りにける。詞イヤ吾妻殿。さうゆるがせな事ぢやない。じやら〳〵とお弄りなされずともちやつと〳〵。ハテ女郎の寢間は。お侍様の城屋敷も同じ事。屛風一重が。鐵の楯とやらぢやわいな。地女郎の手管はこんな時と いふ間に禿が夜着蒲團枕二つに煙草盆。詞これでよいかえ。ヲ、三味線おこし奥へ往きや。地あいと差出す唐桑の。胴のよいのを頼みにて。與兵衞は暫しの隱れ家と。フシ夜着引被き身を隱す。地吾妻はしやんと腰打掛け調子合して彈きかける。三筋の糸は細けれど。心は太き一節に。歌身を捨てる。里あれ

ばこそ浮瀨の。ナヲス地三味線半へ駈來る都。コレ吾妻殿。詞今市彌が話で聞いた。其方は與兵衞樣を色にして。與五郎樣や私が手前。顏の皮が千枚あるか。歌あるを賴みの憂き勸め。詞コレ三味線彈いてぬからぬ顏おきやいの〳〵。引出して赤耻かゝそと。地ずつと寄つて寢床を。引捲らんとする所を。ちやつと押へて。歌渡り競べて名を流す。詞ヲ、其名を廓中へ流さうと。地又取掛るをコレ都さん。詞さう急かんしては何にもいはれぬ。こりや與兵衞樣ぢやない外の色。顏見せる事マアならぬ。ハ、、。隱したとて隱さうか。外の色なら猶の事。見掛つた顏見ずに置かうか。地其所退きやらぬと是ぢやがと。煙管を取つて振上げる。詞マ、これ是非見たかこれ見やと。地與兵衞が片手の切れた指。引出し見せれば都はびつくり。詞ア、此指は。コレ大門口で是程に。心中立てゝ下んした與兵衞樣。色にしたが誤か。但じは突出し世間へ見せうか。サア〳〵どうぢや都さん。コレ〳〵誤つた大事の。〳〵男故。氣が廻つて疑うた。よう色にして下んした。地コレ手を合す何事も堪忍してと詫言の。聲が洩れたか權九郎。詞都其所にか手が惡いと。地いひつゝ出でて。詞コレ吾妻殿聞いて下され。私がよく〳〵に思へばこそ。今親方の手前不首尾でゐても。二百兩といふ金を出す。亭主を賴んでさらりと埒の明いた後で。女房になる事はならぬ。嫌ぢやと跳ねきられ。お乳の人の。乳ふつつりに逢うて手も足もない。地何卒其許のお世話で。コレ得心させて下され。一生の御恩忘れは置かぬと。フシ三拜九拜其間に與兵衞が蒲團の下より。吹込む品を吾妻は呑込み。詞イヤ權九郎樣。都樣の合點のないは。是迄お前の。仕樣が惡いでがなあろ。イヤもうよいも惡いも。遂に〳〵按摩取ろより外。手を指いた事もない。イヤイナ。惡いといふは浮氣ばかりで。地眞實可愛いといふ心中が。見えぬによつてぢがなごさんしよ。詞ヲ、あの吾妻樣のいはんす事わい。其心中立が猶嫌ぢやわいな。コレ〳〵都樣惡い合點。貴方が心中に。指でも切つてくれる氣ならナ。これな。夫婦にならうといはしやんせ。ちやがそれ程にはあるまい〳〵。いやそりやはや女房にさへなつてくれるなら。腕なりと股なりと。地望み次第に指でも切らう。詞アレ聞かんせ。指でも切ろといな。サそれが猶。コレ指がないと。可愛代りになるぞえ。ハア、さうぢや。コレ權九郎樣。地私をほん〴〵に思うて下んすなら心中に指。ナ吾妻樣。ソレソレ。そりや易い事。二百兩棒に振ろより指一本。望み次第切らいでならうか。イデ

地目の前でと。枕を臺に脇差を。當てごとは當てながら。迷惑さうにもぢ〳〵うぢ〳〵。詞どうやら今夜は切りとむない。胸が踊る蟲が騒ぐ。地エ卑怯なおさんと二人して。手取り足取り枕を槌。ぱつしりいはせばあ痛しこと。轉ける間に指拾ひ。其血を直に脇差へ。押塗り〳〵。フシ鞘にうつして出來た〳〵忝い。詞爰な心中男めと。地しと〻打たれてにつこりと。痛い笑顔に二人とも。フシ堪らずどつと打笑ふ。地折柄來る所の役人。亭主は居ぬか。亭主々々と呼ぶ聲に利八は駈出で。はつとばかりに蹲踞る。詞大門口にて人を殺した相手の詮議。客どもへ言聞かせよ。先づあれなるは何者。則ち彼方もお客でござります。ム、町人さうなと傍へ寄り。サア其方兩手を出した。エ。指を吟味する兩手を出したさ。ハイ。利八何の事ぢや。成程お前は合點のいかぬ筈。今宵大門口で。幇間の佐渡七が殺され。口に指を銜へて居る。指のない者が相手とあつて御詮議。何の事はない。手を廣げてお目に掛けられませ。何ぢや。そりやどの指が。改めた所で慥かに小指。エ、。あの小指が。ハテ扨此奴きつい仰天。ソレ家來ども吟味せい。地畏つたと引捕へ。屈める腕や指先を。引出し見るより。詞扨こそ此奴に小指がない。其奴く〻れの下知の下。地捕つたと投げて掛ける繩。詞アア申し。これには段々申譯。私は山崎與次兵衛が手代。權九郎と申す者。此里へ通ひたつた今。あの女郎に何がなんと。ハイ〳〵。あんまり阿房らしうて申兼ねます。コレ二人の衆。爰へ出て言譯して下され。アノまあいはんす事わいの。私らが言譯で。地濟まうとも思はぬナ利八樣。詞ハテ相方の女郎は女房同然。緣者の證據で役に立たぬ。何卒私が言譯して上げましたい。ヲ、それ〳〵。思ひついた事がある。人切つた脇差と。指切つた脇差は血のしたひで忽ち知れる。地これが證據と脇差を。拔きかけ見るより南無三寶。詞鞘の内迄血だらけ。これではどうも言譯立たぬと。地聞いて役人。詞イヤそれ迄に及ばぬ。山崎與次兵衛が手代權九郎なれば。外に御詮議の筋もある。地屋敷へ引けと引立つる。小事は大事の基となり。蟻の穴から堤とは オクリ 後にぞへ思ひ知られたり。地蒲團引除け南與兵衛。詞扨吾妻殿のお働き。お禮の申し樣もない仕合。今思へば幇間風情を。相手にして遁げ隱れ。さぞ腑甲斐ない卑怯な者と。思召しもあらうが。地年寄つた母持つては。何處ともなしに後髮。思はず未練になりましたと。語れば吾妻も。詞サア私も。ほんの父樣があるげなけれど。逢に逢うた事もござんせぬ。地腹の立つ時は思ひ出すがよい藥。

詞マア都様一間へ連立ち。身が儘になつたこそ幸ひ。打解けてナ。打解けて往かんせなう。地そんなら何かの禮は後にへ。詞先づ人の見ぬ内と。地與兵衛も挨拶そこ〳〵に。フシ伴ひ一間へ立忍ぶ。地吾妻は人の世話ばかり我が待つ人はと立つたり居たり。焦る丶念の通じてや。山崎より與五郎。濡髪引連れ太鼓過ぎ。足を早めて入り來れば。詞ヤレ待兼ねたお前も氣が急こ長五郎様。地よう連れましてと挨拶も。フシ心一杯禮ならん。詞イヤモウ。若旦那の足元きついもの。駕籠では遅いというて飛ばれた〳〵。サア其飛ぶ跡から濡髪が急ぐ足音。どうづきするやうで一倍飛ばねばならぬ。扨まあ聞かう。郷左衛門が手附を渡すと。いうてお越しやつたがさうか。サア文でいうて遣つた通り。お前の方から手附打つと聞いて。放駒を頼んで金の才覺。やう〳〵と長吉

が。百兩調へて持つて來て。多い少いと親方と詰開き。地あの百兩が渡らぬ内に。此方の手附が渡したいと。それでいかう待兼ねた。詞もう先刻にからせりふも濟んで。金渡したか其所が氣遣ひ。フウ。長五郎どうせうの。大事ごんせぬ〳〵。今夜の夜明迄に此方からの手附を渡そ。それ迄外の手附を取りやんなと。親方に底入れて置いた。僅か彼方は百兩。此方は三百兩。高が長吉づれを頼んで。金拵へて貰ふやうな侍。跡金の五百兩が何處から出るもの。イヤさうもいはれぬ。あの郷左衛門めは大工面仕。お國から米が登ると。それを賣拂うて。直に請出す手筈ぢやげな。ア、それでは首が飛びますわいの。イヤそれでも氣遣な。よごんす。それ程氣遣なら此三百兩渡して來う。地幸ひ親方も來てゐる。詞又長吉が來てゐると聞けば。渡すにも張合があつて面白

い。吾妻様些の間。休まして置いて下さんせ。遠道の草臥れ。地よう摩つて上げましてと。戀の譯知り色知りて。フシ濡髪とこそいふやらん。地吾妻は四邊見廻して二つ枕の敷蒲團。これ幸ひとコレ與五郎様。詞彼所へ往て寝よ一寸ごんせと。地手を取れば置かしやれ。詞此間は揚詰。帯解くに飽いてゞあろ。明日からは我等が買分。先づ奥へお出でなされ。侍の餘り物食べぬ〳〵。コレそりや何の事。郷左衛門とお前といつぞやの揉合から。十日づ丶分けての揚詰。それでももの二日。逢はぬ夜はないぞえ。あの客も今夜限り。明日からはお前の日柄。一時と二時と早うねたれば罰が當るか。地私や勤の始めから外の客のはだ知らず。お前とねれば サハリ心とけ肌着の。袖のてを拔いて。はだとはだとを合はさねば。ねたやうにない私が氣を。知つて居ながら

悪口にも。帯とくに飽かうとは。そりや餘りなおしやんしやう。外の客に帯といて。お前の心ば。ナホスフシ済むかいなア。地 済むなら済ましておかんせねて貰はいでも大事ないと。ひぞりかけられむつと顔。詞 さういふからは此方も意地。何ぼでも寝所へ往てねてくれうと蒲團の上。ころりと轉ければ。エ、其口が猶憎い。ねさしはせぬと引捲り。ともにそひねの木枕は。フシ よいなかだちと見えにける。地 流連の郷左衛門。始終を見すまし。何でも此奴よい料理と。飛掛つてはつたと蹴飛ばし。これはと起きる與五郎を。取つて捻ぢ据ゑなうこれと。縋る吾妻を跳飛し。詞 ヤイ爰な大ずりめ。身が揚詰の女郎。一夜妻とはいひながら。女房同然。目を盗むは密夫。不義者め盗人めと。地 腕の骨の續くだけ。引廻し〳〵。捻付くれば吾妻は悲しく。詞 コレ郷左衛門様。

め。お前の揚詰も今日きり。明日からは與五郎様の日柄。限の太鼓打ちたれば。明日の客を勸めるが此里の習。元より貸借といふ事もあるぞえ。無體な事を言掛けて跡で難儀をさんすなえ。ヤアぬかすな。此郷左右門田舎者。此里の習ひは知らぬ。あたまで十日の約束なれば。夜明の太鼓打つ迄は身が女房。借りた事なければ貸す理屈ない。眞二つと思へども。場所を思うて了簡する。其代りにこの上草履。おのれが面の皮削る。鑢卸ぢやこれ食へと 地 打付け〳〵とてもの事に節々の。砕けて落つるをこたへてをれと。蹴たり蹈んだり叩いたり。兼ての遺恨を一時に爰で晴する無得心。あるにあられぬ吾妻が思ひ。なうコレそれは餘りと。縋りつくを引捕へ。詞 與五郎めが鼻の先で。抱いて寝るのがせめての腹いせ。地 振詰められた其代り。見せて置いての存分と。

地 引抱へ寝所へコレなう誰ぞ人はないか。コレ與五郎様構ふまいぞ。濡髪様長五郎様と呼べど騒が枷となり猶も紛れるフシ 時太鼓。地 夜番の役のどん〳〵〳〵。明の六つもどんくさい。無體をするか無理するかと。噛めど抓れど女業。與五郎も堪へかね飛びかゝらんとする所へ。濡髪の長五郎夜叉の如く駈來り。引放して郷左衛門が。首筋掴んでぐつと差上げ。蹈拍子にづでんどう。起きるを透さず髪。掴んで引寄せ。詞 コリヤ侍。最前此方の若旦那が。八里。の道の草臥で。寝てゐられたを立蹴に蹴やり。よう打擲ひろいだな。限からは明日の日柄と。譯をいへども聞入れず。夜の内は十日の内と。無理をぬかせど刀だけ。宿の難儀とこたへてゐた。今打つた明六つが耳へ入らぬか。太鼓打つと此方の買分。おのれが無理を理にしておいたは。存分仕返しささ

う爲。六つの太鼓を打つたに寢所に何してをる。あのこゝな大ずりめ。不義者めと。地捻付け／＼疊に摺付け。詞コレ與五郎樣。怖い事も何にもない。踏まれた程存分に。踏返して腹癒た／＼。地おつと駈寄り與五郎が。細い足でも恨の胴骨。詞おづ／＼せずと踏んだ／＼。よう最前上草履で、男の面を打つたなア。今打返す受取れと。地目鼻を掛けて丁々。踏んだは斯うか蹴たは斯うかと。踏んづ蹴つつの腹いせに。吾妻は嬉しさぞく／＼踊り。私もこれ迄弄りをつた。覺えてゐるかと煙管の燒鐵。ぴつしやり當てられ身はちり／＼。フシ踏まるゝよりも辛かりし。詞モウよごんす／＼。退いた／＼。これから又。この長五郎が。お相伴に小鯛の燒物。頤かけて歪めてくれうと。地引起して面引上げ。草履片手に振上ぐる。見付けて飛出る放駒。打つ腕先をしつかと取り。詞コリヤ何とする長五郎。ハテ知れた事侍の横面。はり歪るが何とぞしたか。イヤさうはなるまい。ナゼ。與五郎殿は打たれた代り。打返さるゝは了簡もなるが。わが相伴の草履の燒物。箸かけさする事マアならぬ。ハ、、、。われが來てゐる事聞いてゐた故。もう出るか／＼と。待つてゐたれど。餘り遲さに呼出しの草履。此燒物は汝に振舞をかい。へ、、、。其燒物より。此かたしの作身。薄身なれども相伴さそかい。ホウ大阪でも隱れのない。濡髮と放駒。念の入つた料理の出合。辭儀なしに坐ろかいと。地立身をぢつと フシ居合腰。地傍にハアハア與五郎吾妻。侍は腰刀。反打ちかけて詞コリヤ放駒。後には鄕左衛門。鍔元寛げひかへゐる。百萬の加勢と思ひ。氣遣なしに踏込め／＼。ア、邪魔な事いふわろぢやわい。濡髮これで出入はならぬわいやい。長吉が出入に。侍を後楯にしたといはれては。仲間の者へ顏が立たぬ。今夜の出入を延ばそかい。ホウおれも此方の若旦那が。箒持つてぴこしやこしらるるが。目に掛かつてどうやら惡い。いつそ明日の晩の事にせう。何處がよからう。ハテ。お定りの新町橋か四つ橋。其時にこの上草履を眞向と。地互に振上げ。ハハ、、詞是で虫が安まつたと。地二人の荒者につこりほやり。苦い顏する鄕左衛門吾妻奪られて佛頂顏。詞あたどん臭い。今夜程夜の短い事はない。馬鹿な面ども見るもむやくし。長吉來やれと引連れる。地弱みを食はぬ放駒たるみを見せぬ長五郎。門口まで伴ひ出で。詞明日の晩に。四つ橋で逢ひませう。ハテどうで通る道。遲か待つて居ませう。必ず。ヲ、必ずと。地見合す顏は蝶々の花は コハリ茨か鬼薊。引別れてぞ立歸る。地與五郎吾妻は濡髮を

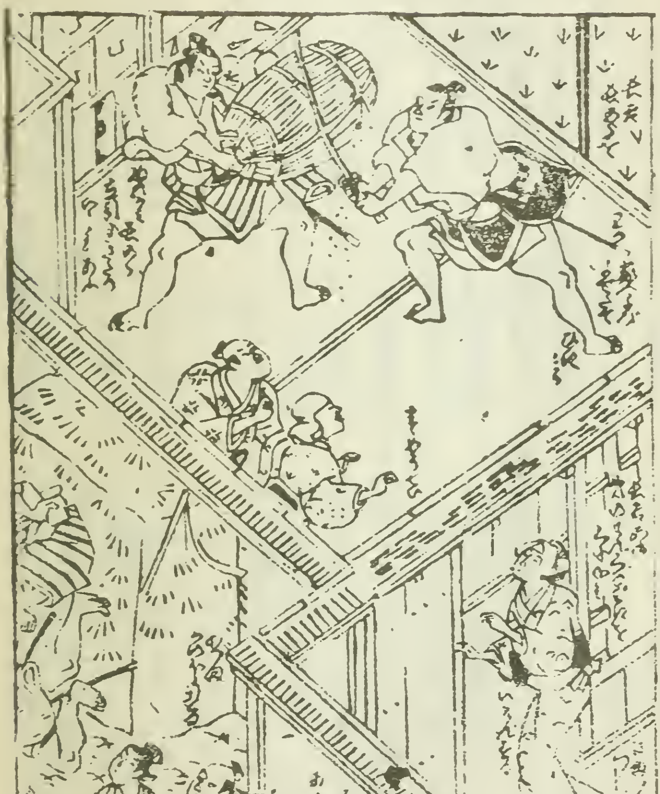
煽ぎ立て〳〵。詞其方の陰で仕返して。胸がさつぱり夜が明けた。ヤア明けた序に最前の。六つの太鼓は七つになるまい。あれ〳〵又六つの太鼓を打つて來る。時知らぬ夜番の寢惚。地弄つて遊ぼと駈寄れば。私ぢや私ぢやと頬被り。取るを透して都さんか。詞こりやどうぢや。最前與兵衞樣の身の難儀。救うて貰うた其代り。六つの太鼓を早う打ち。仕返しさせよと主のいひつけ。先刻に打つたも私ぢやわいな。出來た〳〵。道理で氣疎う早いと思うた。そしてお前はどうするのぢや。地ハテ身請は濟んだれど跡の程が氣遣ひな。時打違へた誤りで。此夜番は駈落駈落。詞出來た智惠者め主めは何處に。辻の番部屋に隱して置いた。ホ、、、跡は長五郎呑込んだ。賴むぞ。地往けと女郎の。袖無し羽織頬被。夜番出立を幸ひに。跡をも見ずして 三重へ行く雲の

第四 大寶寺町の達引に
兄弟のちなみ

中ギン大阪に爰も名高き。島の内。地大寶寺町に年を經て角を絕さぬ搗米屋。一人息子の長吉は父親なしの我儘育ち。姉のおせきはあたふたと店の帳面繰返し。駄賣小賣の石高を。おく算盤の手品迄 フシ男まさりと見えにける。地春雨の向ふしぶきに傘傾け。我が家へ戻る放駒。門口に立ちはだかり。詞この又雨の降るのに俵物をなぜ入れぬ。地のらどもであるわいと。片手に提げ放り込み〳〵。傘下げて内に入り。詞コレ姉者人。此まあ男共は何處へ往きました。サイノ見てたも。一人は頭痛で枕が上らぬ。勘兵衞は心齋橋の鎹屋へ飯米持つて。ムウそれならばてつきり。座摩か稻荷の稽古場へ這入つてゐをろ。いけもせぬ聲で淨瑠璃を語ろより。碓唄の稽古でもしをらいでと。地いひつゝ上れはコレ長吉。詞内人の者のをる前ではいはぬが。人の七難より我が十難と其方も些と嗜みや。内の手廻し諸事萬事この姉に打任せ。明けても暮れても外を家。ア、又姉者人のぶつ〳〵と。世迷言聞飽いた。おれも昨夕は藏屋敷の侍衆に。逢はねばならぬ用もあり。其上に友達共が。出入の尻持つてくれと賴んだ故。夜をふかしつい泊つて戻つたがそれが何としました。アレまだいの。意見がましい事いふとついその樣に腹たちやる。もう今日ぎりで何にもいはぬ。定めて飯もまだであろ。地どれ茶を沸かしておませうと。我が子のやうに弟を フシ思ふは姉の習ひなり。地これも同じ夜歩行仲間野手の三下駄の市。惡鬼共が蛇の目傘町一杯に肩肘を。嚴つがましく表より。詞 長吉内にか誰ぢや。地イヤおれぢやと

打連れて。ずつと這入れば。詞ヲ、二人共惡い日和によう來たな。コリヤ下駄よ。此方の内に雨は降らぬ其傘を窄めぬかい。ほんにさうぢや。したが火が降らいで仕合ぢや。エ、どういや斯ういふどえらい頤。サア／＼遠慮せずと上れ／＼。地ヲ、上らうと泥脚を。からげの裾で押拭ひおいへ一杯伸上れば。地惡者連は猶以て詞優しく姉のおせき。詞ヲ、皆ようござんした。煙草でも參りませ。長吉も空腹かろ。友達衆に斷いうて喰てしまやと。地親の讓りの椀折敷。明けて見ねども弟を思ふ。手づからの。ギン煮焚物盛り並べ。地皆も些と上らぬかと膳直すれば。詞ほんにわいらも食はぬかやい。イヤ／＼世話やきやんな。下駄もおれも砂場へ寄つてナア市よ。ヲ、二八を蹴倒した。こりや膳廻りきつう奢るな。平は大根と油揚。燒物は小鯛の難波煮。こりや甘かろ。イヤもうおれも昨夕の酒で肴は食へぬ。水移といふ腹鹽梅。そんならおれに食はさぬか。ヲ、坐つた物でも大事なくば。是を肴に一つ飲め。姉者人むつかしながら燗して遣つて下はんせ。地ヲ、易いこと／＼。其方の食後におまさうと。爰に燗をして置いた。詞それは幸ひサア二人ながら飲め／＼。そりや忝い。われもちと飲まんか。イヤ／＼おれに構はずと。この汁椀で下駄から始めい。地そんなら姉様たんますと道樂共が酒追從。こりや上燗ぢやと。フシ引請け／＼。差いつ差されつもくが廻つて フシ大肌脫ぎ。詞コリヤ／＼下駄よ。酒がしゆんだに肴せぬかい。ぢやてゝ謠は知らず淨瑠璃は本が讀めず。地ア、よい肴思ひ出したと近所も思はず聲張揚げ。フシ哀れなるかな石堂丸は。ヨイ／＼。父を尋ねて高野へ登る。よい／＼よいやなありや。ナホス詞こりやゝヤイ二人ながらはめを放すな。おれは構はねど爰は町家。アレ姉者人も近所の手前を思うて氣の毒がつてぢや。通筋をぞめくやうに徒口を止めてくれ。エ、われも餘つ程臍より下に。分別のみばえが出來たやら堅い事いふな。ヤア臍の序にコリヤ野手よ。われが臍はいかう黑いなア。その垢取るなよきつう力が落ちるげな。おれは此中取つたので。昨夕新町橋の出入面なとかぶりかいてこまそと掛つたれど。何食うてうせたやら向うの奴が其强さ。既の事しめらるゝのであつたが。長吉が來てくれたで。先の奴めがア、手ひどい目に逢ひをつた。ヲ、そればかりぢやない西口の出入も。この長吉が居合はさすば皆どづかれて戻るぢやあろ。それは格別。われ等も知つてゐる山崎與五郎と。吾妻の事について侍に賴まれ。晩には濡髮とぐつと達引せにや

ならぬ。端喧嘩と逢うて。相手が長五郎なれば生きるか死ぬるか二つ一つと。（地）喧嘩話も聞きづらく姉のおせきは身拵へ。びらり帽子も色氣なき。丸絎の抱帶引緊め／＼コレ長吉。（詞）おれも今夜は同行衆へ志の逮夜に參る。飯も酒も此處にある。喰ふたり進ぜたりしや。あの人も一人なれば。皆も緩と遊んで留守して下さんせ。アイ野手とおれとが留守をすりや慥な／＼。そりや忝いそんなら頼みますぞえ。（地）嬉しや雨も上つたさうな。近所の德は引ずりで軒傳ひ（フシ）皆樣これにと出て行く。（詞）コリヤ下駄よ。是からは長吉に留守事ほつて。も一つ飲もぢやあるまいか。よかろ／＼。ヲ、望ならば酒は振舞はうが。二人ながらひよんな事があるわい。今もいふ通り今夜は四つ橋へ。濡髮と出入しに行く契約なれども。姉貴が留守なれば行かれぬ。エ、甘い事いふな。出入して生きようも死なうも知れぬのに内の事思ふかい。イヤ／＼さうでない。長吉が身はどうなつても構はねど。姉貴に留守を預つたりや表が濟まぬ。定めて濡髮が待つてゐよ。二人ながら長五郎に往て逢うてくれ。叶はぬ用で出入の場所へ往かれぬ。大儀ながらおれが内へ來てくれというてくれ。そんなら往てや



ろ。濡髪が來たらば長吉ひけを取るなよ。晩に逢はうサア野手往け〳〵。コリヤ待てわい等往たとも外の細事必ずいふなよ。地ヲ、合點ぢやと肩打振り フシ四つ橋さして急ぎ行く。地折から來るは郷左衞門有右衞門を同道にて。血眼になり駈來り。詞長吉は宿にゐるか。是は〳〵お珍しい。イヤサ珍しい所でないと。地遠慮もなく兩人はつか〳〵とおいへに上り。詞扨長吉。無念な事をしたわい。其方にも兼々頼んだ吾妻が事。知る通り身請の直段も相濟み。金子百兩手附に渡し跡金渡す段になつて吾妻が駈落。何と肝が潰れるか。察する所駈落さしたは與五郎。身が請出す事隱れなければ。女房盗まれたも同然。此郷左衞門武士が立たぬ。なう有右殿ヲ、さうでござる。なに長吉。其方も常々頼まれてゐる吾妻が身分。油斷なく詮議をしてくりやれ。ア、氣遣ひなさ



れますな。埋んだ奴も大方に知れてござります。幸ひ呼びに遣つたれば詮議し抜いて上げませう。そりや過分。廓も大勢手分して。詮議さすと聞きたれど其儘に捨て置かれず。地身も有右殿同道にて。高津生玉鹽町邊の貸座敷を捜して見よ。吉左右あらば身が屋敷へ。知らしおくりやれ頼む〳〵と立出づれば。これは早々

又重ねてと挨拶すれど郷左衛門。むしやくしや腹で耳へも入らず オクリ 打連へ立つて歸りけり。地 長吉は後見送り。エエ此勘兵衛の大のらめ何をしてけつかるぞ。姉貴の戻るも夜に入らうと。雜穀の船をぐわつたひし琉球の日覆も。破れかぶれの達引せんと。知らせによつて濡髪の長五郎。さすが難波の關取と一目に見ゆる角前髮。脇差ぼつ込みしと〳〵と門口より。詞 放駒内にか。ヲ、濡髪か待兼ねた。下駄や野手にいうて遣つたを聞いたであろ。ヲ、來いというておこしたによつて。それで來たかヤア面白い。差向ひの達引に人が來れば邪魔になると。地 ずんど立つて庭に下り表の店戸 フシ さし固め。地 立歸つてサア長五郎。詞 廓で番うた今日の出入。われから仕掛けるか。おれから手を出さうか何と〳〵。ハテさわ〳〵と喧しい。かうして來るからは死ぬるか生きるか何方ぞに。形をつけねば置かぬに急くなやい。ヤアをさめ過ぎな。今屋敷の侍衆が見えて吾妻が駈落の樣子を聞いた。定めてわれが埋んだぢやあろ。マア其埋んだ所を聞かうわい。そりや此濡髮が匿ふまいものでもないが。わりや又おれにどうしていはすりや。地 ヲ、放駒がかうしていはすと。締めに行く腕外搦にしつかと取り。詞ノリ フ、ウ、、こんな事では聞かれまいと。取つたる腕首折分けて肘落し、



直に前側掴む手を叩き退け。それではいかぬ。遣つて見せうと 地 兩方一度に諸肌脫ぎ。互に手練の身鹽梅。やつといふより合掌して捻れば留り。突落せばどつこいさせぬと濡髮が差しに來る腕引捕へ。詞 ノリ 長吉が高無双。打つを飛越し小腕取りこりや〳〵と引廻せば。地 閾につまづき放駒尻餅どうどつきながら。傍なる脇差抜く間も見せず。起上り切つて掛かる俵口摑んで丁ど請け。詞 叶ひもせぬ事すなやい。地 して見せうと互に身構へ フシ 尻引絡げ。地 開いてはつしと切掛くれば胴繩俵に切込んで。流るゝ米は雨霰。詞 小癪するなと鋒下りに突つかゝる。どつこいさせぬと俵の楯。地 切先にて刎飛せば飛退つて抜合せ。受けつ流しつ我流無法の フシ 白刃と白刃。地 白髪交りの親父共。駕籠を舁せて爰ぢや〳〵と戸を敲けど。二人は耳にも聞入れず。命限り根限りに切結ぶ刄音鍔音ぱつしぱし。表よりはぐわた〳〵〳〵。詞 長吉の大盜人と 地 戸を打敲き フシ 聲々にわめくにぞ。詞 長吉待て。待てとは濡髮おくれたか。イヤ。おくれぬ。今あれ表を敲いて。われを盜人といふが耳へは入らぬか。そんならばわれとの達引些との間待つてくれるか。サアおれも盜人を相手には得せまいわい。ヲ、尤もサア引け。地 汝から引けと一度に抜身をさつと引き。鞘に納めて濡髮もおいへにどつかと フシ 押直れば。地 表の戸をぐわらりと明け。詞 此長吉を盜人と今いうたはおのれ等か。ヲ、おいらぢや。大それた事なればつい立ちながらいはれぬ。皆此方へ這



入らしやれと。地 駕籠諸共どや〳〵と内に入る。中にも人物らしき親父先へ出で。詞 扨米屋の長吉とはわごりよぢやの。エエわり様は前髮だてらゑずい事ようするの。此方の男を昨夕立賣堀迄使に遣つたれば。新町橋でよう投げたり踏んだり仕やつたの。それで此方の内は人參の氣附のと醫者悶着。コレ駕籠衆。たゝかれた者其所へ出して往んで下され。コリヤ久

兵衛痛くと堪へて爰へ出よ。何の意趣で此様には仕やつたぞサアそれ聞かう。ヲヲどいつぢや知らぬが。頬桁を過すによつて叩いたが何とした。それにおのらは此長吉を盗人とは何でぬかした。ヤアけい／＼しさうに物いふまい。昨夕此男に銀六十匁。日野の打違へ入れて持たしてやつたに。擲かれた時から其銀がないといひますわいの。フウ其銀が見えねば此長吉が盗んだのか。マアそんなものかい。大だはけの耄どもが、様々の事ぬかしてうせる。おれが又盗まぬ時は汝等生けては返さぬぞよ。ホ、ウそりや如何なりとこな様の心次第。その又盗まぬといふ證跡があるか見ましよわいの。ヲ、六兵衛殿さうぢや／＼。地柔かういはずとも。いつそ町へ断らしやれ とハズミ近所へ響くフシわゝり聲。地姉のおせきはいつきせき戻ればいつものつけ答へ。様子を猶豫ふ其中に。又東から二三人若い男を肩に掛け。詞コレ／＼五人組衆。マア長吉に逢うて一せつぱさつしやれ。地さうぢや／＼と戸を開き。詞長吉殿とは此方でやすか。是はおれが息子昨夕山本町へ謡講に往た戻り西口で。掛構もせぬ者に喧嘩仕掛けてづなう胴突きやつたの。そればかりか羅紗の紙入に。金三歩と豆板が二十匁餘り。こな様は／＼よう味いことしやつたの。疵養生代と紙入の金共に。今戻しやつたら了簡せうサアどうぢや／＼。成程うぬ等がぬかす通り。西口の頼母が門で出入した。おれにちつくと楯突いたによつて胴突いてこましたが。金落したは彼奴がたはけ。放駒が内へ來てずか／＼物を吐したら。何奴も此奴も手足を捥ぐぞ。アアゆすつたとていふ事をいふまいか。總別わごりよ達が喧嘩仕掛けて物取るをはつたりと言うて今はやるげな。フウそんなら奴等は此長吉を盗人と吐かすのか。堪忍ならぬと脇差押取り立上る。おせきは驚き門口より走入り。長吉にしがみつきコレ／＼姉ぢや私に任して待つてたも。詞コレこな様方は何處のお人か知らぬが。見ればこ年の寄つたお衆。ちつと物が鹿相にござんす。鹿相とは何が鹿相。さればいな。長吉に限らず力達をする者は。喧嘩口論を好き好んで。科もない人を擲いたり踏んだりするは若い者の習ひ。殊に喧嘩は降物。男は閾を踏出すと七人の敵があるといへば。短氣な弟を持つた身は。ほんに／＼夜一夜碌に寢た事もないぞいな。長吉が喧嘩して打つた擲いたといふのならば。七重の膝を八重に折つても詫言はしませうが。金取つたとは人の廢たる惡名。此詫言は私や得せまい。ほんに可哀さうに惡黨には生れたれど。人の物を箸一本取つて戻つた事はない。

もう此上は弟が了簡してもこのせきが了簡せぬ。サア盗んだといふ證據見よ。地證據もなうていはしやるは何と麁相ぢやあるまいかと腹立つ。スヱテ儘の震ひ聲。詞エヽ姉者人こな様に構はす事ぢやない。イヤ私に言はしや。其所にゐさしやる前髪殿も。定めて喧嘩の相手ぢやあろ。ヲヽ、おれも出入に來たれども盗人を相手にやせぬ。其方の達引から仕舞はんせ〳〵。コレ〳〵姉御よう聞かしやませ。喧嘩の場から金が見えぬによつて。盗みやつたといふが無理か麁相か。但し盗まぬといふ證據があるか。地ヲヽ、其證據は姉が見せましよ。弟の一裝束入つてあるは此簞笥。抽斗を打ちやけて捜さすのが面晴と。明けに立つをコレ待つた。詞これを見せれば家捜同然。サア其家捜さしておいて跡で存分いはにや置かぬ。地姉に任しやと抽斗の。上一重は袴入次は帷子薄羽織。

着物布子もでんぐり返し箱の底より引出すは。遂に見付けぬ紙入打違。それ〳〵それが取られた羅紗の紙入裏は京繻子。其打違は此方のぢや定めて銀は飛んだぢやあろ。何とそれでも諍ふかと口々に喚けば長吉も。はつと吐胸を突き詰めた。姉のおせきは顔をも上げず面目。フシ涙に暮れければ。詞コレ姉者人。おれが入物に何があらうが彼があらうが。俺や盗んだ覺えはない。まだ抜け〳〵とそんな事よういふなと。地髻掴んで捻付け引付け涙をはら〳〵と流し。詞此打違や紙入に手足があつて。我が身の入物へ這入つたか。我が身が知らいで誰が知らう。ほんに皆の手前も恥しい。是迄も文字半錢違へた事のない者が。其氣になるは神佛の罰か咎めか。何がまあ乏しうて因果な心になつたぞい。死なしやつた父様や。此姉が顔まで汚すやうな事よう仕出したと。地打違

取つて用捨なく。擲き据ゑ打ちすゑたる姉の親身の強意見。詞イヤサどの様にいはしやつても盗した覺えはない。地知らぬ〳〵覺えがないと詞つこどに言放す。詞コレ〳〵其方の意見聞きにや來ぬ。地埒が明かずば明ける所で明けて見しよと。ばら〳〵と立上がればアヽ、待つて下さんせ。詞其銀私がわきためましよ。暫しが中あの納戸へ。ムウ其様にいはしやる事なら。出所へ出るがみめでもないアヽ、そりや忝い〳〵。地サア〳〵此方へと姉諸共フシ打連れ一間へ入りにける。地長五郎は膝打敲き。詞コリヤ長吉。わりやまあ味な事するなあ。ありやマアぢやらかい。さいやい。身に覺えぬ事なれど。地われが手前も面目ないと。脇差に手を掛くれば。詞コリヤ何する。此脇差捻くるのはわりや死ぬるのか。ヤモウあれ程に思うてくれらる。姉貴の心がどうも濟まぬ。

われが盗みせぬ事は此長五郎がよう知つてゐる。殊にわれは日頃爰のずんどよい者ぢや。によつて今日おれが逹引に來たも相手がよさに來た。したがわりや幸福者ぢや。フウ何と。幸福者ぢやとは。此長吉をきよくるのか。さればやい。おれも在所に母者人を一人持つてゐれど。五つの時別れてから逢うたのは只一度。養子に來た先の父親も死なるゝ。ほんの木から落ちた猿同然で。誰が一人意見してくれてがない。われは結構な姉を持ち。よい意見の仕手があつて。それで幸福者ぢやといふのぢや。總別喧嘩する者は。ばつたりして金も取るやうに思はるゝはア、ア無念な事ぢや。おれも今のを聞いては此後ふつつりと喧嘩を止める。われも心を入れ直せ。殊にあの野手や下駄めは。惡い奴等ぢや重ねてからは附合ふなと。(地)打つてかへたる詞も聞かず。(詞)イヤもうさういうてくれるは過分なれど。どう思うて見ても姉者人の顔が立たぬと。(地)又脇差に手を掛くる。コリヤ待て長吉。イヤ／＼放せと競合ふ中へ。姉のおせきは走出で。(詞)ヲヽよう留めて下さんした。コレ長吉姉が何時もいうた事今思ひ知りやつたか。此後心を直すなら。我が身の顔はこのせきが立てゝやろ。ハテおれが顔さへ立つ事なら。しかとさうぢやぞや。サア／＼同行衆皆來て下さんせ。(地)爰へ／＼と呼ぶ聲に。強請に來た親父ども肩衣懸けて珠數爪ぐり。どや／＼と立出づる放駒も濡髮も。ヤア／＼こりやどうぢやとフシ呆れ顔。(詞)ヲヽ合點が行くまい是は此方の同行衆。常々わがみの喧嘩好が苦になりますといふたれば。何卒心を入れ直してやりたいと。今夜の逮夜に講中が。打寄つて談合の所へ私が行き。先刻に聞いた喧嘩の話をいうたれば。同行衆が此樣に先の相手になつて。強請込ましやつたもわがみを眞人間にしようといふ皆のお世話。そんならあの打違や紙入を入れて置いたは。ヲヽおれぢや。必ず惡う聞きやんなや。人に惡う思はれぬも親の蔭。父御は丸屋仁左衞門とて。此町では口利の結構者後生願ひであつたのに。其人の子にわがみのやうな者がようも／＼生れた事ぢや。父樣の死にしな迄苦にさしやつた其方の事。私を枕元へ呼んで。おれが死んだらあの惡者が身の行末。思ひやられて迷ひの種。姉よおれに成代つて意見してくれよと。死病は苦にもせず。其方が事ばつかりを言死にさしやつた。(地)末期の一句が此耳に殘つて私や得忘れぬ。それ故に此姉が一生身を持固め。わがみの心を直したら冥途にござる父樣の。とひ弔ひに勝らうと思うて心を碎くわいの。(地)殊に今日は父樣の年忌

ちやに。出入とやら喧嘩とやら。殺すの切るのといふのをば。草葉の蔭から父様が。見てござつたら悲しかろとわしや泣いてばかりゐた。詞それで此年忌にも。歴々の子はありながら内で弔ひ得せずに同行衆でして貰うた。もし今日の日を忘れたかと。先刻にも肴据ゑたればどう思うてやら食はなんだは。まだ人間らしい所がある。先刻にも友達衆の徒口を聞けば。年端も行かぬ石堂丸。地父を尋ねて遙々と。高野の山へ登つたといなう地それ程こそはあらずとも。親の年忌の逮夜に。お眞向様へは手も合はさず。色里へ入り込み人を投げたり踏んだりして。それがマア父様のとひ弔ひにならうかと。心に思ふありたけを數へ立て〳〵。弟を思ふ眞實に。袖も袂もフシギン千石通涙の種を篩ひけり。詞ヲ、姉御尤もぢや〳〵。長吉殿よう聞かしやれ。此方の心直さう爲に同行共がよい年して。拵事して來たも佛様の方便と同じ事。此方の心さへ直れば。それがとひ弔ひとなつて仁左殿も佛に成らるゝ合點がいたか。サア合點がいたらば今爰で。誓言立てて聞かさしやれ。イヤもう皆其様に世話やいて下んすを。おれも惡うは聞きませぬ。これからはふつつりと出もしよまいし。商を精出して姉者人の詞を背きますまい。ヲ、出來た〳〵。コレおせき様悦ばしやれ。地ア、嬉しうござります。これといふも同行衆のお世話故。長五郎様も爰にゐさしやるこそ幸ひ。此後弟が身の上は萬事お前を頼みますと。口のこはい放駒同じ仲間の蹈馬に頼むは フシ姉の利發なり。詞いやもうそれは互々頼まれたり頼んだり。兄弟同然にナア長吉。懇にしようわいな。ハテわがみさへ其氣ならおれもさうせう。ヲ、そりやよい事ぢや〳〵。そんなら姉御もう往にます。コレ長吉殿。これからは同行の顔も見知るやうに。些とお寄にも參らしやれ。アツア兎角何事も御開山のお蔭なんまみだ〳〵〳〵。地サア〳〵皆の衆いざござれと フシ打連れ立つて歸りけり。地息繼ぎ敢へず下駄の市門口から聲高に。詞コリヤ長吉かの屋敷の侍衆が。與五郎と吾妻とに。難波裏ででつくはしやつさもつさの最中。野手を殘して知らしに來た早う往てやれ。地おれも是から戀の出入の仕舞を見よと。又引返し走り行く。濡髮聞くよりつつ立上り。詞與五郎殿と吾妻とが侍にでつくはしたか。南無三寶長吉さらばと駈行くを。詞マア待て長五郎。なぜ留める。ヲ、サおれも姉者人の意見でもう侍の肩は持たぬ。今兄弟の約束して。一人遣つては心許ない。コレ〳〵〳〵長吉待ちや。たつた今わがみは誓言立てて又往くのか。地そり

やならぬと引放し。長五郎を突出し往てごさんせと戸をひつしやり。ヲ、合點ぢやと逸散に難波。裏へと 三重 駈り行く

第五　芝居裏の喧嘩に難波

のどろ〳〵

地 大寶寺町を横切に直には行かぬ郷左衞門。業を煮して與五郎が髻片手に引きずり廻す畠中。難儀難波や芝居裏。歎く吾妻を有右衞門小脇にかい込み。詞 郷左殿手ぬるい〳〵。ヲ、サ合點。コリヤ吾妻。此泥坊めになに心中立。手附金は百兩渡す。追付け跡金も埒明けば身が奥樣。それを連れて走らうや。ヤこな生すりめ大盜人めと。地 兩人寄つて蹴据ゑ蹴飛し踏みのめせば。與五郎は半死半生ヤレ吾妻。詞 與五郎が身はどうならうとも。必ず短氣持つまいぞ。地 エ、思へば無念とよろぼひ立ち。しがみつくを踏飛ばし。大地に打付け動かさねば。吾妻はわつと泣き沈み。胴慾や酷らしや。私も一所に殺してと縋り歎くを。突退け〳〵兩人が。與五郎一人を手玉につき。ふんづ蹴つつの打擲に。目も當てられぬ吾妻が思ひ。戎橋筋一文字飛ぶが如くに長五郎。駈り來るより侍二人が腰骨摑んでぐつと差上げ。大地へどうど首の骨。碎けて退けともんどり打たせ二人を圍うて フシ 仁王立。詞 サア長五郎が來た若旦那。氣遣のきの字もない。吾妻樣を手に入れねば第一に私が立たぬ。コレ吾妻樣怖いことない。介抱々々と フシ 稻村蔭に忍ばせ置き。詞 サアお侍達濡髮がいふ事あつて來た。ど性根付けてお聞きやれと。地 喚けど更に返答なく。砂塗になつて起上り。互に自脈顔見合せ。詞 何と有右氣がついたか。成程少し付いたが。皆目に首が廻らぬ。イヤ身共も御同然。今のは何奴。イヤ私ぢやおれでごんすと。地 暗がりにすつくと立ちし長五郎。そりやこそしれもの油斷すな。ヲ、サ合點と刀を杖。ロは達者に喚けども。反打つ所は首の骨 フシ 歪み筋張り立つたりける。詞 イヤ其樣な仰山な事ぢやない。マア下にゐて下さんせ。サア〳〵〳〵。一寸々々とせり立てられ。詞 默れ長五郎せはしない。何ぢや。われがやうに痛みのない體とは違ふぞ。假令難波道骨接へ行く道が近ければこそ。シヤほんに痛みをかしい。有右はどうぢや。骨が折れた。卑怯な長五郎諸侍を騙投げ。樊噲や辨慶でも騙しや負ける。なぜ名乘らぬ。名乘りかけて來るならば。ヲ、此郷左衞門日頃習ひ置いたる劍術秘術。猿の木登り山雀の餌落し。エ、喧しい其樣な事聞きにや來ぬ。濡髮がいふ事掻摘んで申す。吾妻殿の身請の高は六百兩。與五郎殿から親方へ渡した。手附金は半

金の三百兩私が手から渡した地則ち受取が爰にあると押拔き。詞日附の所ナ。見えたか。よごんすか。跡金が一兩かけても吾妻殿渡さぬは廓の習ひ。それを連れて退いた與五郎殿。此方も悪いぢや。けれどもお前方が渡しもせぬ六百兩を渡したによつて。吾妻は國へ連れて去ぬ。イヤ女房ぢや奥様ぢや何ぞと贅らしう云はしやる故。若い人なりふつとした出來心。併し此方には三百兩手附渡して置く。今でも跡金の三百兩さへ調へばそつこで請出す三百兩。都合六百兩でさらりと埒が明く。お前方は僅か手附百兩。跡金の五百兩お國元から來るか知らぬが。惣體屋敷方には格式があつて。縦へ金があり餘つても。太夫請出す何ぞと其様なぱつとした事は屋敷方ではならぬものぢや。此方は高が町人。山崎では一というて二のない與五郎殿。それでさへ金事といふものが。其様に五器皿洗ふ様に心安うはないものぢや。畢竟お前方は。今度の身請を邪魔して。吾妻殿を遣りともないが精一杯。意地の悪いといふものぢや。其意地づく私が貰ひます。申し郷左衛門様。申し有右衛門様。地お執成し一入賴み奉ると。フシ親方思ひぞ道理なる。地始終を聞いて郷左衛門有右衛門にめくばせし。詞ム、成程尤も。屋敷の格式ある故。跡金五百兩調ふまいとな。さうぢやイヤ尤も。向後吾妻が事ふつつと思ひ切つたぞ。エイ然らば思ひ切つて與五郎殿へ事故なう。ヲ、サ二言はない思ひ切る。ヲ、切ると地拔打に有右衛門切付くる。腕首取つてはね倒す。間もあらさず突掛くる。郷左衛門が肋を丁ど脚にて蹴上げ。詞こりや何するのぢや。ほでてんがうひろぐと。汝等がどすの貧乏神。相手にやなり兼ねぬぞといふは嘘。何卒了簡付けて下んせ。そりやもうお前方二人してなら。此長五郎を仕舞ひ付けさんすぢやあろけれども。又私も手もあり足もあり。えいやつとうの道も。へ、些とばかり知らぬでもなし。すりや互に身上づく。ナ。大事の事ぢや何卒了簡。ナ了簡。イヤ了簡ならぬ。もう破れかぶれぢや。可愛い吾妻は手に入らず。跡金は才覺ならず。地せめておのれと拜打。さしつたりと沈んで受留め。詞スリヤどうでも了簡なりませぬか。了簡ならぬ。聢とさうか。諄い〱。地ならずば斯うぢやと腕絡の臂落し。居ながら投ぐる二人が刀。飛鳥の如く躍り越え。突けば開き。投ぐれば沈み。拔けつ潜つつ眞暗がりに閃く稲妻。是非に及ばぬ端髪が段平物の拔打ちに。有右衛門が眞向逆道難波道。畑の畦道踏みくじきうねり〱て切結ぶ。地跡に吾妻がおうい〱と與五郎諸共。うろ〱目玉に

下駄の市。野手の三とが遅ればせ。與五郎吾妻をほうど抱へ。サアしてやつた。詞鄉左衞門殿に手渡しせう。ヲ、サ褒美してやらんと フシ駈行く向うへ長吉ぬつと立塞がり。詞野手か。市か。ヲ、兄かえい所へよう來たぞ。ヲ、 地よう來たと兩人が首筋摑んで眞逆樣。腰骨ぼん／＼踏みのめせば。コリヤ赦せ。兄が怒つた／＼と。機嫌取顏おくれた顏。長吉は只濡髮が身の上如何と尋ねる中。透を窺ひ與五郎吾妻。宙に引立て飛んで行く。ヤア芋虫めら味をやる。それ奪はして置かうかと。フシ跡を慕うて追掛くる。地長五郎は鄉左衞門に渡合ひ。有右衞門が片足片手に引擦り廻す畑中。苛つて切込む鄉左衞門が。急所を蹴られたじ／＼／＼。又切付くる向見ず。性慾もなき死損と。すつぱと池の泥塗れ コハリ爰にあり／＼有右衞門。狼狽眼の同士討や。地芝居に並ぶ茶屋二階かゝる難儀の時知らぬ。餘所は騷ぎの一踊り。胸踊らして長吉は。二人を奪ひ立歸れば。呻く聲々のた打つ音。詞長五郎か。さういふは長吉か。ヲ、扨は二人の侍を切つたか。ヲ、サ今ばらしてもう止を刺すばかり。わりや又其所にどうしてゐりや。與五郎殿を捕へて。ヤアそれは。コリヤ／＼濡髮狼狽へな急くことはない。此長吉とわれとはな。今日大分約束した事がある。ナア合點か。斯うさすまいと思うて。姉の手前を拔けて來た。コレ侍衆。長五郎と長吉は。今日大分達引をして置いて。さつぱりと譯が立つてあれば。おりや吾妻を連れて去ぬ。おくれずと切つた／＼／＼と。地長五郎に力をつける フシ詞の謎。地其間に二人の侍を。刳り／＼て止の刀。押拭ひ／＼。詞長吉々々二人ながらとつくりと仕舞うたが。二人の衆に怪我はないか。イヤ怪我はないが長五郎。わりや大阪にゐられまい。ハテ斯うするからは此濡髮。心はとつくりと落付いて。イヤ居られまい。追取つて與五郎殿の身に難儀が掛かる。コレ與五郎樣怖いことはない二人ながら顫はんずな。ナウ長五郎それぢやによつて。此衆は汝に成り代つておれが隨に預つた。麁末にやせぬ。マア一年と半年は。陰したらよからうとおれは思ふ。落着き所はどれ耳寄せ。ナ。ム、。えいか。サア往け。エ、忝い長吉。與五郎樣吾妻樣隨分御無事で。長五郎もう往きやるか。濡髮樣さらばえ。長吉いよ／＼。さらば／＼の後より。何時の間にかは下駄の市。野手の三とが一時に。こりや聞いた。詞長五郎やらぬと取付けば。さそくの濡髮身をかはす。地ほぐれて向うへ頭轉倒骨兩人が膝に固めて フシロに袖。詞長吉どうせう。ハテどうのかうのと顋聞いたらも

くが破りよ。ソレ毒食はば皿。ソレ一寸切られるも。二寸切られるも 地こりやかうと眞逆様に千本突。泥へ乳だけ突込めば。詞此奴は下駄で不斷泥。地これがよかろと長五郎。捏ねたる土へ。油搾木の槌打つ如くにゑ込まし。サアえい。詞往くぞや往け〳〵。地やれ急げと。胸はときつく法善寺。詞七つぢや往け。地足を早めて 三重へ別れ行く

第六 橋本の辻駕籠に相輿の駈落

地 思ひなくて ハルフシ藪入したき。親里に。與五郎が嫁お照。去らるゝとなく去るとなく呼戻されて明暮に。辛氣〳〵のぶら〳〵病さのみ床にはつかねども。フシつれなき床も懷しき。地お氣の縺れを慰める下女が按摩も話伽。詞申し御寮人様。わたしや先日お隙貰うて。京の芝居見ましたがな。江戸役者の中村七三。二の替りの淺間が嶽。見て參りましたが面白い事でござります。女形は花井吾妻。奥州といふ太夫になつたよさ。それは〳〵七三が傾城買どうもいへぬ。あれなりやほんにどつちやからも。惚れる筈ぢやと思はれますでござりますと。地餘所の噂も身にあたり。詞ムン其花井吾妻とやら。傾城になるかや。ア、見たい事ぢやなう。吾妻といふ名で太夫になれば。與五郎樣の惚れてござる。藤屋の吾妻も同じ事。地どの様にすれば殿達に思はるゝのぢや私や見たいと。いとゞくよ〳〵ひよんな事。言損ひの出直しに フシお藥上ぎよと立つて行く。詞えい〳〵。えゝ。ヲツト杖しよかい。てもしまな物ぢや。太助。二十六七貫あろかい。ヲ、あるとも〳〵。旦那が十四五貫。女中様が十二三貫の相輿。牧方から橋本まで。五百には安いものぢやナア甚兵衛。ヲ、勘六と喜兵衛とが鬮取りに當つたら。地へたりをらうと持自慢。フシ つい行過ぐる門の口。詞おつと爰ぢやぞ下して貰を。辻駕籠は狹うて腰も首もむり〳〵いふ。ヤレしんどや〳〵。地歩行いて些と休まうと垂をひらりとコレ吾妻。詞かう二人乘つた形は。角にいの字で四角な長十郎。見立がきついか氣疎いかと。地駈落しても口へらぬ。面白病は一盛。フシ橙にてや直るらん。地太助は明駕籠振擔げ。詞そんなら甚兵衛後から戻りや。ヲ、お約束なりや程が知れぬ。ヲ、早仕舞や。旦那これに。太儀々々。サア太夫どうせう。どうやらいふのであつたなう。それを私に何の談合。地奥樣も來てござりや。お逢ひなされてよいやうに。おつと合點。詞甚兵衛は何處ぞに待たしておきや。我が身は此處を動きやんな。ぢやがおれはつつと入ろか。賴ませ

うといはうかと。地くしやらむしやらも閾高き舅の内を差覗き。詞むまし。晝寐は我等がお内儀様。幸ひ邊に人はなしと。つか〳〵と入つて枕元。どし〳〵と足音に。ふつと目覺めて見合す顔。詞エヽ與五郎様。ようお出でなさんした。何と思うて來ておくれなさんした。何とは我が身に逢ひに來た。さう仰しやるは嘘なれど。地嘘にもそんなお詞は。聞初めの聞納め。詞ア、幸先の悪い事いふ人ぢや。舅殿はお留守か。イ、エ奥に御寢なつて。ム、寢てか。それで半分落着いた。マアお供には誰が來たえ。イ、ヤ誰も來ぬ連がある。お連はどなたぢやお入りと。地挨拶ながら表の方。ちらと素振を見て取る廻氣。詞與五郎様聞えませぬ。お氣に入らぬは私が科。幾日お宿にござらいでもどうと申した事はない。父様の堅い氣から。親與次兵衛に謝らさにや。何程でも戻しやせぬと。いぬことならぬ私。悋氣でいなぬとお腹立ち。面當に吾妻殿連立つて來てこれ見よがし。私や近付になりもせう。父様は何處で立つ。地昨夕も讀んだ本の中。悋氣も少しは愛想ぢやと。書いてはあれど怪我な事思ひもせにや言ひもせぬ。私ばかりか父様迄それ程お前は憎いかえ。お胴欲なと恨泣き傍で聞き居る夫より。洩聞く吾妻が切なさは。フシ身も悔むより外ぞなき。詞イヤさうぢやない有様に言を。おりや隱匿うて貰ひに來た。エ、。父御様の御機嫌が悪うてかえ。イヤ親父は知らぬけれど。内へ往なれぬ譯は。彼所にゐるあの吾妻。請出さうといふ客があつて。どうも濟まぬによつて連立つて駈落。景淸は牢破り吾妻は闕破り。内へはどうも連れては往なれず。誰を頼まう所もなし。頼まう人は我が身ばかり。舅へ沙汰無しにして。こそで二人を隱匿うてもらぬか。コレどうぢやいなう。地サアそれも皆私が科。お氣に入る様に生れたら其御苦勞はさせませぬ。詞エ、そんな所ぢやない。隱匿ふなら隱匿ふとちやつというてたもいのと。地急く男には返事もなくフシ表へ出でて。吾妻が手を取り。忙しなければ染々とお近付の挨拶せぬ。フシ是へ〳〵と連れて入り。詞お前は私が身に代へて隱匿ひおはせて隱し抜く。與五郎様はお館へ早うお歸り遊ばせと。地聞くに吾妻が不思議立て。詞憎い奴ぢやとお叱りもないは。賤しい此身とお育から。それに不審はなけれども。地與五郎様は隱匿うて私はならぬとありそな事。あちらこちらの仰しやり様。仇を情でお返しは氣の毒がらせ足らぬのか。詞い〻えいえ。つい一通りで殿御をば騙さる〻と思や腹も立と。闕破りといふ事迄して。命に懸けて與五郎様を。

思うて下さる吾妻様何の憎う思はうぞ。お二人ながら隠匿へば。主に逢ひたいばつかりに傾城迄を引入れてと。一途に堅い父様のお叱りは知れてある。地見ず知らずでも頼まれて隠匿ふが人の道。これは又深い緣。詞忍ぶ身はお前ばかり與五郎様に科はない。お館へお歸りあつても難儀のかゝる筋あるまい。吾妻様さうぢやないかえと。地おぼこなやうでも武家育ち。立てぬく義理に恥入りてフシ顔を。得上げぬばかりなり。地與五郎は若氣の苦なし。詞コレお照。そんならば吾妻を頼む。おりやもう去ぬるぞや。どうでもさうせにやならぬかえ。どうやらそれでは。コレ。些との間ぢや大事ない。又逢ひに來るわいの。コレとつくりと預けたぞや。お氣遣ひ遊ばすなしつかりと預つて。晩から私と二人寢て。廓の話も聞きやんしよ。イヤコレ。わがみの事をおりや何にも。惡うはいやせなんだと。地可笑しい尻へ手の廻る。フシ帯引緊めて立出づる。詞聟殿待ちやれ往なれまい。連れて走れば同罪遁れず。關破りの與五郎はこの治部右衛門が隠匿はうと。地呼留むる舅の顔はつと二人が憖かに。逃げそゝくれて手持なくフシ消えも入りたき風情なり。詞イヤサ今更に何遠慮。娘出來いた。吾妻をばよく隠匿うた。サア與五郎。其方は又身が隠匿ふ。エイ。そんなら彼方も御一所に。サア隠匿ひやうこそ曰あれと。地手に持つたる硯箱差出し。詞サア聟殿。娘照へ暇の狀。一通書いてくれめされ。エイ。いやさ驚く事はない。氣に入らぬ女房を持つて貰ふ追從に。隠匿つたとはいはれては。この橋本治部右衛門人中へ面署が濟まぬ。他人になつて隠匿へば。治部も立つ。お身も安穏。肩の惡いは娘ばかり。なんとせう。是非々々書いておくりやれと。地退引させぬ詞詰。はつと一度に三人が心々の當惑涙。詞ヤア娘。兼て言聞かせ置くに何泣く事。地未練な奴めと叱る片手に硯箱。引寄せて墨磨りならし。詞書きやれ與五郎。但しは嫌か。縁切らずば潔白に。我が聟がかく／＼と代官所へ訴へうや。縁切つて隠匿はるゝか。縁切らずに訴へさするか。サアどうぢや／＼と地促立つる程とまくれて。返事なければコレ申し。詞私が事は大事ない。お身さへ無事であるならば事濟む後にはどうなりと。お心休めにマア書いてと。地いふもおろ／＼差當る。訴人の嚇に詮方なく。遣りたい暇もやり難い義理も糸瓜も一つ書。お定りの三件半手早に書いて差出すを。中から取つてお照様。詞こりや吾妻が預ります。私が見る前で渡さしては道立たず。というてお書きなされねば隠匿ふまいと仰しやるし。お書

きなされた暇の狀。私が預りや事濟むと。地緣の意氣づくそれ者とて。フシ諸譯を立てし捌なり。地折もあれ山崎與治兵衞我が子か爰に來てゐるとは。しら髮天窓のおつぼう髮供をも連れず相舅の。門口に賴みませう。詞與次兵衞でござる。治部殿に御意得ませうといふ聲に。地見付けられなと三人とも。奧に追遣り出迎ひ。詞與治兵衞殿お入りと。地何氣なけれど二人共奧へ入る風見て見ぬ風。見付けられてもさあらぬ風。フシ互に一物ある顏なり。詞扨々打絕え御意得ませぬ。相變らずお達者さうで珍重々々。いやもう私が達者なより。息子殿の達者なにほうど困り果てました。照は氣色がよござるかの。イヤもう段々と心よう。物も喰ひますか。たべるとも〳〵。そんなら連れて往にましよかい。イヤ先づ今分では遣られませぬ。サアその遣られぬも大方合點。といふと事が難かしい。舅が迎ひに來るからは。ハテもう利潤といふものぢや。何かなしに戻して貰ひたい。イヤ其許がお出で故。照めは猶え戻さぬ。與五郎おこせといはしやるのか。いや與五郎が參られたらば。いよ〳〵以て往なされぬ。なぜでえす〳〵。與五郎が本心から。照を戻せといひこさば自身は愚か。丁稚小わろをおこすとも違背なく戻すが道。臭い物に蓋すると押付業氣に入らぬ。イヤサさういはんしやんないの。嫁に取るからおれが娘。野良めが性根が直らずばお照で跡を立てる所存皆迄いやんな。我が子にまで金銀を惜み。命生害に及ぶも構はぬやうな與次兵衞。人の子で跡立てると。好い加減な事おいやんな望みにないぞ。ヲヲ望みにない與五郎。なぜ引込んでおきやる治部右。シヤいはして置けば詞が過ぎる。放埒の加擔人はせねど。傾城を請出し。妾めかけにせうとも誰か咎めぬ身上。僅の金に手支させ。義理に義理の迫つた駈落。見捨てれらぬ聟の難儀。引込んだと言はるゝが面倒さに。緣切つて隱匿うた。ア、それも嗅いで來た。女郎を連れて走りをつたと新町からの付答。今日も明日も明後日も醒果てたわいなし。身上が氣遣で引込んで無理暇取り。養を取るやうな聟をかへる思案ぢやの。默れ與次兵衞。太平の代に入らざる武具馬具賣代なしても。養はるゝ治部右衞門ぢやないぞ。諸色を買込み直上げさせ。高利を貪り人をひづめる。むさい汚い人非人と。この治部右衞門が性根は違ふぞ。イヤ人非人とは誰が事。わごりよの事さ。睨とさうか。諄い〳〵。諄くばかうぢやと地せき詰めて。氣短脇差引拔いて打掛かるを鍔にて受け。詞惡戯すなと刎飛ばす。地猶苛立の滅多切り。互に聞かぬ氣拔合

せフシばつし〳〵と切り結ぶ。地中を押しわる息杖は始終殘らず立聞く甚兵衞。詞マヽ、まあ待たしやませ〳〵。待てとはおのれ何奴ぢや。誰であらうとも留める。思案あつて留める私ぢやマヽ〳〵どつこいな。地二人の刀を息杖で。下にしつかと押へつけ。詞先刻からの一部始終。お二人ながら腹の立つもお子達が可愛さ。尤もぢや〳〵と尤も序に留めるも尤も。ぢやと思うて聞いて下さりませ。今の喧嘩の起りといふは。吾妻樣とやらから起つた事。今でもひよつと其傾城の親が來て。今の割口説聞いたら。縱へば私等が樣な雲助でも。何とまあ悲しい術ないこつちやあらうとは思はしやりませぬか。思ひ遣つてこつとらまで涙が溢れて。留められぬからの私が思案といふは。お傾城の親に成り代り。私が段々意見して。若旦那樣の事思切らしや。浪風なしに治まるぢやござりませぬか。何卒私がお願と。地思ひも寄らぬ平頼みは。藪から片棒の駕籠の甚兵衞フシ心ありげに見えにけり。詞ム、すりやわり樣が吾妻に意見をして。思切らせうといふのか。ム、其所もある治部右。願ひ叶へて待つ氣はないか。ハテ身共とても聟や娘。不便さから腹も立つ。了簡はしたけれど一旦武士の拔いたる刀。サア〳〵〳〵。其刀を此甚兵衞に預けさしやつて下さりませ。首尾よう元の鞘に納まるやうに。働いてお目に掛きよ。地平に〳〵と平押に。預ける氣より預けたき心くろめる黑鞘朱鞘。腰から拔いて投出し。詞サア治部右。サァ與次兵衞。これで暫く言分も。吾妻が返答一つに極まる。それ迄はまあ奥で。甚兵衞とやら賴入ると。地子故に詞廻り緣オクリ親と。へ親とは連れて入る。地甚兵衞は刀こて〳〵と鞘に納める受合の。思案とり〴〵夫ぞとは。知らぬ吾妻は落付きし。樣子を道に待合はす放駒へ知さんと。詞甚兵衞どの〳〵。ヲ、爰にか。あの此方は此樣子。長吉殿へしらして下され。アイ〳〵畏りましたが。私も些とお前樣にお目に掛りましたかつた。幸ひのよい所と。地近う寄つて跪き。詞お豐大きうなつたの。母はもう三年になるかや。ム、此方それを如何して知つてぢや。ヲヲ女房や娘の事。縱へ隔てゝゐるとても知らいでかいの知つてゐる。ヤアそんなら此方は。ヲ、お吉が連合其方の親。エイ扨はお前は父樣かと。地いへど不思議は晴れぬ顏。詞ヲ、合點の行く樣にいうて聞かさう。この甚兵衞は大阪の聚樂町に。破家の一軒も持つた者ぢやが。商賣の荒道具ひよんな物買合して。思ひも寄らぬ誤り。所拂に夫から散々。六つの年ぢや覺えまい。嬶は一昨年死ぬるまで狀

通に。お豐も今は藤屋の吾妻といふて。新町で一といはるゝ太夫になつて。おとなしうなつてゐますと。聞くと共儘飛んで往て逢はうとは思うたがの。それから此さま。よう思へば結構な衣服着た女郎に。おらが様な雲助が親ぢやというたら。よい幸ひも落ちようかと遠慮は不沙汰よい客が附過ぎて。與五郎殿をようあんなうぽ〳〵にしをつたなア。おのれが事で今も今。親父様達がすつての事に切つつ拊つつ。聞いてゐた此甚兵衛。術ないと氣の毒なと悲しいと腹の立つと。何程でも涙が止いで。昨日洗うた單物四文が糊を棒に振つた。こりや誰から起つた事。長うはいはぬあの衆に。意見して思切らしませうと受合つた詞がある。久し振で逢うた親が初めての頼みぢや。聞分けて思切つてくれ。此方が思切ると。與次兵衛様も與五郎様も。治部右衛門様もお照様も。皆えいわい。思切らぬとの。與五郎様の爲にもならず。與次兵衛様と治部右衛門様は。先刻の通りえいやつとう。取分けてお照様餘りでおいとしぼい。緣といふ物はしよ事もないもの。今日牧方で鬮取りの錢緡。長いのに當つたも思はず親子の緣の綱。乘せて來た駕籠の內吾妻と聞いてびつくり。ある緣はしよことがない。丁度それと同じこと。今思切つたとて有る緣なら又逢はれる。何卒思切つて下されや。コレ頼みます。〳〵。命も懸けてゐる中を。思切つてくれといふて親が頼む心はまあ。どんなものであらうと思ふ。思ひやつての願ひぢや。コレ聞分けてたも聞分けてと。地啜り上げ〳〵わつとばかりに咽返る。駕籠が涙は息杖の フシ休む隙なき思ひなる。地吾妻は涙押拭ひ。今といふ今迄も父様ありとは聞きながら。お前を私が父様とも。知らぬ道筋。フシ勿體なや。野邊の送りの親の輿子が舁くとこそ聞くものを。いかに知らぬといふとても現在親に駕籠舁かせ。乘つた私に神様や佛様が罰當てて。なぜに私を逆様に落して殺して。下されぬ。神や佛が怨めしい。又其上に與五郎様。退けと フシ仰しやる御意見も。無理とはさら〳〵。フシ思はねど。詞よう思うても見さしやんせお照様といふ奥様の。地あるを知りつゝ逢うた客。始の動め後の色女夫になろとも去らさうとも。微塵も思やせぬけれど。いやな客から請出すと儘ならぬ身は是非なくも。連れて退いたる與五郎様。輕いお身ならそもないに。逢ひかゝるから。今迄も重る節句年の暮。お世話になつた此吾妻。今又わしゆゑ難儀のお身。任せぬ時に振捨てて。どうまあ義理が立つものぞ。コレ手を合して拜みます。エなあ申しコレなあと。親

に取付き泣く娘。粹な育も涙には譯も。隔もなかりけり。詞ヲツヲさうぢや〳〵。さうなうては濟まぬところ。ぢやけれども其樣に。此方も道理彼方も道理。道理ばかりいうてゐれば。いつついけ同じ事。其道理を思ひ外し。與五郎樣の爲ぢやと思うて。退いてくれ。よ。こりや。親が手を合す思切つてくれ。糸瓜とも思やせんか知らぬけれど。いひかゝつた親が頼み。聞かねばもう破れかぶれ。七生も八升も一斗迄の勘當ぢや。といふは嘘。ヤ。えい人ぢや思切れ〳〵。切れ〳〵〳〵と地迫詰められ。詞アイ〳〵。切るか。アイ。切るか。アイ〳〵地の涙の隙。ありあふ刀拔くより早く。南無阿彌陀佛と取直すコリヤさせぬわ。詞こりや何する狼狽者と。地持つたる刄物もぎ取ればわつと泣き。詞生きてゐる內は思切らうと思うても。どうも思切られぬ得切らぬ。思切らねば一日の恩も送らぬ父樣のお詞背いて勘當受ける。是がまあ地どう生きてゐられうぞ。父樣留めずと殺してと。又取る刀をどつこいと留めてもとまらずいや〳〵〳〵。死ぬる〳〵と競合ふ刀。中から取つたは治部右衞門。詞子細は詳しく皆聞いた。吾妻死ぬるに及ばぬと。地刀を鞘にとつくと納め。詞扨は甚兵衞親であつたか。いかさま樣子あらんとは思うた。其許が子を思ふも。此治部が子を思ふも迷ふ心は皆一つ。子ならで親は泣かぬ物を生れる時を悅びとは。地何時の世からの僞ぞや。詞コレ此刀は五郎政宗金百枚の折紙。地頭より兼て御所望。身を離さぬ重寶なれども。賣代なして吾妻を身請。鬮破りの科はこの治部右衞門がさつぱりと拔いた上。與次兵衞に鬱憤いふ。ヲ、承らう治部右殿と。地奥から出づる與次兵衞が何時の間にやらごつそりと。頭圓めた法體姿。是はと皆々驚けば。詞アツア、治部右殿。有樣は今日來た心も息子めが鬮破る金でなけりや扱はれぬ。扱や直に親の手から請出してやるも同然。此方の手前言譯が濟まぬから。氣を搜つて先刻のしだら。金の惜しいも子の可愛さ。金の冥加に盡きる與五郎一文でも溜めて置きや。一日なりと遲う乞食させうと思ひ。せはつたのが今では仇。重代を賣代なし。鬮破りの科を遁してやろと思うて下さる治部右殿。禮のいひ樣がなさにの。與五郎が惡事を引受け。今からおらが與五郎入道。法名もつけて置いた釋の淨閑。息子めには名を讓つて山崎與次兵衞。門跡樣へも上げぬ金。有りたけこたけ出してなりとさつぱりと濟します。其所にゐるは吾妻女郎。女房にとも約束しやろが。了簡して妾になつて。あの性根の直るやうに頼みます〳〵。お照を本妻に立てて置

いて下され。諸事はこの天窓に免じて。治部右殿あやまりました。言ひこそ召されね息子への恨も何も眞平御免。幾重にもお詫び〳〵と。地悋い親父が打つて變へ耻も惜まぬ平詫に。涙一杯目に持つて頭を下げる親の慈悲。與五郎夫婦は障子から覗いて陰に手を合せ。我が身の不孝を思ひ知り フシ謝り。入るぞ哀れなる。詞サア〳〵〳〵お手上げられい淨閑老。何のそれに及ぶ事と。地心解合ふ相舅同士。頭ばかりか一家中 フシ圓らなつてぞ見えにける。地吾妻は去狀取出しずん〳〵に引裂き〳〵。かうするからは私が心疑ひなされて下さるな。詞ヲ、出來した。何もかも目出度い事の上盛と。地悦びあふは富貴の門口庄屋名主があわたゞしく。詞代官所から治部右衞門に。山崎與次兵衞を同道致し罷出でよとの急のお召。地ア何事かは存ぜねどサア〳〵お出でと

せり立つる。詞ハテ心得ぬお召ぢやなア。幸ひ與次兵衞爰にゐます。支度して同道致そ其間は待たれぬ急々のお召。サア〳〵〳〵と地忙しなくいふも上沙汰詮方なく。詞サア淨閑老。治部右殿。地參つて來うと打連れだち フシ代官所へと行く跡に。地障子押開け與次兵衞夫婦飛んで出で。詞今のお召が氣遣ひ〳〵。どうせう〳〵と。地狼狽へ騷げばコレ〳〵〳〵。詞何の氣遣ひござりませうぞ。いや〳〵〳〵。吾妻を身請せうといふ屋敷の客。濡髮長五郎が切殺した。其事に就いての詮議であろが。長五郎ぢやとはいはれぬ義理。ア、氣遣ひや〳〵と。地吾妻諸共あぶ〳〵〳〵と氣が氣ならねばよござります。詞此甚兵衞が往て聞いて來て。樣子を先へ知らせましよ。そんなら頼むまつかせと。フシ尻引絡げ飛んで行く。地道が違うて五六人手ん手に寄棒どや〳〵

〳〵。詞どうでも爰へ來るやうな隱さにやならぬお前方。地まあ〳〵爰へと上戸棚。夜具引出して二人ながら。サア此內へ〳〵と指圖に洩れず早速の。假の隱家戸を立つる。間もなく亡八がわゝり聲。詞駕籠の者が知らして來た。闕破りの與五郎吾妻。廓の法に行ふ出した〳〵。イエ〳〵。そんな覺えは此方にやない。地餘所を尋ねて見さつしやれ。詞ヤアとぼけさつしやるないなう。證人を爰へ連れて來た。地諍ふまいとてつぺい押しそれでも知らぬ。詞女ぢやと侮つて嚇かすのか。てもつべこべとよういふわ。可笑しい所に寢道具が。權兵衞喜六搜そかい。地よかろ〳〵の眞中へ。又どや〳〵と三四人手拭鉢卷高絡。上意を呼ばはり込入り込入り。詞子細あつて治部右衞門に上からのお疑ひ。諸式に封をお付けなさる。それ役人共封印と。地いふより早く手分

けして。押入戸棚も締めたなり簞笥長持膳棚まで。鍋釜萬も打込んで。きり〳〵しやんと封印を。つけるもハア〳〵女氣の フシ怖い〳〵におど顫ふ。詞ヤア皆何奴も頭が高い下げう〳〵。附立の御封印。少しばかりそゝけても。退荷同然科は重罪。屹度申渡したと フシ叱り。つけてぞ立歸る。曲輪の者共うつかりひよん。詞引戻しの蠕ぎりを五々らめに括られた同然。けぶさい戸棚も封印で。大事ない〳〵。五日や六日で濟むまいし。中にをるなら干殺し。地明日來て見ようサア來いとオクリ出て行く。へ跡へ地大汗になつてすた〳〵甚兵衛が。詞サア難しうなつて來た。與五郎樣の事に就いて。長五郎が侍を殺したとあやがぬけいで。お二人ながら揚屋へお入りなされた。地ハアはつと一度に戸棚の内外泣出す。聲に氣のつく甚兵衛。詞與次兵衛樣や吾妻はえ。サア曲輪から詮議に來て。此内へ隱したりや。お上から封印をたつた今付けていんだ。ヤア。もう先へ廻つたか。封印切れば科が増す。というて彼方を此内から。出さずには置かれぬが。地どうした物ぢやこりやどうせう。どうせうぞいのどうせうと。又内外から泣出す聲。詞ヲ、其封印は私が切つて上げうと表から。地はひるは以前の役人一人。詞曲輪から詮議にうせる素振を見付け。南無三寶と思うた故。在外れで人雇ひ思ひついた家財の封印。作者は爰にこの長吉と。地鉢卷取れば放駒。詞ヤア長吉殿。そんなら此方が封印附けたか。ヲヲさて折が惡かつて案じさしたと立寄つて。地戸棚明けてもうつかりと物をもいはず出もやらず。詞與五郎樣長吉ぢや。何してござるサア爰へと。地手を取ればきよろ〳〵〳〵。詞ハ、ア詮議にくる〳〵。親父樣はずんぼろ坊。坊主々々小坊主。歌いたいけな事いうた。ほろゝん〳〵〳〵や。詞これ何いはしやます。長吉ぢやわいなう。何ぢや町中引渡す。コレ與次兵衛樣何いはんす。申し〳〵何仰しやる。今のをお聞きなされて。はつと思うてそれでお氣が上つたか。コレ地氣をつけて下さんせと。二人の女が取付いて。スヱテ泣く顔じろ〳〵打眺め。歌其方は藤屋の吾妻かの。合吾妻請出す山崎與次兵衛。詞曲輪を抜けてそれ〳〵〳〵〳〵。名代の走り坊。しつたん〳〵や。法ぬけ坊主。これは扨とほる。地當度もなしに駈出す。ソレ留めましてと捕ゆる吾妻。氣違力の手に合はねば。どつこいやらぬと長吉が。留めても。留らず引きずられ共に。狂ふや。三重

第七　道行菜種の亂咲

大隅 へはてしなく。フシ狂ふ與次兵衛を。

信濃 地 長吉がスヱやう／＼抱き留むれば。長門 なう正體なきお身の上。吾妻が顔も見忘れてか。これなう／＼と。縋り泣く 信長 フシ浮名の種や。菜種畑。土佐ヲ、イ。／＼。地呼ぶも木精も春風に。フシオクリ連れてへ楠葉の頬冠堤傳ひをそれぞとは。思ひがけなや。信詞ヤア濡髪か。土ヤレ吾妻様放駒。信長地是は／＼珍らしや。信詞不思議に廻り大阪の人目を忍ぶ身を以て。此道筋を何處へ行く。土されば我故御難儀と聞捨てならず。我と名乘つて出る覺悟。地先づ旦那のお顔をと。信土二人立寄り抱上ぐれば。大隅むつくと起きて。詞ヤア長五郎か。コリヤ長吉。われも長。われも長。二人合せて 地蝶々とまれ。菜種にとまれと枝折簪し。本フシ春にも育つ花誘ふ。詞長吉は情の味知らず。半仲俗長五郎は我が譯知らず。知らず知られぬ。中ならば。ギン浮れ初めまい。ナホスツシ狂ふまいと。菜種を持つててう／＼／＼ど。信土二つので ふ／＼打たれて二人も顔見合せて立寄るを。大隅詞イヤ／＼知らぬ。何にも知らぬ。三下り歌今は浮世の放駒。傍で見るめの憂やつらや。信詞あれ見やあの通りぢや。どうも御兩家へ連れてはいなれぬ。この長吉が所にまあお隱匿ひ申さうかと思うてゐる。土ムウ尤も。重々の世話忝い。連れまして往んでたも。大隅ヲ、いの。おれもいの。歌いのやれ。合我がふる。さとへ歸らうやれ。詞といふは些と持たせ風。ハ、アふりかけて來るわ／＼。何と吾妻久しや／＼。鼓歌吾妻は遠き國なれど。又都にも双びなき。難波に稀な太夫職。二上りいつかは見染め逢初めてかの井筒屋の月見の夜。倶に可愛う。なり初めて花ならば連理の枝。鳥ならば比翼の鳥。變るまいぞや ナホスフシ變らじと。フシいひ交したは。地違はぬ／＼四季の花。春は朧に八重霞。ハズミ柳は緑花は紅。フシ其紅の。内でゆかしき。ゆかし懐かし逢ひたしと狂ひ。廻り駈け廻り フシ草葉に。かつぱと伏しゐたる。長地吾妻はわつと泣出し。父御様の御難儀も亂心も皆私故。お心の付く様に仕様はないか長五郎様。何卒療治もない事かと。夫の介抱片袖は涙を。フシ留め兼ねければ。土詞ヲ、其歎も今の間に科を名乘つて出る上は。御病氣も御難儀も一時に事が濟む。信イヤ／＼惡からう。今汝が名乘つて出ると。與次兵衛殿から事起ると却つて家に疵が付く。隱れるだけ隱れるが却つてお爲ぢやコリヤ。長吉が詞を立てよ。土イヤ／＼それでも。信イヤ／＼／＼。大隅地競合ふ中へ割つて入り。半仲あれ／＼／＼。詞あの行く舟は京上り。ちゝり人形かなぎさ堤を曳くわ／＼。三下り歌川の瀬のせのナ。なゝせのあはびノつまもナ。つまもたいでようさ

まよヲ、瀬でくらす。合様は三夜のナ。三日月様よノ宵にナ。宵にちらりとよう様よヲ、見たばかり。長大オンド踊人が見たくば色里へおぢやれの。色里の踊は。花笠をしやんと着て踊振が面白。吉野初瀬のオトシ花よりも。下ギン紅葉よりも。大戀しき君が共顔見ようと走り行く。信やらじと留むる放駒。詞氣遣せずと濡髪は河内の方へをちこちの。人も咎めん往け〳〵〳〵。地ひらに牧方別れ道さらば〳〵。土詞長吉頼む。地〳〵〳〵と聲ばかり入相告ぐる鐘の音に。長大花も。散り行く。茶種畑所。隔てて三重へ落ちて行く

第八 八幡の親里に血筋の引窓

歌出入るや月弓の。八幡山崎南與兵衛のお祖母。我が子可愛かナ金を出せナホスフシさと諷ひしを。地思合せば共昔。八幡近在隠れなき郷代官の家筋も。ホフシ今は妻のみ生残り。地神と佛を友にして秋の半の放生會。夜宮祭と待宵と掛荷うたる供物。長地母は神棚しつらへば嫁は小芋を月代へ。子種頼みの米團子。フシ月の數程持出づる。詞コレ嫁女。月見の芋は明日の晩今日は待宵。殊に日の中からは早い〳〵。これはしたり。お前が明日の放生會を。今日からお供へ遊ばす故。何にもかも宵日からする事とヲ、笑止。コレそのヲ、笑止はやつぱり廓の詞。大阪の新町で。都というた時とは違ふ。今では南與兵衛が女房のおはや。近所の人が來たと。煙草吸付けて出しやんなや。今でこそ零落れたれ。前は南方十次兵衛というて。人も羨む身代。地連合がお果てなされてから與兵衛が放埒。郷代官の役目も揚り内證も仕縺れ。此方の手前も恥かしい事だらけさりながら。詞此所の殿様もお代りなされ。新代官は皆あがり。古代官の筋目をお尋ねにて與兵衛も俄のお召。昔に歸るは此時と。雜行なれども神いさめの供物。蚤の息が天とやら。お上の首尾が聞きたいの。イヤモウそれは御氣遣ひ遊ばすな。お前のそのお心が通じて。御出世でござりましよ。地早う吉左右聞けましたやと フシ待兼ね見やる。地表の方編笠にて顔隠し。世を忍ぶ身の跡や先。見廻し立寄る門の口。嬉しや爰ぢやとづつと入る。地母は見るより詞ヤア長五郎か。母者人。濡髪さんか都殿これはしたり。扨は願ひの通り與兵衛殿と夫婦になつてか。マア悦んで下さんせ。私を請出した權九郎は。根が贋金師で牢へ入る。殺された幇間は。盗人の上前取りで追剝になつて殺し德。何の氣がかりなう添うてゐやんす。ハテ幸福な事。同じ人を殺しても。運のよいのと惡いのと。ハテ幸

福な事ぢやの。イヤコレおはや。染々とした話ぢやが。其方衆は近付か。アイ曲輪でのお近付。あの與兵衛もか。イヤこれはつい一日知人ぢやが又長五郎樣がお前を。母樣と仰しやる譯はえ。ヲ、不思議なは道理々々。どうで一度は言はねばならぬ。この長五郎は　五つの時養子に遣つて。私は此家へ嫁入。與兵衛は先妻の子で。私とはなさぬ中故に。地其譯知つてもしらぬ顔あそこや爰の手前を思ひ。かつふつ音信もせなんだが。去年開帳參りに不圖大阪で見付け。詞年たけても父御の讓の高頬の黒子。もし其方は長右衛門殿へ遣つた。長五郎ではないかと。問うつ問はれつ昔語り。地養子の親達も死失せ相撲取になつた咄。歸つて與兵衛に咄さうかと思うたれど。以前を慕ひ尋ねても往たかと。思はれるが耻かしさに隱してはゐたが。詞かうしらけて來たからは。戻られたら引合し兄弟の盃。負はず借らずに嫁共に子三人。地私程果報な身の上は又と世界にあるまいと悦ぶ親の心根を思ひやる程長五郎。明日をも知れぬ我が命と。知られぬ母の痛はしやと。思へばせき來る フシ涙を隱し。詞イヤ申し母者人。與兵衛殿がお歸りあらうと。拙者が事お咄し御無用。なぜ〱。イヤ相撲取と申す者は。人を投げたり放つたり喧嘩同然。勝負の遺恨によつて。侍でも町人でも。斬つて〱斬りまくり。ぶち放してマアそんな事私は致しませねど。男をたて通して。一家一門へ難儀の罹る事もあるもの。まあ此商賣しまふ迄は。お前ともあかの他人。悴持つたと思召して下さるな。何時知れぬ身の上。これがお別れにならうも知れず。おはや殿。與兵衛殿へも母の事頼みまするというて下され。長崎の相撲に下りますれば。永うお目にかゝりますまい。地隨分御息災でお暮しと。打萎るれば 詞ヤレそんな商賣せいで叶はぬか。長崎へも何處へも往かずと此内にゐて。與兵衛と共に問談合。其かつぽくでは何さしたとて仕果ねばせまい。ナウおはや。さうでござりますとも。御兄弟といふ事主も聞かれましたら悦ばれましよ。マアお茶漬でもナお袋樣。イヤ〱初めて來たもの繪でもしませう。あの體は牛房の太煮。鮹の料理が好きであろ。氣が晴れてよい二階座敷。淀川を見て肴にして一つ飲みや。うぢ〱せずと往きやいの。地どりや拵よと俎板や薄刄の銹は身より出で。死出の出立の料理ぞと。思へばいとゞ フシ胸塞がり。詞申し何にもお構ひなくとも。缺椀の一盃ぎり。ついたべて歸りましよと。地母の手盛を牢扶持と。思ひ諦め煙草盆。オクリ提けて。へ二階へ萎れゆく。地人の出世は時

知れず見出しに預り南與兵衞。衣類大小申請け。伴ふ武士は何者か。所目馴れぬ血氣の兩人。家來も其身も立留り。詞これが貴公の御宿所とな。イザ御案内。地お先へと互に辭儀合ひ南與兵衞。フシいそ〳〵として內へ入り。詞母者人女房。只今歸つた。ヤアお歸りか。戻りやつたかお上の首尾はどうぢや〳〵。お悅びなされ極上々。マア嬉しい。則ち此如く衣類大小下し置かれ。名も十次兵衞と親の名に改め下され。昔の通り庄屋代官を仰付けられ。七ケ村の支配。ヤレ〳〵それは目出度い事。見れば表にお歷々が見えるがありやどなたぞ。あれは西國方のお侍。密々に仰合さるゝ事あつて御同道。さして隱す程の事ではなけれど。暫く母人も御遠慮。地女房も用事ある迄差控へよと云渡し。表へ出づれば嫁姑。今からは武士交際遠慮が多いと物馴れし。母

と嫁とは立別れフシ奥と口とへ入りにけり。地イザお通りと兩人の武士を上座へ押直し。詞今日殿の御前にて仰付けられし竊の御用。子細は各々方に承れとの儀。先づそのお尋者の科の樣子。地お物語と尋ぬれば。年長なる侍取敢へず。詞拙者は平岡丹平。これなるは三原傳藏と申して。主人の名はお上には御存じ。當春大阪表にて兩人の同苗共を殺され。方々と詮議致せど。討つたる相手行方知れず。此間承れば此八幡近在に。由緣あつて立越えたと申す。さるによつて當役所へお賴み申せしに。兄弟の敵隨分見付け召捕られよ。併し夜に入つては當地不案內。所に馴れたる者に申付け。繩かけ渡さんとあつて貴殿へ仰付けられた。子細と申すはかくの通りと地語るを一間に母親か。耳欹てれば此方には。女房おはやが立聞の。蟲が知らすか胸騷ぎ。地與兵衞は

何の心も付かず。詞然らば敵討同然隱密隱密。もし左樣の儀もあらうかと。母女房迄退け御內意を承る。何と。その討たれさつしやつた御同苗のお名はな。身が弟は鄉左衞門。手前が兄は有右衞門。アノ平岡鄉左衞門三原有右衞門。いかにも。フムウ御存じかな。イヤ承つた樣にも。ムウ。してその殺したる者は何者。サア其相手は相撲仲間で隱れもなき。濡髮の長五郎と。地聞いて母親障子をぴつしやり。おはやは運ぶ茶碗をぐわつたり。ハテ不調法なと叱る夫の傍に坐し。フシ猶も樣子を聞きゐたる。詞シテ御兩所は何國を目當。先づ此丹平は當所を家搜しが致したい。御尤も〳〵。傳藏殿には思召寄りは何と。手前が存ずるには。最前其許へお賴み申した繪姿を村々へ配り置き。油斷の體に見せどか〳〵と踏込み。牛部屋柴部屋。或は二階などを吟味致したい。

それも尤も。ア、大きな體。下家にはをりますまい。兎角二階が心許ない。先づ御兩所は楠葉橋本の邊を御詮議なされ。夜に入らば拙者が受取り。假令相撲取でござらうが。柔術取でござらうが。見付け次第に縄打つてお渡し申さん。其段そつとも。ヤレ其詞を聞いて安堵々々。イザ丹平殿。楠葉邊へ參らうか。いかさま日の内は隨分我々働き。夜に入つてお頼み申すが肝心。早やお暇。然らば又晩程役所にて御意得ませう。地左様々々と目禮し。フシ二人の武士は立歸る。地おはやは始終物案じ。さし俯向いて居たりしが。申し與兵衛様。味な事を頼まれなされ。長五郎とやらを捕つて出そとの請合は。そりやマアお前ほんの氣かえ。ハテ氣疎い物のいひやう。あの侍に由縁もなく。元より長五郎に意趣もなけれど。今の兩人が願によつて。お上より此與兵衛に仰付けられた其子細は。關口流の一手も。覺えをる事お聞及びあつて。役人共に申付くる筈なれども。當所へ來て間もなく不案内。住馴れた其方に申付くる。日の内はあの方より詮議せん。夜に入つては此方より隅々迄詮議し。何卒搦め捕つて渡せ。國の譽とあつてのお頼み。地一生の外聞召捕つて手柄の程を見せたらば。母人にも嘸お悦び。詞イヤ〱〱何のそれがお嬉しからうぞ。なぜ。ハテ昔はともあれ。昨日今日まで八幡の町の町人。地生兵法大疵の基と。ひよつとお怪我でもなされた時は。お袋様の悲しみ。何のお悦でござんせう。詞イヤいらざる女の差出。わりや手柄の先を折るか。地ハテ折るも一つはお前の爲 詞ヤア此奴が。何で濡髪を庇ひだて。但しは汝が一門か。地何にもせよ御前で請合ひ。見出しに逢うた此與兵衛今迄とは違ふ。詞返さば手は見せぬと切刃廻せば。詞ヤレ夫婦の諍ひ必ず無用と。地母は一間を立出で。詞最前からの様子殘らずあれにて聞きました。何と其濡髪長五郎といふ者。其方よう見知つてか。一度堀江の相撲で見受け。其後色里にて一寸の出合。隱れもない大前髪。慥か右の高頰に黑子。見知らぬ者もあらうとあつて。村々へ配る人相書。地コレ御覽なされと懐中より。出して見せたる姿繪を。どれと見る母二階より。覗く長五郎手洗鉢水に姿が映ると知らず。目早き與兵衛が水鏡屹度見付けて見上ぐるを。敏きおはやが引窓ぴつしやり。フシ内は眞夜になりにける。詞ヤこりや何とする女房。ハテ雨もぼろつく最早日の暮。灯を點して上げませう。ムウはてなあ。面白い〱日が暮れたれば此與兵衛が役。忍びをるお尋者。地イデ召捕らんとすつくと立つ。それ。まだ日が高

いと引窓ぐわらり。明けていはれぬ女房の。　フシ心遣(つかひ)ぞせつなけれ。　地母は手箱に嗜みし銀(かね)一包取出し。　詞これはコレ御坊へ差上げ。永代經(えいたいきやう)を讀んで貰ひ。未來を助からうと思ふ大切な銀なれども。手放す心を推量して。何と其繪姿。私(わし)に賣つてたもらぬか。　ムウ母者人。二十年以前に御實子を。大阪へ養子に遣はされたと聞いたが。何と其御子息は堅固でござるか。與兵衞。村々へ渡す其繪姿。何卒(どうぞ)買ひたい。　ハア、鳥の粟を拾(ひろ)ふ樣に溜め置かれた其銀。佛へ上げる布施物(ふせもつ)を費しても。此繪姿がお買ひなされたいか。　未來は奈落へ沈むとも。今の思ひには替へられぬわいの。　地ヘツエ。是非もなやと大小投出し。　詞兩腰差せば十次兵衞。丸腰なれば今迄の通りの與兵衞。相變らず八幡の町人。　商人(あきんど)の代物(しろもの)。お望みならば上げませう。あの賣つて下さるか。それでは此方(こなた)の。

ハイヤ日の内は私が役目ではございませぬ。　地ハア、忝やと戴く母。　地袖は變らぬ涙の海。嫁は見る目を　フシ押拭ひ。　詞イヤ申し與兵衞樣。あんまり母御樣のお心根が痛はしさに。大事の手柄を支(さゝ)へました。　嘸憎い奴不屆者と。お叱りもあらうが。　產(うみ)の子よりも大切に。可愛がつてくださる御恩。　地せめてはお力にと倶々に隱しました。常々からも萬事の品包むと思うて下さんすなと。中に立つ身の切なさを　スエ言譯。涙に時移り。あはれ數そふ暮の鐘　中オクリ限なき。ヘ月も待宵(まつよひ)の　フシ光映(は)ゆれば。　詞イヤ夜に入れば村々を詮議する我が役目。河内へ越ゆる拔道は。狐川を左に取り。右へ渡つて山越(やまごえ)に。よもやそれへは行くまいと。　地それと知らして駈出づる情も厚き藪疊(やぶだたみ)。折から月の雲隱れ忍びて。樣子を窺ひゐる。　地堪へ兼ねたる長五郎二階より飛んで下り。表を

指して駈出すを　フシ母は抱止め。　詞コリヤ狼狽(うろたへ)者何處(ものどこ)へ行く。　イヤ最前より尋常に繩掛からうと存じたれども。餘(あま)りと申せばお志の



有難さ。眼前歎を見せませうよりは。此家を離れてと。堪へに堪へてをりましたが。與兵衛殿の手前もあり。地跡よりぼつ付き捕れる覺悟。御赦されてと駈出すを取つて引据ゑ。詞ヤイこゝな物知らずめ。おればかりか嫁の志。與兵衛の情まで無にしをるか罰當りめ。なさぬ中の心を疑ひ。繪姿買はうといひかけたは見遁してたもるか。たもらぬかと。胸の内を聞かう爲。買つてくれた其時の嬉しさ。おりや後影拜んだわいやい〳〵。まだ其上に河内へ越える拔道まで教へてくれた大恩を。何と報じようと思ひをるぞ。コリヤヤイ死ぬるばかりが男ではないぞよ。地七十近い親持つて喧嘩口論。人を殺すといふやうな不孝な子が世にあらうか。詞來ると其儘缺椀に。一膳盛と望んだは。おのりや牢へ入る覺悟ぢやな。それがどう見てをられうぞ。せめて親への孝行に遁れるだけは遁れてくれ。地生きられるだけは生きてたも。何の因果で科人に。なつた事ぢやとどうど伏し前後。フシ不覺に泣き叫ぶ。地おはやも倶にせきのぼす涙押へて。詞申し〳〵。泣いてござる所ぢやないぞえ。夜が明くれば放生會で人立が多い。今宵の内に落す思案。何卒姿を變へる仕樣はあるまいかな。ヲ、それも心付いて置きました。まあ目に立つ此大前髮。剃落しましよドレ剃刀。イヤ申し母人。姿を變へて繩掛からば。よく〳〵命が惜しさにといはれるも無念な。侍を殺した場で。直に相果てうと存じましたが。死なれぬ義理にて生存へ。一日々々と親の事が身に浸み。ま一度お顔が拜みたさに。お暇乞に參つて。却つて思を掛けまする。やはり此儘で與兵衛殿へ。お渡しなされて下さりませ。スリヤどういうても繩掛かる氣ぢやな。覺悟致してをりまする。よいわ勝手にしをれ。地汝より先にと剃刀をア、申し。詞誤りました。〳〵サアそんなら剃つて落ちてくれと。地母が手づから合砥にかゝる思があらうとは。神ならぬ身の。地白髮の此身。地剃るべき髮は剃りもせで。祝うて落す前髮を。フシ涙で揉んで。剃落す。老の拳の定まらず。わな〳〵震うて刄先がきつくり。詞ア申し二所迄お顔に疵が。ハアひよんな事しました。地幸ひ血止と硯の墨。べつたりつけて顏打眺め。詞大方これで人相が變つたか。肝心の見知は高頬の黑子。地剃落さんと剃刀を當てことは當てながら。是こそは父御の讓り。形見と思へば嫁女。私はどうも剃りにくい。詞此方頼む剃落して下され。私ぢやとてむごたらしう。それがどう剃らるゝもの。お赦しなされて下さりませ。ア、思へば〳〵。親の形見まで剃落すやうになつたか。エ、心から

とはいひながら。地可愛いのものやと取付いてスヱわつとばかりに。泣沈む。地折もこそあれ門口より。濡髪取つたと打付ける。かねの手裏劍高頬にぴつしやり。はつと身構へ母は楯。おはやは燈火立覆ひ。詞今のは慥か連合の聲。長五郎さん。顔の黒子が潰れたぞえ。ヒヤアほんに眞に。これも情と母親は。フシ表を拜みゐたりしが。地豫て覺悟の長五郎。思ひ設けてどつかと坐し。詞サア母者人。お前のお手で繩を掛け。與兵衛殿へお渡しなされて下さりませ。コレ長五郎様。お前は氣が逆上つたか。取つたと顔へ打付けて。黒子を消した連合の心。又コレこの打付けた銀の包に。路銀と書いた一筆。そこにお心付かぬかえ。イヤ其書付も黒子を消した心も。骨に徹へ肝に通り。餘り過分忝さに。母の歎も御意見も。不孝の罪もフシ思はれず。地かたはな子が可愛と義理も法も辨へなく。助けたい〱と母人の御慈悲心。暫くはお心休めと詞に隨ひ。元服まで致したれども。詞一人ならず二人ならず。四人まで殺した科人。助かる筋はござりませぬ。愁かな者の手に掛からうより。形見と思ひ母者人。泣かずとも繩を掛け。與兵衛殿へ手渡して。ようお禮を仰しやれや。ヤ。ヤ。コレこれ。さうなうては此方。未來の十次兵衛殿へ立ちますまいがの。ヲ、誤つた長五郎。ようい うてくれたな。いかさま思へば私は大きな義理知らず。地眞をいはゞ我が子を捨てゝも繼子に手柄さするが人間。畜生の皮被り。猫が子を銜へ歩く様に。隱し遂げうとしたは何事。詞とても遁れぬ天の網。一世の緣の縛繩。おはや其細引でも取つて下され。地イヤそれでは連合の心を無になさるゝと申すもの。唐天竺へござつても。此世にさへござれば如何してなりとも又逢はれる。何かはなしに落しまして下さんせ。詞イヤなう一旦庇うたは恩愛。今又繩掛け渡すのは生さぬ中の義理。晝は庇ひ夜は繩掛け。地晝夜と分ける繼子本の子。慈悲も立ち義理も立つ。草葉の蔭の親々への言譯。詞覺悟はよいか待兼ねてをりますると。地おはやを取つて突退け〱。手を廻すれば母親は。幸ひ在合ふ窓の繩押取つて小手縛り。突放せば引繩に。窓は塞がれフシ心も闇。地暗き思の聲張上げ。詞濡髪長五郎を召捕つたぞ。十次兵衛は居やらぬか。受取つて手柄にめされと。地呼ぶ聲に與兵衛は駈入り。詞お手柄〱。左様なうては叶はぬ所。とても遁れぬ科人。受取つて御前へ引く。女房どももう何時。されば夜半になりましよか。たはけ者めが。七つ半を最前聞いた。時刻が延びると役目が上る。繩先知れぬ窓の引繩。三尺

残して切るが古例。目分量に是からとすらりと抜いて縛縄。ずつかり切ればぐわら〳〵〳〵。さし込む月に。詞南無三寶夜が明けた。身どもが役は夜の内ばかり。明くれば則ち放生會。地生けるを放す所の法。恩に被ずとも勝手におきやれ。ハはつと悦ぶ嫁姑。合す兩手の數よりも。九つの鐘六つ聞いて。殘る三つは母への進上。拙者が命も御自分へ。それもいはずとさらば。〳〵。さらば。〳〵の暇乞別れて。こそは 三重へ落ちて行く

第九 觀心寺の隱家に戀路のまぼろし

地河内の國の片邊に幻竹右衛門といふ親仁あり。心に歪む節もなく。正直一遍齒に衣を着せねど付けし里の名は。錦郡に侘住居近所の若者入込んで。相撲稽古の地取場は。裏の縁先縁側に。煙管銜へて寝腹這ひ。詞コレ〳〵〳〵腰が悪いぞ。右を指したらなぜにはたかつて歩み出さんぞやい。エ、其所ぢや〳〵そりや其所な。先刻にから見て居るが皆身の構がさうでないわい。今の様な時はト矢筈になつて止つて居る。向うから仕掛ける所で右へなりとソレ左へなりと捏ねたがよいと フシ仕形見すれば。詞ア、親仁殿此方



のやうに覺えて居れば。大坂へ往て土俵の上で取りますわいの。さいやい。其方達は土俵の上でも耻しうない。春は早々この觀心寺の開帳。其時は是非相撲勸進元はこの竹右衛門。一方は大坂方。寄の方は汝等を關取。皆おれが世話やいたれば。何卒大坂方に勝たしたいがな。イヤそりや取つて見たいな。ヲ、さうぢや。〳〵。したがおらは名がない親仁殿。性を見てえい名を付けて下され。あいつわい。おれをば山伏の様に思ふさうな。マア大關を誰にせうぞ。ヲ、。さつきにから土付かぬ此次郎吉。おれぢや〳〵。ム、次郎よかろ。わりや在所はどこぞ。ハテ知れた澁川郡。イヤ澁川郡とは名乘りにくかろ。何卒强さうな何にせう。大和邊の縁を取り。御所車イヤ〳〵。餘り名過ぎる。澁川郡の心で御所柿〳〵。ヲヲその御所柿よかろ。マア甘い名ぢや。



地 イヤおれが好きぢやと口々に評ふ折から フシ 奥よりも。詞 申し父様。風呂がよい 地 お召しなされと立出づる娘のお虎。詞 ヲ、客人は入られたか。アイ濡髪様は。

コリヤ〳〵娘。濡身では風引く。浴衣着せてなぜ。背中すつて進ぜぬぞ。ちやと往け〳〵。イヤ此間から江戸の客人。春の相撲の大關又おらとは違うて。第一若

し大兵。何と御所柿一番いて見んかい。是はよかろイヤおれぢや。おらも 地取らして／＼と。ざわつく内に浴衣がけ。 地搖ぎ出る長五郎。 詞ヲイ綾川殿風呂へ入つてか。親仁殿辭儀なしに入りました。扨えい加減お入りなされ。ホ、これは皆若い衆。寒取前で精が出やんすよ。イヤ關取。皆若い者共がいかう貴様を見たがつてゐた。慰みがてら教へて遣つて下されぬか。イヤ／＼それは慮外。見れば達者さうな骨組。名乘は皆付きやんしたか。アイ。私が名は御所柿此村の大關でえす。いや何れも／＼丈夫なつくり。ドレ。一番 地揉んで見ようと。浴衣ひらりと飛んで下り。四股踏固むる力足。 地見るより俄に後退り。 詞マアわれ往け何いふぞい。誰が取らうというたぞいマアいけ。／＼。エ、誰の彼のと一時に皆掛かれやい。イヤ。竹右殿さうでない。私も久しう地取もせず。サア御所柿とやら。 地揉んで見ようと。呼びかけられて顫ひ／＼。 詞親仁殿行司か後から屹度押してゐて下はれや。エ、卑怯な御所柿。灸据ゑるやうに思ふさうな。そりや／＼／＼。其所ぢやハア。もう仕舞ぢや。サア／＼／＼續いて掛かれ。郡川の勘兵衛が。目玉いからし取付けば。フシ首じやくり。 地古市の九十郎が。かゝると其儘 フシカヽリそつ首落しにヤこりやならぬと。 フシ砂打拂へば。 地そこらは譽田の善助が四股踏みならし。皆退け／＼／＼。 詞地體わいらが關取にぎつちりと取るによつて今の通りぢや。なぜあへて取らんぞやい。サア參らう 地掛かるや否やコリヤ／＼／＼／＼と。 地刎ねかけられ。さしもの濡髮背ける五體。コハリ所を透さず後抱にしつかと緊め。 詞コリヤ見たかと引抱へ上げても。／＼。 フシ地放れせず。 詞幻掛聲。そりや／＼其所ぢや／＼腰入れ／＼合點ぢや 地コハリ合點と根一ぱい。力めば左の片足が。向うの股へ歩み出で。其足取つて仰向に。ナホスもたれを食うてひつしやりと。地獄落しの餅重ね砂に埋れ減ずロ。 詞テモようした物ぢや親仁殿。是では名乘がつくまいかの。つくとも／＼。えい名があると煙管を揚げ。只今の負相撲。片やにおいて平蜘々々。ハ、、、。エ、面倒な。サア／＼／＼皆一時に組付け／＼ヲ、サ合點。皆腰入れて。エイヤ／＼／＼押せ／＼／＼。サアもうえいかと一押し 地押されて 文彌堪られず。將棊倒しにばた／＼／＼と フシこけ廻る折も折。 詞村の役人いつきせき。 詞申し／＼竹右衛門樣。庄屋殿より言ひつけ。大坂の濡髮といふ相撲取が。人を殺して此觀心寺村へ入込んだ。括つてなりと捕へて置け。明日は早々大坂から侍衆が見える筈。今夜中に下相談。竹右衛門所は

取分け。若い者が入込む程に早う呼んで來いとでござります地ちやつと〳〵といひさして。フシ次の在所へ走り行く。地幻はそしらぬ顔。詞何と皆聞いたか。濡髪とやらが侍殺して駈落した事。此商賣なれば知らぬでもないがわい等は若し知らぬか。イヤ此中から其噂。こちの方へも觸が廻ろサア來い。皆いのかい。ヲ、竹右衞門も庄屋へ往て譯立てう。地お虎は何處に。娘。娘と呼出し。詞コリヤ酒でも燗して綾殿へ進ぜ。表も締めておけ。誰ぢやあらうと迂濶に明けな。地皆來い〳〵と オクリ打連れ。ぺてこそ急ぎ行く。地跡に濡髪只一人。枕引寄せ煙草盆心も。フシ濟まぬ後より。地お虎は銚釐に酒の燗。片手に肴取添へて。詞申し〳〵長五郎様サア御酒上がれ。申し。私ぢやナ。お前の身の難儀も皆知つてゐる。けれど。呑込やの父様が合點なりやつい濟むであろ

必ず苦にして煩うてばし下さんすな。幸ひ父様も留守。アノナ。私やいふことが澤山ある。長五郎様。日外から此内へお出の時。一目見るよりテモ扨も屹として色白なえい殿御と。地思初めては夜も寢られず。文で委しういうて見んと廻らぬ筆で認めた。詞其文も何處でやらつい落した。耻かしい私が方から地寢間へいきや。嫌ぢや。〳〵と頭振ばかり。すご〳〵寢間の一人寐も。お前のお顔が幻に見ゆるとすれば憎てらしい父様の車長持吃驚し。起きれば現にちら〳〵と。暮るれば夢に長五郎様。心で心が悟られぬと。娘心のくど〳〵と悔み恨めば。詞ム、成程成程。志は忝い。何の其方の其心惡うは受けぬさりながら。此長五郎が身は今も知れぬ命ぢや。慭か情らかしい事いうたらすはといふ場に其方の歎き。マア〳〵第一は親仁殿が。ア、長五郎といふ者は

我が身に難儀ありながら。人の世話になる上。一人娘にまで。歎き悲む憂目を見する人でなしと思はれては。今迄男といはれた濡髪が分も立たぬ。爰の道理を聞分けて。酷い長五郎ぢやと思うてばし下さるなと。地事を分けたる一言に。詞サイナ。地其所を無理にといふ私でもない。お身に難儀のある事まで知つて居てこの思。詞はて何とせう。仕舞は尼になる覺悟。必ず未來で添うて下さんせと。地立派にいへどもぢ〳〵と。フシ心殘りの折からに。地竹右衞門はとつぱかは門の戸敲いて。詞お虎〳〵ちやつと明け〳〵。地あいと娘が鉀を。はづせば駈入りはたと締め。詞サア長五郎。大事ぢや〳〵。裏は觀心寺の藪道。それを右へ行けば大和へ抜けるそれから先は根次第サア〳〵早う。〳〵と地急けども急かず。詞親仁殿何の事。エ、何の事とはづきが廻つて。

侍共が古市に宿取つて明日は早々此村へ來る筈ぢやわい。竹右衛門が所にゐる綾川こそ。お尋ねの濡髪と村の奴等が注進。古市へ只今と聞いて顚倒。サア〳〵早う〳〵〳〵。エ、段々の世話。禮は詞に盡し難しさりながら。迚も遁れぬ長五郎。母者人の詞を立て。地一旦は落ちたれどもノコレ義理ある兄の十次兵衛。詞此人に搦められねば母への不孝。其外の侍共は。切つて〳〵切抜ける氣。もし其古市に居らるゝ侍が。兄十次兵衛殿なればと 地駈出づるを押留め。詞コリヤ〳〵〳〵待て〳〵其十次兵衛殿とは此中われが話した。南與兵衛の事ぢやろがな。何の其十次兵衛が。百姓づれを頼みにして。其方を括つて連れて來いなぞといふ樣な武士ぢやないわいやい。コリヤやい來てをる侍はな。汝がばらした郷左衛門有右衛門めが兄弟共ぢやわい。とても括らるゝ氣ならなぜ十次兵衛に括られぬぞやい。其所を思うて一先づ落す氣。一つには。ア、何卒して助けてやりたい。もし爰で縛られたりやお虎めが泣えをろとそれがおりや悲しい。此中縁先で拾うた文何心なう見たれば。娘が貴樣へ付文。テモ扨も。地親はなうても子は育つ。詞陰裏の豆も見ん事おとなしい氣になりをつた。嬶が居たらば悦ばうにと。地嬉しい半分悲しい半分。詞竹右衛門が娘ぢや。まさかの時。未練な氣持つ奴ぢやござらぬ。たつた一言コレ女房ぢやというてやつて下され。賽の河原へ往きをろかと 地それが悲しい。〳〵〳〵とどうど伏して咽返れば。娘は父を伏拜み。親のお慈悲とばかりにて忝け涙にくれにける。詞ム、誤つた。十次兵衛殿に義理のある身。是から直に和泉路へ。それから先は又先での分別。ヲ、聞入れあつて過分々々。併し餘り夜深は又氣遣ひ。コリヤ娘ソレ出立拵へ。おれも些との間休まうと。地蒲團一枚丸寐の夢。お虎も夢の夫婦連オクリ打連れ。ヘ一間に入りにける。フシ早更け渡る。山寺の。鐘も現や九つの。爰ら目馴れぬ。大男夜の編笠大脇差。跡に忍の侍二人付込み來るとも知らぬ顔。門口に大聲上げ。詞竹右衛門殿といふは爰で 地ないかとつかうどにふつと目覺し。詞夜更けて誰ぢや。竹右衛門は爰ぢやが何の用ぢや。イヤ氣遣な事ぢやない。人を殺して大阪からふけつたのぢや。マア爰明けて下はれ濡髪長五郎ぢやと。地聞くより外の侍二人が呼合ひ。フシしてやつたりと走り行く。地幻は合點せず。詞てもさつぱりとした長五郎。其樣な長五郎に近付はない。イヤ親分殿この長五郎に用事あつて大阪より長吉が 地來りしものと戸を明くれば。詞ヤレ長五郎か。長吉か。

互に堅固で目出度い嬉しい。イヤ。竹右衛門殿には始めて。話せば長い摘んでいふ。與次兵衛殿も病氣本復。吾妻殿はお妾分。お照殿は御本妻。廓の出入も何もかも。淨閑殿の銀の威光でさらりと埒明きめでたいだらけ。ぢやが埒の明かぬは彼の郷左衛門めが言拔け。郷左衛門めが一家共一つになつて。明日早々此村へ捕りに來る其噂聞くより只一飛び。跡は此長吉に任せて一先づ落ちよ。元服したも幸ひ〳〵。サア〳〵地早う〳〵と迫立つるフシ男の意氣は格別なり。詞イヤ〳〵さうでない長吉。濡髮が爰にゐながら。此方衆に怪我あつては。いよ〳〵立たぬ。コリヤやい長五郎。長吉殿の今の程事を分けていはるゝに。この幻が詞も聞かず踏留まつて搦め捕られ。その十次兵衛殿にや何手柄さす。イヤ母への孝が立つか。義理が立つか。ヲ、さうぢや。この長吉が折角爰までしらせに來た。志を立てさせぬはエ、曲がないぞよ長五郎。イヤそれでも爰を迯げたといはれては立たぬ。イヤ立つ〳〵〳〵。コリヤやい。長吉が詞わりや何と聞くぞいやい。十次兵衛殿の今宵の泊は高安郡。其高安へ往て。十次兵衛殿に逢ひさへすりや。遁げたのではないナ地落ちよ〳〵と兩人に勸められ。是非に及ばずフシ立上り。詞扨々皆のいかい世話。此禮は未來から。長吉。竹右衛門殿。此方衆と此濡髮は。どうした緣でござらうぞ。最早おさらば。女房。お虎もさらば。地わつと泣出す障子の内。此世の別れ生死の別れフシ思切つてぞ。急ぎ行く。地程なく入來る人音足音。親ひ〳〵此家を目掛け。郷左衛門が弟平岡丹平。有右衛門が兄三原傳藏其外捕手數十人。腰提燈に道を照させ。丹平傳藏に打向ひ。詞長五郎は聞及ぶ大兵。殊には手練迂濶に掛からば仕損ぜん。貴殿は裏道取卷かれよ。地いかにも左様と三原傳藏。供人に牒し合せ。ぬかるな合點と言捨ててフシ裏道へこそ取掛けゝる。地丹平下知して村の若者呼出し。詞コリヤ〳〵。最前言付けた通り地心得ましたと門口敲き。詞親父殿〳〵爰明けて下され御所柿ぢや。晝の地取に腰下を忘れて置いた。中の印判今夜庄屋殿へ持つて行かねばならぬ。サア〳〵〳〵早う〳〵と打敲く。地心得竹右が行燈提げ。戸口に差寄り小聲にて。詞御所柿か。よい所へ。庄屋殿へ行くなら竹右衛門がいひまする。只今大阪から濡髮が來て。前後も知らぬ大いびき。侍衆へ知らして下され。竹右衛門が注進と早ういていうてくれと。地聞くより表に雀躍し。詞コリヤ竹右衛門。かくいふは平岡丹平。其濡髮の召捕に向うた。ホ、出來した〳〵こゝ明けよ。ア、これ

これ〳〵イヤさう仰山では仕損じあり。彼奴は聞えし大兵殊には手利。寝入ばなこそ幸ひ。どれぞ捕手の内。二人程お入りなされ。年こそ寄つたれ此親仁。三人前はまだ勝負。地然らばさうと愚かの丹平。ぬかるな幻込んでをりますサアお出でと。又跡しめてさし足に。二人の捕手も跡につき窺ひ入つたる障子の内。取つたと掛け聲フシ障子蹴放し。地捕手を二人が膝に引敷き口を留め。詞長吉よ。むまいなア。いやどうでも老功嚴しい〳〵。長五郎も早二三里は行たであろ。もうばれださうか。地勝手にせいと抜合せ。二人の捕手を拝み打ち。音はばつさり表には。すは仕果せたといさみ足。奥もばた〳〵フシ足音ばかり。死骸の血汐幻が。體と顔にべつたり塗り。刀を杖によろめき〳〵戸を押開けて。詞エ、無念や口惜しや。命限りに働きしに。手練の濡髪先を取り。

二人の衆もあへなき御最期。まだ某老功故御覧の如く手は負へども。地されども命に氣遣なし。皆踏込んで括つてたべ。詞エ、憎い濡髪遁すなと。地大勢一度に切入れば。心得たりと長吉が。段平物の捲切り。彼方へ退けば此方へ逃げフシ追つつ返しつ追ひまはす。地竹右衛門は手負の眞似。よろめき〳〵捕手の邪魔。思ひ入り限り。息限り上を下へと。三重ヘ立騒ぐ。フシ早や明方の。地横雲も雪に覆はれ東白。道の草葉に降る雪は我が身の上と。フシ観念し。地観心寺の出外れ道。大竹繁る弓手の方。人音騒げば胸騒ぎして立止り。詞扨は落行く跡へ捕手駈付け。長吉がさぞ難儀。竹右はいかゞと地行きつ戻りつ立息らふ向うへ。傳藏手の者引連れそれ遁すなの掛聲に。後を取巻く平岡丹平。詞彼奴が眞の濡髪ならん。組手を定め二番手迄極め置き。後詰は傳藏丹平。

後は大竹足場は屈竟。地切抜けさすなと下知をなし。兩人床机に腰打掛け。蚤取眼にフシ控へゐる。地濡髪にこ〳〵打笑ひ。詞ホ、、面白い。竹の林の土俵入。組んでか〻らば腹櫓十手なんぞは段平で。めつた無双の投切せん。地琴柱刺股か〻らばか〻れ或は捻り腕投げ。鎗でお出は突落し。組子捕手のひらひを取らんと裾ばせ折つてフシ身構へし。地刀提げ大肌脱ぎ雪の裸身降る雪に。捕手の首筋ひいやりひヤあせ。吹雪に巻かれ目眩き。霙混りに足蹌踉。入交へ〳〵取結ぶは危かり。ける三重ヘ次第なり。地難なく組手を打伏せ切伏せ。薙立つれば丹平傳藏堪られず。琴柱刺股捲いて取らんと兩方より。追取り掛かれば長五郎。詞捕手の抜身我が刀左右に提げ上段に來る刺股を。弓手の刀に發矢と受止め。下段にか〻る琴柱の捻り。地馬手に受けては身を交し。詞ノリ突けば

背け開けば付込み。大竹三本小脇に掻込み裾を拂へばひいわりと。地小雀なんどの如くにて力めばおもりに又しいわり。詞ノリ組んで取らんと寄る所を一跳彈く竹の鞭。傳藏丹平眞劍勝負。斬つて廻れば事ともせず。地難なく刀打落し滅多無性の摑み投げ。膝にひつ敷きサア汝等びくと動かば一打ちと。刀振上げ振廻し既に危く見えたる所に。暫し〳〵と聲をかけ走り來るは南方十次兵衞。長吉に繩を掛け家來に引かせ跡に附添ふ竹右衞門。是も供人取卷いて動かせず。十次兵衞聲を上げ。詞聊爾すな長五郎。其方が科はいふに及ばず合點ならん。其兩人を殺しなば科重つて首拔けなるまい。元來緣者ではない他人の十次兵衞。其方の心の晴れる仕樣は是と地長吉が繩引解き。詞サア汝が組留めし兩人も此方へ手渡しせよ。サア〳〵と追立てられ。地忝しと首筋摑んで投出せば。兩人這々起上り。詞ヤア十次兵衞麁忽々々。なぜ長吉が繩解いた依怙最屓な捌きはさせぬ。濡髮めと一所に括り上げなぜ同罪には行はぬ。イヤさうはいはれまい。なぜどおいやれ。長吉は竹右衞門方に旅宿せしに。人違へにて切立てれば彼が科とはいはれまい。皆其方達が麁相といふもの。又竹右衞門が長五郎といひしも。長五郎長吉。紛らはしい假名故。いそがし紛れ殊に老人。聞き違へまい物でなしと。地言解されて二人共。面膨らして　フシ閉口す。詞イヤ長五郎。われも身の欲にせぬ事。主人の爲の若氣。事によつたら御前へ申上げ樣にて濟むまいものでなし。山崎與次兵衞は屋敷のお銀方。かれこれ内緣もあるなれど爰では私の沙汰。サア長五郎立上つて繩掛かれと。地十手振上げ討つて掛かれば濡髮が。切込む刀も緣の綱結ぼれ解けぬ兄弟が。互の心行逢ひに刀蹴落しコリヤ捕つたと。膝にかためて駕籠を持て。詞お上にて言譯濟むまで大事の濡髮。繩は追つていざ〳〵急げと打連れて。地大阪さして早駕籠に逸る長五郎長吉が。心は直に竹右衞門竹の林に住むとらも。勢もよし潔し。心もよしや與次兵衞吾妻。ギン山吹色の茶種畑。花の盛の末繁昌動かぬ。御代こそ久しけれ

寛延二己巳年 七月廿四日

作者連名　竹田出雲　三好松洛　並木千柳

一谷嫩軍記

座本　豊竹越前少掾

序詞戰克の將は國の爪牙犬馬の人を勞る則ば帷蓋を以て是を覆ふ。況や大功の人に於てをや重ぜずんばあるべからずとゝ漢書に見えしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて。奢る平家を討亡し。朝家をやすんじ奉らんと。軍慮をうながす堀川御所　オロシへ日夜に評議。區々なる。地いで其頃は壽永三年二月半。卿の君の御父平大納言時忠。偸に須磨の皇居より入來を。儲のフシ上座にすゝめ。詞先づ以て遠路の所御苦勞千万と。挨拶あればさればノヽ。詞樣々術を以て。神璽と八咫の鏡は念なう奪ひ畢せしが。十握の御劍は安德天皇。晝夜隨身ましませば思ふに任せず。地先づ二種の神寳受取り給へとフシありければ。地謹んで重拜有る。詞コハ忝き御念志。これ偏に舅君の御働きと。地悅喜の詞に時忠重ねて。詞扨又平家の要害。嶮岨を頼みの地理陣取。地中々容易の事にあらず。則ち繪圖に記せりと取出し手に渡せば　フシ逐一細見ある所へ。詞五條の三位俊成卿よりのお使者。只今是へ御出でと。地取次ぐ聲や。長袖の。フシ花の香名のみ。菊の前。襠姿のつしりと　小オクリたばひ。頃なる白菊の露をおびたる如くにてフシおめず。臆せず打通り。地大將の御座近くしとやかに手をつかへ。詞妾は五條の三位が娘菊の前と申す者。父俊成は禁裏にて千載集の役。折から旅人とおぼしき者。此歌を集に加へて給はれと一向願ひ。見れば天晴秀逸と感じながらも。私に加へん事もさだかならず。御伺ひの爲參上と。地入る事計り詞數いはぬ色なる戀人の。短册御前に指置くも　フシゑしやくこぼるゝ風情なり。地義經も忠度の詠歌と知れどさあらぬ體。手に取つて吟じらる。詞さゞ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かな。ハレ香ばしやあてやかや。地何かは苦しかるべきと。賞美の詞を時忠打消し。詞ヤア其歌集には入れられまじ。罷りならぬと傍若無人。地さゝゆる詞を菊の前。詞イヤ申し時忠樣。お聞きの通りあの歌は父俊成も感心し。君も御賞美ましますを集に入れなとおつしやるは。地誤りばし有つての事か。憚ながら今一度吟じかへして御評議あれと。いひも切らせずヤア愚かノヽ。詞ソレ其歌は薩摩守忠度。白髭明神社參の時。志賀にて詠みしは犬打つ

童も知る所。元より忠度は俊成が門家。地弟子ひいきに平家へ近寄り。後ぐらき此使追つかへされよと。フシ言ひほぐせば。地菊の前詰寄つて。詞イヤ申し。弟子を贔屓に平家へ心寄するとは大切なるお詞。それには慥なホヽ證據といふは其方と薩摩守。兼てより樣子ある事知つてゐる。其緣に俊成が。平家をかばふ所存といふが某が誤りかと。地我も平家でありながら前後揃はぬ詞戰ひ。義經暫しと止め給ひ。詞平家方に緣有りと。一旦不審立つ上は俊成卿迄越度と成る。集に入る事かたかるべし。さりながら所存有れば此短册。義經が預り兎も角もはからはん。地此趣を傳へられよと始終をさすが良將の。風雅の返答尤もと時忠詞を控ゆれば。力及ばず菊の前猶も摺寄り手をつかへ。詞父俊成も此秀歌惜む心に候へば。跡よりよきに御差圖と。地思ひ定めし言の葉も。花に嵐の時忠に。心殘してお暇申し。五條の館へ立歸る。フシお次の方より。地武藏國の住人。岡部の六彌太忠澄。熊谷次郎直實參上と。フシ披露を待たず立出でて。六彌太御前に手をつかへ。詞賴朝公より御墨付。到來と指出し。西國の軍數日延引に付き再三の御催促。一日も早く御出陣と。地諫と共に次郎直實。詞君御存じられずや。鎌倉には佞臣おほく。義經は平大納言時忠の娘。卿の君に御心を寄せられ。亡慮のかまへなんどゝ賴朝公に讒言申す輩も有りと承り候へば。地時移るは惡しかりなん。急き御出馬然るべしとフシ詞を揃へ申しける。地大將莞爾と打笑み給ひ。詞ホヽ、兩人が諫尤もながら。謀を帷幕の內にめぐらし。勝つ事を千里の外に顯はすこそ始終の勝利たるべきなり。義經發向遲なはるは。安德天皇所持し給ふ三種の寶。都へ返すを妬く思ひ唐土天竺へも渡すか。地若し海底の水屑とならば寶祚の傳へます。日の本はくらやみ。スヱとやせんかくやと心を痛め。詞是におはする平大納言時忠は。心愽弱なる御方なれば騙つて緣者と成り。賴むより早驅け入つてこれ見よ。神璽內侍所は我が手に入る。寶劍は安德帝御身を離させ給はねば。術を以て奪返さん。地要害嚴しき平家の備へ。繪圖に畫せて案內を知る。見よ〳〵方々險岨を賴みの油斷を見合せ。鵯越より眞下り。詞逆落しに攻入らば。あわてふためく平家の一類。討取るは手裏にありと。地智仁勇備の良將の。軍慮を聞いて諸大名フシはつと感ずるばかりなり。詞ナウ時忠卿。一旦緣を組みし上は別心なき婿舅。天下の爲の謀御心にさへ給ふなと。地忿をなだむる頓智の詞。時忠は默然と指俯向いてフシ居たりける。地義經重ねて。

詞ヤア誰かある用意の制札。地はつと答へて高札さゝげ御前に指置けば。ずつと立つて床の間の。フシ筒に生けたる薄櫻に件の短冊結び付けいかに兩人。詞今度の軍は勅諚の一戰。私の趣意にあらず。六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ。御願ひの此御詠歌千載集には入りしかども。勅勘の御身なれば名を顯はすを憚りて。讀人しれずと記されし趣を演說し。地集に入りたる其印。此短冊を結びたる山櫻を送るべし。詞又熊谷は搦手の。經盛敦盛固めたる須磨の陣所へ打向ひ。若木の櫻を汝が陣屋。義經花に心をこめ。武藏坊辨慶に筆を取らせし高札。此花江南所無也。一枝折盜の輩に於ては。天永紅葉の例に任せ。一枝を伐らば一指を剪るべし。此禁制の心をさとし。地若木の櫻を守護せん者熊谷ならで外になし。其旨屹度心得よと高札は直實。歌は岡部に給びければはつと兩人領掌し。心を含む禁札の。外を和ぐ和歌の道花をいたはる大將に實あり。色あり情あり。恥ある時忠詞なく不承々々に立上れば。コハリ二人の勇士も退出の。底の底意を堀川や。深き惠を汲分けて祝ひ。ことぶく。三重へ御代の春。地柳櫻や。松梅も フシ皆御慈愛に。生茂り。北野の社神々と 小オクリ木の間。〳〵に打つ幕の ギン內は男女の色はえて フシ都ぞ。春の錦なり。地九郎義經の御臺卿の君。幕しぼらせて出で給へば跡に付き〳〵腰元共。申し〳〵姬君樣。いつにないそは〳〵と何を御覽遊ばすと。地尋ねられてさればいなう。詞義經樣は此社へ每日の御詣で。則ち今日が滿る日とけさ程より御參詣。地お道迎ひの心にて思ひ立つた此遊山。木々の花より紅葉より早うお顏が見たさにと。夫婦に成つても惚れてゐる。フシ心は詞に出でにけり。地腰元共も氣をのぼしうはの空目かあれ〳〵。社の方より深編笠立派な若衆供に連れ。當世風のやさ姿お姬樣御らうじやれ。詞よう似たぢやないかいなと。フシいふ間程なく九郎義經。天滿神へ日參にけふ百日の滿願も。人目を忍ぶ深編笠。熊谷の小次郞を供の丁稚に引連れて。フシしづかに下向ましませば。地卿の君出迎ひ。詞けさとく參詣遊ばして今頃の御下向は。地定めて道に面白いお心寄があつたであろ。さすられなされた此肌を。改めたいと引寄せて。ふと股ふつつり。アイタ、、。詞何がいたいえま一つと。地つめつた跡の紫は フシゆるしの色と見えにける。地義經も御機嫌よく。詞イヤ是は迷惑。けふは遊山と聞きし故。大內は色所嫁入ぬ先に結ばれた。よしみの人にもお出合かと。地遠慮で態と遲う來たと。もたせ詞に姬君は顏打赤めコレ申

し。そんなさもしい濡衣の疑ひ受ける覺えはない。わやくな事をと計りにておろ〳〵涙に腰元共。詞こりや殿様の皆御無理。何ぼ程隱しても新枕が證據人。たいそに有つたかなかつたかお心に覺えがあろ。アレ〳〵申しお姫様の癪が上つた。療治して上げなされ。地何ぞで滿足なされたら虫が下ろとむりやりに押遣るもしほ行くもしほ。小次郎來れと打連れて。幕の內にぞ入給ふ。地己が心のだくぼくに人を埋みて平山の武者所。荷擔の人と出合の約束。かたへに打ちし幕の紋目覺えの茗荷巴。あほうな事を企て我身を知らぬ平時忠。跡に續いて梶原平次幕より立出で小手招き一つ所へ寄り集ひ。武者所時忠に打向ひ。詞先達て景高を以て御願ひ申上げたる。彼經盛へ遣はされし玉織姫。呼戻して某が妻にせよとの御事。則ち今日此所で婿舅の結びの盃外に御相談の義もありと景高の內意によつて。是迄推參仕ると。地挨拶すれば打頷き。詞ホホ貴殿を婿に取れば此時忠も大慶其子細は。義經が邪智に誇り。三種の神器を奪はん爲卿の君を望みしを。何心なく緣を組み。神寶をふか〴〵と渡したる今の後悔。義經は末々迄我と同意の者にあらず。何とぞ姫を取返し是なる平次景高。相婿二人都の守護に据ゑおかば。地禁廷は我が心の儘。此上もなき悅びと言ふに平次はしやゝり出で。詞ナウ武者所。貴殿も我も娘達を女房に貰うて有りながら。卿の君は義經が館に居らるゝ。玉織姫は經盛が西國へ連下れば。兩方ながらおも長な談合。サア其事を此平山も色々工夫してゐると。地案じに時忠打笑ひ。詞ハヽアいや其義は何より易い事。經盛と某頃日不中になりたれば。娘を戻せと言ひやらば緣切つて戻すは治定。又卿の君が事は。地コレから〳〵と呼けば平次聞くよりぞく〳〵踊り。詞ハヽア奪取れとはお智惠〳〵。幸ひ今日も此所へ參詣と聞きし間。首尾を窺ひ奪取らん。扨此上は義經を亡す術が肝要々々。地幕の內にて熟談申さん。いざと三人立上り。詞サア平山殿お出でなされ。アいや〳〵貴様は姉婿マアお出で。イヤ先づ舅殿から御入りあれと。俄に舅婿呼ばはり。水の月取る猿松ども。フシ伴ひてこそ入りにけれ。地こなたの幕より小次郎は勢ひ込んで驅出すを。待てと一聲かけながら義經立出で。詞ヤア〳〵小次郎。けしからぬ勢ひにて何處へ行くやと宣へば。君しろしめされずや。此前にて三人が最前よりの相談。末々君の仇するやつばらかたつぱし打殺し。禍ひの根を拂はんと又かけ行くをヤレ早まるなと引留め。汝より義經が始終の樣子は知つたれども。軍を出さぬ其內に。一

人でも味方の勢討取るは不吉々々。又某を亡さんと彼等がいか程もがいても。燈心で磐石及ばぬ事。構はずとも捨置けと。地さも大様に宣ふ中。幕の女中聲々に。詞なう悲しや卿の君樣御自害遊ばしたと。地叫ぶに義經小次郎も驚きさわぎ驅着くれば。御痛はしや卿の君劍に伏して事切れ給ひ。枕に殘る一通有り。こは訝しと押披き見給へば。筆の運びも定まらず讀むも哀れの文のあや。詞誠に御館へ入りしより幾千代迄も末かけて　御情を受け參らせんと悦びも仇夢となる。地我が親の惡心と見るより心附々にも。聞えを憚りとく／＼と繰返し讀終り。詞ヘツエ是非もなし。親の惡事に心を苦しめ。世を見限りしか殘念や。死なずとも濟むべきに。さすが女の細き心。地傍に居ながら別れにも我が身を恥ぢて詞さへ。交さず果てしか不便やな。短き契りで有りしよとやゝ御涙にくれ給へば。悲しさまさる腰元共。血氣にはやる小次郎も　フシ倶に涙にくれ居たる。地暫く有つて御大將屹度思案をめぐらし給ひ。小次郎來よと耳に口。コレナかう／＼とつど／＼に言含めよく計へとばかりにて。編笠に人目を忍び。フシ館に歸らせ給ひける。地直家は差心得邊を見廻し。詞卿の君の御立ちなりと高聲に呼ばはれば。地かたへの幕には平山梶原スハよき首尾と夕暮時。頰かぶりに顏かくし家來に囁き頷き合ひ手ぐすね引いてフシ待つ所へ。地腰元婢付隨ひ御乘物を先に立て。小次郎跡に引添うて歩み來るを見るよりも。此處彼處よりむら／＼と走寄つて乘物を。奪ひ捕らんとおつ取卷く。詞小次郎すかさず身構し。ヤア慮外なるうづ虫めら。忝くも義經公の御臺卿の君の御乘物。狼藉を働いて後悔すなときめ付くる。ヲ、サ／＼卿の君知つてゐる。四の五のなしに渡さぬと其前髮首さらへ落すと罵れば。地小次郎は耐り兼ね引拔いて切りかゝるを。こなたも拔連れ渡り合ひ。切結ぶ太刀かげに。女中は殘らず迯散つて。直家一人多勢を相手受けつ流して戰へども。さすが小腕の言ひがひなく。やう／＼其場を切拔けて　フシ乘物捨置き迯歸る。詞サアもうよいわ長追すな。地いでまあ早う戀人のお顏を見んと平次景高。乘物の戸を明けて斯くと見るより恟りし。詞アアこりや死んでゐるわ。地ヤア／＼やあと時忠も。平山諸共指覗き。驚く中にも時忠は添へたる一通こりや何ぢやと。披き見るより又仰天。詞ヤア扨は最前から相談した。樣子を知つての自害と見えた。ハア地はつとばかり差俯向き。スヱテ途方にくれて居たりける。地景高はくつたく顏。詞エ、埒もない。是はまあどうせう

ぞいなう平山殿。サアどうというたらどうせうぞい。申し時忠卿御思案はござりませぬか。ハテ思案というてどうせうぞい。得心で死んだればねだりにもやられまいし、此儘で葬禮せう。婿の役に景高。供をして燒香めされ。ハイ。いやこれ末重殿も相婿。葬に立たずにや居られまい。サア〳〵ござれと 地誘はれて平山は不承不承の フシ佛頂面。地時忠は涙ながら。詞平山景高。遠路墓所迄御出で御苦勞千萬と。地禮狀文句を口上でのべの送りの營みと打連れ。てこそ。三重へ露時雨。地故郷を燒野が原と。見返りて。修理大夫經盛卿一門の人々と。倶に都を落汐の搦手を固めんと。福原にとゞまりて。手配何や萱の御所しばし。假居の事繁き中に養子の玉織姬。軍の事も色事も綺で見たばかり味しらぬ。行儀育ちの器量よし女房達と諸共に。浮世咄の跡や先。越中の次郎兵衛盛次が妻の裏葉。ひそ〳〵聲にて申し皆様 詞此亂のない先から姬君と敦盛樣。許嫁ばつかりで御祝言の遲いのは。地どうした事と尋ぬれば。忠淸が妻の槇の尾。詞サアじたい御姬樣がおぼこで。しかけを待つてござる故いつ迄も埒が明かぬ。ちよびくさ咄もしかけたり。人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり。御祝言のない先に。內證の祝言は濟むやうにせにや。姬ごぜは立つ物ぢやないわいなと。地なぶれば姬は眞請にして。ほんにとうからさうしたらつい夫婦になられう物。それ知らなんだそしてまあ。寢てから何といはうやと。袖打掩ふ其風情。葉の裏に咲く玉椿色を含みてかはゆらし。地取次の侍罷り出で。詞時忠卿よりのお使者。大館玄番殿御出でと。地知らする聲に女房達。ナウ申しお姬樣。お里の便殿樣へ申上げんと三人は。打連れてこそ入りにけれ。地參議平の經盛卿。時忠の使と聞き一家ながら不平の中。いかなる事か言送ると。御臺諸共立出で給ひ靜々と座に直り。詞時忠卿の御使者。これへ通せと仰せの內。地頰も形も大館玄番いかつがましく畏り。詞主人時忠申越し候は。先達其元へ遣はし置く玉織姬。未だ敦盛殿と祝言も御座なき事。是以て互の幸ひ。存ずる旨候へば。御戾し下されよと主人が口上。則ち迎ひの乘物も。用意致し參つたり。地早く姬をお渡しあれと フシさも横柄にのべにける。地經盛卿の詞を待たず御臺所藤の方。姬君に打向ひ。詞ナウ玉織親御から迎ひに來たが。いぬる氣か。いにともないか。地そなたの心次第ぞと。尋ね給へど姬君は。何と返答いは枕。胸もふさがる思ひにて フシ指俯向いて詞なし。詞ホウ返事のないは。いにたい氣ぢやの。地ア、あぢきないは人

心ちひさい時からいつくしみ。手しほにかけ育てゝも身は身で通るといふが誠。暮れかゝる平家を捨て日の出の源氏に與し給ふ。親御に隨分孝行しやと。スヱ涙交りの恨みの詞。經盛卿打消して。詞ハテぐど／＼と何を繰言。源平と引別れ。互に心よからぬ中娘を戻せとあるこそ幸ひ。コレ／＼玄番。お使者の趣承知致し。則ち娘を返し申すと。立歸つて達すべし。其方迎ひに參りし上は。此方より人に及ばず。早く姫を連歸れと。地仰せにはつと大館玄番。玉織姫の傍に寄り。詞ナウ姫君。何をうぢ／＼隙入り給ふ。時忠のお心は呼戻すと其儘。嫁入の御相談。コレお悦びなされ。其婿殿といふは。平山の武者所末重とて源氏の兵。姉婿の義經殿と肩をならべる大大名。あやかり者とはお前の事。サア／＼地早う乘物にお乘りなされと立寄る中。姫はとかうの答なくずつと寄つて玄番が刀。拔く手も見せず切付くれば。肩先ずつぱと切込まれ是はと寄るを又一太刀。うんとのつけに倒るゝを。飛掛かつてフシとゞめの刀。地さしもの經盛仰天に。藤の方は走寄り。詞ヲ、玉織。歴々の武士も及ばぬ手際心の健氣。サア／＼地こちへとフシ誘ひて。地女心のはしたなう。いうて今さら恥しい。詞其心を見る上は。ナウ申し。地ヲ、成程と御夫婦は點頭き合うて藤の方。詞コレ玉織。そなたに見せる事がある。地待つて居やゝと言捨て一間に入り給ふ。地無官の太夫敦盛は父と一所に出陣の。用意とり／＼なる中に。母の知せに奥の間より御用いかにと出で給へば。跡より御臺女房達銚子土器携へて。ウタヒ君は千代ませナホス地婿君は三國一と祝しける。樣子知らねば敦盛は。悄りうろ／＼フシあたりを眺めおはすれば。地經盛は取敢へず。詞ナウ敦盛卿玉織姫と婚儀の結び。其盃を取上げられ姫へ差して壽をと。地聞くより染衣打笑ひ。詞申し殿樣。御祝言の盃は。姫ごぜより飲初めて。夫へ差すが世上の習ひ。地思召し忘れの樣に存じますホ、、、とフシ袖覆へば。地經盛卿打點頭かせ給ひ。詞ホ、女房の盃を夫へ差し。壽を祝ふ下つかたの婚禮は其通り。譯を知らねば不審は尤も。幸ひの折柄なれば語り聞かす事有りと。地いひつゝ立つて敦盛の御手を取り上座に直し。其身は次に座を改め。地口外へ出さねば知る人あるまじ。詞そも此敦盛卿は。我が子にて我が子にあらず元此御臺藤の方は。法皇に宮仕へ。御寵愛深うして。御胤を身に宿せしが。人の妬の強ければと。先祖平の忠盛へ。白河院より下されし祇園女御の例に任せ。懷胎の身を其儘。某が宿の妻に。賜りて出生ありし此敦盛。地我が子と

して育てしが院参の折ごとに。詞人無き間には妹が子の歌によそへて御尋ね淺からぬ御いつくしみ。かく由緒ある敦盛なればいかなる高位高官も望の如く成るべけれども。詞官位を受けては臣下の列。重ねて帝位を踐む事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛。まさかの時は春宮にも立て給はん御心やと。叡慮を量り今日迄態と官位の望もせず。地扨こそ無官の太夫と。呼ばせしぞや。詞斯く物語る上からは。其土器は天盃同然。地流を汲んで玉織姫三々九度を納むべしと。仰せを菊の。滴に千代を結びの番蝶祝ひ納むる姫君の心の内の嬉しさは。フシ早う其日の暮らしたからん。地經盛詞を改めて。詞敦盛卿へ願ひあり都騒動の折柄。法皇御幸の御行方は知らず。御身を殘し止めても襲ひ來る源氏の軍兵。憂目や見せ奉らんかと。地心ならず一門と諸共是迄伴ひ申せし事。嘸や跡にて法皇の叡慮苦め給はん勿體なや。詞其上今度の合戰は必定平家滅亡にて。一門殘らず討死せば。都へ伴ひ申す人も有るまじ。御身は是より藤の方と。玉織姫を具し給ひ。都は未だ騒しからん。暫く北嵯峨へ御入りあり。折を見合せ法皇の御殿へ移り給ふべし。地今生の對面も今日限りの經盛。暇乞に御顔ばせ見せもし見もしなされよと。スヱテ涙にくれて宣へば。御臺とかうの詞も涙玉織姫女房達。驚く計りうつとりと。フシ顔見合せて居たりけり。地敦盛大きに恐入り。詞コハ存寄らぬ父の仰せ。生れぬ先から親子と成り。けふ迄御恩を受けし事。須彌蒼海も競べ足らず。縱へ何れの胤にもせよ。後の親こそ親ならめ。東西覺えて今日迄御意を背きし事なけれど。是ばかりは御免あれ。一所に出陣仕り。御馬の先にて潔う御恩を送らせ給はれと涙にくれての御願ひ。地經盛卿押返し。詞一旦の義心尤もなれども。親の恩と。天子の御恩一つに言ふも恐有り。是非御承引なきならば法皇への申譯。某は切腹と面色變れば敦盛卿。詞ハ、ア誤り入り奉る。此上は仰せに隨ひ兎も角も仕らん。ム、都へ歸り給はんとな。ホ、承引有つて嬉しや〳〵。源氏の勢は丹波路と。津の國の街道より二手に寄すると聞及ぶ。地敵の見ぬめの浦傳ひ。難波大江の岸を越え。河内路より上り給へ早う〳〵。畏つて敦盛は用意と一間へ入給へば。詞ソレ藤の方玉織も旅の支度を急がれよ。ヤアコリヤ〳〵染衣皆の者。取賄ひにいけ〳〵と。地仰せに御臺はサア。おぢやとオクリ皆引へ連れて入給ふ。地經盛悦喜限りなく。詞サア心安し是からは一の谷へ馳向ひ。地持口を固めんと獨言しておはする所へ。內府宗盛の使として雜兵一人馳來り。經

盛卿へ火急の御用と。一通を差出せば何事やらんと押披き。詞何々三草の合戰味方敗北。是に依つて主上を始め門院二位殿。密に讃岐八島の浦へお開き有り。貴殿御船を守護との仰せによつて迎ひの兵船指遣はす。急ぎ出立有るべき由。地讀みも終らず心せき立ち。詞サア事急なり猶豫ならず。豫て妻子に別れは告ぐる。再び逢ふも互の輪廻。地此儘に出行かん案内せよと使を引連れ。急ぎ濱邊に出給ふ。フシかくとは知らず藤の方。けふ別れてはいつか又。長地逢見ん事は片糸の結び馴れにし夫婦の緣せめて名殘を惜まんと。座敷をそつと立出でて。詞經盛卿我が夫と地尋ね給へど面影は。見ぬ隈々を爰かしこ見廻す中に落ちたる一通。拔き見るより恟りし。詞コレ〳〵皆の衆早う早う。殿は出陣なされたわいのと。呼ばはり給ふ御聲に。玉織姫女房達。追々に走出で一つ所に寄集り。互に顏を見合せて呆れ果てたる計りなり。地かゝる折節奥庭より間近く聞ゆる轡の音。何事やらんと見る所に。江戸敦盛其日の出立には。雛鶴縫うたる直垂に。ナホス鎧は緋威コハリ同じけの。鍬形打ちたる兜を着て。廿四差いたる染羽の矢。ナホス重籐の弓を持ちハズミフシ勇み進んで乘出し給へば。地玉織見るより帶引締め。小褄かい取りかひ〳〵しく。長押にかけたる長刀追取り。母樣さらばと庭に飛下り。フシ轡面に引添うたり。地御臺は驚きヤア〳〵敦盛。詞都へ登れと父の仰せ。其出立は心得ずと。地尋給へば愚かや母上。詞父の命に從ふは一旦の孝行。兄上達一門殘らず。骸をさらす必死の戰場。地我一人都へ歸り何面目にながらへん。是より一谷へ馳行き。父に代りて陣所を固め潔う討死して。名を後代にとゞむる覺悟。親に先立つ不孝の罪。御赦されて下さりませと。スヱテ思ひ込んだる其有樣。地母上思はず兩手を上げヤレでかしやつた敦盛。詞それでこそ我が子なれ。地ヲヽ、嬉しいフシぞや〳〵。地いで餞別を祝はんと。召したる裲ひらりと脫ぎ。詞總じて軍に立つ時は。敵に矢種を隱す爲母衣をかけると聞傳ふ。是をかけて出陣しやと。地心の内は筐ぞといはぬ情や母の衣。箙に フシ打ちかけ給へば。地ハツア御芳志有難し〳〵。詞コレ〳〵玉織。跡に殘つて我に代り母上に孝行あれ。戰場へ連行く事は叶はぬと宣へば。地姫はわつと泣出し。年月待つた夫婦の盃。かはす間もなく振捨てて。殘れとはどうよくな。わたしやどこ迄も付いて行く。邪魔になるなら今爰で。お前の手にかけ殺してたべ。なんぼうでも離れはせぬと。鞍に取付き鐙に縋り フシ歎き慕ふぞいぢらしき。詞イヤ未練なりそこ

放されよと。地あせり給へば御臺所。詞ナウ敦盛。一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事ない。連れて出陣々々と。地聞くより姫は有がた涙。母の方を伏拜み暇乞さへあら駒の。手綱に引添ひ勇み立ち。女房達も取々に御見立て申せば敦盛卿時刻移ると鞭ふり上げ。詞然らば母上もうおさらば。ヲ、さらば。地さらば〳〵の別れの聲も母の耳にはきつと立つ。駒のいななき轡の音あふり フシ立ててぞ打たせらる。地跡見送りて藤の方こらへ〳〵し溜涙。一度にわつと聲を上げ フシどうど。ひれふし給ふにぞ。地女房達走寄りいかゞ渡らせ給ふぞと。樣々いたはり參らすれば。御臺は涙の顏を上げ。悲しい物は浮世の義理。敦盛ばかり此母が臆病に育てし故。軍にも得立てぬとさげしみが口惜しさ。地討死にやる母が思ひ。十五や六の小腕といひ。幼い時から舞樂を好き。軍の事は知らぬあの子。つい殺さるゝは知れた事。鎧兜を着て出たのが千騎萬騎を討取つて。分取高名したも同然。詞わけてかはいや玉織が。歌の會か香きゝに行くやうに跡を追ひ。いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが夫婦と成つたしるしには。一夜の枕も交させたく。地二つには敦盛が妹脊の縁にひかされて。軍をまどめてゐるならば一日でも討死の。便を遲う聞かうかと。はかない事を心の賴み親の因果とばかりにて。身を投伏して泣給ふ。槇の尾裏葉染衣も。めい〳〵夫の行方迄。思ひくらべて一時に フシ又もや袖をしぼりける。地歎きの耳を驚かすえい〳〵聲に人々は。すはや敵こそ入りたれと御臺を奥へすゝめやり。通路の鈴の綱引つちぎり。てん手にたすきにかけ置いたる。長刀大太刀小太刀を構へ。恐れげもなく待ちかけしは。さすが名におふ平内左衛門越中上總が妻女とは。いはねど知れてかひ〴〵し。地時もあらせず入來るは。平山が郎等成田の五郎。大勢引具し大音上げ。詞ヤア經盛はいづくにある。主人平山の武者所末重。時忠卿と相談あり。玉織姫を取戻し。他人と成つて經盛一家。討亡ぼせとの仰せを受け成田の五郎向うたり。地急ぎ玉織姫を渡し覺悟せよとフシ罵れば。詞ヤア推參なる小二才め。敦盛卿の簾中に定まつた姫君樣。武者所でもむしやくしやでもけもない〳〵やる事ならぬ。地長居せば目に物見せん早く歸れと呼ばはつたり。詞ヤア延び過ぎた衒妻め。かたつぱし打殺せと。地下知に隨ふ家來ども拔連れ〳〵切つてかゝれば。心得多勢を相手にしてひるまず去らず三人が。蜘手かくなは十文字。或は大げさ車切。太刀長刀の稻妻に。こりや敵はぬといふやいな主

も家來もわれ一に。表をさして迯出づるをのがさじやらじと 三重 へ追うて行く。地 跡に御臺はこれなう〳〵。長追ひ無用あぶないと。あせりながらも油斷なく。一間に飾りし弓と矢つがひ。立出で給ふ折も折。取つて返す成田の五郎。かけ向ふ出合頭切つて放せばあやまたず。胸板はつしと射ぬかれどうど倒れて死したるは。フシ 言合せたる如くなり。地 追々歸る女房達。此體を見てお手柄〳〵。あはれ成田が身の果とどよめく所へ又むら〳〵。討ち漏されの家來ども主人の敵と込入るを。詞 イヤ面倒なと三人がまくり立てたる太刀先に。地 刃向ふ者も嵐の木の葉ちり〳〵ばつと フシ 迯げちつたり。地 女房達聲々に。詞 サア〳〵申し御臺樣。此浦船に打乘つて八島へ渡り殿樣に。尋ね逢はせ奉らん。地 又も敵のこぬ内に オクリ いささせ。給へといさみ立ち。すゝめ申せど夫や子の。別れ思へば便なく足も。もつるゝ藤の方。フシ 涙に袖を染衣が。勇んで見せる心は裏葉。げに武士の女房に敵も舌を槇の尾とふり。返つたる女武者三人四人が打連れて。歩めど跡へ引戻す濱の眞砂路つきせぬ思ひ通ふ。千鳥の浦傳ひ船場の。磯へと急ぎ行く。

第 二

地 酒極まる時は亂る。樂しみ極まる時は悲しむとかや。二十餘年の榮花の夢跡なく覺めて都をひらき。平家の一門楯籠る。舞 須磨の內裏の要害。前は海上はけはしき鵯越。ナホス地 大手は生田搦手は一谷の山手より。浪打際迄柵ゆひ廻し。赤旗風に吹靡かせ。參議經盛の末子無官の太夫敦盛。父に代つて陣所をかため フシ 事嚴重に見えにけり。江戸 頃は彌生の初めつかた。月さへ入りてくらき夜に。熊谷が一子小次郎直家。先驅して初陣の ナホス地 高名を顯はさんと出立つ姿は澤瀉を。一しほ摺つたる直垂に。コハリ 小櫻威の兒鎧。猪首に着なす星兜星の光りに只一騎。ナホス地 心は剛の武者草鞋 ハズミ 足に任せてはやりをの。山道岩角嫌ひなく。一谷の西の木戸 フシ 陣門に走りつき。地 一息ついて四方をながめ。詞 ハツア嬉しや我より一番に先驅する者もなし。地 跡より人の續かぬ中切入らんとかけ廻れど。亂杭逆茂木透間なく。嚴しく戸ざす陣所の門 フエ いかゞはせんと見廻す內。遙の奥に管絃の音。本フシ 夜は深更に及んだり。地 折節山路に風もやみ海上も波しづまれば。伎樂のしらべ哀れげに フシ さも面白く聞えけり。地 小次郎は思はずも心耳をすまし聞きとれて。詞 アツア實にも上﨟都人は。情もふかく心もやさしと父母の物語。地 今こそ思ひ フシ 合せたり。地 か

かる亂れの世の中に。長地弓矢叫びの音もなく糸竹の曲をしらべ詩歌管絃を催さる。詞ハ、ア床しさよ。地いかなれば我我は。邪見の田舍に生れ出で。詞鎧兜弓矢を取り。かくやんごとなき人々を敵として立向ひ。地修羅の劍をとぐ事は。淺ましさよとばかりにてスヱテ覺えず涙を流したり。まだうら若き小次郎が。身の程程を汲分けて感ずる心ぞしをらしき。地後の方に蹄の音。誰なるらんと窺ふ內。平山の武者所馬上ゆゝしくかけ來り。小次郎が影見るよりも。敵か。味方いぶかしく。何者なるぞと聲かくれば。小次郎もすかし見て。詞ヤア末重殿かさいふ和殿は。コハ小次郎かと地馬よりフシおり立ち。詞フム我より先へ來る者はよもあらじと思ひしに。ホヽ心がけ神妙々々外の人なら平山が先陣を爭うて一番に乘入らんが。初陣の健氣さに先陣を汝に讓る。氣遣ひなしに切入れ〱。イヤなう平山殿。あの管絃の音御聞きなされ。扨も雲の上人は又やさしさが違ひますの。イヤサそれを和殿は得知るまい。昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ詮方つき。櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て。謀もあらんかと我が智惠に迷うて仲達は逃げしと聞く。アレあの管絃も其通り。何怪しむことはない。はや驅入つて高名せよ。但し和殿がおそろしくば某が先陣せうか。何と地〱と持たされ。血氣にはやる小次郎直家。木戸口に走寄り。門打たゝき大音上げ。詞敵の陣へ物申さん。武藏國の住人私の黨の旗頭熊谷の次郎直實が一子同苗小次郎直家先陣に向うたり。平家方に名有る人々出あうて勝負有れと高らかに呼ばはれば。地門內も騷立ち。すはや敵の寄せたるぞ。出向うて討取れと。木戸押開けば小次郎は太刀拔きかざし駈入るを。ソレ遁すなと軍兵ども俄に騷ぐ鯨波。太刀音人聲かまびすし平山いかゞとためらふ所へ。熊谷の次郎直實。我が子の先陣心に徹しフシ足を空に駈來り。詞ヤア平山殿候な。忰小次郎見給はずやと地尋を待たずされば〱。詞最前是へ見えし故小次郎に色々段々。あの大勢の敵の中へ一騎打は敵はぬぞや。モひらによしに召され後詰を待つての事がよかろと色々にいさめても。地はやり切つたる若者無二無三に切込まれしと聞くより直實髮逆立ち。子を失ひし獅子の勢フシ敵の陣へかけ入つたり。詞爰やかしこの鬨の聲。ナホス地聞くに平山獨りゑみ。詞ホウ思うたつぼ〱。親子共に袋の鼠今の間に討たれをろ。日頃からあの熊谷めと六彌太めが出頭を。くい〱と思うて居たに。エヽ時節もあればあるもの。手を濡さず風の神よりよい敵。

其の上親子も剛の者。死者狂ひと働かば。よつぽど敵も悩ましをろ。地あらごなしさせ討死さし。其跡へしかくれば高名手柄は思ひの儘うまいぞ。合〳〵。合〳〵とぞ〳〵勇み フシ悦ぶ所へ。地木戸口に數多の人聲。スハ敵ぞと身構し窺ひ居るも。くらまぎれ。熊谷次郎直實我が子を小脇にひんだかへ。陣門をずつとかけ出で。詞ナウ平山殿おはするか。悴小次郎手を負うたれば養生加へに陣所へ送らん。地お手柄あれと言捨てて フシ飛ぶが如くに急ぎ行く。地平山案に相違して油斷ならずと馬引寄せ。打乘る間もなく門内より數多の軍兵抜きつれて。我討留めんと驅出づれば。詞心得たりと抜合せ。受けつ流しつ多勢を相手。地火花をちらして挑む内。地無官の太夫敦盛は。爽かに六具をかため駒を進めて乘出し。地平山を見るよりも。詞まつしぐらに打寄せ給へばさしつたりと渡り合ひ 地暫しは支へ打合ひしが。詞先を取られし武者所。殊に多勢に取卷かれ。地臆病神の誘ひてや。駒の頭を引返し行先知らず逃出せば。ヤアきたなし返せと聲をかけいづく迄もとあふり立て跡を。慕うて。三重へ追うて行く。詞敦盛様ア太夫様いなう。この暗いのに只一人。あぶないはなうお歸りと。フシいへどあてども波近き。地磯端をうろ〳〵と袖は涙の玉織姫。夫を尋ね朧夜に心細身の一腰かい込み。あなたへ走りこなたへ迷ひ。すまの浦邊をそこよ。爰よと フシ尋ね。さまよひ給ひけり。フシ早しのゝめに人顔も。ほのかに見えし山道より フシ平山の武者所。漸く逃げのび須磨の浦。駒の足を休めんと フシ暫く息をつぐ中に。地玉織姫と見るよりも。やがて馬より飛んでおりつか〳〵と立寄つて。詞コレお娘。テモよい所で出會ひました。いつぞや京で見初めてから。目の先にちらつくやうで。起きても寐ても忘られず。思ひ餘つてそ様の親御時忠殿へいうたれば。やらうとあるを幸ひに迎ひにやつた其跡でも。ア、生娘なら術ながら。マア寐てからどうしてかうしてと。ほんに〳〵どこもかも木のやうに成つて待つてゐたに。迎ひにいた玄番を殺しよう待ちほうけに召さつたなう。サア 地乘物の代り此馬に乘せ。連れていんで女房にすると。引立つればふりはなし。詞エ、あたいやらしい。親が赦そがどうせうが。敦盛様とは二世の約束。かういふ内にも御行方を尋ね逢うて死なば一所。地邪魔しやんなと驅行くをひん抱へ。詞ム、敦盛を尋ねるのか。コレなんぼ尋ねても敦盛の行方。水の底迄在所は知れぬ。そりやなぜに。ヲ、敦盛はたつた今我が手にかけて討つて了うたヤアなんと。敦盛様を

討つたとや。地ハアはつと計りにどうど伏し。人目もわかずフシ聲を上げ歎き。沈ませ給ひしが。地夫の敵と身構へし切付くる。腕首摑んでヤアこいつ手向ひか。詞モウ了簡ならぬといふ所を言はぬ。ても此手の柔らかさ尋常な事わいな。モどうもエ、武者震のする程どうもならぬ。コレ悪い合點ぢや。とんと心を入れかへ。地おれに隨ふ氣にならしやれ。女房に持つてかはいがるサ、。どうか〳〵とフシ猫なで聲。地姫の怒りの涙まじり。詞コリヤ世が世ならそちが樣なむくつけな侍は傍邊へも寄せつけぬに。隨への靡けのとは穢はしい忌はしい。地エ、腹立やと又切付くる。腕首捻上げ取つておさへ。詞サア女房に成るかならぬか。いやなら殺すが何と〳〵と。地太刀拔持つて傍若無人。ヲ、殺さば殺せ畜生め。エ、誰ぞ强い人が來て。こいつを切つてくれぬかとスヱもだえフシ給ふぞいたはしゝ。地强氣の平山むつとせき上げ。詞ヤア、につくい女め。靡かぬ上に色々の雜言。恥面かゝされ堪忍ならず。地生置いて人の花と詠めさすもむやくしい。思ひ知れと持つたる刀。胸板ぐつと突通せば。フシあつと一聲苦しむ折から。地後の方に鯨波。すは又我を追ひ來るやと。駒を引寄せ飛乘つて逸散に其場遥にへ落失せけれ。謡去る程に。御船を始めて。一門皆皆舟に浮かめば乘り後れじと。汀に打寄すれば御座船も兵船も。遥にのび給ふ。地無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ。御座船に馳着いて。父經盛に身の上を告げ知らす事ありと。須磨の磯邊へ出でられしが。舟一艘もあらざればハズミ詮方波に駒を乘入れフシ沖の方へぞ打たせ給ふ。謡かゝりける所に後より熊谷の次郎直實。ナホスヲ、イ〳〵と聲をかけ。駒を早め追つかけ來り。詞ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大將軍と見奉る。正なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。斯く申す某は。武藏國の住人熊谷の次郎直實見參せん返させ給へと。地扇を上げて指招きフシ暫し〳〵と呼ばはつたり。地敵に聲をかけられて何か猶豫の有るべきぞ。敦盛駒を引返せば。熊谷も進み寄り。互に打物拔きかざし。朝日に輝く劍の稻妻かけ寄り。かけ寄せちやう〳〵。合てふの羽がへし諸鐙。駒の足並かつし〳〵。合下ギンかしこは須磨の浦風に。鎧の袖はひら〳〵〳〵。合群れゐる千鳥村千鳥むら〳〵ぱつと引汐に。寄せては返り。返りては又打ちかくる虚々實々。勝負も果てしあらざれば。詞いそうれ組まんと敦盛は打物からりと投給へば。コハしをらしと熊谷も太刀投捨てゝ駒を寄せ。地馬上ながらむずと組

む。えい〳〵の聲の内。互に鐙を踏みはづし フシ兩馬が間にどうど落つ。地すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて抑へ。詞かく御運の極る上は。御名を名のり直實が高名譽(ほまれ)を顯はし給へ。又今生(こんじやう)に何事にても思ひ殘す御事あらば。必ず達し參らせん。地仰せ置かれ候へと懇ろに申すにぞ。敦盛御聲爽かに。詞ヲヽ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士。かく情ある武士(もののふ)の手にかゝり死せんこと生前(しやうぜん)の面目(めんぼく)。戰場に赴くより。地家を忘れ身を忘れ。兼てなき身と知るゆゑに。思ひ置く事。フシ更になし。地さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞給はゞ嘸御歎き思ひやる。詞せめて心を慰む爲。討たれし跡にて我が死骸。必ず父へ送り給はれかし。我こそ參議經盛の末子(ばつし)。無官の太夫敦盛と。地名乘給ひしいたはしさ。木石(ぼくせき)ならぬ熊谷も スヱテ見る目涙にくれけるが。地何思ひけん引起し鎧の塵を打拂ひ〳〵。詞此君一人助けしとて勝軍(かちいくさ)に負けもせまじ。折節外に人もなし。一先爰を落給へ。早う〳〵と。地言捨てゝ。立別れんとする所に。後の山より武者所數多の軍兵。詞ヤア〳〵熊谷。平家方の大將を組敷きながら助くるは。二心に紛れなし。地きやつめ共に遁(のが)



すなと聲々に罵るにぞ。熊谷はつとばかりいかゞはせんと フシ默然たり。地敦盛卿しとやかに。詞とても遁れぬ平家の運命。爰を助かり行先にて下司下郎の手にかゝり。死耻を見せんより早く御身が手にかけて。地人の疑ひはらされよと。西に向ひて手を合せ。御目を閉ぢて待給へば。地いたはしながら熊谷は御後に立廻り。彌陀の利劍と心に唱名。ふり上げは上げながら玉の様な御粧ひ。情なや無慚やと。胸も張裂く氣後れに。太刀ふり上げし手も弱り。思ひにかきくれ討ちかねてフシ歎きに時も移るにぞ。詞ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよと。地捻向き給ふ御顔を見るに目もくれ心さへ。詞倅小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先がけして薄手少々負うたる故。陣屋に殘し置きたるさへ心にかゝるは親子の中。それを思へば今爰で討奉らば。嘸や御父經盛卿の。歎きを思ひ過されてと。地さしもに猛き武士も。フシそゞろ涙にくれゐたる。詞ア、愚や直實。惡人の友を捨て。善人の敵を招けとは此事。地早首討つてなき跡の回向を賴むさもなくば。生害せんとすゝめられ。ア、是非なしと立上り。詞順緣逆緣倶に菩提。未來は必ず一蓮託生。南無阿彌陀佛。南無



阿彌陀佛。・フシ首は前にぞ落ちにける。地人の見る目も耻かしと御首をかき抱き。曇り聲をはり上げて。詞平家の方に隱れなき。無官の太夫敦盛を。熊谷の次郎直實討取つたりと呼ばはるにぞ。地磯に臥したる玉織姬絶入りし氣も一筋に。夫を慕ふ念力の耳に入りしかむつくと起き。詞ナウしばし待つてたべ。敦盛樣を討つたとは。いかなる人かナウうらめしや。せめて名殘に御顏を。一目見せてといふ聲も。深手にフシ弱る息づかひ。地見るより熊谷御首携へ歩み寄り。詞敦盛を慕ひ給ふはいかなる人と尋ぬれば。地今はの苦しき聲音にて。詞我こそは敦盛の妻と定まる玉織姬。お首はどこに。エエもう目が見えぬと。撫廻せば。ム、何お目が見えぬとや。ヲ、いとしや〳〵。御首はコレこゝに。こゝにと手に渡せば。わつと泣く〳〵しがみ付き。膝にのせ抱

きしめて消入り絶入り歎きしが。詞ナウこれ敦盛樣アはかない姿に成り給ふなう。陣屋を出でさせ給ひしより御跡したひ方々と。尋ぬる中に源氏の武士。平山の武者所。我を見付けて無體の戀慕。だまし討たんも女業。この如く手にかゝり。二人が二人で悲しい最期。せめて別れに御顏が。見て死にたいと思へども深手に心が引入つて。目さへ見えぬか悲しやと。又御首を撫でさすり。宵の管絃の笛の時後にとありし御詞が。今生後生の形見かや。此世の緣こそ薄くとも來世では末ながう。添ひとげてたべ我が夫と。顏に當て身に添へて。思ひの限り聲限り。泣くねは須磨の浦千鳥涙にひたす袖の海。引く汐時と引く息のフシ知死期と見えて絶果てたり。地熊谷は茫然と。詞どちらを見てもつぼみの花。都の春より知らぬ身の今魂はあまさかる。地鄙に下りてなき跡

をとふ人もなき須磨の浦。なみ〳〵ならぬ人々の成り果つる身の痛はしやとスエテ悲歎の。涙にくれけるが。地是非もなく〳〵玉織のフシ亡骸を取りをさめ。地母衣をほどいて敦盛の。御死骸を押包み。サハリ總角取つて引結び。手綱をたぐり結付ける。鞍の鞖やしを〳〵と。弓手は御首フシ携へて。地右に轡の哀れげに。檀特山の。うき別れ。悉陀太子を送りたる。車匿童子が悲しみも同じ。思ひの片手綱涙。ながらに。三重へ歸りけり。地昔より爰も名におふ。津の國の。兎原の里に幽なる埴生の宿に獨居の。長地林は老の營みに糸針取つて人仕事つゞりさせてふ洗濯の。糊かい物を打盤の。手元も暗きフシ黄昏時。フシ世のうきに。いさゝめならぬ身の願ひ。フシ忍びて人につけ櫛の。地薩摩守忠度は俊成卿の館より。須磨の陣所へ歸らんと。急ぎの道も行暮れて。宿もがなと爰かし

こ。スエ荒れし軒端もまばらなる。伏屋の門に立寄り給ひ。詞都方より西國へ歌修行の旅の者。案内知らぬ道に勞れ。日も暮れたれば迷惑致す。率爾ながらお宿の御無心。頼入ると有りければ。ハア、いや爰は所の法度にて人宿は致さねども。我も人も行暮れて宿の無いは難儀な物。地殊更優しき歌枕。御修行のお方と聞けば別條もあるまい。宿はせずともマアはいつて。煙草でも参りませと。戸口を明けて。詞ハアお前はどうやら見た樣なお方ぢやが。ヲ、それよ前方都でお目にかかつた忠度樣でござりますな。ム、そなたは五條の三位に居た。菊の前の乳母でないか。成程々々。ハテ珍しや。お久しや。地先づこなたへと伴ひて。フシ上座に直し手をつかへ。詞マア何か指置きお尋申しませうは。此度源氏の軍勢。平家を攻めんと都へ亂れ入るに付け。御一門残らず西國へ落ちさせ給ふと承りましたが。お前ばかり何として今迄都にはござりました。ホウ其仔細は兼てそなたも知る通り。某は俊成卿の和歌の弟子といひ。分けて親しき中なるが。地此度師卿撰まれし千載集に。我が詠歌を加はりなば。たとへ敵の手にかゝり屍は野山にさらすとも。此世の本望敷島の道を求めしかひならんと。思ふ心の一筋に。詞狐川より引返し。俊成卿の館に立越え願ひしが。かゝる時節に平家の詠歌私に加へん事もいかゞと。息女をもつて尋ねの爲源氏方へ送られしが。いまだ其沙汰なき内に。早や合戰最中と聞き心せかれて立歸る。地生田の陣所も程近しとは言ひながら。暮に及べば陣門も開くまじと。此所へ立寄りしも不思議の緣と宣へば。詞されば妾も幼なじみの夫が不所存。置去りにして行方知れざる折から。縁を求めて俊成様へ乳母奉公。養君菊の前樣御成人に就きお暇申し。かゝるべき悴も有つたれど。地性がわるさに勘當致し。今獨身の貧樂と應ぜぬ苦勞はござりませぬが。承ればお前と菊の前樣は。どうやら譯のある。ハア、いや私に御遠慮はない事。それに就いてお話申す事もあれどこりやおつての事。地まあ／＼遠路のお草臥。あれへござつてお休みと。いふもやさしき待遇に。貧家の塵も繕はぬ。ヒロと主が案内に打連れて。フシ一間にこそは入給ふ。ハルフシまだ宵ながら。かきくもる。空も心もコハリくら紛れ。うそ／＼窺ふ大男。枳殼の生垣押破りぬつとはいつて上り口。納戸へしかける ヒロと指足ぬき足。ナホス忍び込む間に主の林。物音聞付け立出でて窺ひゐるとも フシしすまし顔。地袋に入りし一腰かい込み ギンそろり／＼と表の方 フシ出でんとするを。詞コリヤ待てと。

聲かけられて悧りし。迯行く所を飛びかゝり。むしやぶり付いて引戻せば。地 遁れんやらじと摑付き。引つぱるはずみに頬かぶり脱げて落ちたる顔見付け。詞 ヤアわりや太五平ぢやないか。ア、これ〳〵母ぢや人。聲高にいはしやんな。盗人を捕へて見れば我が子なりけりじや。人がしつては俺よりまあ。こなたの外聞が悪いわいの。テモさても憎やの〳〵。おのれがやうな性の悪いやつがあらうか。ハテあればこそ酒も飲みます。色事はこつち任せ。三絃もちつくりかじるてや。喧嘩もめつたに前先の見えぬ事はせず。又これ〳〵もあんまりにじりがすりはくひませぬわいの。ア、慮外ながら萬能に達した男。サア其悪い事が積つて親に様々難儀をかけ。妹娘を勤奉公にやつたも皆汝故。まだ其上は上塗かけ。盗みする様に成つたは。よく〳〵因果な生れ性。そしてまあ外でもある事か。親の内へ盗みにはいるとは。ア、これ〳〵。こなたもほんに年に似合はぬまだな事いはしやるわいのコレ他人の所へはいるとの。忽ち此首がござらぬわいの。そこで若し見付けられても命に氣遣ひのない様に。高をくゝつて親の内へはいつたは。我が子ながらもア、發明な者ぢやと誉めてはくれいで。何ぢややらぐど〳〵〳〵〳〵と。愚痴な事ばかりいはしやるわいの。コレそんな事聞きや氣が盡きますと。地 いひつゝ腰のすつぽんからありあふ茶碗へどぶ〳〵〳〵。詞 ソレそれ〳〵共酒が止まぬから發つて横着な氣も出るわい。コリヤやい。見るかげもない此母がな。人仕事して漸うと其日を送れば。いかな〳〵一錢の貯も。サアあつてたまる物かいの。ない事はおれがよう知つてゐる。ぢやによつて錢銀の望はない。コレ此一腰がほしさに。イヤそりやならぬ。といはしやるは。エ、親父殿が殘し置かれた重代といふ事か。サアそれぢやによつてよう切れうと思うて。盗む心は。商ひせうにも資本はなし。仕覺えた職もなければ。人足廻しの茂次兵衛所にかゝつて居て。歩荷持しても。儲けにくい物は錢ぢや。それに毎日飯代を拂はにやならず。三文でも餘つた時はかたかはくんでやつてのける。是ぢや濟まぬと思ふからふつと氣の付いたは。今源平軍の中。うそ〳〵と見廻つて拾ひ首でもしたら知行に成るまい物でもないと。思ひ付きは付いても是も丸腰ではならぬ商賣。夫で此刄物を盗むとはいふ物の。親の物は子の物ぢや。コリヤ貰ひますぞや。アレまだのぶとい事ばかり。子なれば遣れどわりや勘當したりや他人ぢやわい。サそんなら借ります。イヤならぬと。フシ せり合ふ

中へによつと來る。人足廻しの茂次兵衛が。詞ハア太五平爰にか。ヤ婆樣何やらせり合はしやるが。ア、扨は勘當の詫を聞くまいといふことか。イヤなう詫所ぢやござらぬ。やつぱり性根が。ア、コレ〳〵直らぬとはいはれまい。おれが世話にしてからめつきりとよう成りましたぞや。もう了簡してやらつしやれ。コリヤ〳〵太五平。うつかりとしてゐる所ぢやない。此度の軍に就いて弓持の鑓持のと大分人夫が入る故。それ〳〵の人を詮索してやつたが。まだ旗持がたらぬ故そちをやらうと思うて一遍尋ねた。外の事より辛どうはせいで。マア賃がよいがいかぬかと。地聞いて林が早や氣遣ひ。賃がようても軍場は命がけ。こりやよしにしたらよかろ。詞ハテやくたいもない。高で命に氣遣ひがあれば。雇はれる者は一人もござらぬ。あつちの手人と違うて。道具持は切合の勝負はせず。若し流矢でもくれば。地楯の後へちやつと隱れる。詞婆樣えいか。地鑓長刀がひらめけば。人の後へちやつとかゞむ。とかくちらほら氣轉きかして フシ立廻れば。詞怪我する事は微塵もない。ほんのこけ知らずといふ物ぢや。其段は此茂次兵衛が受合。コレ卽ち先樣からきた。丈夫な裝束見せましよと。フシ風呂敷ほどき取出すは。雜兵なみの陣笠鎧。見るに太五平ぞくつき出し。そりやおれが望む所ぢや。大勢に打交りえい〳〵わいが言うて見たい。ヲ、サそんならちやつと身拵へと。地てん手に帶とく布子ぬぐ。道具屋襦袢の上に黑革の。鎧上帶 ナホス しつかとしめ。一腰さすが侍の小手脚當も似合うたと。陣笠着せて。詞コレ太五平。そちは先樣知るまいから。嗅に所をヲツト合點母じや人。ヲ、そんなら太刀の折紙を。添へてやらうと納戸より。取出し渡せば忝い〳〵。詞コリヤ怪我すなよ。ヲ、夫もよい〳〵此形も。よい〳〵やな。よい。よいやな。よい〳〵〳〵〳〵よいやな。地身ぶりは練物見る如く。オクリ勇み進んでフシへこそは急ぎ行く。フシ林は跡を。打眺め。詞不具な子がかはゆいと。有樣は不便にござる。地とにもかくにもお前のお世話。忝うござります。詞お禮がてらに酒一つ進ぜたいが。奥には仕事を取散らして置きました。納戸でなりと參つて下され。イヤそりや御無用。ハアテ買うては進ぜぬ。餘所から貰うた諸白に。鰯の肴でたつた一つ。地是非に〳〵と無理やりに。納戸へ押遣り勝手から。銚子盃持行くも。フシ子故の愛想と知られたり。地風さそふハルフシ道の時雨も。戀故に。身は濡鷺の菊の前。走着いたる一つ家の。門の戸けはしく打叩き。明けて〳〵と宣へば。林は聞付け誰ぢや

〳〵。イヤ詞大事ない者ぢや。大事ない者とは。ハテわしぢや。菊の前ぢやわいの。ヤア。お姫様とは心得ぬと。地庭にかけおり戸を明けてほんにさうぢや。詞まあ〳〵お入り遊ばせと。地いふ中もどうやら氣遣ひ。見れば付添ふ人もなし。何として夜に入つてお一人お出でなされたぞ。詞さればいの忠度様の遊ばした。お歌の事にとやかくと隙取る内を待兼ねて。お立ち有りしと聞くと早や跡を慕うて。地フシ出でたれども。地心に任せぬ女の足。爰迄來ても追付かれぬ。詞道は知らず日は暮れる。そなたの所は前方に。摩耶参りの時寄つたを便り。漸う尋ね當りしが此やうに後れては。忠度様に逢ふ事は。成るとも〳〵。そりや又どうして。コレ。忠度様は先程お出なされて奥にござる。ヤア夫はほんか嬉しや〳〵。早う逢ひたいあはしてたも。成程お逢ひなされませ。ぢやがコレ。旅草臥で休んでござる。けたゝましう起さずと。そつとはいつて肌身を付け。しつぽりと御寝なれと。地粋な詞におもはゆく。ヲヽ乳母とした事がじやら〳〵と何ぞいの。わけもない事ばかりといひつゝ片頰に笑の眉。ひらく襖も待兼ねて。フシいそ〳〵として入給ふ。折節納戸の暖簾上げ。欠伸ましくら立出づる茂次兵衛。詞婆さま。いかい雜作でござつた。是は扨わしとした事が。不作法な亭主ぶり。イヤモ手酌でたべつおさへつ。銚子切り引つかけたりや履入がしてぐつたりと寢てのけた。内に大分用がある。いかい馳走。其内きましよと地言捨てゝ。とつかは急ぎフシ立歸る。ハルフシ時しも一間。地騒がしく何の様子か菊の前。襖をあけの裾蹴はらし。かけ出で給へば林は驚き。コレ〳〵申しと引止め。詞何事が發つたか氣色をかへてとつかはと。お前はどこへござります。様子おつしやれどうぢや〳〵。サア其様子はの。忠度様がどうよくな。わしに暇をやるといの。ムヽそんならお前のお腹立は尤もぢやが。高いも低いも夫が女房に暇をやるは。よく〳〵了簡ならぬ筋か。其譯を立てなされにや。コレ科ないお前に疵が付くぞへマアとつくりと氣を鎭め思案して御らうじませ。イヤ思案迄もない。其譯は立つてあれど。詞互に思ひ初めしより夫よ妻よと言ひかはし。一生添はうと思うた物。緣切れては片時も何と存らへ居られうぞ。恨みつらみもありそ海一思ひに身を沈め。底の藻屑となる覺悟。とめずと殺してたもいなう。死ぬる〳〵とばかりにて。フシ跡は詞も涙なる。イヤ〳〵詞何ぼさうおつしやつても。乳母はどうも合點がいかぬ。是には定めて深い様子が。ホウ其仔細は忠度が。とくと申

聞かせんと。地しづ〳〵と立出で給ひ。詞天の憎む所天必ず誅罰すと。入道の不善一門の積惡によつて。かく迄傾く平家の運。地此度の戰ひも十が九つ味方の敗軍。某も討死と覺悟極めし事なれば。詞いつを期してか添果てん。思ひ切つて歸られよと。いへども中々聞入れず。陣所へ件ひ行かんとある。時には忠度女に迷ひ陣中迄倶したりと。世の人口にかゝるといひ。死後迄緣を切らされば。地俊成卿の御身の上。平家に親しき咎を受け。終には源氏の仇となつて亡び給はん悲しさに。詞態と難面くいひ放し。暇をやりしは忠度が。師の厚恩を報ぜん爲。恨みと思ひフシ給ふなよ。地とはいへもしも運に叶ひ軍に勝たばながらへて。再び逢はんも計りがたし。詞それを頼みに行末の。契りを樂しみ待給へと。地口には諫め心には。これ今生の別れぞと思ひ廻せばいぢらしく。さしも武勇に張り詰めし。弓弦の切れし心地にてゐるもゐられぬ座を背け。脇目に餘る御淚フシつゝみ兼ねさせ給ふにぞ。地それと悟りて菊の前。イヤ〳〵詞何ぼ其樣に。再び逢ふの添はれるのと。潔うおつしやつても。誠しからぬ身の覺悟。地討死と知りながら何と見捨てゝいなれうぞ。いづく迄もお供して生きるとも死ぬるとも。一所でなけりやわしやいや〳〵。むごいつれないお心と。縋り付いて泣き給へば。林も心根思ひやりスヱテ倶に袂をしぼりしが。地態と勇めの聲勵まし。詞今の程事を分け。利害を說いて言ひなさるに。たつてお供とおつしやれば。親御樣へは不孝といひ。殿御の爲には猶ならぬ。地いかに姫ごぜなればとて其辨へがないかいなう。ア、うとましいお子ではあると。詞を盡して倶々に諫めすかせどいやおうの。應も淚中々に離れがたなきフシ風情なり。地折節風に誘はれて。間近く聞ゆる鯨波。耳を突く鉦太鼓。亂聲に打立て〳〵。どつとかけくる討手の大將。眞先に大音上げ。

切リ「平家の落人薩摩守忠度。此家に忍びおはする由。注進有つて慥に聞き。召捕らん爲梶原平次景高が向うたり。縱へ鬼神なればとて。八方を取圍めばとても遁れぬ。尋常に繩かゝられよ。異議に及ばゝ踏込んで搦捕る。地いかに〳〵とフシ呼ばはつたり。地人々扨は茂次兵衞が。注進せしかと驚けば。ノル地忠度ちつとも動じ給はず。二人を奥へ忍ばせて。太刀おつ取つてつつ立上り。ヤア詞をこがましや景高。源平互に鎬を削り刄を爭ふ戰場には向はず。我一人に多勢を以て取圍む卑怯者。汝如きにやみ〳〵と繩かゝる忠度ならず。地いでや手並を見せんずと。太刀拔放しフシ身繕ひ。地景高苛つてソレ

踏込め。下知に従ふ雑兵共。門の戸蹴破り一同に。かけ入り／＼かけ向ふ。多勢を屈せぬ早業に眞甲。立割車切。四方八方ばつし／＼。薙立て給へば雑人ばら。フシ皆我一に跡ずさり。詞忠度怒りの御聲にて。うぬら如きに刃物はいらずと。地大手を廣げ待給ふ。ハルギン手並にこりぬ雑兵共。一人がかりは敵はじと。大勢一度にどつと寄る。引摑んでは人礫。あやどりなんどを見る如く目覺しかりける 三重へ次第なり。地勇力無双の働きに。さしもの景高氣後れし。逸足出せば雑兵ども。敵はじものといふ波の。立足もなく我先に。むら／＼ぱつと。フシ迯失せけり。地相手なければ忠度卿。息を休むる其中も油斷ならざる埴生のやどり。いかゞして防がんと。心を配る時しもあれ。地又も寄せくる鬨の聲貝鉦。鼓攻め太鼓。フシ手に取る如く聞ゆれば。地忠度はつと心付き。詞扨こそ景高。大軍を催し重ねて向ふと覺えたり。戦場ならば敵の勢。何萬騎にて圍むとも打破り驅惱ませ。譽を顯はし見せんずもの。地軍中に引返し願ふ詠歌も腰をれの。望も叶はず剰へ。さしも名高き忠度が。斯く荒屋に身を忍び。敵に圍まれやみ／＼と。生捕られんは後代迄。屍の耻辱名の穢れ。エ、口惜しや淺ましやと。拳を握り齒噛をなし怒りの涙てる月に。雹を降らすが如くにて ノルフシ いたはしく。も亦道理なり。コハリ地透もあらせず表の方。寄せくる軍兵むら立つ提燈天地を。てらし亂れ入るよと見る所に。ナホス地さはなくして討手の大將。掛烏帽子に花田の大紋さはやかに。長袴のくゝりをとき悠悠然と立向ひ。詞武藏國の住人岡部の六彌太忠澄。忠度卿に見參と。地しづ／＼と打通り傍近く謹んで。詞此度源平兩家の軍は。私ならぬ院宣を蒙り。範頼義經罷向へば。兩陣互に晴勝負。潔き軍はせずして。拔けがけせし景高が卑怯の振舞。聞くに忍びず此六彌太が参りしは義經の嚴命。其仔細は。先達て俊成卿へお頼み有りし御詠歌の內。さゞ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かな。右の御歌千載集に入りしかど。勅勘ある御身なれば。名は憚りて。讀人しらずとなりし趣。則ち集に入りたる印。此短冊御覽に入れよと。地山櫻の流枝に。結び付けたる以前の短冊フシ恭しく差出せば。地忠度につこと打笑み給ひ。詞我が詠歌を我筆の。願ひも仇花ならぬ印。御芳志の山櫻。ハア、忝しと押戴き。敵味方と隔つれば打捨置かるべかつしを。思ひ寄らさる義經の仁心にて。歌人の數に加はり。和歌の譽を殘す事。生涯の本望死しても忘れぬ。フシ悅びぞや。地とても遁れぬ身の不運。死すべき時に死せされば。死に勝る恥有

りと。名もなき愚人の手にかゝり。見苦しき最期もせんかと。後悔せし折に幸ひ。詞武勇の聞え隠れなき。六彌太に生捕られば忠度が恥辱はあらじ。サア。依て繩かけられよと。地フシ御手を廻し待給へば。コハ詞心得ぬ御仰せ。某君の討手には参らず。敵味方の勝負は戰場。其時は兩家の晴業容赦はないぞ。互に時の運に任せん。但し梶原が如き弱みを見かけ。拔駈して手柄にせんと。思ふ様な六彌太と思召さるゝか。ハ、、地フシはつとあざ笑へば。地忠度卿理に服し。詞實に〳〵是は誤つたり。盛んなる時は制し。衰ふる時は制せらるゝ理。いかなれば義經といひ汝迄誠有る一言。心魂に徹して今さら返す詞もなし。地惜しからぬ命なれども明けなば陣所へ立歸り。花々しく軍をせん。其時望みは御邊が首。忠度卿は我討取る。必ず討たれよ。おんでもない事。アレ〳〵八聲の鷄も鳴く。明くる間近しと申せども。路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ソレ〳〵用意の馬引けと。地飾立てたる黒の駒。御前に差寄する。辭するに及ばず忠度卿。立髮摑んでゆらりと召せば。地一間の内より菊の前。コレなう暫しと駈出で給ふを林は押とめ。立身で隠せば岡部の六彌太。夫と悟つて忠度の。脱ぎかけ給ひし上着の袖。刀を拔いてふつつと切り。詞コレ〳〵乳母といふに恟りハテ扨。詞ふしぎな顔せまい。總じて老女は嫗といひ。又姥とも呼ぶ。今宵忠度卿の。お宿を申せし御褒美に是を遣はす。それとも。若々しき錦の片袖。年寄が貰うて益なしと思はゞ。外にほしがる方も有るべし。是も其。人の形見と思へども。猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心。ナ。其方が耳にソレ。菊の前よく心得て地お受け申せと差出せば。地コハ冥加なき仕合と。戴く右の片袖は右の腕を落ちかたの。軍に討死し給ひし。フシ後の哀れとしられたる。ハルフシ思ひの種や涙の種。仁義を種の六彌太が。東雲近し急がんと先に進んでたつか弓。いはぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顔に。見送る姿ふり返る心の種の詠歌も昔ながらの山櫻。散行く身にも指かざす流の枝の短冊は。世々に譽を殘す種。歎きの種の離れ際。諫めを種と隔つれど。はてし涙の悲しみを倶になづみて耳を垂れ嘶く。聲も哀れそふ駒の。足取り諸手綱引き。わかれ行く曉の空も。名殘や惜むらん

第　三

歌世にあらば又歸りこん津の國の御影の。ナホス松と詠み置きし。地一樹と倶に年を經し額の黒痣口癖に。佛の御名を唱ふれば。白毫の彌陀六と。人に知られし石屋

有り。實に交りも信心の同氣同行相求め朝暮。勤むる看經の責念佛の終りには。諸國諸山に建置きし石塔にある戒名の。數も限りもなむあみだ。願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり。地日暮紛れに門口へ連立つてくる石屋ども。親父殿内にかといふ聲聞いてずつと立出で。詞ホウ同行衆ようござつた今日は大分閙しさに仕事の形で直に看經たつた今了つた。サ、上らしやれなむあみだ〳〵。アイヤこれ彌陀六殿。今夜は數珠くりの數右衛門が逮夜。百万遍申すによつて誘ひに來ました。ほんにさうぢやどりや參りましよコリヤお岩まだ彥助は戻らぬか。ソレ娘が起きたら藥あたゝめて飲ませ。若し石塔を誂へさしやつたお若衆が見えたら戻る迄待たして置け。サア〳〵ござれちやつと念佛かき込んで夜食を申そぢやあるまいか。ヲイ〳〵佛も百味の飲食。こちも奈良茶の御食せう。しよさい佛法腹念佛。地門念佛を口々にフシ打連れてこそ急ぎ行く。地跡へ下人の彥助が朸の先にぶら〳〵とフシ網繩引きかけ立歸り。詞ヤレ〳〵しんどや。お岩殿肩も腕もめり〳〵いふわ。ヲ、道理々々さぞ草臥。そして石塔は建ちましたか。イヤまだ建てはせぬが。おりや内に用があろと思うて先へ戻つたが旦那殿は奥にか。イヤ〳〵同行中に百万遍が有つて參らしやつたわいの。ホウそんなら幸ひ。此間小雪樣が病氣ぢやとて引込んでござるは。彼の石塔を誂へさしやつたお若衆に。戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入らぬ内意見せうぢやあるまいか。イヤそりやわしも如才はない。此間から色々というてもいかな〳〵。此戀が叶はねば井戸へ身を投げるの首しめて死ぬるのと怖い事ばつかりいうてぢや。ホウそりやいやなこつちやの。ハアそんならからぢや。たつた一度で思ひ切らしやれと。とつくりと合點さしていつそ逢はそちやあるまいか。ハテもうせう事がない幸ひ今夜お若衆が見える筈ぢやが。其間に旦那が。ア、何のいの百万遍ならちやつとぢや有るまい。マア娘御に其譯いうて工面さつしやれ。おりや寐所で彼の時分。獨角力を取りましよと地言ひつゝ勝手と奥の間へ。フシ別れてこそは入りにけれ。半太夫既に其夜も。丑三つの。風しん〳〵と更渡り。スヱいと物すごき時しもあれ。音取の聲の哀れげに。ほの聞ゆればいとゞ猶。心ぼそさとフシ訝しさ。地小雪は部屋を立出でて灯火かゝげ窺へば。門の戸ほと〳〵打叩き。詞頼みませう地〳〵といふ聲は紛ふ方なきお若衆樣。ヤレ嬉しやと飛んでおり。戸口を明けてようこそお出で。サア〳〵こちへと伴うて。下に居る間も胸せかれ顏は上氣のはち

栬。差俯向いてもぢ〳〵と。挨拶も出ぬフシ其内に。地お岩が聞付け走出で。詞是は〳〵お若衆様。今日お出の約束故只今迄待ちましたが。なぜ更けてお出なされた。されば手前はちと様子有つて人目を忍ぶ者なれば。晝は勿論夜とても密な時刻を心がけ。態と只今参りしが先達て誂へ置いた石塔が出來ましたら。彼地へ建てて貰ひたさ。先づ御亭主に逢ひましたい。イヤとゝ様は只今留守でござりますが。お前がお出でなされたら待たせまして置く様にとナウお岩。アイ申付けて出られました。歸られます迄名代は此娘御。お咄の相手にしてうつゝ答へつやつつ返しつ。地とかくお心安うして進ぜて下さりませ。サア〳〵奥へと フシすゝむれば。詞然らば左様致さんと。地何の心もつい立つて。一間へ通る後かげ見送るお岩が手を打つて。詞テモ扨も好い器量。あの様なお若衆は日本國を尋ねても今一人と有るまい。惚さしやんすも道理々々。したがコレ小雪様うろ付いてござる所ぢやない。ちやつといて教へた通り何かなしにあたまから抱付いてこけたがえいぞや。夫も上へならぬやう下から隨分あしらひなされ。地アレまだうぢかはもどかしやサア〳〵早うとむりやりに。押しやり突きやり跡びつしやり。詞ア、世話やのどうやらかうやら首尾なつた。地是から休もと儘なれどたつた一重の壁ごしに。隣の餅搗聞くやうで寐られそむない夜さりぢやと。フシいひつゝ勝手へ入る跡へ。地小雪は立出で興さめ顔。詞テモめんえうなお若衆様。惜に奥へいかしやんしたがかいくれ姿が見えぬはどうぢや。地不思議〳〵とうろ〳〵きよろ〳〵尋ねる内。こなたの障子さつと明け。詞イヤ爰に居ますわいの。是はしたり意地の惡いいつの間に抜けなさつた。人の思ふ様にもない心つよいお方ぢやと。地言ひつゝ傍へ指寄れば飛びしさつてア、これ〳〵。詞始終の様子を見聞くに付け。優しき人の志。嬉しいとは言ひながら。我が身は深き様子有つて假にも妹脊の語らひをなす事叶はず。地縁なき事は前生の。約束ならめと諦めて思ひ切つて下されと。いふもさすがに氣の毒の。フシ打しをれたる其風情。地小雪ははつと力を落し。サハリたとへ様子があるとても。是程に思ひ詰め心を盡すかひもなく。情なうも振捨てていやとおつしやりや生きては居ぬ。むごいつれないお心とスヱテ恨み歎けば。詞いやとよ恨むはさる事ながら。逢ふは別れの始といふ例に洩れぬ我が身の上。頼み置きたる石塔が今にも成就してあらば。再び此家へ來らぬ故逢見る事も叶ふまじ。地只儘ならぬは世の習ひはかなき

物は人の身の。一生は皆夢と思へばさのみ迷ひも有るまじ。さりながら今を限りの別れといへば。誰しも名残惜しい物。若しも戀しき折からは。詞心のいさめともならん。いで〳〵形見を参らせんと。地錦の袋押開き青葉さかえし笛竹を。渡す心もあぢきなく戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく。ひよんな事ぢやといふより外フシ詞も。涙にくれゐたる。地折から道々口癖に南無阿彌陀。なむあみだ六逮夜よりいきせき戻り門(かど)の戸を。明けい〳〵と打叩けば。あいと奥から返事してお岩がかけ出で。詞旦那様のお歸りさうなコレ小雪様。折角戀になされたあなたを。此儘で思ひ切るお前の心がいかにしてもいとしぼい。地せめてもの心ゆかし此間にちやつと抱付(だきつ)きなされと。むりに押遣り庭に下り戸口を明け。詞ホウ旦那様早かつた。何(なん)の早かろ。百万べん〳〵だら〳〵と跡の話で途方もなう夜が更けた。アなむあみだ〳〵。ヤお若衆はござつたか。サア其お方は。どうぢや〳〵。サヽさつきに見えたけれど。耻しかつたか門口でうぢかは〳〵はいりにくさうにしてで有つたを。もどかしがつて娘御がついはいらしなされたわいな。ヤヽ何ぢや娘がもうはいらしたか。アイ。なむあみだ〳〵。ヲヽ旦那様とした事が悪い聞きやう。此門口にござつたを内へはいらしなされたといふこつちやわいな。ハテさうしつかりといへばえいにどうやら紛はしかつたではつと思うた。地どりやお目にかゝろかとずつと通つて是は〳〵。詞さぞお待遠にござりましよ。扨お誂への石塔。今日の約束なりや夜を日に次いで漸う出來(でか)し。今朝(こんてう)から若い者等に運ばせたが。大かた建てたでござりましよ。それは嬉しやいかい世話でござつた。イヤ世話は家業ぢやがお氣に入つたらこちも仕合。マア御らうじて下さりませ。成程々々同道して参りたい。そんならお供致しましよと。地立つて用意を取急げば。詞コレ〳〵とゝ様(さん)わしも一所に行きたいわいな。そりや何(なん)で。ハテ石塔の恰好見に。ハテ扨わけもない何(なん)のわれが見る事で。爰やあそこの所ぢやなし殊に夜道ぢや。阿呆いはずと背戸門(せどかど)しめてよう留守せい。コリヤお岩。そちも傍(そば)から隨分氣を付け誰が來うとも構へてついはいらすなよ。合點(おつくん)か地サア〳〵お出と打連れ立ち急ぎてこそはへ出てで行く。ハルフシ月もさやけき夜もすがら。四方の景色もすみのぼる。光りを覆ふ雲ならで。雀のやどり影暗き。本フシ松の林に風あれて。汀の波のおのづから音(おと)もはげしくフシ打寄せて。地高根に響くコハリ山彦は。とう〳〵さつと布引のナホス瀧の。しら糸

たえずと人の。とへばかなたと五百崎に ヲクリ つゞく。藪池村里も。急ぎて切利天上寺。摩耶のお山を馬手に見て。行く道筋も直ならぬ脇の濱邊や磯傳ひ。神戸も跡に湊川 ハルフシ 流るゝ水の淀ならば爰も繼橋かけ渡す フシ 舟を守りの神垣や 地 森もしげみて置く露の。垂水の里も早過ぎて行けば。程なく上野山 フシ 一の谷にぞ着きけるが。地 東雲近き横雲のたなびく空も青々と。枝葉しげりし松蔭につつくり立つた御影石。遠目にそれと彌陀六が。走寄つて是ぢや〳〵。詞 先達て遣はされた所書に合せ。若い者等に言付けたりや建ては建てたがちつくり笠にふりがあると。地 押直してためつすがめつ。詞 サア恰好見て下さりませ。何とようござりませうがや。是から狂ひのない様に騰を合すは漆喰と。地 懐より蓋物取出し。重ねの際々塗る所へ。山畑かせぐ百姓ども。

鋤鍬かたげどや〳〵と通りかゝつて。詞 ホウ石屋の親仁殿か。おいやいこりや皆とうから精が出るな。イヤこちとらより此方がとうからあぢな所へ石塔を建てさしやつたの。ハテあの人は商賣ぢやによつて。どこで有らうが持運んで建てねばならぬが。誂へ人が希有なやつぢやの。アアこれ〳〵むさと麁相言ふまい。其施主人が爰にござるぞナアお若衆様。我も人も亡者の爲卒都婆一枚立てても三惡道を遁るゝといふ。まして大層な此石塔をお建てなさるは御奇特なお若衆様。結構なお志でござります。イヤこれ親仁殿。お若衆の施主人のと人もないにそりや何いはしやる。何とはわいら目が覺めぬな。アレまたどこに人がゐるぞいの。ハテこれ爰にハアほんに見えぬわ。ハレめんえうなたつた今迄爰にで有つたが。ハアどつちへござつたな。お若衆様〳〵と 地

呼べば倶々百姓ども。爰かそこかと尋ぬる所へ。娘の小雪がかちはだし息もすた〳〵 フシ 走り着き。詞 お若衆様にたつた一言いひたい事が有つてきた。地 ちよつと逢はして下さんせ。詞 イヤ逢はして所ぢやない影も形も見えぬわい。コレ親父殿。お若衆がゐやらねば忽ち此方の損ぢやぞや。所を知つてか。但し先銀でも取つて置かしやつたか。いやてや。仁體が好いから所も問はず一錢も受取らなんだ。ハア夫でよめた。石塔をかこ付に何ぞせしめる下工。扨は騙に極つた。詞 遠くはうせまいぼつかけんサア皆こい〳〵と立騒げば。詞 イヤこれ〳〵待たしやんせ。よもやそんなさもしい心なお方ではあるまい。其證據はわしにやるとて。コレ此笛を。貰うたのか。ハアどれ〳〵。ヤこりやまあ袋が結構な赤金襴ぢや。扨笛は生竹でもないが節からちつくり枝葉がある。

いか様是を錢にせうなら百が物はあらうかいナウ親仁殿。ハテ扨何の錢にならう夫も娘が一杯喰たのぢや。エ、こんな事ならあたまで半銀取つて置いたら。まんさらの損もせまいにあた慘たらしい目にあうたと。文地悔むにかひもあら笑止や。彌陀六がぬかれたと傳へて諸事の讀物。手附を取るといふ事はフシ此時。よりと知られたり。ナホス地時しも跡の松原より足早にくる女子は。何者成るといふ中に走り。近付き藤の局。詞コレ〳〵ちよつと物問はう。船寺はどつちぢやの。地敎へてたもとありければ。詞ハア、夫は是からよつ程遠いが。見れば賤しうない女中の。たつた一人かちはだしで何故寺を尋ねさつしやる。されば妾は樣子有つて跡より追手のかゝる者。暫く影を隱さん爲と地宣ふ中に目早くも娘が持つたる袋を見付け。詞ならそれちよつと見せてたべと。

地手に取給へば紛ひなき青葉の一管。詞ヤア是は我が子の敦盛が肌身放なさぬ秘藏の笛。どうして此方の手にあると。地聞いて親子も不審顏。百姓どもロ々に。詞其敦盛といふ人は。此間の戰に。源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝり。死なしやつたぢやないかいナア與次郎。ヲ、其時にいぢらしい玉織とやらいふ内裏上﨟も殺されて居たげなと。地聞いて御臺は。詞ヤア〳〵なに敦盛は討たれしとや。福原の館にて母樣御無事でおさらばと玉織諸共いさぎよう。地いうたが此世の暇乞。長い別れに成つたかと。ありし事どもくどき立て。人目も耻じぬ叫び泣き前後。不覺に見えにける。詞イヤこれ親仁殿。合點のいかぬ事がある。死なしやつた敦盛樣があの笛の主なれば。こなたに石塔誂へたお若衆と一つぢやないか。いかにも。サ其死んだ人が來さうなものぢやな

いぞや。いかにも。ハ、ア聞えた。さつきに爰迄連立つて來て。あのゝ物のいふ中搔消す樣に見えなんだは。扨は幽靈であつたよなと。地いへば皆々興さめ顏御臺は猶も悲しさのスヱテ思ひいやます御歎き。小雪も始終を聞くにつけ。儚い事やとばかりにて。フシ倶に袂をしぼりける。地折ふし遙の松蔭よりむら〳〵鳥の搏つが如くかけくる大勢彌陀六が。あれこそ慥に追手の者。先づ〳〵あなたを隱すに幸ひ。此石塔の後へとフシ御臺の手を取り忍ばせて。詞何と思やるいづれも。追手の奴等が此所をすなほに通ればあなたの仕合。若しも何かと意地張らば。是迄平家の領地に住んだ御恩の爲。一働せうぢやないか。ヲ、サてん手に鋤鍬の。背打くらはせぼひまくろと。地いふ間もあらせず砂煙蹴立て踏立てかけくるは。梶原が郞等番場の忠太須股運平先とし

て。數多引連れつゝと寄り。詞コリヤ〳〵百姓ども。三十餘りの女一人此所へきたであらう。どつちへ迯げたそれぬかせ。ハア成程々々。其女はアレ。あの道を横切に。濱邊傳ひに走つたがア、もう二三里も行きませう。追手の衆なら一足も地早うござれとフシ急すれば。地扨こそ逍すな皆來いと。駈出すふりにて立留り。運平が耳に口。牒し合せて木蔭に殘しフシ濱邊をさしてかけり行く。地跡打眺めサア樂ぢや。此間に早うと御臺を出し。詞コリヤ〳〵娘。あなた一人は覺束ない。寺迄送つて内へいね。地ちやつと〳〵といふ所へ。思ひがけなき木蔭より須股運平飛んで出で。詞ヤアどこへ〳〵からあらうと推量し。忠太が我を殘し置かれた。サ、早う御臺を渡せ。邪魔ひろぐとかたつぱし。そつ首ころり打落す何と〳〵と罵れば。地百姓共せゝら笑ひ。詞コリヤやい。そつ首のそつくひのと。わいらがほでの動く間にうつかりとして居ようかい。サア相手仕事ぢや手早にこいと。地てん手に鋤鍬大熊手。打つてかゝれば運平始め。數多の家來も一同にフシ拔連れ〳〵渡り合ひ。地打合ふ隙に彌陀六が。ソレ御臺樣迯げた〳〵。娘も迯げよとあせる中。元來達者の百姓ども。腕先揃へて連枷打。かたはし家來を打毆り。運平を追取捲き。詞投げたり踏んだり蹴飛したり寄つてかゝつて打叩く。地急所にや當りけんフシうんと仰向に反返れば。地ソリヤ死んだはと迯行く家來。又追つかくるを彌陀六が。コレ〳〵待つたと呼返し。詞御臺の難儀を救ふ爲。ぼつ散らす計りでよいにア、死んだりや尻がむつかしい。コリヤまあどうした物であろ。どうというたら迯げたがよいサア皆ござれといふ所へ。地駈つて來る庄屋の孫作死骸見付けて扨こそ〳〵。詞一人も散らす事ならぬぞや。コレ皆よう聞きやれ。今梶原樣の郎等番場の忠太といふお侍がござつて。百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由憎いやつ。殘らず引立て來るべしと嚴しい言付。ア、ひよんな事しておらに迄厄介をかける。遅なはつたら猶こはい。サア〳〵地おちやといふに皆々尻込の。中に彌陀六進み寄り。詞殺したと聞かしやつたは大きな間違ひ。ありや目が眩うて死んだのぢや。其證據にはソレ。死骸に一つも疵がない。ムウそれが定ならおらも嬉しい。地ドレ〳〵と身體を改め。詞ほんにどこにも疵はない。こりやあつちのが大きな麁相。ハテそち達が殺さぬからは何のこはい事はない。此中でよう物いふ者たつた一人居て。さつぱりと言譯すりや濟む事ぢや。ほんにさうぢやハア誰がよかろなア。いやこれ年の功ぢや

彌陀六いかしやれ。イヤ行く分は構はぬがおりや口癖の念佛が邪魔に成つてどうもならぬ。そんなら此庄屋が指圖せう。日頃ちよびくさようしやべる雀の忠吉やらうかい。イヤわしやあんまり口早で何のこつちや譯が知れまい。扨はびしやの五太右衛門かい。おりや聲が鼻へ入るぞ。というて丹兵衛は咽がごろつく。與次郎は齒脱なり。指詰又平おいきやれ。イ、いやコ、こちやド、どもりますわいの。ハテ扨其様に譲合つては埒が明かぬ。幸ひ爰に石を運んだ繩がある是で鬮取したらよかろ。ヲ、そりやいやおういはさぬやら此庄屋がしてくると。フシ手早に繩切り後でもちやくちやひん握り。詞コリヤ結んだのを取つた者がいくのぢやぞ。サアとれいもよ。ヲツト市嗅どれとりやる西國廻つて是々と地てん手に繩先引つぱれば。詞ハア、頭數よんでしたがコリヤ一筋餘つたわ。ハテそりや親の繩ぢや庄屋殿とらしやれ。ほんにさうぢやおれが取ろ。サア引け〳〵かたはしからいなしてくりよ。ヤすつとせい。〳〵。ハア悲しや結んだのはおれぢやあつた。サア庄屋殿いかしやれ〳〵。イヤ待てよ。おりやいかう筈がない。此場の様子を知つてゐるわいらが言譯する筈ぢや。デモ鬮が當つたもの。そんならも一度。イヤ仕直しはならぬ〳〵無理いはずといかしやれと。地寄つてかゝつて引立て押立て。詞ヨイハサツサ。是は迷惑。ヨイヤサツサ。待つてくれんか。ヨイヤサツサ。了簡ならぬか、ヨイヤサツサ。あんまりどうよく。ヨイヤサツサ。おつ立てひつ立て。ヨイヤサツサ。地て。ヨイヤサツサ。こ。ヨイヤサツサ。そ。三重へ行空も。地いつかは冴えん須磨の月。スエテ平家は八島の浪に漂ひ。ギンオクリ源氏は。花の盛を見る中に勝れて熊谷が。陣所は須磨に一構。フシ要害嚴しき。逆茂木の中に若木の花盛。八重九重も及びなき。それかあらぬか人毎に。フシ熊谷櫻といふぞかし。地花折らせじとの制札を讀んで行く人讀めぬ人。一つ所に立集り。詞さても咲いたり〳〵。花より見事な此制札。辨慶殿の筆ぢやげな。扨も見事一つも讀めぬ。ヲヲあれはの。義經様が此花を惜み。一枝切らば指一本切るべしとの法度書。ヤア花の代りに指切ろとは。首切る下地ヲ、こはや。地見てゐる中も虎の尾を踏む心地する皆ござれと。花に嵐の臆病風 フシちり〳〵にこそ別れ行く。ヘルフシはる〳〵と。地尋ねて爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿。陣屋の軒を爰やかしこと尋ねしが。幕に覺えの家の紋。フシ嬉しや爰と内に入る。地折節家の子堤の軍次立出でて。是は〳〵奥様か。詞ヲ、

軍次そなたも息災さうな。マアめでたい〳〵。熊谷殿や小次郎も變る事はないかの。早う逢ひたい逢はせてたも。ハイ旦那は今日御廟參。小次郎樣は先頃より御前勤めで御下りなし。地マア〳〵長の御旅路お疲れをお休めと。フシ挨拶とり〳〵なる所へ。地敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れ來て。こけつ轉びつ花の蔭。陣屋をめがけ走着き。詞跡より追手のかゝる者影を隱して給はれと。地險しき體に驚きて相模は傍へ走寄り。見るに見かはす互の顏。詞ヤアお前は藤のお局樣ではないか。さういやるそなたは相模ぢやないか。テモ久しやなつかしや。地おゆかし樣やと手を取つてマアこなたへと伴ひ入る。親しき體に心を利かし フシ軍次は勝手へ入りにけり。地相模はやがて手をつかへ。詞誠に一昔は夢と申すが。大內に御座遊ばす時。勤番の武士佐竹次郎殿と馴初め。御所を拔出で東へ下り。お前樣のお身の上を承れば。御懷胎のお身ながら平家の御家門。參議經盛樣方へ緣づき給ふとの噂。其折は世盛の平家。御威勢は益々と陰ながら悅びましたに。此度源平の戰ひ。御一門も散々と聞くに付け。ア、此藤の方樣は何となされたどう遊ばしたと。一人苦にしてをりましたに。マア御機嫌なお顏を見て。おめでたやお嬉しや。ヲ、そなたも無事でマア嬉しい。懷胎で出やつた時の子は姬ごぜか男か。息災で育つて居るかと。地ちよつと寄つても女子同士問うつ問はれつ年月に。積る言の葉繰返し フシ嬉し淚の種ぞかし。地藤の方淚ぐみ世の盛衰は是非もなや。詞其時に產落したは。無官の太夫敦盛とて。器量發明揃うた子を。今度の軍に討死させ。地夫は八島の波に漂ひ。我のみ殘る憂き難儀淺ましの身の上とかこち給へば。詞お道理〳〵。以前の御恩もあり。連合にも語りお身の片付後世の營み。お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して。北面同然の武士只今にては。武藏國の住人私の黨の旗頭。熊谷次郎直實と人も知つた侍と。地聞くより御臺は。詞ヤアそなたの連合の佐竹次郎。今では熊谷の次郎といふか。アイ。すりやあの熊谷の次郎はそなたの夫よな。地ハアはつと吐胸の フシ氣をしづめ。詞何と相模。以前大內にて不義顯はれ。佐竹次郎と諸共禁獄させよとの院宣。自らが申宥め御所の御門を。夜の中に落してやつたを覺えてか。アツア其時の御恩。何の忘れませうぞいな。ム、其恩を忘れずば。助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしてたも。エ、イそりや又何のお恨みで。サア最前も咄した院の御所のお胤。無官の太夫敦盛をそちが夫。熊谷が討つたわいの。エ

エそりやまあ誠でござりますか。スリヤそなたは何にも知らぬか。サアはる〳〵と東より。今來て今の物語。地聞いて吐胸の誠しからず追付け夫が歸り次第。様子を尋ぬる其間暫くお扣へ下されと。詞を盡し理を盡し。フシ宥むる折に表より。詞梶原平次景髙所用あつて推參と。呼ばはる聲。ヤア何梶原とや。見付けられては御身の大事。地先づ〳〵こちへと御臺の手を取りフシ一間へ伴ふ其中に。堤の軍次立出で。詞今日は主人直實志あつて廟參。御用あらば某に仰置かれ下されと。地に鼻付くれば平次景髙。何熊谷殿は他行とな。ソレ家來ども。其石屋の親父め引立て來れ。地はつと答へて科もなき白毫の彌陀六を。フシ平次が前に引据ゆれば。詞ヤイなまくら親仁め。汝何者に賴まれ。敦盛が石塔は建てたやい平家は殘らず西海へぼつくぜし。誅ゆべき相手なければ。察する所源氏の二股武士が。賴みしに違ひはあるまい。サア眞直に白状ひろげ。僞ると鉛の熱湯。脊骨を割つて流し込むと。地おどしかけても正直一遍。詞テモ扨も御無理な御詮議。先程も申した通り。石塔の誂人は敦盛の幽靈。五輪の事は扨置き。一厘も手附は取らず。建つると其儘石塔の喰逃。せめて人魂でも手附に取つたら。小提燈の代りに致しませうに。冥土へ書出はやられず。本の是が損しやう菩提。地有りやうの申上げ願以此功德施一切。此通りでござりまするとフシ取じめなき。詞ア、何おつしやつても糠に釘と。地軍次が詞に平次は惡智惠。地大かた石塔を建てさせたわろも合點合點。熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議。先づそやつめを引立て來れと。地一間へ入れば家來ども。石屋の親父をむりやりにフシ引立て奥へ連れて行く。相模は障子押開き。日も早や西に傾きしに夫の歸りの遲さよと。フシ待つ間程なく。熊谷の次郎直實。花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか。さすがに猛き武士も。スヱ物の哀れを今ぞ知る。思ひを胸に立歸り。妻の相模を尻目にかけてフシ座に直れば。地軍次はやがて覆になり。詞先達て平次景髙殿。何か詮議の筋ありとて御影の石屋を引連れ御出有り。奥の一間に御待と。委細を述ぶればムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一獻を催し。梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ〳〵。ハテ扨何を猶豫すると。地呵りちらされ是非なくも。相模に顔を見合してオクリ心を殘し入りにけり。ヘルフシ跡見送りて。熊谷は。詞コリヤ女房。其方は爰へ何しに來た。國元出立の節。陣中へは便も無用と。堅く言付け置いたるに。詞を背くといひ。剩へ女の身で陣中へ來る事。地不屆至極

の女めと。不興の體に相模はもち〳〵。其お呵りを存じながら。地どうかかうかと案じるは小次郎が初陣。詞一里いたら樣子が知れうか。五里來たら便があろかと。七里歩み十里歩み。百里餘りの道をつい。都迄ホ、、ヲ、しんき。地登つて聞けば一の谷とやらで今合戰の最中と。とり〴〵の噂ゆゑ子に引かされるは親の因果。御了簡下さりませ。詞マア此小次郎は息災で居ますかと。地問へば熊谷詞を荒らげ。詞戰場へ赴くからは命はなき物。堅固を尋ぬる未練な性根。若し討死したら何とする。地い〻えいな小次郎が初陣に。よき大將と引組んで討死でも致したら。嬉しい事でござんしよと夫の心に隨ひし。健氣な詞に顏色直し。詞ホ、先づ小次郎が手柄といふは。平山の武者所と爭ひ拔駈けの高名。軍門に駈入つての働き。手疵少々負うたれども。末代迄家の譽。エ、して其手疵は。急所ではござりませぬか。ソレまだ手疵を悔む顏付。若し急所なら悲しいか。イヤ何のいな。地かすり疵でも負ふ程の働きは。でかしたと思うて嬉しさの餘りお尋ね。其時お前も小次郎と一所にお出なされたか。詞ホウ危しと見るより軍門に駈入り。小次郎をむりに引立て小脇にひんだき。我が陣屋へ連れ歸り。某は其軍に搦手の大將。無官の太夫敦盛の首取つたりと。地話に扨はと驚く相模。後に聞きゐる御臺所我が子の敵と在りあふ刀。詞熊谷やらぬと拔く所鐺摑んで。ヤア敵呼ばはり何やつと。地引寄するを女房取付さ。詞ア、これ〳〵聊爾なされな。あなたは藤の御局樣と。地聞いて直實悔りし。ハア思ひがけなき御對面とフシ飛退き敬ひ奉れば。詞コリヤ熊谷。軍の習ひとは言ひながら。年はも行かぬ若武者を。ようむごたらしう首討つたなア。サア約束ぢや相模。助太刀して夫を討たせ。地何と〳〵と刀追取りせり付け給へば。アイあい〳〵と返事も胸に迫りながら。詞エ、これ直實殿。敦盛樣は院のお胤と知りながら。どう心得て討たしやんした。地樣子があらう其譯をと。いふもせつなき フシうろ〳〵涙。詞ア、愚か〳〵。此度の戰ひ敵と目ざすは安德天皇。夫に隨ふ平家の一門。敦盛は扨置き。誰彼と鎬を削るに用捨がならうか。ナウ藤の御方。戰場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。其日の軍の概略と。敦盛卿を討つたる次第。物語らんと座を構へ。扨も去んぬる六日の夜。早や東雲と明くる頃。一二を爭ひ拔駈けの。平山熊谷討取れと切つて出でたる平家の軍勢。中に一際フシ勝れし緋威。地さしもの平山あしらひ兼ぬフシ濱邊をさして逃出す。詞ハテ健氣なる若武者や。逃ぐる敵に目なかけそ。

熊谷是に扣へたり。返せ。戻せ。ヲ、イ。おいと。扇を持つて打招けば。地駒の頭を立直し。波の打物二打三打。いでや組まんと馬上ながらむんずと組み。両馬が間にどうど落ち。詞ヤア〳〵何と其若武者を組敷いてか。されば御顔をよく見奉れば。鐵漿黒々と細眉に。地年はいざよふ我が子の年ばい。定めて二親ましまさん。其歎きはいかばかりと。子を持つたる身の思ひの餘り。上帶取つて引立て塵フシ打拂ひ早や落ち給へ。詞と勸めさしやんしたか。そんなら討奉るお心ではなかつたの。ヲ早や落ち給へと勸むれど。イヤ一旦敵に組敷かれ何面目に存へん。早や首取れよ熊谷。ナニ首取れというたかいの。健氣な事をいうたなう。サア其仰にいとど猶。地涙は胸にせき上げし。まつ此通りに我が子の小次郎。敵に組まれて命や捨てん。淺ましきは武士の習ひと太刀も。

フシ拔兼ねしに。地迯去つたる平山が後の山より聲高く。詞熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは。二心に極りしと呼ばはる聲々。エ、是非もなや。仰置かるゝ事あらば。言傳へ參らせんと申上ぐれば。地御涙を フシうかめ給ひ。地父は波濤へ赴き給ひ。心にかゝるは母人の御事。長地昨日に變る雲井の空定めなき世の中をいかゞ過行き給ふらん ハルフシ未來の。迷ひ是一つ。地熊谷賴むの御一言。是非に及ばず御首をと。咄す中より藤の局。ナウ左程母をば思ふなら經盛殿の詞に就き。なぜ都へは身を隱さず。一の谷へは向ひしぞ。健氣によろうた其時は。母も俱々悅んで。勸めてやりし可愛やな。覺悟の上も今更に。胸も迫りて悲しやと フシくどき。歎かせ給ふにぞ。地御尤もとは思へども相模は態と聲勵まし。詞イヤ申しお局樣。御一門殘らず八島の浦へ落行き給

ふ。中に一人踏留まり。討死なされた敦盛樣。數萬騎に勝れた高名。但し迯げのび身を隱し。人の笑ひを受け給ふが。お前の氣では嬉しいか。地御未練な御卑怯なと諫めに熊谷。詞ヲ、でかした〳〵。コリヤ女房。御臺所此所に御座あつてはお爲にならぬ。片時も早く何方へも御供せよ。サア〳〵早くいけ〳〵。地我も敦盛の御首實檢に供へん。軍次はをらぬか早や參れと。呼ばはる聲と諸共に オクリ一間へ。へこそは入相の。ハルフシ鐘は無常の。時を打つ。陣屋々々の灯火にいとゞ。悲しさ藤の方。ア、地思ひ出せば不便やな。今はの際迄も肌身放さず持つたるはコレ此靑葉の笛。我と我が身の石塔を建てて貰うた價にと。渡し置いた此笛の我が手に入りしも親子の緣。魂魄此世にあるならばなぜ母には見えぬぞ。聞えぬ我が子やなつかしのこの笛やと。肌に付け身に添へ

て フシ盡せぬ。思ひやるせなき。詞コレ申し其笛がよい形見。經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善。地敦盛様のお聲をば聞くと思うて遊ばせと。スヱテすゝめに隨ひ藤の方涙に。しめす歌口も。震うて音をぞ。すましける。合フシ親子の縁の絆にや。障子に映るかげろふの姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより。ヤレなつかしの我が子やと。かけ寄り給ふを相模は抱留め。詞香の煙に姿を顯はし。實方は死して再び都へ歸りしも。一念のなす所。あるまい事にはあらねども。訝しき障子の影。殊に親子は一世と申せば。御對面遊ばさば御姿は消失せん。地イヤなう四十九日が其間魂中有に迷ふと聞く。せめては逢うて一言をと振放しく\障子ぐわらりと明け給へば。姿は見えず緋威の フシ鎧ばかりぞ殘りける。地はつと計りに藤の方。相模も倶に取付いて。扨は鎧の影なるか。戀しと迷ふ心からお姿と見えけるかと。倶にこがれて正體もスヱテ泣きくどく。こそ哀れなれ。地時刻移ると次郎直實 フシ首桶携へ立出づれば。地相模は夫の袂を扣へ。詞コレ申し是が親子御一生のお別れ。地せめて御首になりとも。御暇乞と願ふにぞ。藤の局も涙ながらナウ熊谷。そちも子のある身でないか。野山の猛き獸さへ子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを辨へて情に一目見せてたもと。縋り歎かせ給へども。詞イヤ實檢に供へぬ中內見は叶はぬと。地はね退け突退け行くフシ所に。詞ヤア熊谷暫しく\。敦盛の首持參に及ばず。義經是にて見ようずるはと。地一間をさつと押開き立出で給ふ御太將。ハ、、、はつと次郎直實。思ひ寄らねば女房も。藤の局も諸共に呆れながらに平伏す。地義經席に着き給ひ。詞ヤア直實。首實檢延引といひ。軍中にて暇を願ふ。汝が心底訝しく密に來りて最前より。始終の樣子は奧にて聞く。急ぎ敦盛の首實檢せんと。地仰を聞くより熊谷ははつと答へ走り出で。若木の櫻に立置きし制札引拔き。恐れげなく義經の御前に差置き。詞先つ頃堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊。此熊谷には敦盛の首取れよとて。辨慶執筆の此制札。則ち札の面の如く御諚に任せ。敦盛の首討取つたり。地御實檢下さるべしと蓋を取れば。ヤア其首はとかけ寄る女房。引寄せて息の根とめ。御臺は我が子と心も空。立寄り給へば首を覆ひ。詞コレ申し。實檢に供へし後は。お目にかける此首。お騷ぎあるなと地熊谷が。諫めに流石はしたなう。寄るも寄られず悲しさのちゞに碎くる物思ひ。地次郎直實謹んで。詞敦盛卿は院の御胤。此花江南の所無は。則ち南面の嫩。一枝

をきらば一指を切るべし。花に準へし制札の面。察し申して討つたる此首。御賢慮に叶ひしか。但し直實過りしか御批判いかにと言上す。地義經欣然と實檢ましまし。詞ホヽ花を惜む義經が心を察し。アよくも討つたりな。敦盛に紛れなき其首。ソレ由縁の人もあるべし。地見せて名殘を惜ませよと。仰を聞くよりコリヤ女房。詞敦盛の御首。藤の方へお目にかけよ。地アイあいとばかり女房は。あへなき首を手に取上げ。見るも涙ふさがりて。變る我が子の死顔に。胸はせき上げ身も顫はれ。持つたる首の揺ぐのを。點頭くやうに思はれて。門出の時に振返りにつと笑うた面ざしが。有ると思へば可愛さ不便さ。聲さへ喉に フシつまらせて。詞申し藤の方様御歎きあつた敦盛様の此首。ヒヤア是は。サイナア申し。是よう御覽遊してお恨み晴らしよい首ぢやと譽めておやりなされて下さりませ。申し此首はな。私がお館で。熊谷殿と忍び逢ひ懷胎ながら東へ下り。產落したはナ。コレナ。此敦盛樣。其節お前も御懷胎。誕生ありし其お子が無官の太夫樣。兩方ながらお腹に持ち國を隔てて十六年。地音信不通の主從がお役に立つたも因緣かや。せめて最期は潔う死なされたかと怨めしげに。問へど夫は瞬も。せん方涙御前を恐れ。餘所にいひなす詞さへ。フシ泣音血を吐く思ひなり。地藤の局は御聲曇り。ナウ相模。今の今迄我が子ぞと。思ひの外な熊谷の情。そなたは嘸や悲しかろ。地かうした事とは露しらず。敵を取らうの切らうのというた詞が耻しい。我が子の爲には命の親。忝いと フシ手を合せ。地此首の生世の中。逢見ぬ事の悔しやと フシ倶に歎かせ給ひしが。地是に就きいぶかしきは此濱の石塔。敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ。秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り。最前其笛吹いた時あの障子に映りし影は慥に我が子と思ひしが。詞も交さず消失せしは。詞アいや其笛の音を聞いてかけ出し敦盛の幽靈。人目ありと引止め。障子ごしの面影は義經が志と。地聞いて御褒は我が子の無事。悟りながらも帚木のありとは見えて隔てられ フシ又も涙にくれ給ふ。地折節風に誘はれて耳を突拔く法螺貝の音喧すく聞ゆれば。義經は勇み立ちヤア〳〵熊谷。詞着到知せの法螺の音出陣の用意々々と。地仰に直實畏り急ぎ一間に入りにけり。地最前より樣子を聞居る梶原平次一間の內より躍り出で。詞かくあらんと思ひし故。石屋めを詮議に事よせ窺ふ所。義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々。地鎌倉へ注進と フシ言捨てかけ出す後より。はつしと打つたる手裏

劍は。骨を貫く鋼鐵の石鑿うんとばかりに息絶ゆる。スハ何者といふ中に。立出る石屋の親仁。詞ハ、アお前方の邪魔になる。こつぱを捨てて上げました。扨幽靈の御講釋。承つて先づ安堵。地もうお暇と立行くをヤア待て親仁。詞コリヤ彌平兵衛宗淸待てと地義經の詞に悑り。はつと思へどそらさぬ顏。詞ハレやれ〳〵とつけもない。御影の里に隠れのない。白毫の彌陀六といふ男でえす。ハ、、、。誠や諺にも。至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは。人間一生忘れずといふ。其昔母常磐の懐に抱かれ。伏見の里にて雪に凍えしを。汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ。地其時はわれ三歳なれども面影は目先に殘り。見覺えある眉間の黒子隠しても隠されまじ。詞重盛卒去の後は行方知れずと聞きしが。ハテ堅固で居たな滿足やと。地聞くより彌陀六づか〳〵と立寄り。義經の顏穴の明くほど打眺め。詞テモ恐しい眼力ぢやよなア。老子は生れながらに聰く。荘子は三つにして人相を知ると聞きしが。かく彌平兵衛宗淸と見られた上は。エ、義經殿。其時こなたを見遁さずは。今平家の栖籠る鐵拐が峰鵯越を攻落す大將はあるまいもの。又池殿と言合せ。賴朝を助けずは平家は今に榮えんもの。エ、宗淸が一生の不覺。地是につけても小松殿御臨終の折から。平家の運命末危し。詞汝武門を遁れ身を隠し。一門の跡弔へと。唐土育王山へ祠堂金と僞り。三千兩の黄金と。忘れ形見の姫君一人預り。御影の里へ身退き。平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑。播州一國那智高野。近國他國に建置きし施主の知れぬ石塔は。皆これ彌平兵衛宗淸が。涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔誂に見えし時も。御幼少にて御別れ申せし故。御顏は見覺えねども。心得ぬ風俗は。ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより。心よく受合ひしが。扨は命に代りし小次郎が菩提の爲。此濱の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘツエ地いかに天命歸すればとて。我が助けし賴朝義經此兩人の軍配にて。平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハア、是非もなき運命やな。詞平家の爲に獅子身中の虫とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄。我を恨まん淺ましやと。或は悔み。或は怒りスエテ涙は。瀧を爭へり。元來さとき大將義經。詞ヤア〳〵熊谷。障子の内の鎧櫃。ソレこなたへ地はつと答へて次郎直實。出陣の出立と好む所の大荒目鍬形の兜を着し。抱へ出でたる鎧櫃。フシ御目通りに直し置く。詞コリヤ親仁。其方が大切に育つる娘へ。此鎧櫃屆けてくれ。よ。コリヤ彌陀六。ヤア彌陀六とは。フ

ウ宗清なれば平家の餘類。源氏の大將が頼むべき筋は。ム、面白い。彌陀六め頼まれて進ぜましよ。したが。娘へは不相應な下され物。マア內は何でござります。改めて見ませうと。地蓋押明くれば敦盛卿。ナウなつかしやと藤の方。かけ寄り給へば蓋びつしやり。詞イヤ此內には何にもない。ヲ、何もない〳〵。ホ、是でちつと虫が納つた。ナウ直實。貴殿への御禮はコレ〳〵此制札。一枝を伐らば一子を切つて。ヘツエ地忝いといふに相模は夫に向ひ。我が子の死んだも忠義と聞けばもう諦めて居ながらも。源平と別れし中。どうしてまあ敦盛樣と小次郎を取かへやうが。詞ハテ最前も話した通り。手負と僞り。無理に小脇にひつぱさみ連歸つたが敦盛卿。又平山を追駈け出たを呼返して。首討つたのが小次郎さ。知れた事をと地鋭なる。話に相模はむせび入りエ、どうよくな熊谷殿。こなた一人の子かいなう。逢はう〳〵と樂んで百里二百里來たものを。とつくりと譯もいはず。詞首討つたのが小次郎さ。地知れた事をと沒義道に。叱るばかりが手柄でも。ござんすまいとギンハルフシ聲を上げ泣き。くどくこそ道理なれ。地心を汲んで御大將勇みを付けんとヤア〳〵熊谷。詞西國出陣時移る用意いかにと仰に直實。恐れながら先達て願上げし暇の一件。地かくの通りと兜を取れば。切拂うたる有髮の僧。義經も感心有りホ、さもありなん。詞それ武士の高名譽を望むも。子孫に傳へん家の面目。其傳ふべき子を先立て。軍に立たん望は。ホウ尤も。コリヤ熊谷。願に任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ。父義朝や。地母常磐の回向も賴むと親しき御諚。ハ、ア有難しと立上り。上帶を引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢。相模是はと取付くを。詞ヤア何驚く女房。大將の御情にて。軍半に願の通り。御暇を賜りし我が本懷。熊谷が向ふは西方彌陀の國。悴小次郎が拔駈けしたる九品蓮臺。一つ蓮の緣を結び。今より我が名も蓮生と改めん。一念彌陀佛卽滅無量罪。十六年も一昔。ア夢であつたなあと。地ほろりとこぼす涙の露。柊に置く初雪の日影に融ける フシ風情なり。地ヲ、さうぢや〳〵。我が子の罪障消滅の加勢は是と切つたる黑髮。詞はなくて御大將。藤の局も諸共に フシ御涙にぞくれ給ふ。地長居は無益と彌陀六は。鎧櫃に連着をフシかけた思案のしめくゝり。詞コレ〳〵〳〵義經殿。若し又敦盛生返り。平家の殘黨かり集め。地恩を仇にて返さばいかに。詞ヲ、それこそは義經や。兄賴朝が助かりて。仇を報いし其ごとく天運次第恨を請けん。げに其時は此熊谷。地浮世

を捨てて不随者と。源平兩家に由緒はなし。互に爭ふ修羅道の。苦患を助くる回向の役。詞此彌陀六は折を得て。又宗淸と心の還俗。地我は心も墨染に。黒谷の法然を師と頼み敎を請けんいざさらば。詞君にも益々御安泰。フシお暇申すと夫婦づれ。石屋は藤の御局を伴ひ出づる陣屋の軒。御緣があらばと女子同士。命があらばと男同士。堅固で暮せの御上意に有がた涙名殘の涙。又思ひ出す小次郎が。首を手づから御大將。此須磨寺に取納め末世末代敦盛と。其名は朽ちぬ黄金札。武藏坊が制札も花を惜めど花よりも。惜む子を捨て武士を捨て。ハルフシカヽリすみ所さへ定めなき有爲轉變の世の中やと。互に見合す顏と顏。詞さらば。〳〵。地おさらばの聲も涙にかきくもりわかれて。こそは出でて行く

第四　道行花の追風

ハル磯千鳥。いく夜寢ざめのフシ物あんじ。ハルフシ二世とかねたる。忠度は。はかなく討たれ給ふとも。又鎌倉へ捕はれとも。スエ噂とり〴〵菊の前。心細布胸あはず。けふ立ちそむる旅衣小オクリきつゝ。なじみを重ねつる。養ひ君とフシかしづきの。三重老女ひとりを杖柱。名はありながら呼馴れし。うばらの。里を出でこして。東の空へと。ナホス思ひ立つ。フシオクリ心のへ内こそ。遙なれ足弱づれの。玉鉾にハルフシ末しら浪の武庫川や。昆陽野の池にすむ月も心は。曇る片。袖の其うつり。香も形見かと。思ひぞつもる芥川。いつか伏見も。フシ跡になし。殿御にやがて近江路と。長地見え渡りたる風景も心せかれて行く道は爪先上り小石原。老女は足をいたはりて。詞申し〳〵お姫樣。行先遠き旅の空御身の勞も出やせん。地マア暫くと道芝に立ちやすらへば。フシ菊の前。ヲヽみづからが氣のせく儘。跡先見ずに道を急ぎ。年寄つたそなたの難儀。詞足が痛みはせぬかやと。タヽキ互に問うつ問はれつる。親身なじみの底深き。にほのハズミ浦なみ。山々も茂りし峯は。フシ八王子。磯邊に見ゆる唐崎の松は扇の要とやあれこそ。志賀の。フシ山越の。よき詠ぞと敎ゆれば菊の前打眺め。詞ナウ志賀の山とはあれなるか。なつかしや忠度樣の御詠歌を。千載集へ父上が撰み入れ給へども。勅勘の御身を憚り讀人しれずと末の世迄。御名を削りし本意なさを。御歎きの涙にて。スヱテ濡れし形見の片袖は。忍びあふ夜の添臥も。冷泉君は。左が。フシ寐勝手に。打着せ給ひし口ずさみ。面影の霞める月ぞ宿りける。春や昔の袖の涙に。袖の涙やありし夜の。主は雲

井に隔たりて。昔語となり給はゞ。此身の果はいかならんと。フシ歎きに草の露ぞうく。同じ思ひを押隱し。老女は力つく杖に オクリ道を。助けて行先をたどり寄せなん布引山心も。フシ關の別れより。伊勢や尾張の海面に立つ波を見ていとゞしく。過ぎにし方は遠ざかり。知らぬ山山里々に。日を重ね夜を重ねほつれし。髱に風いとふ濱松過ぎて。山坂にかゝり鞠子やフシ沖つ波。富士の煙の立昇り。行方も知らぬ旅人の姫ごぜ連と。惡口に。唄君と添寐に燈火よせて。挑げて見れば。さうだか〳〵。いとはづかしや。消せばいとしいお顏が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇いとしいお顏が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえいと恥しや。消せばいとしいお顏が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえ。ナホスハルフシ無理もわやくも。したがひの夫に再び大磯と。心ばかりは急がれて足はもつるゝ藤澤やえにしの便星月夜鎌倉。にこそ。三重へ着きにけれ

地榮えぬる平家の一門悉く。西海の波に亡び再び榮ゆる源氏の御代。猶長久の御祈願と鶴が岡の八幡宮。新たに造營ありければ。日々に威を增す神詣フシ賑はふ空も長閑なる。地向うの方よりのつさ〳〵供人引連れ醒井兵太。詞ヤア家來ども。道道もいふ通り主君賴朝公より。平家の餘類は根を斷つて葉を枯らせとの仰によつて。隱れ忍ぶ殘黨を取縛むる身が役目。地隨分四方に眼をくばり。うさんな者と見るならば。男女に限らず搦捕れ。手柄はそち達褒美は某。急度申渡したとはい〳〵〳〵も仰山に フシ社深くぞ入りにける。地跡に社參の一群は徒士の附々も。一際目立つ旅乘物松蔭に舁き据ゑて。詞是は鶴が岡八幡宮と申しまして源氏の御代を守りの御神。御拜がてらに風景も御覽なされて然るべう存じまするど。地頭をさぐれば乘物より。武士にはあらぬ風俗は九條の町に全盛を。菅原といふ太夫職。詞是は〳〵今都では口利の牽頭樣。喜六樣宗助樣などというて大概あまい若樣達は。水銀なしにてん〳〵から〳〵。天上さするからくりの名人樣達。それを供の侍にしてほんにマア變つた趣向ではないかいなア。かう打揃うて行たらば主はきつい機嫌であろ。そしてもう六彌太樣の屋敷は爰からはつい近いげな。三年ぶりで顏見ようかとわしや飛立つやうに思うてゐるわいなア。いか樣是は御尤。此喜六宗助は日頃旦那のお氣に入り。お供をするもお馴染だけ。是からおまへは大名の奧樣。詑りちらす女中の中へ。ヲヽ辛氣わしやいやいなと今迄のせりふではマア舞臺つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の內。御一門のお付合などは路考慶子

で雲上に萬事そこらはちよんの間でお付合なされませと。地餘所へ通ぜぬ教の詞知つた同士こそ フシすゞしけれ。詞そこらはわしが魂膽してゐる。帶の仕樣も此形も藏屋敷の振舞でよう見て置いた屋敷の風俗。遁す物ぢやないわいな。おつとよし〳〵。それはさうぢやが久しぶりのお寐間の段。御勞の出ぬ樣に地黄丸でもあがつて。したが必ず藥酒は御無用と。フシ咄し半へ。地家來引連れ醒井兵太。詞ヤア鎌倉に見馴れぬ女の風俗都者に極つた。地平家の餘類も疑はしいは連歸つて吟味する。ソレ引立ていと立ちかゝれば。傍に二人の牽頭はわな〳〵。詞都者とは御粹方。したがお尋ねなされます平家とやらかつけとやら微塵も覺えはござりませぬ。ヤア僞るまい〳〵。武士に似合ぬがち〳〵と震ふは曲者。地ソレ括れと二人を投付け蹴飛せば。物に馴れたる菅原は。騷がぬ色目しとやかに。詞イヤこれ聊爾さんすなお侍。自らは岡部の六彌太忠澄が女房と。地聞くよりも醒井兵太。詞スリヤお前樣には六彌太殿の御內證とな。これは〳〵存ぜぬ事とて慮外千萬。拙者義は則ち六彌太殿の下目付。イヤモウ何が物でござります。當時羽利の六彌太殿へかういふ事が聞えては何さ〳〵。とにかく是は家來どもが麁相ハテ不調法千萬と。地眞面目になれば二人の牽頭。詞醒井兵太頭が高い。ハアまちつと高い。ハア〳〵と 地家來も一度に眞倒。額を土にすり付くる。其間に菅原目まぜで知らせ。乘物上げさせ足早に フシ引添うてこそ急ぎ行く。地跡には一度に顏を上げ。詞是はしたり夢ではないかや。サ夢ぢやによつて醒井兵太。地皆こい〳〵と打連れてオクリ松蔭にこそ走行く。跡へしと〳〵二人連れ。小オクリ花や。楓と見し夫の。長地便を何と菊の前詞の林打連れてあてども波のかげ遠き フシ宮居を暫し伏拜み。詞何とマア林此樣にうか〳〵とさまよふも。地忠度樣のお顏が見たさ。須磨の軍の亂れよりどう成りなされた事ぢややら。詞此中は打續き夢見の惡さ。わしやいかう氣にかゝるわいの。お道理〳〵。そりや此乳母も同じ事。以前の夫は平家の侍。兄と妹と二人の子の親。樣子あつて退去した。かはいげもない夫さへ思ひ出すが女の習ひ。娘は都に勤奉公。兄太五平も軍に出ると言ひましたが。どうなりをつた事ぢややら。地お前も私も思ひ出す事ばかりで。夜がなよつぴと泣き暮す長の旅路の御氣休め。ちと床几へと勸められ淚交りの身の上咄。地並木の蔭に誰やらん深編笠の浪人姿。後の方には醒井兵太樣子立聞き家來ども。ソレ搦めよと追取りまく。林は姬を後にかこひ。詞

ヤア聊爾せまいぞ。我々は八幡様へ参詣の者。何故に搦めよとは。ヤアぬかすまい。聞いた所が忠度の妻菊の前。地平家の餘類遁れぬ所と林を引退け。姫君に飛掛るをなうコレ待つてととむるを蹴倒し。泣叫ぶ菊の前をひんだかへ。既に危き折からに深編笠の侍が。兵太が利腕ぐつと捻上げ蹴飛せばアイタ、、。詞ヤア爰な編笠め。大切な科人を召捕役目の妨げひろぐ。先づ汝から詮議ある奴。地括れよ叩けと立ちかゝれば。物をもいはず雑兵を宙に掴んで天狗の礫。ばらり／＼と投飛せば。命が大事ぢや家來ども。皆こい／＼と言捨てて フシ逸散にこそ逃げて行く。地跡に二人は胸押撫で。詞是は／＼どなたかは存じませぬが。危い所へおかげ故。コレお前もお禮おつしやれと。地姫君倶々嬉し泣き。手を合すれば。詞アアこれ／＼お禮には及ばぬ嘸御難儀。シテ承れば女中には忠度殿に縁のある菊の前とな。ア、いや左様ではハテお隱しなされなとつくと様子承つた。おいとしや忠度卿には早や御果てなされたわいの。エ、そりやほんかシテ／＼様子は。地御存じならば聞かしてたべと フシそゞろ涙のふるひ聲。詞ヲ、悔りはお道理／＼。さいつ頃須磨の浦の合戰に。岡部の六彌太忠澄に渡り合ひ。右の腕を打落され。つひにあへなく御最期と慥に世間の取沙汰。拙者京都の者なれば兼々和歌の名人と。聞及んだ忠度卿。お咄し申すも他生の縁と。地聞く内よりも姫君は。こは何とせんおいとしや。跡に殘りて自らは何樂しみに存へん。南無阿彌陀佛と懐劒にて。自害と見ゆるをなうコレ待つてと。林が宥め止めてもイヤ／＼／＼放して殺して情ぢやと フシ止むる。かひもなき叫ぶ。詞イヤサこれ女中。死ぬる命を忠度卿の爲に捨てうと思ふ心はないか。ム、何といはしやんす。過行き給ふ忠度様の爲に此命を捨ていとは。どうしたら又お爲になりませうなと。地いふに浪人傍を眺め小聲になり。詞流石は俊成卿の御息女。雲の上人程あつて敵を討たうといふお心が付かぬかと。地言はれて姫君涙を拂ひ。詞ほんにさうぢや悲しいとばかりに心が付いて。夫の修羅の妄執を晴す敵といふは岡部の六彌太。林おぢや。お姫様ござりませと 地逸散にかけ行くをア、これこれ待つた／＼。詞其様にしどけなうてはア、敵討心許ない。岡部の六彌太忠澄というては武藏一國の大名なれども。おのれ討たで置かうかと女心の一念力とくと固まりましたかなと。地心探れば二人とも。ほんにさうぢやと懐劍にて互に自身の髻を。切らんとすれば押止め。詞いかにも御心底見えました。未來の夫へ命

を捨て又の夫は重ねぬといふ切髪。倶に付添ひ尼法師と樣を變へても主人の敵討たさうといふ老女の誠ヲウあつぱれ見事々々。地緣はなけれど見捨てぬは武士の情と。矢立取出し鼻紙に。さら〳〵さつと。フシ書認め。詞コレ此通り。敵の方への入込みやう。御緣あらば重ねて逢はうとフシ立歸れば。地ハアはつと押戴き。イヤこれ申しお前のお名はと問ふ隙も。松吹く風に隔てられ。主從二人點頭き合ひ立別れてぞ 三重へ急ぎ行く。詞ナント作藏彌嘉內。上方からけふ奧樣がござるといふが。旦那六彌太樣の奧樣か。但しは隱居樂人齋樣の奧樣かいなア。こな奴しらないな〳〵。けふござる奧樣といふはな。旦那樣が上方でこつてりと談じやつたお色だはやい。何お色とは紅の事ではないかい。イヤこいつ興がる兵ではある。色といふはな。都九條で菅原といふお傾城の事だはやい。スリヤあの十文字とやらふんであるく。國太夫節の親方殿か。ヲイやい。旦那六彌太樣の奧樣になりに。けふ此內へぬめり込むのさ。なんとうまい事ではないか。イヤサ夫はさうと。合點のいかないは是の隱居樣。御子息の六彌太樣とは。同年位の親子の中。おらは新參者で樣子は知らないが。ありやマア何たる事だいなア。おらもすつきり合點がいかない。親御樣ぢやというてあの樣に大事にさつしやるは。若しは旦那の念者ではあるまいか。したが念者を兄分といふは聞いたが。親分とは新らしいと。地仇口々の折からに。門前賑はふ遠見の知せ。上方の奧樣只今是へ御入りと。いふもとつかは奧よりも待設の女中方。着連れ打連れ出迎へば。ヒロヒ早や舁入るゝ乘物に牽頭末社を供廻り。思付きなる出立は。フシ素人めかざる風情なり。地中にも小槇は局役。しとやかに手をつかへ。詞是は〳〵長の御道中御機嫌宜しうおめでたいお國入り。地いざマアお入りと乘物の。戶を明けお手を取り〳〵に。フシかしづかれつゝ。立出づる姿は武家をやつせども。昔を殘す詞辭。詞是は〳〵皆樣いかいお取持。どれがどれやら初々しい。萬事は皆を賴むぞえ。なんと喜六主宗助主と。地いはれてシツシ。詞はてこれ申し。いゝえいなア。わしや聞えぬは六樣。久しぶりの女房の顏。ヤレ菅原か久しや〳〵と出さんしさうな所を。昔に變らぬ思はせぶりか。わしや逢うたら一通りきつと一番言はねばならぬと。地長う坐るもフシ日頃の習はせ。地傍には手に汗コレシツシにちやつと居直り。詞ほんにマアわしとした事が。始ての付合になめたらしいヲヽ笑止と。フシ袖覆ふさへ廓めかし。詞何と皆見やつたか。都女中はわさ〳〵

と歌舞伎芝居を見る様な風俗。ほんにそれ〳〵。いや申し奥様。殿様は今日叶はぬ御用で外へお出でお歸りも追付け。まあ夫迄はお勞休め。お湯でも召して緩りつと。御祝言の御用意遊ばせ。地皆のお衆は勝手で休息。いざさせ給へと皆々は奥と口とに立別れ。フシ打連れてこそ入りにけれ。地程なく又も知らせの侍。奥方様都より只今お入りと。詞の下より腰元局。こりやまあどうぢや。どちらぞが狐ではないか。是非一人は紛れ者に極つた。詞どうやら奥にござるのが。ヲヽ笑止の詞つき尻聲がなかつた。地化されまいぞ合點かと。睫を濡らす其隙に。フシ日傘につるゝ八文字。歌梅や。櫻と見ゆれども。散りてかひなき袖の露。ナホスやつせばやつす菊の前。本フシ昔は雲井の月にめでけふは浮身を川竹の。フシ流れに染むるはで衣裝。地林は花車に身をかへて赤前垂の紅も。顔の紅葉と照添うて餘所目を包む廓詞。詞コレ申し太夫さん。爰が日頃逢ひたがらんした六様のお屋敷。けふといふけふ天下晴れての奥様遠慮はない。必ず氣をしつかりと持たしやんせと。地言へどしをれし菊の前。スヱ我のみ世をばかこち顔。詞別れにし。其日ばかりは廻りきて。又も返らぬ人ぞ戀しきと。地上東門院の女房伊勢ノ大輔の歌の心。夕の雲朝の雨と誓ひしことも楚王の夢。はかないは浮世あじきなの。此身の上とばかりにて フシ思はず。結ぶ露時雨。詞アヽこれ〳〵それはまあ何いはしやんす。あられもない事ばつかり。エヽ聞えた。昔の勤を隱さうと。堂上めかしてヲヽ虚言。都九條のお傾城菅原といふ事は。何ぼ隱しても知れてある。皆の女中は都勝り。粹の上盛ナア皆さん。宜しう萬事お指圖と。地いふ間あらせず先走り。旦那お歸り〳〵と。しらせに腰元口を揃へ。詞サアもう樂ぢや。一時に二人來た娵御の正體。地本阿彌様にかけたらば。ついくら紛れに探つても。入り付けた門口は心覺えがありそな物と。言捨て奥へ入る跡へ。地岡部の六彌太忠澄は威勢も高き廣書院。しづ〳〵歸る廊下口。二人は見るよりヤアあのこなたは。詞きのふ逢うた深編笠の侍。いか様日外見しりある六彌太殿に似た顔と。地思へど變りし形恰好。不思議にあつたが其こなたが。詞いかにも横目の忍び姿。岡部の六彌太忠澄さ。スリヤ願ふ所の夫の敵と。地手早く懐劍突つかくる。二人の利腕しつかと抑へ。詞コリヤサ〳〵。まだ祝言もせぬ中から。悋氣諍ひ早い〳〵。ナ合點か。此六彌太を付狙ふ。ナ付けつ廻しつ戀慕ふ。其女房を合點で呼迎へたは互の心底。年月疎遠に打過ぎた。恨もあらう憎からう道理ぢや。ハテサ憎い〳〵は

可愛の裏よ。ハ、、、嬉しい〳〵。したが走を妾といひ聘を妻といふ。婚儀は人の大禮なれば。表立て祝言を取結ぶは暮六つ。寢物語は浮世の夢。老女一間に伴ひ用意をし召され。身は大切な親人へ今日の御機嫌伺ひ。マア夫迄はお行きやれさ。スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意。忠澄殿。忠澄樣。待つてをりますぞえ。ハテ扨せく事はないおいきやれと。地詞の目釘打しめし。心隔ての襖と襖引別れてぞ。三重へ入りにける。フシさを鹿の。地夫待兼ねて菅原は。そろ〳〵出づる襖の間は。音も耳なれし廓の歌。唄誠なれども。逢はねばうそよ。しんき心のやるせなや。詞アノ胡弓三味線は御隱居樣を諫の御酒宴。ほんに歌の節ではある。何ぼ六彌太樣の心は變るまいと思うて居れど。三歳隔てて逢ふ迄はわしやどうも心が濟まぬ。長地逢うたらどうしてかうしてと案じも同じ菊の前。暮六つ迄もとけしなく。だまして討たん下心忍び出でたる背と背。べつたり行合ひア、こはと。飛退く二人が顏じろ〳〵。詞ハ、お前はどなたぢやえ。ハイわしは私ぢやが。マアさうおつしやるお前はどなたぢやえと。地問ひかけられて菊の前。詞わしはアノ慮外ながら。岡部の六彌太が奥樣。都九條の菅原といふしやの果でござんすと。地聞いて菅原ホ、、、こりやをかしい。詞其菅原といふ傾城の御本家樣をとらまへて。菅原といふしやの果ぢやとはテモきつい間違ひやう。ム、腰元衆か但し又家中衆のお内儀樣か。近付に成りましよと。地上から出れば菊の前。詞イヤ〳〵和歌三神を證據其菅原はわしぢやわいな。イヤおれが事ぢや。イヤ〳〵わしぢや〳〵〳〵と地聞いて菅原呆れ果て。詞コリヤまあ何のこつちや。ム、ウ聞えた扨は大事の夫を吸取らうとする。鼬の樣な女ぢやな。そしてまああた憎てらしいあの美しい器量わいの。サア〳〵こりやもう氣疎い肝癪が發つてきたわいな。ム、よい〳〵。互にいうては水掛論。深い淺いは夫が證據。たとへ年號は變るとも。いかな〳〵變らぬ中。直々逢うて吟味する。サ、おぢや地いからとフシ立上れば。地ヤア〳〵兩人待て〳〵と聲かけて。ゆるぎ出でたる此家の隱居名も身の上も樂人齋。焙烙頭巾大袍。左右に胡弓と三味線を。提げ二人を尻目にかけ。詞ア、紛らはしき二人の菅原。詮議の道具は此胡弓と三味線。誠や傾城白拍子は。酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも。まこと傾城菅原に極まれば。祝言さするは此親のこうけ。地サア彈け聞かうと褥の上。脇息取つて打凭れ。詞サア兩人。ハテしぶとい。地何隙どると手詰の

場所。詞ヤア〳〵親人。音曲(おんぎよく)お聞きなさるゝに及ばず。其一人(にん)の紛れ者引出してお目にかけんと。地立出づる六彌太を取つて引寄せ。詞ヤア小ざかしい。親をもどく不孝者見るもなか〳〵いま〳〵しいと。地脇息取つて續け打ち。なうコレ待つてと菅原と倶に驚く菊の前。わなゝきふるへば六彌太が。衿(えり)がみ取つて引寄する。共に若木の親子の中様子有りげに見えにける。詞サア彈け女。ヤアきよろ〳〵と何うぢつくと地せんかたも。涙片手に連彈(つれびき)の。スヱテ心々や變るらん。唄身をすつる。里あればこそ浮む瀬の。あるを賴(たのみ)に。うき勤。詞ヤアもうよい彈くな。詮議は濟んだ。九條の町の傾城菅原といふは。地此女に極つたと思ひがけなき菊の前。詞アイ〳〵お前はきつい調子聞き。とてもの事に祝言をと。地いそ〳〵すれば氣遣ひすな。詞モウ暮六つに程もあるまい。勝手へ入つて用意々々。ア、忝いコレこちの人必ず詞違(ちが)へまいと。地敵討たうの氣は張弓ア、これ〳〵と菅原が。とむるもよそに走入る。やらじと駈入る菅原を引止めて樂人齋。詞我上方にありし時。見ぬ戀風にあこがれし。九條の里の傾城菅原。けふといふけふめぐり逢ふも不思議の因緣。悴六彌太。此女に暇(いとま)をやれ。エ、それは。夫はとは得心せぬか。サア〳〵〳〵どうぢやと地せり詰められて返答もフシ呆れ果



實暦元年十二月

ててぞ見えにける。詞イヤこれそこな若い親仁様。こなさんは〳〵。あちらをほんの菅原ぢやというて。今又私を菅原ぢやの。イヤ見ぬ戀に風ひいたのと。がつくりそつくりな物の言ひやう。若し又六彌太様が去らんしたらどうせうと思はんす。ヲ、女房にして抱いてねる。エ。ム、、、今奥へやつたはな。ありや薩摩守忠度が言交した菊の前さ。悴六彌太は夫の敵。祝言といふは僞り。女に涙脆い悴のうんつく。敵を討たれるアリヤ約束じやわいと。地聞くより菅原狂氣の如く。詞そんならあの今の女中様に命をやつて。此わしとはどの命で添はしやんす。海山越えてはる〴〵と。添ひにきた女房の地身にもなつて見たがよい。餘りの事に涙さへ胸に氷つて出ぬわいなと叩く疊のフシいひがひなき。詞ヤアとても命のねぐさつた六彌太。連添うてもいんまに若後家。夙に歎きをかけるも不便。コリヤ子より達者な此親父。思込んだる戀の意地。おうといはうがいふまいがけふの今から身が女房。おうといへやい〳〵。親孝行ぢや。ヤイ悴。きり〳〵暇の狀をかけ。地ハルフシ子は三界の首械とは。今身の上に知られたと。傍若無人の横車フシ持餘してぞ見えにける。地菅原涙打拂ひほんにさうぢや。詞よその女に見かへる夫。心中立てるは大きな愚痴。そんなら おれに隨ふか。ヲ、



豊竹座興行の番附

隨ふ段か帶解いて寢て地花やろと立寄るふり。そばなる刀拔打に切つてかゝるをかいくゞり。ヤアこりやちよこさいなほでてんがうと跳飛せば。透間なく又切りかくるを眞の當うんとばかりに倒るれば。六彌太透さず取つて投げ。注連を飾りし箱よりも陣笠鎧引出せば。見るよりハツト樂人齋。ひるむ所をはつたとねめ付け。陣笠鎧兩手に捧げ。詞なんとおやぢ。此二種の笠鎧。覺えがあらう見知りつらん。誠や故人の詞にも。用ひられる時は鼠も虎となるといふわ。まだも能ある人の身の上。こな天命知らずの匹夫め。今改めていふにはあらねど。女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ。もとこなやつは六彌太が旗持の雜兵。所存あつて此如く。親と敬ひ尊敬すれば。方量もなき兼ての我儘。あまつさへ我が女房に無體の戀慕。無法非道の人畜め。わるく動かば五體を八つ裂。サアひつとでも動いて見よと。地鎧を以てさん〴〵に折れよ碎けと打ちなやせば。頭巾はぬげて撥鬢奴。フシ興の。醒めたる風情なり。地恥を恥とも思はぬ强惡。詞ヤイこな六彌太の恩知らずめ。今鎌倉で岡部の六彌太といはれて。榮花に暮すは。誰樣が蔭ぢやぞやい。わりやおめ〳〵と忠度に組敷かれたを忘れたな。其時に此郎等。右の腕を切落さずば。コリヤ此首はあるまいがな。いはゞ手柄は此奴。よいわ是からばれ次手。鎌倉殿の御所へいて。六彌太が高名は。此鼻がさしましたと。注進の上武藏一國我が手に入れるが意趣晴し。待つてをれべら坊めと。地駈行く所を菅原がさうはさせぬと切付くる。六彌太は只たばこの烟騷がぬ太五平菅原を膝の下にしつかとねぢ付け。詞コリヤまつ此如く薩摩守忠度が。あの六彌太を下に組敷き。首をかゝんとせし所。地一間をかけ出で菊の前から切つたかと太五平がフシ右の腕を打落し。詞敵といふは六彌太殿と思ひの外。誠の敵は此太五平。夫の恨を止めの刀。地思ひしれと立寄り給へば。ヤアこれ今暫く待つてたべと。起上る太五平は。手負に屈せぬ强氣の面色。詞ア、忝い〳〵姫君。此奴が念が屆いて。よう切つて下さりましたの。コリヤ妹初霜と。聞いて恟り菅原は。ムウ初霜といふは私が稚名夫を知つたこな樣はと。地問はれて太五平涙をうかめ。詞ヲ、かうばかりいうては合點の行かぬは尤も。おりや幼い時に別れた。わが兄の兵之助ぢやわやいと。地聞くにいよ〳〵不思議はれず。詞ム、其又現在兄樣が此妹に惚れたといひ。そして何ぢや姫君樣。よう切つて下さつたと。覺悟の樣子は合點がいかぬ。ヲ、疑はしいは尤も。今更語るも涙の種。地姫君樣も聞いてた

べ。詞もと我が親は。ヲ、其譯は此六彌太が推量に違はず。汝が親は平家の大將。三位中將重衡の家臣。臆病者の名を取りし。後藤兵衛守長であらうがなと。地聞いて太五平ハ、はつと仰天。詞ア扨々驚き入つたる忠澄殿の明察。地草にも心置く露の。宿り定めぬ我が生立。御存じられし様子はいかに。詞ヲ、それ誰かある。繩付ひけと詞の下。地思ひがけなき乳母の林。見るめいぶせき繩目の恥。妹は見るよりナウ母様かおなつかしやと走寄り。此マア繩目は何故と姫もスエ手負も驚けば。詞イヤ始終の樣子一通り六彌太が言聞かさん。菊の前もお聞きあれ。先つ頃出陣の折から。御身の父上俊成卿より密の內意。和歌の弟子たる忠度は。一方ならぬ縁もあれば。くれ〴〵頼むと餘儀なき仰。所に源平生田の合戰。向ふ敵と渡合ひ互に。馬を乘放し念なう下に組敷きしが。面ざし見知りある忠度卿。扨こそ俊成卿の御頼は爰ぞと心得。助けんと思ひながらも名ある敵。いかゞはせんとためらふ中。力勝りの忠度卿に。はね返されて此六彌太。地組敷かれしを下郎の汝。思ひがけなく後より。右の腕を切りし故。フシいたはるかひも涙ながら。地御首討つておこがましう。武門の數に列る中。詞合點のいかぬは汝が胸中。忠度卿に打ちかけしは。紛ひもなき源氏方。夫には違ひ詞の端々。源氏をさみする面魂。ハテ心得ずと思ふより。兼て見置きし此頭巾。裏に正しく書付けしは。三位中將重衡の戒名。朝夕戴く心の底。扨こそしれ者手放されずと。思ひ付いたる恩ごかし。親と敬ひ是迄に心を付けしは其方が。謀叛を抑ゆる情の獄屋。今日是へ兩人をそびき入れしは。汝が素性責めさいなんで尋ねんため。所に思はず其方が。己と名のるはこりや下郎の猿智惠。地なんと思ひ知つたかと。始終を聞いて太五平はスエテ肌骨を貫く吐息の炎。フシ母は涙の顔を上げ。詞後藤兵衛守長殿に連添ひ有りしは二十年以前。七つと三つのあの子供を。付けて離別の憂き難儀。妹が乳にて漸うと俊成卿へ乳母奉公。妹は傾城あの兄は。有るにあられぬわんぱく太郎。侍の子というたらば。猶我儘が募らうかと。勘當して置く其中に。いつぞや太五平我が内へ刀を盜みに入つたを。見付けて聞けば軍に出ると。いふこそ幸ひ高名して。侍の名を顯はせよと。家の系圖を折紙と。刀に添へてやつたるが。却つて害に地ハルフシなつたよな。詞ヲ、いかにも貰ひし其系圖。開いて見れば我が親は。後藤兵衛守長ア、恥しからぬ平家の侍。おのれ何でも源氏に紛れ込み。雜兵となり裏切し。親守長に對面せんと。勇みに勇む一の谷。

後藤兵衛守長は。主君中将重衡をふり捨て迯げたりし。臆病者畜生武士と軍中の取沙汰。なむ三寶我が親は。不覺の悪名取りしかと。地胸に磐石。五臓に石火矢。なんばう無念にありけるが。よし〳〵源氏の侍の首取つて高名し親子の耻を雪がんと。心を砕く生田の戰場。夕暮空のほのぐらく浪打際にひつ組んで。詞上になつたは慥に貴殿。シヤ六彌太殿と思ふより。右の腕を只一討。よく〳〵見ればこはいかに。薩摩守忠度卿。ア、しなしたりな。よし其場にて腹切らんと思ひしかど。イヤ〳〵忠義を顯はす時節もと。味方顔にて御首を。やみ〳〵こなたに討たしたる。地無念といふも我が誤り。かく氣取られし上からは。我が一分の我を立てても。とても詮なき平家の御運。せめては入らざる此命姫君に討たれんと。殺されに出た手柄話。詞エ、おでかしなされた

姫君様。忠度卿の右の腕。切つた刀で切らるゝも。此世の因果をはたす道理。地思へば〳〵不運なる我が身の上と悔泣き扨はと驚く フシ人々の。地中に妹は側にある。刀取上げ涙ながら。顔見ぬ父の形見かと。思へばいとゞ胸せまり フシくどき。歎けば太五平は。妹が持つたる拔刀。手を持ち添へて右手の脇腹。ぐつと突込む覺悟の最期。こは〳〵いかに何故と親子は心取亂せば。詞ア、騒ぐまい〳〵と押鎭め。平家方の此兄を。切つたは妹が源氏へ忠義。此一刀の手柄に免じ。申し六彌太殿。必ず見捨ててやつて下さりますな。たつた二人の箸折屈。わたしやあいつが不便にござる。成人して名は菅原と聞いたを便り。上方へ上つた序に九條の町。なつかしさに逢はうと思へど。身は角介のさびた形。全盛飾る妹が耻と。三筋の町の格子の先。よいよ鹿子様。ヨ

ウつりひ様と。ぞめきに紛れて名を問へば。客に揚げられ柏屋の。二階の障子に影法師。三味線取つて投節の。聲を聞いたがコリヤ兄弟の名乘。其時の音色も聲もあり〳〵と。おりや耳の底にしみ付いて。今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三味線で。慥に妹と見極めても。平家に縁あるそちなれば。よもや添うては下さるまじと。現在妹に。女房になれの。惚れたのと。心に思はぬ悪道も。かく計はん心の内。推量してたべ母者人。エ、ついに一日孝行せず。先立つ不孝赦して下され。せめて未來は。勘當 地々をと跡いひ兼ぬる。いぢらしさ母は取分け妹も スヱ正體涙に菊の前。我とても恩と情にからまされ。敵さへなき身の上は。兎にも角にも我が夫の。甲斐なき御運とばかりにて見合す四人がとも涙 フシ前後。不覺に見えけるが。地何思ひけん六彌太は林

が縄目引ほどき。詞太五平が白状にて家名知るれば詮議に及ばず。女ながらも敵の餘類。ヤア〳〵後藤兵衞が妻娘此家に叶はぬ早や出て行けと。地聞いて菅原今更にそりや餘りぢや胴慾ぢやと。いふをも聞かず姫と林を フシ引立て。庭へ突出し。詞女房去つた。ハテこりやナ遣手の付いた傾城菅原敵の娘と聞いては添はれぬ。元の廓へ流し者。付添ひ歩くは遣手の役目。スリヤ此わしは。ヲヽサ兄弟の縁が切るればコリヤ女房。一世の別れの名殘を惜めと地情の詞。ハヽア盡せぬ御恩とフシ伏拜む。ハルフシ折から拍子木家中の夜廻り。六彌太邊に心付け。詞コリヤ〳〵そこな傾城遣手。故郷へ歸る錦の袋。地ソレ持つて行けと投出す。二人は立寄り取上げ見れば。詞行暮れて木の下蔭を宿とせば。ヲヽ其下の句は。花や今宵のあるじならまし。忠度卿の最後の一首。ヤア扨は形見か 地ハアはつと歎き給へば林も倶に。ありし昔を悔泣き。詞ハテ扨これ此六彌太が寸志の情。源氏は今を盛の日の出。平家は暮行く。アレ約束の暮六つ。夜に入れば敵味方のあいろが見えぬ。ソレ早う〳〵。ハアお志。忘れはせじ。地もうおさらばと立上れば。手負は今ぞ此世の名殘。花や今宵のちり櫻。妹一人親兄の別れを胸に八重櫻。姫は形見の言の葉に結ぶ。心のいと櫻。あとに老木の姥櫻涙の雨や。小夜嵐。生死不定は世の中のふだん櫻といさめてもつきぬ。なごりの。山櫻ちり〴〵に。こそ別れゆく

第五

地魏王は鄭褎が讒によつて美人の鼻を劓がしむるとかや。征夷將軍頼朝公相從ふ大小名。岡部の六彌太忠澄を初めフシ威儀を。正して相詰むる。地頼朝御簾に向はせ給ひ。詞此度の戰に平家の一門西海の浪の泡と消失せし事。全く頼朝が武略にあらず。地是皆神明佛陀の御加護と存じ奉ると フシ卑下の詞も奥床し。地平の時忠笏取直し。詞西國にて源九郎義經平家を悉く討亡し。其虚に乘つて兄頼朝も討取り一天下を併呑せんと某をたばかり。京の君を娶り神璽內侍所を奪ひ。直に鎌倉へ攻入らん由急ぎ告げ知らせん爲來つたり。地屹度征伐然るべしと賢人顏の佞人はフシいはねど夫と知られける。地六彌太聞兼ねつつと出で。詞何と言はるゝ時忠卿。義經公に限り左樣な御所存少しもなく。腰越迄御出でありしを平山が讒言故鎌倉へも御入れなく。直に御切腹召さるべきを舊臣の輩押止め。我が君への執成は六彌太が披露承る。夫に御邊が何知つて扣へ召されときめ付くれば。地時忠も反打かけ フシ互に色立ち見えければ。地

賴朝暫しと制し給ひ。詞やをれ六彌太。佞人輩が讒言を用ゆべき我ならず。義經腰越に屯するは鎌倉を覗へさんとの手配ならん。地さすれば弟とて容赦はならず。討取つて我が存念を晴すべしと氣色變つて宣へば。時忠は思ふ壺心の内に含む笑。六彌太猶も進み寄り。詞然らば義經公誠の謀叛にもなされよ。三種の神器の内神璽内侍所。此二品は先達て義經公の御手にあり。帝都を守護しましませば則ち官軍。地それに敵たい弓引き給ふは朝敵も同然。武備盛んなる時は却つて其身を害すと申す。此儀いかゞと言上すれば賴賴騷がず。詞ヲ、其儀は某工夫を凝し置きたる事あんなれ其子細は。安德天皇十握の御劒を携へ入水ありしと聞くより早く。都八條大納言兼房卿と申合せ。老松若松といふ海士子供を浪間に入れて海底を探させけるに。地龍宮城へ奪ひたる十握の御劒を取返し。兼房卿に差上げしを御所持あつて御下向。賴朝拜諸仕り。此桐が谷へ御新殿をしつらひ將軍の宮と傅き。詞即ち此宮より綸旨を乞受け。義經との戰は官軍と官軍のはれ勝負。地幸ひの諸大名一同の出仕。それ〳〵との詞の中。はつと領掌謹んで御劒の筥を携へて。フシ御簾間近く持出づる。地賴朝公恭しく寶劒を取飾り。天顏の恐れありと玉座の御簾。半頃迄卷上ぐれば フシ各一度に尊敬する。地時忠大口明いてから〳〵と笑ひ。詞賴朝は智仁兼備の大將と聞きしに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劒を所持したる者あらば將軍の宮と敬ふかと。地づつと立寄り寶劒取つて打折り〳〵。白洲へかつぱと投付くれば。是はと皆々仰天敗亡。時忠は緩々と座に直り。詞ヤア騷がれそ賴朝。あの寶劒は紛れもなき眞赤な贋物。シテ〳〵其贋物といふ慥な證據が。ヲ、證據なくて折るべきや。寶劒を所持したる者當宮に立つるとある故。言聞かするよつく聞け。都にて義經某を招き。何とぞ三種の神寶奪取つてくれよとある密の賴み。のつぴきならず智略を以て奪取りしかど。呑込めぬ義經が心腹故先づ二色は渡したれども。御寶隨一の寶劒は某が肌身も離さず屹度所持せり。地疑はしくば是見よと懷中より取出せば。邊も輝く十握の御劒。賴朝公を初めとして列座の人々一時に。フシあつと恐れをなしにけり。地賴朝重ねて宣ふは。詞今より時忠卿を將軍の宮と仰ぎ奉らん。ヤア〳〵諸大名萬歲を唱へられよと。地棟梁の臣の一言にもつてうじられ勝に乘り。詞此上は贋宮を引出し面縛させんと。地ずつと立寄り御簾引ちぎればコハいかに。思ひがけなき判官義經。寶劒奪取りもんどり打たせ。足下にぐつと踏付け給ひ。詞ヤ

ア天命知らずの大納言。安徳天皇寶劍を抱き入水ありしと僞りしを。合點行かずと察するに御邊が奪ひ所持する由。兄頼朝と言合せ様々心を盡したは。此寶劍を奪返さん謀。地サア尋常に繩かゝれよと仁心深き義經の。詞にひるまぬ横紙破り無念の顔色齒がみをなし。詞エヽたばかられし奇怪千萬。平山と心を合せ汝等兄弟同士打させ。一天下を一呑と巧みし事も水の泡。地よし〳〵此上は絶體絶命。命限りに切抜けんと太刀ひん抜いて切付くる。引つぱづして勾欄より白洲へどうど蹴落し給へば。六彌太すかさず飛びかかり フシ高手小手に縛むる。地頼朝心地よげに打守らせ給ひ。詞國家を騒がす大罪人刑罰急度糺すべし。地それ計らへと宣ふ所へ。土砂踏散らしあわたゞしき知らせの早打かけ來り。詞扨も平山の武者所謀叛の巧み顯れし故。扇が谷に野陣を構へ此御殿を追取卷き攻入らんとの催し故。地早速御注進仕ると大息ついで訴ふれば。義經につこと打笑み給ひ。詞ヤア〳〵六彌太。扇が谷平山が陣所に馳向ひ。有無をいはさず討取るべしと。地仰は重き兩將の。詞につるゝ岡部の六彌太いざ打立てや尤と。御前に並居る隨兵ども。我先がけん〳〵と勝色見せたる八重梅の。花芳しき弓取の。聲も凊しき軍立扇が谷へと 三重へ急ぎけり。地平山の武者所頼朝兄弟誅罰せんと。扇が谷に陣屋をしつらひ フシ士卒を隨へ控へゐる。地かゝる所へ岡部の六彌太軍兵引具し眞先に大音上げ。詞ヤア平山の武者所。汝が惡事顯れし故此所に陣所を構へ。御兄弟へ敵せん由頼朝の仰を蒙り岡部の六彌太向うたり。地手に立つ武士は下合へと フシ高らかに呼ばはつたり。地かくと聞くより平山末重陣屋より踊出で。詞ヤア〳〵岡部の六彌太。此方より馳向ひ討取らんと思ひしに遙々とよううせた。地某が手を下すに及ばずソレ兩人。物ないはせそ討取れと。フシ下知しながらに引返す。地畏つたと醒井番場。無二無三に討つてかゝる。さしつたりと渡合ひ持つて開いて眞向かざし。鋭き刄の電光石火獅子忿迅虎亂入。馬手は竪割弓手は胴切。二人が命は草葉の露。ソレ遁すなと軍兵どもをめいてかゝるを事ともせず。向ふやつぱら嫌ひなく。大げさ小げさ車切片端切立てまくり立て。追立て〳〵めつた切り。こりやたまらぬとばら〳〵〳〵。跡を慕うて忠澄が フシ遁さじやらじと追うて行く。地さしもの平山途を失ひ馬の鼻を立てかへて。落行かんとせし所へ。岡部の六彌太取つて返し。やらじと尾筒をしつかと取り。詞コリヤ〳〵〳〵と引戻す。シヤ邪魔ひろぐな毛二才め。地そ

こ立去らずば蹄にかけ胴腹に風間を明けん。爰を放せと鐙の鳩胸あふり打立て鞭打くれ。ハイ〳〵〳〵と コハリ乘出せば。どつこいどこへと引留むる。追立て引留めはみ轡。音はちりゝんからころり駒の嘶土煙。六彌太苛つて突放せば馬は前立頭轉倒。ころりと落ちる平山を起しも立てず引伏せフシ首引抜かんとせし所へ。地源義經公平大納言を引立てさせしづ〳〵と立出で給ひ。詞ホウ手柄々々我兄弟へ敵せんと巧む平山。縛首討ち刑罰糺せよと。仰にはつと六彌太忠澄手早に取繩しつかとかけ。フシ水もたまらず首打落す。地かゝる所へ熊谷入道飛鳥の如くかけ來り。義經公に打向ひ。東へ下る道すがら始終の樣子承る。時忠卿は大納言の位有れば私にはなり難し。蓮生法師が出家の役都へ連れ行き禁廷の御差圖を蒙らん。地何とぞ愚僧に御預け下されかしと願へば義經打うなづかせ給ひ。詞ヲ、神妙神妙。高位の身なればうかつには殺されず。いかにも和僧が願ひに任せ時忠を預くべし。直に都へ連れ上り院の廳の御沙汰にかけ兎もかくも計ふべしと。地仰にはつと蓮生法師時忠を預り申し。莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌。詞極樂にも功の者とや思ふらん。西に向ひて後見せねばと地詠歌を殘し暇乞して歸りける。實に末の世に至りても敵に後を見せぬとはフシ此理としられたり。地義經御喜悅限りなく。祿を貪る佞人輩を亡せし此上は。三種の神器を守り奉り兄弟打連れ都へ上り。此趣を奏聞せん勇めやかた〳〵打立てと。御諚に任する岡部の六彌太御立ちさふと呼ばはれば。御供奉の大小名綺羅を飾りて歸洛ある。朝敵亡びの凱歌の聲。太刀は鞘弓は袋と納りて千代榮えぬる源氏。四海太平豐なる國ぞ。久しかりけらし

寶暦元辛未天
臘月十一日

作者
淺田　一鳥
浪岡　鯨兒
並木　正三
難波　三藏
豐竹　甚六

故人　並木　宗輔

奥州安達原

作者　竹田和泉

序地中時は康平五つの年。後朱雀院の朝に當つて東夷猥りに逆威を振ひ。王命に背き奉るといへども。詞源氏の武功に切靡け再び治まる時津風。八幡太郎義家公。武威磨立つる鎌倉御所 オロシヘ暫く鋭氣を養はる。地頃は如月半の空。都より勅使下向ありければ早や門出の日も近づき。取傳へたる梓弓。箭叫の音勢子の聲 フシさも嚴重に見えにける。地宮居間近く假屋を構へ八幡太郎義家朝臣。執權鎌倉の權頭景成。瓜割四郎糺威儀を守つて扣ゆれば。上座には勅使大江ノ大將維時。冠の紐の長き月も。フシ早や西山に傾きぬ。地維時義家に打向ひ。詞此度某罷下る。勅使の趣餘の儀にあらず。中宮御產の御祈り。此度の大赦に就き奥州の流人。桂の中納言則國召返すべしとの勅諚。奥州は源氏の任國。義家宜しく沙汰すべしとの御事なりと述べらるゝ。地義家ハツト領掌あり。詞中納言則國事は聊かの科によつて。父頼義が任國の砌。奥州松が浦へ流され今に存命。此度赦免の下書義家計ひ奉らんと。地勅答あればコレサ義家。詞流人の事は下狀を以て事は足る。御邊は是より直に上洛。十握の御劒も今において行方知れず。かほどの大事を餘所になし悠々と在國し。鹿狩山狩に日を送るは君への不忠。但し所存あつての事かと。地何がな横を蟹公家の爪を隱せし奸佞邪智。コハ維時の仰せとも覺えず。詞雲上には月花の御翫び。武士の狩漁は軍のかけ引。軍慮忘れぬ武士どもが。未熟の手ずさみ御意に入つて祝著と。地一句の答に返答も何がなとへらず口。詞いか樣音に聞えし貞任宗任。鬼神をも欺く曲者。敵に取つてはこは者〳〵。地隨分と稽古して。敵の首よりこつちの首の。用心が肝要ならんと フシ權威をかさに嘲弄す。地怺へかねて權頭憚りもなく進み出で。詞勅使と敬ひ差扣へ罷在れば餘りしき御一言。先年栗坂の其一戰。小勢を以て大敵の逆徒の張本。頼時を討取つたる其日の軍。勝に乘つて追打ちせざるは軍の法。彼の六韜の誡御存じあつての御批判か。サア御返答承らんと。地詰めかくれば瓜割四郎。詞ヤア權頭。高官に對して無禮の過言。扣へ召されと維時に。

詔ふ奸曲義家それと左右を制し。詞維時公の御批判も。武勇を励ます御計ひ。武の憤りに其身を忘るゝ景成が過言。何條賢慮にかけらるべきと。地事を治むる明智の詞。地かゝる所へ小林の郷民ども。折に籠めたる鶴十番。御前に差置き中にも庄官とおぼしき男。假屋間近く頭を下げ。詞此鶴日毎に小林の宮居近くにおり候故所の者追ひ候へども少しも恐れず。飼鳥と存ずれども下々の勝手に惡い大鳥。それ故村中が寄合付け。相談の上殿様へ御獻上。宜しく御上の御取次。地頼み上ぐるといひ捨て フシ御前を立歸る。地義家甚だ御悦喜あり。詞誠に鶴は仙家の靈鳥。我が先祖六孫王東夷征伐の其折から。此所にて雌雄の鶴を得給ひ。源氏の武威千歳の後まで。輝くべき印なりと此小林の岡に放し。所を直に鶴が岡と名付け給ふ。地時といひ所といひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ。八幡太郎義家是を放つと。金の札をつけ此所に放し置き。八幡宮の神鳥と普く天下に觸れ流し。神慮を仰ぎ奉らんと惠も深き御上意に フシ皆々。あつと感じ入る。地景成遙の梢を見渡しア、ラ心得ず。詞歸雁行を亂る時は伏兵ありとの兵書の禁。シヤ曲者ござんなれと。地立上れば御大將ホ、ウよくも咎めし權頭。詞鎌倉の留守を預ける汝。其心がけを見よう爲のわが計ひ。地伏勢ならずと扇を開き。フシ招かせ給へば コハリ茂みより。顯はれ出づるは此度の。御供に隨ふ勇士のめん〱。皆坂東に譽の弓取秩父の。十郎伴の助兼縣の次郎。其外 ナホス譜代恩顧の武士 フシ早や御立と白幡に靡き隨ふ源氏の威勢。朽ちせぬ黄金の。鶴が岡都をさしてぞ 大三重へ行く空の。地何事も春は吉田の神社。百さいづりの宮雀。八百や萬の鳥の音も。フシ賑ふ神の誓ひかや。地參り下向もおほき中 フシ人目にそれと。裲襠は。九條の里の戀絹とて。廓に名ある全盛の 本フシ松の位の大夫職。二世と兼ねたる戀中の。生駒之助に添ひたやと。歩み運ぶぞ殊勝なり。禿の市彌の不審顏。詞申し大夫さんえ。けふは生駒之助樣に逢ひに行くとおしやんして。來て見たりや吉田であつた。コリヤ狐がつまみはせんかと。地いへばにつこと打笑ひ。詞サイノ。久しう便も遠ざかり。案じもあらたな神の利生。地大そうな願參り近いと思へど餘程の道。定めてそなたもしんどかろといふ向うより先拂ひ。遠目にそれと流石は大夫 詞アレ市彌。そなたが常住拜みたがる生きた雛樣。地傍では無禮と フシ花の蔭。地舍人がきしらす御車は。當今の御弟君環の宮。まだ振袖の莟から役目も重き匣の内侍。長地附々賑ふ花の本爭ふ女中の袖袂。

フシ御機嫌斜ならざりし。地馬場先の方よりも歩み來る若侍。武將八幡太郎義家の近習志賀崎生駒之助英。それと見るより遙に飛去り頭を下げ。詞御忍びの行幸とは申しながら。大切なる君の御物詣。主人義家某に申し付け。餘所ながら御車の御供と。地言上すれば匣の內侍。ヲウ流石は天下の武將と呼ばるゝ程あつて。道を守る義家の心遣ひ。詞宮樣にもさぞ叡感。殊更長閑な春の氣色御氣慰みのけふの御供。地物堅き直方殿是非御供とあつたれど。詞どうやらかうやら御所のお留守を。いかにも〳〵。大切なる御所と申し。四角四面な直方殿御遊興の御供には。花も紅葉もくすぼりかへる。ア、何がな宮樣のお慰みをと地見やる木蔭に鶯の首。覗いて見たり引つこんだり招く尾花の鼻の先。冷汗かくとも知らざる女中。匣はそれと見て取つて。詞コリヤ供の者共。宮樣にも殊ない御機嫌。今暫くお隙がいろ。お迎ひは入相の花散る頃早う〳〵に雜色仕丁。フシ殘らず打連れ立歸る。地生駒は此場をくろめんと。眞顔になつて詞アレノ〳〵女中樣御らうじませ。御所方には珍らしい。遊君と申す者。地御覽じた事でござりますまいといふに內侍が何遊君とや。詞江口の君のうかれ女と古今集では見たれども。直に見るは今が始め。地サアノ〳〵早うに生駒之助。してやつたりと一人笑。詞彼の大夫めが揚屋入りの道中を。今爰へ取寄せてお目の正月させません。それ〳〵そこへ。地もう此處へと眴。仕形を戀絹が。かい取小褄八文字。歌よるべ定めぬ流れの身にも。すいた男の。あればこそ 牛太夫すかいで是が勤まろか。ア、くだばかりと ナホス生駒が傍。寄らんとするを目と仕形。寄るなとしらせどヲ、辛氣。サハリけふお前と連立つて。詞此吉田で飲み明かすと。さつきにからと。膝に取付きあまえ泣き。こたへ兼ねたる辛抱袋。破れかぶれと。フシ生駒がやくたい。地二人がそぶりを女中達。コレ生駒殿。詞あの傾城はそなたの相方とやらいふものかと。地いはれて恟り心付き。詞ハテさてめつさうな仰せ物堅き八幡が家來廓遊びは夢にも存ぜぬ。ム、そんなら今のは。ハテ客を捕まへて此樣にするが傾城の仕打。そこで客めがたわいになつて。可愛い色を引寄せて地コレ此樣にと抱きしむれば。詞コレ志賀さん。地らつちもない事隙入れずと。サアござんせと フシ手を取れば。詞ソレ〳〵〳〵どうでもそなたの馴染ぢやと。地睨め上げられて生駒之助。詞エ、近付きでもないくせにいろ〳〵の事ぬかす故。あなた方への言譯なし。地イヤお前がわしにと又取付き。兩手をぢつと引締

めて。詞かうした所が廓の口舌。まづあら方はこんなものと。地口から出次第言ひ次第取付き引付く フシ向うより。地歩み來る瓜割四郎朱鞘の大小いかつげに。それと見るより強腹ながら。詞ヤア生駒殿。主人義家大切なる急用あり。早う。地〱の聲に悄り飛退いて。詞急御用とは覺束なし。貴殿樣子を聞かずやと。地立寄る生駒を突飛ばし。詞大切なる役目を受け。それに何ぞや女を捕へ見苦しき振舞。何かは御用も我等は知らぬ。地早やおいきやれとねめ廻す。地戀絹生駒は目を見合せ。フシ道理に詮方なげ首し。心殘して立歸る。地續いて立つ戀絹を。四郎が止めてコレ戀主。詞エ、われは〱。首だけ惚れてゐる四郎。振つて〱ふり付け。生駒にばつかりきつい乘り樣胴慾ちやぞよ。エ、愛な 地命取めと フシしがみ付く。ふり放して迯げ行くをどつこいならぬと又取付く。ア、これ申し。どうぞ往なして拜みます。イヤ〱〱。拜むのはこつちからと詮方なんぎの最中へ。詞鳥を差いた見さいなさい鳥さいた見さいな。地何にも得とらず。フシ餌差竿。地物見だけい女中達ソレ〱宮のお慰み。四郎とやら其鳥差此處へよびや。四郎。々々に 詞ハア、、。鳥差お召しちやうせをれと。地いふ間をはづして戀絹が。フシ迯げ行く跡になむ三寶。詞大事の鳥を飛ばしてのけた。地鳥差め覺えてをれと フシつぶやき跡を慕ひ行く。地鳥差は立寄つて餌竿をおろし斜に構へ。詞一つひよ鳥比叡の山の。二つ梟二子の山に。三つ木兎 地都鳥そこよ。かしこと立舞ふふりにて匣の袖へ投げ文を。フシひら〱の。檜木の枝とそらさぬ風情。フシ文取上げて匣の内侍。詞ハテいぶかしき賤の振舞。御前に叶はぬあつちへやりやと。地文投げ捨つれば女中達。詞下々の身分で内侍樣に付文とは。大それた慮外者。早や立つて行け〱と。地せり立てられてもびくともせず。詞下々であらうが何であらうが。戀に上下の隔はない。但し又鳥差が上つがたに惚れる事はならぬといふお觸でもあつたか。何でも思ひ込んだ此男。返事聞かねばいつかな〱と 地人目遠慮もあらくれ男。アレ狼藉者誰そ參れと。呼べど下合ふ人もなく隔つる女中をはり退けぶち退け。傍若無人の狼藉に。内侍は宮樣かひ〲しく。なう〱こはやと局達神前さして迯げ行くを。詞おのれ女め一摑と。地大手を廣げ逸散に フシ跡を慕うて追うて行く。地内侍は宮を誘ひてつまづき轉び出で給ふ。跡から逸散かけくる鳥差。詞内侍樣まんまと首尾よう參りました。樣子は今の文の通り早う〱とせき立つれば。地匣は宮を伴ひて何い

ふ隙も嵐に連れフシ何國ともなく落ちて行く。地かくとは知らぬ女中達おろ〳〵目にて走り出て。コリヤ〳〵詞鳥差。宮様どつちへ連れいたと縋り付くを踏飛ばし。詞ヤア宮が見えねば身が知らうか。そこ退け通せイヤ〳〵〳〵。そなたが連れ行た宮様をこつちへ戻しや。イヽヤ知らぬ。イヤそなたがと爭ふ半。地傔仗直方御歸館遲しとかけ來る松蔭。様子を斯くと駈寄つて鳥差が左の脇つぼ。丁ど入れたる霞の當身。詞コレ〳〵〳〵宮様はいづくにおはする。匣殿は内侍はと。地問ふも苛立つこなたもうろ〳〵。あの鳥差が狼藉故。宮様伴ひ匣様はあの道へと。地いふ間もわくせくかけ行く女中。扨こそ曲者吐かして聞かんと又一當。むつくと起きる間稻妻の。フシ懐劍咽につき立てたり。ハヽヽ詞なむ三寶詮議の種へツエ地死なしたりと氣は夕陽。車輪の如くかけ廻り。さもあれいかにと死骸の懐中。手を差入れて引き出す一通。さつと披いて讀下し。詞何々環の宮を盜出し給はるべしと。匣の内侍へ頼みの狀。何者とも名を記さぬは。朝廷に蔓る佞人。大江の維時なんどが所業か。何にもせよ。逆臣に出しぬかれしか。地エヽ口惜しやさりながら。詞これこそは詮議の手がかり。究竟一通懐に。しつかと納むる忠臣の。心の闇の道筋を逸散にこそ三重へ歸りけれ。地西洞院左女牛の殿造。八幡太郎義家朝臣。再び鎭守府將軍に御拜任の御悦びとて。在京の大小名思ひ〳〵の御獻上。飾る口上使者袴。奏者の女中が受答へ。フシ花を散して持運ぶ。地鬧しい中ちらほらと一つ小蔭に寄りつどひ。詞葉櫻様何と御家中も多い中。よい男といふは生駒之助様。かはいらしい殿御ぢやないかと。地いへばみはしがサイナウ。詞したが顔に似合はぬ物堅さ。其顔に似合はぬで思ひ出した。茶の間の楓があの顔で生駒様を付けつ廻しつ。何と身の程知らずぢやないかいのと。地譏る後へによつと出た頬はすもゝの花楓。櫛笥鏡臺携へて。詞ヲヽ皆様聞いておくれ。わしが此様に思ふのに。生駒様の聞入れのないはどうした事と思うたりや。あのお方は傾城ずきで。こちらが様な大むくは嫌ひ。それでわしも今から派出に身を持つて。生駒様に思はれうと。コレおぐし上げの磯野を頼み。結うて貰うた此釣舟。地似合うたか見ておくれといふ目付のしたゝるさ。こらへ兼ねて吹出す。フシ口の間より。地御家人瓜割四郎糺。袴の角菱いがんだ頬付。詞ヤア何ざわ〳〵と女郎ども。ヤラぬは楓めエヽ惡くさいやつシテこりやお玄關近く。女の手道具見苦しい。ばか者めと地蹴飛ばかされて散亂粉灰。

フシ皆々次へ逃げて入る。詞ヤア面倒な此手道具。持つてうせぬか。誰そ取つて捨てよとフシ呼ばはり〳〵奥へ入る。地御門の方騒がしく出をらう〳〵と下部が聲。様子は何か白洲先かいどり小づま フシ八文字。詞ヤア女め待て。御家中に見馴れぬ風俗胡亂やつ。サア名をぬかせ聞かねばいつかな。ホ、、、、。合點が行かぬの聞かねばならぬのと。無理な客様の色事をせかんす様に。ヤア扨は倚賣女よな。此處をどこだと思ふ。忝くも八幡様の御屋敷。サア出をらうと引立つるヲ、無粹。人の心も知らずに。其様に叩らんすものぢやない。其八幡様の御家來。生駒之助様に逢はねばならぬ譯あつて。コレよいお人ぢや。誰やら表へ逢ひに來てゐると。ちよつとあの様をこゝへ呼出して下さんせ。ホンニ又此生駒様も。何して居さんす事ぢややら。早う逢ひたい 地出て下んせぬ事かいの。エ、辛氣やと式臺に。身を投げ島。田すゐせんの フシ流ははでに顯はれり。詞ヤア情のこはい下司女。意地ばらば薪ざつぱとひしめく聲。地何事やらんと立出づる志賀崎生駒之助。一間をずつと顔見て恟り。矢庭に庭へ飛石の。堅い顔付き氣色を變へ。詞ヤア下郎ども。御座の間近く尾籠の高聲。ハイヤ此女め胡亂者故引捕へて。ヤア生ぬるい。わいらで行かぬ身が詮議する。早く下れ何馬鹿やつと。地叩りちらして追立てやり。邊を見廻しつゝと寄り。詞コレ戀絹嗜めコリヤマア何事。物堅きお館の格知つて居ながらはでな姿で晝日中。お上へ聞えたら生駒之助は痛い腹。サア人の見ぬ内に早く。地早くといふ間も若しやと胸どき〳〵。せく男よりせき入る戀絹。コレ生駒様。ひよんな事が出來てきて。それでお前に逢ひたさにヤア〳〵なんぢや。ひよんな事とは氣がかり。其譯をサア早く。サアイナ。其譯といふは。客は誰か知らねども。わしに合點もさせず身請の相談。親方がいに手附まで受取つたと。聞くとはつたりコレこの痞。地どうかかうかと案じる折から。詞駈落してこいとお前の知らせ。ヤア〳〵そりや誰が。四郎様が。ヤア何あの瓜割四郎がさう言うたを。誠と思うてスリヤそちは廓を。アイ 地駈落してきたわいな。ホイ。地はつとばかりに生駒が當惑。ハテ合點の行かぬというてゐる間も其方のこの形。人が知つては一大事どうぞ隱して置く所を。エ、どうせうぞかう障子明ける物音出る楓。見付けられじと戀絹を。フシ小陰へ押しやりそらさぬ顔。地楓は其儘すがり付き。エ、氣の惡い生駒さん。今のしだらはどうぞいな。地あの子ばかりが眞實で。惚れぬいてゐるこの

わしは。うそにいとしと思ふかと見捨てられたもあの子故。アノ傾城と譯ある事今の樣子も書置きして。私やいつそ死ぬ覺悟と。用意の剃刀生駒は驚きマア待つた。死ぬるとは短氣千萬。そしてアノ傾城と身共が譯を。書置にしてよいものかと。地留める兩手をじつとしめ。詞さういはんすは。叶へて給はる心かえ。デモそれは。そんなら死ぬるイヤ放したと地聲高に。こまつて詮方難儀の手詰。そんなら應ちや。エヽ嬉しやと抱付かれ。顏をそむける生駒が思ひ。生ぐさ坊主が精進のフシ馳走に禮いふ心地なり。地折もこそあれお客のお入りとのゝめく聲。何がな幸ひコレ〳〵。お客のお出と引つぱづして逃行く生駒。詞コレ志賀さん。夫婦の固めはわしが部屋。地必ず待つて居るぞえと。尻ふりちらしてフシ走り行く。地程もなくのつさ〳〵入來る權威の鼻。大江大將維時打紐したる白木の箱。雜掌笠原軍記に持たせ傍見廻し聲をひそめ。汝も兼て知る如く年來の我が大望。青公家輩は大半味方になすと雖も只手ごはきは。八幡太郎義家平の傔仗直方。きやつら兩人禁廷にへちまへば。何かと手延無念至極。何卒罪に落さんと肺肝を廻らし。なんなく直方は術の網に打込み。けふ中に仕舞ふ合點。この上は義家一人。彼が家來瓜割四郎我が味方に付けたれば。十が九つ大望成就。たゞ儘ならぬは戀といふ曲者。義家が女房敷妙。色々と心を盡せど今に色よき返事もせぬ。何でもけふは此艷書を合點かと。地渡せば取つて懷中し。詞今日中に御手に入れん。必ずぬかるな合點と。地慾と色との間の褄。出迎ふ瓜割四郎維時が傍近く。お賴みの通り生駒之助しくじらす術上首尾。彼奴がなじみの傾城を此館へ引入れ。それを越度に打殺せば風の神で戀の敵。地戀絹を我が女房にといふもぞく〳〵でかした。〳〵幸先よし。艷書の事を軍記合點か。瓜割必ず仕損ずなと。地二人を立たする間もなくフシさと打薫る。絹の香は。義家の奧方敷妙御前。裲襠姿もしとやかに。詞維時公には御苦勞の御出で。夫義家早速お目にかゝる筈なれども。今日は非常の大赦何かと取込み罷在る。無禮の段は眞平お赦し。御用の品もあらば私にと。地聞いて維時威儀繕ひ。詞ヤ義家の御內證此頃は打絶え申した。其許の親父直方には。御預りの環の宮行方なく。老人の心遣ひ。そこにも親の事なれば嘸案じ召されう。それは格別。某けふ罷越す事別儀ならず。義家には近近東國へ進發。門出を祝はん爲。維時が寸志の音物。地改めて受納あれと件の。フシ太刀箱さし置けば。詞これは〳〵

何から何まで御親切の御詞。殊に夫が門出を御祝ひとは。義家にも嘸悦びと。地蓋押し明くればこはいかに切柄したる新刀の刀。愕りさすがは武将の妻。さあらぬ體に取上げて。詞武士の門出に打物とは。御心の付きし御音物さりながら。これは正しく科人を試す不祥の刀。地といふを抑へてコレサ數妙。詞心を籠めし我が音物。婦人が聞いて何を判斷。義家に見すれば胸に覺えのある事さ。とつくりと思案をして。其刀の返答を相待つと。某が申すといはれよ奥方と。地割つて言はざる切柄は。いかさま仔細あら身の刀。鞘にしつくり納めても。心のときつき納らぬ。フシ氣を取り直し。詞姫御前の智惠に及ばぬ事。義家に右の品。お出での様子も申し聞けん。役目濟むまで暫しの内は。ヲ、サ〱。其刀の返答聞き切るまでは歸らぬ維時。地案内召されと權柄。

横柄敷妙に オクリ打連れ。ヘ一間へ入りにける。地口の間より奥者の女中生駒様〱と フシ呼びつぐ聲。地生駒之助これにあり何用なるぞと立出づれば。詞申しあなたにお目にかゝらうと。九條の廓の亡八とやらいふ者が。ヤア亡八が來たか。コリヤたまらぬ。我等が逢つては事むつかし。こなた衆頼む。地コレかう〱と耳に口。小陰にありあふ櫛笥鏡臺 フシ抱かへて奥へはづし行く。地程なく白洲へ小腰をかゞめ。詞ハイ私は九條の傾城屋文字屋の友三。是なは請人の惣助でござります。私抱への奉公人戀絹と申す女。さる方へ身請極まり手附まで請取りました。處に夜前廓を駈落ち。何が方々と尋ねますれどもとんと行方が知れませぬ。察する處戀絹が深間といふはこれの御家中生駒之助様。身請を嫌うて廓を出たからは。外へは參らぬこのお屋敷に。ア、

コレ〱こゝは殿様のお白洲先。麁相な事など申上げたら。ア、申しおつしやるな。お前方は素人。慮外ながら文學の友三というて。ずんと黒い男。ソレ〱此惣助も身晴。何ぢやあらうと生駒様に逢うてのおりのり。又逢はしやれぬが最後奥へ踏込み直々にと。地口を揃へる亡八がゆすり。一間の內に大音上げ。詞ヤア〱八幡太郎これにあり。汝等下々の分として上を恐れぬ推參者。引括つて牢へ打込む。地覺悟しをれと 道具屋かさ高に褄くわつたり立烏帽子。大紋くわつと目の中の。きよろ〱するも ナホス思ひなし。威に恐れてとんばう返り。ハア〱お赦し御免と後じさり。地弱い所へ附込んで。詞ヤア一寸も動きをるまい。ハア返答が惡いと首が飛ぶも知れぬぞ。思へば〱につくいやつ。傾城も同じ女。かはいさうにいやな男に身請とは汝等が身

勝手。すいた男に添はしてやるか。ハ、ア〳〵そんなら赦してこます。地あのごくだらめがと強う見せたる足拍子はずみにすつぽり立烏帽子。結びめ解けて櫛拂の頬髭落つれば傍邊。ハツト生駒が取りのぼす顔のゑのぐも汗たら〳〵。フシ所斑の八幡大名。地俄にしよげる顔を見て詞ヤアこなたは生駒之助と地いはれてなむ三しくじつたと天窻抱へて逃げ入れば。ヤア大騙の生駒之助金の代りに連れていんで廓の法の桶伏と。フシかけ入らんとする一間より。地兩人控へよ先づ待てと立出で給ふは。義家の妹君名も八重幡の九重に。フシ花もおさるゝ品形。詞コレそこな亡八とやら。其樣に詞を荒し。若しも此事兄義家樣のお聞きに立たばそち達が身の上。生駒之助とても同じ事。そこを思うて留めに出たは自らが情。なんと其戀絹とやらが身の代を辨へなばそち達に言分はあるまいがの。何が扨お金さへ受取りますれば。そんならば其傾城自らが身請した。それ持つて早や歸れと。地寝耳へ水の山吹より花も實もある取捌き。コハ忝し有難しと戴き勇み亡八やは九條をさして立歸る。生駒は面目中敷居出るも出られぬ此場の品。戀絹は一間より姫の情の有難さスヱ出づるもおもて。伏し沈む。八重幡はしとやかに。詞姫ごぜは相身互。何の禮に及ぶ事。地かうして世話をする身にも心に任せぬ憂き思ひ。物馴れしそもじを便り。力になつてとばかりにてフシ思ひ。入りたる御風情。詞アノお姫樣の改つた。大恩受けた此身の上。お心に叶はぬ事あらば何なりとサアおつしやれどうぞいなと。地いはれていとゞ恥しさ思ひ初めたる戀人に。下束の數は重なれど。詞モウおつしやるな讀めました。戀の手管は勤めの道。私がから申すからはお心強う思召せ。シテ其惚れてござんす殿御といふは。お公家樣がお大名か。イ、ヤ大名でなし公家でなし。そもじの馴染の生駒之助と。地聞いて恂り差當る思と。情にからめられ今更何と思案さへ。壁に生駒が。聞くぞともスヱ思ひ。極めて傍に寄り。詞二人が譯を御存じの上私へのお頼みは。よく〳〵せつないあなたの戀路。切るに切られぬ中なれど。いつそとんと思ひ切つて。私がお世話致しませうと地いふをこちらに立聞いておれを思ひ切つたとは。うそか誠かとやかくと氣はもめくさの袴に汗。姫はいそ〳〵嬉し顔。わりない無心此上は。只よい樣にと袖口に。フシ紅葉かざして入り給ふ。地かげ見るや見ずつか〳〵〳〵。胸ぐら取つてコリヤ戀絹。詞エ、汝はな。アイヤモ見さげ果てた根性。さういふ心とは知らず。地つもられたが殘念なと引い

つ廻しつ打叩く手に取付いて。詞ヲ、よういうて下んした。女房ぢやと思はしやんすりやこそ。打ちもさしやんす擲きもさんす。地お前の様な眞實な殿御が又と世界にあろかいな。身請して貰うた義理にせまり今の様に姫君様にいうたれど。お顏を見たれば退きとむないやつぱり元の夫婦ぢやと。男の膝にすがり泣く フシわりなき有様立聞く八重幡恪氣の中にも二人が心。思ひやる方あら氣の生駒。詞エ、いやらしい退いてくれ。心底の腐つた女。顏を見るもけがらはしい。大方おれがやつた誓紙も身仕舞部屋の梳き紙。油くさい狐良よい加減につまんで貰をと。地ついと立つを待たしやんせ又疳癪の惡がうか。そも突出しの其日より言交した互の誓紙。肌身離さず此守にコレ見さんせと取出せば。詞イヤ／＼まだ其守の中に何やらある。エ、疑ひの深いお方。これはわしがとゝ様の形見。大事にかけねばならぬ物。マア其大事がるが地合點が行かぬと引つたくつて。詞隱し男様の誓紙の文言ドレ拜まうか。何ぢや。奥州六郡の主安倍太夫賴時。法名大了院殿喜山大居士と。地讀みも終らずコレ戀絹。詞スリヤ此賴時といふは。アイ私がとゝ様でござんすと。地聞いて悔り一間に立聞く義家公猶も窺ひ。フシおはします。地生駒之助つつと立ち。詞緣はこれまで戀絹と。地思ひがけなき夫の詞縋り付くを振放し。詞添はれぬ譯は其書いた物。賴時が娘とあれば朝敵貞任宗任が兄弟。知らぬ昔は是非もなし。源氏に仕ふる生駒之助。朝敵の血筋に繋がつては主君へ不忠武門の穢と。地言はれて應へも涙ぐみ。地けふまで包みし我が身の系圖。とゝ様はくり坂の合戰に流矢にてあへなき御最期兄様達も皆散々行方定めぬ憂き勤め。不圖馴初めし二人が中。起請誓紙を忠義にかへ。詞緣を切るとのお詞を。地無理とは。更々思はねど。お前に別れてそもやそも此身は何と。フシなるぞいな。詞エ、死なしやんしたとゝ様も聞えぬ。兄様達も兄様達。よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の様な男と敵味方になる様な鈍な軍があるものか。地私が緣の邪魔になる兄様達。こつちから緣切るほどにコレ堪忍して下さんせ。エエなあ申しコレ申しとフシくどき嘆くぞいぢらしき。地始終をとつくと義家公一間をさつと押明くる。音に二人は消入る雪。フシとけぬ此場を逃げて入る。地大將端近く出でさせ給ひ。詞ヤア／＼誰かある。召還せし流人ども殘らずこれへの詞の内。地ばら／＼出づる歸洛の流人。籠を フシ出でたるいさみ足。地瓜割四郎御前に向ひ。詞常磐島はだか島竹の浦松

が浦。いづれも奥州一國の流人都合二十七人相揃ひ候。ヤア〳〵汝等謹んで承れ。此度非常の大赦行はれ國々の流人赦免ある。さるによつて奥州一國の流人は我が君へ仰せ下り召還したる汝等。有難く存じ奉り何國へなりとも立退くべしと。地 上意にはつと流人ども悦ぶ聲は叫喚の。地獄で佛に逢ひたる如く フシ 拜みつ轉びつ出でて行く。ハル フシ 跡へしを〳〵立出づる。ギン これも流人と白洲のさき 下オス なりも形もしよげ鳥の。フシ 身すぼらしげに蹲まる。詞 義家遙に見やり給ひ。奥州の流人則氏とは御身よな。早速の入洛此上なしと。地 仰せに流人謹んで。親にて候則國勅勘を蒙り奉り。流人となりし其頃は我未だ弱冠。成長するに隨ひ父諸共昔を戀ふる憂き年月。表具 海人の苫屋の煙と倶に。父は空しく相果てて。詞 生きたるかひも荒磯の島守にて朽ちなん身の。地 召し返さるゝは大君の御惠み。偏に武將のお情と。スヱ 低頭平身 ナホス なしければ。詞 なに父の卿には空しくなり給ひしとや是非もなしさりながら。今日歸洛の此上は。父則國の本官を直に桂中納言教氏卿いざまづこれへ。誰ぞ御裝束參らせよハツト 地 女中がとり〳〵に。木綿の島守引きかへて。冠裝束花やかに。忽ち雲の上人の。本フシ 威も備はつて見え給ふ。詞 其裝束を召さるれば。貴公は高官武官の某。憚りありと フシ 上座に。進め給ふにぞ。地 コハ痛み入る御禮儀。詞 今迄は天下の流人。今よりは朝家の近臣。地 百官百司に列る上は所存を包むは君への不忠。天下の武將義家に桂中納言教氏が。三ケ條の不審あり。詞 まづ第一には。三種の神器の其一つ十握の御劍。先年より紛失し御行方知れさせ給はず。禁門の外は武將の守る所。天照神より傳はりし御寶。草を分け地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮。御行方ましまさず。これなんどは朝廷の御大事。察する處都間近く叛逆謀叛の族が所爲と。鏡にかけて顯はれたり。地 さすれば奪はれし直方に其疑ひなきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞き及ぶ。縁に引かれてゆるかせに差置くなんど世の人口は塞がれまじ。此三つの返答 フシ 聞かまほしとありければ。詞 ハツア流石は文道に名を得給ひし桂中納言教氏卿。御尤もの御不審一々承知仕る。併し此御返答は。義家存ずる旨あれば參内の折を以て。いかにも然らば再會々々 地 おさらばと。見送る式臺別れの禮儀。袂も匂ふ初冠 大内指して歸らるる。地 大將維時一間を立出で。詞 最前敷妙に渡し置く刀の返答言はずと胸に覺えがあらう。舅直方が誤り一家とて容赦はなるまい。首討つて渡されよ。イヤさう

は罷りならぬ。環の宮を奪はれしは一應の越度ばかりでない。大切の詮議ある直方輕々しく首討たば。宮の詮議は何を以て仕らん。ちと御麁相に存ずると。地やり込められて負けぬ顔。詞左程拔目なき義家が。家來の不義はなぜ詮議せぬ。ソレ軍記。地承はると笠原が。引立て出づる戀絹生駒。詞何と見られしか。主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍。我が家の事さへえ知らぬ御邊。天下の武將心許ない。是でも見事大切の。詮議をするか義家と。地何がな惡口嘲弄も理の當然にさしもの大將拔。差ならぬ此場の時宜二人をはつたと蹴落し給へば。身の誤りに詞なく。白洲にフシ頭を埋み居る。詞ヤアヤア敷妙。最前の切柄の刀持參せよ早く。地〳〵と詞の下。夫の心は白鞘の此刀は何の御用。詞ヲ、不義者めを成敗する。エエ不便ながら武將の役目。ヲ、さうなうては濟むまいと。地嘲る軍記が眞甲梨割フシ二つになつてのたれ伏す。詞ヤア笠原には何科あつて。サレバ此奴大不義者。御覽なされあらう事か。女房敷妙に斯樣の艶書。傾城狂ひは時の興。强ち不義とも申されず。主ある女に不義しかけるは。畜生と申さうか。成敗したが誤りか。科の吟味立すると。どこへ飛沫がかゝらうやら。それともに御不審あらば。地承らんと和かに。肝の束を指通され。詞ム、尤も。扨々軍記めは存の外なる不屆者。逆磔にもかくべきやつ。手討とはまだ御了簡。シテ兩人が成敗は。ヲ、傾城狂ひの放埒者。勘當致して阿呆拂。ム、是も尤も。某も長居は恐れ。尤もなる地趣宜しく奏聞致さんと。二つ胴を遁れた心地。フシ足早にこそ歸りけれ。地言譯なみだ生駒之助刀逆手に取直す。ヤア犬死せんとは狼狽者。追放の身に入らざる武士達。最前一間より立聞けば。其女は貞任がナ。定めて遠い國の者。馴れなじみしこそ幸ひ。夫婦となつて隨分添ひとげ。彼の本國へ立退かば究竟の手がかり。心得たるか。環の宮の行方が知れねば。舅直方は大罪人。時宜に依つては敷妙が。緣の切目とならうも知れぬ。添ひとげるも義理。添はれぬも。浮世の義理と諦めよと。地八重幡姫の事までも思ひやり戸に忍び泣き。緣の切目と嫂の。情の裲襠顏と顏フシ餘所に。見なして入り給ふ。地かゝる所へ笠原が弟同名軍六。兄の敵遁さじとフシ大勢引具し追取りまく。詞それと生駒がコリヤ〳〵戀絹。これで防げと一腰を。地しやんと柳の腰車。石げさ肩げさまくり切り。ハズミ迯ぐるをやらじと女夫は白刄奥庭深く〳〵追うて行く。フシすでに時刻も。宵闇に外面を窺ふ笠原軍六。生駒が手並にもてあまし一拔ぬ

けたる抜けがけは。數妙を奪取つて我が高名にと一人笑み。あの亭こそと裏門の。塀に身をよせ耳を寄せ窺ふ内には戀絹が フシ多勢を切抜けそこかしこ。詞是を足場にあの塀と。差したる刀抜放し突込む切先軍六が。胴腹思はず 地芋串に。フシのた打廻る鰻武士。地内にはそれとも白壁に柄の足代。塀の上。フシひらりと飛びたる折こそあれ。詞多勢を薙立て生駒之助。女房出かした維時が。家來軍六を手にかけしは。忠義の門出手始めよしサア戀。絹と突立つ所へかけ來る瓜割大音上げ。ヤア扶持離れの生駒之助色事仕かと思ひの外手にぼうばつたる汝が働き。ソレ家來ども討つて取れ。承はると近寄るやつばら。から竹梨割瓜割主従 フシ敵はぬ赦せと迯失せたり。地返す敵も並木の馬場。さはいへ名殘と見返る生駒我も。廓をけふ限り。其うきふしもよき武士の。つま引上げて引きしめて。これよりすぐに打立たん。其行先は不破の關清見。白川衣が關忍の。關はありし身の。口舌の柵手管の關鳥の。鳴くさへ憎かりし。今の此身は鳥の音に。函谷關を越えたる例。軈て目出たき世にあふ坂の。關所々々をやす／＼と吾妻の。空へと急ぎ行く

第二

地琴碁書畫を嗜む身とも生れず。明暮物の命を取り浮世を渡る綱手繩。浪打際にフシざわ／＼と。かづきの海士が晝休。詞コリヤ長太のおかた。今日はお代官様が。此外が濱を通らしやると浦中はもや／＼。すつきり仕事も手に付かぬ。聞きや此中は長太も潛に出やるげな。女夫しての挊ぎいから延びたと浦邊の噂。ヲ、あの茂三の内儀の云やる事わいの。銀は延びいでこちのアノ性惡が。鼻毛の延びるに困り物。四郎のおかたの知つての通り去々年の月見の夜さり。膃肭臍取りにいた時に海の中でどれ合ひ初めた女夫中。ヲ、それ／＼其夜さりうらも岩の狹間でこちの人に馴初め今は子の親。こなたはなぜに子が無い。ヲ、子どころかいの。眞實に思うてゐるわしを袖にしくさりくさつて。又しても女さへ見りや帆立貝。ホンニ。うらが思ひは鮑の貝の片思ひぢやと思へば悲しうござる。ヲ、こりやおかたのが皆道理。シタが。そなたばかりぢやないぞいの。海商賣とてどこの男も磯ぜせり。地こちとらも修羅はたえぬと三人寄れば。フシ男の噂。詞ヤイ／＼／＼又男のわんざんかと。地いうて海からによつこりと。上つてくる海士の長太。詞あんまりわいらが譏る故海の中でくつさめばかり。漁が利かいでやう／＼と四五

はい。これでは。塩も呑めるものぢやないと。地いへば皆々テモ我をれ。男の仕事には大きな物これでは女海士もはだし。ドレいんで取溜の鮑内でむいたりむかしたり、サア皆おじやと打連れて フシ住家住家へ立歸る。フシ磯邊傳ひをくる女房長太が見付けてヲイ〳〵。文治の内儀どこへちやと。呼びかけられて立止り。詞ヲヽ誰ぢやと思うたら長太樣。内儀樣御精が出ます。聞いて下さんせ稚兒が長の煩ひ。弱みの上へ大熱けふは取分け樣子が惡い。それで濱手の醫者殿へ藥を貰ひに。ホンニ此間の心づかひ。わしも癪が發りさうな。地ヲヽそれはいかいこな樣の氣もせやと。女房がいふを引取つて。コレ詞内儀其癪にはきつい妙藥があつて。醫者に貰うて置いた。待つて居やしやれ一走つい取つて來てやろ。コリヤかゝ何をきよろり。今の日和は何時か知れぬ。そよ〳〵と良い凪が來る此間に一精出してこい。地若ししけが來さうなら此繩で知らすぞと。約束の千尋の繩。腰にしつかり女房が。舟端より眞逆樣。フシ物馴れし。こそ身過なれ。地繩繰りこして舟張のくわんに手取り早く。詞サアかかめは沖へやつて仕舞つた。地モウ邊に人はなしと口なめずりして上つてくる。長太が素振に氣も付かず。そんなら世話ながら今云はしやんした癪の藥を。どうぞ早うと立寄れば。詞へヽ藥やろといふたは嘘ぢや。地待たして置いたはからうせう爲ぢやと引んだかへ。詞テモうまい凪ではある。此尻つきにふつとのぼつていんまに下らぬ臍の動氣。お前の此藥で直しておくれ。たつた一服で本復すると。地抱付けばひつしよなく。詞何さしやんす。夫のあるわしを捕まへ。ぢやら〳〵と何ぢややら。塩だらけな體して。地あた フシ舌たるいと突飛ばせば。詞それはどうよく。たつた一度。どうもならぬたまらぬと。地抱きしめ〳〵抱きしめられ何とせんかた渚の方。浪間へ響く鐵棒の音に悔り振返り。ヤア南無三所の代官め。コリヤたまらぬとさしもの惡者。せう事なぎさに心を殘し其儘海へづぶ〳〵〳〵。こなたは嬉しさ此場の難儀。遁れて醫者へと走り行く。地程なく出でくる所の代官。鶉の目鷹右衛門跡から庄屋が短い羽織。長い鼻毛を砂にすり付け。ハイ。詞から並びましたが此濱の組の者ども。此浦邊は漁獵師男海士潜の蜑。其外山を挊ぐ獵師も入込み。外商賣は僅か故。總名を獵師町と申しますと。地聞いて代官打點き。詞ム、然らば山獵師もあるとな。浦方はいふに及ばず。山獵師には別してきつと申付くる法度の趣。先達ても聞きつらん。鎌倉鶴が岡の神前にて。千羽の

をお放しあり。則ち氏神の御つかはしめと世に知らせん其爲に。金の札を付置かる。さすれば右の神鳥。何國の浦山におりたりとも必ず麁略致さぬ様との御上意なりと。地さも緩怠に云付け睨付け。フシ濱手をさして打通る。地跡打眺めて浦の者。詞サア〳〵濟んだわ。ア、お年寄御苦勞〳〵。何の〳〵ごくらうはしくらうの上の事。皆も今のお觸合點か。金の札の付いた鶴撃つ事はならぬぞや。鶴は愚か。こんな時には鷺でも必ず撃たぬ様。地皆念入れて觸れうぞやと フシ打連れてこそ歸りけれ。地お谷は醫者よりとつかはと。フシ心も足もいそ打つ浪の。中から出てくる以前の長太。かけ上つてほうど抱へ。詞サアしてやつたさつきには。うまい所を代官めが。うせたで怖さに巣入したれば。鱚と赤貝と口吸うてをつたを見て。イヤモどうも堪へられぬと。地しがみ付かれてお谷はうるさく。詞サア〳〵まあコレ爰放して。イヤ放したら逃げさんす。慈悲ぢや情ぢやコレ拜む。サ、、、、どうなりとせうけれど。晝中にそんな事イヤだんない〳〵。爰でいやなら。海の底でついづぶ〳〵ア、滅相な。鵞かなんぞの様にこちや水へはよう入らぬ。そんなら幸ひあの舟で。結ぶの神は舟魂様 地サア〳〵此方へお出で〳〵。エ、こりや何とする放せ。〳〵。こちの人文治殿と呼べど叫べどかひなみだ。詞コリヤ泣かんすか。泣くとは別して忝い。地可愛男にや泣きよが違ふ。足を屈めてゐのふで締めて。〳〵ハ、ウしよがいの〳〵コレ此様に。しめておくれと。引立て引きずり舟の中。詞なんぼ泣いても喚いても爰はモウ海の中。其様にぴん〳〵するといつそかうぢやと 地舟張の。千尋の繩を帶にしつかり。かうして置いてと抱き付けば。詞エ、穢らはしい情ないと身をもむお谷が帶の繩。千尋の底へこたへてや。遙の沖へうつぽりと浮上つたる長太がかゝ。遠目にそれと見るよりも逆立つ浪を立泳ぎ。其儘舟へ飛上り。詞ノリすつくと立つたる丸裸鱗だらけのさばき髪男を引据ゑくゝりし繩解くより早くお谷は磯へ逃げ上る。やらじとあせる長太が腰嚢引きずり廻しの結目に。地くゝる千尋の繩ぐる〳〵夫に向つてつく息は。詞道成寺を見る如く七卷纒うて 詞サア長太。こつちへおぢやと飛込んで泳げば繩に撥込まれ。コリヤどうしをるも。地聞けばこそ。水には強き女房の元氣引立て〳〵泳ぎ行く。ハルフシ お谷は胸を撫でおろし フシ立上らんとする所へ。地戻りかゝる善知鳥文治。山より山に獵りくらす海部刀の刃を渡る。腰に半弓 フシ山衣装 地お谷はそれと詞ヲ、こちの人。今仕事から戻りかえ。イ

ヤ〳〵。けふは風が高うて獵もきかず。山は疾う仕舞うたれど戻る道で代官殿から鶴のお觸。お宿老へ呼付けられそれで漸うたつた今。シテ稚兒が様子はどうぢや。病人を放て置いてどこへ往ためつさうな。イエ〳〵内には隣りのおか様を頼んで置いて。藥が切れた故醫者殿へ一走り。戻る道で惡者の長太めが。それは〳〵フヽ。あいつがづだい坊には誰も難儀するげな。イヤその難儀で思ひ出した。そなたに悦ばすことがある。稚兒が大病人參でなければ助からぬとお醫者の指圖。あつというても長々の煩ひ。そなたやおれが物衣類まで賣代なした上なれば。人參買ふあだてはなしというて大切なは人の命。どうぞま一度本復さしたいと。胸を痛めてゐた所聞きや。稚兒を大事々々と思ふ。二人が念が居いたやら。よい儲筋を聞出したれば。地人參買ふ工面が出る悦びやと。夫の話に共勇みそれは嬉しい。そしたら私は先へいんで神棚へ燈明上げて。ヲヽそれ〳〵おれは直に其銀の工面に行く。そんなら早う戻つてやと。いふ後から文治々々文治待て。と云ふは誰ぢや。詞イヤおれぢや借錢乞はるゝがいやさに見ぬ顔せうとは横着者。跡月の日切の銀。けさから足の棒になる程往ても。とかく内を外が濟。獵師町でロ利く車錢の南兵衞をよう蹴つぶしたなア。これは又南兵衞殿とも覺えぬ。不仕合せ呑込んで借して下さつた日切の銀。片時も早うと心はやたけ。ちつとも如才はヤアいふな〳〵。銀戻さぬが如才でないか。戻すあてが無かなぜ借つたと。地いがみかゝれば女房分入り。詞お前様のが皆尤も。今主のいはるゝ通り。下地の乾いた其上に稚兒が煩ひ。ヤアがつぼしめが病を言立て。又古手な泣言か。豆板程な涙をこぼして。了簡していぬ者もあらうが。此南兵衞なんぼでもいなぬ〳〵。サア今受取ろサア渡せと。地立催促に猶手をすり。詞イヤモ段々の間違ひ。佛の様な其許も腹が立たいで何とせう。どうぞ長うとは申すまいマア二三日。コリヤコリヤ女房どもあなたへお詫を。地お詫をと上手ごかしに脇道へ。フシ文治は其場をはづし行く。地南兵衞大きにむくりを煮やし。ヤア人にばかり息精張らし。はづさうとは横著者一寸もやらぬ待ちアがれ。ヤイ待ちをれとかけ出す袂にお谷は取付き。詞不躾ぢやと思召せばお腹の立つ筈。あの様にせかれますも。ちつと堪忍なされてどうぞ主の云はるゝ様に。なりと精出して早うお銀が上げたさ。詞エヽやかましいべり〳〵とようべる幻妻。よいわ。それ程にいふからは違ふ事もあるまい待つてやろ。其代銀受取るま

で。汝をおれが内へ連れていぬ。エ、それは。ハテ銀の代りに質に取る。サアうせアがれと 地引立て〳〵情容赦もあら磯の。浪間から又ぬつと。首ばつかりで窺ふ長太斯くと見るよりかけ上り。さうはさせぬと南兵衛が。両足かいてづでんどう。其間にお谷は引つぱづし逃げて行方はなかりけり。はふ〳〵の フシめに。起上り。詞テモ強い幻妻め。もう逃げをつたか。地どつちへうせたときよろ付く眼。ヤア投げをつたは汝ぢやな。銀の代りに捕へた奴なぜ逃がしたと。飛びかゝつて長太が弱腰中に提げ振廻し。詞エ、片手にも足ぬひばり骨締殺さうよりコレかうと。地ぐつと指上げ三段ばかり。遥の沖へざんぶと打込む白浪の。中からによつこりヤイ 詞南兵衛の阿呆よ。海士を浪へ投込んだは汝が手味噌。陸では汝に敵はねど。海の中では千人力。地手竝が見たくば此所へうせいといはれて南兵衛呆れ顔。潮の中から吹出し。詞へ、、、、ちつと怖かろがな。相手にはようなるまい。そこで緩りと業さらせと。地雑言悪口跡しら波。せんかた渚にちだんだ踏みエ、どんな。詞川童めは川へ放す。銀はえ取らず。地あたぶの悪いとふくれ頬。フシ白砂蹴ちらし立帰る。地夕日浪を洗へば漁の火かと疑はる。ハルフシまだ入相も。ギン遠浅の洲さきにあさる鶴の聲。コハリ窺ひ近寄る簑と笠。邊を見廻し手許を堅め。ナホス切つて放せば拳に手ごたへさしつたりと驅寄つて。詞脛根に着いたる金の札ふつつと捻切り押戴き。驅出す四方を五六人ソレ鶴殺しの曲者。遁すな括れと取卷く磯邊に幸ひの。舟へひらりと飛乗る早速。地陸には術も荒磯の浪を。押切り〳〵て行方。しらず 三重へ行末は。陸奥の フシ内にはあれど外が濱。

地國の果とて荒磯に。狩漁を業として。本フシ世を押渡る一村の。中にも善知鳥安方とて野山を家と狩りあるく。スエ内は女房のしほたらと。子の煩ひに打ちかゝり オクリ外には何も煎じやう常の如くに缺土瓶。折焼く柴のくすぼりに。フシしんきをもやすかせ世帯。地浦方の年行司用ありさうに門口から。詞文治内にゐやるかと 地ずつと入れば。是は年行司の庄右衛門様。詞ようこそお出で。連合はたつた今出られましてござります。地まあお上りと人愛も器量に連れて愛くろし。詞ム、御亭は留守か。さらば上つてそ様のお茶。其煮さつしやるを一ぷくたべうか。イエ〳〵こりや茶ではござんせぬ。こちの息子が傷寒でさん〴〵。それで藥煎じるのでござります。何ぢや小癇ぢや。そりや藥より赤蛙喰はさつしやれ。こちの坊主めは大癇で。様々の藥呑まし

ても直らず。そこで此庄右衛門様の思ひ付き。赤蛙十疋ばかり喰はしたればつい直つた。大かんでさへぢやに。小かんぐらゐなら四五疋喰はしたらつい直る。イヤそれはさうと。代官様からの廻り狀。御亭が留守ならこなた見て。奥にしつかり判さしやれと。地投出す一通手に取つて。御存じの通り私は文盲。御苦勞ながら讀んで聞かして下さりませ。詞ム丶ほんにこなたは無筆ぢやの。地アイ恥しながらと フシ赤らむ顔。詞何の夫が恥しい。娘子供が物書くと彼の思ひ〳〵べく候をやりかけをつて。自ら悪性になるというて。親々が敎へぬは。遠國の偏屈。其様に氣を付けても。見んごとはじける時分ははじけをつて 三下り 歌文はやりたし書いたり讀んだりめんどくさいいつそゐもりの黒焼のお藥なんどをふりかけて。此庄右衛門様の思付き。ハ丶丶丶。詞口叩かすとお觸狀。地讀んで聞かそと押披き。詞ム丶何ぢや一つとばかり跡は讀めぬ。高がかうぢや。此國の殿様八幡太郎様が。武運長久の爲ぢやというて。鎌倉とやらで鶴を千羽。金の札付けてお放しなされたげな。其鶴が今は此國にも徘徊する程に。必ず金の札の付いた鶴を取るなとある毎年のお觸。こりやいはいでも知つての事。聞かつしやれ此四五日以前に。岩城山の麓で。彼の金の札の付いた。鶴を殺した奴があるげな。法度を反いた科人。それで國中は厳しいお尋ね。殊に此浦は殺生人が多いによつて。格別に詮議が強い。若し殺した者があるなら。早速訴へに出い。訴人の者には。たとへ親兄弟。夫婦の中でも。其科を赦し。褒美として黄金十枚下されうとある事。これの御亭も殺生好ちやが。そんな覺えはないかやと。地念を入るればヲ丶つがもない。こちの人に限つて何のマアそんな事。必ず氣遣ひなされますな。詞ヲ丶そんならよござる。兎角町には事なかれぢや。ひよつと此村に鶴殺しがあると縛り上げて。京三界まで行かにやならぬ。それがいやさに念入れるは。此庄右衛門様の思ひ付。地おかた其内來ませうと。しやべり散らして フシ立歸る。お谷は藥。漸うと煎じ了うて枕許。屏風押明けコレ淸童。詞今朝から飯も湯もいかず。其様に喰はずに居ると。醫者殿が呵らしやる。此藥呑んでから。わが身の好の茶粥の中へ。餅入れて焚いた程に。梅干に添へて。地一口くややと母親の。詞に漸う枕を上げ。詞イヤ何にも喰ひたうない。コレ母様とゝ様はまだ戻らずか。地とゝが術ない〳〵と。敎ゆる胸より見る親の。胸を痛めて。フシ手を差入れ。詞ヲ丶術ないは道理々々。精出して藥呑んだり飯くふと。此痛みもつい

直ると。地そろ／＼胸を撫でさする。フシ心づかひの外面より。地外が濱の南兵衛とて。よつ程横へ太つた男。旅行李 フシ肩に引つかけ。地七八の亭主と思しき者。伴うてずつと入り。詞おかた來たぞや／＼。南兵衛が來たぞやと。地たまからぐわらつく フシ 雷聲。地ヲ、これ病人がある聲低にいはんせと。フシ枕屏風を押立つれば。詞何ぢや病人とは。ム、がりまか。なんの役に立たぬやつ。いつそてこねてしまやえいにと。地詞でたんなうさゝぬ氣と。知つてゐてもむつと顏。詞ヲ、南兵衛様何ぢやいな。また生先ある大事の息子。お前方のお世話にはなるまいし。構うて下さんすな。地エ、いま／＼しいと捻ぢむく姿。詞何と親方見事でござんすか。イヤモごんす所ぢやない。あれがさうなら結構な代物。そんなら道道話した通り。三年切つて金五兩。ヲ、出すとも／＼。合點なら打ちましよか。しやん／＼も 地指先でおのれ一人が フシ呑込み仕事。詞安い物ぢやぞえ。上方の相場なら。五十兩はぶら／＼。田舍だけで値打がない。コレおかた。大儀ながらいて貰はうかい。ム、いて貰はうかとはどこへ何しに。ハテ青森の町へ勤め奉公に。イヤコレ南兵衛殿。仇口はいつもの事と。聞流しにして居れば。付上つて出放題あた穢らはしい勤めとは。わしには善知鳥文治と云ふ。歷とした男があるぞや。ハ、、、、歷とした男かして。借つた銀をれつきと戻さぬ。もう催促も仕草臥れた。ぢやによつて汝を賣るのは。高が貸した銀取るのぢや。有難いと思うてきり／＼いきやいの。但しわしが引立てうかと。地無法無體をとくよりも。戻りかかつて立聞く文治。ずつとはいれば悦ぶ女房。詞よう戻つて下さんした。女子一人と侮つて。あの南兵衛がサアよいてや。何もかも聞いて居る。高が五兩か三兩の目腐金に。女房賣らいでも濟む事と。地落付く安方せき立つ南兵衛。詞イヤ厚いな／＼。わりや身上が厚いか知らぬが。我等ずんど薄うなつて。家主にはぽんまくられ。身上有限行李一貫。宿無しとなつたれば。貸した金取らにやならぬ。今というても銀はあるまい。サア親方。連立つていんで銀受取らうと。地お谷が腕引立つる。其手を取つてもぎ放し ソレ銀戻す受取れと。投出す金は金ながら。つひに見なれぬ金の札。ソレ其札は金細工。今潰しても三兩程の金目はある。マアそれなりと當座の質物。ヲ、金にさへなるものなら。受取つてやらうが。三兩ではまだ足らぬ。ホ、其不足も。暮合まででには急度濟まさう。ム、暮までなら間もない事。えいわ待つてやらうというて

もぽん無しなりや。いんで居る内がない。暮れるまで爰の内で居催促。コレ五助。大儀ぢやあつた休んで貰はう。ハイ〳〵そんならもうよござりますか。ヤレ〳〵親方の役もよつ程氣の張るもの。地さらばお暇申さうと フシ立出づれば。お谷は不審。あの傾城屋といふは。詞ヲヽ虚言(うそ)ぢやかうしてゆすらにや金にならぬ。何とようしたものか。ドレ奥へいて一寝入(ひとねいり)せう。ぽんまくられて昨日からつがず坊(ばう)。お方飯(かためし)が出來たら起して下はれ。雜作(ざふさ)ついでに酒も一杯。地のみ取眼(とりまなこ)のいがみ頬(づら) オクリ襖へ押明け奥に入る。フシ跡には思案。あり顔の。夫の傍(そば)に差寄つて。詞申しこちの人。今南兵衛にやらしやんしたはありやマア何でござんすと。地問ひかけられてイヤありや此間拾(ひろ)うて來たが。何の役に立たぬ物と思ひの外結構な金(こがね)の札。あすいる人參(にんじん)代にと思うたれどほんの寶は差合(さしあは)せ。ヲヽそんな物ならあいつにやらずと置いたがよい。今更いふに及ばねど清童の煩ひより。地夫婦が着替はいふに及ばず。諸道具までも賣拂ひ今日(けふ)迄續けた人參代。もうあすいる人參の代さへ人に渡して了(しま)ひ。何の力であの子の本復(ほんぷく)。見殺しにせうよりは。詞南兵衛がいうたを幸ひ。わしを勤めに賣つてやり其金で人參を。一分なりとたんと入れ。一日も地早うようして下さんせ。頼む〳〵といふ内も スヱ涙。呑込む曇り聲。詞アヽやくたいもない事いふ人。コレよう思うても見や。以前は鑓も持たせた身分。浪人したとて魂まで女房賣るほど穢れもせぬ。氣づかひ仕やんな人參代もとうから工面して置いたと。地ずつと立つて膳棚の。隅からおろす硯箱。緣(ふち)は缺けても放れても昔しみ込む墨の折(をれ)。ゆがまぬ武士の達筆に。フシさら〳〵と書認め。

詞コレお谷。大儀ながら此一通代官所まで持つていきや。アノ此書いた物を代官所へ持つていけとはえ。サア。夫(それ)を代官所へ持つて行(い)くと大分の金がくる。ムヽそりや又どうして。サア今戻る道で聞けば鶴を殺した者を訴人(そにん)すると褒美は黄金十枚との噂。其鶴を殺した者を。わしがよう知つてゐるによつてそれでわがみを訴人にやるのぢや。エイ。お前も日頃の氣に似合はぬ嗜ましやんせ。人の惡事(あくじ)を訴人して褒美に貰うた其金で。どんな藥を呑ましたとて何の利(き)かうぞ本復せうぞ。恐しい事工(たく)まずとも。地やつぱり私を勤奉公(つとめぼうこう)。親はなし兄弟持たずお前さへ合點なりや誰が點の打人(うちて)はない。聞分けて下さんせと縋り歎けばはてさて。詞役にも立たぬ事いはずと早ういきや。わしぢやとて人の命何の訴人がしたからう。けれども是ばかりは訴人しても大事な

い奴。ムヽ大事ないとはそりやまあどこの。イヤ外ではない奥に居るあの南兵衛。エイ。すりやあの南兵衛が。シイ。聲が高い。ほんのこれが厄病の神で敵とやら。ヲヽあいつなら少々こちから金出してなと訴人のしたい悪者。そんならわしは一走いてくる程に。どこもかもようしめて。取逃さぬ様に 地 して置かしやんせと ギン 小づま引上げいそ〳〵と。ハズミ フシ 代官所へと急ぎ行く。ヘルフシ 夫は奥に氣をくばり。そろ〳〵ひらく佛壇の。長地 佛の箔の光さへ薄き樒の花抹香撞木取出したゝき鉦。なまいだ〳〵〳〵 フシ 聲も幽に。詞 と〻様やか〻様はどこにぢや。こゝが術ない〳〵と。地 苦しむ聲に鉦打止め。詞 ヲヽと〻は爰にゐる。嗅もおつ付け戻るが薬でも呑みたいか。イヤ〳〵薬はいやぢや。コレと〻様必ずどこへもいて下さんなや。お前が留守ならおりや淋しい。

ヲヽ氣づかひすなどつこへもいきやせぬ。地 〳〵と口にはいへど心には鶴を殺した科故に今縛られて行くとも知らず。我を慕ふ志。可愛の者やいぢらしやと思へば胸も。張りさける フシ 涙。隠してコリヤ清堂。詞 と〻はどこへもいきやせねどな。もし用が有つて代官所から呼びに來ると行かにやならぬ。其時必ず泣くなよ。どうぞ早うまめになつてな。と〻が今看經するは大事のお主。其主の名を覺えて大きう成るまで忘れなよと。地 又佛壇に指向ひ。なむ。俗名安倍の大夫頼時公。詞 家臣鳥海の前司安秀が一子。同苗文治安方。今生にての回向の仕納め。南無阿彌陀佛。〳〵。ア、此殿未だ在世の時は。斯く申す我々まで倶に榮花に誇りしが。地 いかなれば御武運拙く。八幡太郎義家が計略の矢先にかゝり。世を去り給ひし其月日は。詞 ヲヽ卽ち。今月今日

が父頼時の十三回忌。法名大了院殿喜山大居士。出離生死頓證菩提と。地 唱ふる聲に立寄つて。障子開けば南兵衛が。姿は素袍立烏帽子一つの位牌を上座に直し。合掌したる有様は興さめてこそ見えにけれ。地 文治は不思議の膝立直し。詞 頼時公を父上とは心得ぬ今の詞。仔細いかゞと尋ぬれば。ヲヽ不審尤も。合戰の砌まではまだ部屋住の其方。我が面体を見知らぬは理至極。鳥海の。城郭にて人となりし。安倍の三郎宗任と。地 聞くより安方ハヽヽはつと飛びしさり。頭を垂れて平伏す。宗任素袍の威儀繕ひ。只今も申す如く。今日父が忌日に當れば。詞 平人の形で回向申すも云ひがひなく。暫く昔に立歸る我が心は。これより直に都に上り。折を待つて父が仇。八幡太郎義家を討取らんず軍の門出。ハア御尤もなる御思立。猶も御心勵ます一條。地 御父安倍

の頼時公。栗坂の合戰に。討死ありし其時は。詞ホヽ兄貞任と諸共に。衣川の城内にて。軍の次第逐一に申上げしは我が父前司安秀。地其身も深手老の身の。栗坂より引返し。詞ノリ軍難儀に見え候。早く此城落ち給へ早やとく／＼と。地勸むる月日はいかなる惡日。天喜五年九月五日。ホヽ其光陰も三つ羽の征矢。詞流矢來つて我が父の。綿上のはづれより骨を碎いてむづと立つ。地急所の痛手に勇氣もくじけ。遂に其傷で果て給ふ。大將死すれば家の子郎等。親兄弟散々に妻に別れ子をふり捨て。兄貞任の行方まで。しら浪寄する。浦々島々はや。義家が領地となれば。廣い世界に此體。置所さへなつ木立。木にも萱にも油斷せぬ身となり果つる其無念。腦を貫き腸を斷つといへども。へエヽ時來らねば十三年。仇に戴く天の咎腎石となつて五體を碎く父の怨。追付け討つて尊靈へ手向の追福仕らんと。初めて明す南兵衛が。氏も系圖も陸奥に竝ぶ方なき。フシ勇氣の大將。詞ハアヽ遖なる御心底其御物語が直に追善喜山大居士安樂國南無阿彌陀佛と地回向の中。表へ誰か人音に先づ暫くと間の襖。さし心得て待つ所へ。斯くとも知らず女房は。褒美の金に氣も勇み。フシ心も足もいそ／＼と。詞サア／＼お金貰うて來た。代官樣のおつしやるには。追付け捕手を遣はす程に。先へいんで取逃さぬ樣にせいとの云付。もう此處へ見えるであろ。南兵衛は逃げはせぬか。かういふ中も油斷がならぬ。早う來て。ちやつと縛つて下されいでと地見やる表へ捕手の大勢。門口より大音上げ。詞ノリ岩城山の麓に於て鶴を殺せし大罪人は。此家の主善知鳥安方と。女房が訴人によつて召捕に向うたり。サア尋常に繩かゝれと。地呼ばはる聲に文治安方。詞顯はれし上は隱すに詮なし。お尋ねの鶴殺し繩かけて引かれよと。地夫の覺悟にお谷が恟り。詞コレそりやマア何をいふのぢやいの。鶴殺しは奥にゐるヲヽ南兵衛というたは僞り。そちを訴人にやらうばかり。岩城山の麓にて鶴を殺し。金の札を取つたるは此安方。エイ。すりや今私が持つていた訴狀にも。ヲヽ自分の科を自分の白狀。そんなら私が無筆故それでだましてやつたのぢやの。ハアはつとばかりに。フシ伏轉び途方。涙にくれけるが。地ア、扨も／＼世の中に。物書かぬ身の上程つらい悲しいものあらうか。連添ふ男の身の科を書き記した物とも知らず。悦び勇み代官所へ持つていたは何事ぞ。せめていろはを讀む程なりと此目が明いてあるならば。何の行からぞ。無筆と知つてかういふ使に。詞やつたはわしを世の人の。物書かぬ身の見せしめ

になれといふのか文治殿。地そりやあんまり胴慾なむごい難面い心やとスヱ正體。涙に伏し沈む。地夫も不便の涙を拂ひ。詞ホヽ其恨みも尤もながら。何事も定まる業と諦めて。清童を隨分大事にナ。彼の人へ頼み置く事これまで〱。サア縄かけて引かれよと。詞に猶豫も捕手の役人。ヲヽ神妙なりと立寄つて。かくる縄目に取り付いてお谷が泣聲清童が。屏風力に延び上り。詞アレとゝ様が縛られてぢや。詫言して下されと。地いふ聲倶に屏風もばつたり落入る我が子。詞ヤアこれ清童が死ぬわいの。コレなうこれと地うろつく女房。縄付ながら夫もうろ〱。詞コリヤ清童。必ず死んでくれなよ。われを助けうばつかりに此父が命を捨つる。コリヤ氣を付けよ清童。清童やい清童いのと地呼べど。叫べど息絶えて。其かひ更に泣倒れ。けふは如何なる日なるぞや。

我が子に離れ夫に別れ。一人殘つてそもやそもあられうものか淺ましやと。妻が歎けば夫は猶。涙にむせぶ聲を上げ。詞四百四病の煩ひより貧程つらいものがあらうか。我が子に呑ます人參の價にせんと鶴を擊ち。其鶴故に我が命取らるゝのみか子も死ぬる。思へば是まで多くの殺生。數多の鳥を殺す中にもまだ巣離もせぬ小鳥を。育てん爲に親鳥の野山におりて餌を尋ぬる。それとも知らず親鳥を殺せば殘りし子鳥も死ぬる。まづ其如く我我も子を助けんとて此親が。死ぬれば殘りし子も死ぬるは歷然報ふ因果の道理。親故不便な死をさすか。堪へてくれ赦してくれ。父も追付け行く程に。六道の辻で必ず待つて居てくれよと。地後や枕に取付いて。夫婦は前後フシ正體も取亂。したるばかりなり。地捕手は哀よそ目に見なし。詞ヤア未練の歎きに時移ると。

地立寄つて引立つれば。是非も縄目に恥ぢしめられ。フシしを〱として立上る。コレなう暫しと女房が。寄るを突退け縋るを拂ひ。前後嚴しく取りまく人數。詞ヤアお役人先づ待つた。鶴殺しの科人は是に在り人違ばしせらるゝなと。地聲をかけて南兵衛が一間を出づれば捕手の頭。詞ヤア自分の白狀によつて縄かけし善知鳥安方。其外の科人とは紛はしき胡亂者。但し鶴を殺したる證據あつてか何と〱。ヲヽ證據は則ちこれ爰にと。地投出したる金の札。詞鶴が岡の神前に於て。八幡太郎是を放つと彫り付けし金の札。その札を所持するからは紛れもない鶴殺し。科ない者を縛らずとも縄といて某を。早く都へ引かれよと。地思ひがけなき一言を。聞くより文治氣を苛ち。詞ヤアいはれぬ我を庇ひ立。證據があらうがあるまいが科人は此文治。イヤサ證據

が有れば鶴殺しは此南兵衛。イヤ某と。地争ふ二人を制する捕手。詞慥なる證據有れば科人は南兵衛に極る。此上は善知鳥が縛。地はやとく／＼と南兵衛に。かけ替つたる縛り縄。地ヤアいつまでも此文治家來の代りに御主人と。いふを打消しコリャ／＼。詞鶴殺しとなつて都へ引かれ。八幡太郎に見參せばそれこそ日頃の願成就。ナ。地合點かと目まぜにはつと心付き。詞すりや御所存有つてホヽ。會稽は今此時。イヤ／＼それは無用の振舞。たとへ再會の期はあるとも身動きならぬ其縛。何の是しき。たとへ鐵の鎖を以て繋ぐとも。我が爲には藁しべ同然。一念頭にとゞまつて本意を遂げし眉間尺。口に劍は含まずとも。一心の寢刃を合さば何條事のあるべきぞ。地ナ心得たるか安方と。身を鐵石に固めたる詞に善知鳥も詮方なく。詞たとへ縄目は助つても。存命ならずと肌くつろげ。山刀拔放せば。こはそもいかゞと止むる女房。南兵衞聲かけヤア何故の切腹。詞仔細ばしあつての事かと問ひかけられて。フシ涙を流し。詞今は何をか包み申さん。只今死せし悴と申すは我々夫婦が子にあらず。三代相思の御主人より預りし大事の和子。御大病の介抱も心に任せぬ身貧の某。此後主人にめぐり逢はゞ何と言譯有るべきぞ。地只切腹を御容赦とおつ取る刀踏落し。詞ヤアうろたへたるたはけ者。たとへ我が兄。ナそれわれが兄の子。名は千代童子といふにもせよ定まる命は力及ばぬ。一人にても味方を招く今此時。犬死して忠義になるか。スリヤ死ぬるにも死なれぬ命。ヲヽまさかの時まで汝に預ける。いざお役人御苦勞ながらと。地勇む縄付しをるゝ善知鳥。妻は泣く／＼野邊送り。何營みも亡骸は。子で子にあらぬ郭公。泣く聲をはつて血を吐く鳥親も。傍にて血の涙。ふらせばお谷がすが簑や。タヽキカヽリ死骸を覆ふ。フシ隱れ笠隱れあらざる弓取の。其御胤ともお主ともいふにいはれぬ苦しさは。鴛鴦を殺せし科やらん。善知鳥は却つて生殘り我は擒となつたるも敵を欺く氣の大鳥。追付け天下に羽うつ鳥。數々鳥の報いを爰に。陸奥の外が濱なる善知鳥の宮。安方町と名も高き古跡は。今に殘りける

第三

歌念仏さればにや少將は。百夜通へとゆふ闇の。笠にふる雪つもる雪戀の。重荷朱雀道。七條堤の假橋に。ナホス フシ盲女の彈語り。襤褸の中の秘藏娘。十ばかりなが手を出して。右や左の道通り。サハリ西は九州薩摩潟鬼界が島の果までも。わしや行く氣ぢやにさりとては。花の都に

袖乞とスヱなりて住むこそ。フシ是非なけれ。地王城の地は物貰ひも襤褸さつぱりフシ月代天窓。詞どうぢや盲のお袖。よい貰ひがあるさうなの。ヲ、かさの次郎殿か。今夜は闇で人通りは少なし。北風は吹付ける手がはぢかんで。三味線も彈かれるこつちやない。何を贅らしい。寒の中に涼むのがわがみの渡世ぢやないかいの。がりまは居睡やせんかよ。商賣に凡な奴ではある。ヲ、イどいつぢや。ム、とんとこの九助今仕舞うたか。儲けるな〳〵。イヤ〳〵。とんとこも初手は取つたもんぢやが。先繰に新物が出てとんと衰微。もう今は町中がお長めに喰付き切つた。まだどういうても角を絶さぬ奴は佐野の源左衛門。あいつは株ぢや。したがわりや。よい儲けがあるかして。見りや立派な蓙をかぶつて。派手な形するな。アヘ、。いやもうこいつも冷たうて惡い物やい。ほんの見てくれはつかりぢやわい。色取るな〳〵。ホ、、、。ほんにそれも一盛。此方は此子一人が樂しみ。去年までは相應に一重の物でも縫うて着せたが。此春から内障になり。俄盲で。娘に介抱受ける身の上。行先を思ひ廻せば夜の目も合はず。今日はお君が誕生日。こんな中でも大事の身祝ひ。こな樣方にも祝うて貰をと。酒も小屋に買うて置いた。したがあの六殿にはさたなしぢやぞや。ヲ、あいつに呑ましたら一升や二升はついころりと。地人事いはゞ莚まで。呑上げる非人の六。諸方の溜に目は据りふくり返つた腹立上戸。詞けたいぢやぞ幻妻の傍にべら〳〵とおけよ。又六めはえらう引いてうせたな。あいつはえい得意を持ちをつて濱脇の料理茶屋で。酒肴の喰飽しをる。サ、それがけたいぢや。おりや業がわいてならんわい。けふも川作の屋敷振舞喰て來たが。惣體近年茶屋方の料理が粋過ぎておれが口に合はぬ。それで腹が立つが無理か。そいで大道掃けの犬追へのと。下男か何ぞの樣につかひくさる。これではもう乞食もやめにやならぬ。コリヤお君よ。をぢが風車買うてやろがえらいか。おりやもうわれが可愛いて〳〵腹が立つわい。ヲ、もうこちの娘が可愛いのが何の腹の立つ事で。腹が立たいぢや。コレおめく。一體おりやわがみの器量のえいのが腹が立つ。乞食だてらそんな美しい顏が。どこにあるものぢや。無理か。無理ならどいつでも相手ぢやと。地くだまく聲もフシ酒くさ原。地踏分け來る瓜割四郎。ソレ。今のお侍樣ハアと二人が。犬蹲ひ。詞非人共か最前言つた生駒之助。傾成戀絹取逃したか。何と〳〵。サア申し。畫ちよつと頭張りましたれど。先もざぶなりや滅相にはか丶ら

れず。ヤ幸ひ爰におる六といふやつは酒くらふと阿呆力。こいつに仕事さしませう。コリヤ六よこゝへこい。又粗略な臑投出して辭儀しをれやい。いやぢやおりや茶屋の料理人より外に腰屈めた事がない。イヤサよう聞け。其二人のやつおいらが往てぐづりかけて爰へおこすは。われが爰に待伏して居て。男めをぶちのめす。そこで幻妻をあなたへ渡すと。御褒美にきすは存分。あなたの振舞呑込んだか。ムヽ酒呑ますか。噓ぢやないかよ。コレ殿樣。そんならマア酒の方を先へせうかい。イヤ〱〱。あの上呑ますと本たはいになります。ヲヽサコリヤ六とやら。仕畢せた跡では呑喰ひはわが望み次第。酒は伊丹の薦かぶりヲツト差合言ひはるな。ムヽこりや麁相。肴は鰒汁。それも差合。鰒はおれが同行中ぢやと。地横にふくれた腹鼓 フシ咽をならして別れ行く。地もう人通りもなささうな。仕舞うて休もサアお君と。タヽキ親子かたへの小屋の中。鳥の ナホス フシふしどと隣同士。露を荷ひし。ギン乘物釣らせ。源家の妹八重幡姫。こなたの土手を眞直に。平傔杖直方互に。行き合ふ提燈の紋に見知りの一家中。詞是は〱八重幡殿夜中に何國へ。ちと心願の事あつて。ムヽ神詣か。徒歩づから殊勝々々と フシ挨拶半ば。地生駒之助は戀絹が手を引き漸う火影を目宛。狼藉者に出合ひ難儀致す。憚りながら此女を。暫しが間お預りと。地差出す提燈ハツト恟り迯行くを。傔杖目早くコリヤ〱若者。詞わりや道に迷うたな。此處は京京中が暗いから。人の誠の本海道は行かずして。色々の道に迷うて居るな。ソレ火を借つてとつくりと。心の闇を見たり見せたり。身どもは老人猶以て何にも見えぬ。よし見えても。八重幡殿とは一家の中。急ぎの用事早や參ると外す老巧 地粹親仁。妼下部さし心得。一人も殘らず フシばら〱と。地氣を通されても濟まぬ中。わざと慇懃三つ指に。詞先づ以て姫君樣。御安泰の尊顏を拜し恐悅至極と相述ぶる。地ヲヽさういひやるは無理ならず。詞したがもう其樣に氣を置いて下さんな。わしやふつつりと思ひ諦め心の髮は切つて居る。ハテ思ひ合つた中を引分け添うて何の本望。殊に兄上のお媒遊した戀絹殿。中よう添うて其代り。地未來の緣を。詞コレどうぞ賴みまする夫婦の衆と。思ひ切つては中々に見向もやらぬ。フシ心根に。地戀絹も恥入つて。詞勿體ない〱。それを聞いては私が方から。思ひ切るとも申されぬは。地ひよんな物を身にやどし。退くにも退かれぬ惡緣。詞そんなら御詞にあまえて。お大事の物なれど此世は私が借分。來世では

きつとお返し申しまする其證據。ちよつと爰で御祝言のお盃がさせましたいが。地ア、どうがなと案ずれば。詞そのお盃私が差上げましよと。フシ小屋の簾を。押上げて。オクリさぐる。目病の フシすり足に。緣も缺けたる三寶土器。長地襤褸の上の裲襠はやれても昔ゆかしげに。詞どなたかは存じませぬが。最前から御尤もなせつない戀のお咄。私も仔細あつて夫に飽かぬ別れをせし者。身に引當てゝおいとしぼく。襤褸の袖を絞りしぞや。詞かやうに申さば賤しいきたない非人めが。穢らはしいとも思さうが。私とてもまんざら。前からかうした身でもござりませぬ。今日は此ちひさいやつが誕生日。昔を思ひ出して調へし九獻熨斗昆布。心ばかりの身祝ひ。地幸ひの折からと慮外を忘れたお媒。サアお君教へて置いた祝言の長柄 地お酌申しやと挨拶に。姫君嬉しく盃の。底意晴れたる取結び。さいつさゝれつ酌みかはす。地待伏したる非人の六。酒の匂ひをかぐよりも。以前の仕込は忘れて仕舞ひ。ほや／＼笑顔もみ手して。詞へ、、、、ホ、、、、お目出たい御祝言。私もお取持にちつとお間。地お酌これへとかけ茶碗。息なしに咽ごく／＼。ホウ。詞結構なお酒でござりまする。ハ、、、、。旦那慮外申しまする。肴は爰に有山の。地面桶の底から鮹の足。詞イヤ過分なが身は精進。そんなら私祝うても一つ下さりましよ。お家樣。上げましよか。おいやか。そんならも一つ下さりましよ。御寮人樣もおいやか。そんなら我等も一つと フシほつとする程續け呑み。地戀絹が代つてお酌イヤ／＼申し。詞見苦しくともやつぱりあれに。娘が生長あなた方にあやかり。よい殿御持つて祝言をホ、、、。わたしとしたことが。非人乞食の身の上で。何の祝言どころと嘸お笑ひなされう。思へば／＼淺ましい身の上。ハ是はしたり。大事の目出たい御祝言につい涙が。私も祝うて謠君は千代ませ／＼と。ナホスくり言を祝ひ歌の。フシ面白の時代や。詞おめでたや／＼。祝ふにつけて我が娘も。昔の身ならお乳めのと。地續松十炷香藝づくし敎へも覺えもせうものを。ろくな事でも敎へるか。橋の上の乞食の娘。詞誰が嫁にも取つてくれう。地侍の胤を受けながら。町人百姓にも緣付の。ならぬは何のフシ報いぞと昔を。忍ぶ悔泣。地身につまされて フシ三人も いとしや道理と倶涙。地六も數獻の持ちこしに。貰ひ涙のかい作り。詞どうやら酒が理に入つて。おれも悲しい。地／＼としやくり上げたる折からに。かけ來る次郎七九助。コリヤ／＼六何して居る。きり／＼しかけて

畳んでしまへ。後詰にはおいらがゐる早う〳〵とせり立つれば。地泣いじやくり。詞次郎七か九助か。エヽわいらはえい機嫌ぢやな。おりやさつきにから哀れな咄を聞いて。泣いてばつかり居るわいやい。わいらもアレ。あなた方の形を見い。雛様のやうなお姫様が酒買ふ銭がないやら。乞食に酒を振舞はれ。せめて天目でもある事か。嚙み割る様な盃に。酒ならたつた一升であやまつてござる心根が。思ひやられておいとしいど フシ涙と。倶に又どぶ〳〵。詞エヽいま〳〵しい又喰うたな。地其酒こちへとたくりにかゝればイヤ〳〵。詞それから御覽じませう。どなたでもどいつでも。旦那衆に手向ふやつらおれが相手。コ フシ尻引つからげ圍うたり。詞どつこいやらぬは乞食に差合。貰うてこませと兩方から。地取付く襤褸の破れかぶれ。うぬらは世界の餘り物。命の高はげんこ取り。ころ〳〵轉び迯行くを キホヒ フシ酒に任せて追うて行く。地向ふに數多の人音は申し〳〵。詞今の侍が來るので有らう。ちつとの間私が小屋へと ヲクリ 二人を伴ひ入る間もなく。血眼になつて瓜割四郎。どつちへうせたと フシ家來もしどろ。地しばし〳〵と傔仗直方。詞コレサ四郎惶しい面色。先づ何を詮議めさるゝと。地尋ねられて。詞イヤ。何其儀は。貴公も此程御吟味なさるゝ。宮を奪ひし曲者。草を分つて詮議せよと主人が云付け。ヤ姫君もこれにお渡り。此小屋が物くさいソレ家來どもナイ〳〵〳〵。非人め出ませい出をらうと。地呼ばれておづ〳〵。フシ這出づる。詞つゝと出をらう。ハイ。まだ出をらう。ハイ。頬上げいと 地突付ける。箱提燈の火明りは。老眼にも見違へぬ。絕えて久しき我が娘。ハツ〳〵とばかりフシ仰天。ながら聲をくろめ。詞ムヽ此小屋の非人は汝か。ハテ非人ぢやよな汝もよもや腹からの乞食とも見えぬ。町人か但しは武士の娘か。ハイ。御推量の通り成下つたは若氣の誤り。淸水詣の折から。東國方の浪人と不圖馴初め胤を宿して是非なき家出。其夫にもあふぎの別れ。ホイ。はてな。ヤアくど〳〵云ふ手間で。うぬが親夫の名をぬかせ。ハイ。それはつかりはどうもなぜ〳〵。名を申すほど不孝の上塗。此身こそかう成つたれ。親の名は出すまいと。晝は袖乞も得致さぬは。せめてもの申譯。ヲヽ尤もさうあらう。今の其心底を。誠の親が聞くならばと 地我が名は言はぬけんじやう向き。千々にフシ心ぞこもりける。詞ヤアいよ〳〵以て胡亂者。まだ隱してあるやつがあらう。直に詮議と 地立寄る鐺しつかと取つてお待ちやれ四郎。詞宮を奪ひしやつの詮議お身は頼

まぬ身どもがする。横合からいつかい世話。但し老人で斯樣の吟味も得せまいと思うてか推參。至極ときめ付けられ。アヽこれ〱〱眞平御赦免。いやもう拙者も御一門の家來なれば。只今のは御心安だて。イヤ姫君にもゝうお立ちお供廻りはどつちへうせた フシ參れ〱と脇道へ。詞ホンニそれ〱自らも。夜の更けぬ内歸るがよかろ。此間にちやつと 地行くがよかろと知らせの謎。フシお袖が小屋の後から。押しやる主從妹脊の別れ。親子の別れは子は知らで親の フシ思ひの闇深き。地傔仗が郞等あわたゞしく。詞只今大江維時公より。宮の御詮議何故に遲なはる。日延の時刻も一日に迫る。尋ね出すか切腹あるか二つ一つの御返事あるべしとの御事なり。ナニ維時が使とな。直に逢ひて返答せん。供せよ彌惣太。提燈持てと コハリゆふ嵐。ナホス地鐘もときつく八重幡姬。詞傔仗樣の一大事。アヽ氣遣はしや。家來ども乘物參れと。フシ呼ばはる聲。地お袖が聞付け申し〱。詞傔仗樣とは平傔仗。直方樣ではござりませぬか。イヤそれ聞いて何にする。ヤア。そんなら今のが。コレ申し。一大事。とは何の譯。ちよつと聞かしてヤア面倒なと突飛ばし。地乘物急げと四郞が逸散。慈悲も。しら砂ころ〱〱。ころぶ蘆邊の濱千鳥 フシ嵐に髮もばら〱〱。親子手を取り雪の足跡を。慕うて 三重へ辿り行く。地心の内こそ哀れなれ。平傔仗直方。環の宮の御行方知らぬ筑紫のほとゝぎす。夏去り冬のいつしかに。スヱテ既に今年の日の數も。本フシ春待つばかり枯殘り。地枯果つる庭の檜皮ぶき落葉の軒と葺變へて。長地殿守の女中仕丁もなく。老の忠義の一筋に。竹の園生の傅も。つもる白髮に雪折れて オクリ妻の濱ゆふ只二人

詞夫婦の人なん。フシいまそかりける。地緣先に立出で。詞なう殿。お年寄の雪降りに。庭へ出て何なさるゝ。寒氣が入らうにもうおはいり。地ちと火にお寄りと切炭の尉になるまで。フシ女夫合。サレバ〱。宮樣行方なくなり給へば。此御所は明屋敷。我々夫婦が斯樣に御番は致せども。肝心の主なければ。玉の御殿も鳥の塒と成果て。地今日なども宮おはしますならば。仕丁共に木の葉の雪を拂はせて。御遊びなされうものをと。ふと思ひ出して子供の眞似する雪なぶり。詞天地の中にさへましまさば。奪ひ返して此恥辱雪がんものと。心は雲にも入りたれど。地都の中を身動きならねば。空しく胸を煎るばかり。詞不便な娘敷妙。日本の智者と呼ばるゝ。八幡殿に連添ひながら。不覺を取つた此親故。夫の手前も恥しく。地嘸肩身がすぼらうとそも此春よ

り一夜さも。實に寢た夜はおぢやらぬとフシ奥齒。もれくるまばら聲。詞アヽよござりますわいの。弓取の不覺といふは軍の中の臆病。こりやほんの災難。敷妙が事仰しやるに付けて。思ひ出すは姉娘の袖萩。親にも知らさず忍び男を拵へての家出。憎い奴と思うたも早や一昔。地其時はまだ十六の跡先なし。年もいたれば嘸今頃は。悔しう思うてゐるであろ。どこにうろたへて居る事ぞ。詞エヽ、又姉めが事ぐど／＼と。思ひ出すも穢はしい。不孝者といはうか。武士の家の不義放埓。再び頬も見まじと思ひしに。まだ業が滿てぬやら。地朱雀堤の橋の上で。詞エヽ橋の上で何としたえ。サアいや何ともせぬ。たとへ橋の上で。のたれ死しをらうが。不便なとも思はぬ。お身は又何とぞ思ふ氣か。イヽエ。何とも存じませぬ。ヲヽ身どもは結局。心地よく思ふわい

と。地口は憎てい身を背け物事包まぬ夫婦中涙。フシ一つは隱し合ふ。地腰元どもが取次の間。敷妙樣御出と。フシ娘ながらも案内は。武家の行儀の表門さすが親子の フシ中座敷。詞ヲヽ此頃は便もなし。心地でも惡しいかと傔仗殿も案じてぢやに。ようおぢやつたサア／＼爰へ。テモ美しう髮結やつたと地子供の樣に。フシ 思ふは母。詞イヤ申し。今日參つたはお見舞ではない。傔仗樣へ。夫八幡太郎義家が使者でござります。ムヽ。ハテ變つた。表向の用事ならば家來は越さで。そなたを使者とはコレ／＼奥だまりやれ。何にもせよ使者とあれば。娘は内證。いざ御使者。御口上の趣 フシ承はらんとありければ。義家申越す仔細。環の宮お行方なき事。御傅の傔仗殿誤り據なし。日延の日數も今日限り。若しも言譯なきに於ては。罪を糺す義家が役。聟

舅の容赦は致さず。勅諚を以て取圍み。敵味方となり申さん。其時必ず遺恨にばし思されな。其爲申し遣はす。使者の口上あら／＼地斯くの通りでござんすと語る中より傔仗直方。いそ／＼立つて一間の内。柳箱に飾つたる旗と思しく携へ出で。詞扨々八幡殿は天晴仁ある大將かな。元來某は平家。八幡殿は源氏。聟舅となるは稀なる事と。そちを嫁らした其時より。聟引出に赤旗一流遣はし。八幡殿より此白旗一流。取換て所持せしは。兩家合體の其印。地此度の我が誤りに就いては言ひがひなき舅。よしなき緣を組みしよと思はれんは必定。大方娘と緣切つて。此旗を取戻しに來るであらう。若し去られたら其思ひはいかばかり詞どうぞ此白旗のやはり此家に止る樣にと。此頃神前に飾り置き毎日祈るかひあつて。今日娘を表向の使者として。差越されし八

幡殿の心底。たとへ聟舅。敵味方になるとても。敷妙は去らぬとある情の謎。地老人が心を察し心遣ひの御親切。逢うて禮も言はれぬ義理。詞お使者歸つて申されうは。仰せ越さるゝ趣一々承知仕る。委細の心底は對面の上申聞けん。お出を待つと傳へられよ。お使者大儀と 地式禮も弓矢の面裏門口。詞八幡太郎參上と 地白衣ながらに入り給へば。コハいつの間にと敷妙も不審立ちそに立つ母親。此頃絶えし一家の參會 フシお茶よお菓子と賑賑し。地直方邊に目をくばり。懐中より一通取出し。詞親しい中にも胸中を量りかね。今日までは聟殿にも包みしが。宮の御行方尋ぬべき。手がかりといふは此狀。契約の如く環の宮を密に盗出しくれよと。匣の内侍へ賴みの文體。名は誰ともなけれども。必定安倍の賴時が餘類。貞任宗任兄弟の族。奪取つて儕等が味方を集むる柱にせん爲。さあれば御命に別條なしと。心の安堵はしながらも。地言譯立たぬ身の越度。我が心を推量あれ。詞ホヽウさそこ〳〵。我が推察もその如く。此程奥州より捕へ來る鶴殺しの科人。面魂尋常ならず。肩口に二つの痣。これぞ兼て聞及ぶ目印。疑ひもなく安倍宗任一人は手に入れしが。今一人の兄貞任。此兩人さへ捕へなば宮の行方明白たらんと。則ち彼の宗任を此館へ引かせ來る。地禁廷の御沙汰なき中に。詮議肝要たるべしと力を フシ付くる時しもあれ。詞桂中納言樣御出なりと知らすれば。ソレ氣遣ひ私の内意か勅諚か。女儀は次へと改むる。地座席に心殘れども フシ母と娘は立つて行く。地中納言敎氏卿衣冠の袂に薫りくる。フシ雪より出でて雪より白き白梅一枝。フシ小四方に取乘せ持參あり。詞傔仗には此間。公の御不審蒙り嘸心を痛められん。鬱氣を晴す此梅。まだ冬籠りの枝ながら進上申す。地此花と諸共喜悦の眉を開かれよと直方が前に差出し。詞義家朝臣のおはするも彼の詮議の一條ならん。殊更親しき一家の中御心底察し入る。地コハ卿の御詞とも覺えず。詞一家は一家政道に依怙なき義家詮議の手がかりになるべき科人。先達て捕へ置く。ヤア〳〵義家が家來ども。鶴殺しをこれへ引けと。地呼ばはり給ふ一聲に鶴の科人出でをらうと。權威の下部は蠅蟲と見下し。破布子の繩付ながら。眼中威勢備はつて。實に大將と大將の。フシ見參とこそ見えにけれ。詞鶴を擊つたる科人。外が濱の南兵衛とは假の名。奥州の住人。安倍の賴時が次男宗任とも いはるゝ勇士。それ程のへろ〳〵の繩引切るは易かるべきに。わざと下部に引出さるゝは。義家に鬱憤を言はんず爲な。聞いて得さ

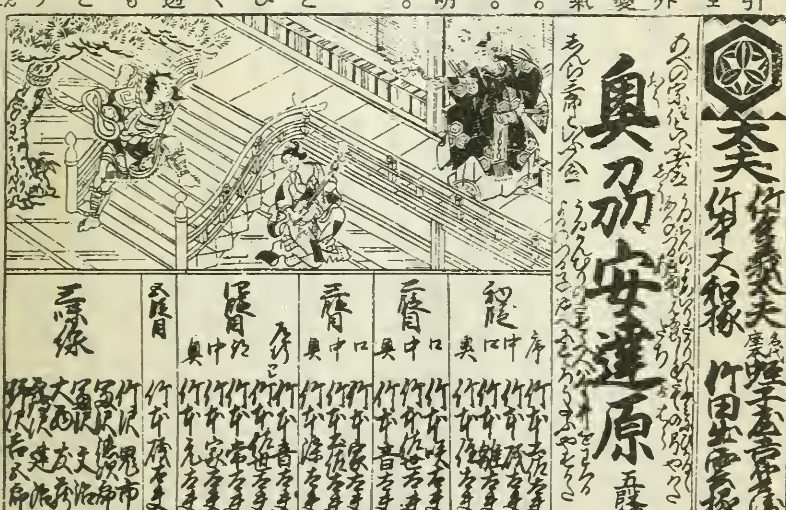
せん。サア何と語れ。フシいかにとの給へば。詞是は又思ひがけもない。そんなむづかしい名は生れてから聞いた事もござりませぬ。博奕打の南兵衛に違ひなければ固よりお前様に勿體ない。鬱憤とやら一分とやら。半錢もかけ値は申しませぬ。兎角命が惜しいばつかり。どうぞお慈悲に繩解いて。お助けなされて地下さりませと泣かぬフシばかりのしら〳〵しさ。詞ム、然らば汝産の匹夫下郞に違ひないな。コリヤ此旗を見知つてをるか。是こそ我が父伊豫守。奧州追伐の折から。押立て給ひし白旗。其時宗任が親安倍賴時。大將目がけ放ちし矢先。狙ひはづれて此旗に受けとめ。即時に踏折り捨てられし。其矢の根はコレ此所に。ハヽヽヽハ。賴時づれが拙き運にて。源氏に敵對叶はぬ事。今にも其餘類あらば却つて敵の此矢を以て。斯くの通りと丁ど打つ。

地鏃は庭の手水鉢じろりと見やつてこれは扨。あぶない事をと。フシそらさぬ顏。地敎氏卿進出で。詞よし手練はともあれたとへ眞の宗任なりとも。匹夫下郞に等しき男。大望の企て思ひもよらず。奧州の果に生れ。草木の名も知らぬ鹿猿同然の族。地かくいふが無念ならばコレこの花の名を知つつるかと。白梅取つて差出し。詞東夷の目にはよも知るまじ。知つたならば地いうて見よやとフシ嘲弄ある。地宗任ぐつとせき上げ。詞南兵衛といふ下郞でござれば。花の名はいかにも存ぜぬ。併し。さうおつしやる敎氏卿も。以前は流し者に逢うて配所の島守。漸う此頃召還され。冠裝束かけたればとて。正眞の山猿の冠。相手になる口は持たぬ。身が返答はコレかうと。地傍に立つたる件の矢の根口に銜へて我と我が。肩口つんざく血汐の紅。何かはあやも白旗に鏃の

筆のさら〳〵と。文字鮮かに染めなすは。東夷の名にも似ぬ三十一文字の言の葉に。座もしら梅の枝折りて。冠傾き。見えけるが。詞ム、詞爭ひ無益しと。和歌を以ての返答。我が國の梅の花とは見たれども。大宮人は如何いふらん。地面白し〳〵。我に歌を詠みかけしは。返歌せよとの事ならんさりながら。最前汝がいふ如く。詞此敎氏は父の卿諸共。幼少より島へ赴き。鄙に育ちし恥しさ。雲の上に座を列ねながら。我さへもえ詠まぬ歌を。かく即席に詠みかなへし器量骨柄。問ふに及ばず安倍の宗任に違ひなし。いはれぬ歌で蛙は口から。我と我が手に白狀せし。地淺はかさよと一言に勝色見する梅花の頓智。術に乘りし無念の宗任。口にくはへし鏃の手裏劍。大將目がけ打返すを丁ど留めたる源氏の白梅。詞ホヽウ尤もかうこそあるべけれ。地生捕るも捕らるゝも

時の運命恥となか思ひそ。猶此上に義家が。尋ね問ふべき仔細あり。こなたへ引けと引立てさせ フシ奥の間。さして入り給ふ。地 敎氏邊を打眺め。傔仗が傍近く。詞さて〳〵心づかひ察し申す。未だ言譯の筋もあらざるや。ハツアそれ故にこそ。地心を痛め罷在る。詞ホヽさこそあらんそれに就き今日貴殿に。志したる此梅は。まだ寒中に。室にて溫め咲かせし花。地天の自然にあらねども。春を待ち得て咲く花より。早き眺めを人の賞翫。詞又散る時も其通り。しぼみかぢけて見苦しうならぬ先に。此枝の如くさつぱりと。切れば却つて香も深し。花に限らず身にも亦。切時が大事。地左樣には思はれずや。詞ムヽ御心深き此一品。地散りかゝつたる老の枝。切れと賜はる天の賜。花物いはねど御謎に白梅の腹切刀。慥に落手仕る。詞ヲヽ天晴明察。大江維時なんどいふ。讒者の嵐に吹散されぬ其先に。花は三吉野人は武士。名を後の世に散さぬ樣の 地思案ぞあらまほしけれと。梅に詞匂はせてしづ〳〵へ立つて入りにける。たゞさへ曇る雪空に。心の闇の暮近く。一間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風。身に徹ゆるは。フシ 血筋の緣。不便やお袖はとぼ〳〵と親の大事と聞くつらさ。娘お君に手を引かれ親は子を杖子は親を。走らんとすれど。雪道に フシ力なく〳〵辿り來て。地垣の外面に。ア、嬉しや。詞誰も見咎めはせなんだの。イヽエ門口に侍衆が。居睡つて居やしやつた間に。ヲヽ賢い子ぢや。傔仗樣は此春から主のお屋敷にはござらず。此宮樣の御所にと聞いて。どうやらかうやら爰まで來ることは來たけれど。地御勘當の父上母樣。殊に淺ましい此形で。誰が取次いでくれる者もあるまい。お目にかゝつて御難儀の樣子が何卒聞きたやと。探ればさはる小柴垣。詞ムヽこゝはお庭先の枝折門。戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い。此垣一重が鐵の。地 門より高う心から。泣く聲さへも憚りて簀戸に。フシ 喰付き泣き居たり。地傔仗は斯うとも知らず。詞垣の外に誰やら人聲。アレ女どもは居らぬかと。地言ひつゝ自身庭の面。外にはそれと懷かしさ。恥かしさも亦先立つて。掩ふ袖袂しらぬ父。開けて悔り戸をぴつしやり。何の御用と腰元ども フシ濱ゆふも庭に立出で。詞傔仗殿何ぞいの。イヤ何でもない。見苦しいやつがうせをつて。腰元ども追出せ。婆。あんな物見るものでない。こつちへ 地 お來やれ〳〵夫の詞は氣も付かず。何をきよと〳〵といはつしやる。詞犬でも入りましたかと。地何心なく戸を開けてよく〳〵すかせば娘の袖袂。はつと呆れて又ばつたり。娘は聲を聞知れど母樣か

とも得も言はず。母は變りし形を見て胸一杯に塞がる思ひ。押下げ〳〵。詞定めない世といひながら。テモ扨も〳〵〳〵思ひがけもない。コレ〳〵婆何いやる。イヤさあ矢張犬でごさんした。ほんに憎い犬め。親に背いた天罰で目も潰れたな。神佛にも見離され。定めて世に落果ててをらうとは思うたれど。これは又餘りきつい落果てやう。今思ひ知りをつたかと。地餘所に知らすも涙聲。様子知らねば腰元ども。詞さつても慮外な。物貰ひなら中間衆には貰はいで。お庭先へむさくろしい。地とつとと出やとせり立てられ。詞ハイ〳〵。どうぞ御了簡なされてまちつとの間。地ハテしつこいと女中の口々。詞ヤレ待つてくれ女子ども。詞ヤイ物貰ひ。お錢が欲しくばなぜ歌を諷はぬぞ。願ひの筋も何なりと。地諷うて聞かせと夫の手前。ちつとの間なと隙入れたさ。あいとはいへど袖萩が。久しぶりの母の前。琴の組とは引きかへて。露命を繋ぐ古絃に。スヱ皮も破れし三味線の。ばちも慮外も顧ずお願ひ申し奉る。歌今の。憂身の。恥しさ。父上や母様のお氣に背きし報いにて。二世の夫にも。引別れ。泣き潰したる。目なし鳥。二人が中のコレ。このお君とて。明けて漸う十一の。子を持つて知る。親の恩。知らぬ祖父様祖母様を。慕ふ此子が。いぢらしさ。不便とおぼし。給はれと ナホス スヱ 跡諷ひさし。フシせき入る娘。地孫と聞くより濱ゆふが飛立つばかり戸の透間。抱入れたさ縋りたさ。祖父も變らぬ逢ひたさを。隱してわさと尖聲。詞ヤア喧しい小唄聞きたうない。女どもも奥へいて。お客人



寶暦十三年正月蛭子屋吉郎兵衛座興行の番附

に付いて居よ皆いけ〳〵。コレサばゝ。何うぢ〳〵。早く畜生めを擲出して仕舞やれさ。アヽコレ。腹立は尤もなれどそれはあんまり。ハテさておばゝ。隙入るる程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎。擲出すとはまだ親の慈悲。長居せばぶち放さうか。親の恥を思うて。名を包むはまだしもと思ひの外。今となつて身の置所がなさの詫言。恥面も構はずようせた。但しは親へ頬當に。わざと其形を見せにうせたか。地につくいやつと怒りの聲。袖萩悲しさやる方なく。なんの〳〵誓文。勿體ないさりながら。詞さう思召すも御尤も。大恩を忘れた淫奔。我が身ながら愛想の。盡きた此體。お詫申したとてお聞入れが何のあろ。そりや思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも來られる身ではなけれども。地お命にかかる一大事と聞いて心も心ならず。顏押拭うて参りました。詞不孝の罰で目は潰れる。此子を連れて此處の軒では追立てられ。彼處の橋ではぶち擲かるゝ憂目に逢うても。此身の罪に較ぶれば。まだ業の果し様が足らぬと。未來が猶しも恐ろしい。地此上のお願ひには。娘のお君お目見えと申すは慮外。只の非人の子と思召したつた一言お詞を。おかけなされて下されと。スヱテ歎けばお君も手を合せ。詞申し旦那様奥様。外に願ひはござりませぬ。お慈悲に一言ものおつしやつて。地下さりませと言馴れし。袖乞詞に濱ゆふが可愛やな。子心にさへ身を恥ぢて祖父様ともばゝ様とも。え言はぬ様にしをつたは皆汝が淫奔故。畜生の様な腹から見事犬猫も産みをらず。生れ落つると乞食さす子を。詞あの様におとなしう産付ざまは何事ぞ。詞あんまり憎うておりやものがいはれぬと。地むごう言ふのは可愛さのうらの濱ゆふ。幾重にもフシお慈悲。〳〵と泣くばかり。地傔仗猶も聲荒らか。親が難儀に逢はうが逢ふまいが。女めが入らざる世話。同じ兄弟でも妹の敷妙は。八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄。姉めは下郎を夫に持てば。根性までが下司女めと。地恥しめられてわつと泣き。詞下司下郎とはお情ない。夫も本は筋目ある侍。黒澤左中とは浪人の假の名。別れた時の夫の文に。筋目も本名も書いてござんす。地これ見てたべと差出すを。取次ぐ紙のはしくれも詫の種にもなれかしと。思ふは母より直方が。讀む文體の奥の名に。詞奥州安倍貞任とはなむ三寶。扨は貞任と縁組みしかと。地心もそゞろに懐中の。一通取出し引合せば扨こそ同筆。ハアはつとばかり當惑の。色目を見せじとずんど立ち。詞穢はしい此状。いよ〳〵以て逢ふ事ならぬ。サア奥こちへ。

ハテぐづつかずと早おぢやれと。地鉄い詞にせがまれて フシ母も是非なく立つて行く。なうコレ暫し。詞もう逢はうとは申しませぬ。お身の難儀の其譯をどうぞ聞かして下さりませ。地申し〳〵と。延び上り。見れど盲の垣覗きはや暮過ぐる風につれ。折から頻りに降る雪に身は濡鷺の蘆垣や。中を隔つる白妙も天道様のお憎しみ。受けし此身は厭はねど。様子聞かねばなんぼでも。去なぬ〳〵と泣く聲も嵐と。雪に埋もれて。スヱテ聞えぬ父と。恨み泣く。次第。々々に降り積る。寒氣に膚も冷えきれば。持病の癪の差込んで。かつぱと轉べばお君はうろ〳〵。さする背中も釘氷。涙片手に我が著物。一重を脱いで母親に。著せてしよんぼり白雪を。すくうて口に含ますれば。漸うに顔を上げ。詞ヲヽお君もうよござる。此又冷える事わいの。そなたは寒うはな

いかや。イエ〳〵私は。温うございます。よう著て居やるか。ドレ〳〵。ヤア。そなたはこりや裸身。著物はどうしやつた。あんまりお前が寒からうと思うて。地ヘツヱ親なればこそ子なればこそ。わしが様な不孝な者が何として。そなたの様な孝行な子を持つた。これも因果の中かとて抱しめ。〳〵泣く涙。堪へかねて垣越に裲襠ひらりと濱ゆふが。詞さつきにから皆聞いて居る。アツア儘ならぬ世ぢやな。町人の身の上ならば。若い者ぢやものいたづらもせいぢや。そんなよい孫産んだ娘。ヤレでかしたと呼入れて。聟よ舅といふべきに。抱きたうてならぬ初孫の顔もろくに得見ぬは。武士に連添ふ淺ましさと諦めていんでくれ。ヨ。ヨ。地といふ中に。奥濱ゆふと地呼ぶ聲に。詞アイ〳〵そこへ參ります。娘よ孫よもうさらば可愛の者やと。老の足 フシ見返

り。〳〵奥へ行く。地折しも庭の飛石傳ひ。雪明りに フシ窺ひ寄る。地安倍宗任戸を引明くればアヽ怖と。立退くお君をちつと捕へ。詞コリヤ怖い事はない叔父ぢや。エヽイ。叔父様とは。ヲヽそちが叔父の宗任ぢや。ヤア宗任様とは夫貞任殿の弟御。ヲヽつひに逢はねど嫂の袖萩殿。アヽそんならお前に問うたら知れるであろ。夫婦別れる時夫に預けてやつた此子が弟の清童は息災で居るかいな。ヲヲ其清童はの。傷寒で死んだわいの。エエイ。ハア。ヲヽ歎きは理。何かに付けて一家の敵は八幡太郎。こなたも兄貞任殿の妻ならば。今宵何とぞ近寄つて。直方が首討たれよ。エヽイあのとゝ様を。ヲヲ生け置いては我々大望の妨げ。此懐劍でと手に渡す。地難題何と障子の内。曲者待てと大將の。地聲に惘り折惡し。そちへ〳〵と忍ばせて。胸をすゑてどつか

と坐し。詞縄引切つて逃出でんと存ぜしに。見付けられたは運の極め。サアいか様とも行はれよと。地腕押廻せば義家公。縄にはあらで眞紅の糸。結びし金札宗任が。首にさつくと打ちかけ給ひ。詞網に洩れたる鱗を助けるは天の道。鳥類の命さへ重んずる我が心。況やあつたらしき勇士。命を助けソレ其札。康平五年。源義家これを放つと書記せば。此上もなき關所の切手。肩口の痣は切裂いても。武將の息のかゝつた汝。繋ぎし犬も同然日本國中を放飼。何國へなりとも勝手に行けと。地仁者の詞にハアはつと。雪に頭は下げながら。底の善惡閉隱す オクリ 氷を踏んで別れ行く。地夫の最期を濱ゆふが白梅の腹切刀。三方に乘る露涙。スヱ 外にも同じ袖萩が。思ひがけなき難題に。死ぬより外は。なく／＼も。地歸る戸口に父傔仗鍜に錠しつかとおろし座に直り。三方取つて頂戴し。押肌ぬいで覺悟の矢の根。取るとは知らぬ袖萩が娘に見せじと突込む懐劍。はつと驚き取付くお君。聲立てさせじと抱きしむれば。母は夫が片手に押へ。まだ女めはいにをらぬか。氣强くはいふものゝ年寄つた體。いつ何時の病死も知れぬ。聲なりともよく聞いておけと。地それとはいはぬ。暇乞とは露程も袖萩が。扨はお心和らぎしか。詞から成り果てた身の上。どうで追付のたれ死。地これがお聲の聞納めで。ござりませうと親と子が。一所に死ぬとは神ならぬ障子押明け立寄る敎氏。母はかけおり。詞ヤアそなたは自害したか。傔仗殿も御切腹。エイ。とゝ様も。地娘もと一度に驚き轉びおり。垣押破り張裂く胸。フシ 呆れ涙に別ちなし。地手負を見屆け中納言樣子具に承る。詞貞任に縁を組まれし御邊。婿の詮議もなるまじ。所詮死なで叶はぬ命。袖萩とやらんも死なずはなるまい。跡の詮議は某がよき樣に計はん。健氣なる最期の樣子天聽に達し。申すべしと。地冠氣高くしづ／＼と心。フシ 殘して立出づる。衣紋に薫る。風ならで。怪しや聞ゆる ギン 鐘の聲。コハ訝しと立戻り。フシ 邊に心目を配る。一二の對の屋隅々に。太鼓の音の喧し。詞ハテ不思議や。此明御殿に陣鐘を打立つるは。何者なるぞと振返る。地一間の内より高らかに。詞八幡太郎これにあり。奥州の夷安倍貞任に見參せんと。地立出で給ふ御大將。續いてかけ寄る二人の組子。さしつたりと身をかはし。弓手馬手へはつたと蹴飛ばし。詞ヤアラ心得ず。桂中納言敎氏を。貞任とは何を以て。ホヽウ此義家。天眼通は得ざれども弓矢の道には賢き某。過ぎつる大赦の砌。桂中納言なりと名乘り來る其時より。島育を云立に

歌詠まず筆取らず。何條しれ者ござんなれと。つくぐ面體を窺ふに。我が幼き時見覺えし安倍賴時にさも似たり。扨こそ宮の御行方。十握の寶劍をも取隱せしに極つたり。姿を變へて禁廷へ入込みしは。猶二種の御寶を奪ひ。親が根ざしの大望を達せんとの巧よな。爭はれぬ證據はこれと。地白旗を取出し給ひ。最前汝が弟宗任と。別れてほど經し兄弟の對面。梅の花によそへて我が顏を。見覺えたるかとかけたる謎。早くも悟つてコレ此歌。我が國の梅の花とは見たれどもつらねし上の句。梅の花は花の兄。我が國とは我が本國。奥州の兄ならんとの詞の割符。兄弟一致の此血判に白旗を汚せしは。源氏調伏の下心。此上にも返答あるや。何とくと差付けられ。地貞任無念の牙を嚙み。逆立つ髪は冠を貫き。怒りの大息ほつとつぎ。詞エヽ口惜しやなあ。我一旦浪人となつて。都の樣子を窺ひしが。官位なくては大内へ入込まれずと。流人赦免の折を幸ひ。誠の敎氏は先達て病死せしを。我なりと僞つてつひに逢はぬ舅傔仗。けふ始めての對面に情らしく見せかけて。腹切らしたは詮議の種の一通を取らん爲。所詮謀卒しくなれば。親の敵八幡太郎相手向ひの勝負して。運を一時に決せんと。地太刀に手をかけ詰め寄れば。ハヽア急いたりな貞任。汝獅子王の勢ありとも。八方に敵を受け一人の力に及ばんや。又其方が一命は。環の宮と寶劍の所在。責むるともよも白狀せじ。術を以て搜出すそれ迄は。いつま



奥州安達原

でも助け置く。命存へ時節を待つて。戰場の勝負はなぜせぬぞ。今犬死して親頼時が。大望は無にするか。弓矢の情は相互。夫婦の操も節義は一つ。地貞心厚き袖萩が。最期の際に一言は。妻子に詞もかけよかし。暇乞をと仁愛になうなつかしの貞任殿。詞最前からよう似た聲とは聞きながら。あんまり思ひがけもない。六年ぶりで廻り合ふ。顔見る事も叶はぬか。地死ぬる今はにちよつとなと。此目が明きたいコレお君。とゝ様なうと稚子を。見るに流石の貞任も。恩愛の涙はら〳〵〳〵。大將憐み思し召し。詞父親の縁切れたるお君。義家が子に養はんと。地仰せに傔仗有難涙。詞いかなれば某は敵と味方を婿に持つ。因果も思ひ廻らせば代代不和なる源平を。先祖に背いて縁組んだ。地我誤りを白旗の此。白梅を血に染めて。元の平家の寒紅梅。詞娘。父上いさ一所に。婿殿さらば。我が夫さらば。傔仗殿。姉様なうと別れの涙。母の袂も敷妙も。一度にわつと濡るゝ袖。御大將も直垂の。袖射削つて餘りの矢先。竹にたちまちすつくと宗任。詞最前見遁し歸りしは。兄弟本意を遂げん爲。優曇華まさりの親の敵。サヽ、勝負〳〵と。フシ詰めかくるを貞任暫しと押しとゞめ。詞ノリ晉の豫讓は衣を裂く。八幡とは八つの幡此。白幡をまつ此ごとく手に取れば。八幡が首提げんは案の内。敷妙の身には大切な夫婦の縁を繼目の旗。ソレ大事に召され。地濱ゆふと渡すは舅の幡天蓋。舅が最期に魂を飄したる梅花の赤旗我が家の旗諸共に奥州に押立て〳〵。詞父頼時が弔軍。一先づ此場は宗任來れ。ハツア實に尤も兄じや人。雪持つ笹は源氏の旗竿。一矢射たるは當時の腹癒せ首を洗うて義家お待ちやれ。ヲヽ〳〵互に戰場戰場。それは重ねてまづ眼前に朝敵の安倍貞任。生捕つて面縛させんと。いふは表。其裝束を其儘に。桂中納言教氏卿地御苦勞さふと式禮に。詞おさらばさらばと敵味方。著する冠裝束も故郷へ歸る袖袂雁の翅の雲の上。母に別れて稚子が父よと呼べば振返り。見やる目元に一時雨。ぱつと枯葉のちり〳〵嵐心弱れど兄弟が又。取直す勇聲。よるべ。涙に立兼ねで。幾重の思ひ。濱ゆふが身に。降る雪の白妙に靡く。源氏の御大將。安倍貞任宗任が武勇は。今に隱れなし

第四　道行千里の岩田帶

ギン傾城の。表具癪は誠の置所。世界の客へそら言も。一人に盡す ナホス 直實の。ハル フシ戀の中なる。戀絹が寢姿恥ぢぬ中となる。フシカヽリ其こしかたの。通ひ路は花車のかけ橋渡り初。生駒の手綱せきと

むる。くつわの關を。打越えて今は女夫の藥賣。長地カ、リ草鞋に隱す八文字鴛昇頼まぬ日傘フシオクリさして行くへは陸奥。の國フシ睦月に出でし。都の空。谷の初聲。聞初めて。彌生は花の。生れ月うしや櫻の顏隱す。ギン霞を拂ふ。春風を仇とは誰がいひ初めて。草のはつかに解く紐の。合結ぼれ合ひし朝寢髮。しんきらしいも命かや。人目堤にナホスフシ荷をおろし。△詞家傳葛城神靈丹。御用はごさんせぬか。お求めなされ。地買ひなさんせと賣聲も。フシ流石それしやの身なれども。迷ふは木々や若草にギンオクリつま戀ふ。蟲の聲なくてけはひ。冷泉はがせし。くれの蝶。とまり定めぬ浮世はなんの。眞間の入江を。スヱ見渡せば。月は渚に乘りおくれ。ハズミ浪より雲に入り。舟や風に逆艪のさつ〳〵さ。さつととわたる。鳥の聲。三下り雁がねよ。其玉章はたが文ぞ。

戀の宛名は只一人越の白山ふる里よりも。月につれだちもてくる文を。花に別れて歸るは返事。△ヲ、嬉しヲ、嬉し。ナホス地ヲ、それ誠我もまた。禿立から物馴れて小オクリ人のやりくり文づかひ。本フシ身にしら糸をおり出す。瀧は流れを立つる身に淸き。心を疊ふ紙。のべにそよ〳〵こちの人さまよ。ヲ、よい女房と戯れの。フシわりなき中も姫君に。タ、キ未來の契り盃の。合井筒にかけし生駒樣。我は裏見の。○たきさしに。いつかすがりと捨てられん。エ、。さりとては浮世ぞや。いつそ此身は此儘に。黑髮山の墨染と思ひ。切るにも。切れはせで此世ばかりの女夫とは。合ほんに結ぶの神さんも。粹の樣にもない事とはかなナホス女の。フシかこち言。二人妹脊のねぐら。夕風にばつと立つたる雀の宮。竹に緣ある源を守る。誓はたゞ賴め。しめぢが原のさしもぐさ我一命のあらん限りは御あり家尋ね。出して大君をふたゝび。都へきつれ川。吉左右淸き道の邊の淸水。ながる。柳かげしばし。とてこそ三重へやすらひぬ。

地東山道の國の果陸奥一國の出入を改め。非常を示す白川の。關の守は瓜割四郎。一人權威をつく棒さす股。琴柱に通ふ雁がねまで。赦さぬ道の關の戸はフシ嚴重にこそ見えにけり。ハルフシ生駒夫婦は關所とも。いさしら川の。フシ番所の前。地通りかゝれば下部ども。詞ヤア慮外者めら。此處をどこだと思ふ。瓜割四郎樣の堅めの關所。笠をぬいでかつつくばひどれからどれへ參る者と斷つて通りをらうと。地留められて戀絹が。瓜割四郎と聞く驚き。フシ猶顏隱し行過ぐる。詞ヤア胡亂者遁すなと。地立寄る下部を生駒之助。ア、申し〳〵。胡亂な者ではござり

ませぬ。御覽の通り我々は藥賣。伊達な所を目印に賣弘むるとは申しながら。あの日がさで顏隱さねば。口上の一口もえ申さぬが女だけ。顏隱すが癖となつて。關所とも憚らぬ不調法。何事も女だけと御容赦なされ。お通しなされて下さりませと。地いひくろむれば瓜割四郎。詞ヲヽ聞屆けし女商人。用はない早く通れと。地赦す詞に二人は嬉しく。フシ笠傾けて立出づる。地戀絹が手をしつかと取り。詞イヤそもじばかりはいつ迄も爰に留める。生駒之助に用はない。戀絹置いて早く通れと。地いふに夫婦が悔りし。詞スリヤ私等を見違へもせず。お前はよう覺えてか。覺えてかとは由がない。サハリ深山鳥も白鷺も我がつま鳥は知るものを縱姿は變つても。見違へてよいものか。地爰で逢うたは盡きせぬえにし。これから我等が宿の奧樣。何と憎うはあるまいが

と。よれつもつれつ餘念なく。恥を恥とも思はぬ赤頬抱付いたは山蜂が。フシ花の露吸ふ如くなり。地ヤア尾籠至極と四郎を取つて突放し。詞昔は昔今は志賀崎生駒が女房。地望ならば汝が首と。替物せんと呼ばはればせゝら笑ひ。詞ヤア素浪人の分際でしやらくさい女房呼ばはり。戀絹に汝が首。添へてこつちへ受取らうと。地いふより早く切つてかゝる。心得たりと身をかはし腕首取つて引つくり返し。骨も折れよと踏付け〳〵。踏付けられて半死半生。ヤア主に敵たふ慮外やつ。ソレ遁すなと數多の下部。一度に拔いて切つてかゝる。詞ノリヲヽしをらしい蠅蟲ども。うぬらも主の相伴とて片手なぐりに切りまくられ。地詞にも似ずちり〴〵に。逃ぐるを追うて生駒之助。コレなうあぶない。長追無用と。呼ばはり〳〵戀絹もフシ跡に續いて走り行く。地一人

殘つて瓜割四郎。心はやたけと逸れども。足も體もぐにや〳〵と。心太見る如くにて。立ちも得やらぬ有樣は。フシ目も當てられず。哀れなり。フシかゝる折から賣來る。地藥は町中評判の。あんぽん丹。詞御用ござりませぬか。何に利くともきかぬとも。知らぬ所があんぽん丹。御用とござれば一貝が三十二錢。半貝が十六錢。試みと申すが僅八錢。地あんぽん丹御用はござりませぬかとフシ賣聲聞いて。詞コリヤ〳〵藥屋。先づ〳〵待てと呼止め。身どもが事は瓜割四郎というて。此關所の役人なるが。角太夫地いかなる過去の報いにや。詞すは合戰に赴かんとすれば。忽ち五體ぐにやと痿え。コレ此通りぐにやと痿え。心ばかりを苛つと雖も。提燈で餅つく如く皆目とんと役に立たぬ。なんと體がしやつきりとなる。地藥があらば求めたしと。スエ世にも哀れ

に問ひかくれば。詞コレハ〳〵お前はきつい仕合者。抑も此あんぽん丹と申すは。一名を長名丸と申して。其様に氣ばかりせいて。何の役に立たぬ人に。此藥を用ゆれば。忽ち五體鐵石の如く。譬へば强敵入りかはつて合戰すとも。ちつとも弱味を喰はぬが名方。先づ試みに一貝上つて御覽じませと。地小さい錫の器物。取出して。フシ手に渡せば。地嬉しげに指先に。付けて一口呑むよと見えしがむつくりしやつきりすつくと立つて。詞ノリあら不思議や。此藥我がのんどを過ぎるや否や。忽ち五體ひり〳〵として。其あつき事火焔の如く。筋骨共に節くれ立つたる心地よさ。ハア、誠や。氣は陰にして其色白し。陰中の陰今變易して。紫の色を顯はす事。偏に此藥の德にあり。地ハアア權妙なり不思議なりと。めつたに虚空を睨付け諸手を。組んで フシ立ゝたる有様。詞なんと奇妙でござりましよが。まだ責道具が入るならば。具足なりと兜なりと。鉢卷もござります。申し其代りに。必ず茶をあがりますな。湯茶をあがると元の通りにぐにやつきますぞ。地ヲ、過分々々と代物渡せば藥屋は。フシ箱をかたげて別れ行く。始終の様子をとくよりも。戻りかゝつて立聞く二人。戀絹が耳に口。何やら囁き生駒之助。フシ元の所へ立忍べば。地戀絹態とおろ〳〵聲。生駒之助様いなうと。呼ばはり〳〵。うろ〳〵と ハズミ尋ね。さまよひ。四郎にばつたり。ヲ、怖誰ぢやと フシ立退けば。しがみ付き。詞イヤこはい者ぢやない。只居よより四郎ぢや〳〵。そもじを待つて最前から。地しやきばつて居るわいのと。餘念のないを見て取るそれしや。ヲ、詞お前なら惚りはせぬわいな。誰ぢやと思うて痞が上つて。地あいた〳〵と胸撫でさすれば。詞何とした〳〵。癪でも痛むか。地藥やらうと紙入より黑丸子。詞ア、申しお慮外ながら。水でもあらば。一口に呑まして下さりませ。イヤ〳〵。水は毒だ。地茶を呑まさうと番所より。茶瓶茶碗持つて出で。コレ一口と差出せば。詞ア、申しぬるいやらあついやら。呑んで見てくれたがよいと。地氣を持たされて實にも〳〵。我等が呑みさし呑む氣ぢやの。コリヤ忝いとぐつと一息。呑むと其儘ア、〳〵〳〵と。いふより早く體は忽ちぐにや〳〵〳〵。たわい。やくたい フシ並木の蔭を。地立出づる生駒之助。詞扨もきついうつそりめ。汝がほんのあんぽん丹。地付けう藥のないやつと。どつと一度に打笑ふ。地折から又も追ひくる人音。とてもの事に跡腹の。痛まぬ様にしていこと。上張ぬいで手つ取早く。瓜割四郎に打着せ〳〵。暫し木蔭に立忍べば。引

返す數多の家來。詞ノリソレ最前の藥屋め。遁すなくゝれと衣裝を目宛。地大勢寄つて手取り足取り。騒立つたる隙間を考へ。時分はよしと戀絹夫婦。跡をも見ずして 三重へ遁れ行く。寒林に骨を打つ靈鬼。深野に花を供ずる天人。風飄茫たる安達が原。隣る家なき一つ家の軒の柱はすね木の松。己が氣儘にまとはるゝ蔦は逆立つ鱗の如く。いづれの工か青龍の形を削りなせしかと フシさも物。すごき破屋に。ハル フシ住馴れ居馴れ。手馴れたる。拤の車やわくらはに。來る人稀の黄昏時。詞御無心ながら煙草の火。地一つ貸して下さりませと。笠を片手に旅の者。老女は籰をくり止めて。詞ヲ、暮れるまで歩かしやますは。何ぞ火急の御用か。ア、ちつと急ぎの爲替銀。福島まで持つて行く者ぢやが暮れるので氣がせきます。何ぢや爲替銀を持つて行くのぢや。アノ銀をや。ヲ、此物騒な安達が原追剝に出合はぬ様に。地用心していかしやませと。いはれてこなたは悔り顔。詞アノ追剝が出ますかの。ヲ、出るとも／＼。昨日も丁度今時分にアレ。向ふの森の中で殺された人がある。地ヤアといふより身はがた／＼。詞申しかみ様。我等生れ付いて其追剝がきつい禁物。どうぞ今夜は爰の内に泊らして下さりませ。いやなう其様な銀持つた人を。こちの内に留めてはマア。氣が張つて夜がねられぬ。サアそこがお情。お慈悲はかみ様。ハテ夫程怖か泊めて進ぜう。地ハイ／＼それは近頃忝いと フシ草鞋解いて上り口。詞ヤレ／＼嬉しや。是で心が落付いたイヤ。めつたに落付かしやんな。爰に泊つてもこなたの懐に銀があると。又追剝が來をろもしれぬ。其銀婆々が預りましよイヤそれは。ハテ扨悪い事はいはぬと 地手を差入れて引出す財布。それ渡してはとしつかと握り。詞おばゝこりやわごりよが剝ぢやの。何のいの預つてやるのだと。地財布持つ手に兩手をかけ。引けばこなたも門口の柱を片手にひんだかへ。引いつ引かるゝ力に腕すつぽりと。拔けて尻居にへたばる老女。詞コリヤおれを殺すかと。よろめく旅人を打倒し。のつかゝつて吭へ。ほうど喰付き喰殺す老女の業ぞ。フシ恐ろしき。ア、嬉しやと 地疊を上げ死骸を蹴落し口のはた。拭ふ血汐の腕取上げ。詞エ、しぶといまだ財布放しをらぬ。アア儘よ。腕ぐち取つて置かうと。地苧桶の底へ コハリ取納め。又繰返す糸よりも ナホス頭の。フシ苧拤かき亂す。地草に育てど草ならぬ花は鄙でも都でも。可愛らしさと憎さげは。跡から付いてあんぽん丹。聲がはりのした大前髮。詞コレ／＼お娘。こりやどこまで連れていかんすの

ぢや。日は暮れる幸ひ人のこぬ安達が原。此草叢でついちよこ〳〵。祭の太鼓打ち仕舞はんといきつた撥の納めばがない。サア〳〵 地爰でと鼻息も 詞オヽせはしな。まだ暮れきらぬ薄明り。誰ぞが見たら恥しい。袖の振合ふも他生の緣と。今來る道でお近付になり。此片遠所まで送つて貰うたお前。私が使に行く家ももう此處。ちつとの間門口に 地待つて居て下さんせ。つい口上いうて出て戻る。其内には暗うもなり。ハテどうなりとお前次第と。跡は得いはず顏赤らめ。袖打覆ふおぼこ氣に。現ぬかして。詞そんなら爰に待つて居る。必ず早う戻ろぞやと。地門口にすつくり松の木立。娘は內へ入り口の フシ戶を押明けて。詞アイ今歸りましてござんすと。いふに主が不興顏。わしにも知らさず出あるいて日の暮れるまでどこに這入つてござりました。大事の身を持ちながら大膽な一人歩き。嗜ましやませと 地つかうども。如才ない氣を呑込んで。詞サアわしもお前にいうてからと思うたれど。地又供の人雇ひのと世話になるが氣の毒さに。沙汰なしにいて來たはソレ今のナ御病人の御願やら何やらかやらの神參り。重ねてからは斷つて參りませう。もう堪忍して下さんせと。斷り聞いて心も折れ。詞ハテ神參りとあれば何の否と申しませう。此樣にとが〳〵いふもお前のお爲。人に見られてはならぬ身の上。かういふ中も誰が見まいものでもない。早う奧へござりまして。何かに心を付けてナ。御合點か。用があるならつい此婆を呼ばしやりませ。必ず端近う出まいぞや。地サア〳〵早うにあい〳〵の。返事しながら表の樣子。主の耳へおくの間のフシ障子押明け入りにける。地門には何にもしら鷺の首程長う待ち草臥れ。うろ〳〵内を指覗けば。詞誰ぢやどこの人ぢや。小暗りに胡散らしい。イヤ大事ない者ちつと用があつて。めんようなもう出さうなものぢやが。コレ〳〵そこな人。出さうなとは何が出さうな。ヤアノ出さうなというたのは。もう月が出さうなといふ事ぢや。ムヽ。月の事か。そしてマアうろ〳〵とこなた何ぞ落したか。尋ねるのなら火を點してかしてやりましよ。地ソレ幸ひの高燈籠。大儀ながら下して下されと。フシいひつゝ取出す火燧箱。こち〳〵打てばこて〳〵おろす。戀の闇路を照すとは氣當りよしと心で悅び。フシ又引上ぐる細引の。長い鼻毛で釣りかけた。娘はまだかと。指覗き。詞コレ婆樣爰の內へたつた今娘が一人來ましよがの。ヲヽ來たがそれが何とした。サア其娘に。もういなんか待つて居るというて下されハヽヽヽ。いなんかとはどこへ

いなんか。ありや餘所の者ぢやない。こちの内の娘ぢやわいのヤア。あの今來た娘は妾の内の娘かえ。南無三しまうた。ホウ氣疎なげな顔わいの。今日氏神へ參つた戻りに。だれやら送つて貰うたというたが。ム、扨は此方であつたの。これはまあ／＼若い人ぢやが。奇特によう送つてやつて下さつた。遠道を歩いた草臥やら。もう奥に寐て居ます。こなたもいんで休んで下され。ヤレ／＼大儀でごさつたと。地戸口をぴつしやり立て出され。物も得いはずむしやくしやと面皰だらけな赤ら顔。膨らかしてもせう事なく。テモむごいめにあはしをつた。結構な釣者がかゝつたと思ひの外。あちらこちらへ釣られてのけた。エ、いま／＼しい。けたいの悪い娘め。どうするぞ覺えて居いと。ハズミ フシつぶやき／＼立出でしが。地何思ひけん立歸り。裏の藪垣押分け搔分けオクリ忍び。入るともしら糸の。サハリ簑にくりまく拵車。ナホス廻る月日の關の戸を。漸う通れ。生駒夫婦。行く先とても定まらぬ當無し旅に行付次第。安達が原の高燈籠 フシ心便りに辿り着き。詞コレ戀絹。若しも關所の追手が來うかと。氣のせく儘に日を暮らし。とんと宿を借り損うた。跡の村で聞いた妾が彼の安達が原。何と廣い野原ぢやないかいの。地ほんにまあ方角さへ知れぬ所。道に迷うたらどうせうと。案じてわたしや癪が痛い。詞何の案じる事がある。氣遣ひしやんな。高燈籠があるからは地家がなうては叶はぬ筈と。邊見廻しあるぞ／＼。あれ／＼あそこに火の光。こつちへおぢやと。フシ戸口に立寄り。詞案内知らぬ旅の者。足弱を連れ暮に及び難儀致す。一夜を明かさせ下さらば上もなきお情と。地案内すれば老女は立出で。詞それはまあ／＼おいとしや。殊に女中もあるさうなに。お泊りなされと申したけれど。氣の毒は間所もア、申し／＼たとへ牛部屋。灰部屋でも。一夜お泊め下さらば生前の御厚恩。ハテ不自由をお厭ひなされずば。成程お泊め申しませう。地これは／＼忝しと夫婦が悦び杖草鞋。脚絆の紐もとく／＼と。フシ二人を誘ひ内に入る。詞見ました所がお侍どれからどれへのお出でぞやと地尋ねに戀絹會釋して。詞アイ私どもは都の者。はる／＼と此國へ參つたは。幼い時に別れたるア、これ／＼女房。イヤ我々は當國松島一見の爲。それは格別。時ならぬ高燈籠はお國の風か 地但しお志の常夜燈かと フシカヽリ脇道へころばす氣轉。主は何の氣も付かず。詞御尤ものお尋ね。此所は安達が原と申して。山なり原なり道の知れぬ街道。丁度お前方の樣に道に迷うて難儀する人が多い故。あの樣に燈籠を

點し。往來の衆の助けにするも。先立たれし連合の未來の闇を照す明り。これは／＼限りもなき大功德と。地咄の中に戀絹が。スヱ旅の勞がフシ苦しむ體。詞コリヤ女房何としたと地寄添ふ夫を力草。詞どうした事やらきつうお腹が痛みますと地聞いて恂り。詞何ぢや腹が痛い。地サア／＼事ぢやとうろつく夫。詞コレ申し何をマア其樣に。腹の痛むは旅勞。水の變りである事と。地落付ける主氣のせく生駒。詞イエ／＼／＼。そんな事ぢやござりませぬ。何を隱さう女房は此月が臨月でござります。大方其氣が付いたもの。ヤア何ぢや。此月が產月ぢや。アノ此女中が。ハテ扨それはと。地心の工面。夫はあはて立つたり居たり。コレ申し。詞どこぞ爰らに餅屋があるなら。地取上婆を味噲汁で。炊いて喰はして下さりませと。何をいふやらフシうろ／＼きよろ／＼。詞マア／＼お前方も。こぼれかゝつた者を連れて旅するとは大膽な。ドレわしがお腹を見てやろと。地懷へ手を差入れ。詞イヤ／＼まだ。今やちよつとの事ぢやない此痛はつい直るとそろ／＼胸を撫でさすれば。地戀絹は心地よく。詞ほんにとんと痛が直りました。お前樣はお功者なと。地聞いて夫もフシ落付く吐息。詞イヤあんまり落付くまい。何時の知れぬおなか。したが道中の冷が入つて心安うは出來ますまい。アヽ何ぞよい藥を進ぜたいものぢやが。ヲヽ幸ひな事がある。此野はづれの庄屋殿に。結構な安神散がある。ありや早めにもなる藥。わしがいて買うて來て進ぜたけれど。年寄つて夜道は叶はぬ。大儀なからこな樣いてと。いうても道の案內知らずであろ。いつそわしと二人いて買うて來ませう。コレ女中ちつとの間ぢや。留守してござれや。あの藥一服呑むと心安うまめになる。それはまあ／＼いかいお世話。地生駒樣も御苦勞ながら。あなたと一所におつと合點。我等は先へいこま之助と。フシ口合たら／＼立上れば。地老女も小褄かい取つて。必ず氣遣ひな事はない程に。ちつとの間待つてござれ。わしが留守の中に奥の襖を明けまいぞ。地サア／＼ござれとフシ打連れて。地戸口へ出でしが立ちどまり。詞コレ藥代がいるが路銀は持つてか。成程肌にござりますおつとよし／＼コレ女中。かんまへて閨の內を覗いてばし見やしやんなと。地念に念押す老の坂。ノル地道の助けは生駒之助オクリ伴ひてこそ出でて行く。ハルフシ跡には一人戀絹が。心細さに行燈の。火はかき立ててかき曇る空もフシ物うき旅の宿。詞ほんにまあ。人の行方と水の流れほど定まらぬものはない。都の者が陸奥三界。しかもやゝまで產む樣に

なるといふは。地ア、思ひ廻せば女程。長地あぢきない者はないと。打悄れしが。ア、ぐち〳〵。詞たとへ野の末。地山の奥でも。かはい男と。一所に居るが身の樂しみ。詞どうぞよい男の子を産んで。主の悦ばしやんす顔が早う見たい。したが若し女の子など産んだら機嫌が惡うはあるまいか。ア、まゝよ。女子ぢやとてまんざら捨てうともいはれまい。二つ取りならよい男の子を産んで。地夫婦が中に添乳枕。ねん〳〵ころゝん〳〵がいうて見たいと女氣は。フシそれしやの果でもしどけなき。地次第に更くる夜嵐の。身にしみ渡つて物凄き。フシ安達が原の軒もる月。詞エ、遅い事ではあるぞ。こんな廣い所にわし一人置いて。つい戻つてくれたがよい。ほんに今のかみ様が。地閨を覗いて見なというてゞあつたが。一寸見ようかイヤ〳〵。何ぞ怖い物でもあつたら惡い。ア又見たい物でもありと。地氣味惡ながらそろ〳〵と フシ障子開いて。詞何やら。白い地物があると手に取つて。詞ナウ悲しや髑髏ぢやと。地逃退く拍子に苧桶にばつたり。詞ヤア爰にも赤人の腕と。地氣も魂も消入る思ひがた〳〵震ひ漸うと。フシ表の方へ迯出づれば。地後にすつくり白髪の婆々。詞申し〳〵。コレ申しと。地呼ばはる聲に又恟り。詞イヤ怖い者ぢやない。主の婆々でござるわいのと。地聞いて少しは人心地。詞ほんにお前はおかみ様。いつの間にお歸りぞ。地定めて主も一所であろ。ちやつと呼んで下さんせと。フシ胸撫でおろすばかりなり。詞イヤ連合はまだ跡に。こなたにちつと用があつて。婆々一人戻りました。何ぢや連合はまだ跡にぢや。エエ又きり〳〵戻つてくれたがよい。手が出るやら。髑髏が出るやら。どうやら氣味の惡い内。地どれ迎ひにと。言捨て出づるを引きとゞめ。詞其夫の戻られぬ先に。此方に婆々が無心がある。サア其無心といはしやんすは。路銀を貸せといふのであろ。わしが肌には無いによつて。ちよつと夫を呼んで來て。イヤ銀ばかりぢやない。路銀よりまだ外に。こなたの肌に付けた物がある。それをばゝが貰ひたい。ム、銀より外にわしが肌に。付けた物とはイヤ外の物ぢやない。こなたの腹な子がほしい。ヲ、あのかみ様とした事が。地そんな事なら人をびく〳〵さゝんがよい。お前様のお世話で不具でもない子を産んだら。其時はどうなりと。詞イヤ産んだ子は役に立たぬ。まだ腹にある中を。子籠というて大銀になる大妙藥。それで其子が貰ひたい。エイ。あの胎内にある子を。どうしておまへイヤ心安うとられる。つい其腹を。裁割つて。ホ、

ホヽ。あの子とした事が。何のそれを震ふ事で。ばゝが痛うないやうに。つい一思ひに殺してやる。よい子ぢや爰へちやつとござれ。アイ。はて扱しぶといごされいの。すりやわたしを殺して。ヲヽくどう。其薬がほしさに。とうから尋ねた孕女。世間に澤山にある物なれど。尋ぬる時は意地惡うない物いの。コレぐづ／＼して隙入れて下さんな。きり／＼殺してまだ寺參りせにやならぬ。年寄は後生一遍南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀佛と唱ふる口は耳まで裂け。安達が原の黒塚に。フシこもれる鬼といひつべし。地戀絹あるにもあられぬ思ひ。私を殺すと仰しやるも銀から起つた事なれば。路銀も殘らず上げませう。まだ其上に此衣類剝いでなりとも助けてたべ。辛い命を存へて。陸奥までさまよふも。何とぞ安う産みたいばかり。地よく／＼深い緣なればこそ私がおなかをかり初も。十月に及ぶやどり兒にせめて此世の明りを見せ。一日なりとも親よ子と。互に呼びつ呼ばるゝまで。命が惜しい。死にとむない。詞慈悲ぢや。コレ申しと。地取付き歎けど。フシ聞かぬ顔。詞何やらいはしやるさうなが。年寄といふ者はの。コレ此耳が遠いわいの。ドレ。そろ／＼やりかけうと。地小褄引上げ玉襷。隙を窺ひ戀絹が。迯出づるを引戻し。懷劍逆手に取廻せば。何とせんかた涙聲。アレ。詞聲が高い。サア／＼それでも。地エヽ息の根とめよと突つかくる刃先をよけてもよけさせず。付けつ廻しつ追廻り。なんなく肩先切込まれ。立つ足さへもたぢ／＼／＼。又突つかくる白刃の切先。兩手に



寶曆十二年九月竹本座興行の番附

握つて。詞こりや。是程いうても聞入れず。どうでもわしを殺しやるの。エ、こなたは。鬼かいの蛇かいの。死ぬる我が身は。因果とも因縁とも。諦めても死なれうが。地可愛や此子が。闇より闇に。迷うて母を尋ねうと。思へば悲しい。死にとむない。地何の因果でわしが身に。やどつて來たぞと身を顫はし フシもだえ。歎くぞ道理なる。詞エ、七面倒な世迷言と。地懐劍しごけば紅の。血汐に染る手を合せ。詞どうぞお慈悲に。連合の歸られるまで。せめて名殘にたつた一目。逢うて死にたい。顔見たいと。地延上つて表の方。詞生駒様いたう。わしや今切られて死ぬわいの。地我が夫なうと泣叫ぶ。聲さへいとゞ。フシ遠近の空吹く風の音ばかり。詞コリヤ世話やくないやい。其連合はな。方角知れぬ山中へ。突放して戻つたれば。今時分は猪や狼に。喰殺されてをるであろ。其跡へ廻つて。路銀はこつちへしてやるのぢや。何とようしたものか。夫に逢ひたか。早う冥土へやつてやろと。髻掴んで肝のたばね指通されて七顚八倒。苦しむ體はくる〳〵〳〵。輪乗の如く打跨り乳の下より十文字に。腹裁破る有様は フシ目も當てられずむごらしき。地斯うとも知らず生駒之助。山道に踏迷ひ漸う歸る表口。フシ戸をほと〳〵と音づるれば。地内には悔り老女が敗亡見付けられては一大事と。赤子の血汐を手つ取り早く用意の器に絞り込み。見廻す傍に以前の髑髏ハテ怪しや。詞此髑髏に浸込む血汐と不審は立てど氣はわくせき。地女の首にかゝつたる守り袋の紐引切り。一つに集め奥の方 フシ指足してぞ忍び入る。地表は猶も打叩き。詞女房ども戻つたぞや。戀絹。地々々と呼べど叩けど音せぬは。ハテ不思議なとさし覗き。見れば血に染む女房の死骸南無三寶と氣は半亂。門の戸踏明け驅入つてヤレ女房。詞何者が手にかけしぞ。地戀絹やいと言ふかひ更に亡骸を。抱上げて立つたり居たり。詞エ、遲かりし殘念々々。さぞ我を待ちつらん。地可愛の者やいぢらしやと スエテ前後涙にくれけるが。地泣く目を拂ひ。疵口に心付き。詞ム、腹をあばき。胎内の兒まで手にかけしは盜賊のわざとも見えず。何にもせよ此家の婆々。我を出しぬき歸りし曲者。地引括つて詮議せんと裾端折つて奥の方。主が閨とおぼしき一間間の戸襖踏開けば。内は珠玉をのべたる御殿。翠簾卷上げてたをやかに打臥し給ふ稚宮。傍に従ふ老の身も賤の姿を引替へて。コハリ十二單に緋の袴。白髪鬘をさげ髪や敬ひかしづく ナホス有様に。荒れし生駒も進み兼ね暫らく。フシためらひ居たりしが。地ちつと

も臆せず大音上げ。詞ヤア體に綾羅は纒へども禽獸に等しき狸婆々。妻の敵子の敵覺えがあらう覺悟せよと。地詰寄ればはつたと睨め。詞忝くも當今の弟君環の宮の玉座間近く尾籠の振舞。かくいふ我は奥州六郡の司安倍太夫頼時が妻。情なくも我が夫を八幡太郎に亡され。無念の月日を送る中。成長したる貞任宗任。環の宮を奪取りしは。奥州の内裏と仰ぎ。諸人をなづける謀叛の根ざし。地いかなれば此君。我が國へ下向の時より物いひ給ふ事叶はず。一天の君としてかゝる難病世の嘲り。とやせんかくやと醫術さま〴〵。詞昔漢の代に或人此病を煩ふ。名付けて止聲病といふ。其頃耆婆が祕密の家方。孕める女の腹を裁ち。胎内の兒の血汐を用ひて立所に平癒す。地我是を行はんと。普く。産婦を尋ぬる所に。詞今日思はず汝が女房。天子のお役に立つたるこそ類稀なる身の冥加。地それのみならず人を殺し。金銀衣服を奪ひしも。皆軍用の助けの爲と。始終を聞いて驚く生駒。詞ムヽ貞任の母儀とあるからは。手にかけられし女が爲にも。ホヽ。則ち母といふ事か。サア。然らば娘と存じの上イヤ知らぬ。娘と知つたはたつた今。地無念の最期をとげられし。夫頼時の魂魄をいますが如く此日頃。詞祭り置きたる髑髏に。女の血汐しみ込みしは。親子の血筋疑ひなしと。捜し見れば此守に吾が家の系圖書。扨こそ知つたる娘が身の上。地往時の敗軍に親子兄弟。ちり〴〵になりし時。乳母に抱かれ別れし後は。都九條へ賣られしと聞きつれど。尋ぬ問ふべき遑もなく。打捨て置きしが彼等が仕合。詞思はず知らず我が娘が君の病の藥となるは。手柄者とも果報とも此上のあるべきか。でかしをつたとてもなら譽めてやつて殺さうもの。何にも知らず死にをつたがたつた一つ殘念なと。地鏡のやうなる兩眼に堪ゆる涙はら〳〵〳〵。實にも貞任宗任を フシ産落したる骨柄なり。地生駒之助感じ入り。女に稀なる大丈夫さりながら。玉簾深き若宮を如何して奪はれしぞ。ヲヽそれこそ宮の御乳母。匣の内侍を賴み。密に御所を立退かせし。詞いざ匣殿。此藥を宮樣へ。とく〴〵すすめ申されよと。呼出せば一間より賤の姿を其儘に。立出で給ふ匣の内侍。ヲヽそれこそ待兼ねし。宮樣の御爲には親とも姉とも。譬へん方なき老女の情。詞二十日餘りの月影を移して用ゆる此藥法。いで御藥を奉らんと。地空に冴え行く月影を映し取るよと見えけるが。何とかしけん器ばつたり谷底へ。落ちて血汐に染めなす岩角。こはそもいかにと驚きながら見下す谷の岩間より。俄に渦捲く水の

あし。コハリ清々滔々と湧上れば。内侍は水氣に目も放さず。守り詰めてあら不思議や。詞今産婦の惡血谷底に滴れば。忽ち谷水逆捲上つて土中の穢を清むる事。誠や水晶は塵を受けず。蓮葉は泥に汚れず。か程奇瑞を顯はすは。正しう尋ぬる十握の御劍。此巖中に隱しあるに疑ひなし。地ハア、有難や忝なやと。女姿もいつしかに引變つたる變生男子。眉逆立つて目の内も威あつて猛き。フシ其有様老女は猛つてうなり聲。詞すりや匣の内侍と僞りしは。寶劍詮議の方便よな。ホ、御劍失せさせ給ひしは。汝等親子が業ならんと内通の心を見せ。義家が一子八若を以て環の宮と僞り。女姿と様を變へ付添ひ來りし某は。八幡太郎義家が末弟。新羅三郎義光と。始めて名乘る武將の系圖。さすがの岩手も驚きに フシ只茫然たるばかりなり。地生駒之助進み寄り。詞

君は稚き時よりも他家にて育ち給ひし故。かく申す某まで御顏見しらぬ幸ひに。驚入つたる御方便。地不審なるは其御種。物いひ給はぬ病とは。詞ヲ、それこそは稚き者に。何事ありとも物いふな。事顯はれては一大事といひ含めたる止聲病。地今日寶劍の有所知れたるも汝が妻が死したる故。莫大の功なれば。詞兄に代つて勘當赦し。元の如く主從ぞと。地情の詞に生駒が悅び。フシはつと平伏すばかりなり。地岩手は無念のぢだんだ踏み。詞エヽ口惜しや腹立ちや。現在娘を殺すといひ。これまで心を盡せしも。皆徒事であつたよな。地よし此上は何とせん敵の片われ其ちつぺい。ひねり殺して冥土の供に連れんずものと立上る。詞さうはさせぬと支ゆる生駒。地振切る袂とゞむる袖。放せ放さじもみ合ふ後の襖を踏明け。詞鎌倉の權五郎景政。とくよりこれ

に守護致すと。地呼ばはり出でしは以前の前髪。肌は小具足小手臑當八若抱き突立つて。詞若君の仰せを請け。岩手といふお婆を釣りに。此國へ入込んだはかういふ時の後詮の役人。叶はぬ修羅くら燃やさずとも寶劍出し降參せよと。地聞くより猶も無念の齒がみ。これまでなりと白刃の切先腹に突立てどつかと坐り。詞とても叶はぬわが運命。かゝる方便ありとも知らず。夫の敵國の仇。子供に討たして高名させんと。我慢に凝つて邪非道。人を人とも思はぬ天罰。地忽ち報うて血を分けし。娘を親がなぶり殺し。さぞや苦しかりつらん。地獄畜生餓鬼修羅道。其苦しみを身一つに。受けし因果を斷切つて。冥土の旅で言譯せん。娘よ。孫よ暫く待てと。突込む劍を口にくはへ。緣先よりまつ逆さま フシ落ちてはかなくなりにける。地新羅三郎進み立ち。詞寶

劍は此谷底某向つて守り奉らん。地兩人外面に氣を付けよといひ捨て谷へ飛び込めば。下に伏せたる隱し勢。提燈松明振立て〳〵。遁さじやらじと三重へ挑み合ふ。フシ谷には新羅。上には兩人投げおろしたる大木大石。壓に打たれて數多の人數微塵になつて死してげり。猶もためらふフシ山陰より。詞安倍の貞任これにあり。見參せんと呼ばはつて。地寶劍携へしづ〳〵立出で。かゝる衞もあらんかと。母にも知らせず付け置く番人。手向ひせしは彼等が役目。弟宗任を助けし義家。敵に恩を受けながら軍せんも心よからず。さるによつて此御寶。只今渡すは宗任が命の返禮。再會は戰場と義家に傳へよと。地寶劍渡し傍なる母の死骸を抱き上げ。詞不孝の悴遲參の誤り。やみ〳〵生害させませし。地殘念至極と物數を。いはねど籠る千萬無量。新羅三郎感じ入り敵ながらもあつぱれ勇士。辭退申さぬ寶劍の納まる所は戰場々々。先づそれまでは。おさらば。と寶劍携へヤア〳〵生駒。詞老女の作れる罪科も高燈籠の光にあり。其火を消すは汝が手向と地仰にはつと立寄つて。松の立木を切倒せば法の。光も。消失せて忽ち修羅の太鼓鐘。相圖に寄せくる數萬の軍勢すは事こそと權五郎。生駒も谷へおり立てば。ヤア〳〵騷がれな方々。詞高燈籠は此家の狼煙。消ゆると集まる手筈の軍兵人々の警固して。八幡太郎の陣屋まで恙なく送り屆けよと。地寬仁大度の詞にはつと諸軍勢。フシ四方を圍む歸國の供。冥土の供はなき母の死骸を抱く貞任が。胸は苧桛とかき亂す糸の。亂の苦しさをこたへる涙。はら〳〵にオクリ衣の。たては綻びて。裾や袂とフシ別るゝ道。詞ノリ勇むは新羅權五郎。地生駒が背に。甥の殿。老いぞ籠りしこの原を。コハリ鬼籠れりと讀みなせし。安達が原の。黒塚の。其古事を末の代に語り。傳へて殘しける

第五

地深きを以て。淺きに入り淺きを以て深きを知る。其源や武將の大度。八幡太郎義家公。貞任が籠りたる小松が柵に押寄せらる。附從ふ輩には。舍弟新羅三郎義光。鎌倉の權五郎景政。其外一騎當千の。鎧の袖も白旗もフシ風に。靡いて目覺しき。地景政御前に兩手をつき。詞兩將には暫く木蔭に御屯と。地勸め立てたる折も折。どつと寄手の鯨波。景政きつと見。詞ヤアちよこさいなる蝿虫めら。一所にかゝれと大手をひろげ。地當るを幸ひばら〳〵〳〵。さながら秋の木の葉武者。勇氣に恐れて軍勢ども。敵はぬ赦せと逃げ行くを。遁さじやらじとフシ追う

て行く。地引違へて陣頭に。踴り出でたる安倍の宗任。新羅三郎これにあり。望む所の宗任め。惡事の固り打碎かんと。地ぐつと引拔く並木の松。微塵になれと打ちかくる。コリヤ〱〱とねぢ合ふ强力とゞまる勇力。いづくよりかは白羽の矢先二人の胸板。はつとフシ驚く間もなく。地貞任義家東西より立出で給ひ。詞ホヽ珍らしや貞任。汝命の恩を忘れず。三種の神器を別條なく此方へ渡し。宸襟を休め奉る上からは。義家が首取つて賴時が冥土の妄執はらせよと。地さも潔くの給へば。はつと二人は頭を下げ。詞ハツア有難き御一言。日頃の恨みと貞任が。地つつ立上つて鞘ぐちに。はつしと兜を打落し。拔くより早く我とわが右手の小脇にぐつと突立て。大將の前にどつかと坐り。詞三十年來父の敵討たうと思ふ鐵石心。義家公の御惠みに忽ちとろけし此上は。弟の宗任を御家來となし下さらば。生前死後の面目と。地苦しき中にも弟をスヱ思ふ眞實。親身の血の淚。地大將不便と思召しいかに宗任。詞心を改め我が幕下に從ひ。安倍の家を引起せと。地惠みも厚き御詞。今こそ願ひ達せし貞任。いづれもさらばとフシ勇氣の最期。地又も聞ゆる鐘太鼓敵にはあらで鎌倉の權五郎瓜割四郎を提げ出で。詞主君に敵對ふのら猫め。これを喰うて死ねと打付くる。地引つぱづして迯行くを。襟がみ摑んで宗任がぐつと一しめ忠義の手始め。かゝる所へ匣の内侍宮を誘ひ生駒之助。維時を高手に縛め御前に引据ゑ。詞謀叛の張本大江の維時。宮を奪取り此國へ落下る。半途に出合ひ斯の通りと。地詞の下に一太刀づつ。朝敵亡びて源氏の勝鬨。早や凱陣とおだやかに國も。治まる君が代の。夜に增し日に增し繁昌は源。氏と壽けり

千前軒門人
近松半二
作者　北窓後一
竹本三郎兵衛

寶暦十二年
壬午　九月十日

武田信玄 長尾謙信 本朝廿四孝

座本　竹田因幡掾

序詞春は曙やうやく白くなりゆくまゝに。雪間の若菜青やかに摘出でつゝ。霞だちたる花の頃は更なり。さればあやしの賤までもおのれ〳〵が品につき。壽き祝ふ年の兄。ましてやいとも やんごとなき。大樹の下の梅が香や。先づ咲き初むる室町の。オロシへ御所こそ花の盛なれ。地君は足利十二代源義晴公。左大臣に任官あり武威海内に輝きて。偃ふす六十六つの花。本フシ豊なる世の貢物。地殊更 妾の腹に御男子懐胎ありければ。なほもめでたき春ぞとて北の方手弱女御前。相州の大守北條相模守氏時。越後の城主長尾三郎景勝。其外参観の大小名。大流小流松竹島臺蕗の臺。かゝる時代におほ廣間フシ各。賀儀を申さるゝ。地氏時御前に謹しんで。詞御先祖足利尊氏公。二つ引兩の旗を以て。天下の棟梁となり給ひ。五畿内は申すに及ばず八隅の外まで威勢に靡き。面を上ぐる者もなき所に。頃日諸國にわれ〳〵の合戰起り。就中甲斐の住人武田晴信。越後の謙信と鋒先を争ひ。君命に従はざる條上を恐れぬ行跡。きつと糺明もあるべきを。その儘に差置き給ふは且は武威の薄きに似たり。地如何計らひ候はんと フシ我は顔に言上す。地義晴打頷かせ給ひ。詞我も此事歎かはしく。兩家和睦を調へんと。先達て兩國へ此旨を申遣はし置く。さりながら謙信が嫡子三郎景勝。疾くより我に昵近し忠勤厚き武士。只心得がたきは親謙信。悴を上し今日まで。上洛致さぬ心底訝かし。地親の心子知らずといへども。父の心中よも知らざる事あらじ フシ景勝。いかにとありければ。地三郎大きに恐入り。詞親謙信儀老體の上。多病によつて引籠り罷在れば。名代の景勝。君御召の御諚の趣。早速申達しつれば。上洛の日限も一兩日の間は過ぎず。又晴信と不和なるは。彼の家に傳へし諏訪法性の兜。隣國の誼に借受けしを。武田の武勇を羨むなんど下樣の惡口。一徹短慮の親ども彼是詞戰ひより思はぬ確執となりし事。如何ばかり我等が歎き。地まづ晴信を召寄せられ君の御詞を添へられんに。誰か否と申すべきと詞の半。北條の家臣村上左衛門罷出で。詞武田晴信参上と。地取次ぐ聲にお次の襖引立烏帽子のおのづから。智勇備はる甲斐の國。武田大膳大夫晴信 フシ

御前間近く出仕あり。地手弱女御前の宣ふやう。詞武勇烈しき長尾武田。君の柱と思召し。兩家和睦を圖らせ給ふ。有難き御上意ぞやと。地傳へ給へば義晴公。詞汝謙信と不和の基。法性の兜とやらん。武田の家の重寶とは何れの代より傳はりし。語れ聞かんと仰せける。晴信取りあへず。さん候もと此兜は我等が氏神。諏訪明神より夢の中に賜つて、明神の使はしめ八百八狐是を守護す。神通力加はつて是を著する度毎に。合戰勝利を得ざる事なし。越後の謙信隣國の誼拜せん望み默し難く。彼方へ持たせ遣はせしが。俗に言ふ心安きは却つて不和の基とやらん。畢竟何の詮なき爭ひ。地晴信に於て聊も。御諚に漏るゝ事あらじと。フシおとなしやかに述べらるれば。地北條氏時進み出で。詞コレ晴信。兩國合戰に及ぶ一大事。子供童のいさかひ同然よも左様の事ではあるまい。兼て親しみある甲斐越後。故もなき合戰は東八ケ國を騷動させ。其虚に乘つて大將の御所を騷がす。兩人が言合せの軍と御疑ひかゝつた上。輕々しき和睦の受合。猶以て呑込まぬ。地必定野心なき言譯。フシ聞かん〳〵と詰めかくる。地主の尾に付く村上左衞門。詞氏時公の御眼力あつぱれ黑星。ぬらりくらりのぬめた晴信。謙信の狸入道。長尾の小狐化顯はせと。地何がな支へる心の底。一物ありと見て取る景勝コレ村上。詞御邊は信濃國の住人。晴信謙信合戰の節も隣國の加勢に事寄せ。兩國をしてやらんと召されしかど。底意知れずと測りし故先づ御邊から攻討ちしに。牛房程な尾を振つてはふ〳〵に逃げられしが。都へ上り氏時殿に媚諂ひ。食客の陪臣奉公。其無念を晴さんと我々が中を割きたがる。夫はともあれ君の御諚。御邊達が出過ぎの助言。すつこんでお居やれと地一口にやり込められ。フシ面を赤めて閉口す。地北の方聲うるはしく。詞假初の詞にも猛きは武士の習ひにて此爭ひを鎭むるは。弓矢の力に叶はぬ事。地胡國とやらんの夷だに王昭君の色にめで。陣を引いたる例もあり。詞景勝の妹に八重垣姫とて聞ゆる美人。武田には勝賴とて年頃同じ子のある由。軍を直に緣の端我が君の御媒。地幸ひ今日の此島臺齡も相生松竹に。花菱は武田の印。竹に雀は景勝の烏帽子の長尾末かけて。中睦じう致されよとフシいと畏まる御計らひ。コハ冥加なき御媒。地君が仰せのかひあつて。フシ互に力越後の國。中を結びし大將の詞は木曾の棧道や。踏みかためたる足利の家の。榮ぞ。大三重へ久しけれ。地名に高き軒端の梅の。色そへて老若男女わかちなく。願ふ誓も誓願寺。茶屋の床几に硯箱發句俳

諸三十一文字。歌に和らぐ都の地　フシ今を盛の梅が香や。地左大臣義晴公の　妾賤の方を設けの幕打廻したる花の下。木下蔭の宿より。スヱ御身に　懐る五月の。帶の悦び身の願ひ。腰元婢に至るまで綺羅を飾りし鋲乗物。御供には直江山城之助。跡に引添ふ徒士若黨中間小者にいたるまで。茶辨當から烟草盆。フシ皆取揃へ歩み來る。地山城は心得て。詞申し〳〵賤の方様もう是が誓願寺。暫し是にて御休みと。地申上ぐれば賤の方。フシカヽリ御乗物を出で給ふ。フシ花もおさるゝ御姿。詞ナウ山城。今年は取分け誓願寺の。花も一入盛と聞き。義晴様に願ひを立てて來りし故。其方衆もいかい苦勞と。地仰せに山城頭を下げ。詞ハア有難き御詞。コレ腰元衆向うに見ゆる山々を。賤の方様に一一致へ申されよと。地指圖に三橋がしや〳〵り出で。詞申し賤の方様御覽遊ばせ。

地アレ〳〵向うの　高山は比叡山と申して都の富士。扨其次は銀閣寺棟も名高き高臺寺。名高き事を釣鐘に。ギン鳴響かせし千疊敷。大佛様と背競の。三十三間堂。

又。此方なは鞍馬山。詞僧正が谷の谺に響く地菩薩池の　フシ水の音。フシカヽリサツサ加茂川流れも清き。上加茂下加茂金閣寺。衣笠山の五體佛。ギン西行櫻。三條小橋



出逢うた所が壬生の寺。四條河原の芝居側。朝はとうから〳〵と。待兼山の時鳥。夫(それ)は。町中のじやれ詞。フシ聞きに北野の天神様。三十一文字の歌よりも。當世流行(はや)る阿漕(あこぎ)が土。どうした事やら此頃は。文の便(たより)もない戀中の。オクリ數も。よまれぬ フシ螢火や。地祇園の社楊弓の音はかつちりとん〳〵と。當り。初(そ)めたる通天(つうてん)と。口合(くちあひ)たら〳〵だら〳〵と。長ことぐ〳〵を言ひければ オクリ皆々。へ興にぞ入り給ふ。三下り歌大黒舞を見さいな福大黒を見さいな。新玉の年の始の福大黒と聲しをらしき。フシ幕の本(もと)。地ざゝめく女中とり〴〵の中に交る山城が機嫌上戸も。腰元の膝にもたれて。詞ヨウ〳〵〳〵。春の始の福大黒。打つにつこりのぼつとり風。男たらしのすつぱより。可愛らしいは此三橋。地こん〳〵九獻の折も幸ひ大黒舞。所望々々とせり立てられ。地早や悋氣する女氣の。歌大黒舞を見さいな惡性大黒見さいな。一に色ある顏付で。ギン二ににつこりお笑ひ顏見れば見る程腹立の。四つ餘所(よそ)の色取りに。五つ因果な見初めて。無性に可愛(かはゆ)い其中は。連理の契りとわしや思ふ。福大黒見さいな。詞ホホヽ、おめでたうござりますと。地頭巾を取れば賤の方の召使(めしつかひ)。名も八つ橋の器



量よし御傍に手をつかへ。今日の御供に外れしより。思ひ付の大黒舞お恥しやと袖おほふ。地賤の方興に入り。詞ヲ、それも自らを慰めの爲。地嬉しいぞやと御仰せ。山城はもぢ〳〵と思ひがけなき八つ橋に。見付けられたる此場の時宜。赦せ〳〵も目顔で知らせ。我等は寺へ御出の樣子。中入れんと立上り。住持の方へ急ぎ行く。地跡へのさ〳〵歩み來る。村上左衛門義淸直では行かぬ面魂。賤の方と見るよりも御傍につつと寄り。詞今日是へお出の樣子承り。御跡慕ひ某が申上げたき一通り。八つ橋もよつく聞け。主君北條氏時賤の方のお姿に迷ひ。明暮千千の物思ひ。餘り見るめもいたはしく申上ぐるも憚りながら。彼方のお心一つにて。氏時樣の悦びは外へは行かぬ御身のため。默れ村上。脇妻妾と言ひながら。義晴樣の胤を懷せし自らなれば。いはゞ主從ア、其御了簡小さい〳〵。主にもせよ家來にもせよ。國家の政道治め給ふ氏時公。日陰者と言はれうより。北の方になるのはお嫌か。コリヤ八つ橋其方向いて計り居ずとも。汝も共々お勸め申せ。又汝にはおれが首だけ。思ひは同じ戀の媒。何と嫌か。ア、いやではあるまいがと。地縺れかゝれる咽の下。髭顏ぴつしやり立退く八つ橋。詞コリヤ〳〵逃げても逃がさぬとしなだれ廻るフシ後の方。地折よく歸る山城が。走り寄つて腕もぎ放し。詞コレ村上殿。御酒機嫌か知らねども。女を捕へさりとは〳〵不行儀千萬。地ちと御嗜みなされよと。いふに八つ橋小氣味よく。詞お前の戻りが遲い故。それは〳〵モウよい〳〵委細は聞いた。何の村上殿が無理おつしやらうナウ義淸殿。定めてそれは座興でがなと。地知つても知らぬ直江が風情。義淸も底氣味惡く。詞ナニ賤の方樣。未だ御參詣なさらずば。某御供仕らん。直江殿には是にて御休息と。地何がな追從賤の方。詞過つて改むる義淸が今の一言。只何事も見ず聞かず。八つ橋直江は此所にて。自らが下向を待ちや。供は村上皆の者。地サア〳〵おぢやと立ち給ひ行くも二人が戀中を。それと推して本堂へフシ打連れてこそ詣でらる。地跡は嬉しき八つ橋が。見かはす目元渡りに船。首尾好い逢瀨と抱付けば。詞ア、嗜みや〳〵。一つ館に居りながら。たまに逢うたか何ぞの樣に。若輩な人では有るわいの。イエ〳〵何ぼ其樣に言はしやんしても。懷しいは女の癖。地奧へ通ひの長廊下。情らしうて屹としたその殿振を思ひ初めタヽキ逢ふも千歳の緣結び。かうじ〳〵て五月の兒を懷した中ぢやもの。戀しうなうて何とせう。人にばかり物思はせ憎い お方と山城にこぼす

涙は。戀の淵。詞サア〳〵道理ぢや〳〵。わしとても其方の事可愛うなうて何とせう。どうで其方にお暇賜はり。誰憚らず女夫ぢやといはれるが互の樂しみ。無事で安産する樣と。神佛を祈つてゐると。地聞く嬉しさは百倍の心ときめく八つ橋が。ちよつと〳〵に山城も。下地は好きなり御意はよし。手を引合うて乘物へ無理に伴ふ折からに。早や御下向と供廻り。出るも出られぬ八つ橋が。內と外とにフシ氣遣ふ二人。詞乘物參れと村上が。地指圖に心得腰元が。明けて㤚り戶をばつたり。あせる山城呑込む左衞門。詞コレサ腰元衆御乘物を明けたり鎖いたりエ、聞えた。コリヤ其內に何者ぞ居るに極まつた。地イデ改めんと立寄るを。賤の方暫しと止め。詞最前ちらりと見し所。此乘物を目がけ逃込んだは慥に雛鳥。よし何にもせよ其儘で連れ歸り。詮議は館で

ナウ山城と。地此場の難儀をフシ助くる情。地直江が心の悅びは。割つていはねど乘物の內より洩るゝ有難涙。降つて湧いたる子寶の行末。長き下向道伴ひ。館へ三重歸らるゝ。地咲分けし。フシ梅と櫻の。花よりも。本フシ妾に咲かせし室町の。フシ庭も玉敷く奥御殿。地義晴公の北の方たをやめ御前。身は本妻の儘なれど君の寵愛淺からぬ。賤の方の懷姙を御身にかへて御介抱。勞はらるゝも勞はるもフシ何れ劣らぬ品容。詞イヤ何八つ橋。今朝から賤の方樣のお顏持が惡い故。殿樣にもことなうお案じ。心がかりは昨日の供先。若しや怪我でもなかつたかと。地尋ねに兎角答さへ我が身の戀にからまれて言ふも。いぶせきフシ胸の內。地思ひを察して賤の方今に初めぬたをやめ樣のお心遣ひ。嬉しさ餘る願詣何の怪我がござりませう。詞それはともあれ。貴方は

定まる御本妻。賤しい此身を上に立て。地結構過ぎた御挨拶やつぱりどう仕やかう仕やと。仰有つて下さりませ。詞是はあられもない。自ら殿樣に馴初めてより今において子を儲けず。朝夕祈りし甲斐ありて。地お前にお胤を宿されしは。取りも直さず我が子同然。殊に左孕は御男子のしるし。足代の御世繼と思ふ程猶あなたが大切。悋氣嫉妬は姫御前の。習ひといふも。フシ下々の。地思ひ違ひし詞の裏。詞よしなき事を苦に病んで。若しもの事があつては大事のお身のさゝはり。最前から間もあれば。コリヤ八つ橋奥へ伴ひお慰みに琴の組でも續松でも始め。お心を引立てよと。地殘る方なき御惠み。伏拜む手に降る涙何といはでの。苔の露曇らぬ底の水鏡磨き合うてぞ。フシ入りにける。地おのが權威に案內せず明くる襖もあらゝかに。入來る北條氏時。我

慢の鼻も立烏帽子。御座の間に フシ畏まり。詞見ますればお女中ばかり晴信も景勝も未だ出仕致さぬかな。ヲ、誰ぞと思へば氏時。知らせなければ何時の間に見えたやら。イヤ御存じなくても此氏時。勤むる所はきつと勤むる。それに何ぞや在番で候などと。人前作る知行盗人。某同然に思召す北の方のお心入いかに結構さばくとて。白い黒いの別ちもなくて。御前様とはいはれますまい。誰憚らぬ御身にて不断お妾を上に立て。大切になさるゝ程却て御身の敵となる。賤の方の心底黒い眼で見抜いて置いた。斯くいふ中も心がかり。早く館を遠ざけ給へと。地口から出次第 フシ言廻せど。地敏き御身は何もかも。呑込む奥より腰元ども。詞殿様の召しまするいざ御入と 地いふしほに フシ帳臺。深く入り給ふ。地義清の二字を守らぬ村上左衛門。はちくり返つて打通れば。氏時聲かけヤレ待兼ねし村上。サア〱近う。〱に額際。つき合ふばかりに座をしめて。詞昨夜しめし合せし通り。心をかけし賤の方奪ひ取るは今宵の内。表門へは人目もあり豫て用意のあの抜井戸。釣出す工夫もして置いたこの上望むは晴信景勝、地不和なる中を幸ひに二人へ焚付け同士打させ。甲斐も越後も我が領分。詞親子とは言ひながら謙信が胸の中。某が思ふ所存もあれば邪魔にならぬはかの一人。地心がかりの晴信景勝了うて取るが上分別。其片腕は村上義清。詞ハア仰せ迄もなく存じの通り某も元は信濃の領主なりしが。晴信謙信に切取られ其許の情によつて。主従の約をなせし上は再び信州へお歸しあらば此上もなき拙者が悦び。ホ、我が望み達せし上は。元へ納むる信濃の領主。氣遣ひあるなと 地氏時が。當なき國の切取り咄。後に聞人のあるぞとも知らず思はず見合す顔。詞ヤア長尾三郎景勝。出仕致さば案内して。ナゼ奥御殿へ通らぬと。地てつぺいひしぎにちつとも動ぜず。詞ホウこは北條殿の仰せとも存ぜず。出仕の時は先づ人並の所にあつて。其後奥へ通るが作法。ム、然らば其方は最前から。イヤたつた今何もかも。イヤ何が何と。イヤサ。お二人のお咄の終る所へ參りかゝり。御挨拶もそれ故延引。御兩所御苦勞千萬と 地寄らず障らぬ景勝が。落付く詞に落付かぬ。破れかぶれと義清が。切付くるをかいくゞり。詞ヤア何科あつてお手討にイヤサ。謙信が子とは知りながら。ついに是まで手練を知らず。武藝の試み少しの差出。ム、拙者が手の内試みあらば。など尋常の勝負もなく。子供童の切合同然。卑怯至極の左衛門殿。お望みならばお相手と。地言はれてせき立つ村上

が。廣言憎しと又切る刀。鍔元むずと引掴み。是非知りたくば腰骨に。覺えられよとどうど投げ。地膝に引敷く途端の拍子。切込む氏時受けたる早速。地北の方の聲として。詞天晴頼もし三郎景勝。武藝の試み氏時も義清も。見やつて嘸や本望と。地それといはねどしら化の無念を鞘にフシ納むる兩人。挨拶もなく立つて行く。詞イヤなう景勝。其方の父謙信は日外より上洛せず。樣子あらんと思ひの外近々に上京との噂。我が君にもお待兼ねと。地仰せに三郎頭を下げ。親謙信が不行跡。御怒りの色目もなく。慕ひ給はる有難さ。地親子が面目是に過ぎじと詞の半へ小姓ども。詞出仕の樣子聞し召し。早う呼べとの仰付でござりまする。ほんに自らとした事が。お待兼ねに氣が付かなんだ。晴信の出仕にも程はあるまい。サア〳〵地此方へと奥深き主も家來も芳しき。花の大紋たぶやかにオクリ御前を。へさして入りにけり。地言葉しがらむ。唐糸の心も直江山城に。繋がる縁のフシ縁傳ひ。詞八つ橋か。直江樣。地逢ひたかつたと取付いて跡は詞も雙方が。抱きしめたる障子の內。詞八つ橋殿八つ橋殿と。地呼ばはる聲にびつくりしフシ駈け入るこなた。地山城が袂にすがれば。詞これはしたり。あれ程女中が呼んでゐるに。地マア〳〵行きやと振切る袖。詞エ、お前は賤の方樣。地はつと赤面直江が手元。ぢつと引寄せ顏打眺め。見ぬ唐土は知らねども。此日の本を尋ねても。又とあるまい男振。詞女のなづむ風俗を。地タ、キカ、リ見るたびごとに色勝る。峯の楓葉心あらば。詞たつた一言可愛というてたもいのとフシ寄添ひ給へば。地ちやつと飛退き。詞イヤ御座興も事による。御前樣は誰あらう。左大臣義晴公の北の方も御同然。殊に主人景勝へ預け置かれし御身の上。見付けられたら一大事。地眞平御免と立つを引止め。詞スリヤどの樣にいうても。不義はお家の堅い御法度。ム、夫程堅い御法度を背き。八つ橋とはなぜ抱かれてねやつた。エ、それは。サア斯ういへば表向知らぬで濟ませし昨日の供先恩を思はぬ其方の胴欲。わしが願ひの叶はぬ代り。八つ橋と不義の樣子我が君へ申上げる。ハテ滅相な。それおつしやつては二人が命。それ程怖くばわし任せにして。地サアおぢやとフシ無理に引張る一間より。詞不義者見付けた動くなと。地聲あらゝかに義晴公刀押取り出で給へば。續いてかけ出る北條氏時。直江が髻引掴み緣板ににじり付け。詞言語道斷憎くい不義者。地縛首討つ覺悟せよと。言ひも切らせず。詞イヤなう其人に科はなし心をかけしは自らばかり。地よきに

計らひ給はれと スヱテ覺悟の體に御大將。身が手にかくる覲念せよと。振り上げ給ふ刃の下。詞ヤレ待ち給へとたをやめ御前。地賤の方を押圍ひ。詞イヤ申し我が夫。一朝の怒りに其身を失ふとはよくも御存じありながら。酒に長じ色に迷ひ。善なる事も惡と見て。御成敗なされては國中に人種はござりますまい。地賤の方の不義放埒。誠と見せて實でない事。此手弱女が見ぬいて置いた。詞サア打明けて給はれと。地仰せも涙の。フシ顏を上げ。詞御推もじの上は包むに及ばず。過ぎし頃よりお目に入り義晴公のお妾と持てはやさるゝ其内に。地君のお胤を身に懷せど御怒りの色目もなく。様々の御勞り。胸に釘針刺すごとく。お志が切なさ故。詞何にも知らぬ 山城之助。無體な戀を言ひかけしも。不義者の名を取つて君の御手にかゝらん爲。地こらへて下され直江殿恩と義理とに此命。捨つるは更に惜しからねどよしない腹をかりそめにも。足利の御世繼と敬はるゝ子を持ちながら。闇より闇に落すかと思へど返らぬ我が覺悟。情は却てお家の仇。一旦御不審かゝりし上は只いつ迄も不義にして。自らばかりを殺してたべ。賴み上げます〱と洗ひ上げたる心の實。フシ眞實見えて道理なり。地やゝありて義晴公。詞ヲヽさうなうては叶ふまじさりながら。我が胤を懷しながら今死んでは。いよ〱たをやめに義理立たず。髮は剃らねど尼法師我が愛著も是限り。身をば大事に平産せよと。地打つてかへたる御仰せ落付く賤の方々も。今こそ晴るゝ悅びは。産まぬ前から若殿の フシ安産ありし心地せり。地かゝる折から取次の侍罷出で。詞西國方の武士と申し御獻上物持參致し。次に控へ罷在る通し申さんやと伺へば。御獻上とあれば苦しうない。地早く通せと氏時が。下知の詞に賤の方 フシ直江引連れ立ち給ふ。地待つ間程なく白洲の內。袴の肩もきつとせし眼中鋭き術ある人相。何か白木の臺の物恭しくもさし置きて恐れ。フシ入りてぞ平伏す。詞ヤアいつに見馴れぬ其方が。我が君に御獻上とて怪しき一品。まづ汝が生國は何國。假名如何にと尋ぬる氏時。ハア某は井上新左衛門と申して。即ち生國は薩州種が島の住人なりしが。故あつて浪人致し。何卒昔に立返らんと。心ばかりは逸れども賴むべき主君もなく。無念の年月を送る所に。不思議にも此賜我が手に入りしは。天道未だ捨てざる所。誰彼と申さんより。恐れ多くも義晴公を主君と仰ぎ奉らば武士の面目是に過ぎじと罷登りし新左衛門。君命じて召す時は。駕を待たずして行くと申せば。憚りも顧みず召に應じて御前

へ推參。執成願ひ奉ると。フシ頭を下げて述べにける。地大將一々聞し召し。詞性根を見込み召使ふ筋もあらん。シテ其方が持參の物。如何なる益に用ゆるや語れ聞かんと仰せある。ハア是れこそ異國において鐵砲と異名を呼び。玉を仕込んで放す音。雷霆の如く當る事速かにて。戰ひに用ひる第一の兵器なりしと聞いたる計り。未だ此地にて見ざりし所。即ち先月六日の夜。地烈しき難風吹起し。大船小船いふに及ばず。中にも。唐船と相見え。種が島の浦にて破損せしが。濱邊に殘りし此鐵砲。持參致せし奉公始め。今より是を手本として。戰場にて用ひ給はゞ敵は殘らず鏖。ホヽ左程の德ありといへど用ゆる事を知らされば。取得ざるも同じ事さいふ汝が其鐵砲遣ひ樣存じてをらば。我が目通で傳授せよ。地早く〳〵と義晴の。仰せにはつと新左衞門オクリ辭

する。色なく手に取上げ。君に向ふは憚りあり。不禮は御免と立直り態と後を見せたる手の內。詞コレ〳〵御覽ぜ。斯くも構へし火蓋の所。さす敵と見るならば。まつかうあれと引鐵に どうど響きし大藥。狙ひ外さぬ義晴公うんとばかりに息絕えたり。地是はと驚く諸大名。ソレ遁すなと下知に連れ。取りまく家來を事ともせず薙り立てたる鐵砲の。手竝に恐れフシ寄付かねば。地夫の敵と北の方。てうど打つたる長刀の刃背をけつて蹴上ぐれば。透さず付入る石突にて落ちたる鐵砲見やりもせず。巧みも深き拔井戶へフシ飛込む跡は亂口。詞心亂さぬ手弱女御前。詞ノリ君の亡骸奧の間へ。敵の詮議は此鐵砲。逃隱るとも遠くは行かじ四門を固めて取逃がさぬ。地手筈を定め知らせの鐘。フシ氏時早うとかひ〴〵しく。地仰せ受次ぐ次の間へ走入るより コハリ相圖の鐘。響

に連れたる御殿の內。法螺貝太鼓に手を合し。ナホス提燈松明一時に。四方八方圍みしは オクリ遁れがたなき フシ有樣なり。地かゝる騷ぎの 奧庭より目ばかり出した大男。賤の方を引立出で。駈行く後に三郎景勝。詞曲者待てと 地呼ばはる聲。心得眉間に打込む手裏劍。遁るゝ曲者强氣の三郎。詞無銘なれども小柄の手裏劍。是を證據に一詮議と フシ逸足出して追つて行く。地褄をさつと武田晴信。君の大事と心も空勢ひ込んでかけ來れば。引續いて薙髮の僧長尾入道謙信。只今上洛仕ると。不和なる中は物をも言はず。かけ入らんとする一間より。地氏時向うに立塞がり。詞在番の武田晴信。君御落命の場處へは參りもせず。納め過ぎた出仕顏。めつたに奧へは通さぬ〳〵。謙信とても左のごとく子故にかゝる身の疑ひ。行方知れざる三郎が脫捨て置きし素袍の烏帽

子。御殿に置くは武士の穢れ焼捨てて仕(し)舞(ま)やれと。地わくる詞も一物二物三方論議の折からに。北の方たをやめ御前鐵砲携へ出で給へば。フシ皆々敬ひ奉る。詞珍らしや謙信思ひ寄らざる我が君の御最期より。總て疑ひかゝるといへど。取分けて武田長尾は兩執權。天下の政道も執行(とり)ふ身を以て。久々上洛せざりし越度(をつど)。又大(まつた)膳太夫晴信は今日(けふ)に限つて出仕の怠り。日頃の不和も我が君を人知れず害せんと。疑ひかゝる兩人を其儘に差置いては。女ながらも身の誤り心に覺えないにもせよ。此場の大事に外(はづ)れし不運。自らは元より諸大名の疑ひ晴らす思案が第一。源家の忠臣土佐坊昌俊(しやうじゆん)。僞りに誓紙を書き誠を見せたる七枚起請。それは誰しも間々ある習ひ。是はそれに事かはり。本心曇らぬ胸の鏡。磨き立てたる證(しるし)がなうては身の上の曇晴れず。家を立てうと立てまいと面々の返答次第。サア〳〵何とと北の方。地彼方(あなた)此方(こなた)を思ひやり。わつと泣きたい所をも泣かぬはさすが大將の。フシ奥ゆかしくぞ見えにける。地理の當然にさしもの二人。下ぐる額の皺(しわ)よりも。眉に寄る浪胸に滿ち。フシ暫し詞もなかりしが。地何思ひけん武田晴信。ずんど立つてかたへなる。紅梅一枝はつしと切れば。謙信も劣らじと烏帽子の眞中さつと切り。御返答申すも恐れながら。詞昔が今に至るまで。惡事に與(くみ)し家國を望み。叛逆無道の名を取るも。子孫に殘さん爲ばかり。地それに引きかへ某が胸中。花物いはねどまつその如く。一子勝頼が首討つて御覽に入るゝが身の言譯。詞ホヽホ謙信とても斯くの通り。悴景勝が行方を尋ね善惡たりとも首討つて。御渡し申す證據の烏帽子。勝頼にも。景勝にも。心を殘さぬ我々が。北の方への申譯。地此上にも御批判あらば。仰せ聞けられ下されと。雙方詞かはさねど割符を フシ合せし忠義と忠義。地たをやめ御前涙ながら。詞ヲヽ心底見えた此二品。地かけがへもなき兩家の繼木(つぎき)。花を惜まぬ心の誓言(せいごん)。是に上こす事あらうか。詞其所存を見る上は。最早勝頼景勝を殺すまでにも及ぶまじ。猶此後は自らが力と頼む晴信謙信。此鐵砲こそ詮議の種。あつぱれ敵を討ち畢(おほ)せ。君の御無念晴してたも。ハヽヽヽ發明なれどもさすがは女儀(によぎ)。當座遁れを誠と思ひ。殺すなとは不覺不覺。餘人(よじん)は格別此氏時。いかにしても呑込まぬ。花と烏帽子に譬へし悴。地ぜひ首討つて出すべしと。何がな支ゆる邪智侫奸(ねいかん)。たをやめ暫しと留め給ひ。詞諸大名の鑑(かゞみ)ともなるべき古老の臣。一旦番(つが)ひし詞は金鐵。などか僞りあるべきぞ。僞り飾る所存ならば。其儘にて歸さうや

地さりながら。假令潔白立つるとても。我が君の三回忌追善供養終るまでは。蟲螻の命さへ。夫の爲には助けもする。詞況や科なき二人の命。殺す基も敵の行方何卒三年がその內に尋ね出さば助ける二人。それも叶はぬ物ならば。討つて出すも世の掟。地我が身の掟は此通りと。二世と兼ねたる黒髮を。フシ根よりふつつと押切り給へば。地晴信烏帽子かなぐり捨て。君の一字を蒙る某。姿ばかりは主君の供と差添拔いて髻拂ひ。詞形を變ゆれば名も改め。今より武田入道信玄と法名し。地心は變らぬ以前の晴信。忠義に忠義を重ねしと思ひ込んだる一生の浮沈。膽にこたへし敵の在所。雲の裏に隱るゝとも。天地の間は獄屋の內。御心慮安く思召せと我が子の命黒髮も。切つて捨てたる勇僧の其名も。武田信玄とフシ云傳へしも理なり。地氏時ほとんど笑壺に入り。詞ホヽ左程の性根を見せずんば謙信晴信とはいはれまい。敵の在所知るるまで我は都に押止まり君の亡骸とり納め政道糺す身が役目。よもや違背はあるまいと。地己が惡事を白洲の內。身の誤りに山城之助。しを〳〵として手をつかへ。詞賤の方を奪はれし我等が越度故。主人景勝へ疑ひ掛りし申譯と。地刀の柄に手をかくる。なう待つてたべ直江樣と。八つ橋も轉び出で。詞不義は二人が誤りなれば。お前ばかり殺しはせぬ。地わしも倶にと死覺悟。謙信聲かけぐつと睨付け。詞八つ橋と不義の樣子。伜が方より聞くやいな勘當と申置きたれば。主從でもないうぬらがむだ腹。五十百切つたとてかゝる大事の爲にならんや。うろたへをらば逆磔。兩人共に出てうせいと。地口と心は裏表情の勘當。フシありがた涙。地早や退出と長尾入道。詞君を害せし面體は知らねども。惡逆千里に響かせし此鐵砲こそ囚人同然。某きつと預り置き詮議の工夫は胸にあり。先づ夫まではおさらばと鐵砲提げ立上れば。地信玄も諸袖に禮儀は述べても顏と顏。不和なる良將勇將の中を隔つる北條氏時。底意を見拔く北の方浮む涙も手向。の水別れ。ヲクリ〳〵て。フシ歸りける。地夫婦も返らぬ御殿の名殘。是非もフシなく〳〵立出づる。地村上左衛門義淸横田兵內諸共に。手の者引具し立塞がり。詞ヤアどこへ〳〵義淸が心をかけたる其女。此方へ渡さばよし異議に及ぶと目に物見せん。何と何と呼ばはつたり。ヤア怖くもない義淸風。如何樣に吹かしても身動きさせぬ大事の女房。主君もなければ遠慮もない。地指でもさゝば撫切と。八つ橋かこうてフシ突立つたり。地物な言はせそ討取れと拔連れ〳〵切つてかゝるを事ともせず。

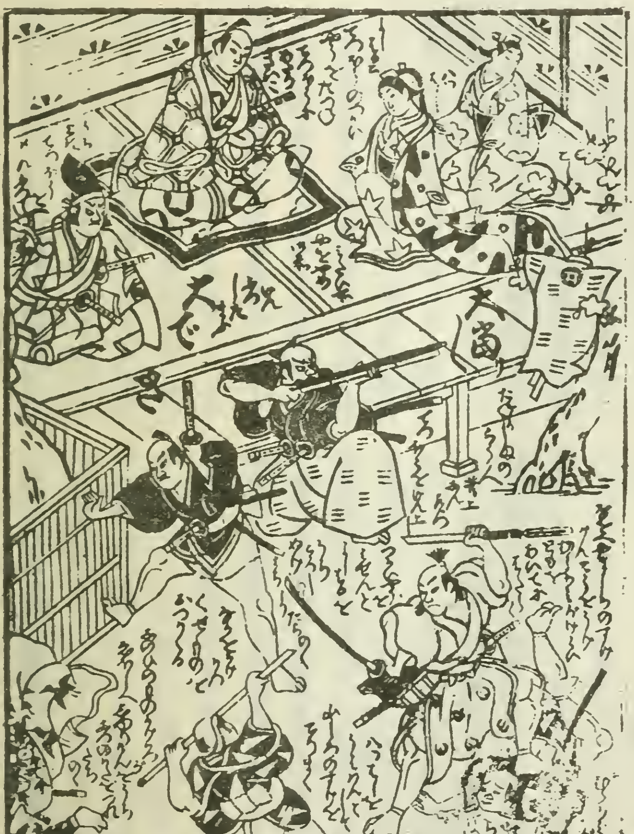
夫婦諸共抜合せ。切立てられて村上左衛門命が大事と迯行く跡。打合ひ切合ふ刀の光。電光石火の間もなく薙立て〳〵。三重へ薙立つれば。地残る大勢立つ足なく頭割られて血は瀧つせ。迯廻るのを横なぐり。兵内透さず後から。詞直江やらぬと切る刀。地ひらりと外せば思はずも。家來を袈裟に切付けたり。これはと驚く兵内が。首と胴との生別れ。フシ心地よかりしことどもなり。地邪魔は拂ひし嬉しやと フシ悦び歎きの數々も。思ひは七重。八つ橋が渡りを得たる女夫連。合サア此上は賤の方。再び廻り近江路や敵もいつかは美濃尾張果は。駿河の富士よりも。名高き君の御最期を悔めど更に甲斐越後。不和なる中もみちのくの直なる直江山城夫婦忠義は代々に岩清水。淸き流れの木曾川や夜半に。紛れて出でて行く

第 二

地惠みは四方に隠れなき。下諏訪の神垣は下照姫の御神にて。靈驗あらたにまします故近國の貴賤歩みを運ぶ賑ひに。巫女が小鼓神樂歌神慮もさぞと知られける。地殊に今日は卯月の初め御神事の宵宮とて。商人百姓草刈の小童までお千度お百度絶間なき フシ其中に。車つかひの簑作。馬場前に車引捨て立寄つて。詞ホホウ皆近在の知つた者ども太郎よ丑松よ能う參つたな。ヲヽ簑作遲かつたさればおれも上諏訪まで。油粕つけて行つて草臥れ果てた。ちつと休んで跡から往のと。地神前の大石に。腰をかくればコレ〳〵簑作。詞其石は明神樣の力石とて其石に腰をかくれば其祟い 石を 上げねば ならぬ。サアさうぢやげなけれど神は見通し見て見ぬふり。地そんなら休んで下向しや後に逢はうと フシ別れ行く。地是等も同じ車遣ひの悪者ども。宵宮參りに肩臂を。いかつ聲でコリヤ簑作。詞わりや此神前の。力石の事知つて居るか。ほんにさうぢやたつた今も子供等がいうたけれど。あんまりしんどうさに忘れてひよつと。イヤ忘れたとは言はれまい。昔から當社の習はし。腰をかくれば叶はぬ簑作。ナア勘八九介。ヲヽ權六がいふ通り其石上げい。上げにや宮へ斷つて。明神樣のお神酒代を上げるか。サア〳〵地どうぢやと石の手詰に簑作が。詞知つて居ながらおれが麁相。二人三人かゝつたとて地放もならぬ力石。どうぞ皆が沙汰なしに下内で。イヤ濟されぬ。上げねば宮へ引ずつて行く。ヲヽさうぢや〳〵。日頃から女たらしで。生じらけたしやつ面踏みにじつてこませいサア立て。地動けと兩手を引つぱりせちがふ折から。武田家の奥

家老板垣兵部。供人引連れ參詣に。此體見るより家來どもに引分けさせ。詞始終の樣子聞いたるが社法を背きし不屆とな。併ながら慈悲第一の御神なれば。法に行ふにも及ぶまじ。爰は身どもが簑作とやらんに成り代つての詫。コリヤ若い者ども侍が詞を下げる了簡してとらせやいサアお侍の詫なれば。了簡したいものなれど宮の掟が。サア其處があるによつての詫。身は信玄の家來畢竟わいらは簑作が訴人なれば。我が領分へ連歸つて訴人の科にきつと行ふ。サア何と了簡するか否といへば言分ありと。地氣色かはれば三人がア、申し〳〵。詞夫程に仰しやる事ならお宮守へは沙汰なしと。地言ふに悅ぶ簑作何方樣か存ぜぬに。お詫なされて下されて有難う存じますと。手を合はすれば。詞ヲ、禮には及ばぬ其代りには。其方へ少賴みたい事がある。旅宿まで來てくれまいか。是は〳〵由緣かゝりもない私お詫なされ下されて忝い縱へさうなくともお侍のお賴み。身に叶うた事ならば御用の仔細此處にて仰せ下さりませ。ヲ、それは過分さりながら。こゝは社内參詣も多ければ。身が旅宿へ同道して。密々に咄したい事によらば隙取うさう心得て大儀ながら歩んでくれうか。何がさて何所までも。來てくれうや。重疊重疊。家來共簑作を同道せいと。報賽して板垣兵部フシ旅宿をさして。立歸る。詞エ、簑作めをゆすつて。酒買はさうと思うたに。いはれぬお侍が挨拶で骨折損。もう此上はやけの勘八權六九介ぬ。鳥居前で目で一杯やりかけうサアさ來い。地〳〵と鼻唄でオクリ鳥居のへ前へと急ぎ行く。地夕暮時は。參詣の人も途絶えて神前の。御燈の光森々と本フシ神寂び渡る其景色。年も漸う十七か破竹草履も足輕に小オクリ見ゆる。所體もぼつとり風。武田の腰元濡衣が何か願ひは鳥居よりオクリかざす。榊に數取つてフシお百度參り大幣もフシ引手に。神や靡くらん跡から憎い風俗の。地大道はたかる鳥居先。信心しら砂踏付けた懷手して神參り。詞姉さん能う參らんすのおれも明神せぶりに來たお百度の連になりやんしよ。是はマア〳〵どなたか知らぬが。幸ひな道連もう日も暮れかゝつて。女一人は心細い。さうであろ〳〵。地白體マア日暮から。大膽な衒妻樣ぢや。マア一度鳥居から百度は大儀姉樣しんどか手を引こかえ。ハテしんどいとて大事の願。身を懲らさいで好いものか。ム、身をこらすとは戀であろ。イエ〳〵そんな事ぢやない。それなれば好い著物が欲しいといふ願ではないかや。何をわつけもない事ばかり。さうおしやんすお前の願わえ。おれが願は商賣の四

つぼ。此間腐り續け。さしばつかりになつたから思付きの百度参り。如何様姉様の足の輕さは。よく／＼の願ひと見えた。コリヤ連立たるゝものぢやない。其様に歩かしやるので。ア、好もしい股の邊がすれませう。マアそろ／＼歩いておれが言ふ事を聞かつしやれ。色事でなくば。おれとはどうぢやア、甘い腰付ぢやと地とんと叩けば。詞ヲ、笑止。大事の／＼お百度に。惡魔をさして貰ふまい。耳に諸の不淨を聞いて心に諸の不淨を聞かす。祓ひ給へ清めて給へとフシから手水。詞コリヤけうとい神道つかひ。堅い所が奥ゆかしい。コレ神様は粋ぢや。ついちよこ／＼と叶へ給へ磨き給へ。地戯談いはずと信を取つて祈る功徳の神よりは。跡から口説く神様もフシほつと草臥れ。詞ヲツト待つたり。ヲ、しんどや／＼佛の顔さへ三度といふに。神様のお百度は。足も腰も抜け果てた。地ちつと休もと大石に。腰をかくれば濡衣は。一心不亂。詞是で丁度お百度の。地數も大方榊を幣。大願成就なし給へと。伏拝み引く鈴の綱切れて落つれば濡衣が胸に當りし。案じ顔。地横藏傍へ立寄つて。詞コレ何とさしやつた姉様。サイナ私がお百度は大事の／＼お主様の命乞。鈴の綱の切れたの



は。お命の無いと云ふ。明神様の知らせかと。地涙ぐめば。詞エ、氣の弱い。さすがは女子と。地鈴の綱手に取上げ。詞こなたの命乞するお主は男か女かアイ殿達でござんす。それなら吉左右。此鈴の綱に書いてあるは。十七歳の男子。息災延命とあるからは神も納受。それはマア〳〵嬉しや。お主のお年も丁度十七。ヲヲよし〳〵。此鈴の綱持ていんで戴かさしやれ。ア、成程好いお方にお目にかゝつて。お命乞の願成就。重ねて御縁もあるならばこのお禮。神に願ひの甲斐の國と。地詞殘して鈴の綱押戴いて濡衣は。嬉しさ足も地に著かず。フシ悦び勇み立歸る。地横藏は跡見送り。詞餘所はない命でさへ神の納受で生きるのに。生きる事はさて置き。胴取りやくさる。張ればかかれる。もう今夜の資本がない。是からは明神様をおれが仲間の胴頭にして。此箱の賽錢を胴錢。マア試みに神様を相手にして。三つぼの廻りして見ようと。地ぐわらりと打明け。詞オ、さくで是程あれば。今夜の資本は樂々サアマア神様か



ら振らしやませと。地張るも投げるも我一人。三つぼの賽をめつたぼり。詞おつと神の四苦八苦。一廉は立棒で受けまする。是からおれが親の番。サア〳〵神様

張らしやませ。ハ、アひり十にねだ切お出でか。こゝを一番當てたいが。南無骸子明神なり給へ當り給へと地ぽいと投ぐればでつくの一。サア仕てやつたと攫へる賽銭。詞神様も一文無。是からは拜殿燈籠神樂太鼓。なんなりと抵當を見ねば銭貸さぬ。縦へ貸しても。正直を重にする神様なれば。よもや無沙汰は打たしやるまい。負けたと思うて神腹を立てさしやんな。全く我等暗骰子は遣やせぬ。イヤはやどういうたとて返答一つ打たしやれぬ。結構な神様と。地銭のありたけ財布へねぢ込み。詞コレ盗みやせぬ。相對づくで勝つた銭。勝ちついでに何なりと。地せしめてくれんと邊うそ〳〵。慾の眼に見付ける太刀。是幸ひの一資本と。拜殿に駈け上り。潜の鐵物捻切り〳〵。己がせしめる奉納の。太刀脇挾み駈出す向うへ。長尾の家來落合藤馬。供人引連れ追取り廻し。詞ノリ最前より窺ふ所。御主人の奉納の太刀。盜取るには仔細ぞあらん。地白状させんと飛びかゝるを。引つぱづして拔手も見せず。首はころりと落合藤馬。スハ狼藉と取りまく家來。博奕打には似合はぬ横藏薙立て〳〵フシ追うて行く。地折から出合ふ長尾三郎。人音太刀音心得ずと。詞窺ふ足元落ちたる首。御燈の光に能く見れば。家來落合藤馬が首。ハツト驚き邊を見廻し。思案廻らす横藏は。血刀提げ立歸り。心がかりは以前の首。後日の邪魔と暗がりを。探せば景勝聲をかけ。詞汝が尋ねる心り一品。今神前で某が。拾ひ取つてコレこゝにと。地差出す首を見て悔り。返答一句も先へは出でず。跡に家來がばら〳〵〳〵。詞奉納の御太刀を盜み落合殿まで殺せし曲者。最早遁れぬ百年目腕を廻せとフシ追取りまく。詞待て〳〵者ども。眼前の家來の敵身が手にかけんと地社燈の光。顔つく〳〵と打守り。詞落合藤馬が首討つたる手の中。多勢を相手に薄手も負はぬ力量を持ちながら。盜賊と聲をかけられ刀を投出し。誤り入つたる面付は。まんざら理非の辨ない奴でもない。こりやおのれ出來心ぢやな武士の家來を手にかけし憎い盜賊。只今成敗するやつなれども命は助けた。エ、すりや御赦免下さるゝか。ヲ、。長尾三郎景勝。身が手を下して討つべき首は。天が下に一つか二つ。汝ごときに目はかけぬ。此社に一七日參籠の大願。未だ滿てざる内なれば一命を差赦す。餘人にかやうの狼藉せば忽ち絶命。面魂に見所ある奴。性根を改め。其首の胴に付いてあるやうに。愼みをれと地和らかに。生れ付いたる大名風。供人引連れ悠々と心。フシ殘して立歸る。詞ア、ひやいな事。命一つ拾う

た。是から博奕場へ行たとも。此ぶまんでは埒が明くまい。一服喫んでいんでこまそと 地力石に腰打掛け。地摺火燧取出し信濃烟草をすつぱ〳〵。すつぱの車遣者どや〳〵と社內に入り横藏を取廻し。詞わりや此力石の法知つて居るか。ヲ、知つてゐる。此石を上げる覺えがあつて。腰かけたが何とすりや。ハ、〳〵〳〵己に千手觀音の手があつてもならぬ〳〵。石はさて置き。おいらが相手になつて見よと兩方より。地小腕取ればぐつと捻上げ。詞あまい事すなやいと。右と左へ踏みのけ蹴のけ。後へ取付く勘八が。首筋摑んで引廻し。地宙に提げ二人が中へ人礫。こりやたまらぬと三人が。面も體も砂まぶれ。フシはふ〳〵逃げて立歸る。詞エ、弱い奴等。力石々々と仰山にぬかせども。手毬程な此小石。まつと居つたら上げるのを見せうにと。地兩手にひん抱きかる〳〵と。ぐつと上げたる石の下。穴を穿つてぬつと出る。白髮交りの有髮の老人身には菅簑異相の體。さしもの横藏ぎよつとして。下界の人か仙人かとフシ顏を眺むるばかりなり。詞若者力量見屆けた。此一卷に血判せい。ム、此地の底を住家にして。人を試す心の底。問はねど聞かねど。大望ある人と見た。品によつたら賴まれませうが。此横藏も其許樣の器量を見立て。賴みたい事がござります。ホ、ウ小賢しくも申したり。主從は一體。主は家來を賴み。家來は主を賴む習ひ。汝が賴みの仔細は如何に。地卽ち是にと懷中より。一卷を取出し。詞老人是に血判がして貰ひたい。ハテ思ひ合つた賴みぢやな。汝も。御邊も。變らぬ大望。身は其方を家來にする氣。身どもは御邊を家來にする氣。どちらへどうとも決せぬ中は。胸中を卷込んだ此一卷。滅多には打明けられぬ。此方とても此胸の中。開かぬ中に。返事が聞きたい。身が返答より其方が。住所は何國ソレ聞きたい。イヤ只野山を住家とすれば。住所とては定らず。留まる所は天が下。ム、面白い。よし所在は聞かずとも。一旦我が目にかかつた上は。雲の裏でも尋ね探し。味方に付けるは折があらう。天が下を志す汝が望みも。某と同腹同性。我も定めぬ旅の空。志す方は六十餘州雨宿する天が下。人目を凌ぐ雨具をくれんと。地著たる菅簑ぬぎ取つて。詞七重八重。花は咲けども山吹の。みの一つだになきぞ悲しき。重ねて逢はうと フシ投げやれば。詞ム、天晴餞別。受けました。手前も寸志の置土產。返辨申すと力石。地ぐつと引上げ投付くれば心得たりと受留めて。詞慥に落手仕る。ホ、ウ御邊の力量も試み申して。先づ安堵。再會々々。地再會するは

此簑を。詞印に逢ふは。七重八重十府の菅簑打肩げさらば。〱と諸共に口にいはねど胸と胸。地知らせ合うたる曲者ども別れて。こそは。三重へ立歸る。地死は武士の常ぞとは常の詞と思ひ子に。今ぞかかれる甲斐の國武田入道信玄と。身は釋門に入りながら武門花咲く。庭の面。落葉角助掃兵衛が。引きずる箒打水に。いとど館はフシしめやかなり。詞何と角助。何かは知らず昨日から。一家中がひそ〱と夜の目も寢ずに走り廻る。其譯は何だと思へば京の大將。義晴樣とやらを誰とも知らず殺したげな。それで國々の大名衆がイヤ〱おりや殺さぬ。知らぬといつて潔白を立てられたげな。そこでおらが旦那も其潔白を立てると言つて。それで館が騷ぐげな。其潔白といふ物は。どんな物だそちや知らないか。何だ潔白をわりや知らないか。イヤこいつ文盲な奴ではある。潔白を立てるといふはおらが小半酒を立てると同じ事で潔白振舞と云つてお大名には節々ある事。おらもちよこ〱潔白喰つたが中々輕くてうまいもの。したが鰒汁と同じ事で。當てらるゝと命がないわいらも命が惜しいなら。誰が潔白を立てべいとも。地必ず喰ふなとフシ物識自慢とつても付かぬ下々の。咄も物の知らせかと戻りかゝりし濡衣が。聞いて案じる胸撫でおろし。詞コレ〱二人の衆。下としてお上の取沙汰。わしが聞いては大事なけれど。若し侍衆の耳へ入つたらこなた衆の爲にならぬぞ。掃除が濟んだら勝手へ、ござれと。地聞いて悔り。頭かく助とちめんぼう。おらは何にも白洲をはく兵衞。フシ箒かたげて迯げて行く。地よしなき事に隙取りし。さぞ奥樣のお待ちかね。詞濡衣只今歸りしと一間に向ひ。おとなふ聲。詞ヲ、濡衣かさぞ苦勞と。フシ障子開いて。地常磐井御前。思ひなき身の思ひ子を。フシ思ひ侘びたる御氣色。地濡衣此方に手をつかへ。詞上々樣に苦はないものと。思ひの外勝頼樣のお身の上。降つて湧いたる御災難お案じは。理樣。達者なお身でもある事か。お目の惡い若殿樣。もしもの事があるならばと。思へば身も世もあられぬ悲しみ。地悲しい時の神祈りと諏訪明神へ參りしも。今度の御難儀免れさせたび給へと。重き願ひも叶はぬ告か。切れて落ちたる鈴の綱。思はずはつと取上げて。詞よく〱見れば勝頼樣の。お年に達はぬ命の釣緒。十七歳の男息災延命と。書いてありしも神のお告と。地嬉しさ餘る鈴の綱。是見給へと取出し。見せるも見るも打莞爾。ヲ、それは嬉しや悦ばしや。切れて落ちしも和女の眞實。神も納受まし〱て勝頼が身にさゝはりない。

諏訪明神の御神託、詞是につけても京都の武將義晴公。何者とも知れず飛道具を以て害せしより。諸國の大名心區々。地我人心疑ひ合ふ。中にも夫信玄に疑ひかゝる身の言譯。一子を切つて出すべしと。契約ありしは武士の意地。詞されども御前のお情にて。君三回忌の其中に。敵の在所知るゝならば勝頼も助けよと。深き惠みの立つ月日。早や三回忌も事濟めど。今に於て敵も知れず。地今日に縮まる我が子の命。何とせん方なき中に。詞ナウ持つべき者は忠義の家來。板垣兵部我を招き。お氣遣ひし給ふな勝頼公に寸分違はぬ御身代り。兵部が存じて罷在れば今日中に連れ歸らんと。館を出でしが妾が樂しみ。地それ故兵部の歸りを待てども。昨日にも昨夕にも。今に於ていなせのないが。心掛りにありつれど。詞神のお告に何疑ひ。兵部の歸りも頓てであらう。地そちも案じな濡衣と。フシ御悦びの折からに。地お側仕が手をついて。詞御上使として村上義清樣お越なりと。地聞いて奥方涙ながら。詞早や上使のお入とや。心當の兵部も戻らず。ハアイヤこれ濡衣。和女は次へ往て休息しや。上使への返答は。自らが胸にある。サアいきや。ハテ立ちやいのと。地仰せに否とも濡衣が。フシ是非なく一間へ行く跡へ。地のつさのつさと入來る。上使は聞ゆる村上義清。疊ざはりも荒くれ武士。いかつがましく座に直る。地奥方遙に手をつかへ。詞甲斐と信濃は國並び。其信濃にござつた村上殿。今は遙々都より御上使とは御苦勞と。地いふに村上打點頭き。詞成程以前は隣國の誼心安う致せしが。夫は内證。只今は上使の役目。仔細申すに及ばず信玄とくと合點の趣。勝頼の首お渡しなされ受取らんと。事もなげなる上使の權柄。成程其儀は夫信玄わらはに申付け置きし故。兼て覺悟はしながらも今はの際に是がマア。悲しうなうて何とせう。親子此世の一世の別れ地心用意も致させたい。詞ヤア首討つに何の用意。手間隙なしの無雜作に。拙者がたつた一打と。地立上るを押留め。詞斯樣申さば武士の。身にあるまじき卑怯者未練者とも思さうが。何を包まん勝頼は諏訪明神の申子にて。神に御苦勞かけ奉り。儲けし子なれば私に殺すも神へ恐れあり。勝頼が命元へ戻し奉ると。諏訪明神へ代參を立てたれば。地せめてそれが歸るまで暫くお待ち下されかし。詞ヤアあまちやゝな。其代參何時戻らうやら知れざるを。べん〳〵だらりと待つ事ならぬ。イヤさのみ夫程隙取るまじ。遲うて今日の暮までは。ヤア此永の日を待つ事叶はぬ。然らば未の上刻迄。夫も叶はぬそれならせめて二時の。

地容赦は武士の情ぞや。詞ハテ雑魚鰯を直切る様に何のかのとどびつこい。夫程延べてほしくば暫しの容赦はしてくれんと。フシ庭に飛下り。地垣根の槿引きみしつて床の間の。花生へ捻込み押込み。詞コレ此槿の萎む迄は宥免致す。花が萎むとそれが寂滅。いやと言はさぬ割符の一本先づそれ迄は奥で休息。御馳走には信濃蕎麥お手打が我等好物。花鰹より勝頼の首。早く賞翫致したい。イザ奥の間へ案内と。地いふに否とも槿の。日影待つ間の命ぞと。思へば胸もいた垣が。早う戻つてくれかしとそれを心の力草。村上を誘うてオクリ一間へ。へこそは入りにける。地始終の様子物陰に聞いて袂も濡衣が。今は恨みを槿に。いはん方なき憂身やとスヱテ聲をも立てず忍び泣き。洩れ隔てたる唐紙を明けても明かぬ目なし鳥。無慚なりける姿にも。武士の角立つ角前髪ウオクリ袴の裾も長廊下。探る刀の手前さへ。面目もなき其風情。ナウ勝頼様かおいとしやとフシ縋り付いて泣居たる。詞一筋な女氣に悲しいは道理々々。只因果なる我が身の上。地たま／＼弓馬の家に生れ弓矢打物取る事さへ。叶はぬ不具となり下り此儘無念な死をせんより。侍らしう腹切るが弓矢神への身の言譯。此頃母の物語其時覺悟は極めて居れど。不具になつても子の命助けたう思召す。母上のお心遣ひ無下になすが勿體なさに。今まで命延はれども。詞今村上が使者の様子。聞いてはどうも生きては居られぬ。地目かいの見えぬ勝頼を。大事に思うて長々の世話。いかい苦勞をしてたもつたフシ嬉しいとも過分とも。地禮は未來で／＼と跡はえ言はず見えぬ目に。涙を隱すいぢらしさ。濡衣わつと聲を上げ恨めしい勝頼様。此館へ奉公に來初めた日からお姿を。可愛らしいと思うたが。縁と因果の初めにて。お主様とも御主人とも。辨へ知らぬ拙い筆に。心のたけを岩本の。タヽキ神の結ぶのお情に。嬉しい枕を交した時。未來までもと仰有つた。詞其お詞が誓紙ぞと樂んで居るものを。お前ばかり死なうとは慘いつれない胴慾と我が身をとんと勝頼の。膝にフシ打臥し泣沈む。詞ヲヽ其恨みは尤もなれど。親の許さぬいたづらなれば。地どうではかない花の縁。詞もう槿も萎む時分。隙入れては恥の恥。地泣かずと其方は次へ行きやと。早や切腹と見えければ。詞アヽ申し／＼まだ槿は萎みは致しませぬわいなア。生々と地今を盛のお身の上。切腹とは情ないどうぞ助ける仕様はないかと。止めても止まらずせり合ふ中へ。母は駈出でヲヽよう止めてたもつたなう。詞坡前來りし使者の様子。聞いて覺悟は理

なれども。そなたを助けうばつかりに心を砕いて居るわいなう。母が心を無にするのか。ハ、アこは勿體なき御詞。地須彌大海に比べても及びがたなき母の大恩。さら〳〵フシ無下には致さねど。地槿の限りの命。詞隙取つては使者の手前。イヤ苦しうない大事ない。そなたに寸分違はぬ身代り。慥にあると板垣が館を出でしは昨日の朝。スリヤもう戻るに間もあるまい。イヤ申し奥様。板垣殿が身代り連れてさへ歸らるれば。勝頼様のお命にさゝはりはなけれども。若し又それが違うては。それも分別して置いた濡衣そちや勝頼と不義してゐるな。エイ。いや呵るではない此母が。今改めて女夫にする。エ、すりやあの賤しい私を。ヲ、地賤しうても貰うても女は夫を大切に。思ふが直に氏系圖。目界の見えぬ勝頼を身にかへて大事にかける。如才ない氣を見込んだ故。詞大事の子なれど其方に預ける。連れて此家を立退けと。思ひがけなき詞に悔り。詞アノ勝頼様を。合點がいたか。地花がしぼむと悲しい別れ。詞早う往け疾う往けと。地いふ中若しや槿の。しをれやせんと伸上り。見やる花より見る母のフシ姿しをるゝばかりなり。地勝頼は氣色を正し。詞コハけしからぬ母人の御仰せ。死を恐れて館を出でなば。後の嘲り家の恥辱。武士の命は義によつて輕しと申す。地只初めより亡き身ぞと思召し諦めて。命のお暇賜らば猶此上の母の御慈悲。お願ひ申し奉ると。命惜しまぬ健氣さにフシいとゞせきくる涙を止め。詞スリヤ此母が是程に心を砕くに承引せず腹切るか。もう此上は留めはせぬ。地汝より先へ此母が自害と差添押取れば。あわて留める濡衣に又取りすがるむざんの目病。詞申し母人段々誤り入りました。地お詞に隨ひ此館を。詞スリヤ聞分けて落ちてくれるか。濡衣も共心か。アイ〳〵必ず聊爾地遊ばされて下さりますな。詞ホホ聞分けてさへたもれば母も嬉しい。斯ういふ中も心せく。地サア〳〵早うと勸められ。是非なくフシ〳〵も立出づれば。詞ヤア勝頼を落さんとはのぶとい巧み。村上が見付けたからは一寸も動さぬ爰へ引出し一討と。地かけ寄る先に立塞がり。詞コレ〳〵〳〵槿のしぼまぬ中に討たうとは。ヤアしぼまぬかしぼんだか脈の上つた死人花。是でも生きるか生けて見るか。地サア〳〵どうぢやと槿の花を目先へ突付け〳〵。突付けられて常磐井も何とせん方なき身ぞと。思ひ切つて突込む刀ナウ悲しや御切腹と。叫ぶ濡衣驚く母ヤレ早まつた生害と。二人左右に取付いてスエ前後正體なき沈む。地勝頼苦しき息をつき。詞申し母人お詞に背きし

段。眞平御容赦下さるべし。地是までの御養育御慈。深かりし身は盲目の淺ましや。軍慮に秀でし家に生れ。戰場の驅引叶はず。遠矢はもとより打物は。漸う刀を杖につき。我が家の内を探り廻る。甲斐源氏の嫡流たる。武田四郎勝頼と。言はれる是が武士か。よくも武運に盡果てしと。詞思へば此身に倦んじ果て。今日や切腹明日や自害と。毎日々々刀を手に取上げは上げながら。地思へば深き母の大恩。我先立ちなば亡き跡にて。嘸御歎き御物思ひ。逆さまな追善供養。受ける不孝の勿體なく。存へ在りし今日只今。親子の縁も。あさがほと共に フシ散り行く御名殘。地ヤイ濡衣我が最期を歎かずとも。母に力を付け奉れ。地さは言へ目かいの見えぬ身を朝夕心の樂しみに。暮した其方が胸の内不便や便もあるまじと。涙呑込む手負の苦しみ。見るに悲しさ濡衣が。つい假初のお障より見えぬ御目をあけ暮に。苦に病み給ふがおいとしく。どうぞ御目の明く樣と御符御札もあらゆる神跣足參りのお百度にも。叶はぬのみかお命まで今を限りとなつたるは神も佛もない事かと涙の限り。くどき立てくどき立つれば奥方も。かゝる憂目を見まいため心盡した兵部さへ今に歸らぬ恨めしさ。思ふに違ふ憂世やと手負にひしと抱き付き流涕。こがれ伏沈む。詞ヤア聞きたくもない世迷言早や首刎ねてくれんずと。地刀するりと拔放せば。なうコレ今が別れかと悶える奥方濡衣が。歎きとゞむを押退け突退け村上が。振上ぐる刀の下。手負は合掌ばつしり立切る。フシ生死の境。地かゝる事とも白洲の内怪しの辻駕えいさつさ。跡に續いて板垣兵部老の心も フシせき立つ足元。詞ヤレ〳〵どめつさうな旦那殿。マア一里ぢやマア半里ぢや。急げ〳〵と息もさせず。上の諏訪から十七八里夜通しの早追。極の駕賃お心付はお心次第。結構さうな旦那殿。地酒手も定めし結構なお金すつかり下さりませと。汗押拭ふ其中に。地兵部は切戸の鎹しつかり。詞駕代もくれう酒手もくれう。地此方へ來れと遣り過して大袈裟切。ナウ悲しやと迯出す相肩眞二つ。二人を仕止る刀の音に悑り驚く駕の垂。開けて迯出る裝作が。詞ア、申し〳〵。私は御領分に住む百姓。博奕は打たず喧嘩は嫌ひ。成敗にあふ科はない。御赦されて下さりませと。歯の根も合はず顫ひゐる。詞ア、音高し〳〵御身の上に氣遣ひなし。地必ず騒ぎ給ふなと座敷へ伴ひ窺ふ中。奥方一間を轉び出で。ヤレ板垣か遲かりしと スヱテ跡は涙に取亂す。詞ホ、さぞお待兼。併し御用の品も首尾よく調ひ。只今同道御悦び下さるべし。奥樣申

し常磐井様と。地いへど答も泣入る母。詞ハテ心得ぬ御有様。何にもせよ委細の譯も仰有らず。泣いてござつて事濟むか。勝頼様は何處にござる。ヲ、其勝頼に逢はしてくれんとフシ首提げて立出づれば。詞ヤアこりや若旦那の御首。すりや早や御最期遂げられしか。地ハア、はつと計りに腰も抜け。胸も張裂くうろ／＼眼。拙者めが心當の事あればたとへ如何様の事ありとも。必ず聊爾の出來ぬ様と。申置いた兵部も待たず。天にも地にも懸替なき大事の若殿殺して仕舞ひ。泣いて濟むか悔んで濟むか。地エ、言ひ甲斐なしとも胴慾とも。いうて返らぬ此有様。いたはしや殘念やと拳を握り齒を噛みしめスエテ五臟を絞るばかりなり。詞ヤアごくにも立たぬ世迷言。泣きたか緩りと跡で泣けと。地首提げて村上はオクリ旅宿を。へさして立歸る。地跡見送つてうろ／＼と身の納りを鍰作が。申しお侍様私はもうお暇申します。マア人に何の合點もさせず。何やら好い事があるおれ次第になつて居いと。無理やりに駕へ捻込み。連れてござつた此屋敷。さつきにからの様子を聞けば。私を身代りにするのぢやげな。何所の國にか滅相な。人の首を斷なしに切らうとは。惨い氣なお侍様。畢竟身



代りが遅なつて。間に合はなんだりやこそあまの命。ヲ、どうやら思ひなしか。首筋元が冷りする。地ヤレ〳〵怖や恐ろしと。フシぞゝ髪立てて立出づれば。詞ヤア一大事を知らせ其分に歸されず。不便ながらも覺悟せよと。地切込む刀かいくゞり鍔元しつかと片手に握り。詞ハテ身代りを遣うたといふではなし。正眞の首渡したを誰が知つたとて何の大事。そしてマア人の命を澤山さうに。瓜か茄子切る様にお赦しあれと突放され。ヤア土ほぜりに似ぬ不敵者。いよ〳〵助け歸されずと地又切付くれば身をかはし。無刀のあしらひ手練の切先危く見ゆる後の障子。兵部が髻ぐつと引寄せ一刀さすが痛手に七轉八倒。こはそも如何にと常磐井御前障子さつと引明くれば。血刀さげて信玄公悠々然と立ち給へば。はつと奥方簑作も フシ身をへり。下り恐れ入る。地信玄一間をしづ〳〵立出で。勝頼が最期にも出合はず。今又兵部を手にかけし某が所存の程。さぞ常磐井の不審ならん。詞ヤア〳〵濡衣。言付け置きし物はや〳〵持て。地ハツト答も涙ながら夫の血汐に染めなす片袖。なく〳〵御前へ差出せば。地信玄御手に取上げ給ひ。詞十七年の春秋を。我が子と思ひ暮されし勝頼こそ。それなる兵部が實の悴。御身と我が血をわけし。悴といふはあの簑作。改めて親子の對面されよと。思ひも寄らぬ詞に悔り。詞スリヤ腹切つた勝頼は我が子でなく。此簑作が眞實の。ヲ、其證據は此血汐と。地御佩刀の血片袖に押當て〳〵押拭ひ。是見られよ此血の。外へも散らず合體せしは紛れもなき親子の血筋。詞十七年以前勝頼誕生せし砌其板垣も一子を儲く。其子が面ざし我が悴と似れば似る物生寫。見分け難きが彼奴が惡念。人知らぬ間に摺りかへ置き。己が悴を主人と崇め主人の胤を我が子となし。己が手にも育てずして病死と僞り。信濃の國の片邊へ一生不通にやつたる事。天眼通は得ざれども卽座に知つたる此信玄憎き逆心一分だめしと思ひしが。今戰國の時に至つて。人の子を我が子とし。我が子を他家に育つるは智謀の一つと奥にも語らず。不通にやつたる其先へ我が手を廻して育てし簑作 慮の圖をはづさず。主となしたる己が子に自然とかゝる今日の災。因果の廻り來るとは知らず己が悴が身代りに。大恩請けし主人の子の行方を捜して連歸り。又殺さんと謀る人外め。國賊とやいはん人面獸心。地天の御罰思ひしれと扇を取つて丁々。はつたと蹴すゑし信玄の。詞に知つたる フシ我が子の身の上。地かゝる野心の者とも知らず。忠義一途の侍と思うたが面目ない。詞それ

に付けてもこの簑作信玄様の御子とは知つてか但し知らずにか。地其儀は我を育てたる乳母が疾より物語。又父上にも是までに忍び／＼の御對面。詞スリヤ稚い時より百姓の。家に在りしも父御のお指圖地とは言ひながら系圖正しき武士の弓箭の業は日にも見ず。身は鋤鍬の泥まぶれ。フシ憂にやつれしその姿。地今改めて親子の對面。衣類大小早や／＼持て。詞まづ暫くと押留め。京都の武將義晴公敢なく討たれ給ひしより。父を始め諸大名へ疑ひかゝる今此時。地それ故にこそ勝頼に。腹切らせしも父の言譯。詞いまだ立つとも立たぬとも。知れざる中に某が又勝頼と立歸らば。いよ／＼疑ひ一身にとどまり難き此館。地身を民間に育つを幸ひ。此身此儘簑作と。白洲へおりて簑と笠世に降る雨は凌げども。我が身にかゝる。横しぶき洩れて姿も濡衣が。始終を聞いて覺悟の刀。隙さず止むる强氣の手負刃物たぐつて我が腹へぐつとつき立て引廻し。ア、恐ろしきは天の照覽主人の罰。詞信玄公の仰せ一々違はぬ我が惡心。悴を國の守と崇めんと。子故の闇に眼くらみ。地くらみ／＼て悴が眼病。藥祈念も叶はぬ筈。勿體なくも御主人を害せんとせし大罪人。逆磔にも行はれず大將の御手にかゝる有難さ。詞コリヤ濡衣。此館の御重寶。諏訪法性の御兜。今謙信の手に入りたり。汝も信濃生れとあれば。今の命を存らへて。何とぞ國へ立歸り。方便を以て兜を奪取り。勝頼公へ奉らば。親と一つでない悴。ホフシ死後の言譯此上なし。詞申し奥様。お赦しあつて此願ひお聞屆け下さらば。地生々世々の御厚恩と伏拜んだる四苦八苦。不便と奥方濡衣引立て。詞大惡人の兵部なれどもそれには染まぬ勝頼が孝心。知らぬながらも親子となりし緣あれば濡衣を親里へ返すがせめて手向草。詞ホ、尤もなる母人の御計らひ。兜の事も捨置かれず今腹切つて死したる勝頼。親と一つでない言譯。地忠義の仕樣は濡衣が心次第と死を留める。詞にさすが死なれもせず。御意に隨ひ法性の御兜。命に代へて取返さん。詞ホ、あつぱれ出かした此簑作。猶も姿を下賤に扮し。地義晴公を討つたる敵草をわかつて尋ね出し詞其時こそは勝頼と。立返つて御對面と フシ早や立出づれば信玄聲かけ。詞義晴公を害せしは四海を望む叛逆人。中々容易き敵にあらず特に手練の飛道具。いまだ日本へ渡らぬ兵器。譬へていはゞまつ此通りと。地用意の鐵丸車輪の如く投付け給へば。すかさず笠にてひらりと受留め。詞火に德のある物は水に德なし。諸葛臥龍が工夫の地雷。火玉飛びちる術ありとも我が方寸にも大河あ

り。何かは以て恐るべき。未だ日本へ渡らぬ鐵砲それこそ究竟詮議の手がかり。尋ね出すは瞬く間。地追付け歸り簑作が身の納りは其時々々。其常磐井に濡衣が暇申すも涙にて。物の黒白もなき夫に。似たる菖蒲や杜若。花紫の明方は。盛と見えし槿も今は名のみぞ勝頼の。御手へ頓て。鳥兜。花にもなせし惡業の フシありて其名は鬼薊。因果は廻る日車に。のりの此身と絶え入る兵部。不便と見やる信玄は仁あり。智ある勝頼に名殘おく方女郎花。桔梗刈萱秋の野の月に。名をふる更科や信濃路。さして出でてゆく

第 三

地名も山深き信濃路に。優しき花の。名に呼びし此處ぞ フシ桔梗が原とかや。地甲斐と越後の領分にわけて立てたる境目の場所。秣を刈りにやつこらさ。江戸一本きめた刀より研立鎌でぐわつさぐわさ。踏み荒したる銘々が主の威光を刈場の領。是も同じく二人連。籠に朸を フシ指荷ひ。地見て悔りのどつてう聲。詞ヤイ下司め。俺が部屋ではついに見た事もないしやつ面ども。誰に斷り此秣を刈りほした。惡く言譯ひろいだら。二人共に首が飛ぶ。地盜人めらと言はせも立てず。詞ヤア下司の口から下司呼ばはりしやらくさい。忝くも甲州の主。信玄公のお馬の飼料。うぬらが知つた事でないすつこんでけつかれと。地猶も引きぬく手先を捉へ。詞ヤイ此標が目に見えぬか。甲斐の領分は是より東。西は越後領分と書いてあるは。うぬらが眼にかゝらぬか。盜人というたが誤りか。地サア／＼何とときめ付けられ。返答こつつり後から。握り拳を二つ三つ。詞ヤア傍輩をぶたれては。後日に主君へ言譯立たぬ。地やぶれかぶれと二人の奴。フシ挑み争ふ折こそあれ。詞兩人共に鎭まれと。フシ聲打掛の裾けはらし。高坂彈正が妻の唐織。越名彈正が女房入江。夫と指圖に腰元ども用意の腰かけおく家老の。女房と見るより下部共。フシ別つてこそは蹲る。地入江邊に心を付け。詞誰ぞと思へばお厩の沓藏百内。何故の爭ひぞ。事によつては聞捨てられず。地包まず語れと尋ぬれば。詞ハイ／＼。喧嘩の元は馬の飼料。信玄殿の家來とぬかし。此方の領地へ踏込み。刈り荒せし狼藉者。我々に見付けられ。言譯なさの掴合ひと。地語る中よりもうよい／＼。詞それでさつぱり様子が知れた。國が變れば心まで變ればかはる。甲斐の國はすべて盜賊はやりしと。人の噂も嘘ではないと。地あてこすられて唐織も。むつとはせしが押鎭め。詞互にお主の確執よりおのづと隔たる兩家の中。家來の

仕落は幾重にも。お詫び申す筈なれとも。只今のお詞に。すべて甲州には盗賊ありとおつしやつた。其一言が承りたい。ヲヽ唐織様とした事が何の根問に及ぶ事。もと此信濃は村上左衛門。義淸殿の領地なりしが。謙信様と信玄様兩人して切取り給ひ。此所に境目の標。それを知りつつ狼藉せしは貴方の御家來。國の守の扶持人さへ是ぢやもの。ましてや町人百姓は猶以て。狼藉するは知れた事。イヤおつしやんな。標ありとは言ひながら。一つに續きし原なれば。過つて踏越えしもいはゞ下郎の刈取る草。イヽヤ下郎にもせよ誰にもせよ其過ちをさせまい爲。建てたる牓木は國家の禁制。花咲く木々の枝とても折取るまじと記せしを手折れば卽ち落花狼藉。地此領分の標に限らず。縱へ白紙に書くとても。事を制する理に等しく。是皆國の敎として。掟を守るは貴人より下々の掟とする。詞謙信様の息のかゝつた領地へ踏込み草一筋でも刈取つたは。國を盗むも同じ事。其儘に指置いては夫彈正の越度。女房の身として見て居られず。地高坂様はともあれ私が夫彈正殿ついに一度も名を穢せし事なければ。お前の殿御と一口には。ほんに言うても下さんすな。詞コリヤ面白い聞所。お前の殿御が執權なら。私が夫も執權職。イエ〳〵そりやお前の胸一つ。深い様子は知らねども。侍衆の口癖にも。高坂様は逃彈正。こちの夫は鎗彈正。人に勝れた鎗の上手と。地逃足早いお侍とは異名さへ違ふもの。まして心の内外も違ひやんすとほのめかす。詞イヤコレ入江様。武士の身は情によつて。引くも逃げるも軍の習ひ。ヲヽ好い口な事仰しやるな。情でそんな異名を取る。武士の法がござんすかと。地いはれて唐織當惑の。何とせんかた此場の無念。廣言憎しと思へども入込んだ越度といひ。夫をさみする詞の端。聞くに辛さもいや增る。涙隱して入江様。花によそへ名に顯はし。非を改むるお前の存分。返す詞も家來の仕落。地今は此儘歸るとも滿つれば缺くるの道理にて。今日のお禮は重ねてきつと。詞ヲヽそりや仰しやるまでもない。私が方に非太刀は受けぬ此以後主人の領分へ。つゆ程もお障りあらば。二度と赦しは致さぬと。地殘す詞も針の先。眞綿に包む唐織が。立寄る所をとゞむる下部。是非・も涙の道筋をオクリ左右へ。こそは別れ行・く。地爰に信州筑摩郡の邊に住む。慈悲藏といふ者あり。生得親に孝心の道は昔の郭巨にも。かはらで積る年の數。本フシ三十の上は漸うと二つか三つの稚子を。抱入れたる懷の。内　フシ曇りなる。冬の空。寒さを凌ぐ種ならで。スヱテ歎きの種

となりふりも。フシ茫然。として佇めり。詞ハア誠や人間の吉凶は。生るゝ時の運に任すといふ。母の胎内を出でしより誕生の祝儀とて。ざゝんざ諷ふ悦びは。貴人高位はいふに及ばず。下萬民の我々迄も。悦びに悦びを重ねるが親子の縁。夫に引換へ其方は。僅か慈悲藏が悴と。生れ來るもそちが因果。地親の心子知らずと我が肌付くれば現なく。結ぶ榮花も夢の夢。頑是なけれど聞いてくれ。詞親として子を捨つるは。人間ならぬ境界と。笑ひし此身に廻りきて。今といふ今其方を。爰に捨置く此親が一人の母へ孝の爲。捨つれば捨ふ神佛の。力を借つて成長せよ。地親と思ふな子でないと。思切つても切りかねる。産の母が歎きといひ。我も不便さ身に迫れど。そちを庇へば不孝となり。孝を立つればそちが難儀。理に迫りたる思ひ子を捨つる此身の孝行より。捨てらるゝおことが孝行。惨いとばし思ふなとスヱテ言譯。なみだ目も明かねば。そつと傍に置く土の。上に臥したる稚兒が。わつと泣出す聲に悚り抱き上げ。泣くを道理とこゝかしこ。唄山を越えて里へ往た。里の土産のナホス見納めと。抱きしむればすや／＼顔。流石童の氣さんじと打守り／＼。名は慈悲藏の慈悲もなく。今目前に捨置いて歸ると知らぬ心根を。思ひ出せば不便やといとゞ。涙のやるせなき。詞ハア我ながら誤つたり。地心弱くて叶はじと。包み廻せし絹の香の。思ひは二重胸の闇もとの所へ押直せど。知らぬ子供の寢入ばな一世の別れと繰言を。跡に殘して雪國のつもる歎きと知られたり。地かゝる折ふし甲斐國の執權高坂彈正時綱。供人數多引倶して當所築摩の御社へ詣の道も膀木の傍件の捨兒に眼を配り。詞人音稀な街道に。捨てられし稚兒は。犬狼の餌食は治定。地見捨てるも本意ならずと。家來を止め歩みより。詞ム、最早嬰兒といふでもなく。男子と見えて氣高き寢顔。賤しからざる者の悴。何故爰に捨置きし。地仔細はいかにと見廻す小袖の絎紐に。付けたる下札手に取上げ。詞何々甲州の住人山本勘助と。地讀みも終らず不思議の顔色。詞此山本勘助といふは。生國は三河の者山賤と見えて。魂は異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者。主人豫て御懇望。地かゝる亂世の其中でも。諸方に招く今日只今。此稚兒に名を記し捨てたる主こそ芳しき。勘助を味方に入るゝ信玄公へよき土産。詞ヤア／＼者共。身が屋敷へ連歸れと。詞にはつと若黨中間。フシ抱き取らんとする所。地高坂殿暫くと。地聲をかけたる立派の侍。家來につかせし鍵印。長尾入道謙信が郎等。越名彈正忠政。我が領分に打通れば。高

坂は甲斐の領牓木を中に挾箱。不和なる中の兩執權。すは事こそと下部まで フシ 団唾を。呑んで聞居たる。詞 イヤなに高坂殿。只今物陰より承れば。是なる捨兒が下札に。山本勘助と書付けし故お拾ひなさるゝ御所存尤とは存ずれども。見まする所雙方の領分へかゝり合せし上は。貴殿のまゝにもなりますまい。手前の主人長尾謙信。日頃望みし折に幸ひ。其姓名を書表はし爰に捨てしは某が。願うてもなき忠義の一品。貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば。彈正が首諸共。さもない中はいつかな叶はぬ。ホ、境目の論なら金輪際。拾はにやならぬ稚兒が。踏んだる足は手前の領分。イイヤさにあらず。物の始を頭といへば。此方の領分を枕としたる山本勘助。越後の國の旗大將。見事貴殿は拾ひめさるか。ヲ、いふにや及ぶ。我が方へ踏延したる足元が。肝心要の甲斐の國。高坂彈正が拾うて見せう。イ、ヤ越名彈正が連歸る。



イ、ヤならぬと刀の柄。地 理を非にさせぬ詞詰め。争ひこゝに二人の女房。とくより立聞く此場の時宜。見やる眼も角菱の。めい〳〵夫を押隔て。高坂が妻威儀繕ひ。及ばぬ私が一思案女の差出がましけれど。彈正殿問かしやんせ。詞 甲斐と越後の領分へ捨置きし稚子は。兩家に望む山本勘助。是を手筋に召抱へるお前方

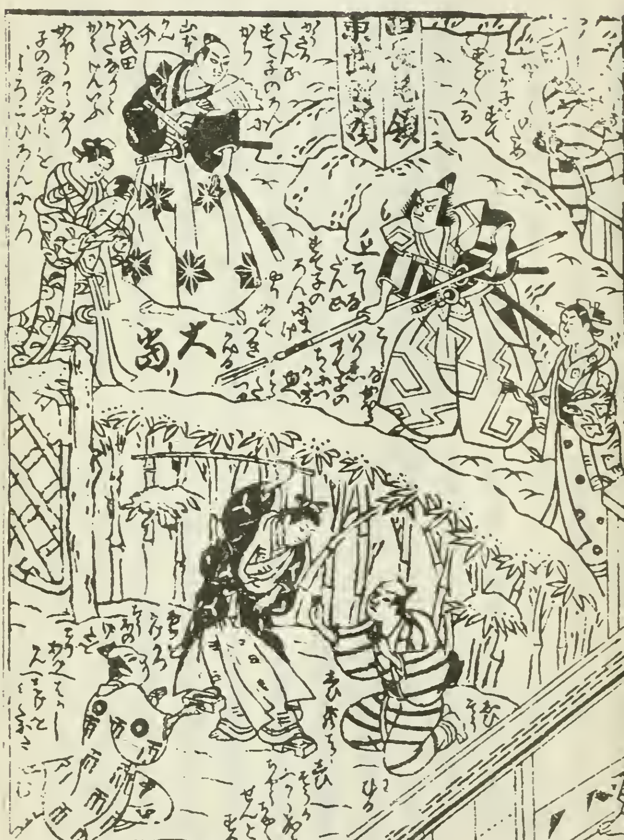
の胸の內。一方へ拾はれては是非一方の國の恥。共爭ひの基となり。肝心の此兒に乳も呑まさず。若しもの事があつたならば。お望みも水の泡。何にもせよ兩方より。乳房含めし共時に。地何れへなりとも呑付く方。夫を證にお拾ひあらばどちらにひけも劣りもないと。わしや思へども跡や先思案してたべ我が夫と。道女の智慧の海。實に高坂がフシ妻なりし。詞女房出かした。爭ひ止むる乳房の鬮取。地幸ひ其方が持合せし乳を與へて試せん。地彈正殿も相應な乳母でもあらば出されよと。入江に當てたる詞の端。聞くよりくわつとせき立つ入江。おかもじ樣の御思案に鼻毛延した今のお詞。詞越名彈正忠政が女房。乳母奉公は致さぬぞ。今一言仰しやつたら。地赦しはせぬと腹立聲。詞ヤイ／＼馬鹿者。大事を前に置きながら。無益の舌の根動かすな。イヤなに高坂殿。負うた子に教へられるとやらで。內方の詞に服し女房々々が乳を勸め。どちらへなりとも方を付け。此場の別れは如何ござらう。ホヽそりや此方も望む處。呑むか呑まぬは互の運づく。唐織早くと勸められ。地だくつく胸も抑鎭め。抱上ぐれば目をぼつちり。明けて三つの稚兒が。わつと泣出す口の內。乳房ふくめて賺しても。フシ呑む體更に見えざれば。地見合す夫婦が顏と顏。詞コレ申し唐織樣。何ぼう勸めさしやんしても。子供はどうでも正直な。地わしが代ろと抱き取る入江。心に拜む神よりも賴みに思ふ此乳を。たつた一口呑んでたもと。ゆぶり歩けどけがな事フシ猶も正體泣叫ぶ。地聲をとめんと手に汗を。握り詰めたるいたいけも。悄やとすねて置く露の。賴みも綱も切れ果てし入江が思ひ唐織も。殘り多さに又立寄り。フシ賺し宥めて抱上ぐれば。地泣きやむ不思議女房より。高坂彈正大に悦び。詞軍師山本勘助。信玄公の御味方と。地いはせも立てずヤアヤアくらい／＼。詞兩方共に呑付かねば。未だ善惡知れざる中。其方へ連歸る其譯聞かんと詰めかくる。ホヽ合點行かずばよく聞かれよ。入江殿が抱上ぐれば泣くは治定あの如く身が女房が手にある中。泣かぬが緣ある是證據。又二つには甲州の住人。山本勘助とあるからは。紛ふ方なき手前の領分。最前ちらと承りしが。越後領へ指さゝば。此後は赦さぬとやらナソレ。御內方の詞もあれば。是とてもまつその如く。稚けれども甲州の町人共許がお構ひあらば却て狼藉國賊の。名を取らるゝか彈正殿と。地先にかけたる詞の裏釘。折返されてさしもの彈正。返答せき切る女房入江。思へば無念と唐織が。抱きし稚兒無理やりに引取ればわつと泣

く。是は無體な入江様さつきの喧嘩に負けたる代り。其子ばかりは叶はぬと。あなたこなたと挑みあふ。裳ほら／＼妻と妻。顔はほのめく薄櫻亂れ散つてぞ フシ 爭ふ風情。地 一度にわくる夫と夫。中にも高坂聲励まし。實にや至つて正直は頭にやどる神の慈悲。一陽の春を待つ雪中の梅にも優る。主君の悦び此身の忠義さればいな。お慈悲深い信玄様の御威勢が顯はれて。私が無念もたつた今。サア申し入江様。最前のお詞にお前の殿御を何とやら仰有つたが。今一言御所望と。嘲る女房ホ、、、。詞 聞きたくば名のつて聞けん。長尾入道謙信の郎等。越名彈正鐵彈正。イヤモ天晴手練の此鐵先。受けてはたまらぬ大事の稚兒。連れて手前は逃彈正。地 唐織來れと立別る丶。胸に一物二人の彈正。爰に捨兒の隨一と。其名も高き山本氏 伴ひ。歸るぞ 三重 へゆ丶しけれ。フシ 秋の末より。地 信濃路は。野山もフシ 家も。降り埋む。海道 雪の中なる。白髪の雪。本フシ 女ながらも故あつて。地 男のすなる名を名のる。山本勘助と人毎に。いは間の水の スヱ 音たえて。木の葉の谺二つ三つ年も幼氣稚兒を賺すお種が手枕に。寢兒が フシ 守は何所へ往た。地 山の薪をえいさつささらば爰らで一休み。

詞 お種女郎冷えますの。ヲ、正五郎様戸助様。吹雪で外は歩かれまい。お茶も沸いてござんす。イヤ／＼構ふまい子持は手が放されぬ。慈悲藏殿は留守か今日も今日と寄合ふとあの人の噂。お袋への孝行は申すも愚か兄への深切。ほんの子は次にして兄貴の息子の其次郎吉を。大切にしらる丶女夫の衆の心意氣。名も慈悲藏といふが尤も。サレバイノ。夫に又兄の横藏殿。兄弟とてあの様にも違ふものか親への不孝さ弟へのむごさ。親兄弟にさへあれぢやもの村中で持餘すが尤も。外を家と出歩いて隣邊へたゞれ込み。人の娘下女婢當り合に孕まし。其おこもりのあの小悴も。親に似た子の鬼子であろと。地 口はさがなき山道を。ゆがまぬ武士の梓弓胸の袋に押包み。孝を外さぬ慈悲藏が。獵漁も母の爲 フシ 流れに添うて立歸る。詞 ヲ、孝行者お歸りか。佛性を慈悲藏殿。殺生に出られたもお袋への養ひか。夫程にさつしやつても氣に入らぬあの婆様は。さりとはきつと片意地者。ア、これ／＼勿體ないことというて下さんな。縦へ身を紛に碎いても。胎内にあるから今日までの親の苦勞。くらべて見れば百分一。地 あの鳩部屋の鳥でさへ。鳩に三枝の禮ありとて諸鳥に勝れて孝行な鳥。何處からとも無う此家の軒へ集つて來るも。慈悲藏が心少しは通じ。類を以て集つたかと思うて嬉しう思ひます。詞

成程夫はこちとらもさる書物で見て置いた。烏は親の養ひを。育みかへすといふ本文おれが毎晩女房に。孝行にする心が通じて。地烏がかあ〱かゝの顔。いんで見ようと出でて行く。詞母ぢや人は最前からまだお寢みなされてか。炬燵でお風ひかしますな。地お目の覺めぬ其中にお肴料理して上げん。次郎吉も寢入つたか。ハイ此子が機嫌よう育つに付けても。氣にかゝるは峰松が事。詞ほんに兄御の横藏様。いかに我が子でないとて捨ててしまへと無理ばつかり。お前が外へ出やしやんすと。私を女房にせうの何のと辛い。悲しい事聞くも。お前の孝行立てる爲と。地辛抱するにもしられぬは。眞實な子を胴慾な餘所へやつたといはしやんすが。まあ其先は何所の誰。ハテ詞夫を問ふがもう未練。氣遣ひしやんな此貧家に置かうより。乳母に乳母を付ける結構な内へ養子にやつた。彼奴はきつい果報者。もう思ひ出さずととんと捨てたと思うて居や。病煩ひといふ事もある。萬一先で死んだら無い昔ぢやと。諦めておりや居る氣ぢやと地云ひながら。犬狼の餌食とも。なりはせぬかと子を思ふ心は一つ一間の中。そつと窺ひ是はさて。詞寢入つてござるかと思へば裏へ出て御氣丈千萬。お炬燵に火もあるか。追付け御膳の用意もしやと。地片時忘れぬ孝心は。フシ又と類は。あらし吹く音も吹雪に高足駄。フシ踏分け尋ね來る人は長尾三郎景勝。萬卒は求め安く一將は得難しと。此隱家の弓取を慕ひて フシ一人門の口。道具や二重の腰の白妙に。枝もたわゝの雪折竹。杖と我が子に助けられ。フシ庭に佇む老女の風情。詞申し〱此大雪にさりとては冷えまする。蒲團の上にござつてさへ御老體の身の上。地平にあれへと取る手を拂ひ詞七十に餘つて愚鈍にはなつたれど。子供に物を敎へられぬすべて親に仕へるに起臥の介抱は誰もする。何事によらず親の心に背かぬ樣にするのが誠の孝行。寢てばかり居るも氣詰りさに。雪の景色も見ようと思ふ。母が心を妨げるは何と不孝であるまいか。ハ、ア一々誤り奉る。其段には心付かず。地お年寄られて一日一日御氣力の落ちるが悲しく。今日も獵に出で。元氣を養ふ谷川の。ます〱お達者なる樣と。志の捧物賞翫なされ下されかし。詞イヤ〱物の命を取り夫が何の養ひ。眞實親の養ひなら。遠い山川の珍物より。つい裏にある竹藪の筍を掘つて來い。ハアそれは御意ではござれども。此寒の内に筍が。サアある物を取つて來るは子供でもする事。ない物を取寄するがほんの孝行。斯ういはゞ母が難題言付くると思はうが。此位の難題に困る樣な

器量では智者と呼ばれて人に知らるゝ。弓取にはなれぬぞよ妾が夫は。天が下に聞えし軍師。詞一生主人を取らず過去られた忘形見。兄弟の子が器量を見定める迄は。女ながらも夫の名をつけ。山本勘助と名乘る此母。二人の中に勘助といふ名を譲り。父の軍法奥義の卷を傳へうとは思へども。夫では中々勘助にはなられぬ。サア其名跡を受けたさに。心を盡す此慈悲藏。ソレ／＼其名がほしさに孝行を盡すは眞實の孝ではない。上皮の僞り表裏。コレ／＼それはお情ない苗字を望むも出世して。母人の悦び顏拜みたいばつかり。兄者人の心入と一つに思し下さるゝは。地餘りつれなき御心とフシ雪に。喰付き落涙に。地老母は猶も腹立聲。詞コリヤ何ぼ利口に言廻しても。此年月膝元を離れ他國して居て。今日此頃俄の深切是が僞りといふ證據。己が心に引比べ兄を



不孝と言ひなす惡心。思へば見るもいまはしと。地杖振上げて打たんとす。老の力みに踏挫く駒下駄飛んでよろめく足。コハあぶなやと抱きとむれば。詞イヤイヤ／＼汝が世話は受けぬわい。地そこ退きをれと親と子の。心合はざる片足の下駄。景勝透さず拾ひ取り御召物これに候と。老女が前におし直し フシしさつて頭

を下げらるゝ。地母つく〲と打守り。詞人品骨柄只人とも見えぬお侍。賤しい婆に履物を直されしは。黄石公に沓を與へし張良が俤。ハテ地おくゆかしき御方や。お近付にもなつて。とくとお禮も申したい。詞コリヤ慈悲藏其方に用はない立つて行け。ハアはつと地何か仔細はありそ海母の心を量りかね。フシ是非なく奥に入りにける。地いざ此方へと請ずれば。フシ辭する色なく座に直り。詞御推量少しも違はず。黄石公に劣らぬ軍者。山本氏の御子息を召抱へて。一方の大將と頼まん爲。地身不肖なれども越後の城主。長尾謙信が嫡子三郎景勝。是迄參上仕るとスヱテ禮儀。正しく述べらるれば。詞扨こそ〱。始めより自然と備はる御眼ざし。して御望みなさるゝは兄弟の中兄か弟か。イヤ景勝が望む處は惣領の横藏。ハテナ最前より御覽の通り。孝行な弟慈

悲藏を差置き。不孝な兄の横藏を。御家來になされうと仰しやるお前のお心は。イヤそりや其方に覺えある事。諏訪明神の社内にて。面體恰好とつくりと見屆け置いた横藏。是非に身どもが所望致す。ム、左樣おつしやれば思ひ當る。よくよくに思召せばこそ大名のお手づから。いやといはさぬ此婆に。下駄を預け給ひしは天晴敏き フシ殿ぞかし。詞兄は只今他行なれど。此母が成り代つて御家來に差上げう。過分々々。其箱是へと取寄せて地いかに老女。詞主從となるからは。一命を捨てても忠義をはげむ。武士の習ひいふに及ばず。此方とても一身を任すといふ。かための一品受取られよ。地若し違變あらば フシ身の上たるべし。詞御念に及ばず其時は母が皺首差上げるか。家來にするか二つの安否。後程々々。老女。地さらばと詞詰。威風鋭き北國武士。越

後縮の物なれて引けぬ其場の。信濃路やオクリ別れて。へこそは歸らるゝ。地木曾山木立あらくれて。無法無轍をしにせにて名も横藏の筋街道。草鞋のひもふり埋む餌竿。かたげてフシ門口より。地母者人今戻りましたと。聲に老母がほや〱顔。詞ヲ、兄待ちかねました。此間はマア何處へ行て居やつた。ハテこな和郎は。おれが足でおれが歩くに何處へなと飛び次第。飛びついでに戻りがけ小鳥十羽程捕らうと思うて。顔も足も切れる樣な。道理々々サ、、、ちやつと上りや。地〱と草鞋の紐。手づから母の慈悲藏も。足の湯を取り機嫌取る。詞兄者人お足洗ひましよ。イヤコリヤ〱。孝行な兄が體に不孝な弟が手をさへるは穢らはしい。母が洗うてやりましよと。地一人に辛く一人には甘い女子の鼻の先。泥脛突付け。詞エ、若い女子の手のさはるは好いもの

ぢやが。乾物の樣な母者の手で情の罪科ぢや。いか樣おれは孝行者。此小鳥も晩の夜食に。こな樣に喰はすのぢやない。燒いて貰うておれが喰ふ氣兎角おれが口さへ養へば。こな樣の氣が休まるなら母者人。さうとも〳〵あのマア孝行な事わいの。サア〳〵炬燵に火もして置いた。ム、こな樣が今まであたつてゐて何の恩にきせる事。エ、こりやぬるい水炬燵ぢや。イヤ〳〵あんまりきつい火は上つて惡い。それがたはけといふ物。もうこなたも追付け火屋へ行く體。稽古の爲にきつい火にも當つて置かしやれ。サア足揉んで下あれと踏出す兩臑慈悲藏見かね。ドレ私がと立寄れば又差出るか小癪者。兒やかうか〳〵と撫でさする奔走息子のフシ鍬平足。詞ア、とてもなら美しいお種がもんでくれりや好いに。ハア貴樣子守か。峯松はどうした。ハイお指圖の通り。

思ひ切つて一昨日主が何所へやら。ム、捨てて了うたかよい事〳〵。一體おりや貴樣に惚れてゐる時に。幸ひと嗅のそげめは死て了ふ。跡に殘つた小悴の其次郎吉邪魔な餓鬼めしめ殺さうかと思うたれど。味なもので子といふものは親よりちつと可愛いゝものぢや。又大きうなつたら俺に似て孝行にも爲をろかと思うて。貴樣に育てさすからはナウ慈悲藏。畢竟わがみと相合の子。とても事に女房も相合にする合點。お種顏振らずとムンと言やいの。それをいやと言ふと慈悲藏が大事がる此母者に當るぞよ。コレしつか〳〵と揉ましやれエ、地まだ火がぬるいと戀の意趣を。炬燵にあたる非道者。フシ持餘してぞ見えにける。地折ふし表に先走り。詞山本勘助殿に用事あつて。大僧正武田信玄參上なりと案内に。地思ひがけなき夫婦が不審。仔細あらんと横藏が。

起きも直らずフシ空寢入。詞ハテ扨思ひ寄らぬ大身のお入。卒爾には母も逢はれまい。慈悲藏饗せ。コレ横藏。これはしたり。何やらいひ〳〵寢入つたさうな。地風ひきやんなと一間の障子。引立て窺ふ表より。匂ふ留木の高坂が。妻と知らせてうづ高き。雪の懷稚兒を抱いて。幾重の。柴の庵。地家來は先へと追ひ返し。行儀正しく打通る。訝しながら手をついて。詞信玄公の御入と思ひの外なる女中の御名は。ヲ、成程御不審尤も。僞りならぬ信玄公のコレ此寢顏に對面なされと。地いふに女房立寄つて。ヤア峯松が戻つたかと。飛立つばかりのフシ胸押鎮め。詞是は〳〵御苦勞樣や。そんなら峯を貰うて下さりましたはお前樣か。いかいお世話樣に。コレ〳〵麁相いふまい甲斐國へ養ふからは最早一國の世繼。卽ち今日の信玄公。孝心深き慈悲藏殿殊に

軍術の達人と聞及び。師範ともお頼みなされん爲。わざ〳〵見やしやんせコレ愛らしい此信玄が抱へに來た。お受け申されて地よからうと思ひをかけたる名將の情は肝に徹ゆれどとぼけた顔で。詞是はしたり。私は此在所の山賤。鋤鍬の外何にも存ぜぬ者を。軍術の師範なぞとは。勿體ない事仰しやります。コレ〳〵此方の人。お前の器量を聞及んでとあるからはきつい譽な事ぢやぞえ。卑下するも事による。ハテ軍法奥義は。母樣の傳授の卷を譲り請けて。さればいやい。それを貰うて山本勘助になつたれば。抱へられまいものでもなけれど。未だ生も變へぬ中に軍術の大將のと。そりや山の芋を蒲燒にする樣なもの。名さへ慈悲藏とて蟲さへえ踏殺さぬ者が。軍に出て人の首が。何として〳〵と。地取つても付かぬ顔付に。唐織はつと胸せまり。不調法な女の使お

氣に入らいで仰有るのか。どうあつても味方に付いて貰はねばならぬといふ其譯は。桔梗が原に此捨兒。山本氏とある書付を。印に拾ひ取りは取つたれど。サアどうも力に及ばぬは肝心の乳に呑付かず。何ぼ抱いても突付けても。あつち〳〵と指さして泣いてばつかり。此大將に兵糧がなければ命も危し。其兵糧を續ける謀は慈悲藏殿。お前の心にありさうな事。甲斐國へ味方に付いて。夫婦して守育てうと思ふ心はござんせぬか。此マアちつとの間にコレ何所もかも。細つた事を見やしやんせ道理でもある。眞實の母御の懷を離れて。他人の手に何の育たう。夜はえ寢ず。晝はうつ〳〵泣寢入に。寢た顔のいぢらしさ。ほんに地見る目が悲しいと。語る中より女房がヲ、可愛やさうでござんせうと。わつと泣出す母親の。聲に目覺しがみ付き縋る乳房は一人に

て。子の手柏の二面。盡ならぬこそフシ恨みなれ。地一間に母の聲高く。詞コリヤ〳〵慈悲藏。子供を餌に恩にかけて味方にせんと。後穢い信玄に奉公しては武士が立つまいさりながら。軍法奥義も傳はらず。家の名跡を繼ぐ氣がなくば。地勝手次第と沒義道に言捨て障子。フシはたと閉す。地ハアはつと立上り。我が子を取つて引きはなし。詞須彌山滄海の大恩を受くればとて。母の恩にはいつかな〳〵信玄に仕ゆる事存じも寄らず變改申す。コリヤ女房。一旦捨てた此悴に見苦しい何ほえる。緣に引かれて知行取つては末代までの名折。親子の緣をさつぱりと切つて了へば。信玄に恩もなく義理もなし。コレ此竹も其本は。竹に雀と離れぬ中。今餌差竿となる時は。鳥の爲には怨敵。事によつたら親子兄弟。敵味方となるも武士道。お返事は此通り。稚兒

連れて地早や歸られよと。詞銳に言放す。詞ハア此上は力なし。地とはいへ歸つて御主人や。夫に何と詞さへ。なく／＼フシ抱き立出づる。地コレなう峯松一世の別れせめてマア。この乳が一口呑ましたいと慕ふ女房を引退けて。枝折戸ぴつしやり。表にも心は殘る雪中へ頑是。なみだのフシ子を抱き下し。地打掛の下ぐくり括り添へたる後紐。垣に結ぶは義理の綱神や捨置く竹の子笠。いたいけつむりに打著せて。詞山本の氏を繼ぐ慈悲藏殿を。軍術の師と賴まんとこれまで來給ふ信玄公。どうも此儘では歸られず。是非とも味方に付くといふ一言を聞くまでは。此信玄は其許の門口を立去らず。雪に凍えて死す迄も爰に座を占め返事を待つ。大將の命助けうと殺さうと御思案次第。よい返答を賴み入ると。地垂絹をかけたる雪の笠フシ思ひを。殘し捨てて行く。詞ヤアそんなら坊はまだ往なぬか。コリヤ／＼。門には誰もない。よし居てからがあかの他人。今傍へ寄るとナ。信玄の恩を受けたになつて。母の一言反古になる。此簀戸の外へ一寸でも出るが否や。夫婦の緣も是限と。地腰さげの紐鐶を括る慘さは我ながら。いかなる惡魔鬼か蛇か。六韜三略の望みある慈悲藏。慈悲も情も知つては居れど。母の詞は背かれぬ。詞どうで乳房に離れた者とてもない命。凍えて死なば死に次第。そちもソレ其子を袖にしては。兄貴への義が立たぬぞ。ハア何かに紛れて。大事の孝行怠つたり。ドレ裏へ行て雪の中の。筍掘 て進ぜうと。タヽキ地簑笠取つて打被きあつき親子の緣をたつ。鍬ふりかたげ。詞此寒氣に荒男でさへ堪らぬもの。餘尺もない體に。アア子を捨てる藪はあれど。地親の詞は捨てがたき。文彌裏の藪へと踏みわける。雪より先にいとし子の埋もれ死なんか不便やと。見合す顏に降る涙。霙爭ふ。濡翅林清オクリしをるゝ。夫のナホル後影。いかに望みがあればとて天にも地にも一人子を。よう慘たらしう捨てられた。詞今の女中も氣の强い。置いて往ぬ程ならお家に寢さしていんだがよい。可愛や／＼ひもじからうのに。地ちつとの間なと抱きたいと。任せぬ辛さ次郎吉を。漸うそつと下に置きさし足。本フシながら庭に下り。タヽキ覗けば門にしよんぼりと。詞ヤレ坊よ夫がマア何と命があるものと。地明けんとすれど鐶に。錠の代りの眞結は。慘やつれなとあせる程。雪にしめつて開かぬ戸に。ちゝたい／＼も絕え／＼の風にうたてや次郎吉が。わつと泣く聲。ハア悲しやと。又かけ戻り抱上げて。サハリ雪やころゝん霰やころゝん。こはそも何たる因果ぞや。この子憎いぢやなけれど

も。我が子に乳が呑ましたい。コレちとの間〳〵寐入つてたもいのと。心も空は。フシかきくらし。又降りしきる白雪に外に。泣く聲八寒地獄。劍を呑むより身にこたへ。思はず知らず轉びおり。碎けよ破れよの念力に。はづるゝ戸より身は先へ。コリヤぼんよ〳〵と我が子を肌にフシ抱きしめ流涕。こがれ泣く聲に。地唐織木蔭をつつと出で。詞信玄公を抱き上げ。乳房をふくめ參らすからは。慈悲藏はもはや此方の味方。地夫に知らせて悦ばせんと勇んでフシ館へ立歸る。地はつとお種も心付きうろつく隙に何處より。懐劍ちやうど峯松が肝先貫き息絶えたり。コハ何事と驚く中。次郎吉を引立て横藏が。一間をさしてかけ入れば。詞ム、扨は我が子の害になると横藏の所爲ぢやの。義理も情ももうこれ迄。敵を取らいで置かうかと。地死骸を小脇にかい込んで。常に

は弱き女氣も恨みに強き力帶 オクリ奥へ。へ窺ふ忍び足。フシ早や日も暮に。近づきて。鐘孝行の。道ぞとて。古き例の跡を追ひ。子故の闇に白妙の道も。涙に フシ見えわかず。詞なんぼ掘つても筈があらう樣はなけれど。親を思ふ一心を憐み。天より授くる事もやと。地心に込めて。一尺二尺底は白羽の鳩一羽。飛んでおりしも飼ひなれし。フシ鳥も心のあるやらんと。地又掘りかへせば又一羽 中オクリ友呼び。誘ふ生類の。有樣つく〴〵打守り。詞最早入相。諸鳥塒に歸る頃一羽ならず二羽三羽。集り來るは。ハテ心得ず。誠や。兵器ある地には鳥群をなすといへり。我が父は日本の軍師。此所にて世を去り給ふ。一生諳んじ置かれたる。六韜三略の秘密の卷此下に。埋み置かれしやらん。扨は我が孝心天に通じ。鳥類是を知らせしか。地ハア有難し忝しと。心勇んで掘

穿つ。雪も散亂群雀ばつと立つたる藪の中。窺ふ兄が頬魂。詞ム、野に伏勢ある時は歸雁列を亂る。油斷の塒を窺ふ惡鳥。殺さうと生かさうと手の内の雀。慥に手ごたへ。この下を。コリヤ待て慈悲藏。埋んである傳授の一卷汝にはやらぬ。兄が出世の種にするわい。兄者人そりやお前無理でござりましよ。サイヤイ。無理いふか兄の威光。阿呆烏の孝行ごかし。邪魔な汝から仕舞うて取る。どつこいさうはなりますまい。苗字を繼ぐは此慈悲藏。見事われが。繼いで見せう。地小癪な退けと鋤と鍬。落花みぢんの雪と飛んで。掘出す箱の二人が爭ひ。道と非道の二筋を滑つつ轉けつ。摑みあふ。はずみにがはと取落し。池にざんぶと。水煙騷ぐ群鳥兄弟も フシカヽリ不思議と。見とるゝ後より。障子ぐわらりと母の老女兩人待て。詞兄弟共に武士となり主人を取るべき時

節到來。雪の中の筝を掘出したる慈悲藏。今こそ母が心に叶うた。天晴孝行出かした〳〵。其方は最前言付けた通り。裏口四方に氣を付けよナ合點か。ハア委細承知仕ると。地駈入る弟横藏は。池中の箱を引上げて フシ母の。御前に差出せば。詞サア〳〵兄。そなたには別てよい主を取らする。即ち主人より下されし。裝束も更めさせんと。地しづ〳〵奥の白臺に。無紋の上下白小袖。傍に三方九寸五分。フシ我が子の前に直し置く。詞母者人コリヤ何ぢや。いやさコレ此白裝束は何の爲。ヲ、それこそは冥土の晴着。只今其方が首打つて。身代りに立つるのぢやわいエエイ。緘相な事ばかり。此首を身代りとは。そりやマア誰が。今日其方が主人と頼みし。長尾三郎景勝公の御身代り。聞及ぶ武田信玄越後の謙信。室町の御所に於て。互に我が子の首討つて。心底を顯はさんと契約ある由。最前そちを召抱へんとて來られし。景勝の面體そちが顔にさも似たり。扨はと母が推量違はず。箱の中に殘されし此一通に。委細の樣子詳かに記されたり。主從となるからは命は君に捧げし物。武士の因果と諦めて。潔う死んでくれ。コレ〳〵〳〵よう思うても見やしやれ。いかに主ぢやとてまだ知行もくれぬ中に。殺さうといふ樣な胴慾な主があるものか。イヤ〳〵もう此主從とんと變改。イ、ヤさうはなるまい。いつぞや諏訪の杜において殺さるゝそちが命。助け置かれし景勝の恩忘れはせまい。其時の情は今身代りに立てん爲。智謀の罠にかゝりしとは知らざるか。恩を知らねば人ではないぞよ。たとへ逃げても此家のぐるりは。景勝の家來取卷いて一寸も遁れはない。切腹するか但し母が手にかけうか。サア〳〵なんと 地なんとと詰めかけられ籠中の鳥の目はうろ〳〵。隙を見て逃出す。膝口はつしと手裏劍に フシ 尻居にどつさり詮方なく。詞是非に及ばぬもう是までと。地腹切る刀取るより早く右の眼に突込んだり。流石の老母も不審顔流るゝ血を押拭ひ〳〵。詞母者人景勝に似たによつて身代りに立てたがる。小面倒な此面に。かう疵付けて相好變へれば。もう身代りの役には立つまい。今日只今父が苗字を受繼ぐ。山本勘助晴義。軍法奥義を胸に貯へ三略の卷より大切な此命。ヤア〳〵謙信の家來直江山城介種綱。夫へ出でよ言ひ聞かす仔細ありと。地呼ばはる聲に一間の內。見參ざふと慈悲藏が。優美の骨柄。長裃 フシさわやかに。詞某長尾の家臣たる事深く包んで故鄉へ歸りし其仔細。母人には密に語り。豫て申受けたる兄者人の命。現在の子を捨てたも否應いはさぬ命の無心さりなが

ら。眼を抉つて。身を全うする大丈夫の魂。あつたら勇士を殺すは残念。長く謙信に仕へ。忠勤を盡さるべしと。地言はせもあへず冷笑ひ。詞愚か〳〵。謙信づれが家來には汝等が分相應。身が主には釣合はぬ。まこと山本勘助が崇むる主人は忝くも。足利十三代の公達松壽君。是へ誘ひ申されよと。フシ詞の下に高坂が。妻の唐織次郎吉を傅き申せば。山城親子ハアはつと計り飛びしさり。フシ恐れ入つたる計りなり。地眞中にどつかと直り。詞ヤイ山城。只今打つたる此手裏劍は。先年室町の館にて此公達の御母。賤の方を奪ひ取り立退く折から景勝目當に打ちかけたる我が小柄。只今我が手へ慥に落手。山本の苗字を引興さんと軍學に心をこらす處に。地武田信玄大僧正姿をやつし只一人。密に庵へ來らせ給ひ。詞足利の行末覺束なし汝我が力となつて事を謀れと。名將の一言心魂に徹しハ、ア畏り奉ると。即座の領承地弓矢の誓。詞ヲ、共時に此母も只人ならずと思うたが。扨は武田信玄公と。主從の契約しやつたの。ヲ、サ。大魚は小池に住まず。鶴は枯木に巣をくはず。知勇兼備の大將に賴まれ申せし身の面目。地直樣都に馳上り。窺ふ時しも館の騷動。詞義晴公はあへなき



御最期。地ハツアせん方なし。懐胎の賤の方人手には渡さじと。忍び入つて御家の。白旗諸共守り奉り。立退く館は八方に提燈松明。ちる花の。都を跡に遠近の雪の信濃路爰かしこ。月の更科の片山里に。人知らず隠まふとは。さしもの母も御存じあるまい。詞知らなんだ／＼コレコレさうして御母賤の方の。在所は何所。サ、、どうぢや／＼。地ハア申すも便なき事ながら。憂き事つもる産後の悩みはかなく此世を去り給ふ。詞跡に残りしあの公達勿體なくも我が子と偽り。次郎吉よ／＼と。呼ぶ度々の空恐ろしさ口惜しさ。弟嫁が乳を幸ひ。我が子を捨てさせ。他家のあの子を養育さする我が心底。我儘無法は一物ありと悟りし老母。雪の中の筝を掘つて見よとは。天晴明察實に勘助が。フシ母人ぞや。地穢れを厭ひ今日まで。埋み置いたる雪中の筝是にありと。箱押取つて差上ぐる源家正統武将の白旗。詞神明を頭に戴く義兵の旗上げ。謙信親子只今より此勘助が幕下に付けと。立歸つていひ聞かせよと。地一つの眼に天が下見下す富士の山本勘助三國無雙の フシ弓取なり。地山城大きに感じ入り。詞信玄景勝不和なるも。互に心を疑ひあふ。忠臣割符を合すが如し。君御



在家知るゝ上は。景勝公の言譯立つて。身代りにもう及ばぬ。追付け兩家和睦の基。成程々々最前裏で直々に樣子を聞いた。信玄公と勘助樣。言合せのある事は。一家中へもお隱しあれば。夫高坂も露知らず。抱へに來た慈悲藏殿は。思ひも寄らぬ長尾の御家來。君の御事初めて聞いた使の面目。地此上なしと悅びの。地中に歎きは一人の孫斯う心が解けるなら仕樣もやうもあらうもの。詞此婆が偏屈から。信玄方の恩受けては立たぬというた一言で。直江が手にかけ殺しやつたは。卽ち母が殺した同然。コレ〳〵〳〵嫁女赦してア、勿體ない。乳房に離れて死ぬ命。思はず知らずお主樣の。お役に立つたも因緣とフシ泣かぬ顏するいぢらしさ。地母は一間の一卷携へ。詞不孝と見えし勘助は却て父の名を上げる。二十四孝に優りし孝。器量も揃ふ二人の子供。軍法傳授の此一卷。地頂戴しやと差置けば。勘助取つて押戴き。詞父の苗字を賜はれば。勘助が身の規模は立つ。母方の氏をつぐ弟直江が母への孝。其德によつて此一卷は。其方に下さるゝ。御恩を忘れず猶此上。地孝行怠る事なかれ。景勝の忠心は我胸中に徹したれども。詞心得難きは親謙信。君に弓引く逆心ならば。汝も從ふ心や如何に。言ふにや及ぶ。我が子を切つて二君に仕へぬ此山城。兄とはいはさぬ敵味方。此三略の恩を仇。一合戰仕らんヲ、さもあらん出かす〳〵。我又主君に仕ふる甲斐の。地天目山に立籠り。出合ふ所は川中島。運に乘じて越後の出城諏訪の城まで押寄せ。〳〵さも目ざましき勝負をせんず。詞ホ、潔しさりながら。假にも一旦景勝に。請けたる恩は何と〳〵ヲ、。日月に誓へたる右の眼は越後へ進上。二心なき勇士の固め。母に與へし片足の下駄。景勝の志捨つるは武士の道ならずと。地左の足にしつかと履き オクリおり立つ。庭の高低も。道はゆがまぬ弓取の直なる竹の根もとより。はつしと切つたる旗竿は。盛運目出たき大將の。誘ふは賢き御笑顏。眠れる花の。死顏に合抱いてゆぶつてすかしても。返らぬ昔唐土の二十四孝を目のあたり。孟宗竹の筍は。雪と消え行く胸の中。氷の上の魚を取るそれは王祥。是は他生の緣と緣。黃金の釜より逢ひ難き。その子寶を切離す弟が慈悲の胴慾と。兄が不孝の孝行は我が日の本に一人の勇士。今に。名高き山本氏。武田の家の礎と事跡を。世々に殘しける

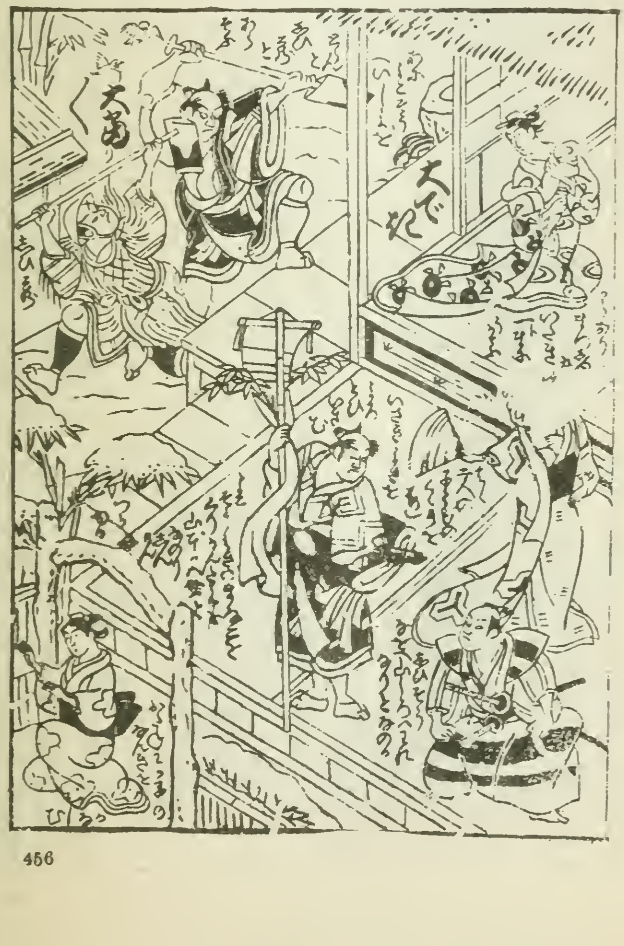
第四　道行似合の女夫丸

歌ギン僞りの。文字を分くれば。人の爲。身の爲ならず戀ならず。心なけれど濡衣

がナホスフシ亡き夫。の名も。勝頼にオクリ件ふ人も。勝頼というてよしある鍰作が。散し配りて薬賣。今日立出づる フシ此國も。フシかいしよありげな。女子の所體。ギン奇特幘子に。筒脚袢跡に續いて薬荷を。擔ぐ肱笠袖笠の。匂はぬ花の降り積る。フシオクリ信濃路。へさして。行く道の泊り〳〵や。宿々へ商ふ物は草の種。命の種の生薬。フシ詞に艶を濡衣が。詞そも此薬は陸奥南部に隠れなき。新羅の家の名方。萬の病ひに用ひてよし。それ薬一粒は。たとへ千金萬金にもかへ難き フシ其我が夫は。世をさりて。冷泉いつの。世にかは。海道木曾の流れの。山川に。女浪男浪がさて美まし。フシ夫婦ならねば。つい言ふ事もかた田舎。長地情がましい一言はいはじ岩間の細道を。歩み馴れたる脛の雪。二上り唄夫は冥土に我が身はこゝに。櫻。花かやちり。〳〵に。花かや櫻。櫻。花かやちり。〳〵にナホスフシちりに交はる神心。伏拝み行く臺が原。道行く人も指ざして。あやかり者とあだ口に浮名立つるもア、恥かしや。今の我が身は。なか〳〵に戀も。情も荒れはてし。ギンオクリ青柳過ぎて宮田の町。とかく。浮世は。伊勢の濱荻。難波の蘆とかはれどもかはらぬ。物は夫の名と。おまへもいはば勝頼様。いつの世にかはあひ染川の。身の浮沈み七度は。氷を渡る信濃路へ。急ぎ行くのが。フシ第一丸。此御薬も鍰作も。もとが新羅の流れにて彼よし是よし世の中も ギンよしと浮世を渡る ハズミ川心。にごさず墨染の。此身の末は天の川。空にも戀があればこそ。雲に浮名は七夕の糸繰返し返しつゝ。戀の染衣濡衣が昔を忍ぶ流行唄。三下り唄くるか〳〵と川下を見れば。川原柳の。影ばかりさりとは影ばかり。川原柳の影ばかり君を待ち。忍び〳〵につま戸へ來れば。月の影さへ。氣にかゝるさりとは氣にかゝる。月のかげさへ氣にかゝるエ、逢ひたやな。ナホス問ふも語るも。フシいく難所。野越え里越え山越えて此處の一村彼所の宿の。軒つゞき薬々と賣り聲もやさし。しをらし立並ぶ家居に今宵一やどりと暫く。勞れを。三重へはらしける

詞なう恐ろしや〳〵。怖い咄でちりけ元から身の毛がよだつ。燈心一筋減すべいと。地相州北條氏時の和田の別墅。村上左衛門預りて今日留守番の中間小者。百物語も親方のフシ油甜りと知られける。詞サア〳〵今度は術内が咄番だ。又おらが。燈心もよつぽど減りうそ暗うなつて隅々が見らるゝ。信玄の領分天目山と國境の此信濃なれば。化物が出べい。わいらもソレ鍔元くつろげてをれさ。ヲ、此寒六も冬平も油斷はせない。若し女の化物が出

たら。段平物で打切るより打切買つたと思うて。かつゐてゐるだんびら物に満足さそ。サア／＼術内咄せろさ。ヲ、サ／＼昔甲斐國に悋氣深い女があつて。男の心の變つたを恨み。夜な／＼男の門に行き。聲うちふるはして。なう恨めしや。妬ましや。言ひかはしたを忘れはせじ。今こそ思ひ知らすべいと。戸を蹴破り男の喉へ喰ひ付き。生きながら鬼になつたと京大阪の芝居で。甲斐國の女の鬼と。狂言にしたげな。夫から其家が毎夜さ家鳴。フウ是はよつぽど怖い咄だ。聲ふるはせずと咄せろさ。コリヤ寒六其様におらがねきへ寄るなやい。イヤサわれが身どもを押すぢやないか。シテ其後はどうか／＼。それから二階がめき／＼。裏背戸がぐわた／＼／＼。地アレどろ／＼と家鳴がするは。百物語の不思議かと。赤鰯の反打ちまはし。もつそをきらずで喰ふ如く壁を睨んでフシ尻込する。地其中にどん／＼と間近く聞ゆる太鼓の音。詞待て／＼。あれはお旦那村上様和田山で獣狩の列卒太鼓。アレ／＼近う聞えるから。お歸りに間もあるまい。地妾ら片付け掃除して。化物より恐ろしい。旦那のお目玉貫ふなと。フシ皆部屋々々に入りにける。地見渡せば野も山も皆白妙の和田の



山。雪の下伏す兎狸猪狐を狩取らんと村上左衛門義清狩装束花々しく。山案内の狩人召連れ獲物を列卒にさし擔はせ。フシ 和田の別墅に立歸り。地 門開かせて村上左衛門。悠々と打通り。詞 ア、冷えるゝ世上の譬に違はず。犬骨折つてたかの知れた獲物。北條殿の此下屋敷を預かる某。今日の猪狩も私の遊興でない。諏訪明神の神使は年經る白狐。信玄是を信仰して武運を祈ると傳へ聞く。何とぞ此狐を狩りとらんと思へども。神通得たる白狐にて狩人の手に及ぶまじ。さるによつて一國の野狐を殘らず狩取らば。神通得てもさすがは畜生。萬一白狐を射留めたらば莫大の褒美。地 其旨きつと心得よと フシ さも横柄に言渡す。地 近習の侍飯山郡太後馳に立歸り。詞 茱列卒の殿を仕らんと。引下り候所に。高島の坂中にて年ふる雌雄の狐を見出し。弓に矢をはげ



追掛けしに。小笹が隈に逃入つてかいくれに行方知れず。無念千萬仕損ぜしと。薄茅原掻き分けて捜せしに。狐に勝りし女の曲者生捕りて参上致す。ナニ女を生捕つたとは。必定敵方の紛れ者。幸ひ新身の刀試胴切にしてくれん。地 是へ引けと詞の下。引立て出づる。小牡鹿の是も夫戀ぶ女と見え。都育のぽつとり風。地 女

好の左衛門大口くわつとよく見れば。地戀こがれたる腰元八つ橋。其儘抱付きたい所。地家來の手前と フシ人體作り。詞ホホウ郡太いしくもしたりな。コリヤ女近う寄つて身が顏を見い。ナコレ村上ぢや〳〵。おれを慕うて遙々の所を能うおぢやつたなうと。いふ所なれど爰は主人の下屋敷。アレ多くの家來共がナ、合點か。コリヤ者ども此女今夜身が寐間に引きすゑ。新身の段平物を以て。腑の下を試して見ん。寢所に土壇の用意。地急げやつと片頬に澁面片頬に細目。詞コリヤうぬらは何してをる。早くうせう汝もうせいと地叩り付け。フシ邪魔を拂うて。詞コレ戀人そもじの事を明け暮れに。サハリうつら〳〵と戀ひこがれ。詞待ちに待つた念が居いて。今日爰へおぢやつたはこれ偏に諏訪明神の引合せ。今日から身が奥。但しは嫌か。サヽ、どうぢや〳〵と ギンしなだれかゝり。抱付けば振り放し。詞私はお主の行方を尋ね吟ひ。これより東の方を志して行かねばならず。地お志は有難けれど。地今は歸して給はれとスヱ涙ぐめば。詞そりやならぬ。言ふ事聽かねば百層倍で仇する左衛門。それでもいやか。地何と〳〵といへど答も泣き入る八つ橋。詞エヽしぶとい女め。コリヤノ〳〵家來共。此女眞裸にして氷責め。八寒地獄の苦みさせい。責めよ〳〵と高聲に。八つ橋庭にフシきえ入る心地。地折もこそあれ取次の侍罷出で。詞甲斐の國武田信玄の使者高坂彈正越後國長尾謙信の使者越名彈正。通し申さんやと伺へば。村上驚き。フウ長尾は格別。武田とは鋒先を爭ふ中。其兩家の使者一所に來たとは心得ず。地何にもせよ對面せずば臆せるに似たり。詞ソレ逃走りせぬ樣に其女には繩ぶつて庭の樹木にくゝし上げい。地敵國の使者なれば手だれの武士ども次の間に。ぬかるなやつと言渡し。其身も衣服更めてオクリ悠々。ヘとして。フシ坐しゐたる。地程なく入來る高坂彈正越名彈正。刄を爭ふ使者と使者。物をも言はず辭儀もせず。見ても見ぬふり上下の襞と。襞ともフシすれ合ふ中。地兩人刀拔置きて。遙下つて高坂彈正。口上の趣といはんとするをまづ待て高坂。詞此越名に辭儀もせず。使者の口上マアなるまい。トハなぜに。門前へ乘込むも一時。玄關へ上るも一時。身が口上申上ぐる迄。すつ込んで居よ逃彈正。ヲ、此高坂逃げたか逃げぬか只今勝負。地ヲ、合點と刀おつ取り袴のそば取り。サア〳〵勝負と フシ立向へば。地村上大口明いてから〳〵と打笑ひ。詞主の使者に立ちながら。汝等が威勢を爭ひ。身を果すうつけ武士。身に對しては不禮と言はうか慮外者。察する處長尾

は先達て北條に心を寄する氣。武田も共に氏時の味方となり。此村上とも和睦して。謙信は信玄を亡し。信玄は謙信を亡さんとの頼みの使者。地違ひはせじと村上に。星をさゝれて詞を揃へ。詞御賢察の通り味方願ひ奉る頼みの使者。お受なされ下さらば。我々迄も大慶と恐入つて述べければ。ホヽウ我が眼力違はざりしな。兩家の頼聞入れぬも武士の本意ならず。兩家の返答依怙なき樣に武勇鬮。弓矢打物の勝負にて。勝つたる方へ北條村上共に味方。幸ひ是に山狩の弓矢二手。氷を積上げ垜として。一寸二寸の的は勝負遲し。五尺の的を射させんず。ヤア／＼郡太。其しぶとい女めこそ屈竟の的。胴腹を射通させつれない心に思ひ知らせよ。女め引けと地いふ間もなく。繩目血走る細腕。本フシ涙ながらに八つ橋も。フシ泣く／＼引かれ立出づる。詞あれ見よ兩人。

此女は足利家の賤の方腰元八つ橋。我都にて見初め。折がな時がなと思ひし處に。今日思はずも此村上が手に入れどもつれない女。我が詞を背く故汝等が勝負にて彼めを成敗。我が見る前で胴腹を射通せと。地刀を杖につつ立上り眼を配れば高坂越名。如何はせんと躊躇ふにぞ。詞猶豫すれば味方はせぬ。地如何に／＼と聲荒らぐれば兩彈正。辭するに及ばず弓矢手挾み。不便には思へども國の爲にはかへ難し。心に篤と觀念せよ。詞サアサア高坂勝負ぬかるな。地ヲヽ心得たりと諸共に。弓と矢つがひきり／＼と引きしぼり弓手馬手へ身を開き。切つて放す目當は村上。射かくる矢先兩手にしつかと。詞ハヽヽヽ察する處謙信信玄心を合せ和睦を言立て。此村上を討取らんとは愚か／＼。所存も知れざる汝等に。弓矢を渡す左衛門が大肝に。汝等が矢先が立つ

べきか。ヤア家來共女を引立て。地きやつばらを搦捕れと。聲の中より列卒の者フシばら／＼と追取りまく。詞エヽ欺し寄つて討取らんと計りしに。仕損じて高坂。ヲヽ越名地無念々々に腮叩かすなと取付くやつばら。右と左に踏みする蹴する一度にかゝれば信玄流。謙信流の太刀打早業。手を碎いたる働きに。家來も列卒もたまりかねむら／＼ぱつと逃入れば。地目ざすは村上遁さじと。雙方より切りかくるを。引つぱづし／＼重ねて切込む刄と刄。ヲヽ合點と身をかはし。傍なる火鉢でしつかと押へ。引かん／＼ともがく二人が首筋摑み。ぐつと引寄せ締付けられ無念々々ともがけども。膝にかためてびつくとも動かさず。詞汝等此村上を欺討に討たんとせし。其返報に踏殺さうか。但しは摑殺さうか。如何したら腹が癒よ。ヲヽ夫よ。地答の矢を射返さん。

肝のたばねに受取れと。尖矢二本逆手に取り喉吭ぐつと一抉り。ゑぐりゑぐられ高坂越名。七顚八倒五體をもがき。フシあへなき最期ぞぜひもなき。詞女めは何所にをる。早く〳〵と地呼ばれておづ〳〵八つ橋が氣も魂も身に添はず。此體見るよりはつとばかり。袂を顔に押當て。フシそゞろに顫ふばかりなり。詞コリヤ八つ橋。おれに敵たふ奴原が。此死ざまをよつく見たかと。地尖矢引抜きどうど蹴飛ばし。詞女もおれが詞を背くとまつ此通り。嫌でも應でも抱いて寢る。寢所へ來いとフシ引立て行く。地コハリ奥は俄に家鳴震動。庭の植込ざわ〳〵と風に煽つて蠟燭の。火影に見れば燭臺に目鼻あり〳〵。三下り唄 咲太夫 眞太夫 朝顔の朝に咲いて。夕には。露の命も戀故ならば。儘よてんぽの皮巾著。珊瑚の珠の目を光らし。腰にもつれて フシ寄添へば。咲 地村上ぎよつとし。詞コリヤ何ぢや。フウ聞えた今日山狩の狐狸。我に仇する憎くい四つ足。地目に物見せんと燭臺蹴飛ばし。此方へ來る フシカヽリ縁側に 岩 眞 又によつぽつりと。石燈籠。火袋に顔まざ〳〵と。有明の月の眉。目元に色を夜目遠目。笠に苔むす手水鉢。やらじと止むる柄杓の手。跡へ戻れば青天井がくるり。くる〳〵蛇の目むき出す轆轤口。開いて窄めて。相合傘の袖と袖。雨や雪霜ふらばふれ〳〵。フシ濡しはせじと一本の足手纏ひとなり瓢。コハリ瓢箪から駒下駄も庭の飛石ぐわた〳〵〳〵。待合の半鐘のうなり。くわん〳〵鑵子。コハリ刀掛字の角軸も。三幅對の竹に虎嘯けば風おこり。龍吟ずれば雲起り。炭のおこつた大火鉢。目鼻しかめてナホス這寄れば。戸障子襖ぐわた〳〵〳〵。咲さすがの村上氣を奪はれ。女を小脇にひんだかへ。行けども行かれず。岩戻れど戻さぬ妖怪に。刀を拔いて切廻れどたゞ雲霧を。三重へ切る如く。地腕もなまり五體も痺れ。眼眩んでよろ〳〵と。どうど伏したる村上が形計りはあり〳〵と。玄關廣間大座敷書院。床の間御成の間ありつる女も消失せて。館と見えしは信濃路の雪降り積る和田の山吹雪ばかりや。三重へ殘るらん。咲 詞 返せ〳〵。迷子の殿様かやせ。地かへせ〳〵と高提燈に太鼓鐘。升の麁忽な大名の。殿様返せと大勢が。フシ尋ねさまよふ向うより。詞えいさつささツ〳〵サ。地夜道を急ぐ早飛脚。詞コリヤ〳〵飛脚物問ふべい。只今われが來る道で。殿様らしい迷子には逢はなんだか。イエ〳〵殿様らしいはさて置き。夜の殿にも逢やしませぬ。フウそれならば金作りの刀脇指で。心中などしてではないか。水にはまつて若し死にはなされぬか。イヤそんな事は見當らぬ。迷子の子が大名

なら火にくばらしやろも知れますまいヤア早飛脚が何かといふ間に遅飛脚随分尋ねさしやませと。フシ道を早めて走り行く。地家中の者ども力を落し。詞ア、おいとしや〱。大方狐の業であろ。今頃はてつきりと。お召がへの雲雀毛が。穢い物を小豆餅ぢやと思召して。ひつたものあがるであろ。イヤ案じて居ても事が済まぬ。胡散なは此萱原。地捜して見ようと足軽ども。そこよこゝよと雪かき分くる萱の影。人こそあれと提燈手ん手に。見れば見る程。詞紛もなき迷子の殿様。申し〱迷子の子の殿様いなうと。地聲に氣の付く村上左衛門。むつくと起きたる其形は。筵袴に竹大小反打廻して大音上げ。詞それへ來るは武田信玄。かくいふは信濃の住人。村上左衛門義清が留めたやらぬと呼ばはつたり。ア申し〱。私はお草履取の化介でござります。フウ化か。信玄ではないぢやまで。あれ〱〱。卑怯未練の越後の謙信。地遁さじやらじと。追ふを止むる家來ども。詞コハ正體なき旦那の有様。人の見る目も恥ぢ給へと。地抱きとむれば漸うと狂ひ。伏してゐたりしが。地村上漸う心づき。文彌 やあら不思議や。今まで和田の館の内。越名高坂を刺殺し。我ながらついに覺えぬ勇力と思ひしが。ナホス詞こゝへはマアどうして來た。サア昨日の山狩から迷子におなりなされ。一家中が一遍三界。皆麓までお迎ひに參つてをります。ム、そんならおれが强かつたのは。狐の業か。成程かのでござります。かのとは誰ぢや。八つ橋か。やれ〱戀しゆかしと焦れた戀人。手に手を取つて歌歸ろやれ。足元を爪立て。ちよこ〱〱と爪立てて。フシ 行かんとするを。家來どもよつてかかつて。乗物に助け乗すれば徒士若黨。詞乗物參れにはい〱〱。地尋ね逢うたる太鼓鐘はやし立て〱。詞迷子の殿様取返した。返した〱。お先手を振る迷子の子。逢うてめでたき信濃路の ヒツユリ 薄萱原踏み。分けて ギン いなうやれ我が故郷へ。三重へ立歸る。地信濃なる諏訪の湖要害に。立籠りたる館城。長尾入道謙信は。代々越後の城主として。己が武勇の鋒先に爰も切取る諏訪の城。新たに建つる奥御殿は。義晴公の御幼君。後室手弱女御前。共にお成を設けの結構。フシ大方ならず見えにけり。地今日ぞ其日と腰元婢忙し中に立集り。何と皆の衆。去年からの御普請で結構に建つた奥御殿は。武將様とやらの後室様のお成ぢやげな。わしらはそんな事とは知らず。此館のお姫様八重垣様の御祝言。其拵へかと思うてゐた。ヲ、彼の人の言やる事わいの。八重垣様に御許嫁のあつた勝頼様は。去年

の秋御切腹それで其勝頼様の姿を繪に寫し。お姫様が明けても暮れても泣いてばかりござるが。そなたの日にはかゝらぬか。今日の拵へは今日本の大將軍のお子様なり。其後宝様尋常のお客とは違ふ。地それで此間より國々の名物をお求めなさるれど。今此諏訪の湖に氷が張詰め。舟の往來も叶はぬ故。何かが嚴い手支へと。役人衆の心遣ひ。詞夫程晴れなお客様故。念の念を入れて不調法の無い様にとの言付け。新參とは云ひながら物馴れた濡衣殿何かの事を頼むぞや。ホヽ是は又人を術ながらす様に。物馴れたやら馴れんやら。今參りの私御前方に引廻して貰はにやならぬと。地傍輩中のおれそれも。フシ中よく見ゆる中庭より。地いきせき出づる養作が今は姿も菊作り。花恥かしき角額綠先に小腰を屈め。詞奥庭の花壇の菊。かゞむを伸し延びるを縮め。枯葉一枚ない様に殘らず手入仕り。漸う只今相仕舞ふと。地言ふ顔うつとり腰元中。さても見事好い男。こんな男に手入しらるゝ菊の花はあやかり物。わしらもどうぞあの人の。手入で小菊が咲かしたいと。何がな惡口言ひすてに奥へ行く跡幸ひと フシ傍見廻し。地濡衣が庭におり立ち手をつかへ。あなたにお別れ申してより此館へ入込む私。程ふる日數の明暮もどうお暮し遊ばすぞと。案じるうちに思ひも寄らず。詞菊作りとなつて此館へ。お出でなされし勝頼様。御思案でもあつての事か。ホヽ不審尤も。此家の主長尾謙信。一子景勝を討つても出さず剰へ。義晴公の忘形見松壽君。御母公諸共今日此館へ招く段。心得難く思ひし故。菊作りとなつて入込む某。汝が役目は法性の兜。未だ奪取る便りもなきや。濡衣フシ如何とありければ。詞ホヽ其兜の事故に奉公に出た私。微塵も油斷は致さねど。何をいふても用心嚴しく夫故心に任さねど。お悦び遊ばしませ。今日の饗とあつて。其兜を上段に飾らして候へば。今日を過さずお手に入れん。すりや其兜が奥の間に。ア、お聲が高いと差寄つて呫き首肯く二人が相談。フシそれと白洲へ立出づる。地姿一癖ある親仁。詞娘々コリヤ娘と地呼ばれて恟り飛退く濡衣。詞ヲ、父様とした事が。あの人に花壇の事を言付けて居る所を。斷なしに娘々と呼ぶ様な。あた不躾な不遠慮な。何ぢや斷なしに娘と呼んだが不躾ぢや。こりやおれが惡かつたわい。今度から用があつて呼ぶなら。サア娘今呼ぶぞと先へ斷ろ。ハヽヽこりや前髪。わりや花作る事が上手ぢやというて。昨日から雇はれて來てゐるが。此花畑は此關兵衛が預かり。今日のお成のお饗になる花故取分けて大事と思ひ。助け

に雇うた花作り。もうお成に間はないが。地のらばかりかはいて居つて。それで仕事が出來るかよと。呵られて手をもぢもぢ。詞イヤモ外の花作ると違うて。不斷手入のしてある花壇故。何にも仕事はござりませず。漸うと枯葉を取つたり。花形のふりを直すが精際。夫故仕事も思はぬ捗いき。落葉一枚ない様に掃除まで仕舞ひましてござります。ムヽそれなれば精が出た。花壇が濟んだら外に用なし。次へ往て休息せいと。地許す詞に簑作がフシ勝手へこそは立つて行く。詞ハテさて見かけに似合はぬ精出す奴。兎角人は陰日向が大事のものコリヤ娘。地われも隨分精出して御奉公に私すなと。いふも親身の親子の中。詞ヲヽ父樣の忝いお詞。地稚い時より武田の家に宮仕。不慮の事故親里へ戻つて見れば。詞父樣も今では長尾の此家へ奉公を幸ひに。親子一所に宮仕。地新參者でも侮られず。傍輩衆にも憎まれぬはお主の御恩父樣の蔭。仇疎かには存じませぬ。詞ヲヽさう思へば冥加がよい。此親も御領分に狩人を商賣に。かつ／＼に暮した身分。謙信公の見出しに預かりお館に置かるゝは。此屋敷に在る諏訪法性の兜とやらは。諏訪明神より賜はつて。卽ち神の使しめ。狐が寄つて番をする不思議の兜。そこで又野狐どもが其兜を戴けば。官上りするとやらで折々館を徘徊する。見付次第打殺せと。アレ座敷先に小家をしつらひ。狐の番が役なれども。勇氣盛んな謙信公何の狐が來よう筈もなし。安閑としてゐる隙に仕覺えた花畑。時ならぬ菊を作るがお氣に入つて。狐の事は餘所になり。今では菊の花守親仁。地樂々と暮すも主人の蔭と。互の身の上しみ／＼と親子話の折からに。早や御成と騷ぎ立ち奧へ行く人戻る人。心せき兵衛濡衣もフシ奧と口とへ別れ行く。地館の主長尾謙信衣冠正しき設けの式禮。角立つ中にさと薫る音もしと／＼女中の手昇。フシ邊輝く錺乘物。見るより謙信謹んで。詞優曇花とやいはん稀代の御入來。冥加に餘る身の面目。地直に其儘奧御殿へと。指圖に隨ひ乘物は。奧へ行く跡謙信も。續いて入らんとする所へ。詞暫く待つた長尾謙信。奧方よりの御上意ありと呼ばはる聲。地はつと平伏頭を垂れ。待間程なく立派の骨柄。長袴の裾けはらし。上座にどつかと威儀を正し。先以て今日は御幼君松壽君。御母公共に入來の面目恐悅に思はるべし。さるによつて母君より。貴殿への上意餘の儀にあらず。先達て申渡せし子息景勝の首。今において討つても出さず。事延引にせらるゝ段必定野心に極まれば。御前において切腹を遂げらるゝや但し。景勝の首只

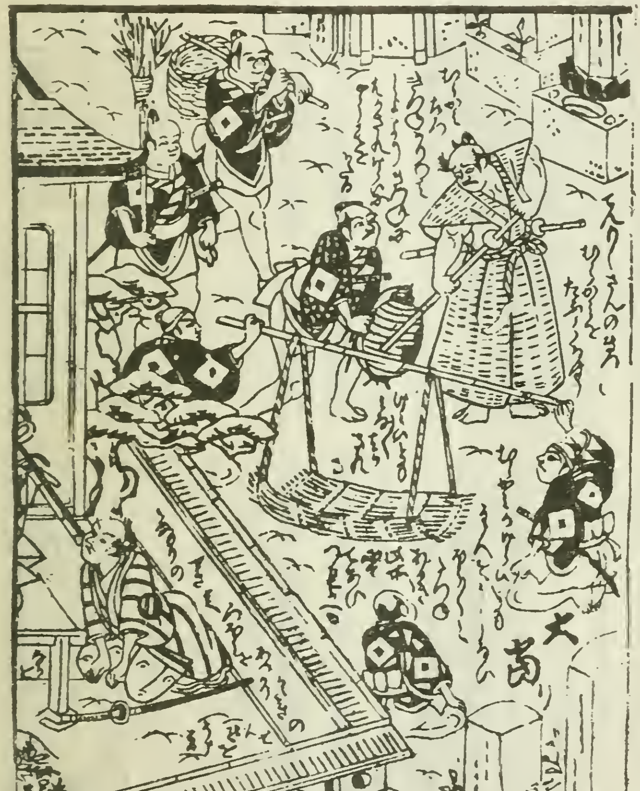
今討つて出さるゝや。返答次第計らふ旨あり。謙信いかゞと上使の權柄。地こは思ひ寄らざる御上意と。顏振上げて。詞ヤア汝は悴景勝と鷲く謙信さあらぬ上使。イヤ景勝にもせよ誰にもせよ。一旦悴を討つべしと契約ありしは諸大名の眞中。今において其沙汰なく。剰へ本國に引籠り。底の知れざる親人の所存。イヤサ謙信の心底と人の疑ひ立ち申す。何故さつぱりと我等が首。イヤサ悴景勝の首討つて心底は見せられぬ。サア首討つか但しはいやか。有無の返答承らん。サア〳〵何とと詰寄れば。地流石名を得し謙信も。悴を悴が討手の上使。返答何と當惑のフシ口を噤んで見えにけり。詞ヤア未練の心底。此上は某こゝにて切腹と。指添に手をかくれば。ヤレ暫く。必ず早まり給ふなと。地聲をかけて花守關兵衞。何か白洲へ白菊の。フシ花携へて立出づれば。

詞ヤア汝等如きが知る事ならず。退去れやつと景勝の。怒りにちつとも臆せぬ關兵衞。イヤ下として上の事。差出るではござりませねど。最前よりあれにて樣子承れば。如何やら斯う木乃伊取が。木乃伊になる樣な御上使樣。可惜しき侍の首切つて仕舞へば再び生からぬ。又此花は何ぼ切つても生けらるゝ。ナ切つて生かすといふ傳授お望みならば差上げたいと地どこやら詞の一理窟。聞いて謙信眉を皺め。詞ム、切つて生けると言ふ白菊面白し〳〵。關兵衞其花所望せん。成程花は上げませうが。花ばかりでは自由に生からぬ。夫を生かすは花作り。幸ひお次にをりますれば。是へ呼寄せ共々に。生ける傳授を御覽あれ。花作りの簑作御用がある地早う〳〵と親仁が呼ぶ聲菊作り。詞エ、けたゝましい何事と。地此場の樣子しら洲の內。息せき出づる顏形。詞ヤア

汝は武田勝頼といふをとゞめて。ア、申し〳〵それ仰しやるとものがない。何にも知らぬ白菊の花。其生け樣を能う覺えた此花作り。人の振見て我が振直すが第一の傳授事。ナ是さへ御所望なされば何もかもさつぱりと申譯の立ちさうなものと。憚りながら親仁めは存じますると。地簑作が身の上それと白砂に。額フシ摺付け蹲まる。詞ホ、天晴の花作り。今より館に召抱へんが。わりや謙信に奉公し花の生け樣傳授せんや。ハイ成程外の事なら存じませねど。花一件なら生かさうと殺さうと我等が得物。夫を取柄にお抱へなされて下されうなら。望んでなりと御奉公したき御屋敷。ホヽ出かしたうい奴。御上使への御返答申上ぐるはあの簑作。まづそれ迄は暫しの御猶豫。地偏に頼み存ずると。餘儀なき頼みに打領き。詞火急の御上意容赦はならねど。塩尻峠に

控へ居る諸大名へ申渡す仔細あれば。我は彼處へ立越えん。有無の返事は塩尻まで。隙どらば直に此城取圍まん。追付け有無の御返答。認むる中箕作も次へ參つて衣服大小。ハア、有難し地〳〵と。勇む箕作景勝は。苦り切つたる塩尻へヲクリ別れて。フシへこそは出でて行く。地跡見送つて闘兵衞は。謙信の前に手をつかへ。詞花作りの箕作合點が行かぬと存ぜしが。あれが大方ホヽ、紛もなき武田勝賴。夫と見出せし花守闘兵衞。下郎に似合はぬ中々器量のある親仁。其性根を見込み改めて謙信が。賴み入れたき仔細あり。我に賴まれ得させんや。返答聞かんとありければ。是は又改まつたお詞。元獵人の私。お見出しに預かつた君の大恩。縱へ命の御用でも。いやとは申さぬ我等が魂。ホヽ、頼もし〳〵。其詞を聞く上は。何をか包まん是見よと。地しづ〳〵立つて一間の障子。開けば内に怪しき牢輿。闘兵衞不思議とさし覗き。詞牢の内には科人らしき者も見えず。何やら見馴れぬ變つたのも。そりやマア何でござりますと。地尋ねに謙信威儀繕ひ。詞未だ日本へ渡らされば。汝等が知らぬは理これこそ鐵砲と名付けし飛道具。ムヽ。其又鐵砲とやらが盜みでも致せしか。何の爲に此牢へ。ホヽ、科は天下を望む叛逆。さいつ頃武將の御前へ。薩州種が島の浪人。井上新左衞門と名のり。此鐵砲を獻上し。類なき軍器の重寶。遣ひ樣の傳授せんと。瞞し寄つて義晴公を一撃に。跡くらまし其場を逐電。草をわかつて尋ね捜せど。今に行方知れざる曲者。詮議の手筋は此鐵砲。其所に殘りありしが。卽ち科人同然なれば。この如く禁牢させ。日毎の拷問手を盡せど。義晴公を撃ちたる敵今日まで白狀せざる不敵の鐵砲。只今より此詮議。汝に申付くる間。火水を以て責め訶み。敵の所在を白狀させよと。地鐵砲くわらりと投げやれば。手に取上げて呆れ顏。詞すりや私にお賴みあるは。此鐵砲とやらを責めいでござりますか。是は又思ひも寄らぬ。拷問も問狀もなみ〳〵の人間なら。及ばずながら責めも致さう。烟管屋の看板か。唐の火吹竹見る樣な物。地責めいとは御難題。あなた方の手にさへ合はぬ物。其上何を證據手がかりも。詞ヲヽ、手掛り證據は其鐵砲の遣ひ樣。昔く世上に知る者なし。其傳授を覺えし者こそ。ムヽ、すりや何と御意なされます。此鐵砲の遣ひ樣を覺えた者が。ホヽ、卽ち武將を撃つたる敵。スリヤどうでも詮議を私に。仕損ずまじき汝が魂。アノ此親仁が性根魂を。サア見込んで賴むに違背はあるまじ。油斷致すな闘兵衞と。詞も重き大將の フシ心殘して入り給ふ。詞アヽ、

申し〳〵。我等風情にこんな役目。難題も事による。地外へ仰付けられたいと。跡を眺めて。詞ム、未だ日本へ渡らぬ鐵砲。遣ひ様を覺えし者が。義晴を撃つたる敵。此關兵衞に詮議せよとは。ム、合點の行かぬ謙信と。地諸手を組んで工夫の顏色。詞ア、いや〳〵。どう思案して見ても。我等には似合はぬ役目。やつぱり似合つた花の番。鳥威の弓矢より。外には何にもしら髮の親仁。地ドレ小家へ往て一休みと。振擔げたる鐵砲も。胸に一物あり明の オクリ月漏る。フシ臥所へ行く水の流れと人の。簑作が姿見かはす長上下。悠々として一間を立出で。我民間に育ち人に面を見知られぬを幸ひに。花作りとなつて入込みしは。幼君の御身の上に。若し過やあらんかと。餘所ながら守護する某それを悟つて抱へしや。地ハテ合點の行かぬと差俯向き。思案に塞がる一間には。フシ館の娘。八重垣姫。許嫁ある勝頼の。切腹ありし其日より一間所に引籠り。床に縮姿かけまくも御經讀誦の鈴の音。此方も同じ松蟲の鳴音に袖も濡衣が。スエテ今日命日を弔ひの位牌に。向ひ。手を合せ。詞廣い世界に誰あつて。お前の忌日命日を。弔ふ人もなさけなや。父御の悪事も露知らず。お果てなされた



お心を。思ひ出す程おいとしい。嘸や未來は迷うてござらう。女房の濡衣が心ばかりの此手向。千部萬部のお經ぞと。思うて成佛して下さんせ。南無阿彌陀佛。〳〵誠に今日は霜月廿日。我が身代りに相果てし勝頼が命日。地暮れ行く月日も一年餘り。南無。幽靈出離生死頓生菩提。申し勝頼様。親と親との許嫁ありし様子を聞くよりも。嫁入する日を待ちかねて。お前の姿を繪に描かし。見れば見る程美しい。こんな殿御と添臥の。身は姫御前の果報ぞと。地月にも花にも樂みは。繪像の傍で十種香の。煙も香花となつたるか。回向せうとてお姿を繪には描かしはせぬものを。魂返す反魂香。名畫の力もあるならば可愛とたつた一言の。お聲が聞きたい〳〵と。繪像の傍に身を打伏し流涕。こがれ見え給ふ。詞あの泣聲は八重垣姫よな。我が名を呼びし



勝頼を。誠の夫と思ひ込み。地弔ふ姫と弔ふ濡衣。不便ともいじらしとも言はん方なき二人が心と。スヱテそゞろ涙に。くれけるが。詞アヽ我ながら不覺の涙と。地衿かき合せ立上る。後にしよんぼり濡衣が。詞申し箕作様。合點の行かぬは貴方のお姿。どうした事で此様に。ヲヽ不審尤も。測らずも謙信に抱へられたる衣

服大小。テモ扨も。衣紋付なら上下の召し様まで。似たとは愚かやつぱり其儘。形見こそ今は仇なれ是なくば。忘るゝ事もありなんと。地詠みしは別れを悲しむ歌。形見さへぢやに我が夫に微塵かはらぬこのお姿。見るに付けても忘られぬ。私や輪廻に迷うたさうな。御赦されてと伏沈む。フシ泣聲洩れて。一間には不審たち聞く八重垣姫。そつと襖の隙間もる姿見まがふ方もなく。ヤア我が夫か勝頼樣と。飛立つ心を押ししづめ。正しうお果てなされしもの。似たと思ふは心の迷ひ。繪像の手前も恥かしと立戻つて手を合せ。御經讀誦の鈴の音。地勝頼公は濡衣が心を察して聲曇り。詞はかなき女の心から。歎くは理さりながら。定めなき世と諦めよと。地諫むる詞此方には。心フシ空なる其人の若しや存へおはすかと。思へば戀しく懐かしく又覗いては繪姿に。

見くらべる程生寫し似はせでやつぱり本本の。勝頼樣ぢやないかいのと。思はず一間を走り出で スヱテ縋り付いて。泣き給へば。はつと思へどさあらぬ風情。詞こは思ひよらさる御仰せ。我等簑作と申す花作り。漸う只今召抱へられ。衣服大小更めし新參者。勝頼とは覺えなし。地御麁相あるなと突放せば。詞ム、何といやる。今父上に抱へられし新參者。花作りの簑作とや。自らとした事が。餘りよう似た面ざしの。若しやそれかと心の煩惱。地二人の手前恥かしながら。詞コレ濡衣。此簑作とやらいふ人を。そなたは疾うから近付か。エイ。いやいの。知る人であらうがの。アノお姫樣とした事が。たつた今見えたお人。何のマア私が。イヤ隱しやんな今の素振。忍ぶ戀路といふ樣な。地可愛らしい中かいのと。思ひもよらぬ詞に悔り。詞オ、お姫樣のおつしやる事

わいの。人にこそよれ。何のあなたに勿體ない。ム、勿體ないといやるからは。どうでも其方の知るべの人か。イ、エさうではなけれども。大事のお主の目を掠め。忍び男を拵へるは。勿體ないと申す事でござります。ム、すりや知るべの人でなく。殿御でもない人なら。どうぞ今から自らを。可愛がつてたもる樣に。地押付ながら媒を賴むは濡衣樣よと。夕日眩く顔に袖。ギンフシあてやかなりし其風情。詞ヲ、お姫樣とした事が。まだお子達と思ひの外。大それたあの簑作殿を。サア見初めたが戀路の始め。後とも言はず今爰で。媒せいとおつしやるのか。我をれ。ほんにお大名のお娘御とて。油斷はならぬ戀の道。品に寄つたらお取持致しませうが。コレ/\濡衣。必ず麁相いふまいぞ。サア何もかも私が。呑込んで。呑込んでお取持致すまいものでもないが。眞實

底から簑作殿に。御執心でござりますかと。地問はれて猶も赤らむ顔。勤めする身はいさ知らず。姫御前のあられもない。殿御に惚れたといふ事が嘘偽りにいはれうか。詞其お詞に違ひなくば。何ぞ慥な誓紙の證據。それ見た上でお媒。地ヲヽ夫こそ心安い事。其誓紙さへ書いたらば。詞イエ／＼。それも此方に望みがある。私が望む誓紙といふは。諏訪法性の御兜夫が盗んで貰ひたい。ヤア何といやる。諏訪法性の御兜を。盗み出せといやるのは。扨はあなたが勝頼様と。地言ふ口押へて。詞ハテ滅相な勝頼呼ばはり微塵覺えのない簑作。麁忽ばし宣ふなと。地いふ顔つれ／＼打守り。許嫁ばかりにて枕かはさぬ妹背中。お包みあるは無理ならねど。同じ羽色の鳥翅。長地人目にそれとわからねど親と呼び又つま鳥と呼ぶは生ある習ひぞや。いかにお顔が似ればとて戀しと思ふ勝頼様。そも見紛うてあられうか世にも人にも忍ぶなる。御身の上といひながら。連添ふわたしに何遠慮。ついかう／＼とお身の上明して。得心さしてたべ。それも叶はぬ事ならば。いつそ殺して／＼とつ フシ縋り付いたる恨泣き。地勝頼態と聲荒らげ。詞ヤア聞分なき戯言。いか程に宣ふとも。覺えなき身は下司下郎。餘處の見る目も憚りあり。地そこ退き給へと突放せば。詞スリヤどの様に申しても。勝頼様ではおはさぬか。ハアヽ。地はつとばかりに簑作が。差添逆手に取り給へば。こは御短慮と止むる濡衣。詞イヤ／＼放して殺してたも。勝頼様でも無い人に。戯言言の恥かしや。心の穢れ繪像へ言譯。どうも生きては居られぬと。地又取直すを猶も押止め。詞ヲヽさすがは武家のお姫様。天晴なるお志。其お心を見るからは。勝頼様に逢はせませう。ソレそこにござる簑作様が。御推量に違はず。あれが眞の勝頼様。ちやつとお逢ひなされませと。地突きやられては流石にも。初めの恨み百分一聞えませぬが精一杯。跡は互に抱付き。つい濡れそめに濡衣も フシ心ときつく折からに。地父謙信の聲として。詞簑作はいづれにをる。塩尻への返答。地時刻移ると立出づれば。はつと簑作飛びしさり。詞御支度よくば直様参上。ホヽ委細の事は此文箱に。片時も早く罷越せ。地はつと領掌文箱携へ フシ塩尻さして急ぎ行く。地謙信跡を見送つて。詞ヤア／＼者共。用意よくば早や來れと。地仰せにはつと白須賀六郎原小文治。更科なんどの譜代の郎等。御前に進めば謙信勇んで。詞今此諏訪の湖に。氷閉づれば渡海は叶はす。塩尻までは陸路の切所。油斷して不覺を取るな。地ハア、畏り奉ると ヘズミフシ

勇み進んでかけり行く。地あとに不審は八重垣姫。申し父上こと〴〵しい今の有樣。何事やらんと尋ぬれば。詞ホヽあれこそは武田勝賴討手の人數。何勝賴樣を討手とは。地こはそも如何に何故にと。驚く二人をはつたとねめ付け。諏訪法性の兜を盜み出さんうぬらが工み。物かげにて聞いたる故。勝賴に使者を言付け。歸りを待つて討取らさんと。牒し合せし討手の手配。エイそんなら今の討手の者は。勝賴樣を殺さん爲か。ハア、。地はつとばかりにどうど伏し。今日は如何なる事なれば過去り給ひし我が夫に。再び逢ふは優曇花と悅んで居たものを。またも別れになる事は。何の因果ぞ情なや。父のお慈悲にお命を。どうぞ助けて給はれと スヱテくどき。歎くに目もやらず。詞ヤア武田方の廻し者。地憎き女と濡衣引立て。うぬには尋ぬる仔細ある。奥へうせうと小腕取り。情容赦もあら氣の大將 フシ帳臺。深く入り給ふ。歌思ひにや。焦れて燃ゆる。野邊の狐火。小夜更けて。狐火や。狐火野邊の野邊の狐火。小夜更けて。ナホス地幾重洩れくる爪音は。君を儲けの奥御殿。こなたは正體。涙ながら。詞アレあの奥の間で檢校が。謳ふ唱歌も今身の上。地おいとしいは勝賴樣。かゝる工みのあるぞとも知らず量らぬお身の上。別れとなるもつれない父上。諫めても歎いても聞入れもなき胴慾心。娘不便と思すなら。お命助けて添はせてたべと スヱテ身を打伏して歎きしが。詞いや〳〵泣いては居られぬ所。追手の者より先へ廻り。勝賴樣に此事を。お知らせ申すが近道の。地諏訪の湖舟人に。渡り賴まん急がんと。小褄取る手もかひ〴〵しく。かけ出でしがイヤ〳〵〳〵。詞今湖に氷張詰め。舟の往來も叶はぬ由。步路を行きては女の足。何と追手に追付かれう。地知らすにも知らされず。みす〳〵夫を見殺しに。するは如何なる身の因果。詞アヽ翅がほしい。羽がほしい。飛んで行きたい。知らせたい。地逢ひたい見たいと夫戀の。千々に亂るゝ憂き思ひ千年百年泣明し。涙に命絕ゆればとて夫の爲にはよもなるまじ。此上賴むは神佛と。床に祭りし法性の フシ兜の前に手をつかへ。詞此御兜は諏訪明神より武田家へ。授け賜はる御寶なれば。取りも直さず諏訪の御神。勝賴樣の今の御難儀。助け給へ。救ひ給へと兜を取つて押戴き。押戴きし俤の。若しやは人の咎めんと窺ひおりる飛石傳ひ ハズミ庭の溜りの泉水に。映る月影怪しき姿。はつと驚き フシ飛退きしが。詞今のは慥に狐の姿。此泉水に映りしは。地ハテめんようなとどきつく胸。撫でおろし〳〵。こは〳〵ながらそろ〳〵と。差覗

く池水に。フシ映るは己が影ばかり。詞たつた今此水に。映つた影は狐の姿。今又見れば我が俤。幻といふ物か。但し迷ひの空目とやらか。地ハテ怪しやととつおいつ。兜をそつと手に捧げコハリ覗けば又も白狐の形。水にあり〳〵有明月。ナホス不思議に胸も濁江の。池の汀にすつくりと跳入りて。フシ立つたりしが。詞誠や當國諏訪明神は。狐を以て使はしめと聞きつるが。明神の神體に等しき兜なれば。八百八狐付添ひて。守護する奇瑞に疑ひなし。オ、それよ思ひ出したり。湖に氷張詰むれば。渡初する神の狐　其足跡をしるべにて。心安う行來ふ人馬。狐渡らぬ其先に。渡れば水に溺るゝとは。人も知つたる諏訪の湖。地たとへ狐は渡らずとも。夫を思ふ念力に。神の力の加はる兜。勝頼様に返せとある。諏訪明神の御敎。ハア、。忝なや有難やと。兜を取つて頭

にかづけば。忽ち姿狐火の。こゝに燃え立ちかしこにも。亂るゝ姿は法性の。兜を守護する不思議の有様。此方の間には手弱女御前。始終の様子窺ふとも。いさ白菊の花の番小屋にとつくと闘兵衛が。フシ見付廻しても神通力。花のまに〳〵えつ隱れつ神去る狐。地南無三寶とせき立つ闘兵衛。狙ひの的は手弱女御前。どつさり響く鐵砲の。音を合圖に遠近より。俄に響く鐘太鼓。亂調に打立つれば。騒がぬ闘兵衛廣庭に二王立。程なく馳せ來る雑兵原。我討取らんとひしめいたり。詞ヤアしをらしき有財餓鬼。此世の暇取らさんと。地大刀するりと抜放し。當る任せに薙立て〳〵御殿をさして。三重へ行く先の。フシ間ごと〳〵は。森々とオン灯火消えて音せぬは。敵の油斷をりこそよけれ。烏帽子素袍も忍び入る。時の用にぞ大廣間。咎むる人もなか廊下オクリ

長袴の。裾コハリ指足に。御座の間近く窺ふ闘兵衛。詞怪しとかねて勝頼が。地透かせど見えぬ眞の闇。人こそあれと身を避くれば。此方も避くる彼方の一間。詞立塞がつたる三郎景勝。地遣り過してかけ入るを。袖引きちぎれば手にさはる。下の腹巻スハ曲者と。組付く景勝小手返し。詞ひらりと付け入る勝頼を。地さしつたりと眞の當。たち〳〵〳〵フシと後じさり。地騒がぬ大膽しすまし顔。人を欺く坂東聲。詞大將の御座近く帶劍の武士叶ひ申さず。銘々詰所の當番大切に致されよと。地外さぬ體にしづ〳〵とフシ猶奥深く行く所を。詞ヤア〳〵美濃國の住人。齋藤入道道三とゞまれやつと聲かけられ。地肝にこたへて駈戻り。邊をきつと大音聲。詞ヤアラ訝かしや。三十年來跡をくらまし。包み隱せし我が本名。齋藤道三と呼んだるは。そも何奴ぞ

對面せんと。地廣縁先に枯木立。景勝勝賴前後をかこひ。逃げば切らんと詰めかくる。後の襖さつとあけ。武田の忠臣山本勘助。叛逆人の詮議をとげんと。悠然と立出づる。續いて近習諸大名。御殿廣間も燭臺に。一度に輝く灯の光。フシ遁れん方こそなかりけれ。地されどもちつとも臆せぬえせ者。詞ヤア長尾謙信の此城へ。日頃不和なる武田の家臣。山本勘助とやらんのさばり來るも心得ず。叛逆人の詮議とは。誰が詮議それ聞かうホ、ウ匹夫下郎の分として。天下に仇する汝が本名。知つたる仔細は此一品。七重八重。花は咲けども山吹の。みの一つだになきぞ悲しき。此義覺えがあらうがな。諏訪明神の力石。出會うた横藏。珍らしい對面するなア。此歌は汝が先祖。太田道灌が列ねし一首みの一つだになきぞ悲しきとは。足利殿に攻落され。美濃國を切取られし其鬱憤にて義晴公を鐵砲にて。撃ち奉る叛逆人の張本。美濃國の道三と。表はす義は身の破滅。最前擊つたる鐵砲の術。覺えし者は汝一人。我と我が身の白狀明白。諍ふな齋藤と。地大地を見ぬく詞の石火矢。三人中へ取込めて。フシ何と〳〵ときめ付くれば。地ほくほくとうち頷き。詞ホ、さすがは武田の軍



師と。呼ばるゝ勘助よく見付けた。我が先祖道灌は。謙信の先祖上杉が鎗先にかかつて死したる恨みの元は足利の武將。頼つて殺さん其爲に。北條氏時に賄し。心を合せやすく\／＼と。 義晴は撃つたれども。忘形見の松壽丸。今日此館へ來るは幸ひ。奪ひ取つて人質とし。謙信信玄氏時をも皆殺し。一天四海を掌握する此道三。汝等が手にはいつかなく\／＼。 義晴を殺した鐵砲で。手弱女御前もぶち殺した。松壽丸を是へ出し。降參せよと睨付くる。 ホホウ根強く仕込みし謀叛人。かゝる危き敵の中へ。足利の公達がふかぐ\／＼と來り給はんや。松壽丸の御入と。僞り來たは此勘助。最前鐵砲にて撃たれ給ふ。手弱女御前の御死顔。篤と拜見仕れと。 地 投出す女の切首。押取つてよく見れば。ヤアこりや娘濡衣か。コハく\／＼如何にと顚倒牛亂。 詞 エ、口惜しや奇怪や。數十年の



鬱憤を。一時に散ぜんと思ひしに。勝頼が恩に引かされて。敵方へ卷込まれ。大望ある此親に。 地 よくも不覺を取らせしな。憎い女が死樣やと。首を打付け齒。ぎしみ齒。ぎり。そゝぐ涙は諏訪の海 スエテ 一度に溶くる如くなり。 詞 ヤア返らぬ繰言絕體絕命。尋常に繩かゝれと。 地 兩人一度に立ちかゝる。シヤ物々し道三が。

死物狂ひと立上る。弓手の臨坪はつしと射る。白羽の矢先は長尾謙信。威風烈しき眼中に。道三どつかと坐を組んで。引抜く鉄我が腹に。ぐつと突き立て目を見開き。詞先祖より遺恨ある上杉が子孫。謙信の矢先にかゝるは。我が運命の盡きる所。本國を切取られ。美濃一つだになかりし無念。美濃尾張兩國を從へ。終には國家を握らんと思ひしが。我が身の終りとフシなりたるか。地及ばぬ望みに足利の。武將を撃つたる其天罰。詞信玄謙信中あしく見せかけしも。我を見出す計略とは。今まで知らさる心の淺はか。最期に魂改むる此世の餞別。北條が城廓の案内は。某具に傳へ申さん。元來相州小田原の城。地堀深うして塀高く。要害の名城なれば。たやすくは落つべからず。霞晴れたる時節を窺ひ。箱根山より見下せば。コヘリ敵地の構よく知るべし其時に謙信が家の軍法細作の。ナホス犬を入れ置き後より。詞勘助是にと切つて出で。放火を合圖に甲斐越後。諸軍一度に矢先を揃へ指詰め。引詰め。地射るならばさしも堅固の城なりとも。直に乘取り氏時が。首を巷に晒さんは道三が。フシ老後の思ひ出。地さらば〳〵と引廻す。心も淸き武士の。死しても殘す名の譽。家の譽と法性の。今ぞ兜を甲州へ。戻す兩家の確執も。をさまる婚禮三々九度。勝色見する紅梅の色ある勝賴勇ある景勝道三が。仇も恨みも晴れ渡る。諏訪の湖歩渡り。夜もしののめに明渡る。甲斐と越後の兩將と其名を。今に殘しける

第五

地甲斐越後兩家の戰ひ。四度の軍術互角にて。勝負一時に決せんと劍の双音鬨の聲フシ山河も。動くばかりなり。地かゝる所へ北條氏時村上左衛門義清。軍兵あまた引連れて暫しと石に腰打ちかけ。詞コレ〳〵村上。某が思ひの通り兩家の滅亡今此時。なんと村上味いでないかと。地人喰馬に合口の左衛門。詞ハア、いか様仰しやる通り。爰が雙方の戰場。兩人ながら籠の鳥。必ず氣遣ひし給ふなと。地詞ばかりは達者でもフシ臑はがた〳〵胴ぶるひ。地軍兵どもロ々に。アレ〳〵ここへ數多の人音。暫く是へと森の內。かかりし所に武田信玄。勝賴彈正引連れ團扇打ちふり宣はく。詞只今の注進は必定味方の勝軍。この勢を失ふべからず。地急げ〳〵と血氣の大將兩人は。はつと領掌白毛の駒フシ轡をはまして駈出づる。地思ひも寄らぬ岨陰より。長尾謙信是に在り見參やつと呼ばはる勢ひ。雲に羽を伸す龍虎の挑み。詞馬も達者乘人も達者。眞一文字に乘りかけ。〳〵眞甲二つと切付

くる打刀。地信玄透さず軍配團扇にはつしと受止め。詞引けば付入る受身の勝。地謙信呉子が秘術を盡せば。信玄孫子が心を捻り。兩方互角の大將自身の働き。生死の境目ざましくもまた危けれ。地信玄猶も床几を去らず。又打込むを團扇の拂ひ。かゝる折から駈來る高坂彈正。山城が是はと驚き立寄れば。どつと寄せくる北條勢右往左往になぎ立て／＼追廻し跡を慕うて。三重へかけり行く。地又も駈來る信玄が謙信やらぬと打掛かる。コハ／＼いかにと雙方を見れば寸分變らぬ信玄。以前の信玄兜を脱捨て。詞ヤア誰かは知らねども。我に代らんと思ふ志は忝けれど。所詮運を天に任せしこの兩人。サア謙信おくれしか。地勝負せよとフシありければ。地此方の信玄兜を脱げば山本勘助。二人が中に割つて入り。詞ハア、其お詞は重けれど此勘助が察するには。

御兩人共に國家の爲に此軍。北條村上を討亡さんとの謀とくより知つて某が五百騎の勢を廻し。兩人ともに早や搦め捕つたり。ヤア／＼兩人氏時村上を引かれよと。地詞の中武田四郎勝頼。長尾三郎景勝兩人を引据ゑさせ。天下を騒がす極惡人思ひ知れと兩人を。指通し／＼勝鬨上げて都入嫁入國入惡人退治。天一天上先勝の二人の。大將二人の彈正。名を末代に山本氏御代萬。歳とぞ祝ひける

明和三年丙戌正月十四日

作者

近松半二
三好松洛
竹田因幡
竹田小出
竹田平七
竹本三郎兵衛

關取千兩幟

座本　竹田文吉

次第別れの跡の振狐。〳〵こんくわいの涙なるらん。狂言詞是は此邊に住居致す古狐でござる。爰にある者の候が。何時の頃よりか狐を釣初め。面白いと思うてか。釣る程に〳〵。我等が眷屬を釣取つて。某をも覘へども。そつとも油斷致さぬ所で。聊爾に餌を食みにいでう樣もござらぬ。こゝに彼が伯父坊主に。白藏主と申すがござる。此白藏主の申さるゝ事は。天逆樣なる事をも。かの者が承引致す所で。今日は白藏主に化け。意見を致し釣止らせうと思うて。化けたかと存ずる。先づ彼の獵師の許へ行かばやと思ひ候。住み馴れし我が古穴を立出でて。〳〵。足に任せて行く程に。獵師の許に着きにけり。詞急ぐ間。獵師の許に着いてござる。誠に彼の者が。犬を飼はぬが一つの取得でござる。犬を好いて飼ふならば。中々我等如きの。寄り付く事も叶ふまいくわい。犬の聲。遠鳴であつたもの。ゑい肝をつぶした。先づ案内をこふ。物もう。案内もう。表に物もうとある。案内は誰そどなたでござる。エイ白藏主樣。ヲヲ愚僧でおりやる。こなたなら案内なしに通りはなされいで。夜中に何と思うてお出なされました。只今參つたは別の事でもない。ちと其方に意見のしたい事あつて參つた。御意見とござるならいか樣の事なりとも承りませう。先づ奥へお通りなされませい。イヤ〳〵。思ふ仔細がある所で。奥へは通るまい是にて申さう。聞けばそなたは狐を釣るとの。イ、ヤ左樣の事は存じませぬ。な隱さしましそ。寺へ來る人毎に。アレあの甥の殿こそ狐を釣れ。人にさへ意見をいふ者が。あれが目にかゝらぬかと。人ごとに云はせらるゝ。よもや僞りではおりやるまい。御存じの上は隱しませう樣はござらぬ。此間狐を一つ釣りましたが。面白う存じて。釣る程に〳〵。七八疋も釣つたでござらう。ム、シテ狐を釣つて何におしやる。皮は引つぱいで引敷に致します。身は料理して食べまする。骨は膏藥煉に賣りまする。ム、聞いてさへ身が顫はるゝ。あの狐と云ふ者は。執心の恐しい物ぢや。此後はふつつりと止らしませ。何が扨此方の御意見でござる程に。此後はふつつりと釣止りまするでござらう。何ぢや止らう。それなら爰に。狐の執心の恐しい物

語がある。語つて聞かさうか。ア迚も釣止るまいならいらぬ物かい。イヤふつつり止りませうお聞かしなされませい。それなら其床儿をおくりや。畏りました。お床几。此物語を聞いて後。釣ふつつりとお止りやれや。畏りました。抑狐は神にてぞおはします。天竺にてはやしほの宮。唐土にてはきさらぎの宮。我が朝にては。稲荷五社の大明神と申すも。皆これ狐なり。ハア。まつた鳥羽の院の御時。玉藻前と申して。容顔美麗の美しき上童のありしが。彼を玉藻前と申す仔細は。四角八方より其姿を見るに。裏表なき美しき女なり。惣じて玉には裏表なき物なればとて。玉藻前とぞ召されける。ハア。ある時清涼殿にて御歌合せありし時。ゑいその如くなる大風吹來り。禁中の灯火一燈も殘らず消えぬ。其時玉藻前が身より光を出し。玉殿は申すに及ばず。御庭の眞砂の數迄隈なく見え候間。帝この光に當り給ふと。忽ち御惱とならせ給ふ。貴僧高僧を請じ申され。色々御祈禱候へども更に其驗なし。爰に安倍の泰成と申す博士を召され。占はせて御覽ずれば。泰成參り懇ろに考へ申す樣。これは偏に玉藻前が所爲なり。根本此女は狐なり。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后褒似となつて七帝迄取殺し。今又日本の帝王を取奉らんと玉體に近付く。かゝる執心の恐しき物なれば。急ぎ調伏有つて然るべしと。頓て呪壇を築いて護壇を餝り。藥師の法を行ひ給へば。大内にもたまり兼ね。下野國。那須野の原に落ちて行く。國内通化の物なれば。疎かにしては叶はじと。三浦之介上總之介に仰付けらる。兩介承つて。下野國那須野の原に下着して。百日の犬追物とぞ聞えける。百日の犬滿じければ。大きなる三ツ尾の古狐顯はれ出づるを。一の矢は三浦之介。二の矢は上總之介。ひやう。どつきと射る。得たりやおうと飛んで下り。劍を以て彼を害し。帝へ此由奏聞申しければ。君の御惱も忽ち御平癒あり。國も治まり太平の御代となる。猶も其執心大石となつて。人を取る事數しらず。地を走る獸。空を翔る翅まで地に落つ。かゝる殺生を致す石なればとて。殺生石とは名付けたり。爰に玄翁といへる僧。彼の石に向つて喝す。汝元來殺生石とうせきれいしやう。何れの所よりか來り。何れの所にか去ると。拂子を取つて三つ打つ。打たれて此石割れしより。猶も人を取るぞかし。かゝる執心の恐しき者なれば。此後釣ふつと。お止りあれかしと思ひすよ。恐しい物語を承りました。此物語を聞いては。狐を釣らう物ではござらぬ。此後ふつつりと釣止りませう。それは嬉し

い。それなら其狐を釣る輪罠とやらがあらうそれをお捨ちやれ。お歸りなされたら捨てませう。いやといへば。其道具を見たら。釣りたい心も出う。身共が見る前でとつととお捨ちやれ。畏りました。是でござる。ム、穢しや〳〵。とつととおすちやれ。捨てましてござる。何ぢや捨てた。ハア。ヲ、能うお捨ちやつたなう。意見を申すにお聞きやらずば腹が立たうに。得心めされて滿足致した。奥へ通り子供にも逢はうなれども。淸められてから參らう。兎も角もなされませい。そなたも又些寺へお出やれ。何も馳走はなけれども。昆布に山椒良い茶を申さう。其お茶が何よりでござる。ア、お出やれとは申したれども。何も馳走は申さぬ。昆布に山椒をまいて。ハア。茶ばかり申さう。ようお出なされました。アお出やれと申したれども。何も馳走は申さぬ。昆布に山椒茶ばかり申さう。〳〵。茶ばかり。〳〵〳〵。〳〵ワイ。ナウ嬉しや〳〵。まんまと意見を致して罠を捨てさしてござる。是から何方へ行かうとも。身どもが心の儘ぢや。此樣な心面白い時は。小唄節で歸らう 狂言唄所に住めばこそ浮名も立てなう。往のやれ。我が古塚へ。しやなら。〳〵とワイ。罠を捨てたかと思うたれば。身どもが歸る道の眞中に。張りすまして置きをつた。アノ善九郎は聞えぬ者ぢやナア。誠に。人間の狐をば野狐の心と申して。物疑ひをすると申すと聞いたが。彼奴は狐には劣つた奴ぢやナア。いや又どの樣な事がしてあれば。若者どもが罠にかゝつたしらぬ。罠の樣體を見て置き度い物ぢやが。ム、何やら小さい眞黑な物があるが。ヤイ汝め。其小さい形で。能う身共が眷族を釣取つたなア。それがよいか。これがよいか。覺えたか。〳〵。ム、よい匂ひかな〳〵。罠にかゝつたこそ道理なれ。上々の若鼠の油揚。これが食はずにおかれうか。飛びかゝつて一口に喰はう。喰ひたいなア。〳〵。ア誠に。眼前若者どもがかゝつたを知りつゝ。身どもが罠にかゝつてはなるまい。道を變へて歸らう。ム、よい匂ひかな。この匂ひを嗅いでは中々歸られぬ。さうぢや餅ばかりむしつて食ふに。食はれぬといふ事あらうか。飛びかゝつて一口に。食ひたいなア。〳〵。何をいうても此。身重い形で。罠にかゝつてはなるまい。よい〳〵たつた今此化けた衣裝を脱いで來て。一口にする程に。其處をのいたら。卑怯者であらうぞえい。〳〵わい。〳〵。〳〵。

地中入り待兼ね樂屋には大阪屋の全盛。錦木太夫禿ども煽ぐ引舟押しぬぐふ。汗は流れて フシ泉派の。 詞後の出端の衣裝

をちやつと。ア、おきや〳〵。もう狂言所ぢやないと 地 禮三が胸ぐら引据ゑて。詞 お前様は〳〵能うも〳〵あんな惡性なされますな。コ、コレ何いふのぢやぞいの。エ、新住の京がことか。さしてもない事を悋氣はゆるりと仕やいの。イエイエなんのそんな事言や致しませぬ。京大阪での色事ならまだしも。遠い近江の彦根とやら。しかも屋敷の女中様が。お前に逢はしてくれいとてあちら座敷に待つて居る。私は知らぬふりで袖之丞に問はしたれば。禮三様に國で深う言交したとあつかましい言ひ様ナウ百合。アイアイあの通り。お前の惡性に違ひはない。何と覺えがござりませうがな。ム、有るでもなし無いでもなし。彦根は親どもから御用を聞く家。去年お國へ往た時に。三島彌太夫といふ人の娘。お才といふのについ鳥渡。其ちよつとが癖の惡いと。

地 口説の半ば フシ 狂言半ば。詞 若旦那〳〵どうでござります。肝心の所間が抜けてらりになつた。太夫様こりやマア何事。コレ善九郎様。地 からぢやわいなと呵く引舟。詞 イヤア我折。扨は旦那が釣狐ぢやない。釣娘。サイナ女子を化す男狐。おれも狐の面目ない。嘸こんくわいでござりませう。エ、口合所かいな。私は悋氣仕はせぬがマアどうせうと思召す。ハテどうというて往なして仕舞ふ分の事。したがおれに逢はずば往ぬまい。ちよつと逢つて好い加減に欺して往なさう。善九郎爰へ呼んで來い。コリヤ〳〵太夫が事は隠すのぢやぞ。ヲツトそこらはすなさせん。地 どうなと勝手に走り入る。フシ ついに來なれぬ難波潟。田舎育ちのぽつとりも堅いは武家の育ち柄。若黨らしいが附添うて。フシ しとやかに座につけば。詞 ヲ、これは〳〵お才殿。アイ禮三様。

お久しうござります。何として爰へは。ハイ私は父様に勘當受けて參じました。お前と不圖言ひかはした。様子は知らず彌太夫様。丹波の家中津田兩助様とやらへ。嫁入さす約束したと。聞いてはつと痞が上り。地 母様に打明けて。詞 ナウ瀬平。成程左様。兎角あなたはお前に添はねば死ぬる心。と申して許嫁の兩助様へは立たず。母様御合點で國を駈落。再び屋敷へ歸らつしやると手打に逢ふ娘。否でも應でもお前の奥様。お手渡し致したら拙者は早や國へ歸りたいと。地 様子段々聞く度に禮三が悔り太夫が修羅。腹立顔をお才がながめ。詞 申しあなたは何方様。イヤこれはおれが伯母貴ぢや。ヘエても扨も。お若い叔母様でござんす。イヤあの様に見えれど。年は四十六。元服した子が二人ある。これはしたり申し叔母御様。お聞き遊ばす通りなれば。今から諸

事を 地お引廻しといひかけられて錦木も。不承々々に。アイ。ようこそ禮三を可愛がつてやりなはます。私は婆の事なれば。増す花のお前様。お樂みなはませと。地ぴんとするのを鎭める禮三。綾繰り廻す狂言師も。あどに フシこまりし最中へ。地禮三々々ちと逢はうと立出づるは。藪屋敷一原九平太。禮三はちやくと。コレ瀬平殿。お才は少の間。隣りの西照庵の庭見せて來て下され。太夫もあちらへ。イヤ錦木は爰に置け。イヤ申し今日は禮三が揚げた太夫。廓の貸借は格別。お前の慰みにはなりませぬ。構はずと往きや〳〵と。地追ひやる跡に フシむつと顔。詞町人と武士とが買論しても濟まぬ事。先達て錦木は親方左衛門方へ。手附金渡し置いたれば。今日明日には身請して身共が女房。なんぼ元氣張つても部屋住の禮三。楯づき立は叶はぬ事と。地惡口明けて次の間から。手代の善九郎。詞コレお侍様此方も二百兩といふ手附亡八へ渡した使は拙者。若旦那あゝ言はれては立ちませぬ。エ、今日中に身受して見せたいな。ならぬ事〳〵。七百兩の金がなくては。太夫が身受はならぬわい。吹きや飛ぶ様な身上で。何として〳〵と。地當てこすられて若氣の禮三。スヱテ無念ながらも有合さぬ。兼て始終を一間の中。詞金子御用に立て申さう。禮三殿と呼びかけて 地しづ〳〵出づる其勿體。エ、詞お前は江州の村岡園右衛門様。ヲ、御用に就いて登り申した。様子あれで承つたがお手前こりや立つまい。只今太夫を身請めされ。今其方に有合さぬ金子。園右衛門が貸し申すと。地家來に持たせし挾箱。取出す五百兩。詞エ、イそんなら其金お貸し下さるか。ヲ、サ念の爲假證文。ハア忝い。サア〳〵太夫主は此方の物。地深き惠みの硯箱。墨黒々と書判に。證文認め フシ差出せば。詞コレ九平太様。コレ此方の旦那は五百兩や七百兩は。嚔をする度にぷつ〳〵と吹き出る。ドリヤ太夫主の身請金。地親方へ渡して來うかと。金を財布にひけらかし。フシ廓をさして行く跡は。地九平太はぐつともいはず。禮三は氣味よく。詞ナント部屋住の勢ひ御覽じたか。お氣にはさへられな。算用の知れてある御知行で。太夫などは請出されぬナアお侍と フシ當て返す。折から中間かつつくばひ。詞園右衛門様へお屋敷より。急の御状と差出す。地封押切つて讀終り。詞氣の毒な事がある。ナニ禮三金子返してくりやれ。エ、たつた今お貸しなされた其金を返せとは。イヤありや殿の御用金。只今の難儀を見て。暫しの間に合せたは武士の情。今相役より金子急入用と申越したれば。延引すると身共

は切腹。背中に腹。サア返してたもれさ。今ちやと申して亡八の方へ遣はした金。今戻せとは餘り御無體。イヤ身は無體は言はぬぞよ。此證文に何時なりとも返辨と云うたは僞りか。ム、こりや聞えた。借證文を反古にして。殿の金子を横取りちやな。ア、申し〱何の左様なヤア吐かすな。もう此上は藏屋敷へ引立て。相役の手前垢をぬく。地憎くい奴と扇で丁々九平太も。盗みひろいだ其金で。受出し自慢措きあがれと。二人が足下に蹴飛ばし〱。サア〱うせうとフシ引立て行く。詞申し〱暫くと。地聲をかけて立出づるは。禮三が親淨久禪門。ヤア詞親父様。何時の間にと。地いへど見向かず園右衛門が前に手をつき。詞悴が不調法。此頭に免ぜられ。何事も御了簡と。地久三に持たす千兩箱。蓋押取つて五百兩。御返進とフシ差置けば。詞ヲ、丁寧の仕方。斯うなうて叶はぬ筈。淨久にも堅固で重疊。金子相違ない上は急ぎの御用。地罷り歸ると挾箱に取納め。詞そこなお侍。おさらばと。地互に默禮目遣ひに。様子有り顔九平太も隣。フシ座敷へ立つて行く。地心掛りにフシ窺ふ錦木お才も歸る小庭先。聞くとも知らず親淨久。詞ヤイ禮三。此親が年々拵ぎ溜めた身上。金銀は親の身の膏。其膏を始末する事を知らねば。終には金銀の冥加に盡きる。金は町人の寶物。芝居の狂言でも。三種の神器とやらいふ寶物の事ばつかりで。一日座中があたふたする。其大切な寶物を。色狂ひに遣ひ果たす痴呆者。今日も町の參會に西照庵へ往たれば。東座敷の襖に。書いてあつた落書。コレこれ見いと地取出す襖のまくり相合傘に。詞大坂屋錦木。鶴屋の禮三。是見た時の町の衆の手前。餘り腹が立つて引捲つて戻つた。まだ其傍に。誰や彼や書いてあつた。ハア何とやら。ヲ、岸本屋お艶として。其傍に。相人は醫者殿かして。慶子と書いてあつたわい。コリヤ子供はかせぬ惡戲。子供の口の端にまでかゝる様な事をして。鶴屋の名跡が立てられうか。勘當ぢや。立つて行けと地父の腹立。身に徹へ思はず知らず錦木も。科人は私とお才も共に轉び出でスヱ泣いて。フシ詫するばかりなり。地きよろ〱眼に善九郎。詞禮三様〱。只今亡八へ持つて往て。今の小判を明けて見たれば。コレ此通りの戎様。こりやマアどうでござります。ヤア何ぢや贋金ぢや。ハテめんような。近江の屋敷で。村岡園右衛門といふ知行取が。贋金を遣はう様はないと。地親子の不審お才が不審。詞アノ村岡園右衛門が爰へ來たかえ。ヲイノ。エ、イ申し其園衛門は私に状を付けて。父様へ貰ひかけ。聞入れ

ないを意趣に持ち。闇打にせうとの工みが顯はれ。則ち私が勘當受けた其日一所に國右衛門もお國を追放。ヤアそんなら彼奴はお拂者か。サイナ。其跡で殿様の備前長光のお刀紛失。是も大方國右衛門が所爲。スリヤ今の金も衒られたか。汝此儘で置かうかと。地駈出す禮三が向うより。詞若旦那お待ちなされと。地名乘は高き岩川次郎吉。池田の名物フシ角前髪。詞私は角力の寄初で。浮瀬からたつた今。聞いた所が。常體の衒と違うて。根のある仕事。つい詮議はなりますまい。が差當つてお前の身の上。御隱居樣聞えませぬ。天にも地にも。たつた一人のお子ぢやないか。世界に金遣ふ者がなけりや。金儲ける者もない。金銀は廻りもの。色狂ひしたとて勘當とは。餘り胴慾でござります。というたらお氣にさはらうけれど。土地の者でもないに。どうした事か嚴い御贔屓。お前の御恩忘れぬから。大事の若旦那。此位の事で勘當とは。ちつとお前老耄かと思ひます。わしを贔屓して下さる氣なら。一番此詫言は聞いて下んせ御隱居様と。地大きな形で物言の。あどない所がフシ關取なり。地淨久手を打ち。詞次郎ようい うてたもつた。常は追從しても。かういふ場所になると。踏込んで詫言する者は手代にもない。過分な。が此勘當はどうも赦されぬ。といふ仔細は此女中。御用承る近江の屋敷の物頭。三島彌太夫殿の息女。丹波の家中津田兩助殿へ嫁入する筈の人と。結び逢うた禮三が惡緣。斯う駈落して來たれば。國へいなせば直に手討。というてお出入の屋敷の娘御。不義合點でおれが子の禮三に添はしては。御家中へ如何も顏が出されぬ。かういふ事は知らいで。息子が夜泊日泊は。新町の太夫故。いつそ身請してやつたら。結句しまりが出來るであろ。聞いた様子が。此お山も眞實禮三を可愛がつてくれるげな。高が千兩迄の事。給銀の高い乳母置いたと思うて。身受の宛に持つて來た。隱居金の千兩。まだ五百兩殘つてある。これで濟むなら金立てて。女房になと妾になと。他人の事はおりや構はねど。棺桶に片足踏込んで。究竟な悴を。久離切らねばならぬとは。地思へば惡い入前と。十德の袖顏にあて泣き倒れたる親心。禮三も不孝の悔み泣き。女郎も共に。フシありがた涙。地善九郎がけら〱笑ひ。詞結構な親旦那の御了簡。そんなら其金。錦木が身の代。たつた今親方へ私持つて參じましよ。イヤ〱。こりや其方は賴まぬ。この使は岩川。デモ最初から手附打つた使も私。サアそれぢやによつてなほやられぬ。善九郎暇やつたぞ。エ、イ。イヤ悔りすな。覺えの

ある事。よう禮三をたはけ者に仕上げたな。末々は番頭脇にもしてやらうと。思ひの外の不忠者。引負萬事書立てて。お上へ願へば首のない奴。暇出すを有難いと。出で失せをらうときめ付くる。地白藏主の正眞に。尾の出た大和の善九郎狐。掻き消すごとくフシ迯失せける。地邊の財布に岩川が。詞金子しつかり受取りました。次郎吉が命にかけて。ぢやがお才様とやらも禮三様錦木様。お二人の身の上は。禮三様に女夫の約束。男は一人。女中は二人。一つに束ねて世話もなるまい。ハテどうせうと行當る。フシ次の座敷の中から取つて。詞其女中預りましよ。ム、さういふは何處から女中の聲ぢやが。此子と近付のお人か。イ、エ近付ではないけれど。岩川様の預り憎い女中様。千羽川の吉兵衛が女房。よつが預つて歸りたい。殊に三島彌太夫様。大坂の藏屋敷お勤め

の時。お目かけられた吉兵衛殿。其彌太夫様の娘御。世話せねばならぬお方。氏神様へ參つた序。立寄つた此惠海庵。幸ひの所へ來合せたも。明神様のお引合せ。お才様の身の上。どうぞ私に世話さして下さんせ。地頼みますると差當る難儀を救ひ投げかけて。頼むは天滿千羽川隱れフシ内儀の手取なり。ヤレ嬉しや。よい買人が出來たぞ。吉兵衛殿に預ければ慥。そしてまあ。病氣はよごんすか。此間は大分よござんす。ヲ、そりや嬉しい。あの人が出やしやれぬと。私やもう片腕もがれた様で。ほんに誓文。早う本復しられます様と神々を祈つていやんす。イヤもう此方の人もお前の親切。陰ながら悦んでどうぞ秋の角力には。岩川と取りたいと。力んでばつかり居られますと。地片屋かはれど。フシかはらぬ交際。地岩川贔屓の禮三郎。詞エ、おれが嫌ひの千羽

川に。世話頼むのは口惜しい。コリヤヤイ。勘當の身になつて相撲取の贔屓所か。汝が大の贔屓を受けねば。立たぬ様になつたわい。頼まにやならぬ二人の衆。今迄の様に岩川。々々と澤山にいふことならぬぞ。ア、これもいらぬ世話。何事も皆後生菩提。なんまみだ〳〵。地珠數に涙を繰交ぜて。しを〳〵歸るタ、キ爺親に。二人は娵とも舅とも心ばかりの暇乞。只伏拜む。フシ親子の別れ。地引違へていづこかは。くつわや左右衛門。詞ヲ、幸ひ好い所。錦木太夫が身受金。ソレ五百兩と地投出せば。詞コリヤ忝い受取の一札。地さら〳〵と書認めフシ差出せば岩川が押開き見て不審顔。詞五百兩受取殘つて二百兩とは何のこつちや。ハイ太夫の代は七百兩。まだ二百兩足りませぬ。イヤそりや手附に二百兩善九郎が持つて往た筈。けもない事〳〵。慥な鶴

屋の禮三様。そのお顔が手附ぢやと思うて。二百兩が一兩も取つた覺えござりませぬ。今聞きや御勘當とやら。跡金の濟む迄は錦木は連れて歸りますと。地手を取れば引放し。詞今日一日は揚の女郎。指もさゝす事ならぬ。明日の朝迎ひおこした。跡金は此岩川が呑込んでゐる。若旦那。スリヤ是も善九郎めが仕事。思ひ廻せば何奴も此奴も。皆共謀と見える。サア取分け憎いは九平太め。岩川頼む最前の仕返し。ぶつて〳〵ぶち殺したも。サア〳〵よござんす。コレくつわや殿。此方様往にしなに。隣座敷の九平太様を。爰へ呼んで貰ひましよ。したがわしが顏は出し憎い。此仕返しはお前にさす。怖い事はなんにもない。岩川が控へてゐると。地炬燵の櫓取つてのけ。蒲團すつぽり闘取の。體を直に櫓なり。詞何でも危うなつた時は。炬燵の傍へ連れてお出と。地いへば呑込む禮三郎。詞皆邪魔になる隱れた〳〵。是からおれが荒事を。お目にかけんと地四股踏みしめ。待つ間程なく出で來る九平太。詞身に逢ひたいといふは誰ぢや。イヤおれでごんす。何ぢや二才めが何の用ぢや。ぐつと用のあるのぢや。大儀ながら一寸炬燵際まで出て貰ひましよ。へ、しやらな蚊蜻蛉め。何なと早く言うて仕舞へと。地炬燵にどつかり。フシサアしてやつた。詞別の用でもない。最前汝や如何して撲つた。其仕返しに撲据ゑるのぢや。ハヽ〳〵〳〵。うぬがざまで身共を素町人め推參至極。イヤ推參呼ばはりせまい。今迄こそなれ。勘當受けたら破れかぶれ。屋敷でも。侍でも。何でも十九文ぢやぞ。イヤ慮外なと拔きかくる。地鐺をぐつと後から。拔けぬはどうぢやと狼狽く中。胸ぐら摑む禮三郎。ちよこざいすなと。突放せば。鐺返しに眞逆樣。詞もう了簡がと摑み付く。地足首取つて締め上ぐれば。詞アイタ〳〵。うぬ何喰うてうせをつたやら。つがもない力になつた。ヲヽこたへたかと又どつさり。筋斗返り山雀投げ。命から〳〵體の煤掃箒の背打ぴつしや〳〵。打伏せられて フシ興覺め顏。詞うぬ武士をひどいめに合したぞよ。此返報は仕樣がある。待つてをらうと炬燵の傍。尻目にかけて。フシ迯歸る。詞出來た〳〵禮三樣。强う見えた〳〵。イヤもう炬燵の櫓がよう利いた。したが待つてをれとぬかした今の詞が氣味が惡い。ハテ何としませう。大方道に待伏せ。彼方からしかける喧嘩。せうことがない。何十人でも撫切にする分。私に付いてござりませと。地鯉口寬げ フシ立出づるを。地およつが呼留め。詞岩川樣御無心がある。お才樣をお供するは此方の人。吉兵衞殿に成り代つて預か

る。私女でも男の名代。お前の其魂を。わたしに貸して下さんせ。イヤこれは。サアお前の方に入る脇指。若しそれが用に立つた時は。お前は下手人。錦木様や禮三様の跡のお世話は誰がするえ。殊にお前ばつかり目的に早う達者になりたいと。養生する吉兵衛殿。お前に若しもの事があつたら此方の人も病が重る。大事の命爰で捨てる所ぢやあるまい。末々お二人見届ける心の堅めに其魂。此吉兵衛が預かりましよ。ム、誤りやんした。吉兵衛殿に岩川が魂。しつかと預けます。エ、忝いよう聞届けて下さんした。いよ〳〵變らぬ二人が魂。見届けた禮三が證人。西はお才東は錦木。地御無事でやいのと本妻妾。池田の關取。難波の名取。地勝負は秋の相撲まで。詞おさらば。さらばとユリ。三重へ別れ行く

第二

地芝居は南。小オクリ米市は北。相撲と能の常舞臺。堀江々々と國々へ鳴り響きたる岩川が。角力の内は夫婦連れ爰に堀江の假住居。見世は初日の飾物半紙。毛氈煙草盆オクリ羽織脇指フシ取褌。江戸ギン酒は杉ばへ米俵。よその軒端を假初もフシ賑々敷ぞ見えにける。詞扨積んだの見事何ぢや羽織脇指米もあるえらい張込ぢやの。いや又二三年こつちの角力に減多に負けた事のない岩川。したが今度の角力には。千羽川が病氣故はずむまいと思うたが思ひの外きついはずみ。ソリヤ其筈。勸進元の顔の好いのに江戸方九州方殘らず登り。岩川といふ贔屓の強い力の強い。あんな男を持つ者の顔が見たいと地表から内を覗いて高々と。夫の噂女房おとは。出合頭に聞く嬉しさ顔に少しは紅桔梗の。前垂の紐フシ縄暖簾。地上げてによつこり。詞北野屋の七兵衛でござります。これは〳〵島の内の七兵衛様能うお出サア〳〵地爰へに打通り。詞扨まあきついはずみ様。千羽川が出ぬ故にどうあらうと思うたが近年の大入。今日は大方爰の關取が取らしやるであらうと思うて。見物に來た序ながら鳥渡悦びに參りましたが。關取はもう往てで御座りましたか。イエ〳〵今日は叶はぬ用事に就きつい近所まで參られましたがもう戻つてござんせう。マアほんにいつぞやはいかいお世話で。練物を緩りと見物致しまして忝うござります。いつでも島の内の祭は。俄が多うて賑やかなこと。私等は在所者故。物見だけいとえてはこちのに叱られます。イヤモこちらの方も門がざわつくばかりで。奉公人が動かねば肝心の商ひが少ない。イヤ斯ういふ中に遲なつたら入

られまい關取へ好い様に。地賴みますと座を立上れば。詞ヲ、忙しない。まあ御緩りとお茶なりと。イヤ遲いと好い場がござりませぬと オクリ挨拶。フシへそこ〳〵歸りける。道具屋町中。の贔屓に肩も岩川が。鐵が嶽陀多右衛門と フシ打連れ歸る我が家の内。詞ヲ、此方の人戻らしやんしたか。陀多右衛門様もようお出で。初日から未だお目にかゝりませぬが。きつい大入でお目出度うござります。アイそりや互でごんす。見物の足が早さに。そろ〳〵行かうと出かけた道で。岩川に逢うたによつてそれでちよつと寄りました。それはマア〳〵ようこそお出で。したがまだ漸うと今の先。櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶なりともと。地會釋に汲出す端香より。心の花香ぞ愛想ある。詞コリヤ女房共。留守の内へ今日の角力割は持てこなんだか。イエ〳〵。まだ何にも持ては。ハテ埒の明かぬ。今迄知れぬは何ぞもめでもあるかいの陀多右衛門。サアおれも初日に鈍な角力取つたによつて。何でも今日はと思うてゐるが誰と合はすぞ。相手によつては魂膽も工夫もして見にやならぬ。いつそ行て聞いて來うかい。ハテまあよござんすわいな。其内には持て來う。幸ひ貰うた肴もある。主と一所に飯上つて行かしやんせ。地ドレ拵らようと木綿襷かけまく神にあらねども。菩薩廻りの女房は。フシ勝手へ立つて入りにけり。詞岩川様お宿にござりますか。新町の大坂屋から參りました。左右衛門申します。錦木太夫が身請の跡金。今日中に遣はされませぬと。こちらに身受の客衆がござります故。其方へ相談致します。お前のお顔を立てまして今日中は待ちます。明日になつたら此方へ太夫をやりますす程に。其時いぢむぢのない様に。念を入れいと申されましたと。地言ひ捨て使は立歸れば。詞ヤア其身請外へさしては岩川が立つものかと。地駈出すを。詞コリヤ〳〵岩川。其身請の譯も其客も。此鐵が嶽が知つてゐる程に。マア行かずともよいわいやい。ム、すりや。其身請の相談を。われがよう知つてゐるか。シテ其身請の客といふは。イヤ外でもない俺ぢや。ヲ、鐵が嶽陀多右衛門ぢや程に。マアさう思うて居いやいと。地俄に骨氣も節くれ立ち。頬髭撫でて フシのさばり面。詞ム、聞えた。こりや九平太が腰ぢやな。尤も汝が爲には大事にかけにやならぬ人ぢやが。爰をよう聞分けてくれ。あの錦木太夫は。おれが親方の禮三殿とはきつう深い中ぢや。其錦木故親の勘當まで受けられた事。こりや言はいでも知つてゐる事。其處らはまあ取つてほつて。五百兩といふ金まで渡し。跡金の二百兩

才覺する其内に。太夫殿を外の手へ渡しては。どうも岩川が顔が立たぬ。わがみが中へ入つたこそ幸ひ。何卒そつちの身請を。じやみる様に言廻してたもるまいか。鐵が嶽。コレ頼む。地〳〵と詞を下げ。事を分けたる一言を。鼻であしらふ フシ悪者作り。詞ヲ、此身請はどうせうと斯うせうとおれがまゝぢや。われが頼む様にしてやろというたら。勝手はよからうが否ぢや。わりや惠海庵で九平太様をひどい日に合はしたげな。ヲ、强いこつちや。其仕返しを頼まれてゐる此鐵が嶽。あんだらくさいことといふない。ム、すりや其時の事が根葉になつて。それ故身請の邪魔するのか。イヤ邪魔するとは何のこつちや。コリヤ錦木が身受は金づくぢやぞよ。僅か二百兩ばかりの跡金を。園子の咽に詰つた様に。ぎつちかはと吠え面かくとは違ふ。七百兩といふ金を。がかりに出して身請するのぢや。なる程尤もぢや。兎角めい〳〵親分を。大事に思ふから起る事ぢや。何と斯うしてたもらぬか。おれを九平太様へ連れて往て。貴方の胸の晴れる様に。撲たしなりと踏ましなりとさして。身請は此方へさしてたも。わがみの言やる通り金づくの事なれば。今日中に跡金さへ出來れば。頼む事も何にもなけれど。サちつと急に出來にくい。尤も在所へ言うてやつたら。工面の出來る事もあらうが。親どもの耳へ入れとむない。それでわがみを頼むのぢや。又身受しやつてからが。とても太夫が九平太様の女房にやならぬ。すりや畢竟が費といふ物ぢや。默れやい。太夫が隨はうが隨ふまいが。それにや構はぬ。九平太様には金がたんとあるによつて。其金でわいらが頰をはり廻すのぢや。サイノ。金で頰をはらずとも。此岩川をどうなりと腹の癒る様にして。身請は此方へさしてたも。コレ一生の頼みぢや。恩にも着よ。コレ手を下げる鐵が嶽と。地頭を疊にすり付けて。スヱテ頼む心ぞ切なけれ。詞ムムそんなら何か。踏まれても撲たれても。言分ないといふのか。イヤモ聞分けてさへたもれば。縦へ此身は如何なつても。コリヤ相談が面白いわい。九平太様の名代に。マアちよつと斯うせうかいと。地立蹴りにどうど踏飛ばし。詞何ぢや何びこ〳〵するのぢや。わりやたつた今。言分ないと言うたぞよ。但し言分があるのか。イヤ〳〵。何の言分があるもので。サア〳〵何うなりと心任せに。ヲ、其筈ぢや。惠海庵での意趣返し。わりや九平太様を斯うくらはしたか。イヤ斯う踏んだかと。地弱みを付込む厄病の フシ髪も頭も引きしやなぐり。地さいなむ折から表へいきせき。詞ハイ今日の相撲割でございます。

もう追付け土俵入ぢや程に。早うお出なされませと。フシ書付投り込み立歸れば。地陀多右衛門押抜き。詞何ぢや。鐵が嶽に岩川。ム、すりや。今日は岩川と鐵が嶽。コリヤ見い。俺と汝とが相撲ぢやとやい。ム、時も時折も折。わがみと俺が立合とは。ハテ氣味合な事ぢやのと。地いふも心に一思案。詞コリヤわれも池田の岩川といはれては。國々へ名の通つた者。又俺も大名のお抱へ。殊に大坂は初めてなれば。此相撲しくじるが最後扶持離れぢや。すりやこれ二人ながら大事の相撲。九平太様の名代に。惠海庵の仕返ししたれば。此算用は濟んである。又錦木が身請の事はおれ次第。ヲ、此鐵が嶽が心次第ぢや。水心あれば魚心あり。頼む事も頼まれる事も。まあ今日の相撲了うてから。其上の事にせうわい。われも隨分神佛でも叩き廻して。俺に勝つ様にせい。したが可愛や。おれと取つたら骨身が砕けて。重ねて土俵踏む事ならぬぞよ。どうぞ頭取衆を頼んで。振換へて貰うてなりと。取らぬ方が勝ぢやあろ。それともに取つて見ようと思ふなら。魚心あれば水心あり。ナ岩川。土俵で逢はうと。地強い詞の何處やらに。味な鐵棒引きずる雪踏。フシぐわらつかせてぞ出でて行く。地跡に岩川兩手を組み。スヱテ思案にくれて居たりしが。詞段々日限の切れた跡金。親方が催促するも九平太が所爲。とかく鐵が嶽を抱込んで。あつちの身受を延して貰はうより外はない。と言うても一筋繩では往かぬ奴。抱込む仕様は。ム、太夫が身請はおれ次第。魚心あれば水心あり。ヲ、こりや今日の相撲を。振つてやらさなるまいわいの。ソレ／＼。彼と我とが立合ふこそ幸ひ。美しう振つてやり。彼奴に勝を讓つて置いて。其上で退引させず。頼むが近道上分別。とはいへ名取の鐵が嶽。何う魂膽してなりとも。投殺さにやならぬ相撲。いはば一生懸命の。大事の相撲を金故に。振つてやる岩川が。心の内の切なさ穢さ。地摩利支天にも見放され。相撲冥加につきたのかと。思ひ廻せば廻す程空恐しさ口惜しさ。思はず拳を握り詰め スヱテ身を顫はして。男泣き。始終立聞く女房が涙隱して。詞ヲ、こちの人とした事が。先刻にから飯拵へて待つて居るのに。爰で上るか奥へ据ようかと。地何氣なければ そ知らぬ顔。詞イヤモ飯なら喰ひたうない。ホンニ角力から呼びに來た。地ドレ行て來うと立上れば。詞そんならもう行かしやんすか。コレ岩川殿。ソレ髪がきつう亂けてあるぞえ。人中へ見苦しい。地結うて上うと取出す櫛箱。詞イヤ結うて居たら隙が入る。つい撫付けて置いてたも。ヲ、お前もこんな髪

して。行かしやんした事はないが。地いつその事何もかも。言うて聞かして下さんせぬか。詞ヤ言へとは何を。サイナ。お前の心のナ。それ縺れ髮。撫付けて置かうより。寧そさつぱり地いはしやんせぬかといふ事いな。詞イヤいふまい〳〵。何ぼわしにいへといやつても。高が女の手業。いうたら大方おくれが出よう。つい撫付けておいてたもと。地傍に直れば女房も。押しては言はぬ縺れ髮。鬢の。ほつれを。撫付ける櫛の背より夫の胸。映して見たき鏡立。詞サアよいか見さしやんせと。地向ふ鏡の盞取つて。フシ映せば映る顔と顔。詞申し岩川殿。色も青ざめ。地そして目の内もうるんで。どうやら氣色の惡さうな顔付。もう今日の相撲へは。斷いうて行かしやんすな。詞何をあんだらつくすぞい。いつはともあれ今日の相撲は。鐵が嶽と此岩川。初日の出ぬ先から町中が。待つて居る晴の出合。何でも鐵が嶽を。土俵の砂へ埋まにや置かぬ。イヤそりや嘘ぢや。今日の相撲は鐵が嶽に。振つてやるお前の心と。言ふ口押へて。詞聲が高い。スリヤ先刻にからの樣子殘らず。アイ一間で聞いてをりました。僅かな金に手詰つて。難儀さしやんすが私や悲しい地寧そ此譯親父樣に。詞たはけ奴。それいふ程なりや此樣に。人に擲かれ踏まれはせぬ。昔氣質の親父樣。打明けて物いふと。禮三樣に意見の何のと喧しい。若いお人の水の出端。若し命生害になつた時は。千日に刈つた萱ぢや。ア、急な事でさへなくば。工面の仕樣もあらうに。僅か二百兩の金故に。大事の相撲を振つてやらさなるまいと思へば。腑甲斐ないやら口惜しいやらで。おりや胸が裂ける樣な。ヲ、道理ぢや。〳〵〳〵〳〵フシさりながら。地夫程の大事の事。連添ふ女房に隱して居る。お前の心が聞えぬと。怨み涙に。フシ時移り。地早や追々の呼使。詞申し土俵入でござります。早うお出なされませ。地ちやつと〳〵に岩川が。しを〳〵として フシ立上れば。詞もうお前は行かしやんすか。ハ鐵が嶽を抱込んで。工面の通りいきや格別。若しも行かねば絶體絶命。是が暇乞にならうとも知れぬ。さらばと 地ばかり一聲を フシ跡に殘して出て行く。詞コレまあ待つて岩川殿。たつた一言いひたい事と。地見れども跡は雲霞。詞コリヤ斯うしては居られぬ所。夫の命にかゝはる勝負。地わしもこれから相撲場へと。帯引締めて夫の跡慕うてこそは。三重へ行く空に。地響く櫓のとうからと打仕舞うたる太鼓より。鳴り渡つたる岩川と鐵が嶽との相撲割。表にべつたり貼紙も。はりさく木戸口押合ひへし合ひ。早や土俵入事終り

相撲の數々取盡し。フシ中入前ぞ勇ましき。詞東西々々道頓堀宗右衞門町。北野屋七兵衞樣急用でござります。一寸木戸迄お出なされませと。地又も呼出す相撲の名告。入れかへ。〳〵勝負も。今一番と フシ夕日に連れて。詞西は岩川々々。東は鐵が嶽〳〵と 道具屋名告上げられ四股踏鳴らす鐵が嶽。此方は猶もしよげ鳥の オクリしを〳〵。上る土俵の上。フシすづまり フシ返つて見物す。詞片や岩川岩川。片や鐵が嶽〳〵。せくまい〳〵せかずと顔を見合せて。やつと引いたる行司の團扇。直に付入る鐵が嶽。ずつと兩腕指込ます。地元來覺悟の岩川が。既に フシ危く見えたる所へ。詞進上金子二百兩岩川樣贔屓よりと。地聞くよりぐつと岩川が。始めの氣色何處へやら。鐵が嶽が兩指を。ほぐして土俵へ引つくり返し。力士の如くつつ立てば。よいや〳〵と數萬人。一度に立つて手を叩きどよみを作る鬨作る。櫓太鼓も打出しの表は人の。三重へ山なせり。フシ次第々々に。散る人の中に紛れていきせきと。駕を舁せて北野屋七兵衞。來かゝる向うへ岩川が。胸のもや〳〵さつぱりと。フシ我が家へ歸る戻り足。詞ヨウ〳〵關取樣出來ましたと。地 跡から付いて來る人に。見付けられじと駕片寄せ。七兵衞が素知らぬ顔。詞ハア關取。さて〳〵今



明和四年八月竹本座興行の番附

日はきついお手柄。ホ七兵衛殿。見てぢやあつたか。見た段か。何うやら取口は悪かつたが。引つくり返した其強さ。イヤモ今日の相撲は譯があつて。きつう取悪かつたが。味な事が張合になて。味な事とは二百兩の纏頭か。コレ其纏頭やつた旦那殿が幸ひ爰にぢや。逢うて禮をいはしやりませと。地垂を上げれば。詞ヤアわりや女房。岩川殿。隨分健で居て下さんせ。そんなら今の二百兩は。コレ關取。お内儀の勤奉公。志の二百兩。女房ども。なんにも言はぬ忝い。サ駕の衆。地やつてと北野屋が。氣轉利かして駕の垂。内は歎きに暮近く。人相告ぐる鐘諸共別れ〳〵にユリ。三重へ行く末は

第　三

ハルフシ昔の京と難波浦。春雨しげき夜の道。オクリ錦木諸共。禮三郎。相合傘の濡事も。フシひつたり濡れる。横しぶき。コレ詞太夫。道々も言ふ通り。わがみの身請の跡金故。岩川の女房が。勤奉公すると聞く。代りに其方を北野屋へやらうとは思うてゐるが。廓と違うて。いかう勤めにくいといふ事ぢやぞや。ヲ、禮三樣とした事が。義理より辛い勤めはあるまい。地お前やわしが身の上まで。段々世話になりながら。詞おとは樣に勤めさしては。どうまあ義理が立つものぞ。地是非とも代る此身の上。詞請出されぬ先ぢやと思や。地わしやひつとつも厭はぬと　スヱ言ふも涙に聲くもる。詞ヲ、道理ぢや〳〵。何を言ふも皆わし故。日外團右衛門めに衒られた金の事。詮議をせうにも。肝心の團右衛門が行方は知れず。何もかも身にかゝる難儀の果は。一足づつに消えて行かずばなるまいと。地我が身は暗きフシ闇の夜に地光る眼も蛇の目傘。向うにすつくと鐵が嶽。詞ヤア好い所で錦木太夫。岩川奴に負けた意趣晴し。うぬをこれから連れていて。九平太樣に手渡しすりや。一廉金になる仕事。サア〳〵うせいと引立つる。ヤイ鐵が嶽。錦木は禮三が身請して。今では俺が女房。其女房を連れて往て。金にせうとは盗人同然。汝を代官所へ連れて行く。サアうせをれと地引張つても。ちつとも動かず。詞エヽ毛二才め何ひろぐ。うぬに引張られて行く間。此手は如何して居ようと思ふ。馬鹿つくさずと太夫を渡せ。いやといふが最後。幸ひ邊に人もなし。手短かにばらすぞよ。ヲ、縱へ此身はどの樣になつても。太夫を遣つては岩川へ言譯立たぬ。ヤア其岩川が猶けたいぢや。疫病神で敵の汝。渡さにや地斯うぢやと踏飛ばせば。なうコレ待つてと錦木が。立寄る腰際引掴み。もう了簡がと武者振り付く。禮三

が首筋引つとらへ。ひばり骨見る樣な態をして。猪口才すなと引寄せて。地握拳のめつた打ち。かよわき錦が手に當る。小石摑んでばら〳〵〳〵っ礫に眼くらまぎれ。油斷大敵禮三郎。小股取られて鐵が嶽。體の重みにうごめく背中。すかさず禮三が取つて伏せ。詞爰構はずと早う〳〵。地必ず怪我して下さんすなと心は跡に島の内。フシ北野屋さして別れ行く。反ね返して髻髮摑んでぐつとのつかゝり。詞サア太夫を何處へやりをつた。埋んだ所をサア吐かせ。此鐵が嶽を盜人とぬかした其頬桁。地蹴裂いてくれんと踏付け。〳〵引廻されても纖弱き禮三。手向ひならぬ無念泣き。詞いかに手に合ふ物ぢやとて。餘り慘い胴慾ぢや。ヤイ胴慾とは汝が事。九平太樣へ極まる身請。岩川めが邪魔するも皆汝から起つた事。地體生白けたしやつ頬。見る度ごとに虫唾が出る。泥ぼに似合うたこれ喰へと。地摑んだ泥を口の内。もうこれ迄と拔きかくる。柄元しつかと。詞ハ、アやるわ〳〵。こりや汝毒もるのぢやな。小さい形して。相撲取を殺さうとは。鰌の地蹈韛叶はぬこつちや。サア切れ〳〵と引拔いて。互に爭ふ其中に又も降りくる。雨の足。禮三は引く足放さぬ我武者。あなたこなたと引廻されて稻村の。内より出づる刀の光。鐵が嶽が肩先ぐつすり。うんと一聲。詞南無三寶手が廻りしか何とせんと。地心おづ〳〵一刀。うぬえらい事ひろいだなと。拔いて切込む白刃と白刄。稻村蔭に窺ふ曲者。あやなき闇の黒裝束。だんびら提げ後より。助くる加勢の滅多切り。禮三が所爲と思ひ込み。切込む深田の泥まぶれ。猶降りかゝる。雨曇り。足もしどろに胸の闇。憎しと思ふ一念力。刳りくる〳〵曲者が。威す足音禮三郎。又も怖氣の身もわな〳〵心そゞろに千鳥足。フシこけつ轉びつ迯歸る。地とつくと見濟まし探り寄り。留めの刀。一刳り。觸る足元落ちたる鞘。納めた思案の。向うへ提燈暫く忍ぶ。フシ身の廻り。雨具に圍ふ立派の侍。家來を先に來る道筋。落ちたは何と手に取上げ。明を持てと提燈の。灯影に見付くる邊の血汐。切倒されし大男。詞ヤアこりや身が屋敷の抱への相撲鐵が嶽。地何にもせよ心得ずと。内改め紙入より取出す一通。詮議の種と開く間讀む間稻妻の。提燈ばつたり曲者は跡を。くらまし ユリ。三重へ落ちて行く

第四

昔は西に。念珠が關今は東に白川の。關も物かは磯に見る。なみ〳〵にて大阪の關はゆるさぬ場所に。類ひ名取の千羽川。其川風にもまれては。四つにも組まん柳

腰如才。内儀の世話になり。お才はさいつ頃よりも爰に。假住み假初の。縁を鶴屋の禮三郎。合せ骨牌のかゝる島。有る無し フシ知らぬさま育ち。丁稚でもない相撲取のひよこと見えるうそ〳〵前髪門口から。詞藤繩半右衛門申します。吉兵衛様の御病氣ちつとよごんすか。今日晝網に取りました此鯔お裾分け申します。ヲ、お心にかけられて。殊に鯔は吉兵衛の相角力。追付け是にあやかつて力付かしやる吉左右よう禮いうて。御太儀ぢやと。地溜紙に百ロ先で。ころりとフシいはす手取嗚。地合せの勝負讀む骨牌。詞一萬二千二萬五千。三萬八千がお才様の勝。アノどうしてこれが勝ぢやぞいな。エ、不器用なお才様まだ覺えさんせぬか。サイナ歌骨牌取ると違うてむづかしい物ぢやわいな。ナンノこれがむづかしい。禮三様に末永う合せの勝負。跡は女夫の一番相撲と世間廣う出ぬけるかため。地團扇は小野川お才様よいや〳〵とフシ譽められて。地赤らむ顔は朝日山。解けぬ心の禮三郎。詞イヤ合せに於ては我等きつい粋方なれど。斯う札が來てはいかぬ。その筈でもあり。此間から段々と詰らぬ身の上。どう思案しても叶はぬ〳〵。叶はぬ戀と思うたに。わたしが様な阿房に縁の悪縁でござんせう。又斯うも來るものか。いつそ此方から身を捨てて南無三寶命を取られた。ア是なア氣にかゝる事言はしやんすな。イヤもうきつい目にあはされとんと禮三が絶體絶命。アレまだいなお才様の業ぢやない。其科はお前ぢやわいな。そりや何故に。ハテお前が切らしやんしたぢやないかいな。エヽイ。何をわしが何時切つて。ハテ今の程お前の出に切つた札。科人はやつぱりお前。身を恨んだがよいわいなと。地つい戯口にいふ事も。疵持つ足の裏背戸にフシ心置かるゝ折も折。破編笠人相は見ねど見す見す悪者作。うそ〳〵覗く姿素振。小氣味悪さに禮三郎。アレ誰やら人がと納戸口。はづす弱みへ疫病の。神様株が伸上り。こりや花々しい勝負でござんすの。ドレ一資本して來うか。内儀様四五十兩貸して下あれ。貸しても借る。貸さにや根太切り引つたくるのぢやと。地喫めとも言はぬ烟草盆。煙管ど太う。フシいやがらす。地およつは騒ぐ色もなく。詞ム、金が借りたい。易い事やの。五十兩なと五百兩なと。何ぼなと貸さうがこな様誰ぢや。ついに見た事もない。術ない人に一文半錢でも貸しては此方の人に立たぬ。此女中様と合せ骨牌のあぢやら事。勝負事の何のと。人聞の悪い。こつきの威し喰ふのぢやない。出直さんせとフシ取りあへず。詞ヤイなめ上るな。御法度の勝負

事を商賣にする證據には。今おれが影を見て隱れをつた男め。ちらりと見てもさす物ぢやないわい。衒妻相手にするのぢやない。爰の亭主は何といふ。亭主に逢はう〳〵。イヤ此方の人は瘧を病んで久しう寢て居らるゝ。殊に今日は發日でそんな事聞かすと忽ち大熱。そりや止しにして下さんせ。だまれやい。病氣ならてこのぼんやせいといふ赦しがあるか。出さらにや爰へ引ずり出す。ア、これこれ。そればつかりは堪忍して。コレ 地拜みますと詫びる程。詞何ぢやあらうと亭主めを代官所へ引きずつて行くのぢや。出され 地〳〵と猶聲高。病家の一間洩れ聞え。詞およつ〳〵。おれに逢はうといふのは誰ぢや。地ドレ出て逢はうといふ聲も。病に屈せぬ大男大阪一番千羽川と。一目にしるゝ關取風。見るよりぎよつとフシ呆れ顔。詞わしに逢ひたいとは此方樣か。

アノ爰の亭主といふは。アイわしでごんす。イヤア 地こりや敵はぬと迯出す。詞コレ〳〵待たんせ。樣子聞いてから其跡で。きつと馳走もせにやならぬ。其御馳走が痛み入ります。イヤ〳〵遠慮のない事。わしやもう嚊が知つて居る通り。土俵の上の勝負より外。腕立する事が嫌ひ　久しいの煩ひ餘り氣が重い故。昨日月代はして見たれどまだ瘧が落ちぬ故。いつからやらふつつりと力業をして見ぬが。腕固めにナア嚊。どこぞ入らぬ體があるならぼき〳〵。摑み碎いて見度い。エエイ。ハテこれ何を其樣に顫ふのぢや。ハイこりや。お前樣の瘧の身代りでござります。ちよつと爰へごんせ。イヤもうそれへは憚り多い。ハテ行かんせと女房に。地突きやられてもびつくびくフシ蛇に追はれし蟇。地頬見てやらうと禮三も立出で。詞ヤア汝は善九郎め。國右衞

門と一所になつてよう勘當さしたなと。地胸ぐら取る手をしつかと取り。詞コレ禮三殿此善九郎は此方故に斯ういふ風體。わがみは恨まず逆ねだり。そればかりぢやない。一昨日の晩難波裏で銕が嶽が殺された。其殺人も大方違はぬ。詮議があるサアわせいと。地引立て行く善九郎が。肩骨摑んでぐつと押付け。詞かゝ。手拭と手ばしかく。地顋立させぬ猿轡。五尺の體 フシくる〳〵卷き。詞詮議のある盜人め。身動きひろいで邪魔になる。ちつとの間何處へなとぶち込んで置きたいが。地ハテどうせうぞ納戸から。幸ひ爰に明半蓋。詞イヤ〳〵〳〵。のら猫の爪研ぐ樣にばたついては面倒な。地寧そ爰へと疊の下。幸ひ炭櫃のあなかしこ迯さぬ思案の極樂落し。跡踏みしめて立直り。詞マアこれで片付いた。あゝして置いたら此方の儘。禮三樣も何やかや。定めて

意趣もあろけれど。實は目に立つまあ晩の事。成程々々とつとこれで胸が晴れた。今夜中に岩川にちよつと逢はねばならぬ譯。地行て來ませうと立出づる。詞申し〳〵お前の脇差はどうなされた。ヤ、アノそれは。ござりませぬか。御勘當のお身の上は猶以て世間へ外聞。何故丸腰でござります。地といふに返事も差詰り。行當る顏尻目にじろり。大方誰ぞを賴んで質物にお入れなされたであろ。あの脇差は親御からの御秘藏ぢやげな。すりや見知りのある一腰。何處から何う廻つてひよつとひよんな所の手に入れたら。お前ばかりか親御のお名の出る事。實は身の指合せ。金さへあれば買はれる道具でさへ大切。まして親御の血を分けて。讓受けたお前の身は猶大切。何處へお出でなされうとも。必ず命を大事にして。聊爾な事なされますな。斯う言や艶らしけれど。前方はしみ〴〵と物言うても下されなんだが。お才樣の緣に連れて。今では次郎同然に。懇ろにして下さるお前ぢやによつて此御意見。惡う聞いて下さりますな。御合點かえ。早うお歸りなされませと。地明けてそれとは夕間暮。口にいはねど過分さを。拜むが諸事の禮三郎。フシ心殘して出でて行く。地申しお早うえも口の中。まだ夫とは言ひ兼ねる。おぼこ娘の案じ顏。詞これは扨追付け戻らしやる人を。もう一生も逢はれぬ樣に。何でございますぞいの。尤も錦木といふ色があれど。禮三樣故に駈落までしてござつたお前。氣遣ひせまい吉兵衛が添はします。とはいふもののお前には許嫁のお侍。丹波の御家中津田雨助樣。まだ緣は切れませぬぞえ。萬一先から大坂まで詮議すまいものでもない。かゝ餘り外へ出しますな。ナニそりやお才樣よりお前の事。今とつくりと養生して。秋の相撲から出にやならぬ大事の體を。ちつと好いと月代剃つて氣丈立が惡いわいな。今日は又發日ぢや。寒けの來ぬ内蒲團でも着て居やしやんせ。何ぬかすやら夕立のせぬ先に。下駄はいて步かれるものかい。なんぼ煩うてゐても。地取などすりや氣合が好うなる。おいらが内に寢て居ると。鳥籠に鶴入れた樣で氣が詰まつて一倍惡い。そんならどうなと勝手にさんせ。何でもわしが言ふ事は聞かんせぬ。ヲ、相撲取は女房のいふ事聞かぬのが好いのぢやわいと。地ぎごつな詞も關取の。フシ中のよさとぞ知られける。地日も暮れ過ぎて藏屋敷の奴が提燈目印を。尋ね來る立派の武士。詞千羽川の吉兵衛殿は此方か。アイ〳〵御方でござります。イヤ苦しうない者。在宿ならば御意得たし。手前が事は津田雨助と申す者。エ、イ。あの雨助

様。そりや丹波の御家中。いかにも左様。エ、これはまあ時も時。兩助様ぢやといなアと 地 知らす聲より驚くお才。心半亂半蓋の。ふためき隱す小屛風に。押圍ふ フシ 間もあるやなし。御免ならうと フシ 打通れば。地 素知らぬ顔に手をついて。吉兵衛と申すは私。津田兩助様と申すはついに承りませぬが何用あつてかようこそお出で。私も瘧を病みまして。見苦しい病家。無禮は御免お茶上げませいと。地 落付いて。腰をすゑたる心の配り。詞 成程存じ召されぬ筈。手前初めて參つたは。ちとお身に尋ねたい事あつて。其仔細は身共が屋敷丹波の抱へ。鐵が嶽といふ者。一昨夜難波裏にて切殺され。何者の業とも知れ申さぬ。此儘に差置いては國の耻辱。若しは相撲の意趣切か。御身の商賣體なれば。知れまいものでもないと存じて。ハアそれでお出でなされたか。そりやもう憚りながらきつい御了簡違ひ。マア第一負けても勝つても。相撲に意趣といふ事はない事でござります。殊に此仲間で喧嘩事が嚴しい法度。又思召しても御覽じませ。相撲取が我儘に。喧嘩を好いて致さうなら。世界に人種はござりませぬ。ム、尤も。然らば今一つ尋ねたいは。お手前は近江の屋敷三島彌太夫に出入するとな。其娘お才を女房に申受けうと契約した兩助。然る所お才には。不義の男あつて勘當せし由。今にも顔を見合すれば侍の意地。眞二つに打放さねばならぬ時宜。彼の不義の男は鶴屋の禮三と聞いたばかりついに顔を見知らず。こりやお手前存じて居ぬか。ハ、〳〵様様の事をお尋ね。相撲取と申す者は。大阪中の町人衆。皆彼方から御存じなれど此方に一々覺えませぬ。山伏の内へ來た様に。ちとおなぶりでござりますかと。地 猶押强う押圍ふ。屛風に女房が胸ひや〳〵。スエテ 力めばいとゞ。身の顫ひ。地 吉兵衛もはつと計り。お侍様御赦されませ例の瘧で俄の寒け。女房ども。羽織羽織と 地 身に引つかけて何處も彼も。フシ 包み廻せし氣扱ひ。地 顔も一曲朱鞘の一腰。居士衣の裾散切髪。詞 吉兵衛殿お宿にござるな。男氣な此方と見受けちと御無心に參つた者。拙者元は由緒の武士。浪人の世渡りそと致した劍術指南。面目ないが尾羽を枯らし。差換への一腰賣りに參つた。何と求めて下されまいかと 地 脇差前に差置けば。これはまあ餘儀ない仰しやり様。御浪人のお嗜み定めて天晴お道具でござりませうが。町人の爲には猫に小判。人切る術存ぜねば刃物買ふ様がない。イヤ其脇差ばつかりは。此方が買はつしやれにやなるまい。拵へは何にもせよ。心を篤と目利してお買ひなされて下

されい。ム、心の目利は私も不得手なれど。左様ならばドレ。ちよと拜見と 地 拔きかくる。鎺の血汐に鯉口ぴつしやり。詞 ナント其心を見ては。外の手へは遣られまいがの。イヤハヤ變つた所にあつた脇差。コレ〳〵。出所は兎も角も氣に入つた買ひませう。イヤ其脇差兩助が買申さう。いつかな事なりませぬ。吉兵衞が買ひましたシテ代物はな。千兩の折紙。サア金がなくば質取りましよ。其質物はこれ爰にと。地 小屛風くわらりと引退くれば。詞 コリヤ何とする。サレバサ。刄物の代りに女中道具の小袖櫃。此場にあつては事の破れになりさうな物。中改めずに此儘で質に取りたい。イ、ヤあの半盞は。いやなら千兩ヲ、サ價はいか程なりと。先づ其心を兩助が。地 檢めんと立寄るを。取つて。突退け蹴上ぐる疊。下からぬつと以前の善九郎見合す浪人。ヤアお頭といふ間稻妻吉兵衞が。袈裟にすつぱと紅の脇差目先へ差出し。詞 お望の心とつくりと御覽なされと。フシ 居合腰。詞 ヲヲ見事々々。鎺元より切先まで。微塵曇らぬ男の魂。ハ、ア天晴驚き入る。眼前に人を殺した吉兵衞と。人の科まで身に引受ける心であらうが。それはそれこれはこれ。況んや其奴夜盜と見えた。如何で首の無い奴。併し不思議なは最期の一句變つた所に近付のある盜賊め。詮議の種にもなるべき物。ハテ殘念と。地 兩助が。尻目に彼奴も底氣味惡く。詞 吉兵衞殿。金子調達。只今急にもなりにくからう。其脇差は預けて歸る。有無の返事を拙者が宅へ。後程までに待ち申す。ム、御浪人のお所は。天王寺樂人町澤田伴龍とお尋ねなされ。澤田伴龍殿。今宵中に屹度參らう。然らばおさらば。お侍これにと 地 ばかり默禮に。邪智を隱して立歸る。

詞 兩助もお暇申さう段々仔細のありさうな事。身どもが用事は人殺しの詮議ばかり。武士が賴みに參つた詞反古にもなるまい。お身此詮議しておくりやれ。イヤ人殺しは私。此奴今は盜賊なれども元は善九郎と申して鶴屋の手代。ム、それなれば猶以て。其奴は殺しても大事ない。此兩助樣子具に存じて居る。鶴屋大恩の下人として。主人の金を横取した奴。凡そ引負の科人は主人の家にて庭成敗に行ふが大法。天罰は遁れず自然と主の刄にかゝる。其脇差の出所は。言はぬが秘傳の折紙道具 地 必ず〳〵何時までも。詞 身を大切に。凶事のない樣。お手前はまだ知るまい。お才が親三島彌太夫事。預りの長光の刀紛失の誤り。此刀が出ぬ時は彌太夫の身の大事。それに就て鐵が嶽が死骸の傍に。落してあつた此紙入こそ一つの手がかり。是をお身の手に渡さば。

其中に其方の入用の物もあらう詮議の筋が見えたらば。大儀ながら身が旅宿まで。委細畏り入りました。シテ貴公様はいづ方に。イヤ旅宿の所書。地則ち認め参つたと。差出せば押披き。詞ヤアこりやお才殿への去狀。ヲ、道程僅か三行半。怪我の無い様去荷の注文。無事に落付く身の行末 フシ此上ながら頼み入る。地萬事後刻と諸事の譯。胸で納めた千石取 フシ藏屋敷へと歸らるゝ。地妻も立出で危い所漸う遁れた半蓋の。二人が悦び吉兵衛は。兩助が詞のはし/\紙入の内より出づる狀一通。繰返し見て愁く面色。詞心得ぬは澤田作龍。どうでも彼奴には仔細がある。コリヤ斯うしては居られぬと。地脇差ぼつ込み門口へ。女房内に氣を付けいと フシいひ捨てつつと出でて行く。詞サア/\お才様悦ばしやんせ。今日といふ今日此去狀が禮三様と女夫の固め。

地ほんにこれも兩助様の。おかげ/\と足跡を戴く疊むつくりと。思ひがけなき フシ以前の浪人。地スハ盗賊といはせも立てず。およつが小腕提緒の早繩。打込む戸棚の錠前しつかり。詞お才怖い事はない。和女故に浪人した團右衛門ぢやヱ、イ。吉兵衛を出しぬき。竹垣破つて忍び込んだも。和女を連れて往なうばかりぢや。おれは汝に惚れて居る。汝は禮三に惚れて居る。定めていやであらうけれど。から鱶が魅入れてからは逃げても逃がさぬ。否でも應でも抱かれて寢る。爰へおぢや。アイ。ハテおぢやいなう。アイ。ヱ、とつともう。悪い時にあれヱ。地/\も女聲。詞なんぼ呼んでも吉兵衛は爰らには居ぬわい。叶はぬ事ぢや枕直して抱かれてねいと。地根強う仕込む蟒蛇眼。逃がさぬ門口吉兵衛が戻りかゝつて戸を叩けば。内に物音吹消す行燈明かぬは不思議と表から。踏碎く戸の破れ口。互に探る暗紛れ。闇は黒白なし摺れちがふ。手に觸つたる帶の端。すつぱと切つて團右衛門 フシ跡暗まし逃失せたり。詞吉兵衛様か。お才様か。帶解きひろげてコリヤ何ぢや。地手に殘つたる男の帶。ム、ヱ、此方様は/\。禮三殿に添はさうと思ふ吉兵衛をかはにして。こりや外に忍び男が出來たの徒女郎。人でなし。サア/\/\道理ぢや/\。此言譯はおよつ様。地出て下さんせにぐわたつく戸棚。錠捨切つてフシ引明くれば詞此方の人遲かつたわいの。最前の浪人が。わしを縛つてお才様に無體の戀慕。ヤア/\/\。そんなら彼の浪人は。兼て話のアイ村岡團右衛門。扨こそ知れた。程は行くまい此道筋。詮議の近道逸散に跡を。慕うて三重追うて行く

第五

咲太夫 地 天滿大川一飛に南のはづれ寺町筋。直には行かぬ團右衛門うねくる野道幾筋も。眞一文字に。倉太夫 詞 ヲ、イ〳〵伴龍殿と。咲 呼んだは誰ぢや。倉 イヤ吉兵衛でごんす。咲 是は〳〵。大方彼の脇差の返事。金子才覺出來ましたか。倉 イヤ其約束の金子の代り。其許に買つて貰ひたい物があつて。咲 ム、スリヤ脇差の價に。ソリヤまあ何を。倉 地 これと差出す帶の端。咲 ハツト悔り。倉 詞 伴龍殿。これぱかりは此方が買はにやなるまいがの。咲 ム、如何にも買はうかい。倉 ヲ、價は千兩。こなたの胸に貯へた。惡事の算用受取ろかい。咲 イ、ヤ何にも覺えないと 地 振切つて行く朱鞘の鐺。倉 しつかと取つて卑怯な伴龍。詞 代物を見て返事もやらず。こりや何處へ行く。咲 イヤ其代物所望にない持つて歸れ 倉 いつかな〳〵しかけた。出入は互の命。そつちへ賣るか。こつちへ買ふか。三寸俎板巧みのばれロ。咲 放せ。放さぬ 咲 地 强氣と不敵。手練の當身にうんとばかり。倉 下地の痞に身はがち〳〵。足踏みしめる。咲 地 其隙に迯げても 倉 どつこい迯がさぬ〳〵。咲 詞 イヤサ伴龍は急の用事。退いて 地 通せとかけ出す。倉 向ふへ廻つて又取付き。咲 彼奴も一世の大事の奥の手。劍術達者の伴龍に。倉 一寸ひかぬ男の魂。咲 右へかはせば右に立ち。咲 左へぬければ 倉 引戻す 咲 互に大汗 フシ たら〳〵おり。倉 地 腰にすがつてぶら〳〵〳〵 咲 投げても踏んでも放さばこそ。さしもの手者も持餘し。二人 一度にどつかり地響に。一息ほつと フシ あぐみし面色。咲 詞 扨々丈夫な魂な男。凡そ劍術一道には。誰こはい者なけれども。お手前が土性骨には伴龍も敵はぬ。畢竟が元は此方から。仕懸けた出入の鸚鵡返し。これで五分々々といふもの。其方の脇差の事も。此方の帶の詮議も。口外へ出さねば濟む事。もう了簡して歸りやれさ。それともに聞き分けなけりや手並は今見る通り。此度は吉兵衛わが命がないぞよ。もうこれ限でサア〳〵歸れ 地 〳〵と言捨て立上れば。倉 詞 イヤ〳〵〳〵。天滿の吉兵衛が出入しかけて。病犬の棒に逢うた樣に。迯吠にしては立たぬわい。殊に相手は劍術師。ぶたれてすご〳〵戻つたといふて。どう此頬が出されうぞい。もう何もかも外の出入は取置いて。こなたに打たれた此顔を立てにやならぬ。猶金輪際付纒うて。此方を殺すか。おれが殺されるか二つ一つぢや。命は始めから投出してあるわいの。サア〳〵〳〵殺して下あれ。殺してもらをと 地 胸打叩き フシ 赦さん氣色はなかり

けり。咲詞ム、成程尤もちや。お手前を殺せば身も下手人。何の益に立たぬ事に互に命を果す道理。併し身どもに打たれて此儘に歸つては男が立つまい。何と命を捨てずとも。男の立つ仕様はないかい。倉一札が貰ひたい。咲ヤ。倉イヤサ。町人出入は高が相手を誤らしてさへ戻れば。何處へ出ても男は立つ。命が惜しくば伴龍誤り證文書いて貰はうかい。咲ム、はて味いな臺詞になつたな。投げられて誤り證文取るとは。神代の昔から聞かぬ事ちやが。それで腹の癒る事ならどうなりとせうわい。倉左様なうては叶ふまい。サアちやつ／＼と書かれいと。地腰の矢立も磨き込む。二十三夜の月明。咲心の曇墨黒に。誤り證文件の如し。澤田伴龍と書認め。フシ差出せば。倉懐より取出し合す證據の一通。詞ホ、墨色筆法紛ひもない同筆。御約束の通り備前長光の刀。

追付け指遣し申すべく候。一原九平太殿村岡團右衛門より。咲ヤア其狀はと取付くを倉フシ一當あてて尻引褰げ。咲地又立ちかゝる伴龍が。倉腕首ちつとも働かせず詞刀の盗賊團右衛門。九平太方へ長光の刀賣つてくれいと賴みの狀。使に立てた鐵が嶽。死體の傍に落してあつた汝が手跡。此手と比べて見たいばかりに。投げられてやつたのを誠と思ふが汝が天命。西國江戸方の關取と採んで來た此體。うぬらは小指にも足るものかい。お才殿の戀の意趣。禮三を殺して了ひたがる巧みの一々。引括つて屋敷へ連れ行き何も彼も白狀さす覺悟せいと フシ睨付くれば。咲地破れかぶれと村岡が差込む腕倉合點と。揞いでどうど車投げ。朱鞘の一腰引つたくれば。咲それ遣つてはとしがみ付く。倉肚腹をはたと眞の當。咲うんと倒るゝ其隙に。倉月に晃めく刃の光。鐔に

噂の彫物は。詞お才殿の咄に違はず。正しく是が備前長光へエ、。地忝し／＼と押戴き押戴 。咲所の大勢物音に。喧嘩喧嘩と立騒ぐ。倉詞ヤア棒の端ちつとでも當るが最後爲にならぬ。千羽川吉兵衛が喧嘩の達引見物せい。此奴は段々詮議のある奴。連れて往んで活を入れしごいて存分言はせにやならぬ。天滿まで付いて來て。達引の譯見て置けと。地腰にぼつ込む長光の。刀の詮議件龍が。帶の前がは我が帶に。しつかと握る證跡は隱れ。紛ひも大阪に。男の生粹關取の天滿を。さしてぞ。三重

第　六

查太夫詞仲居衆／＼。中のしやぎり打止んで今座付が始まつた。棧敷は西の二三の續き。東の五の下孫の出共に。五組のお客様方へさう申しや。火鉢は好いか。

煙草盆と。和佐太夫 地喚けば奥より仲居のお品走り出で。詞ヲ、庄七殿やかましい。しやぎり打切つたも知つて居る。それでお出でと言ふけれど。此藤江は何故來ぬ。あれ程約束して置くに不參があつてはならぬというて。最一度せきにと フシいふ中に。詞太夫 地奥より出づる長崎客。刀提げ。詞コリヤ／＼仲居。顔見世見ると一人は見られぬ。呼びにやつた女郎は來るか。和佐サアお前の仰しやる新造様は。奥に來て居さんす錦さんとこれにござんす桂さん。跡の女郎様方は皆前からの知れた顔。錦さんは曲輪からお出でたが。若し西でのお馴染かえ 詞いや西にも東にも近付はなけれども。身共が望む女郎はこれ迄勤めした者ならず。和佐そんなら錦さんでもなし。詞エ、愚圖々々と隙がいる。藝子はまだか。何故急に呼びにやらぬと 地ばち／＼はぜる山出し炭おこり。フシ散らせば。和佐 詞御尤もう／＼ 地爰へといふ間もなく。住里に名代の藝子の藤江。いきせきと來る上り口。和佐そりや藤江さん遅かつた。座敷はさん／＼御機嫌直すお醫者はお前。マアお藥箱から上げませう。住アイ／＼。今日は北の粟七へ行て。清野小枝荻野。蛇の様な藝子様に引留められて醉うたわいな。詞フウ藤江といふは其許か。待ち兼ねた／＼。影繪の名人とある。サア／＼見たい。三味線が聞きたい。尺八が所望。舞が見たい。住ヲ、せはしな。其様に一時に如何なるものぢやいな。和佐ヲ、なんぼ藤江さんぢやとて。そりやもう八人藝の座頭でなけりやいかぬ事。詞こな仲居どもは身どもが言ふ事一つも用ひぬ。拙者が所望する事なぜ邪魔する。住ア、これ叱りないな。其様にむしやくしやと立つた腹には 音頭紅葉をながすソレ。／＼。／＼。それ。詞ちよつとお間致しましよ。彦アア嬉し。藤江さんよう來ておくれた。住へエ桂さんの御挨拶痛み入ります。錦さんは如何ぢやえ。彦アイこれもいんまに。れしいしさしぢやわいな。住そんなら又お客が。やしきしもしちしぢやあろ。詞何の事ぢや。長崎でも聞かぬ唐音。こりや俺どもが事誹るのぢやな。いから心に障るわい。何のさうではないわいな。とかく座敷で呼けば。餘所の可愛い色事咄。錦主も長であろ。詞此奴。三味線は彈かず。影繪は見せず。踊はせず。長であろとは身どもが鼻毛でも笑ふのか。其長とは何の事。住サア夫わな。歌長やれ／＼花のお江戸は兩國橋とや白い手拭横ナホスちやうであろ。詞長の因縁 フシかくの通り。詞とはしやれ／＼。彦問ひましよ／＼。住何なと問はしやれ。彦お客は／＼。はんこでござんす。彦藝子は／＼。

住ばゝ樣〳〵。彥仲居は〳〵。住かしこの色事。地よいこい〳〵賴政は。鵺を射留めて御機嫌を。なほす藤江が口車。住彥打連れフシ奧へぞ入りにける。和佐 地行燈居眠る時分より忍ぶ。禮三が戀の晝。錦が揚は足代屋の。潜戸半ばに窺ふ素振。フシ內を覗いて小手招き。彥 地目早く見付ける中屋のおさか。門口へ走り出で。詞ヲ、禮三樣お前のお出では合點。錦さんも私が所へ今日出初。御用があるなら私が呼ぼ。マアお入りと フシ取持ぶり。和佐 詞ヲ、其事でちよつと來た。今夜逢ねばならぬ事。爰の客は市原九平太であらうがの。あれには逢はれぬ。首尾を見て此文を。錦にそつと渡してたもと 地背中をぴつしやり。彥賴む者よりたのもしきは。フシさすが所に住めばなり。和佐 地禮三は門を西東。忍ぶに目立つ大提燈。フシ北よりと書く贔屓より。住立つ子遣ふ子に譽められて否にはあらぬ岩川も。心いきせき足代屋の門で見合す顏と顏。詞ヤア禮三樣ぢやないか。和佐ヲ、次郞か。住お前を尋ねて漸う爰迄。聞きや錦さん來てぢやげな。和佐ア、其事は隱して居るに。住されば錦樣を斯うせまい爲。私が心を盡したも水の泡。彼の人に勤めさしては。おれが顏が立ちませぬ。和佐サア〳〵尤もぢや〳〵。あれも長う勤めさすでもない。住其魂膽が猶氣遣ひ。是非今夜は連れて往ぬ。お前もごんせと 地手を取れば。和佐 詞イヤ其客といふは。日外の一原九平太。おれが往てはむづかしい。どうぞ隱れて行きたいが。住それならわしが仕樣があると。地裄尺合ぬ長羽織。人目を包む黑縮緬。和佐頭巾も顏へすつぽりと。フシさながら借着と見えにける。住サア〳〵 地お出でと門口へ。ずつと入れば。彥座敷廻りの庄七。やれ珍しい關取樣。禮三樣お出でぬので。南風も吹かぬがえ。住吹けばこそ出て來やんした。客衆一人連れて來た。何處ぞ座敷が明いてあるか。彥アイ小座敷が明いて御座ります。サア〳〵これへまあお上り。お供は何處へぢや。住イヤ〳〵供は芝居へやつた。彥ヘエいや申しあなたは何方でござりますと。住 地問はれて早速の出ぬ岩川。詞イヤあれは江戶方の關取衆ぢや 彥ニイ。わたしは法師樣かと思うた。して彼方のお名は何と申します。住フウ貴樣此關取知らぬか。コリヤ氣疎い。あれが大關の里見山ぢやわいの。彥エ、いつやら私が所のお客が彼方の手の形を持つてお出でなされたが。ハテ見ると聞くとぢやな。住イヤ〳〵惣別相撲取は着細りがする。あれでも裸になつて。褌かゝしやると土俵一ぱい。ア、見せたいなと 地鼻動かさぬ相撲取。彥とられてどつこい庄七が。詞

前髮のある源太様。我等は差詰め百姓役。辻法印と。里見山 地 よう似たことぢやと打笑ひ オクリ 打連れ。座敷へ浮れ行く。組 フシ 今宵初めて。錦木が。緣と義理とに引かされて。オクリ 二度の勤めも男故。座敷はづして勝手口。窺ひ出づる案じ顏。住地 跡から藤江が走り出で。詞 コレ錦さん如何ぢやいな。おさが殿の託物。渡す首尾がなかつた故。大事にかけて持つて居た。地 サア莞爾と笑ひ顏と。差出す文に組 飛立つ思ひ。詞 コリヤまあ誰が持つて來たえ。住 やつぱり直に禮三様。地 門口覗いてこれはしたりと尋ねる中に。フシ 小座敷より頭巾羽織で立出づれば。組地 はつと恟り立寄つて。詞 ヤアお前は何時の間に。和佐 コレ〳〵藤江主。若し次郎が尋ねたら。此狀渡して先へ往んだと言うて下んせ。住 そりや禮三様取つて居る。組地 わしも奥から尋ねてなら。住詞 そこ

らはわしが左平次で。くろめる中に。フシ 奥よりも。咲詞 藤江々々。住 アイ〳〵。地 何處へ隱さう所も幸ひ。蒲團にくる〳〵衝立の。咲 障子ぐわらりと市原九平太。詞 藤江。住 アイ。わりや其處に何して居る。住 イエ爰に顏見世行で。臺所に人氣がない故。張番してをりまする。ハテ實氣な者ぢやなあ。錦めがをらぬ故。それを尋ねに爰へ來た。新町から南町まで附纏はつて惚れぬく九平太。それと同じ樣に附纏ふ虫がある。でも叶はぬ物は。金銀といふ物に抑へられ。虫めが。動きも這ひも得せぬ。氣味のよい事ぢやないかナア藤江。住 其金のある黃金虫より。金が無うて泣く虫が。咲 其處邊にをらうと 地 立寄るを。住 チテントテツン 歌 鐘に恨みがかず〳〵ござる。初夜の鐘を撞く時は。是生滅法と響くなり。後夜の 鐘をつく時は。寂滅爲樂と。詞 コレ何ぢやぞいな。

咲 イヤ此衝立の內へ。住 ア、滅相な。コリヤわしが商賣の影繪の樂屋。見せる事はならぬぞえ。咲 フウ衝立の影繪見たい。火を赫と燈して見せい。住 ハイ。お目にかけまする影繪の始まり。餘り近いと見えが惡い。必ず樂屋を覗くまいぞ。斯う火を燈して致しまするが梅が枝の無間の鐘。咲 其歌おれが謳うてやろ。歌 二八十六で文付けられて。二九の十八でつい其心。住詞 人の心も知らいで。面白さうに謳ひくつさる。咲 おれが謳ふが氣にいらぬか。住 コレ間がぬけるわいな。ヲ、それよ。奥へ行くは錦様ぢやないか。咲地 どれ〳〵何處にと立上れば。住 火を吹消して 詞 もう仕舞ひ。サアこれからわつさりと。お品殿おさが殿。呑直さうではあるまいか。和彥 よかろ〳〵と 地 無理やりに。フシ 押立て奥へ連れて行く。住地 此間にちやつと小座敷へ。詞 關取樣に相應な、

相手は手取の錦島。地砂子屛風の土俵入。化粧紙まで氣を付ける。行司役やら頭取やら。背中の兀た古藝子。調子合うたる三味線の身に。引きかけるぞフシ頼もしき。吹詞仲居ども〳〵。錦は何處へ。此九平太が目を拔いて。勘當受けたならずめを取込んで。うぬらが戀の中立か。此小座敷が物臭いと。地立たんとするを。彦詞ア、申しお前は醉うてござるのか。吹あの樣なこざ酒で醉ふ樣な俺ぢやない。彦サア聲高におつしやるので。なんで彼處に人が居よ。吹ヲ、居るか居ぬか此羽織と引つたくり地屛風ぐわらりと引明くれば。住江戸それにはあらで大前髮江戸張の銀煙管。煙輪を吹き空嘯きくつ〳〵とフシ吹出せば。吹地さしもの九平太悔り仰天。俄に目をする千鳥足。詞これは〳〵麁相千萬。酒を食べ過して思はざる不調法。御免なれ〳〵。住いやもう苦しうござりませぬ。吹イヤ〳〵お氣に障つたら眞平〳〵。住ハイ勘當も受けませず。元來人樣に虫と言はれたこともなし。又虫であらう理窟もなし。マアそんな物ぢやござんせぬか。吹さうとも〳〵其許さへ其氣なら。拙者は安堵致したりと。地行かんとするを申し〳〵。そりや貴方のお羽織でござりますか。吹地いはれて悔り持つたる羽織。詞ハア、、、。へ、〳〵〳〵。これは重々不調法。これは貴公のお羽織な。住私がどんざ羽織でござります。これは〳〵。勿體ない其儘〳〵。吹イヤサこれを御緣にお近付。又來春はお出來しなさるゝであろ。其節は緩々と。地醉はぬ所を醉はさるゝ。科を酒に塗付けて。頰フシ押拭ひ入りにける。紹地錦はそつと走り出で。詞次郎樣のお蔭にて。ひやいな所を遁れたとフシ悅べば。住詞コレ錦樣。此方に逢ひたいばかりに。先刻にから來て居やんす。お前を捕へて腹立つるではなけれども。如何つぶして下んすのぢやわしが爲には大切な禮三樣。其お方に連添ふお前。其勤めをさすまい爲。おれに隱しておとはめが拵へた金。さうさしては此次郎が顏が。立つまいと思うてか。お前方お二人を。首尾よう親御の內へ入れたら。眞に嘘ぢやござんせぬ商賣冥利。投殺されても大事ない。これ程に思ふのにお前も聞えぬ。禮三樣も胴慾なと。地大切にする眞實は。誠にフシ關取一疋なり。紹地錦は始終差俯向き。とかうの答もなかりしが。其お心が嬉しさに。禮三樣と言合せ。親方樣に譯いうて。今日からの此勤め。詞氣遣ひして下さんすな。此公界も暫しが中。住サア暫しの中が猶氣遣ひと。地やり合ふ中に奥よりも。彦お品が走つて詞申し次郎樣。長崎のお客樣。お前にちよつと

逢ひたいとて。住イヤコレ今夜はおれも取込み。好い様に言うてたも。彦イヤもう爰へ見えますと。組地いふに錦は次郎吉様。まだ話したい事がある。フシ後に〳〵と行く跡へ。詞地程なく出で來る田舍客。詞これは〳〵珍しいと地立出づる顔見て恟り詞エ、お前は淨久様。詞ア、これ〳〵。常住急な所でお目にかゝつた故。見忘れも尤も變つた所で變つた形。好い年して傾城買に來た親父。其女郎は北野屋から出る新造。此方衆夫婦の志が餘り忝さに。外の客には買はすまい。おれが身請する心で。今夜來て様子を聞けば。勤めて居るは錦木。買ひたい女郎は爰には居ず。此金も入らぬ物。勘當した悴めに金やらう筈もなし。コレ次郎殿。纒頭に貰うて下されぬか。住扨はそんなら此金で。詞イヤ〳〵おれは何にも知らぬ田舍大盡。おれが事より彼奴等が。息

災で居る様に。朝夕祈る此數珠の力にも。叶はぬものは國の掟。鐵が嶽が殺されたも。團右衛門が業とはいへど。喧嘩の相手はやつぱり悴。町人が人を殺しては。遅いか早いか風の前の燈火。爰らにまひ〳〵してをつたら。淺ましい死をしをらうと。夜の目も合はぬ因果な長生。地古來稀なる大盡客。詞どろぼが可愛ければこそ。厚かましいこの厚鬢。何事も次郎吉殿。頭に免じて地頼みますと立上れば。住詞そんならもうお歸りなされまするかと。彦和地庭へ送りの駕の者。詞詞次郎殿さらば地何事も。言はぬ色なる山吹色に。フシ誠殘して立歸る。和親の情は身にしめど。人を殺せし罪科はスヱ遁れぬ。禮三が身の覺悟。彦奥より仲居が走り出で。詞わしや先刻にから出たうても話がしゆんで控へて居た。禮三様からお前へ此文。藤江様から頼まれた。住

どれ〳〵と開いて見るより。これはしたり何時の間に去なしやつた。エ、悦ばす事があるに。イヤ些との間も斯うして居られぬ。わしや北野屋へ行て來る間。錦様に此様子戻つてから話しましよ。地つい行て來うと岩川は。悦び勇みフシ出でて行く。地錦は文を見るよりも。あるにもあられず走り出で。忍ぶ禮三を見付けしより。エ、お前は聞えませぬ。何で私を振捨てて。死ぬる覺悟の此書置と。和言ふ口抑へる折こそあれ。住藤江は三味線持ちながら。詞コレ錦さん。唯ぞ來るなら知らして上げよと。地座敷紛らす三味太鼓。組詞ヲ、やかましうて一つも話がならぬわいな。住地ヲツト心得すぢかひ身。合す調子の糸調べ。詞アイ〳〵それ錦さん呼ぶわいな。地ちやつと吹き消す燈火の。紛れに脱ける禮三郎。外からぴつしやり暇乞。組はなれぬ思ひ胸の中。

闇の錦も諸共に脱けて出る氣を 住呑込む藤江。 吹二階から見る九平太が。 住鬼の目をぬく暗がりに潜戸ぐわらり。 詞ハイお尋ねなさるゝは二三軒西でござります。ようお出なされました。

第七

地町の名も フシ鰻谷とて長堀を。少し南へ入口も間口も狭き裏貸屋。かつて鶴屋の禮三郎と名前はあれど外を家。留守は憐の須賀市が見る目は無うて。嗅ぐ鼻と聞き耳。立つる門の口。葬禮戻りの上下ため付け。我が家へ歸る禮三郎。ア、須賀市樣御苦勞〱 ホお歸りなされましたか。きつう遲うござりましたな。さればいな。他宗の葬禮といふ物は隙が入つて惡いもの。外なれば行かぬけれど。家主の葬禮に 地さながら病氣も違はれず。せう事なしに行きました。 詞そりやさうと留守の内に。誰も來はしませなんだか。來た段では御座りませぬ。道頓堀の北野屋の者ぢやというて。三四人の聲がして。押入を明ける音。其處ら内をもんどり返して往なれましたが。ありやマア如何したことでござります。サア如何したことやら。あそこの奉公人が駈落したとて。今朝から夫で丁度三度。わしがした事の樣に迷惑な事でごんす。此奉公人めも何處にはひつてけつかるやら。寧そ爰へうせあがると。これ程わしも案じぬと。 地むしやくしや腹に上下も引きしやなぐるやら。 フシ引切るやら。 地見えぬ座頭が 詞イヤもう日暮れさうな。内に又稽古人が待つて居られう。どれお暇申しましよ。用があるなら何時なりとお呼びなされませと。 地我が挨拶を機會にして。とぼ〱 フシ隣へ立歸る 地跡に禮三がつつくりと。 詞今いふ通り尋ねに來るからは。内は首尾よう出たものが。如何して今迄來ぬ事と。 地案じに暮れる胸の闇。 本フシいとゞ物憂き一つ鉦。無常は餘所か。タ、キこち〱と。石と金との相性が。 ナホスあらば火のふる火燧箱。 長地付木に付けて行燈に。灯す火影の明り窓。入口の戸も。 フシしめ〱と。 地又も案じる隣には。稽古の音〆高々と。 三下り歌浮名をながす。堀江川。流れに淀む捨小船。繋がぬ緣は是非もなや。戀路の鬼が丹波屋の。妻に通ひのかねごとも。昨日は今日の飛鳥川。 ナホス 詞アノ歌は古手屋八郎兵衛。友達の香具屋を戀の意趣で切つたと言ふが。又腹も立たうかい。蝶よ花よと樂みに思ふた色を盜まれては。これを思へば錦木めも。昨夜内を出ながら今において來ぬからは。外に心が。エ、左樣いふ根性とも知らず。親にも身にも代へたのが。口惜しいわい無念なわい。 三下り歌妬みの。

劍研ぎ立てて。我と身を裂く鰻谷。ナホス地堺筋よりも半町も。フシ錦が尋ね夜の道。フシ濱邊も果てし長堀の 小オクリ人目を。包む頰冠り。しめる門の戸打叩き。詞卒爾ながら禮三様の所は内方ぢやござりませぬかと。地尋ぬる聲は錦木かと出でんとせしが。誰じや／＼。そんな人は此方ぢやごんせぬ。何處ぞ脇を尋ねさつしやれ。左様言はしやんすは禮三様ぢやないかいな。コレわしぢや／＼わいな。ちやつと明けて下さんせ。何ぢや。わしぢや。ヲヽどうで鷲か鷹か。爪の長い猿松め。猫め。畜生め。エヽおのれは／＼。憎やな。三下り歌今宵の内に。やつきり／＼／＼。切殺し。浮世の夢を。鮫鞘の鯉口寛げ落し指し。早や初夜の鐘指折つて。ナホス詞コレイナ。明けてくれんのかいな。人が見付けりや悪いわいな。コレ禮三様。何が腹が立つぞいな／＼。口説どころぢやござんすまい。昨夜の揚は足代屋の。地出られぬ内を漸うと藤江様の情にて。出る事は出てもお前の内。爰とも知らずうろ／＼と尋ぬる内に夜は明ける。どうも仕様は中橋の知るべの方に今日の日の。暮れるを逢瀬と待兼ねて。尋ね迷うて來たものを。聞えぬわいな禮三様。思ふに違ふお詞。と言ふ間も疑ひ。フシぐわらりと開き。詞ヲヽそんな事とは知らず。昨夜約束した通り。二人一所に死ぬる覺悟で。先へ戻つて待つて居れどわがみがおぢやらず。内よりは二度三度家探しに來る上は。埒落したに違ひはないが。今迄爰へ來ぬからは。如何で外に心があつて。おれをすつぽりやつたなと。腹が立つて恨んで居たが。今のを聞いて。疑ひは晴れたかえ。ヲヽ其心底を聞く上は。サアマア上りや／＼と入口の。フシ戸をぴつしやりと差向ひ。詞シテ今言やつた中心にかゝるは。其知るべの方から若し知れはしまいかいの。イエ／＼そりや氣遣ひして下さんすな。よし又そこから知れてから。ハテ地明日まで待たぬわたしが命。お前の覺悟は如何ぞいなと。凭れかゝりし。女郎花。涙は膝に置く露のいづれ。はかなくフシ見えにけり。詞何のそれに念押す事。岩川や千羽川殿が。様々と心を盡して下さるれど。昨夜わがみにいふ通り。鐵が嶽を殺したる此禮三。すりやどうで生きて居られぬ身の上。ガ兎角心にかゝるは親父様の事ばかり。夫で吉兵衛殿や。岩川へ頼みの書置。爰で死んでは恥の上塗。大阪の町を離れて濱の寺まで行て死なう。用意がよくばサア地おぢやと手を取れば押留め。詞マア待つて下さんせ。ム、待てといやるは心でも變つたか。何の心が變りませう。さら／＼左様ではなけれども。地お前と夫婦になり

たいと思ふを勤めの樂みに。暮した甲斐もなき命。せめて今宵の半時を千年も添ひし心にて。ほんの男ぢや女房ぢやと。飯炊く眞似や。水汲む眞似世帶する眞似して死んだら。未來の迷ひはあるまいと。さすが女のぐど／＼／＼といふも涙と紅の。錦あやなす フシ諸袖に。いとゞ色添ふばかりなり。詞ヲ、尤も／＼。さう思やるなら。わしも手傳ふほどに。飯しかけて炊いてたも。幸ひ今日は親父様の誕生日。ア、これ迄は不幸の仕續け。せめて女夫が煮炊して。陰の膳なと据ゑるなら。それが此世のお暇乞と。地涙隱して押入の。米取出しあてがへば。サハリ洗ふ。術さへしらげの米。しを／＼下りるはしり元。とぎ流したる白水は。顔に甦とる白粉の。解けて涙の フシかしぎ水。地夫は燃す フシ釜の下。詞申し旦那さん。飯盛る物があるかいな。ヲ、あの人はせはしない。まだ出來もせぬ内から。ソレ押入に茶漬茶碗が一つある 地アイといふまゝ取出す。錦模様の染付も。詞ヲ、穢な。コリヤマア何時洗うたまゝぢやいな。地ほんにやもめといふ者はあた自墮落なというて見る。心が フシ眞の女夫事。詞ソレ飯が焦げ臭いぞえ。ヲツト 地合點燃え杭を消やす。此身も消ゆる身と。いへば錦も顔見合せ スヱ又も涙にむせびしが。詞ア、我ながら愚痴な事。ソレあらいげのさめぬ内。釜から直に盛つてたもと 地机の上に白紙を。フシ敷いて供へる陰の膳。詞御誕生日の御祝儀。目出度う上つて下さりませ。親父様母人様。これ迄一日お心休める事もなく。親に先立つ不孝者。其上碌な死も致しませぬ。憎い奴と思召し。必ず泣いて下さりますな。此上に歎きをかけ。お身の痛みにもならうかと。それが悲しうござりますと。夫が歎けば。フシ妻は猶。地わしも在所に一人の父さん年寄といひ目は見えず。去年祭に見えた時も。詞練物に出るわたしが。髮切つたと聞いてさへ。あられぬ姿と泣かしやんした其時イエ／＼。無事で居りやこそ此様に。お健な顔を見ますると。諫めた私が先立つて。刄にかゝり死んだ事。地在所へ知れたら嘸や嘸。歎きの程が思はれて。悲しいわいのと。フシ伏轉ぶ心の。内ぞ遣る瀬なき。地せめて名殘に一筆と。相の山硯に向ひ磨る墨の。サハリこいとや誰も招かねど。まだ盡き果てぬ親子の縁。ナホス錦が親の手を引いてオクリそろ／＼。北野屋七兵衞が。戸をほとほとと打叩き。詞七兵衞でござりますちよつと明けさしやつて下さりませと。地いふ聲聞いて二人は恟り。そりや親方ぢやどうせうぞ。まあこゝへなと入つて居やと。炬燵へ無理に押入の。蒲團打被せ禮

三郎。俄に作る フシ寝惚れ聲。 詞誰ぢやもう寝ました。イヤ七兵衛でござります。御無心ながらちよつとお明けなされて下さりませと。 地言ふに否とも不承々々。戸口開くれば。 詞ハア、これはもうお休みなされましたか。 ホ誰ぞと思へば七兵衛殿。ア、夜夜中見えたのは。定めて錦木がア、申し〱。今夜は揚でござります。コレ爰に居られますは。錦木が親父殿で。イヤ〱何も驚きなされます事は。此親父殿は目が見えませぬ。其見えぬ目をして。娘が顔が見たいというて日の暮に見えましたれど。錦木は揚で内には居ず。折悪う今夜は泊人が大勢あつて。此親仁殿を寝さす所がござりませぬ。それで近頃御無心様ながら。今夜一夜さ何卒親仁殿を、お前の内に寝さして貰ひましよと存じハイ。それで連れて参じましたと。 地聞いてはつと思へども。 氣取られまいと素知らぬ顔。詞ヲ、易い事。幾日なりとも。泊めて下さりますか。ヤレ〱嬉しやサア〱親仁殿上らしやれ。ヲツト危ない。とば〱しよまい。ドレ〱手を引いて進ぜう。ハイ〱ア、親方様段々お慮外様でござります。ア、何方様ぢや存じませぬが赦さしやつてアイ今晩はおやかましうござりましよと。 地怖々するに禮三郎。 詞イヤ〱其様に氣を張らずとゆるりとしてござりませ。ハイいやコレ親仁殿。あなたはずつとお心安い程に。ゆるりと思うてハイ〱。ア、いかいお世話さまでござりまするな。ナンノ〱。いや申し然らば私はモ歸りましよ。御面倒ながらお頼み申上げます。長居したらどうやら。重井筒の炬燵の段が。イヤ禮三様ちよつと〱あれ迄お目に掛りませうと。 地伴ひ表へ フシ立出づる。詞マアお前に悦ばせます事がある。扨錦が立金は受取りましてござります。ム、そりやマア何處から。イヤ岩川殿から受取つて。済んである事は知らず。昨夜から見えぬ錦。それでこれ。此年季證文をお前に渡さうと思うて持つて参りました。立金が済んだからは。どうせうと。お前方の心の儘ぢや程にナア。死ないでも濟む事なら。というて止めても。鐵の網の中へ入れても。死神といふものが憑いては人間の力にや及ばぬ。私も北野屋七兵衛といはれては。島の内で顔の賣れた者。人の命を取留める事なら。縦へ立金取らいでも。奉公人に涙もかけぬ恩にも着せぬが。あの親仁殿爰へ連れて來たのばかりは恩にきせねば。アレ目の見えぬ人が。うろつかしやるのを見ては。いかな氣の強い死神でも。思ひとまらにやなるまい。ナ申し。必ず〱禮三様。これいはうばつかりに。イヤもうお暇申します。コレ〱

親仁殿。去にますぞや。ホ親方様お歸りなされますか。そんなら申し。夜の內でも娘が歸りましたら。憚りながらお知らせなされて。一時なと早う顏が見たうござります。ヲヽそりや尤もぢや。戾り次第知らせませう。イヤ禮三樣。早うお休みなされませと。地情を殘す情の商賣。切りはなれよき親方に別れて。フシ禮三も內に入る。地其間も待たず蒲團押退け。飛んで出づるを禮三が止め。逢うては惡いと仕形と身振。蒲團を口に押當て〳〵。フシ泣聲かくす心遣ひ。地此方は何の氣も付かず。詞申し旦那樣。エヽ何ぞ進ぜませうか。イヤモウ何時でござりましよ。さればもう四つ半にもなりませうか。ヲ遠道を歩いて。定めてお草臥。ドレ寢所をして進ぜませう。イエ〳〵申し〳〵。御勿體ない構はしやつて下さりますな。遠い道を探りもうて參じますも。娘に逢はうと思ふ樂しみ。嬉しうて〳〵。寢たとてなか〳〵目も合ふこつちやござりませぬ。イヤ申しもう何時でござりませうな。今夜はむしやうに夜が長い。アヽ早く夜が明けてほしい。ちやつと逢ひたい〳〵と地今宵限りの命とも。知らず明けるを待兼ぬる。親の心ぞフシ哀れなる。地錦は正體なき內も書殘したる硯箱。筆取上ぐれば。相の山いとゞ猶。涙にむせぶ泣聲を。地隱す禮三が咳拂ひ。詞ナントマア親仁樣。袖の振合せも他生の緣とやらで。斯うした若い者のお年寄を泊めますれば。私はもう親と思うて居ります程に。お前も子の所へ來たと思うて。心易うなされ下さりませ。これはマア勿體ない事おしやまして下さります。お前樣方に其樣に結構にいはれる親仁めぢやございませぬ。在所者なり目は見えず。したが今日を喰ひ兼ねは致しませぬ。其喰ひ兼ねも娘が蔭。マア聞かしやつて下さりませ。十年ばかり後迄は長柄村でともかうもした百姓でござりましたが。ふつと日を煩ひまして。身上有限り打込んで。とう〳〵盲になつて。モ途方にくれて居りました所を。今北野屋にをります姉が。新町へ勤奉公に參つてくれまして。其給銀を庄屋殿へ預け。月々の利足を取つて。夫で私が樂々と喰はれる樣になりました。ほんにあの樣な孝行な娘は世界中にはあるまいと。思ひ出す度には旦那樣淚がこぼれて嬉しうござります。夫で一日なりと早う勤めを引かしたいと存じましても。目は見えず錢儲けの術は知らず。思ひ付いて去年から。按摩取を致しますコリヤ私が身の冥加。是も娘が顏の汚れる事ぢやと思うて。あれには隱してをります。ヤほんにちつと。肩揉んで上げましよかい。ハイ。そりや忝うござりますが。そ

んなりや御苦勞ながら。肩よりは此手をコレナ。此手をお前のお手で。ぢつと握つて下さりませと。地錦木が手を持添へて。出せば此方も差寄つて。詞ア、お手が痛みますか。お安い事。揉んで上げませうとも。ドレ〳〵お手を。テモ和らかな尋常な。丁度女の樣なお手ぢや程にの。イヤナニ親仁樣何とマア人といふものは何時知れず。老少不定と申しますれば。かういふ私が明日死のやら知れぬ命。若し死んだらこれが此世の暇乞にもなりませう程に。手先をぢつと。ア、旦那樣にんげな事いはしやりますわいの。其樣におつしやりますと。心細うてなるこつちやござりませぬ。地體此間は夢見が惡うて案じてをります上。大阪の茶臼山で心中があつた。イヤ太左衞門橋では切つたの彼處では突いたのと。聞く度々に胸がひや〳〵。もし姉めではないか知らぬと。それで案じて參りましたが。親方樣の健なと仰しやるので。ア、嬉しやと落付いてはをりますれど。ソレ今おつしやる老少不定。ひよつと姉が煩うて。私より先へ死んだら。此親は如何せうと思ひますれば。俄に悲しうなつて來て。御赦されて下さりませと。地涙を拭ふ塵紙の薄き親子の契りかと。物いひたさと悲しさに。錦は胸も張裂く思ひ。蒲團に喰ひ付きフシしがみ付き前後。涙に伏沈む心ぞ。思ひやられたり。早や丑三つを告げの鐘はつと禮三が氣もそゞろ。書置一つにフシ手ばしかく。詞申し親仁樣。私は晝約束がござります故。更けましたれど。ちよつと近所まで往て參じます程に。もし留守の中。京飛脚が來ましたら。此狀渡して下さりませと。地いふ中錦を引立つれど。更に正體立つ足も。なく〳〵禮三に誘はれ。出づる戸口は死出の門。これが親子の別れの涙。思へば胸に保ち兼ねわつとばかりに泣く聲の。血筋も肝に徹へてや。詞今のは慥に姉が聲。コリヤ娘よ。何處に居るぞいやい。親方の詞といひ。先刻にからの樣子と言ひ。何で親に隱れるのぢや。姉よ〳〵〳〵と地立上れど方角もなき目なし鳥。壁にばつたり行燈はぐわらり。二人も探り大阪の。町は生死の堺筋涙。ながらに。三重へ辿り行く

第八　道行闇路の町續

二上り歌夢にだに。見し夢さへも死出の夢。覺めては何時かこの娑婆へ。歸らぬ道もナホスフシ夜嵐や。吹く風寒く。身にぞしむ。往來まばらの軒のつま。スヱテ結びとめたる下がへの。主よ女房と只一夜。それが未來の。フシ晴れの小袖。綾も錦がうら若き。長地二世と契りし禮三郎今宵限りの命ぞと書殘したる藻塩草。ほんに誓

紙の數よりもオクリ手を取り交し行先は。あの世この世の。堺筋。フシオクリあゆめどへ道も。捗らぬ。表具サハリ跡には親の枯れ殘る。老木の老の逆様に。順慶町も空ごとや。わしとお前が憂き事の。あだな契を。米屋町本町筋の軒深く。思ひ初めたる中なれば煙ともせず諸共に。埋まばなどか。安土町男も同じ二世三世。生れかはりて又爰へ。親の便を備後町。永き未來を瓦町。かくなり果つる我々はいつの因果を。身にうけてともに憂き目にナホスフシ淡路町。悔むは愚痴と平野町。本フシとは思へども棄つる身をとがめてほゆる犬の聲。道修町筋過行けば。早や眞夜中の月代の。フシ空恐しく行き悩む。しばしは爰に伏見町。高麗橋の果までも。ともにぞ連れんさりながら。詞所詮此身は人殺し。一所に死ぬれば親々へ不孝の罪も恐しゝ。地そなたは生きて亡き跡を。頼むとばかり曇り聲。錦は涙の顔を上げ。生きるとも死ぬるとも二人一所と言ひかはし。今の辛さを。あの世にて。閨の咄の樂しみと。思うて居るに胴慾な。大事の〱父樣に換へていとしいお前の事。忘れうとすれど猶更に思ひ。切るにも切られぬは。如何した結ぶの。神さんが結ばしやんした縁ぢややら。いふに言はれぬ鴛鴦の。番離れぬ中ぢやものお前に別れてそもやそも。何と存へ居られうぞ共に殺して下さんせと。縋り付いたる恨泣き。道理々々と撫でさする。顔は涙の横しぶき。フシ戀故に降る露時雨。此處や彼處に。立ちとまる浮世小路の縁薄く。水のあはれや大川を越えて。急ぐは後の世の。緣を祈りて寺町や今ぞ誠の。女夫池人目つゝみのやう〱とフシ濱の寺にぞ着きにける。

第九

詞サア錦覺悟はよいかと地拔放し旣に最期と見えける折から。團右衞門九平太に縄をかけて千羽川。岩川諸共駈け來る跡より。津田兩助淨久お才を伴ひ來り。まだ生きて居てくれたかと親の悅び兩助も。團右衞門が白狀にて彼奴等が惡事明白。鐵が嶽は九平太と馴合うて。殿のお金を盜んだ盜賊。禮三に科なき御政道と。地聞いて岩川千羽川。次郎吉兵衞世話甲斐あつて重疊。何かに付けて兩助樣のおかげ〱。猶此上は御本妻はお才樣。お妾は錦木樣。成程々々先づ囚人引立てよと。兩助が采配にて家に羽を伸す鶴屋の禮三。池田の關取。天滿の關取。千兩。千兩二幟其名を。難波に上げにけり

明和四年
亥八月四日

作者連名

近松半二
三好松洛
竹田文吉
竹田小出
八民平七
竹本三郎兵衛

近江源氏先陣館

座本 竹田新松

地あら玉の春立ちそめて御園には。木々も緑の四方の波。本フシしづけき君が御代とかや。地されば右大將賴朝公。驕る平家を西海に切鎭め。源氏一統の御威風。偃す草の鎌倉御所 オロシヘ太平の地を。占め給ふ。地時は建仁三年正月元旦の御壽。二代の君右大臣實朝公。立烏帽子に緋の御裝束。白書院に出で給へば。上段には龍頭の兜を飾り御母公政子の御方。武將の祖父北條相模守時政公。先君賴朝より天下の執權を預り孫君の御後見。御年配も六十餘州自然と握る三つ鱗。其外關八州の大小名。烏帽子素袍もさゞめきて。袖を連ぬる大廣間。フシ御盃の大流小流。コハリ緣側には猿樂の役人祝儀の開口相勤め。謠は老松ナホス梅が枝に。弓矢立合弓取の フシ列を。正して出勤ある。地こゝに近江源氏の嫡流。佐々木三郎兵衛盛綱御前近く召出され。實朝仰せける樣は。詞其方儀は親源藏秀義より二代の家人。ことに近年忠勤を擢んで勳功他に超えたり。從つて近江の國は。元其方が故郷なれば一國をあて行ふ間。江州へ赴き一圓に領知致すべしと。地御諚の趣承り。謹んで平伏し。詞不功の某身に餘る御恩賞有難く存じ奉る。但し一つの御願ひ。某が弟佐々木四郎左衛門高綱兄弟共に先陣を相勤めしに。弟高綱に御恩賞なかりしかば一徹の生れ付き。恐れながら先君を恨み奉り。且は兄の某にも遺恨を挾み。十箇年以前鎌倉を出奔して行方知れず。あはれ此度の序に弟高綱が在所を求め召出され。地江州の內にて分地拜領なし下され候はゞ。猶此上の君恩に候はんとフシ恐れ。入つて言上す。地北條殿莞爾と打笑み。詞尤もの申條さりながら。此度御邊を江州へ遣はすは謀あつての事。其故は先君賴朝薨去の後。嫡男ながら左中將賴家卿惰弱の生れ付故に。舍弟實朝に武將を超えられしを心外に思ひ。鎌倉を立去つて京都へ引つこみ。早や三年。此頃聞けば謀叛の催しあるとの風聞。江州は京都五畿七道の境。關を固めて東國の軍勢を防ぐ用意ありと樣々の噂。御邊の器量を見立て江州へ發向さするは。此方より先を取つて京都を抑ゆる謀。中にも其方が弟佐々木高綱は。軍法の奧義を極め。陣平張良にも劣らぬ勇士。行方を尋ね佐佐木兄弟。地江州を固める用意肝要なり

と。ありければ。詞ハヽア畏り奉る。地弟高綱兄弟心を一致にせば。たとへ如何なる大敵も暫時のうちに取挫ぐは。方寸の内にあり御賢慮安く思さるべしと。お受けの詞に政子の方。御墨付を給びければ。盛綱三度頂戴し。時の面目身に施し オクリ御前をへ立つて退出す。地折ふし廣間に案内して。詞京都頼家公より御禮の使者參上と相述ぶれば。地それ待ち兼ねつ早やこれへと仰次第に言ひ傳へ。鎌倉の附家老片岡造酒頭春久。京都の近習比企判官能員。遙下つて小姓立の若侍三浦之助義村。十八歳の角前髪諸士に式禮衣紋の著振怯ず臆せぬ一器量。フシ人に勝れて見えにける。地時政御覽じ。詞年頭の祝儀早速の參著滿足せり。併しながら此頃心得ぬ人の取沙汰。殊に頼朝御他界の後京都へ退き。度々使を以て鎌倉へ請待すれども。今に於て下向なく。酒宴遊興に日を送らるゝ放埒の振舞。片岡を附け置く上は。など諫言も致さずや。これなる武將實朝は我が孫。祖父時政天下を後見する上は。武將同然の時政を。侮り輕んじ申さるゝ頼家の心腹。それに從ふ諸士の胸中旁以て心得ずと。地凛然たる嚴命に。恐れ入りたる造酒頭。心を察し政子の方。詞人の噂を取上ぐれば。天道の事迄も恨み譏るは下々の習ひ。わけて頼家は自らと繼しき中。故殿頼朝樣の愛妾宇治殿の腹に生れ給へば。地妾に隔もある樣に人の云ひなし。鎌倉を狙ふの御謀叛のと。由無し言を聞くたびに自らが胸の苦しさ。推量せよ スヱ片岡と。仰にはつと頭をあげ。詞我等儀は鎌倉より京都に添へ置かるゝ附家老。いづれに諂ひ。いづれに僞りを申上ぐべき樣もなし。頼家公鎌倉に御下向なきは。素より多病の御生付。御殿を離れ御他行だに稀なれば。御疎遠の段はさして趣意ある事にあらず。實朝公時政公兩將に對して。恨み給ふ御心毛頭なし。地御謀叛などとの雜説恐ろし〳〵。身持放埒の御咎め噂に違はぬはこれ一つ。詞若狹と申す白拍子を殊の外御寵愛なされ。愛妾に引上げられ。夜晝わかず酒宴の興。たつてお諫め申せども一切お用ひこれなき故。人の惡說を重ぬるも。元は好色の御過り。これとても若氣の習ひ。御齡だに長じ給はゞ自ら改まらん。地此儀は我等に御預け 冀ひ奉ると。事を飾らぬ申し條。比企の判官進み出で。詞イヤ〳〵頼家公に御謀叛の心。全くないとは言はれまい。正しく頼朝の御惣領を差置き。時政公指圖として。孫の實朝公を武將に立て。祖父君の後見は自然と四海を手に握る。北條殿の計ひと疑ひかゝりし宇治の方。頼家公御親子の心。餘り無理とも存ぜぬと。地舌三寸で內はから比企がフシ

底意ぞ。訝しき。地聞き兼ねて造酒頭。詞御前をも憚らず尾籠の詞。アレ見よ上段に飾り置かれし兜こそ。源家の重寶龍頭に鍬形打つたるは。大將軍の御印。この兜を實朝公に讓り置き給ひしこそ。賴朝の明智の眼。それを今更僻事と。御謀叛あるべき樣はなし。御邊如きの佞人が御側に徘徊する故。賴家公のあの御身持ナ。イヤいふまい。御身持の善惡は附家老の御邊こそ知る筈。それさへ知らぬ造酒頭。賴家公に御謀叛の心。若しあつたら何とすると。地爭ひ募る無道の判官。末座に控へし三浦之助つゝと出で。詞御前なるぞ靜まられよ。最前より兩人とも何の詮なき爭ひ。賴家公に御別心の有る無いは申すに及ばぬ事。凡そ謀叛とは下より上を討たんと圖る。これを謀叛人といふ。若けれども賴家公は。正しく先君賴朝樣の惣領。時政公は今武將の祖父君にもせよ。もと御家來には相違なし。賴家公憤り思召す事あらば。時政公に切腹あれと仰せられても濟む事。何が恐うて御謀叛なさるべき。下から思ふ私量見。地控へ召され判官殿と。一句に靜める三浦が才智 フシ人々感ずるばかりなり。地時政御機嫌斜ならず。三浦之助これへ參れと御座近く。詞其方いまだ面を見知らず。若年に似合はぬ。ハテ器量の若者よな。今よりしては造酒頭同然。心置なく往來せよ。對面の印それ〳〵と。地三浦之助が名に寄せて義弘の一腰。引出物に賜びてける。誠に當座の フシ眉目なり。地政子の方しとやかに。お心解けて自らも此上の悦びなし。人の噂の取々なるも互に緣の遠ざかる故なれば。詞緣に緣を重ぬる爲幸ひ時政公お局牧の方の腹に出生の乙の娘。時姫を賴家の北の方にそなへなば。地京鎌倉の和順の驗この上なし。これ自らがお願ひと。仰せに時政打頷き。詞政子の發明は太平の瑞相。さあれば賴家が寵愛の若狹とやらんを追出し。其後時姫を送るべし。媒介は造酒頭。ハア畏り奉ると。地領承すれば實朝公。詞今年則ち賴朝の三回忌。南都東大寺にて追善供養執行へば。政子御前も宇治殿も。この靈場にて對面の上。婚姻の契約あらば靈魂も御悅び。供養の催し諸大名相心得よと御上意に。皆退出の谷七郷。松倉卿の拜領も。郷に入つては吉村が。心々の三つ鱗北條殿の智慧の海そこ量りなき鎌倉山御代の榮えぞ ユリ。三重へ久方の

第二

地八重櫻散りしく法の東大寺。總追捕使の御菩提を弔ふ結構工みを盡し。金銀瑠璃玻璃錦の帷。コハリ廻廊石垣悉く。五色の幟絹幾重に包み。照る日に輝く裝ひは

これ彌陀境を移されたり。さてまた千僧萬僧の御經の聲澄み渡り。三尊こゝに來迎かと殊勝。フシなりける事どもなり。地此度の導師建長寺の前住榮西和尙。朱の衣もいと貴く兩人に打向ひ。詞今日は御兩所共警固のお役目さぞ御大儀。しかし天氣快晴にて愚僧も甚だ滿足と。地挨拶あれば造酒頭。詞誠に今日は御苦勞千萬上々にも御悅び則ち御法莚に御出座もあるべくなれども。女儀の事不淨も如何御遠慮あり。某よきに計らふ旨慇懃に相述ぶる。地詞にいがむ比企の判官。詞たとへどの樣な弔ひも亡君何のお悅び。何故と仰しやれ。先君御逝去の跡目は當時實朝公。こりやこれ政子の方の若殿。又宇治のお局は御部屋なれども。賴家卿といふ惣領を生み落されたが修羅の種。弟に天下を乘取られ何の快からう。それに何ぞや。緣組の祝言のと樣々の戲言。役柄も打忘れ媒人の取持顏。見るも中々腹筋と。取つても付かぬあてこすり。耳にもかけず和尙に向ひ。近頃仔細あつて京鎌倉の御緣組御取持仕るも。何卒國家の無事を祈る某。御推量下されと。地事を破らぬ一言に。フシ尤もなりと感ずる智識。地判官はえせ笑ひ。詞ハヽヽヽ。腐繩も結へば結はるゝ。地體鎌倉の附人風がお局の御氣に入らぬ。イヤモ彼方へも此方へも塗廻すねれけ武士。ヤア傍若無人の雜言。さ言ふ和主が不忠の臣。何が何と。ヲヽサ主人に諫も奉らず。毒を吹込む邪心非道。ヤア舌長なり聞捨ならず。おと骨切つて切下ぐる。シヤ小癪なと立掛かる。地こは何事と榮西和尙中を隔て。詞大切の供養の場所。もし刄傷にも及びなば。後日の言譯如何なさるゝ。短慮至極と押鎭め。地供養の時刻は間もあり暫くは御休み。いざ先づ〳〵と勸むれば。互にすれ合ふ大紋の。袖搖直し兩人は和尙の詞に從ひて。フシ休息所へと入りにけり。地供養の御幕打はえしは。北條家の乙の君時姫御寮。賴朝の後室に姉妹の名はあれど。御腹がはり末の子に後れて咲きし姫躑躅。造らぬ木なり手入らずは。何所の枝のふりの袖。フシ都まばゆき姿なり。地お側女中多き中片岡が娘住の江。詞御覽遊ばせお姫樣。京鎌倉の大名方。この廣い境內も埋るゝばかりの賑ひ。殊に御父時政樣よりの仰せ出され。お前を都へ御緣組遊ばすとやら。今日はお約束が定まる筈。地さぞお悅びでござりませうとほのめけば。詞ナウうたての緣定めや。賴家樣には若狹殿とて御寵愛の愛妾。その中へ嫁入は戀路の中を割きに行き。地人の恨み妬みを受け何樂しみがあろぞいのと。仰せにお側の瀧浪が。詞エヽ住の江殿まだな事。賴家樣は都の殿樣。あんな堅苦しい大將は

お嫉ひ。今度お使者のその中で。極上生粋角前髪。都への嫁入より。疾からあなたのお心は。三浦の方へ走り舟。地ひよんな事は狀文の繪でも櫂でも行きにくい。荒磯の岩侍。詞ム、堅い程お姫様の思ひの增すは御尤も。サイナ。その堅みを打碎いてお手に入れたら。敵の城を落したより大きな手柄。佐の江殿は片岡の娘御よい謀はないかいな。サアどうしたらよからうと。地三人小首傾けて。フシ戀の評定しどけなし。詞コレ斯うぢやわいの。その堅藏の三浦殿。お姫様と云うては。お主様の許嫁のと猶以てむづかしかろ。その惚人に私がなつて。堅い所を碎いたら。それからあとはお姫様の。御威光ごかしにやり付ける。地天の川にも中立の舟がなければ渡されぬ。そこで私が妹脊の舵取。詞したが肝腎のその三浦殿。わしやついに逢うた事が。ヲ、その逢はぬが丁度幸ひ。アレ〳〵。地向うへ來る古文字の素袍は違はぬ三浦殿。サア急になつて來た。隨分首尾よう生捕つて。高名見たいと女中達。姫は猶しも羞かしの森の。フシ木隱れ幕の內。地かくとは知らぬ使者男やさ風流の角髮は三浦之助義村。のつし熨斗目にかけ烏帽子。素袍の袖に春風のそよと。音なふフシ內意の使者。詞宇治のお局より時姫様へ使として參上。誰そ御取次賴み入ると。地云入るれば幕よりも。暫くお控へめされよと。地勿體つくるも戀の仕掛とは知らずして三浦之助。素袍の角菱澁面つくり。フシ待つ間。なまめく佐の江が。出合頭に義村を。見ても見ぬ目の心意氣。フシこれ戀知りの印なり。地三浦之助謹んで。詞宇治様の仰せには。今度造酒頭媒酌を以て。時姫様と主君賴家緣邊の御契約。まだ御輿は入れねとも。嫁御といへば心安さ。たまに貰ひしまゝ東大寺の名香。いと珍らかなる夢もがな。心ばかりの贈物御慰み下されよとの御口上。地御前よろしく御披露とフシ袱紗包を取出せば。詞これは〳〵御丁寧な。御口上と申しお使者がらと申し。御持參の香よりも色香の深い戀知りの。地いとしらしい殿振りを見るに思ひの增さり草。詞ア、これ〳〵御奏者。拙者への御挨拶より。早く御上へ使者の趣。ヲ、せはしな。地そしてアノ御元服遊ばさねば定まる御內方様はまだ御座りますまいな。詞左様。部屋住同然の三浦之助。妻とては持ちませぬ。ム、そんなら內證に云ひかはしなさつた可愛らしいお方があるかへ。かつ以て〳〵。洒落仰しやらずと先づお取次〳〵と。地取出す包の手をぢつと。詞ア、これ何なさる無作法千萬。この三浦之助。つひに女中と手から手へ。物取り交したこともない家中の格式。御座與も

事による。放しめされと突き退くれば。地躓きそこに仆けながら。袂をひかへコレ申し。詞京家のお格式は知らず。女中方はまた女中の格式。この幕の内は時姫様の御殿同然。女中御殿へ殿達が。お使者にお出なさるゝからは。此方のあしらひにお付きなされにやなりますまい。それがお氣に入らずば。このお取次は得申さぬ。それは迷惑。女中方の禮儀は不案内な拙者。無骨の段は料簡あつて。御口上早くお傳へ下され。イエ／＼奏者を侮つたなされ方。私も武士の娘。此様に突仆されて。アイタ／＼。地持病の癪がと苦しむ風情。拗ねて見せると知りながら。女子相手に短氣も出されず。お藥上げんと用意の印籠。詞イエ／＼お氣の知れぬお前の藥。どうも私はハテ疑ひ深い。地コレこの通りと毒見の金打。ア、御心底見えましたと。戴き／＼。詞このお藥お前の手から受けましたが。祝言の盃同然。地女夫ぢや フシやいのと抱付けば。これは又きついおなぶり。イ、エ誓文三浦様。なんぼ堅うなされても。もうかうなつたら否とは云はさぬ。サア我とても岩木にはあらねども。そんなら應でござりますな。サアそれは。いやと仰しやりや何時までも。この奏者が 地癪はなほらぬ。詞ハテむづかしう仕込んだ癪。堅う見せるは刀の手前。此方も變らぬ仲人は。この印籠の 地重々情のお禮はかうと。締返す手の柔らぎ口。覗きこぼれて腰元ども。詞ようよう三浦様。しつくりの長門印籠様蓋があいたサアお出と。長地突き出されて雲間より松の葉越しの隈漏れて誘ひ申せば吃驚仰天。詞迯げても迯がさぬ正眞の。惚人は其方に覺のある。お姫様のお文の返事。サア／＼いやとは言はれまいと。地押遣る色の門違。戀の身代り仕の江が。あんまり具合が出來過ぎて。どうやらひよんな氣になれど悋氣も フシならぬ。辛氣顔。地時姫はなほ面伏。仕の江を頼んでそなたの心を引き見るも。思ひつめた自らが心を推して叶へてと。手を取り給へば飛び退り。頼家様と御縁組のお姫様。それ故只今お局よりサアその使こそ自らと。御縁のないといふ印。地香の煙の色もなき移り香。うすき形見とも。縁の切れるといふ心わしや嬉しいと宣へば。詞イヤ／＼／＼。たとへ御縁は切るゝとも。天下の後見北條家のお姫様。我等體に御心掛けられしとは。世の人口も勿體なし。地思切り下されよ スヱと低頭三つ指仕の江差出で。詞いかさま仰有りやそこもあり。やつぱりあなたは頼家様へお嫁入遊ばして。いつそ私と三浦様。地ナア申しと寄添へば。詞どこへ／＼仕の江殿。さう得手勝手は此方がさゝぬ。どうでもかうでも

お姫様。地エヽもどかしいと兩方を。無理に配劑匙加減。調じ合せた目出度いとフシさゞめく中へ。地御兩所お成りと知らせの聲。驚き外す三浦之助。姫は名殘もをし鳥の。離れがたなき後影見送り。見送り。是非なくも。オクリ御寺の。へ方へ入り給ふ。フシ案内も同し東西の。幕しぼらせて政子の方。宇治の局も氣高さは。吉野龍田か月雪の。フシ光り合ひたる風情なり。詞これは〳〵政子様。御佛前へ御燒香も相濟みしが。誠に今日の追福も。あなたと自ら御一所に御弔ひ申す事。地さぞ我が君もお嬉しく思召さんとありければ。地こなたも兎角ろ御挨拶。三年と過ぎる年月も。果敢なの浮世懷かしの今日の其日とばかりにて。互の袖に玉こぼす。フシ露こそ手向なりけらし。地局はいとゞ萎れ入り。老少不定の憂きことも。誰がいつの世に フシ始めしぞ。地我が君此世に在さば自らが事若が事。今の思ひはなきものを一生埋れ果てなんと。悔み涙は妬みぞと。心に障る政子の方。詞イヤなう宇治の方。アノ武藏野に見る月も。賤が伏屋の濁江に。地宿りし月ももと一つ。所々の風雅により眺めも違ふ。その時々を辨へて。世上に付くがよささうな。フシ物ではないかと宣へば。詞これは御尤もさり乍ら。春の花咲き冬は雪。天道四季に私なし。地時をのり順を越え。辭儀も作法もなき時節。詞サアさう思すのが心の僻み。尤も賴家殿も。君のお胤といひながら妾腹なれば是非なき不運。イヤその母々の品位は變るとも。賴家は惣領ならずや。兄を差置き弟が。上に立つといふ事が。ヲヽあるとも〳〵。たとへ乙に生れても君の妻たる自らが。生み落したる實朝を。世に立てるのが天下の掟。殊更子は母によつて貴し。そもじは誰ぞ。伊東祐親の娘ならずや。現在我が君と仇ある中。怨敵の孫娘御咎もある筈を。却て君の御情。活計歡樂榮耀の餘り。源氏の跡を嗣がせんとは。鷦鷯の巣を梅が枝に。かけるより遙かのこと。中々及ばぬ叶はぬと。地云込められてくわつとせき立ち。詞エヽ聞きにくい一言。女でこそあれ賴家を。一度武將に立てて見せう。ホヽヽ。イヤそりや蟷螂が斧同然。取らるゝなら取つて見や。ヲヽ取らいではと打掛ひらり。地持たせし長刀互に搔込み。サア〳〵〳〵と詰寄りしは。野分に騷ぐ荻萩の亂れあうたる如くにて。地すは事こそと腰元下婢。手に汗握る寺中の騷動。佛の會座も忽ちに。修羅の巷へ駈來る片岡。待つた〳〵と氣も狂亂。押隔てどつかと坐し。詞エヽ情なき御有様。御兩所の御爭は。偏に天下亂れの端。この御心付かざる事。淺ましの御所存や。

殊更今は亡き御靈祥月の御命日。そのお位牌の御前にて。かゝるさがなき賤の女の。御爭は何事ぞ。國家の爲を存ずる故。京都鎌倉御緣を結ばゝ。自然と和らぐ御代の礎。地さあれば草葉の亡君も。嘸な悅びましまさん。操の鑑思さずや。不肖の臣が胸膈を。苦しめ碎くは千變萬化。九牛が一毛も聞召し分けられて。何卒和順なし給へと。割つつ口說いつはら／＼はら。涙は忠義隨一の上に立つたる武夫の。フシ諫に誠を現はせり。地榮西和尚しづしづと。御弟子引連れ出で給ひ。詞兩後室へ愚僧が御意見。これにて悟り下されと。地持たせし一軸傍なる。松の小枝にさらりと懸け。詞なんと御覽なされしか。天の時正に到るといふ文字。兎角天下を治むるは。天より自然其人に。與へ給ふにあらずんば。中々治むる事能はず。既にもつて今日。追福し奉る右大將。蛭が小島の漂泊も。後には天の時到り。六十餘州の總追捕使。御跡目の御述懷。御互に遺恨とならば。いよ／＼御代の爲ならず。地篤と御合點なされしかと。出家氣質の一行。和尚も名にし建長寺 フシすつぱりとした意見なり。地政子の方理に服し。先君の追善に。はしたなき言爭ひ妾が過り。詞イヤナウ宇治の方。必ず心にかけられな。地何が扨只今の無禮はお赦し下されと。フシ互に和らぐ御挨拶。地造酒頭頭を下げ。詞憚り多き諫言を。御聞入れ下されしな。御恩は重き細石。地巖となりし御代萬歲。見せ奉るがすぐさま追善。佛事終れば御前にも。いざ御歸館と勸むれば。解けぬ心を打掛に。包む式禮政子の方。片岡和尚御見送り オクリ館を。ヘ指して歸らるゝ。フシ跡に局は。張詰し心の怒止めかね。スヱテ千々に碎くる思案の體。始終の樣子三浦之助。さあらぬ體に手をつかへ。詞日も夕陽に斜なれば。御立ぞふと申すにぞ。地しづ／＼かたへに歩み寄り。懸け奉る雌雄の名劍。小脇に手挾みいかに義村。詞太平の印を見せんと賴朝樣。この東大寺へ納め給ひしこの劍。雄劍は自ら雌劍は其方。これを帶せん兩將を。選み來らんそれ迄は。地勘當なるぞと一口を。差出し給へば兩手に受け。詞四海太平なる時は。弓は袋にし太刀は鞘に納むると雖も。再び用をなすべき時節。近きにありとの御心候な。ヲ、いふにや及ぶ。先君の御恩を忘れし。北條一家の權柄我儘。地鎌倉山の月影を他所に。眺めて賴家を。日陰の花となし果つる。其口惜しさは如何ばかり。たとへ浪路は干潟となり。巖は湯玉とかへるとも。恨は晴れじ我が心。推量せよや三浦之助。詞ハ、ハ、、實に御理。逐一に承知仕ると。地同じく寄つて懸け置きし。フシ弓矢追取り

奉る。詞アレ／＼御覧ぜあの一軸。天の時正に到るといふ。中なる文字こそお恨みの目當ならん。地只一矢にて御鬱憤。散じ給へと義村が。的を外さぬ黒星に。ヲヽ心得しと打番ひ。きり／＼／＼と引絞り。手先上りに切つて放せば過たず。文字のたゞ中はつしと響く暮の鐘。お立の行列主從が別れ。勇んで ユリ 三重 立歸る

第三

歌 實に治まれる例には松に小松の生添ひて枝に枝葉に葉の榮え。ナホス本フシ 契り盡きせぬ源や。地御酒の機嫌も賴家卿。晝夜分たぬ舞歌ひ。お側小姓が笛鼓。白拍子には若狭とて器量もよしの櫻花。戀しき人は君樣と。舞に事寄せ賴家の膝に凭るる品形。よう濡事の生粹めと。側からはやす囃子方 フシ いや／＼どつと褒めにける。地大將御機嫌斜ならず。詞いつ見ても美しい器量につるゝ扇の手。どうも堪らぬ若狭の前。この賴家が北の方。ハイ。地そのお願は私からいつ／＼迄も其通り。必ず變り給ふなと又濡れかゝる一奏。地比企の判官御前に出で。詞君にも知し召さるゝ通り。片岡諸共鎌倉へ下りし處。心得難き北條殿の所存。何時合戰あらんも知れず。まさかの爲の便にと。味方に招く諸浪人。中にも佐々木四郎左衞門高綱こそ。今の世の軍師。彼が行方を詮議いたし此方の大將とせば。此上やあるべきと母上の御諚を受け。世を遁れ住む佐佐木が在所。此程より尋ね捜す人數の手配。殊に又。造酒頭が計らひにて北條家の娘時姫殿と。御婚禮を取結び追付け館へ參るは治定。御祝言とある時は若狭殿の爲にもならず。何と御思案はあるまいかと。地聞くよりはつと若狭が顏色。見て取る賴家。詞コレ／＼だんない／＼。片岡が指圖でも。そもじを除けて賴家が。妻と定める者はない。イヤなに判官。我思ふ所存もあれば片岡出仕致すとも。奥御殿へ通すなと侍中へ申付け。堅く禁制たるべき由小姓どもより申渡せ。コレ若狹構はずと一獻酌み。さらりと流しやと大將の。地色に心も亂れ絲。もつれかゝりし片岡が。フシ 難儀と更に白書院。地取次の侍罷り出で。詞お召によつて佐々木四郎左衞門高綱お次に控へ罷在る。通し申さんやと伺へば。ヲヽそれ待ちかねしこれへ通せ。對面せんと仰の下。地御前間近く立出る。佐々木四郎左衞門高綱。名にのみ聞きし武夫の フシ 行儀亂さず平伏す。地判官佐々木に打向ひ。詞對面致すは初めなれど名は聞き及ぶ高綱殿。此程より貴殿の行方尋ね索めるその仔細は。軍法智略隱れなき佐々木四郎左衞門へ我

が君竊かに。御頼ありたき一大事あつての事。よも違背はあるまじと。地探る詞に莞爾と笑ひ。詞先君頼朝一天下を切治め。草木も動がぬ今の世に軍術武邊も益なき事と。跡を晦し山林に引込んだる佐佐木高綱。今改めて御召出しは。太平の世に武を忘れぬ名将の御心掛。委細の儀御尋ね申すに及ばず。御頼の一大事高綱承知仕る。御心安かるべしと淀まず濁らぬ辯舌はフシ水を流せる如くなり。地煙たい相手にさしもの大將。詞ア、いかう遊びが滅入つて來た。佐々木を母に目見えさしコレ若狭。其跡ではしつぽりとサアおぢやいのと。地大將は帳臺。深く入り給へば。然らば後刻と判官に。目禮式禮高綱もフシ奥にお供し入りにける。地又も奏者が聲として。詞御前様より仰せられし佐々木四郎左衛門高綱。只今伺候致せしと。地聞いて能員ソリヤ何の事。詞たつた今目見えした佐々木四郎左衛門二人あらう筈はなし。ム、聞えた。名ある武士ども召抱へある時節を考へ。匹夫下郎の騙事。何にもせよ仔細ぞあらん是へ通せ糺明さして實否を糺さん用意あれ侍中と。地遣戸口に身を潜め握り詰めたる柄の間も。心を配る高綱は。春待ちかねし鶯の初音を謡ふ心地して。フシしづ〳〵と入來り。詞召に應じて佐々木四郎左衛門只今參上仕る。取次頼み存ずると。地聞きもあへず。判官がソレと指圖に雙方より。取付く二人を引摑み。何の苦もなく投退くれば同じくかゝるも右左。うんといはして寄せつけねば。上意なりと判官が。聲に流石の高綱も躊躇ふ所へ附け込む家來腕を廻はせと。フシ追取り巻く。詞ヤレ暫くと御聲かけ。地ハルフシ立出で給ふ宇治の方。地君に別れし玉櫛笥まだ艶やかな色も香も。フシ觸らば落ちん袖の露。詞ホ、豫て聞き得し佐々木四郎左衛門。自らこそは頼家が母宇治の方顔合すは初めなれど昔に返る主從三世。今より頼家が力となり偏に頼む味方の軍師。ハア畏つては候へども。さ程に迄某を懇望あるに引替り。御家來中の今のしだら。ヲ、其不審は道理なれど。味方の士卒を靡かす高綱。その手練を見よう爲。ハ、、、コハ御諚とも覺えず。身不肖の某なれどもまさかの時は軍師にも。御頼みなされんとの御心には引替へ。劍術柔術の業くれにて。佐々木が器量御試し遊ばさるゝは。淺はかなる御計らひ。地左様の武藝は一人に敵する端武者の技。軍師の器量に足らず憚りながら。大將の御賢慮薄く候と。武威を恐れぬ辯舌骨柄割符を合す。フシ二人の佐々木心一つに奥と口。きつと御目を付々に。かつて云はれぬ。フシ此場の仕宜。詞ヲ、一言一句に備りし軍師の器量。頼

もし〱此上は頼家に目見えさせ事ゆるやかに奥の間で。主從の盃ごと。コリヤ腰元ども佐々木を早う伴へと。地仰にはつと高綱も威勢は。雲に立昇る龍に翼や虎の間のオクリ御前をへ指してフシ立つて行く。地かゝる折しもお庭の內。下れ下れも柔らかな腰元どもが口々に。詞見れば花を商ふ人さうながが。此處をマア何處ぞと思ふ。忝くも源の頼家樣の御殿とも憚らず。中間衆が見付けたら大抵の事ぢやあるまい。早う御門を出やしやれと。地叱る詞もフシなまめきし。地御免々々と手をつかへ。詞イヤ申し女中方。私は近鄕の小百姓。畑の隙には此如く花を擔いで賣りあるき。通る度々この御殿。外から見てもきら〱と結構づくめを見るにつけ。ア、內へ入つて見たい事ぢやと。思ふが一途。覗いても呵人なく。入りかゝつた御門の內これが何と出られませう。

とても事にとつくりと入れさして下さりませと。地いひつゝ立つて行かんとす。判官聲かけヤア何奴なれば尾籠千萬。詞御前樣の御側近く。慮外致さば一討と。地叱り飛ばされ吃驚し。籠より取出す梅の花。判官が前に置き。詞ハイ御赦されて下さりませ。御前樣がかる〱と出てござるとは夢にも知らず。ア、勿體なや〱。お前樣の執成で拜まして下さりませ其代り此梅を上げませう。イヤ申し賣り餘りではござりませぬぞえ。地物は云はねど此花はお詫の種の一枝と。いはせも果てず。詞ヤア見かけによらぬど性根の太い奴。武士を捉へて嘲弄する。地憎い頬桁歪めてくれんと飛び懸り。目鼻もわかず丁々と打つ度ごとに散る梅の。落花狼藉厭ひなく。びくともせねば手は見せぬと。突放されて今更に。返すフシ詞も塵打拂ひ。詞ア、去にましよ〱。慈

悲專らと思ひの外。さりとは慘いお衆達。何ぼ結構な著物着て。仔細らしい顏召されても。かう當りがひどうては御出世はなりませぬ。地貴い寺の門前から去んだがましであつたもの。入つて見たさに痛い目した。命が物種おさらばと呟き〱立出づる。それ繩打てと宇治の方御聲かかれば能員が。取つて引立て無二無三提緖手繰つて小手搦。權威に壓され詮方も。フシ投首してぞ居たりける。地比企の判官取敢ず。詞斯樣の奴等が徘徊致し。御前樣のお身の上惡樣に觸れ歩く。愚人奴等への見せしめに首打放し成敗の。手本に致し候はんと。地聞きもあへず。いかさまそなたの言やる通り。下として上を計らひ。頼家や自らが掟を誹る者あらば。たとへ町人百姓でも。生けおいては政道立たず。處刑の手始其者は。自らが手をおろし手討にする覺悟せい。イヤなら能員。

斯くも溢りに入込むは。外面を守る役目の過り。詰り〳〵の遠侍に守り嚴しく申付け。ともに心を配るが第一。コリヤ腰元ども。其方達は奥へ行き。自らが腰刀早くこれへ持來れと。地仰せに生きた心地もなく。申し奥様。今の様に申したのでお腹が立たば幾重にも。コレ申し女中方。詫して給べとおろ〳〵聲。願へどいつかな弛めぬ判官。詞スリヤ御前様には自身のお手討。ヲヽ云ふにや及ぶたつた今。そなたは次へ腰元ども。地早う〳〵と宇治の方。嚴しき下知に能員も。フシ其儘立つて入りにける。地圍まれし今ぞ命の置所。本フシ居所の歩みの羊より響く時計は八つも過ぎ七つ何とか女子供。きらめき渡る腰刀御前に直し置き。フシ立つて入るさの。月ならで。フシ花にその日を置く露の。地涙と共にコレ申し。詞殺される此命惜しいとは思ひませぬが。今此

處で斬られたら。跡に殘つた女房子が路頭に立つは知れた事。一人と思へど親子三人。見殺しにして何の益。何卒お助け下されと。地拜み度うても後手に スエテ縛り搦めし有様を。地見やる此方も打疊り。淸くさせんと下立ち給ひ。詞歎き慕ふは理ながら。助けられぬ其方が一命。時移る程思ひの思ひ。源家の大將。賴家が母宇治の方が手にかゝるを。果報と思ひ諦めよと。地すらりと拔いたる刀の光。恐々そつと顏打眺め。詞スリヤどうでもこなた殺す氣か。ハア是非に及ばぬ。とても切られる上からは。潔う死んで見せませう。その代り又此方様にも。すつぱりとした刀の切れ味。サア切らしやれと突付ける。地身體の捻りに宇治の方きつと目を付け合點と。丁ど切つたる覺えの手の內。解ける繩目に吃驚し。詞ムヽこりや切れたのは繩ばかり。スリヤ殺しや

なされませぬか。ヲヽ何のいの。生けて再び自らが。賴みたい事あつて。殺すというたはみんな嘘。人前つくりし心を見やと。地刀は鞘に納むれど。まだ治らぬ胸の中。底意如何にと兩手をつき。詞百姓づれの私に。賴みたいと仰有る譯はえ。そなたに惚れた。エヽイヤモ今日ほど恐ろしい事を聞く日はない。長居したらどんな目に遭ふも知れぬ。もうおさらばと立上る。イヤ去なさぬ。云ひ出すからは金輪際。たとへ何れの花にもせよ。その一枝は地自らに折らしてたもと慕ひ寄り。取る手に縋つて。詞エヽ滅相な。女だてらに男に惚れるといふ様な無遠慮な事があるものか。地なう〳〵こはや恐ろしやと。振切り〳〵フシ迯げ惑ふ。地道を塞いで宇治の方。詞そんなら手討にあひたいか。サアそれは。厭ならこの戀叶へいと。地退引させぬ難題に。返答ほうど行

詰り。詞サア〳〵そんならマアあいでござります。ア丶お前樣もいらぬ物好きアアしたが如何でもそぐはぬ色事が當世の流行物。あなたもお公家樣の娘御なら。我等さしづめ痛い腹。必ず切らして下さりますなえ。それはさうぢやが如何いふお心で惚れさしやました。譯を聞かして下さりませ。地フシさればいの。詞君に後れておのれやれ。貞女の道は背かじと思ふに違ふ起臥に。地契り置きにし私語思ひ出せし床の中。只一人寢の手枕に深き思ひを打ちわつて。云ふべき人もありなんと武士町人の別ちなく。入込ませしは幾萬人。數も限らぬその中に。今日といふ今日其方の顔。一目見るより戀草の闇を縫ひゆく螢より。焦るゝ宇治が袖袂。下ゆく水の流さへ。外には洩す。フシ人もなき。地わしが寢所にこつそりと忍男といはゞ云へ。サア打解けて給もいのと

ひつたり濡るゝ雨が下。又とあるまいこの戀路。在所育ちの麥飯で。釣られし鯉は淀川の。フシ七年物と知られたり。詞イヤ申しそのお心。何時迄も必ず違へて下されますなえ。ヲ丶何のいの。一旦惚れた上からは。武士は勿論高家でも。いつかな觸れぬ肌と肌。そなたと合すが互ひの固め。地サアおぢやいのと打連れて上る疊の裏表。片岡造酒頭出仕なりと呼はるにぞ。はつと仰天こなたにも。人音すればせん方なく。隱し所も宇治の方打掛ひらりと忍夫。暫しは宿る下蔭に。オクリ身を潜めてぞフシ窺ひゐる。地ハルフシ春の日脚の。長廊下板敷の音しとやかに。武士のフシ鑑の大廣間。地それと見るよりハ丶はつと。座を立隔て造酒頭謹んで兩手をつき。詞こは御前樣只お一人。心得がたき館の構へ。殊に只今侍中が申すを聞けば。片岡御殿へ通すまじと遮つて

申せども。某かつて合點參らず。地御所存いかにと尋ぬる中。詞ホ丶その仔細は某が。地云ひ聞かさんと立出づる。大江の廣基入道東元。頭ばかりは丸けれど角菱立つる眼付。眞中にどつかと坐し。詞御邊一人奥御殿へ。通さぬといふ仔細。語るに及ばぬ貴殿の胸に。覺ある今度の使者。鎌倉へ參りながら。その役目は遲滯に及び。剩へ時政の娘時姫を賴家公に娶さんなどと。旁以て心得ぬ心底。さるによつて御前より仰せ渡さるゝ右の條々。地言譯あらばいへ聞かんと。席を打つて詰めかゝれば。詞ホ丶それにこそ片岡が深き所存。此度鎌倉に立越え事の樣子を窺ふ所。時政の心底いかにしてもその意得がたく。其儘にてさし置かば。遂には兩家戰ひの。亂を押へん其爲に。北條殿の指圖に從ひ時姫を請受けしは。なほ御一家の緣深く。自然と和談に及ぶは治定。

そこを以て片岡が。三ヶ條の御不審も。只婚禮にて事を治め立歸つて樣子を聞けば。宇治の方の御身持。武士は勿論町人百姓。毎日々々入込ませ。御目に止りし者とては。御寢所に引入れさせ。放埒惰弱の御遊びと。地聞きたる時は造酒頭。はたと塞がる胸の戸も。明けて一人誰あつて。諫言申す者もなきか。エヽ是非もなき次第やと。思ふに任せぬ片岡が。骸は泥に埋むとも。一心變ぜぬ魂と。知ろし召されぬ事ならば。再び生きて歸るまじ。詞穩かならぬ鎌倉の。大事を前に置きながら。色に溺れ酒に長じ。世の人口にかかるといひ。地覺むれば夢の跡先に。お心付けて唯一言。頼家公に御意見の。杖柱ともなるべき御身。思ひ止つて給はれと。忠に凝つたる片岡が。諫める五體に汗雫。フシ袴も浸すばかりなり。地宇治殿氣色を變へ給ひ。詞ム、自らが身持放埒。町人百姓を引入るゝとは。跡方もなき噂を取上げ。貞女の道を背きしと。無き名を立つる推參慮外。女と思ひ侮つてか。詞が過ぎるぞ造酒頭。ハツ／＼御心に障りなば。其儀は幾重にも御宥免。唯返す返す頼家公へ。御祝言の御勸め。この嫁入を變改あらば。最早和睦も叶はずして。亂に及ぶは今此時篤と御賢慮。地廻らされ。時姫君の御事のみ。偏に願ひ奉ると。我が身に代へて祝言の納まり願ふ四海浪豐かに フシ見えぬ風情なり。地入道東元聲荒らげ。詞同じ事をぐど／＼と。主人に向ひ尾籠の振舞。ヤア／＼誰かある。アレ引立てと呼はる聲。地畏つたと比企の判官。詞襖あらはに是さ片岡。鎌倉方のぬらりくらり。言譯しても返らぬ事。去に端が無うて得立たずば。地立たしてくれんと立掛かるを。腕首摑んで フシ貞逆樣。地見向きもやらず摺寄つて。詞たとへ御答蒙るとも厭はぬ／＼。地此上は頼家公へ直に御願ひ申さんと。いふ間あらせず入道が。推參なりと打かくる。手裏劍丁ど身をかはせば。小柄は外れて宇治殿の。打掛あらはに。アイタヽヽヽ小手打込まれし以前の男。一座の驚き生中に。隱立して川霧の。現はれ渡る宇治の方暫し フシ詞もなかりしか。地耻かしや造酒頭。最前のそなたの意見。面目なさも切なさも。思はれぬ程可愛いは。眞實惚れた忍び男。女の因果と堪忍して。必ず叱つて給んなと。地詫びるは武將の御母君。天下晴れたる御身持呆れて何とせん片岡。入道も苦笑ひ。詞頼家公の御母公したい事なさるゝが武將の威光。誰が何と申す者がござらう。片岡が押付願ひ。御得心ないは知れてあれど。身が取次してくれう。次へ立ちやれと權柄顏。地破るは易く守るは片岡。結ぶは早き戀の殿。三つ

に別るゝ奥の間に。笛の響も大將の機嫌とり〳〵。鼓の音銀燭臺の影高く フシ輝きわたるばかりなり。 地若狹はそつと奥の隙。出づる後に東元が。聞くとも知らず獨言。 詞腰元衆の話を聞けばマア祝言は止まつたさうな。これといふも入道樣のお蔭。エヽ忝い〳〵。それに引換へ片岡殿。わしが爲には戀の仇。イヤその敵は外にある。エヽ外にあると仰有るは。ヲヽ理を知らねば不審尤も。君を大事と思ひ込まれし志が切なる故。入道が語つて聞けん。 地近う〳〵と小聲になり。 詞何をか包まん。其方の仇となるべき人こそ。館の後室宇治の御方。エヽ。ヲヽ吃驚は道理々々。エヽ情なや。武將の母といはるゝ身が。下司下郎を引入れて。アレ寢殿に不義密通の私語。先君頼朝の御恩を忘るゝ人非人。鎌倉には頼家公。謀叛などとなき名を立つるも。皆宇治の方の不所存から。この人を生け置いては。頼家公の御身の仇。家の爲天下の爲。御身竊かに寢所へ踏込み一刀に討つて給べ。アヽこれ申し滅相な事ばかり。大事の〳〵殿樣の母君。殺せとは勿體ない。シイ。すりやこなたは頼家公が大切にはないか。大切ならば後室を。殺すのが殿のお爲。よし〳〵これ程の一大事。口外へ出すからは最早暫時も猶豫ならず。こなたが得殺さずは身が手に掛けて。家國の禍を拂はんと。 地奥を目掛けて駈入る氣相。コレなう待つて入道樣。 詞待てとは此方が討つ所存か。サアそれは。サア〳〵どうぢやと フシ競り付けられ。 詞そんなら宇治樣殺しませう。君に添ひたい殿樣を大事。 地大事にからまれて。同しお主といひながら。お家の爲には代へられぬ。 詞仕畢せてお目に懸けませうと。 地口にいふさへ勿體涙。胸にせきくる フシ若狹の水。

詞ヲヽ出かされたあつぱれ〳〵。それでこそ頼家公の北の方。これ此刀ですつぱりと。アレ。あの囃子の終らぬうち。時を過さず合點か。 地心得ましたと脇挾み。氣も太鞘の白拍子目釘潤して忍び足。オクリ窺ひ。 ヘ窺ひ フシ入る姿。 地見やる眼も笑壺に入り。邪智を隱せし胸算用。獨り頷く思案の後。奥よりひよか〳〵以前の男。思はずばつたり。 詞ハアこれはしたり。 地御赦され フシてと行過ぐる。 詞待て〳〵汝合點の行かぬ奴匹夫下郎の身を以て。後室に近寄る不敵奴。汝も生けては歸されぬ。覺悟して居をらう。エヽイこれは又迷惑な。花賣りに來たお庭先で。後室樣のお目に入つたは私が花の科。此方から仕懸けた色事ではなし。畢竟御前樣の御惡性樣ながら。私は何にも。ヤアぬかすまい。そればかりでない。汝最前から何ぞ聞いたであらうがな。エイそれは。

聞いたでもなし。聞かぬでもなし。それ聞いたら赦されぬと。地すらりと抜いて切付くるを。脇息おつ取り丁ど受け。詞こりや何となされます。ヤア御前様を誑し。お家を亂す大罪人。地觀念ひろげとまた切込む。鍔元丁ど打落し。脇腹うんとたぢ〱〱。透かさず駈寄る比企の判官。主は誰とも手裏劍に。ぎやつと一聲フシ敢なき最期。地見向もやらず一間に向ひ。詞良禽は木を見て棲む。大將の器量を選み。此程民間に名を隱す。近江源氏の嫡流。佐々木四郎左衛門高綱。今日只今賴家公の御味方。軍師となる時到れり。家來刀と詞の下。地ハアはつと一度に立出づる。姿も一對二人の佐々木。入道が恟り怪顚。樣子いかにと窺ふうち差出す大小おつ取つて。床几にどつかと坐したる面體。主從變らぬ三人佐々木。フシ三國一の勇士なり。地御劍携へ宇治の方。御悦びの聲高く。詞六十餘州に一人の軍師。待焦れたる甲斐あつて。今といふ今手に入れば。味方の礎大願成就。賴朝樣より傳はりし雌雄の劍と名づけたる。二口の太刀。軍師と賴む上は。手渡しする雄の劍。士卒を靡かす采配ぞと。地恭しく手に渡し。詞心得難きは大江東元。賴朝樣の御恩を受け。賴家の師範とも付置かれし身を以て。何恨みあつて鎌倉へ。内通は致せしと。地仰せに東元起直り。詞存じ寄らぬ御疑ひ。鎌倉へ内通とは何を以て。イヤ〱大江殿とぼけまい。豫てより北條家に心を通はし。隙あらば賴家御親子を。害せんとする貴殿の底意。爭はれぬ證據は。最前我が手に受け留めし。小柄の手裏劍。片岡目あてに打つと見せて。正眞の狙ひの的は。宇治の方であらうがな。ハヽヽ、其時我が手に受けずんば。宇治の方はその座で落命。それのみならず。貴殿の娘を若狹といふ白拍子に仕立て。賴家公に放埒をすゝむるが。鎌倉へ内通の證據。お隱しあるなと一言は地三寸俎板釘打つ如く。詞ムヽ流石の佐々木よく見付けた。淫亂不義の宇治殿を殺さんと謀りしは。家の爲を思ふ故さ。又白拍子若狹を我が娘とは。何を證據。ヲヽその實否は谷村小藤次。四宮六郎。主人の下知にて鎌倉の樣子を窺ふ忍びの犬。妾腹の娘若狹。藁の上より扇が谷の郷に預けて置かれた事迄。聞拔いて來たこなたの腸。サア〱白狀々々と。地詰めかけられてさしもの入道。返答塞がる障子の内。太刀音丁と唐紅。白拍子が首提げ。立出で給ふ賴家公。フシ退つて。敬ひ奉れば。地寛然たる御氣色にて。詞京鎌倉と隔りし。此頃の人心。圖りかねたる我が放埒。今改むる手始に。成敗せし此女。他人の手に人となり。入道が娘とは今日

迄其身も知らず。始めて聞いて身を悔み。覺悟の最期。主を誅る天罰。我が子に報ふと知つたるかと。地常に變りし御上意に。一句一答赤面し。思へば無念せん方な。自害と見ゆれば高綱押止めヤレ暫く。詞假にも先君頼朝より。若殿の御師範と。名を付けられし大江の入道。心を改め忠勤あらば。生害には及ぶまじ。一旦内通の貴殿なれば。所詮生けては置くまいと。思うての覺悟ならんが。佐々木四郎左衛門高綱軍師となる上は。貴殿ごときが幾萬人。内通しても苦には致さぬ。お心遣ひ御無用と。詞人を育つる大器の詞。東元始めて生きたる心地。詞げにも實にも。今の命を戰場にて。我が君に奉るが。忠勤の第一。差當つて御近習の比企の判官。打止めたる曲者。忠義始めに生捕つて。地御覽に入れんと立端の鹽。しほからい目に大江の入道。唐犬の フシ

迯吠してぞ入りにける。地大將重ねて。詞佐々木を軍師と招きし上は。母君諸共日頃の念願。時まさに到るはこゝ。急ぎ士卒を差招き。評議如何とありければ。地佐々木高綱暫しと止め。詞御諚には候へども。北條家には御存じなき。今日の次第を次の間に。窺ひ待つたる武士一人。地對面致せし上の事と。家來を近づけ。詞ヤア〳〵両人。其方達は宿所に歸り。我が身の上を告げ知らせ。地早く〳〵と追ひやつて突立上り高聲に。詞鎌倉よりの附家老。片岡造酒頭。佐々木四郎左衛門高綱見參ざふと呼はれば。地襖をさつと造酒頭。出づる後に組子の侍。おつ取り巻くを事ともせず。詞最前かくと見極めし。我が推量に違ひなく。扨こそ佐々木でありしよなと。いふ間あらせず左右より。捕つたと聲かけ寄る所。その手を。すぐに引摑み。かくも君より御不審のかゝ

り繋がる鎌倉に。足を留めたる造酒頭。たとひ主君の御意なりとも。滅多に縄はかゝらじと。彼方此方へどつさりいはせ。臣は臣たる道を盡し。君を守るが習ひといへど。疑ひ蒙る我なれば。只此儘に出城して。再會は重ねてと。地又も組子が打ちかゝる。十手透さず引つたくり。眉間眞甲うち割つて。云はぬ フシ互の胸と胸。地宇治の方御聲かけ。詞誤つて疑へば。人とともに亡ぶといへど。意地を磨くは武夫の。道にはづれし造酒頭。再び歸り逢坂の。關を破ろと破らじと。其方一人に止めしと。地仰の中より佐々木高綱。詞味方にあつては一方の。旗大將ともなるべき御邊。其儘出城せしむる事。虎を赦して竹林に。放すとは云ひながら。我又斯くてある中は。何條事のあるべきぞ。地すは合戦に及ぶ時。何萬騎にて寄するとも。詞高の知れたる端武者ども。

地四方に亂るを鋩揃へ。搔首梨割鐵砲の。音も烈しき。味方の軍勢。君の威勢をコハリ眞甲に。さしも功ある鎌倉方。どつと寄手の勢にて。勇めや。かゝれと數多の士卒。詞諸葛が術をなすとても。我が方寸の計略にて。そこにも佐々木。こなたにも。佐々木々々々と名をふらし。地こゝの森蔭彼處の堤。追詰め。〳〵時政に。泡吹かせんは高綱が。胸に納めし軍の備へ。詞涼しく言放せば。地造酒頭につこと打笑み。詞我とてもまつその如く。君に疎まれ君臣の。禮儀背きし上からは。本國に引籠り。旗上せんは易けれども。末代此身の瑕瑾となる。我が惡名もさつぱりと。地流せば其名も楯の板。只いつまでも忠臣の。必ず二字を忘るゝなと。味方に付くとも付かぬとも。善惡二つを一道に。納めて歸る造酒頭。さらば〳〵と高綱も。御親子フシ誘ひ奥と口。地東元が采配にて。造酒頭を歸さじと。琴柱刺股振廻し。逃さぬ遣らぬと犇いたり。詞ヤア性懲りもなき有財餓鬼。殘らずうせいと聲かくる。地物な云はすな搦めよと。右往左往に打つてかゝる。鼓は奥の間謠の拍子。ウタヒ舞延年の時のわか。これなる山水の。落ちて巖にナホス響くこそ。地祕術を盡して爭ひしが。さしもの大勢たまりかね逃げ散る跡に我武者の二人。拔合せて切りかゝる。かい沈んで翻筋斗打たせ。直ぐに腰骨踏みつくれば。やらじと取付くフシ組子が急所。地仕止めしは何者と。見やる後の障子の中。衣服改め佐々木高綱。詞判官を討ちとめて。我を庇ひし小柄の返禮。受納あれと高綱が。地立つる勇者の道々に。奥は安宅の舞謠ひ。とくとく立つか弓取の。心ゆるさぬ造酒頭。暇申してさらばよとて。笈にはあらぬ相生の。祝言さへも三々九度。フシ言譯何と片岡が。虎の尾を踏む毒蛇の口。遁さぬ佐々木が四つ目結。紋にあらはす四天王。その隨一と鳴りわたる鐘もさやけき。三重へ夜あらしの

第四　道行旅路の濡衣

サハリ憂き事の。つかさを問へば世の人の。戀と旅とに有明のナホスハルフシ光は空に。いや高き。北條時政の深窓に。スヱテ祕藏娘ともてはやす。名も時姫の時にあふ。長地鎌倉山をあとになし都路さして嫁入りの道は東路戀路はよそへ小オクリそれて。はづして徒路の野もせ。オクリ數かぎりなき傅の中を隱れ路近江路をフシ心のあてど共々に。お側去らずの住の江が助け參らせ玉鉾の。道ならぬとや四方山の噂に濡れん。小夜衣裾吹き拂ふ春風に。フシオクリ露踏み〳〵わけて辿りゆく。村々つゞき果しなく。本フシ物思ふ身は若草や紫雲

英土筆も目に添はで。葉越の瀧の木靈さへ。我を追ふかと怪まれ木の間。隱れに立忍ぶ。そなたの方より一群の。往來の中に聲高く鹽の安賣。山ばかり噂都の伊達姿。商ふ鹽に フシ數々あり。日月晝夜滿干の潮。どうと寄せ來る浦浪は。ハズミ須磨の上潮鹽なれ衣。松風村雨一荷にして。行平これを賞め給ふ赤穗に名高き鹽の色。雪より白いを此如く富士の山もり安いが一德。押合ひ。フシ倖合ひ。隣りのお玉や向ひのおりんがこぼれかゝつて我等が袖を。じつと捉へて鹽の目の。戀路は桝に。フシはかりなきサア召せ〳〵と口上に。數多の往來興に入り。笑ひを フシ殘し行過ぐる。被衣あらはに姬住の江。義村樣かと見合す顏。素知らぬふりに行く袂。二人はやがて右左。縋り止めてコレ申し。さ程無情いお心と知らぬ私が憂き思ひ。都の方へ嫁入も父御の仰せ是非なくも。其場を紛れ落人とかく成りゆくを可愛やと。少しは思ひ給はれと口說き給へば住の江も。ほんに私がいろ〳〵と口說き落した其上で。お姬樣への媒人をあとで思へば味な氣に。縺るゝ絲や。青柳の。亂れて今は。喞ちぐさ。歌花と櫻の二思ひ色香をわけて。さいたづま。手を取り取りや虎杖の。離れがたなき蔦若葉。縋り口說けど大丈夫の。心は空に春の風。ナホスフシ吹きわけらるゝ。袖袂放ちはせじと篠原をあなた。こなたと附纒ひ。亂るる裳裾紅の。入日の波と見え隱れ。木の間の櫻ばら〳〵〳〵。春の最中の雪おろし花踏み。わけて。ユリ三重

第五

地ギン近江野や。フシ鏡の山へ影遠き。高宮の村はづれ。長地辿りて爰に時姬君住の江諸共憂き旅に。うき戀人を見失ひ其所よ。此所よと フシ立ち休らひ。詞コレなう住の江。そなたの世話でやう〳〵と。地廻り逢うた戀人に。振捨てられし我が身の上。推量して給もいのと スヱ涙先立つかこち言。ヲヽ 詞お道理〳〵。物堅い義村樣でも木竹ではあるまいし。地此方の心が届いたら何ぼ無情男でも。情心が出來そなもの。詞何にもせよ此邊を尋ねるにしくはなし。地御氣遣なされなと力を フシ付ける其折柄。地後の方より同勢引連れ。北條の家來闕口平太姬を尋ぬるうろ〳〵眼。かくと見つけ走り寄り。詞時姬君にて候な。御行方知れざる故方々と尋ね御迎に參つたり。地住の江殿にも御供あれいざ御出と申せども。イヤ〳〵鎌倉へ何面目に歸るべしと。否み給へば闕口平太。詞片岡殿の思慮あつて惡しくは計らひ申さぬ由。地是非御供と住の江も倶に引立て大勢が。フシ東路さして急ぎ

ゆく。三下り歌雨の山坂花見りやすべる。花見りやすべる。花に思ひがよいとこ息杖。しやんとせ。詞ヤイ仁作狼狽へたか。この酒屋に駕籠立てゝ親方にもお茶上げい。休む所で休みもせず。コリヤ奈落の底まで舁き込むかい。地性根を付けいと惡談に。先肩もひやうまづき。詞ナアニ馬鹿つくすやら。汝と相棒するが最期。定付の立場でも氣に入らねばすつとこな。酒屋さへ見りや何度でも。休みたさうな面付。それといふも飲みたいから。どうで汝は聞及んだ八つ目の大蛇の再來か。地酒呑童子の眷屬かいげちない酒好きと競合ひ〳〵ヤツトコ フシ駕籠おろせば。地サア〳〵お休み〳〵と亭主が詞に駕籠の垂。上げて床几へ歩み寄る十河額の東武士。悠々と押直り。詞ナニ後肩の者これへ參れ。最前汝に云付けたは。急用のある身どもなれば立場をぬいてほつ付けよと。云うた通りに精が出た極めの外に褒美をくれる。聞けば汝酒好きとやら。亭主。ソレ彼めに酒を飲ませよと。地降つて湧いたる幸ひは。得手の好物嬉然と。笑を含んで駕籠の錢。戴き〳〵兩手をつき。詞エヽ適れなお侍樣。極めの外の褒美には五十三十增しの錢。下さる所を酒と出たは。又違うたものぢや大將々々。何と仁作よこれ見たかと。地云ふを打消し相棒仁作。詞申し旦那。結構な御意なれど。ア同じ事なら地餅がよい。酒に優つた餅の德。年の始も鏡餅。重ねて神の二柱。或は茶粥の柱とも腹の減ること。フシ遲いなり。詞第一駕籠舁に酒飲ますは。嬶に地黄を呑ますも同然。何處ぞの程では乘手の身に怪我の出來るは知れた事。酒をとんと止めにして。ナント餅になされませぬかい。餅になさるが上分別と。地下戸と上戸の得手勝手。咽喉は鎌倉街道の。フシ食爭ひと見えにけり。地侍は苦笑ひ。詞ホヽウ共方にも望次第何なりと仕度致せ。ソリヤ有難い御意が出た。シタガハア悲しや。この店には酒許りで餅はなし。ヲツト力を落すまい。堤の餅屋も此方の出店。後肩殿はあの壺から。お指圖次第に飲んだがよい。地サア〳〵ござれと亭主が案內に相棒は。おのれ存分食ふべしと旦那へ目禮機嫌取り。五文取らうと フシ急ぎ行く。地後肩は立上り勝手知つたる賣場の酒。有合ふ桝を盃に杓からてうど注ぎ移し。詞然らば旦那たべまする。コリヤ見事ぢや。桝で飲むか。何ぞ肴をくれたいなア。アヽいえ〳〵お肴は持つて居ります。地先づ一口と角飲にがぶ〳〵〳〵と一息つぎ。腰の胴亂引明けて取出す蕃椒。詞コレ旦那御覽じませ。肴はこれでよござります。アヽ何とやら。ヲヽそれよ。橘木も紅葉しにけり 蕃椒

この紅葉をお肴と。地一口食うてぐつと乾し。詞エヽ心地よい〳〵。コリヤたまらぬわい。申し旦那。ちとお願ひがござります。ムヽ願とは何事ぞ。ハイ〳〵いやモウ外の事でも御座りませぬ。もう一つこれでたべませうかと申す事でござります。ハヽ〳〵。ムヽなに其上をまだ飲むか。ハテ扨々厳しい上戸だな。何程なりと勝手にせよ。コリヤ有難いと立上り。地手酌のはかり思ふ儘。てうど注いで。詞ヘヽヽヽ又たべます。今度はもう一息にと。地桝引かゝへ蟒蛇が瀧の流を呑む如く。フシ侍も呆れ顔。詞エヽ忝い命〳〵。まだこれからが酒なれど如何にしても無作法千萬。マアこの邊で入れませう。ハア扨と。ヤ慮外は御免。ちととろ〳〵とやりませうと。地芝にころりと邯鄲の。枕いらずに早や鼾。フシ仙人界も斯くやらん。地時刻移れば侍は立上つて身拵へ。フシ用意の内に。都路を東の方へ急ぎの武士。顔見合せて。詞貴殿は八藤軍治殿。コレハ〳〵曾平殿と。地時の挨拶双方が互に禮儀事終り。八藤軍治聲潜め。詞貴殿の御主人大江入道殿。豫て鎌倉時政公へ御内通の忠臣。京家にては出頭の入道殿鎌倉へ内通とは神も知らぬ謀。相互に三日目に逐一の御文通。定めて貴殿も。此方の主人へのお使ならん。いかにも〳〵仰の通り。主人大江油斷なく京城内の爲體。萬事具さに申上ぐる。此頃京都頼家公には。諸國の武士を狩集め密々の評議あり。其儀についての御使。幸ひに途中の對面。雙方の狀を取換へ一刻も早く歸國せん。地ホヽ尤もと兩人が互に密書の箱入替へ。懐中して立上り。鬼山曾平あたりを見廻し。詞イヤこれさ軍治殿。兩人の外人なしと一大事の物語。見ればあれに臥したる下郎。何者やらんと咎ぬれば。ホヽ御不審は尤も。彼めは拙者を當所迄舁いて參つた駕籠の者。食ひどれてあの通り。イヤもうたはいもない下司下郎。氣遣あるなと聞きもあへず。成程熟醉の體なれど。下郎ながら彼めが人相逞しい生れ付。茅にも心置く時節事漏れては一大事。地拙者よろしく計らはん。コレから〳〵と八ッ藤に。囁けば打頷き。寢入りし下郎が側へ寄り。耳近く聲張上げ。詞ヤイ〳〵コリヤ駕籠の者。用事がある目を覺ませと呼はる聲。地ウンと寢覺の醉機嫌。詞エツフウム、何方かと存じたら。最前のお侍様。エツフウ。ムヽまだこりや飲めと云ふ事ぢやな。イヤモまつさら一人は飲めませぬ。ちよつとお間を頼みましよかい。サアおさしなされませ。と地寢ても覺めても酒の事。鬼山はつゝと寄り。詞イヤコリヤ下郎め。汝が名は何といふ。何所の村に住居致す。ハイ。ハ

テ變つた事のお尋ね。我等住居は何所とも定らず。この街道でこんもりと。よう茂つた森の分は。慮外ながら。拙者が寢所。又名がお聞きなされたくば。本名は。雲助。又かへ名が吞助。飮む事は二斗。三斗。まだ其上もたべます。によつて此頃は名が變り。四斗兵衞。〳〵と何所でも申しますて。ヤ又ほんに。酒に於ては。遖れの手柄者。どなたでも叶ふまいと。地半分いひさしとろ〳〵眠り。軍治立寄りヤイヤイ〳〵。目を覺さぬかと引起せば。詞ヲツト合點ぢや〳〵〳〵。フウム、〳〵何と仰やる。我等に肴を致せか。イヤもう私大無器用者。駕籠舁く事と酒飮むより。外は何にも存ぜぬぢや。シタが何ぞやりたいが。ホンニ此間子供等が。街道筋でうたふ歌。覺えてゐたが。ヤてんぽのかは。やつてのけよかい。おまん股ぐらへ太々神樂が飛込んだ。まだ鈴振つて跳込んだ。ハ、、、、と。地餘念なさ。鬼山苛つてヤイこりや下郎め。詞妄言いはずときつと聞け。格別に其方に賴みたき仔細ありと。地聞いて四斗兵衞起き直り詞私にお前方が賴みたい仔細とは。ヲ、サ其方が命がほしい。エイ。イヤサ其方が身體をくれい。エ、。ヲ、。驚きは尤も〳〵。只今此御方と。主人の密事を談じ合ひ。話し終つて後を見れば。醉臥したる體なれど兩人が不覺の第一。たとへ密事を聞かずとも此儘に捨置いては。我我が後日の過り。是非がないと諦め。命をくれよと地聞く中に。四斗兵衞は猶吃驚。詞樣子聞く程膽がつぶれ。興も酒も。醒め果てました。成程左樣に仰有るからは。定めて譯がござらうけれど。何にも聞いた覺もなし。又私には嬶もあり悴もあり。今年八十三になる母じや人もござります。なんぼ雲助致しても大切なこの命。御免なされて下されと。地哀れを作る空とぼけ。フシ詫びるより外詞なし。地軍治怒つてヤアどこへ〳〵。詞最前住所を尋ねし時。所々の森に寢ると云つた。スリヤコレ汝は知れた宿なし。絕體絕命覺悟せよと。地刀ひらりと拔放せば。わつと飛退き。イヤそれから仰有りませ。私が申す事も。マア聞分けて下さりませ。最前家がないと言うたは。酒の上の出放題。きつと家もござります。ア思へば〳〵此樣な。無法な事に出合ふのも。惡い星が當つたのか。何にもせよ此身の因果。さつぱりと諦めて。命は上げますが。只今も申す通り。今年八十三になる悴や。六つになる嬶にも暇乞。ちよつと歸して下さりませと。地迯出すうしろ迯さじと。肩先かけて一刀切つたか飛んだか古井戸へ。眞逆樣に落込んだり。鬼山すかさず手頃の石片古井戸へ。打込み〳〵熟と見。詞モ

ウかく仕つたら氣遣なし。思の外脆い奴。御互に安心と 地八ッ藤も刀を。フシ鞘に納め。詞存じも寄らぬ下郎にかゝり思はずも時刻延引。これよりは夜道をかけ。國元へ急がんと。地猶も何かを談じ合ひ。互に禮儀兩人は フシ京と東へ別れ行く。地始終の樣子最前より木蔭に窺ふ鹽賣長藏。差足して歩み寄り。井戸へ落ちたる下郎こそ只者ならず訝しく。試みせんと豫てより仕込む杓に穗長の鐺。井戸に立寄り逆落しぐつとつゝ込む手練の手答。透さず拔取る鐺の穗先。ほつくと折れしはさてこそと。躊躇ふうちに井戸よりも。ぬつと出でたる件の駕籠舁。上るや否や發止と打つ。穗先の手裏劍長藏は眞俯向けに倒れ伏す。四斗兵衛は見向もせず。何か心に打頷き。のさり〳〵と懷手 フシ村道さして行過ぐる。地跡に長藏空死の鐺の穗先は手に受止め。むつくと起きて身繕ひ。早や暮れ。渡る空の色。曲者が行く道筋を。遙に見やり見定めて跡を。暮うて。三重へ追うて行く

第六

地所の名さへ醒が井といへど朝夕醉臥して。酒代に諸色諸道具まで オクリ酒屋へ。かき出す駕籠舁あり。名は四斗兵衛が内一ぱい。ふんぞり返る フシ高枕。地側に女房が賃仕事。小遣だけを紡出す。ぶんぶ車も世渡りも。廻り フシかねてぞ見えにける。地四斗兵衛は大欠伸。身中さすつて起上り。詞エヽ耳のはたでぶう〳〵ぶうと。あつたら夢をさましくさつた。目覺しに一杯せう。一走り行て買うて來いと。地奈良漬臭い噯氣しながら。まだ飲みたがる フシいげちな上戸。地女房仕事の手を停め。詞ヲヽたつた今その徳利を飲乾して又かいな。買ひに行こにもう値がござんせぬ。錢が無か汝が襤褸ぶち殺して。買うて來いと 地無理邪も男の權柄。詞サアわしが單衣は惜まねど。その樣に飲ましやんしては。身の爲になるまい。ちつと嗜んだがよいわいな。又男の咽喉締しをるがな。おのれ食は食はいでも。酒が飲まずに居られるものか。小言いはずと買てうせう。行かぬかい。コリヤ賴む。何卒一杯飲ましておくれと。地ハル フシ猫撫聲も飲みたさの。餘りの事に女房は。フシ呆れて詞なかりけり。地折から表をひよか〳〵と通り過ぐるやつこらさ。四斗兵衛見るより飛んで出で。詞申し〳〵可内殿。權平殿申し〳〵と 地呼びかけられて立戻り。詞今呼びかけたはお身か。ハイ私でござります。私だといふそ樣は誰だ。誰ぢやとは外々しい。扨々先日は甚い御馳走に預つて。忝うござります。マア〳〵お入りなされませと。地いはれ

て合點の行かぬ奴　フシ無理に伴ひ内に入れ。詞それから一寸お禮に參らうと存じたれど。貧乏暇なしでお禮さへ延引。女房ども彼方へようお禮申してくれ。此中あなたで結構なお料理を振舞はれ。其上結構な御酒を強ひられ。それは〳〵近年の御馳走。お禮申せ〳〵と　地滅多　フシ無上に悦べど。地根から覺えのない奴。詞イヤこれさそりや何の事だ。俺はお手前に何にも振舞うた覺えないぞ。ハテ扠物覺の惡い。あれ程振舞うて置いて。エヽこりやその振舞返しでもせうかとお辭儀ぢやな。イヤモ御覽じます體なれば。振舞返しとてはえ致さぬが。御酒は一つ上げませうかい又此方の嬶が惡い癖で。人樣に振舞はれて居る事がきつい嫌ひ。嬶が心休めぢや一つ上つて下さりませ。嬶一走り酒買うておぢやらぬかと　地いはれて否とも客の手前。不承々々に女房は。　フシ德利下げて出でて行く。地奴はなほも不思議な面付。詞俺に酒飲ますとはどうやら嬉しい事だんべいが。振舞つたなどとは白癡覺のない事ども。コリヤ酒の奸囮だないかよ。エヽうまい和郎ぢやわいの。何のあり樣に酒一杯振舞はれた事はなけれども。あんまり嬶めが飲まさぬ故。かういふ手段を廻らしたは彼奴に酒買ひにやらうばつかり。ハア、それでよめた。こりや俺を餅のかたではない酒のかたにしたのだな。それ程に飲みたがるお手前も飲助だな。飲助の段か名さへ四斗兵衞。何だ四斗兵衞えらい名だな。これも初は一斗兵衞であつたれど。段々飲上るに付き二斗兵衞と立身し。三斗兵衞と出世し。追付け薦被りまで飲上るといふ心で。今の名は四斗兵衞。何とえらい飲助であらうがの。こりやきつい。一斗兵衞から四斗兵衞までの立身。其位では今の間に。五斗兵衞と名を萬天に上げるであるべい。エあやかり者めと　フシ話のうち。地德利ぶら〳〵女房のおまき。イヤ待兼山の不如歸。鳴く音はほぞん缺德利。マア客人からと差出せば酒はあつても肴があるまい。奴樣の御馳走に。湯奴なりとして上げうとおまきは　フシ勝手へ入りにけり。詞湯奴とは忝い。出來るまで一杯せうかい。エヽこの和郎も近渴。そんならそれからお始めなされエ忝いと　地茶碗引受けどぶ〳〵〳〵。一口二口目口を皺め。詞エヽ酒ぢやないこりや水だ。何ぢや水ぢやと　地茶碗にうつし。詞ほんに水ぢや。コリヤ男をやり仕事にかけをつたな。何と一つ上つたか。この手でさい〳〵こちの人に。騙られた振舞がへしの御馳走。奴樣よう上つて下さんしたと。いはれて月夜に鎌髭奴。詞テモ酷い目にあはしたな。コリヤ湯奴ぢやない水奴だ。エヽあた步

の恐いと呟き フシ呟き立歸る。地引違うて來る男。平樽片手に肴籠。詞申し一寸物が尋ねたうござります。何所ぞ此所らに堺屋の三右衛門樣といふのはござりませぬかと。地聞いて女房が。詞イエ〳〵爰らにそんなお人はござんせぬ。ハア、どこやら此邊ぢやと聞いたが。そんなら外を尋ねて見ませうと。地行く酒樽に目の付く四斗兵衛。詞コレ〳〵待たしやれ。こなた其樽肴どこへ持つて行くのぢや。サア今尋ねる堺屋の三右衛門樣へ。アノその酒をやるのか。よし〳〵。コレその堺屋の三右衛門といふは爰ぢやわいの。エ、そんなら內方でござりますか。爰とも〳〵卽ち三右衛門といふは俺ぢや。これはしたり。左樣ならあなたが聟樣でござりますか。媒人蠟燭屋善兵衛申します。追付け嫁御樣お越しでござります。これは少分ながら聟樣へ嫁御のお土産でござりますと。地樽と肴を差出せば女房吃驚。詞コレ〳〵粗相なそんな事はこつちに覺えは。シイ〳〵。エ、すりやこれが嫁御の持參か。コレハ〳〵御叮嚀な。女夫の中に氣を張らいでもよい事を。祝言の盃は後程。先づ手附に一杯致さうと。取出す茶碗。コレ滅相な。其酒飮んで嫁御とやらが爰へ見えたら。どうせうと思うて。ハテどうせうの斯うせうのと。高が女房に持ちやえいぢやないか。アノわしといふ女房のある上に。ヲ 酒さへ持つてくりや幾人でも女房にする。酒戾はせぬものぢやと。地茶碗についでぐつと一飮み。アレ〳〵嫁御がもう爰へと。いふ間表に フシ風薫る。地二八の花の振の袖。ハルフシ町屋にあらぬ。ぶつ裂き羽織。大小の拵へも利方を好む立派の侍。誰ぞ案內賴みたしと。音なふ聲におまきがむつと。詞門違の嫁御樣。あたようお出なされたと。地呟く女房四斗兵衛は。酒が仲人の俄聟これへ〳〵に フシ打通る。地竝々ならぬ其勿體。詞ヤアお前は兄樣。コレ〳〵私の緣は緣。今日これへ參つたは。四斗兵衛殿へ折入つて賴みたき仔細あつて。嫁と名付けしこの御方は。鎌倉の大將北條家の御息女。賴家公へ緣邊を取結びし所。御若氣とて三浦之助にわりなき戀路。京鎌倉和睦の程と思ひし事。却つて破れの端となり。時姬の首討つて渡せと京都よりの難題。時政公も不義の娘。親子の緣切つたりと鎌倉へも入れられず。御身一つの御難儀は。この片岡が一身に迫り。急の沙汰。先づ御姿を隱し置き其上事をはからんため。魂を見屆けてお預け申す四斗兵衛殿。くれ〳〵賴み存ずると餘儀なき體におまきが悅び。詞親兄の許しもないに我儘な男選み。憎い奴不義者と。

お手討に逢ふとても無理とは思はぬ身の淫奔。地悔みは千萬返らぬ昔。そのお叱りもなう親身のお賴み。詞お氣遣ひ遊ばすなと。申したけれど氣の毒は。酒故心轉々する夫の氣質。コリヤやい〳〵。二言めには酒々と。男を打込む才狂め。魂を見込んでとあるからは。いかにも四斗兵衞が。命にかけてお匿ひ申しませう。イヤ合點が行かぬ。その氣ならよけれども。酒飲ましやんすと忽ち變るお前の心。ハテお匿ひ申すうちは何年でも禁酒禁酒。ハテ匿ひ了せたら。其時褒美に四斗樽四五挺。マアそれ迄は臭もかゞぬ氣。ヲヽ出かさしやんした〳〵。お前さへ其心ならアイ兄様。何時までなりとお匿まひ申しませう。地その代りに夫の身の上。よろしう賴み上げますと。夫婦が詞に片岡悅び。詞妹が緣につれ姫を匿ひくれられうとは。町人ながら賴もしき心底。首尾よく致さば妹諸共。鎌倉へ同道致し拔群の知行取る侍に取持ち致さん。そんならアノこちの人を。侍にして下さんすか。コレ悅ばしやんせ。知行取りにするといな。おつとよし〳〵。知行取りになつたら嬶よ。酒買ひに行くも乘物に乘せてやるぞ。アレまだそんな事ばかり。地夫の出世もお姫様。ようお出遊ばして。下さりましたと追從も。フシ夫思ひと知られたり。地時姫も顏を上げ。不思議の緣で夫婦の衆世話になる身は蜉蝣の。あるかなきかの憂き命。よきにとばかりあと云ひさし。顏さし入るゝ懷の フシ内や涙の淵ならん。地片岡座を立ち夫婦に向ひ。詞兩人に預くる事此上の安堵なし。必ず人に氣取られぬ樣隨分心をつけられよ。イヤモこの四斗兵衞が預るからはゆつくりと。通し駕籠に乘つた樣に思うてござりませ。是は〳〵忝い事によらば引返してお迎に。ハテ御念に及ばぬ御勝手次第 地然らばお暇おさらばと。姫にも禮儀片岡はオクリ元來し。〽道へ。フシ立歸る。地あとに夫婦が氣もいそ〳〵。詞コリヤ嬶よ。きつう競口がようなつて來たわい。コリヤまあちつとお神酒でも上げぬかい。アノたつた今禁酒ぢやというてもうかいの。ほんになその禁酒をとんと忘れた程にのハヽヽ。したが飲みつけた酒飲まずにゐたら。氣が盡きてたまるまい。イヤ俺が氣の盡より。お姫様がア嘸御退屈にござりましよ。ソレお慰に酒の糟なと買うて來て進ぜぬかい。ヲヽ嗜ましやんせ。何のあなたへそんな物。御不自由も暫しの中。地軈てあなたの思召す。戀人樣に逢坂山のさね葛。人に尋ねてついお出でござりましよと フシ諫め申せば。時姫も。詞よしなき戀に絡まれて。我が身ばかりか片岡に。苦勞かけるも自ら故。長地夫

婦の手前耻かしと顔は照り葉におく露の袖にひたせる。有様に。おまきも詞涙ぐみ。フシ暫し應答もなかりけり。地折から來る鹽賣が上下ため付け酒樽を。肩にぶら〳〵足音の。中にもしやとおまきが氣轉誰が見咎めても大事のお身。見苦しけれど奥の間へと。女房に誘はれ。フシしづ〳〵立つて入り給ふ。地表に鹽屋が頓狂聲。詞駕籠舁の四斗兵衛殿とは爰でごんすかと。地ずつと這入つて顔と顔。詞ヲ、こな様が四斗兵衛殿かい。つひに逢うた事も。又近付でも。內儀様は留守でごんすか。ア、嬶は內に居ますが。貴様マアどつからござつた。イヤおりや鹽賣の長藏といふ者でごんすが。ア、鹽商賣も身の廻りに張込んで。あふこつちやごんせぬわいの。それで資本のいらぬ駕籠舁がしたさに。弟子になりに來やんしたマア近付のため少分ながらこの一樽。

寢酒に飲んで下されと。地酒樽なほせばにつこり笑ひ顔。詞ハ、、、こりや忝い。酒さへ貰へば何處からでもようござつた。したが駕籠舁の弟子入りに上下とは。ア、裸で茶の湯に行く裏ぢやの。そしてこりやきつい氣の張りやうぢやが。是もまた水ぢやないかや。ハテそんなぢやない。小半酒や八文酒飲みつけた口には。ちつと重うて飲みにくからう。並酒でもないこりや鎌倉山。ヤ何と。サア鎌倉山といふ。大切な銘酒ぢや程に。へ、味はうて飲んでもらひましよかい。ム、ムン飲んましよ。如何にしても云ひ様が面白い。又この四斗兵衛が飲むからは。鎌倉山でござらうが。富士の山でござらうが。たとへ日本國でもコレ此茶碗に引受けて。いでと思はゞぐつと一飲み。マア試に。一杯致そと地樽の。口から。どぶどぶ〳〵。お辭儀なしに下されると フシ

引受け〳〵續け飲み。詞こりや見事。さらばお肴仕らうと。地藁苞解いて黄金作。詞太刀魚の作物粗末ながらと差出せば。ム、こりやお肴が肉過ぎて。我等ちつと食べにくい。この肴はマアお預け申さうかい。イヤお辭儀には及ばぬ。太刀魚よりはコレ此鎗の鋒先。嚙みこなした齒節の丈夫。適れ四海の軍師。サ醉狂人と見極めてのお肴。受けてすつぱり切つてもらひたい。ム、切れとは何を。時姫の首。ヤ。たつた今匿はれた時姫。その首が貰ひたい。がよもや貴樣え切るまいの。ソリヤモ何より心易い事。切つてやろ〳〵。何の俺が首ぢやなし。人の首の一つや二つ。望なら目の前でと。地又引受けて フシこぶ〳〵〳〵。詞然らば肴も。ハテ志ぢや戴こかい。時姫の首。それも合點切つてやろと。地初の心酒故に。打つて變つた詞詰。フシひと癖者と知られたり。地始

終一間に聞き居る女房走り出で。詞コレ四斗兵衞殿。兄様に詞番うたこなたの出世。知行取になる事も酒で忘るゝたわいなし。いかに酒に醉うたとて。お姫様の首切ろとはあんまりな人非人。コレそこな人。酒の醉を相手にせずと。とつとゝ去んでもらひましよと地聲震はして腹立つ女房。夫は酒に廻らぬ舌つき。地ヤイソソ、そげめ。知行々々とぬかすが何の五萬石や十萬石。此酒に代へらるゝものかい。それで姫の首討つてやるが。ナ、、何とした。ム、すりやどう有つてもお姫様を切る氣ぢやの。ヲ、切る。それ聞いたらもう爰には置きまされぬ。わしが供して兄様へ手渡しすると。地一間へ駈入りかひ〲しく。姫の手を取り立出づる。地盡きせぬ緣か見合す顏。ナウ懐しや戀しやと スヱ立寄る。姫を抜打ちに首は前にぞ落ちにけり。ハア、はつとおまきが氣も半亂。鹽賣突立ちヲ、。適れ四斗兵衞出かされたりと云捨てゝ フシこそ驅りゆく。地あとに女房が聲をあげ扨も〲痛はしや。お命を助けうため心を砕いて兄様が。こゝ迄預けに見えたもの。其時つれなう預らずばかういふ事は出來まいもの。佛頼んで地獄の牛頭馬頭。もし今にでも兄様がお迎に見えたらば。わしや言譯がないわいの。いつそ殺して〲と。夫に取付きしがみ付き恨み歎けば。ころりとこけ フシ前後も知らぬ高鼾。地かくとも知らず片岡が禮儀の上下折目を正し。御迎の乘物吊らせ悠々と戸口に佇み。詞ヤア家來共。云付置きし物この家へ持參し。案内せよと詞につれ。地衣服大小白臺に。輝く兜は龍頭あたり フシ狭しと並べ置き。地片岡しづ〲内に入り。詞誠に雷の落ちくる急難。事故なく相濟みし故。早速姫の御迎ひに參上せり。是と申すも四斗兵衞殿。御匿ひ下されし故。助かるまじき姫の命助かりし命の親。直に鎌倉へ同道致し時政公へ御目見え。契約の通り只今より武士に取持つ印の音物。地御受納あつて姫諸共。御出立下さらば此上の悦びなしと。フシ慇懃に述べければ。地女房あるにもあられぬ思ひ。兄が脇差抜き取つて自害と見ゆるを片岡押へて。ハテ心得ぬこの有様と。双物挘取り眼を配り。ヤこりやこれ時姫君の御死骸。何者が手に掛けし。ア、しなしたり〲と。地齒を食ひしばる怒りの面色。詞妹が振舞といひ。扨は四斗兵衞めが仕業よな。汝下郎め主君の敵。一分試と切付くる。地心得むつくと起上れば。いらつて切込む刀は稻妻。こなたの早速は飛鳥の翔。勢ひ雲に龍頭の。兜を片手に引摑み ハズミ 一間を指して驅込んだり。詞ヤア卑怯者逃ぐるとて逃さうかと。地續いて驅行く向う

に妹。詞ヲヽお腹立は道理至極酒故亂る心を知り。匿うたは私が科。夫よりマア先へ私を殺して下さんせ。さうない中は奥へはやらぬ。ヤア邪魔ひろぐなと引摺りのけ。地驅けゆく鐺に又取付き。やらじ放せとフシ爭ふ最中。詞表の方に大音聲。江州醒が井の住人。和田兵衞秀盛殿。御用意よくば坂本の城へ御入城。三浦之助義村御迎ひに伺候せりと。地呼はる聲は以前の鬻賣。初には似ぬ勇士の扮裝。せきにせいたる片岡も様子。フシ如何と躊躇ひ居る。地女房不思議立向ひ。詞坂本の城へ誘はんとは。いつ味方させ何時の契約。殊には隱す夫の本名。和田兵衞秀盛とは。ホヽ陳平韓信が腸を探り。市人に姿をやつし隱されても。美名は四海にフシ芳ばしく。地宇治の方の仰せを受け。何卒して味方に招き。雌の劍を投けんと。姿をやつし徘徊すれども。詞素より面體見知らぬ某。如何と心を碎く中。中仙道にて不思議に出合ひ。我が姓名を記したる。手鎗を以て試せし手練。和田兵衞ならで外に及ばぬ稀代の手の内。地何卒味方に賴まんと思へどたよる手段なく。如何と案じる時も時。詞時姫君を匿はれしこれ幸ひとこの家に來り。首討つて渡されよと渡せし劍が卽ち雌の劍。我が心を推量ありしか。事故なく受けられしは。味方に加はる印の割印。地此上は片時も早く。打立ち給へ御供せんとフシ高らかに。呼はつたり。地片岡聞くより猶もせき立ち。詞ヤア京鎌倉と引別るれば。我は鎌倉時政方。京方の奴輩一人も生け置かれず。其上眼前姫の仇。地何所までもと驅けゆく一間。隔の戸障子踏み開けば。内に四斗兵衞悠々と。フシ褞袍に代る肌著の小具足。唐縫したる陣羽織に十王頭の小手脛當。太刀と兜を兩の手に。床几にかゝる有様は實に。百萬騎の軍帥とフシ骨柄ゆゝしく見えにけり。和田兵衞兜を座前に直しいかに片岡。時姫の身に代り殺されし其娘は。定めて貴殿の息女ならん痛はしさよと悔みの詞。詞ムヽすりや某が娘と知つて。ホヽヽ敵の氣を見て士卒を使ふこの和田兵衞。況んや一人の女童。如何程に伴ればとて。親子の親しみ上下の人相。一目にも見違ゆべきか。賴家公に緣邊は切れたれども。不義の科ある時姫君。それ故娘を身代りとし時姫の心の儘。地三浦之助に添せんとフシ心を碎く片岡殿。その忠義を感じ入り。詞不便ながら殺害致せば。時姫といふ名は消えて。今は憚る所なし。御迎の乘物に。忍びまします時姫君。地早や〳〵是へと和田兵衞が。詞に片岡陳じもならず表の方。乘物あくれば時姫君こけつ轉びつ住の江が。死骸に取付き縋付き親の許さぬ

戀路故。かねて亡き身と思ひしに。自らが命に代つて死んでたもつた佐の江。嬉しいとも忝いともいかで詞のあるべきぞ。只恨めしいは造酒頭。かくなる事を露程もなど知らしてはくれざりし。知らばやみ／＼此人を歸すまいもの味氣なや。と。恨みかこちの涙川フシ袖に淵なすばかり。詞ヤア佐の江とは紛らはし。其死骸は時姫君さいふ汝が我が娘。ナ御合點が參つたか。親に優つた娘が忠義。犬死さして下さるなと。地目をしばたゝく片岡が。心を察して妹は三浦之助に打向ひ。時政公の御息女といへば添はれぬ敵味方。兄樣の娘御に何の障りも味方同士。申し御了簡はといふを打消し。詞ヤア味方とは汚らはし。鎌倉方へ裏返つたる不忠侍。その娘に何の緣組。某に心を寄せし時姫君。首討たれよと望みしも。敵の緣に引かれぬ潔白。是非時姫を娘とし此三浦へ送りたくば。聟引出には汝が首。覺悟せよやと詰め寄すれば。ヤレ早まられな三浦之助。地命を捨てゝ名を揚ぐるは誰しも武士の好む所。名を捨てゝ忠義を立る造酒頭。其證據こそ此兜。これこそ將軍宣下の御寶。たとへ賴家軍に打勝ち。四海殘らず押領あつても。此兜なき時は將軍宣下思ひも寄らず。詞そこを計つて片岡が。鎌倉方へ裏返り。不忠の名を取られし故。念なう兜を奪取り。某に渡されしは。名を捨てゝ忠義を立つる古今の忠臣。地此兜手に入るからは。これより坂本の城へ馳向ひ。詞鎌倉勢と分目の軍。地たとへ時政。何萬騎にて向ふとも宇治勢田に壘を構へ。變に應じ機に乘じ。或は顯れ或は隱れ。千變萬化に寄手を惱まし。大將に舌卷かせんはこの。和田兵衞が方寸にあり心安かれ方々と坐ながら。謀るフシ軍師の軍配。詞ホヽ驚き入つたる秀盛の明智。かゝる軍師味方にあらば。軍の勝利疑ひなし。地我はあつても益なき臣。今こそ三浦の望に任せ聟引出進上せんと。いふより早く差添腹に突立つれば。ナウ悲しやと姫妹。縋り歎くを押退け。突退け。詞京方には誰々と。指折の數にも入りし某が。暫くにても鎌倉へ。裏返つたるその惡名何を。以てか雪ぐべき。味方の內にも追從表裏の大江の入道。某再び城に歸らば。豫々より鎌倉へ。內通したる事どもの。顯はれん事身の大事と。如何なる非道謀計を以て。味方の心を迷はさば。區々なる人心。我疑へば人疑ふ。人氣和せざるその時は。軍の勝利思ひも寄らず。そこを思うてこの切腹。死後にても。片岡は。地返り忠せし不忠の臣と。末代に名は汚すとも。一心五臟に忘れぬ忠義。何卒名ある軍師を。御味方させんものと。詞心當どは和田兵衞殿。妹が連

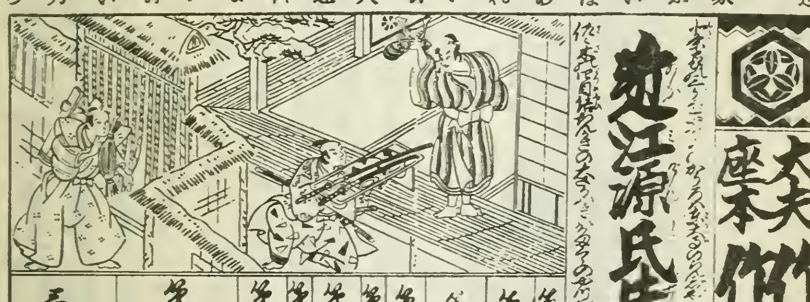
添ふと聞きし幸ひ住所を尋ね。我が志を立てん事。此人ならでと娘を誘ひ。存念を立てたる菜。妹悔むな。時姫君もお歎きなく。御身に代る娘めが。志を立てゝたべ。地不便やお主のお爲と聞き。悦び事は悦びしが。とても事に男の子に生れたら。戰場の一大事。御馬前の御用に立つて。名をあげる討死したら。父上迄がお嬉しかろが。女子の身の腑甲斐なさ。父様。恕へて下されと。いうた時は出かしたと地褒むる事さへ胸に迫り。詞一言一句も出なんだに。親に優つて先に立ち。地親は後れて歩む足。此家へ來る道々の。堅牢地神の頭には。さぞ片岡が踏む足が。大磐石と應へやせん。重き忠義に代へたる娘。よう死んでくれたな出かしたと。鍛ひに鍛ひし忠義の身體も。子故の鞴に吹立てられ。咽ぶ涙は熱湯の湯玉。スヱテ迸る。如くなり。地妹は正體泣沈みよくよく薄い兄弟中。たつた一人の姪子にも名乘合ひもする事か。果敢ない別れ悲しやと歎けば共に時姫君。詞とても添はれぬ敵同士。疾うからわしが死んだらば斯うした憂目は見まいもの。どうぞ添ひたい〱と未練な地心の迷ひから。親子の衆のこの最期。コレ勘忍してたもいのう。思ひ切らうと思うても儘に。ならぬが戀路の因果。詞つれない命死後れ。地面目ない耻かしい。叶はぬ戀を諦めて此身の。果は尼法師それがせめての言譯ぞやと。身を裏菊の兩袖に保ちかねたる露涙。詞親子の爲の香花ぞと。地兜を時の香爐に。本フシ薫らす。煙蘭奢待。詞東大寺の寶物なれば。佛縁に誘はれ地未來の佛果と合す手に又も。涙のフシ數珠の玉こは。有難き御手向娘も我も。成佛得脱フシ只此上は詞三浦之助へ。媒介頼む和田兵衛殿。地ヲ、其儀はちつとも氣遣ひあるなと。兜を取つて三浦に向ひ。詞聟引出と望みし首。此兜ゆゑ命を捨てし片岡なれば。一心五體は兜に殘る。これを引出に姫の事。氣强きばかり。武士とは云はぬコリヤ地情も武士の道具ぞと。渡せば取つて三浦之助。此上何か辭退せん。さはいへ勝利を得る迄はお預け申すおまき殿。詞家を出る時妻子を忘れ。戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常。地もしも運盡き頼家公御大事とならん時これ。この龍頭の兜を著し。君に代つて討死せん。名香薫る首取りしといふ沙汰あらばこの三浦が。討死せしと知り給へと詞は末に。あふ坂や關の清水と湧きかへる。涙ながらの暇乞離れ。がたなき初戀にほだしは。見せぬ若武者を。伴ひ出づる軍の首途。羨ましげに伸上り。見送る手負を介抱し共に。見送る姫女房。戀と無常を見捨てゆく武士の。道こそ。三重へ是非もなき

第七

地名にし近江の景色も今。戰場と名古の浦。源の頼家公坂本に居城し給ひ。家々の旗指物比叡颪に飜へり。霜に輝く弓鐵砲。陣所の篝火天を灼し要害。フシ嚴しく守り居る。地御城預り佐々木四郎左衛門高綱。城中隈々つまり／＼。寒夜を厭はぬ夜廻に。心を配つて立歸れば。地物見の軍侍新開次郎御前に畏り。詞某只今遠見致せしに。寄手は比良に陣を取り明日敵の大將は。御舍兄佐々木三郎兵衛盛綱殿。未明に寄來る體と見え。地數萬の軍兵弓弦をしめし馬に。鞍置き鐵砲火矢の用意最中。御油斷あるなとフシ述べければ。詞ヲヽ出かした／＼。兄盛綱の軍立心憎し。さあらんと某も。豫て手當を仕置きたり。猶又汝諸軍に其旨觸れ知らせよと追立やり。地其身は軍慮に他念なく暫時の暇も机。眞草行の堅からぬ。愛に愛持つフシ間の襖。地物靜かに押開き。妻の篝火一子小四郎の手を引き立出で。詞これは／＼まだお休みもなされず。夜晝合戰の御工夫。只今聞けば明日より矢合せ。寄せ來る敵は兄御盛綱樣。他人より晴の合戰。此子も今年十三なれば。地今夜鎧の着初させ。父上の御供して。初陣に手柄がしたいとたつての願ひ。お聞届け遊ばして小四郎の初陣お許しなされ下されかしとスヱ母の。願に小四郎も。詞明日父上の。戰場への御供を。御赦免あれと稚氣に。思詰めたる顔色を。父も頷き尤も尤も詞主君へ忠義に魂を凝し。我が子の年をはつたと失念。流石は高綱が子程あり出かす／＼。成程そちが願に任せ。明日の軍には我に引添ひ。初陣の手柄を見せよ。サア嬉しや父御の得心。其方も悦びや。地鎧の著初に此母が手づから縫ひ仕立てた鎧下。裄丈藍の下染に勝つ色見する紅梅縅。母が手を添ゆるのが陰陽和合で著初の故實。此上は作法の通り著せてやつて下さんせと。夫婦立寄り壽をオクリ祝うて。鶴の小手臑當。總角取つて打著すれば。父は上帶フシしつかと締め。詞遖れ武者振。鎧の著ぶり。父御にとんと生寫しと。地母の悦び高綱も。我が子を見上げ見下して。悦ぶ眼に涙を浮め。詞情なきものは武士の身の上。御主人の御爲に。明日討死も計られず。命は義によつて輕し。汝とても其通り。伯父甥兄弟引分れ骨肉の戰ひなれば。敵も味方も晴れ勝負。さり乍ら討死するを忠義とは云はれまじ。千變萬化に軍慮を廻らし。身を全うして始終の勝こそ武士の肝要。我が采配に付從ひ。未練の働き致すなと。地父の詞に小四郎も。鎧づきしてゆゝしげに。勇み進みし武者振は。末

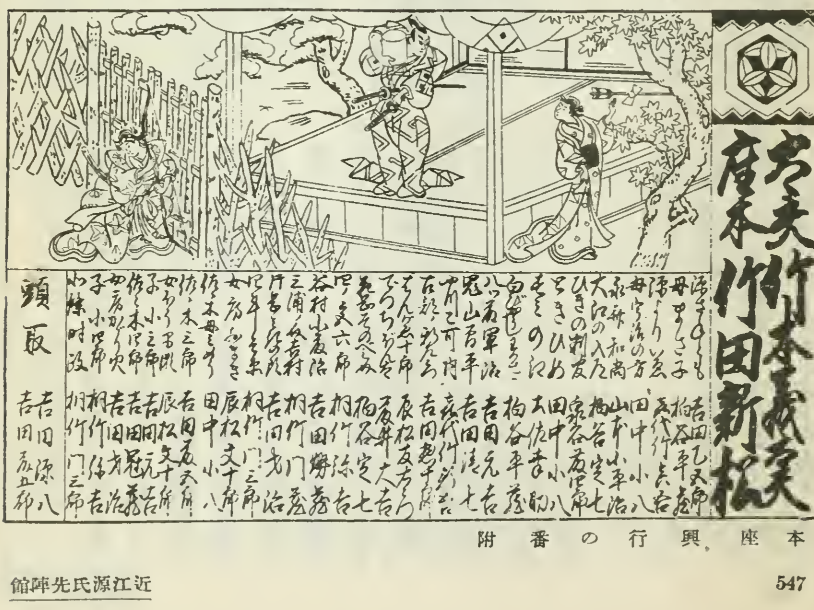
頼もしく見えにけり。地母は悦び軍配にて煽立て〳〵。詞ヲヽ出かしやつた。只今の父様の教訓。忘りやるな。著初の儀式は奥の間で。父様の盃頂戴しや。成程〳〵。頼家公にも申上げ初陣の門出を祝はん。地篝火來れと打連れて オクリ 一間の。へ中へ ハシ 入りにける。地フシ夜もはや更けて深々と。音は湖水の浪ならぬ。敵か味方か白妙の雪にきらめく陣羽織。武者頭巾に目ばかり出し。後先見廻はし城門を。フシ忍びやかに打敲けば。地豫てぬからぬ佐々木が下知。門番櫓に駈上り透し窺ふ星月夜。喚鐘ちやんと打掛に押取刀篝火が。フシ城門近く走り出で。地注進の者か何者なるぞ。さん候供をも連れず只一人。敵の忍びか内通か何にもせよ名を名乗られよ。何と〳〵と尋ぬる聲。アア騒がしし音高し。斯くいふ我はこの城中の主。佐々木高綱が兄三郎兵衛盛綱。

地弟が顔見たさ竊かにこれ迄來りしと。案内の趣取次に。篝火不審晴れやらず。詞一家は内證明日は互に劍を振合ふ敵の大將。三郎兵衛盛綱殿いかなる術も圖られず。内へは得こそ通すまじ。たつてとあらば用捨はならず。ソレ何れも。防矢の用意。地用意といふ折から奥の間より早使。詞高綱様の仰には。兄盛綱様久々の御入り。門を開いて御通しあれ。對面なされんとの御事と。地聞いて猶しも不審ながら。夫の深い思案こそありつらめ。此上は門を開き。詞御通りなされと申しませいと。地禮儀の詞打掛に小太刀隱してしづ〳〵と。油斷あら



明和六年十二月竹

木の門の門。くわつた犇めく城門を。開けば盛綱フシのつし〳〵。地通る客ぶり出迎ふ氣配り。互に見合す四つ目結。坐するも針の青疊。上ずんべりの會釋して。詞コレハ〳〵珍らしい盛綱様。久しうお目にかゝらねど。何方様にもお揃ひ遊ばし。御健勝の御様子。陰ながら承つて。夫を始め妾が悦び。イヤもうそれは相互。今日も指折つて數ふれば。弟に別れて今年で丁度十三年。其節一子も當歳なりしが。定めて成人したであろ。此方にも小三郎といふ同年の悴。見かはすばかりの成人。先だつての合戰には國に殘しおきたれど。此度は母も子も。是非に同道してくれと親子の願ひ。久々一家の對面せねば。餘り〳〵懷しさに參つた。小四郎が成人顔。早く見たい。一目逢はしておくりやれと地世に睦じき盛綱の。詞は二心もあるまいか。どうかかうかと胸は燋る篝火か。詞成程あなたの仰やる通り。太平の御代なれば。小四郎も伯父御様に。お引合せ申して何角差置きお盃を。頂戴致すが順道なれど。サア儘にならぬは敵同士。どうで明日に初陣に。父御に引添ひ出ますれば。御對面は戰場にて。悴小四郎が小腕の拳。矢一筋射かけませう。それを一家の盃と。地思召して下さりませと。否とは云はさぬ尤もごかし。盛綱返す詞さへ。鴛鴦の間の襖押開き。詞四郎左衞門高綱。それへ參つて對面を仕らうと。地立出づるその形軍の出立引替へて。兄弟因の長羽織遙か。フシ下つて座に直り。詞一別以來御意得ねど。



本座の興行番附

兄者人にも御健勝。永々母の御介抱身に餘つて大慶。先だつては由なき詞の論によつて。兄弟の中不和となり國を立退き。これまで疎遠に年月を送りし失禮。平く御免下さるべしと。親兄の禮こまやかに。スヱ手をつき疊にひれ伏せば。地盛綱も居直つて。詞ホヽ音信不通は相互。今日來るは久々にて對面が致したさ。又其外に折入つて。頼みたき仔細あつておして推參。これは／＼兄者人。改つたるお詞。身分相應な御用ならば。聞かうぢやまで。先づ以て忝し。頼みたいは別儀でない。今宵密かに陣屋を抜出で。只一人來た仔細は。某今日より心を改め。頼家公へ降參に參つた。何卒御前へ取次がして貰ひたい。斯様にいへば盛綱。卑怯者と思はうがさうでない。明日の合戰は。何れが勝つとも定まらぬ互角の合戰。旗色惡さに降參する三郎ならねど。地つく／＼思へば兄弟弓を引合ふも。武士の習ひとは云ひながら。昔の爲義義朝の保元の戰ひ。正しく天の道に背けば。平治の亂に義朝は長田に討たれ源家を潰し。永く武道の惡名を殘す。いづれが討ち討たれても。父尊靈の魂魄。悲しみはいかばかり。詞兄弟が不孝の罪。天より高く。滄海よりなほ深し。それを思へば。何と刄が合されう。地今日只今心付き。恥を捨て。兜を脱ぎ。降參に來た此盛綱。骨肉同胞の誼には。頼家公へ御執成。頼入る弟と手をつき。フシ頭を下げにける。

地物をも云はず高綱。ずんど立つて入らんとす。詞これさ弟。聞届けておくりやるか。返答如何にと引留むれば。地立てたる重籐押取つて。りう／＼はつしと擲り打ち。こは何事と驚く妻。本筈しつかと先づ待て高綱。詞現在の兄を打擲するは。何故の立腹と。地云はせも立てずはつたと睨み。詞兄とは推參慮外千萬。凡そ弓取の操はな。善にもせよ惡にもせよ。一度頼まれたる詞を變ぜず。危きを見て命を捨て。二君に仕へぬを道とする事。犬打つ童まで知る所。佐々木高綱が頭を踏まへし三郎盛綱。一旦鎌倉に味方しながら。今更旗色の惡しきを感じて。生面下げて降參とは。よつく腰抜の犬侍。兄弟の緣切つた。それとも御邊誠高綱が兄ならば。その腐つた根性を改め。いよ／＼敵味方となつて。戰場にて四郎左衞門高綱が。首取つて見せうとおいやれ。それこそ誠の兄じや人。有難く存じ奉らん。いつの間にその様な。臆病神は憑きたるぞ。エヽ情なや口惜しやと。地或は勵まし。或は敬ひ。怒の眼にはら／＼涙。ヲヽ尤も至極。盛綱も返す詞はなけれども。詞御邊は一途に忠ばかり。孝の道に心付かず。此頃我が陣中へ慕ひ來る母微妙。御

邊がためにも親ならずや。どちらが討ち討たるとも。お年寄られし母人の。御歎きを思遣り。地生きるとも死するとも。詞兄弟一所にせん爲に。孝行の降參。聞分けて是非お取次。弟嫁も執成を。頼む地頼むの眞實も夫の心はかりかね。フシ何と挨拶口ごもる。詞ヤア恥を恥とも思はぬ人畜。顔見るも穢らはしい。城内には暫時も叶はぬ。早や出て行きやれと手を取つて。地引出す義心の誠には。咎めん方もあら氣の高綱。詞あかの他人の卑怯者。ぼひ捲つて門を固めよ。無益の事に陣立の。支度延引隙惜しや。地篝火來れと フシ立つて入る。地兄はすご／＼計略の裏搔く矢先に返し矢も思案とり／＼。フシ寨の馬場先。窺ひ寄つたる侍は古郡新左衛門。詞盛綱殿か。城内の首尾何と何と。イヤもう弟高綱が義心は鐵石。某も北條殿の御頼み。何卒高綱を鎌倉へ味方させんと。よそながら心底を探り見れども。いかな／＼二君に仕へる所存のない事。しつかりと錠が下りました。とてもお手に入らぬ高綱。此上暫時も猶豫ならず。短兵急に取圍んで。城を落すが肝要肝要。地早や明方も程近し大將へ御注進。げに尤もいさござれと フシ逸足出して行く跡に。地高綱しづ／＼動ぎ出で。詞時政に頼まれて我を鎌倉の味方につけんと。あさとき兄が偽り表裏。計略を仕損じたれば時を移さず寄せ來らん。ヤア／＼陣所の諸軍ども鐵砲火矢の用意せよと。地撥押取つて陣太鼓。コハリ亂聲に打ち立つれば東の。山に茜さす白旗。赤旗鬨の聲早や寄せ來る。三重へ朝嵐。地待設けたる坂本勢。砦櫓の矢間より。敵を寄せじと差詰め。引詰め射かくる矢先は雨霰。射竦められて寄手の軍兵。攻めあぐんでぞ フシ見えたる所に。地城の大木戸押開き。花やかなる若武者一騎。駒に鞭を打立て打立て。手綱搔繰り乘出し。詞ヤア臆したる鎌倉勢。我討取つて手柄にせよと。地鞍笠に突立上り。詞ノリ我こそ佐々木四郎左衛門高綱が嫡子小四郎高重。地今日が初陣と名乘りかけ／＼。東西に驅廻れば。好き敵なり討止めんと。數多の軍兵ばら／＼と。押取卷く。櫓より母篝火わが子の初陣勝負は如何と。フシ見れば平場の戰ひに。地多勢の中に取込められ。父に學びし手練の太刀打。前後左右より突懸くる。琴柱熊手十文字。切拂ひ眞甲縱割手を碎き。切立てられて軍兵ども立つ足もなく逃げ散れば。櫓より見る母親は。嬉しさ フシ足も千鳥泣き。地ハルフシ濱邊の方より年配恰好同じ毛の。駒に跨り乘出し。詞目覺しき小四郎殿の働き驚き入る。某はそなたの伯父。佐々木三郎兵衛盛綱が一子小三郎盛清。地互に初陣從兄弟同士の

晴勝負と。兩人馬を駈寄せ。〱太刀拔きはなし。片手綱。互に覺えの大極無極の太刀捌き。手を盡してぞ戰へば。左手の山の尾先より。小三郎が父佐々木盛綱。悴が初陣勝負は如何にと。瞰下す遠眼鏡。母は櫓に目も放さず膽を冷する子と子の勝負。そこを付け込め小三郎と フシ傍なる人にいふ如く。地父があせれば篝火は。それ小四郎打太刀が鈍つて見える。そこを〱と力む父親あせる母。互に勝負もつかざれば。寄れ組まん尤もと馬を乘寄せむずと組み。えいや〱と揉み合ひしが。鐙蹴放し組みながら兩馬が間にどうど落ち。上になり下になり。ころ〱 フシ轉び打つたりしが。地小三郎運や强かりけん。小四郎を取つて引伏せ。上帶解いて高手小手。折重つて大音上げ。詞ノリ佐々木の小四郎高重を初陣の手始め生捕つたりと呼はれば。地寄手はどつと褒むる聲。櫓の上に篝火がわつと泣く聲。勝鬨は谷に。響きて。三重へ騷しき

第八

本フシその源は近江路の比叡山。おろし隔てられ。スヱテ便り堅田の雁絶えて。フシ武士の。義は石山や月の弓張矢叫びの。矢橋の。歸帆陣幕も。ひらめく比良の陣館。小三郎が初陣の手柄始めと父の悦び。妻の早瀨老母の微妙。軍の安否聞く迄は フシ心許さぬ持刀。地腰元どもも鉢卷しめ追々告げる高名噂。詞目出度い目出度い和子樣が今日の手柄の一番帳。同じ初陣同じ年の小四郎を生捕り給ふは。地大の男を仕止めたより。遙かの譽と フシ口々側から。地早瀨が嬉しさ。詞申しお聞きなされたか。ほんそ孫の小三郎。これからは猶祖母樣の甘やかしが思ひやらるゝ。さりながらひよんな事は。其手柄の相手が他人なればよけれど。やつぱりお前の孫の小四郎。地嬉しいと悲しいと片身がはりのお心を。思遣つてといふを打消し。詞嫁女そりや祖母への當言か。尤も孫の名はあれど。不所存な悴佐々木高綱。音信不通の中に出來た小四郎とやら。つひに顏見た事もなし。よしは不便に思へばとて。から敵味方と別れた上。我も源藏義秀といふ弓取を夫に持ち。盛綱を生んだ母。地涙かけてよいものか。そんな事云出しても下さるな。詞シテ兵衞盛綱孫の小三郎まだ歸館召されぬか。ハイお二人ながらお具足をお上下に召更へられ。道より直に石山の御陣所へ御出仕遊ばしたとの注進。地定めてきつい御褒美と フシさゞめき渡る程もなく。地立歸る佐々木兵衞。小三郎盛淸諸人の尊敬身の面目。上下衣服も花やかに自然と威を持つ其跡に。無慙やな小四郎は高手に縮

むる縛め繩。雜兵に取卷かれ。羽交叶はぬしよげ鳥の 地 顏見始めの孫かとも。いふにいはれず面ざしの。別れし我が子高綱に。似たと思へば不便さを。嫁の手前と紛らせど胸つぼらしう姿形。見まいと思へば目にかゝる スエテ 血筋の。因果ぞせん方なき。兵衛盛綱謹んで。詞 悴小三郎初陣の手始め。これなる繩付生捕りし事誰々よりも目指す大敵。佐々木四郎左衛門が悴俘囚とせしは味方の强味。拔群の高名と時政御感斜ならず。地 御悅びの盃を下され。手づから感狀を下し給はる。詞 御前に竝居る諸大名。凡そ子を持つ程の人羨まぬ者もなく。子息の武勇に肖る爲。そこへも盃こゝへも頂戴ともてはやさるる親の面目。それ故退出も遲なはる。首尾殘る方もなし 地 お悅び下されと。語る中より早瀨が浮き〲。詞 何と御覽じましたか。可愛さうに軍の供したがるものを。足手纒ひぢや留守して居れと叱付けて。鎌倉に殘してお出なされたれど。地 今度の軍に外れたら。生きては居ぬとせがみにせがまれせう事なしいつそ祖母樣三人づれ。跡追うて來た時にも。詞 さん〲に叱られたが。今日の手柄を見た時は。よう連れて來たと私が自慢。出かしやつた〲。地 生んだ母まで俄に肩が聳つて來た。和子樣お手柄〲と賞めそやしたる囂しさ。微妙も共に出かしたと。勇んで見ても。何所やらに濟ぬは胸の。潮境わけ兼ぬるこそ フシ 道理なれ 地 小三郎手をつかへ。詞 わけて君の御諚には囚人の小四郎。首討つ事必ず無用。何時迄も助け置くこそ味方の計略。地 縛めは其儘にて。隨分大切に仕れとの御事なり。詞 ナウ小四郎殿こなたとは從兄弟同士。初陣の軍に仕負け。嘸無念にござらうと。地 言はれて小四郎顏振上げ。詞 父樣の豫ての敎。勝つも負けるも軍の習ひ。まさかの時に迯げるのが侍の恥辱ぢやげな。生捕られても恥とは思はぬ。早や首切つて下されと。地 目を瞑いだる立派さは。フシ 誠に父が子なりけり。地 物見の侍罷出で。詞 和田兵衛秀盛と名乘り。盛綱公に見參致さんと。供廻り僅か一兩人にて通り候と 地 訴ふれば。詞 ハテ心得ぬ。敵方の侍大將輕々しく來るは一物。ソレ四人奥に取迯すな皆退けと追立て遣り。地 騷がず座席取片付け。フシ 衣紋繕ひ出迎ふ。地 甲冑の姿引替へて長上下踏みしだき。伊達拵の大小もさしも無骨の荒くれ男。目禮式禮悠々と。上座に フシ どつかと押し直り。詞 扨々此度の合戰。佐々木三浦かく申す和田兵衛。火水の勝負を決せんと。牙を嚙んで相待つ所に。鎌倉の悠長武士。一日寄せては二日見合せ。睨合うて日を送る中。此方はほつと退屈。それ故

今日は具足も取置き太平の姿。坂本の城より使者に参つた。ハア〳〵これは〳〵名にし負ふ和田兵衛殿。よく〳〵大切の儀なればこそ。お使者の趣逐一に仰聞けられと有りければ。イヤ別儀でござらぬ。今朝高綱構へにて。其許の手へ生捕られし小四郎高重。ちと此方に入用なれば。只今お返し下されとの使なりと。フシ事も無げに述べければ。詞ハヽヽヽこれは存じの外の御事。何ぞや一人の童づれに。侍大将の自身馬を向けられしは珍説々々。あの小悴一人がなければ。合戦も得なされぬか。何故にさ程の懇望事をかしう存ずると。地嘲笑へばげに尤も。詞併し此方に不審なるは。その童の小四郎を貴殿の子息が生捕りしを。一城をも乗取りしが如く悦び勇み。鎌倉方の勝軍の基なりと。箙を敲き勝鬨作つて。引かれしはこれ如何に。さ程鎌倉方に懇望せらるゝ小四郎故。此方にも惜しく存じ。是非所望に参つたり。その代りに少分ながらこの和田兵衛が髭首進上申す。お望ならば手柄次第に。随分取つて御覧なされと地むずと坐したる。フシ不敵の顔色。地盛綱打笑み。詞扨々弟ながら高綱は。大功の勇士と思ひしに。悴に迷ふ未練の性根。そこを察して朋輩の誼み。命を救ふ情のお使者。あれしきの小児いか様共申したけれど。生捕の帳に記した上は。時政公より預りの囚人。盛綱私には渡されず。ならば踏込奪取つて歸られよ。其座は一寸も立たせじと反打つて詰めかくれば。アヽおせきなされな。貴殿と拙者只今こゝで刺違へては。敵味方によき大將二人を失ひどちらも兩損。よし〳〵御邊の儘にならぬ四人。此上は石山の陣に參り。時政殿に直談して。自他とも所望致して歸らん。盛綱地さらばと立上り。フシ廣庭におり立てば。詞ヲヽそりや兎も角も勝手次第。さあらば石山へ御案内申させん。ヤア〳〵誰かあると詞の下。地小具足固めし覺えの力者。フシばら〳〵と取卷いたり。詞ハテ仰山な案内者。敵の陣中へのろ〳〵と一人參る和田兵衛。不知案内の無骨者萬事宜しう。氣遣あるな。ソレ。必ず大將の御座近く。ナ。お引合せ申すならば。大事の珍客。随分御酒を合點か。イヤ御酒とは忝い。我等別して大好物。御馳走ならば湖も潫乾してお目に懸けう。お肴の飛道具。槍薙刀の串肴何本なりとも賞玩致す。盛綱殿おさらば。和田殿御苦勞。案内地大儀と長袴。虎を放して。やる勇氣。火焰の中へ行く大膽。心の具足。鐵石のオクリ石山へさして出て行く。地盛綱は只茫然と。スヱテ軍慮を帷幕の打傾き。思案の扇からりと捨て。詞母人それにおはするかと。地音なう聲に立出づる。陣屋

の隈々後前見廻し。母の膝にすり寄つて。詞親の役目を子が勤むるは順なれども。御老體の母人に。御苦勞お頼み申さねば叶はぬ事。申さぬ先から心得たとある。御誓言承りたしと。地事ありげなる願ひの品。聞かねど流石佐々木の後室打頷き。詞親子の中に改めて頼むとあるはよくよくの事ならめ。仔細は知らねど心得ました。ハツア早速の御承知忝し。お頼の仔細と申すは。最前の囚人。拙者が爲には甥。母人の爲には孫の小四郎を。今宵のうちに母のお手に掛けられてと。地聞きもあへずコレ〳〵盛綱。詞最前我が君よりの仰渡され必ず小四郎に過さすな。殺すなとの御諚ならずや。サアその殺すなと御諚故に。猶以て殺さにやらぬ。辯舌を以て人を懐くる北條殿。小四郎を殺すなとの上意は。生け置いて人質とし。子を餌に飼うて。佐々木四郎左衛門高綱を。味方に付けん謀鏡にかけて顯はれたり。なか〳〵心を變ずべき。弟高綱とは忠はねども。地如何なる大丈夫も我が子の愛には迷ふならひ。萬が一この謀に陷つて。降參などの心付かば。子故に不忠の名を流さん事殘念至極。よしさはなくとも小四郎が。俘虜となつて生きある中は。恩愛といふ大敵に高綱が弓勢も弱り。刃金も自然と鈍る道理。詞迷の種のこの小四郎。一時も早く殺してしまへば。弟が義心猶猶鐵石。これぞ兄弟弓矢の情。地とあつて我が手にかくる時は。主君北條の命に背く。幼な心にこの理を辨へ。自身に切腹するならば。我は油斷の過りばかり。詞兄が義も立ち。弟が忠も立つ。雙方全きこの役目は。御苦勞ながら母人。密に小四郎に腹切らせて下されかし。地現在の甥が命申し宥めて助けるこそ。情ともいふべけれ。殺すを却つて情とは情なの武士の有樣や。如何なれば兄弟敵味方と引分れ。今朝の矢合に敵は甥なり。味方は我が子。肉身と肉身の。劒を合はす血潮の瀧。修羅の巷の攻太鼓胸に磐石こたゆるつらさ。弓馬の家に生れし不祥聞分けてたべ母人と事を。フシわけたる物語。地母は手を打ち尤も〳〵。兄のそなたも。弟の高綱も我が子に依怙はなけれども。隔てヽ居る程不便もまさり。詞有り樣はそなたにも。心を置いて居ましたが。弟に不忠の惡名を。付けさすまいと左程迄。心遣ひの親切。地ヲヽ忝いぞや。フシ嬉しいぞや。詞世の譬にも。小の蟲を殺して大功を立つる事。眞實親身は子よりも可愛い孫なれども。思ひ切つて切腹させう。ヲヽお出かしなされた。健氣者とは見ゆれども幼き小四郎。もし小腕に切損はゞ。母人よろしう御介錯。地早や短日の暮近し。佐々木兄弟が苗字を汚すか名

を上げるか。二つの境涙ばしかけ給ふな。詞氣遣ひめさんな後れはせぬ。地必ず氣强う遊ばせと。渡す一腰受取る腰の張弓に フシ詞番うて別れ入る。フシ柴吹き返す。木枯に。早や園城寺の鐘諸共。誘はれ來る白羽の矢。紅葉の茂みに射込みしは。主を誰とも人目せく。オクリ陣笠。目深に篝火が。男出立の半弓にやはかあだには歸らじと。フシ陣屋間近く慕ひ寄り。地和田殿の供廻りに紛れ込み。爰迄は忍入つたれど用心堅き陣屋の木戸口。心を通はす矢文の謎。小四郎が目にかゝれかし。祝ひ祝うた初陣に。忌まはしい繩目の恥。外の手でもある事か。詞從兄弟同士の小三郎。憎てらしい手柄顏。甥を縛らせ伯父の身で。それが本意か恨しい。地どうして居るぞ只一目。見たい逢ひたい間の戸に。我が身を犇と立板も。フシ通すは涙の矢數なり。地洩れてや奥に聲高く。詞侍中々々。夜廻り怠り申されなと。地女の聲も敵の中。胸騒かれ篝火は。さし足ながら忍び行く。地障子さつと目早の早瀨。紅葉の矢文拔取つて。詞つくづく眺め扨こそ〳〵。羽響もなき忍びの矢。女業と推量に違はぬ手跡。狀の文體にもあらず。名にし負はゞ逢坂山のさねかづら。人に知られでくる由もがな。と古歌を書きしは。ムヽ〳〵。手は見知らねど相嫁の篝火。囚はれの小四郎に。この陣屋を脫け出でて。人知らず來るよしもがな。こゝは處も近江路や。地世に逢坂の關の戸を。明けて逢はんと知らせの謎。詞エヽ、侍の母の樣にもない。未練なさもしい。軍に立てば討死は覺悟のまへと。立派な小四郎に惡氣を付け。もし取迯しやなどしたら。其不調法は誰にかゝる。一家の誼は生捕つても。命に別條ない樣子。知らせて安堵さす程に。必ずこゝらに狼狽へて。親子一所の繩目を受け。夫の名まで汚しやんなと。地恨のうらの反古文。打返したる返事の古歌。矢立の硯さら〳〵と書認めて括付け。內にも人目滋籐の弓打番ひ陣外の。小松にひやうど手答とフシともに立て切る障子の內。地幼な心に油斷せぬ。繩付ながら小四郎は。そつと一間を忍び出て。詞今伯母樣の讀ましやつた。矢文の手は母樣。こゝを脫けて戻れとの。知らせは聞いても敵の中。地見咎められては恥の恥。とは云へ母樣何所にござる。死ぬともちよつと。顏見たやとそろり〳〵とぬき足も。フシ危き毒蛇の陣の口。地あはや跡より窺ふ微妙。小四郎待ちやと聲に吃驚。ア、イ。何所へも行きや致しませぬ。御赦されてとばかりにて。わな〳〵 フシ慄ふ有樣を。地つく〴〵見れば見るにつけ。同じ佐々木の血筋でも。扨も果報の拙い子や。四人の

身となりたれば子心にも氣おくれして。見すぼらしい顔容。今宵限りの命とは。云はねど蟲が知らすかと。思へばそゞろ先立つ涙。胸に押下げ撫下し。詞ヤレ孫よ此所へおぢや。コレそなたの祖母ぢやわいの。器量骨柄揃うた子に。痛々しいこの縄目。解いてそなたにこの祖母が。云聞かす事ありと。地立寄り解く血筋の縄。子故に引かれ篝火が。フシ又立戻る陣屋の前。詞矢文の返事は兄嫁の早瀬の手跡。行くも歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の。關とは時節を待てとの事か。地いかにと見やる戸の隙間。微妙は孫の手を引いて一間の障子押開き。詞ナウ小四郎。高綱に別れてから十三年の年月。孫ありとは聞いたばかり。懐しさ逢ひたさは。膝元で育つた小三郎より。顔見ぬ其方の不便さは百倍。地殊更永の浪人の貧しい中に育てられ。武具馬具もさぞ不自由に口惜しう暮しつらんと。思遣る程片時も忘るゝ隙はなけれども。詞思ふに任せぬ敵味方。この上下は祖母がそなたへ引出物。地著てたもやいのと フシ差出せば。地何心なく押戴き。取上げて不審顔。詞申し祖母様。この上下にはなぜ紋がござりませぬ。九寸五分が添へてあるは。高名手柄せよとある。首搔刀でもあるまい。こりや私に腹切れとの。死裝束でござりますなと。地覺る利發に驚く篝火。微妙はがはと泣倒れスエテ暫し。詞もなかりしが。詞ヲヽ流石は親の子程あり。人に優れて其様に。聞分けよい程助けたさは。胸一杯に迫れども。殺さにやどうもならぬといふは。父親の高綱が。武勇智謀の優れたが。そなたの身の仇敵。助けよとある北條殿は。子を人質に高綱を。降參さする謀。それ迄は殺しもせず。まして助けて歸しもせず。何時迄も陣中に。囚へて置けとの主命。生きて居る程。高綱が武勇の妨げ。地爰の道理を聞分けて。潔う腹切つてたも。エヽ見れば見る程目付なら鼻なら。眉に一つの黶子まで父親にこの似やう。智慧才覺まで違はぬもの。老先も見ずむざ〳〵と蕾の花を散らすかと。老の繰言涙の齦。漏れて外面に聞く嫁の。何ぼ道理は道理でも餘り氣强いお姑様。我が子は殺さぬ〳〵と。仲上れども葦垣の隔つる。中ぞ是非もなき。地母の心の通じてや。小四郎おとなしく手をつかへ。詞私が命一つで。父様や伯父様の手柄になる事なら。何の惜みは致しませぬ。尤も腹の切り様も稽古して置いたれば。切損ひもせまいけれど。私が一つの願ひ。昨日軍の初陣に。直に敵へ生捕られ。地此儘死ぬるは弓矢神の冥加にも盡きたかと。何ぼう悲しい口惜しい。どうぞも一度お歸しなされ。父様母様にたつた一目逢

うた上。せめて雑兵の首一つ取つて。立派に死んで見せませう。このお願ひを。詞ア丶これなう。賢い様でも流石は子供。預りの囚人敵へ歸して。盛綱が武士が立つものか。父や母に逢はされる程なれば。この憂目はないわいの。とはいふもの丶逢ひたいは道理ぢやわいの。尤ぢや。世が世の時なら二人の孫。右と左に月花と。竝べて置いて老の樂しみ。この上もあるまいに。生捕るも孫。捕られるも孫。小三郎が手柄したと。煽立てる眞中へ。縛られて引出されし。顔見た時の祖母が胸は。張裂く様に　フシありしぞや。詞とても甲斐ないそなたの運。最期が未練にあつたなどと。口の端にかけられては。親高綱が弓矢の名折れ。尋常に死んでたも。ヤ丶。介錯はこの祖母。可愛い孫を先立てて。いつ迄因果の恥曝さうぞ。祖母も直に自害して。三途の川を手を引いて　地渡るわいのと抱きしめ泣く〳〵劒差付くれば。只二親に逢ふ迄は。赦して下され祖母様と。未練も親子の恩愛に道理といとど目もうろ〳〵。孫もうろ〳〵隙あらば逃げんと見やる木戸口の。こ丶にと母の呼子鳥。ヤア母様かと飛立つばかり。驅出す孫を引止めて。せき立つ老母の聲荒らか　詞エ丶未練者卑怯者。扨は母親と内通して。こ丶を脱けて出る心ぢやな。それなれば猶助けられぬ。望の通り親にも一目逢はした上は。サア〳〵切腹。但し祖母が手に掛けうか。サアそれは。サア〳〵　地何とと威に抜いて振り上ぐる。劒の下に手を合せ。母様の聲聞いてから一ばい命が惜しなつた。どうぞ助けてお情ぢや。堪忍して下さりませ。アレイ〳〵と逃げ廻り。臆れる孫に猶氣おくれ。詞ヤレ最前の健氣な覺悟忘れしか。とても叶はぬ期になつて。臆病者の名を取るかや。伯父が見ぬ先自害して。立派な最期と賞められてくれ。祖母が方から手を合す。地頼むといへど逃惑ふ。外には酷や無情やと。恨も三方三惡道。前生の敵同士がいとし可愛の孫や子に。生れて憂き目を見するかと老母が親身の血の涙時雨の中の枯れ紅葉。露より先に散りぬらん。地折からさつと山風の遙に陣鐘攻太鼓。事こそあれと早速の早瀬。長刀掻込み走り出で。木戸口開けば駈入る篝火。詞待つた待つた高綱のおかもじこりや何所へ。知れた事。我が子の小四郎取返す。ならぬならぬ。相嫁の初見参長刀に乘りたいか。地イヤ推參なと　フシぎしみあふ。地眞中に三郎兵衛。小四郎小脇に引抱へ。詞石山の御陣所に事ありと覺ゆるぞ。ヤアヤア小三郎は何所にある。ハア卽ち只今御加勢と。地用意の小具足兜の緒。フシしむる間遅しと駈け出す。地引違へて知ら

せの軍卒馳せ參じ。詞時政公の計略の如く。佐々木四郎左衛門高綱我が子を捕られし憤り。今宵自身に馬を出し手勢やうやう二千餘騎。鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと死物狂の其有樣鬼神の如く見え候。併し味方は豫ての用意。大將の陣は數萬の警固。盛綱公には氣遣なく。俘虜の悴を守護あるべしとの御事なり地猶追々に御注進とフシ申捨てゝぞ驅けり行く。地三郎兵衛大息つぎ。詞ハヽア南無三寶しなしたり。さしもぬからぬ弟高綱。子故の闇に心眩み。謀に陷つたるな。摩利支天なればとて。數萬騎のその中へ。一騎がけの死軍。討死せんこと眼前たり。此上は親の御慈悲。佛間で御回向なされかし。盛綱母人。地エヽ力なき武運の末。殘念さよと。ばかりにてフシ眼を。閉ぢて奥に入る。地篝火なほも氣はそゞろ。我が子も氣遣ひ夫も如何。千々に碎くる軍の破れ。えい／＼おうと勝鬨は。敵か味方か二人の妻。胸の陣鐘足も空二度の注進勇みの大音。詞御悦び候へ軍は十分味方の勝利。大軍に取圍まれ集り勢の高綱方度を失うて逃走るを。或は搔首。或は射取り。殘る兵散々に追捲り。諸葛孔明と呼ばれたる四郎左衛門高綱を。榛谷十郎が討止めて候と。地聞くより妻はハアはつと。心散亂燃えたつ篝火。夫の首は渡さじと。行くをやらじと止むる早瀬。詞大將軍時政公。御成ざふと呼はる聲。地ハアはつと早瀬は大將のフシ御座の設けと走り入る。地龍の雲に冲るが如く。一陽の春を待つ平の時政。近習の武士古郡新左衛門。佐々木小三郎盛清御供に扈從して。御召換の鎧櫃御座の次に飾らせて。寛然と入り給へば。三郎兵衛母微妙敬ひ。請じ奉る。地竹の下の孫八慌しく罷出で。詞最前和田兵衛秀盛。御陣所へ參りし所。日頃好める酒を强ひて醉ひ臥させ。居間の四方に金網をかけたれば。籠の鳥同然と思の外のしれ者。隱し火矢をもつて屋根を打拔き。御座の間の白旗を奪取り立退いて候と。地言上すれば時政公。詞ハヽヽヽ敵の軍中へ鎧も著せず只一人。踏込む程の不敵者。汝等が手に合ふべきか。第一の大敵佐々木高綱を討取つたれば。腹心の害は拂うたり。さりながらこの佐々木。古への將門に習ひ。一人ならず二人三人の影武者あつて。いづれを是と見分け難し。地誠の佐々木か僞首か。弟が首よも見損ずまじ。兄盛綱實檢せよと仰の下に新左衛門フシ首桶。御前に直し置く。地三郎兵衛承り。大將に一禮し無慙の弟が死首に。是非もなき對面やと。呑込む涙うしろより。父の死顔拜まんと窺ふ小四郎。盛綱が引開くる首桶の。二目とも見もわかず。詞父

様さぞ口惜しかろ。わしも跡から追付くと。地氷の刄雪の肌。腹にぐつと突立つる。詞ヤレ母人お止めなされ。何故の切腹仔細を言へ。地様子は如何にと人々慌て介抱に。小四郎きつと目を見開き。詞何故死ぬとは伯父様とも覺えぬ。卑怯未練も。父様に逢ひたさ。父を先だて何まだ〳〵と生恥曝さん。親子一所に討死して。武士の自害の手本を見せると地きり〳〵きり〳〵と引廻す。その手に縋り母微妙。ナウその立派な心を知らず。叱つた祖母が面目ない。怺へてたもと右左目をしばたたく三郎兵衛。猶豫は如何に早や實檢。何と〳〵と御上意に。疵口拭ひ耳際まで。熟と改め故實を守り。謹んで兩手に捧げ。詞矢疵に面體損じたれども。弟佐々木高綱が首。相違ごさ地なく候とスヱテ御前に直し押し退れば。詞ホヽウ骨肉の兄が實檢といひ。首に向つて小四郎が恩愛の涙。切腹の有様。誠の首の證據明白。思へば昨日この首に後を見せし時政が。今手の下に誅罰する武運の强さ。ハヽア心地よや嬉しやな。今といふ今時政が。始めて枕を安く寢るは盛綱が働き。我が著換の鎧一領。當座の褒美に殘し置く。小三郎其外には陣中にて。地勝軍の恩賞せん。皆萬歳を唱へよと。悦喜の裝ひ四邊を拂ひオクリ本陣。フシさして歸陣あり。地盛綱あたりを熟と見廻し。詞佐々木高綱が妻篝火。計略の僞首仕畢せたれば。小四郎に最期の暇乞。赦すこれへと一言を。地聞く間遲しと轉び出で。我が子に犇と抱き付きスヱわつと泣くより。外ぞなき。涙ながら母微妙。詞僞首と知つて。大將へ渡した其方は。京方へ味方する心底か。イヽヤいつかな心は變ぜねど。高綱夫婦が是程迄仕込んだ計略。父が爲に命を捨つる幼少の小四郎が。あんまり神妙健氣さに。不忠と知つて大將を欺きしは弟への志。彼が心を察するに。高綱生きてある中は。鎌倉方に油斷せず。一旦討死せしと偽つて山奥にも姿を隱し不意を討たんず謀。然れども底深き北條殿。一應の身代りは中々喰はぬ大將。そこを圖つて一子小四郎をうま〳〵と此方へ。生捕らせしが手段の根組。地最前の首實檢。僞首を見て父上よと。誠しやかの愁歎の有様に。大地も見拔く時政の眼力を眩ませしは。敎へも敎へたり。覺えも覺えし親子が才智。見えすく僞首とは思へども。か程思込んだ小四郎に。何と犬死がさせられう。主人を欺く不調法。申譯は腹一つと。極めた覺悟も負うた子に敎へられ淺瀬を渡る此佐々木。甥が忠義に比べては伯父が此腹。百千切つてもかけ合ひ難き最期の大功。其方が命は京鎌倉の運定め。出かいたな。出かしたと手負の顔を。打

守り〳〵悲歎の涙にくれければ。篝火いとゞかきくれて。子を褒められる親の身の。悦ぶは常なれど生きて高名手柄して。今の仰に預らば何ぼう嬉しかるべきに。年相應より利發なが生れ付いた此子が因果。いかに武士の習ひぢやとて。斯う斯うして自害せいと。教ゆる親の胴欲さ可愛や初陣の初から。死に行く事合點して。詞俺や侍の子ぢやによつて。討死するは嬉しけれど。死んだら父様や母様に。つい逢ふ事がなるまいかと。それぱつかりがと地云ひさして。泣顔見せず勇んで行きしその立派さ。適れ弓矢打物迄誰に劣らぬ物覺え。腹切る事まで是程に。器用になくば何事ぞ。コレなう小四郎。小四郎と手負の耳に口さし寄せ。詞この深手ぢやもの。耳も遠なろ。目も見えまい。今伯父樣の仰つた事聞取りやつたか。そなたの命捨てたので。高綱殿の忠義が立つと。褒美のお詞。地それを未來の引導に迷はずと佛になつてたもと。云聞すれば嬉しげに。詞そんならわしが死ぬるので。父様の軍の勝になるかゝエヽ忝い。祖母様は何所にぞ。わしや縛られても。卑怯者ぢやないぞえ。それで死んでも本望ぢや。伯父様伯母様。祖母様にも母様にも。逢うて死ぬるは嬉しいが。たつた一つ悲しいは。父様に地〳〵と跡は得いはず舌硬ばり。次第々々に弱り果て惜しや實生の初花も。無常の風にフシ散りてゆく。地コレなう小四郎孫やい。今はの際に父親を尋ねて死んだ子の心。思遣つて只一目なぜ顔見せに來てくれぬ。千騎萬騎の大將にも成るべきものを栴檀の。二葉で枯らせし胴欲は神も佛もなき世かと。歎く微妙の聲限り涙の早瀬篝火もフシ消ゆる。ばかりの思なり。地三郎兵衛泣目を拂ひ。詞ハア歎に紛れ後れたり。實檢を仕損じたる鎌倉への申譯。地母人さらばと差添に手をかくれば。詞ヤア〳〵盛綱。和田兵衛秀盛これに在り。敵を見掛けて自害とは。臆したるかと聲かけられ。シヤ幸ひのよき敵。歸らば其儘歸さんに。運盡きたる秀盛。地逃しはせじと突立てば。詞ヲヽ和田兵衛が習ひ得し南蠻流の懐鐵砲。地受けて見よとどうど打つ狙は外れて鎧櫃。内に忍びし榛谷十郎太腹射拔かれフシのた打つたり。詞見よや盛綱。底の底まで疑ひ深き北條の隱目附。汝が手にかけざれば。不忠にあらず彼めが不運。今又御邊自害せば。鎌倉への義は立つべきが。佐々木が首は僞物なりと。忽ち露顯し是迄も。碎きし心は水の泡。時を待つて佐々木高綱。誠はこゝにと切つて出づる其時に。潔く切腹せば。忠も立ち義も全し。腹の切り樣早い〳〵。地ハヽアげに過つたり我が命。暫く生きるは弟へこれも情の一つには。甥

への寸志追善供養。詞野送り萬事も一家の内證。諸事何事も此座きり。表は京方。鎌倉方。地右大臣實朝の御座の白旗奪取りしは。軍の吉左右重ねて再會フシとめて見ぬかと出でて行く。詞ヤア盛綱が陣中にて。味方の武士を討つたる曲者。返せ地戻せは弓矢の儀式。フシ因は兄嫁小姑孫よ甥子の亡骸に。うき事三井の暮の鐘。消え行く子より親心。我からさきの夜の雨父には一目。フシ粟津の嵐。木の葉の紅葉かき寄せて。夕を照らす瀬田の橋門火は。狼煙敵味方さらばと。ばかりユリ三重へ別れゆく

第九

舞比良の暮雪と賞ぜしも。ナホスフシ誠は寒き暮れの雪。冬ぞ寂しき大津の浦に。オクリ世を漕ぎわたる船長の妻もとも〱外稼。内は十五の涎くり。留守の手習机の上。草紙に六道の切書いて。詞天かまいかの玉錢を。一人打つたり。地飛廻りフシ遊びにたわいなかりけり。フシ其日も西へ。入相の。鐘に散りしく花ならで。雪げをしのぐ相合傘。本フシよその宿に身を寄せて。地我が家に歸る女房およつ。詞阿房よ戻つたぞよと。地いふ聲聞いて玉錢隱し。詞ヲヽお家様ようごんたの。ヲヲ彼奴わい何ぞ他所から來た者の様に。そして暗いのに灯もともさずぐづ〱と何してゐる。サア其様にぐづ〱すると叱られるによつて。ぐづ〱するかせんか暗がりにしてお前の臍探ろと思うて。又阿房めが灯をともせと。地いふに合點角行燈。硫黄の花にハヽ嚔。詞又人を誘らんすかいのと。地いひ〱戸口差覗き。詞アレ門口に誰やら居る。誰ぢや何所の人ぢや。イヤあなたは傘を御無心申したお侍様。地お蔭で雪げを凌ぎまして忝う存じます。マア〱お入りなされませと。いふに侍内に入り。詞これがこなたのお宿元か。扨々綺麗なお住居でござりますな。イヤモやう〱頃日此家へ參りし故まだ取締りもござりませぬ。シテ御亭主の御商賣は。イヤ亭主と申すは私ばかり。地營みとても僅かな暮し。詞ムヽすりや後家御か。ハイ左様でござります。是は〱まだお若いに嘸御不自由にござらうな。イエ〱獨身に慣れましてはさして不自由はござりませねど。此浦風の烈しさに。又しても夜冴が致し。心細い折しもは。誰ぞ力になつてほしいと。サア思ふ様な緣もないものでござりますと。地何所やら甘い咄に侍。襟かき合せ差寄つて。詞我等花岡園部之介と申す浪人。未だ定まる妻もなければ。清水の花盛にはこの園部を戀慕ふ短冊もあらうかと。櫻の枝を見廻つても。當世は歌詠む姫も無いかして。閨淋しう暮す某。何と相談する地氣

はないかと。しなだれ フシかゝれば。こなたも打笑み。詞聞きますればあなたのお名は園部様とやら。薄雪姿の相合傘。お情深いも御縁の端。そしてどうやら愛しらしいお姿といひお顔付。女をなづます目元のしほと。地こぼれかゝりし姿振に。現ぬかして。コハリ氣は上づり。側に阿房が差覗き。詞エヽ惡い身をする侍。丁度股ぐらへ山猫挾んだ様に。コリヤ又阿房ロ叩かずと。爰に用はない奥へ行け。アノ俺に奥へ行けかへ。行けなら行こが。俺が奥へいたら挾んだ山猫を出しをろぞへ。まだ徒口をと 地叱られて。盆太は奥へ立つて行く。およつは門の戸 フシ差寄せて。地押入開けて。こて／＼と取出す蒲團 フシ打ひろげ。詞ヲヽ寒む。こんな寒い晩はちつとなと早う寝て。地肌温めうと身を横に。なるたけ堪へる侍が。青うなり赤うなり。つく息さへも絶え／＼に。詞もう其所へはひろかへ。コレもう寝てかいな。どうもならぬと フシ蒲團の内。入ればおよつが起直り。詞そんならお前愈ゝ私と寝る心か。イヤモ心は何所やら飛んで仕舞うて。身體中が張切れる。そりや眞實でござんすか。ヲヽ眞實とも眞實とも。もう根問ひせずとちやつと寝たい。イヤそれが定ならお前へわけて無心がある何と聞いて下さんすか。聞きたうても上氣して耳が聞えぬ。少々の事ならまあ寝所での事にせう。イエ／＼賴むことも賴んでから。何を隱さう私は敵討でござります。よし／＼敵討呑込んだ。それぢやによつて若し敵に出合はば助太刀して貰はにやならぬ。それ合點でござりますか。よし／＼助太刀呑込んだ。萬一返討にあふ時は。命を捨て下さんせにやならぬぞえ。よし／＼返討呑込んだ。ヲヽ何をいうても呑込んだと。大腹中なお人ではあるわいの。よし／＼大腹中呑込んだ。ヲヽそりやお前何をいふのぢや。何ぢや知らぬが早う寝たい。マアよしれぬ事を云はずとも。私が敵といふは兵法の達人。助太刀せうと仰るお前。手の内が見たうござんす。ヤア鉢坊主ぢやなし何の手の內。サア兵法の御鍛錬が。アヽ兵法使ふのか。そりや心安い何時なと使うて見せう。左様なら御手練の程を。ヤレ／＼嬉しやと申してから。心掛けねば竹刀しなへの用意もなし。何を以て御手練を。イヤ氣遣ひ召さんな。竹刀しなへ用意致した。何竹刀を御用意とは。ヲヽサ心掛の武士だもの。竹刀がなくて何とせう。しかも長いと短いがあると。地兩腰するりと拔放せば。赤鰯でもない備前竹光。詞何と天晴竹刀であらうがの。アノ是がお前の魂か。イヤ魂は飛んで了うてこりや人をだましひぢや。ヲヽいつそ呆れて物がいはれぬ。

もう御手練見るに及ばぬ。そのお心なら寝て語ろ。何ぢや寝ようこりや忝いと。地いふ間に行燈フシ吹消せば。詞コリヤなぜ灯を消した。エヽ明くては恥かしいなと。地勝手知らねば此所彼所尋ね探る其中に。阿房をそつと蒲團の内およつは。フシ勝手へ探り行く。地こなたは知らず高這ひに。探り當てたる蒲團の内。何かはなしにフシぐすくく。地入れば阿房が大聲あげ。詞アヽイタヽヽヽヤレ盗人め出あへくと。地呼はる聲に吃驚し。こけつ轉びつ侍は何所ともなくフシ逃げ歸る。地跡に盆太が高笑ひ。詞ハヽヽヽ逃げるわく。ヤイ侍め。汝が血氣に任せ屋尻切らうとかゝつても。滅多に切れる盆太ぢやないわい。お家様も亦お家様ぢや。何のあんな奴が心を試す事があるもので。此間から來る奴等に。碌な奴は一人もない。エヽ隙費な。追付け旦那様が戻つてであらう。湯なとたいて腰湯さそと。地あたりこてく取片付け。オクリ納戸へ。へ入るやいるさの月。地影さへ暗くしめくと。空にちらつく雪よりもフシカヽリ齢の雪を蔽うたる。簑笠著たる老人を。乘せて我が家へ戻り舟。艪を押切つて陸に漕付け。詞急ぎ候程に。早や舟が著きて候。即ちこれが我等が内。サアくお上りなされませと。地歩渡せば老人は。しづくく上る陸の方。船頭も紡綱。亂杙に括付け。いざ御案内とフシ先に立ち。詞女房ども戻つたぞよ。お客がある何所に居ると。地夫の聲に女房が。疾しや遅しと。納戸を出で。詞ヲヽ二郎作殿戻らしやんしたか。今日は定めし寒かつたでござんせう。イヤモ寒い段ぢやない。雪はちらつく。向ふ風の比叡颪で。艪束持つ手も切る様にあつたれど。風に逆うて艪押したので。おれは寒いを忘れたが。あなたには嘸お冷えなされう。地いざ先づあれへと勸められ。簑笠脱ぎ捨てフシ上座に直り。詞一樹の蔭一河の流れ。不思議に亭主が世話となり。寒夜の一宿過分の至りと。聞いて女房が呆れ顔。詞テモまあ仔細らしい物の云ひ様。そして見りや生きた兜人形見る様なお方。ありやマア何方でござんすぞ。イヤどなたやら俺も知らぬが。今日は草津の方に軍があると聞いた故。何でもそこら邊へ行たら。よい儲があらうかと。矢橋の濱に舟着けて見合して居る所へ。彼方がひよつこりお出でなされ。何がなしに舟へ飛乘り。ヤレ出せ。ソレ漕げと滅多無性におだてられ。合點が行かねどマア沖へ漕出して。扨様子はと尋ねたれば。石山の陣所へ歸る者。それ迄急ぎ舟を著けよ。望み次第舟賃やらうと仰有る故。長つたと精出して。押しても。漕いでも向ふ風。一向石山へ舟は寄らず。せう事

なしに爰まで連れまして戻つた。今夜はこちにお泊め申し。風が凪いだら石山へお供する。隨分御馳走申してくれと。地夫が詞にそれはマア／＼御難儀や。見ました所鎧とやらを召してござれば。定めて軍に行くお方。詞ナ申し。左様な事でござりますかと。地尋ねに老人打頷き。詞ホウ推量の通り。今日の軍に思はぬ敗北。それ故かゝる世話に預る。コレこちの人。敗北とは何の事ぢやえ。ハテ軍に負けるを敗北といふわいやい。ム、そんならあなたはお負けなされたのか。ヲ、それはまあ／＼お笑止や。そして見ました所が。お年に不足もなささうなに。命がけの軍せうより。お子様もあらうに。隱居してござれば。敗北とやらもあるまいに。定めてお腹が立つでござりませうな。何の何の。勝負は時の運による。一旦の勝より始終の勝こそ善なるべし。計らざる今日の戰ひ。佐々木の四郎が謀に乘せられ。味方の大軍大半討たれ。某とても無念の敗北。地陸路は佐々木に立て切られ。石山へも歸り得ずとやせん方も渚の方。途方に暮れて漂ふ所に。詞幸ひなる渡舟危き難を遁れしも。全く其方が情故と。地始終を話す軍の樣子。聞いて女房が差寄つて。詞申しその佐々木とやら云ふ人は。討死と聞きましたが。矢張生きて居られますか。されば／＼。これ迄佐々木を討取りしも度々なれど。皆影武者の僞佐々木六日以前の戰ひに。佐々木が悴小四郎といふ者を。味方へ生捕る共砌に討死せし佐々木が首。悴小四郎に實檢さすれば。誠の親と歎き悲しみ直さま切腹。扨こそ佐々木は討取りしと。安堵の思に今日の出陣。又も佐々木に追立てられしは。幾人ありとも計りなき。佐々木が謀の恐ろしやと地フシ舌を。卷いて物語り。地聞く女房が打萎れ。今のお話聞くにつけ侍といふ者は。小さい子でも軍して。命を捨てるといふ事は。果敢ないといはうか。いぢらしいといはうか。その親々の身に取つてはといふを打消し。詞エ、何のかげも構はぬ他所の事を。イヤ申し。かうお宿申しますからは。とても事にあなたのお名を。地ホ、我こそはといはんとせしが詞を控へ。詞イヤ端武者なれば鳴滸がましうムム。成程。薄の穗にも怖ぢるとやら。承つて益ない事。定めてお疲れでござりませう。見苦しけれど奥へござつて。御休息なされませんかい。如何樣。老體なれば餘程の疲れ。詞に付いて暫く休息。イヤモ何にもお氣遣な事はござりませぬ。緩つとお休みなされませ。ホ、何かにつけて心遣ひ過分。地過分々々と老人は。フシしづ／＼立つて奥に入る。地跡に女房がくし／＼と フシ思ひ侘びたる憂き涙。地

夫も思案あり顔に。手を拱いて差俯向き。互に詞納戸より。ひよか／＼出づる阿房の盆太。重箱片手に。詞コレお家様。お前忘れてござんすか。今日はぼん様の一七日の逮夜。それで一文餅三つ買うて來た程に祝うて佛様へ進ぜてと。地いふに思はずせき上げてわつとばかりに。スヱテ伏沈む。詞ヲヽしをらしいよう氣が付いた。愚な汝が志供へいでなんとせうと地しをしを。立つて抑入の。フシ襖あくれば釣佛壇。御燈明の灯はありながら。濕る香爐の。香もりかへ。詞知覺院幼玄童子。佛果の爲と。地手を合せ伏し拜む目も。フシ涙なり。詞申し佐々木殿。シイ。イヤ二郎作殿。お前もこちら向いて。せめて一遍の回向なとして下さんせ。地私が千遍唱へるより。お前のたつた一遍が。あの子の功德になるわいのとスヱ又伏沈めば。詞ヤイ／＼たわけ者。奥に客人もござるに。見苦しい其泣聲。地エヽ未練な奴と叱られて。詞イエ／＼なんぼ叱らしやんしても。これが泣かずに居られうか。地いかに男のかうけぢやとて。お前ばかりの子かいな。私が爲にも子ぢやわいな。詞まだ年はもいかぬもの。かう／＼せいと慘たらしい。父御の詞を子心に。大事大事と忘れもせず。立派にあつた其時の。姿が今に目先に見え。何とこれが忘られう。わしや忘られぬ。地得忘れぬとどうど伏し歎けば流石恩愛の。涙は胸につゝかけながら。詞ヤイ聲が高い靜に泣け。我とても肉緣の悴。不便になうて何とせう。側であり／＼見た其方より。見ずに案じる我が心。どの樣にあらうと思ふ。地骨は碎かれ身は刻まれ。肝のたばねへ燒金を。刺される樣にあつたわいと涙隱せば阿房は目をすり。詞アヽ利根な坊樣で。先度もナ。俺が穴一してゐたれば。コリヤ阿房よ。穴一すると手が下るといはしやつたによつて。コレ／＼そんなませた事いふと。つい死ぬるぞやと云うたれば。俺や侍の子ぢやによつて。死ぬる事は何ともないが。ひよつと死んだら。嘸かゝ樣が泣かしやろなアと云はしやつた。つい泣かしやる樣になつてのけたと。地大聲あげておい／＼泣き。詞コリヤもういうてくれな。聞く程苦しい此胸が。地裂ける樣なと伏沈む。涙は琵琶の湖にフシ漣。寄する如くなり。フシかゝる。歎きの時しもあれ長押に掛けたる鳴子の音。風かあらぬかへぐわら／＼／＼。二郎作聞くより突立上り。詞コリヤ／＼女房。城内より知らせの早打。ソレ奥の間に氣をつけよ。地阿房は裏をと追立てやり。戸口をちやうど差固め。居間の疊を跳ね上ぐれば。下よりぬつと鎧武者。詞ノリ今日味方の勝軍言上せんと手をつけば。詞

ヤア音高し〳〵。谷村小藤治。シテ城内に變はなきや。今日の一戰。味方の勝利。次第聞かんも 地ひそ〳〵聲。詞ノリさん候味方の軍勢栗津の汀に屯を構へ。戰ひを催す所に。敵の大軍どつと押寄せ。無二無三に駈け立つる。味方はわざと負色見せ。十町ばかり引退く。勝に乘つて追來る大軍潮の涌くに異ならず。味方もこゝに踏止り火花を散して攻め戰ふ。地仰置かれし時分はこゝぞと。四つ目結の旗さつと靡かせ。敵の後に大音上げ。詞佐々木の四郎高綱これにありと名乘りかけ〳〵。幕地に駈け立つれば 地そりやこそ佐々木が又出たぞ。謀に乘らぬ內引けや。〳〵とわれ一に。狼狽へ騷げば後陣より。大將時政釆配振立て。詞ノリ佐々木とて鬼神にてはよもあらじ。騷ぐな者ども備へを立てて戰へと高らかに呼はれども。地佐佐木といふ名に聞怖し。崩れたつたる敵なれば。耳にも更に聞入れず。風に散り行く木葉武士。迯げ行く者に目はかけず目指すは時政只一人。詞ノリ餘すな漏らすな者どもと稻麻竹葦と取巻きしが。天を翔つて遁れしか又地を潜つて走りしか。無念ながら時政は討漏らし候と息つぎあへず フシ訴ふれば。詞ホヽ、適れ高名。手柄手柄。併し時政を討漏せしは殘念至極。シテ時政が出立は。ノリ鎧は緋緘錦の直垂。なに緋緘に。直垂とや。シテ〳〵。徒立か但しは騎馬か。イヤ馬は其場に射すくめられ。乘換もなく身は徒立。詞ムヽ、さこそ〳〵。汝は直に城內に立歸り。勝軍の油斷を窺ひ。夜討をかけまいものでもなし。萬事油斷なき樣に。變あらば早速知らせよ。早や行け。地行けと云渡し。差寄つて。フシ耳に口。詞ハア、畏まり候と引返して拔道へ 地飛込むあとの古壘。フシ 元の如くに押直せば。地女房篝火勇み立ち。詞今の注進聞くにつけ。割符を合す奥の老人時政に極まつた。此家へ來るは天の與へ百萬騎よりたつた一人を討取れば。地四海浪風靜まる手柄。用意さしやんせ四郎殿と急立つ女房。地騷がぬ高綱。詞ホヽ、圖らず我が手に陷る時政。とても今宵は過さぬ命。いや〳〵〳〵落付くも時による。油斷大敵小敵とて。侮らずとは常々お前が敎へる軍法。いさ討ち給へ早う〳〵と 地急き立つ折もあれ。又も知らせの鳴子の音。四郎心得手取早く。壘をちやうど跳ねのくれば。ずつと出でたる四の宮六郎。詞御注進と呼はるにぞ。ノリヤア汝が五音は甚だ不吉。心許なし如何に〳〵。詞されば候城內には今日の勝軍。いづれも酒宴の興を催す。中に取分け和田兵衛殿。例の大酒數杯を傾け。餘程酒興の折柄に。大江の入道銚子盃携へ出で。和田兵衛の軍功大將感じ

思召し。御悦びの御酒を下さる。頂戴あつて然るべしと聞くより何の思慮もなく。土器取つて押戴き。ちやうど受けて乾し給へば。忽ち顔色土の如く。六穴より迸る血汐は瀧の如くにて。さしも强氣の和田兵衛殿。虚空を摑みて七顛八倒其儘息絶え候と。地語るにはつと佐々木が仰天。詞シテ〳〵。其座に三浦之助は在合はさずや。ノリさん候取分け無慚は三浦殿。毒酒を以て和田を殺せし。暴惡無道の大江の入道。摑み拉いでくれんずと。阿修羅王の荒れたる如く。入道目がけ驅上る。板間にかねて陥穽踏みはづして眞逆様。下に植ゑたる劍に裂かれ。身はずた〳〵と三浦の最期。皆入道が謀計なれば。此上は頼家公御身の上も危し〳〵。地片時も早く城内へ。御入りあつて守護あるべしと云捨て又も引返せば。始終こなたに立聞く時政。佐々木はとかう呆果て フシ暫し。詞もなかりしが。詞ハア、天なるかな命なるかな。和田といひ。三浦といひ。いづれも秀づる當時の英雄。入道などが術に乘りしは。よく〳〵味方の運の盡。此上は片時も早く。城内へ馳せ向はん。篝火。用意。地用意と氣を急く折から。俄に表騷がしく馬の嘶き數多の人音。ギン三鱗の旗指物。弓鑓持筒引馬の飾りも。きらつく鎧武者。門口に謹んで。詞ノリ鎌倉の大將時政公。此家に遁れましますます由。忍びの物見が知らせにより。御迎の爲參上す。早く御歸陣然るべしと地呼はり皆々フシ平伏す。地内に女房が猶急立ち詞アレ時政を迎の大勢。この場を助け歸しては。龍を淵へ放すも同然。サア今の内本望々々。サア〳〵〳〵とあせる中。地時政公一間を立出で。詞誠に危き難を遁れ。殊に今宵の一宿迄。淺からぬ亭主が情。町人なれば褒美には。この濱邊に家屋敷を建て與ゆる間。濱屋敷として永く所持せよ。猶も望の事あらば。重ねての沙汰に及ばん。さらば地〳〵と馬引寄せ。ゆらりと乘れば諸軍勢。フシカヽり四方を圍うて立歸る。天の助は人力の。フシ及ばぬ運ぞ類なき。詞エヽ手に入る敵をやみ〳〵と遁し歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも言ふに言はれぬ腰拔武士。お前は天魔が魅入れしか。情なや淺ましやと。地恥しむれば莞爾と笑ひ。詞敵の謀について謀を行ふ高綱。女如きの知る事ならず。ムヽ手に入る敵をやみ〳〵逃すが。謀か計略か。ホヽ。今歸つたは時政でない。ありや僞者。ナニあの時政を僞者とは。ホこれ迄度々の戰に。此高綱に欺かれ。其無念やむ事を得ず。面體恰好似たるを選み。時政に扮裝たせ。今日の軍に討死させ。時政こそ討取つたりと味方の者に油斷させ。其虚を討たんといふ術と

疾くより計り知つたるゆゑ。攻口を弛めさせ。わざと助けて此家へ伴ひ。城内の變。一々聞かせて歸せしは。誠の時政を城内へ。誘き出さん我が智謀と。地語るにさてはと女房が。始めて悟る夫の心。感じ入つて横手を打ち。詞適れ我が夫稀代の計略。そんなら和田殿三浦殿も。シイ。謀は密なるをよしと地いふ間に取出す種が島。狙は松が枝ばつたり人音。詞申し今のは。敵より入る忍びの曲者。早や明方も近づけば。我はこれより城内へと又も蠱を。地明烏かはい。かはいの聲につれ。思出したる小四郎が名は消えもせで其主は。親を殘して西方淨土。フシ彌陀の御國の。道法は計り知られぬ佐々木が拔道。拔目なき智謀の。程こそ三重へたぐひなき。染太夫地江州坂本の城と申すは後に峨々たる比叡を負ひ。前には湖水漫々として。日本無雙の名城に。立籠る源の

頼家公。數度の軍に戰ひ勝てども目に餘る敵の大軍。味方は小勢矢も盡きてフシ早や落城と見えにけり。彥太夫地城内には大江の入道御母君を始とし。女中殘らず居竝んで頼家公の御居間と。隔つる座敷は大廣間。今日を最後の門出とオクリお湯引き。髪に梳り。留木の伽羅に諸軍勢フシ心ときめくばかりなり。地入道母君に打向ひ。詞天命とは申しながら和田佐々木三浦之助。おのれ〳〵が片意地を言募り此入道が下知を用ひず。その罰で殘らず討死。所詮開くべき運ならねば。御生害を勸めまゐらせ。某とても跡より御供。時刻移らば敵軍爰に亂れ入らん。敵に首を渡さんより。地片時も早く御生害と。頻つて勸むる入道が底意のフシ程ぞ恐ろしき。染地宇治の方打頷き。詞和田佐々木三浦の輩。討死せしとある上は。最早叶はぬ味方の運命。なに惜しからぬ自ら

が命さりながら。己々が身の始末疎にし置かば。これ亦死後の物笑ひ。ヤア皆の者。心殘りのない樣にめい〳〵心付け合うて。自らが自害も見屆け其上は心次第。必ず逸まる事なかれと。地女ながらも上に立つフシ心は。三根太夫遙か。奥よりも。頼家公のお使として局の千草。フシしとやかに手をつかへ。詞母君樣へ我が君よりのお使。微運は申上ぐるに及ばず。味方の面々討死の上は。生害の時節今日。潔う死出三途の御供せん。母上樣にもお心靜かに御用意あそばせ。此期に臨んで申すべき事とては彌陀の六字より他事なく候。其旨御肝要に思召し下されよ地との御事にて候と涙フシ隱して述べければ。染詞ホ此方からも使を以て申上げんと思ひし折しも。局大儀ぢや。シテ我が君にはお覺悟ようお入り遊ばすか。三根ハア、左様でござります。未明より御覺悟よく

只母上様の御菩提と。御經讀誦遊ばして
でござります。染ナニ自らが佛果の爲。
ハア、。三根地と答ふも。染尋ぬるも跡は
フシ涙の。玉鬘。詞御前へ歸つて申さうは。
御念もじのお使かくなる上は互に申す言
の葉はなく候へども。今生の名殘に御顔
ばせ。今一目見まほしく候へど。入道の
計らひ故それも叶はず。冥途の旅へ赴き
候。必ず母にお心をかけられず。大將たる
御身に候へば。潔よく御生害をくれ〴〵
頼み參らすと地いふ聲涙に咽せ給へば。
彌太夫三根太夫付添ふ女中も一同に。お道理
様やと伏沈む涙。フシ限りはなかりけり。
産詞ヤア姦しい女ばら。局も早く立歸り頼
家公に早く切腹なされといへ。疾く〳〵
行けと追立てられ。三根地是非なく〳〵も
フシ立つて行く。産地あとに入道聲荒らげ。
泣いても悔んでももう叶はぬ。さつぱり
と諦めて。どれからなりと先陣お仕やれ。

この入道が始めたけれど。年役なれば
跡から罷る。女ばらは誰彼なしに立竝ん
で。一所に死ね。サア宇治の方。地時移
ると三方取つて差付け〳〵サア〳〵〳〵
とせり立つるは。此世からなる呵責の鬼。
産外面は修羅の攻太鼓矢叫びの聲フシ喧
く。染詞母君耳を欹て給ひ。ハテ訝しや。
昨日の軍に和田三浦を始め。佐々木の四
郎も討死せし故。最早この城保ち難し。
生害せよと入道の勸め。誠と思ひ極めし
に。今城外に和田佐々木とほの聞えしは。
誰ぞ遠見して參られといらつて宣ふ詞を
打消し。ヤア和田佐々木三浦を始め其外
頼む味方の大將。殘らず討死したは違は
ぬ。死ぬるのが悲しさに血迷うた空耳な
らん。こゝ言いはずと早々生害染イヤ此
實否を質さぬ内は滅多に自害なるまいわ
いの産ならずば某介錯と地すらりと拔い
て切付くる。染どつこいさうはと三方に。

受けてもか弱き女業。産强氣の入道疊み
かけ旣にフシ危き其所へ。彌地後の襖蹴
放して佐々木の高綱飛んで出で。入道を
取つて投退け。詞某始め和田三浦討死と
佯り。御二方に生害勸めそれを手柄に時
政に。味方せんとは太い巧み。是迄味方の
謀内通したるも皆儕。主を賣るの極惡
人。最早遁れぬ覺悟せよと地詰めかけら
れてちつとも動ぜず。詞ホ、よい推量。儕
等が忠義立が胸惡さに。頼家親子が首取
つて時政公へ降參せんと。心を碎いた我
が術。十が九つ仕畢せしに。見顯はされ
て殘念々々。もう此上は死物狂ひと。地
佐々木を目がけ切付ける。彌さしつたり
と搔潜り。刀をちやうど踏落せば。産詞に
は似ぬ大江の入道。奥をさして迯行くを。
彌遁さじ遣らじとフシ追うて行く。染地
跡に母君御聲高く。詞ヤア〳〵者共。か
かる事とも知り給はぬ賴家公。御身の上

氣遣はし。此通り注進申せ。急げ〳〵に三重地色強地女中達皆々フシ奥へ走り行く。如何忍び入つたりけん。北條時政廣間に駈出で詞入道が知らせ故時政直に向うたり。覺悟せよ宇治の方と。地いふ間もあらせず胸板へ。發止と響く筒音に脆くも息は絶果てたり。色詞ヤアお騒ぎあるな宇治の御方。斯くあらん事を察し。詰り詰りに守護する高綱。入道めが惡工いかなる事も計られず。奥へ〳〵と勸めやり。地高綱勇んで大音上げ。詞鎌倉の大將。北條時政を佐々木の四郎が討取つたりと高らかに呼はれば。強地主人の敵遁さじと拔連れ〳〵切つてかゝる。色詞ヤアことごとしき雜兵ばら。一々此世の暇をくれんと。地群がる中へ割つて入り。薙立て薙立て切捲くる。その太刀風に木葉武士。むら〳〵ぱつと逃散れば。佐々木も上帶しめ直し。太刀のほめきを冷さんと縁側に突立つ折から。矢一つ來つて高綱が肝のたばねにかつきと立てば。うんとばかりにどうど伏しフシ果敢なく息は絶果てたり。三重地誰が仕業とも白書院。弓矢携へ悠々と入來る北條時政。詞これ迄數度の戰ひに佐々木めにたばかられし其返報。稻毛の前司某によく似たるを幸ひ。我が姿に出立たせ佐々木めに宛ひし故。誠と思ひ本體を現はせし狼狽者。和田三浦は先だつて入道が謀計に死したる由。稻毛が咄に聞きたれば最早高綱唯一人と思ひの外。我が矢先に最期を遂げし誠の佐々木。今は大將一本立。ヤア〳〵賴家は何所にある。時政直に見參せんと。地呼はり〳〵フシ奥の方。のさ〳〵歩む耳元へ又もどつさり種が島。吃驚仰天振返るお花畑の鳥おどし。染簑笠取つて高笑ひ。詞ハヽヽヽイヤお騒ぎあるな時政公。近江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱。それへ參つて御見參仕らんと三重地呼はる聲にフシ流石の。時政仰天あり。稻毛の前司に勸められ。深々と入來り又も佐々木が術に乘りしか。思へば無念と引返す強地表の方より和田兵衛三方携へ立出づれば。色此方より三浦之助長柄の銚子携へ出で。詞只今城外に於て賴家公實朝公御兄弟御對面の上。互に和睦相調ふと。強地いふに和田兵衛引取つて。詞兩將御心解合ふからは。時政公にも異議あるまじ。御悦の御盃頂戴あれと詞の下。色地佐々木四郎遙に手をつき。詞某方寸の謀を以て。時政公を城内へ引入れしも。御和睦を調へん爲。君御一人の御心にて萬民塗炭の苦を遁る。御承引下さらば敵對申せし我々。御刑罰にあふとても。聊か恨と存ぜずと。色強地詞をつくし理をせめて。命惜まぬ三人が。三重忠義を感じて時政公。詞ホヽ、適れなる忠臣義士。實朝公

御許容の上は。某に何の野心。和睦は願ふ所ぞと。詞に三人飛立つ悦び勇み立つたる折からに。詞軍勢引連れ大江の入道。餘すまじとて追取巻く。詞ヤア物々しやと三人が。抜放したる太刀風に地恐れて近寄る フシ者もなく。地入道一人を引挾み。詞これまで工みし悪の報い思ひ知れと首打落し。地悦び勇む和田三浦。佐々木が家の四つ目結。その結び目は代代までも。解けず。治まる秋津國榮えの。春ぞめでたけれ

明和六己丑年

十二月九日　近松半二

八民平七

作者　三好松洛

竹本三郎兵衞

神靈矢口渡

座本　豐竹新太夫

序詞楚辭に曰く身既に死して神以て靈なり。子が魂魄鬼の雄となる。されば國事に死する者。精神强壯武毅長く。百鬼の雄傑たるとかや。遠く古を考ふれば。異國の伯有我が朝の。菅家の例目のあたり。武藏國荏原の郡。矢口の村に鎭座まします。新田大明神の御神德。オロシ靈驗ありとも。中々に。地申すも恐れ大君の。御代傳はりて九十九代後光嚴院のしろし召す。天に二つの日の本や南北朝と引分かれ。都の花の歸り咲き吉野の內裏に座ますは。後醍醐帝第七の王子後村上の皇子。假の皇居も月移り。爰も雲井の御所作り經營。フシ殘る方もなし。地附添ひ給ふ公卿には。四條大納言隆資卿　坊門　宰相清忠卿。

其外公卿殿上人禮儀正しく參列ある。地頃は延文四つの年菊月半。召に依つて參內と披露して。新田左兵衞佐義興。智仁勇備の御貌御階のフシ本に平伏す。地隆資卿笏取直しイカニ義興　詞汝を召す事餘の儀ならず。父義貞北國に亡び。楠父子討死してより無勢の南朝を見侮り。尊氏押して將軍に任じ。倅義詮を都に差置き。其身は鎌倉に引籠り。四海を併呑せんず勢。捨置かば御大事。地汝を討手に遣はすべしと。之なる清忠の奏聞。此事勅問あらん爲といとフシこまやかなる詔。地義興はつと袖かき合はせ。詞同じ清和の流れにて。一門ながら朝敵の首領といひ。父の仇にて候へば。尊氏を亡さんと晝夜軍慮を廻らせども。地彼が勢四海を覆ひ。味方小勢の此時節。軍を出し候はんは。謀なきに似たり。詞義興退いて考ふるに。彼が執權畠山入道道誓。高師直師安にも。劣らざる奸曲我儘。已れに親しき輩には功なきに所領をあたへ。疎き者は忠臣をも退ける。これを惡む者多ければ。地足利家內亂を生ぜん事遠かるべからず。其時節を考へて　楠正儀と心を合はせ。京鎌倉を亡さんは。義興が方寸に候。詞天の時至らざるに只今義興討つて出でなば御勢少なき皇居の守護。地心許なく候とフシ勅答あれば。地坊門清忠。詞ヤアまはり遠き義興が軍慮。足利家の內亂を待つて。謀をなさんなどとは。相手のしぞこなひを待たんとて。端の步兵をつく下手象棋。差當つたる理に叶はず。先んずる時は人を制し。後るゝ時は制せらるゝの本文。地片時も早く討つて出で。尊氏

を亡せよと。横紙破の一言を。聞流して義興公。詞ハア詩歌管絃は天上の御玩。軍の事は武門の職。百度戰ひ百度勝つも善の善たる物ならず。謀を帷幕の內に廻らし。勝つ事を千里の外に決するは。地身下肖なれども義興が軍慮の奧儀。詞當時守護の武士少き皇居を捨てて軍を出さば。義詮が京都の軍勢。襲ひ奉らんは必定。地其もと亂るゝ御大事此儀は是非に御無用と。いはせも立てず坊門清忠ヤア過言なり義興。詞官軍少きに似たれども。和田楠を始めとして。皇居の守人いくらもあり汝一人居らぬとて。御味方事缺くべきか。ム、聞えた／＼。軍慮にかこつけ尻込みするは。地軍が怖いか。恐しいか。卑怯未練の臆病者。詞コリヤ綸言は汗のごとし。違背すれば違勅の科。討手に行くか。但しはいやか。なんと／＼とせりかけ／＼。地己が工を押隱し。勅定ごかしの　フシきめ壓狀　地義興公胸にすゑかね。軍慮の妨天下の仇。引きおろして只一討と。立寄りしが待て暫し。禁裡の騷ぎ君への恐れ。さりながら時節至らぬ今度の討手掛き負をなすならば。先祖の名をれ家の恥。父義貞叔父義助。楠親子が跡を追ひ。潔く討死し。末代に名を穢さじと　スヱ思ひ定めて御前に向ひ。詞勅定の趣畏り奉る。それについて一つの願ひ。先祖賴光より傳はりし。水破兵破の二つの矢。代々源家の重寶たる故父義貞所持せし所。討死の其後北國より差上げしを。地大內に止め給ふよし。何卒下し給はる樣。奏聞願ひ奉ると　スヱ思ひ込んで願ふにぞ。清忠卿せゝら笑ひ。詞ヤア鹿忽なり義興。忝くも二筋の矢は。養由が娘椒花女より。汝が先祖賴光へ。夢中に授けし希代の重寶。代々源氏の棟梁たる者これを所持す。汝が父義貞は左中將に任じ。總軍の大將たる故。矢を所持しても苦しからず。汝は漸く左兵衛佐にて昇殿も叶はず。地あくちも切れぬ分際で。矢を望まんとは不敵々々。及ばぬ願ひと　フシやり込められ。地こたへにこたゆる義興公。無念の眦血をそゝぎ。思ひ詰めたる　フシ其有樣。地叡慮何とか思しけん。隆資卿を近く召され。しか／＼の。勅定あれば。ハット答へて隆資卿。玉座に錺りし二つの矢恭しく携へて。階近く　フシおり立ち給ひ。詞切なる汝が望みに任せ。二つの矢を下し給はる。有難く頂戴せよと。地渡し給へば義興公。ハ、、、はつと飛びしさり。家の面目身の冥加此上や候べきと歡び給へば。清 清忠は不承不承の　フシ佛頂面。地君は二人が胸の內元來知らせ給はねば。詞早く朝敵討亡ぼし。宸襟休め奉れと。地御簾さつとおりければ。諸卿各々退出ある。フシ義興公は

討死と思ひ定めし御覺悟。これぞ內裏の見納めと名殘惜げに。見返り。見返り。猛き心も打ちしをれしづ〳〵。御門に。さしかゝる。地思ひも寄らぬ落穴。踏込み給ふ頭の上。丈に等しき大石の。どうど落つるを身をかため。兩手にしつかとフシ受止めて。詞エイヤウンと飛上り。アアラ心得ぬ此有樣。此穴へ踏込まば。とたんの拍子に此石の。上より落つる仕掛の工。扨は此義興を。なき者にせん爲に。佞人共の計らひよな。ハアをこがましや傍いたや。たとへいかなる磐石たりとも。義興が爲には塊同然。さりながらかゝる非常の此石を。內裏に置かんも穢らはしと。地兩手をずつと差しのべて。築地の外へ投げ給ふ。表に控へし伏勢の天窓の上へ落ちかゝれば。何かは以てたまるべき。壓に打たれて十餘人微塵になつて フシ死してげり。地殘りし者ども身の毛立ち。天狗の所爲か魔の業か。こはや〳〵と一同に ハズミフシ跡をも見ずして迯歸る。地凡人ならぬ勇猛力末。世に。新田大明神と拜まれ給ふも。大三重唄行末は誰が膚ふれん紅の花。案じ過しを枕に語れ。ナホスフシ 諷ふ一節。媚ける。爰ぞ都の色里へ誰も尋ねて九條の町 オクリ井筒が。內の居續は。新田小太郎義岑公。遊び勞れし フシ居眠りに。地太夫の膝を脇息の興を催ほす フシ牽頭の小吉。詞コリヤ〳〵五作汝が小唄ではお目が覺めぬ。昨日の意趣に一番參ろか。ヲヽ望みならやりかけう。コレお玉殿。三味線賴む。地アイと返事に中居が三味線。しかつべらしく差向ひ。詞問ひましよ〳〵。何でも問はしやれ。問ひましよ〳〵。問はしやれ〳〵。小袖は。羽二重。刀は正宗。坊主は。鈍才。お醫者は寸伯。女は。おもん。男は。お安。ヤア待て〳〵今のは。男にお安とは。サア一盃呑まさにや置かぬと。地寄つてかゝつて フシつぎかくれば。詞アヽコリヤ〳〵餘り騷ぐな姦しいと 地言はれて二人が 詞ソリヤコソ旦那のお目が覺めた。コレ太夫樣。お目覺しに此大盃で。旦那へ一つ上げなされ。コレ五作子。主樣は風引きなさつて。頭痛がするとおつしやつてぢや。アイヤ〳〵其頭痛の。故事來歷。かの慈姑めが。俺よりはお前が毒ぢやというた格で。風邪よりは太夫樣ナウ小吉。ヲイ三人に成つて二人が淋しがるといふ。付合の通句の通り。人交ぜずのちん〳〵こつてり。申し旦那。內にばかりござらずとも太夫樣を連れまして。東山か高尾の紅葉。イヤ〳〵おれはあんまり長逗留。今朝も兄貴義興殿から。大急用をいうて來れど。まだふらついて歸らねば。堅い顏で叱つて居やらう。ハテえいわいなせめてマア二三日。コリヤ太夫樣のが御尤も。淋しく

なると歸らうとおしやる。サアわつさりと酒にしよう。仲居衆。銚子と 地立騷げば追々出づる仲居ども。詞さつきにいうてやりなはつた。江戸兵衛様が來なはつた。追付け爰へ見えるぞ〳〵 地都では藝子と名付け東では踊らぬ時も踊子のすんとして又謙しきは夫者と町の藍こび茶物好したる袖裾も引かば轉ばん其風情 地義岑公はじろ〳〵と。不思議さうに顏打眺め。詞おりや江戸兵衛というた故。男藝者かと思つて居たりや。コリヤ美しい踊子だ。サイナ。あの子はナ此中江戸から登りなはつて。どうすぺいかうすぺいと。まだ詞が直らぬさかいで。ある名は呼ばいで。江戸兵衛様と仇名ばかり呼ぶわいナ。ムムそれで聞えた。ヤ申し旦那。同し兵衛でも少しの事で。助兵衛でなうて仕合せでござります。アイきついおてらしさ。わつちや此間上りいして。まだ勝手を知らないから江戸詞を言ひやすによ餘り笑つてくれなさるな。アイヤおれも上州の新田で育つた故京の詞はなまけて惡い。ならうなら太夫なども。江戸の詞にしてほしい。アイお前の折々さう言はんすさかいで。わたしも此間藝子様に江戸詞を習ひやんした。稽古にいうて見やんしようと江戸兵衛が 地胸ぐら取つて。詞コレナぬしや詰まりんせんよ。わつちが方を打ちやつて。此中も丁子屋のみな鶴様の所へいかんしたを。子供らが見付けんしたわナ。見なんしアノ。まじめな顏わいほんにあつかましい。餘り馬鹿らしう有りいすによ。ホヽヽヽヲヽ恥かしとフシ袖覆へば。詞ハヽヽヽコリヤ太夫様出來ました。地どうもいへぬとそゝり立ち一度にフシどつと打笑ふ。詞ナント小吉も五作も。閉口か。イヤモ。閉口の段ぢやござりませぬ。閉口次手に此所で。江戸役者の聲色を。やりかけ山。江戸兵衛様彈いて下んせ。オンドこれもお江戸に隱れなき。市川の團十郎で申しましよ。市川の。三升でせい。詞アヽコリヤ〳〵。いけもせぬ聲色置きにしろ。南無三寶又付けた。折角つかひ掛けた所をとめられ。痳病にならねばよいがと。地天窓をかけば仲居のお玉。詞申し江戸兵衛様。お前此中言ひなはつた。きやんとやら。わんとやら。喰付く様な喧嘩の身ぶりが見たいわいな。ヲヽ又身かへ久しいもんだよ。わつちや恥しいによ、モヽヽヽそんな事ツたずつと流しさ。コリヤよからう。地所望々々と口々に。望めば フシ立つて身拵へ。詞子供衆その帨巾取つてくれなと 地いふ間に五作が緣側の。布簾はづして當座の肩衣。詞東西々々此所で京と江戸との喧嘩の身を致し分けます。御神妙に御一覽下さりませう。其爲のお斷り左様に 地烟管で枕をか

ちく〳〵。詞マア上方の出入はナ。頭巾をかうかぶつて。草履下駄にてかういふ身ぶり。おつな胴聲を出して。コレ〳〵若いの。ちよと橋詰迄出て貰ひやんしよ。ちよと下に居て下あれと。ヲ、此様なまだるい事で日の短い時の間にや合はぬによ。江戸の喧嘩は。帨巾をかう打懸けて。かう肩を力ませて。何のこんだはつつけめ。人を茶にしあがつたうぬが様な癡心漢は。鼻の穴へ花緒をすげて。何でも安賣り十九文日和下駄にしてくれべい。いま〳〵しい置きあがれ 地ホ、、、こんなものだと打笑へば。皆一同に打ちこけて。フシ興を催すばかりなり。地騒ぎの中に仲居が采配。詞とかうする内夜が更けた。モウお休みと 地いふ機會に然らば旦那又明日。詞太夫様江戸兵衛様。ヲ、皆大儀だ歸つて休め。そんならもういなんすかえ。アイわつちもお暇お玉殿や三味線箱頼んますによ。ヲ、皆様ようお出でたさばへ。アレ小吉様の又じやうだん。悪事しなさるな。詞さるなは妙義の隣なり。りなりの宮へ参らうか。らうかからうかの物案じ。あんじ宜しう 地頼みやすとどよめき フシ連れて立歸れば。地義岑公も一間の内ォクリ涅槃の へ床に入り給ふ。地一間 の内よりぶつつかは面ふくらせし坊主客。詞どいつもこいつも初會だと思つて。餘りむごくしあがる、モウ來るか〳〵と賣れぬ根附を見る様に。蒲團の上に待ちぼうけ。地いま〳〵しいと言ひつゝ傍見廻し〳〵。相圖のしはぶき二つ三つ。跡より出づる竹澤監物秀時。江田判官景連有り合ふ褥を携へ出で。フシ先づ〳〵これへと招ずれば。地おめず臆せず褥の上どつかと居りし大入道。尊氏公の執權職畠山入道道誓とは言はねど フシ顔に顯はれたり。地兩人は近く差寄り。詞家内もふせり。娼妓どもも寐させ置き間を隔てたる此座敷。とくとお談じ申上げん。ホ、豫てより此入道天下に望みある故に。地防門の清忠と心を合せ。新田足利威を争ひ。合戰に及ぶ様に糸を引かせ。楠親子義貞なんども 謀 の圖をはづさせ。憤らせて討死させ尊氏一人になつたれば。詞折を見合せ刺し殺し清忠を王位に卽け。此入道將軍職。お手前二人を兩執權と思へ共。地南朝にある新田義興。親にも勝る大こは者。きやつが此世にある内は中々大望思ひもよらず。かの楠を湊川へ無理に追ひやつた其格で。尊氏追討の勅定ごかし焦れさせて討死さすか。それ迄もなく討取るかと様々の計略。詞サアそこを存じて此判官。清忠殿としめし合はせ。地南朝へ忍び込みきやつが内裏を出づる時。門の上に大石を上げ置き。下には落し穴を仕掛け踏めば上から落ちる様に。工夫

を以て拵へ置きしに。詞サアお聞きなされ。豫て義興大力にて二十五人力ありとの噂故。三十人にて持兼る大石を。頭の上から落しかけしに。宙にて受留め剩へ。手鞠か小石を投げる樣に。地築地の外へ投出し。此判官が伏勢十三人迄打殺され。近年の大しくじり。詞イヤ〳〵そんな事では參るまい。此監物が思ひ付には弟の義岑め。此廓へ入込みしこそ幸ひ。きやつから取入れ一思案。ヲヽ其事は此入道も油斷なく。二人の家來を率頭に仕立てて付置いたり。ハア此監物は義岑が相方。臺と申す女郎をたらし込まんと色々の贈物。樣々に拵へてもこいつも賢き女にて義岑に心中立て。むさと大事も明されず。旁以て難儀至極。其上水破兵破の矢は武運の守となる故に。尊氏公も御懇望。これも義興が手に入れば。地兎角こつちが皆すかたん。ハテどうがなと三人が慾惡無道の思案とり〳〵。横手を打つて竹澤監物あるぞ〳〵上分別。詞某は親入道より新田方の幕下に屬し。方々にて手柄もありしが。地義貞討死の其後は入道殿の御世話にて。尊氏公へ宮仕へそれからの思付き。ムヽ然らば篤と一間にて隈合はさんいざ此方へと三人はオクリ打連れ〳〵奥へ入りにける。地思ひ〳〵の。夢結ぶ座敷々々も子の刻過ぎ。一間を出づる義岑公。詞ナウ臺其竹澤監物とやらはどうしてそなたを其樣に。サイナ死んだ娘と私が顔が生寫し。娘ぢやと思ふとて。紋日其外氣を付けて樣々の贈物。地とくにもお前へいふ筈なれど。尊氏方の人なれば。方便も計られずと。今迄お耳へ入れませなんだ。詞ムヽ今時の人心むさと氣は許されずと。地咄の半ば一間の內。はつたばた付く物音人音。先づ〳〵こちへと義岑公障子の。フシ陰に立忍ぶ。地透間もなく入道道誓。懷劍持ちし竹澤が。腕捻上げ怒りの大聲。詞我をたらして遊所へ引出し。寢首かゝんず謀。エヽ憎い奴と捻伏すれば。地竹澤無念の齒がみをなし。詞汝が首を土產にして昔のよしみ新田方へ。奉公と工みしに。其方便の顯れしは。地エヽ殘念やと起返るを。刄物もぎ取り入道が緣よりどうど蹴落し。詞判官心得たりと刀の背打骨も碎けとぶち据る。竹澤息もたえ〳〵に。手足をもがき七轉八倒入道聲懸け。詞モウよい〳〵。一思ひに殺さんより世上の見ごらし逆磔。其松にくゝし付け。夜明けての上成敗せん。イカニモ左樣と地判官が。ぐつとしめ上げ。フシ猿つなぎ。詞夜明けぬ内にいさお歸り。泥坊めは此通り縛つて置けば氣遣なし。處刑は家來に言付けんフシイザ歸らうと。兩人は。したり顔にて出でて行く。地始終忍んで立聞く臺。手燭携

へ走り出で。庭に飛びおり漸うと。禁解いて耳に口。詞竹澤樣監物樣と呼生けるフシ息吹き返し。詞ホヽ臺殿か忝い。我も昔のよしみ有れば。新田方へ奉公せんと。兼々こなたへ頼め共。一旦尊氏へ隨ひし某故疑ふも尤。地一つの功を立てんとて仕損ぜし殘念やと。スヱはら／＼／＼とこぼるゝ。涙。臺も倶に貰ひ泣き。詞ヲヽ御無念は御尤。私を娘も同然に。地思召して下さります。お心を疑ひてかういふ時宜は私が科。こらへてやいのと取縋れば。詞コレ／＼泣いて居る所でない。義岑公お入りの事は兩人がけどつたれば。地討手の來んも計りがたし。早々落し參らせよと。詞も終らぬ其所へ。どつと込入る捕手の大勢。詞ヤア／＼義岑此家に居るをはかり知り。入道殿の下知を請け荒濱軍次向うたり。恥を思はゞ腹を切れと。フシ呼ばはり／＼亂れ入る。地臺を忍ばせ竹澤監物。物をも言はずなぎ立つれば。コリヤ叶はぬと大勢が表をさして逃げて行く。地いつの間にかは入りけん。障子の内より荒濱軍次臺を小脇にかい込んで。飛んで出づるを竹澤監物首筋摑んで引戻し。拔身もぎ取り軍次が首。フシ討落してつつ立てば。地障子開いて義岑公。詞ホヽ監物疑ひ晴れた。地當座の褒美と投出す一腰。ハア有難き御惠。昔に變らず御奉公。又も討手の來るは必定。詞君には早く御歸り奉公初め路次の御供。エそんならお歸りなさんすかえ。隨分お怪我の地ない樣に頼みまするとフシ臺が名殘。詞ヲヽ我は裏より密に出でん。監物は表より。委細は承知仕る。イケ。地ハアハツト表をさして。三重走へり行く。謡千早振る。神の惠の岩清水。巫女が鼓も。聲すめり。地新田左兵衞佐義興公。今日出陣の龍頭鍬形打つたる五枚兜。緋縅の御着長威あつて猛き御骨柄。同舍弟小太郎義岑色香爭ふ若武者の。花の姿や小櫻をどし御供には竹澤監物秀時。其外家の子士卒迄萬燈の火に映じたる。鎧の金物武の光實も。フシゆゝしく見えにける。地義興仰せ出さるゝはイカニ方々。詞此度朝敵足利尊氏。討亡せとの勅諚なれども。必定今度の一戰は。はか／＼しき勝利はあるまじ。地閫の外は武將の下知。軍の事は臣に任せ時節の來るを待ち給へと色々諫め申せども。詞親義貞には劣りし器量。卑怯至極と淸忠が惡口。達て諫めば臆するに似たり。地先祖の名迄穢さん無念さ。天運未だ至らずとも。正八幡の御利生。源氏を守りましませと。詞此宮居にあのごとく。神慮を仰ぐ萬燈は。地神の惠を頭に戴き。一戰に討亡し。宸襟やすんじ奉らん爲。詞ヤアイカニ監物。汝は新參ながら武藏の國の產と聞く。敵地の案內よ

つく知らん。此度の先陣は汝たるべし。地猶も忠勤勵むべしと。仰せに監物頭を下げ。詞ハア、有難き御詞。新参の某。大役仰付けらるゝ段武士の面目身の本望。地君の武勇に聞きおぢして。脚腰立たぬ足利勢。味方は一致の逸武者。只一揉に踏破る味方の勝利疑ひなし。片時も早く御出陣と。萬卒フシ一度に悦びの。地聲に勇みの御大將。詞イザ神前へ御暇。賽もうしの柏掌の。地音かあらぬか砂煙ぱつと吹き來る風に連れ。一度に消ゆる燈籠の。コハリ皆常闇の神の告げ纔に。フシ殘る一燈の。地光は薄き武運かと。胸に當りし義興公。所詮勝利はなき身ぞと。極めし上に極まる覺悟。心に徹して小太郎も。あら心得ぬ此不思議。詞尤も火を烈しくなすも風。消ゆるも風とは言ひながら。燈し立てたる萬燈の。一時に消えしは今度の一戰。敗軍との告げなるか。御身の上も覺束なし地とくと賢慮を廻らされ。然るべしとのたまへば。竹澤進んでコハ義岑公の仰せとも存ぜず。詞神力勇者に勝つ事あたはず。何のこれしきに神の告げ。今南朝北朝と引分れ。威勢にはびこる尊氏が。峙つたる萬燈を。地まつ此如く打消して。南朝一統の世になさんとの知らせの一燈。目出度き奇瑞に候と匠工ある秀時が。フシ詞を飾つて申しける。地義興莞爾と打笑み給ひ。詞ホ、よくも祝ひし監物。義興思ふ仔細あれば。義岑は只一人。密に都へ立歸り。禁廷の守護怠るなと。地仰せに義岑大きに驚き。詞コハ兄上の詞とも覺えず。一旦御供申せし某。目前怪しき神の御告。いよ〳〵以て心得ず。片時もお傍を離るゝ事は思ひもよらず。地生きるも死ぬるも兄弟一所。但し用に立たぬ腰拔けと思召しての御事かと。言はせも果てずイ、ヤ左にあらず。詞命を捨つるは君の爲。子孫を殘すは家の爲。水破兵破の二筋の矢。敵足利尊氏も同じ清和の流れなれば。豫て望と聞き及ぶ。參内の折から地君恩の有難さ。清忠が支へしかど。某に下し賜はりしは。弓矢の冥加家の譽。詞戰場に持つならば若し運盡きて兄弟一所。討死せんも計られず。さある時は家の重寶。敵方へ渡さんは先祖へ不孝武名の疵。又心得ぬは坊門清忠。必定朝敵一味の輩。地我々都を出るならば其虚に乘らん彼等が工。我に代つて君を守護し。必ず忠勤怠るな。天の命數限りあり若しも運命盡き果て身は戰場に曝すとも。名は末代に輝さん。汝は都へ立歸り。時節を待つて消え殘る火影の如く源の。氏の光を輝かせ。南朝世々の忠臣と末代に武名を上げよ。詞此詞を用ひずば。未來永々勘當ぞと。地必死と定めし武士の口には

言はで心にはこれ今生の別れぞと。さしもゆゝしき御大將。恩愛離別の。フシ目の內に滿る。涙の伏勢を防ぐ。智謀はなかりけり。地義岑も勘當との。重き詞に詮方も。涙を押へて詞ハ、ア畏り奉る。勝負は時の運なればたとへ敗軍あるとても。必ず短慮に思さずとも。目出度く凱陣待ちまする。地ホ、聞入れあつて滿足々々。今汝に與へ置く二筋の矢を心のかため。二張の弓の名を取るな。詞ヤア〳〵めん〳〵。篠塚八郎重虎は軍勢催促に遣はし。此所にはあらねども斯くと下知を傳へたれば。追々跡より駈け付けん。地イザ出陣と。仰せの內引出すお召の白栗毛に。ゆらりとフシめせば。地義岑は見上げ見おろす血筋の別れ。武士の盛を吹きちらす無常の。嵐櫻井の親子の思ひ。楠が名は磐石と堅めたる。義心に劣らぬ義與公障泥立てたる。鐙の鳩胸隼の。翅と駈ける駿足の跡に隨ふ諸軍勢。飛ぶがごとくに。フシかけり行く。地跡に義岑しみ〴〵と。肝にこたゆる同胞のスヱ別れに心。しをしをと影見ゆる迄。伸上り。見送る影も旗の手の。次第々々に遠ざかればスヱ涙をふくんで立つたる折から。思ひがけなき宮居の陰。どつとフシ上げたる鬨の聲。地スハ何者の寄するぞと。傍を睨んで立つたる所に。詞ヤア〳〵新田小太郎義岑。見參と聲かけて。地蹄を飛ばす。駒下駄や半太夫ゆり上げ褄の八文字。どんなお敵も。弓張の目元の月や花の顏。戀の。臺が寄せかけて。意氣と派手との。合討手の大將。跡からどや〳〵禿末社。詞ヤアそなたは臺。コリヤどうぢやと。地力身し腕も拍子拔け。敵は敵でもフシ憎からず。地臺は傍見廻して。詞ヲ、あの悔りの顏わいナア。いつぞや廓の別れの時。兄御樣と御一所に。武藏とやらへ軍しにいかねばならぬとおつしやつた。聞くと持病の此痞。どうぞいかずと濟むやうと。神々樣へ立願やら。はだし參りのかひもなう。けふは出陣なさるゝと。聞いて身も世もあられぬ故。お顏が見たさ逢ひたさに。地あの衆賴んで遠い道。來ごとは來ても大勢の。詞侍樣方兄御樣の前といひ。物いふ事もならぬ品。どうかかうかと思ふ內。結ぶの神の義與樣。都にお前を殘すとは。粋の上もりヲ、嬉し。エ、何ぢやいナ濟まぬ顏して。人の思ふ樣にもない。地憎い男と鐙ごし。詞ヲ、いた。つめつても擲いても。こつちの手が痛むばかり。コレイナア。エ、そんな機嫌ぢやないわいの。どう思ひ廻しても。一所に行かねば兄上の。御身の上も覺束なし。ア、申し〳〵旦那。お前をやつては太夫樣より此五作がきつい難儀。ヲ、それそれ。太夫樣もよく〳〵に思召せばこそ。

傾城の。晝寐ぬ程に思ひ詰め。どうぞ今一度お顏が見たいと。屋敷方の女中方が。芝居行きか何ぞの樣に夜の九つからどつさくさ。道は飛ぶやら駈るやら。外八文字も一文字。所にやんだお前の出陣。悦び事の我等が趣向。地お敵の旦那を討つてしめる寄手の大將太夫樣。四方を取卷く此鎗手。亂調に打つ太鼓持廣げる指の亂杭逆茂木酒肴。兵粮のコレ〳〵〳〵コレ〳〵此提重幸ひの幕の內。地跡賑はしに呑みかけう堅い姿のお床入り。詞コレ門出の笑ひ本サ、、作物や乾物ものとは違ふ。生の物を生でお目にかける。サアサア地お出でと無理やりに。道に弱る色の道。女のよれる神がきに是非なく フシ引かれ入り給ふ。地跡に二人はしたり顏。詞兼て望みのかの一物。引つたくつて主人へ渡せば褒美はずつしり。色男でも道の義岑。あら立てては事の破れと。地幕を覗いてうまいぞ〳〵。詞例の大酒のとろつぺきアノ紛れに奪取らん汝は傍りに眼を配れ。ヲ、サ合點首尾よくせよと。小吉は幕へ跡には五作。四方に氣配りコハリ忍び足。なんなく御矢盜み取り。小吉が小聲に上首尾々々々。詞是さへ取れば義岑を。ぶち殺すは手間入らず。片時も早く主人へ手渡しサアこいと。地逸足出して フシかけり行く。地俄に騷ぐ幕の內。かけ出る義岑に。取付き縋る臺もともに。引摺られても放さばこそコレ〳〵申し殿樣。詞氣相かへてコリヤ何事。なんぞ夢でも御覽じたか。コレ氣を鎭めて下さんせ。ヤア何事とは。兄義興より預りし大切の二筋の矢。思ひも寄らぬ紛失。兼て尊氏懇望と聞き。敵方へ奪はれては味方の不吉我が越度。地兄上への申譯と。差添拔く手に取付く臺。詞イヤ〳〵放せ。マ、、マア待つて下さんせ。ヲ、道理ぢや〳〵〳〵が。コレ。申し。今お果てなされては。誰が殘つて御矢の詮義。兄御樣へ此樣子。申上げる人もない。もうかうなつた上からは。再び廓へ歸らぬ胸。身を碎いても詮議して。其上で叶はずば。私も一所に冥途のお供。地死ぬる命は惜しからねど。此御難儀も皆私故。詞コレ堪忍して暫くの。お命ながらへ地野の末。山の奧までも夫よ妻よと呼び呼ばれ。一所に居たらわしや本望。思案して下さんせと。女心のくど〳〵と跡や先立つ フシ淚なり。詞ム、尤も〳〵よく言うた。此所で相果てなば。盜賊の詮議もならず。犬死となる骸の恥辱。一先づ此場を立退いて。草を分かつて御矢の行方。地定めなき身の俄旅小褄引上げ帶引締め。身拵へする間もなく。引返して二人の牽頭。跡に付添ふ數多の家來。ソレ討殺せと追取り卷く。詞ヤア合點の行かぬ二人の奴

原。扨は御矢を奪取りしも。汝等二人に極つたナ。何國の誰に頼まれしサア。眞直ぐに白狀せよ。ヤアちよこざいな詮議だて。引つくゝつて主人へ土産。地アレ打据ゑよと聲に連れ。捕つたとかゝるを身をかはし。投げすゑ蹴すゑ踏飛ばし。手を盡して働けど。敵は大勢身は一つ。見るにハア〳〵臺が案じ助けん方便も女業。群る大勢義岑の。手取り足取り打倒し。既に危き折こそあれ。篠塚八郎重虎は主君のお供の後ればせ。かくと見るより飛びかゝり。家來を投退け踏散らし。詞様子聞く間も足弱連れ。此場を一先づ落ちさせ給へ早う〳〵と見送つて。地宮居の前に鳥居立ち。遁さぬやらぬと家來共。兩足兩腕數十人。押せどしやくれど動かばこそ。詞にこ〳〵ほや〳〵打笑ひ。ム、、、ハ、、、うづ虫めらがほでてんがう。新田の御内に隠れなき。四天王と呼ばれたる篠塚伊賀守が嫡子八郎重虎。此兩足はは え抜きの。大佛柱を鬉鼠。動かぬ事いかぬ事。助けたとて殺したとて。高の知れたる下臈ども。早く此場をなくなれ〳〵。ヤア下臈とは推參なり。畠山入道の郎等石原丹治逸見ノ傳吾。姿をやつし義岑を討取る方便の索頭一ぱい喰はせて奪うた御矢。主人へ渡せば新田の滅亡。廣言吐く前髪首。さらへ落せと切込む刀。柄と拳を一握り。ヲ、さうぬかせばモウ助けぬ。御矢の盜賊覬念と。一振ふつて打付けられ。ソレ遁すなと下知の下。どつと馳寄る雜人輩。引つ摑んでは人礫ばらり〳〵と三重へ投散らす。地無法不敵の石原逸見。隙を窺ひ切りかゝる。身をかはして鐵拳。素頭ぴつしやり石原藥鑵あたま。みぢんに碎け逸見傳吾。一度に息はたえにけり。地ヲ、氣味よし心地よし御矢の有所は畠山。都にあれば一大事。かくと様子を若殿の。御身の上も覺束なし。一先づ館へ。イヤ〳〵。先づ我君に追付いて事の次第を申上げ。思案ぞあらんあら金の。土砂踏立つる猛虎の駈り。獅子奮迅の勢ひは。實も新田の十六騎。共隨一の勇士の學。父も父たり子も子たり。二代の忠臣條塚が武勇を。代々に傳へける。

第二

詞月の名所を引きかへて。霎やかしこの鯨波。地矢並繕ふ小手差原。鬩たばしる武藏野の。空物凄きフシ氣色かな。地新田左兵衛佐義興公。勅命もだし難ければ今度の合戰は。討死と覺悟極めし軍立て。日を馳違ふ馬煙太刀の鍔音天地に響き。魯陽が勢ひ山を抜く。項羽が力も是にはいかで勝るべき。瘻まず去らぬ戰ひに。さしも多勢の鎌倉勢。フシ色めき

立つて見えにける。地追來る敵を喰留めんと。鎌倉方の侍大將。江田ノ判官景連家の子郎等前後を圍ひ。太刀拔きかざし驅向ひ。手を碎いたる働きに勝ちほこつたる官軍も少ししらけて見えたる所に。詞ヤア卑怯なり方々。竹澤監物秀時これにありと呼ばはつて。地判官目がけ討つてかゝれば。家來は主を討たせじと。驅け塞がるを竹澤が縱橫無盡に討ち散らせば。敵はぬ赦せと迯げちるを。遁さじやらじと追つかけ行く フシ其隙に。地江田判官漸ろと迯げのびて味方の加勢を松原に。フシ鎧突して居る所へ。地取つて返す竹澤監物まつしぐらに驅着くれば。判官も駈向ひ丁々はつしと渡り合ひ。合暫しが程は戰ひしが双方太刀をがらりと捨て互にむんずとコハリ引組んで。えいや〳〵と揉合ひしが。傍見廻はし起上り。フシ塵打拂ひ小聲になり。詞ナウ判官殿其以來は。サレバ〳〵敵味方と隔たれば互に書通の取遣りばかり。シテ其許の手都合は。いかにもいよ〳〵上首尾々々々。始めの程は義興めも中々微塵も氣をゆるさず。サ欺すに手なしと此監物。さま〴〵の忠節顏。今では譜代同然に心置なく軍の相談。それは重疊。兼て牒し合せし通りいつでも貴樣が討つて出ると。味方は迯げる貴樣は追ふ。手柄させて義興に。取入らせんと思ふ故。先程は此判官も足早に迯げ申した。イヤモどうもいへぬ迯げぶり。よつ程下地がありさうな。フシハヽヽヽとにが笑ひ。詞コレサ監物殿。義興が氣を緩すこそ幸ひ。飛びかゝつてすつぱりは。イヤけもない事〳〵。さう早まる故先達ても吉野で貴樣大しくじり。知る通り力は強し。打物取つては鬼神同然。古今に稀な早業手利。ハテナウそんなら所詮いけまいか。サいかぬ所をやるが工夫。釋迦でも喰はせる我等が方便委しくはこの白紙と。地渡せば取りて不審顏。詞何此白紙が思案とは。ヲヽサ假初ならぬ密事の計略落ちても人の見ぬ樣に。此白紙に認め置き水にひたせば皆讀める。コリヤおそろだ。出來た〳〵上分別と。地點き囁きフシしめし合はする折からに。地又も聞ゆる人馬の音。詞ヲツト任せと渡り合ひ。二打ち三打ち。地仕組の狂言迯るをハズミやらじと竹澤監物。返せフシ戻せと追うて行く。地義興公は只一騎。尊氏に近寄つて一時に勝負を決せんと駒を早めて駈け給ふ。大將と見るよりも。一度に寄來る鎌倉勢。八方より取圍み。我討取らんと切つてかゝる。詞シヤもの〳〵しやと驅向ひ。追つかけ追ひ詰め切りまくる地神變不思議の太刀風に。吹きちらされし木の葉武者。むら〳〵ぱつと。フシ迯げて行く。詞ヤア數にもたらぬ。雜兵どもうぬらを

目懸くる義興ならず。イデ尊氏に見參と。地乘出さんとし給へば。コハリ馬は俄に高嘶き打てどあふれど進まねば。詞ムヽ扨は。此茂みに伏勢ありと覺えたり。シヤ何程の事あらんと。地進まぬ馬をあふり立て。駈け出し給ふ後より。案に違はず武者一人。鎧の上に蓑打ちかけ顏を隱せし强盜頭巾。馳行く馬の尾筒を抓んで引戻せば。詞ヤア推參なる曲者。討放さんは易けれど此義興が乘つたる馬を引留めんとはしをらしゝ。ならば手柄に留めて見よと。地一鞭當てて駈出す。馬は駿足乘人は達者。踏出す足なみどう〳〵〳〵。合鐙の金物から〳〵〳〵。互のかけ障泥の音。谺に響く武藏野にまだ枯殘る初冬の芒刈萱女郎花亂れ。散りてぞ三重へもみ合ひしが。地きやつもしれ者踏みとゞめ引いつ引かフシれつ爭ふ內。地頭巾は脫げて見合す顏。詞ヤア其方は我が家來由良兵庫助信忠。ムヽ其意を得ざる今の振舞ひ。南瀨六郎と其方は。我が家の政務を任せ故鄕新田の城を守らせ。妻子を預け置いたるに城を打捨て來るのみならず。今尊氏を追つかけんと。乘出せし此義興が。邪魔せしは所存ばし。あつての事か速かに返答せよと。以ての外の御怒り。地兵庫助は義興の姿を見上げ思はずも。はら〳〵はらと淚を流し。詞君勅命を蒙り給ひ。大將たる御身にて。匹夫の勇を好ませ給ひ。かくかろ〳〵しき御振舞ひ。千斤の弩は鼷鼠の爲に發たずと。申す事は申さずとてもよく御存じ。すべて此度の軍の樣子日々注進の趣にて。とくと思案を廻らすに。日頃の軍慮に違はせ給へば。必定今度の御出陣は。討死との御覺悟と。睨んだ眼に違ひはあらじ。是非御留め申さんと御館には六郎を殘し置き。密に來つて樣子を伺ひ。御所存とくと見定めたり。地御氣に障る事ありとも。恥を忍び身をこらし。年を重ね日を積まねば。大功はなしがたし。一旦の御怒りに御身を失ひ給ひなば。誰あつて天子を守護し。朝敵を亡して。公家一統の代となさん。エヽ情なき我が君やと。或は怒り或は歎き詞を盡しフシ理をせむれば。地義興公も內裏の首尾。我が胸中を打明けて。物語らんかいやいや〳〵。彼に打明け語りなば。行先へ付きまとひ諫めんは必定。所詮決せし覺悟なれば。止めらるゝもむつかしと。さあらぬ體にてイヤトヨ信忠。詞それは皆汝が廻り氣。討死の覺悟のとは。思ひも寄らぬ一言。目に餘る敵の大勢。士卒の心を勵まさんと。手をおろしたる我が働き。イヤ〳〵いか程に御意あつても。此兵庫がある內は一騎立の御働きは金輪際お止め申す。敵陣は此兵庫が。地一當て當てて御目にかけん。君は暫く御休息と。蓑脫ぎ捨てて

一さんに。敵陣さして フシ駈り行く。地大將の御座所尋ねさがして味方の軍勢。井の彈正を始めとして。追々に駈來り。一息ほつとつぐ所へ。已が工を押隱す惡には智惠の竹澤監物。首二三級提げ來り。フシ實檢に供ゆれば。地大將御覽じ。詞ホヽ監物。數度の高名手柄々々。軍の樣子はなんと〳〵。さん候頃日數日の戰ひにて勝に乘つたる御勢に。兵庫が荒手差加はり。手ひどき味方の軍配に。地勞れ果てたる鎌倉勢。尊氏を始めとして鎌倉さして逃げのびたり。この虚に乘つて攻めつけ給はゞ。敵の大勢皆殺しと。工を隱す フシ勸めの詞。地こなたは固より討死と。覺悟極めし軍なれば。いつの時をか期すべきぞ。天下の爲には朝敵。我が爲には親の敵尊氏を。討たずんば再び生きては歸るまじ。いざ追つかけん陣觸せよと。勇みにいさんで乘出し給ふ向うより。かけ來

るは由良兵庫助信忠かくと見るより提げし。敵の首投捨てて。轡づらをしつかと取り。詞コレ殿。最前も此兵庫が。詞を盡し申上げしに。まだ御合點が參りませぬ。エエ淺間しき御所存。日頃に變りし御振舞ひ。天魔が魅入れ候な。一旦負けし尊氏なれども。地鎌倉へ引籠らば中々容易く攻めがたし。一先づ故鄕へ歸らせ給ひ。英氣を養ひ時節を見て。討つて出るが萬全の謀と。お馬の フシ口を引返せば。地せきにせいたる御大將。放せ〳〵とあせれども。こなたは手強き忠義の一圖。エ、面倒なと義興公。陣扇にて兵庫が顏。目鼻も分かず丁々。打てど擲けど放さばこそ。詞ヤア出陣の先を折り。味方の英氣をくじく曲者。敵に一味か二心か。勘當ちやそこ立ちされ。主從の緣これ限りと。地扇を顏へ投付け給へば。エ、御勘當とはお情ない。何國までも御諫めと又も縋るを

鐙にて。蹴飛ばし〳〵あふり立て。諸軍一度に フシ進み行く。地跡に兵庫は呆れ果て。留めても留まらぬ御若氣。エ、是非もなき次第やと スヱどつかと坐して男泣き。詞縱へ御勘氣蒙るとも。追つかけて御諫めと。地立上る折こそあれ。さつと吹來る飄。木の葉土石を卷上げ〳〵。傍に捨てたる陣扇。ともに フシ虚空へ吹上ぐれば。地兵庫は急度眼を付け。詞アラ心得ぬ此有樣。捨置かれし陣扇。土石とともに吹上げしは。我が君の御身の上。地善か惡か何にもせよ。扇の行方を見屆けんと跡を。したうて 三重へ行く空の。地上野の國新田の庄義興公の居城といつぱ。上は嶮岨の山續き。松の古木の枝たれて。雲なき龍かと疑はれ。下は懸崖峙つて晴れざる虹かとあやまる フシカヽリ塀には矢間透もなく。亂杭逆茂木引渡し。要害堅固に見えにける フシ頃しも。小春。中空や。味方の

勢の木枯に敵を木の葉と吹きちらす。武蔵野の勝軍御壽あるべしと。御臺所筑波御前まだ三歳の徳壽丸。乳母が膝にいたいけ盛り。地お傍の女中立ちかはり敵にかち栗熨斗昆布。銚子とり／＼持運ぶ。お家の家老由良兵庫助信忠が妻の湊。一子友千代を乳母に抱かせ手づから捧げる島臺も。君を祝する鶴龜にやたけ心の味方の手柄。松に寄せたる御壽御前に直しフシしとやかに。詞御勝軍の御祝儀お目出度う存じますると地申上ぐれば御臺所。詞湊が毎日の出仕大儀々々。殊にけふは勝軍の祝儀とて心の付いた上物。これまで日毎の注進に一度も悪い沙汰もなく。十一分の味方の勝。殊に一騎當千の兵庫助も跡から加勢氣遣ふ事はなけれども。地くど／＼思ふは女の常若しや深入りし給はんかと宜ければようて案じられる。詞イエ／＼そこはぬからぬ私が夫勝つて兜の緒をしめる御用心させませんと。跡から参る程なれば。殿様のお身の上夫の事に案じはなけれど。私が弟の篠塚八郎。まだ年若な氣丈者。仕損じもあらうかと。こればつかりが心がかり。イヤ／＼八郎が手柄の様子。とくより委しう聞いて居る八幡での働き流石お家の四天王。伊賀守が子程あるとて。一家中の譽沙汰。ヲ、よい弟を持ちやつた。アレ見や友千代があの氣丈。同年でも徳壽よりは大がらに見えるわいの。兩親の血筋どちらへ似ても強からう。此若がよい片腕と地殘る方なき御機嫌に詞ハア有難いお詞ほんにそれよ。御家中の内儀達御祝儀申上げんとて。お次に控へて居られます。ヲ、それは皆大儀々々是へ通せのお詞に。地お侍女中の案内にて一家中の妻女達オクリ連れて〽御前へ立出づる。フシ思ひ／＼の。島臺や。劣らじと氣を播磨潟。君の御名も謡高砂や敵をさつと掃きちらし。地首をさらへの尉と姥小オクリ五十あまりの年ばいはさすが思案の底深き。井ノ彈正が妻の水木。谷の戸出づる。鶯の笠に縫ふてふ梅の花。フシ勝色見せし先陣に。心は世利田右馬之助が宿に殘せし女房お鈴。言はねど薄き唇の滯りなき口上は立板に水長臺に富士の裾野の思ひ付き。フシ君の名字に仁田四郎。夫も籠れる武藏野に組んで臥猪の牙よりも。運の月形鎌倉武士。三國一の高名も時に大島長門が妻。お浪といへど浪風も治まる武功君が代は。千代に八千代にさゝれ石巖の上の釣竿は。軍の先生名も高き。太公望といふ人かと。女中は寄つて共譯を土肥三郎左衛門が。比翼と契るフシ女房お辨。道具屋七福神の船遊びしつかり入つた兵糧を。かつぐ布袋の。福祿壽身をかためたる毘沙門小手。鍛で夷の大敵を。釣寄せてハズミ

フシ打出の小槌。地市河五郎が勇力をしめてぬる夜の睦言はつがも内儀の名もおつがとて。家中名うてのフシぽつとり者。地其の外お家昵近の女房娘殘りなく。皆それ〳〵の捧げ物廣間せましとならべ置き詞勝軍の御壽お目出度う存じまするど。地一度に開く口紅や。づらりと並ぶ裲襠は。染井の躑躅飛鳥の花。眞間の紅葉に胡枝花寺を一つに寄せたる如くにて花々。フシしくぞ見えにける。地御臺は御機嫌うるはしく。詞何れも揃うて綺麗な事。爰では皆も氣が詰らう。奥へいて緩りつと。酒でも呑んでたもやいの。友千代も寢たさうな乳母も共にの 地お詞に。ハツト一度に群鳥の立つや姿の柳腰タ、キかいどりの裾長廊下オクリざゝめきへ連れて入る跡へ。地是ぞお留守の要石動かぬ胸のしめくゝり。南瀬六郎宗澄出仕の上下さはやかに。黄金作の大小も流石お家の家老職と。言はねどしるき共人品フシしづ〳〵と打通り。詞先づ以て今日は。勝軍の御祝儀恐悦至極と相述ぶれは。ヲヽ六郎か近う近う。兵庫が行きやつて其後は。軍の知らせはまだないか。ハア相役の兵庫助申上ぐべき仔細有つて。軍の場所迄參りしかど。未だ便りもこれなしと。地噂とり〳〵なる所へ。取次の女中立出でて。詞武藏野の軍場より。兵庫殿の歸られしと。フシいふ間程なく。立歸る由良兵庫助信忠。積る苦勞の黒革威差詰りたる胸板や。軍出立を其儘に。本フシしを〳〵として立出でしが。御座を見るより。ハア〳〵とばかりに兩手をつき フシ指俯いて詞なし。地心ならねば女房湊。詞思ひの外早いお歸り。そして常ならぬ御顔持。御臺樣のお案じ。どういふ譯かついちよつと。地申上げたがよいわいなと。せけばせく穏屈托顔。詞何を女の小さし出た。御諫言がお氣に障り此兵庫を御勘當。御出馬のお供も叶はず。なま面さげて歸つたわやい。エヽ御勘當とはどういふ譯。地何科あつてと驚く女房。御臺所も御不審顔六郎は摺り寄つて。詞御諫言の其仔細は。サレバサ。勝ちに乘つたる御大將。竹澤が勸めにて。鎌倉を攻落さんと。逸切つたる御出陣。其意を得ざる御振舞ひと。地申す詞も終らぬ所へ。間近く聞ゆる轡の音。コハ何事と見る所に。御注進と呼ばはり呼ばはり表御門に馬乘り捨て。篠塚八郎重虎。鎧に立つ矢簑毛と折掛け。眞一文字にかけ着けしが。ハツトばかりに息切れし。悶絶すれば湊は馳寄りコレ〳〵〳〵。詞氣を慥に持つてたも。八郎なうと地呼び生ける。六郎は聲高く。詞日頃の勇氣に似合はぬ振舞ひ。後れたるか八郎。卑怯なり重虎と。地呼ばはる聲の通じてや。むつくと起きれば。ナウ嬉しや氣が付いたかと。悦ぶ姉取つて突退けどつかと坐し。詞深手に弱る八郎ならねど。心せか

れし早打に。悶絶せしか口惜しやと。地歯がみをなせば六郎は詰めかけ〳〵。詞様子はいかにサヽ何と〳〵。されば候我が君には。武蔵野の御出馬より。勇みにいさむ味方の勢。我劣らじと乗抜け〳〵鎌倉さして攻寄する。地兼て計りし竹澤監物。江田ノ判官と心を合せて。詞矢口の渡しの舟底に。穴をくり明けのみを差し今やおそしと フシ待つぞとは。夢にもいざや白栗毛の駒に。鞭打ち我が君は諸軍に先立ち駈抜けて。かの御舟に召給ふお供に随ふ武士は。世利田大島井弾正土肥市河を始めとして。主従纔か十一騎えい〳〵聲にて押出す。固より名高き玉川の。餘所の時雨に水かさ増り。矢を射るごとき川中にて。詞兼て仕組の舟子供怪我のふりにて櫓を取落し。舟底ののみを抜き。地水中へ飛入り〳〵ハズミ行方しらずフシ くゞり行く。地向ふの岸には江田判官こなたには竹澤監物。伏勢どつと押寄せて。射る矢は霰舟には水。合たとへ翅のあらばとて遁れがたなき御有様。天魔を欺く我が君も。敵はじとや思しけん鎧脱ぐ間もあら無念やと怒りの御聲諸共に終にあへなくフシ御生害十人の人々も。思ひ〳〵に腹かき切りそこはかとなくなり行けば。追々馳付け味方の軍勢。大将失せさせ給ふ上は。生存へて何かせんと。敵陣へ駈入り〳〵一人も残らず討死と。聞くよりハツト人々は。餘りの事に詞も出ずフシ呆れ果てたるばかりなり。地一間の内には家中の妻女。聞くに堪え兼ね聲を上げ一度にわつと泣出す。八郎は息つぎあへず。詞此事お知らせ申さんと。暫時の命ながらへて。君のお供に後れたり。何れもさらば地といふより早く咽笛をぐつと貫きフシ息たえたり。州湊は死骸に取付いて。詞コレ八郎。殿様の御遺言。お尋ね遊ばす御用もあらうに早まつた此最期。コレ地なう〳〵と縋り付きあなたこなたを思ひやりかつぱと スヱ伏して フシ泣き居たる。地御臺所は茫然と歎きに心空蝉のスヱテもぬけの如くにおはせしが。地漸く心や付いたりけんしを〳〵と立上り。乳母が膝に居眠りし若君を抱き取り。詞コレ徳壽。幼けれども大将の子。とつくりとよう聞きやヽ。父上は敵の爲にはかなくお成りなされたわいの。母も一所に行く程に。そなたは早う大きう成り。敵を討つて父上の修羅の恨みを晴してたも。地官軍の總大将義貞様の孫君。清和源氏の嫡流と生るゝ果報はありながら。二人の親に別れなば誰を頼りに成人せん。母が歎きも父上の最期も夢のすや〳〵としらぬ寝顔の。フシいぢらしやと抱きしめ〳〵落つる涙と泣聲に。御目を覺し若君は。詞いやぢや〳〵聞かね

く〵。赤がほしいと。地島臺の。舟に取付くわんばくも。詞ヲ、數ある臺の其中で。此舟がほしいとは地船の中にて果て給ふ。父上戀しといふ事を自然と蟲が知らせたか。合思へば〳〵淺間しや。場所も多きに船の內。前後の敵に取卷かれ水に溺れて御生害。文彌此世からなる地獄の責。詞さぞ御無念口惜しかろ。さうとはしらずたつた今まで祝ひさゝめく此島臺。地舟と聞くさへ恨めしい。七福神の富榮も。夫に別れ何かせん。鶴龜の千代萬代齡は噓か僞りかサハリ高砂住の江相生の松にも夫婦はあるものを。はかなき我が身あぢきなの世の中や。祝ひは却て逆樣事。此島臺もいまはしいと取つて投げほり押碎き物狂はしき風情にて。泣涕こがれフシ伏し給ふ。地六郎も顏ふり上げ。詞此度の鎌倉攻め其意得ずとは思ひしかど。道にて變のあらんとまでは。思ひ設けぬ御災難周の昭王漢を濟るに。船人ども是を憎み。膠を以て船をかため。川中に至る頃。膠蕩けて船碎け。水中にて失ひし。方便に等しき竹澤が謀。某御供するならば。仕樣模樣もあるべきに。地エエしなしたり口惜しやと。無念の拳手の裏へ爪も通らん風情にて涙の玉のばらばら〳〵空にしられぬ村時雨フシ餘所の。見る目も哀れなり。地一間の方には女中の聲々。詞御家中の內方達。君の御最期面々の夫の別れを悲しみて皆々自害致されしと。地聞いて驚く人々より御臺所は心付き。詞ハア死におくれたりさらばぞと。地守り刀を拔放し。自害と見ゆれば湊は押留め。詞ヲ、悲しいはお道理ながら。今お果て遊ばしては。若君樣のお身の上。地イヤ〳〵最早かうなる御運の末。生きてうき目を見んよりは死なせてたもと爭ふを。六郎刄物もぎ取つて。詞エ、御短慮なる御振舞ひ。お家の事も若君の事も。忘れての御生害ならば御勝手次第と地呵られて詞スリヤ死ぬるにさへも死なれぬは地よく〳〵因果の此身かと歎けば湊も諸共に。お道理樣やとばかりにて。フシ又さめ〴〵と泣居たる。地かゝる歎きの折こそあれ物見の軍兵かけ來り。詞我々遠見致せし所。遙か向うに馬煙。數多の軍勢此城へ押寄すると相見えたり。地御用心候へとフシ言捨てゝ又引返す。地コヘそもいかにと御驚き。兩人騷がず扱こそ〳〵。詞竹澤が軍勢ども押寄すると覺えたり。先づ〳〵奥へ御入と。地湊が介抱漸うとオクリ一間の內へフシ入り給ふ。地六郎は心せき。詞ナニ兵庫殿。固より無勢の此城へ。勝ちほこつたる竹澤が。大軍を引受ける。貴殿の軍慮は何とでござる。イヤ。先づ貴殿の御工夫は。此六郎が存ずるには。我が君の弔ひ軍。命限

り敵を防ぎ。叶はぬ時は城を枕。討死の外思案はござらぬ。シテ又貴殿の御思案は。此兵庫が存ずるには。寡は衆に敵すべからず。及ばぬ事に犬死せんより。兜を脫ぎ旗を卷き。敵へ降るより外はござるまい。ム、何敵方へ降參とは。氣が違つたか狼狽へたか。イ、ヤ氣も違はず狼狽へも致さねども。所詮敵はぬ腕立てせんより。降參するが當世かと存ずる。貴殿もとくと分別あれと。地落付く程猶せき立つ六郎。詞ヤア分別もへちまもいらぬ。身は八つ裂になるとても。二君に仕ゆる六郎ならず。ハ、、それは近頃若氣の至り。管仲は敵へ降り。覇王の助けと成りし例。ヤアなまぬるき毛唐人の引き事。今敵へ降つては御臺若君の御身の上。未來の主君へ。どの面さげて御目見えなすべきぞ。卑怯未練の畜生侍。詞を交すも身の穢れ。汝が樣なる臆病者は。牛蒡程な尾を振つて。鎌倉武士に犬つくばひ。糠でもねぶつて命を繋げと。地悪口たら〳〵六郎はフシ疊蹴立てて入りにけり。地何思ひけん兵庫助ずんど立つて身拵へ。奧をさして入らんとす。出合頭に女房湊。詞最前からのせり合ひを聞いて居たが。眞實お前は敵方へ。降參なされるお心かえ。ヲ、くどい〳〵。尊氏方へ降參の手土產。御臺若君引つくゝつて連れて行く。地邪魔ひろぐなと突飛ばすを。起直つてしがみ付き。詞ホンニ呆れて物が言はれぬ。大事の〳〵お主樣御難儀の此時節。命限りお力になりはせで。ヲ、科なき我を勘當し。諫めを用ひずむざ〳〵と。殺されし馬鹿大將。新田の家にあいそが盡きた。勘當請けたりや主でもなく家來でなし。イ、ヤ御勘當請けたりとて。是迄代々御知行にて。育てられたお前の體。何はともあれ是迄に。一方ならぬ御よしみ。コレ思案仕かへて下さりませと。地夫思ひの眞實心取付き歎けば。詞エ、めろ〳〵と邪魔ひろぐなと。地突退け刎退け行かんとす。裾を押へて詞コレ待つた待たしやんせ。縱へ連添ふ夫にもせよ。お主の大事にやかへられぬ。さういふ汚穢お心なら。夫とて容赦はない。ヤア細言いはずと爰放せ。イヤ放さぬとしがみ付く。地エ、面倒なと取つて組伏せ。用意の早繩手ばしかく緣柱にくゝり付け。詞汝が夫を見限れば。此方にも飽き果てた。夫婦の緣もこれ限り。女房去つたと地睨み付け フシ一間の。內へ入りにける。ハルフシ 跡見送りて。女房は胸までせきくるうき淚。けふはいかなる惡日ぞや。殿樣には不慮の御最期。たつた一人の弟を殺し。賴みに思ふ夫に去られ剰へ此繩目。かういふ因果な身の上が又と世にあらうかとくどき立て〳〵どうど倒れて フシ泣

沈む。地大手の方には敵の大勢。四方を取巻く攻め太鼓 フシ鬨をどつとぞ上げにける。地湊はすつくと立上り。詞扨は敵の寄せたるか。御臺様六郎殿。エヽ此縛め解いてほしいナア。チエ恨めしい我が夫。女ながらもお家の大事。みす／＼眺めて居られうか。地と命限り根限り起きつ轉んづ身をもがき。岩をも通す女の一念。詞縄にすらるゝ栢の柱。陰陽激して火を生じ。縄は燃え切れどつさりと。こけても打つても厭はゞこそ地有難しと一散に奥をさしてぞ走り行く。地程なく寄せ來る敵の大將竹澤監物秀時。眞先に踊り出で。鬼神と呼ばれたる義興さへ討取れば城の奴ばら鏖し一人も逭さず討取れと込入らんと フシする所へ。詞降參々々と呼ばはつて。地立出づる兵庫助。竹澤見るより 詞ムヽ心得ぬ汝が降參。其手をたべる監物ならず。ハア其お疑ひ御尤も。論より證據手引きして。此城を乘取らせ。拙者が心底見せ申さん。ムヽ其詞に相違なくば。尊氏公へ申上げ。恩賞は望みに任せんさりながら。降人の法なればソレ家來ども。合點と 地兵庫一人を取圍み。透もあらせず亂れ入る。地湊は身がるにかい／＼しく長刀小脇にかひ込んで。御臺所を先に立て。透間を見て落さんと心を配る向うより。竹澤が家の子笹目兵太。大勢引き具しどつと押寄せ。ソレ逭すなと下知すれば。心得たりと女房がくも手かくなは十文字。追立てられて敵の大勢逸足出して逃行くを ハズミ逭さじやらじと フシ追うて行く。地跡に御臺はハア／＼あぶ／＼。長追ひ無用とあせる內。後へ廻つて笹目の兵太。してやつたりと飛びかゝる。透もあらせず立歸り。斯と見るより湊が早業長刀に。血と一所に兵太が首 フシころりと落ちて死してげり。

詞サア／＼申し御臺様。若君様は六郎殿がお供申せば氣遣ひない。裏道より早う早うと。地御臺の手を引き一散にいづくともなく フシ落ちて行く。地 道具屋南瀨六郎宗澄は德壽丸をかき抱き。上に腹帶しつかとしめ。拔身提げ眼を配り。素肌ながらも一心の。誠は金石鐵の。たてづくものもあら氣の若武者。道具屋取巻く士卒を蝿虫とも。思はぬ心の大丈夫。フシしんづ／＼と落ちて行く。地一間の內より高聲に。詞ヤア／＼六郎。命ばかりは助けてくれん。德壽丸を置いて行けと。地呼びかけられて六郎はきつと。後を見返れば。一間の障子さつと開き。床几にかかりて竹澤監物。こなたには由良兵庫。鎧兜に身をかため。采配追取りいらいうと フシさもいかめしき其形相。地六郎は齒がみをなし。詞チエ新田代々の此城を。朝敵の蹄にかけられ。叛逆不道の惡

人原に。乘取られしは殘念や口惜しやナア。あはれ若君のお供でなくば。うぬらを助け置くべきか。命冥加な盗賊共。德壽君は六郎が懷に入れ奉れば。千騎萬騎のお供も同然。道おつ開いて早通せと。地あく迄に廣言し脇目もふらず。フシ出でて行く。詞ヤア／＼者共。六郎やるな遁すなと。地下知に隨ふ諸軍勢右往左往に取圍むを。掻まずさらず切結び爰をせんどと 三重へ戰へば。地敵の大勢たまり兼ねしどろに成つて フシ引退く。詞ヤアきたなし返せと呼ばはつて。地火雷神の荒れたる勢ひ。流石の二人も底氣味惡く。奥をさして迯げ入れば。ヤア卑法至極のうづ虫めら。目に物見せんと駈寄りしが振返つてイヤ／＼／＼。地天にも地にもかけがへなき若君の御供せん。イザ此隙にと立出づる手並にこりぬ大勢が。又むら／＼と追取卷く。詞ヤア性懲もなき蚊とんぼめらと。地當るを幸ひ切立てられ。多勢を頼みの雜兵ども一度にぱつと。フシ迯げちつたり。地六郎も數ケ所の深手踏みしめ／＼たどり行く。城内には諸軍勢どつと上げたる凱歌を。聞くも無念と立留りしが。イヤ／＼／＼。一先づこの場を立去つて行方知れざる義岑公。御家門脇屋義治公和田楠を始めとして。官軍一味に心を合はせ。若君を守立てて時節を待つて本意を遂げ。今の恥辱をすゝがんと無念ながらも フシ出でて行く。地阿斗を助けし趙雲が。長坂坡の働きにもをさをさ劣らぬ其骨柄。古今獨歩の忠臣やと感ぜぬ者こそなかりけれ

第三

地東路を登り。フシ下りの街道は。武藏相模の國境。往來の足休め。よき程ケ谷とつかの間も。たえぬ旅人の馬竹輿も。爰に立場の茶屋が軒。地所の名さへ燒餅坂。往來の道者腰打ちかけ。詞コレ茶一つ下されもう何時ぢやぞ。イヤモウ七つ過ぎでござりましよ。ナント川崎迄行かれうかの。イヤ川崎迄は心許ない神奈川泊りと見えまする。コリヤ／＼太郎左。わりや夕のふとり肉しめたな／＼。何をいふぞい。アノおたふく。腕は松の木腰は臼泣く聲豚に似たりけりヤアいふないふなそれでも今朝立際にこそと二百なぜやつた。有樣はおれも約束したけれどおれが所へはうせなんだ。ムウそこで手前が燒餅か。イヤそれで思ひ出した爰の坂を燒餅坂といふげなウ御亭主。イカニモ／＼此坂に付いてきつう謂がござりますお話し申しましよか。イヤ／＼それ聞いてゐたら日がくれるあれ／＼腹の加減も七つ過ぎ。ドリヤ茶代拂はうと 地フシ一錢二錢錢つく杖つく道者ども フシ別れ

〳〵に急ぎ行く。地又も往來の街道筋 歌おらが殿樣はナア。姫路をとりやるナ。そこで姫路が繁昌するといナアエ 詞ほてつぱらめ高が十二三貫目の荷を附けながら。埒の明かぬ畜生めと。地鳴りわめくフシ雷聲。地馬の上から湊は聲かけ。詞コレ馬士殿私は馬にはじめて乘つた。落ちうかと思うて怖うて怖うてどうもならぬ。靜かな程こつちの勝手。殊に竹輿に召したは大切なわしが御主人。ちつとの間も離れては氣遣ひ。此竹輿の衆はどうぢやぞいなう。ヲヽ氣遣ひはござりませぬ。東海道五十三次は言ふに及ばず。奥街道迄を股にかけて居る此長藏。わしが呑込んだ仕事アレ〳〵もう爰へ見える。ヲヽイ〳〵早ううせやがれヤアイと 地どやげば跡からいきせきと登り坂道。にた山竹輿の雲助ども。肩もあたまもちぐはぐに。漸うと追付いて。詞ヤイ〳〵寢言よ早う〳〵と汝は馬と人間を一つだと思ふかやい。けふはあまり貰ひがなさに新町の宿はづれに晝寢して居たが。何するも錢儲けだと。願西と言合せて新町から戸塚迄。百五十の駄賃から急いでは立場で一ぱいせにやならないナア願西。ヲヲじつとしてゐると寒い故荷を持つてあたゝまるのだ。長藏汝が雇ひぢやが何と旦那に願うて一杯飲ませい。ヲヽサ何にもいふな爰が泊りぢや。これ〳〵六兵衞殿お泊りのお客を乘せて來たと。地呼ぶに亭主が走り出で。サア〳〵是へと店先へ。湊を フシ馬より抱きおろせば。詞ヲヲ思ひの外早い來樣。跡の宿から二里には近い。モウ爰が戸塚とやらいふ所かえ。イヤ爰はといふを打消す寢言の長藏。ヤコレ成程々々爰が戸塚の宿。ノ御亭主と目で知らすれば亭主も然者。いかにも爰が戸塚でござります。そしてお連は。イヤ連といふは私が主人。地サア〳〵是へと舁寄せさせ。いざ御出でと介抱に。義輿の御臺筑波御前。本フシ習はぬ旅に身もやつれ。スヱテ立出で給ふ御姿。藁屋の軒に三ケ月の。みがかれフシ出づる共風情。地長藏は現をぬかし。詞何と二人共に見たか。旅やつれでもあの器量。旅籠屋のふんばりどもとは。伽羅と甘諸程違つて美しいもんではないか。あんな物を抱いて寢る男めは憎い奴ぢやないかいやい。コリヤ長藏わりや何ぼ所の名ぢやとていらぬ燒餅だな。そして褄外れといひ物ごしといひ。先づお前方はどこからどれへ行かしやりますと。地問はれて湊が 詞イヤわれ〳〵は武藏の者。地頼みしお方の御病氣故。箱根へ湯治に參る者と。フシ言紛らして。詞コレ主のお方。奥へ參つても苦しからずばあの一間へ成程々々御念に及ばぬサア〳〵是へと。地亭主が

案内湊も詞そこ〳〵に一間のフシ内へ入る跡に。地願西は大欠伸。詞ヤレ〳〵草臥れた〳〵。コリヤ長藏わりや爰を戸塚だとて女を欺し。爰に留めたは何ぞうまい仕事があるか。他人にせずと半口のせぬかナア野中よ。ヲヽそれ〳〵戸塚迄行くを爰で仕舞ふ仕事故。だまつては居たが何ぞ之には譯があらう聞かせいやい。イヤサ譯というて高がかうだ。あの竹輿に乘せて來た女に我等首だけ。供といふも女の事。今宵中に一太刀言はせたい思入れ。それで戸塚は入込みの旅人。聲山立てても遠慮のない樣に此立場の雲助宿を。戸塚の宿だと欺して連れて來たのだ。何と智惠か〳〵と地うぬ惚のフシだみそは鼻に顯はれたり。地願西手を打ち扨もしたり。詞戀の智惠は又格別。おれは又あの供の女久しぶりの女犯肉食。フウわれも其心かサア二人ながら相談はきまつた〳〵コリヤ野中よわりや何とする。イヤおりや女より一ぱいやつてぐつと寐たい。そんなら前祝ひに一ぱいづつ己がめるサアこいと。地山も見えざるそら祝ひ。實に長はんが當飲やフシ咽を。ならして入りにけり。ハルフシ御痛はしや。筑波御前。表具見るもいぶせき藁やの軒。湊は障子押明けて。暫く是にて旅の憂はらさせ給へとフシ勸むれば。地御臺は思ひの顏を上げ詞ナウ湊自らが身の上程。世にあぢきないものはなし。地二世と連添ふ我が夫は思ひ設けぬ御最期。いとし可愛の我が子には生別れ。惜しからぬ命ながらへしも。何卒德壽を世に立てんと。それを賴みに此艱難。そなたのいかい心遣ひ。あかぬ別れを忠義にかへ。詞男勝りのかひがひしく。長の旅路の介抱。若し煩ひでも仕やらうかと。色思ひ過して悲しいと。跡は涙に詞さへ曇り。がちなるフシ御顏ばせ。地ともに悲しき。涙を隱し詞これはマアお心弱い其樣に思召して長の旅がなりませうか。義治樣へお前を手渡しするまでは。めつたに風も引く事ぢやござりませぬ。私が夫兵庫助。思ひも寄らぬ二心ゆゑ夫を捨ててお前のお供。又南瀨六郎殿は若君を御介抱。何卒尋ね逢うたなら仕樣もやうもござりませう。暫しの間のお艱難。必ずきな〳〵思召さぬがようござりますと。地口にはいへど心には。是が新田の。奧方の。お有樣かとスヱ打ちしをれ。タヽキ見かはす顏の花曇り。上見ぬ鷲や鵰眼。寢鳥さゝんと寢言の長藏。願西が二人連れにてフシ奧より立出で。詞若し女中樣さぞお勞れでござりませうと地いふに悄り泣顏隱し。詞そなたはさつきの二人の衆。何ぞ用ばしあつての事か。アイ用といへば用の樣なものナア願西。ヲヽちつとお前方

にアノナアノ。コリヤ〳〵長藏おれにばかり言はせずと汝もいへ。ハテマアあたま役ぢやわれからいへ。イヤわれから。われからわれからわれから。ムヽ二人共に言ひにくいといふは。酒でも飲みたい故價をくれといふことかアイまあそんな事もよごんしよ。がちつと御無心がごはります。シテ又外に無心とは。アイお大事の物ではあろけれど。お二人ながらアノわしら二人を今宵一夜抱いて寢て。乳を飲ませて下さりませ。エヽ。アイ出家一人お助けなさるはいかい功德でござります。跡にも先にもたつた二人。どうぞ取らせてやつて下ありませと。地思ひがけなき一言に。御臺はとかう詞もなく。ぞつと フシこはげの胴震ひ。地湊も聞いて悔りの驚く胸を押ししづめ。弱みを見せじと膝立て直し。詞ヤア身の程しらぬ慮外者。女子ぢやと思うてなぶつたらあてが違ふ。長の旅を女の身で主人の介抱覺えがなうてなるものか。殊に歷とした武士の妻。今一言いふと赦さぬぞと。地尖き詞に長藏は。詞へヽヽヽ何と聞いたかこはい事だないかいやいさう强う出やりやこつちも意地。言ひかゝつた色事。コレよう聞かしやれ。戸塚の宿と欺して留めたはおれが思ひを晴らさうばかり。爰は武藏相模の國境。燒餅坂といふ立場。一里四方に此家たつた一軒。泣いても詫びても外に人は一人もないナア願西よ。ヲヽさうだ是非いやだといやりや引縛つて抱いて寐る。サアどうだ地どうだと二人して。戀の手詰めの居催促。聞く程つらき身の難儀。遁れがたなき一世の灘湊は思案し笑顏を作り。詞ハテそれ程に迄思うて下さるお心を。何の仇になるものぞ。私らも長旅の獨寐有様はこつちから。ヤア〳〵それは夢ではないか又ある格の嘘ではないか。サア嘘か誠は寢て知れると地脊中叩けばぐにや〳〵〳〵〳〵詞サアさつぱりと埒明いた。此長藏は近飢手附にちよつと口々と フシすがり付くを。地湊は押留め。詞あなたも私も顏見合せてはどうも恥しい。互に見えぬ樣に目をふさぎ。めんないちどりかけてなら。イヤモウどうなりと君の仰せは背きやせぬ。幸ひ爰に帨巾が。おつとよし〳〵。わしがする樣にならんせと。地帨巾取つて二人共。湊が手早くめんないちどり引きしめ〳〵。サア〳〵。是からこつちも目隱しする。用意の內見まいぞと。いへば二人が合點だ。支度よくばしらせてと。心はもぬけのから衣きつゝ。馴れにし褄引上げ。湊は御臺に目くばせし。早う〳〵の目遣ひに毒蛇の口や門口を。拔けて御臺の御手を取り。こけつまろびつ漸うと行方。しらず フシ落ち給ふ。文弥 詞跡に二

人は夢現。詞サア〳〵女中様早う寝たい。聲のせぬはおもたせぶりか。ソリヤ難面いぞえ難面いぞえ。願西よどこに居るぞ。最前からだまつてゐるはわりやきまつたな〳〵。何を言ふぞいやい。さつきにから盲捜しにさぐつても知れぬぞよ。ヤア汝もさうかおれも知れぬ。あた面倒など地帨巾かなぐり フシ傍を見廻し 詞ヤア〳〵女めはうせぬか。エヽ腹の立つ撮まれた遠くは行かじぼつかけよ。地ヲヽ合點とかけ出す向うへ。竹澤監物が家來犬伏官藏。主の權威を鼻にかけ供人 フシ引連れ歩み來る。地所の名主が先に立ち。詞これ〳〵亭主何か御詮議者があるとて人吟味。泊りの衆も皆これへと。地いふに亭主が罷り出で。詞イヤ私が所は雲助宿御氣遣ひな者は一人もござりませぬと地聞くより官藏ぐつとねめ付け。詞ヤイ〳〵其雲助が猶不審。此度新田義興の家來南瀨六郎といふ者。義興の悴を連れ此邊を徘徊するよし。依つて宿々の旅籠屋を人改め。己が内の泊り人殘らず是へ呼出せ。先づこゝに居る坊主め。合點が行かぬ汝は何故其ざま。マア生國はいづくの者と。地問はれて願西錫杖振立て。三下り祭文地奇妙頂來のら如來。詞抑もわつちが國は上州。幼い時から穴一小博奕。色事覺えて十四で勘當寺へ駈込み和尚の大黑盗んで駈落ち。商ひ知らねば喰込みばかり。女房ぐるみに博奕に打込みそれにもこりずに年増にはまつて盆ござぐるめに。くるむき裸に坊主にされた。さりとは〳〵うるさいこんだにヨウ。說教次は。盲目の伊勢參り。幟片手に聲張上げ。詞奥州仙臺お伊勢様へ。三十三度參りの盲目に御報謝。ヤア汝らが様などう盲目に。詮義はないとつととうせいときめ付けられ。ノリ詮議がないとはありがたい。只今のお心ざし。伊勢太神宮様へ上げますでござります。まめ〳〵〳〵息災延命によう お守りなされて下さりませホホヽヽ ハズミほう〳〵 フシ急ぎ出でて行く。說唄さて其次へ出てくるは。是は戸塚の名代物。合言はねど皆様御存じの。狸の。睾丸。鼓にあらぬたゝき鉦。撞木杖つき漸うと フシ表をさして出でて行く。次は差詰め。詞野中の松。アノ私は元角力好き。アヽ角力と言ふ物はしやう事もない物。大きにけがを致しましたそれでも角力取るならかうエイ。エイ〳〵。何の事た。こいつは〳〵。汝はコリヤ氣違ひだな。エヽ役にも立たぬ奴等に隙取つた。併し只今申し渡した。南瀨六郎見付け次第搦め取つて此官藏が旅宿へ連れ來れ。褒美は望み次第。ヤア百姓ども次の宿へ案内せよ。地早う〳〵と言渡し。皆々引連れ フシ急ぎ行く。地跡に長藏一人笑

み詞何と聞いたか二人の者。さつきに跡の松原でがんばつて置いた金の蔓。褒美は分取り奥でとつくり相談せう。地サアこい〳〵と三人はオクリ打連れへ奥に入りにけり。地既に其日も入相の。フシ鐘の響も。おのづから寂滅。爲樂も。西の空。地願ふは彌陀の誓願力。六十六部廻國に姿を略す南瀬六郎。忠義は重き笈の中錫杖つく〳〵立留り。實に春の日の長きといへど。急がぬ旅のあてどなし。詞日が暮れうが夜が明けうが高が野宿の此身の上暫くつかれを晴さんと。地笈をおろして傍なる榜示杭打詠め。詞フウ何々是より東武藏の國。是より西。相模の國。扨は爰こそ武藏相模の國境と。地四方を見廻し。笈の戸を明けてフシ四つの稚子は。地義興の若君德壽丸。詞サア誰もをりませぬ御心よう御遊びと。地道の邊の花折取り爰迄ござれ此花しんじよ。サア〳〵御出でと膝に乘せ撫でつさすりつ六郎が機嫌取り〳〵道野邊の。草に露吸ふ蝶々の夢ともわかぬ稚子の餘念はさらに。フシなかりけり。地せめて是へと榜示杭引拔いて押直し。若君を抱きのせ御顔つく〳〵打守り。目にもる涙押し隱し。果報はいみじく源氏の正統。新田義興公の公達と生れ給へども。足利尊氏に世をせばめられ。纔の笈に御身を隱し。お乳の人にも。傅にも付添ふ者は某一人。地かく淺ましき御身の上弓矢神にも。天道にも見離されしか殘念やと。拳を握り齒がみをなし。スヱ無念の涙に沈みしが。フシさりながら。詞幼けれども源家の公達。此六郎が申す事。能うお聞きなされや。今御足の下なる榜示杭は。武藏相模兩國の境杭。尊氏は相模の國鎌倉に居を構ゆれば。時に取つての足利尊氏。武藏の國は今敵竹澤監物が領分。二人が軍勢踏破り。武藏相模を一時に。踏隨へ給ふべき前表。地それを祝せし我が寸志追付け尊氏討亡し。目出度く御代に飜へさんと祝ひフシ悦ぶ折こそあれ。地いつの間にかは寐言の長藏。南無三寶と若君を。手早く笈に抱き入れあたふたしめる兩方より。同じく願西野中の松三人一所にフシ追取り卷く。地中にも寐言の長藏が。詞コレ六部殿。行暮らしたる追剝ぢや御報謝に預りたい。ホウ心安い事ながら。此方も人の情を受けて通る修行の身。貯へとては更になしと地半分言はせず詞ヤア貯へがあるとても高の知れた六部の路金。大金になる其笈が貰ひたい。ムウ此笈がほしいとは。コリヤ常の盜賊でもあるまい。早速やらうと言ひたけれどマアならぬ。ヤア甘うといへば付き上る。どうで直ぐではいかぬ奴二人とも合點か。ヲヽ。合點と地兩方から。組付く首筋引摑み。詞右と左へもんどり打たせ。寐言が透さず後より。しつかと抱くを腰車。ヤア合面倒なる靑蠅めら。此世の暇を取らせんと。地錫杖

に仕込みし刀引拔き切拂ふ。こなたは刃物敵はじと。見世の道具の手に當る。茶碗 盃たばこ盆投付け〳〵三重へ打付くる。地切拂ひ切拂ふ劍の下に野中の松。此世の枝葉は枯れうせたり。地願西も手は負ひぬ。長藏有合ふ庖丁追取り立ち向へど。手練の六郎敵はじと持つたる出刃を投付くればあやまたず。六郎が膝の口へずつぱと立つよろ〳〵とたじろく中。いづくともなく逃げうせたり。地六郎は齒がみをなし。エ、討ちもらせしか口惜しやと。庖丁拔き捨て下着の裾。引裂いてしつかと卷き。詞取逃せしは殘念なれど。大事の若君の御身の上が大切と。地痛手につくせず踏みしめ〳〵。歩めどちが〳〵足曳の。山坂に氣を春の夜の。そことも分かぬ宵闇にたどり行くこそ。三重へ是非なけれ。地由良兵庫助信忠は二張の弓も引きかたの。竹澤が推擧にて尊氏卿へ仕官へ。新たに所領賜りて不義の富貴のそれぞとも。しらぬ我が身の程ケ谷や十塚の宿に隣りたる。所の名さへ吉田村傍に目立つ。一構へ。手を盡したる物好きの。オクリ庭に。泉水築山の木々の梢を漏出づる。朧月夜に映ひし。本フシ櫻が枝の白妙も浮べる。フシ雲とや詠むらん。地鎌倉よりの召に依りて主兵庫が留守の內。呵人のない腰元ども。乳母交りにどつたくた。詞サア若子様のお馬が通るハイシイドウ〳〵地高嘶き。まだぐわんぜなき友千代を。抱き乘せたる四つ這ひの。生れ付いたる棚尻。びこつかせてフシかけ廻れば。地ナウあぶなやと抱きおろし。詞コレ皆の衆。旦那様のお留守ぢやとてやりばなしに騷がしやるな。若子様をだしにして面々の慰み半分。怪我させましたらどうしなさる。そしてマアあらう事か。大きな臀を振廻して。お鍋殿もお鍋殿。イヤコレ人の七難より我が八難。お乳母殿のおゐどぢやとて。餘り小さうもござんすまい。なんぼわつちが棚尻でも。見かけに似ず上つてあると。どなたでも譽めなさるよ。ナウお松殿。さうぢやないか。ホホヽ、上つたの下つたのとは。子供の上げる凧巾ぢやあるまいし。イヤコレ〳〵其鮹魚は少と差合ひぢやと。地どつとフシ笑へば詞イヤコレ若子様の今すや〳〵。大きな聲よして下され。ほんに愛らしいお子ではあるぞ。サイナ此お子産んだ母御が見たい。サレバイノ奥様のない此お屋形。寶は身の差合せ。寡暮しの旦那様に。わつちが鮹魚で吸付いたら。身も同然に相果てると。おつしやるであろぞいの。アノお鍋殿とした事が。旦那様は石部金吉。女護が島へやつて置いても氣遣ひの氣の字もない。イエ〳〵〳〵口先でちよびくさいふより。えて堅藏めがしつ深な。必ず油斷さつしやるなと。地三つ寄すれば姦しいフシ目口乾きの色咄。地折から旦那お歸りと下部が呼次ぐ聲に連

れ。ソリヤ野郎かばへて呵られな。イザ若子様も御一所にと。皆打連れて フシ入りにける。地館の主兵庫助信忠。江田ノ判官景連を同道にて。立歸る フシ我が家の内。地イザ先づあれへと賓主の禮。上座に直つて江田判官。詞先づ以て今日は御前の首尾も上々吉。此判官も去年の冬。さしも手强き新田義興。手もぬらさず討取りしは。莫大の勳功と。尊氏公御感の餘り相模半國を賜り。此上もなき悦び。貴殿は固より義興が舊臣。お疑ひもあらんかと思ひの外のお取立て。ハア御意の通り。此兵庫助新田の家を見限り足利家へ降參。當時かやうの活計も。貴公と竹澤殿のお執成。御芳志の程言語には述べられずと。地媚諂ひの挨拶に。判官猶も近く差寄り 詞それに付き義興が弟義岑。又忰德壽丸。今において行方知れず。少しにても手がかりあらば。古主とて容赦召されな。ハアイヤ其御念には及ばぬ事。死損ひの新田の一類。捻り殺すに手間隙いらず。それはさうと判官殿。今宵も最早初夜過ぎなれば。見苦しくとも奥の間で。地夜と共のお物語。詞イヤ／＼拙者も急ぎの道。先づ今晩は御暇申さう。ハテサテそれは殘念千萬。イヤ我等領分より鎌倉への往來には。丁度よい中休み。以後は一寸々々と御尋ね申さう。然らば其内おさらばと。地家來引連れ判官は フシ己が館へ立歸る。地世をうき草のよるべなき、義興の御臺筑波御前湊一人をタヽキ力にて。しらぬ。夜道を。とぼ／＼と。フシ 門外にたどり着き。詞道踏み迷ひし旅の女。地一夜の御宿といふ聲のほの聞ゆれば内には不審。フシ手燭携へ フシ歩み寄り。地互に見合す顔と顔。思ひがけなき悔りに兵庫は流石面ぶせ。入らんとするを女房は。つか／＼と立寄つて胸づくし取つて引きすゑ。詞コレ妥な人でなし殿。落人と成り給ふ。御臺様のこのお姿。さぞ本望でござんしよなう。お前の心一つにて。さま／＼の御艱難。けふ迄お命續きしは。地まだしも神佛の控へ綱。世を忍ぶ旅なれば何かに付けて不自由がち。御臺様のお足の痛此家作りの結構さ一夜の無心と來て見れば。どうかおまへの内さうな。地かゝる暮しでありながらお主の事も女房の事も。忘れ果てたる無得心。詞エ義理しらずと道しらずと意見いふも好誼だけ。どうぞ本心に立歸りお家の御先途見屆けて。是迄の恥をすゝぎ。元の女夫に成つてたべ。憎い／＼と日頃の恨み己やれと。思うて居たが顔見れば稚馴染。心が味になつて來て。恨みも漸う百分一。詞友千代は息災なか。流行風邪など引きはせぬか。かういふ暮しでござるからは。コレ申し。お内儀様を呼び

やなされぬかいな。どうぞ。いうて。地聞かせて下されと強い様で女氣の。しとげ フシ涙にくれ居たる。地御臺も漸う顔を上げ。殿様には不慮の御最期。頼みに思ふそなたさへ尊氏へ降參。德壽を連れて立退きし六郎が行方知れねば。そこや。爰やと尋ねても行く先々が敵の中。東の住叶はねば。脇屋義治殿を頼みにして上方へ志し。迷ひ來たるも盡きせぬ機緣。習はぬ旅につかれ果て。置所なき露の身の。消えなば消えね兎も角も。よきに頼むと フシばかりにて跡は。詞もないじやくり。詞ホヽいたはしき御有様。お力にと申したいがマアならぬ。昔は昔今は。足利家の祿を食む此兵庫。新田方の落人搦め捕る筈なれども。女儀の事なりや料簡して。見遁いて進ぜう。足元の明い中とつとゝ地ござれと フシにべなき詞。地女房は猶せき上げ。詞エヽ聞けば聞く程あいそづかし。コレ飼養ふ犬も主を知り。尾を振つてそばえるものを。犬に劣つた人畜生。サア御臺様お立ち遊ばせ。行き着き次第に參じませう。ヲヽ時世につるゝ人心。地是非もなき世の有様と。しを〳〵として フシ立給へば。地心づよくは言ひながら。流石女の跡や先笑顔。作つて傍に寄り。詞コレ兵庫殿言ひがかりに言ひはいうたが。アレ御臺様のお足の痛み。殊に夜更けて一寸も。おひろひはなされまい。地座敷にならずば軒の下。木部屋になりともたつた一夜を。イヤならぬ。そんならどうぞ友千代に。ちよつと逢はせて猶ならぬ。夫婦でなければ子でもなし。とつとゝうせうと荒けなき。詞に湊は身を震はし。詞ヘエ御臺様のお供でなくば。喰付いても此恨み。人に報いがあるものかないものか。地覺えてござれと見返り〳〵。御臺所の御手を引き。すご〳〵として。フシカヽり出でて行く。オクリ心ぞへ思ひやられたり。地されば其幹摧るゝ時は枝葉全からずとかや。南瀨六郎宗澄は數多の追手を切拔けて。忠義一圖に若君をやう〳〵背に笈の内。深手に弱る足たぢ〳〵。此家を目當てに。フシよろぼひ來り。詞行暮せし旅人なるが。盜賊に出合ひ難儀至極。お家を見かけお頼み申す。御かくまひ下されよと。地内へはいれば。詞ヤア其方は南瀨六郎。ムヽ人非人の由良兵庫。ハレ思ひがけなき對面ぢやナア。愚人に向ひ詞はなし。サアサア フシ勝負と詰めかくれば。詞ハヽヽヽ血迷うたるか六郎。イヤ存外の譫言。所詮助からぬ我が命。汝が首を冥土の土産。ムヽヽ血迷うたとはそこの事。ナント。尊氏公の御威勢見たか。唐土天竺はいざしらず。日本の地に在りては。いか程遁れ隱るゝとも。袋の物を探るに等しく終

には尋ね出されん。そこを計つて此兵庫。手短かに降参し一廉の知行を取れば。コリヤ此通り豊の暮し。かの蟷螂といふ蟲は。己が斧を頼みにして車に向ふまつ其ごとく。汝が武勇を頼みにして。鎌倉へ弓引かんとは淺はかな料簡。大きな物には呑まれ。長い物には卷かれるといふ諺の通り。たとへいか程働いても御威勢にて取圍めば。行先々が皆敵。其上にソレ其深手。手向ひはおぼつかない。ヤア道知らずがぬかしたり瓦と成つて全からんより玉と成つて砕けよとは古人の金言。身は醢になるとても。汝が如き不忠不義恩を忘るゝ六郎ならず。ホヽ其理窟は聞えたが。今某が討果さば。ソレ其笈の内なる徳壽丸、誰あつて介抱するぞ。サとつくりと分別せよと。地星を差したる一言に。詞イヤサどうで遁れぬ御命。但しは汝善心に飜り。かくまひ申す所存なるか。イヽヤかくまふ程なりや鎌倉へ降参はせぬわやい。かくまひもせず。本心にも返らねども。高のしれた小悴一匹。鎌倉殿の害にもならねば。見遁してやる分の事さ。ムヽしかと見遁してくれうや。窮鳥懐に入る時は獵人も是を取らず。ハア忝い。地命惜むにあらねども。御一門は皆ちり／＼。義岑公は御行方知れず。新田の家の御血筋殘り給ふは若君ばかり。詞大切の御命見のがしてさへ下さるれば。御恩は忘れぬ。コレ手を合して拜み申すと地ゆだんを見すまし近寄つて。只一討と切付くるを。騒がず鍔にてしつかと請け。詞ムヽヽヽとても及ばぬほでてんがう。其手では參るまい。さりながら。木にも萱にも心置くは落人のならひ。疑ひは尤も至極。コリヤ見遁すといふ其證據と。地刀のこひ口抜きかけて。丁々と金打し。詞深手の上に氣をもまずと。おくの一間で養生お仕やれ。ヘエ天に踞り地にぬき足。思慮分別も愚に返り。かくなり下る我が身の上。地弓矢の冥加につきたるかと。くらむ心を取直し。心ならねどぜひなくも。オクリ奥のへ一間にたどり行く。フシ程もあらせず。地討手の大勢ばら／＼／＼と亂れ入り。矢ぶすま作つて追取卷く。コハ何ゆゑの狼藉と言はせも果てず捕手の頭。詞新田の小悴徳壽丸。南瀬六郎を付込んだり御渡しあれとのゝしれば。地人數の中より馬士の。寢言の長藏ぬつと出で。詞コレ親方。金に成る代物を燒餅坂で取り逃し。追手の衆の手に餘れば。どうでおいらが手ぎはにやおえないと。見えがくれに付けて來て。おくへ入つたをとつくりと見て置いた。四の五のなしに渡さつしやれ。渡せ。地渡せと大勢がすきもあらせず詰めかける。フシ折もこそあれ表の方。地上使なりと

呼ばはつて。入來る竹澤監物。詞ヤア家來共麁忽の振舞ひ。皆引け。地〳〵と追退け。フシ上座に通れば。詞ム、思ひがけなき御上使とは。ホ、上使の趣き餘の儀ならず。南瀨六郎德壽丸。最前道にて討ちもらせしと追々の注進。尊氏公聞し召され。元來古主の事なれば。兵庫が心底計りがたし。吟味せよとの嚴命。早打ちにてかけ付けしに。案の如く貴殿隱し置く條まぎれなし。昔のよしみにかくまふや。又首討つて出さるゝや手みじかの一口商ひ。返答いかにと問ひかくれば。地兵庫は何のいらへもなく。傍に有合ふ弓と矢追取り。きり〳〵と引きしぼり。一間を目當てに切つて放せば過たず。はつしと手ごたへ血煙とともに障子を踏み脫し。朱に成つて南瀨六郎。詞ヤア卑怯至極の表裏者。あまき詞に我を欺き。飛道具にてしとめんとはヤ愚か〳〵。是式のへろ〳〵矢。百筋千筋身に立つとも。何程の事あらん。類を以て友とする。奸佞邪智の愚人輩。一々首をならべんと。地無二無三に切つてかゝる。心得たりと兵庫助。請けつ流しつ上段下段。鋭き太刀筋こなたは手負ひ。心はやたけに逸れども切込む刄をうけはづし。左の肩先切付けられかつぱと伏せば。わつと泣く。若君ばひ取る兵庫が早速。むつくと起きて六郎が。やらじと縋るを又一太刀。うんとのつけにそり返るを。見向きもやらず若君の首ちうに打落し。フシ檢使の前に差置けば。地竹澤につこと笑を含み。詞兼て知つたる貴殿の心底。疑ふ筈はなけれども。德壽丸が面體を見しらざる此監物。燒鳥に捉緖。念の爲誰ぞ見知りし者やある罷出でよといふ聲に。地以前の馬士おづ〳〵はひ出で。首をとつくと見改め。詞今日道にて見付けし忰に。相違はござりませぬ。ホ、是にて萬事相濟んだり。尊氏公へ申し上げなばさぞ御悅喜。褒美は追つて御沙汰あらんと立上れば。ハア何分にも御前宜敷く。近頃御苦勞千萬と地互のあいさつ竹澤監物首取り。フシ持たせ立歸る。地フシ此家の騷ぎ。地若君の御身の上と聞くよりも。あるにもあられず御臺所。湊が介抱漸うと道よりも引つかへし走り。躓く氣は狂亂。詞德壽はいかゞ。若君樣。六郎殿はいづくにと。地うろ〳〵きよろ〳〵。兵庫にばつたり。詞ム、コリヤ何ぢや。德壽丸にあひたいか逢ひたくば逢はせてやらうと。地投出すは首なき死骸。二人ははつと氣も顚倒。詞スリヤもう若は殺されたか。地コハ何とせん悲しやと死骸に。スエテ取付き泣沈む。湊は身震ひはがみをなし。詞ヘエ鬼とも蛇とも魔王とも。名付け樣のない惡人。コレ申し御臺樣。所詮いうても返ら

ぬ事。サアお覺悟遊ばしませ。地ヲヽいふにや及ぶと用意の懐劔。両方より突きかゝる。ヤア及ばぬちよこざいひろぐなと。腕首摑んで突飛ばせば。又突きかゝる一念力。あしらひ兼ねてや兵庫之助。フシ一間をさして逃入つたり。詞ノリヤア逃ぐるとて逃がさうかと。地飛込む襖の小陰より寢言の長藏躍り出で。詞こんな事もあらうかと跡に殘つた甲斐あつて。重ね〲褒美の種。此趣を注進と。地言捨てかけ出す。後の障子の隙間よりはつしと打つたる手裏劍に。フシぎやつとばかりに息絶えたり。地コハ何者の仕業ぞと。見やる一間に聲高く。詞官軍の御大將。新田左兵衛ノ佐義興公の御嫡男徳壽丸。御安體にて渡らせ給ふ御安堵あれと呼ばはつて。地傅き出づる兵庫之助。見るより二人は夢に夢。詞ヤア徳壽丸は存へてか。若君樣にてましますかと。地抱き取つたは煎豆に花の笑顔のにこ〲を。見る目ぞく〲嬉しさは。フシ何に譬へん方もなし。地女房はつと心付き。詞若君樣を助けるとは思ひがけなきお前の忠義。嘸かし深い方便でがなござんせう。したが最前竹澤とやらに首切つて渡したは。何人の子でござんした。ホヽそれこそ忰友千代。ヤアスリヤ此死骸が我が子か。地ハアはつとばかりにどうど伏しスヱ前後。不覺に泣出す。御臺所も御涙。地我身の上に引代へて。夫婦の心根思ひやる。いかに主の爲ぢやとて。我が子を殺して此若を助けてくれる志。詞家來ではなく。氏神とも命の親とも。今更に禮はフシ詞に。盡されず。詞そしてマアいつの間に友千代と取代へて此子を助けた其譯が。ホヽ其仔細は六郎が申上げんと起直れば。地思ひがけなく又悔り。詞ヤア殺されたと思ひしそなた。ハイヤ此六郎は豫てより。命を捨てての謀。ホヽ忠義はかはらぬ此兵庫。善悪二つに引分かれし地一通り。フシ御物語。詞扨も我が君義興公。朝敵を亡せよと勅命を頭に戴き。必死と定めし御出陣。積く強者六萬餘騎。敵は名におふ足利尊氏。隨ふ軍勢十萬餘騎。地両陣互にいどみ戰ふ。さしもに廣き武藏野の草より。出でて草に入る。オクリ優しき眺めに引代へて。月に緣。ある弓張や射る矢亂れて篠芒。枯野の草を踏越え〲。互に恥ある源氏と源氏。天下分けめの晴軍。組んづ。組まれつ討つつ討たれつ。矢叫びの音鯨波。修羅の巷に異ならず。元來猛き御大將。追つつまくつつ數箇度の軍。さしもの尊氏敗軍にて鎌倉フシさして引退く。虎にも乘るべき御勢ひ。竹澤が勸めにて。跡より追つかけ討取らん續けや〲と乘出し給ふ。詞ヲヽ其勝軍が我が夫の御身の仇

で有つたわいの。イエ〱〱いか程はやらせ給ふとも。無理に御留め申しなばアイヤそこに如才のあるべきか。拔目なき兵庫殿。さま〲お諫め申されても。勝に乘つたる御大將。御承引ましまさず。諫むるを曲事とて御勘當。ヲ、主從暇の印とて投付け給ひしコレ。此扇。跡にて見れば御書置。朝廷には佞人多く君を惑し奉り。我が謀を用ひざれば思ふ軍の圖をはづし。見苦しき負けをせば。我のみならず先祖へ對し。新田の名字をけがさんより。潔く討死せん。汝は跡に生殘り六郎と心を合せ。悴を守立てくれよとある。コレ細々との御筆ずさみ。地様々御諫め申せども。聞入れ給はぬ日頃の御氣質。力及ばずすご〱と。羽なき鳥の心地にて。是非なく フシ故郷へ立歸り。地思案の間もなく竹澤と。江田の判官が謀計にて。矢口の泡ときえ給ふ。名ある家の子郎等は悉く討死し。守りがたき新田の城。落城に及びなば若君の御行方。草を分つて探すは必定。とやせんかくやと火急の思案。詞昔唐土趙の國に程嬰杵臼といふ二人の臣下。主の孤兒を助けんと。敵を計りし故事を思出して相談極め。ヲヲ若君と取代へて立退いたるは此六郎。ヲ、サ我は敵へ裏返り。密に若君御養育。それとはしらず御臺様。地燒野の雉子夜の鶴。子故に迷ふ御旅づかれ。最前入らせ給ひし時。詞わざとつれなくもてなせしも若しや敵へ洩れんかと。思ひ過しは若君の御身の爲と思召し。御容赦なされ下さるべしと。地始終詳しき物語初めて明かす本心の智略の。程ぞ類ひなき。仔細を聞いて人々の。うたがひ晴れても晴れ遣らぬ。フシ涙は瀧を爭へり。地六郎は座を固め落ちたる刀取上げて。腹にぐつと突立つる。コハ何故の生害と スヱ驚き。すがればにつこと笑ひ。詞ハア心よや嬉しやなア。助かりがたき若君のお命助け奉り。御臺様へお渡し申せば。思ひ置く事微塵もなし。地我が命ながらへては。邪智深き鎌倉武士。兵庫殿を疑はゞ若君の御身の大事。殊に數ケ所の此手にて。助かるべきいはれなし。詞兼て落城の折柄。友千代を殺させて敵に油斷させんずと。約束にて立退きしが。いかに忠義といへばとて。一人の我が子をつき出して。我に渡した兵庫殿の心根を。思ひ計つて惜しからぬ。命をかばひ方々に身を忍び。そこや爰やのもらひ乳も。落人の身の心に任せず。東西分かぬ稚子の。餓ゆれば泣出すやんちや聲。飯の取湯や地黃煎で。だましすかして漸うと。なつく程猶いぢらしさ。我を親とも乳母とも。起きふしの上げ下げにも。伯父よ〱としたへども。夜のねざめはいつとても乳

を探つて泣出し。かゝアく〳〵といふ時は。子を持たぬ身も骨身にこたへ。地嘸かし親の心では。夜の目も合はず慕ふらん。詞どうぞ手渡しせんものと。漸うこなたの在所を聞出し。忍び來る道追手に出合ひ。去年の深手に不自由のからだ。又ぞや深手を負ひながら。何とぞこなたに一目見せ。其上はともかくもと此家へ辿り着きしかど。跡より慕ふ不敵の曲者。悟られては一大事と。それ故にしみ〴〵と。地顏を見せざる殘念さと。語るを聞いて女房は。不便の者やいぢらしや。詞久しう連添ふ夫婦の中。子のない事を苦にやんで。持藥よ灸よ湯治よと。樣々の心遣ひ。夫にかくして佛神に立願祈願の効あつて。やう〳〵産んだ友千代丸。疱瘡痲疹もして取れば。最早樂ぢやと悦んで。袴着寺入り讀物は。何からどうして斯うしてと。案じて居たも皆むだ事。三つや四つで死ぬるなら。生まぬがましであつたかと。地譯も涙に取り亂し消え入る スヱばかりに泣きしづむ。兵庫は態と聲はげまし。詞とくにも死すべき忰が命。けふ迄もながらへしはまだしもの仕合せ。泣くな女房日頃に似ぬ卑怯者。エヽ未練しごくと地しかられて。女房は猶しやくり上げ。詞お役に立つて死ぬる命。合點づくなら泣きもせまい。思切り樣もあらうけれど。地お前一人の料簡で。わたしにはつゆ知らさず。詞殺して置いて今になつて。卑怯な泣くな



未練なとは。いかに男のかうけぢやとて。我儘いふも事による。地むごいわいのと打ち フシ伏して叉さめ〴〵と泣き居たる。詞アイヤ其恨みはさる事ながらお家の密事。天下の大事。女童に打明ける兵庫ならず。とはいふ物のいかに計略なればとて。地朋友の六郎に手を負ふせ。詞久しぶりで逢うた悴をもぎ取つて。只一討ち。知らぬ其方の歎きより。我が子と知りつゝ手にかける其時の心の內。コリヤどの様にあらうと思ふぞやい。アイヤなに六郎殿忠義といひ器量といひ。末頼もしき若武者を。やみ〳〵と先立てて。此兵庫は生存へるを卑怯とさみして。フシ下さるな。詞アヽイヤ死ぬは一旦にして安し。跡に殘つて若君を守立つる其方の大役。死するに增る千辛萬苦。其上一人の秘藏子を。イヤ三代相恩のお主の爲には。我が子を殺すもヲヽサ身を捨つるも塵埃とも思はねども。君を守立て朝敵を亡して。天下の苦しみを安んぜんと思ひし事も皆むだ事。地時に逢はねば名將も仇に過行く光陰の。矢口の渡しでやみ〳〵と。詞愚人ばらがあざとき方便に討たれさせ給ひしは。お家の不運か南朝の衰ふべき時なるか。是非に及ばぬ兵庫殿。六郎殿。無念。地々々と手を取組み忠臣義士の溜め涙。天に通ぜば銀河堤も フシ切れて。流るらん。地御臺所はむせかへり。我が子を捨て命を捨つる。かゝる家來のありながら。御運拙き我が夫の。御身の上の悲しやと。過ぎし事まで フシ思ひ出し悲嘆の。涙にくれ給ふ。地六郎は目を見開き。詞アヽ後れたり狼狽へたり。死する所は違ふとも。我が一念は亡君の御跡慕ひ奉らん。さらば。地〳〵と聲の下。吭の鎖をかき切つて。かつぱと伏して フシ息絕えたり。地妻は泣く〳〵我が子の死骸フシかき抱き。地稱ふる回向は弘誓の舟。生死の岸に煩惱の。流れを渡る。フシ三つ瀨川。地タヽキかはいや先立つをさな子は。無常の風の櫻川。塵にまじはるコハリ芥川。フシかゝる浮世に隅田川。兵庫が心の荒川と見えしも智謀深川の。深き忠義のむねの中。みがき立てたる玉川や淵は瀨となる飛鳥川。御臺所は若君に思ひも寄らず。藍染川。六郎が魂魄は。主君の跡を大井川。其源の濁りなき君に。仕ふる武士のやたけ。心ぞ賴もしき

第四　道行比翼の袖

歌白玉か。何ぞと。人の問ひし時。露と答へん落人の。身に添ふものは。ナホスフシ影ばかり。それさへ月の入りぬれば。二人はもとの二人にて本フシけふ立初めし旅衣。地きるに切られぬ緣の糸結ぶの。神の神かけて。二世も三世もまだ。先の世

も。かはらぬ中の。フシ義岑は。地過ぎし八幡の難儀よりオクリしるべの。方にやう〳〵と。長地臺諸共忍ぶ身の忍ぶとすれど忍ばれず。まだ夜をこめて鳥が鳴く東の方へとたどり行く。フシオクリ心の〻内ぞ。たよりなき。二上リ二人が中はつき出しの。其日に呼んで呉竹の。ふしぎな緣で。大津ぞと皆口の葉に謳はれて。カハサキ互に上る坂の下人目の關も龜山の性の悪いは男のならひ。見せかけばかり石藥師。女郎に苦は。ないものと。見やしやんしたは間違ひのかういふ事になるみ潟。おまへも。捨てて岡崎と。思へばわたしも藤川のもつれ合うたる胸の內。打明けていやあか坂のなんぼ源氏の大將でも御威勢に惚れや。せぬわいな。器量吉田の。二かはめ下さまの事しらすかのあらひ上げたる殿振りに。深うはまりし濱松の。素振りをナホス見付けられまいと。

地誓紙を隱す袋井の契りを。江戸冷泉二世と掛川や。金谷せぬとはいみ詞。フシ言はぬ島田のオクリ亂れ髮。フシ人目に。心沖津川。地由井しよ正しき御身にて此有樣は何事と。思ひ廻せば廻す程。腹の立つのは女の癖。顏つく〴〵と三島より運ぶ箱根の山こえていつかは時に大磯と スヱ打涙ぐむばかりなり。詞義岑公も諸共に。しをるゝ心取直し。詞大事をかゝへし我が身なれば。鎌倉へ忍び込み。再び御矢を取りかへすか。兄上の敵を討つか。二つに一つ何れにも。助かりがたき我が命。地そなたは都へ立歸り亡跡とうて スヱくれ〴〵と。跡は詞も涙なり。臺ははつとせき上げて。タヽキソリヤ餘りぢや。胴慾な。今更いふではなけれども。勤めの身にて勤めをば離れて逢ふは勤めせぬ人よりは。又。百そうばい。粋ほど結句。愚痴になり根のない事に腹も立ち。口舌い

うたりつめつたりあちら向いても張弱くついした拍子に下紐も。猶打解けてひつたりと。抱きしめたる睦言に。かはい〳〵の明烏。盡きぬ咄につく鐘の。サハリならう事なら夜の明けぬ國に生れて。いつ迄も。抱かれてねやの隙白く。置き別れても。移香の殘る思ひの。十寸鏡。片時顏を合はさねば生きて居ぬ氣を知り乍ら。むごい心とばかりにて縋り付いては フシ中中に。地フシ離れ難なき花水の橋も。漸う打過ぎて。平に〳〵と平塚や所緣求むる藤澤に。宿のおじやれが聲々に。三下リ歌東男に都の。女郎。いきと情を一つに寄せて色で。丸めた戀の山。傍で見るさへにくらしい。そりや餘り。强過ぎる。武藏野の月。吉野の櫻。景と風情を一つに寄せて雪で。丸めた富士の山。噂聞くさへ美し。そりや餘り。强過ぎる。ナホスフシ謳ふ一ふし聞捨てて。いそげば道もと

つかはと故郷も近き程ケ谷と　オクリ思へ
ば。いとゞ二つ文字牛の角文字。直ぐな
文字。讀み盡くされぬ。かな川に漸うた
どり　三重へ着き給ふ
地藏經　歸妙頂禮地藏尊釋迦の附囑を憶念
し。惡趣に出現し給ひて衆生の苦患を導
けり。　ナホスフシ鉦鼓の聲も。幽かなる。
生麥村の離れ家に。住めば都と墨染に。
浮世を捨てし道心者。本フシたそがれ前の
看經は。殊勝にも　フシ又もの淋し。　地大
海は塵を撰ばず不淨にも。日は照る國の
公や。持餘したるあぶれ者。道具屋ぶつた
くりの萬八がゆがみ捻れた繩のれん。頭
で明けてずつと這入り。詞コレ道念殿。
看經もモウよさつしやれと。地いへど應
も。一心不亂願以此功德平等施一切發菩
提心往生安樂ちやん〳〵〳〵と　フシカヽリ
鉦打納め燈明しめし。詞ホヽ萬八樣お出
でなされませ。イヤ坊樣精が出るよ。し
たが先の知れぬ後生願ふより施餓鬼かお
んぞうでもぢろかい。ハイ其おんぞうと
やらせがきとやらをもぢるとは何の事で
ござりますぞ。イヤコレとぼけた顔せず
とおらは大乘打明けて仕舞はしやれ。デ
モ一向に存じませぬ。ハテやぼなわろぢ
やの。おらは圍者の相談に寺方へ出入る
故よう覺えて居りまする。おんぞうとは
鰻の事だが。宗旨によつてしゆきんとも
又鉢卷ともいふげな。せがきとは鯖の事。
又鯖を普賢といふ事は法華經とやら二十
八とやら片假名とやらへちまとやらで。
八宗を兼學せにや一々は知られぬことだ
と。檀那寺の和尚樣がお花の席で話され
た。今時の出家がこんな事知らないでよ
い寺は取れぬぞや。次手に覺えて置かつ
しやれ。コレ人足とは石持の事。百姓と
は田作りの事。こい等はずんど覺え易い。
鮹を天蓋というては凡夫めらが悟る故
に。今では袋足袋とやらかすだ。地國姓
爺とは蛤浄國とは鮑の事。よう稽古し
て置かしやれと。地いへど相手にならず柴
折りくべ　フシ火を吹付けて。詞イヤ〳〵
から頭を丸めては肴が喰ひたいとも思
はねば。聞いて置く氣もござりませぬ。
イヤ〳〵それは惡い料簡。世帯佛法腹念
佛。コレ坊樣。そんな片意地言はずとも。
此方に少し賴む事がある。何と聞いて下
さるべいか。ハアテ頭を丸めた役なれば。
お前のお爲になる事ならとは忝い。別の
事でもないがコレ。高がからだわ。貴樣
を歷々の和尚に仕立て外に釣出す仕事が
ある。どうぞ賴まれて下され。アヽイヤ
イヤ〳〵そんなおつかない事は赦して下
され。ヤレ〳〵こはや恐しやと。地取つ
ても付かぬ杵で鼻。嚙付く樣に萬八が。
詞イヤコレ御坊。餘り潔白にやらかして
も己ががんばつて置いためんかのまぶい

術妻の事さ。ハイ。いやさ昨日の暮れ過ぎ器量のよい女と若い男が。爰の内へ入つたをとつくりと見て置いた。あれは慥に駈落者こなた一人の仕事にや行くまい。おれと相談する氣なら男めをまいて仕舞ひ。玉を此方へ引つたくり。品川へ賣つてやれば十兩詰から上の代物。したがコレ。弓箭筋なら金にやならぬ。又親指に肉がなけりやこれも商賣屋で嫌ふ事。氣を付けて置かつしやれ。癲癇を試すにはなた豆喰はしやつい知れる。身の代はこなたと山割り。なんと甘いか。甘いか。地 と己一人が呑込んで濡手で粟のぶつたくり。世に萬八といふ事は。此男。フシ より始まりける。地 道念は無氣まじめ。詞 ハテさて御前はとんだ事。明るけりや月夜だと思うて。起きてゐながら寢言いはしやる。一人住みの此庵室。駈落者とやら女子とやら其樣事は存じませぬ。そんならこなたは知らないか。知らなけりや是非がない。必ず後悔さつしやるなと。地 苦を放してじろ〳〵とそこら傍を見廻しオクリ見廻し立歸る。詞 ヤレ〳〵とんだ男がある物だと 地 言ひつゝ立つて。詞 ホ、冬の日はさて短い。話する間にもう暮れたと。地 表を遙に眺め遣り。内へ這入つてあたふたと門の戸しめて フシ せどロの。地 稻荷の社の扉を開けば。内より出づる義岑公臺も共に フシ 悄れ顏。詞 マア〳〵こちへと。地 内へ伴ひたつた一枚嗜みの掛川莞筵をさらりと敷き遙下つて フシ 手をつかへ。詞 思へば盡きぬ御緣とて。昨日不思議に御目に懸り。御供申しは申しながら世を忍ぶ御身なれば。人の見る目を憚れども。地 見る影もなき此庵室。忍ばせ申す所もなく。詞 幸ひとアノ稻荷樣は。此村の鎭守にて。預りの此道念外から觸ひ人てもござりませねば。神は見通し稻荷樣へ。御詫申して暫しの隱家。地 さぞ御氣詰り御究屈。いかに世の末なればとて。義貞樣の御公達。義岑樣ともあらう御身がこの有樣は何事ぞと。こぼす涙に義岑公。詞 思ひがけなきそなたの世話。何角に付けて心遣ひ過分至極と宣へば。地 ほんに不思議の御緣にて見ずしらずの私まで。いかいお世話とばかりにてしをるゝ姿。海棠の雨を帶びたる フシ 風情なり。詞 アイヤ〳〵其お禮には及びませぬ。私はお前樣をよく存じて居ますれど。末々の者なれば御見知りも遊ばしますまい。兄御樣に附添うて武藏野の御合戰。矢口の渡の御最期迄始終御供に參りし者。其證據御目にかけんと。地 佛壇の下戸棚 フシ 明けて取出す一包み。コハリ 内に何かは白木の箱。蓋を開いて有合はす。物干竿を手ばしかくきり〳〵しやんと押立つれば。外に類ひの中黒は。紛

ふ方なきお家の白旗。壁に立掛け飛び退り。ノリ詞御旗を所持する此坊主は。元來お家の御旗持ち。久助と申す者にて身は輕けれど譜代の御家來。地矢口でお果てなされた時の其無念さ口惜しさ。詞冥途のお供と川端へ幾度か立寄つたれど。御先祖より傳はりし大切の此御旗。敵の手へは渡すまじ。一先づ故鄕へ持歸り若君樣へ差上げて。其後は死んでくれうと殿樣の御最期を地見捨ててすご〳〵歸りましたりや。詞情なやお家は亡び城は敵に乘取られしと。聞いた時の本意なさ悔しさ。おのれやれ敵の中へ踏込んで一人なりとも切殺し。死んでしまをと思ひしがイヤ〳〵〳〵弟御のお前樣のお行方を尋ね出し。御旗をお渡し申さんと。此通り姿をかへ上方へと思うても。差當つて路金はなし。行方知れぬと聞くからは世間も少と鎮まつたら。故鄕の方へ御出で

あらんと。此所に住居して托鉢するも海道筋。待ちに待つた甲斐あつて。昨日不思議にお目にかゝりましたは。私が存念が屆いたか。有難やと思へば思へば嬉しくて。昨夜もろく〳〵夜も寢られず。嬉し淚で此正月。名主殿からしてくれた。布子を淚で絞りましたと地吸り上げたる泣聲は。奇特にもフシ又。哀れなり。地義岑公はから手水。御旗を取つて。押戴き。詞此旗を見るに付け。討死なされし兄上の最期の御無念思ひやる。地思へば〳〵八幡にて。我を殘させ給ひしも。生存へて家を繼げと言はぬばかりの御情。それに引きかへ義岑は。若氣の至りの不行跡。遊所より付込みし竹澤が計略の。元を探せば皆我故。手こそおろさね兄上を殺せしも同じ事。其天罰にて此艱難。御赦されてスヱ下さりませと歎けば臺は噦上げ。詞敵の方便にたらされて。とや

から言うたが種となり。兄御樣の御最期の惡人を引入れし科人は此臺。御旗の手前も恥かしい。罰當りの我身をば蹴殺し給へと地打伏して又さめ。〳〵と泣き居たる。道念は目をすり赤め。詞言うても泣いても返らぬ事。此上にもお前樣はお家を興すが御孝行。私はかういふ身の上。これより諸方を修行して。他力を借りて我が君を一社の神に祝はんと。地思立つたる道念が志願は今に傳はりて新田の社建立と。たえせぬフシ修行ぞ賴もしき。かゝる折しも。地萬八が勸めにて一度に寄り來る百姓ども。内にはハツト驚く道念。義岑公は手ばしかく御旗を取つて懷中し又も隱るゝフシ稻荷の社。地表の方には無二無三戶を蹴破つて一時にどつと這入れば。詞ヤア何奴なれば狼藉と言はせも果てずコレお坊。此萬八が相談に乘らぬからはお觸のあつた駈落者引縛つて

連れて行く。玉は何處へこかしをつた吐せ〳〵と摑付くさうはさせぬと道念が。地有合ふ鉈刀を追取つて切つてかゝれば百姓ども御免々々と迯行くを跡を慕うてフシ追うて行く。地萬八は小戻りし社を目懸け立寄つて。扉を明けんとする所へ取つて返す道念が。鉈刀振上げし勢にコリヤ敵はぬと萬八が一散に フシ迯げて行く 地猶もやらじと追つかけしが半途より立歸り。扉を開き二人を呼出し。詞今の奴等が歸らぬ內。此道より落ち給へと。勸めに是非なく義岑公。臺も用意そこ〳〵に。あてども フシなしに落ちて行く。地道念跡を見送りて社の內へそつと這入り。扉を立つる フシ間もなく。地追々歸る百姓ども萬八も一度に落合ひ。詞コレ〳〵皆の衆玉の在所は見て置いた。さつきにもいふ通りなんでもかでも二つに割り。半分は俺がしてやる。半分を惣割だぞ。地皆こい〳〵と立ち掛り扉開いて引出せば。思ひがけなく道念が。狐の面を引被りすつくと。立つたる有様に 地ワイと驚く百姓ども。萬八も恂り フシ敗亡。道念は作り聲。詞うぬらが根性ため直せと稻荷大明神の御神託。謹んで 地承れと横飛こん〳〵狐の身ぶり百姓共は身の毛立ち只ハア〳〵とばかりにて一度に頭を地にすり付け尻もつ立つて フシひれ伏せば。地仕濟したりと圖に乘る道念。詞汝等が心を試さんと。假に女の姿と化し此所へ來りしに。强慾無慚の百姓めら。文彌地稻荷の神の御罰にて田畑殘らず踏みあらし。思ひ知らさん思ひ知れとはつたと。睨む目も口も面で。地隔てて見えねどもふんぢがつたる勢ひに。恐れ慄く百姓共。詞ノリ アヽ申し〳〵それは餘りお胴慾樣。私等は露塵程も曲つた心はござりませねど。此萬八が賴む故雇はれて參つたばかり。御免なされて 地下さりませと フシ口口詫びれば。詞ムヽ、そんならこの以後落人など搦め捕るとは言はぬか。何がさて〳〵。それなれば赦して取らす。ハア有難うござります此お禮には小豆飯。イヤまだある〳〵此庵の道念が托鉢に出た時。通れと言はずにたんと入れるか。何がさて〳〵。大抓みに入れませう。それなれば赦して取らす。此萬八めは大惡人。林清汝常陸の拔參りの。小娘を勾引し神奈川へ飯盛に賣つた事 地覺えてゐるか。詞南無三寶是は委しうよう御存じ。其時は博奕に負けしやう事なしの出來心。微塵も慾では致しませぬ。お赦しなされて下さりませ。イヤまだある〳〵。イセオンド伊勢原の百姓が。御年貢納めに出る所をおこはにかけて船へ乘せ。五十三兩負けさせた其言譯はちつともあるまい。詞アヽ悲しやそれ迄を御存じか。さう知られては

お堪りやない。まだある〳〵。隣の權助が房州へ鰯網にいた留守で。かゝアを汝がちよろまかし孕せた迄知つてゐる。コレハさてきつい見通し。イヤモ一言もござりませぬ。ヤイ〳〵百姓共ハアイ聞く通り大惡人。萬八めが村に居る故。そこで此村が繁昌せぬ。村境から追放する俺に付いて引つ立て來れ。ハア畏つたと 地百姓共。萬八を壓狀ずくめ。道念は神前の幣帛取つて先に立ち。兵庫クドキニトリ音頭（イ本）抓面張る打奪りの萬八はヨイ〳〵。慾の深い事は麹町の井戸よヨウイ〳〵ヨイ〳〵ヨイアリヤリヤコリヤリヤ。二上リキヤリ練馬大根で太いの根と來た。爪の長さが三十三間三尺三寸三分三厘三毛三拂。そこで稻荷樣の腹を立て。ヨイヤサ王子の親玉眞先がけ三圍笠森烏森。杉の森から三崎熊谷蕎麥切九郎助福德愛敬稻荷に西の宮。此神々の御罰にて。そこらは若衆賴みます。此萬八めを締ろやいヨイサ〳〵ヨイコレハノサヨイヤナア引立ててこそ三重へ行末の。地六郷は近き世よりの渡しにて。フシ其古は。都より。東へ通ふ旅人の廻るもオクリはるか弓と弦。矢口の渡と聞えたる。本フシ其の水上は調布や。さらす垣根の朝露を。貫ぬき留めぬ玉川の舟を浮べる流れより。フシ知れぬ心の底深き。地渡守の頓兵衛が内とは思ひ棧作。物好きしたる亭座敷渡世には似ぬ家作は。瑪瑙の階瑠璃の門扉龍宮城の乙姫かそれかあらぬか娘のお舟。蔦が孔雀のぼつとり者。田舍に惜しきフシ姿なり。地擔桶に水を打擔げ立歸る下人の六藏申しお舟樣。詞モウ料理は出來ましたか。旦那殿はまだ晝寢。ほんにマアあらう事か。今渡守の頓兵衛というては。おそらく日本國中に續く者なき大長者。なれども餘り人使ひがひどいから。幾度置いても奉公人が。三日とは居たゝまらぬ故。お娘御のお前が。竈元の世話なさるで。可愛いらしい其お手が荒うかと思へば悲しうて〳〵。酸漿程な血の涙。御家老か番頭かと敬はれる此六藏。渡舟を漕ぐ隙々には。薪を割つたり水汲んだり。いまいましい事ではある。こゝな内でも旦那殿と渡舟がなけりや樂ぢやと。地小言にお舟は氣の毒顏。詞コレ六藏人聞きの惡いとゝ樣の噂。地よしてたもれと制する折からどや〳〵と。しつかり候兵衛三上十次。からのぴん助三人連れ。親分は内にかと揚り口からフシ大あぐら。地皆樣ようお出でなさんしたと。お舟があいその莨盆。詞とゝ樣はまだ晝寢。御用があるなら起しませう。地といふ聲聞いて一間より欠伸まじくら。詞ムヽ今そこへ行つて逢ふべいと。地ゆるぎ出でたる主の頓兵衛。雪を欺く白髮に朱を濺いだるしか

み面。强欲無道の フシ眼ざし。地八反掛の大廣袖紙子仕立の伊達羽織。どつかと坐して。詞ヲヽ皆揃つてよう來た。して仕合せはどうだぞやい。どうかう所ぢやごんせぬ。持つて立つた大失敗。三人乍ら此中の元手。すつぱり負けて仕舞ひました。地面目もなき仕合せと。フシもぢかはすれば。詞ムヽ、ソリヤさん〴〵な目に合うた。えいわ。負ける時がなけりや勝つ事もない道理。ちとばかり負けたとて。補鍋匠が華鯨を請合うた様に。騒ぐ事たないわい。今一勝負やつて見ろ。コリヤ娘よ。ソレ板厨の金を出してやれ。アイ板厨を明けるにも及びませぬ。さつきに品川の兵五郎様と青山の萬九郎様が見えて。日外借りた金ぢやとて。持つて來てでござんす故。つい掛硯の引出へムヽそんなら出してやるべいと。地引出明けて。詞ヲヽ幸ひ爰に六包有る。一人前二百兩で足りずばもちつと借さうかといふに。地三人肝を潰し。詞ナント聞いたか。ヲイヤイ。凡そ金持も多けれど。つがもないはした錢か何ぞの様に。掛硯にも六百兩。目出度いといふも程がある。サレバサ。昔からない物は金と化物といへ共。化物はまだも出ようが。今時ない物は錢金。折々氣ばらしに芝居を見ても近年は浮瑠璃でさへ。何ぞといや金のない事。餘りけちな此時節。有る所にはかう澤山。マアどうすれば此様にめつたに金が出來まするぞ。話して聞かして下されと。地いへば頓兵衛烟管こち〳〵。詞イヤサ皆が料簡が悪いから。出來る金も出來ないわい。塵が積つて地山といへど積る内には又吹散る。詞二文四文ぢや埒や明かない。出世しようなら相場か金山博奕は勿論。地是も近年はこずいかうで能い鴨もフシかゝらぬ故。詞此頓兵衛が思付き。かの鎌倉で貸元の大將。地足利尊氏様と謀反勝負の義興殿が。やみ雲の高つぱり。詞武藏野の窩賭で大勝負。元手の强い尊氏様も根こんさいぶち負けて。コリヤ一番切替うと鎌倉へ 地コハリ盆がへ。何か破れかぶれの義興。うぬが命を投げ長半。鎌倉へ仕掛けの博奕。詞手におへない首尾に成つたを。地鼻つぱりの竹澤監物殿。かすり取りの江田判官殿から。詞此親父へ人をよこして。てらをしてくれると思つて。どうぞ魂膽してくれろと。モ色々とのお頼み。地ハテ後生こそ願ふまいけれ。詞人の爲になる事だ。ぢやが。甘口ではいけまいと。水銀奴からの思ひ付きで船の底を剜抜いて。六藏めにさるを引かせ。一番ごつきりで義興めを。地川中でぐはんと言はせた。フシ其御褒美に此頓兵衛。詞尊氏様の尻持ちで。大名になる筈なれど。それでは結句氣が詰り。

好きの博奕が打たれませぬ。大名けんどんよしにして。矢張りたべ付けたぶつかけの渡守がよござりまするど申上げたりや。そんなら何なと望めとある。そこでお金をしたゝか請けて。地そいつを元手に大勝負。勝つ程にける程に。持丸長者とは。フシおれがこと。詞から普請をやらかしても。昔を忘れない様にと。アレアノ通り床の間に櫓や簑を飾り物。地出生の因緣かくの通りと フシ語るにぞ。地三人は不審晴れ。詞それで聞えた。そんならおいらも一思案。何ぞあてずつぱうにやつて見よかい。ヂヤガくり抜かうにも船はなし。是から坪皿をくり抜いて硎子入れてやらかさうナウ候兵衛。イヤイヤそれよりもおらが望みは。爰なお娘の舟底が剝抜いて進ぜたい 地サア〱お暇其内と フシ皆々打連れ立歸る。地道引違へて走り來る村のあるきがずつと這入り

詞申し頓兵衛様。お尋ね者の事に就いて。竹澤様から御用がある。庄屋殿迄只今一寸。ムヽお尋ね者とは知れた事。新田方の落人の。御詮議であんべい。それなら行くにや及ばない。どちらから來ても此渡しを渡らにやならぬ一筋道。兼ねて竹澤様と牒合せ。新田方の落人が。若し此所へ來るが最期。相圖の烽火を上げると村々で法螺を吹けば。竹澤様から捕手が出る。若しも俺が方で搦取るか討取るか。加勢に及ばぬといふ知らせには。アノ亭座敷の上に釣した太鼓を打てば。村村で取圍んだが皆ちる約束。庄屋どのが大きな面で。どう參つたから參つたと隣の婆様茶を參つたとむだばかりいうであろ。何か様子は知りませぬが。呼んでこいとの言付け。そんなら一寸行てやらう。ヤイ六藏。若しも落人臭いやつが見えたら。烽火と太鼓の手都合を忘れるな

と 地腰に大だらぼつ込んで フシ小庭を連れて出でて行く。地跡に六藏小聲になり申し〱お舟様。詞エヽお前はむごいとすり寄れば。詞とゝ様の留守になると。又ぢやら〱とてんがうばかり。アイヤてんがうぢやござりませぬよ。とうからお前に惚れて居て。何ぼ口說いても戸板にごろ付豆よ。其豆故に身をつくし。根津音羽はいふに及ばず。氷川から補裙樓。朝鮮長屋鮫が橋。蘿蔔圃迄ほついたれど。笠森のおせんと。お前程なはどつこにもござりませぬわい。コレ申しどうぞ叶へて下さりませ。アレ〱〱。テモ耳の早い奴ではある。コリヤたまらぬと抱付く。地放せ〱と フシせり合ふ所へ。地表口から日傭の八助コレ六藏殿。詞ちつとの內用がある。代りに渡場頼むというて。俺に任せて貴様はコリヤしなしやな〱。親玉へ知れると毛氈をかぶ

る出入りだ。地サア〳〵ござれと引立つれば詞アイヤ少仕かけた用がある。もちつと待つて下され。イヤ〳〵待つ事はごんせぬ。貴様の顔で色事とは唐茄子もモウ古い。飛んだ茶銚が西瓜と化けたとフシ打連れ舟場へ急ぎ行く。地娘は跡に獨言。詞けふの髮は上村のおみよ様が。筋立ててくれなさつた大事の髱を損うて。此笄の吹廻しの。地紋迄なくして仕舞うたと。フシつぶやき〳〵入りにける。鴛鴦の番離れぬ。フシ二人連。地義岑公は漸うと道念が忠義故。生麥村を落ちのびて。新田の方へと志し矢口の。フシ渡しに差しかゝり。詞ナウ臺妾が兄義興殿の御最期ありし矢口の渡し。此水底の怨しやと。地川に向ひて合掌し。南無尊靈出離生死頓生菩提と。地回向の聲と諸共に。暫し涙にくれ給ふ。フシ臺も。倶に涙聲。詞ヲヲお歎きは御尤も。早う新田へお歸りあり。御一門をかたらひて。御矢の詮議兄御様の敵をお討ち遊ばせと。地諫むる詞に義岑公。詞見れば渡しに人もなし。道にて聞けば此家が。渡守の内とかや。地頼んで見んと門口に歩み寄り。詞頼みませう〳〵と宣へば。奥より走つて娘のお舟フシ何の御用と立出づれば。地義岑公しとやかに。詞川の向ふへ参る者。舟の無心との給へば。地顔つく〴〵と打守り。詞イエ〳〵舟はいくらもあるけれど。落人の詮議で日暮れては出しませぬ。その上にお前の様な美しい殿御には。貸す事は猶なりませぬと。地顔に見とれてうつとりと心の内は燒がらの。胸をこがせる薄烟。いとしと思ひ懸香のどうぞ留めたきフシ下心。地義岑公は氣のどく顔。詞我々は急ぎの道。暮に及んで宿屋はなし差當つて難儀なれば。何とぞ渡して下さりませ。イエ〳〵どうあつてもなりませぬ。宿屋がなくば私の内に。泊りなさつたがよいわいな。ソリヤとめて下されうか。留めいで何といたしませう。地それは近頃忝い連の女が持病の痞へ。幸ひのよい足やすめ。フシ臺こつちへと呼入るれば。詞ムヽスリヤあなたはおつれ様かえ。エヽにくらしいと地ぴんとする臺は會釋し旅づかれの私ら。お留めなさつて下さるとは忝うござんする。アイお前もお連れなら。おとまりなさんせ。サア申し。見ぐるしけれどアノ奥の亭座敷がよい見はらし。地あれでゆるりとお足休め。しからば左様と義岑公。臺諸共打連れてオクリ奥のへ一間に入り給ふ。地フシ跡打ちながめ娘のお舟。詞ほんに美しいといはうか。可愛らしいといはうか。とてゝ女に生るゝなら。あんな殿御と添うて見たい。それはさうとあの女中。兄弟なりやよいが。もし夫婦なら。わしや何とせう

と。地おぼこ娘の一筋に思ひみだるゝ糸芒。穂に フシあらはれて見えにける。地義岑公は一間を立出で。詞申し〳〵お女中。つれの女が薬たべる。お湯の無心と地宣へば。娘はハツト手をもぢ〳〵。詞申し旅のおかた様え。お前にちつと御無心がござんする。コレハしたりかうお世話になるからは。何なりとも御遠慮なう。アイアノ。連の女中様は。妹御でござんすか。お内儀様でござんすかえ。これはさてかはつた事に御念が入る。アイお妹御ならようござんすが。若し御夫婦ならこつちにちつと濟まぬわけがござんする。アイ成程。あの女は私の妹。久々の病氣ゆゑ。保養がてら浅草の觀音様へ。連れて參詣致しまする。ア丶嬉しや〳〵。それ聞いたらもう何もかも入りませぬ。お前どうぞ私が内に。十日も二十日も。十年も。百年も。逗留なされて下さりませ。したが私らが様な田舎者は。相手になるもおいやであらうけれど。エ丶もうつんと。わしにばかり物言はせ。コレイナ〳〵。こちら向いて下さんせと。地右よ左と付け廻す。琥珀の塵や磁石の針。粋も不粋も一様に迷ふが上の。フシ迷ひなり。地義岑公は氣のどくさ。詞思ひがけなきお宿の無心。いかいお世話になりますると。地入らんとし給ふ袂をひかへ。詞ソリヤ餘りでござんする。是程思ひ詰めたものを。返事のないはお胴慾。地なんぼ田舎生れでも惚れたが因果惚れられたが。不祥と思うて下さんせ。サハリ日かげの木々も花さけば岩のはざまの溜り水。すめばすむ世の思ひ出に。叶へてやらうとつい一口。詞いうてくれたが。よいわいなと地すがり付いたる袖袂。さはらで落つる玉笹の フシあられもないが戀路なり。地義岑公も稲舟のいなにもあらず。詞ム丶それ程迄に思うて下さるお志。さら〳〵仇には。思ひませぬと地じつとしめたる手の内は。戀の錠前情の要。互に抱きつき草の。うつろひやすき色糸のぬれの糸口錠口。すひ付き引付きしめ付けて フシ離れがたなき風情なり。地時にふしぎや義岑公。娘も共に色かはり。ハツト身震ひ忽ちに。フシどつかと倒れ息絶えたり。地音に驚きかけ出る臺。コリヤ何事と狼狽へながら。柄杓の水を口うつし。介抱しても呼びいけても。其甲斐さらにせんかたも。思ひ付いたる氣てんの臺。扨は娘の色香に迷ひ。心の穢れ御旗の咎めなるかと手を清め。義岑公の懐へ手をさし入れて件の御旗。さつと開けば忽ちに二人は夢の。フシ覺めたる心地。地表の方には六藏が戻りかゝつて。窺ひ足。義岑公あたりを見廻し。詞此家に泊りて窺ひ見れば。家業に似ざる普請の

結構。様子といひ場所といひ。かた〳〵もつて心得ずと。娘が戀慕を幸ひに問ひ落さんと思ひしゆゑ。近寄れば今のしだら。仔細ぞあらん此家の内と。地御旗を取つて巻納め。臺來れと引きつれて フシ奥の一間に入り給ふ。地跡にしよんぼり本意なげに何と詞もなげ首し。長地たづきも知らぬ海中に楫なきお舟が物思ひ。地表に打ちしをれてぞ フシ居たりける。控へし六藏は。木部屋に隱せし一腰ぼつ込み。詞アノ旗を持つからは。紛ひなき新田の落人。相圖の狼煙を上げうか。イヤ〳〵討手を引きうけ討たせては手柄にならず。拔懸けし搦め取つて褒美の金。おれ一人でせしめてくれん。うまい〳〵と地うなづき〳〵奥を目がけてかけ入るを。立ち塞がつて娘のお舟。詞コレ六藏。そなたは奥の旅人を。何とせうと思やる。ヤア何とは知れた事。さつきにとくと見て置いた。中黒の旗持つからは新田の落人。義岑に違ひはない。去年親方と相談して。舟底をくりぬいて。義興を殺す時は。命がけのこと手傳はせ。御褒美をもらふ時は親方一人であたゝまり。此六藏はおちやつぴい。出物になつて今に此ざま。其弟の義岑。此度はおれが生捕つて。御褒美丸であたゝまり。おれも出世をせにやならぬ。邪魔なさるりやお主とて容赦はないと。地とめても留らぬその勢ひ。一間に立聞く義岑公。娘は一途に戀の邪魔。拂はん物と フシ思案を定め。詞ヲ、無理にそなたをとゞめはせぬが。何ぼ言うても相手は武士。若し仕損じまい物でもない。僅かの褒美に目がくれて。わしが言ふ事聞かぬからは。是迄何のかのといやつたは。皆うそかやと 地いはれて悔り。詞ソリヤお前ほんの事か。イヤ〳〵〳〵。アノ奥の男めに氣がある故おれを留めうといふ謀。さううまくは参るまい。イヤナウ。そなたの心を見た上と思うてゐた故。是迄は返事もせなんだが。それともに疑やるなら。そなたの勝手にしたがよいと。地ぴんとすねられ六藏は。惡寒發熱あたまに湯氣。詞コイツハエイワイ〳〵。それならおまへは。此六藏が性根を見た其上では。きまつてくれるといふ腹か。サイノ。そなたがおれと夫婦になりや。とゝ様の爲に子ぢやないか。親子の間に拔けがけして。一人の手柄にするにや及ばぬ。とゝ様は庄屋殿へ行つてなれば。とくと相談した上で。どうともしたがよからうと。地口へ出まかせ間に合せを言うて水棹や詞の楫。わたりに舟と六藏は乘せかけられてふはと乘り。詞コリヤ近年にないよい目が出たわい。そんならわしは庄屋へいて。親方を連れて來う。奥の奴等を逃がさぬ様。氣

を付け給へ女房共と 地延びた鼻毛のとちめんぼう。 フシ振廻してぞ出でて行く。 地しすましたりと門の戸の。 懸金かけてとつかはと フシ一間の内へ入りにける。 地フシかくて時刻も久方の。 空さえ渡る冬の夜の。 本フシ二十日ゐなかの月出でて。 遠寺の鐘のかう〱と。 帯に流るゝ川水も。 フシいとものすごき門口の。 地一群茂る藪の中。 ぬつと出でたる主の頓兵衛。 時分はよしと呼子の笛。 塀の陰より下人の六藏。 頓兵衛小聲に。 詞ノリコリヤ〱六藏。 娘めが目を覺し邪魔ひろげばひち面倒。 物音のせぬ様におれ一人忍び入らん。手前は表に氣を付けて。もし逃出さば討取れよ。 ヲツト合點と 地うなづき囁き六藏は元の小陰に フシ身を忍ぶ。 地頓兵衛は門の戸を引けど。 しやくれど明かざれば。 大だら引抜き壁切りあけ。 はいれば吹込む川風に燈火消えて眞の闇。 勝手覺えし我が内も慾に心のくらまぎれ。 忍べばいとゞ身も重く。 床はぎち〱足音の耳へはいれば立留り。 一息ほつと次の間へ又も踏出す。 足の下ぴつしやり砕ける煙草盆。 エヽどんくさいと心では怒りながらもそつと投げ。 襖にばつたりあいたしこオクリなんなく。 忍ぶ亭座敷。 梯子の上へ二足三足。 詞イヤ〱〱きやつも名に負ふ義興が一族なればこは者と。 地心でうなづきそつとおり。 下屋へ廻つて探りより。 闇にも光る段平を抜いて突込む二階の板。 上にはワツト玉ぎる聲。 してやつたりと刃物引抜き血おし拭ひ。 二階の フシ梯子かけ上り。 地障子蹴放し月影に夜着引きまくりて見て恟り。 詞ヤア〱わりや娘か。 お舟かと 地フシ驚きながら。 詞義岑と女めはいづくへやつた。 有りやうにぬかせ。 地有りやうにぬかせと目むき出し怒りの大聲。 フシ娘は顔をつれ〴〵と。 恨めしさうに打ち眺め。 詞申しとゝ様。 浮世に生れた人ごとに。 慾を知らぬはなけれども。 お前のやうにこり固まり。 佛とも法ともわきまへず。 人は死なうが倒れうが。 我さへよければかまはぬと。 身勝手ばかりの强慾非道。 あらう事か源氏の大將。 義興様をたばかつて。 むざ〱と殺したる。 其天罰が我が子に報い。 宵に泊りし旅のお方。 義岑様とは露しらず。 地可愛らしい殿ぶりに恥かしながら心の迷ひ。 お側へ寄れば恐ろしや御旗の咎め。 詞義興様の御怒りにて悶絶せしも。 さうとは知らぬ戀路の闇。 さいぜん六藏を追出し。 一間へ忍び様々と歎きしに。 義岑様のおつしやるには。 兄を殺せし頓兵衛が娘ゆゑ。 此世で添ふ事ならねども。 親と一所でないといふ。 一つの功を立てるなら。 未來で添はうとおつしやつた。 其一言がわしや嬉しい。 此

内にお出であつては。お身の上も心許なく。委細のわけを打明けて。月の出ぬ間を幸ひに。船にて落し参らせしと。地聞くより頓兵衛ぢだんだふみ。娘が髻引つつかみ。詞エヽおのれは〳〵大膽千萬な。見ず知らぬ男めに惚れくさつて。親の大事を他人に打明け。手に入つた代物を。ようも〳〵落しをつた。道しらず。罰あたり。地憎つくいやつと拳振上げ丁丁々。手負ひの上の打擲に。娘は息もたえ〳〵に。詞エヽ罰あたり道しらずといふこと。お前も見事御存じか。つね〳〵不埒な勝負ずき。あまつさへ恐しいわるだくみが仕たらいで。たつた一人の娘の戀人。殺さうといふ惡心から。現在我が子を手にかける。あんまり非道ぢやどうよくぢや。地死ぬる我が身はいとはねども。あとに殘つたお前の身の上。案じ過しがせらるゝと恨み歎けば。詞エヽ役にも立たぬ世迷言。落人を取りにがして此親が立つものかと。地突退けはね退け行かんとす。娘は袖にしがみ付き。詞意見いうても歎いても。聞き入れ給はぬ無得心。かゝ様がござるなら。仕様模様もあらうもの地何をいうても身一つに思ひつめたる義岑様。此世で添はれぬ惡縁と。聞けば聞くほど猶戀しく。お手にかゝつて死んだなら親と一つでないといふ。言譯立たば未來にて。いとし殿御にあはれうかとそれを頼み二つには。一人の娘が先立てば一念發起もし給ひて。お心も直らうかとはかない事を頼みにて。覺悟きはめて死にまする。娘かはいと思すならお心を飜へし。義岑様を助けてたべ。頼みまするとくどき立てワツトばかりに伏沈み。血汐に爭ふ血の涙ふびんと。いふも愚かなり。頓兵衛はせゝら笑ひ。詞此年迄仕こんだ根性。釋迦如來が元服して。誤り證文書かうというても。いつかないつかな飜へさぬ。相圖を定めた義岑めを取りにがしては。竹澤様へ約束の顏が立たぬと。地娘を取つて突きとばし。二階をかけおり川端に仕懸けし烽火に火うちの早業。天を焦せる炎の光。かねて相圖の村々より。人を集むる法螺吹き立て。フシさも物すごき其有様。地娘は苦しき身をあせり。詞村々より大勢にて取巻かれ給ひなば。何とてお命あるべきと。地天にあこがれ地にひれ伏しスヱ正體。涙のひまよりも。思ひ付いたる一思案。上なる太鼓にきつと目を付け。詞此太鼓を打つ時は。生捕りしと心得て。村々の圍みを解くと最前聞いたが天の與へ。地爰ぞ殿御へ心中の。女の操と一筋に思ひ付いたる心の誠。よろめく足を踏みしめ〳〵。やう〳〵撥を振り上げて。打たんとしても手は屆かず。のび上りてはよろ〳〵よ

ろ。又起直つて飛び上り。どんと一聲かつぱと伏す。音に驚きかけ來る六藏。それ打たせてよいものかと。抱きとゞむるを突退けはねのけ爭ふ內身輕に出立つ頓兵衛が。繋ぎし舟に飛びのつて。フシ櫓を押立てて漕出す。地上には娘が身をあせり。コレナウ〳〵と聲かぎり呼べど。叫べど叶はねば。又もや撥をふり上ぐるおつとまかせと後より。ばち引つたくる六藏が脇指引きぬき切り付けられ。欄干より眞逆樣。フシ川へざんぶり水煙。地上には娘がせんかたも。落ちたる鞘を振上げてめつたむしやうに打つ太鼓。響きに爭ふ頓兵衛は櫓を押立ててえいさつさ手疵に痿まぬ六藏が。日頃に馴れし水練に早瀬の浪を事ともせず拔手を切つてコハリ 立ち泳ぎ。娘は死出の斷末魔。夫をしたふ執着心。蛇とも成るべき日高の川。領布魔山の悲しみも是には。いかで

增るべき。跡は間遠になる太鼓遙に隔たる 三重へ川向ふ。地頓兵衛は腕限りなんなく舟を乘着けて。陸へ飛びおり フシかけ出す。地堤の陰より高聲に。詞ヤア〳〵新田小太郎義岑これにあり。匹夫め待てと呼びかけられ。地頓兵衛は立留れば。すつくと立つて義岑公。詞現在の兄の敵見遁すべき奴ならねど。どうで助けぬおれが命。娘が切なる志にめで。暫時の命助けしに。追つかけ來る不敵者。モウ赦されずと フシ拔きはなせば。詞ヤア飛んで火に入る夏の虫。名乘つて出たは百年めと。地渡り合うて丁々はつし。何とかしけん頓兵衛が。つまづく所を義岑公。付入つて取つて組みふせ首をかゝんとする所へ。臺を提げ六藏が。詞サア義岑。親方殺さば此女たゞ一思ひとしめ付ける。地ハツト驚くたるみを見。持返して頓兵衛が。踏むやら蹴るやら叩くやら。詞コ

リヤ六藏娘が敵の二人の奴原。なぶり殺しにしてくれんと。地櫂と水棹のからざを打ち。無念々々と義岑公。臺は苦しき聲限り。力一ぱい牛頭馬頭が。いつそとどめの一思ひ。今が最期觀念とふり上ぐる間もあら不思議や。いづくよりとも白羽の矢二人がのどぶえ射ぬかれて。フシ其儘息は絕えはてたり。地義岑臺は起上り。詞お前にお怪我はなかつたか。そなたは無事かな。さるにても何者のわざなるぞと 地引拔き〳〵。詞ヤア是こそは家の重寶。水破兵破の二つの御矢と。地驚き給へば臺は目早く。詞其矢に何か短冊が。ムヽげにもと月あかり。何々二つの矢を奪はれては。新田の家名の衰へんことを憂へ。我が一念の通力にて敵の手より奪ひ返し。其方へ與ふるものなり。新田小太郎殿義興と。地讀みもをはらず義岑公。ハヽヽ、扨は兄上義興公。お命亡び

給ひても魂魄はれい〳〵と。家を思ひ。弟を憐み給ふ大恩。何を以てか報ずべき。詞再び御矢手に入るからは。官軍をかり集め。朝敵を滅して兄上の恨みを散ぜん代々傳はる此御矢。家の重寶。武運の守り。地ハヽヽヽ有難し忝しと躍り上つて悦び給ふ。末世の今に至るまで新田の社へ參詣し。守りの御矢頂戴の。フシ因縁かくとぞ知られける。地時に向うの川岸に。松明提燈きらめきて フシさながら晝の如くなり。詞ムヽさてこそ〳〵。敵方の捕手の人數。押寄すると覺えたり。此ひまに落延びんと。地臺もろ共 フシいつさんにやう〳〵遁れ落ち給ふ。地程もあらせず竹澤監物。數多の家來一同に船にこみ乘り。詞ヤア〳〵者共。頓兵衛にいひつけおきし相圖の太鼓の聞えしは。落人を生捕りしと。待てども〳〵沙汰せぬは。仕損ぜしと覺えたり。おつかけて討ちとめん。いそげやつと下知すれば。地櫓をおし立ててえいさつさ。川の半に乘出す。コハリ不思議や俄に風おこり。川波逆立ちかき曇る。空に雷電霹靂 フシすさまじ。くも恐ろしゝ。數多の家來を始めとして。水主楫取色ちがひ。不敵の竹澤少しもひるまず舷につつ立上り。詞ヤア卑怯なり者ども。此川にて去年の冬。義興めを殺せし故。恨みをなすと覺えたり。シヤなに程の事あらんと。地虚空をにらんで立つたる所に。空中より聲高く。詞ヤア〳〵竹澤監物秀時たしかに聞け。汝が術に亡びたる。新田左兵衛佐義興が。一念爰に顯はれて恨みをなさん。思ひ知れと。地呼ばはる聲の下よりも小山の如く波立つて。舟をゆり据ゑゆりおろせば。廣言吐きし竹澤も。五體わな〳〵膽裂色。猶も吹き來る暴風。船は碎けて飛散れば。數多の家來一時に。底の フシ藻屑となりにける。地中にも强氣の竹澤が。波を潜つて泳ぎ行く。上より黑雲覆ひかゝり。甲冑を帶したる義興公の御姿。馬上ゆゝしく出立つて。御手を伸べて竹澤が頭を抓むと見えけるが。二つにさつと引裂いて。今こそ恨み晴れたりといふ聲ともに船中にて。亡び失せたる十騎の魂魄。君を守護してあり〳〵と空中に顯はるれば雷も鎭り浪風も治る御代の末までも。運を守りの御神德。十騎の宮と諸共に仰がれ。給ふぞ有難き

第五

地新田左兵衛佐義興公。怒りの一念止む時なく。鎌倉六波羅の館にて雷鳴數度に及びければ。御怒りをなだめんと矢口の村に社を建て。今日遷宮と聞き傳へ フシ參詣群集をなしにける。地鳥居の方より人拂ひ。勅使のお入とざゝめけば。新田

小太郎義岑公。装束更め出で給ふ。兵庫助信忠は德壽丸をかしづきて フシ禮義。たゞしく控へ居る。地程なく勅使四條大納言隆資卿。設けの席に着かせ給ひ。詞ホヽめづらしゝ義岑。それなるは德壽丸よな。さても義興が靈魂。鎌倉六波羅の館にて種々の恨みをなせしゆゑ。尊氏義詮恐れをなし。南北朝御和睦調ひ。天下太平に治り萬民安堵の思ひをなすも。全く義興が神靈の德。古今に類なき忠臣と叡感殊に麗はしく。新田大明神と崇むべし。又忰德壽丸は新田の城を賜はり父が本領安堵すべし。義岑は少將に任官し昇殿を許し給はる。兵庫助が忠勤。南瀬六郎が節義叡聞に達し甚だ感じ思召さる。義岑宜しく沙汰あるべしとの綸命。地猶も忠勤勵むべしと聞いて兩人有難涙。義岑公謹んで。詞コハ有難き勅諚。此上ながら宜しき樣。地奏聞願ひ奉ると勅答あれば兵庫助。詞尊氏公の執權畠山道誓。淸忠卿と心を含せ天下を奪はん工みにて。親しき一家の新田足利爭亂に及びし段。彼等が惡事顯はれ兩家御和睦のしるしとて鎌倉より兩人に繩をかけ引渡されて候なり。地それ／＼とありければ。ハツトいらへて道念が下知に隨ふ守護の武士。二人のなは付き引出す フシ折こそあれ。地思ひがけなき後の方鬨を フシどつとぞ上げにける。地コハ何事と見る所に。江田判官景連手の者引き具し追取り巻き。詞ソレ遁すなと下知すれば 地心得兵庫は若君を道念に抱かせて。當るを幸ひなぎ散らせば。むら／＼ばつと逃散るを遁さじ フシやらじと追うて行く。地其隙に江田判官二人の繩付き助けんと立寄る所に不思議やな。鳥居の笠木落ちかゝり淸忠景連畠山壓に打たれて一時に フシ微塵になつて死してげり。地コハ不思議なる神德と勅使も感涙義岑公兵庫助を始めとして。在合ふ人々下部迄ハツトばかりに三拜九拜。實に著き靈驗は。響きの聲に應ずるごとく。水淸ければ月やどる諸願成就長久の。君と神との道直ぐに榮ゆる。御代こそ目出度けれ

明和七年
庚寅正月十六日

福内鬼外戲作

補 吉田冠子
玉泉堂
助 吉田二一

跋

樽ぬき澁柿を笑て曰。汝我身の澁きを恥ず。澁柿答て曰。汝も澁を抜ずんば澁く。我も澁をぬかば甘からんと。善惡は本不二なり。一日吉田冠子來りて淨瑠璃の作を請ことしきり也。されば盲は蛇に畏ず。小戸はぼた餅に迯ずと。不稽無上の筆任せ。只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず。其餘は闇雲に綴合せども。今をはじめの作者の巣立。しかも初日の急なれば。引書を閲に遑あらず。校合も足ざれば其誤多からん。澁のぬけざる澁柿の。澁き所は容したまへ。寅の初春中旬。作者甲斫福内鬼外。まじめに成て誌す

十三鐘
絹懸柳

妹脊山婦女庭訓

座本　竹田新松

序詞 頭直位す。敷津八洲の三器。智たり仁たり英勇の。利劍四夷を刑し。和らぎ治む和歌の道。八つの耳をふり立てて小牡鹿の聲彌高く。曲れるを直きに置く。操久しき君子國。榮枯交々皇の。寳祚傳へて三十九代。天智天皇の宮居なす。オロシ へ奈良の都の。冬木立。地 日の本の聖主たる君萬乘の御身だに。暗き盲の御惱み天地に日を失ふ如く。堂上堂下これを痛み時々の評議も外ならず。玉座の左は蘇我の蝦夷大臣。政務を預かる威に驕り。我意驕慢たる其勢ひ右の座には安倍中納言行主。庭上の勤臣には大判事淸澄守護の武功を立烏帽子。素袍の袖もたをやかに。同じく此方は蝦夷が家臣宮越玄蕃。其外百官百司の面々 フシ 威儀を。正して伺候ある。地 蝦夷寛然と上座し。詞 改めて言ふに及ばねど。帝盲とならせ給ひ。神例故實日々の政務。行はせ給ふ事能はず。老身の此蝦夷悉く是をはからふ。忰入鹿の大臣は病床に引籠り。又。進出でて力となるべき鎌足の大臣には。假初にも虚病を構へ。行事を捨てて引込む料簡。疾より帝へ奏聞遂げ。今日は鎌足を呼出し。事を糺すに一決。それ故使を立て置きたりと。地 己が邪智を押し隠しさかしら言ぞ。フシ 是非もなき。地 中納言進み寄り。詞 蝦夷公の仰せもさる事ながら。忠勤正しき鎌足大臣。何を以て野心あらん。地 再三思慮を廻らされ麁忽の計らひなき樣にと。仰せも待たず宮越玄蕃。詞 コハ行主公の詞とも覺えず。君の叡慮を安んぜんと。老身の疲れも厭はず。忠勤一途の蝦夷公。麁忽の奏聞あるべきか。地 歌 蹴鞠に日を暮し政務を知らぬ馬鹿公家と。一つ口には申されずと。傍若無人のお主贔屓大判事居直つて。詞 ヤア陪臣の玄蕃過言千萬。堂上の論談は君子の諍ひ。其方達が知る事ならず。下つて居やれときめ付くれば。イヤ陪臣でも陪臣でも。理非を正すに遠慮はない。今一言ゆつて見よ手は見せぬと。地 詰めかくれば此方も鍔元くつろげて。既に斯うよと互の爭ひ蝦夷聲かけ。詞 ヤア〳〵淸澄玄蕃めも差控へよ。無禮至極と制する折から。地 取次の靑侍罷り出で。詞 武官の方々へ御願ひの筋候とて。先達て相果てし太宰小貳の後室。押して伺候仕ると。地 呼ばはる程なく入り來る。太宰の後室定香とて媚も

粧もさだ過ぎてォクリ世を捨て。草の二つ髷。本フシ打掛さばきしとやかに。地階近く両手をつき。詞恐れながら申上げます。過行きし太宰小貳。五十日の忌明も相濟み。何卒娘雛鳥に。似合はしき聟をまうけ。太宰の家相續の御願ひが申上度く。つひに上らぬ雲の上。地慮外はお赦し下されと。會釋の顏もフシ紅葉せり。地大判事打向ひ。詞某取次を申上げ御伺ひ申すべけれども。小貳殿存生より。此淸澄とは遺恨ある家。取次して叶はぬ時。私の意趣により。依怙の沙汰致したなどと疑はれては詮がない。ソレ玄蕃取次がれよ。ヲヲこれ幸ひなに定香殿。兼て主人蝦夷公にお願ひ申し。貴方の息女雛鳥殿。某が宿の妻に申受度く。色々と申せども。今に何の沙汰もなし。只今のお詞で。拙者も安堵致したと。地思ひも寄らぬ聟がねに。とかうの返事言ひ兼ねて フシ差俯向いてゐたりける。地行主耳にもかけ給はず。詞ヤア〳〵定香玄蕃が願ひは內意のこと。何れの內奏聞遂げ。家名相續の沙汰あらん。ア、有難うござります。地長居はおそれと抑付けの。聟の評議を免がれて。御前をフシしづ〳〵立歸る。地君は御惱の奥深き。帳裡を出づる釆女の局。蝦夷大臣に打向ひ。詞帝様の勅諚あり行主様にも聞し召せ。鎌足大臣に野心あるの奏聞。今日御殿へ招き寄せ。事明白に糺すべしとの綸言なり。地父上を召しまして何事も聞き給はれと。スヱテ打濕り宣へば。地蝦夷大臣居丈高。詞鎌足大臣遲參は審し。又も使を馳せ候へ



明和八年正月

と。地呼ばはる折から参内と案内して。入り来る鎌足大臣。中納言座を譲り給へば。押し直つて蝦夷に向ひ。詞今日某を改めて召さるゝこと。何事やらんと宣へば。地采女の局進み寄り。詞父上へ申します。とくより病床にまし〳〵て。久しく参内なき事を。諸卿野心ありとの疑ひ。忠勤厚き大臣。何か曲れる心あらん。速かに言ひ開くべしと有難き勅諚と。地聞きも敢ず蘇我の大臣。詞鎌足の大臣とは主上の左右を助け合ひ。水魚の交り厚ければ。掟を正すに遠慮はならぬ。只今貴卿に見する物あり。彌藤次参れと呼ばはれば。地あつと答へて荒巻彌藤次フシ一つの箱を携へ出で。地御前に直し引きさがる蝦夷件の箱打開き。詞五日以前春日の社壇へ。何者とも知れず奉納の此一箱。中には一つの鎌を入れ。男子誕生平天下と書付けたり。其方の娘采女は。斯の如く君にかしづき。誰及ばぬ寵愛。男子誕生あれば鎌足殿は自然と外戚。平天下と書添へたるは。四海を乗取る心の所願。鎌は鎌足の家の寳。外に類(たぐひ)のない重寳。其影の鎌を新たに鍛(う)たせ。奉納ありしは餘人でない。覺えないとはいはれまい。サア返答あれ鎌足殿と。地思ひも寄らぬ印(しるし)の鎌。數多(あまた)の公卿(くぎやう)呆れ果てフシ口を。閉ぢてぞ居たりける。地鎌足大臣思慮を定め。詞此身に取つてかつ以て覺えなけれど。眼前(まのあたり)疑はしき影の鎌。反逆(ほんぎやく)の者あつて。我を罪に落さん結構。此悪黨を見出す迄は。申分けても詮なき事。我は暫く禁裏を避け。何れへなりと蟄



興行の番附

居せん。ホヽウ其身のあかり立つまでは何れへなりと蟄居あれ。ソレ〳〵玄蕃彌藤次。門前へ送り出せ。地早う〳〵に采女の局。何故申譯を遊ばさぬ。コレなう申し父上と歎き諫める中納言。耳にもかけず鎌足大臣。しづ〳〵フシ歩み出で給へば地蝦夷を始め數多の諸卿早や退散とたつか弓。武勇たゆまぬ清澄も。覆へる雲に。是非なくも。心の駒の控へ綱。荒卷宮越素袍の袖。肩臂はつて歸館の警固。利を隱せる鎌足は心に。はかる七重八重。馴れし九重振り捨てていづくの空やはかりなき後の榮を松の色。操變らぬ君が代の例久しきユリ。大三重地春日野のフシ社頭に近き。地小松原時雨晴間の狩戻り。大判事が嫡子久我之助清舟。美男とも美童ともさたに聞えし角前髮オクリそれとは。見せぬ簑笠に。フシ振擔げたる吹矢筒。詣で休みの拾床几。是幸ひと腰打かけ勞れを休むるフシ其折から。地本社の方より下向の一群。派手を揃へる風俗の中に際立つ武家育ち。年は二八かそれぞとも振の袖のみ澪標ゆたの。たゆたの絹かづき。腰元數多引連れて。打過ぎながら振返り見合す顏ゝ清舟と互に月よ花の香の。こぼるゝ愛につつくりと。フシ思ひに惱む立姿。地氣轉きかして腰元ども。詞コレ桔梗殿。今日はマア餘程の道。お上にも嘸お草臥。こちらの床几で一休み。ヲヽ小菊殿よう氣が付いたと。地附々どもに誘はれ腰と思ひをかけまくも。神の教のえにしかと心の內の嬉しさに。雛鳥は只清舟が。フシ姿に見とれ餘念なし。詞イヤ申し御寮人。最前から見ますれば。アレ彼方の持つてござる遠目鏡の樣な物。不思議に思召すのであろ。不躾ながら私が往て。借りましてお目にかけうナウ桔梗殿合點かと。地點頭き合うて隣の床几。小腰をかゞめ會釋して。詞イヤ申しあなた樣に。御無心がござります。此方の御寮人の申されますは。お前樣の持つてござる其遠目鏡の樣な物。暫しが間お貸しなされて下さりませと。地云ひかけられて。コレハ〳〵安い事。是は小鳥狩を致す吹矢筒と申す物。ムヽそうしたらこれが吹矢筒でござりますか。申し〳〵御寮人樣。是をマア御覽じませ。雛鳥でも大鳥でも。アレあなたの吹矢を持つて。くつしやりと射なさるのぢや。マア此筒をちよつと握つて御らうじませ。どの樣な所へでも。心よう屆きさうな。長あい物でござりますと。地滑稽交りの戀の橋。岩木にあらぬ清舟も。につこり笑顏相惚れに。下行く水のこぼれ口。擲ひ上げて桔梗が氣轉。地コレ申し御寮人樣。早う埒の明く樣に。思ひのたけを仰しやりませ。何をマアいやるやら。ついに逢見ぬ

あのお方へ。地どうマア直にいはれうぞ。わしや恥かしいとフシ袖覆ふ。地折から社の境内より蝦夷が家來宮越玄蕃。鐺挾箱いかめしく代參の戻りがけ。此場の體を見るやいな供に制して挾箱。フシ腰打ちかけて窺ひ居る。地かくとも知らず腰元小菊。詞コレ申し前髪のお侍樣。私が方の御寮人樣。申したい事があれど。恥かしうござりますげな。幸ひな此吹矢筒。咄に聞いた呼き竹。どうぞ聞いて上げましてと。地耳と口とへあてがうて。かう此中を私が持ち。取りも直さず媒役。雛鳥は筒へ手を。思ひありたけ一口に。いへば此方は耳で受け。打頷いて返り言。可愛いらし事通じ合ひ。フシ互に嬉しさ羞紅葉。地玄蕃主從夢現。腰元どもは氣を利し二人を床几へ押しやれば。扇を開き寄添つて。口と口とを鴛鴦のひつたり抱付く此方には。ぐわつたりどつさり挾箱こけ落つるやら鐺持は。鐺をこかして立騒ぐ清舟も打驚き。床几を退けば宮越玄蕃起上つて砂打拂ひ。地ヤア久我之助殿。餘つ程に味やらるゝ。イヤ其處な相手は過ぎつる頃相果てし太宰の娘。コリヤ興がるわ。コリヤよい所へ出くはしたと。地聞いて二人は叉悔り。詞ム、扨は太宰殿の息女なるか。お前は大判事樣の御子息久我之助樣か。ホ、過ぎ行かれし其方の父。太宰の小貳と我が父とは。故あつて遺恨ある家。その息女とは夢にも知らず只今の爲體。そんならお前に添ふことなりませぬか。ハア、地はつとばかりにはや涙。宮越は聞咎め。詞スリヤ兩人は早やちえ〳〵くつたよな。ア、いやこれ必ず麁相いはれな。遺恨ある家とも知らず。最前の時雨の内同じ床几に雨宿り。ム、なる程。今の雨宿り。それならそれにして置かうが。一體此雛鳥には某が大執心。それ故宿の妻に申受けんと。兼て主人へ願ひ置く。ハテ今迄の事は。此後たとへ如何樣な事あらうと儘よさ。此心に隨へば其處はぐつと了簡する。これはマアきつい粋樣。私は雛鳥の召使小菊と申す者でござんす。眞にマア浮世ぢやナア。入鹿樣の樣な聖人といはるゝ。情深いお方の親御に。アノ意地惡の蝦夷樣。其御家來の小意地惡。此方の御寮人を嫁にせうとは。ヲ、笑止と打笑へば。地玄蕃睨付け。詞ヤイ〳〵〳〵女め。其過言覺えてをれ。これから直に御所へ馳行き。二人の樣子を觸れ廻り。何奴も此奴も身の上と。地駈出すを腰元ども。袖にすがつて詞ア、コレ申し。今の樣にいうたのは。お前樣のお心を引いて見る謀。ヲヲ正直なお方ではあるわい。ム、スリヤ身がいふ樣に取持つか。取持たいでよい物かいな。ヲ、それなれば了簡する。サ

アお娘が眞實に應といふか。ソレ最前ちらと見て置いた。吹矢筒の呼竹で聞きたい〳〵。扨も目早いお方ではあるぞ。お望みの通り。呼竹で御返事を聞かしませう。サア〳〵耳へおあてなされ。地ヲツト心得吹矢筒耳に押當てフシ居合腰。詞サアどうか〳〵コレ申し雛鳥様。よいお返事を早う仰有れ。ア丶コレ申し玄蕃様。恥かしがつてでござります。ちつとの間お目を塞いで。ヲ丶〳〵〳〵〳〵成程々々それも合點と眞赤いな。地顔に似合ぬ成佛眼。小菊は心得有合ふ吹矢。筒へ差込み口押當て。ふつと吹けば宮越が耳へくつさりアイタ丶丶丶。エ丶こりや如何しをると狼狽へる。其間に雛鳥打連れ立ちフシ館へこそは逃歸る。地玄蕃は吹矢抜き取つて。堪忍ならずと追つかくるを。久我之助押留め。詞ア丶コレ高が女の戯事。彼是いふ程却て恥辱と。地宥むる此方の岨道より。數多の侍走り着き。詞清舟殿これにござるか方々とお尋ね申した。先刻采女の局様禁廷の御殿を脱出で。いづくともなく行方知れず。貴殿事は采女様の傅役。地早々お知らせ申すると。聞いて驚く久我之助。詞何采女様御行方知れずとや。ム丶何にもせよ程はあるまじ。貴殿方はこれより直に所々の出口を吟味あれ我は山手を詮議致さん。ホ丶聞捨ならぬ采女の出奔。蝦夷公へ注進せんと。地玄蕃諸共數多の侍。フシ出口の方へ急ぎ行く。地跡に清舟只一人。ハテ心得ずと一思案。胸もしどろに入相の。フシ山手をさして歩み行く。地向うより來る人音に。身を除けてやり過せば。さもやごとなき内裏上﨟。フシ心も空に歩み行く。地袖を控へて。詞采女様でござりますか。ヤア久我之助か。ハア只今組下の注進あつて。采女様には御殿を脱出で御行方知れずと申すが。如何なる御所存あつての事と。地問はれて辛き物語。詞其方も聞及ばれん。蘇我の蝦夷威勢に誇り。わが娘橘姫を后に立てんと豫ての望み。妾君に思はれ參らせ。地夜の御殿晝の亭暫しもお傍を離れぬ猜み。詞父鎌足様をも讒言して大内を遠ざけ。何方にお渡りありとも。此身さへつゆ知らず。地妾が傅き參らす程。帝様のお身の仇誠ある入鹿の大臣。父蝦夷を諫め兼ね。引籠り給ふ由。それ故父の隱家を尋ね求め身を隱し。姿をかへる身の望み。只見遁しに頼むぞとスエ跡は涙にくれ給ふ。詞ハ丶此身は傅きの役目なれど。後日の難儀少しも厭はず。御身の爲又第一は天子の御爲。成程落し參らせんが。地諸士ども方々手配致せば。村口を御供申し隣つてお通し申さん。先づ〳〵これをお召あれと地件の。簑笠きせ參らせいたはり出づるフシ出口の方。

地又も大勢足音して。以前の武士ども走り着き。宵闇紛れ透し見て。地久我之助殿未だこれにか。出口々々を吟味せしがお局の行方知れず。ホヽ拙者は山路吟味の上。コレ。これに居る百姓が。怪しき人見付けて注進。未だそれとは極めねど大方は采女の局。我はこれより此土民に案内させて吟味を遂ぐる。各は此趣急いで禁裏へ奏聞あれ。ホヽ畏り候と。地皆々勇み大内へ。こなたは憂身隠れ簑笠に。涙の天が下。清き心の清舟も共に。しぐれて。三重へ行く空は。地九重の。フシ榮えに隣る一構。三條の御所と持囃す蘇我の蝦夷が廣館。雪見の亭を設けの座。女小姓を肉屏風奢りに透間中庭の蔭を。轉ばすつかね雪。冷たさ怺え主命の重き役目と宮越玄蕃、跡に荒卷彌藤次が臺に。乘せたる雪人形各。フシ機嫌を伺ひける。地女中達口々に。詞是は〳〵御兩所のいかい骨

折。殊に此雪細工兎の耳がきつい手際。ヲヽ枝折殿の云はしやる通り。束帶姿の此人形。綺麗な事ぢやないかいなうと。地譽めそやされて兩人は。大人氣なくもフシ出かし顔。地蝦夷莞爾と打笑み給ひ。詞ホヽ玄蕃彌藤次出來た〳〵。地イザ酌取れと餘念なく廻る盃養老の。盡きぬ泉の底はかと。案内もなくフシ廣庭傳ひ。地入り來る二人の僧。彌藤次見咎めヤア〳〵兩僧。詞何用あつて罷り通る。御前なるぞときめつくれば。イヤ我々は御領分に住職致す。文聖寺八乘寺。佛法歸依の入鹿樣。今日行法の滿願の日なれば。拜禮に伺候せり。地罷り通ると奥庭へ。入らんとするを蝦夷は睨付け。詞ヤアいらざる入鹿が佛三昧。うぬらも其組下か。忝くも日の本の神の守護ある我が館。奥の亭へ通らんなどとは。其身を知らぬ賣僧ども。地首をならぶる覺悟せよと。氣色變

れば。詞ア、申しお前樣が佛嫌ひとは。夢三寶存ぜぬ事。命はお助け下さりませ。ア、これも亦お嫌ひか存じませねど。拜みまするとゝ地手を合せ。身を顫はして。青ざめ顔。詞ホ、首引拔いてくれんずなれど。取るに足らぬづくにふめら。ソレ玄蕃彌藤次兩僧が衣を剝ぎ。月代を奴に剃立て門前へぼつ拂へ。それを肴に又一獻。腰元共用意。地用意と詞の中ざわめき立つて女中達。櫛笥の剃刀持出でて。フシ兩士へ渡せば。地こは〳〵ながら文聖寺。詞ア、そんなら此衣をはぎ。頭を奴にお剃りなさると。還俗でござります。どうぞそれは御堪忍。ホ、還俗がいやならば。兩人が手に掛けうか。ア、申し申し〳〵コレサコレ文聖寺。命代りぢやどうなとして貰ひましや。ヲ、よい合點。今玄蕃の言はるゝ通りいやといふと直に成佛。御前樣のお慈悲を以て。うぬらが好

きの佛國。天竺へ所がへ。イヤモウ天竺へ行かいでも。眞のこれが天竺浪人。手に覺えた能はなし。困つた物ぢやと フシ呟く中。地玄蕃彌藤次手ん手に衣。剃取り引きすゑて剃刀手合せごつし／＼。剃りかゝれば兩僧は首をすくめて。詞アイタヽ、ちつと待つて下さりませ。かう剃るとはあんまりむごい。コレ八乘寺。こなたも嘸いたかろ／＼。申し／＼どうも堪えられませぬ。アヽコレ／＼文聖寺それは悟道のすわらぬからぢや。首代りの此月代。悟りの道を極めたら。痛いと思へばいたけれど。ハテいたうないと思へばやつぱり。アイタヽヽ、地あいた／＼を興にして。蝦夷は酒宴。道具屋こなたには奴頭に剃り立つれば。撫廻し。合／＼ナホス殘つた髮にフシ顏見合せ。詞ホンニあんまりの事でいたをかしいわいなう八乘寺。ヲヽサわれがおれか。おれがわれかで。どうも濟ぬ頭になつた。ハテ是からは申合せ何なとして渡世する。貴僧は是より文聖寺の一字を取り。地文七と名を改めよ。愚僧は又。八乘寺の八を取り。詞八藏と付いてこそ。ハレ變つた事になつたナア文七殿。ホヽこりや目出度うなつたわい。此方もそんなら今から八藏殿。ムヽヘヽ／＼／＼と地やくたい坊。玄蕃彌藤次追つ立てて。フシ門外さして出でて行く。地折から表の廣間口取次の靑侍罷り出で。詞大判事の子息淸舟。召に應じて參上と。地呼ばはる聲に入來る久我之助淸舟。器量骨柄武氣備はる。中に倭美の長上下禮儀。フシ正しく座に着けば。地蝦夷大臣進み寄り。詞珍しき久我之助。使を立てしに早速の入來。尋ね度き事別儀でなし。帝愛憐をかけ給ふ采女の局は鎌足が娘。此頃内裏を脱出で。入水せしと聞きつるが其方は采女が付人。實否を聞きたく呼寄せたり。噂の通り違ひはないか。仰せの通り采女殿には。世を儚く思ひ取り。猿澤の池へ入水ありしが。我傅きの役目なれば。野邊の送り營み參らせ。未だ三日を過さずと。詳かに答ふれば。さこそ／＼。親鎌足が蟄居を悲み。淺ましき采女が成行き。其方付人の落度となり。親大判事に勘當を受けたと聞く。さあらば主も親もなき身。それに何ぞや。嚴しく禮服を着飾つて我が目通りへ出でたるは。心得難き汝が心底。ハヽ御不審の段御尤も。親もなく主君もなく獨立ちの私。若輩ながら蝦夷公へ。奉公の儀願ひ上度く。君と敬ふ此禮服と。地心に探りの一思案。眞しやかに相述ぶれば。詞ホヽ扨は此蝦夷を賴み奉公の望みとや。若輩者の神妙々々。我も望む所なれど。其方が父大判事に汝が勘當赦させて。親子とも臣下となさん。コハ仰せとも存ぜ

ず。親大判事が氣質として。一旦申し出せし事翻らぬ鐵石心。勘當も赦さず。元より二君に仕へぬ所存。ヲ、其口剛き大判事。蝦夷が幕下に附けて見せう。ホ、お手柄に如何樣とも。親淸澄得心致さば。此上もなき仕合。所詮私一人の奉公が相叶はずは。とや角申して益なき事。地先づお暇と禮儀をなし。フシ廣庭におり立つて。地靜に歩む向ふの方。豫て言付け置きたりけん。玄蕃彌藤次立出でて。前後を圍み仁王立。ソレと蝦夷が下知に連れ。兩人一度に切付くるを。身を沈めば双方の刄は合打。さしつたりと開いて又も横備へ。車輪の劒付込む鋒先。淸舟心得左右の柄元しつかと握り。詞蝦夷公の仰せなるか。何故に尾籠の手向ひ。ホ、不審は尤も。其方が武藝の試み。兩人に言付け置いたが。天晴々々。コハいかめしき御尋ね。若輩の私なれば腕だめしの覺えもなし。猶此上に手練を極め重ねて御覽に入れませうと。地双方を突放せば。跡へしさつて兩人が又も切込む刄と刄。庭の飛石エイウント。請ければ御殿の天井より。怪しく下る鐵網に。淸舟きつと眼を配り。詞コリヤ再三のお試み眞劒のお相手が。お望みならば兎も角もッ イヤモウ驚き入つたお手際。見屆けましたと。地双方の刀は鞘に飛石も。元へ直せば御殿の網。棟木遙にフシ隱れける。地久我之助さあらぬ體。詞蝦夷公試みの鋒先を。受け留めた今の飛石。地を放るゝと下る鐵網。元のごとく石を置けば網も隱れて其體なし。ハテむづかしい御要害と。地譽める一言ぎつくりと。術の試み毛を吹いて。疵をくろめるしたり顏。詞大切の此要害。其方は身內同然見せて置くも幸ひと。地俄になつける詞の艶。詞ハヽ此淸舟も武士の端。只今如きの御手配り決して他言は仕らぬ。御氣遣ひ 地御無用と暇申して久我之助。左右に目配り悠々とフシ表を。さして立歸る。地跡に蝦夷は溜息の。フシ一間の襖押明けて。入鹿大臣の妹橘姬。跡に續いてめどの方。舅に心奧の間は今日の酒宴にかけ合はぬ。本フシ鉦の響も身にしみ〳〵。地御機嫌いかゞと兩手をつき。詞御酒宴の半ばながらあなた樣へ御願ひ。それ入鹿大臣には。秋の頃より一向に佛の道に入り給ひ。奧の亭へ引籠り一つの棺を地中に納め。丁度今日が百日目入相の鐘を限り定に入り給ふと聞く。地何に譬へん此身の悲しさ。何と便りがある物ぞ。少しは思ひやり給ひお諫めなされて下されと。スヱ涙先立つ喞言。同じ歎きを橘姬。詞何卒再び兄上樣。遁世の思し立止まり給ふお願ひと。地一つ思ひを二人して。いふを打消す父大臣。詞ヤア聞きたくもない入鹿めが沙汰。

今此蝦夷が威勢につぎ。何不足なき榮花を捨て。佛法といふ天竺外道の術に歸依し。奥庭へ引籠り。晝夜わかたず稱名讀誦。此世にあつて益なき忰。土へなりと定へなりとも。入り次第にして置きめせ。また最前から鉦が鳴る。エヽ忌はしい不幸者。嫁も娘も重ねて言ふまい。ハイいやまだ不吉な泣聲。此酒宴を妨ぐるか。イエ／＼申し。何のマア御遊興を妨げませう。モウ何にも申しませぬ涙を零しは致しませぬ。地御赦されて下されと。袖に解け行くしをり雪思ひは。フシ胸に氷るらん。地橘姫引取つて。詞申し父様モウ兄上入鹿様の事申す者はござりませぬ。御機嫌を直されて。別殿で御酒宴を。ホホ娘よく言うた。これより居間を替へ再宴を催さん。玄蕃彌藤次も奥へ來よと。地怒りの風も凪の舵腰元どもが取り／＼に。フシ一間へ伴ひ入りにけり。地橘姫心せき。詞父上のあのお氣質。何程お願ひ遊ばすともお聞入れはあるまい。これよりは此橘大内へ急ぎ参り。何卒兄上入鹿様。御入定を止まり給ひ再び昇殿ある様に。地幾橋のお局へお願ひ申す心ぞと。力付くればめどの方。詞難面は入鹿様。今日を限りの入定と。生き別れの妾が身。同じ館にありながら。暇乞にお顔をと。願ふ事だになか／＼に。地築山の門を鎖し。物いひかはす事さへも。泣いて暮してをりますと。むせぶ涙を友千鳥同じ翅に露時雨しのぐ フシ方なき思ひなり。地姫は涙を打拂ひ。めご様氣遣ひ遊ばすな。暮を限りの事なれば一刻も早う。自らは大内へ。それは一入御苦勞ながら。これはマア改まつた妾とても同じ事。ソレ腰元ども。大内へ上る用意せよ。地畏つて附々が。奥乘物と夕映の。日頃中よき娵小姑。互に力付け合うてオクリ禁裏を。へさして急ぎける。地跡見送つてめどの方。便りすくなき身の上を フシ諦め。兼ねて胸の内。地縦へ願ひが叶ふとも。心變ぜぬ夫の氣質。それと知りつゝ頼みしも。妹御の親切を破らぬ誠 スヱテとやかくと。思ひ續けて庭におり。タヽキ木草の枯葉眺めても。猶いやましの無常心。夫の命もナホス今日限り。涙は胸にふりつもる。雪かき集めかき寄せて。氷る手先も後世の爲束ね。丸めて五輪の形。詞此世の名は入鹿大臣。地頓生菩提と手を合せ。心の回向せぐりくる聲も。憚るしめ泣に哀れはかなき風情なり。地それに引きかへ奥の間は。フシ地下を寫しの三味線に。なまめく歌の聲冴えて。歌花は散つても春は咲く。消えて歸らぬ。其雪にさへ劣る。憂身は消えもせで。合詞あんまりといはうか心ないといはうか。現在子といひ嫁といひ。けふを限りの命ぞと。悲しむ事

を開捨に。歌捨てた。浮世に。斯うして居れば。仇名たつ田の流れの錦。合詞エヽ心ない此中で雪見の酒宴どころかい。アノ鉦の打納めが入鹿様の御臨終。夫を先立て何楽み。地我も一所に此雪と。共に未來の道連と。フシ上着を脱げば墨染の。けさより積る廣庭の。雪に座をしめフシ合掌し。地此儘爰に埋もれて。死なんと誓ふ。貞心は天に通じて降りしきる。膝も袂も白妙に色香盛りの黒髪も。八十のフシ姥と疑はる。地恩愛血筋に屈託せぬ。蝦夷大臣一間を出で。詞嫁めどの方。まだそこに泣いてゐるか。ハテ扨々ごくにも立たぬ。馬鹿者の入鹿が事を苦に病み。物好な雪なぶり。もう打ちやつて爰へ來て。火に當りや。アノ胴慾なおつしやり事。夫は定に入り給ふに。そもやまあ妻の身で。褥の上に居られませうか。地雪に凍えて死ぬるのが。せめてもの夫婦の誠。詞ハテ貞節な心底。其實心を聞いてお身に問ひたい事がある悴入鹿が入定は。佛法信仰ばかりであるまい。樣子無うては叶はぬ筈。親子に増る夫婦の中。夫の心知つて居よう。イヤサ何ぞ密に聞いた事があらうがな。サ其仔細が聞きたい。我強うは言ふものゝ。實は不便な子の命。樣子によつて入定を止める。思案あるまいともいはれぬ。地どうぢや／＼と脇道から。猫撫聲もフシ氣味惡き。詞イヽエ親御樣さへ御存じない事。何の私が知つて居ませう。さりながら脇目から存じますは。夫入鹿樣のお覺悟はお前樣のお心が知れぬ故かと存じます。ハヽ／＼／＼蝦夷が心は今降る白雪。一目に見えてある潔白。サア其雪に埋れては。上から見えぬ塵芥。心の底がどうも解けぬ。入鹿が性根聞きたい／＼。イヤ申し常に夫が申さるゝは内大臣鎌足と父蝦夷は。國に二つの柱同然。一つ缺けても我が君のお爲にならずと物語。其大切の鎌足樣を追退けなされたには。深い樣子のありさうな事。ハテ知れた事。此蝦夷は忠臣。佞人の鎌足をぼつ下したは天下の爲。我が君のお爲ぢやわい。イエ／＼／＼。鎌足樣に罪ない事は。世上の人が能う知つてをりまする。地威勢を妬み猜んでの。さかしら事と世の人の譏は耳に入鹿樣。夫が積つてあのお覺悟。詞一人の榮華を極めんとて。地譏も顧み給はぬ。蝦夷樣のお心さへ改めて下されなば。入定も止まり給はん。夫の生死は父御樣のお心次第。嫁子不便と思召し。お聞入れ下さりませ。詞夫婦が命は厭はねど。お心が直らねば。お前も遁れぬ危い命。地君の御恩を受けながら。十善の位を奪ふ。御謀反の思し立でござりませうがな。天道樣の御罰にて。お身に報ふが悲しさに妾が御意見。惡心を止まつ

てたべ蝦夷様と。舅を思ひ夫思ひ。合す兩手にはら／＼とフシ涙深山の瀧なせり。始終とつくと蝦夷大臣。詞モウよい。すりや我が大望殘らず入鹿に聞えたよな。さうあらうと思うた。氣遣ひすな其方達が望の通りにしてくれうが。まだ尋ぬる事がある。めどの方。駒下駄直せと地刀提げ庭の面。若しや得心あり磯海底は白洲に危ぶむ目遣ひ。詞嫁近うよりや。ハイ／＼と地立寄る目先へ氷の刄。ハツと飛退き。詞舅御様そんならどうでも。思ひ止まるお心はござりませぬな。馬鹿盡すな女め。天下を取らば肉身の入鹿。誑りくれんと思ひの外。道立てする悴にはもう構はぬ。思ひ立つた大望。一度萬乘の位に昇る此蝦夷。エヽ腑甲斐なき性根と知らず。入鹿に渡した連判狀。汝が有所知つて居ようイエ／＼御謀反の譯は聞いたれど。連判とやらは。イヤ吐すまい。一大事を聞い

た女。殊に安倍の行主が娘。所詮生けて置かれぬ奴。いうても殺す。いはいでも殺す。其一巻玆へ出せば。苦痛せずに一思ひ。諍ふとなぶり殺し。サア／＼何とと付け廻す。地遁れがたなに肩先すつぱり。突込む蝦夷が尖き鋒先。手負は大地にこけながら。蹴上ぐる白砂雪烟。手に渡さじと懐中の一巻火鉢に燃立つ炎。嵐に連れて烈々と。折しも聞える。フシ鐘太鼓。詞ヤアいぶかしき攻鼓。連判狀を燒捨てしは。我が大望を挫いたる。不孝の入鹿夫婦の奴輩。大事を敵に洩せしな。地憎くい女め思ひ知れと。足下に踏付け肝先を。刳りくる／＼流るゝ血汐。雪を染めなす皆紅。眼血ばしる表の方。勅使なりと呼ばはる聲。詞ムヽ貝鐘の音に引替へ。勅使の案内は我が胸中。窺ひさぐる謀。身體今日の一擧に極まる。地裝束せんと不敵の蝦夷フシ帳臺。へ深く入りにけり。

地程もあらせず細殿傳ひ。入來る勅使は安倍中納言行主。副使の武官大判事清澄。フシ威儀を正して座に着けば。地出向ふ主も衣服改め。上座に請じ頭をさげ。詞お勅使として行主殿。雪中の路次別して御苦勞に存ずると地挨拶終れば膝を寄せ。詞今日の勅使尋常の沙汰にあらず。貴卿は父馬子より代々の功。忠勤あつく君の寵にほこりたるや。內々逆心の徒を語らひ。帝位をかすめん企てありと叡聞に達せし故。諸國の勤番武官の面々。此館を圍む所。此行主は一家の好誼。今老臣の蝦夷大臣。麁忽の計らひなすべからずと。進み出でて使を乞受け。取敢ず馳向ふ。包まず言上申されよと。地聞いて蝦夷は居丈高。詞ハヽ／＼／＼。何事かと存じたれば。この老人に逆心ありとや。最前より遠く聞ゆる鐘太鼓。スハ禁廷に大事ありと。思ふ折から我が家へ勅使。佞人

議者の詞を用ひ。叡慮暗き帝の疑ひ。勅答致すも馬鹿々々しいと。地詞 鋭にフシ言放せば。地大判事進み寄り。詞ヤア血迷ひ給ふか蝦夷公。其身の白狀勸め給ふ。行主公は一家の誼。叡聞に達する大事。再三吟味あつての事。いか程に諍はれても。拔きさしならぬ證據ありと。懷中より取出し。投げやる一卷おつ取つて。見れば覺えの連判狀。序文の手跡誓書の名印。さしもの蝦夷も證跡に。ハツトばかり驚く面色。ナント見られしか蝦夷殿。我が聟の入鹿大臣。此一卷を帝へ捧げ諫めても承引なき父が逆心。子として是を露はす事不孝の罪莫大なれども。君恩に代へる道なければ叡聞に達するなり。我は祖父馬子が意をつぎ。佛法に歸依しぬれば。遁世の外なしと引籠りめされども。我が娘めどの方。謀に命を捨て最前燒き捨てし贋物の連判狀は。試に逆心有るかなきか。知らせの狼烟。貴殿の口より謀反の次第。最前既に白狀の上。最早陳ずる詞あらじ。ナント〳〵地ときめ付けられ。一句一答詞なく。只默然たる フシばかりなり。地大判事さし心得。三方に腹切刀。蝦夷が前に差置けば。行主立寄り傍なる。雪人形手に取上げ。詞コレ見られよ。愚かなる譬なれど。此束帶の雪人形。其形をなすといへども。火に當れば忽ち水。其人にあらざる逆心。消果つるは天の御罰。せめて最期は此雪の如く。潔く生害あれと。地諫めの言葉を耳にも入れず。無念に固まる雪人形。傍なる火鉢の炎の上。摑み碎けば水烟。肌押しくつろげ腹切刀。腹に突立て怒りの眼中。詞エヽ無念口惜しや。仕込に仕込みし我が大望。現在の悴入鹿が手より洩れたるは。我が運命の盡きる所。さりながら此蝦夷世を去らば。見よ〳〵忽ち天地は常闇。不具者の帝を始め。月卿雲客思ひ知れと。地きり〳〵と引廻す。太刀取り後に大判事。はつしと落す首諸共。矢一つ來つて行主の胸板射拔き フシあへなき最期。地こはそもいかにと恟り仰天。途方にくれて立惑へば。詞ヤア淸澄必ず驚く事なかれと。地聲かけて一間の襖。二人の武士に引拂はせ。築山の岩間陰。しづ〳〵出づる入鹿大臣。髮はおどろに麻衣。さもすさまじきフシ有髮の僧形。地大判事ぎよつとして。詞ヤア入定ありし入鹿公。不思議の對面いぶかしと立寄れば。ホヽ實にも〳〵さもあらん。不審の一條語つて聞かせん。父蝦夷年を重ね叛逆の企てあれど。其器小さくして。なか〳〵大望なりがたし。爰を以て此入鹿。表には仁を飾り。父の惡事をうとめる容。地佛法歸依と引籠り。帝を初め數多の公卿。父蝦夷に心を付け。油斷の間を行法の築山よ

り禁廷の。寶藏へ隱れ道。土を掘り。石を穿ち。妙計違はず忍び入り。詞疾より評定ありしに違はず。神璽御鏡失せ給へど。叢雲の劍は。易々と手に入つたり。父が命妻が命。芥の如く見捨てしは。此時を待つ謀。あら。心地よや潔しと。地御殿に響くうなり聲。地扨はと驚く大判事。玄蕃彌藤次弓と矢番ひ取圍めば。大臣重ねて。詞馬鹿者の舅行主。血祭に手にかけた。其方は我が所存あれば。味方に付けば其通り。否といはゞ行主同然。サア勝手次第に返事せよと。地大惡不道の入鹿が行跡。爰ぞ大事と大判事。心を定め低頭平身。詞時を得給ふ大臣に。いかで違背申すべし。我が君と仰ぎ奉ると。地申上ぐればにつこと笑ひ。詞ホヽ潔し潔し。三德備はる此入鹿。天地の間に挾まるもの。誰か敵對ふ謂なし。今日より我こそは萬乘の主たり。アラ忌はしの墨衣。地いでや衣服を改めんとオクリ呼ばはる。聲に數多の官女。手ん手に着せる。綾錦。地立直つて大音上げ。詞清澄は皇居の案內。玄蕃彌藤次殿せよ。是より禁裏へ馳向ひ帝を始め月卿雲客。殘る寶の所在を責め問ひ。摑みひしいで心の儘。地中門のほとりへ丸が車を進め。官人ども來れやつと。聲に隨ひ數多の武官フシ列を正して先備。地玄蕃足駄を奉ればひらりとおり立つ勇みの姿。心は雲井に高足駄。門出の音樂璉然と。またも降り來る雪の空。心得供奉のみさぶらひ。柄長の御傘差しかくれば。六つの花瓣ひらひら雪。威風邊を拂ふ雪。合深き思慮ある大判事。前後のそなへ。嚴かに。御車。はつと時めきて內裏をさして出でて行く

第二

地山又山も都路は心に連れて奧深き。名も猿澤の池にさへ。波立つゝフシ世こそ憂かりける。地此方の道よりたどり來る山働きの狩人ども。打連立ちて立留り。詞コレ九右衛門　こちらが仲間の芝六が。此間から夜狩して好い代物付け出した。それでおいらを助けの雇ひ。葛籠山から山城境へ入込んで居るとの事。今夜はぐつと働いてやらにやなるまい。ヲヽサもう明けても暮れてもおいらが相手は猪武者。五六疋射とめてやつてぐつと褒美を貰はう。サア〳〵地行かうと世渡りに。追はるゝ獵師山も見ず。フシ足を早めて急ぎ行く。地世の憂さは尊き卑きも亡魂の雲隱れせしと思ひ人。フシ釆女の局の跡慕ひ。地勿體なくも萬乘の。長地帝の歎き淺からず御所を忍びの夜の鶴。それとに更に人知れず。舍人にも武官にも。只官女のみ道案內。池の邊へ御車の。軋るさへもの淋し。殊に盲の君なれば哀れも勝

る御姿。宣ふ聲も打ちしをれ。詞此邊が猿澤の池なるかと。地仰せに官女進み寄り。此間久我之助措舟奏聞申せし通り。采女様入水の跡。猿澤の池にて候と。地申上ぐれば今更に。スヱテ御落涙をせきあへで。思ひ出せばフシ去年の秋。民の營み憐みて。詞わが衣手は露に濡れつゝと丸が詠ぜし傍らに筆を取りし其采女。早や此世には亡き人とや。誠に我が衣手は。涙に濡るゝはしならん。地せめて今宵の手向ぞと。詞わぎもこが寢くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しきと地詠じ捨てフシ御涙こそ限りなし。地フシかゝる折しも。此方より。尾羽打枯らせし浪人姿。御車近く手をつかへ。詞女中方へお頼み申す。帝様の御車と遙に見受け申した故。押して御願ひ申す事あり。憚りながら奏聞の御取次頼み入ると。地いふ聲それと聞し召し。詞ナニ珍らしや淡海なるかと。

地仰せに猶も頭をさげ。地私過ぎつる節會の時。神例の式を過ち。とくよりも勅勘蒙り。先非を悔いて内裏を遠ざけ。市中に潜まり在る所。蘇我の蝦夷我意を振ひ。父鎌足も蟄居致させ。猶玉體も安からずと聞くより前後顧みず。何卒玉體守護の爲。勅勘の御赦免を。願ひ上げ奉ると。地土にフシ平伏し。詫びにける。地君叡感斜ならず。朕が不德のなす所か。左右に奸佞の人絶えず。地蝦夷帝位の望み有つて叛逆の企てある事。嫡子入鹿大臣が忠心に事顯はれ。安倍の行主を使に立て。詞今日事を糺すに及ぶ。未だ歸り來らねど。蝦夷が自殺は眼前。地鎌足内裏を避けし事も悔むに甲斐なき有樣ぞ。詞今より元の淡海。再び忠勤勵むべしと。地さも有難き免許の勅諚。淡海初め付々も。皆悦びを。フシ奏する所へ。地禁廷の勤番使御車の御跡慕ひ。息つぎ敢ず馳參じ。詞主上是に渡御なる事漸う相知れ御注進。今日蘇我の蝦夷館へ行主公勅使として大判事を召連れられ。彼等叛逆吟味の所速かに白狀あつて蝦夷は其座に切腹あり。清澄是を介錯す。然る所行法に取締つたる入鹿大臣。寶藏へ忍び入り叢雲の御劒を奪取り。眞は親蝦夷に越え王位を望む大惡人。行主も忽ち手にかけ禁廷へ馳込んだり。是に支へる公卿の面々。或は蹴殺し切倒し上を下へと逃げさまよひ。さしも廣き禁裏の内人種も盡きんばかり。地猶も追追注進と。フシ呼ばはり捨てて立歸る。地皆々はつと驚きに。わきて帝の御歎き。詞如何なる天の咎ぞや。思ひ計らぬ入鹿が惡心。われ四海の主として。臥所さへ地なき身となるは。淺ましき境界とスヱカヽリ歎かせ。フシ給ふを淡海は。御心弱き御仰せと。勇める中に思慮を廻らし。竊に官女の耳に口申し合せて。フシ車に向ひ。

詞思ひがけなき只今の注進。是より馳付け遠見を致し。安否を言上申さんと。地出行く振の偽りも。盲の君の御心地を休むる術此方なる。フシ木蔭に暫し。彳む中。取り〳〵フシいさめ奉る。地暫くあつて淡海は。急ぎ歸りし足音して御車近く息をつぎ。詞只今遠見致せし所。諸國の軍勢蟻のごとく禁廷へ馳參り。さしもに猛き入鹿大臣直ちに退け候へば。忽ち内裏は穩かなり。地早や入御ならせ候へと誠しやかに相述ぶれば。主上は安堵の御思ひ御悅びはフシ限りなし。地淡海は官女を制し。詞急いで還御と先に立ち。地轅を取りて舍人役。押して行方はいづこども空定めなき空勇み。オクリ露踏み。分けて三重へ辿り行く。地山手の道より親子連爰に名高き狩人芝六。弓矢手挾みいつきせき。フシ人絕の木蔭に立止まり。聲をひそめ。詞コリヤ三作此間から夜の狩。是は渡世の表向雁ひの列卒ども山手谷々方々とかけ廻す。此物音の騷に紛れ兼て其方に言付けた。彼の爪黑といふ牝鹿は千疋が中に一疋。地それ取りたいばつかりで此様に骨を折る。其念力が通つたやら。ハアツ葛籠山の向うの谷間。見付け得た其爪黑。詞アノ猪狩の貝鉦でぼつ立てたら驚いて。向うの山を越すは必定。地其方は是から谷へ廻り列卒に貝鉦打鳴らさせ。件の鹿を追出せ〳〵。詞ヲヽ心得ました。シタガこれ父様。追出すは易い事ぢやが。鹿を射るは所の法度。お前の身に難儀が



出來ては。地母様やわしが身は。如何しませうと稚氣に。後を案じる賢しさは。孝行見えてフシ不便なり。詞ハテ扱氣の弱い事をいふそれ知られて埒る物か。もし知られたらば百年め。命がけな事するのも此身の榮耀を望むではない。所詮此狩人商賣人間のする業ぢやない。せめて汝等には狩人がさせとみなく。侍にせうばかりぢや。爺が身に氣遣ひはない程に。サアく早う谷陰へ地おれは別れて麓の方。合點かぬかるな心得たと。牒し合せて親と子が。道は二筋ひき別れ山路をさしてぞ。三重へ急ぎ行く。谷山峯に。地輝かす數の松明貝鉦の響につるゝ列卒の聲松の嵐も囂き。スハ好き時分と芝六は弓矢つがうて麓の方木蔭に隠れフシ待つ所へ。地猪を狩出す山路の騒ぎともに驚き駈來る鹿。件の爪黒得たりやつと。切つて放す矢あやまたず鹿の咽吭貫きてフシ其儘其處へ倒れ伏す。地三作はかけ着けて。詞爺様射とめさつしやつたか。シイ。聲が高い。ヲヽ首尾能う仕留めた。エヽ爺様地如何やら怖うなりましたとスエ身を顫はして涙聲。詞ハテくどくと氣遣すな。人の見ぬ中歸れば濟むと。地邊見廻し心を配り。鹿引つかたげ親子連宿りをさしてぞ三重へ立歸る。地三笠が本の雨宿り烈しき嵐吹き越して君が御遊の御車は。フシ此荒家にとゞまりし。地獵師芝六が侘住居。妻のお雉もまめやかに。仕へ參らす大君の供御のしかけの米粒をフシオクリ選むも。女中の手ずさみに。紺の前垂緋の袴。打交りても女子同士。つい馴安きならひなり。詞ホンにいか様上々様といふものは。此様に一粒々々米を選り。是はちつと色が黒い。是は角が缺けたのと皆選出して。上げます米は二粒か三粒。神様より大切な十善の主様。斯うなつてはならぬ筈。是を思へば勿體ない。王様に上げる供御を踏む。碓踏めば足が腫うと。地いへば女中が何のいな。詞上様でも肝心の時は。やつぱりうすがお好きでな。勿體ないと此方から遠慮すれば結跏して。下馬緩怠とお呵りなさると。地笑ひ綻ぶ。障子の中。しほたれ公家のしよげつばさ。フシしよんぼり立出で。ナウく上臈達。夜も早や初更に及びしに。夕御膳の供御何として遅なはる。膳番は何處に居る怠り。フシなりと呵らるゝ。詞ホヽホヽヽお公家様方とした事が。やつぱり禁裏の格式で。何のマア獵師の内にそんな仰山な膳番とやらがあるものか。彼方には御存じない。貧乏世帯といふものは。何もかもたつた一人。むつくりと起きると釜の前。庭の掃除は仕丁の役。お清所の飯炊役。鑰の出し入れ内侍役。地とんと仕舞しまうて寐る所がお后様。詞百人

前する事なら手の廻らぬは御推量遊ばせ。地此又此方の王様は。遅い事ぢやと夕闇に。山を了うて親子連息せき背に大風呂敷寒風に汗たら〳〵フシ下りの我が家の門。詞嬶今戻つたと内に入り。コレハ〳〵大切なお方々。なぜ端近う出しますぞ。お前方もお前方。在所の邌物見るやうな。その大層なお姿で地によろ〳〵と出て御座つては。何ぼう山家の一つ家でも誰が見まいものぢやない。詞お局方も年中巫子殿の様に。其長い物を此狭い内で引きずつたら。裾踏んで轉さつしやろ。それでコレ。奈良の町でよい流れ買うて來た。サア〳〵是をお召替へと地風呂敷解いて取出し。着せる褞袍のゆき丈も。哀れ昨日の。長袖を在所小紋のかます袖。似せ兜羅綿の平田帯根から似合はぬ。フシ御装束矢背のけらを見る様な。名もかへて右大辨助様。お前は大納言兵衛様。地此方が髪も町風に島田とやらに結直し。詞おあちやおいちやにお梅が香。在所の嬶の風俗は。憚りながら私が傳授。ア、こりや嬶。上様の御膳はまだか。何れも様も嘸御空腹にござりませう。イヤ〳〵。心遣ひ無用々々。帝さへ御安泰なれば。地臣等が事は苦しからずと。殿上人もスヱ世に連れて。食客の身のフシ氣の毒顔。詞イエ〳〵何ぼ尋常におつしやても。内裏様も喰はにや立たぬ。思ひなしか昨日から。めつきりとお顔が細つた。嬶マアちやつと握り飯なとして上げいと。地亭主は如才内證のしがをフシくろめて入る所へ。地腰に帳面ぶら〳〵爰へ郡山の搗米屋。詞内方にごんすか。ヲ、新右衛門様。能うお出でたれど折悪う今日は。ヲツトお内儀。又留守といふのか。晦日に來るといつでも朝から内に居ぬ故。今日は留守を云はさぬ様に。氣をかへて朔日に仕かけた。拂はぬ辨に。節季に書出し何故おこさぬと。小みづがいやさにコレ。持つて來た此書付。去年の尻殘りが六十六匁三分五厘。何時まで釣り付けるのぢや。踏付くられては居ぬ男ぢや。サアサア〳〵今拂や今受取らうと。地邊響かす聲高く。大納言押止め。詞ヤヨ下々の者いとはしたなき爭ひかな。しづまれよやとありければ。ヤ貴様何ぢや。今手の筋見る人か。コレ茶一つ汲んで下あれ。アア滅相なあなた方は大事のお客何ぢや客ぢや。ハテ米代も拂はずにあんなけない人取込んで。また米屋を騙るのぢやの。コレ喰ひ潰し達おれが喚くが無理かこの書出し。ソレ見やしやれ。ム、此切紙は色紙の形扨は歌かと地つく〳〵眺め。詞ハテ珍らしき五つ文字。書出し一つ米代六十六。去年の霜月殘る銀。是は戀歌とも思はれず。イヤ戀も戀借錢乞ぢや。何

にもせよ下々には優しくも三十一字をつらねしな。エヽ三十や四十の端た錢ぢやないわいの。貴樣もかゝり人ならよう聞かしやれ。爰の芝六は盜人ぢやかういふが無念ならサア金拂へ。がからは言ふものゝコレ嗅衆。こなさんの心次第で。アヽ結構な料簡があるにナ。アノ薄い芝六に。百目近う仕送つたは。しやりから付け入つて貴樣の舍利塔。疾から念かけて居るに。しやりとては胴慾な。留守が定ならコレどうぞと フシひつたりと抱付けば。詞アヽこれ何さしやんす。主が內に居やしやすぞえ。ヤア〳〵。內に居るなら銀受取らうわい。イヽエ留守ぢやわいな。留守ならちよつとと又取付く。地首筋摑んで板間にどつさり。怐りしながら負けぬ顏。詞ヤア芝六。夫程內に居ながらよう留守つかふな。サア米代受取らうかい。イヤ米代は渡してある。ソリヤ何時渡した。ヲヽ密夫の代三百目の內で。六十六匁引いて。跡が二百三十四匁。こつちへ今請取らう。ヤア夫は。サア今渡せ。サア〳〵〳〵と詰めかけられ。地ぎつちり詰つた入口ぴつしやり。門からしめて留守ぢや。詞密夫代も米代も。逢ひさへせねば取りやりなし。留守は五分々々。算用濟んだと。地お留守になつた腰の骨。フシちが〳〵引きずり迯げ歸る。地姿は地下に落ちながら心の官位右近兵衞の。中將淡海公する〳〵と立出で。詞兼秋卿政常卿。君にも益々叡慮めでたく御渡り。是といふも芝六夫婦が深切。虎の口の御難を遁れ。此家に匿ひ奉れども。計らざる入鹿が亂。帝の御耳に達しては。彌御惱も重らんと。何事も包み隱し。只太平の容にもてなし。御目盲させ給ふを幸ひ。此荒屋をやはり禁裏の御殿の中と。僞りすかし參らする我々が氣苦勞。此上ながら御悟りなき樣にと。地詞半の破れ疊。出御なりと警蹕の。地聲諸共に押明くる。ギン明障子の御格子に。本フシ御悼はしや天皇は。此賤が家とは夢にだに白平絹の緋の袴。褥に玉座なりければ。各シイと公卿達。フシ威儀を。正して拜謁ある。地配膳の典侍阿茶の局。四方の御盤。平戶燒の茶碗。土器 フシ其儘に。地下がる御膳を淡海押しとめ。詞朝餉晝の御膳。少しばかり召上られ。今夕の供御はお手も付かず。此儘下げよと勅諚か。地扨はお料理が御機嫌に叶はぬか。エヽ不調法な。詞御膳番の大隅大炊頭。急度申し付けんと。地立たんとするをヤヨ淡海。さな心痛めそよ。詞膳番の者の罪ならず。地兩眼くらき病の上釆女が別れの歎きに沈み。思へば詮なき心の迷ひ。不德の君と蔑しまん フシ恥かしさよ。地爰は常寧殿よな。詞それに詰めしは誰々ぞ。ハアア大納

言兼秋。右大辨政常。其外參議。中將。少將。百官百司殘らず參内仕る。エヽ御目だに明らかならば。遠方の御幸はならずとも。此内裏の中にても見所は樣々。其障子の繪絹には桐に鳳凰。見事な彩色。上段の繪は。竹林の七賢。又清涼殿の廊下より。奥の間の四季。杉戸には蘆に鷺。雪に梅。種々色々の名畫名筆。毎日見ても飽かぬ御殿。それより初春にもならざるに。梅壺の梅今を盛り。君の御目も開かるべき 地瑞相にて候と。誠。フシしやかに奏聞あれば。地實にさこそ。十善の位には卽きながら。此九重の内だにも見る事叶はぬ常闇の。御裳川の流れを穢す我が誤りのなす所。詞誠に此月は内侍所の御神樂。兼てしゆらいもあるべし。病平癒の祈りなれば。樂人共を召出し。壽の管絃を始めよ。地早やとく／＼と仰せに恟り。ハツ／＼。とばかり俄に管絃の才覺も出で

て。ハズミ返らぬ綸言の。地冷汗ながら。詞ハア／＼是はよき思召し。樂は何がよからうぞ。還城樂か。武徳樂か。樂人只今追付けこれへ。エヽ何として遲參致すと。地立端のしほに芝六が。手を引いて門に出で。詞扨迷惑な勅諚。俄に管絃のお望み。縱へ出來るにしてから。笛太鼓で騷立てば。忽ち人に御在家を知らるゝ難儀。何と智惠はあるまいか。智惠といふて私らがてこにおへぬ樂とやら。舞とやら。一體お前がこんな内で太平樂仰あるからぢや。ハア。ヲヽ何と是はどうあらう。私暫く廣瀬に居た故。べれ／＼萬歳を覺えて居ます。坊主めに舞はして私が小鼓。管絃の代りにはなるまいか。素袍烏帽子がなけれど。そこらはかぐれ樣の一德。常の形でも大事ない／＼。ヲヽそれ究竟と御前に出で。詞樂人延引仕る中。廣瀨村の萬歳瀧口へ參り候。梅の早咲き

と申し。春に先立ち參るも吉左右。庭上にて千秋萬歳相勤めさせ候はんソレ御免なるぞ始めませいと。地仰もあいに愛らしく時の幸ひ才若の扇開いて。萬歳萬歳と有難かりける我が君の。御惱しづまり御目も開き給ひけるは。誠に目出たう候ひける。昔の京は難波の京。中の京と申すは志賀辛崎の松の色。變りし物は我々が身の有樣。君は。變らせ給ふなと。千年の齡奉る。忠臣の柱は月卿雲客。日本の柱は日天子。三本の柱は左近右近の花橘。四本の柱は紫宸殿。五本の柱は五畿内安全。シバカキ八重九重の内迄も治り。靡く君が代の。ウタヒ千代に八千代を。コハリ細石のナホス地祝ひ壽き申すにぞ甚だ。フシ叡感おはしまし。詞いしくも祝しつるものかな。誰かある祿取らせよ。地管絃糸竹も祝儀は同じ。今日の舞樂も事終れば。詞百官百司も退出あれ。朕も夜の御殿に

入らん。地思へば我は斯くの如し。錦繍羅綾の内に坐し。民の艱苦を露しらず。徳なうして榮華に耽る。神の照覽勿體なやと。御身のことは知り給はず民を。憐むフシカヽリ御詞。各顏を見合せて。額に涙の天が下。暫し入御なし奉る。地芝六跡にさし寄つて。詞仰付けられた彼の爪黑の牝鹿。近邊の山々尋ねても扨少い物。是迄つひに見當らず。漸う昨日見付け出し。念なう射とめ。乳の下の血汐を絞り壺に認め置きました。ヲヽ大儀々々。正に天下の用に立てる。得難き鹿の手に入る事。偏におことが忠義の働き。父内大臣鎌足疾より入鹿が亂を察し。罪なくして身退き。興福寺の後なる山上に取籠り。天皇御惱祈の祓百日の行ひ。則ち今日が滿願の終り。帝此家にましますこと。先達て知らせたれば。明曉六つの鐘を限りに。密に是へ來らるべし。地其時こそ其方の勘氣も赦免。改めて元の家來詞玄上太郎利綱。ハアコハ有難し忝し。この年月の念願成就。浮木の龜とも優曇華とも此上ながら鎌足公へお執成し。仰ぎ奉る。地必ず氣遣ひ致すなと。主從水魚の中臣氏。土に生ひても穢れなきオクリ藁屋の。フシへ御殿へ入りにけり。地樣子立聞く女房の。嬉しい中の心晴り。草臥さんしよと立寄りて。詞イヤアノこちの人。わしやお前に問ひたい事。今朝の噂に。マア聞かしやんせ。きつい法度を知りながら。春日の牝鹿を射殺した者があるとて。嚴しい吟味がござんすげな。よもやとは思へど。萬一麁相でお前やなど。そんな覺えはないかいなと。地うら問ひかけるも夫思ふしかも牝鹿は覺えのきつくり。詞ハハヽヽ。ハテ譯もない。奈良の邊は赤子でも知つて居る鹿の法度。石子詰にあふ事を知りつゝ。殺す白痴があるものか。したが鹿といふは質置く事。一體しがないおれなればぶち殺すは常住の事と。地言紛らしてもどこやらが。鹿子まだらの雪見酒。氣が築山で一杯せう。嗚烱つきやと女夫中。醉うた顏でも濟みやらぬ。癪を押へて入りにけり。地村の步人が表から。詞コレ〳〵興福寺の塔頭から鹿殺しの科人。獵師中間に極まつた。友吟味して訴人したら。御褒美を下さるとお觸が廻つた。庄屋殿まで早やござれと。地言捨て歸る高聲は。小耳にはつと三作が。若し爺樣の身の上に。詮議かゝらばどうせうと。稚心のやさしくも眞實案じ侘住の手習。文庫破れ双紙。筆くひしめし何やらん。七ついろはの。淸書文章。搔捜しやの腕白弟。詞コレ兄様。さつきの箱下されやくれぬとコリヤ。かうぢやと引つたくる。地筆のしんみは憎からず。詞ヲヽ夫もやらうが。コレ杉松。兄が賴む事聞いてたも

るか。此狀を持つての。大儀ながら興福寺の門を敲いて。寺中へ差上げますというて渡して來てたも。ム、そしたら何ぞ賃下さるかやるとも〳〵。賃には春日野の火打燒買うてやろ。又嘘欺すのぢやないかや。イヤ〳〵眞まぢや。そんなら合點ぢや。往て來うと。地すかさるゝのもすかすのも。年より賢き杉松が。狀懷にちよか〳〵走り。見送る兄が書き殘す。スエテ筆の命毛器用なが。フシ仇と白地の神ならぬ。地折もこそあれひそ〳〵と。表に窺ふ捕手の侍。ソレとかけ聲かけ入つて駈行く奥より駈出る芝六。詞待つた〳〵。こりや人の内へ理不盡に狼藉千萬。ム、聞えたお前方は鹿奉行のお手下ぢやな。イヽヤ此家の内に吟味あつて。入鹿大王より詮議の役人。汝が内に匿ひ置いた者あるべし。眞直に白狀と。地かさにかゝれど悔ともせず。詞ハア何の事かと

思うたら。私ぢやとて貧乏な狩人でも。相應のかくまひは致さいでは。それを御吟味とは。お役人に似合ひませぬ。仰山なお侍樣。ヤア啌けな。かくまひ置いたはお尋ねの天皇。竝びに鎌足が忰淡海。是非諍へば此通りと。地傍に在合ふ三作を取つて引き寄せ差付くる。刄は胸に差當る。人質取られて。詞ハア〳〵〳〵。サア〳〵何とと詰めかけられ。先づ〳〵お待ち下されい。如何にも申譯致しませう。が爰ではどうも申されず。大庄屋の方迄參り。委細白狀。致しませう。ム、。然らば早く。サア歩め。ハツ〳〵。コリヤ三作わりや戸をしめて。嚊に氣を付けいと言へ。いざ。お役人と地打連れて。毒蛇の口の一思案フシ心は。跡に出でて行く。地一間に樣子立聞く淡海。局々と呼出し。詞芝六が心底。忠臣無二と思ひしが。子に絆されて大事を誤る今の行跡。

拷問に及ばゝ慥に白狀。どうも天皇。長く爰には置きまされず。今宵の中に山越に。お伴して立退かん。地皆々密に用意々々。我は猶も芝六が。歸りを待つて一詮議と。錣元くつろげ立上る。詞マア〳〵お待ちなされて下さりませと。地お雉は駈出で手をつかへ。詞お疑もさる事なれど。あれ程に迄思ひつめ。御勘氣を赦されうと。心を碎く夫芝六。中々白狀致す樣な。未練な心でない事は。私が存じて居ります。一先づ歸りをお待ちなされ。其上胡亂な事があれば。一天の君にはかへられぬ。夫とは言はせず。私から切りかけます。其時にこそ心底の。明さ暗さは今宵一夜。憚りながら私に。お預けなされて下さりませ。ム、實に。一命を差出し。賴まるゝ程の玄上太郎。とはいひながら草も木も。地我が大君の國なれど。詞今は草木にも心置かるゝ此時節。すはといは

ば容赦ならず。御前へ參つて返事を待つと心。地ゆるさぬ關の戸は。破れ障子のつゞくりも。反古にせじと間に合ひ紙。書きあつめたる胸の中。母の心を三作もフシ共に。案ずる折からに。地興福寺の衆徒鹿役人。先に立つたる杉松が。しるしの門口差覗き。詞ム、科人はあの悴よな。地捕つたといふや否應言はさず三作を。取つて引立て用意の早繩。お雉驚き。詞コリヤ何事。大事の子をどうするのぢや。ヲ、鹿は春日のつかはしめ。殺した者は古へより。大垣の刑に行ふ大法。エ、イ。其御詮議は聞えたが。狩人も多い中。外の吟味はなされいで。此子一人が知つた樣に。あんまりな當推。但し證據でもござりますか。ハテ證據なくして名を指さうか。其悴が所爲といふ事。慥な訴人あつて明白。ム、訴人したは何所の奴ぢや。覺えもない無實をいふやつ。切刻んでも飽足らぬ其訴人め。サア爰へ出してお見せなされ。ヲ、訴人は此悴。現在の弟が注進。よもや相違はあるまいと。地聞いて恟り。詞コレ〳〵ぼん。我が身はさつきから何所へ往て居やつた。アイ。わしや此狀持つて。あの坊樣の內へ往て。連立つて戻つたと。地いふに怪しと引取つて。讀む度々に胸どき〳〵。詞何ぢや。お尋の鹿を殺し候者は。私兄の三作に違ひござなく候。そんなら此書付を。ア、わしが持て往た。サ、兄樣負下され。地饅頭ほしいとフシ頑是なき。詞エ、何いふのぢやつつともう。性もない子供のいふ事。取上げて下さりますな。ナウ三作。何のそなたが其樣な。法度を破つてたまるものか。サアちやつと言譯しやいのと。地つき出せば頷ふり上げ。詞いかにも弟が訴人の通り。鹿殺しは私でござります。コレ〳〵。そなたは氣が上つたか。狼狽へる所ぢやないぞや。イ、エ。狼狽へはしませぬ。わしが手にした事。覺えのない狩人の。仲間の衆に吟味が縣り。ひよつとどうした人違ひで。爺樣の難儀にならうとも知れぬ。夫が悲しさ尋常に名乘つて出ます。常々お前の話にも今の爺樣は義理のある親ぢや程に。猶大切に孝行せいと。ソレ云はしやつたを。わしや能う覺えて居ますわいの。地わしが所刑にあうた跡で。爺樣の泣かしやれぬ樣に。京の町へ奉公にやつたと。いうて置いて下され。詞是からは杉松を。私と二人前可愛がつてや。鹿や兎の命を取れば。どうで末は斯うなるもの。せめてあれ一人は狩人さして下さるな。地それぼつかりを賴みます。さらばでござる母樣と。親の代りに罪科を。引受ける氣の立派さを。思ひ合せてハアはつと。今更未練なとめ樣も。諍ひやうもないじやくり。詞扨も扨

も。健氣なといはうか。産んだ子ながら恥しい。義理ある後の親夫。地わしやまだ恩を得送らぬに。大人も及ばぬ發明は。一生の智惠も壽命も十三年につゞめたか。こんな子を持つた親とひけらかしたい稀な子を。世にも稀なる大垣の。土の中へ生きながら。石子詰で殺すとは。なんぼ前世の約束でも。餘り慘い約束事。詞イヤ〳〵〳〵。なんぼうでも殺さぬ〳〵。地〳〵と我が子にしつかとしがみ付き。涙の瀧にしめるにぞフシいとゞ。喰ひ入る縛り繩。詞ヤア成敗極まる科人に返らぬ繰り言。今宵の中は寺中の法事。明六つの鐘つくを相圖に。山下の土中を掘つて石子詰の刑罰。最早七つ。もう一時。刻限移ると引立つる。なう胴慾な。いはゞ畜生一疋を。殺した科を夫程の。御成敗にも及ぶまい。御出家のお慈悲には。どうぞ助けて下さりませ。地叶はぬ事なら土の中。母も一所に埋んでと。取り付く島も袂の岸。涙に漂ふうかれ船。繩目の綱は親子の別れ。見返る姿霧霞フシ飛ぶが如くに引立て行く。地母は正體腰もぬけ。詞ヤレ三作よ待つてくれ。地思へば〳〵今日の日は。わが身一人の惡日か。由緒正しい武士の子を。一生狩人山賤に。朽果てさするばかりかは。所の法に行はれ。非業の死は殺生の。罰か報ひか悲しやと。土邊に蹉跎と身を打付け。フシ聲を。はかりのこがれ泣き。ウタヒ患を拂ふ玉箒。ナホスいかな大事も好物て。醉うてはころり芝六が。機嫌上戸の。ちろちろ戻り。詞ヤア女性。是におはすか。此冷えるに地邊に轉りは。扨は貴樣も醉醒しか。久しぶりの色事。地ドレ抱いてやらうと手を取れば。詞ヤア此方の人か。ハア悲しや。南無三きやつ泣上戸。我等は悲しうても笑ふ。貴樣は目出たい事にも泣く。イヤ又此樣な嬉しい折から。祝うて地一つ泣き給へと。餘念たわいも泣顏を。見せじと妻も氣を取り直し。泣く泣く笑顏繕ひて。詞ホンニ又何處でやら。きつい機嫌で戻らしやんした。さうしてマア。最前の捕人の侍。取り巻かれてごさんした。其仕舞はどう付いたえ。サレバ〳〵。そこをぬかつてよい物か。此能う廻る舌を以て。立板に水を流す如く。とんと匿ひませぬにて。すつぱりと言拔けて戻つた。雨降つて地固ると。是からは猶あなた樣も。帶紐といておかくまい申してよいといふ物ぢや。ナ。そぢやないか。ヤお天子樣の御機嫌はどうぢや。マア〳〵悦びや。今日の日天樣がかぐれ樣にならしやましたらこそ。斯ういふ內へお成りなされて下さるといふは。有難いといはうか忝いといはうか。目出度いといはうか。嬉しいといはうか。これが悅

ばずに居られうか。ナ左様ぢやないか。まだ嬉しい事があるわ。明日の明六つがごんと鳴ると。鎌足様が爰へござる。そこで勘當御赦される筈。淡海様の請合ぢや。日頃の願ひ叶ふは明日。餘り嬉しさ身祝に。呑酒屋叩き起して御神酒五合供へた。エヽ忝い。〳〵。コリヤ。坊主よあすからは元の侍になつて。われにも大小さゝすぞよ。ヤ兄は何所に居る。三作よ。作よ。地〳〵は胸を裂く。妻の苦しみ。詞イヽエイナ。作はお前の戻りが遅さ。一人獵に行くというて。エヽ夜の内に何所へ滅相な。もう獵師はさゝぬ。弓取に仕立てるはあすの夜が明け次第。イヤ。もうそろ〳〵白みかけるぞ。出世の雲が見えるぞ〳〵。有難い。〳〵。早う明六つが鳴つて下され天道様。頼みます。〳〵と。地祈る夫が空を見つ。覗く表も裏表。夜明は我が子の最期時。どうぞ此夜

が。百年も明けずにあつてくれかしと。胸の阡陌の色々に。嬉しいも六つ。悲しいもフシ六つ無量の物思ひ。詞アヽおりや最う今夜は丁度元日を待つ心地。果報は寝て待て。ちよつとの間いねつまう。坊主はおれが懐にと。地こつぽり被る蒲團より早やとろ〳〵の草臥寝入。地何にも知らぬ悦び寝顔。それというたら三作が。心も無足に夫の命。それも悲し我が子も可愛し。心は千々に鳴る鐘を。早や撞き出す興福寺。合 詞ハア南無三寶。アノ鐘の地數に縮まる子の壽命。一つの命を二つに分け。養ひ親への孝行心。ほめてやつて下されと。言ふもいはれぬ女房が。心の苦痛三つ。四つ。重ねて響く胸先は。斧鉞に打たるゝ心地。五體五つにいつの世の。報いを爰に。修羅の鐘。打切る六つはヤア知死期かとわつと叫ぶは一時に。蒲團の中も血の涙。寝入り伏

したる稚子の。咽ぶえ疊にぬうたる刄。詞ヤア杉松をむごたらしい。酔狂ひか亂心かと。地涙もいつそ。狼狽へて咽へ流るゝ。スヱテ呆れ泣き。芝六居直つて聲を上げ。詞中將淡海公へ申上ぐる。玄上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ。最前の捕人は。拙者が心を引き見給ふ。鎌足公の廻し者と。氣は付きながら情ない。人質に心迷ひ。彌もつて御疑ひを重ねたれば。天子も爰には置き給はじ。冥加に叶ひ。一天の君を匿ひ申す。身の大慶も水の泡。勘當御免もなき時は。生きても返らぬ心外。悴を切つても他言致さぬ魂を。今改めて御覧に入れる。詞コリヤ女房。張詰めた太郎が義心。大事の心底見せ損うたは。三作といふ其方の連子元は秦の益勝と云ふ樂官の女房。蝦夷の讒にて潰れた家。力になつて下されと。頼まれての後妻。地義理のある子が枷になつて。鎌足公に

根性を。見下げられたが口惜しさに。さし殺したは。二人が中に出生した此杉松。科はなけれど主人へ面晴。鬼になつてと酔うた顔。酒ではなうて劒を呑む。侍の義理が。敵ぢやと。詞思ひ諦め。坊主が代りに随分兄を。可愛がつてやりやいのとスエテどうど坐して。泣きければ。詞ナウコレ夫程に思うて下さる。其兄の三作は鹿殺しの科人になつて。縛られて行つたわいな。ヤア。〱〱〱。すりやおれが科を身に引受けて。名乗つて往たか。地エ、それ殺してはと狂氣の如く。駈出す弓手の岩壁に。詞太郎暫しと聲あつて。地内大臣鎌足公。神事の禮服小忌衣。心葉の冠梅が香のヲクリ匂ひ。殘れる釆女の御方。手に捧げたる内侍所フシ悠然と。出で給ひ。詞玄上太郎心底慥に見屆けたり。我敵の亂を避け。餘所ながら守護する天子。一日にても其方が。御難を避けしはあつぱれ忠義。入鹿が心をかけたる釆女。久我之助に言含め。猿澤の池に入水として。此興福寺の山奥に。鎌足諸共隱れ住む。今日計らず汝が悴。大垣の刑に行なふ所。不思議に命助つたり。三作參れと仰せの下。地上下改め靜々と携へ持ちし寶の箱。地明けて我が子の無事な顔。詞ヤアまだ生きて居てくれたかと。地思ひがけなきフシ夫婦が悦び。詞ヲ、不審尤も。天皇御悩の祈の爲。天の岩戸の古例を引き。天照大神に祈誓をかけ。百日の行滿ずる今日。爭ひ難き神の力。刑罰の地に掘穿つ土中に怪しき光り物。能く〱見れば先年失せさせ給ひたる。内侍所神璽の御箱。地入鹿が父蝦夷大臣疾より謀叛の根ざしにて。埋み隱せし二種の寶顯れ出でしは是正に。神明の助け給ふ三作が命。詞今改めて鎌足が三代の忠臣。さりながら鹿を殺せし春日の掟。同じ血脈の弟が死骸を埋め刑罰の。表を立てて菩提の爲。標の石の其上に。撞鐘一宇は鎌足が。改めて建立せんと。地仰せは今に曉の。六つに死したる七つ子の數を合して。十三鐘の音にぞ。フシ哀れ殘りける。地鎌足重ねて。詞此八咫の御鏡は天照大神の。御影を寫せし御正體。勿體なくも蝦夷大臣。穢れし土中に埋み置く。地其故にこそ一天の御影を曇らせ。御目盲させ給ひしも日月の鏡曇りし故。詞我が行法の今日に當つて。御鏡出でさせ給ふ事。常闇の世の岩戸を開き。天照神と天皇の御對面の時至れり。出御ざふと奏聞の。地聲に應じて淡海公。御手を取つて立出づる。折から向ふ鏡の光。フシ朝日の影に輝きて忽ち御目も明らかに。ナウ懐かしの帝樣。釆女是にと走り寄り。互にゆかしき物語りフシ御戀中も恐れあり。詞ヤア〱太郎。汝が射たる爪黒の。鹿は入

鹿が調伏にて。地頓て太平萬乘の御代知し召す暫くも。詞民間に落ち給ひしは天より地中に落ち給ふ。地是ぞ稀なる天智帝。御目も将に秋の田の。刈穂の庵の假御殿。木の丸殿に准へて。今日の出陣の城廓に悪魔追伏興福寺は。我が藤原の氏の寺。いさや。これより臨幸と。先を拂つて鎌足の。威風凛々綸言の。フシ汗か涙の露にぬれ。草葉に置ける芝六が。妻戀ふ雉や子故の闇。明けてもくらき六つ七つ十一十二。十三鐘の古跡を。今に傳へける

第三

地奈良の都の八重九重。禁裏守護の太宰の館。入鹿公のお成とて。フシさゞめき渡る奥女中。地荒牧彌藤次一間を出で。詞コリヤ仕丁ども。今日は入鹿公御目出たの御悦びに。奈良の町へ入込の諸職人。商人藝者に受領を下されんとの勅諚。相詰めたる町人ども一人づつ呼出せ。地はつと答へて立出づる。縣召かや諸人に。司を給びてそれ〳〵に。國名を付きし烏帽子子の。始めにかけし烏帽子屋が。身を立烏帽子兩眉は。三大臣のお召とて。スエテ高き位や懸烏帽子。十二の冠式法の。烏帽子屋なれば平七を。頭平と受領なされける。跡へ出でたは　フシ烏帽子に白丁。地彌藤次きつと見。詞フウ共方は神職な。神職ならば何故吉田に參つて受領を受けぬ。イヤ拙者めは鹿島の事觸。當年は辛の卯の年祟り年とござつて。鹿島の御寶殿よりでつかちない光り物が飛び出で。神の扉が八文字に披け神馬の四足に大汗をかいてござる。禰宜神主是を歎き御湯を捧げて七座の齋。時にお鹿島の御託宣に氏子共が下用櫃にしやりを切らして。むらつぎをするであろと。人の物でも手まはり次第打殺して其日を凌げ。むくりこくり地の底より潤はして米は下直に。錢は高うさしてやろとの御託宣でござる。無上禮法新兵衛嘉兵衛。拂ひ給へ清めて給ふとフシ喋りける。詞扨は汝事觸よな。向後そちが受領には。地口松の差出の頭佐平次と。ゆるせし跡へぼつとしよ髪。言はねど手足黒々と。鍛冶屋の木梃の衆てんからり。ころり。てん〳〵からりの相槌に打つや。打ち物元が燒刄の燒物なれば。備前の守　フシとや名にし負ふ。地櫻に色香取交ぜて。手品やさしきびんざさら。歌京の水色よい染上の。との茶小紋に見初めて染めて。醉うてぢやらくら笹の葉小紋。今夜必ず必ずやいの。松葉小紋の戸明けて門にちつとやつて下ん。ナホス詞シテ汝は伊勢か熊野か。イヤ私は伊勢比丘尼。それならば比丘尼の司。地お雨なんどとフシ岩楠の。地樫作りのどつ

てう聲。詞アイおらは攝州西成の郡。上福島の船乘でござります。それならば大名の船歌。上つ方には珍らしからん。謡へ〳〵の聲につれ。舟歌エヤつるつつともいつきやなう來てな。小側に立寄り見てあれば。おんめんもとはころり。ころりんなころ〳〵とも。こんころがしやりかの。しやなりんがちよろ。よけんれんばまたのいよほん。ほんほ若枝や。はんは葉もイヨエ榮えやはんは葉も。ろやんはいよイヨエさらへ。謡ひ納めしナホス船歌に。彌藤次は聞入つて。詞ヲ、出かした〳〵。此後は其方を船の頭となすべしと。地言ひしより名を船頭と。名付けし跡へ道心者。風呂敷肩にひよつか〳〵。詞コリヤ〳〵汝。所化ならば上人和尚になりたい望みか。イヤ〳〵。愚僧は願人坊主。寺號をお赦し下さりませ。ム、願人とは何の宗旨。されば八宗九宗をもれ。二季の彼岸は鉦太鼓で町々を。六齋念佛。地お目にかけうと風呂敷より。取出し始める太鼓の拍子。歌やあん楊柳子。〳〵。南天龍膽金銀花咲いた。合銀杏金柑楊梅寒梅瓢簞鳳仙花。やあん鐵仙花。〳〵。梅檀沈丁芙蓉林檎。長春半夏草。エ、スエ〳〵りよ。エ、スエスリヨ。こんりやう。エ、ス、リヨ。こんりやうこんしんこんりやうこんしん〳〵。こすへぶくぶくいしせほろみとす。ナホスと打納め。詞扨盆前の施餓鬼には。鐃鈸なんど打鳴し法界の。地施餓鬼〳〵と六字詰。音頭七月二十四日には。地藏菩薩を脊たら負ひ林淸詞一つや二つ三つや四つ。十より内の嬰子は。小石拾うて塔と積み。一重積んでは親の爲。二重積んでは。鄕里兄弟我が身の爲と。ナホス地回向する。庚申にはと丶打つて。詞庚申の代待。地扨傘に。赤前垂を腰に巻き。住吉踊。歌四社のお前で。扇を拾うた。ハンヤ扇めでたや末繁昌。サ住吉樣の岸の姫松めでたさよ。白かんかねのべてのうソレ襷にかけて。よね〳〵はかるせきのと。せんととのやさらば〳〵エ。ナホス踊り了へば彌藤次も。詞是はしんどい宗旨ぢやな。向後は其方を。曉山西方寺と寺號をお許しなさるゝぞ。ハア、有難し忝しと。地悦び勇む春駒は。合歌めでたや〳〵。春の初めに春駒なんど。夢に見てさへよいとや申す。ドウ〳〵〳〵〳〵。三吉乘つたか。右の袂に三七三夜。左の袂に三七三夜。合兩方合せて六七六夜。ドウ〳〵〳〵〳〵。ナオス勇み舞うたる春駒が。轡の紋もきつぱりと。好い男ども友禪の。二上り歌伊達な下着を一つ前。ナオス横目つかうて白洲につくばひ。詞私は堺の素人淨瑠璃。三右衞門と申す者。政太夫は播磨。若太夫は越前。筑前大和と受領致す。是は大坂の名人藝。

私は太夫號を下さらば有難うございます。ナニ淨瑠璃を語るとな。幸ひ〳〵。奥女中も聞きたがる。無間の鐘を所望々々。これは迷惑。私はちやり聲で歌事は參りませぬ。地いかぬを是非にと權威の所望。迷惑ながら聲張り上げ。詞テ、テン〳〵テン〳〵石にもせよ。金にもせよ。心ざす所は無間の鐘。其金爰にと三百兩。深山おろしに山吹の花吹き散らす。地われ聲にて。語れば扨も。怖い聲。詞最前の藥鑵屋と。一處に置いたらよからうと。地どつとフシ笑ひを催せり。詞ヲ、一興一興面白し。梅が枝は諸木に先立ち咲く花なれば。三右衛門も向後は咲太夫と改むべしと。地仰せにはつと悦びて。お禮申せば殘りし受領。又明日と言渡し。オクリ何れも。フシ白洲を立出づる。地召に應じて大判事清澄。袴の襞積も角菱ある。不和なる中の定香が屋敷。互に夫と白書院。フシ目禮もせずつつと通り。詞入鹿公の御座の間へ。誰そ案内仕れと。地言捨てて行かんとす。定香聲かけ先づ暫く。詞珍らしや大判事殿。太宰の少貳が跡目を預る妾が屋敷。挨拶もなくお通りは女と思ひ侮つてか。但し武家の禮儀御存じなくば少と御傳授申さうかと。地詞の非太刀フシ打掛捌き。地騒がぬ清澄空嘯き。詞少貳存生より領地の遺恨に依り。此屋敷の内へは今日迄足踏もせぬ大判事。入鹿公のお召によつて參つたは勅諚を重んずる故。皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ。挨拶する口は持たぬ。イヤそれなれば猶もつて。今日入鹿樣お成なれば大内も同然。大判事に御疑ひの事あつて。此定香に吟味致せとの勅諚。此詮議濟まぬ内は一寸も御前へは叶はぬお控へなされ清澄殿。ム、ハテ珍らしき事を聞く。君御詮議の筋あらば檢非違使に仰せて。拷問あらんに何の御遠慮。元來御疑ひ蒙るべき覺えなし。生綴き女の吟味。受ける樣な清澄でおりない。お身見事詮議して見るか。ヲ、太宰の後家此定香が。屹度詮議して見せう。イヤ小癪な。其處退いて早や通せ。罷りならぬと根に持つ遺恨。地互に折れぬフシ老木の柳。松の間の襖押し開かせ。出御なりと警蹕の。聲に二人も飛び退り恐れ。フシ入つたるばかりなり。地入鹿の大臣寛然と。上段の褥より遙に見下し。詞ヤア大判事。未明より參內せよと。勅使を立つるに甚だの遲參。アレ見よ今日は午の上刻。流星南に出でて北に拱するは。萬乘の位に卽く丸が吉星。それ程の事知らぬ大判事でなし。但し。入鹿に仕へるが不足と思ひ。身を退かん下心か。緩怠なりときめ付くれば。コハ御諚とも覺えず今一天四海君の御手に屬するとは云ひながら。いまだ殘黨先帝に

心を寄する族あつて。帝都を窺ふ折から。我等が領地紀伊國は。西國南海の咽首にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅參。其上忠臣第一の大判事に。何事の御疑ひと フシ憚なくぞ申しける。詞ホヽ其仔細といつぱ。先帝の寵妾釆女の局を。丸が後妃に定めんと行方を尋ね求める所。猿澤の池へ入水せし由。いかにしても合點行かず。察する所釆女が所在は。大判事其方がよく知らうがなと。地思ひがけなき疑ひに。清澄不興の眉を顰め。詞コハ存じ寄らざる儀。其釆女の御事は。猿澤の池に捨身ありしとは。誰知らぬ者ござなきに。我等が行方存ぜしなどとは。何を目當の御仰せなるぞや。ヤアとぼけな。汝が悴久我之助は釆女が附人ならずや。其親たる其方なれば。よも知らぬとは言はれまじ。サア眞直に白狀せよ。陳ずるに於ては計ふべき旨あり。イヤなら大判事殿お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とは此事。サア覺えがあらば申されよと 地言はせも立てず。イヤ默り召され。詞女の差出る所でなし。イヽヤ勅諚を受けての詮議なれば。勅答の有無に依つて。其座はちつとも立たしはせじと。地膝立直し詰寄つて。フシ双方挑み爭うたり。地入鹿大臣大口明き。ハヽヽ。詞イヤ巧んだり拵へたり定香が領分大和の妹山。清澄が領地紀の國脊山。隣國境目の論に依り。互に確執せしとは表の見せかけ。内々には申合せ。故主の帝へ心を通はす汝等と。我が眼力に違ひはせじ。さすれば天皇釆女は兩家の中に隱し置かんも知れざる故。大判事が詮議を申付けた定香コリヤ其方にも此疑ひはかゝるぞよ。是は又君の勅諚とも覺えませぬ。それ少貳より中惡き大判事殿。何故申合さう樣もなし。地私に迄お疑ひは恐れながら。詞言ふな女め。左程音信不通の中なるに。大判事が悴久我之助。其方が娘雛鳥と。密通致し居るは如何に。イヤ知るまじと思ふか。悴共が縁に繋がれたる汝等なれば。兩方ともに吟味は遁れぬ。地何と肝に徹うがと。飽迄邪智の一言に。何思ひけん大判事席を蹴立て行かんとす。詞コレ待ち給へ清澄殿。氣相かへてコリヤ何處へ。何處へとは。親々が不和なる中を存じながら。忍び逢ふ悴が不所存。引捕へて吟味せねば。子供が縁を幸ひに和睦せしと言はれては。我が家の恥辱となる。ヲヽそりや此方も同じ事。一日武士の意地。今更中が直りたいばかりに娘に態と不義させしと。世上の人に蔑せられては。過逝き給ふ夫へ立たぬ。地妾も共にと裾引上げ。駈出す二人をはつたと睨め。詞私、汝らが悴の不

義を吟味はせぬ。丸が尋ぬるは釆女が所在。サア何れからなりと早く言へ。何と〱イヤ悴が性根はいさ知らず。釆女殿の儀は曾て存ぜず。我が詞に僞りあらば弓箭神の御罰を受けんと。地刀すらりと抜放し。丁々と金打し。詞此上にも御疑ひあらばいか程の拷問なりとも。サア遊ばせとどつかと坐す。ヲ、妾とても少貳が妻。家に換へて釆女殿は匿はぬ。地水責火責に逢ふとても。知らぬ事は存じませぬと フシ詞するどにいひ放す。詞ム、然らば釆女が詮議は追つて。先づ汝等が面晴なれば。匿はぬといふ潔白に。定香は雛鳥を入内させよ。又大判事も覺えなきに相違なくば。久我之助は今日より。朕が目通りへ出勤させよ。急度其旨心得よと。地何がな探る當座の難題。二人は胸にぎつくりと。答へも フシ暫しなかりしが。地やゝあつて詞を揃へ。詞斯く有難き勅諚を。互の子供が違背致さば。ヲ、地言ふにや及ぶと邊なる生け置く櫻の一枝押取り。詞得心すれば榮える花。背くに於ては忽ちに。丸が威勢の嵐にあて。まつ此通りと欄に。地はつしと打折り落花微塵。はつとばかりに親々の。心も共に。フシ散亂せり。地猶もゆるまぬ大音上げ。詞ヤア〱彌藤次早く參れ。汝は百里照の目鏡を以て。香具山の絶頂より急度遠見を仕れ。コリヤ〱兩人よつく聞け。若し少しでも容赦致さば兩家は沒收。從類までも絶やするぞ。地性根を定め早や行けと。せき立つ諚意に親々の。思ひは千々の胸の中。見せぬおもてに。忠と義を。張り詰めし氣のたゆみなく。打連れてこそ。フシカ、リ出でて行く。誠に秦の趙高が。馬と欺く小牡鹿の。入鹿が威勢ぞ フシ類ひなき。地かゝる所へ中門より追々駈入る鎧武者。御注進と呼ばはつて。御白洲に頭を下げ。詞河内の國に武智郡司安彥。先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを。官軍殘らず馳向ひ。敵を攻付け一晝夜に落城。大和に安曇の文次宗秀。當麻の邊に陣を取り。地南都を攻むる其結構。馳向うて戰ひしに味方の。官軍利を失ひ。殘らず敗北仕ると息つぎ敢ず言上すれば。ハ、、、詞物數ならぬ逆徒の奴輩。朕馳向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし。希代の名馬。吉野の牧より狩出したる。其馬引けと廣庭へ引出させ。地欄より。ひらりと フシオクリ打乗り。名馬の勇み。合手綱かいくりしと〱〱。合轡の音はりん〱〱〱。綸言誰か背くべき。大地狭しと馬上の勢ひ。刻む蹄も街の谺。いぞふれ。やつと出陣の駒を早めて。三重へ駈けり行く。地古の神代の昔山跡の。國は都の始めにて。妹脊の始め山々の。中を流るゝ吉野川。塵も

芥も花の山。實に世に遊ぶ歌人の。フシ言の葉草の拾所。地妹山は太宰の少貳國人の領地にて。川へ見越の下館。脊山の方は大判事清澄の領内。子息清舟日外より爰に勘氣の山住居。伴ふ物は巣立鳥谺と我と只二つ。經讀む鳥の音も澄みて。フシ心細くも哀れなり。春太夫地頃は彌生の初めつかた。此方の亭には雛鳥の氣を慰めの雛祭。桃の節句の供へ物。萩の强飯腰元の。小菊桔梗が配膳の腰も。すらはり春風にオクリ柳の。フシ楊枝はし近く。詞ナウ小菊。いつもの御雛は御殿でお祭りなさるれど。姫様のおしつらひで此山峯の假座敷。谷川を見晴し櫻の見飽。雛様も一入お氣が晴れてよからうの。此方も追付け好い殿御持つたら。常住あの様に引つついて居たら嬉しかろ。フウ桔梗の何言やるやら。何ぼ女夫並んで居てもあの様に行儀に畏つてばかり居て。手を握る事さへならぬ窮屈な契りは厭や。地肝心の寐る時は離れ／＼の箱の中。思ひの絶える間はあるまいと。仇口々も雛鳥の。胸に邉の人目せく。辛い戀路の其中に親と／＼は昔より。御仲不和の鬪となり逢ふ事さへも片糸の。結ぼれとけぬ我が思ひ戀し床しい清舟様。此山の彼方にと聞いたを便り母様へ。詞お願ひ申して此假屋。お顔が見たさの出養生爰迄は來れども。山と山とが領分の境の川に隔てられ。地物いひかはす事さへもならぬ我が身の儘ならぬ。今は中々思ひの種。いつそ隔てて戀侘びる。逢はれぬ昔がましぞかしと。切なる思ひかきくどき歎けば共に腰元ども。お道理でござりますほんにひよんな色事で隣同士の紀伊國大和。御領分のせり合で。詞お二人の親御様はすれ／＼。雛鳥様と久我様の。妹脊の中を引き分ける妹山脊山。船も筏も御法度で。たつた



此川一つ。つい渡られさうな物。小菊瀬踏して見やらぬか。ヲ、滅相な。此谷川の逆落し。紀州浦へ一つてきに流れて住たら鮫の餌食。したが申し雛鳥様。お前の病氣をお案じなされ。此假屋へ出養生さしなさつたは。餘所ながら久我様に。お前を逢はす後室様の粹なお捌き。女夫にして下さりませと。直にお願ひ遊ばしたら。よもやいやとは 地岩橋の渡ることこそならずとも。せめて遠見にお姿をと。障子ぐわらりと緣端に。覗きこぼるゝ腰元ども。染太夫 地久我之助はうつ〳〵と父の行末身の上を。スヱ守らせ給へと心中に。念彼觀音の經机。案じ入りたる顔容。春 地手に取る様にナウあれ〳〵。詞机に凭れて久我様の。物思はしいお顔持。地お癪がなおこりつらん。詞エ、お傍へ行きたい。コレ爰に居るわいなと 地いへど。招けど。谷川の。漲る音に紛れてや。聞えぬつらさ。詞エ、しんき。こちらが思ふ様にもない。コレこつちや向いて見たがよいと。地あせるお傍にフシ氣の付々。詞ほんにそれよ。口でいはれぬ心のたけ。地兼て認め奥山の鹿の巻筆封じ文。戀し小石に括り添へ。女の念の通ぜよと祈願をこめて打つ礫。からりと川に落ち瀧津波にせかれて流れ行く。詞エ、どんな。心の念は屆いても。地女力の屆かねば思ふたばかり片便。返事を松浦佐用姫の。石になりともなりたいと。ひれ伏す山のフシかひもなき。染 地久我之助川に目を付け。詞何處よりか水中に打つたる石は重けれど。逆卷く水の勢ひに沈みもやらず流るるは。エヽ重き君も入鹿と云ふ逆臣の水の勢ひには。敵對難き時代の習ひ。夫を知つて暫しの中。敵に從ふ父大判事殿の。心善か 地惡かを三つ柏。水に沈めば願ひ叶はず浮む時は願成就。吉野を假の御祓川太神宮へ朝拜せんと。柏の若葉摘取つて谷を傳ひに水の面。春 地見やる女中が申し〳〵。詞今の小石が屆いたか。久我様が川へ下りなさるゝ。あの岩角のをり曲りが。川端がいつち狹い。幸ひのよい逢瀬と。地いふに嬉しき雛鳥の。飛立つばかり振袖も。裾もはら〳〵。坂道を折から風に散る花の。櫻が中の立姿しどけ難所も厭ひなく。ナウ久我様か懐かしやと。染 いふに思はず淸舟も。雛鳥無事でと顔と顔。見合すばかり遠き間の。春 心ばかりが。染 抱き合ひ フシ詮方淚先立てり。春 詞 申し淸舟様。わしやお前に逢ひたさに。病氣と言立て爰迄は來て居れど。地親の許さぬ中垣に忍んで通ふ事叶はず。女雛男雛も年に一度は七夕の。逢瀬はあるに此様に。お顔見ながら添ふ事の。ならぬは何の報いぞや。妹脊の山の。中を隔つ吉野の川に 鵲の。スヱテ橋はないかと口說

き言。染地聞く清舟も揖あらば早や渡りたきゆかしさを。胸に包みて。詞道理々々。我も心は飛立てど。此川の法度嚴しきは親々の不和ばかりでない。今入鹿世を取つて君臣上下心々。隣國近邊といへども親みあらば徒黨の企てあらんかと。互に通路を禁めて船を留めたる此川は。領分を分ける關所も同然。地命だにあるならば又逢ふ事もあるべきぞ。今流したる水の柏。詞波にもまれて浮みしは心の願ひ叶ふ知らせ。地入鹿が掟嚴しければ我も世上を憚りて。此山奥の隱住み心の儘に鶯の。聲は聞けども籠鳥の雲井を慕ふ身の上を。思ひやられよ雛鳥と。スヱテ儘ならぬ世を恨み泣き。春詞ナウ又逢ふ事もあらうとは別るゝ時の捨詞。縱へ未來の父様に御勘當受くるとも。わしやお前の女房ぢや。地とても叶はぬ浮世なら法度を破つて此川の。早瀨の波も厭ふまじ。何國如何なる方へなと連れて退いて下さんせ。詞私はそこへ行きますと。地既に飛込む川岸に。周章驚き留むる腰元。イヤ〳〵放しやと泣き入る娘。染詞ヤレ短慮なり雛鳥。山川の此早瀨。水練を得たる者だに渡り難き此難所。忽ち命を失ふのみか母後室に歎きをかけ。我にも彌憎しみかゝる。科に科を重ねる道理地必ず早まり召されなと。制する詞一筋に。春思ひ詰めたる女氣もフシ今更弱る折こそあれ。染詞大判事清澄樣御入りなりと知らする聲。地はつと驚き久我之助歸るを名殘春押しとむるも。我が身を我が身のまゝならず。コレなう待つての聲ばかり。詞後室樣御出と。地告ぐる下部に詮方も。なく〳〵庵の打萎れ登る坂さへ別れ路は。オクリ力へ難所を行く心地フシ空にしられぬ花曇り。染地花を歩めど武士の心の嶮岨刀して。削るが如き物思ひ。思ひ逢瀨の中を裂く。川邊傳ひに大判事清澄。春こなたの岸より太宰の後室。定香にそれと道分の石と意地とを向ひ合ふ。川を隔てて。詞大判事樣。御役目御苦勞に存じますと。地聲打掛をかい取りの夫の魂。フシ放さぬ式禮。染地清澄も一揖し。詞早かりし定香殿。御前を下るも一時參る所も一つなれども。此脊山は身が領分。妹山は其許の御支配。川向ひの喧嘩とやら睨合うて日を送る此年月。心解けるか解けぬかは今日の役目の落居次第。二つ一つの勅命。地狼狽た捌きめさるなと眦。フシくしやつく茨道。春地脇へかはして仰の通り。詞入鹿樣の御諚意は。お互に子供の身の上受合うては歸りながら。身腹は分けても心は別々。若しあつと申さぬ時は。マアお前にはどうせうと思召す。染知れたこと御前で承つた通り。首打放す分の事さ。不所存の悴はあつて益なくなうて事

缺けず。身の内の腐は殺いで捨つるが跡の養生。畢竟親の子のと名を付けるは人間の私。天地から見る時は同じ世界に涌いた蟲。別に不便とは存じ申さぬ。春ハテきつい思し切り。私は又いから料簡が違ひます。女子の未練な心からは。我が子が可愛うてなりませぬ。其代りにお前のお子息様の事は。眞實何とも存じませぬ。只大切なは此方の娘。忝い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸ひ。たとへどう申さうとも。母が勸めて入内させ。お后様と多くの人に敬ひ傅かさうと思へば此様な嬉しい事はござりませぬホヽヽヽと フシ空笑ひ。染詞ム、シテ又得心せぬ時は。春ハテそりやもう是非に及ばぬ。枝ぶり惡い櫻木は切つて接木を致さねば。太宰の家が立ちませぬ。染ヲヽさうなくては叶ふまい。此方の忰とても得心すれば身の出世。榮華を咲かす此一枝。川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流るゝは吉左右。花を散らして枝ばかり流るゝならば。忰が絶命と思はれよ。春いかにも。此方も此一枝。娘の命生花を。散さぬ様に致しませう。染ヲヽサ今一時が互の瀬越し。此國境は生死の境。返答の善惡に依つて。遺恨に遺恨を重るか。春サアこれ迄の意趣を流して。中吉野川と落合ふか。染先づそれ迄は双方の領分。春お捌きを待つてをりますと。地二人詞峙つ親と親。染山と大和路分れても。二人變らぬ紀の路恩愛の。春胸は霞に埋もれし オクリ庵の 春染へ内に フシわかれ入る。地立派に言ひは放しても定かに知らぬ子の心。覺束なくも呼子鳥。娘々と谷の戸に。音なふ初音雛鳥も。母のフシ機嫌をさし足に。詞母様ようぞ。今日はお目出たう存じますと。フシ武家の行儀の三つ指に。地堅い程猶親子の親しみ。詞ヲヽよう飾が出來ました。今日は其方の顔持もよささうで。一入目出たい。母も祝うて献上の此花。供へてたも。幾才になつても雛祭は嬉しいもの。女子共何なりと。娘が氣に合ふ遊びをして。隨分と勇めてくれと。地いつに勝れし後室の機嫌は訴訟の好い出しほ。詞今のをちやつと乘り出して御覽じませと。地腰元に。腰押されても兎や角と。フシいひそそくれの縺れ髮。詞イヤなう雛鳥。春たけ延びた娘を。親の傍へ引付けて置くは結句病の種。それで急に思案を極め。和女によい殿御を持たす。嫁入さすが嬉しいか。エヽ。ハテ氣遣ひ仕やんな。可愛い娘の一生を任す夫。和女の氣に入らぬ男を何の母が持たさうぞ。ナア腰元ども。ハイ〳〵。左様でござります。お氣の通つた後室様。嫁入の先は大方今のナ焦るゝ君でござりませうと。地押し推當ども得手勝手。誰にか縁を組紐に。胸は眞紅のふ

さがる箱取り出し。妹脊をならぶる雛の日は嫁入の吉日。此箱の主は極まる殿御。雛の御膳で夫定め。コレ和女の夫と云ふは誰あらう。入鹿大臣様ぢやわいの。エ、そんならわたしを嫁入さすとは。ヲ、太宰の少貳が娘雛鳥。美人の聞え叡聞に達し。入内させよと有難い勅諚。エ、イ。地はつと悔りうろ〳〵とスエテ詞は涙。ぐむばかり。詞ヲ、肝が潰れる筈。夫と申すも畏れ多い。一天の君を聟に取る家の面目。日本國に此上のない嫁入の隨一。果報な娘。此様な目出たい事がある物かナア女子共。ハイ〳〵お目出たいと申さうか。いつそ亂騒でござりますと。地エ合違ひの嫁入に。菊も桔梗も投げ首の。フシ二人は小腹立てて行く。地母の心も色色に咲き分けの枝差出し。詞親の赦さぬ言ひかはし私通は呵つて返らず。一旦思ひ初めた男。何日迄も立通すが女の操。

破りやとは言はぬが。貞女の立様がありさうな物。とつくりとよう思案しや。此花は八重一重。互に不和なる親々の。心揃はぬ二つの花。一つ枝に取り結び。切放すに離されぬ悪縁の仇花。今和女の心次第で。當時入鹿大臣の深山颪に吹き散され。久我之助は腹切らねばならぬぞや。雛鳥と縁を切つて入鹿様に降参すれば。清舟も命を助かる。知らせは川へ流す櫻。散るか散らぬが身の納り。時に從ふ風に靡き。君が手活けの花になれば。八重も一重も恙なう。九重に傅かる〻互の幸ひ。戀しと思ふ久我之助。助けうと殺さうと今の返事たつた一つ。貞女の立て様サア〳〵見たいと。戀も情も辨へて。地義理の柵せきとめても涙せき上げ〳〵ながら母様段々聞わけましたお詞は背きませぬ。詞そんなら得心して入内してたもるか。アイ〳〵　ヲ、嬉しや。出かしやつた〳〵。夫でこそ貞女なれ。馴れぬ雲井の宮仕へ。武家の娘と笑はれな。地今日より内裏上﨟の。詞髪も改めすべらかし。祝うて母が結直してやりましよと。地いそ〳〵立ちは立ちながら娘の心思ひやり。別れて櫛のはかなさも。解きほどかれぬ憂き思ひ。染重き脊山の。フシ庵の内。地父が前に謹んで。詞久我之助が心底聞し召し分けられ。切腹御赦免下さる事。身に取つていかばかり大慶至極と手をつけば。地默然たる大判事。良打潤む。フシ目を開き。詞今朝入鹿大臣此大判事を召出し。先帝寵愛の采女。身を投げ死したりとは僞り。其方が忰久我之助。人知らぬ方へ落しやりしに極れば。必定汝等が方に匿ひあるべしとの難題。元來知らぬ大判事。よく〳〵思へば采女の御難をさけん爲。猿澤の池に入水の體にもてなして。密に落し参らせしは。なか〳〵久我之助が智

恵でない。鎌足公の差圖を受けての計らひと。知つたは身も今日が始め。親にも隱し包みしは大事を洩さぬ心の金打。若輩者には神妙の仕方。ハヽア出かしたりと思ふに付け。地邪智深き入鹿。久我之助が降參せば命を助けん連れ來れと。情の詞に釣り寄せて。拷問にかけん謀。地責殺さるゝ苦みより切腹さすれば。采女の詮議の根を斷つ大功。天下の主の御爲には。何悴の一人など。稗に生える草一本。引くよりも瑣細な事と。涙一滴こぼさぬ武士の表。詞子の可愛うない者が凡そ。生ある者にあらうか。餘り健氣な子に耻ぢて。親が介錯してくれる。地侍の綺羅を飾り。嚴しく横たへし大小。悴が首を切る刀とは五十年來知らざりしと。老の悔みに淸舟も。親の慈悲心有難涙。命二つあるならば君には死して忠義を立て。父には生きて養育の御恩を送り申さんに。

今生の殘念是一つと。顔を見上げ見下してわつと平伏す スヱ親子の誠。春こなたの亭には母後室。詞サア〳〵目出たい。和女の名の雛鳥を。其儘の內裏雛。裝束の付け樣も此女雛と見合せて。地サアサア フシ早うとありければ。地恨めしげに打守り。女夫一對何時迄も添遂げるこそ雛の德。思ふお人に引離され。詞何樂みの女御后。茨の絹の十二重。雛の姿も恨めしと。地取つて打付け緣板に。ころりと落ちし女雛の首。驚く母の胸板に必死と極る。娘の命。包めどせきくるはらはら涙。詞娘入內さすというたは僞り。まつ此樣に首切つて渡すのぢやわいなう。エエそんならほん〳〵に。貞女を立てさして下さりまするか。アヽ忝い有難いと。地伏し拜む手を取つて。ナウ入內せずに死ぬるのを。それ程に嬉しがる。娘の心知らいでならうか。詞あつと受けても自害

して死ぬる覺悟は知りながら。和女の死ぬる事聞いたら。思ひ合うた久我之助。共に自害めされうも知れぬ。せめて一人は助けたさ。一旦得心したにして。母が手づから解いた髮は。下げ髮ぢやない。成敗のかき上げ髮。介錯の支度ぢやわいの。地高いも卑いも姬御前の。夫といふはたつた一人。穢らはしい玉の輿。何の母も嬉しかろ。詞祝言こそせね。心ばかりは久我之助が。宿の妻と思うて死にや。エエ是程までに思ふ中。一日半時添はしもせず。地賽の河原へやるかいのと。引き寄せ〳〵雛鳥もフシ膝に取付き抱付き。忝さと嬉しさと逢うて別るゝ名殘の涙。一つに落つるフシ二つ瀨川。染地川を隔てて淸舟が。最期の觀念惡びれず。燒刃直なる魂の。九寸五分取直し。腹にぐつと突立つる。詞ヤレ暫く引廻すな。覺悟の切腹せく事はない。コリヤ冥上の血脈讀み

さしの無量品。親が讀誦する間。一生の名殘女が面。一目見て何故死なぬ。イヽヤ存じも寄らず。この期に及んで左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ。さりながら。今はの際の御願ひ。私相果てしと聞かば。地義理に繋がれ雛鳥も。共に生害と申すべし。詞さある時は太宰の家も斷絕。暫くの間ながら。切腹の儀はお隱しなされ降參承知致せし體に。後室方へお知らせあらば女も得心仕り。入内致せば彼が爲。地不義の汚名は受けたれども。是ぞ色に迷はぬ潔白。詞ヲヽ出かした能く氣が付いた。年來立てぬく武士の意地。地不和な中程義理深し。命を捨つるは天下の爲。助くるは又家の爲。詞氣づかひせずと最期を淸う花は三吉野侍の。手本になれと潔く。地いへど心の。亂れ咲きあたら櫻の若者を。ちらす惜しさと不便さと小枝に注ぐ血の涙フシ落ちて。波間に流れ行く。春地それとも知らず悦ぶ雛鳥。詞アレ〱花が流るゝは嬉しや久我樣のお身に恙のないしるし。地私は冥土へ參じます。千年も萬年も。御無事で長生遊ばして。未來で添うて下さんせと心でいふが暇乞。詞思ひ置く事。言ひ遺く事もう何にもござんせぬ。片時も早うサア母樣。切つて〱と身を惜まぬ。地我が子の覺悟に勵まされ。胸を定めて取上ぐれど。刀は鞘に錆付く如く。離れ兼ねたる血筋の絆。今切殺す雛鳥を。無事と知らする返事の櫻フシ同じく川に浮ぶれば。染詞ハアア嬉しや。是ぞ雛鳥が入内の知らせ。久我之助が心の安堵。采女の方の御所在は最前申上ぐる通り。此世に心殘りなし。御苦勞ながら御介錯。春サア〱母樣切つていの。未練にござんす母樣と泣かぬ顏するいぢらしさ。地刀持つ手も大磐石。染思ひは同じ大判事。子よりも親の四苦八苦。春命もちり〱。染日もちり〱。春詞ハア左樣ぢや。早や西に入る日輪は娘がお迎ひ。彌陀の來迎。西方淨土へ導き給へ。地南無阿彌陀佛と眼を閉ぢて。思ひ切つたる首諸共わつと泣聲答ゆる谺。染肝に徹して大判事。刀からりと落ちたる障子。詞ヤア雛鳥が首討つたか。春久我殿は腹切つてか。染地ハアしなしたりとどうど坐し。春悔むも泣くも一時にスヱテ呆れて詞も染なかりしが。春地やゝありて定香聲を上げ。詞入鹿大臣へ差上ぐる雛鳥が首。御檢使受取り下されと。染地呼ばはる聲を吹送る。風の案内に大判事オクリ歎きの。姿改めて。衣紋繕ひしづ〱とおり立つ春川邊の柳腰。娘の首をかき抱き。詞大判事樣わけては何にも申しませぬ。御子息の命はどうぞと思うた甲斐もない。あへない有樣。お前樣のお心も推量致し居りまする。地添ふに添はれぬ惡緣を。

思ひ合うたが互の因果。此方の娘も添ひたい〳〵と思ひ死。詞餘り不便に存じます。せめて久我之助殿の息ある中に此首を其方へお渡し申すが。娘を嫁入りさす心。染實に尤も嫁は大和 地婿は紀伊國。妹脊の山の中に落つる。吉野の川の水盃。櫻のはやしの大島臺。目出たう祝言さしませうわい。春そんなら是迄の心も解けて。染ハテ互に婭同士。エヽ忝いと。地悦ぶも跡の祭。詞ほんに脊丈延びた者を。何時迄も子供のやうに。思うて暮すは親の習ひ。地あまやかした雛の道具。一人子を殺して何にせう。跡に置く程涙の種。詞腰元ども其一式。殘らず川へ流れ灌頂。フシ未來へ送る。嫁入道具行器。長持犬張子。タヽキ小袖箪笥の幾棹も。命ながらへ居るならば。一世一度の贈り物。五町七町續く程。美々しうせんと樂みに。思うた事は ナホス引きかへて。フシ水になつた

る水葬禮。タヽキ大名の子の嫁入に。乘物さへもなか〳〵に。紀念も仇の爪琴に。首取乘する弘誓の船。アシオクリ あなたの岸より。染 地彼の岸に流るゝ。フシ血汐清舟が。地今はの容顔見る親の。口に祝言心の唱名。詞千秋萬歳の千箱の 地玉の緒も切れて。今は敢なき此死顔。生きて居る中此樣に。婿よ嫁よと言ふならば。いか計り悦ばんに。領分の遺恨より。意地に意地を立通す。其上重なる入鹿の疑ひ中直るにも直られぬ。義理になつたが二人が不運。詞あれ程思ひ詰めた嫁。何の入鹿に從はう。とても死なねばならぬ子供。一時に殺したは。未來で早う添はしてやりたさ。地言合さねど後室にも是迄不和な大判事を。婭と思召せばこそ。悴に立てて一人の娘。ヲヽよくこそ手にかけられし。過分に存ずる フシ定香殿。春 詞アヽ勿體ない。其お禮はあちらこちら。不束

な娘故。大事のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御。夫に持つた果報者。地とはいひながら。あれ程迄手しほにかけて育てた子を。又手に掛けて切る心。染 詞サヽ推量致してをる。武士の覺悟は常ながら。まさかの時は取亂し。介錯仕後れ面目ない 春 地いえ〳〵それで目出たい此祝言。是がほんの葬よ嫁入。一代一度の祝言に。婿殿の無紋の上下。詞首ばかりの嫁御寮に。對面せうとはしらなんだ。春 地それも子供が遁れぬ壽命。染 兎にも角にも世の中の子といふ文字に死の聲の。二人有るも定まる宿業と。隔つる心親々の積る思ひの山々は。染とけて流れて 春吉野川 フシいとゞ。染漲るばかりなり。地涙はらうて大判事首かき上げて聲高く。詞悴淸舟承れ。人間最期の一念によつて輪廻の生を引くとかや。地忠義に死する汝が魂魄。君父の影身に付添うて。朝敵退治の勝軍

を草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥と改めて親がゆるして盡未來。五百生まで變らぬ夫婦。忠臣貞女の操を立て死したるものと高聲に。閻魔の廰を名乘つて通れ南無成佛得脫と。唱ふる聲の聞えてや物得言はねど合す手を。合せ兼ねたる此世の別れ。早や日も暮れて人顏も。見えず庵の霧隱れ。春 埋む娘の亡骸は此方の山にとゞまれど。染 首は脊山に檢使の役目。春 我が子の介錯涙の雛。よしや世の中憂き事は。何時か當麻の。染 大和路や。春三。染ヨ合。春 跡に妹山。染 先だつ脊山。二人 恩愛義理を堰下す。染 涙の川瀨。春 三吉野の花を。染 見捨てて。春 出でて行く

第四

詞 引いたり。ヲ、。引いたり。ヲツト 地 文月七日例年の。水を新井に繰返す釣瓶の綱も フシ 三輪の里。地 酒商賣の世杉屋が身過ぎの水の內井戶をわけて。祝ひの賑はしき。サア〳〵濟んだと取り〳〵に。御酒洗米供物。フシ 皆々汗を入れにける。地 主の母は納戶より運ぶ用意の酒肴。いつにないほや〳〵機嫌。詞 近所の衆どなたも大儀でござんした。嘉例の通り酒盛して。暮れるまでゆつくりと遊んでいんで下さんせ。コレ土左衛門さん。年かさにお前から酒始めて下さんせ。ア、又雜作な止しにさんせいで。おいらが相借屋で手傳ふのも。年中爰の井戶の水を使ふ恩返し。なう五洲兵衛左樣ぢやないか。ヲ、さうとも〳〵。氣をはつて貰ろて術ない。是からはいつもの通り。賑かに遊びましよ。サア野平藤六。騷ござや〳〵。ホンニそれは左樣と。コレ內儀さん。見れば爰にも寺屋の樣に。七夕樣が祭つてあるな。サイノマア見て下さんせ。愛たてないと思はんしよが。こちらの娘のアノお三輪。何やら星樣に願があるとて。あの樣に內で祭も色々の供へ物。ませた世界ぢやないかいな。ホ、そりやマア奇特なこつちや。そして此お娘は留守かえ。アイ小さい時行た寺小屋へ。七夕に呼ばれました。サア〳〵一つ飮んで下さんせ。ヤイ子太郎。酌をしをらぬか。どりや吸物に豆腐でも。地 たいて來ましよと母親は。フシ 納戶に入れば打ちくつろぎ廻る。盃底なしども。引受け〳〵。いつき飮み。肴の鉢を。引寄せて箸放さずの。フシカヽリ 滅多喰ひ。丁稚の子太郎。フシ 呆れ顏。詞 ア、扨々。氣味のよいとは挨拶ぢや。よつ程下作な呑み樣ぢや。井戶の鮒が水呑む樣に。口明いてがつぷ〳〵。エ、夫では味が知れ難かろ。コレ此酒は內儀樣が張り込んで。こちの銘酒の第一番。男山といふ酒ぢやが。こなた樣達は眞の無茶飮。此銚子の代りめから。もう鬼殺しにしてくれろ。

そしてまあよい加減に酒飲まんしたら。例の通り騒ごかい。こちのお三輪様の三味線と。太鼓も借つて來て置いた。地おつと合點と口利の。土左衞門が眉に皺。詞それはさうぢやが。北隣へ近頃來た相借屋の烏帽子折。此井戸がへにも立合はず。餘りなめた奴ぢやないか。野平なんと思やるぞ。ソレ〳〵なまじらけた顏付で。馬鹿慇懃な顏付き。平生ぬかす挨拶も仔細らしい切口上。毛唐人のやうな奴。大かたそれ今流行る。早學文といふ本を見て。唐の箝め句をしをるのぢや。地此井戸がへに出合ぬからは。急度物いひ付けてやろと。借屋の内の神樣達。フシ御託宣もとり〳〵に。地それとも知らずのつし〳〵。歸る隣の烏帽子折。辛き世渡り甘口に羊羹色の黑小袖。一腰指したとりなりに。フシ浪人とこそ知られける。地門口より腰かゞめ。詞隣家にをります其原求馬でござります。お屋敷方の用事に付き。未明より罷出で只今歸宿仕る。後室樣にはいよ〳〵御機嫌うるはしうござりませう。後刻緩りと御意得ませうと。地我が家へ入るを惣々が。詞ア、これ〳〵〳〵。マア待たんせ。けふはコレ爰の井戸がへ。相借屋が寄つて居るのに。こな樣ばかり來ずに居て交際が濟むのかい。但しおいらを。潰すのかと。地ねだり臺詞に求馬は恟り上り口に兩手をつき。詞是は〳〵お顏を見れば皆合壁のお方々。この井戸がへお手傳ひ。曾以て私存ぜず。地是と申すも不案内から先格の作法を存ぜず。段段の失禮眞平御赦免下されと。スヱ疊に額すり付ける。詞ア、これ〳〵。又仔細らしい事いはんすかいの。ハ、勝手を知らにやしよ事がない。了簡せいなら夫で濟む。此方も一番いうた跡は。モウいざこざはないわいの。此土左衞門が呑込んだ〳〵。地然らば貴方樣がお執成で。斯樣に御敎訓なされた上は。其いざこざとやら申す。御遺恨はござりませぬか。詞サアもうよい。言はんすな。扨おいらは餘程醉うて居る。是からは嘉例の騷ぎぢや。調子が合はいで面白ない。此石できゆつとやらんせ。ハ、忝うはござりますが私。一滴もたべませぬ。ヲットそしたら勝手次第。サア是からが騷ぎの趣向。此土左衞門に烏帽子屋殿。五洲兵衞に丁稚の子太郎。しめて四人の大踊。三味線太鼓は。野平藤六よいか〳〵。求馬樣も合點か。スリヤ私にも共踊を。ヲイノこな樣は此貸屋での新面。猶踊らにやならぬわい。音頭もおれが二役ぢや。音頭ヤア千代の始めの一踊。先づは松坂こえたえ。松坂こえたやつさ。踊はありや〳〵ハツハヨイヤサ。地烏帽子屋殿はもぢ〳〵と。手持不沙汰に揉烏帽子。ヤットサ。爰の娘

の柳さび引き立烏帽子と折りかけた。ヤツトサ。風折烏帽子見すまして帆懸烏帽。子と歸るゝ。ヤツトサ。ナホス地家主もぎ兵衞フシいつきせき。詞いかに嘉例の祝でも。あんまり騷ぎがかさ高なと。地門口から聲高々。音頭喚いてはいれどいかな事。フシ耳へも入れずヤツトサ。ヤツトサ。もぎ兵衞叶はずとも〳〵に。呵る詞も拍子づき。ヤツトサ。詞ヒャウシ此家主をそでにして。酒を飲めとも言はどこそ。ヤツトサ。おのれ等許り飲喰ひ。近所を構はぬ大騷ぎ。ヤツトサ。是程いうても聞入れにや。家明付けるが合點か。ヲ、サテ合點ぢや。地是を來て見よかしのえ。お家主渡したと。踊る拍子の醉機嫌。夢中になつて立歸る。家主跡に。とほんとなり。詞ア、やくたいもないやつら。とう〳〵おれ迄夢中にした。婆樣内にか。逢ひたいとフシいふ聲聞いて納戸より。詞

ヲ、是はマアお家主樣かヤイ子太郎め。あなたがお出なされたら。何故おれに知らせをらぬ。ナア二言はんすやら。あのお家主樣も。いんま迄同じ樣に踊つてであつた物。又つけ〳〵と伺ひをる。サア〳〵申し。なんぞ御用でござりますか。ヲ、用とも〳〵大事の用。さるお侍から頼まれたが。入鹿樣の言付で。ソレ鎌足といふ和郎の子息の淡海。方々流浪して居るげな。それを見付け出したら大金。何でもマア此方へござれ。とつくりと言うて聞かそ。サアちやつと〳〵〳〵。ハイ〳〵〳〵そしたらお前へ參りましよ。ヤイ〳〵〳〵子太郎よ。サア鬧がしうなつて來た。もう日が暮れたさうな。火も消して見世明けい。用心に氣を付けい。又此娘は寺屋から戻りが遲い。ソレ酒買が來たら擲出せ。盜人が來たら酒はかつてやりをれと。地氣の急く儘に間違ひだらけ。

オクリ打連れてこそ出でて行く。地日と共に營む樣も入相の。本フシ四方の市庫戸鎖し時。地子太郎跡を打見やり。灯を上げ表の戸夜の構へのそこゝと。フシこなたの道より。步みよる振の袖の香やごとなき。面を隱す衣被き。フシ誰白絹の優姿。地窺ふ内に隣の軒。知らせのしはぶき主の求馬。詞今宵はどうして早かりし。地サア〳〵此方へと共跡は。言はず語らず手を取つて。フシ戸口立寄せ入る跡に。地子太郎は不審顏。隣の門口耳をあて。聞き濟して立戻り。詞なんでも隣の烏帽子奴は。おれと違うてよつ程豪い色事師ぢやわい。彼奴が見事な烏帽子で。アノ代物占めをると聞えた。こちらのお娘に聞せたら。大抵のことぢやあるまい。エ、はし早い奴ではあると。フシ呟く所へ。地娘のお三輪。寺子屋戻り。早足に。フシ門口這入れば。詞やお三輪さん戻らんし

たか。サア／＼事ぢや／＼／＼大事ぢや／＼。ヲ、あの人わいの何ぢやいの私に悯りさしやつたわいの。さしやつたわいの。さしやつたわいの所かいの。コレお前に忠義をいうて聞かす。忠義とは何の事ぢやいの。エ、忠義とは忠臣の事ぢやわいの。サ其忠臣は知つてゐるがの。夫がどうぞしたかや。サ其忠臣はの。アノ隣の烏帽子奴がな。隣の烏帽子とは。ム、求馬様のことかいの。ヲ、求馬々々。其求馬の姿から起つた事。こちの內儀様は家主殿へ用があつていかしやつた。其跡へ何ぢやか知らぬが。眞白な絹をかつぎ。幽靈かと思うたら。美しい衒妻が隣の門口こと／＼と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て。よう早う來たナアと。手に手を取つて內へはいつた。それからおれがぢつとして聞いて居たら。コレこちへ雇ふ男どもが。朝の間に酒桶洗ふ様に。シイ／＼といふ音がした。どうでもありや求馬様が。竹篦で擦ると見えるわいな。ナントお三輪様。コリヤだまつて居られまいがな。ム、そんなら何といやる。求馬様の所へ美しい女中様が見えて。其女中様を。連立つてはいらしやんしたと言やるのか。アイ。そりやマア合點のいかぬ事。幸ひかゝ様も留守なれば。其方往て求馬様を。爰へ連れて戻つてたも。ヲツト合點吞込んだと。地走り出でて隣りの門。破れるばかりに打敲き。詞コレ求馬様隣の酒屋から使に來た今のが濟んだら印判持つてござんせと。フシ口から出次第。地求馬は悯り何やらんと。立出づれば物をもいはず。マア／＼此方へと無理やりに手を引連れて。フシ我が家の內。地夫と見るより娘のお三輪。口にいはねど赤らむ顏。詞求馬様お歸りなされたか。ホ是は／＼お三輪様。寺屋へお出なさつたげなと。地互に味な墨付きを。子太郎がひつ取つて。詞サアおれが役はもう是迄。そこへ何かの立引さんせ。地爰らで我ら粋を通し夜食の扶持にありつかう。詞兩人共後に逢はうと。地納戸へ。フシ走り入りにける。地跡に二人はつぎほなくおぼ子育ちの娘氣に思ひ詰めたる一筋を。言はうとすれば。胸迫り。詞今子太郎に聞いたれば美しい女中様が。宵からお前へ來てぢやげな。定めてそれは隱し妻。地是迄お前とわたしが中逢ふ事さへもたま／＼に。千年も萬年も變らぬ契りと仰しやつた。其約束は僞りか。浮世の譯も辨へぬ。在所育ちのわたしでも。いひかはした事忘れはせぬ。あんまりむごいと。取付いて涙先立つ フシ恨言。詞是は思ひも寄らぬ疑ひ。成程女中は來て居るが。あれはソレ春日の神子殿。其連合の禰宜殿の。烏帽子を誂へに見えたのぢや。美

女はおろか。いかな天女か影向あつても。外へ散る心はない。和歌三神を誓にかけ。僞りは申さぬと。フシ時の間に合ひ落付かせば。地さすがおぼこの觧けやすく神様迄誓言に。夫でわたしも落付いた必ず變つて下さんすなと。立上つて七夕に供へ祭りし二つの緒環。持出でて前に置き。詞わたしが寺屋へ往た時に。お師匠様に聞いて置いた。殿御の心の變らぬ様に。星様を祈るには。白い糸赤い糸。地緒環に針を付け結び合せて祭るとやら。詞ヲヲそれが則ち願ひの糸の乞巧針。ム、お前も能う知つてぢやナア。白い糸は殿御と定め。女子の方は赤い糸。地それで私も此願籠。寺屋で見た本の中に心をかけし女の歌。詞ア、何とやら。ヲ、それよ。戀渡る。思ひはちゞに結ぼれて。幾代願ひの糸の緒環。ホ、其男の返しには。逢見ての。後も願ひの糸筋を。地よそへ亂すな君が緒環。詞アイ〳〵さうでござんした。何時までも變らぬしるし。赤い糸をお前に渡し。白い糸を私が持ち。地契りも長き願ひの糸。夫婦の約束星合に。鵲ならぬ フシ緒環を。千代の媒介取りかはし肌に付き合ふ。フシわりなき縁。地求馬が内より以前の女。歩み出でてこなたの門口。詞隣の烏帽子折様は。こなたへ來てござるかな。許さつしやれと内へ入る。地姿に求馬は手持不沙汰。お三輪は何の氣も付かず。詞ア、彼方が今のお人かえ。ヲイノ。あれ〳〵神子様ぢや。そ



れで薄衣着てござるナア申し。お前様はアノお連合様の。烏帽子を誂にお出でたされましたのぢやナア。左様でござりませうがな。サヽヽ、さうでござりますと。フシ紛らかす。地包む詞の絹を漏る月の笑顔をぴんとすね。詞コレ申し求馬様。アノ女中はお下婢か。何人でござります。アイヤ是は此酒屋の娘御。ムヽ其マア隣の娘御と。最前から久しい間。何の用がござりましたと。地問はれて求馬は答へもなくうぢつく素振見て取るお三輪。詞アヽ申しコレ神子様とやらいふ女中様。人をマアお下婢かの何のと。ひつこなしたものの言ひ様。求馬様にはアイ。私が用がたあんとござんす。お前のお世話になるまいし。構うて下さんすな。ヲヽ是ははしたない。其様に言はしやつても。そもじなどの用を聞く。求馬様ぢやないわいなう。地サアお帰りと手を取れば。お三輪が隔てて。詞イエ〳〵。わたしが未だ用がある。往なす事はなりませぬ。イヽヤこゝには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しやと。地手を引立てて立出づれば。イヤ放さじとお三輪もまた。あなたへ引けばこなたへ引く。譯も渚に戯れる雁。翅振袖ふり分け姿。フシ戀を爭ふ其折から。地いきせき戻る此家の母。詞ヤア求馬殿。此方様には用がある。何處へも遣る事ならぬ。地動くまいぞと身構へに。何かは知らず白絹の姫は。外へと出行くを。とめる求馬に又すがる。娘を押分け母親は求馬やらじと引止め。繋ぐ手と手を柵の フシ風に揉まるゝ爭ひに。地子太郎立出で見廻して。これ幸ひと母親の帶に確り括つたる。繩先を桶の呑口に結付け納戸へ逃げて入る。此方は互に戀慕ひ姿亂るゝ。姫百合の手を振りきれば一時に亂れて走るを母親が。遣らじと追へば繋ぎ繩。力む拍子に呑口抜け酒は瀧津瀬悒り敗亡。三人門へ遅れじと同じ。思ひを跡や先道を。したうて 三重

道行戀のをだまき

表具 岩戸隠れし神様は。誰と寝して常闇のよる。〳〵毎に通ひては。又歸るさの。ナホス道もせ氣もせ夫も何故 スヱカヽリ 戀故に。フシ窶るゝ所體。恥かしと。俤隠す薄衣に。ギン包めどかをり橘姫。オクリ 思はぬ人を思ひ侘び心のたけをくどけども。長地 つれなき松の下紅葉焦れて絶えん玉の緒も殿故ならば捨草も。暫しは憩ふ芝村のギン賤の男が。歌置き手拭で。忍び〳〵の出逢妻晩にござらばナコレ。のんやほんにさ。背戸の柿の木の。枝こえてナホス連理を契る言の葉は。フシそれも戀中妾は又。箸中村よ一森の長者が跡と名に響く。釜が口をも出離れて。フシオクリ歩むに。ヘ暗

き呉竹のフシ茂れる中を合泉分行けば。葉毎の露が。ほろ〳〵とほろゝ打つなる雉の聲。思ひ比べていとゞ猶。心細野に立ちつくす憎や。案山子に威さるゝオクリ我が。姿に又怯ぢてはつと立行く羽風につれて。ちり〳〵ちるや。柳本流るゝ水に裾ぬれて。本フシ物思へとや帶とけの。スヱテ里美し自らは。終に一度の。情さへないて。身を知る。合涙雨。タヽキ布留の社の御燈の影か。ナホスフシ松の木の間にちら〳〵とハズミ見えつ隱れつ。歸るさの和跡を求馬が慕ひ來て。姫和互にはたと行合の星の光に顔と顔。姫ヤア戀人か何故に。爰迄跡を追ひ鳥は。もしや塒の契りをも。叶へてやろとのお心かと。胸にはいへど詞にはおもはゆふりの袖几帳。和成程切なる心さし仇に思はじさり乍ら。左様こがるゝ戀路にて晝をば何と。烏羽玉の夜ばかりなる通ひ路は。いと不審なり名所を聞いたる上はこなたより。二世の固めは願ふ事。明させ給へと只管に。姫問はれて實にもはづかしのもりて。あまれる。浮身の上。語るにつらき葛城の峰の白雲あるぞとも。さだかならざる賤の女と思うて深い疑ひの。雲をはらして自らが。思ひもはらして給はらばどんな仰も背くまい。縱へ草葉の露霜と消えても。何の厭やせぬ。是程思ふに胴慾な。とけぬお前のお心はあんまり結ぶの神様を。祈り過した咎かや。つれなのフシ君やと恨みわび。春思ひ亂るる。薄薩夫とお三輪は走り寄り。中を隔てて立つ柳。和立退く袂。春引止めエヽ、聞えませぬ求馬様。ソリヤ氣の多い。惡性なそもや二人が馴初は。始めて三輪の過ぎし夜に。葉越の月の俤は。お公家様やら。侍様やら。知れぬなりふりすつきりと。水際の立つ好い男。外の女子は禁制と。しめて固めし肌と肌。主ある人をば大膽な。斷なしに惚れるとはどんな本にもありやせまい。合上カン女庭訓躾方。よう見やしやんせ。エ。窘みなされ女中様。姫イヤ。そもじとてたらちねのゆるせし中でもないからは。戀は仕勝よ我



が殿御。春イヽヤわたしが。梶イヤわしがと二人共にすがりつ。手を取つて三人 三下り 歌園に色よく咲く草時は。フシ男女になぞらへ言はば。言はれう物か夕顔の。台梅は武士。櫻は公家よ。山吹は傾城。合杜若は女房よ。色は似たりや。菖蒲は妾。牡丹は。奥方よ。桐は御しゆでん姫百合は。娘盛りと撫子の。ナルゾエ〳〵。なるとならずと ナホスフシ奈良坂や。此手柏の二人の女。春睨めば。梶睨む荻と萩。和中に揉まるゝ男郎花。放ちはやらじと縋り付き。梶こなたが引けば。春あなたが止め。二人戀の柵 蔦葛。付き纒はれてくる〳〵〳〵。三人 上ギン廻るや三つの小車の花より白む横雲の。たなびき渡りあり〳〵と。三笠の山も程近く。梶鳴る鐘の音に驚く姫。和歸る所は何處ぞと求馬が氣轉振袖の。はしに縫ふて取交す。春緣の緒環いとしさの。あまりて三輪も悋氣の針。男の裾に付くるとも。三人 しらず印の糸筋をしたひ慕うて三重

地榮ゆる花も時しあれば末枯嵐のあるぞとは。いさ白雲の高御座。新に造る玉殿は。彼の唐國の阿房殿。爰に移して三笠山。月も入鹿が威光には。フシ覆はれますぞ是非なけれ。地腋門の方より宮越玄蕃荒卷彌藤次。御前よき儘高う吹く。フシ帆かけ烏帽子も十分に。仰反り返り入來り。詞ホウ仕丁ども朝清めな。イヤなに玄蕃殿。此度新たに築かれたる此山御殿。朝日に輝く所は。吉野龍田の



花紅葉。一度に見るとも及びますまい。ナニサ〳〵。イヤモ言語に述べがたき御物好。瑪瑙の梁珊瑚の柱。水晶の御簾瑠璃の障子。コレ見られよ。飛石は琥珀砂は金銀。又釣殿に登り見おろせば。春日の杉も前栽の草びら。若草山葛籠山は撒石同然。猿澤の池は。お庭の井戸に見えまするると。地話の尾に付く仕丁ども。詞ア、結構な御普請でござります。さうして何やらふつ〳〵と好い匂ひが致します。ヲ、其筈緣板檻に至る迄皆伽羅と沈。シタリ抹香や鉋屑とは違うた物ぢやなう又次。サイ。又お學問所は唐を寫して唐木ぢやげなの。ハアン。其唐木とは何々ぞ。ヲ、先づ花梨。フン。紫檀。フン。黒檀。ホイ。鐵刀木。ホイ。うらやさん。ホイ。當卦本卦。や手の筋。や。男女相姓や墨色の考。コレ〳〵。失せ物待ち人。コレ〳〵〳〵。書判の善惡。アアコレ〳〵。そりや山御殿ではなうて山伏ぢやぞや。サア王樣も此山で寢やしやるによつて山伏ぢや。エ、人を嘲弄するかな。イヤ長老とは坊主の事か。イ、ヤ女子の事ぢや。そりや女郎ぢや。イヤ如露とは花に水かける物ぢや。エ、どう言やかう言ふと。なんぼ貴樣がくずなの獄でもおれにや敵はぬ。ヤイふるなの獄ちや。くずなとは魚ぢやわやい。イヤくずなぢや。イヤふるなぢや。くずなぢや。ふるなぢや。〳〵。〳〵。〳〵。ヤイヤイ騒がしいそりや何事。清め仕舞はば早く下れ。皆行け〳〵と。地追立てやり。詞アレお聞きあれ彌藤次殿。我が君此殿へ御移りと見え。物の音近く聞え申す。いかさま左樣と威儀つくろひ嚴重 オロシ へにこそ。控へ居る。地花に暮し月に明し。酒池の遊びに醉ひつかれ。御殿々々の通ひ路も。數多の官女が道樂に。君の機嫌を鳥甲。下オン調ぶる笛や簫篳篥 ギン 太皷の。音も鷄徳に。己が不德を押登る。繧繝の深緣蜀錦の褥の上。むんずと坐せし有樣は。實に類なき榮華の殿。玄蕃彌藤次頭をさげ。先達て卿上雲客達より。君の壽を祝し申されし數の島臺。ソレ女中方。叡覽に供へられよ。地アツト答へて持出づる思ひ〳〵の飾物。何がな君が壽を祝ふ。鶴龜松竹の。影は千尋の深綠。松と鶴合せて見れば。一萬二千の齢を君に。讓り壽く。フシ 蓬萊山。扨又次の島臺は。周の帝の寵妃。假の情の弟草實に寵愛の色菊や葉毎を染めし其筆の。命毛長き八百歳老いせぬや。〳〵藥の名をも菊の酒。酌めども盡きぬ泉の壺。ナホス 殿上人の方々より フシ 御祝儀なりと相述ぶる。地一入輿に入鹿が悦び。詞ヲ、百司百官より。下萬民に至る迄。我が在位長かれと願ふ事銘々が身の冥加なれば。猶

萬歳を唱へよと高慢我慢の詔。地はつと兩人階下に平伏し。詞我々は申すに及ばず民百姓も野に手を拍つて舞ひ樂む。誠に戸ささぬ御代と申すは今此時に候と。地滅多に追從猩々の。人形に見惚れ官女達。詞コレ〳〵、此猩々が手に持つた。酌盃も取りはづし壺には誠の造酒を湛へた是で御酒宴始めうか。いか樣夫は能い御慰みサア〳〵地早うと取り〳〵に手まづ遮る盃のギンオクリ廻れや。廻れや萬代も盡きじナホス盡せぬ。歡樂の興を催す三重其所へ。詞ものまう賴みませうとどつてう聲。撥鬢頭の大男。御殿間近くぼつか〳〵〳〵。着たる木綿の長袴。糊しやきばつて立ちはだかり。詞エヽ入鹿殿は爰ぢやな。内にならば逢はして下んせと木で鼻くゝるむくつけ詞。宮越荒巻目に角立て。詞ヤア何奴なれば。君の御前とも憚らぬ馬鹿者め退去りをらうときめ付くる。イヤ俺や。難波の浦の鱶七といふ網引でごんすが。何時やらから此方の方へ。宿替してごんしたお公家殿鎌きりの大身から。雇はれて來た使でごんすと地いふを遙に見下す入鹿。ハテ心得ぬ其鎌足めは首陽山の昔を學び跡を隱せしと聞きしに。扨は難波の浦に在りけるよな。普天の下。率土の濱。王地にあらざる所なければ今日迄飢にも臨まず健固にをりしは我が惠ならずや。夫を思はゞ疾にも參り恩を謝すべきの所。使を立てしは緩怠なり。エヽそれおれが知つた事かいの。斯う見た所が。餘程短氣者ぢやわいの併し喧嘩はこなんの樣にこつきで行くのが德ぢや。鎌殿も一旦は言ひがゝりて。てつぱつて見ようと思はれたさうなが叶はぬやら。どうぞ俺に往て挨拶してくれてて。夫は〳〵きつい弱りいの。大概な事ならもう料簡してやらんせ懇な中は得て心安立て。間違がある物ぢやてなう。コレ中直りの印ぢやてて。ます一升おこされたと地刀の提緒にフシぶら〳〵と結びし德利急度目を付け。地未だ日本に渡らぬ兵器唐土にありと聞く飛道具の類なるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。かた〳〵油斷致すなと眉を顰めて。身構へたり。詞エヽとつけもない。とつくりと見やんせ酒ぢや〳〵。コレ其處なお手代衆早うコレそれ進ぜさんせ。イヽヤ善惡しれざる鎌足より差上げし酒ならば。毒藥仕込みあらんもしれず奉る事罷りならぬ。エヽまはすわ〳〵。どれおれが毒味してやろ茶碗はないかえ。そんなら赦さんせ直やりぢやと。地言ひつゝ德利のフシ口から口詞ヲヽよい酒ぢやになあ是を飲まぬといふ事が地あるかしらぬと振つて見て。詞ヤヽヤア南無三。皆飲んでしもた。エヽひよんな事してのけた。ヤコレひ

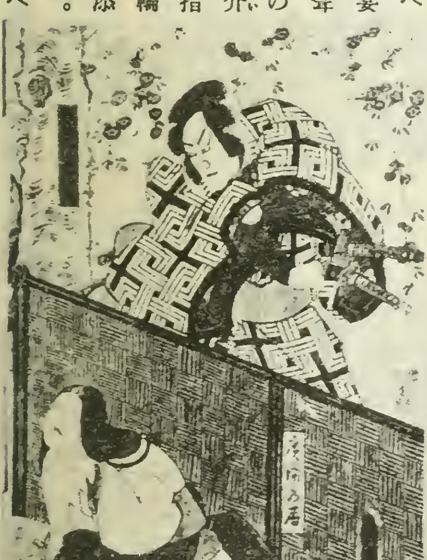
よつと鎌殿に逢はんしよと儘おれが飲んだと云はずに。よう屆いたと禮いうて下んせやと。地我武者な樣でも正直者。フシ眞面目になつて氣の毒顔。詞アヽまだ何やら言傳つて來たが落しはせぬかと懷探し。ヲツトあるわサア是見やんせと一通を。地渡せば彌藤次押し拔き。詞ナニナニ我不肖たるによつて。暫く心を惑はすと雖も。今一天四海御手の內に落入る事正しく天の讓り給ふ萬乘の御位。入鹿公に背くは天に背くと同じと。先非を悔いて爰に降參を乞ふ者なり今より臣下に屬するの印。君の齡を東方朔にたとへ。此桃花酒を以て御壽を祝し奉る。內大臣藤原の鎌足謹んで申すと讀上ぐる。ハヽヽハなまくら者の鎌足め。臣下とならんなんどとは。イヤしら〳〵しき僞り奴。何ぢや鎌殿を嘘つきとは。何ぞ慥な證據がごんすか。ヤア小ざかしき證據呼ばはり。彼が心腹いうて聞かさう。ドレ聞きませうか。先づ此入鹿を東方朔に譬へたるが野心の證跡。そりや又なじよに。ヲヽ昔漢の武帝が代に。東方朔といへる奴。三千年に一度實を作る桃を。三度盜んで喰ひし故。九千年の齡を保つ。桃に百の緣をかたどり。百敷百官を手に入れし入鹿を。盜人なりといはぬばかりの底巧み。憎くい奴と居丈高。イヤ〳〵それや無理ぢや〳〵。ヤア蛆虫め。何を知つて小癪奴。イヤ何にも知らんけど。代りになつて來た俺ぢやによつて一番いふのぢや。ヲヽ鎌足が代りならば。是をも代りに試みよと。地傍なる島臺押取つて眉間へはつしと打付くる。臺は微塵に飛散れどびくとも動かず。詞アヽ好い加減にだゝけさしやれ。其厄拂ひの代物。東方朔とやらに譬へたというて業わかすのか。年にあやからんせとこそ書いておこさしやつたれ。盜人と書いちやないぞや。それに其方から色々な講釋を付けて盜人穿鑿。知つた同士はすゞしいとやらで。盜人の覺えがあるかして今の拔打。アヽこなんは正直な人さんぢやと世間の噂。見ると聞くとで大きな違ひ。マアそんな盜人と鎌どんを。懇には俺がさすまいわいの。仁體にも似合はぬ事さんすの。よもや左樣ぢやあるまいかの。但し覺えがごんすか。イヤ左樣かいのと。地文盲だらけも理窟は理窟。如何でごはると フシやり込むれば。地邪智の入鹿も苦笑ひ。詞ハテロがしこく言ひ曲げしな。うい奴でかした。其褒美には。鎌足が實否を正す迄汝は人質。最早籠中の鳥同然。歸る事はならぬと思へ。ヤア〳〵玄番彌藤次いざ萩殿にて天盃を廻らさん。地來れやつと引連れて フシ帳臺深く入りにけり。詞アヽコレ〳〵おれを質に取らしやると。着物

や道具と違うて。代物が飯喰ふぞや。併しあの業腹では。大抵で喰はしをるまい。ヲヽ。空腹に今の酒でよつ程酔が來たわい。ドリヤ何處でなと一寢入り。やつてこまそとフシ伸上り。詞エヽ腰が重い筈よ此大小。らつしもない物差さしておこして。地あた面倒なと緣板へ。ぐわたりと鳴るは相圖かと。突出す鎗は篠薄。構はず轉り。臂枕不敵なりける。フシ男なり。ハルフシ御所より外へ。咲出でぬ若き御達が入りかはり男。小オクリ見に來る愛想には。お茶よお菓子よ煙草盆。銚子土器持つて出で。詞コレそな人は何御用で。お召寄りありしはしらねど。地無待久しう氣もつきよう。九獻一つとフシ差置けば。地體寢返り腹這に。頰杖つく〳〵打眺め。詞フン貴様達は誰ぢや。ヲヽ。我々は上様の。詞身近く召さるゝ女ども。何ぢや短い女子ぢや。ドレ〳〵。成程どれもこれも能う煮え込んだ者ぢや。わいらは爰な飯炊ぢやな。テモ希有な前垂してゐるな。エヽ地つがもないさればみ事。わしらを問ひやる其方の名は。詞ヲヽ鱶。何鱶とは。ハテ商賣の夜網に出りや。沖でも磯でも行當りに。よう寢る故に鱶七といふ。漁師々々。ヤア料紙とは。何ぞ書いてたもるのか。地それならば必ず繪や歌はいやぢやぞや。今難波津で持囃す。地カヽリ歌舞伎芝居の其中でも。よう聞及んだ文七や。八藏の紋ならばフシ書いて欲しいとしどもなき。地櫻の局摺り寄つて。詞さうして下々は。皆其方の様な男かや。能い男もたんとあるであろ。地地下の女子は羨しい。芝居は見次第好い男は持次第。ほんに又此御所女には何がなる見るも〳〵。冠装束。窮屈で急な逢瀬の其場でも。衣紋の紐よ。上帶よ。解くかほどくか。大抵では下紐迄は手がとゞかずつい其内には花に風。月に叢雲さはりが出來て。本意ない別れをするわいのといふさへ顔にフシ紅葉の局。詞中將や少將あたりで戀すれば。あの緌が邪魔になり。尻目づかひは出來ぬ〳〵。其上悋氣口論も。こつちからは檜扇で。地叩けばあつちは笏でとめ。詞つつぱりかへつていきつたばかり。いらうても見ぬ逆ほこの。雫情も受けて見ず。しんき〳〵で暮そより。地いつその事に玉の緒もたえなばたえたがましであろ。もしもや誘ふ水しもあらば。往にたいわいのと鱶七にフシひしと二人は抱き付く。地恟り敗亡業にやし。詞エヽけたいな街妻奴等。あつちへきり〳〵うせ、あがれと。地權もほろゝに言ひちらされ。詞さつてもすげない戀しらず。玉の盃底ぬけ男。地不骨者よと不興して。フシ本意なく奥へ入りにけり。地四邊見廻し長柄の酒。庭の千草にさら〳〵

と灌ぎ。かくれば忽ちに。葉立變じてフシ枯萎む。詞ハヽヽヽフヽヽ。最前の鎗といひ。又候や此毒酒。ハレヤレきつい用心と。地猶。打見やる庭先へ弓と矢つがひばら〳〵〳〵。追取りかこませ宮越玄蕃。詞いかにしても心得ぬ面魂尋ね問ふべき仔細のあれば。引立て來よとの綸言なるぞ。早く參れヲヽ呼びにごんせいでも行くのぢや。假初にもびこ〳〵と。ちよつとでもさはるかいな。腰骨踏折り疝氣の虫と生別さすぞ。ヤコレ家來どもさんわり様達も其鳥威放すが最期取摑へて首引抜きかたはしからぬたにするぞ。ヤどりやおれから先へ行きやんしよと。地事とも思はぬ大膽者。胸の。强弓矢襖をヲクリ引明けへてこそ入りにける。半太夫されば戀する身ぞつらや出るも入るも。忍ぶ草。露踏分けて橘姫。スヱテすご〳〵歸る對の家の障子にばらり打つ礫。ソリヤ。お歸りの知らせぞと。めい〳〵フシ庭に集ひ下り。地枝折開いて入れ參らせおいとしや〳〵御所のお庭の。内さへもつひにお拾ひなされぬに戀なればこそ徒歩跣。さぞ朝露でお裾もぬれん小桂に。召させかへんと立寄つて。詞ヤアお振袖に付いてある此紅の糸不審と。地手繰りたぐればくる〳〵と糸に寄る身はさゝがにの。雲井の庭へ引かれ來る主はゆかしの。ヤア求馬様か。ハアはつと驚く姫よりも。騷ぎさゞめく局達。扨も見事引寄せた。七年物の戀人様か。能うこそお入り遊ばしたサア〳〵此方へと手を取れば。詞イヤ手前はつい道通り。此緒環を拾ひ上ぐるやいな。滅多に引かれ參つた者。何にも存ぜぬお赦しと。地出づる向うを立塞ぎ。エヽ手の惡いなされ様。わたしらに御遠慮は。内内のお話ならどりや フシお次へと立つて行く。地姫はとかうの詞なく。スヱテ差俯向いて思案の求馬。詞フン此御所の姫とあれば聞くに及ばず。入鹿の妹橘殿と。地言はれてはつと胸せまり入鹿が妹と知り給はゞよもお情はあるまいと。隱し包みし甲斐もなう御存じありしお前こそ。藤原の淡海様と。言ふ口ちやくと袂に覆ひ。詞女なれど敵方に我が名を知れば一大事。不便なれども助け難し。成程お道理御尤も。生きて居る程思ひの種。お手にかゝるがせめての本望かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が殘る。サア〳〵殺して下さんせと。地刄を待つたる覺悟の合掌。詞心底見えた。が誠夫婦となりたくば。一つの功を立てられよ。一つの功を立てよとはえヲヽ入鹿が盗み取つたるこそ。三種の神器の其一つ十握の御劍奪返して渡されなば望の通り二世の契約得心なければ叶はぬ緣。サア是非もなや。惡人にもせよ兄上の。目を掠むるは恩知らず。

地とあつてお望叶へねば夫婦と思ふ義理立たず。恩にも戀は代へられず。戀にも恩は捨てられぬ二つの道にからまれし。此身はいかなる報いぞとスヱテ忍び歎いておはせしが。詞ヲ、左様ぢや。親にもせよ兄にもせよ。我が戀人の爲と言ひ第一は天子の爲。命に掛けて仕舉せませうヲヲ出かされたり。シテ又知らせの相圖は何と。今宵御遊の舞に事寄せ。寶劒奪ひお渡し申さん。笛や鼓の音をしるべ奥の亭迄お忍びあれ。然らば我は此所に暮るるをしばし待合さん必ず首尾よう合點でござんす。が若し見付けられ殺されたら。是が此世のお顔の見納め。地たとへ死んでも夫婦ぢやと。おつしやつて下さりませ。詞ヲ、運命拙く事顯はれ。その場で空しくなるとても。盡未來際かはらぬ夫婦。エ、忝い嬉しやと。地抱きしめたる鴛鴦の。つがひし詞緣の綱オクリ引き。べわかれてぞ忍ばるゝ。ハルフシ迷ひはぐれしかた鶉草の靡くをしるべにて。いきせきお三輪は走り入り。詞エ、此緒環の糸めが。切れくさつたばかりで。道からとんと見失なうた。さりながら爰より外に家はなし。大方此内へはいつたに違ひはない。エ、誰ぞ來よかし。地問ひたやとフシ見遣る先より。お下婢が被眉深にしやな〱と。豆腐箱提げ歩み來る。申し〱と呼びかくれば。ヲツト呑込み早合點。ヲ、お清所尋ぬるのなら。其處をこちらへ斯う廻つて。そつちやの方をあちらへ取り。あちらの方をそちらへ取り。右の方へ入つて。左の方を眞直に。脇目もふらずめつたやたらにずつと行きや。イエ〱。私が尋ぬるのは。お清所とやらではござんせぬ。年の頃は二十三四で。色白にくつきりとした。好い男は參りやせなんだかえ。ヲ、。〱〱來たげな。〱。それはお姫様の戀男ぢやげなの。三輪の里から跡追うて來た所を。何がお局達が引捕へ。有無を言はせず御寢所へ。地ぐつと押込み上から蒲團をかぶせかけ〱ア、〱。宵の中內證の御祝言がある筈と。暮れぬ內から騷いでぢや。エ、けなりこちと迄。內太股がぶき〱とフシ卯月あたりの彈け豆。豆腐の御用が急ぐにと。フシ喋り廻つて出でて行く。詞サア〱。ひよんな事が出來て來た。ほんに〱油斷も隙もなるこつちやない。大それた人の男を盜みくさつて。何ぢやいしこらしい內祝言ぢや。餘りな踏付けやう。よい〱。其代り何處に居ようと尋ね出し。求馬様と手を引いて。是見よがしにいんで退けるが腹いせぢやと。地行かんとせしがイヤ〱。詞はしたない者ぢやと。ひよつと愛想をつかされたら。と言つて此儘に。地見捨てて是が如何去なれう。

エ、如何せうぞと心も空フシ登る階長廊下。地行きかう女中見咎めて一人が留むれば二人立ち。三人四人いつの間に。友呼ぶ千鳥むら／＼と爰かしこから寄りたかり。詞つひ見馴れぬ女子ぢやが。其方はマア誰ぢや。何者ぢや。ハイ／＼イヤ私は内方の。ヲ、それよ。さつきのお清殿は寺友達。奉公に出られてから。久しう逢はぬなつかしさ。ちよつと見舞に寄りましたら。是はマア／＼よう來た。上れ茶々呑め。さうして煙草喫め。アノお上には。あた滅相な。御祝言があると。聞けば聞く程涙がこぼれて。あたお目出度い事ぢやげな。ほんに内方の様な能い業の御祝言は。何の様なものぢやおのれやれ。拜んでなりと腹癒よと。うか／＼爰迄參りました。何卒お前方のお心で。聟様をちよつと。拜ましてもらうたら。添う地ござりまするといふ顔も。フシ恨み色なる紫の。地ゆかりの女と早や悟り。瞞つてやろと目引き袖引き。詞マア／＼其方は仕合な。斯ういふ折に參り合せ。お座敷拜むといふ事は。女の身では手柄者。したが此方が呑込んで。お座敷へ出すものゝ。何ぞさゝずばなるまいに。何と皆様。いつその事此者に。酌取らそではあるまいか。よからう／＼。ア、申し。其酌とやらは。ヲ、何の又其方達が知つてよい物か。今爰で教へてやろ。幸ひ爰に御酒宴の銚子島臺。有り合の聟君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。地殘りは介添待女郎と。櫻の局が指圖して。いやがるお三輪に長柄の銚子持たせ持添へ。詞マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで。左へ二足。コレ立つのぢや。エ、何ぢやいの。うか／＼せずと能う覺や。三度目ついで聟君へ。コレ酒がこぼれるわいなう。不調法な。是からが亂酒謡ひ物。地是も暗なければならぬ。詞サア四海浪なと謡やいの。エ、。エ、とは否か。そんなら聟様拜ます事はマアならぬ。サそれがいやなら早う謡やと。地せつき立てられ是がマア。何と謡千秋萬歳の千箱のナオス地玉



の血の涙スエテ聲詰らせてないじやくり。詞ヲヽめでたう哀れに出來ました。色直しにはんなりと。梅が枝でも蕗組でも。サア／＼聞きたい所望ぢや／＼。エヽ。あられもない事おつしやりませ。山家育ちの藪鶯。地ほう法華經も片言ばかり。上り下りの仇口や。馬士の唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しなされ。詞サ早う共聟様に。サア聟様が見たくば早う謡や。馬士の唄なら面白からう。序に振も立つてしや。否ならこつちもなりませぬ。歸りや 地／＼と引出され。詞サア／＼／＼。何のいやと申しませう。サそんなら謡や。アイ／＼／＼。地謡ひますると泣く／＼もスヱカヽリ涙にしぶる振袖は。ギン鞭よ。手綱よ。上タヽキ立上り。馬士唄 馬士唄竹にサ。雀はナア。品よくとまるナ。とめてサ。とまらぬナ。色の道かいなア、ヨ。詞エヽ、娑な。ほてつ腹めと此様に。地申しまするとフシ打伏せば。地皆々一度に手を打つて。扨もきつい嗜み事。よい慰で我々が。ほてつ腹までよれました馬士殿大儀と言捨てて。行くを驚きコレ申し。わたしも共にと取り縋れど。ふり放されてがはと轉け。寝ながら裾にしがみ付き引摺られて聲を上げ。詞なう皆様お情ない。どうぞ私も御一緒に。連れてござつて下さりませ。地お慈悲／＼と手を合せ拜み廻るを擲きのけ。ヲしつこ。とても及ばぬ戀爭ひ。お姫様と張合ふとは。叶はぬ事ぢ



や置いてたも。地大膽女のしつけをせうと。耳を引くやら脇明けより。手を指入れてこそぐるやら抓りつ擲いつ突倒し。詞サア〳〵是で姫様の。恪氣の名代納つた。彌々めでたい御祝言。三國一ぢや聟を取濟したしやん〳〵。地〳〵と濟んだと打笑ひ フシ局々へ入る跡は。地前後正體泣き倒れ フシ暫し消入り居たりしが。詞エヽ胴慾ぢやわいの〳〵。男は取られ其上に。まだ此樣に恥かゝされ。何と怺へて居られうぞ。思へば〳〵無情男。憎いは此家の女めに。見かへられたが口惜しいと。地袖も袂も喰裂き〳〵。亂れ心の亂れ髮口に喰ひしめ身を顫はせ。詞エヽ妬ましや腹立や。汝おめ〳〵寐ささうかと。地姿心もあら〳〵しくフシ駈行く向うに以前の使者。詞ヲヽ其方も邪魔しに出たのぢやな。もう斯うなつたら誰が出ても。構はぬ〳〵そこ退きやと。地袖すり拔けてかけ入る裾。しつかと踏まへコリヤ待て女。詞イヤ待たぬ。爰放しや〳〵〳〵と身をもがく。地髻摑んで氷の刄。脇腹ぐつと差通せば。うんとのつけに倒れ伏す。地刀拔捨て邊を窺ひ目を配る。奥は豐に音樂のフシ調子も。秋の哀れなる。地お三輪はむつくと起返り。詞さては姫が言付けぢやな。エヽむごたらしい。恨はこちからあるものを。却てそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。ヲヽ殺さば殺せ一念の。生きかはり死にかはり付纒うて此恨。晴さいで置かうか。地思ひ知れやと奥の方。睨め詰めたる眼尻も。叫ぶ聲音もうはがれてさも いま は しきフシ其有樣。地じろりと見やり。詞女悦べ。それでこそ天晴高家の北の方。命捨てたる故により汝が思ふ御方の手柄となり入鹿を亡す術の一つ。ヲヽ出かしたなア。何と賤しい此身を北の方とは。ホヽウ其方が語らひ申せし方は。忝くも中臣の長男淡海公。エヽ。シテ又私が死ぬるのが。いとしいお方の手柄になつて。入鹿を亡す術とはえ。ホヽ、其譯語らんよつく聞け。彼が父たる蘇我の蝦夷。齡傾く頃迄も一子なきを憂へ時の博士に占はせ。白き牝鹿の生血を取り母に與へし其驗。健かなる男子出生。鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と號く。さるによつて。彼奴が心をとらかすには。爪黑の鹿の血汐と。疑着の相ある女の生血是を混じて此笛に灌ぎかけて調ぶる時は。地實に秋鹿の妻戀ふ如く。自然と鹿の性質顯はれ。色音を感じて正體なし。詞其虚を計つて寶劔を過なく奪ひ返さん。鎌足公の御計略。物陰より窺ひ見るに。疑着の相ある汝なれば不便ながら手にかけしと。地件の笛の六穴にたばしる血汐受け灌ぎ〳〵。今こそ揃ふ此幻術。此笛こそは入鹿を挫ぐ火串な

らん。ハヽヽ有難やと押戴き。いさみ立つたる其骨柄。げに藤原の御内にて金輪五郎今國と鍛へに鍛へし フシ忠臣なり。詞なア冥加なや。勿體なや。いかなる緣で賤の女が。左樣したお方と暫しでも。枕かはした身の果報あなたのお爲になる事なら。死んでも嬉しい忝い。地とはいふものの今一變。どうぞお顏が拜みたい。たとへ此世は緣薄くと。未來は添うて給はれと這廻る手に緒環の。此主樣には逢はれぬか。どうぞ尋ねて求馬樣。もう目が見えぬ。なつかしい。戀し地〲といひ死に。思ひの玉の糸切れし。緒環塚と今の世迄鳴響きたる横笛堂の。因緣かくとフシ哀れなり。 今國不便彌增にせめて葬り得させんと。背にお三輪が亡骸を。追々馳來る荒しこども。曲者やらぬと取卷いたり。見向もやらず悠々とオクリ几帳の。綾絹引きちぎり。死骸と共に我が五體

くる〲しつかと引結び。詞死人を取置く我等こそ先づ出來合の坊主役。十念授けてこまさうにも都度々々には邪魔らしや。一度にかためて授けるが。うぬらが爲には百年めいざ來いやつと力士立。詞ヤア廣言なる骨佛と。地前後左右より十文字。鑓先揃へて突出す。詞ひらり早業すつかり素鑓。ほぐれる片鎌踏落せば。後をつく棒しつかと取り。しりへを狙ふは不敵やつ。左樣に甘うはさすまたも引きたくつて打折つたり。手取にせよとどつと寄る當るを幸ひ砂石の如くほり飛ばされ。逃行く奴ばら餘さじと奥ふかくこそ。三重へ行先の。地御殿々々に銀燭を挑ぐる張綾錦紅葉の殿の御簾卷上げ妹姫の今樣を。遊覽せんと入鹿大臣。詞ヤア女ばら。そち達姫が殿へ參り。用意よくば始めよと言ひ來れよ。地早う〲といらたての。フシ使重る樓に。橘姫は今宵

こそ。よき折烏帽子水干のオクリ衣紋も。はでのウタヒ舞の袖。地檜垣の陰より淡海公。弓矢つがうて忍び寄る。目當は入鹿が胸先へ。羽響高く切つて放す。苦もなく摑んで大音聲。詞ヤア宿直はなきか早や參れ。地承ると彌藤次玄蕃。走りかゝつて打ちかくる心得たりと フシ切結ぶ。地姫は寶劍振袖に。押隱す間も阿修羅の如く。樓目がけ駈來る入鹿。支へ隔つる官女ども。はらり〲と投落し。飛びかかつて掻摑む。遁れぬ所と橘姫。寶劍下へ投捨つれば。取得る淡海支へる兩人。フシ打合ひ〲いどみ行く。地見るに。ハア〲我が身も。鷲に捉れし雛鶴の。詮方涙顚ひ聲。詞ヲヽさぞお腹が立ちませう。其お怒をさせますも。皆自らが徒から。地赦して給はれ兄上と。スヱ歎き詫ぶるを。はつたと蹴やり。詞ハヽヽ鉛刀に等しきなまくら物。こと〲しく篩置

きしは。劍を餌に天皇始め。鎌足親子もおびき寄せ塞にする此計略。誠の劍を安々と。きやつら如きに奪はれんや。エエ。スリヤ今の劍は僞りとな。ヲヽ我が帶せしこそ十握の劍。地扨はと立寄る肩先を。拔手も見せず丁ど切る。折から吹出す笛の音に。聞入る入鹿は醉へるが如く。勇氣碎けてかつぱと伏せば。コハリ不思議や劍は拳を離れ。忽ち化したる龍の形。雲にうねり。雨をさそうて舞下り。松の梢をさら〳〵〳〵。ナホスさつと飛入る御溝の水。白浪さわぎどう〳〵とゆすりあふるゝ。フシすさまじさ。地橘姫は手疵も忘れ。守り詰めしが。詞ヲヽそれよ怪しと思ふ心より龍とも蛇とも見ゆれども。正しき十握の御劍ならずやたとへ誠の惡龍なりとも。何か恐れん夫の爲。既にかゝり死ぬるとも厭はぬ〳〵。地再びもとの寶劍と。顯はれ給へと心願し。ひらりと飛込む水煙。逆立つ浪に打立てられ。遙に。流れ〳〵くる江戸枯枝に取付く身は浮草。オクリたゞよひへながら間近く寄れば。金龍頭を振返し。コハリ紅花の舌をひら〳〵〳〵。ひらめく。背鱗を鳴し。浪間を分くれば續いてわけ。潜ればくゞり。沈めば沈み命限りと追廻せば。地又も虚空に立ちのぼる。此方も岸にかけ上れど。叶はぬ思ひ身をあせり足も空なる雲行を目當に。こそは フシ慕ひ行く。地次第に更くる夜嵐に。つれて聞ゆる人馬の音。貝鐘太鼓亂調に フシ打立て〳〵鬨の聲。道具屋官軍隨へ鎌足公。薄紫の狩衣に。肌は腹巻着込を着し玄上太郎御供にて。フシ悠々然と入り給へば。地二人の敵を討止めて立出づる淡海公。金輪五郎詞を揃へ。詞我が君御賢察の如く。入鹿が有様稀代の此笛併し十握の御劍の儀は。ホヲ氣遣致すな最早我が手に入つたるぞよ。其子細は豫てより徒黨を集むるかたらひ山。絶頂によぢ登れば。黒雲俄に覆ひかゝり。一つの金龍我が袖に落つるや否や。十握の御劍と顯はれます。今よりは彼の山を龍が岳と號くべしと。地仰も高き多武の峰此大臣のフシ靈嶺なり。地玄上太郎進み出で。詞ヤア〳〵入鹿。汝是迄朝恩厚く蒙りながら。王位を犯す天罰の。只今歸すると知らざるや。地見參やつと呼ばはつたり。眠り臥したる兩眼を。くわつと見ひらきうなり聲。詞ヤア事々しや鎌足。我に刄向はんなどとは。鷄卵を以て岩石にあたらんとするより危き巧み。地目に物見せてくれんずと遙の樓より フシ飛び下りたり。地玄上太郎金輪五郎双方より引包んで切りかくる。ちつとも怯まぬ勇猛力。弓手になぎ捨て馬手にかなぐり。追立て〳〵追廻し。鎌足目がけ飛びかゝる。騷がず神鏡手にさゝげ。入鹿が頭に

指向け給へば。鏡に映る降魔の相和光のきらめき眼も眩み。勢ひ絶えてたぢ〳〵〳〵。隙を窺ふ勇氣の兩人。腰の番をしつかと組む。シヤ面倒なと兩手に提げ打付け〳〵。膝に引敷き動かせず。鎌足後につつと寄り。神通希代の燒鎌に。水もたまらず搔切つたる。首は其儘虛空に上り。火焰をくわつと吐きかけ〳〵。飛鳥の如く翔け廻る。フシ一念の程ぞ恐ろしき。地淡海きつと見口に唱ふる重獸品。忽ち治る朝敵の。しげきが本を打拂ふ。鎌足の德劒の德。實に譽ある藤原氏。花の紐解く橘姬。誠をてらす神鏡は。神の御影の尊くも。詞思へば伊勢とナホスお三輪が菩提。賤の緒環繰言を。くり返したる言の葉を末に傳へし。物語

第五

地逆徒凶賊直ちに退き。年盡き新に春の空。都を江州志賀に移され。今ぞ長閑けき大內山主上の叡慮安らかに。フシ猶奧深き玉だれや。地中央の座には中臣の內大臣鎌足卿。同じく淡海義士の面々。玄上太郎利綱一子三作諸共に。清涼殿に居並べば。鎌足の大臣は治國の褒祿沙汰ありて。入鹿が妹橘姬親兄に代へ忠義の貞節。豐代姬と名を改め。淡海が宿の妻と我が君の勅諚なり。又大判事清澄は。暫く敵の臣下となり。四海を治むる智謀の勞。詞にも述べがたし向後武官の司とし三作を養子となし。志賀之助清次と名乘るべし。地其外に太宰の後室金輪五郎を始めとし。各々大祿賜りて フシ主上を初め一座の勇み。地かゝる所へ金輪五郎殘黨を搦め取り。凱歌を稱へ入り來れば。故人となりし淸舟雛鳥兩人が追福に。妹脊の山とかはれども。かはらぬ志賀の山櫻供養絕えせぬ花の塚。譽を世々の。香に匂ふ折吉し川波春の風幣帛もて拂ふ國の富。市中屋敷と所せき フシ月の遠近松の半。二月の夕暖かに。坂東南海穀。民は至善平かに オクリ秋に米夏に麥。鱗迄も浮める形。千代の並松洛陽に。文作青き若みどり。惠得の姿滿願の。神は伊勢又春日に八幡。三の惠も鎭常打てばはづさぬ陣太鼓久しき。御代を祝しける

明和八辛卯年
正月廿八日

作者連名

近松半二
松田ばく
榮善平
近松東南
後見 行年七十六歲 三好松洛

攝州合邦辻

座本　豐竹此吉

地住吉の岸の嵐も霞むらん。遠里小野と聯ねしも早や立ち替る霜月下旬。四社明神の鎭火祭和光のかげの瑞籬や。老若男女貴賤の差別なく歩みを。運ぶ神德は。フシ治の御代の印かや。地派手ならず。ハルフシ憎からざりし。執成も。出立榮せし屋敷風。河内の國の一城主。高安殿の奥方玉手御前。後に續いて御代繼俊德君と御親子の。名はありながら年配は廿の上は過ぎざりし。桃李の姿百の媚。あてやかなりし御粧ひ。腰元婢女附々も輕う。ホオクリ出立つ忍びの詣。裾吹返す フシ松風に。留木の薫り媚かし。地外珍らしき腰元ども。詞ホンニ今日は奥様や若殿様のお蔭故。久しぶりで住吉參り。よい男の見飽きは目の正月藪入り取越致しました。ナウ小菊殿。サレバイノ奥様や若殿様に。參り下向が見惚れてもお傍へ寄り付かれず。時々わしらがお尻のあたり。ひり〳〵するは奥様のお腰の廻りのお身代り。地疼さ堪える辛抱もこれも忠義ぢやないかいのと。しどなき話に奥方もフシ笑ひ催し給ひける。地俊德丸は慇懃に。詞屋敷よりは餘程の道母上様にも嘸お疲れ。鎭火祭の神事まで神主方へ御入あり。地暫しが間御休息と。隔てし中も隔なき。フシ孝行深く見えにける。詞ヲヲようこそ心が付きました。例年當社の鎭火祭いつもは殿様御社參なれど。折惡しい御所勞父御の名代そなたの參詣。自らとても我が夫の。武運の祈り御病氣も御全快遊ばすやう。地神に願ひの今日の催し。神樂を奏し神酒頂戴俊德殿にもいさ〳〵と。堅い親子の挨拶も武家の行儀はくどからず。腰元引連れしづ〳〵と。フシ神前さして詣でらる。地鮑魚の肆腥きを知らずとかや。同氣相求むる世の習ひ。高安左衞門通俊の外戚腹。治郎丸とて大前髪あとに引添ふ壺井平馬。惡の腰押す一つ穴狐もいやがる狼武士。浪人めいたる侍引連れ。密事と見えて三人が一つ所に寄り舉り。中にも平馬が差配ばり。詞豫々申上げ置きたる京地の浪人。桟圖書とはこの仁。御詞を下し置かれ然るべからんと。地壺井が詞次郎丸打點頭き。詞フウ噂に聞いたる桟圖書とは共方よな。我高安の惣領とは生れながら外戚腹ゆゑ次男となり。高安の家督は俊德丸と。京都へ願ひの眞最中。地さすれば

我は家來同然。肩身を窄むる無念奇怪。折もあらば家國を押領せんと工む折しも。詞幸ひ父の病中といひこのどさくさに俊德丸ぶち殺すか毒害か。殺してしまふ仕樣は樣々。差詰め家督は次郎丸。心をかけし俊德が許嫁。和泉の國陰山長者が娘淺香姫といふ手入らずも。自然と我が手に入る道理。地何も彼もよい事だらけ。心がかりは家老の主税。高安の繼目の綸旨。病みほうけても親通俊。詞寶藏に納め鎰は腰付。こつちへたくる術は其方。此儀首尾よく仕畢せなば兩人は執權職。地心得たるかと當もなき。水の月取る猿智慧の。フシ早呑込みぞ愚なる。地平馬は猶も圖に乘つて。詞委細の樣子は圖書殿にとつくと牒し合したれば綸旨は追付け御手に入れん。お氣遣ひは御無用御無用。成程貴殿の御意の通り。萬事は拙者に御任せ何彼の手筈を密談せん。

ホヽ出かした〳〵。さりながら。こゝは人立。委細はあれにて主從堅めの盃せん。地兩人續けと次郎丸。欲と惡との三鐵輪オクリ 打連れてこそ フシ急ぎ行く。地草に育てど棲はづれ。賤しからざる小娘の。脊に草籠手に撤。ハルフシ落葉掻くなる松蔭に。其處よ フシ此處よと人待つ風情。地社の方より俊德丸。社家の馳走の醉さまし供をも連れず只一人。出合ひ頭に御姿。一目見るより戀風のぞつとする程美しき。顏に見惚れて取落す。さらへる戀のいろ手本。師匠は波のうかれ舟。フシ岸に寄りたき思ひ也。地若殿も最前より。心は付けど然あらぬ躰。詞誠や古歌にも。小夜更けて。あられ松原住吉の。浦吹く風に千鳥鳴くなり。ハテ面白やと 地獨り言 ハルフシあてやかなりし御風情。地思ひ余つてこなたの娘。いつその事と抱付く。コハ怪しからずと俊德君振放して逃げ行

き給ふ。袂に縋る藤葛やう〳〵と抱き止め。耻しい事ながら。繪にある樣なそのお姿。高安の若殿樣に。在所育ちの不束な私等が。惚れたとは冥加ないやら。勿體ないやら憎い奴ぢやとお蔑視。お呵り受けても大事ない。戀に貴賤の隔は無いとや。たつた一言不便やと仰しやる事も叶はずば。いつそ殺して〳〵と。スヱ縋り淚に暮れ居たる。詞ホヽ迎ひの輿入遲き故。我が心を引き見んとあられぬ賤の其姿。和泉の國陰山の息女淺香姫と。地詞に今更耻しの。洩るゝ我が名をそれぞとは知つて難面い今の仰せ。詞許嫁はありながら。是まで文の取り遣りばかり。地お顏見たさに此姿。もしや殿御の移り氣がありもやするとナホス疑ひは。ハルフシ思ひ過した女の心。この住吉と高砂の松さへ。契る妹脊中。しん〳〵の年月を。思ひやりなきお心と淚はあられ。松原に

時雨ハルフシ降りしく。風情なり。地脊撫で按り俊徳君。我を我と思へばこそ供をも連れずこの有様。心づかひ忘れはせじさりながら。詞折惡しき父の御病氣。嬉しい心は度々の。たに知れどもこれ迄も打過ぎしは右の譯。父上の御病氣も。御全快し給はゞ輿入とても程あるまじ。先づそれ迄は互の辛抱。此方とても思ひは同じ必ず恨み給ふなと。地詞嬉しく淺香姫そのお心を聞く上は。案じる事は無けれども。始めて逢ひ見る今日の首尾。つい此儘に別れとは。辛氣な事やと俊徳の。膝にのゝ字の惣鹿子。おぼこはフシ戀の眞身かや。詞ハテ聞分けない淺香殿。父母よりお免しの婚禮濟まぬ其中は。かうした仕儀を母様のお目にかゝらば互の爲。殊更隔てし中といひ。地未だお年も若ければ踏付けた所爲ぢやと。思召しても孝行立たずと。戀は知つても武家育ち。フシ堅いに困る其中へ。フシカヽリ社の方より白張の。袖も色めく神子姿。目元に張りの鈴振立て。俊徳丸に託宣あり神の移らせ給ふぞと。しづ／＼と分入れば。ハヽヽはつと俊徳君。御託宣とは有難やと。頭を下げて聞き給へば。嚴しげに袖かき合せ。詞よくこそ神樂に神の慮をいさめてくれた。悦びの餘りこの神子に。託して事をフシ告ぐるなり。それ天地開け初めて後。伊弉諾伊弉冊の二柱の御神。天の浮橋のフシ上に立ち。床入さしやんしてより以來。陰陽和合國の大要。何ぼ堅い神々でも。野暮天神も空神も。ハズミこれを。嫌ふ者はないに。詞俊徳丸ばかりは。何故堅いとのフシ御託宣。詞可愛さうに淺香姫が。逢はう／＼を樂みに遙々と此處まで來て。早う嫁入したいとの心願は。よく／＼はずんで居ると思ひ。神の慮にたんと不便な。許嫁あるからは女房に違ひはない。盃したせんには依らぬ程に。何處ぞ其處邊の木蔭でなりと。マア嫁入の内上をしてやつたら宜からうとの御託宣。ア、コレ／＼申し。よも神様が左様な猥は仰有るまい。イヤ／＼疑ふまい／＼。神のいふ事聞かぬと。これからもう守りやせぬぞ／＼。親の許しがないなどとは。今時の息子には似合はぬ。不粹な／＼との御託宣。エ、さりとは姫ももどかしい。何ぼ堅い男でも。女の方からべつたりと仕かけると餘り否がりもせぬものぢや。ツイ袖から袖へ手を入れて。抱付け／＼との御託宣と。地無理に突きやるよい拍子。ひつたり抱付く女夫中。サアしてやつたと悦ぶ神子。彼處の陰より立出るお供に扣へし奴入平。詞さつても嗅があちやつた。明神様の託宣ごかし。お姫様の日來のお願ひ。今こそ叶うて嬉しかろ。オ、こちの人悦ばしやんせ。主

從三人言合したこの趣向。神子殿の裝束借つてあられもない御託宣。ホヽヽヽ。イヤモウこの入平も物陰で最前からの濡事。神子殿の鈴よりも持前のこの鈴に。餘程さんばい仕兼ねたわい。エヽコレそんな事いふ手間で願うてもないこんな首尾。どこぞ靜かな所はないか。お二人ながらやりましたい。そこらを拔つてよいものかい。人影のない奥の天神。地水茶屋の簾の屛風。善は急げぢや御出と。夫婦が差配取り〳〵に勸め。立てたる フシ其所へ。地本社の方より腰元小菊。それと見るより手をつかへ。詞これにお渡り遊ばすか。最前より奥様のそれは〳〵御尋ね。先程神樂も濟みまして。神前の神酒洗米。御頂戴遊ばしませとの御口上でござりますと。地いふうち又も出て來る腰元。詞奥様これへ御出と。地聞いて恟り姫俊德。追付そこへ此場を早う。〳〵と胸の仕方。呑込む入平お樂も倶に放れ難なき淺香姫。御手を取り〳〵フシ急ぎ行く。地腰元どもは心得て松の木蔭に毛氈の。色透き通る玉手御前。神酒を移せし長柄の銚子。鮑の盃携へて。フシしづ〳〵彼所に立出で給ひ。詞神樂首尾よく相濟む上神前の神酒親子一緒頂戴せんため此處まで持參。コリヤ〳〵腰元ども。俊德殿にはこの玉手が。密に咄す用事もあれば。其方達は神主方へ。早う〳〵と フシ人を除け。地後先見廻し膝摺寄せ。詞人影の無いこの松原。神酒といふのは表向。堅苦しい挨拶はマア暫くは止めにして。打解けての酒盛サア〳〵 地一つと件の盃。手酌に注いでついと乾し。差出し給へば。詞これは〳〵いつに勝れし母上の御機嫌。御盃頂戴致さんと。地押戴いてこれは大盞。而も風雅の鮑貝。御酌は憚り銚子はこれへ。イヤ其儘と注ぎかくる。酒はなん〳〵母の命。辭するは慮外と呑乾し給ふ。其手を取つてじつと締め。詞今の盃合點かえ。これは母様何なさるゝ。合點かとは何を合點。ハテ姫御前の方から殿御へさすは妹脊の固め。この松原は取りも直さず。祝言の大嶋臺。尉と姥との友白髮。今更否とはいはれまいと。地聞くよりハツト俊德君。恟りしながらハヽハヽヽ。詞母様の御酒機嫌。あられぬ事をと立上る。地裾を扣へてコレ申し。詞酒にも醉はぬ氣も違はぬ。お前の母君先奥様に宮仕の私。御奉公の始から。地その美しいお姿に。心迷うて明暮に。詞モウ打付けて言出そか。爰と思へど落ちる恐れ。地此身の科は厭はねど可愛しい御身に浮名もと。辛抱するうち情なや。詞奥様もお過ぎなされて後。新奥方にと殿の御意。强つて辭退もお主の權威。背けば館に居る事叶はず。せう事なしの親顏を。

母あしらひの其辛さ。此儘ならば戀煩ひ焦れて死ぬる私が身。不便と思うて給はらば。わりない契りをこれ申し。やいの〳〵と縺れ寄り。篩む糸に戀の框。フシ母の行儀は失せにけり。地俊德丸は呆れはて暫し詞もなかりしが。詞エヽ情なや淺ましや。天魔の魅入か母人樣。血こそ分けね現在の。子に戀慕とは何事ぞ。地聞くもうるさや穢しやと。立退き給へば縋り付き。詞母呼はり聞きとむない。年はお前に一つか二つ。老女房がそれ程いやか。否でも應でも惚れた〳〵。抱かれて寢ねば何時迄も放しはせじと抱き付く。地振放して涙を浮め。詞父への操を背くといひ。此世からなる畜生道。人の誹惡名も思召さぬか母上樣。地何卒お心飜し本心になつて給はれと。諫の詞さまざまに。義理と孝行二筋の フシ涙は清水を諍へり。地こなたは猶も増しくる思ひ。

詞畜生でも大事ない。是非とも夫婦と取縋る。地詮方盡きて俊德丸。突退け〳〵逸散に社の方へ入り給ふ。コレなう待つてと玉手御前。跡追ひ鳥の塒をと。フシ足もしどろに駈行く向うへ。地早や御迎ひの家來ども。詞若旦那には御先へお歸り。奥方樣にもいざ御下向御乘物をと舁き居ゆる。地氣に染まねども是非なくも。詞俊德殿は歸られしか。自らもこれより下向皆供せよと何氣なく。地思ひを隱す乘物は。我が子に戀の道ならぬ。裏門通り高安の フシ館へこそは歸らるゝ。ハルフシはや薄暮の。黄昏時。待てども君の便りなく。主人を誘ひ入平夫婦 フシ元の所へ立歸り。詞エヽ折角仕込んだこの仕組。肝心要の段になつて奥方の御出故。お姫樣のお力落し。ヲヽこちの人の云はんす通り。併しあなたに如才はあるまいが。任せぬ首尾故お歸りあつたか。月に村雲花に風。ヲヽそれ〳〵。宵戎に大雨同然。御輿入も程あるまい。地一先づ館へお歸りと フシ姫を勇むる其所へ。地惡い事には目の光る次郎丸を先に立て。壺井平馬も諸共に淺香姫を奪取らんと。手ぐすね引いて駈來り。詞ノリコリヤ〳〵奴め。其姫には用がある。こつちへ渡しつッ走れ。二言辭ぬかすとぶち殺すと。云はせも立てずゑせ笑ひ。ホヽ終に逢はねど合點合點。許嫁ある御主人に横戀慕する敵役。付け廻しても叶はぬ〳〵。コリヤ入平がお供した。命に掛替あるならば。サア來い〳〵と尻引つからげ フシ身拵へ。地ヤア返答無益と無法の主從。すらりと拔いて切付くる。かい潜つて腕首取り。一締締めて蹴返す早速。後に平馬が段平物。透さぬ入平身を開き腕がらみに眞逆樣砂をかぶつた壺井が弱腰。力に任せ踏付くるを。コリヤさせぬはと次郎丸。締

めに來る手を肘返し。投付けられて兩人は フシ叶はぬ赦せと逃げ失せたり。詞ノリエヽごくにも立たぬがらくたども。さのみ長追ひするに及ばぬ。地イザ〳〵お立ちと入平夫婦。忠義は堅き誕生石。姫の思ひは反橋の。フシ渡りがたなき戀の橋。御輿入を松原の。葉越に見ゆる月代も。冴え渡りたる奴が働き。社の御前で大きな手柄。ハンヤ扨も器量者。和泉の館へ。三重へ歸らるゝ。地物の師と豐に見ゆる人さへも。走る師走の空なれど。フシ長閑に見えし檜皮葺。地河内一國一城主名も高安の館には。國主所勞の其上に俊德丸の大病と。家中の上下ひそ〳〵と臺子に沸る湯にまでも。フシ手を當て心奥書院。地腰元婢女囁き合ひ。詞ナント若菜どう思やる。大殿様はお年といひ御持病の事なれば。案じる程の事はないが。物怪なは若殿様住吉參りの下向から。御病氣と

云うて一間に籠り。大殿様御家老様お醫者様の外はお逢ひなされぬ御大病。どんな様子ぢやそなた知つてか。サイノ御大病〳〵と云ふけれど。三度の御膳も常の通り御食も落ちぬはめんよな事と。御典藥をたらして聞いたりや。御病氣は米俵一俵と二俵ぢやげな。おいとしぼい事ぢやないかいの。ハアそりやマア終に聞かぬ病。米一俵と二俵とは。飯たんと上つて脾胃虚とやらいふものかや。エヽあの人は不粋な人。一俵と二俵は三病ぢやわいの。ヤアそりや大抵の事ぢやない。地あれ程美しい若殿様に。取付く病も多からうに。ひよんな事やと フシ一同に。吐息に交る涙聲。地高安の執權譽田主税が妻の羽曳野。出仕を知らす奥使。腰元どもは通路の鈴。綱引鳴らせば奥の間より。ハルフシ立出で給ふ玉手御前。しとやかに座に着き給へば。羽曳野は手をつかへ。

詞大殿様には先もじより段々に御快氣と。悦ぶ間もなう若殿様の御大病。夫主税が江州多賀の代參も御本復の立願今明日には歸國の積り。大殿様奥方さま。さぞ御辛勞に存じますと。地申上ぐれば玉手御前。詞ヲヽそなたのいやる通り。取分けて案じるは俊德殿の病の容體。夫左衛門様主税之助典藥のほかは病架へ寄せず。病の善惡療治の様子。見聞きもならぬ母が思ひ。地主税之助留守なれば羽曳野は夫の名代。病家へ通つて機嫌を窺や。そなたの心で自らもそつと同道頼むぞやと。包むとすれど埋火の。戀の煩熱 フシ洩れ易き。地色目見て取り苦笑ひ。詞奥様の仰の通り。夫主税之助申されましたは。留守中は名代役。若殿の御病家へ心を付けよとの事なれど。外に御介抱申す人もなく。たつたお一人ござるお寢間へ。深々と參るは世上の聞え。殊に又御器量

よしの俊徳様。夫を持つた女中にも袖褄引いて。あのゝものゝといふお方もあると聞けば。お傍へ行かぬが御奉公。地奥方様はみづ／＼と水の出端の若盛り。マア御遠慮を遊ばすが。よかりさうなもののやうに。わたしは存じられますと。眞綿でしめる首械の。フシ子に戀させぬ利發者。地玉手御前は胸に釘。はつと思へど然あらぬ顔。詞成程いやるは尤もなれど。それは人に依つたもの。我が子の傍へ母が行くにさして遠慮もあるまい事。案内しや。サア病床へ。アヽイエ／＼。鼓口に伯母様とは昔の事。近年は母御でも油斷のならぬ世間の自墮落。ヤア言はして置けば慮外な雜言。主に向うて詞が過ぎるぞ。過ぎても足らいでもお家の爲。歸國する迄大殿と御典藥の外。唯の一人も若殿の御寢所へ寄せなとは夫が言付。河内一國しめくゝりする家老の詞は殿様でも。お立てなさるが國の掟。平たういへば奥様でも。叶ひませぬ成りませぬと。地急度きめたる家老の女房。色香も顔も花薊針はあれども フシしをらしし。地主の權威も理の當然。殊に疵持つ足の裏笹原ならで打騒ぐ。胸撫で下し フシおはする折ふし。詞勅使のお入と 地告ぐる聲。よい立ち機會と奥方は。腰元引連れ入り給へば。いでお知らせと羽曳野も。フシ奥御殿へと急ぎ行く。地勅使は時の傳奏役。高宮中將茂滿卿。疊さはりも荒々しくのつさ。／＼と入來ある。館の主高安左衞門尉通俊。病中ながら衣服改め。出向ふ後に次郎丸壺井平馬も隨ひ出で。主從諸共末座に下り皆々。フシ平伏なし居たる。地勅使は上座に威儀を正し。詞勅諚の趣他の儀ならず。高安左衞門通俊老年の上多病にて。禁廷の在番勤り難く。一子俊德丸へ家督相續の願ひ奏聞に達せし所。天子にも聞召し分けさせられ。悴俊德へ家督勅許ある間。先年通俊家相續の砌。下し置かれし繼目の綸旨を相渡し。勅使に隨ひ俊德丸參内致すべきの條。臣。高宮中將へ宣下の趣斯くの通りと述べにける。左衞門謹んでコハ。有難き勅命。恐悦至極仕る。詞併し悴俊德儀。家督相續願ひの後折惡しき病氣に取合ひ。勅使の御前へも罷出でさる仕合。唯今の參内恐れながら當惑。此上の御惠に。上洛暫く延引の段。何卒勅使のお情にて。地禁廷宜しく御執成偏に願ひ奉ると。頭を疊に摺付くれば。詞ヤア自由らしい願ひ事。家督願ひの奏聞。三十日經つや經たず。病氣でござるの參内は延引のと。一天の君を重祭坊に致すのか。この中將情は知らぬ。執成などとは上を恐れぬ慮外。早早俊德呼出し。繼目の綸旨も相渡せ。一寸も猶豫はさせぬと筋骨 フシ立てて睨め

付くれば。地我が子の難病差當る。難儀にと胸ついたる通俊。次郎丸は脊をつき袖引き。詞コレサ親人。こゝで彼のナ。勅使設に拵へ置かれた。お菓子〳〵と氣を付くれば。地點頭く通俊平馬は高聲。詞お小性衆〳〵。最前の御菓子これへ持參と。地呼はる下より小小姓が。携へ出づる日八分。勅使の フシ前に直し置く。地勅使は猶もふくれ頰。詞女童をたらす樣に。菓子で機嫌を取る追從。其手はくはぬ菓子も食べぬ。第一嫌ひ。望に無い持つて行けと。地突きやる高坏打轉けて。ぐわら〳〵〳〵と溢れるを。見れば家主貞良夕顏ならで山吹散らすフシ小判の光。地恟りしながら氣もそゞろ。眼に佛なく取集め。仁躰崩れし高笑ひ。詞ハ、、、、ヤコレハ〳〵仰山御馳走。さて結構な御菓子哉。第一我等菓子が大好。ハテ心のついたお饗應。ナニ唯今承れば。俊德丸には病氣とな。それは氣の毒。冷える時分隨分と大切に召され。綸旨渡さるれば。少々參內は延引しても。苦しうない〳〵。そこは中將が請合々々。コレ〳〵〳〵左衞門殿。サア〳〵手を上げられい〳〵。餘り慇懃。近頃迷惑仕ると。地金氣で弱る河童公卿。尻口合はぬ。フシ追從輕薄。地通俊少しは安堵の顏色。詞ハテ御用捨の段有難し。織目の綸旨は寶藏より取出し奧の亭にて奉らん。御休息旁あれへ御入り下されかしと。地いふに中將打點頭き。詞如何やうとも〳〵。俊德丸織目の綸旨は參內の上某が。早速申し賜つて相渡さう。先づ〳〵御邊が拜領ありし。織目の綸旨は奧にて受取らん。地案內あれの詞につき。主從三人前後に隨ひ オクリ奧の。へ亭へぞ入りにける。地人なき隙を窺ひて。病の一間をそろ〳〵と。本フシカヽリ忍び出でたる俊德丸。詞賢き身にも佛神の咎か何の報かは。癩病に色黑み。スヱ蛾蠶の眉も凩の。木の葉と。散りて枯々の。御有樣ぞいたはしき。ナホス奧口見廻し暫くは。スヱ淚にむせび。フシ居給ひしが。詞思ひ寄らずも惡病に。苦む我が身は前世の業。地唯悲しきは高安の。家名を穢す殘念さ。嘸父上の御無念と。思ひ廻せば身も世もあられず。生害せんとは思へども。老いたる父に先立つ事不孝の中の隨一と。聞けば死なれぬ我が命。とあつて館にあるならば自然と世上の人も知り。父上ばかりか先祖の耻。詞其上嫡子と立つたる俊德。家督の參內叶はずば朝家の咎覺束なし。元來我に先立ちて。出生ありし次郎丸殿。腹は異れど父の胤。某此家を立退かば家督相續相違もあるまじ。殊更繼母の道ならぬ。戀慕と聞くも穢らはし。早く此家を立退きて。地日本六十餘州を廻り。神社佛閣に歩みを運び。

前世の悪業滅しなば。それぞ誠の罪障懺悔詞思ひ切つたり迷はじと。地立出では出でなから。生れ落ちて一日片時。御傍離れぬ父の顔。名殘に今一度見る事さへ叶はぬフシ事が淺ましや。地これも宿世の業なるか今朝明方に父上の。忍んで病家に來り給ひ。ヤレ。俊德よ必ず歎くな。詞癩病とても百病の數には洩れず。聖人孔子の門人にも。癩疾の賢人あり。いかなる高位高官も遁れぬ病は耻ならず。人は何ともいはゞいへ。我が子の病をうるさしとも。穢らはしとも思ふ親が。三千世界にあるべきか。もしや若氣に恥辱と思ひ。短氣な心も出ようかと。案じて老の目も合はずと。地勿體なきお慈悲の詞。身にしみ〳〵と其時の。お顔が此世の見納めかと。聲もえ立てずかきくれてノルフシむせび。歎かせ給ひしが。ハルフシ漸う心。押鎮め。詞人目にかゝらば止められ。詮なき事となりやせん。地せめては父へ一筆の。お暇乞と泣く〳〵も。違棚の料紙硯。蓋は明けても塞りし。胸の思ひをフシ書き殘す。フシハル折柄奥は勅使の饗應。調べる琴の音もさえて。歌三下り寄邊定めぬうたかたのいつそ泡とも消えはせで浮かれさまよふ身の行方。ナホス地我が身は一所不住となれば。もしや野の末山奥にて死したりとお聞きあるとも。構へて〳〵逆様な御回向あつては彌〻増す罪。詞不便と思召すならば。打捨て置かれて下さりませ。三下り歌青葉々々と呼べども嶺の嶺の松風音ばかり松風嶺の嶺の松風音ばかりの便りもがなと託ち歎くぞ哀れなり。ナホス地歌の唱歌もひし〳〵と身につまされて。せきかくる涙。フシカカリ押へてしを〳〵と。立出で給ふ後より様子は聞いた俊德様。是程まで戀ひ憧るゝ私を捨てて胴欲な。虎臥す野邊の果迄も連れて行つて下さんせと取付き縋る玉手御前。あらうるさやと身を震はし。詞今更くどう申すに及ばず。母の身として子に戀慕。年月の御介抱御恩も慈悲も皆徒事。愛想盡きたる御心底。此世の對面是限りと。地振放しても放さばこそ。詞マア〳〵待つて下さんせ。日外もいふ通り。私は先の奥様に使はれた腰元。親でもない子でもない。何所までも付纏ひ。地女夫にならにや生きては居ぬと。猶も放れぬ煩惱の犬ともなれ。鷹ともなれ。放ちはやらじとくる〳〵〳〵。追廻り追廻れば。詞子の身として母上を手籠も是非なき此場の仕儀。赦させ給へと立寄つて。地通路の鈴の綱引寄せ。拳を合してしつかと括り。見返りもせず裏門口ハズミ行方知らず。フシなり給ふ。地斯くとは知らず羽曳野は。出合ひ頭に。詞ヤアこりやどうぢや。奥様を誰が縛つたと。地

驚きながら駈寄つて。解く縛コレ羽曳野。詞俊德丸は世を見限り此一通を残し置き。家出とありしをとゞめた自ら縛つて置いて裏門から。エ、斯ういふ中も氣遣ひと。地駈出し給ふをしつかと捕へ。詞イヤモ。悔りも餘りきつい。虫が居つて何ともない。シタガ若殿の追手には。お前はちつと遣り難いと。地引摺り戻し聲張上げ。詞大殿様はじめ家中の面々。一大事あり早う〳〵の。地聲に驚く通俊公。次郎丸は平馬を引連れ。家中の諸士も一同に駈付け〳〵其の様子。聞いて皆々顔見合せ呆れ。果てたるばかりなり。地羽曳野は涙の隙。これが則ち御書置と。差出せば通俊公。詞悴が國遠。殘念の涙にはあらねども。老眼なれば字性も朧。それにて讀めと地身を背け涙を隠す武士の。ｽｴ表を立てる。痛はしさ。地羽曳野一通押披き書き殘しゝ一通。一ツ適々人界に生を請くるさへ廣大無邊の善果なるに。高安の嫡子と生れ何くらからぬ其上に。父母の御いつくしみ喜見城の樂みもこれに上越すべきとは存じ候はねど。計らざる身の業病。人中の交りも叶ひ難く。家の恥父の御恥辱と存じ候へば。身の御暇を賜はり佛神に一身を抛ち候はゞ。せめて惡業も滅し快氣の時節も候はんと御名殘惜しき父上を振捨て。唯今國遠仕り候。次郎丸殿御事は。外戚腹とは申しながら惣領に極り候へば。家督相續賴み入り候。次郎丸殿主税之助其他の一家中。彌々忠勤怠りなく父上の輔佐肝要に候。地以上は讀まず羽曳野はわつとばかりに伏し沈めば。通俊公は。唾を呑込み瞬しげくおはします。心に笑を含みながら人前つくる次郎丸。咽ぎく〳〵と。ないじやくり。詞エ、聞えぬぞや俊德殿。某を家督とは。この家國をしてやらうと。望をかける次郎丸と。思はつしやるか恥しや。親人や。俊德殿へ言譯には。地切腹と差添に手を掛くれば。ヤレ御短慮と平馬は押止め。詞俊德様への義理ばかりでお命を捨てられては。御家督の御男子なく。父君への不孝ばかりか。眼前にお家の斷絶。忠心篤きこの平馬が。諫言を聞き入れられ。地生害とゞまり下されかし。詞某とてもかはらぬ歎き。俊德様の御出奔。是非なき事とは申しながら。お痛はしや無慚やと。地出もせぬ涙に目をこすれば。詞ヘエ、死ぬるも死なれぬ我が命。平馬推量してくれと。地主從手に手を取りかはし只。ワア。〳〵とどつて う聲。氣ばつて見ても出ぬ涙。旱魃の空に鳴り渡る。空雷の。フシ如くなり。地耳にもかけず羽曳野突立ち。詞ヤア〳〵家中の面々。折惡しき夫の他行。慮外なら自らが下知に隨ひ方々は。若殿の御行

方手分して詮議あれ。地妾も倶にと駈出すを。ヤレ侍て暫しと通俊公。詞俊徳が業病も。過去遠々の報と思へば。假令家出に及ばずとも。往來しげき街に捨て。前世の罪を償はんと豫てより我が存念。某が詞も待たず。國遠せしは遉にも。通俊が子にて地ありけるぞや天晴健氣の俊徳丸。さしも孝ある身の上に類少き難病は。何の因果ぞ恨めしや。其儘に打捨て置く父難面しと恨むるな。例は恐れある事ながら。延喜帝第四の皇子。蝉丸の宮も雖病故逢坂山に捨てしぞよ。唯何事も定り事薄き親子の緣ぞと諦め。悔むな俊德。我も歎かじ歎かぬと。潔くは宣へど親子一世の憂き別れと。目にもる涙。はら／＼／＼。お道理樣やと羽曳野が貰ひ涙に奥方も フシ倶に袂を絞らるゝ。地始終を聞いて高安中將。奥の間より搖ぎ出で。詞織目の綸旨は受取つたれど。家出した俊徳丸。殊に難治の癩病人。再び此家へ歸つても家督などとは思ひも寄らず。というて一旦奏聞に及んだる家の繼目。べん／＼と打捨て置かば高安の家は滅却。差詰家督は二男の役。次郎丸を急いで參內。心得されしか通俊と。地聞くより平馬しや／＼り出で。詞ハヽ、御尤なる勅使のお指圖。サア我が君お請と。地勸める先折り。詞假にも一國一城の御跡目。輕はづみにお受とは底意の知れぬ平馬殿。夫主税之助は家老職。其家老の留守の間に。御家督定はわしがさせぬ。アイこの羽曳野が呑込まぬ。御二男の出頭でも陪臣同然。餘り出過ぎる。すつこんで居やしやれと。地齒に衣きせぬ理窟詰。平馬はひよんな高上りぶつとも得 フシいはず眞面目顏。地次郎丸眼をいからし。詞ヤア出過ぎるとはそちが事。某を家督とは否應ならぬ勅使の御諚。それでも見事支へるか。ホヽヽヽヲヽ家國に望はない。言譯には切腹と。さつきの詞の裏が來て。こりや急に家國が。欲しうなつたか御二男樣と。地あぢな所を押へられこれも。フシ同じく閉口す。詞ヤア勅使の前とも憚らず。我々の論談慮外至極。サア通俊返答何と。地何ととせり立てられて兩手をつき。詞次郎丸家督の願ひは。家老主税之助歸國次第。すぐさま上洛致さすべし。先づ御勅使には御歸洛近頃御苦勞千萬と。地お受の返答落着く中將。さらばと言捨て出でらるれば。御見送りと次郎丸平馬も倶に立出れば。奥方羽曳野引連れて通俊公は奥御殿。家中の諸士も一同に部屋々々。フシカヽリにこそ入りにけり。二上リサヘリ既に。其日も暮近く。寒さを送る北風に。つれて降りくる白雪は。音せでいつか木々の葉も。庭も軒端も白妙に。飛石隱す ナホスフシ庭の面。地雪踏

分ける駒下駄も。晉せじものと傘に姿隱して羽曳野が。窺ひ居るとも フシ白書院。ハルフシ緣側傳ひ。忍び足。心もしめる高からげ。路金の用意帛紗物。心せはしく肌に付け庭へ。ひらりと下り立つて。地駈行く先にすつくと羽曳野。詞奥樣何所へと聲かけられ。地思はずハツト飛退いて。フシ膝もわな／＼震ひ聲。地臆する胸をじつと据ゑ。詞何處へ行かうと。自らが身は自ら次第。サアそこ退いて通した／＼。イヽヤならぬ。路金の用意は俊德樣の。跡を慕うて行く氣ぢやな。エヽ人でなし女畜生。血は分けいでも俊德樣は子ぢやないか。母親の身で子に惚れて後の後まで付廻す。其根性を見限つて若殿の出奔も。三分はこなたの戀慕から。主ある身で不義いたづら。そんな人を今日まで。お主樣の奥さまのと云うてやつたがむやくしい。先御前樣に使はれた腰元のお辻殿。大殿に引上げられ。新奥方と俄立身。榮耀が餘つて年寄がいやになり。若い同士の若殿に濡れかける水鼬。猫といふか犬といふか。エヽ顏を見るも胸が燃えると。地胸の有りたけたくしかけ フシかぞへ立てたる憎て口。詞ヲヽ口のある役。腹存分いひたくばいや聞きたうない。さすが賤しい家來の女房。曲り曲つた性根にくらべ。向う見ずの出放題。後悔は先に立たず。必ず跡で手をするなよ。ハヽヽヽ。家來呼はり聞きにくい。成上りの奥樣と素性くらべがして見たいわいの。そんな穢らはしい根性でも。まだ主顏の權づけに。邪魔させまいと思やつても。金輪際動かしやせぬ。サア／＼後へ戻つた／＼。フウ。スリヤ實正そちが邪魔するな。ヲヽ。邪魔する／＼。すんとする。ヲヽ妨すれば一討と。地丁ど受けたる傘の。骨を碎きし互の手練。雪は猶しも降りかゝり。凍える手先傘も。拔身も倶に取落し。一度に摑む髻髮。髢解けて亂髮亂心か白妙の雪を蹴立てて。へ挑みしが。地拾ひ上げた。傘の柄に。羽曳野が鎔を一當。うんとのつけに倒るる隙。玉手御前は飛立つ嬉しさ足を。フシはかりに走り行く。地若殿の國遠と聞くより宙を翔けるが如く。立歸る主税之助。詞エヽ遲い遲い主税殿。都から勅使が來て。織目の綸旨も請取つて御二男を御家督と。無理無體のあたまべし。俊德樣は御出奔推量の通り織母の横戀慕。跡を慕うてたつた今。サア／＼早う追つかけてと。地聞いて驚く主税之助。詞若殿織母は追つての事。合點のゆかぬ其勅使。追付いて一詮議。地何より大事は殿の身の上。急度守護なし奉れと。言捨てて又韋駄天走り跡を。慕うて。三重へ追つて行く。地山坂嶮岨

の龍田越。勅使は乗物立てさせて。フシ供廻り遠ざくれば。地次郎丸主從は目ばかり出した黒装束。木蔭より立出でて。詞ヤレ〳〵圖書大儀々々。首尾よう行たも其方が働き。某が代とならば一廉に取立つるぞ。ヲヽ其段は平馬が請合。此上邪魔なは主税之助。彼奴を仕舞うて取る談合。イヤそこの所は氣遣ひなされな。折を見合せ忍び入り。圖書が手にかけ誑討。そつちも隨分ぬかりなう。氣取られぬが肝要々々。奪ひ取つたこの綸旨。地お渡し申すと差出せば。詞イヤ〳〵家老主税は大抵の奴でなければ。こつちに置くは浮雲物。氣の付かぬ汝が方に暫く預ける大事にせよ。家督の願ひ延引せば。大儀ながら又勅使。ヤ人の見ぬうち早歸らう。成程萬事は後日の密談。地いかにも左様と主從はフシ山路踏分け立歸る。地圖書は呼出す供廻り皆それ〳〵に雇ひ

賃。算用半がしこより。息をはかりに駈來る主税。南無三寶と以前の如く行列揃へる間もなく。待つた〳〵勅使待つた詮議があると。鍔打叩き仁王立ちに突立つたり。詞ヤア勅使に立つたる高宮中將。何奴なれば詮議呼はり。慮外の雜言退り居らうと。地きめ付けてもびくともせず。詞誰とは愚高安の執權。譽田主税之助といふ見通し法印。なんぼ勅使の乾の卦で離坤兌さうに罵つても。こつちが先へ坎の卦繰り。心から底から見拔いた贋公家。地意地ばつて白状ひろげば助けて呉れる。冠り引拔かるゝは巽の卦で。艮せうぞや。フシとひやうまづく。地鍔際迄もひるまぬ圖書。ヤア詞贋公家とは何を證據。勅使に双向ふ違勅の科。主左衛門が身の上迄後日の咎覺悟せよと。地おどしかけても嘲り笑ひ。詞ハアテ盗人たけ〴〵しい。江州多賀へ參詣とは嘘の皮。此間上京し

て傳奏高宮中將様に。對面して來た主税に向ひ。又高宮とは似せ晒。無頼者の化顯はし。頼人があらう白状せいと。地睨付ければむくりをにやし。詞エヽ失策つたか殘念〳〵。腹癒せには繼目の綸旨寸々に引裂くわと。地懐中より取出せば。詞破りなりと喰ひなりと汝が腹に入つた様。誠の綸旨は中將様へ。とうに差上げ置いたわやい。南無三これも失策つた。エヽ忌々しいと投付ける。地綸旨を取つて押戴き。詞やつぱり是が誠の御綸旨。中將様に逢うたも嘘。一ぱいならず二盃まで。テモ大喰ひと嘲弄せられ。地無念と引拔き切りかくる。引外してどうど投付け。脊骨も挫げと。フシ踏へる鐵脚。詞サアうぬら手向ひひろがぬか。主を助けて見る氣はないか。アヽ何の〳〵勿體ない。私共は貳百宛で雇はれた雲助共。そのわろが難儀せうが微塵も構ござなくい。御

苦労ながら迚もの事。粉になられる程とつくりと。地踏んで進ぜてやらしやつて。下さりませと頼み置き。皆散り〴〵になりにけり。地サア是からが一味の詮議と。引立て見ればぐにや〳〵〳〵。詞これは扨。さしてむごうもせなんだが。つい寂滅ひろいださうな。ハテ残念と死骸を谷底。地投げやる向うへばら〳〵と。皆一様の頬かぶり頬を隠せし組子ども。抜きつれ〳〵切つてかゝる。詞ホヽヽ、拍子抜けのした所へ。ようこそ〳〵御出と。地諸手をひろげ鷲掴取つて投げ〳〵。童遊びの印地打ばらり〳〵と。三重へ人礫敵はじとや思ひけんフシ一度に逃げて行方なし。地先づは御綸旨奪返し。心落着く此上は。館にまします御主人大事。お家を窺ふ悪人輩。詮議仕出して一々捻首。國遠ありし若殿の。お行方尋ね誘ひ歸り。何卒本復。なし奉り。主君の家國長久と。神に祈るややつ此この。譽田が勇猛山を抜く主税之助と號けしも。理あり忠義あり。譽ありける武士と感ぜぬ。者こそなかりける

下の巻

地一千餘回の法の花始めてこゝに咲き匂ふ。上宮太子の救世の恩末世の衆生の御誓に。洩れず詣でる貴賤都鄙殊更衣更着時正の日。參詣群集は佛法の。フシ繁昌の世と知られけり。地俊徳丸の許嫁淺香姫の中間入平。女房お樂も諸共に旅の草鞋脚絆がけ。南門の石段を假のフシ床几と立ち休らひ。詞何と見さしやんせこちの人。夥しい參りの人。御繁昌な事ぢやごさんせぬか。ヲヽ其筈々々。常さへ尊む天王寺。殊に今日は彼岸の中日。他國からも皆參れば。凄しい筈の事。ほんになア身の上に取紛れ。其心が付かなんだ。が道くだりも群集の中。色々に尋ねてもお姫様には得逢はず。まして俊徳様らしいお方さへ見當らず。辛氣なことぢやないかいな。サレバ〳〵。許嫁の俊徳丸。難病故に國遠ありしと。お聞きありお姫様も又家出。必定戀君の御行方。尋ね給ふと思ふ故こちら夫婦も跡を慕ひ。人立多い所々方々。尋ね廻れど雲を闇。ほつと鍬をぬかした〳〵。サアしんどいと言うて斯うして居ては。いつ迄も知れもせまい。ちつと又參りの衆に。尋ねても見たがよいと。地いふ中むら〳〵一連の。下向を見かけ小腰を屈め。詞卒爾な尋ね事ながら。十五六な氣だかい息女。色白く鼻筋通り。二皮目にて髪の艶。眞黒繻子の大振袖。又一人は十七八。ちと申しにくいが癩病人。一緒にか別々にか。其程は存ぜねど。もし御覧なされずやと。地尋ねかくれば。詞ヤ何といはしやる。美

しい娘と癩病人と。テモ木に竹といはうか。鐵棒に心天を。總合した尋者。エ、聞えた。コリヤ風雅な娘御で。茶めかした心中ぢやの。娘は何ぼも見たけれど。顏ばつかり見て居る故。振袖やら黑襦子やら。一向對面仕らぬ。シタガ今椎寺の門の内で。子供が大勢手を叩いて。弱法師〳〵と囃すを見れば。目も見えぬ癩病人。邊りの人の咄には。元はよしある人の子なれど。どうでも過去で惡い事。した報ぢやといふ評判。俄盲でよぼ〳〵よろ〳〵弱法師。もう見ずとおかつしやれ。いぢらしい者穢い物と。地口々しやべりそこ〳〵に。フシ敎へてこそは行過ぐる。地夫婦は顏を見合して。疑ひもない俊德樣。さうでござんすこちの人。サア來い女房。ござんせと。夫婦は競ひ勇み立ち オクリ椎寺 へさして走り行く。道が違うて。其跡へ。[illegible]いたはしや俊德丸。

思ひがけなき難病に。父の館を脫出でて。國境より方々と。迷ひ歩きて ナホスやう〳〵と。この里人の情にて埴生の小家に竹の杖。足も。痛げによろ〳〵と宿りに。フシとぼ〳〵歸られしが。地杖を力に立ち休らひ。前世の戒業拙くてかゝる難病盲目の。身と成果てしは過去の業因。歎くは愚痴の凡心と諦めながら慈父の恩。おくらで朽ちん殘念さよ。さりながら常々深き御慈愛。殊に寄る年弱る御身。嘸や跡にて御歎き。思ひやる程不孝の罪。又一つには淺香姫かゝる樣子を聞くならば。さこそ歎かん不便やな。詞鴛鴦の衾に立去る悲しみ。比目の枕に波の愁。地況や人間有爲の身の。妹脊の緣も消えがての。雪とも花とも見えわかぬ。此世からなる闇路の闇。かの一行の花羅の旅闇穴道の苦みも。斯くやとばかり身にしみぐ〳〵 フシ不覺の。涙にくれけるが。地折ふし。さつと春風の。ハルフシすげなく誘ふ梅の花 ハズミ袖や。袂に フシ散りかゝれば。詞ハ、異ならぬ梅の薰。色こそ見えね香やは隱るゝ。飛花落葉は悟道の緣。素より神にも佛にも。憎まれ果てし病の身。出離の紲は煩惱道。切らではいつか佛意に至らん。思ひ出すまじ。地思はじと小屋の菰垂そこ爰と フシ探り。廻つて入り給ふ。地跡へえいさら〳〵えい。地獄の沙汰も錢次第。閻魔の御頂地車に。乘せて勸化の道心者。參り下向をあてにして。詞西門石の鳥居脇に建立の閻魔王。一錢二錢の多少によらずお志はござりませぬかな。〳〵。たつた一文か二文で。閻魔樣に近付になつて置くは德なもの。死にしなのよい心便り。奉加。地奉加といきせい張り。喋る間に往來の大勢。詞時々廻る閻魔の建立。彼岸をあてに此處へわせたの。ア、したが惡い合點。當極樂土

とあるからは。この天王寺は直に極樂。閻魔がわせては大きな差合。コリヤ門違ぢやあるまいか。ハテお前方は悪い呑込。アノ芝居を見やしやませ。實方があれば敵役もある。鬼があればこそ佛もある。畢竟地獄は極樂の出店。其出店の番頭はこのわろ。番頭の氣に入つて置かずば。本家の極樂へ何と出入はなるまいがの。成程理窟ぢや。そんなら奉加に付く程に。いつもの様に惡身の教化が見たい〳〵。おつとそれは心得たが。跡で奉加をいじむぢと。云はしはせぬと尻輕に。地撞木おつ取り聲作り。詞惣じて今の人心。祭文二上り彌陀や。藥師や觀音地藏。佛ばかりを頼むのは片手打ちなる信心者。折には鬼や倶生神。閻魔王をば信心なされ。奉加にたんと付く人は少々悪い事をして。地獄へ落ちてもあつちに近付。そこらは譬の金次第。ナホス詞無間の釜で酒の燗。

焦熱地獄で肴を焼き。三途川の船遊山。劒の山行なんどとて極樂浄土の樂みよりやつとましなる遊びあり。さすれば地獄極樂は元來一つ世帯なり。善惡邪正不二といふ。佛の教はコレ。〳〵。この天王寺。地八宗九宗とせり合へど解ければ同じ谷川の。三水四石は フシ未來の導き。後生願への種にとて朝題目に宵念佛。三下り歌寺々の鐘の音寒き霜夜は三界無庵の。諸國走り廻り。後生願はゞなどか佛にならざらん。方々よ此世は僅假の浮世にたもだ。〳〵蓮華經を唱ふべし。いふにや及ばず安き間の事なれば。元來は無實なもだ。〳〵と申さうずるには。餘念涙もをかしけれ。夜半夜念佛はそりや誰が爲ぞ。添はで別れしヤレ親の爲。鉦を叩いて佛にならば。鍛冶屋若い衆はヤレ皆佛。アレハサ。これはサ。踊出せ振出せしやんと振出せ。合今は念佛も空吹く

風よ。かいて貰はう 腥坊主念佛無間。ヲヽ。こゝな修業者は念佛が剝けたか剝けんかいつ見たぞヲヽ。佛も衆生も隔はあらじ。六拍子揃へて我が身を見れば。〳〵。さながら四季の〳〵。物狂ひよの。〳〵。一夜明けて〳〵。否でもござらぬ其折には。しげる松山の物狂ひ。今は心も亂れ〳〵〳〵〳〵てヤツチカサ。こつちかさ。ソツチカこつちかソツチカサ。さつさ龍田の花紅葉。ナホス地よいよ〳〵と諸見物三錢五錢先番後番。奉加の錢のばら〳〵と。フシ笑ひちらして別れ行く。地跡にとぼんと道心合邦。詞ア、よい年からげて飛んづ跳ねつ。これも佛の衆生濟度。謳ふも舞ふも法の聲。體も糊と草臥れた。一睡やつて又奉加。暫く閻魔の相住と。地車の上にヤツころり跡は フシ鼾の肘枕。詞一昼出入の。月を見されば明暮の。夜の境を。得ぞ知らぬ。ナホス地早や

夕暮も近付かん今日ぞ彼岸の日相觀。目は見えずとも拜せんと。本フシカヽリ小家の菰垂押上げて。西に向ひて音をぞなく。心を阿字の門に入り。合掌してぞおはします。ハルフシ夫故思ひ淺からぬ。淺香姫は俊德の。長地御身の上を聞くよりも有るに有られず和泉路を浮かれ出でつゝ御行方。尋ね迷ふもいつ迄か。フシ万代が池に辿り着き。地戀しき人はそこにとも知らぬはかはる俤の。顏もけやけき惡瘡の。臭氣いかゞと袖覆ひ。詞コレそこな乞食殿ちと物が尋ねたい。河内の國高安殿の御世繼。俊德樣といふ美しいお若衆樣。そもじの樣な病にて館の内を拔け出で給ひ。此國の内に迷ひおはすといふ噂。地もし知つてなら敎へてと。尋ぬる聲は淺香姫。ヤレなつかしやと云はんとせしが待て暫し。我が妻ながら耻かしや斯く見苦しき姿にて。それと名乘るも面伏。僞つて歸さんと思へど殘る輪廻心。世になき我を斯程まで慕ひ尋ぬる志。嬉しいとも。可愛いとも。いはん方なきはら〳〵涙。フシ襤褸の袖を絞らるゝ。地姫は不思議と見廻し〳〵。尋ぬる事は答へもせず泣いてばつかりござるのは。もしやお前が俊德樣かさうならさうと名乘つてたべ。我こそ妻の淺香姫と。立寄り給へば身を背け。詞歎きの體に其人かと御不審は道理ながら。お尋の人に付き。哀れ果敢なき事ある故。地思はず落涙致せしとフシ餘所にもてなしましませば。地詞の端を聞咎め。詞尋ぬる人の身の上に。はかない事とはどうした譯。地早う語つて聞かしてと。氣をせき給へば俊德丸。詞さればお尋の俊德丸。去ぬる頃迄此所に。我も同じ病人故。朝夕伴ひ暮せしが。身の業病に世を見限り。我にも知らせず過ぎつる夜。この万代の池水に。身を投げ空しくなられしと。地聞くより姫はハアはつと。心は闇と呉服鳥あやも涙に正體なく。ナニ我が夫はアノ池に。沈んで世を去り給ふとや獨り先立ち自らに。物思へとや曲もなや。コハそも夢か現かと。ノルフシ伏し轉。びてぞ歎きしが。地漸うに起上り。二世とかはせし戀人に別れて存生へ何樂しみ。同じ藻屑と身を沈め未來は一蓮托生と。邊りの小石見まつめて帶や袂に拾ひ入れ。池の汀に駈け行くを探り廻つて俊德丸。振の袂をしつかと取り。詞コハ逸興なり先づ暫く。死んでは亡者の爲ならずと。地引留め給へばイヤ〳〵。詞いとしい夫を冥途の旅。一人はやらじ追付かんと。地振切る袖を猶引留め。詞ヲヽ貞心の程尤も至極。今は何をか包むべき。俊德丸入水とは僞り。未だ此世におはするぞ。先づ〳〵最期を留られよと。地いへども姫は聞入れず。

イヽヤ自らを助けうとて僞りの間に合ひ口。詞イヤ〳〵天地も照覽あれ。露ばかりも虛言ならず。フウ地そんなら何所に我が夫が。詞ヲヽ五日以前の曉方。滅罪の爲三十三所。順禮の旅立ありしが。申置かれし事とては病身といひ長の旅。何處いかなる所にて身を終らんも計り難し。もし我が妻と名乘る者尋ね來る事あらば。身を万代が池水に沈んで死せしと傳へてたべ。地咲出すも花散るも花いづれか此世に殘るべき。來世は半座の臺を分け長き契りは替るまじ。御身は未だ二八の齡。いかなる人にも身を任せ末の榮を待ち給へ。必ず恨と思はじと傳へくれとの遺言ぞや。早々故鄕へ立歸り。命全う生存へ。思ひ出する折々は亡き俊德の後世菩提。弔ひ進ぜさつしやるが。誠貞女の操ぞと餘所〳〵しくは云ひながら。切なる姫の心底を。思ひやる程胸迫り。溢るゝ涙を隱さんとしを〳〵立つて小屋の内。フシ心殘して入り給ふ。地姫は猶しも泣き焦れ。いかなる人にも身を任せ末の榮を樂めとは。二人の夫を持ちさうな自らぢやと疑うてか。過ぎし逢瀨の豫言は。皆僞りとの事かいな。難面いわいなとばかりにて フシ恨涙ぞ遣瀨なき。地境内殘らず尋ね盡し是非なく戻る入平夫婦。ヤアお姫様かと走り寄り。何故こゝに御愁歎。先づ御安泰嬉しやと。脊撫で摩り介抱す。地姫は涙の聲振上げ。詞夫の行方の覺束なさ。そなた衆に様子も云はず。國を拔出で此處彼處。尋ね廻つてアノ小屋の。癩病の盲人に夫の行方尋ねしに。五日前迄此所にましませしが。西國三十三所の觀世音。順禮のため行方ならおなりなされた悲しい咄。地今そなた衆に逢うたのは悲しい中にせめての悦び。こゝから直に自も夫の跡追ひ倶に巡禮。サア連れて行てたも早う往こと フシ小褄からげて氣をせき給へば。地入平は最前の噂といひ小家の乞食。合點行かずと姫女房。傍に招き囁き合ひ。小屋に立寄り聲咳き。詞フウ何と仰しやる。スリヤ俊德様には順禮とな。然らば片時も道を急ぎ。先づ熊野路へ御供せん。地サア〳〵お出でと三人はわざと足音どし〳〵〳〵。遙に行過ぎ又そつと。差足拔足立戻り。フシ小陰に窺ひ聞くぞとも。地知らぬ瞽の悲しさは。思はず小屋を轉び出で。姫の行方はそなたぞと。目は見えねども打守り暫し涙に。フシ暮れ給ひ。地思ひ切つても凡夫心戀しゆかしと思ひ妻。名乘らで歸せし殘念は。そちの思ひの百倍ぞや。必ず恨みそ淺香姫。さりながら斯ばかり世に淺ましき我が姿。それと名乘るも恥かしく。詞一つには繼母の戀慕。某が跡を慕ひ。國遠ありし噂を聞けば。もしもや外

へ洩れ聞え。俊德此處にと知り給はゞ。尋ね來り給はんかとそれのみ氣づかひ二つには。地かゝる病も前世の業。佛の道に入らずんば罪の滅する事あらじと。煩惱の迷ひ晴らさん爲。難面くはもてなせし。詞唯悲しきは母上の我が父といふ夫を捨て。不義い戀慕の家出なれば。父高安殿御怒強く。終には捜出されて。無慙の最期を遂げ給ふも。地皆我故と思ふにぞ。業に業を積重ね。來世もいかなる地獄の苦しみ。フシ思ひやるさへ果敢なきぞよ。地とは知らずして順禮の長の旅路の甲斐もなく。尋ね逢はずば身も勞れ。我を恨みて死にもやせん。不便や可愛やいぢらしや。なつかしの淺香姫。せめて目なりと暗からずば。姿なりとも見んものを。現在の妻にさへ見違へられしはいかばかり。見る目嘸悒くなりつらん。淺ましさよとどうど伏し フシ前後。正體泣き給ふ。

地隱れ聞いたる三人は。堪へかねて大聲上げ。わつとばかりに泣き出せば。扨はそこにと驚きあわて。あら耻しやと逃げ給ふを。縋り付いて淺香姫。心強い俊德樣。たとへ變りしお姿とて耻も遠慮も人による。夫婦の中を耻ぢ給ふは分隔のあるお心か。そりや余りぢや聞えませぬ。是程焦れて尋ね廻る妻の心をちつとでも。不便と思召すならばたつた一言可愛いと。云うて給はれ胴欲な。とは云ふものゝ痛はしや。玉を欺くあてやかな。お顏も手足も此樣に。變れば變るものかいのと。或は恨み或は喞ち。抱付いてぞ泣き給ふ。俊德丸も今更にありし。フシ事ども侘涙。地入平夫婦は手をつかへ。詞いかなる惡病難病も。佛神の力醫藥の能。御本復なき事や候べき。御夫婦諸共我々が知るべの方へ御供申し。何彼の樣子御物語。地イザ〳〵御手をと姫女房。フシ取り〳〵介抱する所へ。地姫の行方を方々と尋ね廻つて次郎丸。家來引具し駈け來り。詞ヤア戀人これに居なはるか。アノうそ穢いどう乞食に付廻つて心中立か。惡い分別よしに仕いや。五體滿足何處もかも。ぎんばり返つた次郎丸。連れて往んで今夜から有難い目に合はしましよと。地引立てかゝるを突飛ばし。詞ヤア獅子舞鼻の千松面。汝が持つた太鼓の撥。お姫樣には不相應。皷の胴へ押込んで片手業が前髮相應。但し奴が厄介になつて見るかと フシ嘲笑ふ。詞ヤア糟奴めに物言はすな。殺してしまへ家來ども。地承はると拔連れ〳〵。切つてかゝれば入平夫婦。得たりと銘々かけ向ひ。落花微塵と切散らせば。コリヤ叶はぬと逃げ散る主從。フシ何處迄もと追うて行く。地跡には姫はハア〳〵〳〵。先も氣遣ひ此處も氣遣ひ。うろ〳〵としておはする所へ。

刀脇差打落され。丸腰ながら次郎丸。サアしてやつたと走りつき。姫を引立て行かんとす。盲摑みに俊徳丸。狼藉者と足首に。取付き給へばエヽ面倒い。詞兄弟の誼だけ踏殺して取らさうと。振放して脊骨を三つ四つ。なう悲しやと淺香姫支へとめても孱弱き手先。こつちへごんせと引摺る後。晝寢の合邦小屋の菰。引千切つて前髪頭。すつぽり被せて引抱へ。詞コレ／＼申しお姫様。こいつはわしが受取つた。俊徳様をアノ車に。お前は綱を早う／＼。ソレ其道を右へ廻れば鳥居筋。西へ／＼と走つた／＼。後からわしも追付くと。地敎嬉しく俊徳の。手を引き車に法の人。どうした誼にこのお世話。詞ハテそこ所かい急な場所。様子は內で咄せう。ちやつと／＼と氣をせいても。地孱弱き姫の力業。地動きせねば思はず知らず。詞エヽ埒の明かぬと手を放し。地走りかゝつて押出す車。こゝぞと姫は一世の力足に任せて。フシ引いて行く。地菰投げ捨てて眼の埃こすり／＼も次郎丸。追駈け行くをどつこい何處い。汝をやつてはこつちの南門。是にうへ牛頭天王の。地社の方へコリヤ／＼／＼。引戻されて次郎丸。憎い木菟入老耄めと。摑みかゝれば四手に組み。年は寄つても皺腕でも。まだ前髪に負けうかと。投げつ投げられ摑き合ひ。組んづ轉んづ七顚八倒。はずみに取つたる大髻。片手を內股に引被ぎ。この万代の池の水。泥坊武士に捨扶持と。どうど投げ込み逸散に見返りもせず。三重へ立歸る。地願以此功德鉦の聲止むが回向の白上げ。百萬遍の同行中座並上下の差別なく。心安居の岸はづれ合邦夫婦が志逮夜の料理そこ／＼に。氣輕手輕の給仕こそ フシ心一ぱい馳走なり。地講中一番乾煎口煎餅屋の槌右衞門。折箸片手に斜に構へ。詞ヲヽ奇特によう勤めさつしやる。見れば新しい戒名も張つてあれど。炬燵の櫓や焙銅の様な字ばかりで一つも讀めねど。此樣に味い事拵へて講中を呼ばしやるからは。どうで身中の佛でござらう。誰ぢや知らぬが頓生菩提と。地念佛に汁菜嚙み交ぜる。蓮池の葩煎やの婆。詞志の佛があると聞いた故。今夜の念佛は我一と精出したでいつもとは夜食も格別。麥飯にとろゝ汁。飛龍頭の平。蒟蒻の白和では。いかな亡者もするノ＼と極樂へ辷り込み。しやりしやり佛にならしやろと。地いふもフシ馳走の追從口。地主合邦取繕ひ。詞今夜の百萬遍はいつと遁れぬ亡者の手向。國を隔てて暮す故命日も知らず。それで戒名も手作に。大入妙若大姉。御存知もない佛に御苦勞をかけまする。則ちこれが逆緣の成佛。心ばかりのほんの茶漬。何も

無くと御酒も三獻。ようまゐつて下されと。地夫が挨拶女房は。眼には涙の含聲。詞久しう顏も見ず。死目にさへも得逢はぬむごい別れ。せめて未來を佛にと。御苦勞かけての百萬遍。ようこそ參つて下さりました。サアなるもならぬも格盞でと。地取りの盃面々に。ヲツトある〳〵溢れると。夫婦が强ぶん大分にコリヤたべ過ぎた滿腹と。膳は取れても俯向いて辭宜さへならぬ腹塩梅。詞いかい御造作御馳走と。地禮もそこ〳〵同行共。フシ皆打連れて立歸る。フシ跡に女房は。御明しの。灯はかき立てれど晴れやらぬ。スヱ子故の闇の口說言。詞天にも地にも獨の子。やつぱり道心者の娘で置いたら。非業の最期もさすまいもの。なまなか河内一國の。大名の奥樣といはしたは親の科。地五年六年逢ひ見ぬ親子。病でもある事か苦しい死をする時に。詞嘸や親々戀しいと。思うたであろ。慕ひもせう。地今はの念に引かされて未來も迷うて居るであろ。可愛の者やいぢらしやとフシ身を平。伏して泣き喞つ。地合邦は尖り聲。コレ〳〵お婆。エヽ同し事を繰返して未練な述懷。不仕合ゆゑ十年以來。頭は剃つても心は昔の侍氣質。獨り娘を高安殿へ腰元奉公。奥方に引上げられても。親ありとも名乘らぬは。かういふ淺ましい姿故。我が子の肩身も窄らうと。折節の狀通にも。必ず〳〵親一門もない者と言募れと。くどい程いうてやつたも。娘の影で立身望むと。世上に云はるゝが面倒さ。潔白な親とは違ひ。子と名の付いた俊德樣に。無體な戀をしかけるのみか。跡までを慕ひ廻り。大恩の夫を捨て。家出したいたづら女郎。其儘にしてあらうか。早速に追人をかけ。地なぶり殺しにがな成つたであらう。不所存を提げた奴。子と思はねば不便にも。いぢらしうもなけれども。詞弔ひの百萬遍は折々の貢の禮。又見ず知らずでも劒難で死んだ者は。弔うてやるが頭の役。そなたも武士の娘だてら。エ見苦しい泣顏と。地叱れば婆は猶涙。可愛さうに其樣にむごたらしうは云はぬもの。かたはな子に不便をかけるは世上の赦し。女は誰しもある習ひ。詞二十そこらの色盛り。年寄つた左衞門樣より。美しいお若衆樣なら。惚れいで何とするものぞ。淫奔者の不義者のと。叱るのは生きて居るうち。死んだ跡ぢやちつとばかり。可愛やと云うたとて。地佛の咎もあるまいと。恨み數けば爺親も。心の底は子を思ふ。數を見せじと頭振り。詞アヽイヤ〳〵。我が子でも惡人を不便と思ふは天道へ敵對。坊主の役と一遍は弔うたれど。畜生めが其戒名。引破つてしまひなりと。そこらの事はそなた任せ。

抹香も切れたら盛りなりと。御明しも消えぬ様にしなりと。勝手にしやれ俺や構はぬ。滿更懇な他人の死んだ様にも思はぬ故。思はず涙がア、いや。涙は出ねど年の科。此眼がかすんで。地〱と擦り赤めたる恩愛の。涙隱せど悲しさは。フシ聲の曇りに顯はれし。地夫の心くむ妻は手向の水の哀れげに。スヱカヽリせめて未來の助にと燻す。香の薄煙思ひは。富士の高根とも。袖は淸見がせきとめて。涙押へる鉦の音。オクリいとしん〱たる夜の道 地戀の道にはフシ暗からねども。地氣は烏羽玉の玉手御前。俊德丸のスヱカヽリ御行方。尋ねかねつゝ人目をも木フシカヽリ忍びかねたる頬かぶり包み隱せし親里も。長地カヽリ今は心の賴みにて馴れし故鄕の門の口。立寄る跡より入平夫婦。御兩所の御行方こゝとは聞けど奥方の。姿見るより様子もと。戶脇に厚き藪疊。身を潛めてぞフシ窺ひ居たる。地斯くとは知らず玉手御前。干破に洩るゝ細き聲。詞母様。〱と地呼ぶは慥に娘の聲。詞ヤアわりやまだ死なぬか。殺さりやせぬかと。地立上りしが心付き。フシ振返り見る女房の方。鉦に紛れて聞えぬは。これ幸ひとフシ素知らぬ顏。詞母様〱ここ明けてと。地叩く戶の音聞き咎め。詞合邦殿。今こな様は何とぞ云うてか。イヽヤ何ともいやせぬ。そりや空耳であろぞいの。イヤ空耳かは知らねど。ちらりと聞えた娘が聲。地ハテ合點の行かぬと立上る。詞さう仰しやるは母様か。ちやつと明けて下さんせ。辻でござんす戻りました。地と聞いて恟り。ヤア詞戻つたとは夢ではないか。健にあつたか嬉しやと。地駈出る裾を取つて引留め。詞ヤイ〱ヤイ狼狽者。肌は觸れても觸れいでも。我が子に不義をしかけた畜生。侍の身で高安殿が助けて置かしやろ様なければ。何の今迄存生へて。うか〱爰へは何しに來う。ア隱すより顯はるゝはなし。親は無いと云はしてもある事知つて。娘が手から度々の合力金。二人が命を養うたは。皆高安殿の御厚恩。其夫の目を掠め。畜生の心さげた娘。假令無事で戻つたとて。門端も踏まされうか。素より娘は切られて死んだ。が。今物いうたが娘なりや。それこそ幽靈。そなた氣味が惡うはないか。因緣の深い程死人になれば怖いもの。必ず門の戶明けまいぞと。地云ふに女房は。詞イヤ〱〱。幽靈はおろか狐狸の化けたのでも。今一度見たい娘が顏。もしや怖しい物であつて。目をまはして死んだら仕合。いとし可愛い子を先立て。生きて業を曝さうより。一目見たいと振切るを。猶引留めて。詞ハテ惡い合點。狐狸か幽靈なればまだしも。もし

眞實の娘なら。高安殿へ義理の言譯。以前は刀を差した役。親の手にかけ殺さにやならぬ。それがいやさに留めるのぢやと。地泣かねど親の慈悲心を。聞く子や妻は内と外。顔と顔とは隔たれど心の隔泣寄りの。親身の フシ誠ぞ哀れなる。地娘は涙押拭ひ。門の戸口に口を寄せ。父様のお腹立。フシお憎しみは御尤。地これには段々言譯あれど人目を忍ぶ此身の上。マアこゝ明けて下さんせと。泣く〳〵願へば母親は。詞アレ聞いてか合邦殿。言譯があるといの。聞いてやつて下さんせ。ハテ娘と思へば義理も缺ける。幽靈を内へ入れるに。誰に遠慮もあるまいぞえ。いかさまなう。此世を離れた者なれば。世間を憚る事もない。そんなら早う呼込んで。茶漬でも手向けてやりや。可愛や立寄る所はなし。幽靈も嘸饑るかろと。地身を背けるは泣く百倍。母は悦び門口の疾しや遲しと開く間も。お懐かしや懐しやと。縋る娘の顔容。前後見つ肌に手を。入れてもやつぱりほんの娘。嬉しや健で居たかいの。さうとは知らいで逆樣事。アタ忌々しい百萬遍弔ひした夜に無事な顔。ひよつと夢ではあるまいかと。抱締め〳〵嬉し泣。父も程經る娘が顔。見たさに思はず立寄れど。以前の詞と世の義理を思へばちやつと飛退いて。手持 フシ惡いぞいぢらしき。地母は漸う心をしづめ。詞世間の噂にはの。そなたはアノ俊德樣とやらに戀をして。館を拔けて出やつたの。イヤ不義ぢやのと惡う云へど。そなたに限りよもや〳〵。さういふ事はあるまいの。嘘であろ。〳〵。嘘か。地〳〵と箸持つてくゝめる樣な母の慈悲。面はゆげなる玉手御前。母樣のお詞なれどいかなる過去の因緣やら。俊德樣の御事は寢た間も忘れず戀ひ焦れ。思ひ餘つて打付けに。いうても親子の道を立て。難面い返事堅い程。猶いやまさる戀の淵。いつそ沈まば何所迄もと。跡を慕うて徒跣足。芦の浦々難波潟。身を盡したる心根を。不便と思うて倶々に。俊德樣の行方を尋ね。女夫にして下さんすが。親のお慈悲と手を合せ。拜み廻れば母親も。今更呆れ我が子の顔。フシ唯打守るばかりなり。地父は兎角の詞なく。納戸の内より昔の一腰提げ出で。詞ヤイ畜生め。汝にはまだ咄さねど。もとおれが親は靑砥左衞門藤綱というてナ。鎌倉の最明寺時賴公の見出しに逢うて。天下の政道を預り。武士の鑑といはれた人。己が代になつても親の蔭。大名の數にも入つたれど。今の相模入道殿の世になつて。佞人共に讒言しられ。浪人して廿餘年。世を見限つての捨坊主。此姿になつてもナ。親の讓りの廉直を。立て通した

合邦が子に。ようも〳〵汝が様な。女の道も人の道も。無茶苦茶な娘を持つたと思へば。無念で身節が砕けるわい。高安殿が今日迄。汝を助けておかつしやる。御心底を推量するに。もと汝は先奥方の腰元。後の奥方に引上げうとあつた時。强て辭退しをつたを。心の正直懇望で。無理やりに奥方姿。ア、手をかけず奥様とも云はさずば。この仕儀にも及ぶまい。殺さにやならぬ様になつたも。皆我が業とお身の上を顧みて。親への義理に助けさつしやるを。エ有難い恥しいと。思ふ心が芥子程でもあるなら。假令どれ程惚れて居つても。思ひ切るに切られぬといふ事はないわい。それに何ぢや。其態になつても。まだ俊德様と女夫になりたい。親の慈悲に尋ねてくれとは。ド、どの頬げたで吐かした。あつちから義理立てて助けて置かしやる程。生けて置いてはこ

つちも又義理が立たぬ。覺悟せい。ぶち放すと。地早や抜きかくる刀の鯉口。母は取付き詞コレ合邦殿。ソリヤ了簡が違うた〳〵。お慈悲で助けて下さる娘。お志を無足にして。殺して義理が立ちますか。ハテ此上は隨分と意見して。俊德様の事思ひ切らし。命の代りに尼法師。地いかなる科の囚人も助かるは衣の德。浮世を捨つれば死んだも同然。どこへの義理も立つ道理と。奥へ指さし様々と宥め賺して母親は。我が子の膝に膝摺寄せ。詞聞きやる通りの様子なれば。どの様に思やつても。そなたの戀は叶はぬ程に。ふつつりと思ひ諦めて。早う尼になつてたも。地十九や二十の年輩で器量發明勝れた娘。尼になれと勸めるは。どんな心であろぞいの。助けたいばつかりに花の盛を捨てさせて。かゝれとてしも黒髪の百筋千筋と撫でしもの。剃らねばならぬ

この仕儀は。何の因果とばかりにて縋り付いて。泣き居たる。地娘は飛退き顔色變へ。詞エ、譯もない事云はしやんすな。わしや尼になる事いやぢや〳〵。折角艶よう梳き込んだ此髪が。どうむごたらしう剃られるもの。今迄の屋敷風はもう取置いて。地これからは色町風隨分派手に身を持つて。詞俊德様に逢うたらば。あつちからも惚れて貰ふ氣。怪我にも假にも。尼の坊主の。云出して下さんすなとけんも フシほろゝに寄せ付けず。地さう吐かしやモウ堪忍がと。父が身構母親は。詞ヲ、道理でござんす。腹の立つも尤もぢやが。モウ半時かしひて一時。わしに預けて下さんせ。手の裏を返すやうに。思ひ切らして見せませう。夫婦に成つて長の年月。地たつた一度のわしが願ひ。聞き届けて下されと。願へば是非も中の間へ。見返りもせず行く父親。母は意地ば

る娘の手。引立て〳〵無理やりにオクリ納戸へ。へこそは入る月の。フシ影さへ見えぬ。目なし鳥。番放れず淺香姫。一間の内より俊徳の。御手をフシ引いて忍び出で。詞今の樣子を聞くに付け。モウ暫くも此内にお前はどうも置きまされぬ。何處なりとお供せうと。地手を引立つれば俊徳丸。我が業滿てず母上に斯く迄思はれ參らするも。身の罪障とはいひながら。館を出でし頃には勝り。兩眼盲いたる其上に。かゝるけやけき姿をば。お目にかけなば母上の。詞愛着心は切れもやせん。案内せよ今一度。地御目にかゝつて其上に。入平夫婦も尋ね來ば召連れて立退かんと。宣ふ聲を聞きとる門口。詞ア、我我夫婦は先刻より。始終の樣子承はる。此所に御座ある事里人の噂に聞けば。もし敵方へ洩れては大事。一刻も早く御供せんと。地氣を急く折しも駈出る玉手。

ナウなつかしや俊徳樣。お前に逢はうばつかりにいくせの苦勞物案じ。心を盡した甲斐あつて。お健なお姿見たわいなと。縋り給へば身をすり退き。詞ヘエ、情ない母上樣。館にても申す如く。同氏さへも娶らぬは君子の禁戒。まして親子の中中に。戀の色のと斯程迄慕ひ給ふはお身ばかりか。地宿業深き俊徳にまだ〳〵罪を重ねよとか。詞昔は桃李の粧ひなりとも。今は見る目も鬱悒き癩病。兩眼盲いて淺ましき姿はお目にかゝらぬか。これでも愛想が盡きませぬか。地道も恥をも知り給へと。スヱ涙と共に。恨むれど。詞愚な事を仰しやります。そのお姿も私が業。穢いともうるさいとも。何の思はう思やせぬ。地自ら故に難病に苦しみ給ふと思ふ程。彌増す戀の種となり。一倍いとしうございんすと。また取付けば不審ながら。詞フウこの業病を母上の。業と仰しやる其仔細は。地フシされば いな。地去年霜月住吉で神酒と僞り。詞コレ此鮑で勸めた酒は秘方の毒酒。癩病發する奇藥の力。中に隔をしかけの銚子。私が呑んだは常の酒。お前の顏を醜うして。淺香姫に愛想盡かさせ。我が身の戀叶よう爲。前世の惡業消滅と。家出ありしはよい幸。地跡を慕うて知らぬ道。長地お行方尋ぬる其中も君が筐と此盃。肌身放さず抱締めて。いつか鮑の片思ひ。難面いわいなと御膝に。身を投げフシ伏して口說泣。地樣子を聞いて俊徳丸。無念と思へど義理の親。恨もいはれず兎に角に。我が身の不運と御落涙。姫はいつそ涙も出ぬ。腹立紛れ取つて突退け。詞エ、聞けば聞く程余りぢやわいな〳〵。玉をのべたお姿を。ようアノ樣にしやつたのう。母御の身として子に戀慕。人間とは思はねど。道ならぬ事も程がある。サア元のお顏にして返し

やと。地恨み余りて フシはしたなさ。地玉手はすつくと立上り。詞戀路の闇に迷うた我が身。道も法も聞く耳持たぬ。モウ此上は俊徳様。何處なりとも連退いて。戀の一念通さで置かうか。邪魔しやつたら蹴殺すと。地飛びかゝつて俊徳の御手を取つて引立つる。アラ穢らはしと振切るを。離れじ遣らじと追廻し。支へる姫を踏退け蹴退け。怒る眼元は薄紅梅。逆立つ髪は青柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行。門には夫婦が身に冷汗。堪へかねて駈出る合邦。娘が髻引摑みぐつと差込む氷の切先。あつと魂消る聲に悔り戸をめり〳〵。駈込む夫婦驚く御夫婦。詞情なや母上を手にかけしかと御涙。地娘を抱へる母親は。詞心からとはいひながら。ヲ、術なかろ苦しかろと。地歎けば今更 フシ人々も涙。涙を添へにける。地合邦は怒の顔色。筋骨立てて。詞ヤア皆何の爲に其涙。

ナ、、何吠えるのぢや女房ども。われ泣いては左衛門様や俊徳様御夫婦へ。心の義理が立つまいがな。此様な念の入つた大惡人を。まだおのりや子ぢやと思ふか。おりやもう〳〵憎うて。〳〵どうもかうも堪らぬ故。十年以來蚤一匹殺さぬ手で。現在の子を殺すも。浮世の義理とは云ひながら。これが坊主のあらう事か。コリヤ汝ばかりか此親迄。佛の教を背かして。無間地獄の釜焦げに。ようしをつたなア魔王めと。地剜る拳を手負は押へ。詞ヲ、道理でごさんす。道理ぢや〳〵憎い筈ぢや。が是には深い様子のある事。物語るうち此刀。必ず抜いて下さんすなと。地苦しき息をほつと吐き。詞様子といへば外でもなく。外戚腹の次郎丸様。年かさに生れながら。後に生れた俊徳様に。家督を繼がすを無念に思ひ。壺井平馬と心を合し。御世繼の俊徳様殺さうと

いふ豫ての巧。推量ばかりか委しい様子。立聞して南無三寶。義理ある中のお子といひ。元は主人の若殿様。殺させては道立たず。此上は俊徳様。御家督さへお繼ぎなくば。次郎丸様の惡心も自然と止んで。お命に別條ないと思案を極め。地心にもない不義いたづら。いふもうるさや穢はしい。妹脊のかためと毒酒をすゝめ。難病に苦しめたは。詞お命助けうばかりの方便。戀でないとの言譯は。身をも離さぬ此盃。繼母の心子は知らぬ。片思ひといふ心の誓。地繼子繼母の義は立つても。嘸や我が夫通俊様。根が賤しい女故。見損うた淫奔者と。おさげしみを受けるのが。黄泉の障りになるわいのと。いへど合邦嘲笑ひ。詞それ程知れた次郎丸が惡事。ナ、、なぜ通俊様へ告げぬぞい。たつた一口いひさへすりや。癩病にする事も。不義者にもならぬわい。口利根に

言廻したとて。今になつてそんな暗い言譯。くふ様な親ぢやない。イヤ〳〵そりや父様の御了簡違ひ。其様子を夫へ告げなば。道理正しい左衛門様。お怒あつて次郎丸様。切腹か御手討は知れた事。次郎丸様も俊徳様も。私が爲には同じ繼子。義理ある中にかはりはない。惡人なれど殺しては。先立たしやんした母御前が。草葉の蔭でも嘸や歎き。隔てた中ゆゑ訴人して。殺したかと思はれては世間も立たず。義理も立たず。通俊様もお子の事。地何の心よからうぞ。あちやこちやを思ひやり。繼子二人の命をば。我が身一つに引受けて。詞不義者といはれ。惡人になつて身を果すが。繼子大切。地夫の御恩。せめて報ずる百分一と。言譯聞いて人々は扨はさうかと疑ひの。晴るゝ程猶母の歎き。詞ヲ、小さい時からの氣立ではさうなうて何とせう。曇霞もない人を。惡う云はすが口惜しい。そなたも嘸や口惜しかろ。心根を推量して可愛いわいの。〳〵〳〵可愛やと地咽び返れば父親は。詞コリヤ娘。其心でなぜに又俊徳様の跡追うて。家出したが合點が行かぬ。ヲ、尤もなお咎なれど。何處迄も行方を尋ね。あなたのお目にかゝらねば痛はしやアノ癩病。御本復はござんせぬと。地聞いて入平不審顏。詞フウ何と仰しやる。お前がお傍に付いてござれば。御本復なさるゝとは。さればの事。典薬法眼に様子を打明け。毒酒の調合頼む折柄。本復の治法委しく尋ねしに。胎内より受けたる癩病ならず。毒にて發する病なれば。寅の年寅の月。寅の日寅の刻に誕生したる女の肝の臓の生血を取り。毒酒を盛つたる器にて。病人に與へる時は。即座に本復疑ひなしと。聞いた時のその嬉しさ。それで〳〵此盃。地身に添へ持つて御行方。尋ね捜す心の割符。詞父様。母様。何と疑ひは晴れましてござんすかえ。フウスリヤそちが生れ月日が妙薬に合うた故。一旦は癩病にしてお命助け。又身を捨てて本復ささうと。それで毒酒を進ぜたな。アイ。ヘエ、出來しをつた出來した〳〵。娘コリヤやい。モ、、、何にもいはぬ。堪忍してくれ〳〵。日本は扨置き。唐にも天竺にも。今一人とくらべる人もない貞女を。畜生の惡人のと。憎て口いふばかりか。親の手にかけ酷い最期も。コ、この己が愚鈍なからぢや。地赦してくれとどうど居て フシ悔み。涙ぞ道理なる。地始終を聞いて俊徳丸。數行の涙フシ拭はせ給ひ。地探り寄つて繼母の手を取り。押戴き〳〵。詞なさぬ中の義を重んじ御身を捨てての御慈愛。誠の親とも命の親とも。いふにも盡きぬ御厚恩。地身を百千に砕くとも何と報じ盡すべき。有難や

忝なやと頭を疊に付け給へば。そのお心とは露知らず。勿體ない道知らずとさげしんだのが恐ろしい。お赦しなされて下さりませと。兩手を合す姫の詫。天晴女の鑑とも云はるゝお身に惡名受け。かゝる御最期痛はしやと。入平夫婦も悲歎の涙。母は正體涙にくれ。ほんに此子が生れたは寅の年の寅の月寅の日の寅の刻。世間へ沙汰をせぬものと世の數をば大事ぞと。夫婦親子の其外は犬猫にさへ隱したに。義理にせまれば我と我が身を責めはたる無常の虎。ひよんな月日に生れたは持つて生れた不運かと。歎けば道理と一座の涙。逢坂增井の名水に龍骨車かけし如くなり。地手負は顏を振上げて。詞豫ねて覺悟の今の最期。未練に歎いて下さる程。結句私が未來の迷ひ。此樣子を我が夫へ。具に頼むは俊德樣。不義の言譯立つならば。思ひ置く事一つもない。命を捨てた御褒美には。次郎丸樣のお命を。お助けなされて下さる樣。必ず〳〵父君へ。お願ひなされて下さりませ。イヤ〳〵〳〵叶はぬ迄も御養生。何卒存生へ下さるが。御慈悲の上の御惠子のため親を殺しては。我が身の冥加恐ろしい。ヲヽおやさしい事よう仰しやつて下さりました。さりながらとても助からぬ此深傷。死ぬるはかね〴〵望の事。必ず親を殺したと思召しては私が罪。お腰元のこの玉手。お主の爲に身を果すは。武士の家では身の譽。泣いてやなど下さりますなサア〳〵父樣。コレこの鳩尾を切裂いて。肝の臟の生血を取り。此鮑で早う。地〳〵と氣をいる娘。後れる親。詞憎いと思うた張合なりやこそ。切りも突きもなつたもの。今では心底可愛い娘を。どうマアそれが酷たらしい。若役ぢや入平殿とやら。大儀ながら頼みます。これは又迷惑千萬。主人の介抱お世話の御禮。どんな御用も相勤めうが。御主人同然の玉手殿。どこへ刄が當てられませう。こればかりは御免々々。名代には女房共。エヽこちの人にんげもない。勿體ない奧樣を。どうマアそれが。お赦しなされて下さりませ〳〵。エヽ未練な用捨。所詮その心底では叶ふまい。モウ人頼みには及ばぬと。懷劍逆手に取直せば。詞マヽ、待つてくれ。娘とても生きぬそちが命。臨終正念未來成佛。地佛力頼む百萬遍。この人數でくる珠數の。輪の中で往生せいと。ハルフシ取り〳〵廣げる。珠數の輪の。中に玉手は氣丈の身がまへ。俊德丸を膝元へ。右に懷劍。フシ左に盃。外には父の親粒が導師の役と鉦撞木。母は涙の目も明かず。宵は死んだと思ひ子が。廻向の爲の百萬遍。今又無事なと悦んだも。露と消えゆく勸めの念佛。どうでも亡者になる

のかと。歎けば父もかきくれて。詞百八煩惱の絆を切れば。六道四生の苦を免れ。成佛正に疑ひなき。佛の金言僞りなくば。珠數の内こそ寂光淨土と。ハルフシ鉦打鳴らし。詞光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨地涙くり出す。珠數くり出す。なむあみだ佛。〳〵。見る目ひやいさ人々は。眼を閉ぢ氣をひき一心不亂。南無あみだ佛。〳〵〳〵〳〵。

地内にはなんなく切裂く鳩尾。自身に血潮受けたる盃。差付ける手もわな〳〵〳〵。俊徳丸は押戴き。母の賜物天地にも餘るばかりの御芳志と。唯一口に呑乾し給へば。不思議や忽ち兩眼開け。面色手足も瞬くうち。昔の姿に返り咲き花の顔ばせ見る手負。苦しき片頬に笑ひ顔。ヤア御本復かと一座の悦び。早や斷末魔の四苦八苦。鉦も早めて責念佛。なまいだ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。願以此功徳平等に。死骸に取付き縋付き。悲しみ涙ハルフシ忝涙庭に。波打つばかりなり。地歎の中に母親は。頭の雪を打拂ひ。娘が菩提の尼衣。俊徳君も涙をとゞめ。詞廣大無邊繼母の恩。せめて少しは報ずる爲。出世の後は此邊に一宇の寺院を建立し。母尼公を住侶とせん。繼母は貞女の鑑とも曇らぬ心は淸める江に。月を宿せし操を直に月江寺と號くべしと。地仰は今も尼寺と。常念佛の鉦の音に昔の フシ哀れや殘るらん。地父は常々勸進の閻魔の御頂持佛に居ゑ。不産で死んだ娘が爲。詞地獄の苦患を助くるは。地自力他力に此佛體。建立して我が住家を其儘一つの辻堂に。營むも亦。平等利益。東門中心極樂へ。娘を往生なし給へと。願ふ心は後世の爲。現世の名殘數々は。百八煩惱夢覺めて。いつか再び鮑貝。涅槃の岸に浮む瀨と。筐に殘る盃の。逆樣事も善智識。佛法最初の天王寺。西門通り一筋に。玉手の水や。合邦が辻と。フシ古跡をとゞめけり。地かゝる所へ主税之助。次郎丸壺井平馬高手小手に縛め來り。詞二人が惡事露顯の上大殿の御意を受け。君のお行方尋ぬる折から。里人が知らせに依つて御安泰の御尊顔。殊更難病御本復此上の悦びなしと。地申上ぐれば俊徳丸。詞繼母の貞心つど〳〵に次郎丸の命乞。惡の根ざしはこの平馬と。地入平が太刀風に首は大地へ落ち瀧津。和泉河内を打合せ。治まる御威勢高安の。俊徳丸の物語書き傳へたる筆の跡千歳の。春こそ目出たけれ

安永貳癸巳歳

如月五日

作者　菅専助
　　　若竹笛躬

糸櫻本町育

座元　豊竹新太夫

淺草の段

詞抑も當時金龍山淺草寺と申すは。人皇三十四代推古天皇の御宇海中より出現の靈像でござる。常に開帳は叶ひませぬ近う寄つて御縁を結ばれませう。內陣は結縁でござると。地縁起さら〳〵貴賤群集。押合ひへしあひ南無阿彌陀 フシ後堂へとうち群れ行く。地群集の中に一際立つ上州赤城殿の奧方。お國歸りの道よりも大悲の誓かげ頼む。開帳參りも腰元は男を拜む尻目遣ひ。神原左五郎山住五平太御供にて フシ暫し床几に休らひ給ふ。地山住五平太しやくり出で。詞御前には御覽なされしか。只今參る道の因果地藏拔きつい流行やう。何でも私が因果で御座るとさへいへば。モどんな六ケ敷い願ひでも又はどんな及ばぬ戀路でも。ついずる〳〵と叶ひますと。地小糸を横に塩の眼は隨分細い心でも。フシ只常體の目玉なり。地腰元お熊がとんきよ聲。詞わしは金龍山の餅屋ばつかり覗いた故。とんと因果を見はづしたなう小糸殿。ヲ、さもし。それはさうと今來る道でも。ふくりん糖や弘慶子かはつた形ぢやないかいな。サあの弘慶子といふは。何の藥ぢやそれ知つてか。どうやら何ぞに付けたらば。ひり〳〵しさうに思はるゝと。地袖打掩へば腰元小糸。詞アレ〳〵御前樣御覽じませ　アノ向うにある提燈。サお熊殿。讀めるか爰から讀んで見や。ヲ、何ぢや。三浦屋の花咲。ア、どんな女郎ぢや見たいなと フシ噂半ばへ。廓馴れて。苦界苦にせぬしこなしも。二十の上は三つか四つ五つの町に。名も高く 小オクリ 今を。さかりの花咲が。今日身揚りの フシ觀音參り。地奧方の御意承はり。神原左五郎立出でて。詞卒爾ながらお傾城。これに御座るは拙者が主人の奧方。廓の風俗珍らしく。暫し御足留めたしと御意は請けても田舎の無骨。申しやうも存ぜぬながら。情を商ふお傾城。苦しからずはこれにて一服。地賴み入ると三つ指に。詞ホホ、、、ヲ、かた。したが廓の內ではなし粋も不粋もいらぬ爰女中樣のお客といひ。何の遠慮も 地長煙管。もみぢ。煙草と大やうにおめる氣色も フシ投げ嶋田髮を詠めつ衣裳の模樣。屋敷女中の物見たけフシ呷き領き喧し。地行く水と過ぐる月

日と散る花と。つかひ捨てたる身は元へ何れ返へらぬ世の中や。憂き勘當にあひ馴れしかの花咲に逢ひたさの。身は占ひのうら表町家々を聲高く。詞當卦本卦の占ひ願ひ望みの考へ。手の筋見るは法樂と。地呼びあるく身は本町に名高き中根屋網五郎が フシ成れる果てこそ淺ましき。地腰元ども聞付けて。何でもこれもお慰み。手の筋を見て貰ひなぶらうではあるまいか、コリヤよからうとお熊が立出で。コレ占ひと フシ呼ばれてこなたに畏り。詞拙者が占ひは弘法大師一子相傳にて。或は人相の善惡。失物駈落夢判じ。年寄の銀煙管若息子の紙子羽織小父貴のにきび母者人の聲がはり小娘の疝氣まで。奇妙な見通し錢次第。地手の筋見るは法樂なりとぞ フシ喋舌りける。地そんなら法樂から見て貰ふと腰元の。お熊が出す手を打詠め。詞ハ、先づ器用筋と見えるわ。名を指いて見せうか。ム、きのか。おけふか。おことか。おかいか。おなあか。イ、エお熊といひやんす。ム、成程白木屋の様な筋ぢや。扨から見た所にこなたの望み事は。中の芝居が見たからうが。それ〳〵笑ひを含んでぢやと。地いふうち小糸が思ひ付き。五平太に吹込めば呑込んで罷出で。詞扨これなるは拙者が妻同然の者。手の筋を見て貰はうと。地いやがる太夫を無理やりに押出せば花咲が。若しかの人に逢ふ瀬もやと差出す手先。詞顔と顔。詞ヤア網様。そなたはア、コレ慥かにそれと見通しの法印様。めつたに麁相な事はあるまい。考へ違ひもあるもの。急かずと私が身の上。様子があらうと何事も。あたりさはりのない様に。ナ占つて下さんせ。ム、お前がアノ。あなたの奥様ハテなあ。いか様知れぬ人心。手前がしやうげな儘に。人の詞も眞實震の封と思ひ。兌上斷まされてのぼり詰め。親の坎中連を受けて。當卦本卦を追出されモウ絶體絶命とは思へど。せめて今一度は。逢ふも不思議逢はぬも不思議のうらやさん。利根さうに女の詞を。一代の守り本尊とはいかい白痴。微塵もゆこんは殘らぬと。いふは心のうらやさん餘所に言ひなす フシ恨みの蓍木。詞サアそれには段々様子もあれど。今は人目の。ナ。せき立つ心をよう鎭めて。手の筋見てと差出すを 地どれと取る手を袖の内。それと言はねど締める手に變らぬ心江戸ぐくり袂ぞ戀の。きまりなる。地折から宿坊圓了院。奥方の前に手をつかへ。詞御國御發駕の今日當寺へ立寄られ。御家の重寶定家卿の小倉色紙御奉納下さる由先達て御知らせ則ち客殿しつらひ置き候へば。早や御入と慇懃に。地奥方もしとやかに。詞それは御念の入りし事。

イザお傾城も御苦勞ながら。酒一つすゝめたし。地是非にとばかり御挨拶。辭むも愛嬌こぼれ梅別れる心驚や。經讀む寺の宿坊へ　フシ皆々引連れ入り給ふ。地後にうつかり綱五郎。詞ア思ひも寄らぬ今のしだら。しかし花咲は請出されたか。但しは嘘かア、儘よ。地情を賣るが其身の商賣。我等も商賣始めましよと。葭簀圍ひの張襖懸看板の書判も。兎角穴めがむつかしいと。獨りつぶやき机を直し。オクリ浮世のへ迷ひを待ち居たる。地月花の。フシ外に男と。いふ詠め屋敷勤めの外珍らしく。往來を見んと腰元の。小糸が後から神原左五郎。詞小糸殿そもじはそこに何してぞ。アイ開帳參りの女中を見ようと思うて。ム、イヤ女中ぢやあるまい當世のきん／＼男を見立てにお出でなされたか。我等が樣な田舍侍は御意に入らぬも御尤もさりながら。そこがお情。

コレ。此文あけて見たとてもあんまり罰も當るまい。地コレどうぞいなうとフシ寄添へば。地つんとすげなう立退いて。詞左五郎樣堅い屋敷の御格式。御存じない事はあるまい。そんなみだらなことをして侍が濟みますかえ。お國へ歸れば猶の事。お年寄の尾上殿岩藤殿。不義はお家の嚴しい御法度。若いお方が袖褄引くともかんまへて浮かされなとの言付け。殊にわたしやお前のやうに生白けた男は嫌ひ。わたしが好きはかう色も薄赤うて。鎌髭あつて强さうで侍らしい男がすき。男の目には鈴を張れとやらいふに。お前の樣な糸のやうな尩弱な侍と女夫になる事いやいなと。地振付けられて手をもぢ／＼。後に立聞く山住五平太。コリヤ註文は我が事と衣紋繕ひ　フシ鬢かき撫で。詞左五郎／＼と。地いふに悔りコレサ神原。詞御奉納の色紙は貴樣の役目。今御前のお尋ね早く／＼と胴調聲。地うろうろきよろ／＼神原は。フシ御前へこそは駈り行く。地入替つて五平太が。詞コレサ是々つれないぞや／＼。此間見ると口說き。逢ふと口說き。心を盡す心中男。さうむごうはせぬものだ。アレ／＼／＼あの川へ渡せる橋も。あづま橋とは文字にさへ　地サハリ吾妻橋と讀むわいなあ。コレ／＼是さ／＼。拜む／＼そしてから今のお詞を聞く所が。强さうな男を御吟味なさるゝ思召しかな。アイモわたしや芝居見にいても三五郎や八百藏はきつい嫌ひ。わたしが贔屓は友右衛門介五郎。何敵役が御贔屓とや。友右衛門魚樂なら我等へ札の落ちる筈。コレ色薄赤く强さうで。きつとした侍らしい此五平太。コレ／＼相談する氣は中橋かと。地じつと取る手を押退け。詞お嗜みなされませ。不義はお家の御法度今も今とて左五郎殿

の詞。振付けたを御存じないかえ。但しお國へ歸り。御家老樣へ此通り申上げうか。ヒヤウすりやアノ立役も敵役も嫌ひぢやな。ハイ二度みだらな事おつしやると其分では許しませぬぞ。が只今は旅懸の事。以來をきつとお嗜みと。地堅う出られて。詞ハイ〳〵。委細承知仕る。必ず御沙汰御無用と地眞面目に白けゝる後より。詞五平太〳〵今御前のお召。早く早くと　左五郎が呼聲しほに手持ち無沙汰。フシこそ〳〵と迯げて行く。地邊り見廻しコレ小糸。詞左五郎樣。言合せた通り。まんまと五平太が口說の根は切つて仕舞うた。さいなあ毎日々々口說くが嫌さ。お前とわしが中のこと若しや知れては互の身の上。それ故お前を振つて見せたりや。眞かと思うてよい氣味〳〵。サアこれからはほんまの色事コレ嘘ぢやないかや何のいなア。地わたしやいつそと寄添うて抱き付く身はとてもなら。體も一所に。フシなりたい思ひ。後に立聞く綱五郎。詞ヨウ〳〵有難の。ヨヽ。おそろしいの二人が悔りア、これ〳〵。怖がる所ぢやない。何かの事を見通しの賣卜者。なるかならぬの手の筋から文の墨色よしあしに。戀といふ字の書判も穴數一つの考へ物。粹ぢや通ぢや。大事ない。葭簀の内を貸してやろ。ついちよこ〳〵と小ぎりめに。ちよんぎまりとはどうあつう。地サア〳〵早うといふを機會。目許に物を言はせ合ひそんなら暫くこの内を。詞ハテお辭儀には及ばぬと。地二人を突きやり押しやつて。詞扨どうせう豆藏でも見てこうか。奥山一遍あるいて來たら。其間に大かた埒も明こと。地緣を結んだ綱五郎　フシ氣を通してぞ急ぎ行く。座敷をぬけて。花咲が ヲクリ勤めの。外の酒機嫌戀しき人に淡路嶋。思ひに通ふ千鳥足あたり見廻し占ひの。看板目當に。詞綱樣。綱樣是はしたり。留守かいなと地覗く葭簀に怪しき影。ヲヽしんきやとフシ立退けば。地樣子窺ふ乞食が。下ありませ〳〵。ヲヽ知らぬわいの。ハイお結構な女中樣。戴かして下ありませと。地藪から出した亂れ咲。怖さ半分山吹色。禿が包み　フシ手あたり次第イエ〳〵申しこんな物はいりませぬ。ムヽそんならそなたは何が望み。ハイお情らしい女中樣。毎夜〳〵のお餘りがあるならば。どうぞお情に戴かして下ありませと。地付込むねだりどす聲に。さすがそれしやの物馴れて。詞成程勤めの身なれば情をくれとは何にもせよ嬉しい事。シタガ親方に養はるゝ身わし儘にもならぬといふのか。そんなら爰へは何しにお出で。サアアノわたしや待人をヲツト見て貰ひにと言ふやうなことであろハテ當世の若い者

は客に女郎を買はせて置いて。こつそり小宿のちよん〱幕。ヘヽヽモウ金というてはない體。モ惚れたが因果地藏樣も御照覽。アイどうぞお情に横番切らして下ありませと。地口說きかゝるは身を知らぬ破れ布子に緋縮緬刺繡と。襤褸の取合ひは。岩のはざまに浮草の。フシ花の咲き出し如くなり。地何と詮方花咲が。イヤモウさう言はれては逢はねばならぬ樣なれど。今日はお客に買はれぬ此身。身揚りは女郎の榮耀。今日一日はわしらが氣休み。廓の內なら情を賣るが身の代がはり。廓の外では常の女も同じ事。ハテいつなりと廓へさへござんしたら。情を賣つて上げやんしよと。地理詰に此方も。フシ口あんごり。詞そんなら必ず廓では。サアお近い內にも地言捨てに小棲かい取り衣紋坂フシ吉原さして立歸る。うろうろ眼に山住五平太。詞ハテめんえうなコリヤ非人。爰らへ二十二三の男と十七八ばかりの女は來ぬか。テモきつい急き樣。イヤサこれが急かずに居られうか。コリヤ乞食ではないコレ先生々々。どうぞ敎へてくれぬかい。イヤモ事によつたら敎へませうが。それ聞いてどうなされます。ヲヽサ聞かせてさへくれるなら褒美は望み次第サどうか〱。マヽ急かずとお聞きなされませ。イヤサこれがせかずにゐられうか。ムヽ褒美とあれば。サどうか〱。言はずばなるまい。サヽヽサどうか〱何と〱〱。エヽさりとてはやかましいイヤサ是がせかずに居られうか。サヽヽどうか〱と地せき立つ山住立寄る非人。コレかう〱と 呼けば。詞ヒヤウそんなら此內。シイ引摺り出してどうなされます。知れたこと重ねて置いて四つにするシイ。サ切つてお前の言譯は。ムヽサそれは。人を殺せばお侍樣でも御切腹か輕うて御扶持は上りますぞえ。ムヽいか樣そこがあるわいの。サそれぢやによつていつそかうなされませぬかと地耳に口。詞ヤコリヤ面白いそんならあの色紙を盜んでシテ。褒美はきつさり御合點か。いけと惡事を呑込み呑込み地羨しげに葭簀の方。戀と。慾と右左オクリ立別へれてぞ入りにける。地うそうそ戾る綱五郎。モウよい時分と葭簀の圍ひ。這入りかゝつて南無三まだぢやと咳拂ひ。詞何とモウよからうぢやないかな。イヤモさう長う盆がふさがつては。迷惑至極の賣卜者。ちと足り苦しうして置かんせと。地詞にさすが フシはぢ紅葉。地顏を赤めて左五郎小糸。どなたか知らぬが此御恩。詞アヽお禮受けよとて取持ちは仕らぬ。アヽそれ女中樣。髱に紙が付いてある。お侍樣ソレ。お前の右の口許に紅が少しと地氣を付けられ。髮を直しつ

顔ふくやらわけも媚く戀中の。御縁もあらばと互の會釋。フシ詞少なに別れ行く〳〵。詞エ、うまいことして置きながら。何喰はぬ顔でハ、、、。それはさうと。花咲はいんだか。不思議に廻り逢うたもの。地殘り多やと言ひつゝも。机に直る フシ折からに。地生業の。本フシ糸によりくる老の波。フシ本町二丁目。中根屋の母妙閑。娘お房を杖柱開張参りの手には珠數。小オクリ現世。未來の願ひより勘當の子に逢ひたさの。長地心をこめの袋から報謝も涙の種蒔きて鳩鷄を見るからに誰か生きとし生けるもの。子を悲しまぬはなきものを。詞三人の子は持ちながら。兄の綱五郎は勘當する。妹は藁の上からお屋敷へ養子にやる。地そなた一人を力草兄めはどこにゐる事ぞと。思へば後生もどこへやら觀音様に向うても。詞綱五郎が息災と。祈る母が心も知らず。勘當の詫にも來ず。來たら許そと思ふばかり。地親の心子知らずと。因果な奴めと憂き時は。恨みながらもさりとては我が子の行方安穩と フシ祈る心ぞ哀れなる。詞又かか様の兄様のこと。言ひ出して泣かしやんす。どうぞ廻り逢うたらば。勘當許して上げまして。ヲ、そりやおれに如才はない。よつ程塩も踏んだからは。許さいで何とせう。そなたも脊丈の伸びるまで。地かうして置く筈はなけれども親父殿は去年秋死なしやる。兄が內へ戻らぬ中はわしが力がない故に。詞二十の今日まで嫁入もさせぬ。ちつとの間ぢや辛抱しや。ヲ、何のまあ。わたしやいつ迄も。嫁入はせいでも大事ない。兄様と二人して。お前を樂に養ひます。お心遣ひさしやんすなと。地いふにほろりと涙ぐみ。詞ようい うてくれたなア。それに付いても養子にやつた妹は無事で居ることか。其後便りも聞かねば。地案じらるゝとぐど〳〵と。タ、キ思ひに足も踏迷ふ。親の心は子しらずと。譬のふしの陰陽師。幸ひの賣卜者。詞子供らが身の行方念ばらし占うて貰はうと。地立寄りて小腰をかゞめ。詞お邪魔ながらちよつと御覽じて下さりませ。モ年寄りまして惡い入りまい。內を出ました子供の身の上。息災でをりますことか。とつくりと御覽じて。下さりませと差出す。地手の筋よりも親子の血筋。それとも知らず知らぬ同士何心なく綱五郎。見るよりハツト悔りの。胸なでおろし素知らぬふり。詞悟られまじと作り聲。ア、よいお手の筋。したが一人の男の子はあれど、御勘當なされたの。其人も今では根性も改まり。先非を悔いてゐらるれど、町所の人目もあれば。詫びに行くにも行かれぬ仕儀。年月の經つにつけ兩親の御高恩。骨身にし

みく〳〵忘られず。思ひ出す度毎に。泣いてばつかり暮されます。ヲ、見通しのお占ひよう當りました其通り。シテ其兄めは何所に居ますと。地問はれて胸も張裂く思ひ。詞イヤ随分無事でござれども。今は西國邊に居らるれば。つい廻り逢ふ事もござるまい。コレお房遠國にゐるといなう。地老ひさらぼいし此母がいつまで命があるものぞ。つい廻り逢ふ事もならぬといふは前生の。いかなる報ひか淺ましやとわつとばかりに母お房。歎くを見兼ね綱五郎忍び涙は編笠の フシいひ甲斐もなき風情なり。地涙拂うて綱五郎。詞成程お歎きは理ながら。お歸りあつてお連合ひともお仕事なされ。相應な御養子でもなされませ。情なや。其連合ひは去年の秋死なれましたわいなう。何親人は御死去とや。ハアハツトばかりに綱五郎 スヱテ前後不覺の有様に。地お房がそれと見付ける顔。詞エ、お前は兄様。綱五郎様ぢやないかいな。コレ〳〵かゝ様かゝ様。兄様ぢやわいな〳〵〳〵。ヤアヤア。どれ〳〵ほんにそなたは綱五郎。ヤレなつかしや〳〵。よう息災で居てたもつた。がなぜ初めから有様に。打明けてはたもらぬぞ。地年寄つた此母が尋ね焦れてゐる心。少しは推量せよかしと。母と妹は取縋り。嬉し懐かし親と子が。フシ悦び涙ぞ道理なる。詞ハ、誤りました母者人只今の身を耻ぢて。名乘るまじと思ひしが。親父様の御死去の事。聞いて我が身も忘れ果て。地面目もなき御對面と。スヱ大地に喰付き泣きゐたる。詞イヤ〳〵泣いてゐる處でない。さつきにからの詞の端。モウ根性も直つたさうな。アイ〳〵どうぞ兄様の御勘當。ヲ、許さいで何とせう。スリヤアノ御勘當御免とな。ヲ、早う連れて歸り。伯父御十兵衛殿にも相談して。早う家が渡したい。ハ、、、有難し。然らば直様御供と。地店片付けるも妹が手傳ひ。今日御勘當許されんとは夢にも知らぬ賣卜者。是が誠に陰陽師身の上知らずと戯れて始めの歎き引替へて親子兄妹水入らず。盡きせぬ縁の綱五郎。フシ引連れいそ〳〵立歸る。色紙の箱を引抱へ。仕濟まし顔に以前の乞食。跡から付いて山住五平太。詞コリヤ本名は最前聞いた九郎兵衛とやら。其代物を代なして出世の蔓に。ヲ、合點。お前も彼奴めをぼいまくり。かの戀人を。呑込んだ重ねて。地さらばと乞食は何所ともなく フシ迯失せけり。地色紙の見えぬに神原左五郎。氣も狂亂の亂れ髪。駈出すを五平太聲かけ。詞コ左五郎あわたゞしい何事ぢやイヤサ大切の小倉色紙お次の床に置いたる處。かいくれに行方知れず。ヤア〳〵〳〵そりやヲゝ大事。マ飛んだこと

のそれがなければ國へ歸つて。わりや言譯はないぞよわれ。コリヤ生耻晒さうより。今爰で腹切つてくたばつて仕舞ふさ朋輩のよしみ。介錯して取らさうと。地心付けられ若氣の左五郎。南無阿彌陀佛と覺悟の體。詞ヤレ待て暫しと地奥方に。引添ふ腰元小糸は半亂 フシ生きた心地はなかりけり。詞思はず紛失の色紙。誰が業とも知らねば。切腹とは麁忽々々。イヤサ奥様。どれ程に仰せられても紛失の言譯は。ハテ今日此所にて此色紙が失せんとて。言譯の仕置きはない筈。預りの左五郎切腹して。誰が色紙の詮議はするぞ。サソレハ。但しお身に言付けたらいつ何日までに吟味して。差出す思案ばしあつての事か。サアそれは。推參千萬控へて居よと。地てつぺい挫ぎに五平太が。しかんだ顏の苦味にて。フシ小糸が癪は下りけり。地神原左五郎兩手をつき。詞不調法なる拙者めを。生き延びよとは冥加なし。此儘お暇下し置かれれば。雲の上地の底と潜つても。尋ね出して其時は。ヲヲ替らぬ主從歸參を待つと。地早や御立ちの臺笠立傘。涙の雨は凌ぎかね小糸が心の亂れ糸いとし可愛いも仇枕。フシ是非なく／＼も立上る。詞扶持放れの左五郎に。大小無益と五平太が。フシ直樣にもぎ取れば。地よしや此身は暫し耻たとへ町人商人の姿となつても小倉色紙。取返さでおくべきかと。詞のはしは。嘘もなく本町二丁目糸屋にて。妹のお房に左七とて。世に謳はれし。優男末に。浮名を流しける

第二　屋形の段

唄これの御殿は目出度い御殿。鶴と龜とが舞ひ遊ぶおめでたや。千代のこおめでたやよい／＼。ナホス地謳ふ フシ髮々賑しく。地赤城殿の國館奥は年々暮毎に。煤掃過ぎは女中達殿御始め御家老も。胴に上げるを樂しみに。男の肌に觸るのは年に一度の。フシ天の川。詞ナウお梶殿小笹殿。いつでも此樣に年の暮には。人見ると胴に上げ。日頃憎いと思ふ人は、どつさり落して腰を打たし。又可愛い男は。上げるふりで手を握るのが皆樂しみ。サレバイノ。お暇の出た神原左五郎殿。何でも此暮には思ひ入れ手を握り。どこもかしこも締め付けうと思うたに。サイナウコレそれに付けても小糸殿。左五郎殿との譯は。こちらも知つて知らぬ振してやつたが。お年寄の岩藤殿が聞付けて。殊に懷胎ぢやとて此頃からの責せつちやう。そして御用人の五平太面が。全體惚れて口說いたを。振付けられた意趣ばらし。岩藤殿は五平太殿の伯母御なりや。一入詮議に念が入ると。フシ噂なかばへ奥より

も。御一家よりの歳暮のお使者。四角四面の根來主膳。詞お女中。歳暮目出度う御座る。明春ゆる〲御意得ませうと。地出づるを見るより主膳殿。お祝ひ申しませうと言ふより早ぐばら〲〲。手取り足取り女中達。唄めでた〲の若松樣よ枝も榮える葉も茂るおめでたや。千代のこひやうたんぢやよい〲。詞アヽモウ御免々々さて〲御苦勞忝いと。地麻上下も皺だらけ腰をさすつて。フシ迯歸る。地それ〲そこへ御家老樣。上げる色目をけどられなと フシ小陰にかくるる。其所へ。地さすが家老の勿體らしく白と黑とのあはせ鬢。朱鞘の大小のつく〲熨斗目も立派に入り來る。それとかけ聲五六人。コリヤたまらぬと袖振放し駈出すを。御嘉例が外れます。ならぬならぬと武者ぶり付く。女中相手に力も出されず。多勢に無勢御家老も。是非なく

女中のお手車。唄千代のこひやうたんぢやよい〲。詞アイタヽヽ、こんな時は劍術柔術も何の益にも立たぬもの是が家老の樣かいと地苦り。切つて迯行く跡フシどつと笑ひを催せり。地跡へ入り來る山住五平太。又立ちかゝる女中達睨み廻して。詞うぬら此五平太に指でも指すと。どこもかしこも引き捲くるぞ。ヲヽ捲くるなら捲くつて見や。捲くらるゝが怖いとて。お舘の祝儀は外されぬと。地強う出られて。詞コレサ〲眞平御免。實はかうぢや。此上下小袖は今日藏おろし。皺になつては正月が見苦しい。爰は一重にお情〲。奥様へは上げた分にして。御嘉例は濟しておくりやれ。是ぢや。地是ぢやと顔を疊。詞ハテさうおつしやれば上げにくい。赦してあげるお通りと。地言ふに嬉しくヤレ〲忝い。詞此お禮はきつと〲。薩摩芋三貫目ばかり進上

と。地言ひつゝ通るをやり過し。後抱きに惣々が。憎さも憎しと唄なしに。敷居へどつさり腰骨打たせ。手を打ち フシ叩き迯げて入る。地五平太は顔しかめ。詞ア、えらい目に逢はせをつた。智慧まん〲たる某もだますに手なし。つい落しても能い事を。意地惡う敷居の上。陰嚢ぴしやと言はしたと。地しかみ返つてゐる所へ。奥御殿お年寄とて鼻高く。おのが儘なる老女岩藤。のう〲と立出て。詞ヤレ五平太か待兼ねました。ヲヽ伯母者人。扨て小糸めはどうで御座る。サレバイノ表向きはきつと責めて內證では。五平太にうんとさへ言へば。御前樣へはよい樣に言うて赦しやるとて。割つつ口説いつ言うて見れど。かぶりばかり振りくさる。コリヤもう兼ねて言うた通りせずばなるまいわいの。サそれについてカノおろし藥。やつと調へました。がこれ

を飲ましては。ハテ飲ますといううて嚇したりや。懐胎してをるは定。怖さにうんといふまいものでもない。又嫌とぬかせば此方も意地。口押割つても飲さにや置かぬ。ム、面白い。然らば後程伯母者人。ヲ、合點々々。ヤコレ／＼お腰元衆。此藥煎じて置かしやれ。大事の藥ぢや粗末にせまいぞ。サア甥の殿イザ奥へと。地呑込む一味のきほひに。伯母に フシ打連れ入りにけり。地始終を聞いて立出づる。女中預かり尾上とて。文庫結びのしめくゝり打掛姿しとやかに。ドレ其藥と手に取つてつく／＼見。詞ム、よし／＼。それ早う煎じてやらしやんせと。地袂の内で揩替へて。素知らぬふりに フシ奥へ入る。地小身の身。フシの悲しさは我が子にも。奥と表と分隔て。逢ふことかたき石塚彌三兵衞。願書携へおづ／＼と錠口を差覗き。詞ヤなに女中方。勘定役石塚彌三兵衞。お願ひに參つたと。御老女方へお取次と フシ打萎れてぞ控へゐる。地ゆがみにゆがむ岩藤が。出合ひ頭に彌三兵衞を。見ても見ぬふり錠口の。襖ぱつたり女ども。詞小糸めを引揩り出せ。ドリヤ 地一責めと當てこすり。煙草の煙 フシ空うそぶく。詞イヤ申し岩藤樣。彌三兵衞で御座ります。お願ひの一通り。お聞きなされ下さりませう。知りませぬ。ウ今日の取次の當番は相役尾上。わしは小糸を詮議の役。依怙贔屓のない正道な仕樣。襖の外から聞かしやれと。地態と親子の顏さへも。見せぬ胴慾彌三兵衞は。涙かくして。詞サ其娘小糸めが事に就いてのお願ひ。知らぬわいの。イヤサ小糸と申すは義理ある娘。實の親は江戸本町二丁目。中根屋と申す糸商賣。藥の上より貰ひ置き、エやかましい。取次は尾上殿。コレヤ女ども。ソレ小糸を引揩つてうせあがれと 地わゝりちらける フシ憎々しさ。地奥より出づる山住五平太。詞何岩藤殿。拙者は御用に就いて江戸表へ發足。隨分ともおぬかりはあるまいがな。ナソレ今の事を。ヲ、それは合點。伯母に如才はないわいの。氣遣ひせずと早う戻りやと。地領き合うて フシ出て行く先。詞ホ彌三兵衞。何ぢや泣くか。エ、小糸が事に就いてか。コリヤ尤も。嘸ぞ娘に逢ひたからうが。何ぼ逢ひたうても勘定役位ではお錠口は通られぬ。そこは用人の忝けなさ。我が內も同然に。どこまでも行きぬける。ハ、、、。ヤ此敷居が越えたからうがならぬわい。家柄といふものは違つたのものさ。よい年しても奥へは叶はぬ。拙者などは水の出端の若盛。女が見るとびろ／＼とびろ付く程の美男なれど。何所までもつか／＼通る御用人。が出頭もはや御用の多さで甚だ迷惑。江

戸へ出ても屋敷方の交際。今日は吉原明日は深川のと。遊ぶことにもほつとするわい。ヤ又堺町葺屋町の茶屋どもが料理。深川西の宮洲崎の舛屋大川屋。樂庵の百川のと。モうまい物も毎日は難儀なことさ。お身などは何が。朝は茶粥に焼味噌。晝は座禪豆もみ大根。祝儀日などはくわつと奢つてさんまの干物。ハ、、ハ、。どりや。地参らうと惡口嘲弄疊。フシ蹴立てて出でて行く武家の。役儀ぞ是非もなき。地岩藤は膝立直し。詞此小糸めは何してをる。きり／＼うせうと地つこど聲。もれて フシ一間を立出づる。二上リサハリ無慘やな糸が身の。糸より細く窶れ果て。日毎の責めに泣明かし。褄は重ねぬ小夜衣。重き其身を忍ぶさへ。我が身一つの命ならねば。／＼と。思ふばかりを。露の世にながらへなく／＼畏る。ナホス地岩藤は目をむき出して。詞ヤイ小女郎よ。毎日々々此年寄に。世話をかける横着者。駈落ちした左五郎と。不義したであらうがな。そして奉納の小倉色紙も。おのれが盗んだに違ひはあるまい。サア有樣にぬかしをれ。地といがみかゝれば顔を上げ。身に覺えあることならなん／＼の誓文。隠さう様はなけれども。知らぬといふが申譯。色紙を盗んで何のまあ。詞いやだまりをらう。左五郎とちえ／＼くり合ひ。色紙を盗んで賣代なし。小宿這入りの元手にせうとて。やつたには違ひない。これはまた御無理ばかり。地其色紙故にこそ左五郎様の御越度。有所さへ知つたらば歸参さしやんすお身の上。詞さう吐かすが心得ぬ。不義の證據はおのれが懐胎。隠せば爲にならぬぞよ。サ泣いて事が濟むか。吐かせ地／＼と煙管おつ取り。かよわき體をりう／＼／＼。襖隔てて彌三兵衛が。詞申し／＼岩藤様。そりやあんまり。何が餘り。奥向きの事こなたが知つた事ぢやない。すつこんでゐさしやれと。地又も煙管にばつた／＼。親は我が身を打たるゝ思ひ。襖一重が七重八重かさなる責苦うき難儀。モウ堪忍とばかりにて スヱテどうど伏してぞ。泣き居たる。地エ、其吠面が猶憎いと。煙管もまだるく有合ふ箒振上ぐる。其手をしつかとホウ尾上殿。詞コリヤ小糸を庇ふのか。イヤお前様をかばうて。ム、そりや又何故。ハテ小糸もお上のお腰元。若しや面に疵でも付くか。萬一急所にあたつた時は。お前の難儀と思ふ故。だまらしやれ尾上殿。此詮議はわしが役。急所に當つて死んだらば。ハテお仕置にあふばかり。いらざるお構ひ御無用と。地強き言葉も理の當然。さすが尾上も力なくすご／＼立つて隔ての襖引開くる。ナウ父様か小糸かと。いふに

言はれぬ親子の歎き。岩藤が尖り聲。詞ヤこれ尾上殿。科人に親子の對面なりますまい。其襖さいた〳〵。イヤ彌三兵衛殿の願ひの取次。それ故明けた此襖。取次は私が役。いらざるお構ひ御無用と。しつぺい返しに フシしかな顔。地何がな邊り見廻して。煎じ立てたる以前の藥。茶碗に受けて。詞サア小糸これを呑め。エ、これは。ヲ墮胎のおろし藥。エ、。懐胎が嘘なら呑んで見しや。サアそれは。但しは懐胎か。イ、エ。呑まぬか〳〵呑みをれと。地髻引寄せせちがふ有様。親の心は半狂亂。見えぬがましのなま中に。眼前娘の命の瀬戸。此方は情もあらぎの岩藤。彌三兵衛たまらず駈寄るを。詞ア、コレ〳〵其敷居越ゆる時はお家の法を背く科人。デモ目前に娘の難儀。ハテ何事も此尾上が胸にある。此願書讀む間。ちつとして見てござれ。ヲ、さうちや尾上殿。ヤしぶとい女郎め今の間に。地憂目を見せんと口おし割り。茶碗の藥無理やりに。目鼻も分かず流し込む。小糸が身には熱湯を。呑むよりつらき苦しみに身一つならぬ憂き事の。重なる思ひ幾重にも赦してたべといふ聲も。咽につまりし有様を見る悲しさは子の百倍。何とせんかとせんと心ばかりに身をあせりわつとばかりに泣沈み フシ前後。正體泣きゐたる。地襟繕うて尾上は立寄り。詞ヤコレ岩藤殿。おろし藥は效きましたか。されば飲めば忽ちおりる筈。ハテ面妖な。ハ、、、。ヤなに小糸。心持はどの様なや。イエ何ともござりませぬ。すりや小糸が懐胎は僞りに相違ござらぬな。サアそれは。小糸が言譯立つ上は。覺悟しやれ岩藤殿と。地詰めかけられてア、これ〳〵〳〵。詞こなたは氣が違うたか。此婆には何科あつて。ヤア科のない事言はうか。墮胎の藥は天下の法度。何所から求めてござんした。サアそれは。人を損ふ人非人。地覺悟召されと言ふより早く。襟髪取つてもんどり打たせ。又立ちかゝる脾腹を一あて。庭にどつさりころ〳〵〳〵。フシ心地よかりし有様なり。地彌三兵衛庭に駈けおりて。憎さも憎しと引立つるをア、コレ聊爾せまいぞ。詞其氣を付ける藥は爰にと。地搯替へ置いたる以前の毒藥手に渡せば。畏つたと水鉢の。杓にうつして口押割り。流し入るれば目をほつちり。夢見た心地に起上れば。尾上は詞改めて。詞正氣付いたか岩藤。今日よりは長のお暇。早く館を立つていきや。彌三兵衛殿のお願ひは奥様へ伺はん。地小糸ござれと大やうに フシ打掛さばき彌三兵衛親子。不審晴れねど尾上様。詞御前宜しうお取置きヲ、お次に暫く御休息。小糸はこちへ。軈て吉左右 地

松の間の フシ襖押明け別れ入る。地跡に岩藤恨めしげに。惡の報ひは覿面に廻る藥の腹わたを。引つくりかへす苦しさに。アイタ。/\と目顔を顰め。のたくり廻る其所へ。尾上が指圖に下部ども。割竹てん手に日頃の憎さ。爰でこそと口口に。詞コリヤ老耄め立上れと。叩き立てられ。コレ/\。今迄の朋輩中。ちつとはよしみも。何誼み。澤山さうに呼使ひ。むごい目見せた其代りと。地情容赦もばつた/\。打立てられし羽抜け鳥。フシ見返り/\出でて行く。地いとゞ短き冬の日の。早や暮過ぎて奥御殿樣子。聞かんと彌三兵衛が。庭の切戸に佇んで。詞ハテ心得ぬ娘は慥かに懷妊と。思ひの外のおろし藥。情ある尾上殿の言葉といひ。地ハテ不審と獨言。手燭片手にしづ/\尾上。小糸を後に押しかこひ邊り見廻しそろ/\と。庭に下り立ちフシ切戸の外。地小糸を突出し彌三兵衛殿。詞お願ひの通り小糸はお暇。なに娘にはお暇とや。地ハヽヽ、有難やと手を合せ。見合はす灯影蠟燭のしんけ泣寄り親と子が フシ悦ぶもまた涙なり。詞アコレ禮をいうてゐる所ぢやない。可愛い男の行方を尋ね。恙なう身二つに。エヽ。スリヤ最前のおろし藥は。ヤレちつとも氣遣ひなか橋の。まきや藥の實母散。エヽ忝い

第三　中の町の段

騒ぎ唄花に遊ばゝ日本堤や衣紋坂。江戸町すみ町素見の地廻りひけ四ツ鐘四ツきんきんのじ屋有雛山屋の豆腐でやうわり向ひ酒。わい/\のわいとさ。程太夫 詞サア申し山樣。お一つお上り。内匠太夫ヲヽ呑む/\。それはそうと此花咲や。半時九郎兵衛もモウ來さうなものだなア。程ハイ/\もう。追付けお出でござりませう。エヽ扨と申し山樣。シテお前樣は。マヽどなた樣に。内匠ハテさて誰の彼のといふ段ぢやないわ。五平太が氣にさへ入れば。直ぐに受出しおかみ樣。それに何のかのと喧しい女郎ども。客がさすといはゞ此五丁町は此山住皆知つたものおれに逢ふ女郎はないと。淺太夫 地いへば藝者の琴野が口まつ。詞又万八をいひなんす。お前の樣に女郎樣方を一切れ買ひになんすはきつい野暮。ちつと意氣な所を覺えなんし。内匠エヽやかましいわい。氣に入らぬによつて買放しならばおれが氣に入つて見たがよいと。程 地いへば幇間が。詞アヽ申し/\一度で行かぬは客の恥。二度で行かぬは女郎の恥とやら申します。いゝえいなア權樣。アリヤ床花が惜しいのさ。内匠エヽいま/\しい何ぬかすぞい引退れめ横面はりのめすぞ。程ヲツトト/\琴野さん。ちよつと彈きな。

扨爰で一つ上げますが。大谷の廣治でごさります。唄雨の降る夜はな一入床し。詞有難い。程エ、次は嵐雷子でごさります。色雪のふる夜はな小幡の里に。詞三人すごい〳〵。イヤモおそろしいわい。内匠そんなら此五平太も一節やらずばなるまい。程ヨウこりや有難い。さらば聴聞仕らうか。東西々々。内匠地愛護の若に二世までというて別れて其後は文もとゞかず顔も見ずそれさへ今は其人も舘を出でて比叡の山浅ヲ、モいつそ調子が合はぬわいな。内匠エ、けちな三絃ぢやなア。ム、聞えた上方節だによつて受取れぬなよいわお駒を語らう。心任せにした上でモウ堪忍をしてやると。いうて堪能しかられたんのう。詞ア、それは流行歌ぢやわいな。内匠ヲ、ほんになア。エ、われが弾きやうが悪いゆゑ飛んだ所へ連れて行くわい。そして最前呼びにやつた幇間の左七とやら。モウ來さうなものゝ。程イエ申し山様。何故にアノ左七を。其様にお待ちなされます。内匠サレバサ彼奴は身どもと元は朋輩。神原左五郎と言つた奴とら打つてしくじり。この吉原に幇間してをると聞いた故。呼付けて困らしてやらうと思うてさ。程ハテなあ。道理で人柄のよい男と思うたと。浅地いふに琴野が。詞イヤアノ左七様は今度の俄の囃子に太鼓の役。それで來なんせんのさ。程ほんになアもう俄も來さうなものとフシ二人噂半ばへ。俄の囃子遠音に聞ゆるすり鉦太鼓そりやこそ來たわと店の端。くづれかゝつてフシ待ち居たる。地見物群集を制する棒つき。先行燈も華やかに。江戸珍らしき。祇園ばやし。五平太始め末社ども所望々々も聞捨てに。フシ地囃子打つて行過ぐる。新太夫地向うへ來かゝる半時九郎兵衛。内匠程見るより五平太幇間ども。程詞申しお頼み申しやす九郎様。爰でと新地頼むにうなづき。詞俄のはやし一番所望だ。頼人は半時九郎兵衛。頼まれて貰ひましよと間太夫いふに是非なく打ちかゝる巻太夫隣の簾押しあげて爰でちよつくら囃してくんな。嘘のない本町綱五郎。はやし所望と地聲かけられ。二人あなたこなたの氣を鉦太鼓三絃の。どうしてよからうろ〳〵と。開する内左七が。詞ア、さう一時に兩方からおつしやつては。私共が大の眩暈。後先を申しては。お互に御不足勝ち。又同じことを二度お聞きなさるも畢竟御無盆。爰はわたしが中を取つて。お二人の眞中で囃しましよ。それで双方御料簡と。地いひつゝ太鼓の音色よく。二人よいや〳〵と見物群集。フシちり〳〵ぞめき別れ行く。内匠地それと目まぜに五平太が。新簾おろせば半時九郎兵衛。詞幇間の

左七とやらちよつと逢ひたいと。関 地呼ぶに是非なく立戻り。詞何の御用でござります。新イヤ外の事でもない三浦屋の花咲毎晩通へど振付ける。聞けば本町綱五郎とやらいふ二才め。深う馴染んでをるとのこと。又手前も其座敷は格別に勤めること聞いた故。どうぞ貰うてくれまいか。関 詞ハヽ、これは又迷惑千萬。お客の座敷勤めるは中間の役。十方旦那のわたしが身。どなたこなたと分け隔ては。新ヤ無いとは言はさぬ。九郎兵衛が頼みかゝつた此返事。聞かぬうちは一寸も動かさぬ。巻イヤ何九郎兵衛とやら。何故直ぐに言はぬぞい。五丁町に名の知れた本町綱五郎。最前から聞いてゐるが。幇間頼んで口説かすとは。通り者には似合はぬ〳〵。新ム、われが本町綱五郎ぢやな。名は聞けど逢ふは初め。巻半時九郎兵衛。新本町綱五郎。巻以後は 二人見知つて貰はうと。地江戸の生えぬき男の生粋。フシ詞もさつぱり見事なり。地 関左七は中へ分入つて。詞お直に何かの達引は。どちらが負けても意趣のはし。いざこざなしに妾は一番。私が貰ひます。後方までに新ム、面白い。見事汝が此事を。関ハテ扱きざな九郎兵衛様。マア奥で一献おあがりなされませ。巻そんなら左七。花咲を九郎兵衛に。関サ、ヽ何もかも此胸に。新きつと返事を待つて居るぞよ。関先づお入りなされませ。唄戀といふ字は。詞の糸で。結んで。其下心。ナホスフシ村太夫俄見がてら。綱五郎が母の手をひく妹のお房。七年三つの年配も男えらみに肌知らず。袖はとめても何所やらに。本フシおぼこは見えて可愛らし。詞ア申し母様。今の囃子は面白いことぢやござんせぬか。伊久太夫ヲイノ此年になるまで。終に吉原で俄のはやしといふは。今年が見初め。村サイナ。それにあの太鼓打つた一人の人。いとしらしい男ぢやと。関 地噂の人は目の先に思案工夫の幇間の左七村見るからぞつと戀風の含む目許も。フシ愛嬌あり。伊久 地母はそれとも氣も付かず。詞綱五郎も來てゐるであらうが。何所にゐるぞい逢ひたいと。村 地いふは幸ひ渡りに船。お房は左七が傍に寄り。詞申し近頃申し兼ねましたが。本町の綱五郎といふ人の。遊んでゐられます茶屋はどこでござります。地御存じならばどうぞ教へて下さんせ。関 詞ハイ〳〵則ち其隣の近江屋。わたしも随分お近付きでござります。村お名はえ。関幇間の左七と申します。村テモよい名ぢやなあ。どこにゐさんすえ。関ハイとつと水道尻に居ります。村お前獨りかえ。伊久コレお房。そんな事は聞かいでも大事ない。ちよつと兄を呼出して。関ハイ〳〵私が呼

出して上げましよと 地 内へ這入れば。村 詞 テモ氣のよいお方。男振なら氣立てなら。地 物和らかでしやんとして。好いた風ぢやと伸上り。見るうち出づる綱五郎。巻 詞 ホ母者人。お房。俄御見物でござりますか。伊久 ヲイノ。それはさうとちと内へも歸らしやれ。昨夕からの流連なら。酒も大方過ぎたであらう。此春勘當許してから。内の事はそなた任せ。ひよつと身上しもつれては。あの母があまやかし。勘當許したばつかりで。よい老舗の商賣を。散々にしたと言はれては。そちは固より。行先の近い此身。死んで未來で親父殿へ。どう言譯はあらうと思ふぞ。地 どうぞ心を入替へて。糸屋の家の續くやう。思案してたも綱五郎と。スヱ 打涙ぐむ フシ 親身の意見。巻 地 誤り入つて綱五郎。詞 ハヽ成程私が不調法。ふつつり廓通ひはやめて。伊久 ヤレ ふつつり止めいと言ふではない。若い者のことなりや。友達中や廓の手前付合ひもあるもの。それ知らぬおれでもないが。此お房も嫁入り時分。どうぞよい處へ片付けて。わしに樂しみをさせてくれ。村 コレ兄様。わしや何處へも行くこといや。そんな事はほつて置いて。アノナ。アノ囃子の太鼓打つた。左七さんとやらいふお人は。お内儀さんがござんすかえ。巻 ムヽイヤありや獨住み。村 スリヤおかみ様はないかえと。地 味な所へ念押して嬉し恥し母の前。脇目に フシ ちらすはぢ紅葉。伊久 地 母は引取り。詞 サお房歸りましよ。晩には必ず戻らしやれと。地 我が子思ひの姥櫻。櫻に曇る花の町跡にも心引かさるゝ フシ 娘を連れて立歸る。内匠 地 引違へて花咲が。詞 綱様々々々。お前も兼て知つてゐさんす九郎兵衛が。わしを身受けするといふて。追付け手附を渡す相談。聞くと其儘知らさうと。地 思へど叶はぬ勤めの此身。どうぞ仕様はないかいなとおろ／＼涙に。巻 詞 スリヤ九郎兵衛は。手附の相談するといふか。今も今とて九郎兵衛が一言。もう腕づくと思へども。左七が挨拶深切を。無下にもならず後までにと受合うたが。シテ其手附の金は何程。内匠 アイ百兩でござんすと。開 地 いふ内奥より 詞 花咲様／＼。内匠 エヽ何をいふ間もない。地 後に／＼と花咲は フシ 暖簾押上げ入る跡に。開 詞 其百兩貸しましよと。地 投出す顔は。巻 詞 ヤアわりや左七。此金はどうして。開 イヤそれには段段譯ある事と。地 邊り見廻し小聲になり。詞 元私は武士の果。大切の小倉色紙を。去年淺草の寺内にて。盗まれたる科によつて流浪の身。其盗人といふは。アノ隣に居る山住五平太。もと私が朋輩。慥かに彼奴が仕業とは思へども。それといふ

證據もなく。付けつ廻しつ窺ふ內。傍(そば)を放れぬ半時九郎兵衞。サ此奴(こいつ)も素性の知れぬやつ。二人を捕へ詮議せば。色紙の在所(ありか)明白に知れるは必定。ガサ何をいうても非力(ひりき)の私。力に及ばぬ無念の月日。御用立つ此金は。浪人しても武士のたしなみ。今日の手附の間に合はせ。こなたの難儀を救ふといふも。男と見込んで頼みたさ。此左七が力となり二人を捕へて小倉の色紙。二度我が手に入るやうに。コレ偏(ひとへ)に頼む綱五郎殿と。地 額を大地に押しさげて。思ひ入つたる。其風情。詞 いかにも。お頼みの一通りは聞えたれど。女郎のことに金借りて。肩持つたといはれては。どうも此綱五郎の顔が立たぬ。マア此頼みは呑込まれぬと。地 財布を取つて フシ 投返せば。開 地 ハツト左七は當(たう)惑(わく)の胸を極めて綱五郎が。一腰抜いて取直せば。詞 是はと掴り止(とゞ)むる綱五郎。開 詞 イヤ〳〵。色紙を二度取返さでは。この身は一生埋木(うもれぎ)の。地 花に呼ばれつ色里に。生恥さらす幇間(たいこもち)。何と恥辱が雪(すゝ)がれう。生きて甲斐なき我が命放して死して下されと涙ぐみたる心根を。詞 思ひやつて綱五郎。詞 ム、成程わしを男と見込んで。命に代へての頼み。ハテもうそれ程に思はんすことなら。頼まれて進ぜませうわい。開 そんならアノ聞届けて下さりますか。詞 サア頼まれて進ぜるからは。わしもこなんに無心がある。こゝをよう聞いて下んせ。色紙の詮議の相手は侍。一人は名に負ふ半時九郎兵衞。まさかの時は命づく。命を捨つれば家が立たぬ。さつきにも母者人の意見。親の跡を絶やしては折角勘當許された。此綱五郎先祖へ對してどうも立たぬ。が爰がこなんへわしが頼み。さつきにちらりと見た妹のお房が素振(そぶり)。何とあいつと女夫(めうと)になつて下んすまいか。開 エ、。詞 サこれ家をさへ繼いで貰へば。假令(たとへ)命を打ちやつても心が殘らぬ。突込んで色紙の詮議。命にかけて取返して進ぜましよ。開 エ、有難い忝い。さうおつしやることならば。いか樣(やう)ともお詞に從ひませう。さりながら私が難儀に付けてお前の命に及ぶ事を。詞 ハテ何のいの。モ頼むといはれちや一寸も。引かぬが老舗(しにせ)の綱五郎。九郎兵衞であらうが。侍であらうが。氣遣ひちつとも仲の町。ヤコレ落着いて居なさいと命は。地 露塵(ちり)大丈夫 フシ 江戸の育ちぞ頼もしき。開 詞 そんなら此金親方へ。詞 イヤサそれでは此男が。開 其處(そこ)は幇間(たいこ)が取計ひ。首尾よく色紙のかへるまで。矢張りわたしは幇間(たいこ)の左七。地 綱樣後(のち)にとぢん〳〵ばせより。揚屋を フシ さして駈り行く。内匠 地 際(きは)を見合せ駈出る花咲。詞 相も變らぬ九郎兵衞が。身請けの談合(だんかふ)わしや

氣が揉めてなりやんせん。左七様の心さしお前は受けて下さんしたか。卷さればいの。それに付けて隣の侍。五平太めは矢張りゐるか。内匠イ、エ五平太はたつた今裏の方から大門口へ。卷地ヤアそれやつてはと駈出すを。内匠裾に縋つてコレ待つた。詞氣相かへてコリヤ何所へ。様子聞かねば放さぬ〳〵。卷地ヤア面倒なと突飛ばし跡を。慕うて三重へ追うて行く。地早引け四ツに地廻りの。往來も絶えて日本堤。鼻唄諷うて五平太が。卷歸る跡より綱五郎。小腰かゞめて。詞申しお侍様。ちよつとお待ち下さりませ。内匠ム、待てと留めたは何やつだ。卷イヤ綱五郎と申す者でござります。が其許様は。山住五平太様ぢやござりませぬか。内匠成程身どもは五平太ぢやが。其綱五郎が何の用。卷イヤ外の事でもござりませぬ。其許様は小倉色紙を。御所持なされてござるとの噂。何と卒爾ながら。ちよつと拝見仕りたい。内匠ム、イヤ身ども覺えないわい。卷イ、ヤないとは言はさぬ。淺草寺の寺内に於て。内匠何がなんと。卷へ、、、。どうぞお見せ下さりませ。内匠こいつ馬鹿なことをいふ二才め。酒に喰ひ醉つたか。エ、聞えた。覺えないこと言懸け金でもせうといふ腹だな。惡く騷ぐと其分には赦されねど。爰は場所が惡い。サそこ退いて通せ。卷イヤ通すまい。足元の明い内。きり〳〵色紙を出さいでな。内匠奴は言懸けひろぐな。身が懷中に色紙がなくば何とする。卷ハテ前先見ぬこと言はうかい。色紙がなくば此體存分にならうわい。内匠面白い。しかとなれよと地詞詰め。內懷まで明けひろげ。詞サアどこにある。卷ヤ。内匠サ見ぬかやい。兩の袂にや紙屑もないぞよ。卷サアそれは。内匠ヤ大泥棒めがと。地髻摑んで土に摺付け。詞よく太平をぬかしたな。どの口からぬかした。マ此頤か。ヤ此腮たか。エ、白けたしやツ面。見るもなか〳〵いま〳〵しいと。地刀の鍔にて眉間くわつしり流るゝ血汐。卷詞ヤわりや男の面に疵付けたな。内匠ヲ、付けたりやどうする泥棒めと。鍔も碎けと續け打ち。卷もうこれ迄と綱五郎。ひらりと拔いたる刀の光。内匠肩先ずつかり五平太が。拔合せててう〳〵〳〵。打合ふ光は闇の夜の。星か螢か電光石火危かりける 卷へ次第なり。地初めの深手に漂ふすきま疊みかけ〳〵。乘りかゝつて綱五郎。咽吭ぐつと止めの刀フシ心地よかりし有様なり。新地うそ〳〵來かゝる半時九郎兵衞。卷様子聞くとも白刃の、血刀。襦袢の片袖引きちぎり。血押拭うて投げやる後。新そつと拾うて歸るとも。卷知らぬ綱五郎溜息つき。詞慥かに

色紙と思ひの外。ム、扨は氣取つて九郎兵衛に渡したか。地何にもせよ此死骸。フシ人に見せじと見廻す所へ。新地提燈さげてあの屋十兵衛。火影にすかして見合す顔。詞綱五郎ぢやないか。巻伯父者人か。新地提燈吹消し一散に闇は。二人あやなし。三重

第四　糸屋の段

地繁昌の。町は八百八町なる オクリ其中。中に取分けて本町二丁目中根屋と。暖簾古く老舗たる。店には母や娘のお房。手馴れし業も糸による オクリ さゝがに。ならで夕暮の ギン 空に焦るゝ花嫁は。散る事知らぬ入相の フシ 鐘待ち兼ぬる風情なり。地表へいそ〳〵此家の伯父。唐棧留の袴さへ昔渡りの狡猾親仁。あの屋十兵衛に付添うて。左七もあぢな縁の糸結ぼれし身も紛失の。色紙の行方詮議のよるべ聟と呼ばるゝ昨日今日。町の目見えを引連れて。歸るを見るより母娘。詞コレハ〳〵十兵衛様いかいお世話。伯父様きつい御苦勞様と。地挨拶あいそいつよりも増さる フシ 思ひを目の色に。地出さぬ綱五郎奥より出で。詞これは〳〵伯父者人。お年寄の御苦勞千萬。町向きは濟みましたかな。ヲ、濟みました〳〵。イヤ何妙閑殿。これにゐらるゝ左七殿はお房がきつい戀聟。アコリヤうつむくな。何も恥かしいことはないわいやい。所に氏素情も正しい人と。兄綱五郎の合點づくで。昨夕さらりと祝言の盃も濟んで。女夫は寢間へ這入る。お袋も休ましやつた跡で。綱五郎がおれへの頼み。勘當のうち流浪した加減やら兎角病身にござる。幸ひ左七をお房に見合はす上は。家相續は氣遣ひない。わしも安堵しましたれば。ついでに明日町の名前も。譲り替へて下されと事を分けておれへの頼み。幸ひ今日は町の算用寄合ひ。左七を連れて町中目見えの上。譲り替へも濟み帳面も改めました。成程々々其事は今朝もちよつと聞きました。ハテもう脊丈伸びた此お房。餘所へ嫁入さすれば兄の物入り。五年六年内を出て。うき艱難しやつた綱五郎。兎角アノ子の心任せにしてやつて下さりませ。兄や娘や聟殿の。手にかゝつて介抱受け送られうと思へばこんな嬉しい事はござらぬ。わし程果報な者はないと。地悦ぶ親の心根を思ひやる程綱五郎。明日をも知らぬ我が命と。知られぬ母のいたはしやと。ひし〳〵胸へあたりの人目。まぎらす煙草の煙より。敢果なき此身と喰ひしばる フシ 吸口。かみ割るばかりなり。地知らぬが花聟左七も挨拶。詞んと存じませぬ私。とかく宜しくお指圖

をお頼み申上げまする。ヲヽ此十兵衛も年寄つて子とてもない身。此方からも頼みますぞや。エヽ聞けば生れは上州とやら。イヤもう斯うなるも皆前生の因縁づく。エヽかう言やあぢな言分ぢやが。親も子も義理ある中が猶大切。お袋も是からは此左七殿を。綱五郎ぢやと思うて可愛がり。ハテ其位に思はねば。隔てに親子は順熟せぬもの。又綱五郎は勘當許さぬ昔と思うてない者にして居やつしやれ。ハヽヽア、とつともう餘り目出たう嬉しうて。何やらいかう理に入つて來さうな。サヽこれから奥へいて。打解けた盃しませう。ヲヽそれ〳〵昨夜の殘でコレお房。アイ〳〵ほんに御苦勞休め。伯父様に酒一つ。兄様お出で。左七様。地 こちの人さへ言兼ねてまだ恥かしき初女夫。フシ 打連れ奥へ。入相過ぎ。地 空の雨夜の暗きより。心の暗き半時九郎兵衛。

門口より聲高に。詞 綱五郎内にかと 地 いふを聞付け出る戸口。顔を覗いて。詞 ムヽ面はこれまで見知つて居れど。物いふたは一昨日初め。がマ何と思うて此方の家へ。イヤ別の事でもない。一昨日からわれに逢はうと跡追うて廻つた。が大方家にゐようと思うて來た譯は。此間われが取つた花唉が手附證文。何とおれに與れぬかい。ハテ仰山な。高が女郎の出入り。其様に聲高に言はいでも。やる筋なれば此綱五郎未練は殘さぬ。さつぱりとやる。が又やるまじき筋なれば。金輪際ようやるまいわい。ムヽコリヤ尤もぢや。そちも大枚の金。百兩といふもの出した手附證文。只貰はうといふでもない。コレこれで貰はうと 地 懐より。取出すは血汐の片袖。見るよりはつと綱五郎。身の一大事二つには母に聞かせじ知らせじと。心は千々に塞がる胸。詞 へヽ

へヽヽムヽ何と結構な代物であらうがなア。サいやと言や代官所へぢや。アヽこれ九郎兵衛。成程望みの手附證文。われにやらうが。明日まで待つてくれ。エヽならぬわい。待つくらゐなら又外に。結構な代物があれど。急に金にならぬ故。モ明日のことはさて置いて。一時も待たぬ半時九郎兵衛。ぐづ〳〵ぬかしや此袖が。たつた今代官所。サ否か。應かの一口商ひ。きり〳〵ぬかせと 地 憎體も。握つた證據に腰強く。弱身へ付込む。フシ いがみ面。詞 ハテモさう言やりや是非がない。證文は渡さうが。繻袢の事は命づくぢや。命はちつとも惜まねども。今死ぬるまでも母者人の耳へ入れともない。コレ爰はわれも男づくぢや。何と河岸まで歩んでたもらんか。其上で證文と。其片袖とを引替へに。ムヽハテもう證文さへくれる氣なら。それ程の事は不承しよ

うわい。サア來い。地來いと先に立ち。無理の理詰めもそでないと。言はれぬ血汐の片袖に。道理が負けてしを〳〵とオクリ伴ひへ河岸へと行く空の。地親ならぬ。親の心の闇ならで。義理の子故に迷ふ身の。道さへ暗き町筋をオクリ尋ね。尋ねて石塚彌三兵衞。小糸を連れて提燈の小オクリ火影に。すかす門の口。絕えて程經し老人のフシ心覺えに打頷き。戶を引明けて上り口。賴みませうと訪ふ聲。母は聞付け一間を出で行燈差寄せどなたぞと。親ふうちにしづ〳〵と。娘を伴ひ石塚彌三兵衞。詞ホヽウ久々中絕致せし某。お見忘れも御尤も。召連れたるこの娘は。藥の上より養子に貰ひし。上州赤城の家中。石塚彌三兵衞で御座る。ホンニ誠に。これは〳〵とんとお見忘れ申しました。マ何と思うて殊に夜に入つてのお出で。マア〳〵是へお通りなされませと。地奥底もなき挨拶に。フシ上座に通れば母妙閑。血筋ゆかしき我が子の傍。詞ホヽ、產落した母なれど。藥の上から養子にやつたそなた。モほんに我が子ながら初めて逢ふも同じ事。ヤレ〳〵マア美しうよい器量に成人しやつたなう。親御達の育てのよさと思はるゝ。コレ〳〵マちと仰向いて顏見しやいのと。地餘念なき母娘は只。フシ差しうつむいて答なし。

地彌三兵衞詞改めて。詞イヤこれお袋。はる〴〵と尋ね參つた仔細といふは別儀でない。樣子あつて此娘。實の親御へお戾し申す。エヽそりや又何故でござります。サレバ。二十年の今日の日まで。實の親より大切に孝行にしてくれたも。緣なきことは力なし。というて娘に芥子程も科はない。樣子は彼に聞かれよと。地濕り勝ちなる詞のはし。詞ムヽ、お怒りの體もなく。御不便におつしやりながら。實の親へ戾すとは。ハテ心得ぬ。コレ娘。樣子はどうぢや。サいうて聞かしや。早う地〳〵とせつかれて。小糸はやう〳〵顏をあげ。藥の上から二十年の年月育てあげられし。大恩のある父樣に親子の緣は身を切るより。つらい悲しい憂き思ひ。まだ其上に恥かしや十月のお腹を苦しめし。產の恩ある母樣に又苦をかけに戾されし。切ない苦しいわたしが胸。あけて言ふのも。フシ恥かしながら。詞母樣。わたしやお屋敷の御法度を背いたわいなア。ヤア〳〵何といやる。御法度を背いたとは。扨はそなたは不義しやつたの。ア、これお袋。不義なればサ命がない。そこを存じて何にもいはぬ。サ其言はれぬ病ひの相手は。不慮の儀に付き御暇。今この江戶にゐるとのこと。聞くと彼めが癪の種。其上に早や七月。屋敷の內で產み落さば。間數とてもなき小身の某が

住居。お上へ知れたら娘も孫も。いぢらしい目を見ようかと。それが不便さ可愛さに。地二十年來手塩にかけ。蝶よ花よと樂しみし。たつた一人の此娘を。緣切つて返しに參る身が心。どの樣にあらうと思はるゝ。詞ア町人の身分ならばな。早速聟よ舅よと。取結びもあるべきに。地刀差す身の情なさ。召連れまゐる道々も。彼が姿を見るに付け。何の因果で是程まで。育て上げたる娘に別るゝことぢやと思ふ程。一足歩めば二足跡へ。寄る年の身の便りなさ。子といふものゝあればこそ。忠も盡せ義も磨け。一人娘に引別れ。何樂みの扶持知行。淺ましの武士やと。表を立てて何事も言はぬといひし詞の下。取亂したる恩愛の。涙は武士も町人も。別に變らぬ忍び泣き。母も涙に娘は猶。有難涙名殘の涙々は玉川の フシ六つの秋を。絞りけり。地彌三兵衛は泣く目を拂ひ。詞ハアこれは武士のあるまじい未練の涙。お袋の手前も面目ない。シテ御子息綱五郎殿はお留守よな。御歸宅の節よきやうに賴み入る。ヤなに小糸。いふまではなけれども。若しかの人にめぐり逢はゞ。それとても貯へなき浪人の身の上。假令袖褄結んでも。裏屋長屋の住居するとも。貞女の道を忘るゝな。無事で暮せよ。お袋さらばと 地いひ捨ててしづ〱立つて表の方。見返りもせず フシ出でて行く。地是なう暫しと駈寄る戶口。外からぴつしやり立切る緣別れて。フシこそは立歸る。地跡は親子が詞さへ。スヱテ泣き連れ歸る雁の音も。おぼろ〱に春の夜の。本フシ霞が埋む鐘の聲。地母は娘の傍に寄り。詞コレ小糸。何もきな〱と思やることはない。世間にない習ひぢやなし。そしてほんに姉のお房。姉妹とはいふものゝ二十年振りでの名乘合ひ。また近付きにする人がある。昨夜姉のお房によい聟とつての。それは〱よい氣な人。ほんに明日まで延ばすもどうやら異なもの。マア〱今夜引合はせう。姉や。お房。お房と呼ぶ聲に フシアイと答へて姉お房。一間の內より立出でて。詞ヲヽ母樣許して下さんせ。昨夜夜の更けた加減か。酒が廻ると伯父樣も御寢なる。わたしも左七樣も。アノ四疊半でふせりました。そしてアノそこにござる女中樣は。どこから見えたお客でござんすえ。ヲヽ我が身としたことが。いかに昨夜の草臥ぢやとて。さつきにからのもや〱。二人ながら根から知らずか。知らぬかとは何事ぢやいな。さればいの。こゝにゐやるは二十年以前。藁の上から養子にやつた。そなたの妹ぢやわいの。マア〱樣子は長いこと。養父石塚彌三兵衛樣が。たつた今連れて戾しにござつたわ

いなう。エヽそんならあの子が妹でござんすか。地ナウ懐しやと駈寄れば。姉様かいなと手を取合ひ。親は泣寄り姉妹が。何に付けても目にうるむ。フシ涙は女の道具なり。詞ヲヽ妹何にも氣遣ひに思やることはないぞや。綱五郎様といふ慥な兄様ある上に。昨夜ござんしたこちの人。左七様とてそれは／＼氣立てのよい。モウ／＼／＼母様の前で言ひ難いが。其モウ男のよさ。そなたもわしにあやからしてあんなよい殿御持たす程に。何にも案じることはないぞや。ヤアノ母様え。左七様起して。此子に近付きにせうかいな。ヲヽ聟殿も眠むたかろが。ほんの里子の戻つたやうにうひ／＼しうしてゐやる。左七殿にも引合はして。此母が頼みませう。ちよつと起して呼んでおぢやと。地詞の内に姉お房。一間へ入つてよい男持つた自慢を今逢うた。妹に見せる鼻の先行燈の火に見合す顔。詞ヤアお前は。アヽこれ／＼。サコレ妹御。何もかも一間で様子は聞いて居りました。何にもマア今晩はおつしやるな。不思議の御縁でこなたの内へ参るからは。兄弟同然のこな様の身の上。身に引受けてお世話致す／＼。お身の上の色話しには。お袋や姉御の傍ではさし合ひもあるもの。ナコレ何事も推量致して居りまするると。地目まぜで留められ詮方も。いろてよいやら惡いら。憎い中にも可愛い男。スヱ差控ゆれば。それぞとは。フシ知らぬが佛母と姉。詞ヲヽ聟殿よい推量。身贔屓をするやうなれど。モ若い時にはある習ひ。モ思ひも寄らぬ面倒な小姑が。どこからやら戻つて來たと。うるさうも思はしやろが。こな様の妹と思うて。遠慮なう呵り廻して下さりませ頼みます。わしやもう何かの氣草臥れ。奥へ行て休みます。若い者は若い同士。コレ小糸。聟殿や姉にも何かの譯を話しや。ヤそれはさうと此綱五郎。又どこへぞ行きやつたさうな。アヽ薄着して風引かねばよいが。ほんに苦のやむ隙がないと。地兎に角物を思はする子故にかこつ我が居間へ。フシ入るや入るさのつぎ穂なき。左七小糸は顔と顔。あけて言はれぬ。もつれ糸。地お房は立つて押入れの蒲團。とり出し塗枕。詞今宵は伯父様もお泊り。妹も奥に寢やるであろ。どうやら奥は氣が置かるる。サア左七様。二階でお前と私は寢て。地誰憚らぬ一つ夜着。詞サア／＼妹。そなたも早う母様のお傍へ行てもう休みや。地サアござんせと嬉しげにいそいそしたる姉娘。詞エヽ何のこつちやいな／＼／＼。ホンにあたお目出度い。あた阿呆らしい。又聟様も聟様。こんな處へ聟入りするといふ様な事が。マ

何處の國にあるものぢやいな。コレ〳〵妹なに言やる。こんな處と卑下しやるは尤もぢやが。今宵からはこちの旦那殿。そなたもどうぞ主の世話になつて。又主のやうなよい男。地持たしてやらうと又しても。男自慢が口先へ。出るに付けても。燃上る胸の焔のやる瀬なく。詞嫌でござんす。何のよい男の何のとて。人の心を思ひやりもない。畜生のやうな。猫のやうな犬のやうな。モほんに〳〵わしや噛付きたい。地喰付きたいと袖を喰ひしめ。喰ひしめて身を顫はせし腹立ちの涙。道理と思へど此場の仕儀。いふに言はれず胸板に釘鎹を。フシ打たるゝ思ひ。地悟られまじとコレお房。詞二十年も育てられた父御に別れた水離れ。こりやきつい疳癪と見ゆる。それ黒丸子でもあるなら白湯も一口持つておぢや。早う。地早うに何の氣も。付かぬおぼこの姉娘。

フシ奥へ行く間を待兼ねて。小糸は左七にしがみ付き。聞えぬわいなと泣出す。口に袖あて。詞コレ聲が高い。譯を語るもせつくるしい此仕儀。コレ紛失の色紙詮議の間。そなたの爲にも實の兄。綱五郎殿の情にて。暫しよるべの此聟入。胴慾な者。聞えぬ者と恨むは重々尤もなれど。爰をそなたの親里とは夢にも知らぬ此左五郎。さりながら。昨夜の祝言今日の譲り。一旦綱五郎殿へ契約の義理を立つるも今宵一夜。今夜中には色紙の在所も知れる筈。コレ暫しの事と辛抱しや。殊に又アノお房が心さし。これとても捨てられずと。地詞に小糸は恨み泣き。詞左五郎樣。聞えませぬ。地ソモヤ二人が馴初めをいふは今更愚痴なれど。去年の彌生の雛祭桃と。サハリ柳の女夫花美しいというたのを。目で合點して其時に。柳の糸の名によせて。わしは三千年かはらぬ

と花によそへて謎々を。とく下紐の結ぼれて。お身の難儀の憂き別れ。只ならぬ身を胴慾に。何のいなせも。音信も泣いてくらせし憂き月日。聟入せねば色紙の詮議。しられぬ事でもあるまいに。たつた一夜か二夜さの姉御の心さし捨てられぬとは餘りな。移り心と取付いて恨みフシかこつぞ。道理なる。地左七は只ハアハアと手當るやうにお房が手前。奥を見やりて立つつ居つ。うろつく中に姉お房。フシ茶碗片手に黒丸子。詞サア〳〵一ぺん尋ねて取つて來た。白湯も沸して來た程に。地一口呑みやとさし置けど。腹立ち涙に身を投伏せ。正體なければそれぞとは。露知らぬ身の氣も付かず。詞ヲヽコリヤもう餘程きつい癪。今さはつたら惡からう此儘寝かして置くがよい。モウ夜も更けた左七樣。地サア〳〵ごんせと手を引かれ。何と詮方見かへる聟。何の心

もなまめく姉。身を顫はして泣く妹。三人三つの金輪の火上る。ヘ二階は燈火も。いとしめやかに見えければ。小糸はあるにもあられぬ思ひ前後。不覺のうらみ泣き。詞千の万のというたとて。姉樣の事なれば所詮此家で添はれぬ緣。とはいふものゝ左五郎樣。變りやすいは男の癖。ひよつと私に愛想がつき。姉樣とこの家で。一生添ふといふ樣なひよんな氣にならしやんしたら。わしやマア何とせうぞいな〱。ヲヽさうぢや。生きて憂き恥さらさうより。憎い男へ面あてに。地死ぬると覺悟極めても。又引かさる我が夫の スヱテ心は何と白紙や 相の山カヽリのべに。今置く露涙。口紅粉筆の我とわが。思ひ血を吐く時鳥。ナホスフシ月がないたか一聲も。哀れを添ゆるものとては夜半の。嵐のしみ〴〵と。身にしむ母の恩の程。思ひ續けて綱五郎。九郎兵衛に契約の時刻は今宵明六ツの鐘はかねての生死の境。今一度母に今生の。暇乞ひをと我が家の軒。戸を引明くれば驚く小糸。詞誰樣ぢや今頃に。どこの人ぢやと。地書置を袂へ隠す フシ顔形。地ぢろ〱眺め綱五郎。詞ムヽどこの人ぢやと言ふこなたはどうやら見た樣なが。マアこなたは何所の人ぢや。アイ。わたしは爰な娘でござんす。ヤ何ぢや娘ぢや。アイ。そしてお前は何所のお人ぢやえ。わしかえ。わしは爰の息子ぢや。エヽそんならお前が兄樣。綱五郎樣でござんすかと。地いへど不審の一間より。詞ヲヽ合點が行くまい綱五郎。戻りやつたかと母妙閑。地一間をとつかは立出でて。詞ヲヽ不審は尤も。コレ此娘はそなたの妹。藁の上から養子にやつて今の名を小糸。譯はゆるりと明日でも話さう。ムヽすりや。石塚彌三兵衛殿へ養子にやつた妹。マア〱何はともあれ息災で嬉しい。ヤそれはさうと母者人。少し話したいこともあり。コレ小糸そなたも草臥れてもゐやうし。奥へ行てもう休みや。アイ。サヽヽ。アイ行きや早う〱とせり立てられ。長地休む心は泣く〱もたゞ眼にかゝる二階の方。思はじ見まじと思ふ程。思ひやる瀬も夏の虫。我をこがせる煩惱の。暗き火影のねたましく。フシ是非なく奥へ入りにけり。地跡打見やり綱五郎。母の傍へさし寄つて。詞ヤコレ母者人。ちと無心があるが聞いて下さりませぬかい。ヲヽあの人としたことが。親子の中に無心とは何事。ぢや。アいや外のことでもない此綱五郎。又勘當がして欲しい。ヤア何といやる綱五郎。尤も若氣の廓通ひ。死なしやつた親父殿の堅い氣で勘當をさつしやつたも。ほんの塩踏ますため。追出した其跡で母が案じは幾世の思ひ。五年

六年泣暮し。漸う尋ね逢ひ。勘當許して間もないに。又勘當してくれとは。氣が違うたか綱五郎。アいや氣も心も違はねど。ほんの譬にいふ通り。乞食三日すると忘られぬと。勘當許されて家へ戻つて其氣づまり。もう〳〵商賣がうるさうて。家に居ることがいやで。マヽ第一こなたの顔見る事が眞から底からとんと厭ぢや。ぢや程に。たつた今又勘當して下され。いやと言はしやつても。どう言はしやつてもこちから親を勘當ぢやと。地投出す詞に母親が。愛想もこそも突詰めた。腹立ち涙聲ふるはし。詞ヤイ罰あたりの不孝者め。是程に思ふ此母に。何が不足で其様な愛想づかしをよう言ふな。モウ〳〵とんと思ひ切つた。望みの通り勘當する。出て行きをれ。コリヤ忝ないわ。ア、案じるより産むが安いとあまちやな母者人。くど〳〵〳〵と埒が明くまいと思うたが。イヤもうとんと野の宮。世間が廣うなつたやうな。ヤコレ親でなければお房めも。今夜戻つた小糸めも。兄弟でないほどに。重ねてどこで逢ふとも。物もいふな他人ぢやと言聞かして下されや。どりや是から出掛けうと。地大手を振つてフシ表の方。詞綱五郎待ちや。親子は一世。此世ばかりで又逢はれぬ。母が顔も見もしたり。そなたの顔も此母に。とつくりと見せてたも。エナヽ何といはつしやると。地肝に應へて立留れば。二階の障子しめ明けに。様子立聞く聟左七。母はせき來る涙ながら。詞人を殺した科の首綱。親兄弟にかゝらぬやう。妹のお房に聟取つて俄の讓り。其上勘當してくれと言やるそなたの心。又さつきに奥からちよつと見た。九郎兵衛とやらが持つて來た。血に染まつた片袖は。アリヤわしが縫うたそなたの襦袢。エヽサこれ。何ぼ女子に生れても。そなたを産んだ母ぢやわいなう。壁に馬を乗りかけたやうに。昨日から今日の仕儀。其處へ心が付かいでかいなう。ムヽスリヤ。何かの様子をば御存じか。ハア。地はつと驚く綱五郎。二階も障子を締切る胸板。一間の内より伯父十兵衛走り出でて。詞コレお袋。わしも共々隱したを料簡して下されや。勘當許して間もないに廓通ひの綱五郎。意見しに連れて戻ろと尋ねに行く日本堤。行きかゝつたれば人殺し。怖々ながら提燈で顔見れば綱五郎。コリヤたまらぬ。マヽどういふ譯と様子問ふ間も人目のこはさ。無理やりにこちの家へ連れて戻り。何かの入譯左七の様子。マツかう〳〵して呉れとおれへの頼み。ハテもう返らぬ事は是非がない。一先づ爰を立退かさうと思へども。言はゞ一軒の主。駈落になつては家が立たぬ。幸ひ左七に

お房を娶せ。聟にしたのも。コレこなたの心を休めうと。綱五郎が孝行。わしも又世を廣う綱五郎かくまふ心町の譲りも濟んだ上。それからは上方へでも落さうと。心を砕いた昨日からのコレこのしだら。死なれた兄貴佐右衛門殿が臨終の枕許へおれを呼んで。コリヤ十兵衛。勘當はしたれども。只不便なは綱五郎。性根さへ直つたら勘當許して内へ入れ。おれに代つて世話してくれと。コレ／＼苦しい中でほろりつと。涙を滾して目をふさがれた。兄貴の末期の詞といひ。俺ぢやと言うて子とてはなし。甥といふも綱五郎一人。若しや縄目にかゝらうかと。昨日今日も一粒の。菩薩も咽へ通りませぬわいの。地何の因果で此様な。憂目を見せてくれるぞと。歎けば母は正體なく。詞それ程までに綱五郎を。可愛がつて下さるか嬉しうござる忝い／＼。地がさりとては聞えぬぞや綱五郎。詞人を殺せば科人と。辨へ知らぬそなたぢやなし。明日をも知れぬ年寄つた此母に憂目を見よといふことか。地これを思へば死なしやつた親父様が仕合せぢや。一年跡に生殘り。情ない目に逢ふことやと。母と伯父とが手を取つて。詞十兵衛様。お袋と。地顔見合せて一時にわつと泣出す二階にも。お房が泣き聲段梯子踏みはづすやら落ちるやら。詞情ない左七様が／＼左七様が。書置殘して二階から。どつちへやら行かしやつたわいなアと。地聞いて恟り綱五郎。共に慌てて十兵衛も。詞ドレ／＼／＼マア／＼其書置を讀んで見やと。地老いのそゞろの身もふるひ行燈提げる手もわな／＼。土器搖込み フシ眞暗・がり。地エヽ鈍な人ぢやと綱五郎。勝手へ燈しに行く隙に。小糸は一間をしのび足。夫の跡を慕はんと。心あてども潜りを オクリ難なく。へ表へ立出づれば。小屋根に隱れし左七が門へ。ふはと飛んだる妹脊の縁。物をも言はず手に手を取り。軒に忍べば綱五郎。やう／＼燈し來る行燈。お房がうろ／＼又ばつたり。詞エヽ面倒な。讀むには及ばぬ其書置。此綱五郎が様子を聞いて死ぬる覺悟に違ひはあるまい。今宵中には手に入る色紙。左七が死なぬ其内に取返して渡さねば。折角盡した志も水の泡。母者人さらば。伯父人跡を頼むと言捨て フシ一散に駈行けば。地お房も夫の行方をと駈出づるを母と伯父。留むる内に外面の二人。道を違へて妹脊鳥。塒を立つや明六ツの。鐘は上野か淺草か夜明けぬ。うちにと 三重

第五　道行妹脊の組糸

サハリ いとしさはいとゞ染込む小紫。色に出でたる江戸鹿子。いふに言はれぬ恩と

義理。戀と情にナホスフシからまれし。うき身を何と。左五郎が。小糸諸共本町の。スヱテ糸屋をぬけて出づる夜は。まだほの〴〵の朝霞。見えつ隱れつ行く道の。オクリあてども へいづく。一筋に。二上り唄繋がれ出でて通り町。三丁過ぎて今の身は。してうにかゝる惡緣の。いかなる業が傳馬町。死出の。旅路の。門出は留めてとまらぬ フシ旅籠町。けはひ化粧も宥のまゝ。長地髮も艶なき油町お前の目許の塩町にいとしらしさの淺からぬ。タヽキ淺草橋の橋柱。ふちは瀨となる人心。もし兩國の二道な。風に靡くや柳橋。何の疑らういつまでも。嘘ぢやないかや茅町の。可愛さを目にフシ森田町。正八幡も往昔の。武士の冥加に盡きたかと憂き事に氣をくろ船町遠目に。それと觀音の塔は五重か三重の。罪深き身に。いとゞ猶。義理の父さん眞實の母樣も嘸ぞお腹立ち。

國から深い中ぢやとは知らせ給はず姉樣の。私を恨んでござんせう。堪忍してとばかりにて。縋り付くのも付かるゝも。淚にくれの朝顏や共に。萎るゝ顏と顏。男も淚にかきくれて死ぬる覺悟に書き殘し。爰までは出たれど色紙を搜し出すまでは。死ぬに死なれぬ我が命しばし浮世をかくれ笠。スヱ身の置き所も定らず。そなたは糸屋へ立歸り身二つになり腹な子を。大事に育ててたもいのと。いへば女は縋り付き。サハリ無理は男の辭なれど。タヽキこんな難儀になつたのも。根をたんだへて行く時は。みんな私が戀路からお前に浮世を忍ばせて。何と身も世もありそ海若布かる。磯猿すむ。山家住居も野の末の。月もる宿も。あばら屋も何の。苦にせう厭やせぬ。連れて退くのが嫌ならばとても覺悟を極めた此身。お前の手にかけ今こゝで。殺してたべと取付いて

はかなぐど〳〵ナホスフシ口說言。花の街や。花の露ぬれて戾りの醉ざまし。唄三下リうはき櫻はつい風かをる惡性もの。見事に咲いたとな。咲いた櫻を染めたとさ。染めた此紋どうぢやいな。かげ日向。あるのはしんき。つらいもの。梅を心の誓ひに折るとは何ぢやいな。昨日にかはるとさ。明日は筑紫へ行かんすか。留める袂に苧環の。糸による。柳はしんき。亂れ髮。ナホス諷ひさゞめく フシ聲々に。聞流し行く水の音。大川筋の舟よばひ空しら〳〵と東雲に。すは身の上を人や知る。人や咎めんこなたへと。手に手をとりの諸羽交かあいと鳴けど憎まるゝ。里の烏の告げ渡る。タヽキ廓の樣子をよそながら聞くも。心の力草。ナホス知邊の方にしばらくは。身を寄せ浪や花川戶。花の姿や花の袖。吉左右待たん待乳山吉原。さしてぞ三重へ急ぎける

第六　駒形の段

地聖天町の方よりも息をはかりにえいさつさ。ぐる／＼巻きの吉原駕。跡からひつ添ふ半時九郎兵衛。駒形堂につく息杖。向うへ人影南無三寶。見付けられなとよけるうち。待つた／＼と駈來る本町。フシ棒鼻しつかと支へたり。詞コリヤ何とする綱五郎。イヤ何ともせぬ。いかにもわれが望みの通り。百兩の手附證文。襦袢の袖と替へ／＼に渡したれば。そつちの十分。がおれも又そつちから。ちつと受取りたい物があるわい。ム、そりや何を。イヤ外の物ぢやない。定家卿の小倉色紙。五平太が手から請取り。われが持つて居ようがな。ヨ何がなんと。イヤサあらがふな九郎兵衛。宵にわれが詞のはし。急に金になりにくい代物と。ぬかしたが此方の聞きかけ。三寸俎板見拔いた綱五郎。きり／＼渡して貰はうかい。ム、さうぬかしや面白い。たとへ證據は渡しても。日本堤で五平太を殺し。死骸をどんぶり言はしたまで。黑い眼で睨んで置いた。細言ぬかしやたつた今。代官所へ注進して。三寸繩に締上げさせうか。スリヤどう言うても色紙は渡さぬな。エイワ毒喰はゞ皿。おのれも生けては置かれぬと。地いふより早く九郎兵衛が。先を取らんと拔放し。切付くるを身をかはし。拔合したる白刄と白刄。光りに悧り駕の者。喧嘩々々と狼狽騷ぎ。フシ駕を捨ててぞ逃げて行く。地こなたは互に身の大事。命限り根限り。疊みかけてぞ三重へ切結ぶ。地强惡不敵の九郎兵衛も。義心の刄に切立てられ。フシのたれ廻つて死してげり。地駕の繩目をやう／＼に引切り／＼駈出る花咲。詞綱五郎樣。コリヤ何にもいふな。心を付けよと立寄つて。地死骸の懷中。搜り見れども色紙は無し。コハ／＼いかにと訝る中。こゝに何やら落ちてあると。取上げるを綱五郎。すかし詠めて。詞ヤアこりや質札。扨は色紙を質に入れ。身受けの後金渡したな。これさへあれば氣遣ひなし忝しと押戴く。地後にばら／＼所の大勢。ヤレ人殺しとわめく聲。砂を摑んで眼つぶし。花咲來いと引立て／＼。河岸に幸ひ繫げる猪牙船。飛び乘る間もなく櫓を押立て跡しら。波とぞ三重へなりにける

第七　行德の段

地下總の。フシ行德村に住みながら。身に德もなき貧しさは。持つて生れた盆の窪茂治作といふ小百姓。二畝が見世にぶら／＼と草履草鞋の紐よりも細き煙の侘住居。岩藤は此家へ敷金持つて後連れと。形も容も變る世もフシ金の光のたか

枕。地茂治作は徳願寺の回向も濟んでいつきせき歸る我が家の門の口。見れば女房が圍爐端。ふんぞり返る寢姿に。呆れ果てつこど聲。詞コリヤ嬶。お岩〳〵。エ、マア〳〵背戸門を明けひろげて。何としたどぶさりさま。地起きぬかやいと枕許。つぶやく聲に目を覺し。詞エ、喧しいわいの。背戸門を明けて用心が惡か。何故内にゐやらぬぞいの。ヤイ〳〵。おのれマそんな口を利きをるまい。毎晩毎晩夜を晝と。めくりを引きにうせては夜を明し。晝になると縱な事を横たへもせず。おれがちよつと德願寺樣へ御回向に參つてくる内。起きて居ることがならぬかい。アノ爰な地引きずり女子めと疊叩いて フシ腹立ち聲。地お岩はじろ〳〵茂治作が顏を細目に起上り。詞コレベら棒親仁。こなたはコリヤ氣が違つたの。何ぢやと思うて其樣な。太平を言やるぞいの。コレ此おれはの。赤城の奥御殿で。お年寄樣とも言はれた身。何の爲に敷金持つて。こなたの樣な老耄の。何の役にも立たぬくにや〳〵〳〵と。あたしんきな男を持つぞいの。おれが心任せに暮さうと思やこそ。十五兩の未進に詰まつて。ぎつちかはとしてゐやつた金を立替へ。雨が降ると傘さゝねば住まれぬ家を建直したつた一人客があると。産月に氣の付いたやうに。騷ぎ廻つて借りあるく諸道具を買ひならべ見世にアレ少しづつ物を置いて商ひさすは。コリヤマア誰が金ぢやと思やるぞ。皆此お岩樣のお金ぢやぞや。ほんにおれも此内へ來る時は。まだみづ〳〵としたわしが。あんな男を持つといふは。餘程無分別ぢやがとは思うたれど。ア、高がよぼけたひんこ親仁。夜晝おれが血氣に任してせこめたら。半季か一年で見送つて了はうし。聞きや吉原に娘とやらが勤めして。大分よい女郎と聞けば。ほんの無盡をかける氣で。親子になつた誼みには。年が明いたら年切り増し。年が明いたら年切り増し。皺のよるまで勤めさしたら。萬更捨金にもなるまいと思やこそ。貧乏神の神主を見るやうなこなたを。おれが男に持つたぢやないか。サアかういふが腹が立つなら。勝手にしやれ。こなたの身上といふは。油つぎの會所見る樣なアノ佛壇と。對王時代の古葛籠。底の抜けた鍋釜と紙屑籠も一所に脊負うて。今此内を出て行くなりと。貸した金を耳揃へて戻しなりと。二つ一つの返事ぢやと。地口へ出儘の惡口雜言。いひ込められて一言も。もぢ〳〵として茂治作が。律義一ぺん返答も。スヱ貧苦をくやむばかりなり。フシ折から來るは。めくり友達。さんまの彦治がぬつと入り。詞ハア、久しい物の。又女夫喧嘩で

えすか。大方親仁殿の口が過ぎたものぢやあろ。かういや婆様の贔屓をするやうなが。何もこなたがいふ筋はない筈ぢやて。重ねてからきつと嗜ましやれ。いやコレお岩様。もう／＼今日はわしが挨拶。料簡さんせ／＼。そして今夜は蕎麥切屋のこんがてら。お前を連れて暮早早。來てくれと頼んで居た。アレ德願寺の暮六ツが鳴る。エヽそしてまだ内證で。こなんに話して儲ける口もあり。サア／＼行かうぢやあるまいかと。地人喰馬に相口の。儲けと聞いて顔色かはり。詞ハテもうこなたの挨拶なら。料簡ならぬ所なれど無下にもなるまい。コレ親仁殿。重ねて屹度たしなましやれや。そしてそれおれが行た留守の間に。水も汲んだり。明日の麥もよばして。佛壇の掃除から。買うて置いた鰒も料理して。又それ。戻る時分には。茶も沸して寐所も敷いて置かしやれと。地喚き散らして錢財布片手に提げて二人連れ。伴ひてこそフシ出でて行く。地跡打詠め茂治作が。口惜しいとは思へども。勝たれぬものは敷金の。スエ才覺何と泣くばかり。しを／＼立つて火打箱。打つ石の火のばら／＼と落ちる涙にしめる炭。漸う燈し佛壇の。佛の箔の薄かりし緣は先立つ女房が。位牌に向ふ フシくもり聲。詞コレ嚊。堪忍してたもや。取分け今夜はそなたの逮夜。さぞや草葉の陰からも。いらぬこととして後連れ持つて。今にも娘の花咲が。廓の年明け歸つたら。アノわんさんな繼母めが。むごうつらう當るであろ。それも皆おれが心からと。恨んでばかりゐやるであろ。尤もぢや道理ぢやが。モあの樣な根性の。惡い者とは露知らず。アノ今來た彦治が仲人。敷金持つて來る女房と。聞くと其儘後先の。聞合せもせず呼入れたは。未進を立ていと庄屋殿から。嚴しい催促。娘がことをよう知つて。年切り増して金立ていと。在所の衆のすゝめ。可愛相にお咲めに。長の苦界をさす悲しさ。詮方盡きて敷金の。付いた女房入れたも。眞の娘が可愛いさが。地却て仇になつたのぢやと生きたる人にいふ如く。老のぐど／＼悔み泣き フシ珠數を。こづたふ涙なり。地忍ぶ身は薄の穗風しみ／＼と。まだ近付きにならねども綱五郎は花咲を。親里に預け置き色紙の在所尋ねんと フシ二人連立ち夜の道。詞コレ花咲。九郎兵衛を殺した場で。手に入つた色紙の質札。在所は知れても請出す。金の才覺するまでは。我さへ浮世忍ぶ身に。そなたの風俗目に立てば。一倍心が引かさるゝ。親仁殿をよう頼んで。隨分人目にかゝらぬやう。暫く身をば隱してたもと。地いへば花咲涙聲。ひよんな私に祭

がれてうき御難儀をさせますと。思へば胸が碎ける樣な。詞貧しう暮してござつても。頼もしい私が父樣。さりながら聞けば此春母樣を。呼ばしやんしたとの事なれば。お心知らぬ今の母樣。地お前は大事のお身の上暫く後の辻堂に。待つてゐて下さんせ。詞父樣に私が逢うて。何かの話した上で。跡からお知せ申しませう。ヲヽ尤も。そんなら必ず辻堂に。親仁殿へもよいやうに。地賴む〱と綱五郎。辻堂さして引返す。地花咲は父親のゆかしなつかし逢ひたさも疵持つ足のうら若き。フシ戸を押明けて入りければ。地茂治作は看經の珠數繰りさし。詞どなたぢや誰ぢやと見合す顏。詞ヤアそなたは娘のお咲じやないか。とゝ樣久しうござんすと。いふに駈寄り。詞ヲヽマアようおぢやつたの。エヽモそれからとんと便りもなく。どうかかうかと案じてばかり。ヤそれはそうと。今時分に人も連れず。ムヽハヽア何やらそぶ〱そなたの樣子。聞かぬではなけれども。今の嚊の手前を思うて。齒ぶしへも出さなんだ。そして其。言ひかはした綱五郎殿とやらの事。昨日も今日も談議の場で。餘所事に聞いて居て。心がもや〱案じられたが。其お人はどうしられた。アイ譯をうす〱御存じならば。お話申すも長いこと。たつた今門口まで。送つて來てゞあつたれど。今の母樣のお心も知れず。マアお前に私が逢うて其上でと。アノ後の辻堂に待合はしてござんす筈。ヲヽそれは出かした。よう氣が付いたな。イヤもうひよんな嚊を持つてな。われが手前も面目ない。小さいから苦勞してくれた。其われが惚れた男。命も何も打ちやつて世話する筈ぢやが。サ今の嚊めが其根性の惡さ〱。こちの内にはどうも置かれぬ。がよい思案があるわい。ソレ。われも知つてゐよ。水戸街道の新宿村に。おれが妹。ナヤわれに言うては埒が明くまい。おれがつい一走りいて。綱五郎殿に逢うて來う。其間留守してゐや。嚊めは今夜もめくりにうせて。夜が明けねば戻らねば。マア氣遣ひはない程に。案じずと留守してゐい。地つい行て來ると子故には暗き道さへ。厭ひなく。フシ辻堂さして急ぎ行く。まだ宵ながら淋しきは。本フシ何れ在所の習ひかや。地思ひはいつか花咲が。憂きを喞てる獨言。詞おいとしや父樣の。年寄らしやんしてお氣扱ひ。とつくりとした入譯を。御存じはあるまいし。人殺しの綱五郎樣。どうで遁れぬ天の網。わしも共々死出の旅。覺悟は疾うから極めてをります。今お眼にかゝるのが。一生のお暇乞にならうも知れぬ。何やかや餘所ながら。言ひたい事はたんと

あれどお顔を見ると悲しうて。一つも口へは出ぬわいな。地若しもの事があつたらば嘸ぞお便りもあるまいし。お歎きを思ひやる。不孝を許して下さんせと。憂き身の上や親の事。思ひ續けし口說き泣きフシ袖は。涙の露しぐれ。地人の哀れは白髮のお岩。見たか知つたか我が家の內。差足拔足立戾り。つつと這入れば花咲は。恟り仰天フシうろ〱目許。詞アヽコレ〱〱。何にも氣遣ひな者ぢやござらぬ。今そこで親仁殿に逢うて話で聞いた。こなたは娘の花咲とやらか。ヲヽ美しいよい器量やの。わしは此春嫁入つて來た。今のそなたの母ぢやぞや。エヽこれは〱。お前はアノお母様でござんすか。眞の娘と思召し可愛がつて下さりませ。ヲヽあの子としたことが可愛らいでよいものかいの。取分け小さいから廓の勤め。嘸や苦勞をしやらうと。思へば〱悲しうて。ほんに〱夜の目も碌に合ひませなんだ。マア〱〱よう戾つて下さつたと。地猫なで聲もフシ氣味惡く。詞イヤこれお咲や。聞きやアノ。そなたの深う言交した。其木町糸屋の綱五郎殿とやらも。アノ人を殺して駈落をしられたげなの。エヽ。アヽこれ。何のわしに隱すこと。そなたのいとしがりやる人の事。假令どの樣な事があるとても。命にかけてかくまふ氣。定めて一所に連立つておぢやつたぢやあらう。サア〱早う呼んで來て。此母にも逢はしてたも。イエ〱〱そりやお前の聞違ひ。何のそんなことは。ヤイ賣女め。エヽいけまじ〱とした此面わい。そんなでいく婆ぢやないわい。やい其綱五郎めが殺した。山住五平太といふは。おれが大事の甥の殿。甥の敵注進して。綱五郎めを逆磔。それとも知らずふか〱と。うせたはおのらが運の盡き。サア綱五郎めは何所に居る。有樣にいや。アイ。サいやいの。アイ。エヽしぶとい女郎さいめ。どうで斯うせさぬかすまいと。地有合ふ細引おつ取つて。立ちかゝれば花咲が。とやせん方も表の方。逃行く先を立塞がり。詞コリヤ。どこへ行く。よそへ行くなら綱五郎が。ゐる處を知らして行け。アノ変な横着者。サア。痛い目せぬうち早う言へ。エヽしぶとい女郎めぢやと。地かよわき小腕ぐつと捻上げ。容赦もフシ荒くしばり繩。地ナウ悲しやと花咲が。身悶えしたる叫び泣き。詞エヽ胴慾な情ない。地いかにまゝしい中ぢやとてよく〱の緣なればこそ。親となり子となるも先の世からの因緣づく。元より知らぬことなれば責殺さるゝも厭はねど。あんまり氣强いかゝ樣と身をふるはして。泣き沈む。詞エヽまだぬけ〱と諍

ふかと。地縄先柱に フシくゝり付け。地庭に有合ふ靑松葉。圍爐裏へへし込み押込んで。團扇おつとりはつた〳〵。煽ぎ立てたる苛責の責。娑婆の三途の白髪の姥。眞黒々と立ちのぼる。煙の中に花咲が。阿鼻叫喚の苦みも。夫の爲と胸をする。覺悟はすれど苦しさ辛さ。詞とゝ様戻つて下されなう。父様なうも 地煙にむせ。聲さへも出ぬ。地獄の責 フシ目も當てられずいぢらしき。詞エ、扨も〳〵性の强い。これでもいはぬか。ドレ〳〵。モウこれから。むごい料理をせさなるまいと。出刄庖丁をおつ取つて。地邊り見廻し有合ふ砥石。ねた刄を合す フシ折こそあれ。地綱五郎を引連れて歸る茂治作我が家の內。娘の泣聲綱五郎。肝に徹へて門の戸を。はつしと蹴破り駈入つて。此體見るより飛びかゝり。婆が首筋鷲摑み。眞逆様にどうと打付け。縛め解けば花咲が。蘇生つたる嬉しさは フシ何にたとへん方もなし。詞ヲ、よう戻つて下さんした。もちつと遲いと今こゝで。殺さるゝのであつたわいな。ヲ、さうあらう道理々々。今親仁殿の話には聞いたれど。是程にはと思ひしが。ヤモ呆れ果てたる猫股婆め。花咲が仕返しに。これこれ汝をおれがさいなむ。コレ親仁殿。その荷ひ棒任せ合點日頃の意趣。手傳はして下されとひつ張り蛸の棒縛り。圍爐裏の傍へ引据ゆれば。今の返報花咲が。松葉を圍爐裏へ煽ぎ立て。あふぎ立つれば目を白黑。苦しむ婆の田樂責。フシ心地よくこそ見えにけれ。時分はよしとさんまの彥治。婆樣首尾はとづつと入り。見るより悔りコリヤならぬと。迯出すを引摑み。詞大方おのれも合盜め。地觀念せよと前なる井戸へ。ざんぶと打込む水の音。三人打連れをちこちの新宿村へと 三重

第八　小石川の段

鹿踊 武藏野に。フシ一叢薄。穗に出でて。地亂れ合ひたる糸筋の分けていはれぬ戀中の。僞りならぬ本町を。死にに出でしも兎に角に。スヱテ死なれぬ命暫くも。義理と戀とに。つながるゝ。駒込邊の小借家を。假の浮世の假住居店借りてきて昨日今日。左七が留守にしほたらとフシ小糸が。長屋呼びあるけば。地忝いと夕暮より。道具カヽリ 相借家の惣頭身のすぎはひは福の神。大黑舞の槌右衛門。元手入らずに口先で世を淡嶋の權兵衛と。薄い身代吹けば飛ぶ風の神の喜左衛門。三人打連れどや〳〵と。上れば直ぐに座敷やら フシ臺所やら隔てなう。詞御懇に致しましよ。先づ御亭主に近付きになりませうかい。ハイ不躾ながらアノ兄様は。急な用でちよつとそこ迄出られました。折角お

招き申しまして。不調法な亭主ぶり。地モウ歸らしやんすでござりませう。それまでに御酒一つと。恥かしさうに出すちろり フシ盆に載せたる筒茶碗。地見るより先へ魂は酒はゆなりし呑助達。腰はお留守に淡嶋權兵衞。手早に茶碗とり上げて。詞ハレヤレ〳〵そんならアノ御亭主は。お前の兄御でござりますかえ。ハテ扨なア。わしは又若い女夫の宿這入り。ハア、何でもこいつけお駒才三なぞとやらかして來た。宿這入りぢやなと思うたが。そんならお前は妹御でござりますかいな。シテ見ますれば爰に三味線もござりますが。ちと承りたいなア。ヤ扨何れも御酒が出ました。エ、此長屋の付合ひは。茶碗で一盃切りが定りなれど。が一盃ぎりといふも氣がかり。われら此茶碗で二盃受けて廻しませうヤいづれも早うござるお酌。ハ、、、慮外と 地酒追從。

一つ受けてぐいと呑み。扨もうましと舌鼓。待兼ね山の大黑舞咽を鳴して。詞サア〳〵〳〵淡嶋殿。お盃頂戴いたさうハア、こりや御造作でござりますよ。見た處が二人ながらいやしう育たぬ人と見えました。隨分と世帯を大切になされ。こちらも此長屋へ來た時分は。それは〳〵苦しい事がござつた〳〵。が大黑殿のお蔭でどうやらかうやら暮しまする。いやマア一つ下されうと。地引受けてぐいと呑み。詞扨もよい氣味。コリヤ御酒に念が入りました池田屋の出か四方の赤そうにござる。アいや風喜先生嘸お待遠。イヤもう先つきにから魂はちろりの中へ飛んでしまつた。マア二三盃續けて受けうと 地いけぢな上戸の息なし呑み。詞お酌度度ハ、、 お慮外でござります。ヲツト、ト、、ハア、コリヤ鷄を呼ぶやうな事を申した。ちよつとお間を淡嶋殿。イヤモ

ウとんとわれらは二盃ぎりマ一つ呑むと此顏が眞赤に猿の樣になりまする。ハテ扨呑むなりをして辭儀する人。其代り此大黑が一番祝儀を見しらしませう。地と甲張つたる聲はり上げ。謡一つ長屋の權兵衞殿。マ一つ參つて猿となる。ハ、コリヤ忝い差詰め此權兵衞。何ぞ一つするのぢやが謡は知らず淨瑠璃は節がいけず。ヲ、あるぞ〳〵えらい事をして見せう。此間見て來た堺町で今流行る輕業。むさん飛びをして見せう。地コレハよかろと相借屋に。サハリのぼし立てられ淡嶋が。着たる紙子の袖なし羽織ひつくりかへす鬱金裏。身拵へする其隙に大黑舞が持つて出る爼板。足繼其上に四方の柄樽を積重ね。風の神が口まつの出放題なる口上いひ ナホス大黑。三味線彈いた〳〵。詞さて東西。いよ〳〵御覽に入れまするが。むさん飛びちん藏升の上の輕身。發

端がしやちほこ立ち。足頭に付きますれば鶺鴒の水遊び。ハリトウ〳〵。足升へうつりますれば香爐獅子。手を放し立上りますれば野中の一本杉。其體逆に戻りますれば元の香爐獅子と戻ります る。ハリトウ〳〵。地とロ上に。一つもいかぬ升の上。秤の輕業見る如く。家樽碎けてころ〳〵〳〵。腰骨かまちでどうと打ち。庭へどつさり打ちこけて。物をもいはずぎつく〳〵。小糸も氣の毒かけ寄つてお怪我はないかと撫で擦れば。相借屋もうろたへ騷ぎ。藥よ水よと抱起せば。やう〳〵にフシ人心地。詞ア、〳〵恨めしの風の神。大黒殿も聞えませぬぞや。おれが仕付けぬ輕業を。留めてくれたら此やうに。腰骨は打つまいもの。ア、腰いたや堪えがたや。地思へば〳〵。商賣の淡嶋殿も聞えませぬと。恨めしげなる聲音にて。そも〳〵紀州名草の郡加田淡嶋大明神。女中樣方の腰より下のわづらひは。直してやろとの御誓願に此權兵衛が腰骨の折つたをみす〳〵見ぬ顏して知らぬふりはお胴慾な。餘り氣强い淡樣と。醉が廻つてすゝり上げ。しやくり上げたるフシ泣上戸。相借屋は天窓をかき。詞是はさて情ない。又例の泣上戸。ほんにやれ〳〵。こなたの樣に泣く年增が。大根畠にあつたらば。嘸かし時行であらうにと。地仇口ましぐら相借屋。立たぬ權兵衛を肩にかけ。引立つれども足立たず。詞こいつはいかぬいつそ拍子でやつてくりや一つとや一つ長屋の權兵衛殿。輕業しくじり腰拔けたんのう立たれぬたんのう立つ足もしどろへもどろに歸りけり。地侘住居には取分けて哀れを添ゆる初夜の鐘。心もほそき行燈の。灯をかき立てても後先を思ひつゞけて。フシしよんぼりと。詞佐七樣はなぜ遲い。何してゐさんす事ぢややら。早う戻つてくれたがよい。住馴れぬ故かして。どうやら氣味の惡い家と。地すみ〳〵詠める女氣の。待つ身になるなかゝる身に形も容も面瘦し。フシ佐七は積る。憂き事のうきが。中なる憂世帶。うと〳〵戻る我が家の內。ちらりと見るより走り出でヲヲ戻らしやんしたか待兼ねた。今迄何してゐやしやんした。遲かつた案じたと。地女房顏してちとばかりフシ世帶めかすも可愛ゆらし。ヲ、道理〳〵。嘸待兼ねてゐやらう。早う戻ろと思うたれど。綱五郎殿の安否も聞きたし二つには紛失の色紙。行方も知れうかと。あつちこつちと駈步き思はず夜に入つた。イヤこれ小糸。今更いふには及ばねど。糸屋の家の騷動。ゐるにゐられぬ品になり連れて退いた其時は。死ぬる覺悟に極めたが。色紙の在所知るまでは。どうも死ぬにも死

なれぬと未練に命ながらへて。せうことなしの宿這入り。ア、モほんに浮世に飽果てたと語るを聞くにいとゞ猶。小糸は浮む目に涙。詞ほんにお前はわし故に。たんと苦勞をさしやんすなう。思へば思へば私ほど親に不孝な者はない。國の義理ある父樣に。思ひをかけて憂き別れ。又もや產みの母樣の。地お氣を背いて姉樣に添うてゐさんすお前と連立ち。退いて二人が此樣に。添うてゐるとの取沙汰を聞かしやんしたらさぞやさぞ。姉樣のお憎しみ母樣のお腹立ち。思ひやる程悲しうて。私はいつそ死にたいと。夫の膝に取付いて フシ隣憚る。忍び泣き。地左七も涙の眼を拂ひ。詞ア、埒もない事思ひ出し。思出す程留めどがない。千萬言うてもかへらぬこと。さつぱりと思ひかへて。サ、わつさりとしや〱。さてまあ斯う宿這入りをしたからは。何ぞ商賣がなうてはなるまいが。というておれは商ひの事は何にも知らず。ヤよい思付きがあるわいの。そなたは三味線をよう彈きやるが。何といつそ町藝者に出てくれぬかい。アイモ私がやうな不束な三味線でも。役に立つならお前の爲。ヲ、そりや忝い〱。したが極めねばならぬ事があるわいの。コレ必ず轉ぶことはならぬぞや。地あれまだあんなじやら〱と。お前を置いて。仇枕交す心はないわいな。詞ヲツト誤り〱。がそれはさうと稽古のため。何ぞ彈いて見やらぬか。コレうさ晴しによかろぞや。アイ私も屋敷で彈いた儘。撥の持ちやうも忘れたが 地彈いて見ようと樫棹の。憂きを三筋の糸しらべ。二上り唄思ふ中にも隔ての襖。あるに甲斐なき捨小舟。詞ヨウ〱〱こちの女房の命取りめ。何いひぢやゃらすつきりとモウ手が廻らぬわいな。大事ない〱。唄わしは白浪うつゝなき夜の寐覺の其睦言も。思ひ出す程いとしさのぞつと身も世もあられうものか。詞思ひ廻せば姉樣の。私を恨んでゐやしやんしよ。堪忍して下さんせ〱。唄せめて名古屋の二重帯が。三重廻る。ナホス詞ヲツトよし〱。いやモウ一廉の藝者樣ぢやわいの。そしてそなたの其振袖今では丁度もつけの幸ひ。長屋の衆の思はくもあれば晝の內は妹と兄樣。入相がごんと鳴ると。直ぐに濡事女夫の始まり。これを思へばアノ鐘は暮六ッぢやないぬれ六ッぢや。エ、何をじやら〱てんがう口。サアもう四ツでもござんせう。炬燵に火もよい寐やしやんせぬか。テモせはしない床急ぎ。コレ今夜はわしは精進ぢや。アレまだあんな惡口ばかり。よい加減に置いてなと。地蒲團一つが玉の床。思ひ近江の疊の上浮世の塵をひしき物。割なき フシ夢や結

ぷらん。地妹と脊の流れは同じみなの川。深い淺いの分隔て。姉のお房は戀聟の オクリ左七を。戀し小石川。タ、キ其隱れ家へより糸の。手を引く伯父の十兵衞が心も暗き。フシ小提燈。地尋ねあたりし門の口。詞コレお房。口の長屋で聞いて來た。左七と小糸が隱れ家は。大方こゝに極つた。なま中に案內したら。風をくらうて迯げうも知れぬ。どうぞ仕樣がありそなものと。地いそ／＼話すも二人は氣懸り。戶の隙間より差覗けば慥に伯父の十兵衞殿。置去りにせし姉のお房。南無三寶とうろたへ騷ぐ內の物音。十兵衞表の戶をこぢ放し。這入るを見るより炬燵の內。小糸は何と詮方も。納戶へ迯込む後影コリヤ／＼／＼見付けた待ちをれと。駈上つて引摺り戾しどうど打付け。詞ヤイこな畜生め。犬めふんばり女郎めがおのれ。此間江戶四里四方を。一遍三界尋ね搜した。知れぬこそ道理なれ。爰で尋ね逢うたはおのれ等が運の盡き。お天道樣のお知らせぢや。サ左七を爰へ出せ。／＼／＼。出しをらぬかと、地疊叩けば小糸は只。アイ／＼／＼とばかりにて何といらへは泣くよりも フシ外に返事はなかりけり。詞ム、內に居らぬか。留守ならば留守にもせよ。戾りをるまで爰は動かぬ。エ、おのれは／＼／＼。マ言はう所のない不義者ぢやぞよ。おのれは。藁の上から彌三兵衞殿へ養子にやつて。育てられた恩も思はず。色事で屋敷をしくじり。親里へ戾つた晚に。マあらうことかあるまいことか。姉聟の左七と色事して。家を駈落するといふ樣な又こんな素早い性の惡い女子が。此廣い江戶中にま一人とあるものぢやないわいやい。夜鷹め。助兵衞め。ほんに／＼意見するも餘り阿呆らしいて。呆れが舞うて臍が可笑しがつて茶を沸す。其樣な不義女郎とは知らず。死なれた親父の佐右衞門殿はな血の尾ぢやとて汝を大體可愛がられた事ぢやない。けれども彌三兵衞殿へ。やらねばならぬ義理になり養子にやられた跡でも。どうぞあいつばかりは。まめで達者で。屋敷で出世をさせたいと。コリヤ伊勢へ七度熊野へ三度愛宕樣へは月參りをしられたわやい。それに又聞いては居らうが。兄の綱五郎はな。左七め故に人を殺し。勘當せねばならぬやうになつて。其晚から行方知れず。それにおのい等は駈落とんと糸屋の家はらんちき騷ぎぢやわい。其中でもアレ見をれ。お房はな不所存な。左七めがことを。いひ出しては泣き。思ひ出して泣き。モ泣明し泣暮し。とう／＼目を泣潰して仕舞うたわやい。おりやモあいつが可愛うて／＼ならぬ程。おのい等がモ憎うて／＼ならぬわ

い。いとしいはお袋。いつそ泣きもせずうろ〳〵と。子供の事はかり案じ。一昨日から床に就いて食もいかず。藥も咽へは通らぬわい〳〵。そりや誰が業ぢや。皆おのれが業ぢやぞよ。俯いてばかりゐることはないわい。面を上げいやい〳〵。それにまあおのい等はぬつくりと店借して二人暮そと思ひ居るか。コリヤ天道樣といふものがあつて。ヨウ暖かに暮されうかいなあ。サア左七めが事思ひ切つて糸屋の家へ戻すかコリヤ返事をしをれやい〳〵アとはいふものゝ。そつちにも尤もな筋もあろけれどもわれが思ひ切つて左七を糸屋の内へ戻すと。母の病氣も癒れば家も立つ。姉も悦びや目も癒る。合點がいたか合點がいたか。サ、、、合點がいたら今こゝで思ひ切ると言へ。思ひ切るといへ。サぬかさぬかい。コリヤ小糸。どうぞ思ひ切るといふてくれと。地賺しつ嚇しつ理を分けて。いうて聞かせど目に保つ。フシ涙は聲に顯はせり。地お房はわつと泣出し嫌はしやんす左七樣。無理に添はうといふではない。そなたに添はして母樣のお年の上の御苦勞を。させましともないばつかりぢや。眼が潰れたら猶の事愛想が盡きるは定のもの。疎まれてから去られうよりいつそそなたに美しう。添はせて私は尼ともなりあなたの聲を餘所ながら。聞いて暮すが樂しみと フシいふも哀れな心意氣。地小糸は始終顏をも得上げず。明けていはれぬ身の上を死ぬる覺悟に。フシ胸を据ゑ。詞伯父樣のお腹立ち。姉樣のお心根。御尤もともお道理とも。申上げう詞がない。私やふつつり思ひ切り姉樣に添はせます添はせまするが皆樣へ。私が此世の申譯。詞ム、そんなら得心して。左七を姉へ戻してくれるか。ヲ、出かした〳〵。よう思切つた。イエ〳〵地それでは此姉がどうも心が濟みませぬ。詞ハテさて又鈍な事を言出すやつぢやわい。マ、、何ぢやあらうと。此伯父が胸にあり。左七が戻つた上のこと。それ迄奥に待つて居る。サお房。地こちへと手を引いて納戸へ這入る後影。見るより小糸は駈寄つて。蒲團も櫓も取つて除け。コレ左七樣どうせうぞいなうどうせうと スヱテとり付き縋れば。詞聲が高い。最前よりの一伍一什。聞けば聞くほどのめ〳〵と。どうも生きてはゐられぬ仕儀五平太や九郎兵衛を手にかけたは。此左七と書置して。恩のある綱五郎殿の命に代れば。糸屋の家も立つといふものそなたは跡にながらへて。お袋への孝行。わしが死んだら亡き跡の。香花でも取つてたも。小糸。地さらばと立上る。裾に取付き。詞マ、、待つて下さんせ尤もぢや〳〵。サア留めはせぬ留

めはせぬ。コレ事を分けてのお言葉を悪う。地聞くではなけれども。逢ひなれ初めて二年の人目にせかれせかるゝも。戀路の中の樂みに。割れても末に間の戸の影やお庭の小柴垣。荻吹く風におそはれて。帶のしやらどけ亂れ髮。結ぶ緣は七月の。お腹に宿る月の數。重るお身の御難儀も。皆私から起つた事。それにお前を先立てゝなに樂みにながらよう。一所に殺して下さんせ。むごいつれない心やと。恨み フシ口說くぞ。道理なり。詞ヲ誤つたこらへてたも。とてもかくてもながらへず。死ぬると覺悟極めたそなた。コレ一所に死んで未來で添はう。エヽ嬉しうござんす嬉しうござんす。そんなら早う爰を出て。心中所はシイ。聲が高いと フシ口に袖。詞左七樣の聲がする。戻つてかえと姉お房。納戸を出づるも。さぐり足。イヤ申し左七樣。小糸に樣子は聞かしやんしよ。母樣のお歎き。伯父さんのお氣苦勞。中に立つた此房が。心の中の切なさは。針の褥に寐るよりも。つらい苦しい憂き思ひ。私はふつつり思ひ切り。諦めてゐるほどに。どうぞ戻つて妹と。中よう添うて家を立て。地母樣や伯父樣の。お氣を休めて下さんせと スエテ 手を合したるいぢらしさ。地死ぬると覺悟極めたる。思ひをそれと悟られじと。詞ヲヽ、これお房。ようまあ尋ねて來てたもつた。今戻つて何もかも樣子は聞いた。モウ〳〵これから直ぐに往んで。其方と一生添ふ氣ぢや程にノ。マ伯父御と連立ち先へ往んでノ。ソレ先へ出て。ソレ待つてゐやと地小糸に知らすフシ裏表。詞お房必ず欺されな。ありやみな嘘ぢや。僞りぢやと。地納戸を出づる伯父十兵衛。詞コレ左七殿。こなたが糸屋の家を出た跡に。殘してあつた書置。お袋にも姉にも見せず。俺が胸一つで讀んで見た。小糸とは國から譯のあること故。死ぬるとある書置。讀んで見ておれも悔り。所に又うす〳〵聞けば。此邊に店借して。二人世帶を持つてゐるとの噂。ムムそんなら國から譯のあるといふも。死ぬると書いたもコリヤ皆嘘ぢやわい。エエ憎いやつら義理知らず。おのれやれ引きずつて戻つて。何でも姉めに添はさうと。思ふ心の一徹でコリヤ小糸。さつきの樣に言うたのぢやが。奥から立聞きしてゐれば。腹まで大きうなつて。モウ七月といふ事は。夢にもおれは知らなんだ。さういふ譯なら尤もぢや。道理ぢやがコレ左七殿。こなた故に人を殺し。お尋ね者になつても。色紙を尋ねて渡さねば。男が立たぬと綱五郎は。アレ遠國へも立退かず。うろ〳〵〳〵としてゐるぞや。可愛いさうにそれ程に思ふ志は無足

し。糸屋の家を立てもせず。色紙もお主へ差上げず。死んでこなた濟みますか。サアそれは。サどうぢや。返事があるなら聞きませうと。地理に責められて當惑涙。お房はかねて用意の剃刀。自害と見ゆれば十兵衛押留め。詞ヲヽわれがのも尤もぢや〳〵尤もぢや。道理ぢや尤もぢやが。コリヤ爰をよう聞いてくれ。そちが今死ぬるとな。只さへ枕の上らぬお袋。それこそ直ぐにころりと往生。さすればそちが死ぬるのは。親を殺すも同じこと。親殺しになつても大事ないか。大事なか死ね〳〵〳〵。ア斯うはいふものの。下地から譯のある事と聞いたら。何の生きてゐたからう。死なうといふも尤もぢや〳〵。がまたこちらの二人の奴らも尤もぢや。爰の道理を聞分けて。三人共に死んでくれな。どうぞ思ひ止つてくれと。地三方四方の命をば繫ぎ留めたる糸屋の伯父。死ぬも死なれぬ三人が。涙は千筋百筋にもつれ合うたる糸口の。一度にわつと聲を上げ フシ泣沈むこそ道理なれ。地世を忍ぶかやにも心奥ふかき。長屋を尋ね綱五郎が。跡より付いたる捕手の犬。とは知らずして門の戸叩き。詞左七殿の家は此處か綱五郎が尋ねて來たと。地いふ聲聞くより以前の捕手。フシ飛ぶが如くに引返す。地内には皆々悔りの。中に十兵衛戸を引開け。這入るを見るより跡ばつたり。フシ外面あやぶむばかりなり。詞イヤ伯父者人。何にも怖い事はござりませぬ。頼まれた小倉の色紙。取返すまでは男の意地。命惜しんで逃隱れたが。もうこつちから名乘つて出る氣。コレ左七殿。お頼みの色紙。受取らしやれと懐より。地取出し手に渡せば押戴き押戴き。詞ハア有難し忝し。男づくとはいひながら。何の誼みもない拙者が。お頼み申したばつかりに。科人にして死なせては。生面下げてこの左七。生きながらへてはゐられませぬ。科を我が身に引受けて。ハテさて悪い合點な人。男と見込んで頼まれたら。命を捨てても引かぬといふは。ソリヤ何國でも同じ事。昔大阪の黒船忠右衛門。誼みもない五郎八に頼まれたばかりに。獄門の庄兵衛を殺し。科人となつたこれもこれ男の意氣づく。ハテ大阪ばかりに男があるぢやあるまいし。花のお江戸の本町生れ。命をかばふ心なら。天窓から頼まりやせぬと。地投出したる命の安賣。高いは性根の据ゑ處。江戸の生粹混りなし。フシ本町育ちと知られたり。地十兵衛は涙ながら。そちは覺悟極めても母の歎きを思ひやり。一先づ爰を落ちてくれと。いふに二人の妹も母様のお歎きを。思ひやつて暫しでも落ち延びて下さんせと。取付き縋れば十兵衛

が。用意の路金財布の紐。首にかけたる天の網。世間に人音物さわがしく。戸の隙間より差覗けば。表は數多の捕手の人數。恂りわな〳〵驚く人々。綱五郎ちつとも騷がず。詞名乘つて出ようと思へども。一旦伯父貴の詞を立て。母への孝に切拔けん。左七殿は小糸を連れ。伯父者人お房諸共。怪我せぬやうに裏道から。身拵へする間もなく。詞捕つた捕つたと捕手の人數。戸を打破つて込入るを。ヤり過して肩車。どつこいさうはと取付くを。振りほどいて腹櫓。地打付け〳〵摑み投げ。投げつけられて數多の捕手少し白けて見えにけり。フシかゝる所へ。待つた待つたと石塚彌三兵衞。岩藤に繩をかけて引立て來り。詞淺草の寺內に於て。色紙を盜み取つたるは。山住五平太と此岩藤が白狀。九郎兵衞とても其同類。色紙を首尾よく取返し。左五郎先知に歸る上は。兩人共に殺し德と江戸屋敷より御差圖。則ち殿の御墨付と。地差上げ見すれば人々は フシ嬉しさ言はん方もなし。地左七が國へかへり咲き。お房小糸は妻妾とむすぶ糸屋の跡取りは。緣の綱五郎本町に。育ちけなげの糸櫻。花は三吉野男氣は。花のお江戸の眞たゞ中。中はあると讀む文字。フシ新につゞる假名書きのすみいろ筆の內匠よく。むらがり來る御贔屓を。力鬼百合伊久千代も。袖をつらぬる君が代は關の戸ささぬ苧環の。いともかしこき御恵み榮ゆる。春こそ久しけれ

安永六酉年三月十一日

作者　紀上太郎

補助　達田辨二

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鐵弟子如樓回吾儕所傳泝先師之源幸甚

名代　薩摩屋　小平太

座元　豐竹新太夫

江戸橋四日市廣小路

書肆　上總屋利兵衞版

お染久松 新版歌祭文

作者 近松半二

座摩社の段

地敬て白す。フシ地難波の里の大社座摩明神の鳥居前。張廻したる一構は。手の筋失物走人息もすた／＼北濱から。四季の草木の賣買は。フシカヽリ花の顔見せ。冬籠り。新参古参大當り。御馴染御贔屓綱八を。今入れかはり。お休みと。打つたり。舞うたり。神樂所の。鈴の音さへ賑へり參詣群集山家屋の。佐四郎はお百度の緡の數さへフシ九つ時。ヘルフシ瓦屋橋に。子飼から。年季重ねて久松が。屋敷廻りも勤めがら。主の目鏡に油屋の。下人小助と二人連。宮にはお百度現の佐四郎。見るより小助が思案顔。立ちとまつて。アイタ／＼。

フシ土邊に尻餅。つくり病と知らぬ久松。何とした小助殿。怪我はないかといたはれば。詞イヤ怪我はせぬが。昨夜から冷腹で。アイタ／＼。こりやこれ寒の中に水汲んだおどもり。久々の病で急病ぢや。奉公の身のつらさは大概な事は押して居れど。かう疝氣が差込んでからは。寸白様になとかゝらにやならぬ。エヽひよんな事ぢやなう。小倉の屋敷の商ひ銀一貫五百目。晝迄に請取りに來いとの御使。霜先の銀念の爲の二人連。というて遲なつたら親方の無調法になる事。いつそ私一人往て來うかい。そんならば大儀ながらさうして下され。これでは中々一足も往かれぬ。コレ氣を鎭めて茶店でなと待つて居やんせ。エヽ丸子持つて來たらよいに。戻りに反魂丹買うて來て進ぜうぞやと。地傍輩の氣をかね財布裏表なき小倉縞。屋敷をフシさして急ぎ行く。地後に小助は山伏の。圍の傍へ小聲になり。詞法印殿／＼。ヲヽ油屋の小助殿か何ぞ用か。ヲヲ貴様に銀儲けさす事がある。アレあの宮の内で百度參りして居る人は。山家屋の佐四郎といふ銀持。こちの娘のお染様にきつい惚れやう。それ故にあの願參り。こゝらが貴様のよい代物。おれがとひ打つて貴様に祈禱頼ます仕業。今あそこへ往てあのわろに逢うて咄す中。何もかも筋が知れる。貴様そこから立聞きして居て。占の奇妙を見せると跡が銀ぢや。鹽梅ようかゝつたら二つ山ぢや合點か。ムムそんならあの和郎がかの大身代の山家屋ぢやの。地うまい／＼と法印に。牒し合してよい時分に。小助が差足さは知ら

ぬ。佐四郎はお百度を。廻りしまうて神楽所の前に平伏し。拍手ちよん／＼。詞南無座摩大明神。油屋の娘お染を私が女房に持ちまする様に。どうぞあつちから惚れまする様に。なむ神明なむ稲荷なむ八幡。なむ大師遍照金剛なむ觀世音菩薩。申し／＼佐四郎様ぢやござりませぬか。ヤ油屋の小助か。わが身やいつの間にこゝへおぢやつた。イヤたつた今來て後からお前のぼやきを聞きました。聞いたかエヽ面目ない。山家屋の佐四郎ともいはれる者が。戀なればこそコレ此錢ざしを見てたも。シタリ百度參りとはきつい凝りやう。イヤ凝つた段ではない。元油屋の家には親どもから。百貫目餘の取りかへ。それを急に催促せぬはあの娘故。後家のお勝にとうから言込んで。結納まで入れてある。それに今日此頃後家が言分には。いかにも上げませうけれど。緣の事は親のまゝに無理押しにもなりませぬ。あれが心を聞いてからの何のかのと埒が明かぬ。そこでわが身に槌打たさうと思うて時々の用無心。イヤ羽織の裏がほしいの。加賀の褌を買ふはの。髭剃の色拂ひまで呑込んで遣つた此山家屋。それにマア。おつといふまい。働きが鈍いと仰しやるのか。慮外ながら急度働いて居ますぞえ。それならこそお前のお望み。十分の物九分は埒が明いてある。ヤアそりや眞かいやい。眞か嘘か此間の文の返事。かはいらしいお染が筆。爰に持つて居るけれど。さういふお前の請なればマアお目に懸けまいわい。アヽこりや拗强ずとちやつと見せてくれ。見せたら此働き代は。ハテ此望みが叶うたら。禮はきつと飯櫃形でするわい。マア其文を。イヤ滅多に代物手放されぬ。當世掛商は浮雲い。マア後での禮は禮。先へちつと力付かぬと勢がない。かうせう。此文私が讀んで聞します程に。よい返事の文句なら冥加錢を上げさんせ。えいか。さらば開帳致さうか。ハア何ぢや。ようぞや御文下され嬉しく拜し參らせ候。ソレ嬉しいと書いてあるぞえ。誠に數ならぬ我が身に淺からぬ御しんもじの程。身に餘り忝う存じ／＼。ソレそこで冥加錢。地心得たしなみ銀入から。豆板一つ。詞サア／＼其後は／＼。身に餘り忝う存じ／＼へども。母様のある身にて任せぬ譯御座候へば。先づ／＼御斷り申上げ／＼。ヒヤアこりやどうぢや。サヽヽ爰が味ぢや。母親の許しさへ出たら。私はお前に添ひたいといふ事ぢやわいな。又々母様に尋ね候へば。緣の事はどうなりとそなたの好いた殿御を持てと御申しなされ候故。それは／＼嬉しう存じ／＼とけつかるわい。エヽ忝い。冥加錢。ノリ今度ははず

んで二朱一つ。ヲツトしめたと又着服。詞 さうして跡は〳〵。嬉しう存じ〳〵へども何分私はお前がいやにて御座候。イヤアいや〳〵急くまい〳〵。こりや是ちつとした讀みやうぢや。私を。お前がいやであらうといふひぞりの文ぢや。其證據は後にあなたにも私を御なぶりの事と推し參らせ候。ソレ〳〵〳〵。もし又眞實にて候はゞ誓文々々私が事は。ソレ爰が肝心の性根ぢや。今度は一分ぢや冥加錢冥加錢。サア遣るわいやい。マア氣がせく跡を早う聞かせいやい。誓文々々私が事はふつつりと思ひ切り下され候。何の因果にお前の樣な男に。ヤ何と其跡はどうぢや〳〵。サア此跡は。イヤもう聞きなんすな跡はほんやくたいぢや。一分一つ井戸へ落したと思はんせと。地 聞いて佐四郎はおろ〳〵顏。お性根取られた鼻紙袋。下地が拔けた緡ばかりの。百度參りも フシ 恨めしき。詞 申しさう力落したものでもない。お前の戀の邪魔といふは久松といふ丁稚め。何でもこいつに腐り付いて居ると見えます。尤も男はあいつよりちつとお前が次なれど。肝心の所で喰付かしたら。乘りかへるは知れてある。サイヤイおれが背中の骶のずんに。これ程な疣がある。こいつが前後に振りかはつてある位なら。恐らく前髮奴には仕負けぬものを。殘念やと 地 尻を捻つて。フシ 無念がる。詞 イヤ申し物には祈禱といふ事がござります。幸ひあそこに山伏がある。久松とお娘と緣切をお賴みなされぬか。ホンニ是は氣が付かなんだ。第一おれが戀が成るか成らぬを見て貰はにやならぬ。シタガもしひよつと成らぬといふたら。又十二文損するのぢやと。地 根がしはんぼの安物から。網にかゝつた フシ 鳥居の前。占ひ。御判墨色相性の考へ。見て上げませうお入りと。地 呼込まれるをしほにして。はひる佐四郎さしこんだ小助が相槌。詞 あなたの年とは三十一でござりますな。ム、三十一。當年三十一歳の男お生れ年が寶永六年己丑。御一代の守本尊は月の廿八日不動明王性分は火にして則ち住所より南少し東に當り水邊に待人あり。女と見えます。こりや色事でござるな。旦那何ときついか〳〵。成程此旦那大色事師でござります。八卦の面にさう見える。トキニ其許樣は丑の年で牛の寐た程金銀を持つてござる。此度東に當つて金銀の星が顯はれまする。是が其許樣の年頭に當る。卽ちかの金銀の勢で此女はお手に入る筈ぢやが。爰に一つ障りがある。其許樣には背中の骶に疣が一つあらうがの。イヤアサア〳〵見通しぢや〳〵。サア〳〵無けりやならぬ理ぢや此疣の有所が惡い。惣體背中にある疣は背疣と

いうて。只今師走には或は牛房鯑何なれ角なれ人に物を遣るばつかり。錢銀を取られるばかりで是まで頼んだ事が一つも埒が明かぬと見えます。とんと其通り。さうあらう。時に又一つ大きな邪魔がある。ハテかはつた物四角な物ぢやが。坎艮震巽りかんがすかん。兌中斷と取つてだゝぼたの兌の卦に當る。人相に取つてはこりや前髪と見えます。かの金星銀星が寄合はうとする中へ。此前髪の眞鍮星が毎晩夜這星になつて邪魔するといふ卦體サアそれがけたいでなりませぬ。どうぞ其前髪を。此法印が行力で祈り殺して進ぜませう。先づ縁結びの星祭こりや其許様のお家へ参つて致さにやならぬ。サアそれが第一お頼み申したい。申さぬ事は聞えぬが金銀の星を祭るは同氣相求めるの道理で。金銀の元入が餘程入ります。サア何ぼでも大事ない。供物は隨分大きな鏡餅十二重ね跡は法印が受納致す。さて祈禱の間酒肴で我らを御馳走なされるがよい。かく申せばとて手前が食ひたい飲みたいではござらぬ。即ちそれが星様への御馳走。物をほしがるによつてこれ星なり。祈禱始めに宮の内の福屋でマア一寸御神酒上げよかい。旦那こりやよござりましよと。地おだてる太鼓神樂所の。鼓片手に フシ糟禰宜が。詞山家屋佐四郎様。御獻上の神樂が只今上りますサアお出でなされませ。これはいかな様てゝ交ぜてどんちやんと。これもやつぱり今の願。モウ神様を頼むに及ばぬ。コレ神樂の酒手ぢや貴様も御神酒の相伴さすぞ。イヤ有難いわさらば福屋で腹存分。地禰宜山伏のフシ位爭ひ。詞願主様まづお入りと。鼓よりまづ舌つゞみ打ちつれ茶屋へフシ勇み行く。地小助はそろ／＼小戻りし。手招きすれば最前より。待ちかね山師の浪人者鳥居の陰より又一人。これも手合と顔見合せ三人一緒にフシ寄りこぞる。地中にも勘六氣をせいて。詞シテ件の物は。コリヤ聲が高い。あの井の内に仕かけて置いた。この鈴木彌忠太久松めとは仔細あつて意趣のある中。彼奴めをしくじらす工面は小助。かう／＼合點か。よし／＼。彌忠太様は勘六と。福屋で飲んでござりませ。前髪めが戻るを待つて。手工合首尾よう／＼と地耳から耳へ相談さらり。しめて三人 フシ別れ行く。地人一盛。夢の世や。浮名の。端の種油一人娘と寵愛の。お染が思ひ日に千度行きつ戻りつ蝶々の。縫の模様を振袖に。包むとすれど娘氣の。迷ふ心を一筋に。座摩の フシ宮居に歩み來る。地下女のお傳が申しお染様。詞宮の内の茶店でちとお休みなされませ。地私はこゝに張番して彼の人が今でも見えたらコレ斯うと。いへばお染

はほゝ笑みながら。神のお庭で勿體ない差合のない時に。顔を見るのが樂しみと。フシ待つ人よりも待たるゝ身。久松はいきせきと屋敷の用事そこ〳〵に。フシ足下かろく立歸る。地お染は見るより。コレ久松樣といはれもせず。こゝに〳〵と寄添へば。久松も途中の人目。詞コレお傳殿小助殿は見えなんだかと。地いひつゝ邊に氣を付くれば。呑込むお傳が。詞申し御寮人樣。わたしやあの綱八の芝居が一切見て參じたい。ホンニそなたは芝居好き。藪入でなけりや行かれぬに。けふは幸ひ勝手に往ておぢや。隨分緩りつとだんないぞや。ハイ〳〵。そんなら往て參じよ。久松殿もお染樣と。どこぞそこらへ藪入さんせと。地はづすは猫に鰹木の。氣を通り札鼠木戸。フシこれも忠義と行く跡に。地契りし中は詞數。いはず取る手を振放し。詞申し御寮人樣。お前樣は追付けゑい男お持ちなさるげな。私は下人の事。何とせうしよ事がないといて拗强るはやつぱり愚痴。勿體ないお主樣が。これまでのお志眞實冥加なう存じますと。地押下れば摺寄つて。詞コレそれはマア何の事。內では人目があるによつて。久松〳〵と家來あしらひ。地樣といふ字は。ロの中で。常住消して居るわいの。詞せめてこんな所でなりと。女房かお染かと。地いうて滿足さしもせず。お前樣の御寮人のと。獻上向な挨拶はまだわしが氣を疑うてか。そもや。見初めし其日から。詞エ、こんな事何やかやいひたいけれど。人が見るので何にもいはれぬ。地どこぞ人の聞かぬ所で。しつぽりと咄したい。こつちへおぢやと フシ手を取れば。詞さうぢやてゝ茶屋の內もやつぱり人目。地どこぞ暫しの隱れ家と。覗く八卦のかこひの內。詞ヤア誰もないわいの。地外から襖は戀の塒。サア此間にちやつといのと。手を引く主從三世相。二世を兼ねたる妹脊鳥 フシ忍び入るこそわりなけれ。地神樂の鈴も時移る。ほろ醉機嫌に法印は。とろ〳〵目して鳥居前。詞エ、きやつも吝いやつぢや。喰はれもせぬ吸物にたつた酒三銚子。ホンニ端酒飮まうとて店を明けたは不用心。山伏が物盜まれては見て貰ふ所がない。ヤ、何やらぶつ〳〵吽くやうな。此內に人の聲あるは。地ハテ怪しやと暖簾の內。差覗いて悄り仰天。這入られもせず氣は上ずり。繪馬に上つた一來法師。立ちすくみ男。詞コレ〳〵法印樣一つ見て貰ひたいと。地入らんとすれば。詞ア、コレ今內へ這入ると水火木金亂騷ぎ。木火土金粹をきかせいやい。八卦なら爰でもつい見てやる。失物か走りか心中がゝつた者なら

奇妙に所を指いて見せるぞ。イヤそんな物ぢやない。こちの旦那山家屋の佐四郎様が。今朝から今にお歸りなされぬ。ム、それがよいわ。この山伏が行力を以てたつた今こゝへ天降らして進ぜる。佐四郎様〳〵。ヲヽ法印坊そこにかと。地出て來る佐四郎にすれ違ひ。そつと後の襖から フシ鳥居の中へ行く二人。地戀しいお染と夢にも知らず。詞サア〳〵〳〵一時も早う星祭。是から直に手前が宅へ。そんなら參ろか。イヤ待つたり肝心の商賣道具。地持參致そと圍の内。詞ヤア。テモ素早い奴もう逃げをつた。さては今のがかの前髪めであつたな。ようぼん代を喰逃げにしをつたな。よい〳〵此意趣返しはたつた今。お染がお前に靡く様に祈り伏せるは我が數珠先。歌さんげ〳〵六根大聖南無不動明王〳〵。なんぼうに見つとむなうても。男はれこもち喰はねば立

たぬ。身代よしの山家屋で。腥料理喰ひ次第。蒸菓子羊羹責めかけ〳〵榮耀のありたけえいさらさ〳〵。さしものお娘も喰につき。魂の返るは今の中と勇んで ナホス フシ打連れ歸りける。地南の辻に人立し喧嘩々々と騒ぐ聲。驚き出づる久松お染。下女もとつかは久三の小助。一所に フシ落合ふ床几の上。地喧嘩は振物國侍。相手は町人胸ぐら取られ。引立てられてもひるまぬ男。詞こりや何とさつしやります。何ととは素町人め。武士の足を泥脚で踏みながら御免ともぬかさぬ慮外者め。サアえいわいな。慮外ならあやまる分。マアこゝを放さんせ。踏んだはおれが脚踏まれたはこな様が脚。武士ぢや町人ぢやてゝ脚に違ひはあるまい。そんなこつき喰ふ男ぢやない。聞かぬというてどうさある。お太刀ひねくつたとて滅多に切られるものぢやない。人戯えせずと

お侍。どうなと 地召されとすり寄る體。詞エヽ汝しきぶち放すも刀の穢れ。地どうしてくれうと傍邊。有合ふ財布眉間へぱつしり。ハツト驚く久松を。お染が抱きしめ押ゆる袖。氣をもみ裏の裏へ行く小助がきつとコレ申し。詞あの包は手前の銀財布。斷りもおつしやらずお侍には似合はぬ仕方。誠にこれは心せくまゝ手前の麁相。眞平〳〵。なむ三寶。少々血が付き申した。幸ひの井の許と。地淸むる穢は薄けれど包みし惡事すりかへる。手目を見せじと小助が氣配り覆になつて フシ立縞の。地財布手早く。詞コレ久松此銀は懷へ。お染様掛り合になりや惡い。私もお供サア〳〵早うとせり立つる。地工の底は白歯のお染。久松早うと手を取つてせはしい所が結ぶの神。足を早めて フシ立歸る。地跡は人たえ宮芝居の。切のめりやすしめやかに。囁く二人が仕濟し

顔。詞彌忠太様首尾は。ヲヽ件の物は手洗鉢の下にある。地うまい〳〵と立寄つて財布取上げ。詞彌忠太様。今日の働き代はえ。ソレ金二兩。エイ眉間に疵まで付けられて。たつたこれかいな。サアよいわ。其壹貫五百目どうで小助にも。口錢やらにや聽きをるまい。そんならふてうはどやでせう。ぐれの來ぬ内サアごんせと。地銀懷へ取納め連でない顔跡先に。のし〳〵歩む フシ鳥居の陰。詞盗賊待てと聲かくる。地びつくりしながら騒がぬ顔。詞盗賊とは誰が事。おのれらが事さ。エヽ何を證據に盗賊とは。ヤアぬかすまい。今日此方の屋敷にて油屋の下人久松に渡せし銀子。子供上りの若いやつ何とも心許なく。跡より來り窺ひ見るにおのれ等が騙事。かやうの吟味仕れとお金役より付け置かれた。岡村金右衛門といふ者だわい。サアおのれ等引括つて屋敷へ連行く。腕を廻せと詰めかけられ。ハテさう見られたら是非がない。成程其銀は騙りましたが。此お侍は通り合して連れになつたばつかり。何にも御存知ないお方。私一人繩かけてサアお引きなされませ。サア〳〵と地油斷を見すまし彌忠太が。差いたる刀拔打ちに肩先ずつぱと金右衛門。同じく拔いて切結ぶ兩方劣らぬ牛角の早業。彌忠太は八方に。眼を配つてソレ〳〵そこをと。聲の助太刀力にて。强氣の勘六まくり切り。なぐる刀を受損じたじろく所を付け入つて。兩脚薙がれよろ〳〵〳〵うんとのつけに フシ倒れ伏す。地勘六は一息ほつと。人や見ぬかと見廻す彌忠太。詞勘六どうした。氣遣ひさんすなもうとまつた。ホイ。シテ此捌きはどうせう。ハテどうといふて高ぶけり。ヲヽ身どもとても此處には居られぬ。ドレ其銀を此方へ。彌忠太様。お前此銀取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍をばらしたからは。どうでおりや遁れぬ命。とても助からぬからは。何もかも勘六が引受けてこな様の名は出さぬ。づきの廻らぬ内早往かんせ〳〵。尤もエヽあつぱれ男ぢや。縁あらば重ねて。細言いはずと早う〳〵。ヲヽさらば〳〵と 地フシ別るる跡。地納めた勘六そろ〳〵と。死骸の傍へ立寄つて。詞首尾よう行たぞ。ヲヽもうよごんすかと 地むつくと起きる體は血まぶれ。詞勘六殿今のでよかつたか。よいとも〳〵。物した物を又こつちへ。これも貴様の切られ様が上手なから。何ぼ切つても疵痛みせぬ。紀州の源藏大儀でごんした。ヲヽサそこらをさす物かいやい。シタガ餘り拍子にか〻つて。よつ程の疵。いたみやせぬか。何のいやい。もう最前吉野丸付けて置いた。それを知らずに今の侍めが。逃げて去にをつたさま。

コリヤ此位の疵はたつた一付で直るわいやい鼻垂めが。ソレ酒代の一兩。忝い。サア／＼これからこちの商賣。紀州源藏樣お歸りぢや。ア、コリヤ立前所ぢやないアレもう芝居が果てる人の見ぬ間に早う行け。チヨン／＼。地幕際綱八の。切狂言の果太鼓音に。紛れて　三重

野崎村の段

地年の内に春を迎へて初梅の花も時しる野崎村。久作といふ小百姓せはしき中に女房は。萬事限りの膈病。娘おみつが介抱も心一ぱい二親に。孝行臼の石よりも堅い行儀の褄外れ。フシ在所に惜しき育ちかや。地冬編笠も燻り三味線つぼもすまたの彈語り。詞御評判の繁太夫節。本は上下綴本で六文。お夏淸十郎の道行／＼。長州あづまからげのかいしよなきこんな形でも五里十里。ナホス詞通らしやれ。母樣の煩ひで三味線も耳へは入らぬ。手の隙がない通つて下され。詞淸十郎涙ぐみお夏が手を取り顏打眺め。地同じ戀とはいひながら。お主の娘を連れて退く。これより上の罪もなし。ナホス詞ヲ、聞きとむない。通りや／＼と地いふ聲に。久作は納戸を出で。詞大坂ではやる繁太夫節そなたにも聞かしたけれど。病人の氣に構はう本なと讀んで氣晴ししやと。地義理ある中も子を思ふ惠みは厚き古合羽の。煙草入からこつて／＼フシ錢取出して。詞ドレ一冊買ひませう。ナンヂヤお夏淸十郎。道行戀の濡草鞋。コレ見や。このお夏は手代と念頃して。姫路を駈落する道行。同じ娘でも世は樣々。纔か三里の大坂へ芝居一つ見にも行かず。今度の大病から目の見えぬばゝの介抱。達者なおれが喰物まで其樣に氣を付けてたもる孝行娘。もし勞れでも出ようかと。おりやそれを案じるわいなう。ヲ勿體ない事いはしやんす。煩うて居さんす母樣より。地健なお前のお心苦勞。せめてもの手助けと思うたばかり。其樣な事苦にやんで煩ひでも出ようかと。私やそれが悲しうござんす。詞ハテわつけもない。したが百日と限りのある婆が大病。案じるも無理ではない。ガ玄庵殿の加減の藥で。今朝から末の椀蓋におも湯が二杯通つた。見かけによらぬ巧者な醫者殿。ヤ幸ひ今日は日和もよし。久松が親方殿へ歳暮の禮に往て來る程に。隨分婆に氣をつきやと地いひつゝ脚絆草鞋がけ。フシ紐引きしむれば。詞ヲ、父樣とした事が。此短い日にモウ晝過ぎ。明日の事になさんせいで。何のいやい。年こそ寄つたれ此足に覺えがある。一時三里犬走り日暮までには戻つて來る。歳暮の祝儀は。コレ／＼此藁苞の芋は鰻になる。久松が年が明いたら

ば。われは又お内儀になる。それ樂しみによう留守せい。ドリヤ往て來うと 地身拵へ。薬苞肩にヤえいとこな。表へ出でしが立ちどまり。 詞取分け今年は早う咲いた此梅。何よりかよりよい土産と。地春待ち顔に咲く花を。手折つて苞に一枝を。添へてひよか〳〵野崎村。跡に見なして。フシ出でて行く。地影見送りて久松が事のみ思ひ兎や角と。胸に一ぱい半分の水量り込む薬鍋。一トへぎ入れる生姜より。辛い面つき久三の小助。久松 フシ引連れ入口から。 詞久作内に居やるかと。地づつと這入ればおみつは嬉しく。詞ヲヽ久松様ようマア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方。 地お茶よ煙草と嬉しさに。立つたり居たり氣もそゞろ。詞エエやかましいわい。うそ穢い在所の茶飲みにはこぬ。コリヤ追従せずと聞いて置けよ。此久松めが親方の銀。一貫五百目お山狂ひにちよろまかしたによつて。今日連れて來たはな。久作と三つ鐵輪で詮議するのぢや。親父を出せ〳〵〳〵とフシ辰巳上り。地身の誤りに久松が差俯向いて詞さへ。無いには若しやと思ひながら。詞お腹立はお道理ながら。何のマア久松様に限つてよもやさうした事はあるまい。定めてこれは何ぞの間違ひ。覺えがなくばないといふ。ツイ言譯をして下さんせいな。ハヽべるは喋るは。コリヤヤイ頭こそ前髪なれ其素早さ。傍輩には辭宜もなしに。取つて置きのお娘まで。此跡はいはずにこます。裾貧乏のはつた行過ぎ丁稚め。首綱のかゝる事言譯に如才があろかい。小倉の屋敷へ請取りに往た爲替の銀。御役人から改めて渡つたは正眞。内へ戻つて明けた所がわやひんの胴脈。道の間ですりかへた品玉の太夫。早咲久松でございます。ハリトウ〳〵。白眼剝くは無念なか。無念なら銀立てるか。あるまいがな。サア久作は何所に居る。地出さらずば引出さうと。駈入る袂を久松引留め。詞成程銀を摺替へられたは皆私が無調法。身の明りの立つ迄は在所へ行けと。後室様の結構な御料簡。それをそなたが。ヤイ〳〵何ぬかすぞい。そりやわれが勝手料簡の聞損ひ。おれには此詮議仕ぬいて來いと。内證で後家御の言付。ぢやによつてめつきしやつきするが何ぢや。ひんこめ出されと 地大聲を。お光が押へて。詞コレ申し御尤もでござんすけれど。奥の病人によい事がましう聞かしましては。病氣の障りもそつと靜かに。イヤ高ういふのぢや〳〵。これ程喚くに聞耳潰すは親仁もぐるの仕事ぢやな。イエ父様はあなたの方へ。歳暮の禮に往かれました。どうして道が違うた事。もし持病やなど發りはせぬかと。地外も

氣がかり病床への聞えも氣づかひ久松が。身の言譯に。スエテ差込んだ。癪を覺えるばかりなり。地弱みへ付込む惡者根性。詞大坂へ往たが定なら否ながら道で逢ふ筈。そんなてれんぬかすなやい。ドレもう家捜と出かけざなるまい。地邪魔ひろぐなとおみつを引退け。取付く久松面倒なと。踏むやら蹴るやら無法の打擲。詮方もなき折からに。道引返しいつきせき戻る久作駈け入つて。小助をフシ引退け突飛ばし。留守の間へ來てわつぱさつぱ樣子によつて料簡せぬぞ。ヲよう戻つて下さんした。最前から久松樣をな。ヲ、よいてや。久作が戻るからは娘もじつと落付けと。地納める程業腹煮し。詞大まいの銀引負したそのばりめ。詮議に來た小助は親方の代。それを又わりや何で投げたのぢや。これは迷惑な。雲雀骨見る樣な手で。血氣なこなた投げたのではない怪我のはずみ。出端れの曲途で道が違うて。留守の間へ大坂から息子が來たぞやと。若い者どもが知らしてくれたで。行き戻り五六里を助かつた德安堤。引返して戻つたが。そんなら何か其引負で久松は戻つたか。ア、それ聞いてマア落付いた。マア〳〵何角は差措いて傍輩衆のお世話であらうと。蔭ながら言うてばつかり居ますわいの寒い時分によう連立つて來て下さつたなう。ソレおみつよ茶なと汲まんかいやい。コリヤ納めな〳〵。わりや夢に見た事もあるまいが。一貫五百目といふ銀高。子の科は親にかゝる。銀立てるか。但しは又願はうか。二つ一つの返答聞こわい。ハテよいわいの。其樣に息せいはるは大きな毒。兎角人間は心長う持つのが藥ぢや。ヤ其藥で思ひ出した。土産にせうと思うたこの山の芋をとろゝにして。出來合の麥飯を進ぜうかい。置けやい。見せかけばかりの正直倒し。麥飯のとろゝのと。ぬらくらとは抜けさせぬ。あんだらくさいと地蹴散らす藁苞。破れてぐわらりと出る丁銀。詞ソレ久松が引負の銀。渡したならば言分あるまい。とつとと持つていなしやれと。地聞いておみつも久松も思ひがけなき驚きに。小助もぎよつとしながらも包改め。詞こりや正眞ぢやテモ出難い所からよう出たな。吹きや飛ぶ樣な内のざまで。泥龜三つで一貫五百目請取るからは言分ないわい。ヲ、そつちに言分がなうても。こつちにぐつと言分がある。と言ふも古いものぢや。これまでお世話になつた親方樣。御恩こそあれ恨みはなけれど。人に欺され取られた銀引負の惡遣のと。無い名を付けて貰うては世間が濟まぬ。というて無理隙取るではない。親が暫く預つて置く程に此通りいうたがよい。モウ二十年おれが

若いと。わごれにはぐつと馳走もあれど入らさる殺生。サア／＼早ういんだらよかろと。地言はれてどうやら底氣味悪く。詞銀の出入さへ濟んでしまや外の事はお構ないさらばお暇申さうと。地打違取出しフシ捻込み押込み。詞ハヽア命冥加な一貫五百目。内へいんで出した所が蟇になつて居やせまいか。ハテ仇口をきかずとも足元の明るい中。ヲいないぢや。銀こそは主の物。何のそのおれがでに。おれがかたげて。おれが足で。おれが歩いて。おれが體がいぬるに。ぐつとも言分ない筈と。地へらず口して。とつぱ門口柱で天窓。アいたし小助は足早に。フシ大坂の方へ立歸る。地おみつは親の氣をかねて。いらへ無ければ久松すり寄り。詞此身の手詰は遁れてもこのお暮しで。餘程の銀。跡でお前の御難儀には。ハテおれぢやとて相應のかくまひはせまいものか。始末してためたあの銀は黒谷の方丈へ上げる冥加銀。氣遣しやんな。まんざらあればかりでもないわいの。改めていふではなけれど。末はわが身と一つにする約束でこのおみつは婆が連子。あれも否でもないさうなり。折もあらば親方殿へ暇の事を願はうと思うてゐたが。これがほんのもつけ重寶。もう大坂へいなしはせぬ。早却なれど日柄もよし今日祝言の盃さすぞ。何とおみつよ嬉しいか／＼／＼。我等はまた天窓を丸め參り下向に打ちかゝらうと。賴み寺へ願うて袈裟も衣もちやんと請けて置いたてや。幸ひ餅は搗いてあり。酒も組重も正月前で用意はしてある。サア／＼早う拵らやと。地藪から棒をつつかけた。親の詞に吐胸の久松。知らぬ娘は嬉しいやら又恥かしき殿まうけ。顔は上氣の茜裏袂くはえるおぼこさを。見るに付けても今更に。否應ならぬ親の前急に思案も出の口の。壁にいの字をフシかき一重。地裏の病床に咳嗽く聲。ホンニこちらの事に取込んで定めて婆が淋しからう。久しぶりで久松にも逢はして。此事を聞したら藥より利目がよい。ハテ俯向いてばかり居ずとおみつ膾も刻んでおけ。久松おぢやと。地先に立ち悦び勇む親の氣を。知つて破らぬ間合紙オクリ襖。へ引立て入りにけり。地跡に娘は氣もいそ／＼日頃の願ひが叶うたも。天神樣や觀音樣。第一は親のお蔭。詞エヽこんな事なら今朝あたり髮も結うて置かうもの。鐵漿の付け樣。地挨拶もどういうてよかろやら覺束なます拵へも。祝ふ大根の友白髮。末菜刀と氣も勇み手元も輕うちよき／＼／＼。切つても切れぬ戀衣や。本の白地をなまなかに。お染は思ひ久松が。跡を慕うて野崎村オクリ堤。傳ひに漸うと。梅を目當にフシ軒の

つま。地供のおよしが聲高に。詞申し御寮人様。かの人に逢はうばかり寒い時分の野崎參り。今船の上り場で。教へてもらうた目印の此梅。大かた此所でござりませうぞえ。ヲ、もそつと靜かにいやいなう。久松に逢ひたさに。來ごとは來ても在所の事。目立つては氣の毒そなたは船へ。地早う〳〵と フシ追ひやり〳〵。地立寄りながら越えかぬる戀の峠の フシ敷居高く。詞物申お頼み申しませうと。地いふもとは〴〵暖簾越し。詞百姓の內へ改つた。用があるなら這入らしやんせ。ハイ〳〵率爾ながら久作様は內方でござんすかえ。左様なら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせと。地いふ詞つき姿かたち。常々聞いた油屋の扱は。お染と悋氣の初物胸はもや〳〵かき交膾组板押しやり。フシ戸口に立寄り。地見れば見る程エ、美しい。詞あた可愛らしいその顔で。久松様に逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ。餘所を尋ねて見やしやんせ。地阿呆らしいと フシ腹立ち聲。地心付かねば。詞ホンニまあ何ぞ土産と思うても急な事。コレ〳〵女子衆。さもしけれどもこれなりとと。地夢にもそれと白玉か露を袱紗に包の儘。差出せば。詞こりや何ぢやえ大所の御寮人様。様々々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女。と悔つてか。欲しくばお前にやるわいなと。地やら腹立ちに門口へ投ればほどけてばら〳〵と。草に露銀芥子人形。微塵に香箱割れ出した中へつか〳〵 フシ親子連。地出てくる久作。詞どうぢや膾は出來たであらう。さて祝言の事婆が聞いてきつい悦び。ぢやが年は寄るまいもの。さつきのやつさもつさで。取上したか頭痛もする。いから肩がつかへて來た。ア、橙の數は爭はれぬものぢやわいの。左様ならそろ〳〵私が揉んで上げませうか。ソリヤ久松忝い。老いては子に隨へぢや。孝行にかたみ恨みのない様に。コリヤおみつよ。三里をすゑてくれ。アイ〳〵そんなら風の來ぬ様にと地何がな表へ當り眼。門の戸 フシぴつしやりさしもぐさ。地燃ゆる思ひは娘氣の。細き線香に立つ煙。詞サア〳〵親子ぢやとて遠慮はない。艾も痃癖も大摑にやつてくれ。アイ〳〵きつう痞へてござりますぞえ。さうであらう〳〵。序に七九をやつてたも。ヲツトこたへるぞ〳〵。サア据ゑますぞえ。アツツ〳〵えらいぞ〳〵。あすが日死なうと火葬は止にして貰ひませう。丈夫に見えてもう古家。屋根も根太もこりや一時に割普請ぢや。アツ、、、。ヲ、父様の仰山な。皮切は仕舞でござんす。ホンニ風が當ると思や。誰ぢや表を明けたさう

な。地締めて参じよと立つを引止め。詞ハテよいわいの。晝中。欝陶しい。ナウ久松〳〵コリヤ久松餘所見ばかりして居ずとしか〳〵と揉まぬかいの。サア餘所見はせぬけれど。エ、覗くが惡い。折が惡い惡い。〳〵〳〵と。地目顔の仕かた。詞ヤ惡いの覗くのと。足に灸こそすゑてゐれ。何所もおみつは覗きはせぬ。サアアノ惡いと言ひましたは。慥か今日は瘟癀日。それに灸は惡い惡い〳〵〳〵というたのでござります。エ、愚痴な事を。此様に達者なは。ちよこ〳〵灸するゑ。作りをするそこで久作。アツ、、。ニ、何ぢやわい。わが身達も。達者な様に灸でもすゑるのがおいらへの孝行ぢやぞや。ヲさうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて。招いたり呼出したり。憎てらしい。アノ病ひづらが這入らぬ様に。敷居の上へ大きうしてすゑて置きたい。コレおみつ殿。振袖の持病のと。色々の耳こすり。はしたない事聞いてゐぬぞや。ホ、、、、變つた事がお氣に障つた。ヲ、障らいぢや。こりやをかしい。其譯聞くぞえ。いふぞやと。地我を忘れて諍を。外に聞く身の氣の毒さ。振の肌著に フシ玉の汗。地久作も持てあつかひ。詞アヽコリヤ肩も足もひり〳〵するがな〳〵。まだ祝言もせぬ先から。女夫いさかひの取越かい。灸業の代り。喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜め〳〵。イエ〳〵構うて下さんすな。今の様な愛想づかしも。病ひづらめがいはしくつさる何をいふやらモウ〳〵兩方とも。おれが貰ひぢや。ヨヨ。中直しが直に取結びの盃。髪も結うたり鐵漿もつけたり。地湯もつかうて花嫁御を。コリヤ作つて置けと打笑ひ。フシ無理に納戸へ連れて行く。其間遲しと駈入るお染。逢ひたかつたと久松に スヱ縋りつけば。詞アヽコレ聲が高うござります。思ひがけない此所へはどうして。譯を聞かして〳〵と。地問はれて フシ漸う顔を上げ。詞譯はそつちに覺えがあらう。私が事は思ひ切り。山家屋へ嫁入せいと。殘しておきやつたコレ此文。そなたは思ひ切る氣でも。地私や何ぼでもえ切らぬ。餘り逢ひたさ懐しさ。勿體ない事ながら。觀音様をかこつけて。逢ひにきたやら南やら。知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一所に添はうなら飯も炊かうし織り紡ぎ。どんな貧しい暮しでもわしや。嬉しいと思ふもの。詞女の道を背けとは。地聞えぬわいの胴欲と。恨みのたけを友禪の。振の袂に北時雨晴間は。フシ更になかりけり。地曇り勝なる久松も。背撫でさすり聲ひそめ。詞其お恨みは聞えてあれど。十の年から今日が日まで。船車にも積まれぬ御恩。仇

で返す身のいたづら。冥加の程も恐しければ。地 委細は文に殘した通り。山家屋へござるのが母御へ孝行家の爲。よう得心をなされやと。いへど答も涙聲。詞 否ぢや〳〵私や否ぢや。今となつてさう言やるは。これまでわしに隱しやつた。許嫁の娘御と女夫になりたい心ぢやの。地 是非山家屋へ行けならば覺悟は疾うから極めて居ると。用意の剃刀取直せば。それは短氣と久松が。止めてもとまらず。詞 イヤ〳〵〳〵そなたに別れ片時も。何樂しみに生きて居よう。地 止めずと殺して〳〵と スヱテ 思ひ。詰めたる其風情。詞 そんなら是程申しても。お聞分はござりませぬか。添はれぬ時は死ぬるといふ。誓紙に嘘がつかれうかいなう。ハア達て申せば主殺し。命に代へてそれ程迄に。思ふが無理か女房ぢやもの。叶はぬ時は私も一所に。お染樣。久松と 地 互に手に手取りかはす惡緣。深き契りかや。地 始終後に立聞く親。詞 其思案惡からうと。地 言はれてはつと久松お染。騒ぐを押へてア、大事ない〳〵。詞 マア〳〵下に居や。因緣とは言ひながら。和泉の國石津の御家中。相良丈太夫樣といふれこさの息子殿。聊の事で家が潰れてから。わが身の乳母はおれが妹。其緣で十の年まで育て上げた此久作は後の親。草深い在所に置こより。知慧付けの爲油屋へ丁稚奉公。それ程までに成人して商賣の道讀書まで。人並になつたはコリヤ親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは。これ見や。先に買うたお夏淸十郎の道行本。嫁入の極つてある。主の娘をそゝなかすとは。道知らずめ。人で無しめ。サこりや淸十郎が話ぢやわいの。疾うから意見もしたかつたけれど。丁度今の樣な事があらうかと。それが悲しさ一日延び。二日延ばしする間。降つてわいた銀のもめ事。これ言立に隙を貰ひ分けて置くのが上分別と思ふから。引負の銀の工面。どの樣に氣張つても高の知れた水呑百姓。僅かの田地著類そげ。おみつめが櫛笄まで賣代なし。漸う拵へたさつきの銀。地 生さぬ中でも親子といふ名があるからは。肉親分けた子も同然。可愛うなうて何とせう。詞 コレお染樣ではない。此本のお夏とやら。淸十郎を可愛がつて下さるは。嬉しい樣で恨めしいわいの。聞いての通りおみつめと女夫にするを樂しみに病苦を堪へて居るアノ婆樣に。今の樣な事聞かしたら。何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には。そこらの義理も絲瓜の皮と。投げやつてこなさんといつまでも。添遂げられるにしてからが戸は立てられぬ世上の口ぢやわい。エ、アノ久松めは辛抱した女房嫌うて。身上のよい油屋の聟になつたは。コ

レ榮耀がしたさぢや皆慾ぢや。人の皮著た畜生めと。地在所は勿論大坂中に指さされ。人交りがなりませうかいの。コレ〳〵父の道理を聞分けて。詞思切つて下され。申しコレ拜みますわいの〳〵。是程いうても聞入れず。親御達が滿足に産付けて置かしやつた其體を。切りさいて淺ましう死ぬるのが女の道か心中か。サ久松も其通り。不義密夫の惡名受け。實親の名を汚すばかりか。世間の義理も主の恩も。むちやくちやにして仕舞ふのが。侍の子か人間か。地返事次第で思案があると。眞實親身の强意見。骨身にこたへて久松お染。何と返事も フシないじやくり。これ程いうても返答のないは。コリヤ二人ながら不得心ぢやの。アヽ勿體ない。實の親にも勝つた御恩。送らぬのみか苦をかけるも。私が不所存から。イヤ〳〵そなたの科ではない。皆此身の徒から。親にも身にも代へまいと。思詰めても世の中の。義理にはどうも代へられぬ。成程思ひ切りませう。ヲヽよう御合點なされました。私もふつゝり思ひ切り。おみつと祝言致しまする。そんならそなたも。お前もと 地互に目と目に知らせ合ふ心の覺悟は フシ白髪の親仁。詞アノさつぱりと思ひ切つて。祝言をしてたもるか。何の嘘を申しませう。娘御も今の詞に。微塵も違ひはござりませぬか。久松の事はこれ限り。私や嫁入をするわいの。ヲヲ出來た〳〵。むくつけな親仁めと腹も立てず。よう聞入れて下さりました。晩の間の知れぬ婆が命。息のあるうち祝言が濟んだと聞かして下さるが。大きな善根。善は急げぢや。今こゝで盃さそ。おみつ〳〵と フシ呼立つる。地聲聞えてや。病床より。母は漸う探り出で。詞親仁殿。久松もそこにか。待ちに待つた娘の祝言嬉しうて〳〵。此間にない氣色のよさ。大煩ひの上目まで潰れた因果人佛樣のお迎ひを待兼ねたに。難面い命があつたりやこそ。悦ぶ聲を聞くといふも。孝行な久松が蔭。ふつゝかな在所生れ。心には入るまいけれど。末の面倒見て下され。地賴みまするといふ中も。痰火は胸にせき上せば。詞エヽ此寒いのに寢所にやつぱり居たがよござります。地冷えれば惡いと蒲團の上。抱きかゝへて久松が。介抱如才納戸より。親子の中も丸盆に乘せた盃銚子鍋運ぶ久作。詞コレお婆。やつぱり寢ては居やらいで。したが島臺の無い代り。世話事の尉と姥も新しい。目の見えぬは目出度い秀句ぢや。ハヽヽヽ。エヽ目出たい序に。此嫁は何所に居るぞい。おみつ〳〵と 地尻輕に。立つて一間を差覗き。詞ハテ出ぐすみをして居るは。それでは果てぬと手を取つて。サア〳〵マ

ア〳〵嫁の座へ直つたり〳〵。エヽトキ
ニ一家一門著の儘の祝言に。改つた綿帽
子。地うつとしからう取つてやろと。脱
がすはすみに笄も。抜けて惜しげも投島
田。根よりふつつと切髪を。見るに驚く
久松お染。久作呆れてこりやどうぢやと。
いふ口抑へて。コレ申しとゝ様もお二人
様も。何にもいうて下さんすな。最前から
何事も殘らず聞いて居りました。思ひ切
つたといはしやんすは。義理に迫つた表
向。底の心はお二人ながら。死ぬる覺悟
でござんしよがな。サ死ぬる覺悟で居や
しやんす。母様の大病。どうぞ命が取り
とめたさ。私やもうとんと思ひ切つた。
ナ切つて祝うた髪かたち。見て下さんせ
と兩肌を。脱いだ下著は白無垢の首にか
けたる五條袈裟。思ひフシカヽリ切つたる
目の中に浮む涙は水晶の。玉より清き貞
心にスヱ今更何と詞さへ。涙呑み込み。

呑み込んでこたゆるつらさ久松お染。久
作も手を合せ。何にもいはぬこの通りぢ
や〳〵。詞エヽ女夫にしたいばつか
りに。そこら邊に心もつかず莟の花を散
らして退けたは。地皆おれが鈍なから。
赦してくれも口の内。聞え憚る忍び泣き。
アヽ詞冥加ない事おつしやります。所詮
望は叶ふまいと思ひの外祝言の。盃する
様になつて。嬉しかつたはたつた半時。地
無理に私が添はうとすれば。死なしやん
すを知りながら。どう盃がなりませうぞ
いな。詞おみつの何をいやるやら。女夫
になりやるを此母も。悦びこそすれ何の
死の。ナウ親仁殿。ソヂヤワイノとても此
世はない縁でも。せめて未來は。アヽイ
ヤ未來までも變らぬといふ。地盃さそと
フシ立上り。地口に唱名ぶつ〳〵と佛壇
開けて取出す。花瓶の松に鶴龜もあの世
を。ホフシ契る心の島臺。詞サア〳〵斯う

してなりと盃さすのが。せめてもの心ゆ
かし。エヽいひたい事だらけぢやけれど。
このやうな座敷には。たべ付けぬこの親
仁。地三々くどうは言はぬが花嫁。詞一
つ飲んで久松へ。アヽ目出たい〳〵。婆
もさぞかし嬉しかろ。ヲヽ嬉しい段かい
の一世一度の娘が晴。定めて髪も美しう
出來たであろ。さき笄に結やつたか。イ
エそんなら兩輪か。ヲヽ兩輪とも〳〵。
思ひがけなうすつぱりと。アいやさつぱ
りとよう出來たわいの。ヲヽ親父殿のい
はしやる通り。自慢ぢやないが髪は大て
い上手ぢやござらぬ。ホンニ前方大坂行
の土産に貰やつた薄の簪。けふの晴に
差しやつたかや。著物は取つて置きの花
色。加賀の裾模様。それか。アイそれ著
て居やるか。アイナ。ヲヽわがみにはよ
う似合ふぞいの。ならう事なら鐵漿付け
て。顔直しやつたおとなしさを。たつた

一目見て死んだら。地善行寺様の御印文にも勝つて。未來は極樂往生。詞ホ、、ホ、。わしとした事が。目出度い中で忌まはしいと。久松必ず氣にかけて。地たもんなやいのと子に迷ふ。暗き盲目にそれぞとも。知らず悦ぶ母親の。心を察し誰々も泣聲せじとくひしばる。四人の涙八ッの袖。榎並八ケの落し水膝の。堤やフシ越しぬらん。地見聞くつらさに忍びかね。お染は覺悟の以前の剃刀。南無阿彌陀佛と自害の體。久作あわて押止め。詞コレ娘御何が不足で死ぬるのぢやと。地聞き間違うて娘ぞと。母は驚きコレおみつ待つて／＼と這寄つて。探る手先に五條袈裟。詞ヤアこの袈裟といひこの頭。どうして髮を切つたのぢや。地譯を聞かして／＼と。急けば急く程咳きのぼし。病苦に惱む母親を。見るに娘は猶悲しく。詞コレ母様こらへて下さんせ。添ふに添はれぬ品になり。私や尼になつたわいな。ヤア／＼／＼そんなら先刻にから母が氣を休めう爲。ヲイノ來世の緣を結ぶ盃。此世の緣は切れてあるわいの。ハア。ヲ、尤もぢや／＼。そなたは見えぬがいつそまし。地傍でまじ／＼見て居る心推量してたもいのと。いふ聲咽に詰らせば。詞サア／＼／＼其悲しみをかけるのも此お染から起つた事。死ぬるがせめて身の言譯。イエ／＼。死なねばならぬ此久松。地わしから先へと駈寄るを。久作剃刀引つたくり。詞是程いうても聞入れず。是非死にたくばおれから先へ。物の見事に死んで見せうか。爺様が死なしやんすりや。私も生きては居ませぬぞえ。ヲ、娘出かしやつた。むさい在所に育つても貞女の道を辨へて。よう尼になりやつたなう。そこにござるが噂に聞いたお染様か。お前様や久松を殺しとむな いばつかりに。蝶よ花よと樂しんだ一人娘を尼にして。出かしたといふ心の中思ひやりがあるならば。なぜ存へては下されぬ。折角娘が志無足にするとは地胴慾と堪へし涙一時にわつとばかりに取亂せば。詞ヲ、道理ぢや／＼。サア／＼どうあつても死にたくば。婆も娘もおれも死ぬる。三人ながら見殺す氣か。サアそれは。思ひ留つて下さるか。但し死なうか。サア／＼／＼と地三方が。義理と情と恩愛のしめ木にかゝる久松お染。死ぬる事さへ叶はぬはいかなる過去の報ひぞと前後正體。泣倒れ咽返るこそフシ道理なれ。地久作涙押拭ひ。どうやらかうやら合點が行たさうな。詞さぞ母御様が案じてござらう。大事の娘御結な者に。イヤそれには及びませぬ。母が慥に請取りましたと。地フシ言ひつゝ這入れば。地ヤア母様。ハアはつとばかりに詞なく差俯向けば。詞コレ／＼お

染か野崎参りしやつたと。聞いて餘り氣違ひさ。アイヤ氣慰みによからうと跡追うて來て何事も殘らず聞いた。夫婦の衆の深切おみつ女郎の志。最前からあの表で。私や拝んでばつかり居ましたわいなう。サア觀音様の御利生で。怪我過のなかつた嬉しさ。これから直にお禮參り。ホンニこれはさもしい物なれど。御病人への見舞の印。地麁末ながらと詞數いはず出過ぎぬ杉折を。フシ供の男が差置けば。詞マア／＼冥加もないお見舞。地戴きますると取上ぐる。手元はづれて取落せば。中よりぐわらりと以前の銀。詞ヤア先刻に渡した此銀を。ヲヽ表向で請取つたりや事は濟む。改めて尼御へ布施せめて娘が冥加ぢやわいなう。言譯が立つからは久松ももとの通り。戻つて目出たう正月しや。取込の中長居も無遠慮。娘もおぢやと地手を引いて。フシ表へ出づれば久作も。門送りして。詞これはマア／＼何とお禮を申しませうやら。お辭宜致すも却て無躾。せめてものお土産に。折つて置いた此早咲。地めでたい春をまつ竹梅とお家も榮え蓬萊の飾物。幾久松が御奉公大事に勤めて此御恩。忘れぬ フシ 證と差出せば。詞ヲヽ心ありげな此早咲。譬へていへば雨露の恵を受けぬ室咲は萎むも早し香も薄い。盛りの春を待てといふ二人への良い敎訓。殊更内に口さがない者もあれば。何かに遠慮せねばならぬ。幸ひ私が乘つて來た。あの竹輿で。コレ久松。そなたは堤お染は船。別れ／＼に往ぬるのが世上の補ひ心の遠慮。左様でござりますると。お志ぢや。乘つて往にや。娘は船へと地親々の。詞に否も言兼ぬる。鴛鴦の片羽の片々に別れて。二人は乘移れば。詞そんなら久松もう行きやるか。地來る正月の藪入を。母も必ず待つて居る。詞兄様お健でお染様。もうおさらばと詞まで早改まるおみつ尼。哀れを餘所にみなれ棹船にも積まれぬお主の御恩。親の恵の冥加ない取分けておみつ殿。斯うなりくだるも前の世の定り事と諦めて。お年寄られた親達の。介抱頼むといひさして泣音 フシ 伏籠の面ぶせ。地船の中にも聲上げて。よしないわし故おみつ様の。緣を切らしたお憎しみ堪忍して下さんせ。アヽわつけもないお染様。浮世離れた フシ 尼ぢやもの。地そんな心を勿體ない。短氣起して下さんすな。詞ヲヽ／＼娘がいふ通り。死んで花實は咲かぬ梅。一本花にならぬ様に。目出たい盛を見せてくれ。隨分達者で。ハイ／＼お前も御無事で。お袋様もお娘御も。おさらば。さらば。さらば地／＼も遠ざかる船と。堤は隔たれど緣を引綱一筋に。思ひあうたる戀中も義理の柵情のかせ杭。竹輿に比翼

を。引分くる心々ぞ ユリ三重 へ世なりけり

下の卷 長町の段

廓カヽリ 鬼は外。福は内。ナホス 打納めたる日暮から。晝を欺く長町の夜店賣物家々の春を。請取る賃搗屋。賑ふ臼取杵の音。とんく疾うからせつきに來る。下女が丸顏とり粉ぬる。鏡の大小子持嗅。分相應の年始め フシ 實に神國の證なり。地 忙しい中で油屋の小助は肩に風呂敷包。ぶらく フシ 來る餅屋の門。詞 ヤア勘六こゝにか。今日は年越で一日の休み所を透かさず賃搗にまで雇はれるとは。きつい精の出し樣ぢやな。イヤモこれもせう事なしぢやわいの。何が寡なり宿はなし。年中の飯米は饂飩か餅か。五文取の代五六百。此雇賃で帳消さすのぢや。が貴樣の世話でそちの內へ。絞に雇はれて行くにつけ。いつぞやの座摩での仕事。久松めがじろくとおれの顏を眺めをると。どうやら氣味が惡いわい。ハテさて日頃に似合はぬ正直な事いふわい。貴樣を絞りに入れて置くのも。久松めを目論にかけて追出す仕事の種油。あすは大晦日仕舞仕事ぢや朝から來てたも。今夜は槌の子でも抱いて寢る晩。そこで我等も隙貰うてこれから色の所へ行くぢや。ア、さうかして月代もすつぱり。ア、こりや障つてくれな。たつた今床で結立ぢや。ム、それに又其風呂敷は何ぢやぞい。これか。こりや立てに行く大盡衣裳ぢや。內からは著て出られぬ故こゝまで小出し。羽織は卽ち此隣の古手屋に誂へて置いた。ヤコレ。此間の茶縮緬仕立ててあるかな。ヤ何ぢや。もう追付け出來ます。エ、遲いく。今夜色に見せに行くのぢや。こゝからすぐに著かへて行き。何でも今夜はえら立てぢや。勘六貴樣も辨慶に連れて行く。其代りおれを旦那あしらひにしてたも。コレ。必ず久三といふまいぞと。地 太平樂の下稽古。隣りへ入れば フシ 立替る。地 季もあら玉や往來の。足も春めく祇園道。主持つ身には年德の惠方參りそこくにせはしう戾る久松が。摺違うたる提燈の。印に目早く見返る女。詞 申し。くお若いの。ハイどなたでござりまする。イヤ卒爾な事ぢやが若しお前はと。地 言ひつゝ明りに顏見合せ。詞 久松樣か。ヤア乳母のお庄。地 これはとばつたり小提燈。ヲ、危い灯を消さすと。とつくりと久振りの顏見ませう。半ば元服さしやつてから。お果てなされた丈太夫樣にとんと其儘。ヲ、きつとした好い殿ぶりやの。此間の文定めて見やしやんしたであろ。乳母が日頃の念願叶ひ。今度殿樣におめでたで。多くの科人も御赦免なさるゝ折柄。一つの功さへ立つならば丈太夫が悴久松。和

泉の本國へ歸參さするは此時。其功の立て様は。先達て紛失の吉光の守刀。即ち此度のお目出度に正月三日鎧開きにお餝りなさるゝ。それ迄に其刀を詮議して差上げなば。跡目相續相違あらじと御家老中の仰せ渡され。まだ年もあるけれど。親方様へ暇の願ひ。聞届けがあつたかまだか。マア年越に健な顔見て。地嬉しうござると フシ餘念なき。地親身の詞に久松は。今更國へ往なれぬ譯。明けて言はれず。詞それはマア嬉しいが。師走の内も今日明日になつて。餘りせはしない急な出世。そうして其吉光の刀は手に入つたかや。さればいな。大坂谷町の質屋にあると聞いた故尋ねに往たれば。その質は半年前に流したといふ。かの刀の失せた折から。お國を出奔した鈴木彌忠太。こいつが盗んで立退いたは知れてある。その質の置主の名を尋ねても言はぬからは。此質屋も相對と思はるゝ。フウ何といやる。谷町の質屋とはもし。山家屋とは言はぬか。ヲ、それ／＼。その山家屋佐四郎。彌忠太は此長町に居るげな。慥な手懸りあるからは。必ず氣遣ひさしやんすな。まちつとの所ぢや煩ふまいぞ。コレ和子。ヲ、マア私としたことが。やつぱりぼん様の様に。追付け千五百石の若旦那。立派な馬に乘せまして。地はいしい同勢お國入り。お目出たう フシござります。詞何から何まで乳母の深切。孤子になる久松けふまで命恙いも。そなたの兄久作殿のお情。其刀の質請にも。定めて金がいらうがの。詞これは足しにもなるまいけれど。重々世話の恩返し。地萬分の一歩七つ八つ。守袋を開けて出す。はずみに落ちるお染が起請。隱すを押へて。コレ申し久松様。奉公人に似合はぬ黄金。誰に借らしやつたぞ。合點が行かぬ。ア、イヤ／＼氣遣ひな事ぢやない。此壹歩は小遣にせいと御寮人様が下さつた。その書いた物は大事の守り。こつちへたもいの。イヤ待たしやんせ。ハテ情深い御寮人様ぢやな。シタガ餘り親方の情過ぎるも善し悪しの。なには兎もあれ。しぼらしいお前の志の金預つて置きませう。此書いた物は熊野の牛王か定めて大切な守りであらう。神様の名を書いた物。そゝこしうしては今の様に。つい溝へでも取落せば守りが却つて其身に祟るこりやわしが預かりますと。地ちらりと見付けて懐へ。くろめる乳母は守神 フシ胸に納めて。詞久松様明日は私もお家へ參り倶倶に暇の願ひ。親方持ぢやマア早う往なしやんせ。地諸事は明日と言殘し立別れては立留り。詞コレ申し必ず國へ行くのぢやぞえ。ア、どうやら濟まぬ顔付ぢや。ほんに又油斷のならぬ。いつまでぼん様

ぢやと思うて居る内。つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子。地いとしや仕馴れぬ奉公をと。昔思へばひと雫涙。催す師走空見返り〳〵 ユリ三重へ別れ行く。地往來人絶え長町の。夜店の賣聲。小唄物眞似。詞なまいたんやぽ。厄拂ひましよ。落しましよヤアラ目出たいな何ぼう目出たいな。こなたの御壽命申さうなら。鶴は千年龜ぢやないか。三か 地六かと一所へ。呟きよるの フシ小働き。詞ナントよい仕事したか。サアひがだいの衒妻。侍に逢うて物いふ間に。ちぼ引いた。ヤア結構な守りぢやな。中には一歩書いた物も入つてある。日本橋でてうふせう。アレ〳〵又衒妻が此方へうせる。地かはせ〳〵とばら〳〵に。散る三人を見付けた勘六。フシ跡を慕うて飛んで行く。地非道の刀さすが世を。忍び頭巾の浪人に。小腰屈めて付添ふお庄。詞胡散者と思召し。お名をお包みなさるゝは尤も。一昔過ぎた事なればお見忘れなさる筈なれど。此方にはよう覺えてをります。石津の御浪人鈴木彌忠太様。其時の同家中相良丈太夫が家來。三平が女房のお庄でござりますわいな。ハテナ。成程さういやれば見請けた様な。シテ此彌忠太には何の用。ハイお願ひがござります貴方様が國元を。お立退きなさるゝ折節。紛失致した吉光の刀。其過りで主人丈太夫家退轉。此刀が今でも出れば。主人の跡目相續致す。承れば當所の質屋。山家屋に質物になり。限月は切れたれどその置主さへ知れたれば。質札を買取り。此方へ請戻したさ。色々と心を碎いて金子十五兩。才覺致して參りました。詞どうぞ其金で質札を。私へお賣り下されうならヤコレ〳〵何と言ひめす。スリヤ其質の置主を。この彌忠太ぢやと聞召さつたか。イヤ左様でもござりませねど。それに又麁相千萬其置主は卽ち盜賊。さしつけて身どもぢやといやれば。此彌忠太を盜賊といふも同し事。女と思ひ聞流せば。慮外至極とかさ押にきめ付くる。イヤ全く左様ではなけれども。もし貴方がこの置主を。御存じならば 地お知らせなされて下さりませいを打消して。詞アヽ師走の果に左様の事。相手になる馬鹿があらうか。とはいふものの侍は相互尋ねてやるまいものでもないが。其詞僞りなくば十五兩の金子。そこに持つて居召されうの。イヤ旅宿に預けて置きました。ムヽ手前も只今急用で。他所へ參る明日參つて篤と談せう。お手前の旅宿は何處だ。ハイこんな事もあらうかと。則ち旅宿の所書。認めて置きましたと。地何心なう懷へ。ふつと氣の付く守袋。搜せど見えずはつと悔り。詞イヤコレ〳〵身も只今は心せき。重ねて緩

りと早参ると。フシ袂ふり切り急ぎ行く。地ア、これ申し今暫く。詞エ、折もをり今の守りもし人に拾はれては久松様の身の大事。それも氣遣ひ。今來た道へ。イヤ〳〵。刀の詮議は延されぬと。我が身は一つ二筋道。フシ忠義一途に追うて行く。地勘六に締上げられ。手をすりごうの痛い顏。詞ア、申し出します〳〵。出しあがれ。今働いたはこの守り。一歩が八切。其儘でござります。まだこればかりぢやない。何もかも吐出しをろと。地せごす後に立聞く彌忠太。詞ヤアわりや勘六ぢやないか。ヲ、彌忠太様か。彌忠太かとは横道者。汝よう身共をやつたな。サ、、、何にも言はしやますな。コレ此紙入はお前のであらうがな。ヤ何が。ハテサお前のぢや〳〵。中にはしつかり。これが日外の入替へ。ナえいかえ。ム、〳〵いかにも身どもが紙入。よく盗んだ

な。まだ〳〵コレ此印籠。ヲ、それも身どもがのぢや。イエ〳〵その二色は。お前様のぢやござりませぬと。地いふを言はせずどう盗めと。二人が寄つて踏んづ蹴つ。いがみの物取る大盗人に。フシ命から〳〵逃げて行く。地二人は跡を見廻して。詞彌忠太様。先度の一貫五百目は。丁半でころりと仕舞うて。ちぎ文もおはしまさぬ。それで算用ずつてにさんせ。エ、ふといやつ。さして此紙入には何程ある。ヤアこりやはした錢ぢやぞよ。うまい人ぢや銀なら何のこなんにやらう。マア〳〵腹立てさんすな。此守袋には。お性根が入つてあつたれど。そりやおれが飲んで仕舞うて。あとに書いた物がある。慥に證文と思はるゝ。おりや讀めぬによつて。こな様に進上すると。地渡せば取つて夜店の明り。詞ヤア、こりやこれ。お染と久松が起請。よい物が手に入つ

た。油屋へ仕懸けてぐずりの種。コレ〳〵そんなら。二つ山ぢやぞやと。地何でも取付く フシ餅屋の隣。詞待つた暫く。此小助も其仲間へ。入れて貰をと。地ぬつと出でたる男ぶり。久三の繻袢引きかへて。一丁目脇指やつ仕立。當世風の フシ旦那衆頭。詞彌忠太様何とえらいか。よい事聞いた。祝ひに今夜は我等立てちや〳〵。そりや過分なが。まだ一口儲けの手筋。片付けて跡から参らう。ヲ、此勘六も今一臼取つてから。貴様の餅搗き祝ひに行かう。そんなら勝曼で待つて居る。打つてくれ。シャン〳〵。も一つせい。しやん〳〵。祝うて三度おしやしやんのしやんしやん。〳〵 地しやんと引別れ。フシ葭簀も折柄よい時分。行かんとせしが立ちとまり。詞ハア俳しと。久しう行かぬ馬場先の。田中屋へ行かうか。アいや〳〵彼奴が所はぶさ打つてある。それよ。勝曼

の色めが醴に。生姜入れて待つて居る筈。先づ此方へと 地 行つては戻り。詞 ア、可愛や髭剃のおふさが借錢の咄。正月屋のぜんざいを。お前と氣入らずに喰ひたいといふたが。これも行きたし。醴も飲みたし。地 どうせうか。から勝曼六道の。辻に待つた以前の丐ども。詞 こちらが仕事の。邪魔しをつた侍めはソレそいつぢや。地 たゝめ〳〵と三人が。有無を言はさず引立つる。夢見た樣な。小助が難儀。悔り駈出す勘六を。そいつもぐるぢやと。掴み付く。心得立臼とり〳〵の。餅に片足踏んごんで。べつたり尻餅あも重ね。運のつき臼。掴み付く。眞額げんのみ五文取り。起上つては又ころ〳〵。取粉にまぶれて頬眞白どれがどれやら 味方同志。ぶつやら踏むやら暗まぎれ。跡をも見ずして 三重 へ走り行く

油屋の段

フシ 地 難波詠めの。其中に名に大坂の鬼門角。油のしめ木引きしめて意見の種も後家育ち。山家屋へ嫁入の日數迫りし大歳の。拂ひは宵に片付けて春を壽く注連飾 小オクリ 松の。盛砂。高盛の飯椀づらりと仕事師の フシ 夕飯時は賑はしゝ。詞 ア、おさつ殿使立てました。今日は大晦日一年中の仕事納め。早う仕舞うて知行米はマア腹へ取込んだ。此勘六めはどつちへうせた。めんやう惡い癖で飯時に飯は喰はず。又酒買ひにうせをつたか。あいつは大方さか兒に生れをつたであろ。イヤ〳〵酒喰ひの筈ぢや。あいつは薦かぶりから成上つた奴ぢやげなと。傍に居ぬ者譏り合ふ口の惡いは フシ 缺徳利提げて外から。詞 ヤイ〳〵〳〵勘六が事譏りあがつたは長八めぢやな。イヤおれぢやない久兵衞ぢや。イヤおれぢやないぞ〳〵。エヽ喧しい。どいつこいつの用捨はない皆覺悟してけつかれ。人の錢借つては飲むまいし。おれが酒飲んだら汝等が足でもひよろつくか。何のいのちつと傍あたりが熟柿臭いばつかり。吐しをんな。惣體油搾りといふ者は襦袢一つで働く商賣。取分けておれは寒の師走も日の六月も。年中裸で暮す故だはの勘六と異名付いた男。此仕事せいでもえい錢を儲けるけれど。打入れ打上げる。けがな身に付けた例がない。汝らは錢が無いからえ喰はぬのぢや。おれが此嗅をかゞしこますを有難いと思ひけつかれ。一盃入れて跡で飯も喰ふのぢや。此盛つてあるおれが飯にどいつでもほでさいたら腹袋引裂くぞと。地 何でもふしづく鬼の面。ほつた腕は惡鬼の看板。障らぬ フシ 神に祟なし。詞 仕事の賃さへ貰うたら往んで早う年取らう。

ヲヽどうなと勝手にしをれ。おりや往なうにも盆はなし。此酒の勢ひにぐつたりといつそ來年迄一寢入してこまそと。地裏へ轉込む拗强者に。構はぬ手間取お家樣へよいやうに。詞ホンニ此久三の小助は今朝からとんと顏見ぬなう。サア昨夜の年越からまだ戻らんせぬ。ム、年越からとあれば何所の豆を喰ひに往かれた。大かた納屋の下の陰裏豆。地こちもいんでかゝの煎豆。お福は內に待つて居よとフシ住家々々へ立歸る。地木綿でもなく絹でなく。せう事なしの山蠶紬。久三小助が廓通ひ オクリ勝曼の。茶屋で 昨夜から。しゆつぽく酒の二日醉こそのお山に送られて瓦屋。橋にふつと氣が付き。詞ヤアこりやうか〳〵來て早やこちの內ぢや。もう往んでくれ〳〵。サア最前からいね〳〵いひちやけれど。內方が見たさについて來た。アヽコリヤ覗くな手代衆が見やしやる。イヤサ手代どもは大事ないけれど。女どもが見たら悋氣する。ちやつといね〳〵。そんなら旦那樣かた三日違へなえと。地ぴんしやん歸るを待兼ねて。番部屋の物陰で。著かへる衣裳繻子の帶。上著くる〳〵。すつぽりと元の。久三の尻からげ。急がし顏で竹箒。詞ノリ昨夜ののらの掃溜を跡から拭ふ拭き掃除手桶の切水ぱつ〳〵と。地浮名は餘所に立つぞとも知らぬ久松小隱に。悋氣。口說も聲高に。いはれぬが フシ苦の世界なり。詞お染樣そりや何おつしやる。許嫁のおみつさへお前には見かへぬ私。それに何の浮氣らしい外の色事所かいな。イヤ〳〵何ぼさういやつても合點がいかぬ。これ見や久樣と書いたお山の文が再再來るは。どうでも茶屋狂ひしやるに極つた。これは又疑ひ深い。何所の奴がそんな狀。誓文私が茶屋へ行たら。地西から日が出る東堀。いづこ川筋師走の懸取。詞田中屋でござります。中拂の殘り十貫五百文御算用賴みます。ム、田中屋といふは覺えぬがこなさん何賣つたのぢや。イエ私は馬場先の茶屋でござります。久樣にお目に懸れば御合點。女郎衆の取替が六貫三百殘りは御酒取肴。ア、これ滅相な。此久松馬場先とやらつひに往た事もない覺えない〳〵。ハテこな樣の知つた事ぢやない久樣に逢はして貰を。サア久松は私ぢやわいの。イヤ久松ぢやない久といふは此內の旦那殿。旦那に逢へば分るこつちや。イヤ〳〵そんな名は爰にはない。ハテ扨。コレ旦那の口から直に聞いた。おれが名は油屋の久三郎とおつしやつた。久はひさといふ字。そこでこちの島では久樣といふわいの。エ、そんな事こちや知らぬ。知らぬぢや濟まぬと聲高に。地見ぬ顏しても居られぬ小助。

門から手招き。詞コレ〳〵〳〵爰ぢや〳〵。久三郎これにをる。イヤアお前は久様旦那様かと。地恂りあたふた門口へ。詞エ、不粋なやつではある内へ這入るといふ事があるものかい。デモお目に懸らにや濟まぬ出入。ぢやがお前はテモ薄いお姿で。そして御自身に門掃くとはこりやどうでござります。サイヤイ。大勢の人を使ふ者は旦那からかうして見せねば廻るものぢやないわいやい。ハア聞えました。時に聞えませぬは日外からお風が變つて勝曼へお出なさるゝげな。そしてこれ程の御身上に私が僅かの懸を。サア〳〵やるわいやい。ソレマア三歩取つて置け。跡は後にこつちから男どもに持たしてやる。それも面倒いおれが直に持つて行く。そりや有難いそんなら必ず。違やせぬわい。これ迄算用せずに置いたは。お山めが意氣方が惡さに肝癪で態と引摺つたのぢや。イヤそりや旦那お道理なれど。お山の肝癪で呼屋を踏むとは大きなつぼ。ソレ重井筒にもござります。踏むな呼屋に科もない。地火燵にたんと火をいけて。待つて居ます。くわつとお立と。こそ屋はいき〳〵。生玉さして フシ立歸る。詞コレ小助殿。この閙がしい大晦日に何所へ往て居やしやつた。へ、前髪がなまちよこざい置いてくれ。久三と手代二人前の此小助。請拂は昨日しまふ。年越に隙貰うて戻ると直にはき掃除。此働きが目に見えぬか。イヤ〳〵さうばかりぢやない。明日の節の椀家具藏へ行て出して來いと。かゝ様の言ひつけ。イエ〳〵藏の出し入れは久三の役ぢやござりませぬ。お氣に入りの久松。御寮人様と連立つて行きや。それでは詞に角があつて氣の毒今のはわしが言損ひ。サアいつしよにと 地傍輩の機嫌取る手をひつしよなく。詞ハテ行けなら行くが邪魔になろがな。あすは元日。大かた姫始の取越しお染様の藏の鍵。あけましてお目出たうござります。エ、同じ傍輩で門口からお禮申す事さへならぬ。此久三には何がなると。地けたい惡口傍輩悋氣 オクリ ぶつくさ。へ呟き立つて行く。地年一日も フシ暮れかゝる。地四十の浪も世話に寄る乳母のお庄は久松に尋ね。おほさか油屋の。中戸に訪ひ。頼みませう。どなたと内より出合頭。詞久松様か。ヲ、乳母か。よう來てたもつた。マア〳〵こゝへと 地深切は。變らぬ中の フシ行燈の陰。地男が先へ箱提燈點し立てたる禮衣裝。上下ためつけ山家屋佐四郎。歳暮のお禮とつゝと入る。詞コリヤ喜八よ。今夜はこれで夜が更る。夜半前に迎ひに來い。お勝殿は奥にござるか。ハイさやうに申しませう。地暫くお待ちとつい立つて。行くも見送る主思

ひの。乳母が氣のつく煙草盆。ほんに幸ひよい折から。詞今日もあなたへ參つてお尋ね申さにやならぬ譯。かの吉光の守刀。ア、これ一昨日も申す通り。其刀は手前質に取つたれども。もう疾うに流れました。サア其儀は承りましたが。其置主は。もし鈴木彌忠太とは申しませぬか。イヤもういかい事の口數。すゞきやら鯔やら。此方覺えは致さぬと。地塵灰つかぬ詞のしほ。お茶上げませうと久松が。差出す茶碗。引つたくり。詞エ、小じたたるい丁稚めぢやな。手入らずの染茶碗。ちよこ〳〵破りさうな頰付。茶碗の代りに親方の前で。何もかもけつ破つてこます。けふは後家に逢うてめつきしやつき。嫁入の延びるも方圖がある。結納おこしてから幾月になる。今夜中にお染を渡すか。さうなけりや結納の證の脇差一腰金拾兩。取戻してこちから變改。其代りに又

借して置いた百二十貫目。毳まで算用して取るのぢや。ア、案内しをれ丁稚めと。地しやちこばつたる麻袴疵持つ。足の穗に顯れ。問はぬにそれとお乳の人。そんなら和子二階で待つて居ますぞえと。心殘して フシ立つて行く。地藏からそつと小助が惡智慧。小判の包封押切り。詞先づ拾兩忝い。此盜人を久松めに。さうぢや〳〵と一人笑。地人に難儀を塗文庫の。中へ目錄蓋ぴつしやり。詞ノリしめたぞしめたぞ。時に此金。ちつとの間。何所ぞに地奥から小助殿〳〵と呼立て出づる下女のおさつ。詞コレ〳〵小助殿今奥で山家屋の旦那樣とお家樣と。結納を戻せと遣つゝ返しつ其中に取交ぜて。結納の金が見えぬというて。大抵の詮議ぢやない。サア〳〵ごんせ。ヲ、〳〵そこへ〳〵。エ、どこへ隱して置き所に。地事かく折敷飯椀の。高盛へ フシつつ込む小判のご

もく飯。上から押付け素知らぬ顔。打連れて行く奥から口。目から鼻へフシ拔目のない女主。地後家に負けぬは銀の利の。かさにかゝつて聲山家屋。詞お勝樣結納の證潔白に戻さうと言はしやつたから。今更否はいはれまい。サア〳〵戻して貰ひましよ。サア今お聞きなさるゝ通り。大切にして簞笥に入れ。しつかりと藏に入れて置いた結納の金拾兩。今になつて見えぬといふは。コレ置かしやれ。言掛りで戻さうとはいうたれど。結納戻せば百二十貫目立てにやならぬ。所で何なと引延す。てれんはたべぬ。人にこそよれ山家屋の佐四郎。一保が講釋三年聞いた男ぢや。そんな計略に乘つてたまるものかいの。が又嘘でなくば其結納お出しなされ。サア〳〵何ととつかゝる地主の當惑取分けて。氣の毒餘る久松。詞私が差出がましけれど。大枚の銀さへ立てうと

あるお家様。纔か拾兩の金惜んで。何の間合仰しやらう。油屋商賣は大勢の仕事師。毎日入込む事なれば。誰が業かは知らねども失せたには違ひなし。私どももめい／＼身晴。共吟味して今夜中に。急度お目にかけませう。お疑ひ晴らされませと。地挨拶する程むつと顔。何がな小みづをくり出す勘六。フシおうへにどつさり大あぐら。詞コレ丁稚殿。貴様あぢいな事いふの。こゝの内に金が見えにや。仕事師のおいらが盗んだのか。イヤ／＼さうではないわいの。イヤさういふのぢや。仕事師が大勢入込みうさんなといふからは。捽り仲間を盗人といふのぢや。殊におりや今日此頃の新面ぢや。猶以て耳に立つぞ。但し何ぞ證據があるか。ヨ。證據もないに盗人呼はり。けたいが悪いぞ。忌々しいぞ。ア、是々聲高にいやんないの。イヤ／＼／＼止めやんな小助。

あのせんまめ仕様がある。サ、尤もぢや／＼。わがみの立たぬ様にはせぬ。マア／＼待ちやいの。イヤ止めやんな／＼。サア／＼よいわいの。わがみの立たぬ様にはおれがせぬ。喧しい言やんな。／＼古町ぢやわいの人が立つわいの。勘六正直者ぢやさかいえらう腹立て召さる。ハ、ハ、、。イヤコレ久松。ちよとおぢや。サアいうてしまやいの。いへとは何を。ハテわがみが金盗んだ事を。コレ／＼小助殿。そりや何いふのぢや。覺えもない事を。ハテ扠もう叶はぬ事を。其眞顔が厭ぢやわいの。證據の出ぬ中。サア綺麗にいうて仕舞うたがよからうぞや。サアおれにいや／＼。エ、知らぬわいの。ヤ實正覺えないか、エ、氣の毒ながら。證據出さずばなるまいと。地久松が手習ひ文庫提げ出で。詞こりやこれわれが文庫。アノ佐四郎様から。結納の證について來た

目錄。わが部屋の入物の中に。コレ／＼／＼入れてあつたが遁れぬ證據サ天命ぢやの。是でもわがみが盗まぬかと。地差付けられても覺えなき。スヱ身の災難に詞なき。地久松が胸づくし。取つて引据ゑ勘六が。詞イヤばりめ。うぬが盗んだ金を人にぬつて。ようおれに紋付けたな。コレ／＼勘六喧しういやんな。金の有所吐さねば。どづき据ゑて言はすのぢや。エ、地吐しあがれと責めせつてふ。お勝は聲かけ小助待ちや。詞エイお家様。なぜお止めなされます。ハテ下人というても人の子。疵でもついたら何とする。殊に其金の盗人。急度久松には極らぬ。アノ。これ程知れた證據のあるに。サレバイやい。其久松が文庫は。開いてあつたか錠がおりてあつたか。金盗む程の者なら。其目錄は破つて捨てる筈の事を。我が科の知れる様に。わざ／＼我が文庫に入れて

置いて。しかも盗開けて置きさうなものか。但し。又錠がおりてあつたをそなたが開けたら。人の箱の錠捻切るは盗人の行作サそれならそちにも疑ひが懸るぞよ。サそれは。其様に手荒うせずと。静かにしても詮議はなると。地ぎつくり詞の角屋敷納めた後家に。いらつく佐四郎。詞ヤアそりやお勝殿最屓のさばきぢや。現に知れた盗人の久松。そつちで詮議がならずば。町内へ断つて代官所へ引摺つて行く。小助しめ上げて詮議しやいの。ハイ〳〵合點と立ちかゝる。コリヤ主の詞を背くのかと。地主命流石うぢつく腕。詞小助せくな。此丁稚めは勘六に任せて置けと。地久松が前髪引付け平手でびつしやり。起直つて詞コレ勘六。こりや何とするのぢや。大ずりめ。小助は傍輩だけで手ぬるい。其日雇はれの勘六。どなたにも遠慮はない。金吐出さにや。商賣の油の滓喰はすぞ。胴性骨の油糟。絞り出しても言はさにや置かぬと。地土間へ引立て踏落され。髪もばら。〳〵あら涙こたへ兼ねて駈出る乳母。詞マア〳〵〳〵待つて下され待つていのと。地庭に駈けおり。詞コレ久松様。お前の身に曇りのない言譯は私がする。ほんに〳〵今でこそ町家の奉公。筋目正しい此和子に。そんなさもしい心があらうか。無念にござんしよ。最前からお前より。私が口惜しうてならぬわいなアと。地背撫でフシさすれば。詞ハヽヽヽ何ぢやけたいな婆が出た。ごくにも立たぬ言譯せずと。今爰でだはの勘六が。盗人の政道するをよう見て置け。ぢやが醉醒で餓にぐつとひだるうなつた。飯一杯喰うて腹丈夫にしてから。どうするぞ待つてをれと。地飯椀引出し箸取りかゝれば小助はびつくり。詞ア、コリヤ滅相な〳〵。それはマア何するぞいやい。ヤ何するとは俺が飯をおれが喰ふのに。それが何で滅相な。イヤサ。それはいかにもわれが飯さうなといふ事。サア。おれが飯ぢやによつて。ア、コリヤ〳〵。その飯喰ふないやい。妙な事をいふ人ぢや。ム、ばりめを行ふのに隙がいるといふのかよい〳〵。そんなら飯喰ひ〳〵やつてこまそ。一責責めたら。白状さすは膳の上の箸と。地飯椀はなさぬ勘六。ア、これはまた情ない。ア、こりや。〳〵〳〵マアそれを下に置け。此飯は喰されぬわやい。エ、けたいな。そりや又何で。サイヤイ。金の盗人が知れぬ内は。仕事師にも皆疑ひが懸つてある。ヨウ。もしわれが盗んだのなら。盗人に飯喰はす法があるか。身の垢を抜いた上で跡で喰へといふ事。ム、こりや理窟ぢや。そんならこいつもうしごいて仕舞はにやならぬ。ア、これ

これ大事のおれが扶持切米。物いひの付いた飯ぢや。やつぱりこゝに置いて貰を。様々の事で食どめしられる。おれが為には食敵。汝にはこれ喰はすと。地割木提げ立ちかゝる。詞勘六待ちや。家來の吟味は主がする。雇人のそなたがいらざる差出扣へて居や。そんなら小助が。イヤわがみも頼まぬ。ヲ、すりやこな様の直の吟味。見物致そと地突張る佐四郎。いやといはれぬ フシ此場の表。詞頼みませう。小助表に案内がある。小助々々ハイ〳〵。ハテどなたぢやと。地出迎ふ門口。豫てや牒し相見を。互に見ぬ顔空とぼけ。詞拙者浪人者でござる。此度有付いて國方へ参るにつき。路用の拵へに手詰り。お家を見かけて御無心と申て唯は申さぬ。賣は身の差合せ。賣りに参つた一品ちよと御覧下されと。地懐より取出す一通。詞コレ浄土宗一向宗にはなければならぬ圓光大師の一枚起請。贋か正筆かはたつた一目御覧じると忽ち知れる。お見知の手跡。ナ。なんと是ばかりは買はつしやれずばなるまい。天罰起請文の事。此跡を讀まずに。直を付けるが商ひの秘事。娘御に買うて進ぜられたら。一生の災難を遁れる。守本尊でござらうぞや。但し御所望にないか。ナニそれにござるお若人。其許にも入用の物ぢやお求めなされい。現當二世の起請文。イヤもう〳〵有難い御文章お望みならば。讀んでお聞かせ申さうかと。地意地くね悪う鬼門の肝先。詞ドレ拜見致そかと。地立寄る佐四郎は金神の。中からお庄が引取つて詞一枚起請買ひました。私に賣つて下さりませ。地御不祥ながらと フシ差出す。地金包み手に取上げ。詞こりや僅か金拾五兩。こんな事では。サア〳〵それは當座の手附。ム、手附とあれば請取つた。價は何程致さうと。わたしがアイ買ひまする。今年は夫の十三年。この有難い御文章が。何と人手に渡されう。コレ久松様。お前の親御丈太夫様。預りの御重寶失うた科。阿房拂に逢ふのが無念さ。お覺悟の切腹。夫三平介錯の上。主人の追腹。お前は漸う六つの年。兄久作の在所へ預けわしは國に留まつて。どうぞ今一度相良の跡目相續の願ひ。御家老中へ月々の訴訟。其時失せた殿の重寶。この大坂の質屋にあると聞いたはお主の出世時と。其爲に拵へた此金なれど。差當つた地獄の苦患遁るゝは此一枚起請。其大切な事を何とも思はしやんせぬは。親御の恩を仇に思うて居さしやるから。コレ見やしやんせ。妙誉西岸信士。俗名三平。こりや私が夫の戒名。片時も肌身を放した事はない。お前の親御は。劒樹院等覺居士。其心では命日も。忘れてがな居さしやら

う。コレ地此位牌の夫三平が。忠義の心を少しでも思ふ氣があるなら。詞未來の約束。忝い御文章を反古にして。國へ歸つて命長う。家相續して。父御様に。地草葉の蔭からにつこりと笑はしまして下されと。恨みも。意見も十分一明けていはれぬ百千萬。我が子の様に。養ひ君思ひ詰めたる眞實の。母より深い大恩慈悲。誤つた〳〵。もう堪忍して。地〳〵とスエ歎けば涙拭いてやる。フシあまいは乳母の習ひなり。地歎きを餘所に山家屋が伸欠。詞ア、こりや盗人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人。見た所があの嗅。跡金の才覺心許ない。手附限の事であろ。いつそおれ買ひましよか。イエ〳〵外へはやらぬ。私が先約。サア跡金は何ぼでござんす。惣高金は五百兩。エ、イ。安い物ぢや。サア只今請取らうと。地聞いて今更ハツトばかり。スエ當惑顔を。

見て取るお勝。詞イヤ〳〵。無躾ながらそりや出來まい五百兩なら私が買ひましよ。今がらりに渡さう程に。さつきの手附はあの人へお返しなされ。成程成程さうならうては叶はぬ處。めくさり金で大事の代物。買取らうとはのぶとい女め。手附金ソレ返すと。地投出す包。お勝が取上げ。詞お侍様。こりや最前の手附とは違ひましたな。何が違つた。イヤ違ひました。中は見いでも知れてある。大かたこれは戎様の贋小判。ヤ。ア、そりや何か手前存ぜぬ。あの女が。イヤ仰しやんな。こりや最前の金ではないわしがよう見て置いた。あの人が渡した金は反古に包んでござんした。是はこれ白紙。包が違うてあるからは。お前が内から拵へてござつたふきかへの贋金。正眞の金は懐にあらうがな。日外久松が騙られたも丁度此傳。これをたぐつて詮議したら。

何が出ようも知れまいと地穴を見付けた發明後家。暗い仕事は油屋の。明りにきよろつくフシ化の皮。詞イヤ其詮議よりこちらの詮議。ドリヤ。起請の正體を顯はしてお目にかけうと。地立寄る小助を勘六が。取つて突退け起請の一通。フシ寸々に引裂いたり。詞コリヤやい〳〵。大事の證據なぜ破つた。こつちへおこせと言はせも立てず。地弱腰どつさり片手投げ。詞コリヤ何しをると摑みつく。頬に飯椀地菩薩の罰。詞ソレ久松小判が出ようが。ホンニ丁度拾兩。そんなら此盗人は。ヲ、こいつぢや。もう遁れぬわい。道理で飯惜み仕をると思うた。何でも三つ山の約束に。己一人よい事せうとはさりとは下心の惡いがき。もう此勘六魂が返つて。これからは久松が味方。何もかもいうて仕舞ふからは。どこへ尻が行かうも知れぬぞ。エ、もう赦されぬと取付く

を。地脾腹の當身久三郎。きうともいはず目を白黑。一の裏は勘六が。みたの代りに山家屋もフシ傍杖こはがる膽婆色。詞サア佐四郎樣。拾兩の金子出しましたぞえ。持つてお歸りなされませ。これでも私が盜みましたか。何のいの。正直正路な丁稚殿。有所さへ知れたら持つていぬには及ばぬわいの。ム、さうおつしやれば娘にも。言分はござりませぬか。何のあろぞいの。そんなら嫁入の日限は。春永に〳〵。ア長居致した。早ういんで稻積みませうと。地そこ〳〵に底氣味惡う彌忠太も。そろ〳〵〳〵表へ。詞侍待つた。懷の金置いて行け。但し勘六が引出さうか。イヤ〳〵コレあの拾五兩は御文章の代金。深い志の金。お庄殿へはわしが返す。どつこも波風ない樣に。わざと何にもいはぬぞえ。ヲ、サ。身どもも何にも言分ないと。地强い顏でも胴震ひ肝を栞種に油屋の。辻から フシ横に迯歸る。地お庄はいそ〳〵。結構なお家樣の御料簡で久松樣の明りも忽ち。打つて變つた勘六殿。急に善過ぎて合點が行かぬ。詞コレ氣遣ひせまい此勘六。久松殿の肩持たねばならぬ譯は。これ見て下され。腕に卒都婆の入痣。妙譽西岸信士。ホンニ此位牌の戒名と。合うたは不思議。母者人健でござつたの。こな樣の子の三之助でごんすわいの。ヤア。別れたは十四の年。見忘れさんしたも尤も。かういふ髭頰になつたもの。一體が少さい時からいけずであつて。陪臣の忰の分で。歷々の家中の子供衆に礫打つたり頭はつたり。手討にもせにやならぬ處を。親父樣の慈悲の勘當。間も無う死なしやつたと聞いてがつくり。始めてちつと人間の魂が出來たれば悲しや體がみだれ同然。親の墓へさへ詣は得參らず。夜の中に寫して來た戒名。命日に坊樣呼ばうにも。宿なしなれば佛樣は猶なし。せめて親の大恩を忘れぬ樣に彫付けた。此腕がわしが佛壇。置所が惡さに手を合はしては拜まれず。每朝片一方の手でお禮を申しますわいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫樣。御切腹なされた元はといへば。紛失の吉光の刀。此大坂に質物に入つてある由。エ、是を請戻してお家を立つれば。お主へ忠義。親父樣のお位牌へ。是に上こす手向はないと思ひ立つた其日から。金の工面に樣々の騙事。日外座摩ですりかへた其銀故に難儀さつしやる久松樣が。主人の若旦那であつたとは夢三寶。たつた今聞いて腸がひつくり返つた拵的。目當の外れたも不孝の罰母者人。堪忍して。地下さりませと眞實親身の後悔は。昔に返る稚顏。其氣になつたら親子ぢやもの。何の惜かろ。よう健で居てくれたな。母者人。懷し

かつたと抱付き。襦袢の袖を。絞りが誠。フシ大づけ涙。殊勝なり。詞ヲヽ、親子の心底感心しました。それ程に二人の衆が。心を盡す吉光の守り刀は爰にあるぞや。エヽそりや又どうして。お前のお手に。サア緣は不思議と久松の人がら。由ある人と見た故に尋ねて聞いた氏素性。守刀の入譯。廻り廻つて山家屋にあると聞出し。お染を望むを幸ひに。こつちから乞うて取つた結納の證。久松。そなたに是がやりたいばかりに。嫌ふ娘を山家屋へやらねばならぬも爰の譯。これを土産に本知に歸れば。和泉の御家中相良久松様。地いつまでも油屋の丁稚で居るが見目ではあるまい。まだ年の明かぬ中と。わしへの義理や何やかや。譯もない事思はずと。早う出世さしやんせと。渡す後家鞘ぬけめなき。フシ情にお庄が忝なみだ。地腑甲斐ない我々が思ひ込んだ念が居いて。嬉しいとも。有難いとも。詞久松様お禮を。〳〵。ア、これ。地禮は來年ゆるりと。詞マア行かしやんせ。ホンニ母者人。うか〳〵して居る所ぢやない。今夜の內に藏屋敷へお供して。お留守居へお目見えなされずば。歸參の願が叶ふまい。サア〳〵〳〵若旦那。早う〳〵に久松はお染に引かるゝ亂れ髮。撫付ける間もせはしなく。フシ突出す鐘は。詞早や夜半。時刻が移ると勘六が。地先に押立て駈け出す足首。片息ながら取付く小助。投込むくゞり戸。詞御家樣おさらば。御無事で。まめでと地內と外隔つる。一夜大歲の鐘は。百八煩惱を跡に見捨てて。三重へ急ぎ行く。說經 菅太夫

跡にむさんや油屋の。お染は一人娘氣に。思ひ詰めたる久松に。別るゝ様子立聞に。聞いて氣も消え胸せかれ。爰で添はれぬ緣ならば。未來で積る白雪の庭へ。泣く〳〵フシをりからに。組太夫 詞お染 地〳〵と母のお勝が聲すれば。菅アイ〳〵とフシ元の座敷へ立戻る。組地お勝はさあらぬ顏色にて。詞あすは目出たい元日。年の終りは寢ぬものぢやげな。たとへさうなうても。寺々の鐘の音で。寢られぬから持病の癪が差込んで。アイタ〳〵。ちつと爰を押へてたも。菅地あいと娘は何氣なく。手を差入れる懐を。あけてそれとはいはた帶。障る手先にお染は悸り。詞母樣こりやお前腹帶ぢやないかいなと。地思ひがけなき興覺顏。組地娘そなた腹帶といふ者。して見やつたことがあるか。菅エイ。いえ〳〵何のマア。腹帶とやら。ついに見た事も無いけれど。地お腹にやゝを宿した時此様に。卷いて置くものぢやと咄に聞いたばかり。組詞ヲヽよう知つて居やる。いかにもこりや腹帶。イヤサア。癪を押へる腹帶。此癪の直る藥をコレ見や。買うては置いたれど。下女にも男にも煎

じてもらふ人がない。わがみ大儀ながらこの藥。誰も人の見ぬ様に。こつそりと煎じてたも。音アノ母様の何いはしやんす。地藥あがるに誰に遠慮。組詞イヤ／＼人に見せられぬ。こりや此癪を押下げるおろし藥。音エヽイ。組ヲヽ、肝が潰れう。地娘の手前もフシ恥かしけれど。地太右衛門殿に別れてから。後家は立てても離れぬ煩惱。詞嵐三右衛門の芝居に誘はれ。名はいはれぬが。美しい若衆形をふつと見てから。思切るにも切られぬ惡緣。地それが積つて情ないツイこんな癪になつたわいなう。詞かういうたら定めてそなたの心では。母様の未練らしい。私らがそんな事が出來たら。井戸へなりと身を投げて死んでしまふに。卑怯な命惜むとも思やらうが。それではわが身ばかりぢやない。世間へぱつと沙汰になつて。油屋の家はこれ限。地わしも色香を知りながら。

心に好かぬ山家屋へ。嫁入さすも家大切。詞今の若衆形の事ふつつり思ひとまつた證據に。地おなかの癪をおろし藥。詞折角佛様のお世話で。五月にもなつたもの。いぢらしけれど。子を助ければ親が死ぬ。いひ交した男まで生きて居ぬ氣を知つた故。三方四方を納めるはコレ。地そなたの思ひきり一つとはいふものの譬にも。子よりも孫は可愛といふに。初孫に日の目も見せず。水になせとの胴欲を教へる母が心の中は。コレ鬼ぢやわいの／＼。詞男の爲親の爲。家相續の爲と思うて。氣に入らぬ嫁入してたも。コレ一生の賴みぢやと。地我が子を拜む母親の義理の腹帶しめ泣きに。音詞いかにも嫁入致しませう。組ヲヽ、出かしやつた／＼／＼よう云うてたもつたのう。その代りにどうぞして。早う飽かれて戻る様に。わしや神神を祈つて

居ると。地粋な親ほど取りわけて迫るせつなさ音娘の心。互に思ひやるせなき親子の。誠ぞフシ道理なる。武太夫地やゝ時移り。久松はも一度お染に暇乞。死ぬる覺悟に立戻り塀の外面にありぞとも。組知らずお勝はヲヽ、嬉しや／＼。詞翌日は目出たい元日。地泣顔ふいて神様へ何やかやお賴み申そ。サアおぢやいのとフシ連れて行く。音地見越の枝に三尺帶ひらりと。内へ久松があはや人影見られじと潛む。暗き夜藏の戸のあいたを幸ひそつと入る。武跡からついて見濟す小助。外から戸前をどつさりと鼠落しのフシ仕濟し顏。音地折から外には小提燈。雪の傘差しかゝる鈴木彌忠太。武跡を慕うて勘六が息もフシすた／＼。詞彌忠太殿／＼一遍こなたを尋ねたわいの。音身どもに何ぞ用があるか。武ある段か／＼。こなたが盗んで立退いた吉光の守刀。質屋にあつ

て手に入つた故たつた今藏屋敷へ持つて往た處が。眞赤な贋物。正眞はこなたが持つて居よう。サア尋常に出した／＼。菅ハヽヽヽ。いかにも推量の通り。質屋めに一杯喰はしたのぢや。正眞はおれが持つて往て立身の種にする。溫かに渡してよいものか。武それ聞いたらもうよい。其刀は大方こゝにと。堀柄にかける菅手をもぎ放し。直にすらりと拔打ちを傘でぱつしり フシ請身の手だれ。武堀内は妹脊の緣側より庭の井筒に合掌し。菅詞南無阿彌陀佛の 武聲聞取り。お染様か。菅ヤア久松か。二人どうでも死なねば。ならぬ身の上。堀未來は一所に手に手を取つて。組合ふ外の暗紛れ。武手に障つたる小脇差。探つて見れば九寸五分。扨こそ吉光。菅それやつてはと武者ぶり付くを。武フシ 踏み飛ばし。詞エ、忝い。武運の花の開き時。久松様は。何所にござると。堀それと白雪白壁の。藏と庭とになむあみだ。二人アツと苦しむ一聲に。武驚くお勝久三の小助。久松めはくたばつたと。呼はり出づるを取つて引敷き。詞エ、早まつた御最期と。二人堀恨むに甲斐も百八の鐘も打切りしら／＼明けかはいの聲と諸共に。年の終りに明け渡る。春を重ねて久松が。名は大坂の東堀今に。傳へて殘りける

安永九年庚子九月廿八日

伊賀越道中雙六

座本　竹本太市

第一　鶴が岡の段

地大權聖者の未來記に書き記したる四海の治亂。元弘の戰一統に。切鎮めたる足利氏草も。フシ搖がぬ鎌倉山。ユリ 地頃は大永元年二月上旬。鶴が岡の奉幣に勅使下着の知らせによつて。山内の執權上杉顯定警衞の役目承り。坂本に假屋をしつらひ一日代りの家中の守護。和田行家が一子志津馬。威儀嚴重に守り居る。地折節佐々木丹右衞門。非番の姿上取つて。下を憐む羽二重侍。假屋に來かゝり。詞志津馬殿。當日のお役目御苦勞と挨拶し。別して今日は勅使御入の日なれば。取分けて大切の御番。隨分麁末のない樣に。と申すも此丹右衞門。貴殿の親父行家殿に劍術の門弟。これ迄外の弟子よりも。格別に御差圖下されし師匠の御恩。山よりも高ければ。其御子息の志津馬殿。次第に立身もある樣と神に心願を籠め奉り祈る程の拙者が心底。日頃から歯に絹着せず申すを。必ず氣にはさへられな。地貴殿の疵は御酒參ると萬事を忘れさつしやる。色と酒をば敵とせよとは賢者の誡め。常に此儀をお忘れあるなと眞實あまる。意見なり。詞ハア忝いお示し。兼々親どもが申すにも。劍術の高弟といひ。若けれども實義ある丹右衞門殿。兄弟同然に。萬端を相談致せと申付け置かれたれば。其許樣を兄と思うて居りまする。イヤ左樣請けて下されば。拙者は何より甚だ祝着。弟子傍輩の事を申すは如何なれども。氣の許されぬ男は。澤井股五郎。彼が從弟城五郎は。鎌倉殿の昵近衆。直人を一家に持つたと鼻にかけ。御前の勤めも疎かにして。晝夜遊所に入込む由。必ず彼を友になされな。昨日は拙者が番。今日は非番なれども內證ながら。見廻りも致さうと存じて推參致した。地勅使のお入に間もあるまじ。別當へ參つて配膳の。勝手の案內見て參らう。後刻。フシ〳〵と別れ行く。地折柄うそ〳〵來かゝる町人。番人聲かけ。ヤイ〳〵何處へ行く。御假屋の前。すさりをらうと口口に。嚙付けられて犬蹲踞。詞アヽイヤ私は切通しの町人。本庄屋定七と申して。和田のお家へお出入の者。地志津馬樣に用事あつてと。聞く り志津馬。苦しうないこれへ參れと傍近く。詞今日は勅使

御入の社内故一々人を検むる。急用か。何事ぞ。ハイ。イヤ別儀でもござりませぬ。彼の金子の儀を。コリヤ／＼。イヤサ家來ども。其方どもは南門へ參つて人を通すな。地殘らず行けと フシ追ひやれば。詞ハア如何様金銀の事は内證。爰で申すは不調法。アイヤ／＼契約の日が延引すれば無理とは思はぬ。が此事は股五郎殿を頼んで置いた。一兩日猶豫を頼むと。地話し半ばへ大小も。金拵へのつかつかと。入來る澤井股五郎人を。非に見る。フシ のさばり顔。詞ヤア定七。お手前が來た筋は。股五郎が呑込んでをる。部屋住の志津馬殿吉原通ひの内證金。今用立つて置いたれば。豫てお身が願うてをるお國の掛屋に仕てやるさ。時に志津馬。頼みがある。身が懇意にする町人の女房今日勅使のお入を聞いて。都人の裝束姿拜見させて下されと。據なく願ふに付き。地裏門からこつそりと。最前社内へ入れて置いた。爰は粋な貴殿なれば。詞大目に見てくれまいか。どうぢや／＼。アヽイヤ／＼。町人たる者殊に女。左様の事を政道する志津馬が役目。地外の者の見ぬ中に。一時も早く追歸されよ。詞ハテ左様堅う言うた物ぢやないわい。コレ貴様の好の女だわい。マアちよと好い女房見たがよい。器量はどてん天人姿天降してお目にかけう。地此處ぢや／＼と手招きに下り來る坂の段かづき。屋敷か町と三重の帶。フシ堅う見せてもしどけなく。志津馬様わしぢやわいなと。地被を取れば松葉屋の。ヤア。瀬川ぢやないかと志津馬が愕り。詞ナント股五郎は粋ではないか。何が一日逢はねば百日と。吸付き合うてをる中。身どもとは違うて親持の身分。此間より御前勤めに間がなうて。廓へ來ぬを女氣で若しや心替りかと案じるが可愛さに手工合して今日の參會よもや腹も立つまいが。コレ太夫嬉しいか／＼。遠慮なしに。しげれ／＼と。地突きやられてひんとすね。詞女中法度の此お假屋追ひ去なせと仰しやつたは。よく／＼私がお嫌ひさうなと。地思はせぶりの雪の梅解けぬ フシしかけがそれしやなり。詞イヤサ。さうではなけれど。これは又きつい所へ連れて來た。御門は誰が通したぞ。イヤ此實内奴でごはります。スリヤ御門を通したは汝か。エヽ憎い奴。とはいふもののおれも顔が見たかつたエヽ疾から左様砕ければよい。堅い顔が氣にくはぬ。家來どもは散つて仕舞うた。實内は志津馬の腰付。廓の供する粋奴。かう寄つた所はとんと廓の座敷になつた。太夫主のお持たせこれへ。ナイ地と返事は奴の遣手。蒔繪の提重角樽は股様よりの御見舞。詞吉彌煙草アイ地と

跡引く長烟管包。小オクリほどいて取出す。打掛姿立木の櫻あたり。フシまばゆく見えにける。地先づ一獻と股五郎大盃引受けて。詞サア志津馬慮外申す。イヤ今日は大禁酒ぢや。といふてあの君が顔見て飲まずには居られまい。ちよつと一つは身の養生。飲めば甘露の菊の酒。其盃定七に差召され。大事ない一つ飲みやれ。扨盃を差して置いて。お手前に頼む事別儀ではない。此瀬川と此通りに深う言交した中。所にさる大家から身請の相談。先方は千兩二千兩惜まぬ家柄。慾に喰付き親方が其方へやらうといふを。先約なれば志津馬が方へ。五百兩で身請さすると。此股五郎が突張つて置いたれど。今日明日に迫つた日限。これまで取換もある上なれば。用立つてくれまいか。ハイ。そりやはやあなた方のお頼み。いかにもとサ申したけれど。部屋住の志津馬様。

慥な抵當がなければ。ヲヽサそれも思案して置いた。和田の家の重寶正宗の名作を。質物に差入れる。これ程慥な抵當はない。イヤ／＼コレ股五郎殿。其刀は先祖より傳はつて。常の差料には致さぬ重寶。質物に入れる事はハテさて惡い合點。其大切な刀ぢやによつて書入れて間に合すのさ。金さへ濟せば凶事はない。殊に此度武將の若君。御元服の御祝儀。諸大名より名作の劍獻上あるべき折から。正宗多き中にも和田の正宗は勝れて無双の名作。殿より御所望あるは必定。其時に無ければならぬ大事の刀。暫くの用に立て。其中には股五郎が工面して取返す。氣遣ひせずとサア志津馬。其趣き一札書いてお渡しなされと。地色々付入り正宗を。仕てやる心の劍とは。白紙取つて認むる。若氣の思案ぞフシ是非もなき。地定七證文懐中し。そんなら金子調

達致し。股様方迄持參致さう。質物は結構なれど所詮此方の物にはならぬ。御返濟の違はぬ様に。氣遣ひするな身が一門は歴々。金銀澤井が呑込んだ。よござります。が申し言はぬ事は聞えぬ。利銀は二割三月をどりでござりますと。地慾の鵰股五郎に。フシ詞番うて立歸る。詞サア／＼祝うてこれから祝言。天下晴れての志津馬が奥方。目出たい／＼打つて置けしやん／＼。地調子に乗つても一つ大事か二つも三つもいつの間に。醉が廻つて役目の大事。忘れるめれんにしてやつたと。詞笑壺に入つたる股五郎。媒人は醉の紛れ。積る話をゆるりと瀨川。地暫く粋を通さうと。跡に難儀を掛作。廊下へ抜けてフシ行くともしらず。詞股主々々どれへござつた。ぬけそとは手が惡い。人をころりと殺して置いて。逃げうとは卑怯者。エヽコレナ。此様な嬉し

い中に。殺すの死ぬのと氣にかゝる事ばかり。そんならおれと祝言するが。そなたは眞實嬉しいか。とあれば我等も千萬祝着。此悦びに又一つ。アヽ申し其様に御酒上つたら御用とやらの害になろ。もうこの盃は止めにせう。止めにせうとは祝言がいやか。いやでなくばま一獻。たとへ知行召上げられ。歌ふちは瀬川になるとても。詞二人手に手を引き合うて。どんな川へも志津馬は本望。もう主も親もいらぬ殺せ〳〵と　地酔狂も物がいはする。　フシカヽリくだ枕。膝にたわいもなき折から。勅使のお入と呼ばはる聲。聞くとひとしく丹右衛門。志津馬はいかにと駈着くれば。詞南無三寶例の沈醉。コレ志津馬殿〳〵。コレイナ。太夫様を待たして置いてあの様に寝てぢやわいなア。地こそくり起そと二入して。抱き起しても。とろ〳〵目。詞コレ志津馬。正氣を付けやれ勅使のお入ぢや。イヤ猪口は嫌ひ。こつぷで致さう。エヽ何いうても死人同然。一世の浮沈何とせん。家來ども此女裏門から追返せと。地替裃の肩衣を。身に引つかけて志津馬が代り　オクリ勅使を。出迎ふ深切も夢にも　フシ白川高駢。松吹く風も音添へて。後の難儀と。和田の家世の成。行こそ三重へ定めなや

第二　行家屋敷の段

地春毎に。詠めは飽かぬ鎌倉山。仁義を守る武士も。旦に隠す桐が谷。地和田行家が一構へ書院先の遣水も。打手に靡く腰元仲間塵取役や掃除番。フシ其役々を割付けて。地一つ所へ寄りたかり。詞何と玉木どう思やる。今鎌倉のお屋敷ではどの若旦那がよい男。アヽコレおきや〳〵。とても男を吟味しても生物は入れられぬ。乾物で仕舞うておきや。生物をたべ過すとお谷様がよい手本親の赦さぬ淫奔と親殿様の御勘當。毎日々々お詫言に御出なさるゝは。おいとしい事ではないか追付けお越しなされたらそなたの部屋に置きまして置いてたも。思はぬ話で暇入つた。地必ず晩の宿下りに。假寝の床のふつてりと。握りごたへのあるのをば。土産に　フシ頼むと打笑ふ。地一間の襖明暮に。血を分けし子と血を分けぬ。義理の葛にからまれて。柴垣一間を立出でて。詞何をざわ〳〵腰元ども掃除仕舞はば勝手へ行きお谷殿をこれへ呼びや。必ず〳〵目立たぬ様にとありければ。地ハイと答へて腰元ども皆々　フシ勝手へ入りにけり。地今日も又何と言寄る方もなく。詫にお谷が綱切れて　フシ悄々として座に直る。詞心からとは言ひながら。我が内ながら人目を忍び。夫に

付添ふ女の道政右衛門事は我が夫のお氣にも入り。天晴の達人なれば今日や殿へ御目見え願はん翌日や取次せんものと思召したも恩が仇。其方が連れて立退きしは不屆者と御勘當。自らが身にも成つてたも。世繼と定まるあの志津馬傾城狂ひに身を持崩し。萬一御沙汰あつてはと御前勤めの願ひを下げしも我が子を思ふ夫のお情。世間の取沙汰口惜しく。繼子繼母の隔てある柴垣とばし思やんなと。地夫に隨ふ貞女の道。言聞かされて差俯向き　フシとかう詞もなかりしが。地漸うに顔を上げ。詞何とぞ今一度父上のお赦しあるお詞を。お願ひなされて下さりませ。ヲヽ其事は氣遣ひあるな。一旦夫婦と成つたれば世間を守るが男の役。適の侍を埋木となさん樣もなし。命にかへて願うて見ん。地先づそれ迄は自らが部屋へ行きや。早う〱といふ折から。澤井樣御出と。知らせと共に打通れば。隔たる柴垣お谷をば。ちらと見るより空嘯き。悔り驚く奥方も。お出とばかり詞なく　フシ入らんとするを。詞アヽコレ〱奥方。挨拶もなく御入りなさるゝは。先生の御病氣毎日お見舞も得申さぬ。其御立腹があつての儀か。拙者とても病氣故。お斷の願ひを立て。御前勤めもとくより引いて罷有れば。御無沙汰の段は御免下され。何の〱親御又左衛門樣から御懇な間柄。其御挨拶に及ばぬ事。成程々々其懇意について。いひぞはお尋ね申さうと存じたが。其許樣は先生の後妻。先奥方の腹に出生の志津馬殿。今一人お谷殿と申す姉御が有つたが。何時頃からやらとんと見請け申さぬ。嫁入なされた沙汰もないが。やはりお屋敷にござるかと。地譯知りながら問ひかける。そこに心を奥方は何と返答口籠る。地一間の内より立出づる和田行家。病氣ながらも鋭き眼中。詞よくぞ〱澤井氏。心にかけられお見舞過分々々。イヤ先生存じたよりは顔色も宜しく。珍重に存じます。扨今日參つたは密々にお話し申したき事あつて。申し奥方。ソレ冷えるにお蒲團上げられいと。地いふを立端に柴垣は。詞腰元ども燭臺持つて。地來いよ。フシ〱と立つて行く。地股五郎摺寄つて。詞お話と申すは別儀でござらぬ。兼て貴公の家と手前とは一家同然。殊に拙者劍術のお世話に預りし先生。心腹を打割つてお話し合ひ致す中。貴公樣も御同然。そこを存じて。内分にて申上げうと存じ參上致してござる。これは〱お互に御懇意に致すからは。何事によらず承りたい。サヽヽ御遠慮なうお話しなされ。イヤ別儀でもござらぬが。正宗の刀私に御讓り下さるまいかなと。地思ひがけなき一言

に。返答なければ。詞サヽ、斯う申したばかりでは御合點參るまじ。斯うでござる。正宗の刀は質物に入れてござる。斯樣申せば。志津馬殿の事訴人致す樣なれど。譯を申さぬと御合點が參るまじ。惡うござる〳〵。吉原の瀨川と申す遊女に迷ひ。正宗の刀を質に入れ身請の相談極りしと承る。エヽとくにも拙者存じたならば。御意見でも仕らんと存じた所が跡の祭。スリヤ正宗の刀は他家の物に成りまする。そこを存じて拙者方へ申請くれば。貴公なり。手前なり。兩家に有るも同然。御內談とは此儀でござると。地お爲ごかしに言ひ廻す。心の內ぞ恐ろしし。詞コレハ〳〵。日頃御懇意に致す間。悴めが不屆御世話下さる段。コレ〳〵手を突いてお禮申す。千萬忝う存じます。扨々不屆な悴め。ヤモ此お世話御無用になさつて下されソリヤなぜでござる。右の刀は則ち私方へ請戾してござる。ムウスリヤ正宗の刀は請戾したとな。それは重疊。シテ志津馬殿はな。勘當致した。若し斯樣の儀沙汰あつて萬一殿樣よりお尋ねに預りし時。申譯ないと存ずるから。右の刀を請戾し御沙汰なき中悴めは勘當致した。ハテ氣の毒千萬。時に外にお賴み申したいは。私未だ獨身でをりますが。どうぞ姉御のお谷殿を。拙者が妻に下さるまいか。スリヤ婿は子なり。行家殿の御家督拙者が預り。其內には志津馬殿。お心も定りなば御渡し申すに相違なし。是非お谷殿を申請けたい。此御相談は如何でござるな。イヤ御親切忝いが。其お谷めが事は唐木政右衞門と申す浪人と密通致し。家出したは四年以前。斯樣の不屆者なれば。勿論此奴は七生迄の勘當。貴公も此儀は申さいでも能く御存じでありながら。何かこりや御座興でござるのと。地何をいふても受付けぬ。始めの恥辱に股五郎。何がな見出し付込まんと。白眼廻せば立聞くお谷。三人一度に見合す顏。立切る障子驚く行家。詞コリヤ〳〵惡い〳〵。今爰へ出ると身が武士が立たぬ。屋敷に叶はぬ出てうせいと。サ追出して置きましたと。地言紛らせば高笑ひ。ムヽハヽヽヽ。詞行家殿何いはつしやる。娘やることならぬならいやで濟む事。ナニカコリヤ手前小身者と侮り嘲弄召さるの。ヤ恥辱を與へるのか。股五郎は武士でござるぞや。侍でござる。娘は勘當致した。屋敷に居る物を追出したの勘當のと。貴公殿の名代に一家中を治むる役ではないか。サそれで御家老職といはれますか。志津馬を勘當したといふは僞り。これも屋敷に隱して置く。正宗の刀貴公が質に入れたであらうと。惡口雜言フシ出放題。地こたへ兼

ねて膝立直し。詞慮外なり股五郎。汝が親又左衛門は身どもより上座の家筋。其忰と思へばこそ。劒術の弟子ながら禮儀を以てあしらへば。のし上がる法外者。心得ぬやつと思へども。何とぞして撓め直し。親の跡目を繼がせてやりたさ。鑓の一手も教へてくれた。師の思ひを打忘れ。忰志津馬をそゝり上げて遊所へ連れ行き。正宗の刀を質に入れさせ奪取つて夫を越度に我が家を滅亡させんと。よくも巧んだ人非人め。こりや汝が智惠ばかりでない。正宗の刀に望をかけ。頼んだやつが有らうがな。其頼人も合點たり。サア眞直に白状致せ。鏌鎁が劍も持人による。性根腐つた股五郎。病勞れても汝らごときに。正宗を出すにも及ばず。身が差料の此刀。巧みの腸引出して洗うて見せうか。何と〳〵と。地胸に覺えの一々を。見透されたる股五郎。頬眞赤にしよげ鳥の。返す詞もなかりしが。地面目なげに顔を上げ。詞ハア左様ぢや誤つた。相果てた親どもが義を思召され。折節の御意見が耳に當つた僻み根性。彌つのる色狂ひ。放埓の友を拵へうと。志津馬殿を廓の魔道へ引入れたは成程拙者。さう見顯はされてからは一言もござらぬ。好色に魂奪はれ。大恩の師匠を仇に存じた非義非道。只今夢の覺めたる心地。御推量の通り正宗の刀。拙者が持つて何に致さう。有様は色遣ひの金が欲しさ。そこへ付込み右の刀を奪取つてくれるならば。金子千兩禮物に遣さうと。頼んだ者も外ならず。拙者めが一家ながら思へばこいつが惡智惠の根本。かう打明けて申上げるは今より心を改むる證據。ア、假にも惡い巧みは致さぬ事。もう〳〵〳〵ふつ〳〵懲りはてました。これ迄の不屆。最前よりの無禮の段々。先生眞平御免下されコレ〳〵。斯う申したばかりでは御得心あるまい。彼の正宗を望む者。拙者への頼みの書狀。御目にかけるが二心ない股五郎が申譯と。地取出す一通手に渡し。懺悔に誠をあら涙誤り入つたる有様に。地心に油斷はなけれども。やゝ病中の老眼に燭臺引寄せ狀の宛名。詞澤井股五郎殿同城五郎。ムヽさもあらんと長文を。地つぶ〳〵胸に疊越し。突出す白双と右劒の拔打。眞甲へ切付くる。シヤ國賊めと付け入つて。澤井が肩先切付けたり。此方もしれ者受流し。流石名を得し行家なれども。初太刀の手疵に眼くらみ。受太刀になつてたぢ〳〵〳〵。引くよと見えしが飛違へ。澤井が眉間丁と切る。下より付け込むすくひ切。脾腹をかけて切込む太刀先。急所にや當りけんどつかと坐する縁の下。股の附根を貫く切先。立つも立たせずたゝみかけ。非業の

劒に和田行家フシ無慙の最期ぞ是非もなき。地とゞめの刀引きぬいて。疊あぐれば奴の實内。詞澤井樣お首尾は。シイ。主に見かへて身どもへ加勢。あつぱれ出かした褒美くれう。アヽ忝しと立寄る實内袈裟にずつぱと。フシ邊を見廻し。地豫て謀計の股五郎。上段の床の間の刀箱取出し。蓋押開けばこりやどうぢや。刀はなくて狀一通。こは心得ずと星明りに透し見て。詞ナニ〳〵正宗の刀一腰。仔細あつて私方へ預かり申す所實正也。和田行家殿。佐々木丹右衛門判。扨は刀は丹右衛門が預かり居るよな。エヽ無益の骨折口惜しと。地手疵にしつかと鉢卷締め。表は人目飛石傳ひ。フシ裏道さして落ちて行く。地曲者が入つたるぞ燈を持てと奥方の。聲に追々腰元ども。折から駈來る丹右衛門。伏したる死骸は。詞ヤアコリヤ行家樣。先生を何者が手にかけしぞ。今曲者が此小柄コリヤ澤井股五郎。遠くは行くまい家來ども。表を圍へと高股立。地聞くと等しく家内の騷動上を下へと。へ立騷ぐ。地桐が谷の裏道づたひ御勅使見送り奉る。跡押へは澤井の一黨。其身は素袍懸烏帽子。皆一樣の御裝束君臣の禮儀默しがたく。星をあざむく高提燈フシ事嚴重に見えにけり。備への中を股五郎。疵持つ足の裏道を。押分けてフシ打通れば。地それと見るより野守之助。詞股五郎殿ではないか。心得ぬ面體氣遣はしと。地聲をかければ傍に寄り。詞豫て申し談ぜし通り今日行家が方へ參り。何かと事を謀りしに此方の底意を氣取し上。法外なる申分骨髓に徹したれど。强敵の行家なれば。計略をもつて只一討。併し殘念なは正宗の刀。持歸らんと存じた所。丹右衛門が預り居る事。慥な證據はコレ此一札。ナニ城五郎殿我これへ來りしは一人の母の事何卒御世話賴みたい爲ばかり。一家の誼お賴み申す。地一日にても生延びては行家一家の奴輩に。未練者と言はれんは。家名の恥辱一家の恥。詞我一人切腹致せば。跡の難儀は氣遣ひなし此世の名殘おさらばと。地言捨てて駈出す城五郎聲かけ。イヤコレ〳〵先づ待たれよ股五郎。身不肖なれども澤井城五郎お隱匿ひ申したい。意氣地によつて討たれしは我々が賴みしより事起る。聞捨に致しては武士道の表が立たぬ。此上は我々が命にかけて隱匿はん。先祖の遺恨今此時。出かされたり股五郎。縱へ和田一家の奴輩。君命を以て來るとも何程の事あらん。一時も早く屋敷へ歸り評議を定めん。油斷は不覺の基なり。路次の用心氣遣はし。氣を付けられよ近藤殿。詞其儀はちつとも氣遣ひなし。歸宅濟む迄御役目指でもさゝ

ば彼等が家の一大事と。地備へを亂さず振出す。威光輝く鎌倉山。連れて我が家へ三重へ立歸る

第三　圓覺寺の段

地されば澤井股五郎行家を討つて立退くより。直に馳込む圓覺寺。門戸を鎖して闘近藤海田荒川澤井を始め。昵近の若殿ばら。若し上杉より寄せ來るとも引きはかへさじ弓鐵砲。佛の說きし法の庭平等大會に引換へて。修羅の街の大評定方丈狹しと詰めかけたり。地股五郎一禮し。詞物數ならぬ陪臣の拙者。城五郎殿は一家の誼。其緣に連れ御歷々の昵近衆。御隱匿ひ下さる段。身に取つての面目此上なし。併しながら主人上杉憤り深く。拙者が母を人質に捕へ置き。股五郎を渡さずば。母を成敗するとの難題。我故に一人の母を殺すも不孝。且は誼もなき昵近方。斯く騷動に及ぶも氣の毒。地やはり拙者を上杉へ。御渡しなされ下さるべしと邪智を。隱せしフシ賢人顏。地野守之助進み出で。詞何さ〳〵其遠慮には及ばぬ事。此度我々が加擔するは。お手前の爲ばかりでない。上杉には此方共年來の遺恨有り。武將の御先祖尊氏公より譜代相傳の昵近武士。元弘建武の古へ。尊氏公に粉骨を盡し。忠義を勵みし我々が家筋。上杉を始め其外の諸大名は。旗色のよきに從うて。降參した腰拔の家筋。我は顏に高祿を取り。昵近衆を蔑に輕しむる日頃の存外。事がなあれと思ふ折節。お手前をかくまうたは。上杉に恥を與へる爲さ。案の如く上杉此事を憤り。追付けこれへ押寄せんと。軍評定最中の由。今太平に治つて茶の湯遊興に日を送り。鎧兜の着樣も知らぬ國大名。何程の事あらん。ヲ、サ野守殿の仰せの如く。日頃斯樣な事を待受け武藝鍛錬の我々一まくりに蹴散らして。昵近武士の遺恨をはらすは今此時。地敵方より寄せぬ先。此方から逆寄せにして上杉に泡吹せん。フシヲ、尤もと立ち騷ぐ。地城五郎押止め。ア、暫く〳〵。某が所緣ある股五郎をお庇ひある何れもの御深切忝し。さりながら。行家を討つたる事の起りは。此城五郎が賴みし事。其仔細は。此度武將の公達。御任官の御祝儀に就き。諸大名より名劒を献ぜらる。然るに行家が家に持傳へし正宗の名作あり。主從の事なれば。上杉これを取つて献上すべし。さあれば彌上杉が鼻高く。威をふるはん事心外至極。何とぞ此刀を奪取つて。某が手より献上すれば。我は勿論昵近衆の。手柄にも成ると存じ。股五郎に言含め。行家めをぶち殺さしたは。正宗の刀を取らう爲ばかり思ひの外。此刀行家めが手

にはなく。佐々木丹右衞門が預かりをる由。股五郎を請取りたくば。老母鳴海が命を助け。並びに正宗の刀を此方へ渡せよと。難題の使者を立てたれば。此返事のある迄は。暫くお控へあれよと。地言ふ間程なく馳來る門番の徒士の者。詞佐佐木丹右衞門より今朝の御返翰と。地差出す文箱を城五郎。封押切つて一通を。さら／＼と讀み終り。ホヽウ城五郎が思ふ壺。股五郎をお渡しあらば。母鳴海が擒を赦し。正宗の刀を遣はすべし。追付け二品とも丹右衞門持參致さんとの文言。後刻御出を相待ち居ると。口上を以て返答せよと。地蓋引締むる明文箱。取るより早く走り行く。詞イヤサコレ城五郎殿。一旦かくまうた股五郎今更のめ／＼と上杉へ渡し。それで武士が立ちますか。地ヲヽ我々も其意得ぬ貴殿は上杉が恐ろしいか。臆病神が取憑いたか。卑怯至極とフシ詰めかくれば。股五郎押鎭め。アヽどなたにもお靜まり下されい。イヤ城五郎殿。拙者が命は惜みはせねど。武士の意地を立てぬく貴殿が。今になつて腑甲斐なく。上杉へ渡さうとは。エヽ聞えた。行家をぶち放したばかりで。お頼みの正宗手に入らぬ御立腹。それ故でござるな。イヤサ左樣の事でない。今合戰に取結ぶとも。只世上を騷がすばかり。望の刀が手に入らねば。無益の沙汰。一旦和睦に事を納め。母の鳴海と正宗を請取つた上。お身に繩打つて心よく相渡し。使者の歸りを思ひがけなく。多勢をもつて引包み奪返す我が工夫。いづれも必ず隱密々々と。地聞いて皆々勇み立ち。誠に智謀勝れし貴殿。左樣ならでは叶はぬ所。詞然らば各々其用意と。地騷ぐを押へてアヽ先づ待たれよ。謀は密なるを以てよしとすれば。某が詞を出す迄いづれもお控へ下さるべし。股五郎が後の災免れさする屈竟の。忍び所は九州相良。密に落す用意萬端ナニ呉服屋十兵衞これへ參れ。地ハツト答へて次の間より。小腰屈めて並居る中。怯めず憶せず畏り。詞又五郎樣の御身の上。委細とつくと承りました。城五郎樣へは。數年來御出入の私。相良へは商ひに毎年下る道案內。見込んで頼むと大切のお供。畏つたは商人冥加。多年の御恩報じなれば。ちつともお心置かれますな。町人でこそあれ心は金鐵。二人や三人は苦には致さぬ。腕に請合けちりんも。地掛直は申さぬ呉服屋が。めつたに引けぬ太織地の男一疋。フシ頼もしゝ。地股五郎片頰に笑ひ。扨々氣味のよい男。敵持の供すれば肌刀は放されず。行家めを仕留めた時コレ見よ。弓手に二箇所の疵忽ち治したる此藥は城五郎殿の家に傳は

る南蠻國傳來の妙藥。身どもを同道の人人へは。いづれもこれを懷中さする。地お手前もまさかの用意。此印籠を預けるが。股五郎が一命を賴む印と手に渡せば。詞これは〳〵結構なお藥でござります。怪我と病氣は何時知れず。地道中の肝心とフシ取納めたる折こそあれ。地又も馳け來る遠見の者。詞上杉の使者佐々木丹右衛門。網乘物一挺供は僅か三人。只今門前迄。ヲヽよし〳〵。言付けし如く門を開き。隨分神妙に取計らひ。此所へ使者を通せ。ソレ。地いづれもは裏門より。先へ廻つて待伏せの。用意々々に逸り男武士。我一急ぐ裏門口。股五郎は十兵衛を引連れ。奥へ入りにける。地琴を彈じて敵を避け。窈窕として檻穽の謀もやあらんと心赦さぬ丹右衛門。使者の禮儀の裃も。四角四面の方丈へ。網乘物を舁入れさせフシしづ〳〵と打通れば。地城五郎威儀繕ひ。詞ホヲ聞及ぶ御邊は佐々木丹右衛門とな。今日の使者大儀々々。今朝も言送りし通り武士の意地によつて爭論に及ぶと雖も。かく靜謐に治まりし代に。私の遺恨にて合戰を取結ぶは武將への恐れあり。罪は罪なり股五郎。望みに任せ渡さんなれば。此方よりも望みし如く。正宗の刀。竝びに老母鳴海が事上杉殿より。定めて送られつらんずな。ハア成程〳〵。主人上杉顯定怒りの元は股五郎一人。逆磔の刑に行ひ。國の政道を正すべき存念。股五郎たにお渡しあらば。外に會て仔細なし。則ちこれこそお望みの正宗。竝びに老母を誘引せり。イザ御檢め下さるべしと。地箱に納めし持參の刀フシ差出せば手に取上げ。地切先物打鎺元とつくと檢め鞘に納め。詞ヲヽ聞きしに違はず天晴名作。慥に落手と。地提げて立上る丹右衛門引止め。詞アヽ麁忽なり城五郎殿。股五郎をこれへ出し。老母と互に取替へざる中。むさと刀はお渡し申さぬ。サア下手人股五郎に繩打つてお出しなされ。アヽ近頃我儘千萬と。地眼を配る勇氣の面色。詞ヲヽ實に尤もこれは身どもが麁相。然らば刀は暫くそれに追付け下手人渡し申さうが。先づ其方の囚人老母鳴海が變らぬ體。ヲヽ母に科なければ最早繩目にも及ばずと。地乘物の網取拂ひ。引出す姿縛り繩。子故に科を身に老のフシ恥と。鳴海が憂き思ひ是非も繩目をほどき捨て。丹右衛門老母に向ひ。詞子息股五郎を此所にて請取る上は。其許が命を助け城五郎殿へ渡すべき旨。今朝殿より仰の通り彌承知なるべしと。地聞いて鳴海は顏を上げ。詞誠に悴が不所存故。彼方此方へ御苦勞かけ。憎い奴とは思へども。地天地の間に親一人。子一人の股

五郎。未練とも卑怯とも笑ふ人は笑ひもせよ。どうぞ助けてやりたいと。思ふが親の身の因果。詞御主人へ對しては不忠者の悴なれども。母が命を助けう爲。繩か丶つて出ようといふは。此親には孝行者。地老い年寄つた此母が詮ない命生延びて。我が子が刑罰に行はれるを。眺めて何の嬉しかろお情抑て恨めしい。詞ヤイ股五郎此母は何の樣な憂目に逢はうが殺されうがちつとも構はぬ厭ひはせぬ。必ず爰へ出てくれるなよ地ならう事なら此婆を。代りに殺して股五郎が。命お助け下さりませ。惡人でも産んだ子に違ひがなければいぢらしい。お慈悲〳〵と恩愛の子故に迷ふ憂涙とゞめフシ兼ねて見えけるが地ア、思へば誰にも恨みなし。詞此科の起りといふはよしない刀に念をかけ地成敗に逢ふも名作の劍は我が子の敵ぞと言ひつ丶這ひ寄

り棒鞘をずばと抜く手も見せばこそ吭のくさりをかき切つたり。これはとかけ寄る城五郎。佐々木も仰天乘物へ。手負を打込みしつかと押へ。城五郎に目を放さず底意を探る碇繩。又もフシ大事と見えにけり。地澤井わざと空とぼけ。詞コレサ丹右衛門。契約の通り鳴海を受取り申さうかいかにも科人股五郎を受取る代り。母が命は助くべしと契約は申したれど。御覽の通り只今老母は自害致した。併し此方の手で殺しはせず我とわが手に相果てたは某が存ぜぬ所。默れ丹右衛門。隱匿うた股五郎を了簡して渡すは何故老母を受取らう爲ばかり。親の命を子に換ゆる大切の鳴海なぜ殺した。元の如く生かして渡せさなくば澤井股五郎もいつかな〳〵渡しはせぬ。サア老母を早く請取らうサア何と〳〵と詰かくる。丹右衛門ちつとも騷がず。鳴海が自害はいう

て返らず。弟子として師匠を殺す極惡人の股五郎。目の前で親が死んだればとて悲しむ樣な奴でなし。況して緣者の城五郎殿。鳴海が最期をそれ程に惜まつしやる樣がない誠は老母が事は附たり。正宗の刀がお望で。ござらうがの。それとも刀は入らぬ。老母を生けて返せとあらば。拙者とても詮方なし約束變改元の白地罷り歸つて此趣主人上杉に言上し一家中これへ押寄せ鑓先を以て股五郎を生擒にする分の事。人非人の澤井が母。死神の憑いたはこれ天罰。地軍の血祭早やくたばれと。手負の刀ぐつと引拔き。正宗の刀の切味お望みならば御相伴なされよと寄らば斬らんず氣相に。肝先挫がれ城五郎。詞ア、これさ〳〵。丹右衛門此方より事は好まぬ。ム、いか樣よく思へば自身覺悟の鳴海が最期全くお身か業ではない。刀さへ渡し召さるれば言出した武士

の意地さつぱりと立つといふもの。ムヽスリヤ股五郎をお渡しあるか。渡さいで何とせう元來彼も覺悟の上ヤア〳〵股五郎最期の時刻近付いたり尋常にこれへ出やれ。地ハア疾より仕度仕ると。返答立派騷がぬ澤井。海田荒川前後を圍ひ。其身は丸腰惡びれず。悠々と座に直り。詞なにお使者御大儀。傍輩を討つた意趣の元は外でない。老耄の和田行家。年に免じて立ててやれば付け上り。此股五郎を劍術の弟子などと師匠顏が胸惡さ。何の苦もなく討放した。御身達に安々と搦め捕らるゝ股五郎ではなけれども。身ども故に一國の騷ぎとなるが氣の毒さに。命惜まぬ武士の覺悟。城五郎殿イザ御政法に行はれよとむずと。座を組み手を廻す。詞ヲヽあつぱれ〳〵。其方が命一つで。騷動納まる國家の爲。恨みと思ふな股五郎と。地捕繩たぐつて縛は緣につながる城五郎。詞身どもが潔白見屆けたか丹右衛門。ハアこれで主人が心も滿足。扨此老母の死骸を進上申さうか。イヤサ死人は入らぬ持つて往にやれ。然らば科人。其刀。只今取換へ。請取りませう。地いざと繩付棒鞘を。渡す目配り請取る氣配り互に。屹度フシ立別れ。詞これで双方意恨もさつぱり。老母が死骸は乘物に此儘屋敷へ早や急げ。おさらばさらばと目禮も。龍の腮を出でて行く危かりけるへ次第なり。影ほの暗き。黃昏時繩付引立て丹右衛門。前後をフシ固めて行過ぐる。地思ひがけなき山門より。ぱつしと射かくる白羽の矢。膝にかつきとコハ如何にと。引拔く間も又一筋弓手の腕に立騷ぎ。周章騷く同勢が中へむらむら物陰より。現はれ出でたる數多の武士。物をもいはず拔連れて。家來を胴切車切斬伏せ〳〵一文字に。切つてかゝるを丹右衛門前後左右に渡り合ふ。其間に澤井を引包み何國ともなく奪ひ行く。南無三寶と駈け行くを。新手を入れ替へたたみかけ。既に危き其所へ。心ならずもかけくる志津馬。スハ一大事と拔刀。命限り根限り火花を。散らす三重へ强勢勇氣相手は大勢身は二人。金鐵ならねば丹右衛門。數箇所の手疵刀を杖。詞志津馬殿かエヽ口惜しや股五郎を奪取られた。地無念々々とばかりかつぱと伏す。ハアはつと志津馬もどうど坐し。弱るを付け入る家來ども。後れ馳に池添孫八片端撫切り。ぼつ散し。志津馬を圍ふ忠義の働き。お谷も斯くと氣もそゞろ足もフシしどろに走り着き。詞ヤア志津馬は手を負やつたか。若旦那手は淺いぞ。コレ氣を慥に地〳〵と抱起せば。詞イヤ手疵には痛まねど。これが正氣を失なはずに居られうか。股五郎は手に入らず。正宗の刀

は敵へ渡す。頼みに思ふ佐々木殿は此深手。いよ／＼殿への言譯なし。運命もこれ限りと。地刀逆手に取直す。アヽコレ待つた。詞其方が今死んで父様の敵は誰が討つ。サア其敵が討たれぬ故此切腹。イヤ／＼／＼何ぼうでも放しはせじと。地爭ふ二人。倒れ伏したる丹右衛門。むつくと起きて。詞ヤレ志津馬早まるな。股五郎を奪取られたは最初より覺悟の前。正宗の刀は我が手にある。ムヽすりや最前城五郎に渡されしは。ヲヽサアレハ贋物。行家殿より預かりし。正眞の刀はいつかな渡さぬ。誠の正宗。志津馬が手より。主人上杉に差上げ上杉公より。武將へ献上ある時はお家の譽。是を功に敵討の。願ひを立てさす我が工夫。とは思へども城五郎は。音に聞えし刀の目利。贋物を突付けては受取らぬ邪智佞人。先づ正眞を検めさせ。直ぐ様取つて鳴海が自害。乘物の中の疵口で摺替へた贋正宗。地眞はこれにと乘物より取出す切柄正銘の。極めは爰に今際の鳴海。早や絶え／＼のフシ息の下。詞股五郎が親の身で丹右衛門様と言合せ。城五郎を謀りしはどうで非道な悴めが命は所詮叶はねども。股様のお手に渡れば。竹鋸か磔付の御成敗は知れた事。地せめて武士らしう志津馬殿と。敵討の勝負で死すれば何ぼう嬉しい親心。此場を見遁し下されとお頼み申して今日の時宜。詞ヲヽサ老母の頼みはなくとも。志津馬に討たさにやならぬ敵。わざと敵へ奪取らせ。丹右衛門一人が過りに成つて相果つれば。地月日を待つて本望遂げ。敵の首を先生の。位牌の前と身が墓へも手向けてくりやれ頼むぞと。最期の際迄師弟の義理。我故命を捨てらるゝ此大恩は何時の世に。返す／＼も殘念は。詞大敵の股五郎。志津馬が助太刀後楯と。地頼む此方に今別るゝ。心の悲しさ推量あれ。詞ヤア腑甲斐ない志津馬殿。丹右衛門は死するとも無念の魂此世を去らず。郡山の政右衛門こそ我に十倍勝りし達人。早や／＼歸つてお谷殿。助太刀頼むといはずとも彼が爲にも舅の敵。違背はあらじ早やさらば。地此世のさらば未來の門出。丹右衛門様。鳴海殿。地思へば今日の言合せ。敵と敵が修羅の道連。とゞめは互に一太刀と。落ちたる刀指添を。よろめきながら取上げて。眼は眩めど胸と胸差貫いたる。義士貞女。歎き志津馬も深手の弱り。家來が肩に敵の圍み。齒をくひしばつて立歸る心の。内こそ 三重 せつなけれ

第四　郡山宮居の段

謡君萬歳の祈とて。神に歩みを運ぶなり／＼。ハルフシ國の初めの其昔。誰が名付

けてや鄙山。御城下の見付筋武家町人の別ちなく。引きもちぎらぬ弓八幡。奉納願主譽田大内記殿。謡の番組數々も。打納まりし隅田川。あらお目出たやと上を見習ふ下懸。やがてお立を　フシ松蔭に列を。正して待ち居たる。地杢助が聲高に何と能助どう思ふ。同じ様に言ふは勿體ない事だが。殿様は遊藝がお好き故。今日は何處の奉納明日は爰ぢやのと。毎日のお能。我々も其お家に奉公して居ながら。其氣のないは冥加ない事ではないかと。地いへば能助打笑ひ。詞ハヽヽ、何を杢助がいふやら。そりや汝が藝氣が無いによつてさう思ふ。おらが親はきつい能が名人。名さへ軍陀羅夜叉右衞門というて。道明寺の祈りの段。面白い事だ。コリヤ／＼能助。道明寺とはそりや干飯ぢやないか。必ず外でそんな事をいふなよ。ハアアノ謡の名はヲヽ何とやら。ヲヽ思ひ出した宗善寺。コリヤをかしい宗善寺とは津の國にある寺だわい。そんなら汝がのも違つた。道明寺は河内でないか。イヤ／＼宗善寺に違ひはない。ハテ片意地なもの。コリヤ能助お身は藝者の子なら狂言の心があろ。何と稽古してくれまいか狂言覺えて何にする。ハテ殿様がお好だ故。毎日々々此通り。いかに下々ぢやというて。其氣の無いは何と不忠ではあるまいか。コリヤ尤もぢや。稽古してやろ第一足取を稽古せい。サアおらが歩くやうにせいと。地鳥居の馬場を能舞臺。仔細らしげに身繕ひ。詞マヽそれ／＼手を振る事はない。兩手をかうして。さうだ／＼歩き様を覺えたか。ヲヽ合點ぢや／＼。ハテ垢切を切らした時の歩き様と覺えて居よ。おらがいふ様に跡から言へよ。かやうに候者は此邊りに住居致す者でござる。頼うだお方が狂言を好ませらるゝ故。我々も稽古致さうと存ずる。太郎冠者有るか。ナイエヽ惡い覺え。イヤ／＼此返事にしてくれい奴を呼出すのは極つて有るわい。身が前へ出あがらう。サアそれは芝居の臺詞だわい。ハアお前にはぬるくて惡い。エヽそんなら止しにせろ／＼と。地仇口々を言ひ廻す。お立と觸るゝ聲々に。惧り驚きしり／＼　フシ舞ひ／＼かがみ控へ居る。地威光輝く大内記殿。奉納首尾能く納りて早や御下向の先拂ひお徒士御近習前後を配り鳥居前迄出給へば。御供には宇佐美五右衞門中扈從に召連れられ。御前間近く引添へば。跡押へは櫻田林左衞門指南の棒を振廻し鼻高々と御供す。暫く是にて御眺めと宇佐美が詞に近習の武士。御腰掛を奉れば　地遙か跡より能太夫源之進。御傍近く手をつかへ。詞今日殿様のお能。恐れながら駑

き奉ります。いつ〳〵よりも出來させ給ひ。神も納受ましまさん扨一家中。何方様もきついお上手。殿様の御機嫌の程御伺ひ奉ると 地中上ぐれば打笑ひ給ひ。詞ナニ源之進。これといふも其方が指南の徳と宣へば。ハアヽハ冥加ない御詞。地時の面目有難しと フシ退去て一禮述べければ。地重ねて仰出さるゝは。詞ア、羨しいは源之進が身の上。我が望みは外になし。能太夫になつて。猩々の亂れ一世一代がして見たいわい取分け今日の奉納も。我一人の力にあらず。一家中の者迄も満足せねば奉納とは言ひがたし。殊に天氣も宜しければ我が悦び限りなし。地大儀々々とありければ。皆一統に頭をさげ。ハツト フシばかりに平伏す。地五右衛門御前に手をつかへ。詞誠に殿様の御意の通り。今日は一入天氣宜しく御祈願の奉納一家中の者は申上ぐるに及ばず。我々迄も恐悦至極に存じ奉る。恐れながら五右衛門が御願ひの筋あり。先達て御取次仕る唐木政右衛門儀。劍術を申立てお家へ御奉公に出し候所名のみばかりにてその器量あるなきを。御上覧に入れ奉らず何卒林左衛門殿と立合の儀。御高免遊ばされ候様に御願ひ上奉ると。地聞きも敢へず林左衛門。詞ア、これ〳〵宇佐美殿。御上へ對し恐れ多い願ひ尤も政右衛門とやら貴殿の御世話によつて。劍術を申立て御奉公に出られた人。武士は相互。成程お望みならば相手になつて進ぜうが。そりやもう蟷螂が斧とやら申す事さ。いかぬ事ぢや〳〵。止しにし召されお氣にはさへられな。此林左衛門相手には餘り大人氣なく。何の夫が一堪もあるものか。殿にもをかしく思召し。ハヘ、、、と フシ嘲笑ふ。地林左衛門には見向きもせず。右政右衛門儀不鍛錬なる者などと。陰口を申す者も候由。左様なる者に御知行を賜はり候ては取次仕る此五右衛門。一家中へ相濟み申さず。是によつて政右衛門に立合の儀御願ひ申上候様と申聞かせども。彼も新参者の儀故辭退仕る。何卒。此儀御上より仰付けられ下さらば拙者が面目此上なしと。地餘儀なき願ひに内記殿 詞武の道は尤もなれども。我共家に生れながら劍術の事は。とんと氣が乘らぬぢや。政右衛門事は家老どもがきつい取持。兩人の立合何方が劍術善惡にもせよ。某が構はぬ事。家老どもが得心せば。身が事は何時でも見物せん今日の奉納もとかく家老ども不得心。そちは又未明より出でて忠勤盡す其代り。餘り好かぬ事ながら始めての願ひ。聞屆けんも道ならず。政右衛門事は辭退致すとな。兩人の事は用人方へ言付けてくれう其代り近日若宮の八幡宮へ春日

龍神奉納したい。又家老どもが何といはうと。其方が計らひせよ。ヤモとかく遊藝が樂しみが深い。願ひの通り聞届けたと 地御上意の。詞にハツト宇佐美が面目。忝涙に フシ平伏せば。 地大内記殿仰せには。 詞奉納の場所へ諸人の入込み。神拜の恐れもあれば。其方は跡に殘り御神樂をあげ。社内の淸め仕れと。 地言ひ捨て御座を立ち給へば。横に蔓る櫻田が御跡に引添へば。さゝめき渡る御供先駒の嘶き轡の音。 フシ本城さして歸らるゝ。 地御跡見送り五右衛門は獨語。 詞ハア流石大家の殿樣。これ程にお好みなさるゝお能に代へ。林左衛門と政右衛門立合の勝負。御願ひ申したれば。早速に御聞屆け下さるゝも。日頃の願ひ本望と。 地社内をさして フシ行く折から。 地申し〳〵と松蔭より。呼びかけるは女の聲。何者なると見合す顔。 詞お谷殿で

はないか面體荒れし人相氣遣はしやと尋ぬれば。 地お谷は涙押拭ひ。包むとすれど女の事。有樣にお話し申さん。 詞國許から歸りてより政右衛門殿の心底變り。出るにも入るにも不機嫌、此刀を差出しこれを持つて五右衛門方へ行けというたばかりに物をも言はず。 地どういふ譯やら合點行かず。問返されぬ日頃の氣質。 詞御前に逢うて樣子もいはうと。其儘立つて來りしが。 地通りかゝりてお前を見受け殿樣のお立をば。忍んで今迄相待ちしと。刀取出し差俯向き。 フシ暫く詞もなかりける。 地宇佐美はつく〴〵打眺め。 詞ハテ心得ぬヲヽそれよ〳〵。コリヤコレ我が秘藏せし長船の一腰。其方が親代となつたる證に遣はせしに。持たせ越したは合點行かずと。 地引抜き見れば物打に。差添へし一通。コハ〳〵いかにと解ほどき。見るより愕り。 詞ムヽコリ

ヤ此方へ暇の一札。樣子があらう語られよと。 地詞にお谷は仰天し。 詞なに私への去狀とや。去らるゝ覺え微塵もなし。エヽ聞えぬぞや政右衛門殿。 地科もない身をむごたらしう。去るといふこと誰が始めた。お腹に十月たゞもない身を。情なやと。 スヱテかつぱと伏して。泣居たる。 地五右衛門せき立ち。 詞エヽこなたも武士の娘でないか。魂の腐つた政右衛門。跡を慕ふ事はない。エヽ口惜しい。我が眼の見えぬが誤り。天晴器量のある奴。何とぞ出世をさせんと思ひ。今出頭顔する林左衛門と一勝負立合はさせ。武藝の器量をあらはし。一家中の手本とせんさすれば。殿にも遊藝の事はお控へなされ。武道の道にお心をよせ給はゞお家のお爲と思ひし故。林左衛門と立合をすゝむれども。辭退するは。臆病風に引かされた大腰抜めが。此儘に相止めに成

りし時は一家中の物笑ひ。願を上げし御前の手前も言譯なし。地エヽ腑甲斐なやとばかりにて スヱテどうど。座を組み居たりける。地お谷も共に泣きくどき。夫の心の直る様。卑怯者といはれぬ様に。コレ思案を頼む五右衛門様と。取付き歎けば。詞ヲヽさう思ふも尤も。最前も殿の御前で。林左衛門めが我に向ひ。彼等を相手に立合ふは大人氣なしと。人もなげなる雜言過言聞かぬ顔は何ゆゑぞ。お家のお爲二つには己を出世させんものと思ひし事も恩を仇。但し國許の騒動を聞き一家の緣を切る所存か。おのれ故には勘當請けし此お谷。某が親となり女房に持たせしに。科なき者に疵を付け。追出してをこすのみか。親代りにやつたる此刀の物打に暇の狀を巻付けしは。我を欺く憎くい奴心肝に徹へ／＼こたへて了簡ならず。地年寄つたれどもこの宇佐美。鋭き刃金の切味見せんと一圖に凝つたる フシ國侍。地お谷は取付きマア／＼お待ち下されと。縋るを拂ひ。詞ヤア愚か／＼一先づ此方は。屋敷へ歸り何氣もなくもてなされよ。我も跡より押しかけて。事によらば先手を取つて切りかけん。地其時こなたも此刀で尋常に自害せられよ。未練に心殘されなと フシ詞立派に言放す。地夫の心の善惡をと。小褄凛々しく帶引締め。勇まぬ心取直し勇み。勇むや庭神樂打連れてこそ 三重へ立歸る

第五　郡山屋敷の段

地昔は山の跡なれや。今も名のみは郡山。家中屋敷も繕はず直な唐木の柾目ある。スヱテ家の柱は退去に。地奥様役の留守預り石留武介は 忠義者。常の奉公裏表。内證賄ひ フシ忙しき。地臺所より腰元どもばら／＼と立出で。詞コレ武介殿。今夜は内方へ嫁御様が見えるげな。お目出たい祝言振舞。わたしらもあやかる様にお手傳に參りました。イヤ御苦勞々々々。小身の旦那政右衛門様。中間一人下女一人。若黨の此武介が。料理人やら家老やら。人手が無さに御家中の女中方を御無心。待女郎にも酌人にも各を頼みます。イエ同じお給仕でも。祝言と聞けば氣がしよぎ／＼。したが合點の行かぬ事は。お谷様といふ奥様。お里歸りなされてから。聞けば去られなさつたげな。まだぬくもりも冷めぬ中新らし女房を入れるとは。餘りな手廻し。サイノ今度の奥様は何處からお出なさるのぢや。イヤ我等もかつふつ存ぜぬ。何だか知らぬが旦那が一人呑込んで。今夜嫁を呼ぶ程に。祝言の拵へせいと言付けて出られたから。何が俄に料理拵へ。少しばかり聞き

はつつた。海老の舟盛置鯉。置鳥などといふ。しちむつかしい事は取置き。鮒の吸物腹合せは新枕の心ぢやげな。肝心の島臺を忘れて。正月のお古を組みかへて間に合はす。いかぬ物は銚子加への折形。知つてなら折つて貰ひ度い。ハテ何の其様に儀式せいでも大事ない。仲人さへない嫁入。今迄何處ぞにこつそりと。圍うてあつた女中であろ。ホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事師。先の奥様はお腹が立たう。馴染の女房暇取らして。跡へ來る嫁づらは。どんなお頬ぢや見てやりたいと。地さがない女子の口々に。うたて浮名の高話。憂事の思ひの。フシ種を身に持つて我が内ながら心置く。夫の留守を フシ窺ひ足。地腰元目早く。詞ヲ、奥様ようお出なされましたと。いふに武介も押下り。詞幸ひ只今旦那のお留守。お歸りならばお知らせ申さう。地先づお緩りととあしらふ程。いとゞ重なる憂さ辛さ。諸白髪迄と言交した人の心も變れば變る。詞我が内へよう來たといはれる様になつたわいの。身に覺えはなけれども。親分の五右衛門様。どの様な誤りしたぞ暇の印の此一腰。譯が立たねば受取らぬと。地お屋敷にも置かれねば立寄る方もない身の上。詞見ればいから賑やかなが。お振舞でもあるのかと。地問はれてそれとは言ひかねる。跡先見ずの下女婢。詞今夜はお屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤア嫁とは誰が嫁。コレ武介。よもやさうではあるまいと。思へど若し旦那様に。女房が來るのぢやないかや。イヤ其儀は。エ、武介殿隠してもどうで知れる事。政右衛門様のお内儀様でござります。下地から譯のある事かして。今夜俄の御祝言。わたしらも隣屋敷からお給仕に雇はれました。お前様は先の奥様てつきりとお妾に。見かへられなされたに違ひはない。地ぐつとお悋氣なされませと身にもかゝらぬ下々の。法界悋氣に焚付けられ。いとゞ重なる口惜しさ フシ包みかね れば見て取る武介。詞エ、コレ女中方。役に立たぬ事言はずと。お臺所に人がない。爐の炭もついで貰はう。アイ〳〵合點ぢやサア皆お出で。地旦那のお歸り待女郎。こちらも嫁御の相伴で。よい夢見ようと打ちつれて立つて行く間を待兼ねてかつぱと伏して。スヱテ泣居たる。詞ヲ、お道理ぢや〳〵。したが奥様。必ず悋氣なされますなえ。アノ言やる事わいの。悋氣とは一通りの事。非業の死をなされた父様。弟志津馬が敵討の。力と頼むはたつた一人。其夫政右衛門殿。縁切れたれば誰を頼みに。大敵の股五郎。いつ本望が遂げられう。地力も綱も切果てしと。思へば胸が

張裂けると。歎けば共に泣いじやくり。詞お氣遣ひなさるゝな。縦へ旦那がどうおつしやつても。拙者めが命に代へても此御縁は切らしませぬ。悋氣なされなとはそこの事。お前様のお腹には。政右衛門様の御世繼がござりますぞえ。去狀取らうが後妻が這入らうが其お子さへ御平産なされたれば。切つても切れぬ血筋の緣。政右衛門様の奥様といふは。お腹が證據のお谷様。敵討の助太刀も。頼みの種の人参子。産月に氣をもんで過ちあれば如何なさるゝ。追付け旦那お歸りあれば。悋氣がましい顔なされず。兎角此内を動かぬ様になされませ。御合點が參りましたか。とはいへ義理のある女房去つて。嫁入の祝言のとは旦那はどうしたお心ぢや。拙者も一切合點が行かぬ。ホンニ此蝶花形私は折様存ぜぬ。お前様お頼み申しますと。地いはれて手には取りながら。みす〳〵夫を寝取らるゝあた憎てらしい蝶花形。大骨折つて隼の。鷹の餌になる春の雉子外に夫の聲聞え。詞アレ旦那のお歸り。暫く忍んで地ござりませと家來が情を力草。逢ひたい夫に隠るるも。疵持つ心唐紙をオクリ押明けへ忍び入りにけり。地心がけある侍は。地を這ふ虫も氣を赦さぬ唐木政右衛門。伊達を好まぬ刀の柄前。人に勝れし袴の幅上屋敷より歸り足。地武介手を突き。詞申し旦那。殊の外お隙入り。御用の品は如何體の儀でござりましたな。サレバ〳〵。此間から辭退する彼の。林左衛門と武藝の試み。明朝正六つ時御前において立合へと押付けて御家老の言渡し。今晩妻を迎へまする婚禮の中。一兩日お延下されと願うてもいかな聞き入れず。女房呼ぶは私事。明日は延ばされぬ。とさりとは心ない家老殿。此方は内へ氣が急く。もゝ尻になつて漸う只今。祝言の拵へ用意は出來たか。ヤレ〳〵知行取りにも飽果てた。地嫁の來る迄袴脱いで休息せう。枕おこせ女子ども。アイと返事もさし足に。地角を隠せし塗枕。そつとかたへに奥様を。腰元がはりの。見えがくれ袴は解けど胸解けぬ鋭い常の侍肩衣。折つてたゝんで。取直す。詫の種とは見付けた夫。詞ヤイ武介。あの女子は何者ぢややい。エイ〳〵。イヤ。あれは彼の。今日お目見えに參つた。新参の女中で。ナ。ハイ地旦那様お目かけられて下さりませ。詞フウ奉公人ぢやな。見かけから愚鈍さうな。不束な女なれど。使うて見てくれろ。コリヤヤイ。今夜は身どもが女房を呼迎へる。祝言の給仕申し付くる。アノ。嫁御とお盃の。其お給仕をせいとは。地そりや餘りイエサア。餘り。急な御祝言。不調法な私が。詞給仕得せずば

奉公叶はぬ。立つて歸れ。イヤ〳〵申し地何でも御意は背きませぬと。下女になつても夫の內。離れ兼ねたる。スヱテ心根を察して武介が呑込む涙。詞さうだ〳〵。奉公は辛抱が大事。何おつしやらうと。アイ〳〵とそこらを程よう。鹽梅加減。ドレお盃の用意せうと。地料理を フシ 機會に立つて行く。地折から宇佐美五右衛門樣御出でと案內す。詞ハア又堅藏がわせられた。誰ぞ。地羽織持て來いと言はぬ先から心得て。勝手覺えし女房の德。機轉利して後から着せる羽織をひつしよなく。詞エヽ子供ではないわい。差出た女め彼方へ行けと。地睨付られて。是非なくも。立聞せはしく入來る五右衛門。彌左衛門裁の袴こはばり切つてむずと坐し。詞政右衛門殿。今晩は其許に嫁入が有ると承り。御祝儀申しに參つた。老人の寸志ぞと御覽下されと一通を差置けば。これは〳〵。婚禮を祝しての。御發句でかな。先づ以て忝しと。地押披き見て驚き顏。詞フウこりや拙者への果し狀でござるな。ハテ存じ寄らぬ。先づ其意趣の次第はな。知れた事。科ない女房何故去つた。ハア。拙者が女房を。拙者が去るに。お手前樣が何故の御立腹。イヤサいふまい。尤もお谷は上杉の家中和田行家が娘なれど。お身と密通して二人連。此郡山へかけ込んだ。浪々の體不便に思ひ。且はお手前が器量を見込み。殿へ申して有付かせたは此五右衛門。其上勘當受けて親の無いお谷。身どもが娘分にして。改めてお身にくれたれば。以前は行家が娘にもせよ今は身が娘。少しの見落し有るとても。去られる義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ。外の女房持替へて。五右衛門を踏付けた仕方堪忍ならぬ。それとも。お谷に據ない科でもあるかそれ聞かう。返答次第。座は立たせぬと鍔打叩いて。フシ詰めかけたり。詞イヤモウ重々御尤も千萬。お谷に微塵も科はなし。去つた仔細は別儀ではない。飽きました。女房といふ物は。飽いてからはもう〳〵。片時も持つて居られるものではござらぬ。サヽヽお聞きなされ〳〵。御立腹は御尤もぢやが。今拙者と討果されては五右衛門殿。殿への不忠になりませう。なぜとおつしやれ。今日上より御意有つて。明朝御前において。櫻田林左衛門と劍術の。勝負を致す此政右衛門。これまで拙者を推擧なされ。明日も勝負見分の役目を。仰せ付けらるゝ其許が。此立合も致さぬ中に。拙者をさつふりと切つてお仕舞ひなされて。殿へは何と。言譯はなさるゝぞ。是非憤り晴れぬとあらば。何と致さう。武士の因果。明日の御前を勸めて。その跡で

お手に懸りませう。暫く宥免下されと。地理に詰められてさしもの五右衛門。コリヤ尤も。詞遺恨は遺恨。御用は御用。明日迄は傍輩の役目。中よし。〳〵。御得心下さるか。ア、忝い〳〵。地然らば今宵はこれに緩りと。御酒一献御上り下され。詞追付け新しい女房が参る。イヤ又其器量のよさ。雪と墨との替徳古女房のお谷めは。不器量の上に。因果と早う子を孕んで。地正眞の河豚の横飛。飽いたを無理とは思召すなと。愛想づかしを立聞きの障子に歯形も入るばかりスエテ上る。痞を折しもあれ。詞御嫁様早やこれへ。ヲ、待兼ねた早う通せ。女子どもそれ燭臺に火を點せ。地島臺銚子と騒ぐ程。五右衛門が。フシむかつき顔。地玄關より奥座敷オクリ直に。手操の鋲乘物對の簟笥に染込みの。覆も受持つ。介添女房。詞ヲ、大儀々々。イヤ申し宇佐美公。只今か

の妻が参つた。お悦び下され。ア、。御目出たい儀でござる。御推量下され。貴公には御退屈。コリヤ〳〵彼方に御酒上げいよ。イヤ拙者御酒たべると。胸が惡くござる。是は氣の毒。然らばお菓子。イヤサお構ひ御無用。ハテ堅くろしい地何がな御馳走。詞ヤイコリヤ新参の女。何をうろ〳〵まひ〳〵と。其不調法では祝言の酌は得せまい。お客人の癇癪。ソレお背中でも揉んであげいと。地いふ程腹の。立波に音を鳴く千鳥。四海波。詞扨我等今晩の花聟。裃を着る筈なれど。あたまから打解ける様に。角菱止めて此儘の見参。サア〳〵。早う女どもの顔が見たい〳〵。ヲ、お心安い地聟様で。嫁御様のお仕合。恥かしがつてござらずと。サアお出なされませと。乘物明くれば綿帽子に。腰より上は埋もれて。七つばかりのいと様御寮。尺にも合はぬ補褂ほら

〳〵。帶につられて座敷にとんと。詞乳母これ取つて〳〵。ア、其帽子。御盃の濟むまで召してござれ。ア、イヤ〳〵欝陶しからう取つてやりや。ドレ戀女房の地御面相と帽子取らせば尺長も締らぬ罌粟の花嫁御。直す三寶土器を乳母が持添へ戴かせ。聟君様へフシ上げまする。詞忝い〳〵。女子ども皆見てくれ。何とちよつこりと。何處に置いても邪魔にならぬよい女房であらうがな。ハア嬉しい〳〵地目出たう一つ。フシ次の間より。ウタヒ千秋萬歳の。千箱の地玉と謠聲。フシ打掛の。袖に一通取乘せ。立出づるヤア。詞お前は母様柴垣様と。地驚くお谷に目もやらず。政右衛門に打向ひ。頑是ない此娘を女房に持つて下され。此上の本望なし聟引出の此目錄は。詞主人上杉宇内様より。悴志津馬に下されし。敵討御免の御書。いよ〳〵助太刀なされて下さる

お心ぢやな。お尋ねに及ばず。承知致いて。フシ罷有る。詞コリヤ新參の女もよく聞け。身どもには先妻があつたれどもな。親の許さぬ密通。行家殿の勘當の娘。どれ合女夫の悲しさは。表立つて。聟舅といふ事はならぬぞよ。今郡山の扶持を戴く政右衛門が。地よしみもない他人の。助太刀がなるべきか。詞コレ此お後は世間晴れた行家殿の忘形身。志津馬が妹に違ひない。此子と今祝言すれば。これこそ誠の聟舅。地舅の敵。小舅の助太刀仕ると。殿へ御願ひ申さんに。よも不屆とは思されまじ。彼方此方を思ひ量つて。科もない女房。去つた謂は此通り。義理といふ色に迷うて。五年の馴染に。見替へた心汲分けて五右衛門殿。御立腹の段々は。詞眞平々々。御免下され。我等もう醉ひました。何申すやらたわい〳〵と。地酒に紛ぎらす本性の。言譯聞いて手を合せ。よう去つて下さんした。其誠をちつとの間も恨んだ女子の廻り氣を堪忍して下さんせ。詞ヲヽサ。身どももよい年をして。疑ひの惡口面目ない。天晴武士かな。地政右衛門殿。詞此祝言は敵討の門出。武士道も立ち家も立つ。よい嫁を迎へられた扨々めでたい婚禮。地我等もとも〳〵お取持と。始めの腹立打つてかへハズミ一度に。顔の色直し。詞お心が解けたれば。彌々變らぬ政右衛門が。後妻のお後や。二世かけて。其方の男。地タヽキ今夜から抱いて寢るぞや。コレ女房ども〳〵といへど。お後は欠伸交り。乳母もういなうとやんちや聲。これは娘としたことが。嫁入早々往んでたまるものかいの。三々九獻まだ濟まぬ。殿御の盃戴くものぢや。イヤあからはいや乳母あれほしい。あれとは。ムヽお饅かえ。さもしい奥様ではあるぞ。イヤ〳〵道理ぢや〳〵。かはいゝ女房に何惜しからん。併し一つは過ぎる。半分は身が預かる。地是が夫婦の固めぞと。持たせばほや〳〵饅頭喰。詞ホンニ忘れた。嫁君の御持參のお道具と。地箪笥の引出し廣蓋に盛り竝べたる持遊の。市松人形風車。歌七つになる子に。殿を持たせ濟ましたしやん〳〵。ウタヒ濱松の。フシナホス音はざゝんざ。地座は變らねど我が夫を。夫といはれぬお谷の心。思ひやつて居るわいの。そもじとは生さぬ中。ほんの娘の此お後と。見かへさした繼母が。聟殿に惡性根付けたと。恨んでばし下さんな。ア勿體無い事ばつかり。わたしが緣の切れるは。父樣へ不孝の言譯。政右衛門殿何時迄も。あの子と添うて下さるが。家の爲志津馬が爲。わしや死する迄去られて居るが。嬉しいわいのと明かし合ふ。親子の貞心三國一。思ひは富士の郡山とけて。

フシ・涙を汲みかはす。地酒も廻に入りしめ／＼と。フシ夜も更け渡れば。稚子が。乳母もう寝ようと乳さがす。詞ヲヽ此お子わいの。七つになる迄乳啣へる子があるものか。殿御の手前も恥ぢなされ。イヤ大事ない／＼。これからが新枕。腰元ども。床を取れ身も追付け寝る。コレお乳母。女房どもに尿やつて地寝さしてやりやと勞はり心付き／＼。乳母のお藏が抱きかゝへ。ナクリ寢所に伴ひ。入りければ。地政右衞門宇佐美が前に手を突き。改めて五右衞門殿へ御頼み。申上げたき様子あり。詞サア／＼。役には立たずと。身どもも力に成り度い。何なりとも遠慮なう承らう。どうか／＼。ハア御親切忝し。地近頃申し兼たれども。詞其許様には明日。切腹なされて下されい。其仔細といつば。明六つ時。櫻田林左衞門と。立合仰せ付されし。此勝負に拙者負けまする。

サア知れてある林左衞門が手の內。打つてぶち伏せるは合點なれど。勝てば御前の御意に叶ひ。これより一家中の師範仰せ付けられお暇が出ぬ時は。助太刀の望みが叶はぬ。御前に於て政右衞門。物の見事に打負け。それを越度に知行差上げ。浪人して思ふ儘。小身の助太刀致す所存。時には拙者が劍術を。吹聽なされた其許様。負けた我等が恥よりも。見損うた御恥辱。よもや生きてはござるまい腹なされにやなりますまい。これ迄厚う御贔屓下され。様々御恩に預かりし。恩を仇と申さうか。腹切つて下されと。地申し出すは。五臟の血を一時に。吐くよりも苦しけれども。身の敵が討ちたさ。志津馬に本望遂げさしたいばつかりに。斯様の不屆を申上ぐる。御赦されて下されと。鬼を欺く政右衞門わつと。泣いたる。眞實に。感じ入つて。詞ム、尤も／＼。

命進上申す。何よりも易い事。只殘念なは林左衞門めに。恥顏かゝせんと思ひしに。却つて此五右衞門面目を失うて。相果つるは悔しけれど。貴殿が本望とげたれば。骸の上で身どもが恥も。其時雪ぐ暫しの無念。誠ある侍の爲に。皺腹一つが役に立たば。身に取つて大慶々々と。地死ぬるをフシ常の武士氣質。詞アレ聞いたか。主人に預くるお命を。我々に下さるる。地有難いとお禮申せ。女房どもとはいはれぬ表。親子とも又言はぬが孝行。勝つべき勝負を負くるも義心。恥辱を取つて御最期も。侍同士の。お情と。互に禮儀の中々に。フシ涙。催す八つの袖地時計の七つせはしなく。詞アレ早や勝負の刻限近し。身は先へ登城致す。地用意あれ政右衞門。詞貴殿のお暇出るを相圖に身どもが切腹。御邊は直様鎌倉へ出立。冥土の出立。早や參る。御苦勞。地後刻と式

禮默禮。性急武士の短夜や。明くる間を待つ最期の門出勇んで。御前へ 三重へ時過ぎて 地早や明六つの。知せの太鼓。朝日輝く大廣間。大内記殿上段の褥に着座近習の武士。各見物晴れ勝負。政右衛門は大の竹刀。櫻田は兼てより好む所の佐分利流。長柄を持つて待ちかくる。双方呼吸の透間なく先を取らんと。挑み合ふ。切先双金はなけれども。鎬を削る心の眞劍。打合ふ數は帳面に。見る人々も息を詰め暫く時を。移せしが。兼て期したる。政右衛門櫻田が槍先を。あしらひ兼ねたる手の狂ひ竹刀からりと卷落され。槍にひばらをウンとばかり。がはと倒れて俯伏に。 フシ面目なうこそ見えにけれ。 地勢ひ込んで林左衛門。 詞ナント何れも御覽じたか。陰で廣言は誰もいふ。まさか勝負にかゝつては。生兵法が役に立つ物ではない。此樣な拔作を。お取持なされた五右衛門殿。何と今御合點が參つたか。イヤハヤ天晴のお目利〱と。地嘲弄譏りも覺悟の前。御前に向ひ謹んで。詞不鍛錬の政右衛門を。推擧致せし不調法。恐れながら申譯と。地言ひもあへず肩衣はね退け。差添に手をかくる。詞ヤレ待て五右衛門。あれ留めよ。御意ぢや。切腹先づ待たれよと。地近習の聲々。ハツとばかり暫し。 フシ控へて平伏せば。 詞櫻田林左衛門唐木政右衛門。兩人共是へ參れ。ハア。地ハツと一度の答さへ。肩で風切る櫻田と。唐木は枯れし萎れ枝。見すぼらしげに蹲る。詞ヤイ政右衛門。只今の勝負。大内記これにて逐一見屆け。其方が致し方神妙に思ふぞよと。地仰せにハツ〱とばかり夢心地一座の。フシ不審。詞イヤサ。詞其方どもは今の立合を何と見た。尤も勝負には政右衛門負けたれども。始めよりつく〲見るに。身構へ太刀捌き。よつく鍛へし誠の達人。林左衛門が中々及ぶ所ならず。彼が心を察するに。新參の身を以て古參の者に。恥辱を與ゆるは。武士の情にあらずと。わざと勝を譲りしは。地劍術ばかりか心まで奥床し。頼もしゝ。詞併しながら是迄。遊藝を樂しみ。武藝に疎き大名と。噂に言はれし大内記。劍術の批判覺束なしとも言ふべきが。弓取の家に生れし身が。武藝を知らぬ樣あらんや。然れども。弓を袋にし。太刀を鞘に納むるは太平の掟。今足利一統に治つたる此御代。靜謐の世に。弦を引き鏃を研き。鎧よ弓よとひしめくは。上への恐れ家衰微の基。爰を思ひはかつて。茶の湯亂舞に日を暮せども心に捨てぬ劍術武藝。よく知つて居る地身どもが眼相違あらじ。詞政右衛門を取持し五右衛門。身が爲に天晴忠臣誤りと思ふべからず。又林左衛門事は。怪

我の勝をそれとも知らず。いかめしく罵るは。我が藝の我がでに見えぬ不鍛錬千萬。知行くれるは國の費。暇を遣はす。勝手に屋敷を立退くべしと。地案の外なる御諚意に。林左衛門一句も上らず。鋭き殿の御賢慮に。恐れ入つたる一家中。詞御前に叶はぬ林左衛門。早や立ちめされとせり立てられ 地した丶かな目に。大廣間一人 フシすご／＼立つて行く。詞重ねて政右衛門にいふべきは。新参ながら其方。武藝の鍛錬感じ入る。二百石の加増申し付ける。黒書院にて改め盃今より一家中の師範となり。彌忠義を勵んでくれよ。といと懇ろに仰せありしづ／＼。御座を御太刀持の小姓引連れ入給へば。近習の面々 フシざゝめき渡り。詞さりとては政右衛門殿。けしからぬお首尾おめでたい／＼。イヤもうお羨しう存じます。我々もあやかる爲。お盃が戴きたい。詰所に相待ち居まする。扨々々お手柄 地／＼と。オクリ挨拶悦び受くる程。ぐわらりと違ふ胸算用。二人は顔を見合すばかり。只うつとりと手を組んで。詞政右衛門殿。五右衛門殿。是ではお暇は願はれまいサア身どもも折角。切かけた腹がひねになつた。コリヤマア。地どうと腰もぬけ一度に溜息次の間の。襖あらはに妻お谷。肩にかゝりし柴垣が喉に懐劍突詰めし。母の自害に稚子の。お後も跡におろ／＼目元。詞二人驚き何故の。この生害イヤなうこれは覺悟の上。唐木殿の頼もしい心底を聞く上は此世に用のない體。未來へ參つて。娘お谷が勘當の訴訟今日の様子を見屆けてと。此廣間のお次迄。隠れ忍んで委細の譯。思ひの外の立身でお暇の出ぬは是非もなし。地此上ながら姉も妹も。やつぱり此方様の女房と思ひ。敵討には行かれずとも。心の助太刀を。陰ながら志津馬が力になつてたべ。兄弟共さらばよと顔を。見上げ見下して。盛りの梅と蕾の櫻 フシ跡に殘して息絶ゆる。コレなう是と取付いて スヱテ泣聲人や菊の間より。地大内記殿の御簾中。久方御前立出で給ひ。詞改めて殿様の御諚意。政右衛門が今日の仕方。定めて様子あるべしと御窺ひなされし所。心の底に望みあつて。わざと我が手練を隠し。主を欺罔りし趣。殊に御座の次の間へ女を引入れ。御殿を穢せし科によつてお暇を遣はさるゝ。さりながら。暫しも扶持し置かれし家來。浪人の粮に盡くるも不便なれば。刀一腰お暇の印に下さるゝ。殿様御秘藏の信國の名作。敵討の餞別とは仰有れぬ。賣代なして世渡りの助にせいとの御慈悲。地有りがたう頂戴しやと。小姓に持たせし刀箱。打明け申さぬ心の底。知ろし召れし御恩

み。詞エ、相果てし志津馬が母。今少し生延はり。地此御諚意を聞くならばと止めフシ兼ねたる有難涙 地御簾中も御落涙。父にも母にも後れたる。其稚子は手廻りで養ひ育つる三世の緣。殊更姉は只ならぬお腹に持ちし大事の身。假の親分五右衞門の屋敷で介抱如才なう。本望とげて立歸り。元の主從對面を待つて居るぞとつど／＼に仰せも重き亡骸は。宇佐美が屋敷で野送りの。供に控へし若黨武介。此世の名殘御殿の名殘。始めの妻と後の妻。生れぬ子にも引かるれど返す。／＼も大恩の。御前を拜し。地立出づる。世の有樣こそ。三重へものうけれ

第六 沼津の段

東路に。爰も 三下り歌名高き沼津の里。富士見白酒名物を。一つ召せ／＼駕籠に召せ。お駕籠やろかい參らうか。ナホス地お駕籠／＼と稻村の。蔭に巣を張り待ちかける。蜘蛛の。フシ習ひと知られたり。浮世渡りは。樣々に。草の種かや人目には荷物もしやんと供廻り オクリ泊りを。急ぐ二人連。立場と見かけ立ちどまり。詞コレハしたり大事の用をとんと忘れた。大儀ながらわしが寄つた所迄一走。地往て來てたもと急ぎの用事走り書き。さら／＼／＼と書き認め。早う／＼と手に渡せば。主に劣らぬ達者もの心安兵衞逸散にもと來し。道へ引返す。稻村陰より。詞旦那。申しお泊り迄參りませうか



い。申し旦那様どうぞ持たして下さりませ。今朝から一文も錢の顏を見ませぬ。地どうぞお慈悲と言ひかけられ。詞イヤ〳〵わしは今夜は夜越に行く。サ、そこがお慈悲でござりますと。地頼みかけられ是非なくも。詞サ、そんなら吉原迄何ぼぢや。エ、お前様も。わたしが頼んで持つのぢやもの。えい程に下さりませ。サそんならやらしやれ。年寄の止しにせいでの。そんなら持たして下さりますか。エ、忝いサアお出でなされませ。地ヤツト任せは聲ばかり。一肩往つては立留り。詞ヤ今日は結構な天氣ぢやなア。ヤツトまかせ。地二肩往つては息を繼ぎ。詞旦那申し向ふの立場に餡の名物がござります。ヤツトまかせと。岡崎杖する度に追從。深田に下りし。白鷺の。餌嘴みをするに異らず。見るに氣の毒。詞コレ親仁殿。ちつと持つてやりませうか。

ア、それ〳〵あぶない〳〵イエイエ。勿體ない〳〵。ア、氣の毒な足許。前から見て居るに氣しんどでならぬ。これは私が足の癖でござります。旦那の蔭で。今日も内入がよござります。モウ此方も幾つぢや。七十に手が屆いてござります。ア、ソレ〳〵。合點の行かぬ足取。お氣遣ひなされますな。若い時は小相撲の一番も取りましたヤツトまかせとなと。地いふ下道の爪先上り。木の根に躓きひよろ〳〵。詞ソレ見やしやれ。エ、苛い事をしたの。親指を蹴かいたか。ヨシ〳〵早速に癒してやろと。地用意の。ハズミ藥取出し。付けると其儘。詞何んと如何ぢや痛みは止ろが。コレハ結構なお藥でござります。痛みはとんと癒りました。サア〳〵お出でなされませ。イヤコレ〳〵荷はおれが持つてやる。ア、旦那様滅相な。イヤサ駄賃はやる。氣遣ひさしやんな。此方の足もと最前からあぶなうて〳〵。荷を持方がやつと氣樂な。咄しもつて行きませう。サア〳〵地ござれと先に立つ。三下り平作は千鳥足。しんどが利になる蒟蒻の。砂になるかと悲しさに。小腰屈めて。申し旦那。一肩やりませうかい。イヤ〳〵これで大分歩行よい。ア此方の足もと茶めいたものぢやの。其足取を狂言師に見せたいわいの。亂れ抔と言つて。傳授事になりさうな事。イヤ旦那のおつしやる通り。大概亂れかゝつてをりますわい。ハハヽヽ。ハヽヽヽと。地道の伽する笑ひ草。オクリ踏分けて。來る道草に。菊の折枝持ち添へて。地見合す顏は父様か。詞お米ぢやないか。今日は結構な旦那の供したので。荷は持たずにお世話になつた。お禮申してたも。コレハ〳〵有難い。もう爰がわたしが家。地暫くお休み遊ば

しませと。昔の殘る風俗も。尾羽打枯れし。松蔭に。伴ひ。オクリ入るや西日影。侘びたる中の二人住。門の柱に印の笠。地お掛けなさるりや庭一杯。いつそ座敷へマアお上りと。親仁が馳走娘の愛。前垂の藍薄くとも。マアお茶一つと差出す。こぼれかゝりしフシ藁屋葺。地折惡う湯も沸かず。水でなりと御み足を。詞ヲヽイヤ〳〵もう行きまする。扨娘御は好い器量。不躾ながら此内には。せゝなげに咲いた杜若。よい床へ生けたいなう。ハイどなたも左様におつしやります。自慢で作つて置きましたれど。近頃は手入が惡るさに。いかう田地が荒れました。何が身に構はず賃仕業。貧乏は。苦にもせず。それは〳〵孝行にしてくれます。それで私が年寄つての雲助も。せめて三文なと肩休めと。餘り彼女がいぢらしさでござります。コレ父様始めてのお方に。其様なさもしい話を。ホンニさうぢやハヽヽヽ。イヤお米。今日は大きな怪我を仕てな。コレ〳〵これ見よ。爪が起きてある。ア藥もあればあるものぢや。彼方様の藥きつい妙藥。ありや何と申す藥でござりますえ。此藥は大切ない物。第一金瘡には。其場で治る妙藥。武家方には尋ぬれども。金銀づくでは手に入らぬ妙藥と。地語れば娘は猶ほた〳〵。詞父樣の命の親。一日や二日で。お禮は言ひも盡されず。地ならう事なら今宵は爰にお逗留遊ばして。詞ア、娘何言ふぞいこんな家に泊めまして。肴は干鰯が一疋なし。虱より外あなたの身に付く物はない。イヤ〳〵不自由は仕付て居ります。娘御があの樣に。しなつこらしう言はしやるので。どうやら爰に根が生えた。大事なくばいつそ泊めて貰ふかいと。地目の鞘抜けし商人も。上手な娘の饗應にころりと。なれば。お枕と。油氣はない眞身の馳走。是も一樹の笠舍り。フシ尋ぬる軒の。地目印當に内に入り。詞旦那これにござりますか。サお立ちなされませんか。ホ安兵衞か。早かつた〳〵。其方は其荷物を持つて。吉原の鍵屋で宿を取りや。日和が知れぬ早う行きや。地雨具の用意は吉原の。鍵屋をさしてフシ急ぎ行く。地お米は立つて門の戸を。引立てんとする所へ。平作殿内にかと。ぬつと這入るは原の町の古道具屋。詞エイ市兵衞樣。御苦勞にようお出で。イヤ此方も商賣づく。昨日此方の言はしやるは。急な入用錢三貫。道具諸式を直にして取つてくれといふことなれど。代物見てからのことと。手附に三百進ぜて。殘りの錢持つて來た。駄賃出しては合はぬ仕事。直が出來たら此方樣が荷うて來て下さるか。時にと道具といふ

は。見え渡つた此通りか。コリヤ聞いたとはきつい相違のマア第一。放しにくいと言はしやつた故。見込に思うた佛壇が。コリヤ百が物はかない。デモマアちよつと置いて見よ。二つ土竈鍋釜かけて。百二十と入れい。古疊八疊で三百よ。鼠入りの膳棚百五十文。流盤は役に立たぬ。是十六文。破障子一枚十二文。緣の取れた角行燈八文。大略こんなもの。家ぐち毀つても壹貫がものはない。というて手附の三百は。飛んで了うてもうあるまい。御推量の通りでござります。せうことがない。此疊まくつて往なう。コレ若いの。そこ退いて貰ひましよと。地疊ばた／＼上げかける。詞申し／＼御尤もなれど。今夜の所を御了簡と。地親子が詫ぶる氣の毒より。ひよんな所へかゝり合ひ。詞コレ道具屋殿。わしは今夜泊つた客。これは難儀な所に泊り合した。とんと煤拂に茶屋へ往た樣な。どうで埃はかづかにやならぬ。手附はわしが返しましよ。疊は此儘置いて貰をと。地綺麗に捌く二朱一つ是は結構な旦那殿。ちと多けれど爰迄來た賃。序に疊も引直し。まん直しに平作殿貧乏神の居ぬ樣に。箒でお上。地槌で庭。薬の出ぬ前お暇と。躓き フシ廻つて立歸る。地親子一度に手を合せ。忝いとも面目ないとも。嬉しいと術ない涙がごつちやになつて。お禮の詞も出ませぬと。破れ疊に フシ喰付けば。詞ハテ今のは今夜の宿錢。高で知れた親子の世帶。家財を賣代なさうとは。よく／＼差詰つた。難儀な事があるのでごさんせう。いとしや苦勞さつしやるの親仁殿此娘御より外に。もう子供衆はないかいの。ハイ此お米が上に男の子が一人あつたれど。二つの年養子に遣りましたが。又其親の手を離れ。今は鎌倉の屋敷方へお出入。よい商人になつて居るとの噂。それ聞いてとんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。ハテ一旦人に遣つたれば捨てたも同然。我が子ながらも義理あるもの。今其悴が身上が好いとて。尋ねに往て箸片し貰うては。人間の道が濟みませぬ。今出逢うてもあかの他人。子といふは此娘一人ム、それも尤も其兄貴は今幾歳位ぢやの。ハイ斯うつと。丁度今年二十八。鎌倉八幡宮の氏地の生れ。母の名はとよと書付け。守り袋に入れて遣りました。其後此お米を産んで母も相果て。則ち今日が命日で。孝行な娘が水手向花の立方御覽じやつて下さりませと。地何心なき話の合紋。一々胸にこたゆる十兵衛。思ひ合せば覺えある扨は。生みの親父樣。血を分けた我が妹が貧苦の有樣。有合せた路用の金。なま中親子と名乘つては受けぬ氣質を何とがな。

金の遣りたい屈托に胸を。フシ痛めて。詞コレ親仁殿。何んと物は相談ぢやが。此娘をわしに下されぬか。エヽ奉公に上げますのか。イヤテヤ。まだ女房のない男。利發な娘御。商人の嗅には極上々の羽二重地。得心して下さるなら。仕拵へはこつちから。旅商人の事なれば。呼迎へる日限は。未だ何時とも定められぬ。嫁入の拵へ料。爰に少々持合す。これ置いて往にまする得心かいの。如何でごんす。コレよい女房。面目ないが最前から。わしや此方様に。地惚れたわいのと。フシしなつきかければ。地ついと退き。詞父様。あのお方もう往なして下さんせ。いかに貧しう暮して居るとてあたなめ過ぎた。阿呆らしいと。地打つて變りし フシ腹立顔。詞エヽ嗜め。よい女房と云はれるが。何のそれ程腹の立つ事。我が器量がよい故ぢやと。おりや嬉しい。イヤ申し貴方様。よう御深切に惚れさしやつて下さりました。じやが此お米は女房というてはやられぬ譯がござります。ムヽそんなら御亭主があるのか。これは〳〵。イヤ實は只今のはほんの座興。主のある人とも存ぜず麁相申した。眞平御免に預かりませう。コレ娘御。機嫌直して貰ひましよ。アノ痛み入つたお詞。ほんに思へば在所者を。おなぶりなさるを眞受にして。地お恥かしやと莞爾と笑ひに フシ心打解けて。地話しに紛れてずつぷりと。日の暮れてあるに氣が付かなんだ。詞三日月様が上つてござる。宵月夜で行燈はいらぬ。御燈明を伽にして辻堂の雨宿り。お客様も最うお休足延すと壁につかへる奥座敷。綏りとちぢかまつて御寢なりませ。私は此臺所コリヤ娘は其方に寢い旦那様はお堅いけれど。時のはずみでは主のある池へ踏込みなさりよも知れぬ。用心には網を張れぢや。今夜はおれが股引をはいて寢や。むさけれど彼方には。地わしが布子を裾になと。追風もてくる。鐘の聲 オクリ いとしん〳〵と フシ聞えける。地お米は一人物思ひ。心にかゝる夫の病氣。我が手で介抱する事も浮世の義理に隔てられ。秋の螢の消殘る。本フシ佛壇の灯もほそ〳〵と。地嵐にふつと フシ氣の付く娘。詞奇妙に治つた父様のあの疵。今でも敵の手がかりが知れてから。あの病氣では思ひも寄らず。ムヽと 地心で點頭き胸をすゑ。灯の消えたるは天の與へ。夫の爲と抜足 フシさし足探り寄り。地印籠取上げ立退く足。躓く音に目覺す十兵衞。思はず高聲。何者と。裾を捉へて引留むれば。わつと泣入る娘の聲。平作も悔りし。起上つても眞暗がり。お米。〳〵と言ひつゝ探す。フシ竈の埋火。地付木に

うつし顔見合せ。詞娘ぢやないか。旦那様か。何故に此有様。エヽ何の因果で此様な。情ない氣に成つたぞいやい。コリヤ此親は。其日暮しの者ぢやけれどな。人様の物一文半錢。盗もと思ふ氣は出さぬわいやい。エヽ親の顔迄。穢しをつたと。地わつとばかりに泣居たる。地十兵衛は氣の毒顔。詞金銀を取つたといふではなし。是には譯のありさうな事と。地問はれてお米は。フシ顔を上げ。詞恥かしながら聞いて下さりませ。様子あつて言交せし。夫の名は申されぬが。私故に騒動起り。其場へ立合ひ手疵を負ひ。一旦本復あつたれど。地此頃は頻りに痛み。いろ／＼介病盡せども効なく。立寄る方も旅の空。フシ此近所で御養生長しい間に路銀も盡き。長地其貢に身の廻り柄笄迄賣拂ひ。最前もお聞きの通り。悲しい銀の才覺も。男の病が。治したさ。地先程のお話に金銀づくではないとの噂。燈火の消えしより。アノ妙藥をどうがなと思ひ付きしが身の因果。どうぞお慈悲にこれ申し。今宵の事は此場切り。お年寄られしお前に迄苦勞をかけし不孝の罪。今日や死なうか翌日の夜は。我が身の瀬川に身を投げてと。思ひし事は幾度か。死んだ跡でもお前の歎きと。一日ぐらしに日を送るどうぞお慈悲に御了簡と。東育の張もぬけ。戀の意氣地に。身を砕く。心ぞ思ひやられたり。地歎きの端々つく／＼と聞取る十兵衛。詞コレ姉御。そんなら此方さんは。江戸の吉原で全盛の。松葉屋の瀬川殿ぢやの。ハイテモよう御存じ。すりや瀬川殿の夫の爲に。ムウ／＼と地心の目算。思案を極め。詞イヤ太夫殿。夫の手疵を治す藥。ほしいは尤も。それ聞いては進ぜたい物なれど是は人の預かり物。此事は思ひ切らつしやれ。今此方衆の話の通り。わしも亦恩を受けた。サ其恩を受けた人の爲に。いづれの寺でも苦しうないが石塔一つ寄進がしたいが。何と世話して下さるまいか。それは御奇特。結構な寄進でござります。何時なりともお世話致しませう。私も來年は嚊が年忌。勸むる功徳倶に成佛とやら。是非お世話致しまするでござります。どうぞ今度の下り迄違はぬ様に頼みます。兼ての願ひに。書付も此内に委しうござると。地金一包取出し。詞コレ必ず頼んだぞや。親子の衆最早夜明に間もなし。随分無事に親仁殿。地と立出づれば平作も。必ずお下り待ちまする。姉御さらばとばかりにて。心に一物。荷物は先へ道を フシ早めて急ぎ行く。地跡に親子は顔見合せ。金取上げてコレお米。詞随分大事にかけておきや。夜明迄は間もある。地和女も休みやと水いら

ず。見廻す傍に落ちたる印籠。詞ア、是は今の旦那のぢや。定めて尋ねてござるであろと。地いふにお米が手に取つて此印籠はどうやら覺えのある模樣。ハテ合點の行かぬ。それかこれかとよく／＼眺め。詞ホンニそれよこりや澤井股五郎が常々持ちし。覺えの印籠。地ハテ不思議なと平作も金取出しよく見れば。詞金子三十兩此書付は。鎌倉八幡宮の氏地の生れ。稚名は平三郎。母の名はお豊。コリヤコレ我が子に付けて置いた書付。そんなら今のお方は私が爲には兄樣。ヲ、我が子の平三であつたかいそんなら最前からの親切は。それとはいはず此金を。貢いでくれた石塔代。地不思議の緣と親と子は暫し。呆れて。フシ居たりしが。地お米は印籠手に取つて。裾端折つて駈出す。詞コリヤ待て娘コリヤどこへ。何處へとは父樣。此印籠を持つて居る。其兄樣は敵の手がかり。追つかけて股五郎が所在を尋ね志津馬樣へ尤もぢや／＼。が汝ではいかぬ年寄つたれども此平作。理を非に曲げて言はして見せう。汝も續いて跡から來い。どの樣な事があつてもな。必ず出るなよ。敵の所在聞くまでは大事の場所。木蔭に忍んで立聞きせい。必ずとも麁忽すな。合點か本海道は廻り道。三枚橋の濱傳ひ。勝手覺えし抜道をと。地子故に迷ふ三悪道。フシ轉けつまろびつ走り行く。地跡にお米は身拵へ。續いて出でんとする所へ。折柄來かゝる池添孫八。詞瀨川樣か孫八殿。よい所へごさんした。今夜爰に泊つた客で。敵の手筋が知れさうな。詮議の爲に吉原迄。父樣が行かしやんした。イヤ忝い。シテ其行先は。吉原迄はよも行くまい。地何かの樣子は道にて聞かんと。瀨川に續く池添も足に任せて 三重へ慕ひ行く。地實に人心さま／＼に。町人なれども十兵衞は。武士にも及ばぬ丈夫の魂。夜深に立ちし獨旅。フシ千本松にさしかゝる。地ヲ、イヲ、イと杖を力に息すた／＼。詞申し／＼旦那樣。ヤレ／＼お早い足もと。フウ今呼んだは此方か 惶しう何の用。イヤ。只今のお金を。戻しに參じました。石塔料と名を付けて。大枚の金子三拾兩。其日暮しの雲助に。下さるにも譯がある。又請けまするにも譯がある。けれども。此金を請けましては。さる人が立たぬ義理がござります。これをお返し申します代りに。貴方にお頼みがござります。お聞きなされて下さりますか。ハテ一夜さ泊るも何ぞの約束。樣子に因つて頼まれまいものでもないと。地夕闇の夜の聲しるべ跡より窺ふ池添瀨川。固唾を呑んで聞居たる。詞シテ其頼みの樣子は。ハイ仰しやつて下さりませ。此印籠の

主の所在を承りたうござります。これを尋ねて知りたいばかりに。さま／＼の流浪致す人。それ故娘も廓を出でて。憂き艱難。是が知れると本望成就。娘につれて私迄。モヽヽヽ此上の悦びはござりませぬ。二拾や三拾のはした錢で。露命をつなぐ私が。死ぬる迄安樂に暮される程の三拾兩。其金銀に代へてのお願ひ。七十に成つて雲助が。（マヽ）こに叶はぬ重荷を持つ。地それはまだ休みもする。子の可愛いといふ重荷は。寝た間も休まぬ 詞一生の苦痛を助ける。藥の名お前様も親御が有らば。子故には愚痴になるものぢやと。地思召しやられて。願ひを叶へて下さりませ。コレ申し旦那様と。血筋と義理と道分石。わけて血の緒の三界に。踏迷ふこそ道理なれ。地親の心を察しやり。詞ム、左様あらう。心底至極尤もぢやが。是ばかりはどうも言はれぬ。おれも頼まれた男づく。其方の人が大切なら。此方にも亦大切。縱へ又在所を聞いても。命がなうては本望は遂げられまい。其方の内に落して置いた。主のない印籠の。其妙藥で疵養生。達者に成つた其上では。望みの叶ふ時節も有らう。親仁殿。サア左様ぢやないかと。地心の掛籠一重明けぬ十兵衛が。フシ情の詞。詞サヽそれ程御慈悲のあるお方。とてものことなら其藥の持主。イヤサコレ悪い合點。此藥の持主は其病人とは大敵藥。三十兩の其金。敵の恩を受けまい爲。戻したではないかいの。此持主の名をいへば。敵の藥で疵本復。恩を請けてはまさかの時。鋒が鈍らうぞや。矢張拾うた藥にして心置なう養生さしたが。よささうに思はるゝと。地聞いて平作感じ入り。詞アヽさうぢやあつた。エヽお前様は恐ろしい發明なお人ぢやの。左様聞きましては。申様もござりませぬ左様ならもう歸りましよ。旦那様。おさらばと。地言つつ探つて十兵衛が。脇差拔取り腹へぐつと突立つる。ヤア／＼／＼何とした／＼。コリヤ自害か。何故に。地誰を恨んで勿體なやと。うろ／＼涙驚く娘。聲に手當てる池添が。泣音とゞむる轡蟲 スヱテ 草に喰付き泣くばかり。平作苦しき目を開き。詞俺や此方の手にかゝつて。死ぬるのぢやわいの／＼。ハテ。此方と俺とは敵同士。志津馬殿に縁のある此親仁を殺したれば。頼まれた此方の男は立つ。コレ／＼此上の情には。平作が未來の土産に。敵の所在を聞かして下されいの。外に聞く者は誰もない。今死ぬる者に遠慮はあるまい。地不思議に始めて遇うた人。如何した縁やら。我が子の様に思ふもの。何の此方にひけ取らす様な事此親が。詞サア此親仁が致しませうぞ。これが一生の

別れ。一生の頼み。聞かずに死んでは。迷ひますわいの〳〵コレ拜みます〳〵旦那殿と。地子故の闇も二道に。わけて命を塵芥須彌大海にも勝つたる。誠の親に始めて逢ひ。名のるもならぬ。浮世の義理。孝行の仕納め。詞何處に誰が聞いて居まいものでもなけれど。十兵衞が口からいふは。死んで行く此方樣へ餞別。今はの耳に能う聞かつしやれ。股五郎が落付く先は九州相良。道中筋は參州の。吉田で逢うたと。人の噂。エヽ忝い〳〵〳〵アレ聞いたかイヤ〳〵誰もない〳〵聞いたは此親仁一人。それで成佛しますわいの〳〵。地名僧智識の引導より。前生の我が子が介抱受け。思ひ殘す事はない。詞早う苦痛を留めて下され。地親子一世の逢初の。逢納め。詞親仁樣。兄。エヽ顏が見たい〳〵〳〵顏が見たいわいやい。南無阿彌陀佛。なむあみだ〳〵〳〵と地唱ふる十念十兵衞が。こたへ兼ねたる悲歎の涙。始終窺ふ池添が。小石拾うて白刄の金合はす火影は。親子の名殘跡に。見捨てて 三重へ別れ行く

第七 關所の段

地藤川の新關と人には言へど影の鄕一村籠る松蔭に茶屋の娘のお袖とて。長地年は二八の跡や先まだ內證は白歯の娘。雪氣厭はぬ寒空に。オクリ水の出花や煎じ茶の。佛をだしに參詣人。黑谷の御上人鎌倉へ下向の道。山中の法僧寺に今日で三日の御逗留。御符御札のお蔭にて。啞が物言ふ聾が治る。躄のお祖母が禮參り。フシ カヽリ御禮參りの三人が。フシ茶屋の床几に腰打掛け。詞何と太郎兵衞きつい人群集の。扨皆聞かしやれ。御符のお蔭で奇妙な事がござる。吉田の宿の搗栗屋といふ炭屋の子が疱瘡で目が潰れ。何が一人子の事故夫婦の衆が發心して。罪亡しに西國に出る所へ上人樣の御立寄。何が御符を戴くやら聞かしやれ。其夜から目が明きましたといの。それから吉田中がひつくりかへし。山中がお泊り故毎日の參詣人有難い事ではないか。ハテそりや其筈いの。炭屋の子なら黑谷樣に御緣がある。ハヽヽヽヤこちらも住んで緣のある。地啞が炊いた御符をば。戴きませうと打笑ひ我が家。フシ〳〵に歸りける。

地父の敎を守らざる 其罪科の降積る。本フシ雪氣の空も厭ひなく。地姿を窶す和田志津馬。敵の行方知れざれば空しく過ぐる光陰の。フシやたけに心關所前。詞コレ姉樣。最前より此茶店で。待合す體の人は見えなんだか。イエ〳〵左樣なお方は見受けませぬ。地然らば暫しと腰打ちかけ。詞姉樣此遠目鏡は往來の慰みか。イエ〳〵慰みではござりませぬ。わたし

が父様は。此關の下役人。若し切手なしに拔道を通る人があらうかと。吟味の爲の遠目鏡と。地聞いて志津馬が心の當惑。差當つたる切手の用意。ハテ如何がなと思案顔。お袖は一心志津馬が顔テモ好い男と思ひ初め。言ひたい事も。娘氣の口へ出兼る茶の花香。顔を眺めて汲む手もと。脇へ流すも氣もそゞろ茶碗ばかりを手に持つて。差出す心の思はくはフシ汲んで知れかし目遣ひも。地相手に藝氣があればこそ。詞是はきつい御馳走。餘り茶に福がある。然らば今一つ。とてもの事にほんまの茶を。いくつも〳〵呑みたいと。地思はぬお茶の捨詞。詞お前故なら何度でも。入端を上げたいと何と言寄る方もなく。顔は上氣の初紅葉男の生粹一森に。戀の出花と見えにけり。地志津馬も扨はと心付き。フシ我に心をかけしこそ幸ひ切手の手がかりと。

心で點頭きすり寄つて。詞コレお娘頼みたい事がある ハズミ何と聞いてくれる氣かと。地思うた壺へ和らかに。言ひかけられた返答の。詞に詰るが女子の情。何と返事の言様も。詞わたしもお前に頼みが。サどの様な事なりと。頼むとあれば引きはせぬ。エヽ忝い。わたしもお前故ならば。どの様なお頼みでも。フシ厭ひはせぬと寄添へば。詞それ聞いて落付いた何を隱さう我が身の上今夜中に此關を通らねば我が一命にかゝる事。こなたの覺えし拔道を。何卒教へて貰ひたい。死んでも忘れぬコレ頼むと。地色で仕かける我が身の大事ちつと締むれば締めかへし。恥しいやら嬉しいやら抱付いてはしめかはす。袖は人目の關の門。詞暮六つからは通路ならず。それ迄に私が働き。若し間違へばわたしがお供し立退かん。必ず氣遣ひ遊ばすなと。地思ひ合うたる

他生の緣。二人が望みは二道の。一筋道を。急ぎの道中 ハズミ狀箱刀に括り付け。地通りかゝればお袖は呼留め。詞お飛脚様お休みと 地いへば奴が立ちどまり。詞呼びかけられて姉様に。恥かゝしてよいものか。まだ八つには間もあるばい。一服せいと腰打掛け。詞ヤレ〳〵しんどや〳〵。申しお客様御免なされと地いへど志津馬も何氣なうお飛脚はどれからお立ち。イヤ下拙は鎌倉扇が谷の四つ辻切通し。夜前濱松泊り日が短くて漸う此處迄と。地聞くより志津馬は心當りだまして問はんと傍に寄り 詞扨々早い事。私共は何として〳〵。エ羨しい足もとと。地話を機會に茶の出端。一目見るより餘念なく。お袖が傍にぐにやとなり。詞コリヤ忝い。白歯娘のお初穗。一口飲ます氣はないか。地一目見るから戀茶と成つた。詞エヽ奴殿惡ちやり置かん

せ。ちやは〳〵とちやゝ入れまい。こちやずんど眞のこつちや。コレイノ〳〵。そつちや向くまいどうぢや〳〵。ア、さりとは貴公も顔に似合はぬやつし形。名は何と言ひます。身どもが名は助平。イヤもう飯よりも好物だてや。コレサ。お娘どう仕てくれる。エ、じやら〳〵と。そんな事より此樣な。面白い物見る氣はないかと 地目鏡の傍へ突やられ。助平は差覗き。ハアコリヤ フシ面白いと眺め入り。詞テモ大勢人が見ゆる。ハア向うに見えるは。ア、あれはおらが仲間の頭だ。コレ頭何ぞ用はないか。何ぢや金比羅樣の提灯も有る。ハア川が見える。何ぢや藤屋の二階で客が樂しみよる。ヨヨ。味い事〳〵。ハアあの女は見た樣な。それだ〳〵。ヤわりやおきのでないかと。地一目見るより氣相かへ。詞や汝は〳〵。ようもおれに退狀おこし其處に

樂んで居るな。コリヤヤイ言交はした事忘れはせまい。旦那へ願うて奉公引かし。女房に持つと思やこそ春からも一步やり三步やり四步遣り。女房ぢやと思やこそ。おらが切米打込んで遣つたぞよ。コリヤ其折おらに何と言つた。お前と夫婦になつて夜も晝も樂しもというたぢやないか。それに何だ。我が見る前で尾籠千萬。其男と抱かれて寢るか。よくもおらを欺したな。鎌倉で人も知つたる澤井殿の家來澤井助平 地もう了簡が成らぬわいと駈け出せしが 詞ハア〳〵。今のは何所だ。何だ何にも見えない。コリヤどうだと。地言ふにお袖がさし覗き。詞アリヤ吉田の茶屋の二階。爰から一里もある所。腹立ちなさるだけが損。もう了簡なされ。如何樣言へば一理ある遠方から悋氣するは聾に耳とらするに同じ。とは言ひながら殘念と。地又差覗き。フシ

現に成れば。地これ幸ひ扨は澤井の家來よなと。志津馬は邊に氣を付けて狀箱の封押切り。一通奪取り フシ元の如くに直すのも。知らぬ助平一心不亂。打眺め。詞エ、アレ口中を契りをる。こりやもう堪忍ならないと。地お袖が腰を力草。詞エ、放して下さんせ。何とこれが放されう。ハア〳〵と。地古木の如く鯱張り返り。横にどつさり朽木倒し。登り詰めたる奴凧。糸目の フシ切れし如くなり。地傍に落たる紙入の。中より出づる關所の切手。見るにお袖は飛立つ思ひ。嬉しいやら怖いやら結ぶの神の此切手と。志津馬に渡せば懷中し。詞我が身の難儀は遁れたが。かうして置かれぬ奴殿。コリヤ蟲腹か。癲癇病か。コレ顔へ其水吹きかけたと。地言ふにお袖は狼狽へて。沸返つたる茶釜の茶。天窓へさつぷり打ちかくれば。悔り氣の付く助平が。

邊り見廻し起上り。さも苦しげに聲顫はし。文彌詞ア、どなた樣か忝い生れ付いて悴めが蟲早く。時々おこる疱瘡子に。湯がか〻つて助かつたと。地話せば二人は顔見合せをかしさ　フシ隱すばかりなり。地時も違へず關所には。打つ拍子木に助平が。詞一つ二つと　地指折つて。詞ム、アリヤ七つの時がはり。大切の此狀箱一時も早くお屆申さん。地關所の切手と紙入の。内を搜せど。詞ハテめんような。南無三寶跡の茶店で落したか。地ドリヤ一走りと立出れど。水氣取られし河童奴。ふなら。〱と池水の。三ツユリ泥埃に逢うたる。如くにて　フシ元來し道へ引返す。地お袖は跡を見送りて。此間に早うと茶店の道具を門内へ運ぶ片手に顔眺め。見飽かぬ目鏡の戀男。志津馬は一心敵の手がかり。白齒娘が手を引いて オクリ岡崎へさして歸りける。地鎌倉の奥女中お里歸りの道中と。人目に見せる鋲乘物　フシ關所の前へ舁据ゑる。地家來お傍へ立寄つて。詞お關所で候へば暫くこれより御歩行と。地聞くと等しく戸を開き。旅姿に身を窶し兜頭巾に目ばかり出し。昨日に變る勢も淵瀬と澤井股五郎。邊り見廻し。詞コリヤ駕籠の者大儀であつた。これより早く歸つてたもれ。林左殿は何してござるな。あれへ御出でござります。お旦那にはお先へお通りなされませ。ヲ、木にも萱にも心置くは世話人の志無足にせぬ我心底。たとへ我を付狙へばとて何程の事あらん。見付け次第に返討。わいらもちつとも氣遣ひすなと。地家來　フシ引連れ打通る。地此海道を住家とする蛇の目の眼八。人喰馬に櫻田が。手に入り顔に先に立ち。詞コリヤ蛇の目。今話した事男と見込んで頼むぞよ。何であらうと見付け次第に合點かヱ、親方氣遣ひさあんな。此蛇の目が魅入れたら一寸も動かしやせぬ。ハテサテ氣味のよいやつと。地紙入より取出し。金子千疋手に渡し。詞當座の褒美納めて置けさ。ヱ、忝い。馬士に千疋とは。仕合せよしの此蛇の目。何であらうと見付けたら。皆撫にする一鍔と。地祝ふ幸先木左衞門。晩の泊りで何かの事。隙し合さんサア來いと。フシ門内さして入相の。地鐘諸共に關の門閂はつしとしむる音。宙をかけつて政右衞門。關所の前に立寄れば門戸かためて出入もならす。詞暮時で分らねど。うしろ姿は林左衞門に違ひなし。スリヤ股五郎を同道には極つた。ヱ、付込んだ敵を取逃せしか口惜しやと。地齒噛をなして身を悶え門内白眼付け　スヱテ無念涙にくれ居たる。詞ヲ、それよ。志津馬と爰で出合ふ約束但し先へ入込んだか何にもせよ出合ふ所は

一筋道。今夜中に此關越えねば。最早敵は手に入らぬと。地行きつ戻りつ思案を極め。兼て聞居る抜道は慥に竹の林の中。押分け行けば山傳ひ。探り廻りし眞暗がり。うろ〳〵眼に助平がこれも窺ふ抜道を。すかし見れば雲突く様な大男。悔り驚き身を忍ぶ。探り當りし政右衞門。竹藪押分け。忍び行く。地とつくと見屆け助平が。狀箱腰にくゝり付け。味い〳〵と抜道の跡を慕うて ヘ急ぎ行く。地不敵なるかな政右衞門天に一命擲つて。目ざすもしらぬ眞の闇。降り來る雪の道踏分け。裏道づたひ一丁ばかり行くよと見えしが。關所の内に聲高く。詞忍びの鳴子の音するは。裏道を越える曲者ありと。呼ばはれば。地それ遁すなと捕人の人數。兼て用意の高提燈。人數を配つて取卷きしは危かりける。ヘ次第なり。地政右衞門は事ともせず三角に眼を睜き。詞山を食する猿松め皮引つぱいでくれんずと地段平引抜き待ちかけたり。それ遁すなと組子ども。一度にかゝる四方詰。イヤ小癪なと振りほどき付入る所を宙にて切取り飛びくる熊手を受け流し。切立て〳〵切立つれば。詞には似ぬ組子ども。跡をも見ずして フシ逃げちつたり 地逃ぐるを追はず政右衞門。道の案内は此提燈と。勝手覺えし杣道の足跡 フシしるべに慕ひ行く。跡におくれて助平は。道の勝手は方角知らず。フシうろつく折柄 地取つて返す組子どもそれと言ふにも及ばゝこそ高手小手に括り付け狼狽奴と夢にも知らず。組子の頭大音上げ。詞強敵の曲者を。組子仲間へ生捕つたりと 地引立て。てこそ 三重ヘ急ぎ行く

第八　岡崎の段

地世の中の フシ苦は色かゆる。松風の音も淋しき。冬空や。霰交りに。ハズミ降り積る。軒もまばらの離れ家へ。岡崎の宿はづれ。百姓ながら一理宿主は山田幸兵衞と人も心を奥口の。障子隔てて女房が績ぐ車の夜職歌。歌いとし殿御を三河の澤よ。戀の棧。文杜若。更けて忍ばゝ。夜は八つ橋の。水も洩さぬ手枕鄙も。都も小娘の。誰教へねど戀草を見初め惚初め打付て 長地雪の夜道の氣散じは互に手先折添ふる傘の志津馬に纏れ合ふ。じやらくら話何時の間に戻るお袖が。我が家の戸口。詞ヲヽ、辛氣。いつもは遠う覺えたに。意地惡う今夜の早さ。まだ話が殘つてある。跡へ戻つて下さんせぬか。さりとてはわけもない。日は暮れる草臥足。跡へも前へも雪の段。鉢の木の焚火より。地暖なそもじの肌で暖めて貰ふが御馳走早うお宿を御無心と。じやれた詞に

どういうて。よいか悪いか白歯の娘。聟聞付けて誰ぢや〳〵。詞アイ〳〵母様わたしぢやわいな。ヲ、お袖としたことが。此寒いのに何して居やる。戻りが遅さに待兼ねた。早う這入りやと　地母親の。詞を機會に内へ入り　詞疾う歸らうと思うたけれど道連のお方があつて。それで思はず夜に入りました。ム、道連のお方とは。アイ行暮らした旅のお方それは〳〵きつい御難儀。今宵一夜は此方の内に泊めて上げて下さんせ。申し苦しうござりませぬ此方へお這入り遊ばせと。地呼ばれて志津馬は怯々と。小腰屈めて御赦されませ。詞獨旅の浪人者。日は暮れる足は損ふ詮方盡きて此お頼み。近頃わりない事ながら。一夜のお宿を御無心と。地言ふも心に荷物の葛籠。お袖見るより申し母様　詞父様の旅葛籠彼處に戻つてあるからは。ヲ、親父殿も今日暮前歸らしやつた旅草臥で寢ておぢやわいの。エ、遅うても大事ないに早い事やと其跡は。言はぬ色目を見て取る母。詞日頃から二親がちよつと出ても戻りを案じる孝行な其方。どうやら不興な顔持は堅い父御の氣質故折角お宿を借りませうとお供しやつた道連様へ。約束が違ふかと案じ過ぎてのことであらう。たとへ父御は得心でも。此母が不得心何故と言や。今でこそ茶店の娘。去年迄は鎌倉のお屋敷方へ腰元奉公。御主人様のお差圖で。さる武家方へ末々は緣に付けうと堅い約束其許嫁の夫を嫌ひ無理暇貰うて親の内へ戻つて間も無うみだらがあつては。以前のお主ばかりぢやない。顔は知らねど約束した婿殿へ。何の顔さげて言譯せう。サア斯くいふは言ふものゝ其方に限り。左様した事はあるまいけれど。時分の來た若い娘のある内へ若い男。一夜は愚か半時でも。ひとつ所に寢臥せば戸は立てられぬ人の口。其上良人幸兵衛殿。國守よりのお目がねにて。新關の下役を勤めさつしやる今の身分。常の百姓とは違うて。物事を正しうするも役柄故。必ず悪う聞かやんなやと。言はれて何と返事さへ。お袖が意見の相伴に。志津馬も手持投首を。　フシカヽリ見る氣の毒さ母親も。さのみは如何と何氣なう。詞此様に意見するも轉ばぬ先の杖とやら。イヤ申し御浪人様。お心にさへられて下さりますな。泊めます事はならずとも　地せめてお茶なと入端を。一つ上げうと尻輕に　フシ勝手へ行く間待兼ねて。娘はおづ〳〵志津馬が傍。詞誰も來ぬ間に言殘した。話の殘りを納戸でと。地取る手をすげなく振放し。詞見る影もない旅の者に。關所での情といひ。道すがらあた嬉しい。詞を誠と思ひの外。許嫁があるからは。主あ

る花に落花狼藉。密夫なぞと重ねて置いて。モウ四つに。間もあるまい。夜の更けぬ中宿取つて。寢て 地花やろと立上る。袂に縋りコレ申し。詞あつて過ぎたる緣定め。今更とやかう母樣の。今の詞がお心にさはつて私へ當言を。無理とはさら〳〵。フシ思はねど。地恥かしながら今日迄も。殿御に惚れたといふ事は知らぬあどない不束な。在所育ちの此身でも結ぶの神の御利生で。お顏見るから思ひ初め。詞どうぞ女夫に。地なりたいと胸はしがらむ白川の關は越えても越えかぬる戀の峠の新枕。かはさぬ中に胴慾な。つれない事をいふ手間で。つい可愛いと一口に。言はれぬかいなとすがり寄り。しども。涙のかこち言。岩木ならねば流石にも。振捨てがたき戀の罠。かゝる折から門口へいきせき來かゝる フシ蛇の目の眼八。地お袖は目早く一間の

内。無理に志津馬を忍ばせて何氣ない顏。入口から差覗いて。詞ヤ味いぞ〳〵。毛蟲の親父や母者は居ず。お娘一人は無い圖な首尾と 地這入るや否や後から帶際ほうと引だかへ。詞常から目顏で知らしてもぴんしやん〳〵はね廻る。馬よりおれが太鼓のぶち。立場で驛驛見付けた樣に。さんばい仕兼ねて居るわいの。否應なしにちよこ〳〵と孳でおくれと。フシしなだるれば。詞エヽ穢ないうるさい嫉らしいと。地突付けられても押强く。詞誰でも初手はいや〳〵と口では言ふが。がさ汁と色事は。味覺えてから止められる物ぢやないて。それとも否ならおれも意地ぢや。今夜藤川の關所を破つて。忍び道を通つた奴。召捕ようと岡崎中は上を下へと詮議のどう中。胡散なやつとの相合傘。ちらりとつないだ此眼八。灰汁で洗うた蛇の目が詮議。ほえ頰

かゝしてこまさうと。地かけ入る向うへ立塞がる。お袖を突退け立切りし。障子引明け見て悔り。コリヤ違うたと狼狽眼。かけ出す蛇の目が利腕捻上げ。立出る主の幸兵衛。詞百姓なれど新關の下役をも相勤むる身どもが居間へ。泥脚を切込む狼藉やつ了簡ならぬ所なれど。所存ある故赦してくれる。此以後きつと嗜みをらうと。地投付けらるゝと思ひの外。突放したる手强さに底氣味惡くうぢ〳〵もぢ〳〵見るにお袖が嬉しさと。いとしい人の納りを心一つにとやかくと案じ彌增す思ひなり。地弱みを見せぬ惡者根性。お家にべつたり上股打ち。詞役目役目と云ひはるが。其大切な關所を拔けた。科人を吟味する最中に。爰の娘が連れて戻つた旅の侍。引込んで置きながら。詮議する此眼八。何故しめ上げて手ごめにしたのぢや。ムヽ娘が連立ち歸つ

たとは。其侍は何處に居る。ヤア慥さつきに爰の內へ。默りをらう。お袖にうつぼれ最前より法外の有り條。承引せぬ故無法の當推。よし又其侍とやら此內へ來たにもせよさ。鎌倉通行の東海道。數限りなき旅人の往來。これぞと言ふべき證據もなく。侍とさへいへば。悉く引捕へ鬪破りと言ふべきか。勿論汝は當所の馬追。誰が許しての詮議呼ばはり。長居ひろがば括し上げ。御地頭へ引立てうか。何と〳〵ときめ付けられ。ア、申し〳〵お氣の短い。商賣が馬方だけ。詞豆から發つたいさこざで。親仁様の寢所まで。地踏馬御免とへらずロ。ハズミ跡をも見ずして フシ逃げ歸れば。地跡見送つて落付く娘。忍ぶ志津馬も一間を立出で。詞覺えなき身に鬪破りと。今の危難を免れしは。御亭主の御厚志故。忝しと スヱテ手をつかへ禮の詞にヤこれは〳〵痛み入る。詞先づ〳〵お手を上げられいサ、平に〳〵。承れば御浪人とな定めて仕官のお望みで上方へござるのかい。イヤ〳〵樣子あつて世を忍ぶ獨旅。則ち當所岡崎にて。山田幸兵衞殿方へ密に參る浪人者と地聞いて不審の眉に皺。詞其山田幸兵衞とは身どもが事。シテ其許は何方から。ム、スリヤ貴殿が幸兵衞殿とな。拙者は鎌倉の昵近武士澤井城五郎殿に緣ある者。地委細はこれにと藤川にて。手に入る一通手に渡せば。封押切つて老眼に。つぶ〳〵讀むもロの內。樣子知らねば氣遣ふお袖。幸兵衞とく〳〵讀終り。ム、某が性根を見込み。和田行家を討つて立退く澤井股五郎が力となつてくれよとある。お賴みの書面の趣。先達て鎌倉の樣子承りし砌より。待ちに待つたる此お賴み慥に承知仕つた。遠途の所御大儀〳〵。此使を勤めらるゝ其許は。城五郎殿の御家來かと。地尋ぬる詞は敵の手筋これ幸ひと氣色を正し。詞ハア幸兵衞殿の御懇切。承る上からは何をか隱さん某こそ。刀の遺恨止む事を得ず和田行家を手にかけし。澤井股五郎と申す者さ。ア御自分が股五郎殿か。いかにも左樣。鎌倉出立致せし折は。澤井殿より附人も數多あれども。人目立も如何と存じ。別れ別れに罷り上る。城五郎殿には前以て御懇意の幸兵衞殿。何とぞ御助力下さらば。此上もなき拙者が悅び。ム、さすれば貴殿が股五郎殿か。これは〳〵存じ寄らぬ。是迄互に御意得ねば双方共に知らぬ同士コリヤ〳〵娘許嫁の婿殿ぢやわやい。エ、そんなら私が鎌倉へ御奉公の其中に。ヲ、サ城五郎殿のお勸め故。其方を遣はさうと面談には及ばねど。約束致した花婿殿。能うこそ尋ねて下されたと。地悅ぶ聲の洩れ聞え。母も立出でヤレ

〳〵思ひがけない。此方様が聟殿であつたかいなう。したが氣には支へて下されな。許嫁はありながら。股五郎と言ふ名を嫌うて。今迄娘が不得心。それ故疎遠に打過ぎました。が聞いたと違うてヲヽ好い男。此様な婿殿でも。其方はやつぱり否かいなう。ヲヽ勿體ない事言はしやんす。許嫁の殿御ぢやと。今の今まで知らいでさへ。添ひたうてならぬもの。緣は切つてもお主のお差圖。父様や母様のお許しの出た股五郎様わたしが何の嫌ひましよ。二世も三世も替らぬ夫。もう〳〵これから何方へも。やります事ぢやござんせぬ。何時までも爰に居て。可愛がつて下さんせと。心に思ふありたけは言はで思ひを押包むお袖が。嬉しさ兩親も共に フシほた〳〵悦び顔。地思ひがけなき許嫁の。聟に志津馬は成程成程。詞上杉に仕官の中。城五郎殿お差圖にて。顔はしらねど許嫁のお袖殿であつたよな。一方ならぬ股五郎が一世の大事に及ぶ時節。御匿ひ下さらば。生々世々の御厚恩と 地わざと其身を謙り。フシ 詞を盡し頼むにぞ。詞イヤモ何がさて〳〵狩人すら。懐に逃入る鳥は助くる習ひ。況して婿殿違背はない。年こそ寄つたれ幸兵衛が。命にかけてかくまふからは。志津馬づれが付狙ふとも何程の事かあらん。さりながら爰は端近。幸ひ奥に別家もあれば。心置きなく打寛いで。ソレ女房娘稀の珍客何はなくと盃の用意をしやれ。アイヤ〳〵其お心遣ひ却て迷惑。ハテ婿殿の他人がましい舅入やら婿入やら祝言もごつちや煎の在所料理。みしり肴の舟盛より外に馳走は。手入らずの娘のお袖が初物一種で。ホヽヽヽヽハハヽヽいか様祖母の言やる通り。敵持の婿殿に七十五日生延びるとは。これも吉左右目出たい〳〵。ドレ〳〵案内致さうと。地おどけまじりに先に立つ。親の手前を恥らひて赤らむ顔の色直し解けて。見せても下心。許さぬ志津馬が肌刀。胸に寐刃を。相の間の オクリ襖へ引立て入りにける。地既に其夜もしん〳〵と フシ遠山寺に。告渡る。早や九つのかねてより。内の案内は知つたる眼八。裏から忍んで納戸口。思はず躓く明がらの。駄荷の葛籠を幸ひとあたふた押明け忍び込み。鼻息もせず窺ひ居る。かくとは人も白雪の。道も厭はぬ政右衛門。心も闕の忍び道 オクリ遁れて急ぐ跡よりも。數多の捕人が見え隠れ。慕ふ足跡氣轉の唐木。兩腰そつと道端の雪掻集め押隠す。 フシ隙もあらせずばら〳〵〳〵。腕を廻せと追取巻く。詞ヤア仔細もいはず理不盡に。繩かゝるべき覺えはないと。言はせも果てず双方より。捕つたと

かゝるを引つぱづし苦もなく首筋一摑み。一振ふつて右左。弱腰蹴すゑて狗投。隙間を得たりと二番手が腕がらみを振りほどき。ほぐれを取つて眞逆樣。地頭轉胴骨雪道にハズミ打ちつけられてかなはじと。入替つたる三番手。詞打込む十手かい潜り脾腹を丁ど眞の當。地激しき手練にさしもの組子。左右なくも寄付かずフシ跡じさり。するばかりなり。地見兼ねてかけ寄る捕手の小頭。詞ヤア上意によつて向ひし我々。手向ひなすは關破りの。浪人者に相違はない。腕を廻せと詰めかくれば。ヤレ麁忽なりお役人急用あつて此ごとく夜道を急ぐ旅の者。丸腰の某を。關所破りし浪人とは。身に取つて覺えぬ難題。外を御詮議なされよとちつとも恐れぬ。地フシ丈夫の振舞。地始終を見屆け幸兵衛は戸口を駈出で押隔て。詞憚りながらお役人へ申上ぐる。關所破りの御詮議半ば。深夜に一人歩行の旅人。御疑ひは御尤も。併し此者は鎌倉飛脚。仔細あつて此幸兵衛能く存じ罷有れば。慮外の段は御容赦あり。無難にお通し下さらばありがたき仕合せと。地かばふ詞に政右衛門。詞ムウさ言ふ此方は何人といふを打消しイヤサコリヤ。身に覺えないにもせよ。お役人に慮外の手向ひ。アヽ不屆至極と叱り付け。しづ〳〵と歩み寄り。倒れ伏したる組子ども。引起して死活のいけ。詞いづれもお心悟にござるか。お役目御苦勞千萬と。地苦い挨拶氣の付く捕人。地幸兵衛猶も威儀を正し。詞承れば關所を破りし科人は帶刀の浪人者彼は町人此丸腰。憚りながら人違へ。斯やうな儀に隙取る中。かの曲者を取逃さば。詮なき事。早々お手當なされよと。地言はれて實にもと捕人の小頭。詞ムウ其方が存ぜしと申す詞に相違もあるまい。これよりは山手へかゝり。かの曲者を詮議せん家來地參れと引連れて。元來し道へ引返す。地影見送つて政右衛門。詞ハヽア危き場所を遁れしも全く貴公の御厚志故。がお禮は重ねて心もせけば失禮ながらお暇申すと。地立上るを暫しと止め。詞昨今なれど折入つてお尋ね申す仔細もあれば。地見苦しけれど拙者が宅へ暫時ながらと老人の。詞に是非なく政右衛門然らば。フシ御免と打通れば門の戸引立て主の幸兵衛。傍近く差寄つて。詞多勢を相手に今の働き感心の餘り役人を欺き歸し。難儀を救ふは身どもが寸志。それに付けても訝しきは貴殿の柔術。地正しく拙者が流儀に同じき神影の極意。手練せられし旅人はと訝る色目。こなたも不審。詞神影流の極意なりと。見極められし御老人。地ハテ心憎しと双方が。ためつすがめつ見合す顔。詞

ム、お別れ申して十年餘り。相好は變られしが。生國勢州山田にて。武術の御指南下されし。要樣ではござりませぬか。ヲヽ其詞で思ひ出した。我勢州に在りし節幼少より育て上げし庄太郎で有らうがな。成程々々。然らばあなたが。其方が。これは 地〳〵と手を打つて。盡きぬ師弟の遠州行燈へ掻立て〳〵打眺め。詞ヲヲ稚顔に見覺えある庄太郎に相違ない。ハテ健かに生立ちしな。ハア先生にも御健勝で。ヲヽサ。〳〵無事の對面互に滿足。さりながら。アヽ思ひ廻せば過行く月日。其方は山田の神職荒木田宮內が悴なれども。幼少の砌父母に離れ孤兒となる不便さに。手鹽にかけて育つる所。稚立より武藝を好むは。末頼もしく思ふより。地門弟どもへ稽古の序。一手二手と敎ゆる中。一を聞いて十を知る頓智といひ器量といひ。十五以下にて鎗術劒術。鎖鎌。體術。柔術に至る迄。諸歷々の弟子を追拔き。神影の奧義を極むる無双の達人。何卒大家へ仕官致させ。親の氏をも繼がせんと。心頼みに思ふ中。未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年。地便なければ折に觸れ。此庄太郎は如何なりしと。雨につけ。風につけ。思ひ出さぬ事もなく。地夫婦打寄り其方が噂。詞シテ只今の住所は何國。有付とてもあらざるかと師匠の慈愛に政右衞門。思はずはつと手をつかへ。詞親にも勝る大恩。師匠を見限り家出せしと。御疑ひはさる事なれど。常々武術の御講釋。小耳に覺ゆる其中に。一派に心を凝さんより。諸流に渡り修行をなすこそ。此道の心がけと御敎訓。地心魂にしみ渡り十五歲にて國を出で。普く諸國を遍歷し。詞武術を磨く武者修行。天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど。生れ付いたる好色者。亂酒に主人の機嫌を損じ。只今はもとの浪人。便るべき方もなければ。若し上方に有付もやと。志して參る所。地思ひがけなく先生に面目もなき對面と。スヱテうかつにそれと身の上を。言はぬ底意は白髮の母。樣子聞いてや一間を立出で。詞ヲヲ庄太郎かテモ成人仕やつたの。連合の眼識に違はぬ武藝の上達。器量を見込んで頼みたい 地仔細があると聲をひそめ。詞其方の家出した時は。三つ子のアノお袖。もう十七に成るわいの。緣あつて許嫁の其婿殿を。親の敵と付狙ふ者がある故。まさかの時の後楯。力に成つて下さらば。餘の人千人萬人にも勝つて嬉しう思ひます。詞ヲヽいかにも〳〵。庄太郎と知らぬ先。難儀を見衆ね救ひしも。其儀を頼まん下心と。師匠の詞聞きもあへず政右衞門摺寄つて。詞ムウ其付狙ふ敵の假名は。ヲヽ婿といふは上杉の

家來。澤井股五郎といふ侍。付狙ふは和田志津馬と。聞いたばかり面體は知らねども。高で知れたる若輩者。幸兵衛が片腕にも足らぬ相手。が爰に一つの難儀といふは。彼奴が姉婿唐木政右衛門といふ奴。音に聞えし武術の達人。たとへ五十人百人加勢あるとて。政右衛門には及ばぬ〳〵。まだしも唐木に立合はんは。其方ならで外にはない。何とぞ婿に力を添へ。助太刀頼む庄太郎と。地餘儀なき頼みに政右衛門。先生に內緣ある股五郎殿に力を添へれば少しは師恩を報ずる理。いかにも助太刀仕らう。サヽ此上は澤井殿の隱れ家へ御案內と。地せき立つ唐木忍びの眼八。蓋押明けて差覗く影をちらりと見付ける幸兵衛。心付かねば。詞ヤレ〳〵嬉しや。庄太郎の今の詞聞いたからは千人力。地ドレ婿殿へと立上るを。詞ハテ扱いらざる女の差出。股五郎殿の行方は知らぬナハテ。壁に耳ある世の諺。それと慥に知らねども。言聞かすには折があらう。がうかつにそれと明かされぬ。地話の蓋は取らぬが秘密と何處やら一物。歩行の小助。門の戸叩いて。申し申し。庄屋殿から急な御用。只今御出と 地とんきよ聲。ハア 詞また關破りの詮議であらう。いやといはれぬ 地役目の不祥と。言ひつゝ羽織引つかけて。嗜む大太刀差しこなす。腰もかゞみし海老錠を葛籠にしつかと。詞コリヤ女房今も言つた話の蓋。戻つて來る迄明けぬ樣。心におろした此錠前。地ナ合點かと詞の謎。聞く女房も解けやらぬ。雪道いとはぬ高足駄。さす傘の骨組も人に勝れし岩丈作り。歩行を先に幸兵衛は オクリ心を。ヘ殘して出でて行く。詞戻らしやるまで寢られもせまい。糸績ぎながら話しませう。ハア今に御上根な事。マア火にお當りなされませ。私もこれから下男同然に。お遣ひなされて下さりませ。何のいの此方樣は大事のお客。マア煙草喫んでゆるりつと。寢轉んだがよいわいの。イエ〳〵勿體ない師匠の內。ホンニ此煙草は何處から參つた。ソリヤ親父殿が旅戻りに貰うてござつた上方煙草。ハアあなたのお口に合ふのなら服部か國分か。此天氣にかうして置いたら濕りましよ。留守事に刻んで見ませう。地幸ひ爰に切臺庖丁。底に劍の刄摘へ敵を聞出す煙草の小口。オクリ葉卷。手早くきり〳〵と。大の體を小廻りの。奉公振も フシあはれなり。地外は音せで降る雪に。タヽキ無慚や肌も郡山の。國に殘りし女房の。思ひの種の生れ子を抱いてはる〳〵 オクリ海山を。たどり〳〵て岡崎の。宿より先に日は暮れて。ナホス何處を フシ宿と。定めなく。がはと轉ればわつと泣く。子を

すかす手も。冷え凍る。雪の蒲團に添乳の枕。いんのこ〳〵に友誘ふ　フシ犬の聲々。地夜廻りの番が見付ける小提燈。ヤイ〳〵軒下に何で寝るのぢやきりきり往けと叱られて。ハイ〳〵〳〵。私は秩父坂東廻る順禮。癪でお腹を痛めまする。ちつとの間置かしやつて。順禮でも幽靈でも在の中に寝さす事はならぬならぬ。意地ばるは猜胡散者。地棒いたゞくなと提燈突付け。見る棲外れの尋常さ。白眼んだ眼うつかりと。細目に明くる戸の隙間。内から覗く夫婦の緣。思ひがけなき女房お谷。ハツと恟り差合せ。包む我が名の顯れ口。悪い所へ切りかけた煙草の双金。胸を　フシ刻むと人知らず。詞フウ見た所が。小盗する風俗とも見えぬ。此雪に乳呑子抱へて難儀ぢやあろ。何所ぞ後生氣な所を頼んで。泊めて貰はしやれ。エヽ見れば見る程頃合な好

い女房。一人寝さすは殘念なれど。此方も寒氣に閉ぢられ。地瘦畑の鬼灯であつたら物を見逃す事と。玄さ　フシ歸るも頼みなき。地人の詞もせめての頼み。火影を力戸口に這寄り。詞幼い者を連れた順禮でござります。お情に今宵一夜さ。地お庭の端にとばかりにて癪に。フシ苦しむ息切の。地聲に主は涙もろく。詞いとしや癪持さうな。門中に寝てはたまるまい。地泊めてしんじよと立つて行く。南無三寳と裾引留め。詞アヽこれは又御麁相千萬。此お觸の嚴しい中。殊にお役柄の此内。何處の者やら知れもせぬに。滅多に引入れ。後の難はどうなさるゝ。急度止しになされませ。夜中に一人歩行く女子。碌な者ぢやござりませぬ。戸を明けずとぼい往したがよござります。いか樣なう。親父殿の留守の中は用心が肝心。コレ〳〵旅人。いとしけれ

ど一人旅を泊るは御法度。御城下の中は軒下にも寝る事はならぬ程に。宿はづれの森の中へ　地往て寝やしやれと和らかに。言うて　フシ引出す糸車。歌來いと言うたとて行かれる道か道は四十五里波の上。詞ハア何處へ往ても一人旅は泊てくれう樣もなし。はる〴〵の海山も。此子の顔を旦那殿に見せたいと思ふ精力で。産落すから此巳之助。漸う忌も明くや明かず。國を立つてついに一夜さ。家の下で寝た事がなけれや。身はならはしと山寺の。鐘がなれば寝る事にして。星の光を燈火と。思うて寝入れど今夜の暗さ。氷の樣な此肌で。寝苦しいは道理ぢやわいの。殊更癪で乳は張らず。雪に凍え雨に打たるゝ。つらさは骨に徹ゆれども。旦那殿や弟が。敵を尋ねる辛抱は。まだ〳〵〳〵こんな事ではあるまいに。其艱難にくらべては。雪は愚か劍の上に

も。寢るのがせめて女房の役。氣は張詰めても此癪の。重るにつけては二人の身に。勞れの病が起りはせぬか。萬一悲しい便やなど聞いたら。何とせうぞいなう。賴み上ぐるは觀音樣。弟夫の武運長久。我が子の命息災延命。未練な事ぢやが私も。此子を夫に渡すまでは生きて居たい。死にともないと。地傍に夫のあるぞとも。知らぬ不便さ喰ひしばる。喉に熱湯内外に水火の責苦。雪霙。子を濡らさじと抱きしめ〳〵。天道哀れ白雪の積り重なる旅勞れ。癪と寒氣にとぢられてアッと一聲氣を失ひ。どうど倒れし物音は。肝にこたへて南無阿彌陀。南無阿彌陀佛も口の内 地今の は何ぞ と主の母。戸を引明くればばつたりと。身は濡鷺の目はどみたり。詞こりや眩暈が來たのぢやわいの。エヽいぢらしや如何せうぞ。夫れよ幸ひ此氣付と。地とつかは文庫に用意の薬。詞ア、申しそりや御無用になされませ。なぜにいの。こりや親父殿の道中で。持たしやつた結構な氣付。サア其結構な氣付を。非人同然の者に呑まして。それでも氣の付かぬ時は。かゝり合に成りますぞえ。此儘にして放り出して。お仕舞ひなされませ。ぢやというてどう見捨になるもの。アレ可愛や乳を捜して泣くわいの。せめて此子を殺さぬ様に。奥の炬燵で温めて遣りませう。地風



に當てじと寢衣の襦袢。あかの他人は慈悲深く。比翼とかはす女房を慘う引出し　フシ戸を。引立て。地奥口見廻しさし足し。勝手は見置く釜の前。附木の明り見咎めて。人は何とかいひ柴を。そつと隠して門の口。伏したる妻の氣を付くる柴の　フシ焚火の。あたゝまり。地嚙みしめる齒を押割つて。雪に濕す氣付の一滴。耳に口寄せ聲かすめ。お谷といふも憚りて。心の内で呼び生ける。夫の誠通じてや。うんと一聲氣が付いたか。コリヤ女房。ハア、マア〳〵。政右衞門殿かいのと。いふを押へて。コリヤ何にもいふな。敵の在所手がかり取付いたぞ。此屋の内へ身どもが本名氣振でも知らされぬ大事の所。其方が居ては大望の妨。苦しくとも堪へて一丁南の辻堂まで。這うてなりとも行てくれい。吉左右を知らすまで氣をしつかりと張詰めて必ず死ぬるな。サア早う行け〳〵と。地夫の詞は千人力。詞觀音樣の御引合せ。お前に逢うたは人參熊膽。エ、忝い〳〵が。坊は何處へ氣遣ひすな。坊主は奥で寢さして置いた。ソレ〳〵向うへ來る提燈。見付けられな早う。〳〵とせり立つれど。地此年月の悲しさと嬉しさこうじて足立たず。杖を力に立兼ぬる。とやせん側に脱捨し。薦に積りし雪の儘　オクリ着せて人目を暗き夜を。地ほか〳〵戻る達者親父。詞ヲ、お歸りなされましたか。ヲ、庄太郎寒いに門に何して居る。イヤお歸りが遅い故。お迎ひに出かける所。ナンノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴の燃えさし。非人どもが業であろ。地不用心なと見廻す提燈。イヤ私がと取る拍子。地態とばつたり。詞コリヤ麁相。だんないない〳〵。きつい風ですでに道で取られうとした。まだも好い所で火が消えたと地言ふもこたへる疵持つ足。天氣も大方上り口。庭から足拭く下駄直す師匠思ひに　フシ機嫌顔。詞イヤ馴染程結構なものはない。これから緩りと夜と共話さう。いよ〳〵最前頼んだ事。違變はないの。これはお師匠とも覺えぬくどいお尋ね。心元なう思召すなら。鈍刀でない魂を。只今金打。ア、コレ何のそれに及ぶ事。及ばぬとおつしやつても。お頼みなさるゝ本人の。股五郎殿の所在。御存じないとおつしやるは。お師匠の詞に鞘があらうかと存じられ。頼まれるに力がない。ナント左樣ぢや　地ござりませぬかと。探る心の奥より女房。稚兒抱き走り出で。詞コレ親仁殿最前行倒れの順禮が。抱いて居た此乳呑兒。今肌を明けて見れば。守りの中に此書付。和州郡山唐木政右衞門子。巳之助と書いてあるいの。ヤア　地と幸兵衞立寄つて。誠に

誠に。シヤア好い物が手に入つたぞ。敵の忰を人質に取つて置けば。此方に六分の強み。敵に八分の弱みあり。股五郎殿の運の强さ。其餓鬼隨分大事にかけ。乳母を取つて育てるが。計略の奥の手と フシ悅び勇めば。地政右衛門ずつと寄つて稚兒引寄せ。喉笛貫く小柄の切先。幸兵衛驚き 詞コリヤ庄太郎。大事の人質何故殺した。ハ、、、、此忰を留置き。敵の鋒先を挫かうと思召す先生の御思案。お年の加減かこりやちと撚が戾りました。武士と武士との隱業に。人質取つて勝負する卑怯者と。後々まで人の嘲り笑ひ種。少分ながら股五郎殿の。お力になる此庄太郎。人質を便りには仕らぬ。目指す相手政右衛門とやら言ふ奴。其片われの此小忰。血祭に差殺したが。賴まれた拙者が金打と死骸を フシ庭へ。投捨てたり。地幸兵衛手を打ち。ヘ、ア尤も其丈夫な魂を見屆けたれば。何をか隱さう。股五郎は奥へ來て居るわいの。祖母婿殿を起しておぢや。コレ／＼股五郎の片腕に成る賴もしい人が來たと。言うて爰へ呼んでおぢや。スリヤ。澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか。フウシテ。外に連の衆でもござるかな。イヤ／＼供もなしたつた一人。奥底なう話してたもと。地打明け語るは思ふつぼ。何條知れたる股五郎。手取にするは易かりなんと。手ぐすね引いて待つ大膽。志津馬は女房が案内に股五郎が片腕とは。何奴なりとも只一討と鯉口くつろげ居合腰。氣配り目配り互にきつと。詞ヤアこなたは。／＼と フシ一度の仰天。幸兵衛むんずと居直り。詞唐木政右衛門和田志津馬。不思議の對面滿足で有らうなと。地先がけられし二人より。思ひがけなき女房が心どぎまぎ不審顏。詞ナント老人の目利よもや違ひはせまいがの。今宵澤井股五郎と。名のり來る年配恰好。聞及びしとは拔群の相違。扨は却つて付狙ふ。志津馬か但し餘類の者か。肌赦させて詮議せんと。態と一ぱい喰うた顏。三寸俎板見ぬいたれど。我が弟子の庄太郎が政右衛門といふ事を。知つたは漸くたつた今。骨柄といひ手練といひ。あつぱれ股五郎が片腕にせんものと。賴めば早速承知しながら。股五郎が在家を根を押して。聞きたがるは心得ずと思ひしが。地子を一刻りに刺殺し。立派に言放した目の中に。一滴浮む涙の色は隱しても隱されぬ。肉身の恩愛に始めてそれと。フシ悟りしぞよ。地澤井にさせる恩はなけれど 詞娘お袖を。城五郎方へ奉公に遣はした時。筋目ある人の娘。末々は我が一家の。股五郎と。娶合せん。ヲ、いかにもお賴み申すと。つい言うた一言が。今更引かれ

ぬ因果の緣。其後娘は奉公引いて歸りしかど。今落目になつた股五郎。見放されぬは侍の義理。地隱匿ふ幸兵衛ねらふは我が弟子。惡人に與してくれと賴むに引かれず。現在我が子を一思ひに殺したは。劍術無双の政右衛門。手ほどきの此師匠への言譯さりとては過分なぞや。其志に感じ入り。敵の肩持つ片意地も。詞最早これ限只の百姓。町人も侍も。地變らぬものは子の可愛さ此方は男のあきらめもあり。最前ちらりと思ひ合す。順禮の母親の。心察しやらるゝと。悔めば門に堪へ兼ねてわつと泣く聲内よりも。明くる戸直に轉び入り。あへなき骸を抱き上げ。詞コレ巳之助。物言うてたも母ぢやわいの〳〵。地昨夜までも今朝までも。憂い辛い其中にもてうち仕たり藝づくし。父御によう似た顏見せて自慢せうと樂んだもの。逢ふと其儘刺殺す。惨たらしい父樣を恨むるにも恨まれぬ。前生にどんな罪をして侍の子には生れしぞ。こんな事なら先刻の時。母が死んだら憂目は見まい。佛のお慈悲のあるならば今一度生返り。乳房を吸うてくれよかしと。庭に轉びつ這廻り抱きしめたる我が身もフシ雪と。消ゆべき風情なり。

地志津馬涙押拭ひ。詞此上は包まん樣なし。とても事に眞實の。敵の有所を。何がさて。此方も隱しはせぬ。有樣は此幸兵衛。最前庄屋へ呼ばれた時。股五郎に逢うて來た。ヤアすりや敵は庄屋の方に。地心得たりと駈け出すを。政右衛門引とゞめ愚か〳〵。詞我々爰にあると聞いて。暫時も此地に足を留めう樣がない。はや五六里も行過ぎて、もう爰に敵は居ぬ。此行先も用心して。海道筋へはよも行くまい。道を變へて落ちたと見える親仁樣。何と左樣でござらうがな。したり黒星其通り。とても非道の股五郎。天道の御罰にて。どうで討たるゝ者なれども。此岡崎で勝負さすれば。肩持たねばならぬ幸兵衛。藥師堂の山越に中仙道へ落したは。城五郎へ一旦の情股五郎との緣もこれ迄。思はぬ方便が緣になり。志津馬殿と言交はした。娘が身の果。地不便やと。見れば簪の小蔭より。思ひ切髮墨染の。袈裟に變りしそぎ尼姿。詞お袖か。ヲヽ出かしやつた。惡人の股五郎に。假にも女房と名の付いた。其間違ひが其方の不運。地可愛や盛りの黒髮を。詞アコレ申し。もう何にも申しませぬ。顏は見ねども許嫁の。男持つのがうるささに。屋敷を戻つた其時から。尼になる氣で袈裟衣。地今日一日に氣が變り。染違うたる鐵漿付を元の白歯と墨染に。染直しても剃しても思ひ染めた煩悩の。心が兀げぬ佛樣。御赦されてと身を背け。

泣かね フシ氣を泣く親心。地股五郎にも志津馬にも緣を離れたお袖道心。袖振合ふも他生の緣。子に別れた順禮に菩提の爲のよい道連。詞關役人の我が娘。關所々々も切手入らず。中仙道への。案內者地勝手に連れて行かれよと。娘に敵の道引を。さすが子故に踏迷ふ。未來の契り鉦撞木。淚で渡す父母の。惠みも。深き觀世音。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。我が子は冥土の道しるべ。志津馬唐木も恥合うて。悄れぬ表 フシ武士の禮。師弟は內證敵同士。此儘歸るは卑怯者。返せと一聲切付くる。得たりと請ける半蓋に馬士の胴切重切。詞まつ其通りの手柄を待つ。まだお手の內は狂ひませぬ。ハヽヽハヽ、やがて 地吉左右／＼と笑うて。祝ふ出立は侍なりけり 三重

第九 伏見の段

詞男ども／＼。ソレ胴の間へお蒲團は入つたかな。ハイ艫の間の四人樣水菜は爰に置きまする。コレ船頭衆此荷物破物ぢやぞソレ氣を付けて貰はうと。地世話は素燒の土産物積むより早く押出して。舟を見送り御機嫌ようお下りなされとそこそこに。夕日程なく吳竹の。伏見の里の船着場。軒を並べし舟宿の客に フシ絕間もなかりけり。地世の憂を何と志津馬は此處彼處。敵の行方尋ね兼ね心氣。勞れた眼病を。いたはる瀨川も諸共に。暫しは爰に宿りして。北國屋が奧二階。手を引連れてそろ／＼と。梯子ををりしも フシ黃昏の。地人なき隙を幸ひと邊見廻し。詞イヤ申し志津馬樣二階ばかりもお氣詰り。月の夜すがの川景色見やしやんすのが目の養生と。地介抱如才撫でさする。心遣ひぞ フシわりなけれ。詞イヤモウ何ぼう養生しても捗々しうもない眼病。見かけに變りなけれども。今日此頃は此樣に。其方の顏さへわかり兼ねる。ぶら／＼月日を過す中。主人上杉公急病にて御死去遊ばされし由。御存生の中に敵も討たぬ殘念賴みに思ふ政右衛門殿。武介諸共引別れ大阪へござつた故。此伏見に逗留するも若しや敵の。ヲヲこれはしたり思はず知らず大きな聲で。コレ／＼誰も聞いて居なんだかと。地豈にも心奧口へ。聞え憚り差寄つて フシ ひそ／＼咄す店先へ。地志津馬に連れて孫八が忍ぶ姿の按摩取。頭巾すつほり船着の宿屋々々の門口から。按摩よござい。ヲヽ孫八殿コレ／＼瀨川樣。さりとは物覺えの惡い。我等按摩取の勘兵衛。必ず麁相仰しやるなと。地言ひつゝ差寄り小聲になり。詞若旦那のお供して。二三日以前から此伏見に逗留して。思ひ付いた按摩痃癖。每日々々此船宿。入込んで

氣を付くれどさしてこれはと申す様な手がかりもござりませぬ。それは左様と若旦那ちとお目はようござりますか。ヲヽ孫八の心遣ひ忘れはせぬ。某とても此程より歩行はならず。出入の旅人に心を付けて窺へども。敵の行方知れざる故次第に重る眼病は。地口惜しさよとばかりにて打悄るればお道理と。瀬川も涙孫八も。フシ共に目をすり居たりしが。詞アアさりとてはお氣の弱い。何の神佛様が無いにこそ。アレ天道が正直なれば。御孝行な心が屆いて。御本復も本望も今の中でござりましよ。其様に思召すは養生の大きな毒。ヤ毒の序に瀬川様。兎角病人は介抱が大事。お如才あるまいけれどお若い同士。何よりかよりお持合せの彼の毒忌が肝心でござりますハヽヽヽ。ヤこれから上手の宿屋を廻つて。後程お見舞申しませうと。地言ひつゝ立つて表口出るより早く聲張上げ。詞按摩痃癖。鍼の療治と　地覗く隣の。フシ八百屋の店。地奥の間よりのか／＼と出づるは櫻田林左衛門。詞アヽ旅労れで殊の外頭痛がする。幸ひの導引一つ頼まうかい。ハイ／＼左様ならお座敷へ。イヤ／＼表を見るも又氣ばらし。苦しうない爰で／＼。成程それも宜うござりましよ。ヤ旦那御免なされませと。地庭から直に店の間へ上る孫八櫻田も。互にそれと面體を知らねば何の氣も付かず。詞イヤコレ療治人。身は隨分きついが好き遠慮なく揉んでくりやれさ。ハイ／＼アヽきつう凝つてござります。さうしてマア見受けました所がお歴々様。骨組と申し丈夫なお生れ。嘸お力も強かろな。アノ兵法とやら劍術とやらも。定めて拔てござるぢやあろな。ヲヽ汝達が目にも左様見ゆるは尤も／＼。天が下廣しと雖も。某に立會はん者は恐らく覺えない。成程左様に見えまする。さうしてあなたのお國は何國で。何處へお出でなされます。ムヽ身どもは西國方の者なるが。智謀劍術勝れし故。高木風に倒るゝ習ひと。傍輩の讒によつて浪人して永々と漂泊せしが。サア身ども程の達人がをらぬは國の弱みとあつて。此度歸參を仰付けられ。先知の上に過分の御加增。故鄕へ歸る嬉しの道中。數多ある供廻りは別宿に控へをれば。跡荷物の揃ひ次第明晝船にて下る積りと。地口から出次第階上を。隣の店に漏聞く志津馬。詞アレ瀬川あれを聞きや。同じ武士の身の上でも衰へると榮うるは是程にも違ふ者かい。心を盡して尋ね捜す敵には廻り逢はず。困窮の上此眼病よつく武運に盡きたかと。地悔むに瀬川も共涙。ほんに思へばおいとしや。沼津でお別れ申してより。お跡をしたひ尋ね逢ふ甲斐

も長しい日は立てど。地これぞと思ふ手がかりもないを苦にして此樣に。ほんに悲しい病む目より。傍で見る目の私が心。推量して下さんせと　スヱテかこち歎くを此方には。聞耳立つる櫻田が。兩耳ぴつしやり。詞ア、コリヤ何とする放さぬかやい。ア、お前樣も辛抱のない。斯う致して引きさげねば。お頭痛が直りませぬわい。ハテ仰山な按摩だな。シテコリヤ何といふ流ぢやぞい。是は南蠻流の隣の今宮流でござります。ハア聞えたそれで聾にするのぢやな。ハ、、、、コレ瀨川。したが其樣に案じてたもんな。此宿の亭主が引合せて。隣に逗留してござる眼醫者竹中贅宅老の加減の藥。湯煎に立てて洗うてたも。地アイと言ひつゝかい立つて。勝手へ入つて汲んで出る。夫に盡す貞節の。心は清き淸水燒。白湯に振出し　フシ差出せば。地始終聞き居る林左衞門。詞の五音心得ずと。延上つて差覗くをちやつと兩手でめんない千鳥。詞ア、コリヤ〳〵〳〵何とする目が見えぬわいやい。又これも今宮流か。イエ〳〵〳〵から致して置きまして。ト一時に手を放すと。何とお目がはつきりとなつてよござりましよがな。是を名付けて天照太神天の岩戸開きと申します。何を馬鹿なことを。したが氣裂な按摩取。シテ其方が名は何といふぞい。ハイ私は板屋勘兵衞と申しまして。此間大坂から上りました。貴方もお下りなされたら。外を差置き芝居へお出なされるであろ。アア面白い事でござります。コレ則ち爰に持つてをりますが役者の番附。お慰に御覽じませ。ムウナニこれが役者の番附。ハイ。三下り歌大坂土産に何を貰うたナ。申し役者の番附日傘でござります。詞ムウナニ日傘。チヱ日傘。シテそちが假名は板屋の勘兵衞。チヱ板勘兵衞。ナニ板勘兵衞。ハ、、、ヤ是からお下をやりましよが横におなりなされませぬか。イヤ〳〵下の療治は後程頼む。料物も一所にくれろ。中々氣裂な男め故。長旅の欝氣を散じた。地さらばこれから夕飯の宿屋の知行に有付かう。勘兵衞後にと櫻田は刀提げ立上り。一間へ入れば孫八は上の　フシ町へと急ぎ行く。地道摺違うて何處かは。飛脚と見えて門口から。詞ハイどなたぞ頼んませう。是のお客林新五樣へ大坂からの此狀と。地聞くより志津馬は覺えの替名。詞ヲ、これは〳〵則ち拙者林新五。直々に請取りました。ハイお返事をなされるなら。追付け取りに參りましよと言捨て　フシ飛脚は立歸る。詞コレ瀨川唐木殿よりの此書狀。何事ぢや讀んでたも。地早う〳〵に封じめ解き。覺束ながら押開く。襖の內より林

左衛門。差足拔足表ロ。戸脇に隱れて立聞くとも。心付かねば。詞テモ扨も政右衛門樣のお氣の付いた。私でも讀める樣に假名交りの此手紙。ナニ〳〵彌御無事と存じ候。然れば敵の落足とゞめん爲大坂川ロの出ロ々々は門弟ども數多付け置き油斷なく手當致し。我等事は武介諸共尼が崎兵庫の邊りに待受候間。其地にて變りし事も御座候はゞ。早速御知らせ下さるべく候。此由申入度早々以上。スリヤ政右衛門殿には大坂を立つて兵庫の邊りへ參られしか。此方よりも委細の譯。返事に委しく申送らん。コレ瀨川爰は端近奥の間で。大儀ながら書いてたも飛脚の來ぬ中。サア早う。地アイと瀨川は夫の手を引連れ這入る後影。地とつくと窺ひさてこそ〳〵。和田志津馬に相違なし。踏込んで討放さうか。ハテ如何はせんとつおいつ思案半ばへひよつか〳〵。一僕さへも内證の。薄いを黒める木綿の居士衣。見るから藪井の竹中贅宅。療治　フシ了うて戻り足。地それと見るより。詞ヲヽこれは〳〵隣座敷のお侍樣。コリヤ端近にござりますな。ヲヽ昨晩ちよつと御意得申した贅宅老。サこれへ〳〵と片脇へ。招き寄せて聲をひそめ。詞今朝も申す如く。隣家に逗留致して居る若侍がアノ眼病。貴殿が療治召さるゝに就き。折入つて賴みし密事彌御承知下さるゝや。イヤモ御大身のあなた樣のお賴み。お禮物さへ慥ならば。先づは過分。然らば打明けお話し申す。仔細あつて某始め別宿に逗留致す。組の者どもへ仇ある奴と。夜前より心を付くるに。身どもが推量ちつとも違はず。彼が實名知つたる上は討つて棄てんと思へども。彼者に力を添ゆる劍術無双の曲者ある故。我々が手にかくる時は却て此身の有所も知れ。帶紐解いて夜が寢られず。サア〳〵賴むといふは爰のこと。何卒貴公の働きにて毒藥を藥と僞り。彼奴が眼の見えぬ樣に何と手段はあるまいか。此事成就致しなば一廉お禮を仕らう。地先づ賴みの印と懷中より。金子の包取出し些少　フシながらと手に渡せば。詞ヤアコリヤ金子五十兩。テモ結構なお印やな。隣の病人治したとて高々貳朱か。ようくれて百疋は覺束ない。ほんのこれが牛を馬に乘換へたと申すもの。後ともいはずたつた今。我等が秘方の毒藥を。差すが相圖に兩眼より。五臓へ浸込む腐り藥。ちやくと用意致して置いた。コレ刀入らずに了うて取るは此贅宅が手の中にある。エヽ早速の得心滿足致した〳〵。必ず手ぬかりなき樣に。イヤモお氣遣ひなされますな生かす覺えはなけれども殺す事なら此方が得物。委細はあれから御覽じませ。地いか

にもよきにと打點頭き。牒し合して店の間の。障子引立て窺ふ櫻田。何でもしめたと貧宅が。物に懸りの掴み類。上べに見せぬ傘骨の。扇ばち〳〵隣の店。詞ヤ貧宅でござる。御見舞申すと。地聲に志津馬は一間を出で。ヲヽこれは御苦勞千萬。扨お歸りを待兼ねました。ヲヽさうでござらう。晝からお見舞申す筈が。御存じの流行醫者。あそこからも竹中。爰からも貧宅様。活藥師ぢやと持囃して。漸う只今罷歸つた何と晝の洗ひ藥で。さつぱりとよからうがの。イヤさして變つた事も。ハテめんような。アノ藥でよい筈ぢやが。ドレ〳〵今一度診て進ぜうと。地行燈引寄せ灯明に。ためつすがめつ透し見て。詞コリヤ内瘡立ちやわいの。これなら洗藥では行かぬ筈。コリヤ取つて置きの點藥を。出さずばなるまい。コレ大切な藥ぢや程に。うつかりと思はしやんなや。氣遣ひ召さるな。今の間に本復さして進ぜうと。地こて〳〵取出す藥箱。詞アヽ是はよいお方にかゝり合はして拙者が仕合せ。此お禮は本望を。イヤ追付け本復致したら急度致すでござりましよハテ心遣ひさつしやるな。醫道は仁術人を救ふは醫者の役ぢや。サアもそつと此方へ寄らつしやれと。地片手に瞼押明けてすくふ件の毒藥は。直に志津馬が命を斷つ匙の刄金の點藥。忽ち毒氣廻ると見え。詞アヽ嚴う此目がヲヽ痛む筈。しゆむか・しゆむで有ろがの。少しの間ぢや怺へさつしやれ藥瞑眩せさる時は。其病治せずと申して。一旦動かねば藥は利かぬ。追付け兩眼明らかに。此活藥師が活して進ぜる。ドレ　地其間に一服致さうと。煙管取上げすつぱ〳〵。すつぱの骨頂。フシ納めた頬付。志津馬は苦痛堪へがたく。詞申し〳〵これ迄の藥とは違うて。五臓までも泌渡り。いかう苦しうござりますと。地聲に瀬川も走り出で。もしお藥は違ひはせぬか。お心惱に持たしやんせと一方ならぬ　フシ介抱に。地じろりと詠め。詞うつそりどもめ。今藥ぢやというて點したのは。汝が目を潰さうばかり。おれが秘法の毒藥ぢやわやい。ヤア〳〵〳〵そんなら今のは毒であつたか。何意趣あつて此仕業。サ様子があらう。様子はと。地立上れどもよろ〳〵〳〵。詞瀬川何處に居やる。瀬川爰が苦しい〳〵。地せつないわいのと夫の惱みを見る悲しさ。あるにもあられず縋り付き。詞そんならお目がもう見えぬか。ハアヤイ胴欲醫者の鬼め。魔王め。地ずた〳〵に刻んでも恨みは晴れぬとしがみ付く。小腕取つて膝に引敷き。詞ヤイ〳〵〳〵ばた〳〵と刎廻つてももう叶はぬ。イヤ申し隣のお客。何と拙者が匙

加減を。地ヲヽ篤とこれにて見屆けたりと。物陰より林左衞門したり。フシ顔に歩み出で。詞和田行家が忰同苗志津馬。無念にあらうな。ヤナニ某を和田志津馬と知つた此方は。ヲヽ澤井股五郎に力を添ゆる。伯父の櫻田林左衞門。其方づれが股五郎を討たんなどとは及ばぬ事と。地聞くより扨はと這寄り〳〵。敵の片われ逃さじと刀の柄に手をかくるを。襟がみ摑んでぐつと捻付け。詞ヤア劍術無双の此櫻田に刄向はんとは。小賢しい。蚊蜻蛉侍。捻り殺すは易けれど。某始め股五郎が所在を知られては一大事と。贅宅に申合せし身が計略眼も見えぬ分際でも。見事親の敵を討つか。相手は大敵其上に。城五郎殿のお心付にて。劍術勝れし侍數多付添ふ股五郎。所詮叶はぬ事だとあきらめ。首でも縊つて死ばれと惡口雜言足にかけ。踏付けられて無念の齒ぎり。詞エヽ侍のあるまじい卑怯未練の此仕業。親の敵の股五郎に。緣を引いたる其方が。土足にかけられ手向ひも。ならぬは此目が見えぬから。地エヽ口惜しや無念やと拳を握り男泣き。見るに瀨川が氣は狂亂。詞目かいも見えぬ志津馬様に。慘い辛い大惡人 地天道樣の明かな。お目にはこれがかゝらぬか。詞孫八殿は何してぞ。地神も佛も恨しやと聲を限りに泣叫ぶ。詞エヽやかましいわい〳〵。コリヤ眼の見えぬばかりぢやない。毒氣が五臟へ廻るが最期。追付けころり百兩の。褒美がほしさの仕事ぢやわいやい。ヲヽ贅宅が働きにて此志津馬めを了うて取り。待伏ひろぐ政右衞門め。鼻明かすのが此方の方便。荷物の内に忍ばせ置きし股五郎にも落着かせ。うぬらが苦痛を肴にして一献酌まう。ハレ好い態と踏飛ばし。駈け行く鐺をしつかと取り。詞すりや差す敵の股五郎は。ヲヽ身どもと一所に昨日よりこれに逗留致し居るわい。エヽ忝い。今こそ敵の在所が知れた。志津馬樣。嘸御本望と。地ぬつと出でたる池添孫八。主従一度に身繕ふ。詞ヤア〳〵。コリヤ汝眼が見えるな。贅宅こりやどうぢややい。ヲヽ目醫者となつて入込みし。此贅宅が本名は。孫八が兄池添孫六。志津馬樣と言合せ。明かな兩眼を目病と僞り汝が俗姓敵の行方を知らん爲。首尾よう參つた櫻田殿と。地言はれて悔り。詞ヤヽヽヽスリヤ股五郎を見出さん爲。言合せであつたよな。地此上は一味の者へ告知せんと駈け出づる。敵の加擔人逃さじと拔手も見せず主従が。烈しき手練の働きに。さしもの櫻田敵はじと ハズミ 旅宿をさして逃込んだり。ヤアいづく迄もと孫八志津馬。駈入らんとする奥の間より。どつこいな

らぬと呉服屋十兵衛。かけ隔て支ゆるを。血氣の志津馬が鋒先に。肩先ずつぱり切下げられ。フシうんと倒るゝ其隙に。地奥を目がけて駈入るを。詞ヤレ暫くと聲をかけ。地濱邊に繋ぎし笘舟より。船裝束を其儘に。武介引連れ政右衛門。フシしづ／＼と歩み出で。詞手に入つた敵なれども。爰では討たれぬ仔細あり。町人ながら義心ある十兵衛が此深手。地非道に與せし先非を悔ひ。志津馬が手にかゝりしは。本望ならんとありければ。手負はむつくと起上り。詞ヲヽ御推量の上は我が所存。今更くど／＼申すに及ばず。股五郎始め一味の者ども。西國へ落失せては。御本望の妨げと。政右衛門様の計略にて。最前の似せ飛脚を。誠と心得裏道より。地巨椋堤を伊賀越に。志州鳥羽の港より。大廻しにて九州相良へ。落失せんとの言合せを。詞お知らせ申して相果つるが。志津馬様へのせめての寸志。町人なれども。敵の端くれ。股五郎に頼まれた。一つの命を兩方へ。わけて願ひは此上ながら。ヲヽ瀨川が事は政右衛門が。刀にかけて志津馬に添はす。ハヽ武士の鑑の政右衛門様。其御一言は呉服屋が冥土の晴着。サア／＼片時も早くぼつ着いて。此年月の御本望。早く／＼と氣をいらつ。地手負に取付き妹が歎くを制して政右衛門。詞ヲヽいかにもぼつ着き討留めんは我



が掌の中にありと。地志津馬が亡君上杉殿の。御家門たる畠山。政家公よりする置かれし。詞宇内公の石碑ある伊賀路に於て本望達する物ならば。地泉下にまします顯定公。行家殿への追善ならんたとへ。何百何十人。彼に力を添ゆるとも。天理に背く敵の助太刀。何條恐るゝ事あらじ。時は初更の戌の刻。先へ廻つて伊賀越に。多年の本望今此時と唐木が勇めに力足。手負を跡に三つ瀬川。三途の瀬ぶみは。敵の魁。さらば〳〵を夜嵐に聲吹分くる海道筋跡を。慕うて　三重へ急ぎ行く

第十　敵討の段

地されば唐木政右衛門股五郎を付出し。夜を日に繼いで伏見を出で伊賀の上野と志し。先へ廻りて代官所の屆けも濟みて北谷の。四つ辻に主從四人。フシ我劣らじと入來る。地政右衛門聲をかけ。詞孫八武介は我に構はず志津馬を圍へ。我豫て聞及ぶ。股五郎には附人ある由目ざす敵は只一人。地たとへ助太刀何十人あるとても。何程の事あらん。最早來るに間もあるまじ身拵へをとフシ制すれば。地志津馬は今日を一世の晴業。心得たりと片肌脱げば。南蠻鎖の差込に鎖鉢卷。拜領の不動國行覺えの名作。同じく唐木も立附に澁の鉢卷信國の寐刄は兼て合詞。いづれ劣らぬ。古今の勇士。池添石留引添うて。日頃の念願指す敵を今や來ると。フシ待ちかけたり。地程もあらせず。股五郎惡黨ばらに前後を圍はせ。一番手は林左衛門。さゞめき渡り我一と。フシ小田町筋へと打通る。地斯くと見るより和田志津馬木蔭より飛んで出で。向うに立つて大音上げ。詞ヤアヤアいかに澤井股五郎。汝が手にかけし和田行家が一子同苗志津馬。此所に待受けたり。尋常に勝負せよと聲かくれば政右衛門。ホヽ久しや櫻田林左衛門。郡山にて眞劍の。勝負を望みし其方今日に至つたり。サア覺悟せよと呼ばはつたり。



地心得たりと林左衛門馬上より飛下りるを。走りかゝつて政右衛門。肋骨より肩先かけて切付けたり。ソレ遁すなと聲々に。一流を得し附人ども志津馬を目當て切りかくる。心得たりと池添石留四人を相手に切結ぶ。地股五郎 志津馬は 一騎打。兼て手練の和田志津馬。爰に顯はれ彼所に切抜け。飛鳥の如く早業に。股五郎もあしらひ兼ね突かける鑓先を。鍔ぜりに受留められ。跡退りになつて たぢ〳〵。坂の下へと引いて行く。地こは心得ずと園四郎。股五郎を救はんと勢ひ込んでかけ行く所へ。どつこいやらぬと政右衛門。仁王立に突立つたり。シヤ邪魔ひろぐなと打ちかくる。心得たりと受流し。付込む所を身をひらき。飛ぶよと見えしが園四郎。から竹割に切伏せたり。返す刀に助太刀ども一人も殘らずすくひ切り。志津馬が身の上氣遣はしと。二人の家來を跡になし坂の下へと飛んで行く。孫八武介は死物狂ひ。數多の付人相手に取り切つつ切られつ戰ひしが。數箇所の手疵に目も眩み同じ枕に死してけり。地股五郎相手に和田志津馬。手利と手利の晴れ勝負。いづれ拔目はなき所へ。政右衛門が韋駄天走り。助太刀の奴ばらは一人も殘らず討留めしぞ。殘るは其奴只一人。ソレ踏込んで討留めいと地聲の助太刀百人力よろめく所を付入つて肩先ざつふと切付けたり。こは敵はじと股五郎死物狂ひと働けども。動ぜぬ武士の太刀風に。さしもの澤井も切立てられ。しどろになるを疊みかけ。鋭き一刀大地へどつさり。起しも立てず乘りかゝり。年來の父の敵。舅の敵。主人の仇。地一度に晴るゝ胸の月。空に知られし上杉の。家の譽れと悦ぶ唐木。武名は世々に鳴りひゞく。和田が手疵も日を追つて。やがて全部十冊物。この上もなき敵討今に譽を殘しけり

天明三癸卯年四月廿七日

作者　近松半二
　　　近松加作

奥州秀衡遺跡爭論 伽羅先代萩

地 天地の。開け始めし昔より。本フシカヽリ 今に變らぬ妹と背の 小オクリ 契りの。末の樂しみは。女夫暮しの世帯事。長地 手鍋提げるが眞實の。誠の戀の。睦言や。詞 五十四郡の御主。冠者太郎義綱公。今日吉辰の。宿這入。オロシ 都離れし船岡の。山の麓に手を盡し綺羅を。磨きし葛屋ぶき オクリ 勝手。賑ふ客まうけ。島原に名も高尾とて。盛りあらそふ太夫職。手づから炊ぐ。白水も。流れの粋な フシ 襷がけ。地 御大將は爼板に。フシカヽリ きざむ鱠も五分切りの。國分煙草を禿の楓。お氣が盡けうと長ぎせる。詞 ホヽ、コリヤよう氣が付いた。コレ太夫。イヤこちの女房ども。そなたもさつきにから米洗うて。定めて肩がつかよう。マア〳〵一休みしたがよい。アイ〳〵 地 私より殿樣の仕付けもなされぬ切りきざみ。嘸ぞお肩が痛みませう。詞 よつ程久しう洗うたりや是で大方よいであろ。是からお粥をしかけうと。地 いふに楓が小利口に。二人して舁く米炊桶。二つ竈に金の釜。玉を。のべたる玉だすき。伽羅割よりも持たぬ手に。割木の刺もいた〳〵し。奥より帮間。フシ 遣手の夏。詞 ヤレ〳〵お二人樣ながら嘸ぞお嬉しうござりませうな。サア此樣にお目出たう。宿這入の御祝儀に呼ばれるといふ事は。ほんに〳〵此頓吉帮間冥加に叶うたといふ物なうお夏。アイ私も大勢の太夫樣方を廻したれど。此樣に内方へ來るといふはこれが始り。だん〳〵とお居くろめなされて。お二人の中に和子樣も出來る樣。ア、イヤ申し太夫樣。釜の下がきつう燻るぞえ。そして何ぢややら無性に好い匂ひが。ドレ〳〵どうでよう焼きはさんすまい。ソレ其火吹竹といふ物を。テモ堅い木ぢやコレ頓吉樣見やしやんせ。ヤアこりや堅い筈ぢや伽羅の節木ぢや。ハヽどうでもお大名の宿這入は違うた物ぢや。極樂世界と喜見城。かの唐土の阿房宮。三千世界にあるとあらゆる結構づくしを集めても。又とあるまいさし向ひ。大方粥は金色の。拍子 菩薩の世話事床がため。御新宅の地形がため。ヤア目出た〳〵の若松樣よ。枝も榮える葉も茂る。お目出たいいよのお目出たい。千秋萬歳〳〵萬々歳 詞 ハヽヽ、コリヤ頓吉目出たい〳〵。皆知つてゐる通り。この高尾が突出しから逢ひかゝつて。毎晩毎晩通ひ詰める此義綱。せまい廓の居續にとんと氣がつまり切り。どうぞ氣の變つ

た事がしたいと思ふ内。アノ錦戸刑部といふは誠はおれが伯父なれど。今では家老同然。流石血筋程あつて顔に似合はぬ粋親仁。此様に家を建て太夫とおれとたつた二人。百姓といふ者の眞似をして。大名事は忘れてしまへと。あれが勸めにこゝへ引越し。わいらをお客におれが料理。太夫も今朝から精出して。米洗うたり粥炊いたり。ヤモ大抵面白い事ぢやない。こんな事なら疾うから百姓になるものを。何の因果で大名に生れた事ぢや。マア第一何を言付けても。ハアノ〳〵というて何一つ無いといふ事のないその不自由さ。女子どもは女子どもで曲輪の張とは違うて。こゝへ來い。ハア帯解けハア。足上げいハアと此様に思ふ様に物事が行ては。モ世に生きてゐる甲斐はない。ヤほんに客人達も嘸ぞ退屈。ソレ太夫。家渡り粥が出來たらお客方を奥の間へおりや膳立と何事も。地珍らし盛りたわいなく。そんなら奥でお祝ひ申さう。サアノ〳〵こちへと打連れて。オクリ奥のへ座敷へ入りにける。地折から表賑ひて。歌かの船岡の〳〵。アレハサノ宿這入の門に佇みて。アレハサノお目出たいやんらお目出たい。ヨヲイヨイヨヲイヨイ〳〵ヨヲイ〳〵アレハサノエ。ヨヲイトコナ。アレハサノエ。ヨイトコエ。コレハサノエ。〳〵ヨイコノエイヤラナ。〳〵。もしも山の手の天から大事の小娘が。落ちたら喧嘩になるまいか。ヨヲイヨイトコナ。よい〳〵よいやな。地聲も揃への染頭巾。詞坂道を押す大八車。門口に引付けて。詞御新宅の御祝儀に一つ締めましよ。よい〳〵。モ一つせいヨイノ〳〵。祝うて三度ヨイノ〳〵ヨイ。地滅多無性に目出たがる。顔は錦戸。ヤア刑部か。詞珍らしいしやれ姿跡なは荒鷹風之助。車に乗せたはアリヤ何ぢや。今日殿様高尾様。御宿這入の御壽。刑部様より御家見。車に積みしは金子の箱。お心付いたる御音物。ソレ〳〵内へ舁き入れよ。地はつと皆々立寄つて數も限らぬ千兩箱。積み上げ〳〵上板もフシしわるばかりに並べ置く。地義綱公は打詠め。詞ムヽ粋な刑部が進物なら。何ぞ面白い器物であろと。楽しんで居たに金子の箱とは。ムヽマア見た所が面白うもない物。アリヤマア何の役に立つ物ぢやと。地不興に刑部兩手を突き。詞ハ御誕生あつてより外を御存じなき御身。御不審は御尤も。某がお勸め申す。今日只今百姓とお成りなさるれば。只今までとは違ひ殿と高尾殿とお二人にて。世帯方をなされねばならぬ。其世帯と申すには。いらで叶はぬ物は金。掛屋方へ申付け。アノ箱の中に千兩づつ。金高は三萬兩。サア其様にいうても。其

金とやらいふ物を。どうするのぢや合點が行かぬ。イヤ其儀は荒灘めが申上げ奉らん。何事も御存じなき御殿様。今まては御家老方。お小姓近習用人なんど。あまた役人承り。何から何まで致せども。是からは御自身に世帯方をなされにやならぬ。先づ第一の立物は米。これも今日より米屋と申す者の方へ。太夫様でもお出でなされ。かの米屋より五升でも一斗でも。かますといふ物に入れて持つて參る。それを飯に拵へるには。薪と申す物を使はにやならぬ。其薪屋にて。和らか炭一俵。是は早く火がおこり。女中方には調法な物。それより味噌塩醤油。現金では扱せはしいもの。そこで是を置替と申す物に呑込ませ。先づ千兩箱一つ二つ。先々へ預けて置き。それからお二人差向ひで。遊んでは食ひ。食うては遊び。うか／＼とする内に。三十日といふ恐しい物が來ると。書き出しと云ふ物を持つて。常は笑顔のよい親仁が。其日は急にこはい面。其時にアレアノ金箱。其儘では遣はれぬ。四文錢といふ物に取りかへて。さらり／＼と拂うてしまふ。又金がない時には。質といふ物を置かねばならぬ。是が又重寶なもの。代物を持つて行くと。錢でも金でも二朱銀でも。望み次第に換へておこす。アヽまて／＼荒灘。大概は承知したが。今の質の所が大分面白い。アノ金を早う皆にして。其質が早うして見たい。が又何にもならうなつたりや。イヤ其時は此刑部が掛屋方へ申付け。何萬兩でも差上げる。ハテナ。金といふ物は澤山にある物ぢやなア。モウ遣ひやうは覺えた／＼。マア今いうた米や薪。そして味噌塩とやらいふ物。荒灘ちよつと買うて見せい。ハヽ畏り奉る。ハヽ白米壹斗薪四五把。和らか炭一俵。此直段が斯うと千兩ぐらゐであるであろ。イザ家來中手分けして。地追付け買うて參らんと金箱かたげ立出づる。家來が締める草鞋のはるかの フシ里へと出でて行く。地すれ違うたるまかい道 フシそれ者と見える本田わげ。一つに合はす裏襟も黒い顔付き三浦屋才助。うろ／＼見廻す門の口。詞ちと物がお尋ぬ申したい。もしこゝらに冠者太郎義綱様といふ。お大名の店越はござりませぬか。ヤア太夫か。ヲヽ才助ようお出で。ヤ義様もそれにござるか。ホヽ高尾が親方。何と思うて。エヽ何と思うてとは。お前は／＼／＼滅相なお方ぢや。此親方にも得心させず。禿遣手まで引連れて大門へも斷り無し。行方が知れぬ故。こちの内は上を下へとまぜかへす中に。さる方から高尾を身請け。言うて來ても肝心の。玉が知れぬで方々へ。尋ね歩く此才助。サア／＼高尾早う來い。但しは高

尾が身請金。今請取れば言分なし。あちらへ遣らうか。金渡すかサア〳〵どうぢやと 地高聲はお定りなる フシ臺詞なり。詞コリヤ才助。わが言ふ事はとんと分らぬ。高尾はおれと宿這入りしたれば。どつこいもやる事ならぬ。サアそんなら身請けなさるゝか。ヤ其身請けとは何の事ぢや。サア身請けといふは太夫が身の代。サア其身の代とは。エヽ合點の惡い。コレ太夫を爰に置きたくば。金を此才助にお渡しなされと申す事。ムヽ金か。初めからさういへば濟む事を。ソレ其積んである金を。望み次第に持つて去ねと。地仰せに見附ける千兩箱ヤア〳〵〳〵。世は末世に及んでも有る處には有る物ぢやな。したがあんまり金過ぎて値の言ひ出し様がない。エヽ斯うつソレヨ三百兩ではイヤ〳〵あんまり安い。六百兩かい六百兩では儲けが少い。いつそ飛んで千兩かエ

エそれでもどうやら安さうな。地エヽコリヤどう言はうと目もうろ〳〵。金に噎せるぞフシ道理なり。刑部聲かけヤイ〳〵才助とやら。何をうろ〳〵。誰あらう冠者太郎義綱公の。御臺所に定まる高尾殿の身請け。いか程と極めては世間の聞え。それに積んだる千兩箱。其方が力次第。持たれるだけは持つて歸れと。言ふに才助なほ悔り。夢ではないか夢にでも。こんな嬉しい有難いコレナうまい事があるものか。たとへ腕は折れるとも。詞存分取らいで 地おくべきかと オクリ薪の。繩切これ幸ひ。金箱手早やに七つ八つ。しつかとくゝり肩腰入れ。上げても〳〵。いつかな〳〵。爰らが男の辛抱と。總身の力を肩に入れ。心はやたけとはやれども次第次第に精根盡き息切れ。目眩ひ汗たら〳〵詞エヽ扨も〳〵此様な地因果な事があるものか。寶の山へ入りながら持つ事

ならぬは金持に。ならぬといふ證かと涙ながらにこつて〳〵。取りへぐ箱のうらめしく。殘り多げに漸うと一つ擔げる獨言ひよろ〳〵〳〵〳〵してぞ フシ立歸る。詞ハヽヽヽても扨も弱いやつ。アヽ是ではまた減らし様を工夫せずはなるまい。刑部も奥へ。太夫もおぢやと。地うつかりおんくわの御大將。金花咲く陸奥を。心がけたる錦戸が。いざ御入りと打連れて オクリ奥の一間に入りにけり。地山道も。都なればや和らかに。育ちがらなる風俗は オクリ十七八の角額。地貝田勘解由直勝が一子源之助。立派作りの大小も。フシ角菱立てぬのつとり顏。跡に付添ふぼつとりは。伊達明衡が娘松島。夫婦といふは名ばかりのまだ盛り見ぬ躑躅山。腰元家來はかたへに殘し。打連れ來る。庵の戸口。詞申し〳〵源之助様。道々も申す通り。殿様の惰弱の御身持。

國にござる母樣から御意見申し上げよと竊の文。男御樣へ申上げても聞入れなく。御諫言もなされぬは。どう思召すお心やら餘り心ならぬ故。及ばずながら殿樣へ御意見を申し上げうと思うても女の身。お前を楯に言ふ爲。最前から申した事。よう覺えなされましたかえ。ヤアムウイイヤ先にから言やつた事餘り長うて一つも覺えぬぞや。モウ大概な事なら覺えさせずとよしにしやいなう。エヽつんとモウ譯もない事ばかり。コレ最前から申した通り。アヽ待ちや／＼むつかしい事ぢや故宙では覺えぬ。地コレたしなみ持つてゐると。鼻紙袋の石筆に。詞サア今一遍いうて聞かしや。サア殿樣のお身持御放埒。アヽコレ／＼其樣に長ういふ事はない。筋ばかりで跡はおれが胸にある。マア一つ殿樣の事さうしてから。サア館へもお歸りなく晝夜を分かぬ御放埒。ムムよしし御放埒の事。もう是でよい／＼。大概心覺えは書いて置いた。サア／＼早う內へ往なう。エヽ又何をおつしやるぞいなう。殿の御目にもかゝらぬ先。內へ歸つてよい物かいな。アヽほんにさうぢやなう。コレ申し必ず／＼行儀よう。地何にもお忘れなされなとフシ伴ひ這入る門の口詞誰ぞお取次頼みましよと。地音なふ聲に奧よりも。立出づる錦戸刑部。詞ムヽコレハ／＼貝田の子息源之助。松島との夫婦連れ。扨は殿の御機嫌伺ひ。お出での樣子某が後程宜しく披露せんと。地いへど答へもうつかりひよん。松島は氣の毒さ。詞コレ源之助樣。刑部樣へ御挨拶。それ早うおつしやりませ申し。地申しと氣を揉めば。詞ヤア挨拶とは何の事ぢや。エヽほんにしん氣な事ではあるぞ。マア下へおすわりなされませ。それな行儀に兩手を疊へ突いて。ヲヽ呑込んだ／＼と。地かしこまつて手をつかへ。詞エヽアノ何とやらエヽヲヽそれ／＼地思ひ出したと懷より。以前の書付け取出し打詠め。詞エヽ一つ殿樣の事。ムヽ殿樣が何と致した。エヽさうしてからアノ御放埒の事。何御放埒とは。シテ／＼サ其跡は。ムヽ何やらであつたが。ヲヽソレ／＼覺えぬ／＼あら／＼斯の如くなり。フシナウ松島と譯もなき。地傍には獨り氣をもむ松島。錦戸刑部苦笑ひ。詞ハヽハヽヽ親に似ぬ發明人。何の事やら分らねど。御放埒といふからは殿へ御諫言との事ならん。こりや松島の附智慧であらう。其方の實父伊達明衡。國家老を鼻にかけ申越したに違ひはない。此刑部は別腹故家臣の列に加はれども。正しく義綱公の爲には現在の伯父。意見してよければ某が諫言する。いらさる女の忠義立て。早や歸りやれと傍若無人。地横紙破り

に松島も何と詞も　フシなき折から　地荒くれ男の天窓付仰反髮も　鉞にくゝり付けたる夏紅葉。遠慮會釋も門の口。ずつと　フシ　這入つて上り口。　詞今日は爰に大金持の宿這入があつて。榮耀榮華のほたえ次第奢り次第と聞いた故。どうで薪でもついした物では賣れまいと。思ひ付いたコレ此紅葉。賣りに來た此男。サア買うて貰ひましよ買うて下んせと。　地言ふも一癖ある面付。錦戸きつと見。　詞ヤアおのれは先年義綱公に諫言して。用ひなきを憤り。白晝に國を立退きし熊川源五兵衛。ムゝ聞えた浪人の糧に盡き家々をゆすり商賣。古への主とも知らず。百姓町人と心得慮外千萬。錦戸刑部が前とも言はず狂氣同然の尾籠者と。　地きめ付くれどびくともせず。くつ／＼と笑ひ出し。　詞ヤアぬかしたり腹の皮。三千世界に主君がなければ怖い物のない此熊川。慮外と言はるゝ事はないぞ。三度諫めて身退くと古語に引きかへ。百度千度の諫言も。傍に付添ふ佞人ばらめが。さゝい巨細言廻し剩へ御前を遠慮。やら腹立ちに妻子を連れ。四年以來浪人住居。聞くまいと思ふ程いよ／＼聞える殿の放埒。其元は傾城め故。コレ此紅葉は高尾の名物。コレまつ此樣に打切つて仕舞ふが。主君の目覺ましお家の爲。寵愛の女を手にかけしと殿が腹を立てられうが。とんぼう返りしられうが。そこらは構はぬ源五兵衛。國に殘る明衡定倉兩人が。知らず顏は知行が惜しさ。ヤモどいつもこいつも祿盜人めら。渇しても盜泉の水。おのれ等と一つに飲まぬ某。サア傾城めを此處へ出せ。留めだてすると相伴に此鉞で幹竹割。　地病の根を切る一療治と不忠の良藥熊川が　フシ苦い效驗ぞ手ひどけれ。　詞ヤア言はして置けば樣々のたは言。　地早や立歸れと引立つる。手先を摑んで引つかつぎ。眞逆樣にづでんだう。もう赦されぬと刀の鯉口。ヤレ暫く待たれよ刑部殿。　地熊川氏も早まられなと疾くより戸口に貝田勘解由。二人が中に分入つて。　詞委細一々承る。熊川殿の忠節ハヽ天晴／＼。其方國元を出られてより。某竊に御諫言申せども。情なや御聞入れなき其許は。國に殘る明衡定倉この貝田を忌み嫌ひ。御前を遠退けんため奢りを勸め込み。用金を主君に當てがひ。稻妻鄕助といふ筋無き者を御傍に付置き。御惰弱を勸むるは兩人が心に一物あらん。某御傍を放れなばいかなる珍事も出で來らん兎角時節を見合さんと。御心に入る事のみ御諫言も申さぬは。御傍を放れまい爲心を盡せども。モ誰あつて片腕とする忠臣なく。樣々心を痛める此時節。思はずも熊川殿此處へ來られしは。某が身の大慶此

上やあるべき。地是より兩人心を合せ。倭人逆臣の奴輩一々追ひ退けんは我が方寸の内にありハア、忝なや嬉しやと誠を表す フシ忠義の詞。地源五兵衛も納得し。詞ム、忠義の爲とお言やれば何國までも立て貫く熊川。定倉にもせよ明衡にもせよ。逆意とあれば國へ立越え摑み殺すに何の手間隙。地いで此儘に國元へとつつ立ち フシ上る性急者。詞ア、イヤ〳〵急いては却つてお爲にならず。一先づ我が家へお越しあれ諸事の密談。ア、イヤコレ〳〵勘解由。そりや何事向う見ずのアノ熊川。こなたの屋敷へ連れ歸り密談とは此刑部は呑込めぬ。イヤサ何事もこの貝田が。お家の爲に心を碎く仕上げは跡にて。ヤア仲松島も諸共に熊川殿を御供申せ早く〳〵。地と諫めの詞。心ならねど松島が。詞イザ御案内サア源之助樣。ムウもう往ぬのかヤレ〳〵ほつと退屈した。シタがあの强い人が出たのでどうやらちつと氣が晴れた。地サア〳〵往なうと先に立つ。詞ム、然らば貴殿のお屋敷へ委細はあれでと地勘解由が式禮熊川はフシ皆うち連れて出でて行く。地跡に錦戸不思議の顏色。詞コレサ勘解由。かね〳〵某と心を合せ。義綱を阿房に仕込み。忠臣の奴輩に愛想つかさせ取つて押籠め。鶴喜代に跡目を願ひ後見となつて一家中を味方に附け。其上で鶴喜代を亡き者にせんと日頃の計略。大概に出來かゝつた所。忠義立てするアノ熊川ホ、ウ取込んだ我が心は。殿の爲と誑しこみ。國にある伊達泉兩人を片付けさせば。跡に氣ぶさいな者も無い五十四郡は心の儘。只何事も我が胸にちつとも氣遣ひ 地あられなと。惡事に固まる詞の下。宙を飛んで稻妻郷助 フシ息をはかりに駈來り 地斯くと見るより兩手を突き。詞ヤア御兩人共是に御入り。殿樣の御用あつてお館へ參りし所何かは知らず國元より早馬。早駕籠上を下。何分殿樣が御座なくてはと存じ息を切つて立歸ると地言ふもひい〳〵〳〵 フシずた〳〵息。詞ホウ出かした〳〵。我々が御供は人の目立つは御爲ならず。汝は館へ裏口より片時も早く御供申せ。地早く〳〵に稻妻が。フシはつとばかりに奥の方。地折から歸る風之助錦戸見るよりコリヤ荒灘。詞日頃言付け置きしは爰。外に供なき冠者太郎。跡より追付き道中にて人知れず討放せ。コリヤ必ずぬかるな。地合點と風之助道を フシ早めて追うて行く。かゝる所へ貝田が若黨有村金助。色眞靑に駈來り。詞若旦那を御供し歸る麓の岨傳ひ。羽色餘鳥に異る山鳥。人も恐れず岩の上。固よりあどなき若旦那。手取りにせんとなされしに。ぱつと立つたる跡を追ひ。山路へ追駈け

御入りあれどかいくれに行方知れず。松島様の御歎き過ちあつてはいかゞぞと。熊川殿にお頼み申し。數多の下部は手分けして。尋ぬる隙に右の様子お知らせ申さん爲暮に及ばゝ氣遣はしお旦那にも御出であれと フシ言ひ捨てて馳り行く。地 刑部も悔り貝田勘解由。詞 心悪な我が倅古狼野干の所爲なるか。何にもせよ捨置かれず。地 刑部殿には義綱の有無の音信相待たれよと駈出す心も夕陽の日影を追うてぞ。三重 へかけり行く 地 岩間谷陰咲き揃ふ花踏みちらす韋駄天走り。我が子を尋ぬる氣はそゞろ フシ 駈け行く坂中 地 物こそ見ゆれと立寄り見れば。若黨金助のたれ伏したる骸は血まぶれ。見るよりくわつと怒りの眼。詞 ヤア主に忠無き卑怯者と。地 死骸を谷へはつたと蹴込み。詞 必定猪狼の仕業ならん。たとへ天狗の所爲なりとも。大丈夫の一心に。何ぞ

求め得ざるべき。峯を崩し水を穿つても我が子の敵。地 微塵になさで置くべきかと。眼血走り氣は半亂駈け行くこなたの洞穴より。詞 ヤア暫く貝田勘解由。汝を待つ事やゝ久し。對面せんと聲を掛け。地 立出づる其形相。葎の髪を振亂し。身は白狼の革衣眉毛漏れ フシ 來る眼の光。詞 ムヽ扨は家來を害し。倅源之助を奪ひしは汝が仕業よな。サア倅が生死白狀せよと。地 はつたと白眼めばにつこと笑ひ。詞 ホヽ竹の林に住む虎は勢ひ猛きものなれど。我が子の別れを悲しみては。千里に功ある足痿えて。一歩を成す事能はずとや。さしもに勇なる貝田なれども。恩愛の道捨てがたき。心を計つて一子を取り。此山中へ釣り寄せしは。大望の片腕とも頼まん爲の我が計らひ。元某は常陸の大椽國香が末子。常陸之助國雄と言ふ者。汝が主人義綱は陸奥守秀衡が嫡孫。我が父

國香は隣國にて。互に武威を爭ひて。地 數度の合戰軍慮を磨き。軍に勝利の時もあり。又は敵の方便に乘り。詞 味方追はるゝ折もあり。蝸牛の角の爭ひも。天の成せる運命は。いかなる猛將勇者なりとも。叶はぬ時節か 地 闇々と。秀衡が謀に思はぬ深入り伏兵ども。一度に起つて亂戰に。詞 父を始め兄國光。宗徒の郎等一騎も殘らず討死と聞いたる時の我が無念。馳せ着いて父の仇。弔ひ軍せんものと。心はやれど幼稚の某。頼みがたなき人心。恩顧の家來も皆。散り〳〵時節謀つて秀衡を。一太刀恨みん其爲に。跡を晦まし國を立退き。六十餘州を遍歴し。深山幽谷に身を凝らし。習ひ覺えし妖術幻術。魏の孟徳を悩ませし左慈が傳ふる稀代の妙術。隱るゝ時は芥子にも入り。地 また現はせば天地に跨り。心の儘に身を變じ。詞 神變稀代心の儘。錦戸刑部と心

を合せ。國を奪はん汝が胸中。計り知つたる我が術にて。おびき寄せしも心を合せ。地秀衡が末孫を討つて亡父へ手向けん爲。勇猛智謀は汝に在り。我が妙術を添ふるならば龍に翼を生ずる如し。大望成就疑ひなしと。胸中見抜きし フシ稀代の曲者。詞ホヽ天晴なる汝が詞。我が大望を見透す上は何をか包まん。錦戸が巧みに與するは彼が權威を借らん爲。地事成就せば打殺し。五十四郡を手に握らば一天四海も一摑み。詞冠者太郎が家に傳はる亂れ髮といふ一陽。疾くより奪ひ身を放さず。刀紛失の次第惰弱の身持ち。歸つて國へ通達すれば館の騷ぎの虛に乘つて。事を謀る方便は樣々ハヽヽヽ 地面白やと猛惡に。悦ぶ國雄も勇み立ちホヽヽホ心地よき强勇豪傑。詞返し與ふる源之助。子孫の榮え請取られよと。フシ引立て出づる源之助。親の工みも夢現。別れ散つたる家來ども追々尋ね見付ける人影。詞ヤアお旦那是に若旦那と。地立寄る下部を拔打ちに右とフシ左へ蹴飛ばし。詞怪しめられては事の破れ。只狼の難に遭ひしと言ひふらすも。密事の血判。やがて再會々々と。地立別れたる深山路や。能はぬ望みは童に。花咲きまじる躑躅山我が家へこそは 三重へ立歸る

第二

地夜目にきらめく門構へ磨き立てたる金物の。紋も羽を伸す竹の丸冠者太郎義綱の上屋敷。用心嚴しき拍子木の音さへ澄みてフシしん／＼たり。色と酒とに現なき身は空蟬のもぬけ殼。高尾が肩に義綱公もつれもつるゝ千鳥足。跡に付添ふ稻妻荒灘。門外近く立留り。詞申し殿樣。爰がもうお屋敷現ないお姿では御家來中の見る目も氣の毒。心をお付け遊ばせと。地いへどたわいもぶら／＼眠り。詞アイヤ申し高尾樣。其樣に氣の毒がる事はない。假令どうなされうが。皆殿の御家來ばかり怖い者は一人もない。ドレ御門を開かせんと。地荒灘は門の戶びら。割れるばかりに打ちたゝき。詞殿樣只今御歸館なるぞ。御門を早く開かれいと。地言へどひつそと靜まつて フシ答へる人もなかりける。地荒灘はむくりを煮やし。詞コリヤヤイ是程にわめいても返事もせぬは寢入つて居るな。うぬらが役は何だと思ふ。御門の開閉するばかりで御扶持を食つて居るではないか。その殿の御歸館に。たわいもない寢とぼけめ等ど性根付けずは荒灘が門打碎いて御供せうか。獄道めらと 地どつてう聲俄に騷ぐ御門內さつと一度に高提灯はせ違ふ人音足音 フシ思ひがけなく表は悔り。地門內より聲高く。詞御門番は伊達ノ治郎明衡。仔

細あつて相勤むる所に。理不盡に門を開けなんどとは何者なるぞ。眞直ぐに名を名乘れと。地詞に仰天荒灘が。暴風に遭ひし心地にて皆々フシ答へもなかりけり。詞ム、聞えた京童のざれ深く。田舍武士とて嬲るよな。急度詮議もすべきなれど。一大事の評議最中其儘に打捨て置く。ヤア〳〵者ども御門を嚴しく相守れと。地聲諸共にしめる戸の。フシ貫木入れたる詞の錠。地稻妻は氣をいため。詞コレ〳〵荒灘。何にもせよ我が君を。館へ御入れ申さずば事の樣子が氣遣ひな。裏門から御供せん。イザ御出でと御手を取る地高尾も共に氣もそゞろ裾もほら〳〵踏みかへす裏の御門へへ急ぎ行くフシ廻れば道も遠目から。星をあざむく高提灯。螢かとばかり人々は只うつとりと詠めゐる。地鶴助は詮方なさ。御門の扉にひそ〳〵聲。詞此御門はどなたのお固め。義綱公御歸館なれども。表門は明衛殿お固め故御入り叶はず。何卒密かに此門より御入りある樣賴み入ると。地聲より早く高塀よりずつと見越すは名も高き和泉小治郎定倉。詞ヤア義綱公の御歸館とは心得ず。此定倉が主君と申す。冠者太郎義綱公は五十四郡の御主。西に津島の冠者。東には伊達ノ冠者。靜謐の御代には國の固め。戰場に出馬の時は百萬騎の大將たり。それに何ぞや女童を引連れて。ム、コリヤ我が君を放埒なりと世間へ流布させん爲。惡人共のはからひよな。地錦戸貝田が知らせにてお家の重寶。亂れ髮の刀紛失と追々知らせ。必定逆意の者共が騷ぎに紛れ我が君の。御身の程も覺束なし。詞君は館に。あるとも。無きとも知れざるも又佞人ばらの心を探る一方便と。御門を固め此通り見れば足弱を連れし旅人と見ゆる。門前にうろついて人に見咎められぬ樣。早く立去れ〳〵と。地仔細ありげな定倉が。詞と共に門内もひつそと。フシ鎭まり音もなし。地人々案に相違して。スヱテ心を痛むる其中に。寢ぼれ聲なる義綱公。詞御家老衆の例の堅み。大切がる此門も。島原の大門ほどには我等嬉しう思はぬ〳〵。イヤ又。出口は和らかみが格別。されば廓中先生達の御託宣に。唄都島原出口の柳。かそやれ〳〵此柳。サツサかそやれ此柳。詞なぞとやつた所はたまらぬ〳〵と。地現たわいもフシなかりけり。地隙を窺ひ荒灘が義綱目がけ拔き刀。目早く稻妻引きずりのけ。詞ハテ心得ぬ風之助。御主君を討ち奉る極惡人。コリヤうぬ誰ぞに賴まれたな。ヲヽ知れた事賴まれたが。それを汝にいふものか。打放した跡で言うて聞かさう先づうぬからと地切込む刀。まつかせ合點と拔き合せ。打合ひ打合ふ白

刃と白刃。電光石火稲妻が手練に刀打落され。逃行く荒灘後袈裟フシ二つになつて死してけり。地ホ、天晴手柄と小治郎定倉。詞當座の褒美と。地投げこす一通詞委細はそれに早や行けと。地詞は何かフシしら刃の血しほ。地一先づ爰を高尾様。アイ〳〵とかいしよげに小褄引上げ我が夫の御手を引くもなまめける。姿の盛り花紅葉。タ、キカ、リ色にたわいも現なき君を伴ふ稲妻が忠義は今に 三重

第三

地謀計は一旦の利潤。神明町に一構へは貝田勘解由直勝が屋敷。義綱公の館の内分けて目に立つ華麗の造り。手を盡したる奥の間は。浮べる雲の金襖龍に翼の出頭は。フシ誰並ぶべくも見えざりけり。地ちよつと掃くのも四五人が。草臥れる程廣い間に狭い。女氣陰の間の。フシ奉公箒持ちながら詞コレお綱。此様に朝から晩まで忙しいお屋敷が。廣い京にもありやせまい。爰から近い北野様へ。一寸参る事さへ叶はぬ。ソレイノ忙しい中へ心も無う。錦戸刑部様が。三日にあげずお出でなされて。旦那様と圍ひの内。何やら二人さし向ひ。人にお隠しなさるゝはどうでろくな事ではあるまい。ヲ、ろくでない事いはうならお館様はうか〳〵と傾城を買ひ過し。此間から行方が知れず。お大名の駈落でも。鑓長刀の持手は無し。お供の衆はあるまいし。マア危い事ぢやないかいなう。ホンニソレあぶない次手にこちの若旦那。船岡山の歸りがけ松島様におはぐれなされ。蓮臺野の片脇で。狼に取りまかれてござつたを。漸う連れましてお歸りなされた。しかし狼で仕合せ。アノマ美しい若旦那。狐などが取巻いたら跡が疵物になるならうおむつ。サレバイノ。どこに思ひ入れがあるか。熊川とやらいふ怖い顔な人に。狐が憑いてそぞろ言。それを祈り鎮めると狸の様な山伏が。憎てらしい高慢顔。地狐やら。狸やら狼やらであへかへす。詞狼より恐しい。旦那様のお目玉を。地貰はぬ様と段々に。掃除フシしながら次へ行く。地襖明けると摺足し。脇目もふらず源之助。長地屋敷の内もあぶ〳〵と若は色かへぬ松島が。フシ跡に付添ひ立出づれば。詞隠れもない大名。太郎冠者あるかやい。〳〵。來たか〳〵。コレお前にと言ふのぢやわいなう。エ、覺えの悪い人。マア一度初手から仕直さう。サア〳〵早う立ちやいなう。アイ〳〵。そんならあとを致しませう。昨夕お前が行方なうおなりなされた其時に。はつと思うた悲しさと。お歸りなされた嬉しさと。地何やらかやらで持病の癪。ちつとの間お待ちなされ。お氣が盡

きたらお菓子でも。詞イヤ／＼欲しうない構やんな。きつう癪が痛むなら灸をすゑてやらうかや。モ熱いが辛抱しやるかと。地言ふ顔つく／＼打詠め。嬉しい今の其お詞。夫婦と思し召せばこそ。愚しいお心にもたんと案じて。フシ下さんす。思ひ出すも味氣ない。お父様と父様が言ひ約束の無い先から。私が心に極めた殿御。女冥加に叶うたのぢやと。思ふ内早や睦び月。祝言をして程もなう健忘とやらいふ病。神や佛のお力で御本復は遊ばしても。御一門のお出會に。つまらぬ事をおつしやる度。おいとしいやら。悲しいやら。此後とても侮られ。住む甲斐も無いお身の上。思ひやられて悲しいと スヱテ悔み涙の。折からに。地奥よりしづ／＼出で來るは明衡が一子千賀之助。立派に出立つ フシ旅裝束。地松島見るより是は／＼。詞直様お立ち遊ばすか。此頃何かに取紛れ問はせの文も認めず。國では兄弟同然に仲の好かつた文字摺様。お前がお迎へ遊ばせば私が爲には大事の姉様。どなた様へもお前から。いかにも／＼。誰々へも宜きに傳へん。源之助殿にも御堅固にと。地いへどうつかり氣の毒を。紛らす松島勝手口。フシ連れて見送り出でて行く。詞サア是からおれが一人遊び。鼓も太鼓も爰にあると。地留うた事は奇特にも。鼓取上げ聲張り上げ。謠抑も是は桓武天皇九代の後胤。平の知盛。幽靈なり。ナホス 詞ハア、わしが好きの強い伯父様が出てござつた。コリヤ面白い／＼。謠打物業にて叶ふまじと。珠數さら／＼と ナホスコハリ 押し揉んで。跡より出づる奇妙院。謠いかなる天魔鬼神なりとも。ナホス 地祈り伏せんずフシ眼付き。地きよろ／＼目して熊川が。何を聞いてか高笑ひ。詞ハ、、、コリヤをかしい／＼。日頃堅い顔してゐる。六條の左近殿が。聖護院のお辰女郎を嫁に取る。コリヤ取持ちに行かずばなるまい。地先づ。盃は三々九度。祝儀も濟んで床の内。しめてからみし藤の森。松の千年と契りしを。小女郎が聞いて悋氣の燒餅一つ參れ兵衞殿。ま一つ參れ兵衞殿。詞ヤア伯父様その餅食たか。エ、汚な。三下り唄北野を過ぎて柏野や。思ひ内野にあればこそ。つめつた跡の紫野。後は互に睦言の。未來を契る連臺野。小褄引上げ引きしめて。裾はひら／＼平野の宮へ。思ひなん／＼七野の社。緣を切れとは。ナホス詞エ、胴欲ぢやナ。地わしや何ぼでも離りやせぬ。殺して置いて行かしやんせと。泣いつ。笑ひつ現なくとんと。フシ倒れて高鼾。地奇妙院は一心不亂祈れど驗あらざれば。源之助は精盡かし。詞エ、鈍な山伏ぢや。二人面白う遊ぶのに。おのれが邪魔を仕をるので。伯父様も

つい寝入つた。サア〳〵とつと歸れ〳〵。イヽヤ歸るまい。貝田殿の頼みによつて。此病人を本性にする。若輩者の知る事ならず。默つて居ろと睨め付ける。ワアイ病人を癒すはお醫者様ぢやわい。わいらがそんな事したてて一つも効く事ぢやない。邪魔になる早う歸れ。シヤ小癪なる素丁稚め。某が術を以て空飛ぶ鳥も祈り落す。世事に分らぬ大馬鹿に言ひ聞かすには及ばねども。刑部殿の頼みにより。義綱の曲輪通ひ。伽羅の下駄に呪咀の文を書き履かせたる故にこそ。眞心蕩けて本性なし。まつた是を癒さんには。懐中したる祕書の一巻。此中に一つの良藥。是を呑ませば義綱も。元の通りに正しくなる。かく萬事に亘る某。魑魅魍魎を退けんは。掌をもつて大地を打つよりいと易し。地イデ〳〵驗を見せんとて又莿高を押しもめば。源之助は撥押取り。謡今の蛇身を祈る上は。何の恨みかあり明の。撞鐘こそ。すは〳〵動くぞ祈れたゞ〳〵。引くや手々に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の黑煙を立ててぞ祈りける。ナホス 地 祈り祈られ源五兵衛。恐しや幣帛に。三十番神まし〳〵て魑魅鬼神は穢はしや出でよ〳〵と責め給ふぞや。アラ腹立ちや苦しやと。奇妙院が首筋摑み座敷へどうど投付けて。覆ひ重る肥滿のからだ大山を負うたる如く指を屈めん様もなくフシカヽリ苦しむ内に。聲高く。謡尋ねても〳〵。此上嵐の雲に乗りて。龍女は南方に飛去り行けば。龍神は猿澤の池の青波蹴立てナホス蹴立てて 地滅多無性に踏付けられ。目口を張つて奇妙院。フシ其儘息は絶えにけり。詞サア〳〵是からはおれが居間。其山伏を人形にして遊ばうではあるまいかと。地言ふ内よりも死骸をさし上げ。詞中の〳〵の小法師はなぜ背が低いぞ。まつから高いわ〳〵。地氣の抜けたのと氣違ひと。誰に心もおくの オクリ 間の襖へ押明け入りにけり 地斯くと様子もしろ書院。入來る渡會銀兵衛大場道益伴ひて。フシ座敷へ直れば。地それと案内に貝田勘解由。詞ホヽ、渡會殿御大儀千萬。シテかの一品は調ひましたかな。ハアいかにも〳〵。委細とつくと此道益老に相頼み。事成就の後には新地千石。證人はこの銀兵衛則ち證文も渡し置く。ナニ道益老。最前お頼み申した通り調合のかの毒藥。勘解由殿へお渡しあれと。地指圖に道益近く摺寄り。詞お頼みのかの毒藥は我等が家に傳はる祕法。醫の道は仁術にて。人の命を斷つ事は醫家には固き禁めなれども。國の爲との御事故調合は致せども。先づ何人にこの藥御用ひなさるゝや。地承つて上の事といぶかる顏色。詞ホ尤の尋ね。國

の爲家の爲。其毒藥を用ゆるは若殿鶴喜代君。エ、とは又何故。ヲ、錦戸刑部殿に此家國を横領させ。我々も諸共に國郡の主と成り。榮耀榮花をせん計略。スリヤ銘々が國の爲さ。ナニ鶴喜代君に毒藥とはお國を亂さん國賊共。長袖なれども忠義は忘れぬ大場道益。知行にほだされ非義非道に與せんや。地穢はしき奴輩と暫時も同席勿體なやと。つつ立上るを銀兵衛が立ち塞がつてどこへ〳〵。詞大事を聞かせ歸さうやと。地留めてもいつかな一徹老人貝田が拔打ち後袈裟。すぐに止めの。フシ一ゑぐり。詞ア、時代に合はぬ忠義立て。たとへ得心したとても打放さでは後日の難と。地懷中さがし取出す包。詞コレサ銀兵衛。此一包は貴殿に渡す。地豫てしめし合せし通り。ナソレ早く〳〵。ハア委細承知仕る。地追付け吉左右お知らせと フシ館をさして駈り行

く。地跡に勘解由は血押拭ひ。死骸片手に蹴上げる疊。さあらぬ體に傍へなる。臺子の釜へ打込む毒藥元の如くに蓋 フシ取繕ひ。詞ナニ松島。それにお居やるか。松島々々と呼ぶ聲に。地あいと返事も合の間の襖 フシ押明け手を突けば。詞ホ、嫁そちや先程よりそこに居るか。何ぞ樣子を聞いたか見たか。イ、エ。何にも。ム、知らぬぢやまで。イヤナニ松島。今朝より何かと用事繁くほつとりと退屈した。幸ひの釜の沸りそちが手前で薄茶一服。地點てくりやれと底意ある。舅の詞松島が。立寄る振の紅の。朱を奪ふや。紫の。服紗さばきもしをらしく。本フシカカリ フシ點つる茶筌の泡よりも。先へ消え行く命とは。心も付かず氣も付かず。行儀正しく フシ差出す。地茶椀取上げ貝田勘解由とつくと詠め。詞ム、色も變ぜず。ちつとも怪しき體もなきは。ハテ奇妙の

祕法。ハア、嬉しやこの毒藥を膳部に加へ進めなば。鶴喜代は卽時に落命。ハ、ハ、地心地よやと フシ高笑ひ。地聞いて恟り松島が。心は千々に浮島や水に フシ漂ふ思ひなり。詞コリヤ松島。とてもの事に此薄茶。其方そこにて獨り服せい。エ、。イヤサ驚く事はない。其方が父伊達明衡は義綱の一族。忠義立てする老耄め。鶴喜代を毒害しても刑部殿へ國の政道仰付けられなき内に。事露顯せば大望の妨げ。現在明衡が娘の其方。ヤモ生けて置いては夜が寢られぬ。樣子聞かうが聞くまいが。どうで助けぬそちが命。其毒藥を試みて。死んで見せるが舅へ孝行。地サア呑め。くらへと舅の詞。思ひがけなき松島は。暫し スヱテ途方に暮れけるが。地漸うに フシ顏を上げ。地明衡が娘の私。若君樣への毒害を。と〻樣へ洩さうかと。思召してのお疑ひ。無理とはさら

さら存じませねど。姫御前の身は生れてより三界に家無しとやら。夫を神とも佛とも。大事にするが世の敎へ。其夫の父上樣眞實ほんの父樣より。御大切に思ふものたとへどうした事にもせよ。お身の御難になる事を。何の人に洩さうぞ。未練に命惜しいとも 地微塵思ひはせぬけれど。心に懸るは我が夫の悉しいお心故女夫といふは名ばかりに。つひに一度の添寢さへ。馴染む程なほ頑是ない。氣にも私を女房ぢやと思うてござるがおいとしい。離れともない死にともない。何々の誓文で 詞人には言はぬ申しませぬ。地命を助けて給はれと口說いつ泣いつ。伏しをがみ。伏拜む手に露雫つたふ涙の瀧津浪。岩に堰かるゝ フシ風情なり。地かゝる所へ渡會銀兵衛色眞蒼に駈來れば。勘解由きつと見。詞ヤア合點の行かぬ貴殿の顏色。首尾よく毒害しおふせしか。アア心許なし何と／＼。されば／＼。直ぐ樣館へ馳着きかの膳番にしめし合せ。膳部に殘らず毒を入れ。サア仕濟ませしと思ふ所に。イヤモウ 地よい事には寸善尺魔。詞若殿の御手遊び枝珊瑚樹の鉢植が。微塵に割れしは心得ずと乳母政岡あやしめば。かの强力者の節之助。正しく毒に紛ひなし其頼人を白狀せよと。膳番川崎軍八が首筋摑んで手詰めの場所。遉老功の刑部殿急きにせいたる風情にて。軍八を眞二つ傍に居並ぶ近習小姓腰元茶道に至るまで。十人ばかり卽座に手討。白狀すべき手筋も切れ 地只今評議眞最中。いかが計らひ申さんやと。靑息吐息 フシ訴ふれば。地さしもの貝田も溜息つぎ。詞エエ十が九つしおほせしに殘念々々。さりながら素早き刑部の計ひにて。詮議の根を斷つたるは天晴の働き。しかし。政岡松が枝なんど鶴喜代が傍を離れねば。事を計るに便なし。ガ其毒藥を見出せしは。外に逆意の者ありと思はせん計ひなりと。却つて彼等に難題を言ひかけ。遠ざける謀計は刑部と兩人計らはれよ。暫時も猶豫なりがたし。早く／＼に 地渡會は。又引つかへし フシ駈り行く。詞嫁々コリヤ松島。斯く／＼しおほせねば猶の事。いよ／＼命は助けられぬ。覺悟して早く呑め。アイ。サア呑め。アイ。くらはぬか死女郞。サア。サア／＼と 地おひ廻され。悲しさつらさ一世の瀬戸際。褄ぐわらりと源之助拔く手も見せず松島が。肩先ずつぱと切下ぐる。ウンとばかりにかつぱと伏す。血刀逆手に取直しぐつと突込む左手の肋。日頃に變る立派の覺悟。フシ强氣の勘解由も恟り仰天。地手負ひは苦しき顏振上げ。詞日頃愚鈍の私が。かゝる有樣父上の御不審は御尤も。錦戸殿としめし合せ。勿體なくも主君を失ひ。國を奪は

ん御企ても。子孫の榮華にあらせん爲。地その萌しを鎮めん爲。いつぞやの大病を是幸ひと作り阿房。現なき身の行作も。主人を掠める冥罰は。倅に忽ち報いしと先非を悔いて本心に。お成りなさるゝ事もやと。詞心を付くれど此頃は。彌募る惡事の企て。父は子の爲に隱し。子は父の爲に隱すと。古語に引きかへ親と子の心々に隱しあふ。地不忠不義の御心。諫言せんにも情なや。詞明衡が娘松島。某が妻とすれば。女に引かされ大望の妨げなすかと思さんかと。地不便ながらもこの如く。手に掛けたるは女房の。緣に迷はぬ心の潔白。仕込みに仕込みし御企て。思ふ圖の外れしは。天道誠を照し給ふ。フシ是目前の。證ぞや。詞近き手本は船岡にて。鳥を取らんと眼前の。慾に迷ひて山深く。難に逢うたるまつその如く。地國郡の慾に耽り。我が身を忘れ深入し。

終には御身を亡し給はん。淺ましや父の惡事の根本は。私と云ふ子故の闇。その迷ひの根葉を斷つ我が。生害は先祖代々。傳はる貝田の家の苗字。汚さじものと一心に。思ひ込んだる孝の道。心の迷ひをふつつと切り。惡事を思ひ止つてたべと。孝と忠義と二つ三つ弱り行く身の松島が。扨はさうしたお心か。さうとは知らず今までも。御病氣故の現言。どうぞ本復ある樣と鳥の鳴かぬ日はあれど泣いて祈らぬ神樣や。佛樣まで御苦勞を懸けぬ願ひもなかりしに。今の立派なお詞を悅ぶ甲斐も情ないコレ。此お姿は何事ぞ。此世の緣は薄くとも。未來はやつぱり夫婦ぞやと。痛手も厭はず縋り付きいたはる息も。絕え〲に賴み。すくなき フシ其風情。地强惡不敵の貝田勘解由。詞ハハ、、、ハテほざいたり不孝者。子が死ならが親が死なうが。思ひ込んだる我が

大望。いつかな〲翻さぬ。親に逆らう天罰にてくたばるは不孝の罰。思ひの儘に苦痛をひろげと。地二人をはつたと踏飛し フシ見返りもせず入りにける。地樣子とつくと物陰よりぬつと出でたる源五兵衞。詞貝田が胸中合點行かず事を謀らん其爲に。狂氣の體に何もかも聞き拔いたれば。遁れぬ勘解由。地イデ一摑みと駈行く勢ひ。マア〲待つた源五兵衞殿と苦しき體取縋り。詞忠義に凝つたる貴殿とは。知つたる故に法印が。工みの次第あど打つて。白狀させしも我が父の。百分が一の罪亡し。地我も少しの忠義ぞや。詞主に叛く父勘解由果ては刄の錆屑と。なり給はんとは思へども。眼前親の憂き目をば。何と見て居られうぞ。地相果つるとも魂は。四十九日が其間。此土を去らぬと聞くなれば。死しても見ゆる我が悲しみ。せめて暫しが內なりとも父の命を延

べてたべコレ。今はの際の願ひぞや。コレ手を合す源五殿お情お慈悲と身を投伏し歎けば共に松島が。合す兩手も弱々と今を限りの二人が體。孝心貞女の節義には。さしもに荒き熊川も。目をしばたゝき居たりしが。佞惡邪智の貝田が伜に。斯くも忠孝揃ひたる。天晴健氣の若者よな。親は子故に迷ひもせで子は親故に迷ひしよな。赦しがたき勘解由なれども汝が孝心厚きに免じ。けふの様子は何事も知らず覺えぬ氣違ひの。目にはこぼさぬ一雫。ハア、、、、有難涙末期の水。引取る息も一時に哀れ。はかなき。フシ最期なり。地ほろりとこぼす勇者の涙。しをるる熊川庭先へ。貝田が下知にて數多の家來。ばら〳〵と追取り卷き。詞ヤア伴氣ちがひの源五兵衛。遁すなやらじと呼ばはつたり。詞ム、ハ、、、常の力に百倍増し。氣違ひ力の源五兵衛ならば手柄に留めて見よと。地庭へひらりと右左。捕つたと掛かるを引寄せ〳〵ばらり〳〵と。三重へ人礫地强力手練の働きに。コリヤ叶はぬと フシ皆ちり〳〵。地思ひがけなき後より頭目當に打付くる。釜の熱湯毒氣に噎び思はず尻居にどつかと伏す。透へ切込む貝田が刀受けたる强力手水鉢。微塵になさんと振上ぐる。さすがの貝田氣を呑まれ迯入る跡へ又むら〳〵。出合ふ大勢打付くる石に打たれて フシ人の鮨。地我が身もどうとふし〳〵に。染込む毒氣に眼も眩み。勇氣も碎け無念の齒がみ。詞エ、口惜しや殘念や。やみ〳〵と毒藥に。命を果すか奇怪や。此上は何千萬日本國が寄せくるとも死物狂ひのあばれ死。地敵の屋敷に我が屍。いつかな殘さぬ人種の。有らん限りと氣を固め踏出す。足もたぢ〳〵〳〵弱る兩足踏みしめ〳〵。支ゆる奴ばらはりのけ蹴殺し踏殺し。人無き原を行く如く。萬夫不當の豪傑も運つきの輪や熊川が武勇の程こそ三重へゆゝしけれ

第　四

地姫氏國と書きし寶誌こそ四百餘州の粹ならん。フシ何國はあれど。取分けて。都の水で磨き上げ娘盛りの品者が オクリ 前垂れ 小オクリ たすき。掛けまくも髪形さへ手品さへ。和らかさうな豆腐屋の。内を手傳ふ小息子が。フシ水の垂るのを燒き立てる。地おかべ一重の隣には。何する人としら浪かしかとは見えぬ男振り。フシ されども此人甞をば何と烏羽玉の。夜ならで目覺め給はぬは。いと不審多きすぎはひなり。地中間とも侍とも。わからぬ腰付せいひつ合羽。あたりうそ〳〵立止り。詞浮世渡平はこの宅な。地在宿ならば御意得たし。詞ア、誰ぢや喧しい。

用があるなら明朝ござれ。ム、昨夜の義理を取りに來たのか晩には是非とも行く程に。其時に一所に濟すイヤ／＼左樣の用事でなし。地自他共に御意得たし。詞是非逢ふ氣かそんなら其戸をぐつと押した。ア、コレ／＼靜かにしようぞこぼれ物がごんすぞや。アリヤこそ溲瓶引つくり覆した。地麁相な人とぬつと出す顏はをかしう惡光り。素人の燒いた樂燒の中にぎろつく目を擦り／＼。詞エ門兵衛樣さて悽じい降りでござります。そしてマア何ぞ用でもござりますか。ヲ、サ／＼地密々の用事もあれば。内へ這入つて其樣子。詞イエ／＼内は雨がだゝ拔け。外の方が增しでごんす。然らば是で申付けん。主人錦戸刑部殿其方へお賴みなされたきは餘の儀でもない。隣の豆腐屋は。傾城高尾が親里なれば。地冠者太郎諸共に尋ね來らんは必定其時には折を窺ひ人知れず二人共に刺殺し捨てられよ。此儀首尾よう仕おほせなば某が推擧して。侍に取立てる。詞斯樣の事を申付けるも。先日屋敷で博の節。二三度の出會に。地汝が魂見拔きし故偏に奉公勵まれよ。詞畏りました。スリヤ隣の豆腐屋は。ヲ、サ高尾が親里若しも尋ねて來まいものでもなし。來た時には。ハテ氣遣ひさんすな。貧乏搖ぎもさせませぬ。ハテさて小氣味のよい男。地然らば隨分手ぬかり無う。萬端貴殿を賴入る。詞近日ゆる／＼御意得んと。詞は天晴萬石取り。腰に二腰さしこなす。銀拵へも胡散なる。なまりフシ散らしてかへりけり。詞ようお出でなされました。コレ屋敷によいのが出來たらかならず知らして貰ひましよぞえ。沙汰無しにしよまいぞえ。ア併しあいつも錢なしぢや。ちつと負けると小言ばかり。エ、あつたら夢を覺された。ま一寢入り見知らそと地入るよりはやく高鼾オクリ着のみへ着の儘氣散じなり。詞サア／＼申し重三樣。大分仕事のはかが行た。地ちつと休んでくださんせ。詞イエ／＼お構ひなされますな。女氣の無い私が内。湯ぢやの茶ぢやのと親子とも。毎度お世話になりまする。コリヤそのお禮でござります。七兵衛殿は病氣で宿へさがつてゐられるげなその間は御遠慮無う。お遣ひなされて下さりませ。まだよつ程此豆腐。手序にみな片付けませう。そんならさうして下さんせ。私も串を刺いて仕舞を。イヤ申し重三樣。斯うしてお前とから並んで。此樣に精出すも。世帶の稽古して見ると。ほんに嬉しうござんする。地初めて見染めた其時に。いとしらしいと思うたが。癪を覺えた。始めにて。廻らぬ筆の跡や先。譯の無いのが緣の端。緣求めて寐てそして。寐る度毎に可愛さの。

十寸鏡取るその隙も。寐た間も忘れた事は無い 詞ア、コレ〳〵。豆腐を其様に振廻すと。私が身内は眞白に。人の白あへが出來まする。ホンニ嬉しいお志。ちつとも仇には存じませぬ。元私は小さい時。餘所へ養子に參りましたが。先が皆死果てて。此頃親仁を尋ねて參り。一月餘り京都の住居。近所に馴染といふは無し。南無三豆腐を眞黒にした。モウ親身といふは親仁ばかり。御存じの通りのあゝいふ氣性。ヤ申しお幾樣え此上ながらお頼み申します。あれまだあんな固くろしい。他人の様な事ばかり。お前の心に掛子がある。詞かけごも何にもござりませぬ。ほんにかはゆうござります。其ござりますがわたしやいや。そんなら可愛い女房ども。私が心は此焼豆腐。地たとへ火の中水の底。詞そりやほん〳〵でござんすか。幸ひ酒も爰にある。改めて内祝言。必ず嘘をいはしやんすな。何の嘘を誰が言を。そんならほんまに此方の人。女房ども。ヲ、嬉しやと抱き付き。締めからみたる若藤や。若紫の若女夫面白盛り フシ花盛り。詞ア、イヤ晝日中このやうに。ひつついても居られまい。お袋様は今朝から南禪寺の方丈様へ。ア、雨もどうやら止みさうな。地幸ひ豆腐も出來てある。詞お迎ひがてら往て來うと。地あぢに世話をば焼豆腐。提げていそ〳〵 フシ出でて行く。地日影はつらく忍ぶ身は。文彌薄におぢて菅の蓑。み傘と申せみ侍。賤の姿にしよんぼりと。高尾を先に義綱は。とある フシ小陰に立休らひ。詞ヤコレ高尾。冠者太郎義綱ともいはるゝ身が。烏おどしの様な形をして。そなたと斯うして道行は。此頃で無い大當り。今日の趣向を皆に見せたい。呼んでこい〳〵。アイ〳〵イヤ申し殿様。モウ爰が私が家。サア〳〵お入り遊ばしませ。又この鄕助殿は何してぞと。地言ひつゝ寄つて蓑笠を フシぬがせ申せば義綱公。ずつと通つて誰ぞ居ぬか。誰ぞ居ぬか。爰へ來て足洗へ。つひにして見ぬ世話事で。今日は大分草臥れたサア〳〵早うも。地夢現。恟りしながら娘のお幾手盥に汲む豆腐の湯。お足に觸る和らかな。手先にふつと。詞ム、穢い家に似合はぬ奇麗な娘。一夜の情をかけてくれう悦べ〳〵。今の褒美に何をがな。ヲ、幸ひ〳〵。今まで履いたそれ。その下駄。あたゝまりのあるのを遣はすぞ。是が妹脊の固めの證。後日に嫌と言はさぬ様に。幇間どもが常にいふ。下駄をしつかり預けたぞ。コリヤ誰かある案内せいと。地上座へ直るも千鳥足。門より高尾が。詞コレ妹。久しぶりの姉が顔。見忘れはしやらぬか。何のマア忘れませう。地姉様よう來て下さんし

た。此間からお前の噂。とやから聞いて案じたが。詞お前の事を言出すと母様の不機嫌。モウ何處にどうして居やんすぞと案じぬ日はござんせぬ。が母様はさつきにから。南禪寺の方丈様へ。往かしやんして留守なれば。お戻り次第よいやうに。私が言はう必ず案じさしやんすなえ。ヲ、よう言うてたもつた。曲輪へ往て逢はぬ中。テモマア大人しうなりやつたの。それなら母様はお留守かや。イヤコレ此お方は大事のお身跡からお供も來るほどに。ちつとの間なりと奥の間で。御休息さしましたいと。地どうやら譯もある體を。見て取るお幾は手をつかへ。詞見苦しけれど奥の間へイザ御入りとすゝめられ。ヲ、行かう〳〵サア地高尾もおぢやと打連れて。一間のフシ内へ入り給ふ。地道におくれて稻妻が息もせき尋ぬる黃昏時。南禪寺の門前は爰かと人にとうふ屋の。門をそこ〻行迷ふ戻りかゝりしフシ主のお澤。ア、イヤ申し卒爾ながら物問ひませうと。地見合はす顏。詞エ、お前は神浪山左衞門様ではござりませぬか。ヤこな様はお澤様。テモマア久しぶりでお達者な顏。お前も御無事でお嬉しや。サ、、、マア〳〵フシ此方へと我が家の内。山左衞門取りあへず。詞ヤナニお澤殿。思ひ出せば十六年以前。若氣の至りと女に馴染み。因果と懷胎。生れ落すと女は相果て。アいか様ナア若いお人の萎たらと。乳呑子抱へうろ〳〵さつしやる氣の毒さ。しかも辰の年。辰の月辰の日辰の刻の。ほんに珍らしい誕生。幸ひ此方に乳もあり。姉と一所に呑ます內。斷りも無うお前は家出。滅相な人ぢやと思うたが。死んだ佛のいはしやるには。餘所の子を世話にするも。一方ならぬ他生の緣必ず麁末に召さるなと。地夫婦して育てる中其愛らしさ可愛らしさ。何時ともなしに此方の娘。詞成程其節我ら旅より歸りお尋ね申せど行方知れず。不思議な事で今日といふ今日。廻り逢うたも古主の御恩。シテ其娘は何と致したな。サアお腹一つ痛ませず。疱瘡痲疹も輕う仕舞ひ。自慢ぢやないが此界隈に。ま一人と無いよい娘。シテマアお前は何故に。アアイヤ拙者只今仕官の身。稻妻鄕助と名を改め。お主の供して此邊りに。傾城高尾の親里尋ね。何とおつしやります傾城高尾の親里を尋ねてか。イカニモヲ、其高尾といふはわしが娘のお種ぢやわいの。エ、さうとは知らいで是はしたり。コレハしたりコレハしたりと地絕えて久しき名乘合ひ。問うつ問はれつ憂き事のつもるフシ數々話合ひ。地樣子聞きぬる娘のお幾。扨はほんまの父様か。お懷しやと取縋る。別れ程經し親子の名乘り。流

石剛氣の鄕助も。親は泣寄り目に涙。大
つげなうて哀れなり。母の聲ぞと聞くよ
りも。高尾は奥より走り出で。おなつか
しや母樣苦界の身の悲しさは。長の年月
音信せず。ようまめで居て下さんした。
地殿樣のお世話にて曲輪を出でし程もな
う。御身に迫る憂き難儀。暫しの內の御
不自由と大事の殿樣お供してお前を目當
てに。詞ム、そんなら何と言ふ殿樣のお
供して。アイさつきにから奥の間にと。
地聞いて心も落付く鄕助。何思ひけん母
親は。高尾がフシ手を取り門の口。地突
出して戶をぴつしやり。詞そなたは爰に
置く事ならぬ。何方へなりとも勝手に行
けと。詞に悔り。エ、そりや又なぜでご
さんする〳〵。地假令どういふ事あ
りとも殿樣の傍放れ。脇へとては行く事
いや。詞惡い事があるならば堪忍して下
さんせ〳〵。コレ母樣。地詫言してたも

妹と。スヱおろ〳〵涙ぞフシ道理なり。
詞妹構ふな神浪樣もお構ひなされな。ヤ
イ高尾科はその身に覺えある筈。東國に
て誰あらう。肩も並ぶる人もなき冠者太
郞義綱公。お膝を入るゝ所も無う。見苦し
い破屋へお入りなさるは誰故ぢや。今こ
そは此身なれども。古へは高橋幸內敎俊
とて。秀衡公の御扶持人。いかに流浪し
たればとて。現在の汝ゆゑお家を亂し殿
樣に。御惡名付けさせて。過ぎ逝かれた
幸內殿。先祖へ對し言譯なし。御家中廣
き其中に。忠臣の武士あらば汝を殺して
惡道の。根を絕つ人のありもやせんと。
母が覺悟はコレ爰にと。地佛壇より取出
す位牌。詞俗名高尾と記せしは。今日は
娘が殺さるゝか明日は死骸を送るかと。
我が子の死ぬるを待兼ぬるも。古主の御
家が大切さ。夫もあの世で御主君へフシ
心ばかりの申譯。詞片時も殿樣と御一所

に置く事ならぬ。うろたへて爰らに居ば。
七生までの勘當ぢやぞ。サア〳〵皆樣奥
へ〳〵と。地母の詞は理の當然押して留
めん樣もなく。跡に心は殘れども。是非
なくフシ奥へ入りにけり。外に。しよん
ぼり。枯れ紅葉。思ひ高尾がとやかうと。
スヱ思案に思案さだまらず。詞エ、胴慾ぢ
やわいなア母樣。殿樣をお主とは私もよ
う知つてゐる。地逢ひ初めてから二三度
は御意見もしたれど。つい其內にいとし
うなり。一日お顏を見ぬ時は私は。人の
心も無う。お主も家來も打忘れ。タ、キ夜
每々々添ひぶしの飽かぬ別れの曉に。往
なうとあるを引きとめて。ついそれなり
に居續けが。かうじ〳〵てお身の仇皆。
私からの事なれば。いつそ身を投げ死な
うにも。お腹に宿したこのやゝは。私が
子でもお主樣。死ぬるにも死なれぬ身。
どうぞそれまでは堪忍して。お傍に置い

て下さんせ。やいの〳〵と戸を叩き。悶え焦れて フシ泣き居たり。 地内はひつそと靜まりて。答へなければ涙をとゞめ。詞ア、さうぢや。何事も皆先世の業と。邊り見廻し拾ひ取る。小石を。 入るゝ袖袂。フシカヽリ駈け出でんとする後へ。ぬつと出でたる浮世渡平。片手に高尾を鷲掴み。我が家の内へ放り込み。其身も共に。入相時。蚊の泣く音さへほそ〴〵と。 近所洩れくる夜なべ唄。唄君と逢ふ夜の。障りは月夜。月も忍ぶか笠を召す。月も忍ぶか。笠を召す。 ナホス 詞ア、イヤ只今それへ參ります。 私はちと内證に用事を仕舞ふと直様それへ。お袋の言はるゝ一伍一什尤もぢやが。若い女中を只一人。外に置くのは危い物。高尾様〳〵〳〵。ハアコリヤもうこゝに人氣は無い。ア、氣遣ひな〳〵。というて奥には女ばつかり。此家を明けて出られもせず。どうしたものであらうなア。 いか様世界は味な物。殿のお傍に附添うて。片時放れぬあの高尾。義理詰めになつたれば別れねばならぬ時宜。又十六年前に別れた娘。縁あればこそ廻り合ひ。切つても切れぬ血筋の緣。和泉の小治郎定倉殿。某へ密かの書面。此度秩父の重忠公より御狀到來。その趣きは殿の御身持ち上聞に達し。御覺え宜しからず。されども先祖の戰功に感じ思召し。義綱が放埒の元は傾城高尾故。此女の首を打ち一家中の心を堅め。義綱を補佐すべし。大將の御前は重忠宜しく計らはんとの御内意。其方は人知れず。高尾を打つてくれよとの事。おのれやれお家の爲と請合ひしが。長の年月我が娘を世話にしてくれたお澤殿。其大恩のある人の。眞實の娘の高尾。どうマア是が殺されう。というて助け置く時は定倉殿の詞も無足。ハテ何としたものであらう。ソレ。我が娘のアノお幾。幸ひ年も似合ひ頃。高尾殿の身代りに。ム、さうぢや。さうぢやと立上り。 地思へば〳〵因果な娘。生れた年は母にはなれ。久し振りで廻り逢ふ父親が殺すとは。 いかなる業か報ひかと。人目なければどうと伏し聲を。フシ 立てずの忍び泣き。 地表に人音一寸遁れせめて暫しの命なと。かばふは恩愛あひの間の襖。引立て フシ入りにけり。我が家の中よりそつと出る。 渡平は跡の掛けがね締め。邊り見廻し隣の家。入るより早う高笑ひ。ハ、、、、コリヤモウお天氣でござります。倅は此方に居りませぬか。お袋様は看經か。ア、なむまみだ佛南無阿彌陀佛。ハアコリヤ皆お留守かえお留守かえ。そしてお客でもあつたかして盃や銚子鍋。エ、何かな。コリヤ私に呑めと言ふ事ぢやな。是は御馳走でござります。イエ〳〵。肴には及びませ

ぬ。エ何ぢや田樂を拵へて喰へ。アイ〳〵忝うござります。そんなら此燗鍋も爰へ乘せ。ア、コリヤ火が弱い炭を一杯取つてこうと。地餘所の勝手の委しいは何國の浦でも鰥の性根。我が物いらず。十能に一ぱいの炭。フシ打明けて。吹付ける中ぱつちりと。炭のはねるに悔りし。詞エエけたいな炭ぢや。すでに顏を燒かうとした。おれが顏に燒傷をしたら。玉子娘になるであろ。ヤ。ヤ。何ぢや美臭い。美臭いわ。貰い衆の弔ひの匂ひがする。何處ぢやの〳〵。ハテ不思議や。今この下駄のえならぬ匂ひ。最前使の詞と言ひ。正しく此家に冠者太郎。ム、ヨシ〳〵と。地一人點頭きさし足し。下駄取上げて土打拂ひ。傍に人もないしようの。明いた戸棚を幸ひと。そつと這入つてナホス内から戸を。ヲクリ仕濟しへ顏に忍び入る。フシかくとはいさやしら張の。行燈

提げて娘のお幾。裾もほら〳〵立出でて。詞此マア重三樣は何してぞ。エ、モ人の思ふ樣にもない。早う戻つてくれたがよいと。地日にいく度か取上げる。本フシ合せ。鏡も引きわくる。地母は奥より立出でて。詞お幾や。又髮を結ひ直しやつたか。身だしなみをきつうしやるの。ほんにそなたに言ひたい事。マア〳〵爰へちよつとおぢや。コレ。今までとは違ふぞや。實の父御の手前もあり。あの樣に育てたかと思はるゝも恥しい。といふは重三殿とそなたの中。あるまい事ではなけれども。心の知れぬアノ渡平殿。其子息の重三との緣組は。どうもつまらぬものぢやぞや。若い時の一盛り。面白い程飽きも早いコレ。わしが惡い事は言はぬ。マア一旦は退いて仕舞ひ。末ではどうともなるぞいのと。地母の意見を聞く悲しさ。皆尤もな フシ御事なれど。地重三樣と私

が中。未來までもといひかはし。必ず退くな退くまいと。雛樣までを誓紙に入れ。堅い約束今更に退かれうかコレ母樣。是ばつかりは堪忍してどうぞ添はして下さんせと。娘心の後や先つまらぬ樣でも義理は義理。立て通す フシ氣ぞ道理なる。地奥より出づる神浪は。母を押退けお幾が胸ぐら取つて引据ゑ。詞ヤイ爰な恩知らずの女郎め。最前より始終の樣子は皆聞いた。大恩受けたお袋の。事を分けたる今の意見。よう口答へひろいだな。イヤコレお袋。此娘にさつぱりと。勘當をして仕舞はつしやれ。實の親の折檻は。どの樣な物ぢやうぬ見をれと。地娘を引立て フシ出づる門口。詞ア、コレ待つた山左衞門殿。血を分けた高尾が身替り。義理ある娘を殺さしては。此母が世間へどうも濟まぬ。ヤア何と。サか程ゆゝしい騷動に些細な者の命をかばひ。似せ首の事顯は

れたら義綱公のお身の上。高尾を殺して其首を。定倉殿の御目に掛け。一家中の髻を堅め。義綱公を御代に出さずは。忠ある者とは言はれまいぞ。や尤も〳〵なれども。こなたの娘といひ。殊に腹には主人のお胤。其高尾を殺す時は主殺しの悪名遁れず。コリヤ娘。そちが命を捨つればな。親は主君へ忠義となり。義綱公の御身も納まる。養ひ親の爲にも古主。コリヤ聞分けて命をくれい。とは言ふものの其方も。地たま〳〵逢うて悦びし其日も去らず手に掛けるも。先生からの定り事。親子の縁も盡き果てていつそ逢はずに仕舞うたら。殺す心もあるまいになま中に縁盡きず。廻り合ふと殺さるゝは。因果の道理と諦めて。堪へてくれよと聲を上げわつとばかりに。スヱテ泣き居たる。地娘は始終聞くよりも。父が前に手をつかへ。勿體ない其悔みお主のお役に立つといひ。姉樣のお身替り願うても無き身の果報。さりながら一つのお願ひ。どうぞ聞いて下さんせ。詞早う言へ。早う言へ。アノ其お願ひといふのはな。身替りになる事を。暫く延べて下さんせ。其中には母樣のおひえ(布子)も仕立てて仕舞ひたし。七觀音の其間。淸水樣へも參りたし。マア一月も。四五年も。經つての上のお身替りと。地何を言ふやら フシ譯もなし。詞ヤアそりや汝何を言ふのぢや。最前より樣樣と事を分けて言ひ聞かすに。コリヤうぬ。命が惜しいのぢやな。エヽ未練者め。卑怯者と。地刀するりと振上ぐる。娘はわつと飛退いて。詞コレ〳〵申しお母樣。アレ父樣が私を斬るといなア。斬られぬ樣に。お詫言をして下さんせと。フシ聲もしどろに震ひ居る。詞アヽ氣遣ひしやんな殺さしやせぬ。コレ神浪殿。可愛さうにアノお幾はの。地年端の行かぬ心にも。生さぬ中の義理立てて。詞色々に氣を付けてくれるもの。それを知つて親の身で。繼子ぢやゆゑに殺したと。どうそれが見てゐられうぞ。何ぼうでも身替りに。殺さぬ〳〵〳〵と。地義理にかこつけ有樣は可愛さあまる母の フシ慈悲。詞母樣嬉しうござんする。お前の蔭で助かつた。つれない父樣なら怖やと。地迯行く。詞帶際引戻し。詞エヽ情ない根性ぢやなア。コリヤヤイ科あつて殺すなら。我が代りに此體。一分だめしに刻まれても。見殺しにするものか。地親は百倍惜しけれど。殺さにやならぬは人界の。義理と恩とに責められし。おれが心を推量せよ。詞何時まで言うても詮なき事。地覺悟せよと振上ぐる。母はちつとも身を惜まず。詞アコレ〳〵〳〵神浪殿。必ず聊爾せまいぞや。ハテ扨お袋。惡い了簡。とても助けぬ彼が命。かばひ立てして怪

我せまいぞと地ぢりり／＼と付廻す。アレ／＼堪忍して下さんせ母樣退いて下さんすな。詞氣遣ひしやんな切らしやせぬと。地母は我が子の覆ひになり殺さすまいとかばふ親。忠義の爲に殺す親。思ひは二つ三つ又に水越すばかり浮く涙。涙は陸奥の船。浮めんフシ風情なり。人に知られて詮なしと。思ひ切つても手もたゆむ始終の樣子。隣から聞き居る高尾は身もよもあられず。走り出でて表の戸。碎けよ破れよと打ち敲けば。懸金はづれ開く戸の。としやおそしと我が家の内。南無三寶と神浪が。隔つる母を及び腰。たぶさ摑んで提げ斬りに首をはつしと打落す。死骸に取付き母娘。前後正體なき居たる心ぞ。思ひやられたり。地神浪も恩愛の。胸にせきくる涙を押へ。せめて死顏淸めんと首引寄せて引上ぐる。たぶさに結込む一通は。詞父樣參る。幾々と。地

聞くより母は涙ながら。詞ヤア扨は覺悟のあつたのか。地但しは何ぞ望み事。ドレそれ見せてと取縋る。詞ア、イマ／＼此樣な未練者。死んだ跡まで恥さらしと。地引裂く手先に取縋り。なら假令未練な事ありとも。これに上こす形見はない。私に讀まして下さんせと。高尾が泣く／＼。フシ押開き。詞松は千とせを盛りとし。朝顏は一時を一期とし。何事も先生よりの定り事と諦めまゐらせ候。わたしが首を打ち。高尾樣の身替りになされん由。其場になつたら歎きにおくれ。よもや得討ちなされまじと。態と臆病になり。卑怯な最期を致し候ヤア。機嫌を直され。只一遍の御回向のみ。未來の樂しみに致しまゐらせ候。ソレ見やしやんせ神浪殿。是でも臆病者かいなう。卑怯者かいなう／＼／＼。出かしたな／＼。ヲ、さう言ふそちが心と知らず。未練者。卑怯者と言う

たのが。今では面目ないわい。コリヤ娘よこらへてくれい／＼やい。母樣へ申殘しまゐらせ候。何と書いてあるぞいの／＼／＼。エ、西も東も覺えぬ時より。十年に餘る其間。生さぬ中の隔てもなう。可愛がつて下さんした御恩も送らず。先立つ不孝の程御堪忍なされ下され候。エ、未來の母樣に逢うたりとも。やつぱりわたしはお前樣を眞實の母樣と存じまゐらせ候。ヲ、さう思うてたもるかいの／＼。コレ何處までも親子ぢや程に。氣を慥かに成佛してたもや／＼。取分け心に掛りまゐらせ候は高尾樣の御事。頼み上げまゐらせ候。只一言申上げ度き事御座候へども。父樣の手前恥しく得書殘し申さず。よきに御推もじ願ひ上げ候。申す事はやま／＼なれど。心急かれ候まゝ惜しき筆留めまゐらせ候と。地讀む中父はそゞろなく歎けば母は聲を上げ。恥しいと書いたのは重三殿のことであろ

ヲヽ此母が吞込んでゐる。コレ〳〵必ず迷うてたもんなや。思へば〳〵可愛やな。貧しい中でしほたらと何角に付けて苦勞さし。いつ華やかなことも無う憂身の果は此樣に。親の手にかけ殺すとはいかなる業か報ひかと。親々首に抱き付き。抱き付いて伏し轉べば高尾も共に泣きくづをれ前後正體歎きしは理。せめて哀れなり。戸棚ぐわらりと浮世渡平奥の一間に冠者太郎。忝なしと駈け行くを。しつかと取つてどこへ〳〵。詞義綱公の御座ありとは。何を證據と言はせも果てず。地以前の下駄を取出し。火鉢へ投ぐれば炎炎と。匂ひは四方に フシ薫じけり。詞ソレ。其銘は薄紅。日本國中廣しといへど。伽羅にて作れる下駄履かんは。義綱ならで何國にある。小言いはずとヤ爰放せと裾振切つて駈出せば。地モウ是までと斬付くる拔けつ潜つつ死骸にて。丁ど請

くれば血は滴り。流れ込んだる以前の燗鍋。してやつたりと引提げて一間の内へ駈けこんだり。何國までもと駈行くを。夙くより窺ふ重三郎。走入つて支ゆるを。汝も敵の廻し者觀念せいと斬りつくる。拔合はして上段下段。詞互に手練打合ひしが。重三郎は受太刀も。しどろになつてたぢ〳〵〳〵。よろめく裾を蹴上げられ。どうど轉ぶを乘りかゝり。胸元押へ只一突きの フシ其勢。詞ヤア〳〵神浪山左衞門。必ず早まる事なかれと。地障子をさつと義綱公。敬ひ守護する渡平が有樣。さしもの神浪悔りし呆れて。フシ詞も無かりけり。地義綱公は嚴然と。詞佞人どもの計ひにて近頃より心亂れ。晝夜分たず婬酒に溺れ。始めて心付いたる今日。國の爲に汝が娘殺害に及ぶ事。忠義とは言ひながら。娘の最期不便やと。地仰せにはつと頭を下げ。詞ハヽヽヽヽコハ有

難き御仁心。娘を斬りしは某が寸忠。恐れながら君の本心いかなる故と尋ぬれば。ホヽそれこそは此渡平。貝田が行ふ邪術にて心惑はせ給ふ我が君。辰の年月揃ふ女の。肝の臟の血を取つて。熱酒に合し。伽羅にて煎じ是を差上げ。かの術を立ち所に塞く事は。奇妙院が懐中の一卷にて我よく知る。此家の娘の血を以て我が君に奉れば。ハヽヽ斯くの如く本心になり給ふ。最前高尾を手込めせしも。過ちをさせまい爲。斯く身を窶し守護する我は。熊川源五兵衞秀影。以後は互に申合さん。ハヽア天晴忠臣さりながら。某稚き砌より。よく見知りたる熊川氏。似ても似付かぬ顏形。ホヽヽヽこれこそ館にて數多の組子を支へる折柄。地毒に當りてこの如く相好變るは一つの方便。詞傳へ聞く晋の豫讓は。漆をさして形を變ゆる。我はそれには引きかへて。地敵

より注ぐ毒藥は。却つて味方の天の賜。味方顔して敵の計略。一々に告げ知らさんは我が。方寸の内に在り。ハ、、、、嬉しや悦ばしと。勇み立つたる有樣は實にも由々しきフシ忠臣なり。詞ヲ、頼もしゝ方々。さりながら。先祖より傳はる政宗の刀。紛失するも我が誤り。二度代を知る心はなし。松ケ枝節之助を付け置いて。鶴喜代に世を讓り。地是よりは程近き加茂川に隣りたる。砂川に屋敷を建て。我と我が身を押込め隱居。詞御尤もなる御詞。高尾殿も諸共に御供をさせ申さんが。一所に置けば諸家中の心揃はず。身替りも詮なき事になり果てん。ヤア〳〵伜重三郎。高尾殿を同道し。地近江路へ立越えて眞野の知るべに身を忍べ。詞ハ、畏り、奉る。しかし雛儀は高尾殿。若輩の某が一所に連れて立退かば。高尾が誠に語らひしは重三郎と流布せんか。よし惡説も忠義故。些細な事は顧みず佞人亡びて其後は。高尾殿の代りに死せし。お幾が爲の初發心。地道具屋行方定めぬ修行の身夕は川に浪枕。朝は土手に身をこらし名を道鐵と改めて。一宇の寺を建立せん。詞ホホ實に頼もしき志。娘の爲の善智識。我は是より此首を定倉殿へ持參して。區々なりし一家中の臍を堅むる忠義の門出 フシイザお暇と。立出づる母は引留めなう暫し。けふはいかなる日なるぞや。一人の娘に生別れ一人の娘に死別れ。跡に殘りて老の身は。何とかならん浮草の。うき世に秋の紅葉ちる。高尾も共にくど〳〵と。歸らぬ歎き人々も。萎るゝ心取直し。振切る袖や濡るゝ袖包む。涙は身にあまる義理と。恩義と忠義とに別れ。別れて三重へ出でて行く

第　五

地王城の隣に並ぶ上郡は。ホフシ日出度き御代にあふみ路や。蕪川魚潟水に。事缺かぬ國唐崎も。矢橋も比良も。フシ目に付かず。地錦戸刑部が家來大木戸門兵衞。大勢引連れ濱邊の砂道。詞家來ども參れ〳〵。言ひ聞かす仔細あり。コリヤ渡平汝もとくと聞け。主人刑部殿大望の御企て。コリヤ早やわいらも知る所。貝田殿の計ひにて冠者太郎義綱も。砂川の屋敷へ押込め隱居。鶴喜代も術を以て自滅さするに間は無し。時にかの高尾が事。定倉が計らひにて首討たせしと風聞あれども。其沙汰さだかならざる所に。重三郎と言ふ奴が。高尾を連れて近江路へ立退くと。間者が知らせに某を召され。汝は是より近江路へ立越え。義綱の胤を孕んだ高尾。切殺し立歸れ。敵の末は根を枯らすとの仰付け。それ故に御覺えの一腰をたまはる。ガコリヤコレ主人の御重寶差添なれ

ども波の平行安。斯くも御恩に預る某。此事屋敷で語らんにも餘り火急の事なる故。爰までは一跨げ。地近江路と聞いたばかり雲を掴む尋ね者。何時までかゝらん程も知れず。それ故路金はふんだくに蓄へたり。詞此所まで來る道にて高尾くさい者を見ず。假令高尾に逢うたりとも生物を殺す事某は大不得手それ故汝を召連れたり。ヤレ／＼しんどい息が切れる。皆も休めと大道に。地主がすわれば家來ども同じフシ座席に居並びて。詞ア、大きな池ぢやなア。シテまあ爰は何と言ふ處。ハイ是がかの近江八景の中。堅田の浮御堂でござります。スリヤ早や爰は近江路な。聞きしに勝る風景々々。堅田の浦の釣小舟浪にもまるゝ。ヨイ如くなりと。古い書物で知つたれども目前見るは今が始め。定めて此湖には。鯉や鮒が澤山ならん。鰻四五本欲しいなア。肴にして一盃呑んだら地風景も一入ならん。詞イヤモウ其様な肴は澤山。時によると八九尺から一丈餘りの鯰が。取れます。ハテさてえらい物が取れるな。其様な肴は氣味が惡うて喰はれまい。イヤ又氣味の惡い事を言はうなら。此所は川童原。何時ともなく化けて出て。老若男女の別ちなくかの裏門を念がけます。ヤア。シテ其川童は晝でも出るか。イエ／＼日中には出ませぬが。日の暮前からそろ／＼と。エ、是は又ひよんな所へ來合はしたわい。イエ／＼お氣遣ひなされますな。私は爰らの生れ。氏子には手指もせず。其川童の親玉は卽ちこの浮御堂様。スリヤ何と言ふ浮御堂の氏子がゐれば川童。サアノお川童様はお構ひなされぬか。それでもどうやら氣味が惡い。しかし日暮までは間もあらん。コリヤ／＼家來ども何をうつかり。其方どもは此近邊高尾が行方詮議して。日暮前に早う歸れ。早く／＼コリヤ小人數なりと見こなして裏門好みの川童殿に。穴取られては叶はぬぞ。地急げ／＼と權柄に。主と山路へ家來ども。フシ當所も無しに尋ね行く。詞イヤなに渡平。浮御堂へ參詣し。武運長久祈らん間。身續いて參れ

道行夏野のさらし井

唄世の憂き目。見えぬ山路へ。入らんには。思ふ人こそほだしなれ。ほだしの胤を身に持ちて。ナホス フシ馴れぬ旅路の。旅はどき 小オクリ 草鞋引きしめ／＼て。海道のぼる坂路オクリ爪先の。高尾を連れて重三郎。長地都を尻におき別れ心は跡に引かさるゝ。牛石右手に行く末は。何とかならん道草も。タ、キ泣いてしをれてたど／＼と。せめて暫しは逢ふと見る。夢路に泊る宿もがな。つもり／＼し憂き事

の。フシオクリあふみ路 二上リへさして辿り行く。人目堤をふたり連。樵る。童がうち群れて。若い女夫と惡口も。何の儘よとナホス聞捨てに山中の宿うち過ぎて。フシ峠はるかに見おろせば。誰かしらべん。琵琶の湖。操る如き細路を。分けつゝ來つゝ。行きがてに。在の女夫が打ちまじり。仲好ささうに連節に 唄一つくずやに。一つくずやに四季の花。粋な水仙室咲の梅。いとしかはいと撫子の。よれつもつれつ糸櫻。垣根卯の花杜若。からざを歌の夫婦合ひ。可愛らしいぢやないかいな。此方の最屓と。二人しつぽり抱柏。返事菊蝶比翼に縫はせ。好いたくわん菊四つ紅葉。行きつ戻りつ香の圖の。戀に戀ひわび瀧登り。笹龍膽の二つ紋。可愛らしいぢやないかいな。ナホス鄙も變らぬ フシ妹脊仲。ア、美し我とても。勸め氣はなれ殿樣と。逢ふ夜重る鵲の橋もとだえて

此樣に。つらい別れの其上に。妹とてもむごらしい。はかない事もわたし故。嘸ぞかゝ樣も今頃は。泣いてばつかりござんせう。世を忍び住む命さへ憂き事つもる身の上に。又此末はいかならんと。返らぬ事をくど〳〵とかこち歎くぞ道理なれ。重三郎も諸共に過ぎし夜すがの事共を。本フシ思ひ續けて倶涙。フシ歩みかねてぞ居たりけり。詞護國寺山内辨才天建立。地辨天坊あじろ笠。鼠の麻衣。生木綿の白布子。手甲股引りゝしげに。建立箱脊に負ひ子供に囃されて。餘所目は二本棒。誠は行坊強い坊。鈴打鳴らし町々を。大福長者を授くゝる利生のそつそ坊。そそそ。そゝくさ。來かゝるフシ道筋に。見合はす顔は。○詞ヤア兩攀樣△ほんにお前は高尾樣。地袈裟衣から齋非時のと。常住お世話になりました。私が爲の一旦那。跡の月から行方は知れず。詞方々尋ねに

出ましたが思ひがけない好い所で。地是から愚僧もお供する。見れば大分泣いた顔なぜ浮き〳〵となされぬぞ。そそそれ〳〵覺えてござりませう。お前樣と義樣と。味な座敷へ此坊主。あたまの樣にまん丸う挨拶をして床の中。○サイナわたしも言ひがかり。背中合して寢て居ても。ついそれなりに張弱う。仲直りすりや。明けの鐘憎うてならぬ鳥の聲。何の鳥が意地惡るで。鳴、ぢやなけれど後朝の。往なせともない。心から。△ソレヨちつとも離れかね。身仕舞部屋へよし樣を。引き摺つていて其時に○眉も引かずに鐵漿付けてよう似合うたか見ておくれ。こつちへ寄りなヲ、嬉しと。傍へ引寄せ引きしめて。二人の顔を一面の。鏡に寫し見たものを。今はそれには引きかへて。いつの月日に逢ふことも知らぬ田舍へ知らぬ路。言問ふ人もなつの日に。乾かぬ袖の

うき涙。かはいと思うて下さんせと。歎く涙は道もせの フシ小川に。水や増しぬらん。二人も倶に。露涙しをるゝ心取直し。必ず歎き給ふなよ頓て御代になし奉り。一つ枕に逢ひの手の歌の唱歌も色めきて。三下り唄 味な縁から。つい馴れ染めて。末の約束固めの枕かはらぬ契りと思はんせ。ヲ、それ夫がほんかいな。つとめ勤めも。つい馴れ染めて。寐るに寐られぬうたゝね枕。逢ひたさ見たさは皆一つ。ヲ、それ夫がほんかいな。ほんにナホスフシ浮世は儘ならぬ。△アレ〳〵〳〵日も。山の端にをちこちの落人と人や見とがめん。いざさせ給へと手を取つて。急ぐ道筋程もなく群れゐる鴈の翼さへ。頼まん方も片だより堅田の。浦にぞ 三重へ着きにけり

地 近江路は。餘所の。國より涼しさの。まさる憂き身の浮御堂。フシこなたに暫し立休らひ。詞イヤ申し高尾様。道筋とても油断がならぬ。是から眞野へは程もなし。地知邊の方へ急がんと フシ皆うち連れて行く向うへ。地とくより待ち得し大木戸門兵衛。渡平諸共現れ出で。詞ヤア〳〵それへ打たせ給ふは都島原に隠れなき。三浦屋の全盛太夫高尾の君と見しは僻目か。正無うも敵に後を見せ給ふか。返し合して勝負あれ。斯く申す某は關八州に隠れなき大木戸門兵衛臂利なりしばさせ給へとフシ呼ばはつたり。地重三郎は物をも言はず一腰抜いて斬付くれば。受合して丁々。斬合ふ後兩攀に渡平はなにか囁けば。心得邊り見廻して駈入る間にもあら笑止や。門兵衛刀打折られ。しどろになつてヤア〳〵渡平。詞兩人共に搦め捕れ。取逃しては汝が科。詞番うた諍ふなと。地口は達者に雲霞。フシ砂道蹴立て逃げたりけり。地渡平はしづ〳〵身拵へ傍へ。立寄り重三郎。ヤア親人。コリヤ。何にも言ふな。コレ〳〵斯う〳〵。ナ合點かと二打ち三打ち。打合ふ體にて程よき所。コリヤ捕つたわと用意の早繩。コレハと立寄る高尾も共に。同じく掛ける三寸繩 フシ二人を引立てつつ立てば。

地 遠目に斯くと大木戸門兵衛走り。三重 カヽリ歸つてホ、ウ手柄。手柄々々。地某程の武士なれど。敵に刀を打折られ逃げるではない引退く。詞 コリヤ是耻に似て耻にあらず。往時壇の浦の戰。箕尾谷四郎國俊。地景清に刀打折られ少し汀へ引退きしを。詞誰か一人臆病とや言はん。今の代までの美談ならずや。ア最うよござります。お前の耻ちやござりませぬよ。シテ此二人はどう致しませう。知れた事都へ引け。是はしたり仰山な。イヤ申し。此邊に知邊のある奴輩。取返されたら詮ない事。いつそ二人を斬殺し首にして歸

りましよ。妙計々々。然らば貴殿御苦勞ながら。ア、イヤ待てよ〳〵。最前も言ふ通り。生き者殺すは大きな嫌ひ。ましてや是は人の首。目の前で斬るを見たら。忽ち身ども 地 持病の癪。詞 イヤ〳〵やはり京での事。ハテさて埒の明かぬ。コレ私がたつた一討ち。お前様もそれ程怖くば。そちら向いて目を塞いでござりませ。妙計々々。然らば仰せに任さんと 地 兩袖顔に押當ててあちら向いたるその隙に。二人の縄を解きほどき又も囁きさゝやけば オクリ 二人は彼處へ フシ 忍ぶ中。地 邊りの畑見廻して。西瓜を二つばつさりの。音にきいやり。詞 南無阿彌陀佛南無妙法蓮花經。浮世氏。浮世氏。二人の者を仕止めたか。何の苦もなくざつぷりと。サア〳〵お改めなされませ。なう厭な事いやな事。もう見ずとよしにせう。是は又卑怯千萬それでも武士と言はれますか。

ム、見ようかの。ア、氣の無い物ぢや。しかし怖い所を見るも主命。さりながら。首實驗には故實ありと。地 兩手を顔の覆ひにし。指の間よりさし覗き。詞 ハツアいか樣なア。生顔と死顔は相好の變るもの。今迄は二人とも。あてやかなる顔なりしに。うそ氣味わるう眞青に。少し赤みの見えたるは。血の流れたる所ならん。切口の。地 立派さは天晴ゆゝしき手の内や。詞 待てよ待ちなさいよ。いかに切れた首ぢやとて。目鼻も口も何にも無う。ずんべら坊主の此斬首。俄に瘡は掻くまいし。斯くも形の變りしは。ハテ〳〵〳〵合點の行かぬ事ぢやなアと 地 諸手を組み フシ 暫し。見とれて 詞 コリヤ西瓜ぢや。ヤ何と。ドレ〳〵ほんに西瓜ぢや。ハテ不思議な。たつた今二人の首。打放して間も無う。西瓜になつたはコリヤどうぢや。門兵衛樣門兵衛樣。コリヤ只事ぢやござりませぬ。浮御堂の近邊で。血をあへした其咎めか。そろ〳〵日暮になつて來る。お川童樣も出やしやる時分。御用心をなされませ。ヤア扨はさう言ふ事かいやい。それぢやによつて首打つ事は。よしてくれろと言うたのに。どうやら空も曇つてくる。コリヤ〳〵渡平。まちつと此方へ寄つてくれと。地 そこら フシ 眺める其折ふし。地 追々歸る家來ども。詞 旦那。ワイと飛退きア、申し〳〵。私は何にも存じませぬ。渡平が業でござります。地 御免々々と手を合せ。フシ 拜み廻りて震ひ居る。詞 是は〳〵正體なき旦那の有樣。人の見る目も恥ぢ給へ。コレ申し。家來どもでござります。何家來ども。さう言うて身どもを化すのであらう。暫文々々家來どもでござります。ドレ〳〵ほんに家來だ。ヤイうぬら。言語道斷不居者。歸つたら歸つたとそつと言へばよ

い事を。周章しう吐したで。武士のあるまじい。膽を菜種にして退けた。身が目通りには一人も叶はぬ。何國へなりとも立去れと言ふ所なれど今は言はぬ。餓鬼も人數ぢや。わいらでも力になる。ソレ最前聞いたナソレ。お川童様のお咎めかして。何やらかやら怪しい事だらけ。サア〳〵〳〵一時も早う 地 急がんと。フシ 立歸らんとする折ふし。地 時分はよしと重三郎。浮御堂の時太鼓 コハリ しどろ拍子に打ち立つれば。ナホス ワツト皆々腰も拔け。うろたへ廻る目先へずつと顯はれ出でし兩攀が。詠 抑も是は浦島太郎十代の後胤川童の冠者乘好なり。地 アヽラ恨めしや腹立ちや。詞 汝神慮を恐れもせず血をあへしたる咎めに依つて。早々命を召取るなり。貴殿の秘藏の情所我が神變に吸ひ取つて。穴ぢやう往生さしてやろ。エヽ氣味の惡いイヤコレ渡平殿。貴様は

あなたの氏子とやら。どうぞお詫をして下され。成程々々。元はお前の業でも無い。主命故の麁相なれど。かう見た所がよつ程きついお腹立ちの樣子。つい一通りでは合點はなされまい。ハテどうした物であろ。コレござりますか。ある〳〵。それをあなたへ差上げて。お詫言をして見ましよ。イヤ申し川童の冠者樣。畢竟是は間違ひ事。あの者が申しますは。近頃憚りな事ながら。少々持合せの金もあれば。それをお前に皆上げます程に。どうぞ御了簡下さります樣と。アヽ氣の毒な物でござります。私を段々頼みます。今申した其金を皆取つて。堪忍しておやりなされませ。地 イヤ金銀は人間の寶川童道には有つて益なし。詞 只金銀の其金の後の方におはします。かのソレ今の 地 情所が所望なり。詞 アヽ悲しや。どうやらお臀がくすぐつたい。コリヤ〳〵家來ど

も。ソレ下の帶をきつと締めて。裏門口を用心せい。武士のあるまじい。屋敷を餘り急いだで。不斷の儘の越中褌。締りが無うて便りがないと。地 主も家來も懷へ。手を入れ締める下の帶。下心ある浮世渡平。彼奴出家だけ慾氣無し。物を言はしては惡からんと傍へ立寄り フシ 恭しくも。詞 うす〳〵うさすはもふ。さきかちんぶりかくさんきんにやうらい。とらやあ〳〵と スヱテ 低頭平身。なしければ。地 譯は知らねど器用者。出たらめ臺詞の唐詞。詞 しやうちいにいつうばてれんてう。かすてらやうかんのせたんけい。地 聞くより フシ 渡平は此方へ歸り。詞 あなた樣には龍宮育ち。日本詞をお遣ひなさるりや。どうでも勝手が違ふゆゑ。御苦勞なだけ腹立ちもきつい。そこで今の樣に龍宮詞で受け答へ。先づは神慮を宥めて置いた。時に又今おつしやつたは。地

獄の沙汰も金とやら。龍宮界も有様は。去々年の大飢饉で。米が百に四合五勺。其揚句ゆゑきつ詰り。成程路金を皆おこせ。又お前の大事の物を。今の金と一所に上げたら。今のソレ穴錠往生は赦してやろとの御詫宣。サア〳〵早うお上げなされませ。スリヤ何と云ふぞ。貯へた路金と。外に大事の物と云ふはヲ、ソレ〳〵。主人より賜はつたるこの指添。二色さへ差上ぐれば。御了簡下さるか。忝し〳〵と。地懐中探しこて〳〵と。取出す肌打飼。有りだけ粉だけ。指添共に。フシ一つに掴み。詞サ、、是をあなたへ上げてくれ。一時も早いがよいぞ。ア、コレ〳〵浮世々々。マア〳〵お待ちよ。侍の事なれば。腰の物は無くてもよいが。折入つて相談がある。爰から京へは餘程の道でござんすは。サ、、マ、、、うんと云ひな〳〵。エ承知か〳〵。此金を

皆上げてはサ、、、マ、、、うんと云ひな〳〵承知か〳〵。蕎麦を一膳食ふ事が成らぬは。サ、、、マ、、、うんと云ひな〳〵。承知か〳〵。爰はどうぞお情ぢやが。南鐐一片残されまいかな。エ、けちな。神に物を吝しがると。忽ち罰をお當てなさるゝ。スリヤ罰をお當てなさるゝか。ハテ是非も無い事ぢやな。そんなら南鐐とは云ふまいが。あなたのお名に象つて。川童六十四文は成るまいかの。一文も牛文も成りませぬ。スリヤ一文も叶はぬか。ハア。地はつとばかりに聲を上げ。かつぱと伏すと云ふ事は。フシ此時よりも始まりける。詞エ、ぐづ〳〵と。早うお上げなされと。地吝しがる物を無理無體。引つたくつて此方に向ひ。詞青黄赤白黑。瑠璃紺路考茶中赤蔵。おいてうかふたんぶたうんすん。辰ヤア〳〵と差出せば。地氣味悪さうに手に取つて。詞か

ねんを取るんは婿しんが。どうやら尻んがきそんばか。牛ヤア〳〵。サア〳〵門兵衛様〳〵。サア〳〵川童様の御機嫌が直つた〳〵。神明納受の驗には各方に悉く。福壽海圓滿樂。天筆和合楽の。大福長者に成る。結構な文をお授けなさるゝぞ。皆々お請けなされませ。地我等は其内神前を。祓ひ清めて參らんと。何國とも無く出で行く。詞サア〳〵コリヤ〳〵家來ども。只今お授けなさるゝぞ。うぬらも心を清浄に。ハ、ア有難うござります。地ヤレ〳〵皆の衆よ。正直正路に我は愛で壽福の文を授くべし。龍神詞は分るまじ日本流に教ゆべし。皆々信心凝らしつゝ囃してくれよ凡夫たち〳〵。〳〵〳〵。はやしてくれよ凡夫たち。〳〵。詞左の腰を延べ其上に右の手を拳にして大指を開き小指の甲を曲げ左の掌の上に置く事しやほんの如く是を以

つて則ち七度震動せば貧所忽ち福者と成り。寳の藏を並べ建て無量の財福を充滿する事雨や霰の降るが如く金と銀と錢と瑠璃と硨磲と瑪瑙と珊瑚と琥珀と眞珠の七寳出生して大福長者と成るなむはくじやきやうかやしやぎやらべいしんたまにひんてんうんそはか。なうまくさらばたゝぎやていひゆびじんばぼくけいびやくさらばた。けんうどぎやてそはらけいまんきやぎやなうけんそはか。ごこくさいしやううかやとんとく如意。寳珠わうたい辨才天。そぞそ。こゝそ〳〵。とこそ 三重へ立歸る

第　六

唄いつまでも。變らぬ御代に。あひ竹の。よゝは幾千代。八千代經る。ナホスフシ千代を壽く。爪音は。鎌倉山に美を盡す。冠者太郎義綱公の奥御殿。懦弱の聞え隱れなく砂川へ隱居ありければ。御長男鶴喜代丸幼稚ながらも御家督定り。近き頃より御病氣とてお傍には男を禁じ。諸士の對面叶はねば家中を始め典藥まで。何としあんもせんじ樣。常より館物さびし。地諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井御前。渡會銀兵衛が妻の八汐。襠姿しとやかに。フシ禮儀正しく打通り。詞イヤ申し八汐樣。大殿義綱樣御隱居遊ばし。御幼稚ながら御家督の鶴喜代樣。此程より御不快とて御食事も召上れず。殊更人に逢ひ給ふ事がお嫌ひとて。男を禁じて近習小姓も遠ざけられ。お傍には政岡殿。腰元衆の外叶はず。地何卒直ぐに御容體伺ひ申す私が心さればいな。詞手前の夫銀兵衛は御膳奉行と云ひ。今後見の刑部樣の御出頭。それさへ御對面叶はぬとは。コリヤ政岡の胸中に。深い所存があつての事か。モ今日は是非とも御容體見居けねば下られずと。奥女中まで申込み置いたれば。御保養かた〴〵追付け是へお出での筈。地何かの樣子とつくりと心をお付け遊ばせと。フシ二人が噂の程もなく。地奥より腰元走り出で。詞殿樣是へ御出でと。フシ知らせの中に。地まだ頑是なき鶴喜代君。お傍のお伽も同い年政岡が子の千松が。舁いて出でたる鳥籠の。エイ〳〵サツサ。愛らしき。フシ跡に付添ふお乳の人。はつと二人は頭を下げて。恐れ敬ひ奉る。地政岡御前に手をつかへ。詞信夫の庄司爲村の後室沖の井。渡會銀兵衛の内方八汐。御病氣の御樣子。伺ひのため參上と。地申上ぐれば大人しく。詞二人共よう見舞うてくれた。大儀。地大儀と情ある。仰せにはつと恐入り。詞誠に存ぜしよりは麗しき御容體。見奉りて我々が安堵。さりながら御食事進み給はぬ由。モ一家中の心遣ひ。恐れ

ながら沖の井が。申付けし今日の御膳。少しなりとも召上られ下さる様。地ソレ〳〵早うと詞の下。はつと答へてお傍の女中。捧げる膳の目八分。フシ御前に直せば。嬉しげに。詞そんならモウ。飯食うても大事ないかと。地座に着き給ふを政岡が。尻目に睨まれ。もぢ〳〵と。詞イヤ〳〵。おりやモウ飯は厭ぢや〳〵。アレ見よ千松。雀が飯を食ひたいやら。口を開いて鳴くわいやい。弱い奴ぢやと地乳母が顔。見やる目元に涙ぐむ。スヱテ御心根のいたはしさ。ぢつと堪へて政岡が。イヤ申しお二人様。あの通り御膳をお進め申しても。いやぢや〳〵と御意遊ばす。お傍に付添ふ政岡が心遣ひ。御推量下さりませ。が醫脈を伺ひ申さんにも。男たいせし者はお嫌ひ。それ故に典薬も。ヲヽ此八汐もそこへ心の付きし故。御典薬大場道益が妻の小巻。女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽れ。御容體伺はせん爲召連れて参りし。地ソレ召出せと詞の下。はつとお次へ腰元が オクリやがて。伴ふ年輩も。四十に近き。二つ髷 襠さばきも。しとやかに フシ遥か。末座に手をつかへ。恐れながら。大場道益が妻の小巻。御脈伺ひ奉らんと。地すり寄れば政岡が。いさと進めた鶴喜代君。本フシ御手を出させ給ひければ。恐れ愼しみ御脈體。とつくと伺ひ驚く面色。詞ヤアコリヤこれ只今必死のお脈と。地いふに恟り驚く人々暫し。フシ詞も無かりしが。地沖の井御前不審顔。詞イヤコレ小巻。御物ごし御顔色常に變らぬ御様子。それに必死の御脈とは。ハア成程御不審御尤も。仰せの通り麗しき御容體。それに引きかへ絶命の御脈は。モ何とも不思議。恐れながら若君様。是へ御越し遊ばされよと。地遥かこなたへ誘ひて。又も伺ふ御脈に。はたと手を打ち。ハテ不思議や。詞あれにて見れば必死の御脈。今又是にて伺へば。常に變らぬ御脈體。ハテ。地怪しやと眉に皺。政岡始め人々も フシ更に心は納らず。地何思ひけん沖の井御前。長押に掛けたる長刀追取り。ぐつと突込む天井の。板こじ放せば怪しき曲者。落つるを透さず取つて引伏せ。用意の捕繩手ばしかくフシ 高手小手にくゝり上げ。詞お脈の不審の其根元。サア眞直ぐに白状せよ。陳ずるに於ては水責め火責め。憂目を見するがサア〳〵何とと。地きめ付けられて詞アヽコレ申します〳〵。イヤモ斯う現るゝ上からは有様に申します。鶴喜代君を殺してくれと。頼まれたも褒美が欲しさ。ムヽシテ其頼み手の名は何と。サ何者に頼まれた。サア〳〵どうぢや。サア何とと地倶に詰め寄る政岡が。顔を眺めてテモ扨も。詞アノしらしい顔わいの。其

頼人は誰であらうぞ卽ち此方。ヤア何とア、コレ〳〵。もう隱しても隱されぬ。千松とやらを代に立てたさ。若君を殺してくれとナソレ。賴ましやつたぢや無いかいの。ヤアコナ下郞めが大それた僞言。コリヤ自らを科に取つて落さん爲。己れを賴んだ拵へ事ぢやな。イヤコレ政岡殿。モいか樣に諍はれても。こなたの工といふ事は此八汐が睨んで置いた。とても叶はぬ覺悟召され。ム、假初ならぬ一大事。マとつくりと糺しもせず。妾が業とおつしやるには。何ぞ慥かなヲ、證據といふは其曲者。サ現在こなたを傍に置いてあの通りに言ふからは。モ是に上越す證據はない。がまだ其上に。コレ此一通。鶴が岡の神木の本に。埋めてあつた釘付けの箱。內に込めたる願書の文言。若君を調伏し。我が子を出世させたい望み。願主松ケ枝節之助。乳母政岡と。あり〳〵と書いたが慥かな證據。サ何と違ひはあるまいがの。イヤ〳〵それも眞赤いな似せ筆。更々此身に覺えは無い。無實を言ひ懸け跡で後悔なさるゝな。ム、是程慥かな證據が出ても。まだ潔白なあらがひ立て。シテ又覺えないと云ふ。サ證據があるかな。サアそれは。サア〳〵何とと。地 詰め掛けられて政岡が。覺えなき身の言譯も。證據無ければ今更に。スヱテ無念淚の。外ぞ無き。詞ヲ、言譯はあるまい〳〵。言譯無くば遁れぬ科人。節之助諸共に。牢屋へ打込み急度糺明。今日より若君の御守役は此八汐。ヤア〳〵侍中。政岡を縛り上げ。牢屋へ引けと。フシ呼ばはるにぞ。地若君はおろ〳〵淚。詞乳母が牢へ行くなら。おれも付いて行きたいわいやい。ヱ、そりやマア何を御意遊ばす。八汐が申す事ようお聞き遊ばせや。あの政岡はな。君に敵たふ大科人。イヤ科人でも大事ない。乳母は何處へも遣る事ならぬ。デモ伯父御樣。刑部樣の仰付け。イヤ〳〵其刑部も其方達も。皆おれが家來ぢやないか。それ程牢へ入れたくば政岡が代りに。そち達から牢へ行け。乳母と放れて居る事はいやぢや。地いやぢやと腕白も。自然と備はる仁心に。嬉しさ限り政岡が。身に沁み渡る有難淚。フシ只手を合すばかりなり。地さすがの八汐も主命に。返答無ければ沖の井御前。詞君の仰せまでもなくお乳の人に科は無い。朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿。サ誠若君を害せんと思はゞ。人手を賴むまでもなく。仕樣もやうもあるべき事。サそれに何ぞや此曲者。誠政岡に賴まれなば。一旦は隱れ遁るゝ筈。自らが長刀の光に脆く飛び下りしは。ハテ賴もしい賴まれ人。又道益が妻の小卷。必死の脈と云ひたるも。モあまり割符が合ひ過ぎて。此沖の

井は呑込めぬ。ア、イヤそればかりでない此願書。願主松ケ枝節之助。政岡とあるからは。イヤ〱それとても同じ事。かかる大事を工む者があり〱と名を顯はし。證據の種を殘し置かうや。サ若しや其名が八汐とあらば。お前は科を被る氣か。モあんまり工みが淺はかで。詮議立てするお人まで。底意の程が心得ぬ。曲者めを拷問して。五十四郡を呑まんとする工みの底を白狀させ。惡事に與する方人ども。一々首を並べて見せう。サとつくと見物成されよと。地此場の善惡明白に見通す如き辯舌は。實にも信夫の後室と。フシ奥ゆかしくぞ見えにける。地理の當然に拉がれて。八汐は尙も減らず口。詞テモつべこべと能うおつしやるの。が所詮分らぬ水掛論。モ何時まで言つても同じ事。マア此儘に差措いて。追つての詮議それまでは。小袋も下つて休息召され。地と目くばせし作ふ二人に一物の。有りと見抜きし後室の眼鏡はづさぬ一捌き。曲者引けと嚴重に。心は隔つ。竹の間のオクリ襖へ押明け入りにける。地跡見送りて政岡が正無き事も身に懸る。科は晴れても晴れやらぬ。養ひ君の行末を誰に。問ふべき樣もフシ無く心。一つの憂き思ひ。地物案じなる母親の。顏を詠むる千松に。鶴喜代君も打守り。詞コレ乳母。モウ何云うても大事ないかや。アイ〱外に誰も居りませず。何なりとも御意遊ばせ。ほんに先に沖の井殿。若へ御膳を上げた時。豫て乳母が申した事お聞入れ遊ばして。ようマアお上り遊ばさなんだナア。それでこそ此乳母が。お育て申した若殿樣。ヲ、お出かし成された天晴なと。地譽むればあどなき稚氣に。詞ヤイ乳母。ひもじいと云ふ事は。强い武士の云はぬ事と。常に其方が云うた故。おれは云はねど。先にから空腹に成つたわやい。ヲヲお道理でござります。今日は思はぬ事故に。御飯の拵へも遲うなり。あなた樣にも嘸ぞお待ちかね。千松もよう辛抱しやつた。地モウ拵へて上げますと立上れば。詞ナウ乳母。こゝに在る此膳を。食べるのは惡いかや。ア、イヤ申し其御膳を上げる程なれば。乳母も苦勞は致しませねど。此程から怪しい事ども。忠義厚き沖の井殿。差上げられた其御膳。疑ひはなけれども。油斷の成らぬ此時節。上げてよければ此政岡が上げまする。コレようお聞き遊ばせや。今お館には惡人蔓り。御近習小姓膳番まで。ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は。不義者とて遠ざけられ。力とする者も無く。朝夕の御膳は皆庭へ捨てさせて。私が手づから拵へて差上ぐるも。若し毒藥の工みもと。微塵心はゆるされず。空腹なもお道理ながら。

御前のおこらへ遊ばす爲。此千松も四五日前から。地三度の食事もたつた一度。忠義故ぢやと堪へて居ります。詞コレ千松。そなたは云ふ事よう聞いて。何とも云はずに辛抱する。ヲヽ賢い〳〵强い〳〵强者ぢやと。地譽むれば千松。詞コレ母樣。侍の子といふ者は。ひもじい目をするが忠義ぢや。又食べる時には毒でも何とも思はず。お主の爲には喰ふものぢやと云はしやつた故に。わしや何とも云はずに待つて居る。其代り忠義をして仕舞うたら。早うまゝを食はしてや。それまでは翌日までも何時までも。かうきつと坐つて。お膝に手を突いて待つて居ります。お腹が空いてもひもじうは無い。地何とも無いと澁面作り。涙は出づれど稚氣に譽められたさが一杯に。詞こちや泣きはせぬわいと。地額を撫でて泣顔を。隱す心は流石にも。名に負ふ フシ武士の胤なりき。地母は健氣さいぢらしさ スヱテ目に持つ涙心には。御前に聞かす譽め詞。詞ヲヽさうぢや〳〵。强者ぢや。千松はいかう强う成りやつたわいの。イヤ千松よりおれが强い。ヤイ政岡。おれはちつとも空腹には無いぞよ。大名といふ者は。飯も何にもたべずに。かう坐つて居る者ぢや。ナウ乳母おれは强者ぢや。是は又氣疎い事ぢやわ。さうお行儀な所を見ては。まだ〳〵千松などは叶はぬ〳〵。ヲヽお强い〳〵。さうお强うては。コリヤ早う飯を上げさな



るまい。地ドレ拵へうとかい立つて。傍へに飾る黒棚より。オクリ取出す。錦の袋物。風爐に掛けたる茶飯釜の。中太夫フシ湯の試みを千松に。飲ます茶碗も樂ならで。タヽキお末が業を信樂や。いつ水指しを炊ぎ桶。流す涙の水こぼし。心は清き洗ひ米。釜に移して風爐の炭。直して煽ぐ扇さへ。骨も砕くる思ひなり。地アレもう飯ぢやと御機嫌の。我が子も共に悦び顔。見れば胸まで突つかくる。涙呑込み呑込んで。詞モウ上げますぞえ。母様早う上げましてや。ヲヽ上げませいで何とせう。今上げまするまちつと煮立つ其間。お氣に入りの雀の子。モウ親鳥が來る時分。地其處へ直してお慰み。アイ／＼と千松が返事はすれど立ち惱み。歩む姿もたよ／＼と。フシ置き直したる小鳥籠。文彌地ちうと敎へる親鳥の軒端の竹に飛びかはす。子は孝行に面痩せて。はごくみ返す烏羽玉の。涙を隠す フシうなひ髪かゝれは直ぐに飯になる。ソリヤもう飯ぢやと悦ぶ子。詞コレ千松。何とも無いと云ふ下から。忙しない何の事ぢや。何時も唄ふ雀の歌。唄うて御前の御機嫌取りや。エエ鈍な子ではあるわいと。叱られておろ／＼涙。スヱしやくりながらの濕り聲。唄こちの裏のちさの木に／＼。雀が三疋留つて／＼。一羽の雀がいふ事にや／＼。夕べ呼んだ花嫁御花嫁御。竹の下葉を飛び下りて籠へ。寄來る親鳥の。餌食みをすれば子雀の。嘴フシさし寄する有様に。詞アレ／＼乳母。雀の親が。子に何やら喰はし居る。おれもあの様に。早う飯がたべたいと。地小鳥を羨む御心根。ヲヽお道理ぢやと云ひたさを紛らす聲も。フシ震はれて。唄わしが子息の千松が／＼。詞エヽコレ千松。殿様の御機嫌を。エヽ何を泣顔する事がある。ちひさうても侍ぢや。コレ。唄七ツ八ツから金山へ／＼。一年待てどもまだ見えぬ／＼。詞乳母まだ飯は出來ぬかや。ヲヽもう出來まする。唄二年待てどもまだ見えぬ／＼。詞母様飯はまだかい



のエ、忙しない。そなた迄が同じ様に行儀の悪い。イエ〱わしは食べたい事は無いけれど。御前様がおひもじからうと思うて。エ、何のお強いお殿様が。おせがみなされう。ソリヤ其方がせがむのぢや。イエ〱私はせがみはしませぬ。サアせがまずば今の唄。聲張上げて唄うて見やと。地云はれて涙の聲張上げ。唄ほろり〱とお泣きやるが〱。地力なく〱泣聲を隱して連れる母親が。何が不足でお泣きやるぞ〱。唄の唱歌も身に當る。涙はお乳がフシ胸の内子故の。闇で遣る瀬なき。地若殿小陰を打詠め。詞アレ〱千松狆が來る呼べ〱。狆よこい〱と。地呼べば駈けくる緣の上。詞ヲ、よい所へよう來たな。アほんにわれは仕合せ者。おすべりの此御膳。殿様の御機嫌を。直した御褒美戴けと。地紙折り敷いて並ぶれば悦ぶ體を見る若君。詞乳母おりやアノ狆に成りたいと地羨み給ふ御風情。聞く悲しさを堪へかね。詞ヲ、お道理ぢや〱。地日本國の其中に幾億萬と限り無き。人の果報を請け給ひ五十四郡の御主と。榮耀榮華は上も無き何暗からぬ御身にて。思ひがけ無い御辛抱。詞縱へ賤しい下々でも。斯ういう事が有るものか。地ましてや遂に見も聞きも。長地涙ながらに政岡が申す事とておとなしう。聞入れ給ふ痛はしや。現在御内の御家來が。詞邪非道に組み從ひ。殺害せんとのエみとは。知つたる故に蔭身に添ひ。おまめな御身を御病氣と世間を僞り胴慾に。幼い御身に朝夕さへ思ふ様に上げぬ故。鳥獸の餌ばむをば羨しがるお詞は。御尤ともお道理とも云ふに云はれぬ御身の因果。雀や犬に劣つたる宮仕して忠義ぢやと。云はれうものかと喰ひしばり。胸も煮立つ風爐先の。屏風にひしとフシ身を寄せて奥を。憚る忍び泣き。地幼けれども天然に太守の心備はりて。詞コレ乳母何で泣くぞいやい。其方や千松もたべぬ内。おれ一人忙しいと思ふなら。モウ堪忍して泣いてくれな。其方達二人がたべぬ内は。何時までもおれは堪へてゐる。おれがたべても乳母がたべずに。死にやつたら惡いナア千松。そちが死んでも惡い。ナア。ハイ〱〱。ようおつしやつて遣はされます。ア、有難う御ざります。乳母が今泣いたのはな。アリヤ飯の早う出來る呪ひ。何の悲しい事はござりませぬ。コレモウ涙は無い。ナ御覽じませ。ホ、ホホ、、、。をかしい〱サア〱今の呪ひで。モウ飯が出來ました。いつもの様に。地握々して上げましよと。飯七取つて手の内に。フシ結ぶを千年と待侘びて手を出し給へば。詞マア〱お待ち遊ばせや。吟味の上にも吟味せねば。御辛抱の

甲斐が無い。地先づ御毒味と千松が。顏を眺めて。詞ム、氣遣ひない。サア〳〵地御前御心靜かに召しませと。云ふにいそ〳〵御悦び。千萬石を手の裡に。握る御身に引替へて。只一握りの握飯を數の珍味と思召す。御心根の勿體なやと君を思ひ我が子を思ひ。心の奥のフシ忍ぶ山忍び。涙の折からに。詞梶原様の奥方御入りなりと。呼ばはる聲。ハテ心得ぬ梶原の奥方とは。何にもせよお通し申せ。コレ千松。そなたは次へ。常々母が云ひし事。必ず〳〵忘れまいぞ。サ早う。地早うと追ひやつて。フシ衣紋繕ふ其内に。沖の井八汐も出迎ひ敬ふ。襖押し開かせ。地梶原平三景時の奥方。夫の權威に榮え御前。しと〳〵と上座に直り。詞ヲ、何れ〳〵も出迎ひ大儀。自ら今日來りしは右大將の御上使。夫景時承はれども。義綱の一子鶴喜代病氣によつて。男たる者を禁じ

たると聞きし故。夫に代る此榮。義綱隱居の其後鶴喜代の所勞。殊に食事も進まぬ由。御心を付けられし此御菓子。頼朝公より下され物。有難く頂戴あれと。地持たせしフシカヽリ菓子箱さし出せば八汐引取り。詞コレハ〳〵有難い大將よりの下され物。サア〳〵と申し若殿樣。早う頂戴遊ばしませと。地蓋押開き。詞テモまあ見事な結構な此お菓子。イザ召しませとフシ差出す。地流石童の嬉しげに。立寄り給ふ鶴喜代君。詞ア、申し御前樣。又其樣なさもしい事。御病氣の御身なれば。お毒になつたら何となさるゝ。地此方へお越しと政岡が。詞打消す榮御前。詞ヤア頼朝公より下さるゝ御菓子。何疑うて頂戴させぬ。是非此榮が食べさせる。ア、イヤそれでも。ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しうないかサア。サア。サア〳〵とフシ權柄押し。地奥より走つて

千松が。其菓子欲しいと引摑み。何の頑是も只一口。八汐が悔り榮御前。毒の工みの顯れ口。忽ち惱亂目を見詰め蹴ちらかしたるフシ折は散亂。地八汐は透かさず千松が。首筋片手に引寄せて。懷劍ぐつと突込めばわつと一聲七轉八倒。驚く沖の井政岡がフシカヽリ仰天ながら一大事と。若君押し遣る我が部屋口。戸口に付添ひフシ守り居る。詞ヤア何をわざ〳〵。騷ぐ事は無いわいの。忝くも頼朝公より下されし此折。蹴破りしは上への無禮。小さい餓鬼でも其儘には差置かれぬ。それ故に手に懸けたは。お家の爲を思ふ八汐が忠節。ム、ハ、ハ、、、、。ヲ、可愛さうに〳〵。痛いかいなう〳〵。他人の私さへ涙がこぼれる。コレ政岡殿。現在の其方の子。悲しうも無いかいの。何のマアお上へ對して慮外せし千松。御成敗は御家の爲。ム、スリヤ。是でも此方

は何とも無いか。ヤ是でもか。〳〵と。地嬲殺しに千松が。苦しむ聲の肝先へこたゆる辛さ無念さを。ぢつと堪ゆる。辛抱も只若君の大事ぞと。涙一滴目に持たぬ。男勝りの政岡が。忠義は先代末代まで又有るまじき烈女の鑑フシ今に其名は。芳しき。地榮は始終政岡が。素振に氣を付けほゝ笑み。詞ヲ、出かした八汐。右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子。小伜めが出しやばつて。すつての事に大事の工み。イヤアノ大事の菓子を荒した科。殺したは八汐が働き。さすが渡會銀兵衛が妻程ある。政岡には自らが云ひ聞かす事もあり。沖の井八汐兩人は。暫く次へ間を隔て。遠慮召されと地榮の詞。何と違變も沖の井が深き心は和田津海の。汐の八汐も打連れてオクリ伴ひ。へ一間へ入りにける。フシ跡先見廻し榮御前。政岡が傍にすり寄つて。詞年頃仕込みしそなたの願望。成就して嘸ぞ悦び。エ、何とおつしやる。ア、イヤモ隱すには及ばぬ。東西わかぬ内よりも。取替へ置きしそなたの子の。鶴喜代が身に恙なう。義綱の誠の悴。千松がこの最後。嘸ぞ本望であらうなう。エ、。ヲ、取替へ子の樣子は先達て知つたれども。若しやと思ひ最前から。窺うて見る所。血筋の子の苦しみを。何ぼ氣強い親々でも。堪へらるるものぢやない。若殿にして置く我が子が大事。そなたの顏色變らぬは。取替へ子に相違は無い。スリヤ皆々心は同腹中。刑部殿とも内談しめ。諸事我が夫の指圖あらん。先づ今日は立歸り。病氣の樣子申上げん。必ず〳〵何事も。人に覺られまいぞやと。地一人呑込み悠々と。フシ館をさして歸らるゝ。地フシ跡には一人。政岡が奥口窺ひ〳〵て。地我が子の死骸抱き上げ。こたへ〳〵し悲しさを一度にわつと溜涙スヱせき入りせき上げ歎きしが。詞コレ千松よう死んでくれた出かしたな〳〵。そなたが命捨てたゆゑ。邪智深い榮御前。取替へ子と思ひ違へ。已れが工みを打明けしは。親子の者が忠心を。神や佛も憫みて。鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。ハ、、、、有難や。有難や。是と言ふのも此母が。常々教へて置いた事。稚心に聞分けて。手詰めに成つた毒害を。よう試みてたもつたなう。ヲ、出かしやつた〳〵。そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中。所存の臍を堅めさす誠に國の。フシ礎ぞや。地とは云ふものの可愛やな。君の御爲豫てより覺悟は極めて居ながらも。せめて人らしい者の手に懸つても死ぬ事か。素姓賤しい銀兵衛が女房づれの劒に掛り。なぶり殺しを現在に傍に見て居る母が氣はどの樣にあらうどうあらう 思ひ廻せば此程から。唄

うた唄に千松が。七つ八つから金山へ一年待てどもまだ見えぬ。二年待てどもまだ見えぬと。唄の中なる千松は待つかひあつて父母に顔をば見せる事もあらう。同じ名の付く千松の。そなたは百年待つたとて千年萬年待つたとて。何の便があろぞいの。三千世界に子を持つた親の心は皆一つ。子の可愛さに毒な物喰ふなと云うて叱るのに。毒と見えたら試みて。死んでくれいと云ふ様な。胴慾非道な母親が又と一人あるものか。武士の種に生れたは果報か因果か。いぢらしや。死ぬるを忠義といふ事は何時の世からの習はしぞと。凝固まりし鐵石心。流石女の愚に返り人目無ければ伏し轉び死骸にひつしと。抱付き前後。不覺に歎きしは理。フシ過ぎて道理なり。地後にすつくと八汐が大聲。詞何もかも様子は聞いた。こつちの工みの妨げ女。己れも生けては置かれぬと。地

詞の一間押開けて。詞ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦。工みの次第白状せよと。地立出づる沖の井。詞ヤア此八汐に白状とは。ヲ、其證人は爰に在ると。地云ひつゝ出づる顔見て恟り。詞ヤアそちは小卷。ヲヲ好い證人であらうがの。夫道益に云付けて。無理に毒藥調合させ。此事外へ洩らさうかと。よう夫を殺したな。夫の敵と思へども。女の身の討つ事叶はず。態と惡事に一味して。まつ斯う手めを上げよう爲。鶴喜代君と千松を。入替へ子と云うたも小卷。それ故に榮御前。うま〳〵此場を歸りしも。裏の裏行く七加減。サア眞直ぐに白狀と。地忠と不忠の喰ひ合せ。毒藥却つて藥と成る顔に似合ぬ配劑は。類ひ内儀の フシ手柄なり。地モウこれまでと八汐が懷劔。心得政岡請け流す。互に嗜む太刀さばき手を 三重カヽリ盡したる。フシ二人の女。地我が子の恨み一心

に突込む懷劔打落し。直ぐに切込む八汐が肩先。ひるむを取つて突通され。虚空を摑んで悶き死。惡の報ひは フシ忽ちに心地よくこそ見えにけり。地手柄々々と沖の井小卷。共に悦ぶ折からに。物音人聲騒がしく。詞アノ人音は縁の下。油斷ならざる若君の御身の上も氣遣ひたり。ヤア腰元中燭々。地はつと答へも銘々手燭。手んでに一腰長刀も閃めき渡る へ縁の下。身は鐵石の節之助。寄りくる忍びを人礫。三重カヽリはらり〳〵と フシ投げ散らす。地物の文色も暗紛れ。丈拔群の大鼠。口にくはへし系圖の一卷。飛鳥の如く駈行くを。透さぬ松ケ枝小柄の手裏劔鼠の頭忽ちにぱつと燃え立つ焰と共すつくと立つたる。異形の フシ姿。詞ア、ラ不思議や。密かに宿直の縁の下。斯く取り圍みし曲者ばら。騒ぎに紛れ現れしは。群に勝れし大鼠。正しく忍びの幻術なる

か。ハ、ハ、怪しやナア。此一卷を奪はん爲。大願成就嬉しやなア。地聲は遙かに節之助。曲者待てと聲より早く。はつしと打つたる以前の小柄。心得松ヶ枝忍びを楯。胸先血煙り曲者は跡を。晤まし

三重へ出でて行く

第七

詞サア〳〵休め〳〵。おらが旦那明衡殿は。人遣ひが好いと聞き。跡の季から住んで見たが。此頃の忙しさ是では體が續かない。ヲ、それ〳〵。專内が云ふ通り。朝から晩まで働き通し。其上に京都から。上使とやら檢使とやら。今日此處へ來ると云うて。あの樣に幕打廻し。饗應ぢやの御馳走のと。酒や肴で交ぜかへす。殘らずあれを喰ふであろ。おいらはすぐち空腹で。寒晒しの此尻を。明け六つに御戸帳開き。夜九つに閉帳して。著のみ著の儘轉りとやるは。はかない事では無いかいやい。コリヤ是非内が云ふ通り。中間の身の上程。打見には美々しくて。不便者の上は無し。さりながら悔むな〳〵。此身の上にも樂しみあり。最前幕へ運ぶ内。ちよろりと曲めたコレ此樽。三人寄つて呑まうぢやないか。是は出かした素早いやつ。肴などとは榮耀の沙汰と。地芝に。べつたり毛だらけな尻 フシかたばみに押直り。地指いつ指されつ食べつ押



へつ呑む程に酒もよい程廻り口。江戸兵衛茶碗。下に置き。詞ア、何ぞ肴が欲しいなア。アノ幕の内にこそ肴はたんとあるらん。ソリヤ知れた事。此專内が運ぶ内。一々蓋は取つて見ねど。大方中は淺蜊の酢和。鮪の刺身きらずの煎上。鰶こはだを魚田にし。それから段々長じて來たら。湯豆腐などと奢るであらう。コリヤ〱江戸兵衛。汝は其樣な料理をば。喰つた事はあるまいな。テモ扨も此奴はきつい下卑藏。喰物の事ばかりぬかし居る。忝くも此江戸兵衛。水道の水で育つた男。其樣な卑劣な事は御存じ無いわい。コイツハ〱僭上をぬかすがな。江戸は江戸でも。大方裏屋の九尺店一つ竈に割鍋懸け此頃は米は高し。其日々々の小買ひであろ。コリヤヤイ〱。頤の動く儘。樣々と人の店探しするがな。忝くも此男の。住みし所を云うて聞かそか。ドレ聞かうか。云ふぞよ。聞くぞよ。抑も此男の住みたる所は。淺草見附の邊りに於て。島屋といへる現金店。先づ其間口が五十間。奥行が五十五間。土藏作りに家を建て。ヤア藤井と書きし暖簾を掛け。番頭手代子供まで。六百人餘の人を遣ひ。ヤア。某は其中で。番頭殿か。イヤ飯焚殿ぢや。ほんに人の行末と。白水の流れ程知れぬものは無い。江戸の者が奥州三界。わい等と付合ふも他生の縁。イヤ又江戸の繁昌



が見せたいわい。先づ現金店と云ふ物はな。手代衆が二百人ばかり。抹香盛つた様にづらりと並ぶと。店に子供が立つて居て。お這入りなさいやせう。是へ〳〵〳〵。時に女中など來ると。お出でなされませ。今日は長閑にござります。此間の地合をも一度御覧じませ。エヽ子供や。ヘノサ位の八丈替り縞。十四五反持つておぢや。勘三御覧じたで御座りませう。羽左衛門もきつい評判でござります。エヽ判取などとやらかすは。ハテさてそれは賑はしさうな事ぢやな。したが其勘三羽左衛門とは。どのお屋敷の御家老だ。エヽコイツハ生得田舎の芋掘りだ。コリヤ其勘三羽左衛門といふはな。日本一の歌舞妓芝居。イヤ又其繁昌が見せたいなア。役者と云ふものがたんとあつて。義經をする時は義經。金平は金平。傾城は傾城と。それ〳〵に分かる所が妙だわ。それをわい等に見せたいなア。ぢやが此様な遠國に生れては。それも一生得見ずに。地仕舞うであろと總々が スエカヽリ 打萎るれば道理々々。詞さりながら江戸中に生れても。屋敷方の奥女中。又町方の奉公人。芝居を見るは一年に漸と一度か二度。其様な人にはかの。聲色で堪能さすわ。なに聲色とは聞かない染色だな。エヽ蒲色の事であろ。但は萠黄か花色か。アヽイヤ〳〵其様な事ぢや無い。今云うた役者の聲柄を。とつと其役者がそこへ出た様に似せるのぢや。おれも江戸に居た時は。其聲色を使ふ事が大名人。聞手があるなら聞かしたいと。地口から出儘の フシ 太平樂。地聞いて皆々擧り寄り。詞コレそれは何より面白かろ。芝居を見る事は成らずとも。せめて其蒲色とやら聲色とやらが聞きたいなア。どうぞ一口所望ぢやと。地せがみ立てられ今更に。知らぬとは云はれぬ時宜。高で向うは田舎者。知らぬを當に押強う。詞そんならわい等は彌々知らぬな。イヤ〳〵知らぬ。ほんに知らぬな。知らずばさらば遣つて聞かさう。併し聲色遣ふには。唄が無くては成らぬが。わいら唄つてくれないか。ハテ唄というても在郷者。臼引唄より何にも知らぬ。イヤ〳〵聲色の唄は文句が極つてある。アヽ何とやら。ヲヽそれ〳〵。雨の降る夜は一入ゆかし。この文句に何なりとも。節を付けて唄つてくれ。そんなら節は何でもよいな。唄雨の降る夜はナ。一しほゆかし。詞東西々々只今遣ひますが市川團十郎でござります。金ならたつた三百兩で。可愛い男を殺すか。アア金が欲しいなア。二八十六で文付けられて。二九の十八でつい其心ぢやわいなア。とつともうえらいもんぢやわいなア。ヨウ〳〵團十郎様〳〵。ハヽ團十郎は女

役ぢやな。今のは大方十七八な。娘になつた所と見えて。可愛らしい風俗までが。思ひ遣られて面白いわい。サア〳〵ま一つ所望ぢや〳〵。今度はから金平か金時の様な。强い事がよかろ〳〵と。地請けのよいのに頭に乘つて。詞强い事ならヲヲそれ〳〵。そんなら瀨川菊之丞。こいつは又可愛らしい名ぢやが。若し菊之丞は女役ぢやないか。イヤ〳〵。江戸一番の敵役。丈の高さが六尺餘りで太り肉。たとへて見ようなら誰であらうぞ。ヲ、ソレ〳〵。此國から出られた。丁度谷風と云ふ男。顏を眞赤に塗り散らし。橋懸からぐわたり〳〵と。イヤ聲色ばかりは面白ない。ついでに身振りもして見せう。おれが足を踏む度に。そこらの石を拾つて來て。今の桴でも叩いた〳〵。おつと合點と專内是非內。陰を打つ役ぐわたり〳〵。ぐわた〳〵〳〵。地まつこの如くと踏んばたかる。詞ヨウ〳〵菊之丞様〳〵。椎の木四五本小楯に取り。赤澤山の山千鳥。本尊かけたか掛け千鳥。とんびはとゝう鳥はかかア。變つたハレマ對面ぢやなアと。地何を云ふやらやくたいも。知らぬが佛總々が フシやつちや〳〵と褒めにける。地江戸兵衞ハツト心付き。詞からしてべら〳〵遊んだら。また頭めが呵るであろ。尻の來ぬ内サア〳〵と。箒かたげて 地銘々に オクリとばかは へ彼處へ フシ急ぎ行く。地天ざかる 木フシカヽリ鄙とはいへど風俗は。都に恥ぢぬはずし地の。徒步を拾うて象潟御前。娘文字摺伴うて。フシ乘物釣らせしづ〳〵と。とある木蔭に立休らひ。詞イヤなう文字摺。けふは御先祖秀衡樣の御命日に相當れば。定倉殿廟參の筈なれど。公用繁き中なれば。夫に代つて自らが徒步路を行くも君への恐れ。そなたを一所に伴ふも都より上使の御入り。御馳走役はそなたの夫。祝言はまだせねど許嫁の千賀之助殿。餘所ながら顏も見せたし。さりながら屋敷からは餘程の道。そなたも定めてしんどかろ。私よりは母樣の。常からおひろひなされぬ道嘸ぞお疲れでござりませう。お使者儲けの此床几。ちとマアお休み遊ばしませと。地親子の中も武家は武家 フシ堅い程尙可愛らし。詞コリヤ〳〵家來ども。暫く休息する間乘物はそこに置き。木蔭に休んで歸りを待て。地サア文字摺と傍へなる。フシ床几に休らふ程もなく。地京都よりの使者羽根川丹下。伊達千賀之助伴うてしづ〳〵と。出で來れば。それと見るより萩原藤治。二人が前に兩手を突き。詞先づ以て遠路の御光駕御苦勞千萬。拙者儀は定倉が家來萩原藤治。憚りながら一つのお願ひ。先祖秀衡の眼識を以て。主人定倉代々預る領地の內。今改

めて明衡殿の支配地に罷りなる事。主命黙止しがたけれど。何とも拙者その意得ず。此儀遺恨の元とならば。終には兩家の不和と成つて。自らと忠義を忘るゝ道理。今一應了簡あつて。御割戻し下されかしと恐入つてぞ願ひける。ホウ萩原の願ひ尤も至極。定倉殿と親明衡。兩人遺恨を差挟まば鶴喜代君のお爲もいかゞ。コリヤ丹下殿御思案あつて。御割戻し遣はされまいか。成りませぬ。何事も皆此胸に。サ何にも云はずと控へてござれ。ヤイコリヤ若い者。此度の領地の事。主人鶴喜代の指圖ばかりと思ふか。忝くも梶原殿内意を以ての御仰せ。其方如きの知る事ならず。上使に向つて過言を吐くは。主人定介の言付けならん。後日の祟りをヤ待つてをれと。地嵩にかゝれば此方はむつと。詞鶴喜代君の仰せとあらば。了簡の付くべき品もあらん。が先祖秀衡武功によつて。鑓先にて取つたる此國。ヤ他家の指圖を請くる樣な主人で無い。ヤア緩怠なり其頤骨。切下げてくれんずと。地切刃廻せばこなたも身構へ。既に斯うよと フシ見えければ。地象潟中へ分け入つて 詞マア〳〵お待ち下さりませ。自らは定倉が妻象潟と申す者。モ最前よりの家來が無禮。御立腹は御尤も。が慮外の段は幾重にもっ御了簡下さらば忝う存じます。イヤなう藤治。御主人様より我が夫に。數代預る領分なれど。モ他家へ上げるといふではなし同家中の明衡樣。殊に內緣ある家へ。お預けなさるを其樣に。マ何を爭ふ事がある。御覧じませ田舍武士と申す者は。面々が勝手ばかり。モ必ずお氣に障へられて下さりますなえ。コリヤ其方は此樣子。定倉殿へ早く申せ。イヤサコリヤ何事も此胸にナ。合點がいたか。サア〳〵早うに 地是非なくも。主命何と詞さへ無念を。フシ堪へ立歸る。地跡打見やり。詞イヤ何象潟殿とやら。其許は定倉の奥方となて領分の狭められ嘸ぞ無念にござらうが。主命なれば是非ない事と。早く諦めさつしやるがよい。ヤコレ千賀之助殿。其許親父預り地の外。十分の棒杭打たせ。嘸ぞ大慶にござらうの。モ誰しもかやうの目出たい事。あやかる爲に幕の內で。お盃を頂戴致さう。ヤコレサモ兎角のいらへもさつしやれぬは。どうでござる。サ其許の御利分に成る事。刑部殿の差圖なれど。モ一つは拙者が働きを以て。サかやうに事を取計らふも。此國に澤山なる。カノエ、金花咲く陸奥の。ナ金花咲く御馳走に預らんと參つたに。不興の體は心得ず。が但しは使者を侮るのかと。地氣相變れば象潟は。上使の前に差寄つて。詞お氣放じにお茶一つ。召上られて下さりませ。イヤ其許

の馳走は請けぬ。かつふつ構ひ召さるゝな。が心得ぬは千賀之助。餘人は知らず某へは。逆様に這ひつくばひ。馳走答拜すべき筈。不快でござります。ヤ何とおいやる。サア此四五日はきつう病氣が差發り。一向人事も分りませず。モそれ故私は一家の事なり。けふ御馳走の其役に頼まれました事なれば。モ何事も御遠慮なう仰付けられ下されよと。地この場の時宜をそれぞとも言はぬ色なる一包み。フシ上使の袖へ差入るれば。地ちやくと袂でしびいて見。俄に作る。ほや〳〵笑顏。詞ハ、、、さてはさういふ事であつたか。それは近頃御苦勞千萬。が千賀殿も病氣とあれば養生が大事でござる。モ早く藥を用ひさつしやれ。が象潟殿が取持ちなさるれば。モウ其許は是にござるにも及ぶまいさ。身どもとても疳癪持。發りさうな其時は。かの今のナソレ。萬

金丹か。金勝丸。金の字の付く妙藥を。給べると忽ち直ります。が是から幕の内へ參り。疳癪の養生ながら。御馳走に預りませう。それは何よりお嬉しい。イヤナウ文字摺。千賀之助殿のあの病氣も大抵では癒るまい。モそなたは近頃大儀ながら。跡に殘つて介抱頼む。が但しは母が殘らうか。アノマアかゝ様のおつしやる事。大儀な役を勤めるが。ちとなとお前へ私が孝行ヲ、それ〳〵。申しお使者様。マ孝行な娘ではござりませぬかいな。イヤハヤ神妙な事でござる。モあれなら娘御の御馳走でも。隨分とよからうが。モどう言うても若いだけ。今のナソレ萬金丹。金花咲く陸奥に。心が付かぬと我等が迷惑。若い者は若い同志。が象潟殿には御案内。然らば左樣。斯うお入りと地塗り廻したる追從も。深き心の奥方は オクリ件ひへ幕へ フシ入りにけり。地千賀之助は

默然と。スヱテ思案取り〳〵後には。心もだ〳〵文字摺が。詞イヤ申し千賀之助様。お心惡いが定ならば。お背中でもさすり・ませうかえ。ヲ、緣なればこそ深切に。問うて下さる忝い。が只心得ぬは父の胸中。此頃はそなたの父。定倉殿とも中好からず。さすれば主人へ不忠の基。が但しは深い思召し。あつての事か何にもせよ。モどうも思案に落付かぬ。アレまだあんな餘所事に。紛らす様な事ばかり。地許嫁ばかりにていつ呼迎へなさるゝやら。ほんに出雲の神様へ。懸けた願ひの驗にて。思ふ殿御へ。嫁入りを今日よ明日よと待つ月日。短い冬の一日を。千年と思ふ心根を。ちつとは推量してたべと。娘心の一筋に思ひ積りし。フシ怨み泣き。地千賀之助も稲船のいなには非ず穂に出でて。靡く心の向うへ人音。詞アレ〳〵あそこへ親仁様。地ほんに私が心も知ら

ず悪い所へ明衡様。かういふ猥らな體見せたら直ぐに勘當請ける事。コリヤマアどうせう木隠れも七熊ならぬ乗物へ。小さうなつてフシ屈み居る。地伊達の治郎明衡廟参の下向道。幕際近く立止り。詞それなるは文字摺ならずや。京都の御使者は早やお入りか。倅千賀之助今朝より此所へ参り居る筈。が其方は知らずやと。地様子知つたか。知らぬのか。氣味悪さうに文字摺が。詞サア千賀様はたつた今まで。私と話しやなどするお方ぢやない。さうして常からお達者で。乗物は大嫌ひ。お屋敷にやなどござりませう。サ早くお歸り。なされませと地何を。フシ言ふやらしども無き。地幕の内より羽根川丹下。象潟御前伴ひ出で。詞ヤコレハ〳〵明衡殿先刻よりお待ち申す。が就いては其許領分の儀。拙者内外取りはからひ。士分の棒杭打ち漸う只今休息の所。嘸ぞ御滿

悦でござらうの。ヤコレハ〳〵遠路と申し。御懇切の御計らひ身に取つていかばかり。某も今朝より早速参る筈の所。先君の廟所へ参詣。心外の不沙汰御宥免に預りたし。が則ち倅千賀之助。御使者設けの其爲に。ア、イヤ〳〵其儀はお構ひ御無用。象潟殿の御取持で。種々御馳走に罷りなる。ハテナ。饗應の役人に付置く倅は此場に無く。頼みもせぬに横合ひよりの取持ちだて。世には物好きな者もあるもの。ナウお使者と地どこやらに毒ある詞聞咎め。詞イヤ申し明衡様。其お詞は誰におつしやる。最前是に千賀之助殿。病氣の體に見えし故参りかゝつた氣の毒さ。お世話申すも一家の誼。ヤア其一家氣にくはぬ。心善からぬ定倉が。娘の縁を幸ひに我が倅を取込んで。收め賜はる領分を。割返させん其爲に。お使者の追從輕薄。其方の猿智慧か。但し定倉

が言付けか。ヤア卑怯至極な追從侍。ヤア聞きにくし明衡殿。縁談は内證事。京都のお使者もござる前聞捨てにはなりがたし。定倉が領分は。先祖の鑓先鈍らぬ所。表裏を以て郡内を貪り掠める明衡殿。平たう言はゞマア國賊。斯く申すのが御無念ならば。お相手になりませうか。サア御返答地承はらんと懐刀抜きかけて。詰寄り詰寄る柳腰。傍にあぶ〳〵フシカ、り氣遣ふ娘。明衡は高笑ひ。詞ハ、、、、。ハテつべこべと喋つたりな。所詮女は相手にせぬ。御自慢なさるゝ御亭主に。泡を吹かせてお目に掛けん。がこれよりは屋敷へ歸り。不所存なる倅めを眞二つに打放し。内縁さつぱりと。切つて仕舞へば何處からも。手を入れられん氣遣ひなし。イザお使者には。お先へと地邊に屹度目を付けて。フシ屋敷へこそは立歸る。地行く間遅しと乗物より。飛んで出でた

る千賀之助。詞日頃には似ぬ父の詞。刑部貝田に荷擔して。お家を奪ふ工みよな。ヤ何にもせよ御意見をと。地駈行く氣相マア／＼待つた千賀之助。詞今明衡の詞と言ひ若輩者の意見だて。聞入れぬのみならず却つて刄にかゝりなば。サお主へ忠義はどの命で。マア急く所ではないわいなう。が今日の爲體。明衡殿の心に一物。所存あつてか敵へ一味か。善惡分かるそれ迄は。千賀之助をこつちへ人質。牢輿がはりの此乗物。娘の部屋へ押込めて日の目拜まぬ座敷牢。屛風の内の轉責。夜もとつくりと寢さしはせぬ。さう心得て覺悟しや。イヤなう文字摺。假初ならぬ大事の人質そなたに番を言付ける。マ取逃さぬ様相輿にと。地恥かしがるを手を取つて無理に。押込みヲ、ソレ／＼。詞いつ駈出さうも知れぬ囚人。地肌と肌とを締め合うて。用心堅固に油斷せまいぞ。ヲ、マアノ嬉しさうな顔わいの。家來ども。乗物やれと地引添うて。歸るは粹の。水上や衣。川へと 三重へ立歸る

第八

三下り唄荻の上風浮氣はいやよ。しめて寢る夜はナ下紐解いて。萩の下露わしや恥かしい ナホスフシ 武名は國に綻びぬ。衣川の館には泉の小治郎定倉。華麗を好まぬ奥座敷。庭は代々經るもとあらの木萩の花の返り咲き。時を違へし人心穩かならぬ冬の空。庭には主從三人が手々に竹杷箒目の。落葉枯葉を取捨てて打つ水玉に置く露もフシ紛へて。蟲とや見えぬらん。地主定倉機嫌好く。詞ヤ千賀之助。今日は其方が手傳ひで思ひの外早い仕舞ひ。嘸ぞ草臥であらう休息しやれ。ハアこれは痛み入つたるお詞。お前様こそ嘸ぞお勞れ。モウ何事もお構ひなく。平に御休息なされませと。地勸めに定倉傍への床几。腰うち掛けて烟草盆。煙管取上げ薫らする。煙に憂さを吹きはらす。フシ花に餘念は無かりける。地飛石傳ひ。歩み來る。定倉の奥方象潟御前。跡に付添ふ文字摺御寮。年も二八の振りの袖心ばへなら器量なら京恥かしき品形。腰元はしたがとり／＼に。小竹筒組重かず／＼を床几の フシもとへ持てはこぶ。地奥方はしとやかに。詞御秘藏の花の返り咲き。いつも盛りの時分と違ひ。寒氣烈しき冬の空毎日々々庭へ下り。御持病でも發つてはと。文字摺に氣を付けられ九獻でも上げたいと。此子が手づから切り刻み。所變れば品とやら。お氣放じに酒一つ。お上りなされて下さりませと。會釋こぼるゝ挨拶に。詞ヲ、氣が付いて心遣ひ過分過分。花に心を移し居れば鬱氣もせず。結句土なぶりは身の養生。ナニ栂平は次へ

立つて休足せい。ナイ〱と地其儘部屋へフシ立つて行く。地定倉は打ちくつろぎイザ一獻と取上ぐる。娘が酌に一つ受け。詞此盃は千賀之助。そなたへ差さう。一つ呑みやれ。此頃自身庭の掃除を勤むるも。秀衡公寵愛ありし此萩。それ故庭を清くするも先君に仕へる心。時ならぬ返り咲きもお家の吉事を告ぐるならん。此もとあらの木萩に寄せ詠みたる歌は。ア、何とやら。娘そちや覺えずや。アイ成程その歌は。秋萩の古枝に咲ける花見れば。元の心は忘れざりけり。ヲ、いかにも〱。ある人萩は一年づつにして枯れ。若葉より花咲くを古枝に咲けると詠みしはと難ず。此萩草花にあらず木なり。地一名を唐萩といふ。依つて弓などに是を作る。詞武勇に長ぜし秀衡公寵愛ありしも尤も〱。地花の色も異木に勝り餘國に雙ぶ方なき名木。先君御秘藏のこの木

萩。詞一年に二度の樂しみ。去年と今年を秋と冬。ハテ面白の眺めやと地酌みかはしたる盃の數々。オクリ廻ぐる年毎に。フシ斯くぞありたき風情なり。地父の機嫌に文字摺が。何か願ひのあり顔を。見て取る母がコレ文字摺。詞父上へ今の事ちやつと〱と敎へられ。地面映ゆげに手をつかへ。不義者と思召すもフシ恥かしけれども。地許嫁の千賀之助樣。一つ屋敷に居ながらもまだ祝言もせぬ殿御。父上のお情で。どうぞ今宵夫婦の盃。お許しなされて下さりませと。父には願ひ夫には聞け。聞けがしも戀のかぜ。胸の結ぼれもつれ糸たゞ一筋のフシ願ひなり。詞ホ、尤もなる願ひなれども其盃は追つての事と。言ふ其仔細は。明衡が此頃の行跡。刑部貝田に合體せしか。先つ頃より不和の中。彼が心底さぐり見て。惡説に極まらば其時こそ改めて明衡方へそちが

輿入り若し又惡事に與せしならば。言ふまでもなく叶はぬ緣と諦めよと。地聞いてがつくり文字摺が。いつ果てしなき盃の。延びる思ひのスヱテ遣瀨なさ涙隙なき。有樣に。地母象潟が引取りて。詞此頃上使設けの時。明衡樣の御機嫌損じ。それ故自らが伴うて此館に置く千賀之助殿。折を見合せ詫言は自らが心にある。其上父御が明衡樣にお逢ひなされたら。祝言もつい出來る。必ずきな〱思やんな。この國にて明衡定倉といへば羽翼の臣。代々忠義を忘れぬ家。明衡樣に限りよもやさういふお心の。イヤ〱奥さうで無い。水は方圓の器に隨ふ。油斷ならざる此時節。移り易きは人心と。地詞の内に千賀之助定倉が傍に差寄つて。詞父明衡が胸中は定倉樣こそ能く御存じ。主君を忘れ非道に與し。同天は戴かず。地さりながら。如何なる天魔が魅入りにて。

逆徒の氣ざしも候はゞ。一家同友の御誼み。御諫言なし下さらば生々世々の御厚恩と スエテ 涙と共に。願ひける。詞 ホ、切なる願ひ尤も〳〵。併し義に依つて一命は塵芥よりも猶輕し。君父に仕へる千賀之助。若し又明衡。君に弓引く心あらば。ハ、ア仰せまでも候はず。君の爲國の爲。父明衡を討つて捨て。腹かつさばき父諸共冥途の魁。ヤレ其詞が武士の誓言。ハテ逞しや健氣やと。地 流石血筋の縁に連れ。千賀之助が心の中。思ひやつたる目に涙。見合す顔の一雫 フシ 花も萎るゝばかりなり。地 折柄下部が手をつかへ。詞 錦戸鷲五郎様御入りなりと知らすれば。ハテ心得ぬ。刑部が倅當國へ來りしとは。何にもせよ是へ通せ。象潟娘も次へ立ちやれと追立てやり。衣紋繕ひ。地フシ 待つ間ほどなく。入り來る錦戸鷲五郎。都育ちと名にも似ぬ飾くれ立ちし角

前髪。疊障りも荒けなくさも横柄なる面構。上座に フシ どつかと押直れば。地 定倉は威儀繕ひ。詞 ホ、珍らしや五郎殿。先づ以て遠路の所御苦勞千萬。御用の趣き承はらんと手を突けば。サレバ〳〵。拙者遙々と參る事餘の儀にあらず。當時都には奸佞の者多く。やゝともすれば主君を害し。家國を押領せんとの企て。愚父を始め貝田某。日夜を分たず寢食を忘れ。さるによつて間者を入れ聞きたる所。其逆徒の張本といふは。當國に在りと事明白たるによつて。貴殿と某申し合せ。國賊どもを搦め捕り一々に首を並べ。國家の歎きを鎭めん爲夜を日に繼いで參つたり。コレハ〳〵存じも寄らぬ大變。承つて驚き入る。シテ其反逆人とは何者でござるな。サレバサ。其逆徒といふは。貴殿と縁ある伊達の治郎明衡さ。承れば梶原殿の御意と僞り。貴殿の領地へ棒杭

打たす。是などがかの佞人ばらと馴合つて。定倉殿。貴殿に一揆起させおのれ等が館へ引寄せ。手を出さずして討取る術。ナサ御合點が參つたかと 地 同士討ちさする フシ 底工み。地 千賀之助つつと出で。詞 ヤア聞きにくし鷲五郎。棒杭は君よりの御差圖。父明衡が反逆とは。慥かな證跡あつての事か。ハ、、、同し穴の子狐め。化の皮が顯はれかゝるで。悶くわ〳〵。此鷲五郎を誰とか思ふ。當時肩を並ぶる者も無き。錦戸刑部が二番生え。女童が使のやうに。イヤサア其證據はなどと口を閉ぢて歸らうか。アノ爻な大馬鹿者めが。汝ごときの生白けたしやツ面で知る事でない。頤をたゝかずと其方の方へ片寄つて。ちよ〳〵となつてござい。ちよ〳〵となつてござい。イヤ定倉殿貴公へ見する物ありと。地 懷中より一通を取出し。詞 この一書披見召され。ム、松ケ枝節

之助殿伊達明衡。地ハテいぶかしと眉に皺。披き見るより悔りし。詞明衡妹政岡と心を合せ。鶴喜代君を毒殺に及ぶべし。定倉事は。某存ずる旨あれば宜しく事を計らはん。コリヤこれ明衡自筆の狀。ホイ。何と御覽じたか。身動きならぬ此一通。ちよつと小口がこんな物さ。とても遁れぬ明衡親子。可愛や命が宿腐つたか。ヤモ面を見るも穢らはしいと。地飽くまで惡言嘲弄に。たまりかねて千賀之助。腹に据ゑかね。詞ヤア詞が過ぎる。察する所汝等親子。貝田勘解由が工みにて。父を科に落さん爲な。我が推量に違ひはせじ。地イデ逆徒ばら一々に面縛させんと立上れば。ヤア何處へ〱。詞案外なる素野郎め。某親子を反逆とは。圖ない事を卷出したな。其はしやいだ頭骨を。切り下げてくれんずと鍔打鳴らしつつ立てば。ヲ、さう言ふ汝をと地鯉口くつろげ。詰寄り詰寄る血氣と勇氣 フシ既に斯うよと見えたりける。地定倉押しとめ。詞五郎殿お控へなされ千賀之助も控へてをれ。明衡が科明白の上は君の上意を頭に戴き。討取るに何の手間隙。今兩人刄傷に及び此事世上に流布あらば。國の騷ぎ大方ならず。事落居するまでは千賀之助は此方へ人質。最早籠中の鳥同然。五郎殿には大切なる討手の役目。何事もお構ひなく奥の一間で御休足。御酒一獻召上られよ。コレハ〱某も長途の勞れ。然らば奥にて御馳走に預らん。コリヤ千賀之助。此世に居るも暫しが內。賴み寺へ人でも遣り。似合うた樣に念佛でも唱へて待つて居れ。ヤ定倉殿御案内と。地慾惡不道の犬侍。力み詰寄る千賀之助。押へる定倉鷲五郎 フシ打連れ一間へ入りにけり。地フシ風かあらぬか。萩の本そよと物音忍びの姿。邊りを窺ひ コハリ〱足。出合ひ頭に栂平が見るとも知らず曲者は。奥を指して駈入るを。詞ヤア忍び入るは何者ぢやと聲掛けられ。地振返つて物をも言はず。斬つて懸るをかい潜り。刀手繰つて擔投げ。拍子に落つる一通を疾くより後に定倉が。拾ひ取る間に栂平が。何の苦も無く曲者を縛し フシ上げてぞ引据ゑたり。地定倉封じ押開き。詞何々其方今日屋敷へ忍び入り。小治郎定倉討取りなば。當座の褒美として。金子三百兩遣はすもの也。猶恩賞は功に依るべし。伊達の治郎明衡判。ム、さすればいよ〱彼が惡心。根深くも工んだりな。出かした栂平。下郎に似合はぬうい奴〱。今日より後日末長く。武士に取立て使つてくれん。ハツ〱〱有難く存じ奉る。此上ながら何時々々までも。お目掛けられて下されうなら。忝う存じまうすでごはりまうすると 地フシ悅び勇む折こそあれ。

詞明衡様御出で。ハテ合點の行かぬ。斯くも仕込みし今日の時宜。此頃不和なる我が屋敷へ。明衡來るは仔細ぞあらん。栂平曲者取遁すなと引立てさせ オクリ座席をへ改め待ち居たる。 フシ早や程もなく。地伊達の治郎明衡。家に杖突く年ばいや腰に梓の弓取の。張と意地との岩乗作り。袴のひだも角菱ある不和なる中の中敷居 フシ目禮ばかりつと通る。地定倉も一揖し。珍らしゝ明衡殿。いつぞやより何となく。中絶致せし某が屋敷。思ひ寄らぬ只今の入來。サ仔細ぞあらん。ホホ成程。伊達泉の兩家は。誠に車の兩輪の如く。何れを何れと甲乙なく。國の政治を預る兩人。水魚の如くあるべきを。何故に忍びを入れ。某を討たんとは謀りしぞや。證據は忍びが所持の一通。貴殿よりの頼みの狀。地コレ見られよと投げいだす。定倉取上げ打ちまもり。詞ハ、ハ、年老いぬれば麒麟も駑馬。流石に名を得し明衡も。刃金が背へ廻りしな。其方の工みを仕損じ。詮方なさの破れに。先づ其方から白狀召され。ヤア舌長し小治郎定倉。某に白狀とはナ、何を以て。アイヤ鶴喜代君を亡き者にせんと。種々の工みを我能く知る。最前召捕る曲者が。懐中の狀の文體。人知れず定倉を害せん工みの證據の一通。地披見せよと以前の狀。差出せばとつくと見。詞ハテ工んだり拵へたり。似せ筆を以て某を。謀らんとは愚か〳〵。遺恨あらば武士らしう名乘り掛けてなぜ勝負はせぬ。腰拔け侍を相手とするは。刀の穢と思へども。イザ立上つて勝負々々。ホ、何事も露顯すれば。所詮叶はぬ死物狂ひ。狂人同然の明衡なれども。望みに任せイザ勝負。サア。サア。サア〳〵と地互に鯉口ちつとも赦さぬ。氣配り目配り。とくより此方に立聞く象潟。心を冷す氷の刄。一度にきらめく電光石火。かつしと合うたる刃先と刃先。胸の鎬はこぼるゝ如く。勇士と勇士の フシ一世の晴業 地打掛ひらりと白刃の刄。詞マア〳〵待つた定倉殿。明衡様もマア待つてと。地我が身をしづにどつさりと。二人も尻居にどつかと坐し。詞ヤア武士と武士との爭ひを。女童の知る事ならず。ヲ、サ奥方留立てして怪我召さるゝなと引取る刀。マア〳〵まあ言ふ事を聞いてたべ。女童とおつしやれども。先程からのお二人の爭ひ。互に證據はありながら。それと分らぬ其内に。打果しして御不孝と言ひ。主君へは不忠不義。なされては。兩家共に滅亡し。先祖へ對マア〳〵とつくりと御思案と。地詞立派に武家育ち。合す刄に打つ非太刀。流石 フシ泉が。妻なりし。地二人も顔を見合して。詞ム、實にも〳〵。負うた子に敎

へられ浅瀬を渡ると譬の如く。今兩人が打果せば。家の斷絶先祖へ不孝。しかし汝が工みの次第。屹度詮議するまでは。傍を離れぬ定倉と。地納むる刀明衡が。フシ膝元へ投出せば。地此方も同じく刀を鞘。詞ホヽ、明衡が魂も定倉に付添うて。汝が底意白状まで。互に離れぬ詮議役。ヲヽ明衡が魂は定倉が急度張り番。定倉が魂は明衡が屹度糺明。後程迄に。サ仕上げを見よと。詞のせつば詮議の鍔際。國に目貫の兩家老 ヲクリ別るゝ一間象潟も。暫し休まる胸の中 フシ連れて奥へと入りにける。地様子窺ひ鷲五郎。出づる庭先差足抜足。邊りを見廻し以前の忍び。共に木蔭を奴の栂平。詞鷲五様郎。シイ聲が高い。親刑部殿の計ひにて。伊達泉兩人を。同士討させんと忍びの計略。圖をはづさず爰までは仕課せたが。成程〳〵疾くより入込むこの栂平。又國に殘る一味の面々。いよ〳〵二心なき血判。コレ此一卷にと差出せば。ホヽ、出來かした〳〵併し。この連判を明衡定倉に見付けられては事むつかし。コリヤ〳〵汝は是を親人へ。右の様子物語れ。必ず人に見咎められな早く。地早くに曲者は。肌にしつかと納むる一卷。詞然らば拙者は是より直ぐ。ヲヽ、サ〳〵早や急げ。ナニ栂平は跡に殘り。某諸共何かの手番ひ。地早や行けと フシ奥と。表へ別れ行く。隔つ親子の。仕切りの襖。明けても明かぬ明衡が。跡に附添ふ千賀之助。父が前に差寄つて。詞先程より申す如く。貝田と縁ある親人故。主君に背く氣さしありと。證據を以て鷲五郎が。定倉殿へ讒言は。却つて彼等親子が工み。親人と定倉殿。互に疑念を生ぜさせ。一虎潰えに乗ぜん爲とは思へども。地日頃に變り利慾に迷ひし境論。何かの様子思ひ合せば。若しや眞の不忠にやと。現在血筋の某さへ。疑ふ心の出づるもの。詞今區々の人心。他人の疑ひ尤も至極。地お心を打明けて定倉殿と心を合せ。お家に逆ふ惡人ばら一々に糺明し。忠臣の名を上げてたべと詞を盡し理を盡し孝と忠との一筋に スヱ涙は。血筋の誠なる。地明衡は返答なく。諸手を組んだる。フシこなたの一間。地障子開いて小治郎定倉。詞ナニ文字摺。最前よりそちが願ひは。勘當をしてくれいとな。女の身に似合はぬ望み。サ様子は何とと尋ねられ。地涙ながらに顔を上げ。姫御前の身のあられぬお願ひ嘸ぞや憎しと思召す。不孝の罪も辨へぬは。親と〳〵との言ひ約束。祝言せねど殿御ぢやと。樂しんで居るものを。詞思はぬ今日の爭ひ故。夫婦の縁も是切りに。なつたら私や何とせう。どうしようぞいな〳〵。地思ひ切られぬ胸の内。いつそ勘當請けたな

ら不和な中でも武士の。義理も意氣地もあるまいと無理な思案も千賀様に。添ひたいばかりの私が願ひ。人と思召されずと犬畜生と思ひ切り。願ひを叶へて給はれと。おぼこ育ちのあやもなく。フシ譯もなみだにくれ居たる。地千賀之助は父の顔。やゝ打守り恨めしげに。詞いか程に申しても。御返答もなされぬは。お心に一物あるか。忠義には親をも討つ。誠お家に仇ならば。親子の縁をさつぱりと。お切りなされて下されい。不孝には似たれども。不所存なる父上と。一つで無い主君へ言譯。先祖への我が忠義。サアさつぱりと勘當との。お詞願ひ奉ると。地口には言へど心には。子として親へ不孝の惡口。勿體なや恐しやと胸へ フシせきくる血の涙押へ。かねたる風情なり。地治郎明衡聲あらゝげ。詞ヤア若輩者の言はれぬ諫言。親に勘當してくれとは。他人となつて某に。またも諫めを入れん爲か。但し許嫁の文字摺に。心迷うて其願ひか。何にもせよ親に向ひ。慮外は我に弓引くも同然。幸ひ飾るこの弓矢目當の的は襖の繪。雪持つ松の下り枝。一矢に射當てば望みの通り。勘當をしてくれんと。地投出す弓矢定倉も。詞ヤイ文字摺。一旦組んだる夫婦の縁親に換ゆるは女の操。とは言ひながら只一人の我が血筋。捨てるか捨てぬは正八幡の教へに任す此弓矢。的は襖の松の枝。射當てばそちが望みの勘當。早く〳〵と地親々が互に詞かはらぬ願ひ。はつと一度に取上ぐる。親子別れを爭ふ一矢。弓矢神の冥慮にも。盡き果てたるか悲しやと。思へば共に手も震ひ。目當もくるひ引き絞る。弓弦を傳ふ露涙。覗ひ固めて文字摺が放す手の内はづるゝ矢先。鋭き羽ひゞき千賀之助。目當違はぬ松の枝。射當つる矢先我が胸も。碎くるばかり親と子の縁の切れ目と思ふにぞ弓投捨てて。フシどうと坐し暫し詞も無かりける。地明衡は勇みの顔色。詞勝負の一矢に射勝ちし上は。京都へ赴く伊達明衡勘當せし千賀之助。行末頼む小治郎殿と。地詞に文字摺千賀之助思ひがけなく フシ驚く二人。詞ホヽ年月の本望遂し嘸ぞ御満足察し入る。改め言ふには及ばねども。刑部を始め貝田直勝。徒黨を拵へ鶴喜代君を害せんとする此時節。貴殿某兩人の内京都へ立越え。台聴に達し事を糺さんと思へども。今諸士の別當たる梶原平三景時は。錦戸刑部に内縁あれば。此度の決談は地獄の上の一足飛び。生きては歸らぬ此役儀。勤むべき貴殿と某互に忠義を爭ひしが。死ぬるも跡に留まるも忠義の決著せん爲に。倅どもが弓矢の勝負射勝ちし方が都へ出立。命を的の對決も星をはづさぬ忠臣は。武運に叶ひし。

明衡殿。地ホヽお羨しう存ずると。詞に明衡莞爾と打笑み。詞貴殿と某兩人が。心を堅むることを知らば敵心を許さずして。短兵急に我が君を。殺害せんも計られず。敵よりの術に乘り。不和なる體になしたるも。事を延する互ひの計略。最前取交したる一腰は。死ぬるも生きるも兩人が忠義を一つにせん計略。又邪智深き鷲五郎。いよ／＼不和に見せかけて。事の樣子を刑部貝田へ告げ知らせんと我が計らひ。地武士の身の上は人界へ生るるより。君に捧げる身體髮膚。時日を移さず都に登り。佞人ばらを悉く罪を糺して立歸らんさりながら。詞老少不定の世の習ひ。父が顔をも能く見置き都へ登りし其跡は。定倉殿を親と頼み萬事の差圖に隨ひて。文字摺と中好く添ひ。子孫の榮えを忘るゝな。地又母とても無い千賀之助。御不便頼む小冶郎殿と。忠義に撓まぬ武士も。流石恩愛捨てがたき。身節に應へ千賀之助。文字摺も正體なく歎けば共に定倉も。親子の心フシ思ひやり。忍び涙にくれ居たる。地襖ぐわらりと錦戸五郎。詞ヤア始終の樣子とつくと聞く。此上は汝等が息の根留めんと懷中より。地取出す鐵丸庭の面。投げると其まゝ燃え立つ狼煙。倶に盛りの萩の花。一度に散つて散亂せり。合圖に駈來る以前の曲者。フシ庭先に突つ立つたり。地五郎聲かけ。狼煙を合圖に味方の軍兵。取懸けたるか何と／＼。されば候術の如く。狼煙を合圖に寄掛けんと。待ちに待つたる刑部が軍兵。定倉殿の下知によつて。こなたに仕掛けし焙烙火矢。切つて放せば一騎も殘らず微塵に碎けて皆殺し。此上は其方一人。最早最期に間はない。尋常に觀念せよ。汝が忍びと頼みし我は。熊川源五兵衛秀景逆意一味の連判狀。最前我が手に入りし上は。親子諸共逆磔。覺悟々々と呼はつたり。詞ヤア扨はおのれは熊川よな。斯くまで仕込みし我が大望。汝ら如きが術に乘り。裏かゝれしか殘念やナア。せめてもの腹癒せに。某が豫て仕掛けし地雷火にて。倶に冥途の供させん。覺悟ひろげと言はせも立てず。ヤア愚か／＼。地中に陽氣ある故に。時ならぬ萩の返り咲。正しく敵の工みにて。地雷の仕掛と測り知り。熊川に言ひ含め。衣川の水上を堰き入れたる故にこそ。地中に籠りし陽氣を失ひ。アレ見よ花は枯れ萎む。草木心無しと申せども。お家の凶事を告げ知らしむ。凡人ならぬ秀衡公の惠みの程の有難さ。先君御寵愛のこの名木。今より後は此花を。先代萩と名付くべしと。地詞は實にも大國の。花も實もあるフシ宮城野に。今もその名は世に高し。地鷲五郎は死物狂ひ。定倉目がけ斬付くるを。か

い潜つてもぎ取る刀其儘 フシはつしと。首打落し。詞鷲五郎を討取る上は。兩家の疑念も晴れ渡る。此上は二人の子供。婚禮を取結ばん。ヤア〳〵象潟。取り敢へず銚子々々。地アイといらへて象潟御前。心ばかりの祝儀のまなび。三方土器取持つて。二人が フシ前に並ぶれば。地明衛頭打振つて。詞源五兵衛の忠節にて。慥かの證跡出る上は。晝夜を分かず都へ上り。惡人輩をとり拉がん。倅ごときの小事にかゝはり。暫時の延引暫時の不忠。フシ早やお暇と立出づる。地定倉暫しと押止め。詞忠心一途の御老人。逸り給ふは理ながら。過半刑部に一味の中。一人參會ある事。氣遣ふ儀にあらねども。地恐るゝに德ありとかや必ず〳〵油斷なく。詞ヲ、尤もなる御示し。錦戸刑部は取るに足らず。貝田直勝梶原が。威勢を假りて忠節を。覆ひ隱す術ありとも我亦。義心を表に立て。地誠を以て押す時は神國の奇特などやなからん。詞若しやかの地に變あらば。若君を竊に守護し間道より馳せ歸らん事。十日の外出まじきぞ。其間の籠城を堅固に賴む定倉殿。ホ、、其儀はちつとも氣遣ひあるな。本城に立籠り種々の計略諸卒を勵まし。地寄せ來る敵を追立て〳〵暫時も足は留めさせじ。ヲ、潔よき御詞。詞千賀之助も其時は一方を賜はつて。破竹のごとき堅陣なりとも。義を金鐵に切つて入り。地井の字巴の字に薙ぎ立て〳〵。野白になつたる敵兵ども追詰め。〳〵。追散し。武術の程を試みん。詞ホ、勇ましゝ〳〵。此熊川も立籠らば。敵の首をば二三百。珠數繫ぎにしてくれんもの。近頃殘念さりながら。寄手に武功の者あつて。思ひがけなく城外に勢を伏せ置き不意を討たば。ヲヲそれこそは傳へ聞く。野に伏勢ある時は。歸鴈連を亂すとかや。地まつ此通りと松が枝に。打込む手裏劍桝平が。フシ眞逆樣に無慘の最期。詞ヲ、天晴々々。手の内と言ひ智謀の程。末賴母しき千賀之助。心置きなくはや出足。ホ、然らばお暇。地再會は。フシ賴みがたなき夢の世や。思ひ數書く文字摺が。せめて一日宮仕へ泣いて見送る象潟が。互の心思ひ遣りこぼるゝ淚。押包む。忠義の誠を顯はす時節。かゝる目出度き出立に淚は不吉と聲張り上げ。謡兵者の交り賴みある中の酒宴かな。詞ハ、ハ、ハ、、、、。地笑ふは武士の別れの淚忠臣。三重なりける

第九

詞サア〳〵何と〳〵。主人鶴喜代幼少にて家督相續仕るに付き。信夫庄司。錦戸刑部。兩人後見仰せ付けられしを國許の

老臣ども。不快に存じ罷りある上某儀。京都在府に極められ。家中の仕置仕るゆゑ高木風に憎まるゝの譬へ。信夫の庄司病死以後。錦戸刑部と私二人。政治專らに取計らひ罷り在るゆゑ爾餘の輩。その誤りあらん事を心掛け。越度あらんにのみ目を付け。耳を傾け親はゞ。數年の間何ぞ一兩度の誤り無き事やあらん。勿論毒殺に及び。家を奪はんと一味徒黨を催せしなんど。ゆめ〳〵覺悟仕らぬ儀。然る所麁忽の訴へ。コリヤ明衡が偏執邪推。憚りながら此儀御賢察下さるべし。聊か左様の企てせん事。地天の冥罰恐ろしと。辯舌巧みに フシ述べければ。地梶原顏色快然と。詞貝田勘解由が申す條一々に理に當れりア、明衡贔屓の人あらば嘸ぞ赤面を致されん。地ハ、、、、と嘲弄に。詞ホ、梶原殿の詞とも覺えず。忝くも公の政道を承り。理非明白を決斷し。親疎依估贔屓に拘はらさるを面々職分の心得。邪を糺す役人として身に邪を行ひ。或は時の權威に誇りて己れに諂ふ者を助け。己れに疎き者を罪に落す。若しも左様の者あらば是ぞ誠の大罪人。誰にもせよ。どなたにもあれ。急ぎ召取り首討つて。獄門の木に曝すこそ。政道の本意ならんと。地諂ひ飾らぬ其勇氣。凛々たるに肝拉がれ。詞成程々々。左様々々。重忠殿には氣象人。尤も至極に存ずると。地座興の體に フシ紛らせば。地明衡謹しんで頭を下げ。詞貝田勘解由が逆罪の儀は。先達て訴へ奉る通り。當鶴喜代に限らず。凡そ十ケ年以來の存じ立て。其故は若き主人は常々に諫言を加へてさへ。我儘さし起り申す事なるに。却つて近習の者どもに申し含め。頻りに婬酒を勸め。奇妙院と申すを頼み。下駄に呪咀の文を書かせ。益々放埒に本心を取亂させるの類ひ。擧げて數へるに暇なし。仰ぎ願はくは。台命の憐愍なし下され。御糺明願ひ奉ると恐れ入つて訴へれば。梶原聲かけ。コリヤ〳〵勘解由。明衡が申す所一一に相違なきや。其方が返答に依つて存ずる旨あり。定めて覺悟あることならんと。地心を付くれば貝田はひれ伏し。詞冠者太郎の近臣の内不身持知らす者あるゆゑ。刑部私申し合せ。度々諫言仕る節は。毎度異議なく得心致し。私など出席の砌は。酒宴遊興の沙汰嘗て無く後々に承れば法外なる事ども御座あるよし。據なく國許へ申し遣はし。一門ども罷り上り。義綱を隱居致させしは老臣ども皆承知の所。私一人の所爲と申し出づる明衡が所存心得がたし。コリヤ〳〵貝田暫く待て。汝事を左右に寄せ言譯立つると思へども爾餘の儀は未だ知らず。最前より廿餘ケ條。悉く其方が罪。其職に居て其

事を怠るは大罪にあらざるや。ハ、御意恐れ入り奉る。しかし。過分の役儀に付き用事繁多に相勤め罷りあれば。義綱の放埒惰弱晝夜傍にこれなき故存ぜぬ事は力及ばず。ヤア詞多し貝田直勝。汝富婁那の辯を振ひ。役人どもを言ひ掠めんと思ふや。譬へば其方。主人の家に大切なる重寶あつて。汝が方へ預くる時。盜賊の爲に奪ひ取られ。イヤ某は存じ申さず盜賊の業なりと。油斷の言譯立つべきか。サ其方何と心得居る。若き主人を預る事器財の類の輕きにあらず。往古周公旦成王を補佐し給ひ。淸和の朝に良房の趣き人臣たる者の鑑たり。義綱の心亂れ。行跡正しからざるは預り人の罪誰にか讓らん。返答いかに直勝と。地水を流せる詞の楯板。暗きを照らす明察は フシ實に日本の固めなり。地貝田は猶も進み出で。詞ハ、御意恐れ多く候へども暫くお扣へ下さるべし。明衡に答ふべき儀あり。家の大事を訴ふるに御身一人引請け。爾餘の面々は一向知らざる體。これ不審の第一なり。謀書を作り佞人を集め。某を無實の罪に沈めんと計るは。如何なる遺恨あつての儀なるや。これ不審の二つなり。又諸士の面々何心も無きに。汝一人詞を企て。台聽に達し奉る事。これ不審の第三つなり。言譯ありや明衡と。地フシ居丈高に詰めかくれば。地こなたも膝を立て直し。詞汝辯を巧みにして專らに非を飾れど。何ぞ明衡を言ひ掠めんや。某一人事を預るは深き意味ある所にて。其方如きが知る事ならずと。地言ひも果てぬ梶原聲かけ。詞ヤイ〳〵明衡そりや暗い。只今貝田が尋ぬる所一つとして返答に及ばず。意味ある事と後日に延し。我が方に理ある事を只今急に言ひ立つるは。コリヤこれ汝身勝手過ぎる。貝田一人に申すと心得しか。忝くも決斷所に於て。諸役人を蔑ろにしたる申し分。甚だ以て奇怪なりと氣色損じて見えければ。ハア、御意恐れ入り奉る。併しながら。國許の面面一列に申上ぐべき事なれども。一味徒黨の後難を恐れ。私一人事を預り申上げ奉る。近年國許へ申遣す仕置等。道ならぬ事ども少なからず。心得がたく存ずれども何時の下知何れの指圖にも梶原様の仰せ。景時様の御内意と申越さゞるは是なく。當時一天下の間に於て。梶原様の御意とあれば。迅雷の如く恐入り奉る儀。刑部貝田が非道を訴へ申す時は。憚りながら梶原様の貴命を背くに相似たり。さるに依つて。コリヤ〳〵明衡。委細の樣子詳かなり。さりながら。梶原殿に限り左樣の非道あらん樣なし。殊に景時殿は專ら歌人の聞えあり。正直の心を種とする詠歌。ナその歌詠の梶原殿。よも邪に

與し給はん。但し覺えばし御座あるや。何の〳〵。左樣の事予が知る所にあらんや。定めてそれは佞人どもが。此梶原が威勢を借り。諸人を靡かす謀り事某は存ぜぬ事。左樣なくては叶はぬ所コリヤコレ刑部貝田が工みならん。明白に白狀せよ。ハア御意恐入り奉る。併しながら我我が謀計とは。何を以ての御仰せ。ヲ、其證人は是に在りと。貴人高位の恐れもなく。明衡が前にむずと坐す。詞ム丶珍らしゝ浮世渡平。シテ其方が證人とは。こりや明衡と言合せ。某を罪に落さん工みならん忝くも御大名の方々。歷々御座の其中へ其方如きの出席は上へ對して恐れあり。且つ鶴喜代が後難ともならん。其處立去れと地白眼付くる。ちつとも臆せずくつ〳〵と吹き出し。詞今に變らぬ立派の口上併し某出るからは大言の吐く其頤骨追付け踏み裂いて地くれんずと事も。無げなる一言に。緩怠なり浮世渡平。詞某が工みとは何ぞ慥かな證跡ありや。ヤア盜人たけ〴〵しいと。俗語の如く其爭ひも今の內。某疾くより入込みしを。熊川とも源吾とも得知らぬ阿房ども。隙を窺ひ奪ひ取りし此一卷に汝を始め一家中も大半は刑部に一味の連判狀。最早遁るる方はなし。それへ參つて繩掛けようか。但し言譯の筋あるか。サアそれは。サア〳〵〳〵どうぢやと地退引ならぬ證跡に。さしもの貝田も口ごもり返答。フシしどろに控へ居る。地庄司重忠威儀繕ひ。詞ナニ梶原殿是にて事は落着せり。さりながら。證據となるべき其の一卷改めずんば叶ふまじ。許す是へ持參せよ。地ハツと明衡頓首して。フシ御前へ差出せば。詞景時殿イザ御披見。イヤサ〳〵何の是しき見るに及ばず。其儘に捨て置かれよ。イ、ヤイヤ左にあらず。鶴喜代一家の納りは此一卷の中に在り。佞人どもに哆し賺され。梶原殿も一味なされ。其許の御姓名此中にあらんことを。恐れて披見なされぬか。サアそれはよもや左樣の事あるまじ。然らば一所に見せうと。地兩人立合ひ紐とく〳〵。貝田は一生懸命と面色はやゝ土の如く。明衡熊川兩人の胸の曇りを吹き拂ふ。冷風さつと押開く。中には一字一點なく重忠は唯不審顏。景時怒りの聲荒らげ。詞汝等兩人。此所を遊所遊山の座席と思ふや。忝くも京都の決斷事を猥りに取計らひ。白紙を以て證跡とは上を恐れぬ大罪人。謀書を拵へ詞を工み貝田を科に落さん爲明衡一人の所存にあらず。みな鶴喜代の指圖ならん覺悟せよ汝等と。地一卷取つて投げ付くれば。兩人驚き立寄つて披き見れば。詞コリヤ白紙。明衡殿。源五兵衛。ハア〇地間每々の結構は實にも執事の奧座敷。

上段の間に座をしめて。テレイキヤン。インテレイヒ。コウキヤン。テビイルヒイル。コハリと唱ふる仙家の祕密文。鼎に注ぐ潔淨水。棘の黒髪振亂し天に向つて渴仰し。明衡貝田が對決に。落著すべきかの一卷。唐土盧江の水を取つて。是なる鼎の中に湛へ。洗ひ落して白紙となせしも。奥羽二國を覆へし。ナホス先祖國香の修羅の妄執。散ぜん事は今此時。アラ〳〵心地よや嬉しやと襖に響く フシうなり聲。地疾くより窺ふ外記左衞門窺ひ寄つて眞二つと。打込む刀曲者は。又と唱ふる祕文につれ。次第々々に手もすくみ思はず知らず取直し。我と我が手に數ケ所の疵。夢の直路の如くにて。よろぼふ足を踏みしめ〳〵。爰ぞと斬込む刀は反り。眞向二つに血は滴り。鼎の中へ入るより早く陰陽激して忽ちに逆卷く水氣燃え立つ炎。折よく松ケ枝節之助。さしもに重き大鼎片手に差上げ差し付くれば。血汐の穢れ嫌ふと見え背ける曲者早速の松ケ枝。姿に影の添ふ如くぢりゝ〳〵と付け廻せば フシうんとのつけに倒れ伏す。詞ハテ不思議や先つ頃下家に忍ぶ君を守護する其折から。鼠と化して系圖の一卷。奪ひ取つて立退く曲者。何にもせよお家の系圖此方へ奪ひ返さんと。地立寄る松ケ枝曲者は。むつくと起きて。詞シヤ豎子。汝いかなる强盛なりとも、我叉。大室九丹金液經の法を行ひ。雲を起し。雨を呼び。須彌山を拔き芥子に隱れ。自在を得たる我が幻術。汝も下界の鬼となさん。テレイキマン。インテレイヒ。カウキマン。テビイルヒイル。地と責めかけ〳〵唱ふれども更に奇瑞の見えざれば。節之助希代の思ひ。詞扨は外記左衞門が無念の精血。血汐の穢れに汝が仙術。忽ち失せしは天の責。我が君を守らせ給ふ氏神の御加護ならん。ハア有難や悅ばしや。サア此上は系圖の一卷。早く渡せ。假令仙術失せたりとも。汝等如きに渡さんや。速かにそこ立去れ。こま言いはずと早く渡せ

ヤア〳〵明衡。其方筋無き事を申し。某を科に落さんと謀書を拵へ。剰へ證據なんどと差上げし其一卷。白紙を以て上を欺く。汝ばかりの科にあらず。主人鶴喜代越度となつて家の斷絶今此時。地覺悟せよ明衡と鍔打叩いて フシ詰めかくれば。地源五兵衞むくりを煮やし。詞正しく館を出づるまで紛ふかたなき連判狀。今白紙となつたるも汝が胸に深き工み。地イデ糺さんと立ちかゝる。明衡暫しと押し止め。事にはやるは尤もなれども。今荒氣を出しては鶴喜代君のお爲にならぬ。ぢやと申して。先づ〳〵待たれよ。何事も此胸に先づ。先づ次へ立たれよと。地老臣

の詞是非なくもしを〳〵フシ次へ立つて行く。地梶原聲かけヤア〳〵者ども。詞鶴喜代始め一家の奴ばら。悉く繩を掛け。獄屋へ引け。アイヤ先づ待たれよ梶原殿。貝田勘解由も暫く扣へよ。ヤイ明衡證據となるべき一卷の白紙となりしと言ふも僞り。貝田を科に落さん爲汝一人が工みであらう。左樣なければ鶴喜代も筋なき事を台聽に達し。上を恐れぬ科遁れず。其方一人落命せば。主人の身の上別條なし。天誠を照らし給へば死後に汚名は自然と雪がん。とくと思案を廻らし召され。ハツ今に始めぬ重忠樣の御厚情。粉骨碎身仕るとも報じ難き御示し。斯くなる上は何をか包まん。貝田勘解由に職を超えられ。我が威勢を奪はれし其無念止む時なく。斯くまで仕込みし大望も。時至らねば悔みて返らず。此上の御願ひ。切腹御赦免下さらば。ヲ、神妙の詞至極せり。其儀は梶原さし赦す。早く支度を仕れ。ハツ有難く存じ奉る。跡々の儀は重忠樣。ホ、心置きなく最期を淸う。ハ、ハツト地お請も明衡が。無念の涙押隱し。心靜に手を合せ。南無松島大明神弓矢神正八幡。奥州五十四郡を照し給はゞ。鶴喜代の御武運長久。我こそ武運拙くとも。死後には冥覽明らけく。是非潔白を神國の印を顯し給へやと。祈念の内に貝田聲かけ。詞ヤア明衡。切腹とは武士の冥加。傍輩のよしみ某介錯してくれん。ヲ、過分々々。腹十文字に搔切つて。イザと聲をかくるまで必ず早まり介錯すなと。地無念の一言身も震はれ詞エ、天惡人に與せずとは僞りなるか。エ、奇怪や。たとへ骸は死するとも。魂君の影身に添ひ。侫人輩に目に物見せんと。地肩衣はね退け坐を組んで。差添に諸手を掛け。フシ既に斫うよと見えたる所へ。詞暫く待つた明衡殿。松ケ枝節之助是に在り。貴人出席の其中へ陪臣の參會御免に預ると。地一卷片手にフシ立出づれば。貝田聲かけ尾籠千萬。地既に以て事極つた裁許をもどくは恐れ多し。早や立去れと地極め付くれば。から〳〵と打笑ひ。詞汝が手足と賴んだる常陸之助國雄を殺し。家の系圖奪ひ返す。又砂川の屋敷にて。傾城高雄平産の姬君。義綱公諸共に害せんとする汝が間者。此方へ召し捕つてうぬらが工みの底叩かす。最早遁れぬ覺悟々々。ヤア舌長なり節之助。既に以て明衡が差上げたる連判狀一字一點なき白紙。是即ち慥かな證據。ヲ、其一卷こそ仔細あり。國雄が幻術蹇く上は印ぞあらん明衡殿。地實にもと傍なる一卷を。開けば姓名あり〳〵と元の如くに鮮なり。明衡貝田をはつたと白眼み。詞禽獸に等しき汝讀み聞かすに及ばねど。重ねて詞を出さぬや

う。篤とそれにて承れ。此度冠者太郎義綱。幷に子息鶴喜代丸。退け且つ害せいと謀る事。則ち成就せば一味連判の輩は。其功の輕重に應じ。恩賞高祿宛行ふもの也。錦戸刑部太郎國純直勝とまで 地 讀まぬ内二つになつて倒れ伏す。血刀引提げ飛鳥の如く奥の一間へ駈込めば。續いて松ケ枝節之助 フシ 遁さじものと追うて入る。地 梶原俄にあわて出し。詞 貝田めが死物狂ひ殊に松ケ枝無法者。彼奴があばれ出したらば我等はお座にたまられず。コレ／＼武勇自慢の重忠殿。組留めてたべ 地 賴み入ると膝もがた／＼ フシ 震ひゐる。地 重忠は脇目もふらず。詞 驚き入りし貝田が手の內。伊達次郎明衡が帶する所の刀諸共。速かに斬放せしは天晴名作。是こそは先達て紛失せしと略聞きたる。亂れ髪の一腰ならん。貝田が工み明白に現はるゝ其上に。家の重寶出づる事。鶴喜代の運目出たき所と。地 劍戟を振る其中に座席崩さず悠々として坐しゐたる。寛仁大度ぞ フシ 見事なり。地 次の一間は鍔音刃音手に取る如く聞ゆれば。梶原猶も尻据らず。詞 アレ／＼爰へ來るさうな。コリヤどう致さう重忠殿。コハ仰々し梶原殿。何の是しき仔細なし。終日の對決に拙者殆ど疲れ申す。氣を養ふは斯樣の時。足下の手前で薄茶一服。一服やら立腹やら。切腹しようも知れぬ時宜。薄茶どころであらばこそ。折節風呂に火の氣は無し。爐の炭もつぎかへずほんの是が冷火燵。地 緩りとおあたりなされよと。尻に帆掛けて走り船梶原 フシ はふ／＼逃げ出づる。地 貝田を中に熊川松ケ枝。いづれ劣らぬ早業は目覺しかりける 三重へ 次第なり。地 熊川は薄手を負ひ。貝田を足下に節之助とゞめをぐつと刺通せば。庄司重忠喜悅の眉。詞 ヲヽ出かしたり／＼。貝田が帯せし一腰は亂れ髪の一腰ならん。系圖の一卷家の重寶かく一時に手に入る上は。錦戸刑部は遠流させ。家の榮えは萬々歳と。地 仰せに兩人勇み立ち祝ひ壽く池の龜千代の榮えを鶴喜代の。威勢は朝日の登るが如く實に神國の人心。賴もしゝともなか／＼に申す。ばかりは無かりける

天明五年巳正月　作者　松貫四
高橋武兵衛
吉田角丸

傳兵衛 おしゆん 近頃河原達引

上之卷　祇園の段

地七重八重フシけふ九重に。匂ひぬる花の都の川東。祇園の社年ふりて和光の影もいちじるく。參り下向の人群集。咄し萬歳居合拔。えいとう／＼諸見物。フシげに繁昌の靈地なり。地ものゝふの身はいとゞなほ難からめ。瀧口左内と聞えしは。龜山の勘定役人ひとも心をおくじまの折目正しきフシ長羽織。地それには似ざる相役の横淵官左衞門紛ふ方なき惡者づくり暫しは爰に立ち休らひ。詞何と官左衞門殿。我が國元などとは違うて繁華の地と申すものは。まあ賑やかな事ではござらぬか。されば／＼此度貴殿我等役用にてまかり出で。しばらく都住居。いつ來ても飽かぬ賑ひ。これを思へば田舍にぐづ／＼暮すといふは申さば面々の不仕合せ何と左內殿さは思さぬか。ア、其お詞御尤もにはござれども譬にも申す通り花は三吉野人は武士たとひ田舍にをるとても心に引けのあるべきや。いざ神前へと兩人は。オクリ打ちつれへてこそ行過ぐる。フシ一きは目立つ。風俗は。祇園の町に名も高き。長地おしゆんといへる戀知りが二世の誓を神かけて。フシ願ひは重く足輕く。仲居まじくら歩みくる。向ふの方よりすた／＼と。來かゝる男が目早くも。詞テモマア妹よい所で行合うたな。ホヽウ兄樣與次郎樣。よい所で逢ひました。案じらるゝはかゝ樣の御病氣別にお變りもないかいな。殊に目さへも不自由なお身。嘸お前のお世話でござんせう。イヤモウ別に變りはないけれども。いつとてもぶら／＼とたゞ引立たぬ母じやの病氣。したが物を苦にしやるな。追付けさつぱり本復さしやろ。こちも今日は此邊へ用があつた故序ながらの祇園參り。又是から外へ寄つていぬる所もあれば。此頃ゆるりと逢ひに行きませうさらば／＼と小短き羽織打ちふりフシ別れ行く。地氏よりも育ちにつるゝ人心フシ男ぶりさへ。常ならず。來かゝる井筒屋傳兵衞と。遠目に見ても焦るゝ人。それとおしゆんがさし招く。手に走り着き。そなたも今日は祇園參りと聞きたりしが。よい所で出くはした。マア氣を急いたは身請の事互に深いといふ事は。人に知られた二人が中。外へ遣つては此傳兵衞が男も立たずマア當分百兩ばかり手附をやつて。金の鎖で繋いで置く事を手代の万八と牒し合せ。大

方に手附の才覺。サイナ文でもしらす通り私を身請したがる客があるのと。ほんにもう氣の揉める事ばかり。地どんな出世の身になるとてフシお前に別れ片時も生きながらへる心はない。いとしやきつう苦があるか。詞このまあ色の惡い事わいな。地その苦もみんなわしゆゑぞ。こらへてくだんせこらへてと手をフシカヽリ取りかはし泣きくどくフシ折から後へ。瀧口左內。それと知らする咳を。聞いてびつくり立ちのく傳兵衞。エヽコリヤ左內樣。詞爰へはまあ何時の間にと。地隱れもならぬフシまじめ顏。地左內も片頰に苦笑ひ。見れば遊所の女中さうなが。密に用でもこゝは往來。人目に掛れば何のかの。社へ參詣あるならば早う〳〵と追立つる。詞に否とも云はれねば。おしゆんは別れ行き過ぐる。詞ナニ傳兵衞お身にも粂て存じのとほり。拙者もと關東浪人漂

泊の內。僅かな好みに御親父喜左衞門殿の世話を以て。今の主取り龜山へあり付いて新參奉公。だん〳〵御前の首尾合よく。間もなく勘定頭仰せ付られ。恩顧譜代の面々とも肩を並ぶる身の立身。これといふも龜山へ代々出入の喜左衞門殿の。世話下されしゆゑと恩を仇には存ぜぬ此瀧口左內。心にかゝる其方の身持放埒。御國へ出るたび親父の噂。某此度上りしを幸ひに意見を加へ。心腹を矯め直さうとこれまで意見したは幾度か。したが若い時は誰しもある習ひ。とはいふものゝ見た所がよつぽど染みついた體たらく。得手勝手な義理づくに。無分別など出す時は。第一が親への不孝世間の人の評判誹り。それ程の事辨へぬお身でもあるまい。ハテつまらぬ事は相談もしたがよい。此左內が恩を受けた井筒屋の息子の身の上。聞き捨てに致すべきかとくと

く內へお行きやれさ。諸事は晩ほど。早く〳〵と立上る。地傳兵衞は忝なみだ。詞お馴染とて御懇な度々の御意見。用ひませぬ不屆をお叱りもなう事を分けての今のお詞。中々わるうは受けませぬ。有難う存じます殊にあなたが當お役におなりなされてより。諸色算用廉直にまかりなり。惣掛や仕入れ方取りわけて親共が悅び。此脇差の小柄迄も。殿樣より拜領なしたる程の我々が身の首尾合。これと申すも皆あなた樣の御高恩御執成し。さら〳〵徒らには思ひませぬ。ハテ其禮いふには及ばぬ〳〵身持を改めさへすればこの左內も嬉しい忝い。ちと又晩など身が旅宿へも來たがよいと。地心つく〴〵瀧口は。フシ宮居をさして別れ行く。地あと伏拜み傳兵衞は。淚のうちにもくどくどと。詞他人の身でさへ目に餘つての意見親父樣の心根をさぞとは知れど。勤め

の身にておしゆんが貞節。馴染むにつれて可愛さ増し。退くにのかれぬ二人が中。これも因果のひとつかと。身を悔みたる一人言。地後の方より官左衞門しづ〳〵と出で來り。詞ヤア傳兵衞待つてゐたと。地聲かけられて泣きがほ隱し。詞これは〳〵官左衞門樣よい所へお出でなさりました。此間お賴みなされた鍔の儀。三百兩に付け人がある故。いよ〳〵お拂ひなされまするならば。追付け是へ。仲買を手代万八が同道致して參る筈。それに付きちとお咄しと申すもマア御無心の筋委細は万八に。ヲヽサ委しく承知いたしてをる。隨分三百兩なら拂ひ申さう。某も入用の金子なれど。平日懇意の其方の無心。否といふも何とやら氣の毒。當分百兩用立て申さう。それは近頃有難い仕合。イヤもうあなたもお手づかへなればこそ。大切な道具をお手放しなさるゝに。餘儀なき御無心申せしに。御得心あつて用事を足すといふも偏にお蔭と。地禮の八百三百兩の。金ふり擔げいきせきと仲買勘藏同道して手代万八。詞ヤアよい所に若旦那。幸ひ官左衞門樣もお出なされてぢや。万八殿を伴うて參りました。ヲイノこちも見える時分と最前から待ち心。マア〳〵此處へと居並ぶ茶見世。地傳兵衞は懷中より八橋の鍔取出し。詞コレ勘藏殿。こちの手代万八とは馴染さうなが。わしが逢うたは此中初めて。其折もいふ通り。出所の確なは。卽ちあなたの御所持の鍔今御相對申して三百兩で手を打つた。イヤもう家にこそよれ井筒屋の若旦那が世話ぢやもの。何の粗末のあるものか。サアこれ代金三百兩と地包渡せば万八もろとも。金改めて渡す鍔。互に引き換へ取りをさめ。詞幸ひさる歷々の旦那衆が。乞ひ望まるゝ此鍔。買人のある內急に見せねばならぬ代物。其內お目にと地仲買は。とつかは急ぎッシ立歸る。地官左衞門は二百兩。懷中して立上り。詞念のため百兩の預り手形。認めて置きやれ。身は一先づ行て來ると。地立別れゝば此方の道へ。來るはたしか揚屋の六左。ヲヽイ〳〵と傳兵衞主從。招けば程なく六左衞門。詞ホヽウ傳兵衞樣。このごろ內申します通り。おしゆん樣を身請さうと。望みのお客が手附を御渡しなされうとあるゆゑに。則ち其お客が今日は爰へ見えてなれば。今相談に參りがけ。お笑止な事なれど。何を言うても皆金づく。イヤこれ六左。おしゆんと深い中といふは。人に知られた此傳兵衞。外へやつて立つべきか。時宜によつては生きては居ぬ。又死ぬるからは一人は死なぬ。ホヽウそれ〳〵。此万八が腰押しぢやないが。身請を取持つ六左衞門。一番駈にしやつぷり

と。ア、氣味たが悪いわいな。首筋元からぞつとするわいな。もししやつぷりと言はされては。マア好の酒も飲めぬわいな。もし又忽にお前の方で。ホ、ウ身請せう。おしゆんが身請せう世話を頼む六左衞門。それ手附金百兩渡す。これで其方らの談合は。イヤもう何がさて〳〵。お前が身請なさるれば。おしゆん様も悦び。私もしやつぷりを脱るゝ。何處も好しぢやと懐中より。地矢立取り出しフシ手附の證文。詞まづ此金をちつとも早く親方へ傳兵衞様お出を待つと。地金請取つて六左衞門活々として引つかへす。地跡へ横淵官左衞門。詞サア〳〵證文請取らう出來てあるか。ホンニなあはつたりと忘れてゐた。殊にこゝには判もなし。手形せうにも矢立の用意は。ア、これ若旦那。途中でそりや間に合はぬ。はて今六左衞門から請取つた手附證文。手形するまで百兩の質物。ヲ、サ〳〵それで此場を取り計らひ。手形認め晩になりと引き換へに來たがよい。地然らば左様と件の一札手に渡せば。詞身は近邊の兩替屋で金改めて直に旅宿へ。地兩人共跡からと。フシ別れてこそは歸りける。地跡見送つて手代万八。詞官左衞門様のお蔭で。どうやらかうやらおしゆん様は繋ぎ留めたで。此万八までも大安堵。何とお嬉しうござりますか。イヤもう嬉しうなうて何とせう。是も皆そなたの働き。ハテお主の爲ぢやもの。働かいでよござりましよか。是からまだ跡金の工面じふめん。これも亦此万八が見んごと働き出してお目にかけよ。ヲ、頼む フシ頼むと悦ぶ折から。地息もすた〳〵六左衞門。大汗になつて駈け戻り。詞ア、お人柄に似合ひませぬ。お顔だけに沙汰はすまいがかうした金を人に摑まし。手附とは横道なと皆まで聞かず。手代万八。詞ヤア何とお言やるおらが旦那に似合はぬの。横道のと名を立てて。手附の金に何言分。麁忽な事ほざき出すと。その分には濟まさぬぞよこれお手代殿。濟ますの濟まさぬのとはそりや皆此方から言ふ事。今請取つた手附の金。往にがけに懇仲の兩替屋で改めさせたれば。みな贋金。ヤアとびつくり包をほどき。見れば最前渡した金。詞さては仲賣勘藏めが。ほつかり一杯喰はしたか。悪い奴と氣もそゞろ。詞コレ〳〵万八。知りやる通り此間わが身が世話で。近付きになつたあの勘藏。そなたは馴染の事なれば。町所も知つてゐやろ。引きずつて來て此譯をエ、申し。わしぢやてゝ馴染といふでもなしお前が直々つばめの相對。マアそれをわしがどうして知るものぞい。根が大枚の金を。粗末に取遣なさるるからと取りあへもせぬ顔付に。傳兵衞

はロ惜しさ。駈出さんとする所コリヤ待て傳兵衛動くなと。聲をかけて官左衛門。コナ贋金遣ひの大騙め。大切なる道具の代金。此様な贋物を。投けようとしをつたな。晝强盗の泥坊めと。地たぶさ握んで引倒し。金の包を目鼻の間。打ち付け／＼投付くる無法の打擲覺えなき身も言譯なく。スヱテ齒を喰ひしばる。無念の涙。詞ホヽウ無念でもロ惜しくても。手向ひならぬ身の邪曲。贋金をつかまされ。秘藏の錺を騙られた上からは。旅宿へ引きずりぶちはなすと。地引立つる手をもぎ放し。ぐつと捻ぢ上げ突飛せば。振りかへつて詞ヤア左内殿。御手前にはマア何時からこれへ。アヽイヤ先刻より様子一々見聞いたした。フヽムお聞きあつたら申さいでも知れた科人。引立つるをなぜ留めさつしやるぞ。なぜ邪魔しめさるぞ。イヤ此瀧口が止めましたは貴殿のお爲。ナヽヽ何と。サアたとへ傳兵衛まことの騙り贋金師にも致せ。左様の吟味政道は。當地の御代官所よりあるべき事。何ぞや他國仕官の身を以て。いはれざる吟味仕置。もし代官所より御察度あらば言譯は何となさるゝぞ。サアその儀は。如何にお急ぎなされたとて。麁忽千萬。百兩の手形の出來るまで取り置かれた手附證文。それなる男へお戻しなされて。彼めを歸して遣はされい。そりやなりませぬ。拙者が賣つた錺代の三百兩。誠の金請取るまでは此質物。返す事存じもよらず。フヽムコリヤ成程御尤。傳兵衛いつぞや其方より借用した三百兩。只今急度返濟する。此金を錺代に官左衛門殿へ進ぜれば。贋金遣ひの名を免れるではないかとサヽヽ敎へはせぬがともかくもと。地取出し渡す三百兩。詞イヤ申しあなた様へ三百兩。御用立つた覺えは。ハテさて物覺えの惡い男と。地目顔で知らせ敎へられ。はつと戴くありがた涙。詞これ官左衛門様。仲賣めにのめ／＼と騙り取られた八橋の錺。贋金を取つたは此傳兵衛が誤り。左内様の御蔭にて。三百兩をまどひます。それ請取つて最前の手附の證文お返しなされませ。ヲヽ眞の金請取るからは。戻してくれる。と證文投出し。どう見ても仲賣めと。肯き合うた手錬事。其儘では濟まされぬ吟味する所で吟味させうと底意地わるき詞の針。六左衛門は手附の一札。取りあげて引裂きすて。詞ア、氣の毒な様子なれど。我等風情の何と判斷。どなたもこれにと立上る。左内は聲かけコリヤ／＼揚屋ちと尋ねたい事がある。おしゆんを身請せんといふ客の名が聞きたい。ハイ其お客はと言はんとするをコリヤ／＼六左衛門何をうだ／＼と。喋らすと早く歸れ。こ

れはしたり官左衛門殿いらざるお世話。コリヤ其客は何國の誰名は何と。サア其お方は。どうも此處では申されませぬ。ヲヽその筈〳〵。サアもう何にも用はないちやつと去ね〳〵。ハテ其許にはいらぬお構ひイヤ何官左衛門殿我々國元を出立の砌遊所へ足ぶみ堅く停止と。御家老中より嚴しく仰せ渡されたは。貴殿にも覺えてござらうがの。いかにもそれに又かの者が名を。六左衛門とはどうして御存じ。サアそれはアノ物でござる。ハテとぼけた顔めさつても遊所通ひは明白明白。ハレ滅相な左内殿。身はついにあの者が所へ。入りこんだ覺えもなし。逢うたもたつた今が初め。イヤサ言はるゝな。初對面のあの者をたつた今六左衛門と。彼が名を知つて呼ばるゝ筈がない。此趣を本國へ申し遣はせば其許の御身の上。サアそこを朋輩の好みに。今日の所を聞き遁しに仕り其代り傳兵衛が今日のしだら此場限りに風聽御無用。ナンと御得心か若し不得心なら。おしゆんが身請の客の名までも詮議しぬいて。アヽヽいやこれ左内殿。何のまあ不得心。傳兵衛は固より親喜左衛門は出入の町人。懇意の中。何事も此座切りに。さらり〳〵。兎角かやうな所に長居は。おそれお先へ参ると云ひ捨てに。地立歸れば跡に揚屋も立場なく。こちも長居はおそれあり。早ういなうとこそ〳〵と。我が家を指して急ぎ行く。地苦り切つたる瀧口左内。詞ヤア万八め。汝よう傳兵衛をそゝり上げたな。此一巻詮議の仕様もあれど。科人も出來且は諸方の掛り合ひ。何にも言はずに濟してくれる。イヤ何傳兵衛。身も喜左衛門に逢ひながら。同道して立歸らん。いざお行きやれと瀧口が。伴ひ歸る傳兵衛に。地底氣味惡く万八も フシ跡に付添ひ立歸る。地道引きちがへうそ〳〵と。來かゝる横淵官左衛門。こなたよりも勘藏が。ちらと見付けて立寄れば。万八も フシ走りつき。詞今日は互に上首尾〳〵。シタガ左内めがほくあげかけ。さて冷い目。ヲヲサ此官左衛門も氣を冷した。其代りにはまんまと三百兩。冷いな目に逢はぬは勘藏われひとり。イヤもう其代り。お前を待合して。さつきにから其處らあたりをぶら〳〵〳〵。サア八橋の鍔戻します。ヲヽ此方からも分口と。地百兩づつを二人に渡し。詞さて身が當り前の百兩を。おしゆんが手附に渡し。其内に金の工面。是といふも皆万八その方の蔭。イヤ私も勘藏も。お前の手先を働くは。分口の金が欲しさ。シタガ左内めに穴を見られたから。尻尾の出ぬうち爰から直に駈落。ヲヽサ此勘藏も當分は影をかくさにやなるまいかい。何に付けても此百兩。ホヽ

ウうまい〳〵と三人が地立別れ。てこそ
三重へ行く末は

揚屋の段

其許は主人鹽谷の讐を報ずる所存はないか。氣も無い事〳〵。家國を渡す折柄。城を枕に討死というたのは。御臺樣への追従。時に貴樣が上へ對して朝敵同然と其場をついと立つた。我等は跡に鯱張つて居たはいかいたわけの。所で仕舞はつかず。御墓へ參つて切腹と。裏門からこそ〳〵〳〵今此安樂な樂しみも貴殿のお蔭。昔の好み忘れぬ〳〵堅みを止めて碎けをれ。いか樣此九太夫も。昔思へば信太の狐。化顯して一獻酌まうか。サア由良殿。久しぶりだ御盃。また頂戴と會所めくのか。さしをれ飲むわ。飲みをれさすわ。狂言のお邪魔ながら。官左衛門樣へ申上げます。御國元より御狀が參りました。何々國元よりの書狀とや。どれどれ亭主是へ〳〵。フヽムイヤもうこりや何でもない見舞の狀。何事かと思うたに家來どもも氣のつかぬ。爰まで持たせておこすに及ばぬ。はずみ切つた狂言の大事な所で腰が折れた。地殘念至極とスヱテ拳を握れば。仲居藝子も氣の毒さ。詞ホンニもう御家來衆の不粹なから。いらぬ狀おこして。大事な所で間が抜けたなうおたよ殿おそめどん。サイナ官左衛門樣の由良之介はえらいもの。尾上梅幸そこ退けぢや。ソレ〳〵大抵うまいこつちやないと。地笑ひを嚙みて機嫌取り。イヤもうお相手になつた此久八敵ひませぬ。今歌舞伎で刄金を鳴らす。三五郎や十藏に。お前の藝がやりたい。いらぬ所に藝者がある。フヽム豪いものであつたろがの。今宵は身が思付きで。仲居交りのしのぎ狂言。此あとが雙蝶々で。娘のお縫が濡髪の長五郎。其間の狂言に我等が踊に仕らう。サア〳〵何ぞ唄つてくれろ。マアお一つ上つてさ。ヲツトこぼれるおたつ殿替銚子。それ高調子で。オンド立田川では紅葉を流す。我は君ゆゑ浮名を流す。イヨ〳〵やんや〳〵。どうだ〳〵。きついものか〳〵。眞だあらうが〳〵。ホンニもうまとも〳〵ホンマニ猿でござりますと フシ言ひ捨て逃ぐれば。詞につくい仲居め料簡ならぬと荒れ出す。地亭主は陰より手すりたいほう。久八も押止め。詞女子どもの仇口に。腹を立つとは旦那不粹々々。マア〳〵下に御出でなさりませ。そしてもうおしゆん樣が見える時分。ホヽウ兎角きやつが事ぢや。揚詰にしてくどけども。帯解かぬ情張者。この横淵も精が盡きたれど。そこが意氣張。是非とも傳兵衛と手を切らせ。女房にせにゃ顔が立たぬ。コリヤ六左かねて相談

して置いた。身請の手附百兩は。すなはち今宵渡さんと。持參致いてをる。肝心の狂言は。國の飛脚で間拔がする。踊は女子どもに半疊を打込まるゝ。何とやら氣が滅入つて面白ない。座敷をかへて酒にせう。ホンニそれ〳〵。いかう座敷がめいつて來た。サア〳〵是から奥座敷。娘どもはどつちへ行たお縫お國と呼び立てて亭主は フシ作ひ奥座敷。地勝手の方には氣の張らぬ酒も茶碗でお縫がほろ醉ひ機嫌。おたよどん一つ飲まんかい。またお縫さん醉はんすなえ。島田髷へみのかけて。髮も衣裳も出來てあるに。狂言の腰が折れ。お前の濡髮の長五郎を見いで殘念ぢやわいな。ホンニ大たぶさの前髮で。肩振つての身鹽梅。艶退けて仕手は無いぞえ。又おたよどんのいらひぢやよ。ナアニお前をいらひては。何處ぞにあろぞいな。誓文わしや誰もない。おしゆんさんにあやかつて。傳兵衞樣のやうな面白い間でもありや好けれど。何言はんすお縫さん此おたよが取つてゐるわいな。ホンニもう此おしゆん樣もなぜ遲いこつちやぞえ。いつそお縫さん何ぞ彈かんか。アイ〳〵何にせうな。道行にせうかいな。それよかろそんなら愛護の若ぢや聞かんせと。地音メやさしく彈きなして歌サハリ逢ふことは。なほかた糸のよるとなく。晝とも分かぬ閨の內。枕ナホスひとつの。フシ床の海。地おしゆんは戀に面瘦せて。長地餘所の文句もわが身には。いとゞ思のまさりぐさ。詞お縫さん今參じた。ホヽウおしゆんさん二日醉といふ色ぢやぞえ。アイ二日醉やら三日やら。日さへろくに覺えぬ。ホヽウ道理いなあの官左衞門づらが。お前のお出が遲いとて。喧しう吐しくさつてならぬわえ。そして奥座敷のお客が。お前と盃がしたい。どうぞちよつとなりと。逢はしてくれとたつての頼み。お縫さんも一所にこちへと。おたよは二人を伴ひて。入る奥座敷。フシ茶屋の繁昌奥口の フシ取り締もなく忙しき。地折ふしおそめがとつかはと。詞おみよどん〳〵。ホヽウ何ぢやと。地勝手から。詞何ぢや所か。きり〳〵ごんせいなう。大抵や大方。ひよんなこつちやわいなう。奥の客が。おしゆんさんを今宵中に身請するといふわいなう。ヤアサア〳〵事ぢや〳〵。どうぞ傳兵衞樣へ知らせたいものぢやが。イヤ〳〵それ知らしたら。どんな事が出來ようも知れぬ。どうぞまあ幇間の久八どんに逢ひたいものぢや。あの久八どんは傳兵衞さんの大分恩になつた人ぢやといふ事ぢや。それゆゑ傳兵衞樣の贔屓方。呼んでこうかと地二人して。フシ思案かひなき女子同士。折から此方へ出る久八。地二人は見るより。

詞コレ何して居さんすぞい。サア／＼ちよつと思案出して下さんせいなう。イヤもう。さつきにから思案してゐれど。えい狂言の趣向はない。ヲヽしんきそんきそんなこつちや無いわいな。ドレ／＼耳おこさんせ斯うぢや／＼わいな。ヤアそいつは事ぢや／＼。アノ官左めが身請の手附々々と吐かしくさるに厭き果てたに。今宵中に身請するとは。ソリヤ事ぢや／＼。太鼓持つが役なれば客の呼ぶ時はどのやうな座敷でも勤めねばならぬ故。官左衛門めとも附合うては居れど。この久八は何處までも傳兵衛の味方。こちはもと新町の幇間。傳兵衛の大坂へ出てござる時。天滿祭で喧嘩仕出し相手をあやめて。直に牢舍する所を。わしを傳兵衛様の引かしやつて。金出して扱うて下さつて。それから京まで連れてござつてきつい世話。大恩のある旦那なればどこまでも世話せにやならぬ。イヤ／＼もうそりや事ぢや／＼。サアちやによつてえい思案料簡を。ちやつと／＼／＼／＼。アヽ其様に忙しういふと。出かゝる思案も引込んでしまふわい。サアかうぢや。どうぢやいな。あるぞ／＼こいつはどうであらう。どうぢや／＼。たかゞあの客は此丹波屋の內の客。爰の亭主が呑込んで。相談の出來ぬ様に。ちや／＼入れたらじやみさうな事。その亭主を抱込みやうは。ヲヽ娘のお縫。娘のうちでの立者。きやつが呑込んだら。出來る事。ずつと氣の捌けた通り者。頼んだら否とはいふまい。イエ／＼／＼そりや惡い。その思案惡い／＼。おそめそりや何として。サイナアおみよどんは知らずか。あのお縫は傳兵衛さんと譯があるわいな。ヒヤアそれちやによつておしゆんさんの身請と聞いたら。ありや喜ぶであろぞいな。言ひ出して結句惡かろ。ハイしまうた。サアどうがなと。地三人が。上サハリ小首傾け智慧袋フシ一度に絞る折も折。奥にはお縫が聲として。詞久八さん。用がある何處にぞい。アノ聲は娘のお縫。爰へ來ては話の邪魔。二人ともに此方へおぢやと。連れて一間へ入るあとへ。おしゆんは。しを／＼立出でて。スヱテ心も浮かず氣もすまず。案じに胸をフシ痛めしが。詞互に變るな變らじと。言ひ交した言葉を反古にして。奥の客に受出され。傳兵衛さんへ濟むべきか。どうぞ逢ひたい知らせたいと。おしゆんは淚の獨言。逢瀬もしばし途絶えして。君ゆゑ心痛むなる。傳兵衛が內さし覗きつツと入る。ナウ傳兵衛さんか。逢ひたかつたと スヱ抱き付けば取つて突退け。詞イヤコレ古めかしいその身ぶり。此頃は官左衛門が揚詰で。おれが事は忘れ果てくさつたろ。あたぶ

が悪い穢はしいと。地仕掛ける口説。地おしゆんは顔を振り上げて。恨めしのタヽキお言葉や。なんの私につゆほども。ナホスフシ外へ引かるゝ心は無い。地お前に別れたその日より。揚げづめにする官左衞門。地振つて〳〵振りつけて。内へ戻ればそのあとへ。詞茶屋からの附け届け。親方様には叱られる。それも誰ゆゑお前ゆゑあまりたよりが無いゆゑに。どうぞお顔を見るやうにと。地神さままでをせびらかし無理な願もお前に逢ひたさ。サハリ粋な臺詞も打越して。愚痴になつたも誰が業ぞ。義理も恥辱も外聞も。忘れ果てゝも忘れぬお前。それを外氣もあるやうに。疑はしくはお前の手にかけて。殺してやいのと膝の上。身を任せたるおぼこさは廓に馴れてもかはゆらし。傳兵衞も心解け。詞ホヽウ疑ひはれたもう泣きやんな。堪忍しや。日頃から憎いと思うてゐる官左衞門めが揚詰で。一倍に氣が揉めて。常から外心の無いとは知りながら。腹立ち紛れ。口へ出るまゝ言うたのぢや。ホンニあの官左衞門めが。祇園での三百兩も。てつきり言ひ合せた騙り事。手代の万八めを吟味して。事のしだらを質さうかと思へども。その場より彼めも駈落。あの官左衞門めが外の者なら仕樣もあれど。何をいうても出入屋敷の重役人。それ故に手出しもならず。殘念無念を胸を擦つて堪へてゐる。ホヽウ道理いな尤ぢや。それ程ぬしの憎んでござんす官左衞門。何しに從はう。帶解くものでござんす。急に話さにやならぬ事がある。マア〳〵こちへと手を引いて。地しんき辛苦をわくせきと フシ伴ひてこそ入りにけり。奥から亭主が。詞おそめ〳〵おそめは居ぬか。アイ〳〵〳〵と。地勝手から。詞旦那さん。奥にござるかおしゆん様を身請なさるゝお客かえ。ヲイ〳〵座敷が淋しいちやつと行きや。イヤ御亭主それへ參つて御意得ませうと立出づる。地年も六十の フシ親父客。詞おしゆん〳〵と名を聞いて。焦れて來たこのおやぢ。身請して連れて往ぬる氣。今宵中に賴みます。あと金を宿もとへいうて遣る間の手附け金と フシ差出せば。詞ホヽウこちらにも先約があれど。今宵中とあるからは。あなたの方へ。首尾なるやうに相對して參じましよと。立上れば此方より。詞その身請まあ待つてもらひましよ。ソリヤマア誰ぢや。イヤわしでごんすと。地聲をかけ娘のお縫が狂言仕立の大前髮。道具ガカリ肩から歩く。大縞のサハリ裾小短き草履下駄强さうな顏。フシかはゆらし。詞お縫こりや何ぢや。イヽエわしや縫ぢや無い。濡髮の長五郎ぢや。おしゆんが身請は此濡髮がさゝぬ。アイ。

ぐつと長五郎が邪魔するのでごんす。イヤこれ此方が身請して連れていぬるといふおしゆんに。何ゆゑ邪魔しめさるぞ。サイナ身請を待つてもらひませうといふ譯は。あのおしゆんには傳兵衛というて深い間夫がござんす。それを又何してわしが世話やくと思はんしよが。其傳兵衛様にはわしもちつとした譯がござんす。それぢやによつておしゆんさんと傳兵衛さんの中を裂きたがると思はれてはわしが女が立ちやんせぬ。金輪際世話やいておしゆんさんと添す氣。それ故男伊達の濡髪の長五郎になつて頼みます。こゝを聞分けて。親仁さん。マアその身請止めて下さんせ。頼みましたと 地 立役の臺詞も所の フシ 德ぞかし。詞 おそめは手を打ちあつぱれ女子ぢや。富十郎が女伊達其處退けぢやと。フシ いそ〳〵すれば。此方は仔細聞き屆け。詞 此親仁がよい年をしての色狂ひと。一通りはをかしく思はしやろが。わしが身請せうといふも外の手へ渡すまいため。こなさんの其頼もしい心底を聞くからは。私が所存も打明けて話します。聞いて下され。わしは其傳兵衛が親でござるわいの。エヽ。ホヽウ恥をいはねば理が聞えぬと。わしが出生は遠州濱松。だん〳〵と身上し縺れとう〳〵果は紙子の身の上。子供の時覺えた東北の曲舞を。謡うて立つた井筒屋の門口。先の喜左衛門様は慈悲深い生れ付。エエ惡うも育たぬ風體不便な事と呼込んで。こちが成立の話を聞き。讀み書き算用の出來るを取柄に引上げて手代格。エエ有難い忝い。どうぞして此恩をと商賣に憂き身を窶し。一つ飲んだ酒も止め。煙草は固より鼻紙は紙屑籠から取り遣ひ。足袋はかず頭巾きず。十八年が間惣嫁一つ買はゞこそ。花の都に住みながら芝居は何をするものやら。親方大事家業大事と精出したが御一家衆の目に留り。先喜左衛門殿死去の後。此跡式を立てかねぬ其方と。家の娘にめあはされ。我が名も直に喜左衛門と改めて。大名高家のかけ屋とは成上つたるわしが果報。其後悴傳兵衛を產み落したは女房といへど昔の主なり家筋と。心一杯介抱したれど。十年以前につい往生。わが子ながらも傳兵衛は。此家の眞の血筋と。大事々々が餘つて甘く育てしが。親の眼を眩まして。多くの金を傾城買ひに遣ひ棄てる身持放埒。どうぞしたら直らうかと。心を痛め暮せしが。つく〴〵思案した上で。それ程あれが好いた者なら。おしゆんを請出し女房に持たせてやろ。添はしてやろ。マアどれほど染み付いた中かと。様子を見るため親ながらよい年しての揚屋這入。もし傾城は持たされぬなどと。選り

嫌ひして。心中事の世話になど作られるやうな無分別などした時は。井筒屋の血筋はとんと絶果つる。それが悲しいとまた不便が餘つてよりの急の身請。お縫女郎の道を立てゝ。男伊達の濡髪になつての頼もしい今の入譯。忝なうござる。嬉しうござる。そんなら斯うしませう。此身請の一巻は。お縫どのに預けるから。お世話ながら突込んで世話やいて貰ひませう。是では道も立ちましよがの。スリヤわたしが言葉を立て。身請の世話させて下さんすか。エヽ忝ないと禮いふ場なれど。濡髪の長五郎が預りました請負うたぞえ。必ず今宵中にその身請を。ホヽウ違はぬ證據おしゆん女郎をこゝへ呼んで下され。アイ／＼。地あひから様子を立聞くおしゆん。傳兵衛は親のお慈悲とありがた涙。おしゆんを連れて出る久八。詞思ひがけない親旦那。ざつと捌けた御取捌き。ホンニもう拜んで居やんすお縫さん。ヲヽわしや厭いのおしゆんさん。世話するは濡髪が役。これでわしも立ちやんした。ざつと臺詞が納つた。サア／＼是から奥へ行て酒にせう。ホンニほんに旦那さんさうぢやいな兎角浮世は色ぢやえ。地騒ぎにつれて打連れて オクリ入るやへ其夜もフシ後夜近く。地奥からそつと横淵官左衛門。様子立聞きこなたへ出で。詞あの喜左衛門めが。今夜中に。おしゆんを請出しをるとは。思ひがけない事。兎角こゝの亭主めも幇間の久八めも。傳兵衛が贔屓して身どもが詞は取合はぬ。いつそ親方を直に呼んで。逢ひたいとは思へども。三百兩の身請の所へ。此百兩ばかりでは所詮埒の明かぬ事。國許へ言うてやる間もない急な事ゆゑ。金の才覺難儀至極。いつそおしゆんを人知れず。引つさらつて退くより外の思案はない。地さうぢや／＼とつぶやく所へ。地奥より此方へ出て來るおしゆん。物をも言はず官左衛門。じつと小脇にひん抱かへ駈出す。後へ久八が。どつこい遣らぬと引戻せば。邪魔ひろぐなと踏飛す。足首とつて久八が。緣より下へ フシ眞逆様。地踏付け／＼踏みのめされ。命から／＼官左衛門フシ這ふ／＼迯げて立歸る。地皆々此方へ走り出で。詞テモよいさまよい氣味と。地笑ふ折から。走つて來る。手代十助。詞唯今瀧口左内様より急の御使。トハ氣遣はしと喜左衛門。狀箱取上げ封押切つて讀み終り。お國許より急ぎの御用筋申し來る。急に談じたき筋あるによつて。只今旅宿まで來いとの此文體。何御亭主。身請の事を今夜中に埒明けて と思ひしに。今聞かるゝ通の譯なれば。私は是から直に御出入屋敷のお役人の許へいぬる程に。御用筋の濟み次第。こゝへ戻つて

明日は早々後金おこして埒明けましよ。傳兵衛は跡に殘り何か相談極めて戻りやいの。皆の衆頼みます。そんならお歸りなされますか。おさらばさらばと聲々に。地仲居が見送る前垂のあかりを。ユリ 照し 三重へ出て行く

中之巻　河原の段

地名に高き。四條河原も。冬ざれて。本フシ川風寒く吹きすさび。往來も浪の石ばしる。水音までも夜はなほ。いとしん〳〵とフシ物凄く。曇る空より我が胸も。戀路にくらむ官左衛門。万八勘藏引連れて立止り。詞何でもおしゆんを引つさらつてと出かけた所。たいこ持の久八めに邪魔されて散々の仕合。すご〳〵と戻る所汝等二人に行き逢うたこそ幸ひ。今夜中に請出して　喜左衛門めが連れて戻ると吐かしたおしゆん。この河原に待合はして。面を隠して引つ擔げ。何處へなりとも退く料簡。ホヽウそれよごんす。何かなしにお前の段平。ずばと引拔いて閃つかせたら。他の奴等駕籠を投つて逃げるは定。そこで件を擔げて退くのぢや。万八ぬかるな。ヲット合點ぢや呑み込んだ。もし邪魔する奴はしらども頼んで片付け。さす。我等にお任せ。ひと走り往て頼んで連れてこう。コリヤ出來た。そんならちつとも早いがよい。地走れ〳〵に万八ま。



近頃河原達引

逸足出して驅り行く。かゝる工のありぞとは知らぬ井筒屋傳兵衛は。わが家へ戻る辻駕籠に。道を急がせ フシさしかゝれば。地そりやこそ來たわと。ぬつと出で。提灯ばつたり切り落せば。駕籠舁ども。わつと驚き逃散つたり。コハ狼籍と駕籠よりも。飛んで出でたる。傳兵衛が顔見てびつくり。詞ヤアわりや傳兵衛か。お前は横淵官左衛門様。ヤアおのれは仲買勘藏め。よくも／＼いつぞやは贋金を摑ましたな。汝に逢うて此詮議がしたかつたわい／＼。ヤアそこな蚊蜻蛉め。假令人目無けりやよけれ。大きな聲で吐かすなやい。贋金の吟味がしたうても所詮わが手に合ふ此勘藏では無いわいやい。あた忌忌しいと踏飛す。足首取つて拂ひのけ。心得がたきは官左衛門様。かゝる惡者を手に附けて。何ゆゑ此傳兵衛に狼籍をさせ給ふぞ。ホヽウその仔細いうて聞かさん。汝が親喜左衛門が身請して。連れ歸るおしゆんを。待伏せして引つさらへ。擔げて退かんと最前から。待つて居た此官左衛門。駕籠に乘つたはおしゆんぞと。思ひの外に傳兵衛サヽヽおしゆんは何處へ片附けた。サヽそれ吐かせ。吐かせ／＼と嵩高なり。こなたは故と逆はず。イカニモおしゆんは。親どもが身請を。今夜中に致して連歸るべき筈なりしが。御國より急の御用金申し來り。おしゆんが身請は明日と約諾致し置き。親ども儀は瀧口様の御旅宿へ先刻參上。これによつて某事も。跡より只今參りがけ。瀧口様もあなた様と御判談もなされたかろ早々御歸宅然るべし。身も親どもが待ちかねべし。心急かれ候へば。地御先へ參り候と言捨て立つを引き止め。詞何處へ／＼。一寸も遣ることならぬ。スリヤ身請明日へ延びたとな。いま／＼しい手筈違つた今夜のしだら。汝に知られたからは此儘では戻されぬ。ヲヽさうぢやさうぢや。そ奴を歸していけ口叩かれては。此方とらが身の破滅。いつそ旦那一思ひに。ヲヽサ／＼この官左衛門も其料簡。イヤ何傳兵衛。此横淵官左衛門は。汝が出入屋敷の重役人。身が惚れたと聞かば。おしゆんと手を切り離れべき筈なるに。親喜左衛門までが一つになり。身請して内へ引摺り込み。官左衛門に鼻あかせんとは。言語道斷憎き仕方。おのれといふ色男がある故に。おしゆんめに振附けられた腹いせに。思ふ存分さいなんだ其後で。息の根止めてこますのぢや。たとへじたばた騒いだとて。所詮埒の明かぬ事。汝が手に合ふ俺ぢやない。諦めて泥水喰へと。地雨の溜りへとうと投げ。あた忌ま／＼しいと鍬平足に。踏附け蹴飛しフシさいなむにぞ。地傳兵衛も齒ぎしみ齒ぎ

り。無念の胸撫でさすり。詞イヤ何官左衛門様。此傳兵衛は卑しい町人。蹴られても踏まれても苦しからねど。此脇差の小柄は。殿様より。拜領したる祐乘が作の三疋獅子。此小柄を。御家來の身として。土足に掛けても勿體なくもござりませぬか。ヤア置け〱いふな。たとへ以前は殿の物なりとも。おのれが手に渡つたからは。素町人の家の道具。踏んだとて蹴たとつて。何の勿體ない物か。小柄ぐるみに。踏み躙つてさいなまん。ヲヽ此勘藏は。元より小柄に掛合ない。おのれがやうな愚鈍な奴は。饂飩ぶみにしてこまさんと二人して。地踏むやら蹴るやら河原へ投げ付け踏付けられ。詞エヽ餘りといへば非義非道な官左衛門様。出入屋敷の重役人と。無念を堪へて手向ひせねば。附け上つたる非道の打擲。さほどおしゆんに執心ならば。夙くにも身請はなされいで。腹立つまゝのぶち打擲。武士に似合はぬなされ方。ホヽウその金が出來るくらゐなら。贋金のぐら事騙はせぬわいやい。スリヤあの八橋の錺の折。ヲヽ是なる仲買勘藏。手代の万八と肌を合せ。三百兩物したのぢやわいやい。地さてこそさうと傳兵衛が。スヱテ無念に無念重る思ひ。睨みつけたるはら〱涙官左衛門は。せゝら笑ひ。詞ハヽヽヽホヽヽヽロ惜しいか大聲あげてとこ吠えろ。腹一ぱいさいなんだあとで息の根止めてやる。これが此世の泣納め泣け〱ほえろ。地大べらぼうめと立ちかゝり。又踏みかゝれば。もう是迄と官左衛門が。肩先すつぱり切下ぐれば。勘藏は氣も狂亂。ヤレ切つたわと呼りながら フシ一散にこそ逃げて行く。地深手ながらも官左衛門。拔合せて切付くれば。ちやうど受けとめ。切先鋭にちやう〱〱。危かりける有様なり。痛手に堪へかね。官左衛門河原へどつさり倒るゝを。疊みかけて切りつくれば。殘念無念のうめき聲。のた打ち廻るをなぶり斬り。數ケ所の傷に官左衛門。フシ狂死こそ心地よき。地をりから來る。人影に。既に自害と。傳兵衛が。覺悟の刀取直すを。ヤレ早まるまい傳兵衛様。マテ〱待つて下さんせと聲かけられ。ヤアさういふは久八おしゆん。そなたの事を根に持つて。最前より官左衛門が非道の打擲。堪へるだけはとこらへしが。どうもかうもならぬ仕儀になり。胸に餘つて手にかけたれば。人殺しの此傳兵衛。すぐに此座で死ぬ覺悟。親人さまのお歎も。さぞかしと思ひはすれど。此期になつては詮なき繰言。不孝の段々よき様に詫してたもと。地又取直すを久八は押止め。詞河原に喧嘩があると聞いた故。お前の事が心もとなく。おしゆん様諸共走つて

來た。人を殺せば死ぬるとは尤の事ながら。喜左衛門様や。是なるおしゆん様の。歎かしやる所をも思ひやつて。四邊に人の居ぬこそ幸ひ。早く此場を立退いて下され。サア落ちて下され。久八さんのいはんす通り。喧嘩と聞いて胸騒ぎ。かういふ仕儀もあらうかと。脱けて來たこのおしゆん。わたしが事から起つての人殺しの科何とせう。さういふ事なら死ぬる覺悟は道理ながら。親御様の歎きや。わたしが悲しさを推量して。どこの山奥。いづくの浦にも遁れるだけは逃げ隠れても。どうぞ死なずに下んせ。死ぬる事ならお前一人死なしはせぬ。わたしも共に死ぬ覺悟。地おまへを先立て。わしが身が一日生きてゐられうか。親孝行と氣を入れかへ。未練卑怯な心にも(マ)こちつとは持つて下さんせと フシ身を投伏して泣きゐたる。詞サア親への不孝やそなたの歎き。思はぬにはあらざれど。人を殺して此傳兵衛。存へる所存はない。止めずと放して殺した〵。はてさて聞譯のない。お前の恩になつた此久八。悪い事いひはせぬ。たつた一人子のお前を。家の血筋と喜左衛門様の大切がり。後先見ずの。不料簡も出ようかと。おしゆん様の身請なさるも。悲しい事のないためのお計ひ。そこをよう聞分けて。止まつて下さりませ。それ聞分けぬにもなけれども。そんなら落ちて下さりますか。それぢやて此死骸。ハテ跡は我等にお任せあれ。おしゆんさま此所に長居して。人目にかゝつては傳兵衛様の爲にならぬ。早う内へ戻らんせ。序に傳兵衛様。こつそりと送つてやらんせと。地言ふにおしゆんも心急き。詞サア〵〵傳兵衛さん。早う退いて下さんせ。もし死ないで叶はぬ其時は。わたしも一所に死出の旅。ハテサテおしゆん様。お前までがそんな事。千の萬のと言葉數いうてゐるうち隙が入る。何をうじ〵。早う〵と地せき立てられて傳兵衛は。フシ心ならずも遁れ行く。地星の光に後影。見える間は延び上り。やれ嬉しやと始めて吐息 フシ つく折から。地向ふへ万八が。しらども引連れ走り寄る。かくと見るより悔し。無二無三に締めかゝるを。ひらりとかはして身繕ひ。詞方人つれたる泥坊めら。久八が手並を見よと。地左右前後を相手どり。手を盡したる手練の働き。コリヤ叶はぬと万八はじめ フシ這ふ〵遁れ逃げて行く。勘藏が訴へにや。所の代官捕手引具し駈け來り。勢州龜山の御家來。横淵官左衛門を切り殺せしと。注進あつて召捕りに向うたり。尋常に繩かゝれと。地呼ばはる聲に久八が科をわが身に引きうけて。捕手の前にどつかと坐し。人を殺せ

ば覺悟の前。御苦勞ながらと手を廻せば。早くも掛けたる縛り繩。四人引けハア

堀川の段

地同じ都も。世につれて。フシ田舍がましの。薄烟。堀川邊に住居して後家の操も立つ月日。琴三味線の指南屋も。合の手縺れ。氣縺れを。保養がてらの藥風呂。煽ぐも我を澁團扇。フシ目さへ不自由な暮しなり。詞おつる樣待遠にあらうなア。そして何やらのさらへであつた。ヲヽそれ鳥部山。アリヤ地體心中事。會にでも彈くのなら。お前は女子の方。おしげ樣は男の方。掛合に唄ふがよいぞえ。ドレ〳〵おしげ樣の代りにわたしと掛合に唄ひませうと。地おいてひく手もしをらしき。二上り歌女肌には白無垢や。上に紫藤の紋。中著緋紗綾に黒繻子の帶。年は十七。初花の。合雨に萎るゝ立姿。男も肌は白小袖にて。黒き綸子に色淺黄裏。二十一五の色盛をば。戀といふ字に身を捨小舟。どこへ取りつく島とてもなし。合鳥部の山は其方ぞよ。死にに行く身の後髮。ひく三味線は祇園町。茶屋の山衆が色酒に。亂れて遊ぶ騷合ひ。合あの面白さを見る時は。詞イエ〳〵しをれがない



二上り歌あの面白さを見る時は。あの面白さを見る時は。詞よし〳〵。二上り歌染どのそなたと某が。去年の初秋七夕の。座

敷踊をかこつけて。忍び逢うた事思ひ出す。詞けふはマアそこまで精が出るほどあつて。きつう手も廻り出した。もうもう何處で彈きなさつても。恥かしい事はないと。地聞いて笑顏の片男波。又明日といふしほに。フシおつるは立つて歸りける。地母を大事と油斷なき身すぎも輕き小風呂敷。肩に載せたる猿廻し。戻りはいつも日暮前。與次郎は息せきフシ門口から。詞母者人今戻つたぞや。ヲヽ兄戻りやつたか。さぞひもじかろ。茶も沸いてある。膳もそこにして置いた。ヲヽとくよ戻つたか。今朝から子猿めが親を尋ねて喧しい。ちやつと傍へやつてやりや。アイ／＼さうでごんしよとも。ソリヤちやつと乳を呑ましてやれ。イヤナウ與次郎。そなたが孝行にしてたもるにつけ。わしがこの長々の病氣も。いつ本復する事であらうと思へば。疲れの上に猶

疲れる。僅な弟子衆の餘情や。わが身の働きで。この養生がなるものかと。地思へば藥も毒となり。母ではなうて子供の爲には。呵責の鬼と思はるゝ。鬼は冥途にあるものを。つれなの老の命やと。身を悔みたる咽び泣き。スヱテ哀れにもまたいじらしゝ。詞アヽコレ母じや人。ソリヤ何を言はんすぞいなう。其樣にひそやかな身代ぢやと思はしやるか。地此間弟子入した米屋の息子殿から。永々おふくろの煩ひで嘸かし勝手も惡からうと言うて。雪か花かと申すやうな白米の仕送り。店店の旦那衆からは何なと用があるならば言うておこせ。もし出養生さしますなら幸ひな隱居所もあるほどにと言うてくるお方もあり。羊羹饅頭生魚。近所隣へさう／＼裾分もしられねば。鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣。詞モ案じる事は微塵もないぞや。それにまだ／＼氣の毒

なは。この家主が此家を居なりに買うてくれぬかと頼まれる。ヤレ厭やの。／＼アヽあた世話な家持よりは金持が。遙かましでもあらうかと。母に案じを掛けさせぬ。噓八百さへ一貫に足らぬ節季の言譯を。いふ下稽古やフシこれなるべし。地うそとは知れども老の身は子に從ふが習ひぞと。機嫌よげに頷き。詞ヲヽそれ聞いて落付きました。が落付かぬは娘が事。此間も親方が。おしゆんを預けに來て言はしやるには。コレ傳兵衛殿といふ客の事で。ちと内に置かれぬ事がある。たとへ傳兵衛が尋ねてござろとも。おしゆんが歸つて居る事は。包み隱さねばならぬぞやとくれ／＼も言はしやつた。サアわしも其入譯を聞いた故。おしゆんが心根を思ひやり。思はず涙が。ドレマア。地火を點そと棚の隅。こて／＼取り出す行燈の。フシ火影も漏るゝ暖簾ごし。おし

ゆん／＼。アイと返事もしを／＼と。本フシ思ひ悩みし顔容。地マア／＼こゝへと小聲になり。詞門の戸はかけてある。見る人も聞く人も無い。方々で噂を聞くに。此間の川原の喧嘩は。殺人はわがみの客の傳兵衛殿なれど。大恩受けた久八といふ者が。代りに捕られて往つたげなが。其場に落ちてあつた小柄が。カノ傳兵衛殿がお屋敷から。拝領した小柄ぢやゆゑ。天命遁れず御詮議最中。なれども其夜から傳兵衛の行方も知れず。其相方の女郎はおしゆんといふ事お上にもよう御存じで。親方の方へも色々と御詮議があれど。是も行方が知れぬと言ひ切つて。今揉めてある最中ぢやと。とり／＼の噂評判。おりやもう聞くたびにびく／＼すると。地聞くほど迫る。フシおしゆんが胸。詞其夜の起りも皆わしゆゑ。何處にどうしてござるやら。地心もとなさ逢ひたさも。いふに言はれぬ此場の品。フシいかゞと胸も塞がりし。地母は一途に娘の可愛さ。詞コレおしゆん。何にも案じる事はない。併し突詰めた男氣で。ひよつと此方の家へ來て。刄物三昧でもしやせまいかと。四五日は夜の目もろくに。寝られぬまゝの物案じ。地世間にたんとある格な心中やなどしてくれたら。此母は目かいは見えず。兄はアレあのやうな臆病者。もしもの事があつたらば跡で母はどうせうぞ。袖乞物もらひに歩いてもそりやもうひッとつも厭やせぬけれど。そなたの體に凶事でもあつたら。おりやモウ直に死んで仕舞ふぞや。若い氣に前後思はず。義理ぢやイヤ人の落目を見捨てゝはと。つまらぬ義理を立てぬいて年寄の此婆に。つらい目見せてたもんなやと。可愛さ餘る親心。ア、南無阿彌陀佛もフシ涙聲。地兄もとも／＼。コレおしゆん。詞今母の言はるゝ通り。何の義理もへちまもいらぬ。退いてしまへば赤の他人。またおれも氣にかゝつて。好の飯さへ喉へ通らぬ。母じや人の氣休め。俺が腹助けぢやと思うて。退いてたも。や。や。頼む／＼と正直一遍。母の心と兄の言葉。勿體ないと思へども。切るに切られぬ胸のうち。所詮死なねばならぬ身の。此場を脱けて其上でと。フシ心一つに思案を極め。詞母さん兄様。お二人のお言葉よう合點致しました。地殊に又傳兵衛様。つい一通りで逢うた客。深い 中サハリ譯でもないわいなあ。しかし勤の習ひにて。人の落目を見捨てるを。廓の恥辱とするわいな。迚も末のつまらぬ事。わしや得心をさせまして。品よう譯の立つやうに。詞イヤ／＼其やうに譯立てると言やつても。あつちに得心せぬ時は。それ／＼往にがけの駄賃馬で踏殺し。ア、イヤ／＼

無理殺しにしようもしれぬ。コリヤ滅多に噂合はされぬ。ヲヽ兄の言やるとほりぢや。そなたに怪我でもあつては。傳兵衛殿とやらも難儀。思ひ切るのがあつちの爲。わがみに心引かされては。つい捕へられるは知れた事。退狀を遣つたらそなたの事も思ひ切つて。切れるとも〳〵。遠い國へでも影を隱したら。身を遁れまいものでもない。ソレ〳〵むつかしかろとも一筆。兄硯箱取つてやりや。サヽ早う。地〳〵と母と兄。言葉にいなもなき顏を。隱す硯の海山と。重なる。思ひ延紙に。筆の立所の後や前。涙に墨のにじみがちなる。胸のうち。地書き遺すとはつゆ知らぬ。與次郎が傍から。詞コレ。其やうに長たらしう書かずとも。つい退きますと書いても。濟みさうな事ぢや。イヤナウ。書いたものはあと〳〵まで殘る物。男の去狀と同じ事。とつくりと譯の分るやうに書いてやるがよいぞや。アイ〳〵此狀にとつくりと。御合點の行くやうに。兄樣。此文お前から。お渡しなされて。よし〳〵。此狀さへあれば千人力ぢや。マア〳〵。母じや人も落着かしやれ。とやかう言ふ内九ツ前。お前も奥でもう寢やしやんせ。ソレ〳〵。今夜こそゆつくりと。心よう寢るであろ。兄もそなたも其處に寢やと。地奥底もなき隔てをば。押明けてこそ入りにける。詞サアおしゆんこちらもこゝに往生いたそ。アイと地おしゆんが共々に。暫し此世を假蒲團。タヽキ薄き親子の契やと。枕に傳ふ露涙。夢の浮世と諦めて。ナホス ギンオクリ更けゆくへ鐘も哀れ添ふ。地頃しも師走十五夜の。月は冴ゆれどスヱ胸の闇。過ぎし別れの言ひかはし。死なば一所と傳兵衛が。忍ぶ姿のしよんぼりと。イむ軒は見覺えの。慥かにこゝと門の戸へ。障る相圖の咳拂ひ。聞くにおしゆんは飛立つ思ひ。上る枕もうちはづす。フシ與次郎は傍に高鼾。地心も共に行燈の。ともしび吹き消しさし足にハズミ心。急くほど明きかぬる。戸口の鐶表にも。詞おしゆんぢやないか。傳兵衛樣よう逢ひに來て下さんしたと。地いふ聲寢耳に與次郎が恟り。起きると明ける門の口妹が姿も暗紛れ。捉へる袖の振合せおしゆんと心得傳兵衛を。無理に引きこむ取り違へ。戸口を内からぴつしやりと引立て。詞ソレヤこそ突きに來をつたぞ。おしゆん必ず外へ出まいぞや。戸口に俺が押へてゐる。門にゐるは傳兵衛ぢや。おのれを入れてよいものかと。フシ言ふもがた〳〵胴震ひ。詞コレナア兄樣。わしや表にゐるわいな。何ぢや表にゐるわいな。ヤア其聲色おいてくれ。そんな事喰ふおれぢやないわい。母じや人〳〵。傳兵衛がおしゆ

んを殺しに來たゆゑ。今表へ立て出した。おれ一人では手が廻らぬ。こなたも加勢して下され。加勢／＼と。地うろうろ／＼フシうろたへ騒ぎ。地母親も。詞何ぢや傳兵衛の加勢。ム、まだ外に同類でもあるのかと。地探り寄つたる傳兵衛がそば。詞コレ／＼おしゆん。顫ふ事はない。兄や母が付いてゐる。マア氣も鎭めやと撫でさする。背中の手障り合點ゆかず。詞コレ／＼與次郎。どうやらコリヤ娘ではないやうな。ヤア闇がり紛れに材木が紛りやせぬか。此方つかまへて居て下されやと。地探る手先に火打箱。がち／＼震ふ。フシ付木の光り。詞コリヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや。おふくろ兄御。エ、面目もない此姿と。地猶も小隅にフシ屈みゐる。詞コリヤヤイ其やうにしをしをして見せて。おいらを欺して。おしゆんを突かうとするのか。其手は喰はぬと。

地懐より一通取り出し。怖々ながら傍に寄り。コリヤ傳兵衛。おしゆんと汝と手が切れぬと。科人の汝ぢやによつて。妹まで難儀する。それでさつきに。妹に得心さして。退状が書かしてある。コレ是を見い。これぢやによつてモウ／＼。おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわい。ム、。スリヤお俊がその退状を。コリヤどき狀ぢや／＼。エ、その心とは知らず。いひかはした詞を誠と思うて。迷うて來たが無念なわい。地口惜しいと齒を喰ひしばる男泣き。恨を聞くも隔たる戸口。心はさうぢやないじやくり。詞ヲヲさぞ腹が立と道理ぢや／＼。マアとつくりと氣を鎭めて退状を見て下さんせ。ヲ、それでよい。長う物言やんな屑が出るぞ。傳兵衛。おれが讀むで聞かしたうても。皆目おれは祐筆ぢや。サア／＼。地早うと封じめ切り。突付けられて目にたまる。涙を拂ひ。詞ナニ書置の事。ヤアなんぢや書置。コレ／＼兄正直な。吃驚する事はない。そなたは無筆私は盲者。書置ぢやと讀違へ。狼狽さして門へ出で。娘を存分にせうとの工み。そんな虚言は喰ひませぬ。サア／＼ほんまに讀まつしやれ。コレ／＼與次郎。表の娘に氣を付けて。門の戸を明きやんなや。ヲ、呑込んでゐる。こゝにはおれがへたばり付いてゐる。サア早う讀め。物こそはよう書かね。聞く事は無筆ぢやないわい。サア／＼。讀んだ／＼。これまでの御養育。海山にも譬へ難き親の御恩。殊更不自由なるお身の上何とぞ首尾よう勤を遁れ。世を樂に過ごさせまし候はゞ。せめて少し御恩報じ。孝行の片端にもなり候はんとそれのみ朝夕祈り／＼處。二世までといひ交し／＼傳兵衛樣。思はず此度の御身の難も皆我ゆゑに候へば。今更見てゐ

候ては女の道立ち申さず候。不孝とは思ひながら共に覺悟を極め〳〵母じや人どうやら風が變つて來た樣な。サイナウ。わしも胸がどき〳〵と。サア〳〵。あとを讀んで下され。先ほど傳兵衛樣退狀と申して認めしは。此事申し上げたきまゝ退狀と僞り書遺し〳〵。何事も〳〵前世よりの定まり事と御諦め下され候。申上げたき數々は筆にも盡しがたく候へども。心せくまゝ申し入れ〳〵。扨はさうした心かと。地驚く傳兵衛親子はうろうろ。詞エヽ、氣遣ひなコレ兄や。娘を内へ早う。地〳〵と母があせれば與次郎も。戸口を明くれば走り行く。妹を無理に四人が顏見合して溜息つき。涙に更に別ちなく。地なんと言葉も傳兵衛が泣く目を拭ひ。詞一旦言ひかはした言葉を立て。共に死なうと覺悟して。義理を立てぬくそなたの貞節。忘れはせぬ嬉しいぞや。地思ひ廻せば廻す程。我こそ死なで叶はぬ身。そなたは科のない身の上。共に死んではお二人の歎き。命ながらへ亡き跡の。とひ弔ひを賴むぞと。言葉にはつと泣出し。そりや聞えませぬ傳兵衛樣。お言葉無理とは。思はねどそも逢ひかゝる始めより。末のすゑまで言ひ交し。互に胸を明かし合ひ。何の遠慮もないしようの。世話しられても恩に被ぬ。ほんの女夫と思ふ物大事の。大事の夫の難儀。命の際に振捨てゝ女の道が立つものか。不孝とも惡人とも。思ひ諦めコレ申し。一所に死なして下さんせと。隱せし剃刀取直す。詞マヽ、マア待て待ちをれやい。是で死ぬると命が無いぞよ。コリヤ何の事ぢやとんと分からぬやうになつて來たわい。殺しに來たと思うた傳兵衛殿より。今ではわれが方が手强うなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞと。地いふもおろ〳〵母親も。詞ヲヽ、さうぢや。我が子が可愛い〳〵と。子ゆゑの闇の傍ひら見ず。これまでおしゆんがお世話になつた恩も義理も辨へず。一途に中を引分けうと思うた母は義理知らず。地賤しい勤する身でも女の道を立て通す。娘の手前面目ない。そなたの心に恥入つて何事も言ひませぬ。傳兵衛樣と一所にの。コレ死出の道連しやいなう。したがコレ申し傳兵衛樣。定めて親御樣たちもござりませうが。親の心といふものは人間はおろか。譬へ鳥類畜類でも。子の可愛さに變りは無いもの。おしゆん傳兵衛と言はす氣か。もしやお前が死なしやつたと親御たちが聞かしやつたら。悲しうて〳〵此世に殘つてゐる氣はあるまい。何國いかなる國の果。山の奥にも身を忍び。どうぞ遁れて下さりませ。娘が心に恥入つて天にも地にも掛け替ない。可愛い我が子を

心中に合點してやる親心。こゝの道理を聞き分けて。コレ拜みます。頼みますと手を合したる母親の。子ゆゑに迷ふ闇の闇。二人は何と言葉さへ涙に涙結ぼるゝ。血筋の別れ與次郎も涙の雨の古布子袖くひしばりッシしやくり泣き。地ア、傳兵衛様の歎かしやるも道理ぢや。又おしゆんの泣きやるも道理ぢや。母じや人の泣かしやるのも猶道理ぢや。道理ぢや〳〵。道理々々といふては根から葉から。何時までも分からぬ道理ぢや。ガコレ二人ながら母じや人の今の言葉。御合點が参りましたか。エ、コリヤ。われも得心してくれたか。合點がいたか。サ、、、合點したらば。どうぞ此場を立退く分別。しかし其形では人目に立つ。京の町を離れるまで。此編笠に顔隠し幸ひの猿廻し。まめで二人が末永う。めでたう女夫になり遂げる。門出の祝ひに此與次郎がおはつ徳兵衛が祝言の壽。こなた衆も別れの盃。イヤ〳〵祝言の盃と。地祝ひ唄ふも聲低に。有田歌お猿はめでたやな。合拍子婿入姿ものつしりと〳〵。詞コレさりとはく〳〵地ナウあるかいな。さんな又あるかいな。詞ヲ、徳兵衛様ござんせ。餘りこな様が來やうが遲いによつて。おはつ様は顔眞赤にして腹立てゝゐやんすわいなう。コレお初様。聟様が盃をしたいといなう。機嫌直して盃を戴かんせ。コレ



コレ〳〵地戴くなら盃を。さんな又あるかいな。詞ヤ、コレむこ様。足で盃をさす餘りつれない。それでは嫁御が戴かんせぬわいなう。ひぞらずとほんまに差してやらんせ。さうぢや〳〵。そこでお初が戴いた物ぢや。地コレ戴くなう盃を。さんな又あるかいな。拍子コレ嫁御の晝寢もころりとせい〳〵。ナ。コレ。エあるかいな。さんな又あるかいな。詞コレ婿様餘りつれなうさんすによつて。おしゆんよめ御様が起きさんせぬわいなう。そこらでちよつと起したり。〳〵。エコリヤコリヤヤイコリヤ。さりとはさりとは地ナウあるかいな。さんな又あるかいな。拍子起きたら互ひに抱き付きやれ。ヲ、それで機嫌が直つたぞ。地エ、、、あるかいな。さんな又あるかいな。合拍子くるりと返つて立つたりな。立つてくれコレ〳〵〳〵立たしやませ。序に日和を見てたもれよい女房ぢやに。地〳〵ナウあるかいな。さんなまたあるかいな。拍子日より見たらば落ちてたも。〳〵。コレさうぢや〳〵。地おさるはめでたやめでたやな。詞サア〳〵きり〳〵此家を。さるまはし。まさるめでたう何時迄も。命全うしてたもと。目は見えねども。見送る母。言葉も此世で聞きをさめ。心の中の暇乞あすの噂と。なりふりも窶す。姿の女夫連。名を繪草紙に聖護院森を。あてどに。三重へ辿り行く

下之巻　道行涙のあみ笠

二上リ歌なまなかに染めて眞紅の縺れ糸。結ぼれしより白糸の。昔をナホス忍ぶ。フシ世の憂さや。今は浮名も。たちばなの。花の姿もスエいつしかに。萎れがちなる目にもろき。露の命と消えに行く。深き契りの傳兵衛は。おしゆんを連れてをちこちのたつきも知らぬ夜の道。あとやさきなる縺れ髮。むすぼれそめし縁のはし人目を包む。編笠に。姿は窶し變れども。心の誓紙いつまでも變らじものと手を取りて。心細くもたゞ二人。半太夫ハルフシすぎし廓のきぬ〳〵に。送られしとは引替へて。我ゆゑかゝる。フシ身となりて。半中サハリ智慧も器量も身代も。みな淡雪と消失せて。かはさし言のかず〳〵に。切るにきられぬ中々に。しがらむ。縁のいとしやと。いへば傳兵衛身を悔み。人々の氣やすめと。猿廻しと姿を變へ。堀川を落ちては來たれども。人を殺した我が身の上。存へる心は無い其方は後に生殘り。母御へ孝行盡してたも。往んでたも。コレ傳兵衛さんそりや胴欲な。氣の惡い。かゝさんや兄さんにも。替へぬお前を先立てゝ。生きて居さうな。わたしぢやと思うてかいな愚痴なぞえ。死なば一所と

いひながら。世にも尊き靈場の。森の中にてナホス死ぬるなら。回向の數に後の世の闇も。照さんヒロヒこなたへと。手を引き立てゝ行く空の。星も逢ふ瀬の。天の川。それにはあらで織女の錦の小路綾もなく。セツユリ過ぎる向ひにちら〳〵と。見ゆる火影は。誓願寺。嵐にさゆる。鐘の聲なま。いだなむあみだ 說經世は定めなや去年の秋。閨の隙間の。小夜嵐。ナホスア、よい月と フシ眺めてし今宵は二人月影も。面恥かし此姿。半太ハルフシわたしももとは。突出しのふと逢ひそめし戀の種エ、儘ならぬ浮世ぞや。おいとしい此姿。わしといふもの無いならばお內儀さんを呼迎へ。仲よう添うてござんしよと思ひ廻せば。フシ勿體ない。誓文わたしや未來でもあなたを退けて浮氣はない。二世も三世も其先までも。どうした因果の緣ぢややら。堪忍してとばかりにてわつとひれ伏し。フシ泣沈む。ユリ二人フシ露の橫顏吹きかはし。帶のしやら解け引締めて。本フシよしや歎かじ色ゆゑの。憂さもつらさも。猿廻し 有田歌おさるはめでたやな。合拍子婿入り姿のつしりと〳〵。詞コレさりとは〳〵 地ナウあるかいな。さんなまたあるかいな。又とあるまい二人が中。涙耕す畑道。合にげ來る二人。合追ひくる二人。合挑みあらそふ人影の。合夜の目にそれと小さうも。さだかに見えぬ霧の中。見えつ。隱れつ。フシかくれなき。二人が中は櫻木に。鏤められて唄はれて。色の譯しり戀しりと。タ、キカ、リ 仇名殘すが亡きあとまでも。ほんにせめての思ひ出と。へ慰められつ。なぐさめつ。行くも淚の道もせや。二人が命はかなくも森の。こなたに着きにける

聖護院の段

地こなたの畑道いつさんに迯げ來る勘藏其跡より。同じく走つて万八も。吐息つき。詞ヤレ〳〵危い。ひよんな所で出くはしたる瀧口左內め。アノ又井筒屋の。手代十助めも力强。なか〳〵手に合ふ奴等ではない。ヲ、サ〳〵何でもおしゆん傳兵衞二人の奴ら。引捕へてくれんと。思ひの外の今宵の時宜。さて〳〵ひどい目に逢うた。イヤもう此万八が。體は大方粉になつた。よもや此處まで追つかけても來はせまい。捉へられてはむつかしい。地マア息休めと芝の上。へたばる後の樋の陰より。ずつと出でたる手代十助。隱せし提灯差揚ぐれば。吃驚しながら顏打眺め。詞ヤアおのれは手代の十助ぢやな。ヲ、二人とも動くまい。最前惜しい所を取迯して。これまで跡追はへて來た。此處で逢うたが百年目。傳兵衞樣の難儀も贋金も。おのれらが皆仕業。片つぱし

引縛つて。ぐつと詮議を仕拔くのぢや。ホヽウ斯うなるからは。此方も死にもの狂ひ。それ万八。ヲヽ心得た。もうやけむちやに締殺せ。してこいと。右と左に万八勘藏武者ぶりつくを。詞ノリ 心得二人を小手がへし。又組付くをすくひ投げ。提灯消えて。地コハリ 眞闇がり。どれがどれやら當どなく聲を。しるべに摑みつき。投げつ投げられ根競べ。迯ぐれば追つかけ追戻し。堤をすべつてころ〳〵。落ちては上り上れば落ち。命限りと 三重 へ摑み合ふ。フシ 斯くとも下より。弓張提灯。火影にすかして。ヤア十藏。詞 左内が來た氣遣ひないと。いふ聲聞いて驚く万八。落ち散る雪駄かい握み。提灯へ。ばつたり當てれば火は消えて。俄に闇の心地する。畠を傳うて迯げ出す一人。何國迄もと ユリ三重 へ追駈くる。地 こなたの森はしん〳〵と。傳兵衛は傍へに座をしめ。詞 サアこれが我々が。露の命の捨てどころ。書置く事も言ふ事も。もう此段には皆繰言。二人手に手を取りかはし。死出三途を伴はん。心強く死んでたもと。地 涙ながらに勸むれば。お俊も涙に。フシ 聲曇り。詞 嬉しうござんす傳兵衛さん。夫があの世の樂みぞ。もう今生のいひをさめ。女房おしゆんと唯一言。いうて殺して下さんせ。わたしもこちの旦那どの。傳兵衛さんと 地 いふわいなと。スヱ 膝に凭れて泣きくどく。詞 アヽ愚な事ばかり。逢初めた其晩から。互にほんの女夫ぢやと。約束したに違ひはない。斯く成り果つると知らずして。我が命を助けんと。久八が身に覺えなき人殺しとなつての。獄舎の住まひ。憂き苦しみ。親人にお歎かけ。現世の罪に罪重ね。來世の苦患も恐ろしい。親の御恩を忘れぬため。地 家の定紋の小袖は血汐に汚さじと。冷泉 とある傍へに フシ 直し置き。詞 サア夜が明けては恥の上塗り。この傳兵衛を御不便が餘つてより。そなたを請出し添はせんとの。親人の御情。思ひがけなく其晩に。事を仕出せし河原の喧嘩。詮方なさに。官左衛門を斬殺したる身の災難。不孝に不孝重ねたる我が身の上。是まで不孝の詫言や。暇乞には拜むばかり。そなたも堀川の親兄へ。暇乞して禮言やと。地 心を付けられ身を震し。地 エヽ忘れて居たものを。ひよんな事いひ出して。また泣して下さんすか。宵に別れて出るまでも。いかなる國の果。山の奥にも身を忍び。どうぞ遁れて夫婦となり。無事で暮せとかゝ様の。地 の給ひしに。明日は死んだと沙汰あらば。さぞや母様兄さんの。歎き給はん。お命も續くまいと。案じられ。それが悲しい〳〵とわつと スヱカヽリ ばかりに取亂し。フシ 前後正體なかりしが。地

やう／＼涙押鎮め。詞アレ／＼あれは向うの赤いは夜の明けるのぢやないかいな。イヤ／＼あれは在の墓所。亡者を葬る火の光。同じ人と生れても。疊の上で死んだ身は。あとのあとまであの様に。葬らるゝもあるものを。都の中でも指折の。町人の子が淺ましい。見苦しう。死んだ體を巷に曝され。あと／＼までも。恥をさらしのながら川。地水の流といひながら。人間の身は船に似て。心の船長柁取の。悪いばかりで末の世まで。因果の業を果さぬかと。悔み歎けば。諸共に抱き合うたるもろ涙。フシ森の落葉や浸すらん。はや明がたの鶏のこゑ。タヽキここには無常の使かと。心せかれて死用意。ナホスフシとり／＼急ぐ其所へ。地一文字に駈け來る與次郎。南無三寶と迯出すを。兩手に取り付き殺さぬ／＼もう殺さぬぞ。斯うあらうと思うたゆゑ。方々と尋ね歩行いた様子があるといふ聲も息切れしたる後より瀧口左内喜左衞門を同道し勘藏万八に繩をかけ十助に引立てさせヤア早まるまい／＼兩人横淵官左衞門は役柄にて自由を働き是まで殿の御用金を掠め遣ひ多くの御金を引負ひしたる條明白に死後に露顯に及び不屆たる旨お咎め強く彼奴は死にぞん殺しどく是なる万八勘藏も彼が手さきを働き贋金まで遣ひし仔細悪事の段々一々白状彼等を直に代官所へ引渡し。久八が出牢を願ふばかり。地安堵せよ傳兵衞と。言葉の中より喜左衞門。詞おしゆんは直に身請して波風もなく事すんで。治まる家の花嫁と呼迎へん。喜べと。地聞いて皆々勇み立ち。親のお慈悲とありがた涙。嬉し涙にフシカヽリ喜びをかさね重ぬる。千代八千代。羽を伸す。鶴や龜山に。昔は絶えせぬ瀧口が。仁あり義あり道を立て。運も開くる傳兵衞おしゆん。昔に還る其噂。目出たき末の代々までも筆に任せて書き殘す

右此浄瑠璃は天明二の春豊竹八重太夫中の芝居へ下り御目見え出語大賞仕候得共正本出不申依之此度つたなき筆をもつて上中下三段に綴り四方の貴客の御一笑に備ふのみ

天明五乙巳年九月九日

中村重助再撰

繪本太功記

座本　竹本諏訪太夫

發端

詞天にかなひし故やらん八百の諸侯從ひて紂王を討たんといひしを我未だ天命を知らずとて諸の軍を引具し先づ歸りぬ。ナホス地實に戰國に大勇を示す亂舞の音高き。內大臣春長公の一構。遠近の諸士大半屬し。登城は櫛の齒を引く如く　フシさも嚴重に見えにけり。地取次の侍罷り出で。詞仰せ付けられし安部の法印只今參著仕ると。地申上ぐれば近習の面々。斯くと取次ぐ間もなく內大臣平の春長。從ふ武士は羽翼の臣眞柴筑前守久吉。武智光秀諸共に　フシ緣際近く座に直る。地久吉下部に打向ひ。地ホ、君にも殊なうお待ちかね。早く案內申せよと。地いふ間程なく法印安部氏。さすが都の水清く。淀まぬ公家の交りに　フシ衣紋正しく入り來る。地春長莞爾と打笑み給ひ。詞ホ、法印には大儀々々。其方を召寄せしは餘の儀にあらず。あれなる大庭の蘇鐵。泉州妙國寺にありしを。此安土に植ゑ置く所に。頻りに聲を發し妙國寺へ歸らん。歸せ〳〵と震動する事三夜に及ぶ。正しく變化の所爲ならん判斷。いかにとありければ。地始終を聞き入る內よりも理を考ゆる道々の。胸の算木に眉を皺め。詞ハア、御尤もなる御尋ね　某考へ申せしに。草木心なしとは申せども。佛地に育ち朝夕妙經を聞込み。一度枯れし木なれども。元の如く榮えしも法華經の德ならずや。法力の尊きは御宗旨の有難き所なれば君にも御滿足ならん。肝要ならんと法印が。地急ぎ佛地へ送り還し給はるが。水を流せる辯舌は實に晴明の末孫の器量フシ顯はれ見えにける。地色血氣の大將道理に迫り。詞春長が手に入れし蘇鐵返すべき謂なし暫く妙國寺へ預ける旨。使者を以て申遣はし身が心に叶はざる法華の族。いはれざる宗論を好み。上を恐れざる無禮の段々。牢獄へ押込め置いたり。地其上今日捕へ置きたる普天一人。身が目通りへ引出せよ。詞安部氏には休息あつて然るべからん。久吉には麁略なき樣もてなすべし。地はつと領掌式禮目禮。眞柴に隨ひ法印は　オクリ次の へ一間へフシ立つて行く。程もあらせず下部ども。普天坊を高手小手庭上に引据ゆれば。詞光秀は普天に向ひ。詞ヤア貴僧。かゝる縛め

に遭ふ事も。法義故とはいひながら。獄の苦しみ察しやる。君にもこれに御座ましませば。退つて出牢の御願ひナ。サ致されてよからんと。地普天を庇ふ明智が詞。尾田殿くわつと怒りの面。詞ヤア某が詞も出さぬ内。出牢の願ひせよとは。いらざる汝が贔屓の沙汰。控へて居よと居丈高。ヤイ。根ぐさり坊主よつく聞け。此度妙國寺の庭木の蘇鐵。某所望し此安土に植ゑ置きたる所。無性に妙國寺へ歸らんと吠ゆる。喧しきによつて。暫くかの地に預ける間。佛木たりとも春長所望の上は。再び返すにあらず。汝等を番人に申付くる間。其旨きつと心得られよと。冥途の高祖へ申し達せよ。不承知ならば直ぐ樣に。普天を以て冥途より返答あるべし。地おのれも法華の妙を知らば。二度此土へ立歸り。詞某に詞をかはせよ。最早左樣なる法力はあるまい〳〵。一時

も早く使を急がせよ。早く。地早くと不敵の春長。重惡募る權威の仰せ。怺へ〳〵し普天坊。ずつと寄つて齒嚙をなし。詞ヤアぬかしたり嘲つたり。汝が宗門でありながら。高祖を輕んじ奉り。惡口雜言報ひ忽ち遠かるまじ。愚僧只今命を滅するも。汝が使に行くにあらず。閻魔の廳へ赴きおのれが惡逆訴への爲に此世を去る。見よ〳〵頓て火の車を持たせ。拙者迎ひに來るべし。サア。一時も早く冥途の門途急ぎたし。イザ光秀殿介錯と。地罵る普天を光秀がはつたとにらみ。詞ヤア我が君に詞をかへし。惡言を吐く手間で。なぜ助命の願ひは致さぬ。恐れながら我が君にも御怒りを鎮められ。御助命の程偏に願ひ奉る。元來勇猛盛にして。良もすれば靈場佛地を破却し給ふ事。君の一失山門の衆徒等も。急難を遁れんと一七日の加持祈禱。惡逆の勇將と。世の

人口默しがたし。只仁惠の御計らひ偏に願ひ奉ると。地事を分けたる光秀が。詞に春長突つ立上り默れ光秀。詞我が惡逆とは憎くき過言赦されずと。地拳振上げ明智が頭りう〳〵。打据ゑ給へど手向ひの。ならぬも主命ハッはつと。あやまり入つたる無念の涙。普天なほも怒りの顏色。詞エヽ、惡鬼魔王といふは汝が事。君あつて臣。臣あつて君たる事を知らず。情なくも大國の。主たる光秀殿を。童劣りにちう打擲。天罰佛罰一時に報ひ。墮獄にくだしてくれんずと。地怒り重ねる額の天弓。光々として日蓮の。出現あるかと身もよだつ。ヤア〳〵物な言はせそ早くも國境へ引立てよと。御下知恐れ家來ども。はつとばかりに引く繩のやがて恨みを知らさんと。題目の聲一心に。佛敵春長赦さじと。詞は正に本能寺。御法の庭の露となす。佛の報い宗門の威

力の。程こそ 三重

六月朔日の段

扨も其後。地天正十年六月上旬の事かとよ。内大臣平の春長。東北に猛威を振ひ押して都に上洛ある。御嫡男城之助春忠二條の御所に居をしめ給ひ。天奏御沓を入れ給へば。饗應の役人は武智日向守光秀。森の蘭丸始めとし。譜代の良臣古老の諸士 フシ列を正して相詰むる。地色院の御所の內勅。浪花中納言兼冬仰せ出さるゝは。詞往時應仁の亂れより。諸國の逆賊王威を輕んじ。都の內へ軍馬を引入れ。玉座近く馬蹄に穢し叡慮穩かならざりしに。幸ひ春長大志を抱き。帝都を無事に治むる條。主上叡感淺からず。其功を賞じ給ひ。嫡子城之助春忠を從三位に敍し左中將に任ぜらる院の內勅。地斯くの通りとありければ。春長はつと平伏ありコハ有難き勅命。詞不肖の某。何ぞ一臂の力に及ばん。三好を始め逆徒原。四方に退散いたせしも君の聖德。數ならぬ悴春忠身に餘つたる官位昇進。天恩謝するに詞なしと。地勅答あれば兼冬卿。やや滿足の御氣色。春長重ねて。軍務に暇なき某。心ばかりの御饗應。鄙びたる觀世能御上覽も時の興。イザ奥殿へとありければ袖かき合せ兼冬卿。武智が案內にしづ〳〵と。オクリ奥の間 フシさして入り給ふ。地色春長跡を見送つて。蘭丸これへと近く召され。詞汝も豫て知る通り。無二の忠士と思ひの外。心得難き光秀が心中。彼が心を探らん爲。いつぞや寺に於て諸侯の見る前。恥辱をあたへ恥しむれど。面に怒りを顯はさず。無念を忍ぶ彼が胸中。猶以て不審の一つ。其儘にさし置かば。虎の子を飼ふに同し。逆心の企てあるや。地虛實を探り試し見よと。仰せに蘭丸さん候。詞武智が行跡聊か不審に存ずる折から。割符を合す君の御心。思ひ合する彼が俗性。頭上に喜怒骨ある者は。主人に祟ると異人の禁め。もし逆心に極まらば、討つて棄てんに手間隙いらず。奥へ踏込み引捉へ。ヤレ麁忽なり蘭丸。實否も糺さず荒立てなば。却つて僻事出來せん。事によそへて。ナ。合點か。ハア、畏り奉る。必ず油斷いたすなと。地牒合して春長公 フシ帳臺。深く入り給ふ。地蘭丸は只一人。兩手を組んで思案顏。本フシ工夫を凝す折も折奥は。亂舞の打囃子。二番三番ワキ能も。終りと見えて配膳の。フシ時刻も移る。巳の上刻。武智が一子十次郎。オクリ故實を。守る饗應司。配膳のかけ盤山海の珍味を盡し。フシ目八分に捧げ來る。蘭丸見るより。詞コレサ十次郎先づ待たれよ。饗應の役目は。お手前の親父。光秀殿と此

蘭丸。兩人立合ひ申合せもあるべきを。自分一人の取計らひ。この蘭丸は呑込めぬ。膳部の次第は。如何でござる。ハア、御料理は板元奉行中井半左衛門。七五三の獻立。ナニ七五三。ハテナア。何にもせよ。相役の某に。一應のこたへもなく。氣儘なる致し方。近頃以て不躾千萬。此分では差措かれず。光秀殿へ直應對。地イデ役所へと駈行く向ふ。襖ぐわらりと出で來る武智。蘭丸傍へぐつと詰寄り。詞様子殘らず。聞かれしな。武士は禮儀を表とするに。この蘭丸を踏付けし仕方。如何なる趣意か言へ聞かん。返答次第手は見せぬときつぱ廻せばハ、、、、コハ仰々しや蘭丸。さすが若氣の一徹。何故貴殿を侮り申さん。最早御膳の時刻故。役目大事と勤むる光秀。默り召され。饗應の役。貴殿拙者に相勤めよとは主人の云付け。主命をもどき。自分の氣儘にせゝらるゝは。エヽ聞えた。こりや何か。拙者を役に立たずと思召すか。但し又智慧者と呼ばれし武智殿。人を見下す高慢か。イヤハヤ。人も知つたる其許の素性。何か浪人の寄る邊なく。所々方々をうろたへ廻り。北國に於て詮方なく。粮に盡きたる身のせつなさ。土民どもの小倅を集め。手跡指南の禮物で。命をつなぐ寺子屋のお師匠様。ハアアまだある。日外。江州佐々木征伐の折から。木下と先手を爭ひ。箕作和田山時限の合戰。久吉に仕負けても。恥を恥とも思はぬ其許。何と。さうではござらぬかと地心に思はぬ傍若無人。さしもの光秀くわつとせき上げ。詞ヤア物に狂ふか蘭丸。大切の場所と事を愼み。いはせて置けば法外千萬。今一言いつて見よ。舌の根を切下げん。ヲヽならば手柄に切つて見よ。ヲヽ切つて見せう。サア。サア。サアと。地兩方が互に詰寄り〳〵。既にフシ斯うよと見えたる所。地襖あらはに春長飛びかゝつて光秀が。衿がみ摑んでどうど捻付け。詞やをれ光秀。凡そ武家の格式は。故實を以て式法を用ゆる。過ぎたるは猶及ばざるに若かじとは。古の詞。院の內使も重けれど。皆それ〴〵の例法あり中納言殿饗應の膳部。金銀の瓶器を用ひ。七寶を芥の如く鏤め。法外奔走。此後。主上仙洞の御幸には。何を以てか饗應に叶はんや。其上蘭丸が申すは我が詞も同然なるに。異變致す慮外者。頬打て蘭丸。ハア。早く打て。ハア〳〵〳〵御上意なりと蘭丸が。地腰の鐵扇振上げて。眉間眞甲つゞけ打ち。喰入る要に血は瀧津瀬。これはと駈寄る十次郎膝にかためて引敷く光秀。流るゝ血汐諸共に眼血ばしる。フシ無念の顏色。地春長つく〴〵打守り。詞いかに光秀。今蘭丸が手を以て春

長が折檻。口惜しうは思はぬかと。地底意を探る大將の。詞に光秀居直りて。コハ仰せとも覺えず數ならねども武智光秀。君に捧げし我が命骨は挫がれ身はずた〳〵になるとても。大恩ある御主人をお恨み申さん樣はなし。さはさりながら世の人口。春長こそ鬼の再來。情を知らぬ大將と。地譏りを殘し給はん事。末代までお家の瑕瑾。舊惡を悔む御性質。諸士の恨みは小車の終に御身に報ふといふ。御心の付かざるはへエヽ淺ましや悲しやなア。御心を飜へされあつぱれ仁義の大將と。呼ばれ給はれ我が君と。或は怒り。或は歎き。五臟をスヱテ絞る。血の涙。思ひは千々に十次郎父の心を察しやり。齒を喰ひしばる忍び泣き フシ心ぞ思ひやられたり。地色金言耳に逆立つ大將。猶も怒りの聲荒らか。詞ヤア言はれぬ諫音。推參至極。目通り叶はぬ立つて失せ

う。ソレ〳〵蘭丸。武智光秀親子の者。門外へ引出させ。早く〳〵と。地烈しき下知。はつと領掌蘭丸が。猶豫は如何にときめ付けられ。無念重なる光秀が。我が子を フシ引立て出でて行く。底意は誰かしら浪の。萬里に羽打つ大鵬や。面目涙十次郎身はしよげ鳥の片羽がひ。父の心はしらにぎて。神も佛もなき世かと身を託ちたる忍び音の。タヽキ胸は暗闇五月闇せん方。涙諸共に御門の外へと三重へ出でて行く。地フシ名にし負ふ。花の都を隣りして。時に近江の本城を跡に見なして今爰に。假の舍の上屋敷千本通りに一構。日向守光秀が。出仕の留守は操の方。長地 夫子の武運長久を。神に祈りをかけまくも。手づから備ふる神酒供物。殊勝に見えて褄はづれ。フシさすがは武家の奥床し。折から次の襖を開き。出で來る武士は武士武智が組下九野豐後守。年も

五十の分別盛り。操が前に兩手をつき。詞先づ以て今日は。林鐘の初日。大内にても氷室の節會。殊更太守光秀公。大公儀より饗應司の大役仰付けられ。御家の眉目我々まで大慶。フシ至極と述べければ。地操の方取りあへず。詞夫光秀殿。十次郎諸共未明よりの御登城。殊に大事は今日のお役目。常々短氣な春長樣。生れ付いた夫の一徹。地何の障りもない樣と案じるは女の常。悲しい時の神佛と手づからのお供物。詞是は〳〵。イヤもう萬事拔目なき光秀公。追付け吉左右上首尾と。フシ挨拶取々なる所へ。殿樣の御下城と。知らせの聲に妻操。我が子の音壽諸共に豐後守も座を改め。待つ間程なく武智日向守光秀。常に變りし其面色。疊ざはりも荒々しく。不興の體に立歸れば。跡に隨ひ十次郎。フシしを〳〵として座に直る。地色夫の顏色額の疵。心ならず

と操の方。光秀の傍近く申し我夫。詞いつにないお顏持ち。お氣もじ惡うはござりませぬか。お怪我でもなされたか。どうやら氣がかり胸騷ぎ。地心がかりと尋ぬれど。とから答へもせぬ夫。十次郎顏振上げ。詞今日二條の館にて饗應司を勤むる所。日頃不和なる森の蘭丸。我々へ樣々の惡口雜言。それのみならず春長樣。もつての外の御怒りにて。蘭丸に仰付けられ。アレあの通り。父上の眉間へ疵の付く程に。殿中での打ち打擲目通りへは叶はぬと。警固の武士に追立てられ。無念ながらもおめ〳〵と。顏押拭ひ歸りしと。地いひつゝこぼす口惜し涙。聞くより妻はハアはつと。胸を貫く釘鎹。豐後も倶に拳を握り。スヱテ咬牙齒ぎしみ無念の涙。地色樣子立聞く四王天。物をもいはず表の方。駈出す裾をしつかと止め。詞事を急いたる汝が顏色。仔細ぞあらんと言はせも立てず。ヤア愚かなり豐後守。主人へ恥辱を與へし。素丁稚の蘭丸め素頭引拔き立歸る。妨げすなと振解き。地行かんとするを猶も引止め。詞イヽヤ其憤りは麁忽々々。汝が無骨は主人の誤り。却てお家の仇とならん。先づ待たれよと支ゆる九野。地シヤ面倒なと勇氣の田島。放せ放さぬ。フシカヽリ二人が爭ひ。光秀聲かけヤレ待て兩人。詞身が詞も出さぬ內。立騷いで見苦しい靜まれやつと制すれば。地物に悚へぬ田島頭。武智が前にぐつと詰めかけ。詞たとへ誤りあるにもせよ。丹州近江兩國の太守。殿中での打擲は。我々も倶に恥辱。頰恥を曝さんより。蘭丸めを討つて棄て。叶はぬ時は生害と。覺悟極めし四王天。ナヽ何故お止めなさるゝな。ヤア愚か〳〵。光秀を打つだるは私ならぬ主命。スリヤ蘭丸に遺恨はない。元來短慮の御大將。心に叶へば飽くまで寵愛。又叶はねば打ち打擲。たとへ命を召さるゝとも。君に捧げし我が一命。ちつとも惜まず厭はぬ某。我が存念も知らずして。息筋はつて尾籠の振舞ひ。靜まれ退されと睨め付くる。地道理にさすが荒者が。行くも行かれず立つたり居たり フシ勇氣も。たゆみ猶豫ふ中。詞御上使の御入りと下部が聲。地光秀不審の眉を皺め。詞ハテ心得ず。思ひがけなき上使とは。何にもせよ。女房悴は次へ立て。早く〳〵と フシ追立てやり。地色威儀繕うて出で迎ふ。案內につれてのつさ〳〵。役目を功に肩肘張り。頰も眞赤い赤山與三兵衛上座に。むんずと押直り。詞上意の趣き餘の儀にあらず。先達つて眞柴久吉。郡三家を退治の爲中國へ馳せ向ふ。急ぎ光秀加勢として。西國へ下り久吉の幕下に屬し。戰功を勵むべし。其功勞によつて。

出雲石見の兩國賜はるべき間。今まで下し給はる丹州近江二ケ國は召上げらるゝ旨。城代へ申渡し急ぎ城を明渡すべしとの嚴命なりと。地いふに人々二度びつくり。主從顏を見合せて暫し。フシ詞も口籠る。地物に動ぜぬ光秀は。禮儀正しく上使に向ひ。詞ハア丶台命の趣き委細承知仕る。すぐさまこれより西國下向。城明渡しの用意萬端。家中の諸士へも申し渡さん。ホ丶早速の領掌神妙々々。一刻の延引は一刻の不忠となる。出陣やら宿替やら。がらくた道具片付けて。はや〱城を渡し召され。役目はこれ迄おさらばと。地憎體目禮取混ぜて。眞綿に針の靑疊。フシ蹴立てゝこそは立歸る。地一徹短氣の田島の頭。詞コレサ御主人。今赤山が上意の次第。前後揃はぬ詞のはし〲。西國加勢と披露して。實は御身を改易し。自滅をさせんず春長が姦計。良禽は木を見て栖む。不仁非道の尾田春長。義理も忠義もこれ限り。西伯姬昌は殷を討ち。つひに天下を治めし例。破鏡再び照さぬ道理。今目前に顯はれたり。今隨臣の空虛を考へ。一時に尾田を討ち亡し。天下に覇たる功を上げ。名を千歲に留めんは。サ丶丶丶いかに〱と急立つ田島。や丶默然たる日向守。始終こなたに立聞く操。襖あらはに走り出で。夫の傍へ差寄つて。詞忠義一途の田島の頭。さら〱無理とは思はねど。地勿體ない我が君を殺して四海を奪はうとは。聞くもうるさい穢らはしい。罪は目前美濃尾張主を殺して一日も。安穩ならぬ天の責めお年寄られし母御樣。いとし可愛い子供まで倶に惡名とらするが。それが本意か情ない。妻子不便と思すなら。御身全う月と日の。曇らぬ鏡武士の。操を立てゝ給はれと。わつゝ口說いつ理をせめて。夫を思ふ貞心の思ひは千筋百筋の苧綛を亂す憂き涙。フシ止めかねてぞ見えにける。地元來仁義の豐後守。光秀に打向ひ。詞文武二道の我が君にお諫め申すは憚りなれども。和漢の書籍に記せし通り。反逆謀反の輩が本意を逹せし例はなし。世に秀でたる光秀公高木風の俗語にひとしく。皆佞人のなす所。時節を待つて誤りなき。申し開きの手段はさま〲。上使に立ちし赤山と君が五音を考ふるに。水火既濟の卦に當つて。西施國を傾くる不吉の占。一旦勝利ありと雖も。日あらずして災ひ生じ。終に全からざる前表たゞ幾重にも思ひ止まり。スヱテ下されよと。事を分けたる諫めの詞。地いへども兎角の返答なく。地ム丶心なき人は何とも言はゞ言へ。身をも惜しまじ名をも惜しまず。スリヤいよ〱御謀反の思し立ちでござるよなと、地言はせも

あへず豐後が首討つてかたむる。フシ謀反の首途。詞ハヽ適れ〳〵。此上は軍の手配り。ホヽいで出陣の用意をせよ。ハア。所存の程こそ三重

同　二日の段

詞何と三助暑くて堪へられぬぢやないか。ヲヽサ此下郎には何がなる。朝疾くから手桶の切り水。暮方も又此樣に汗水になつての掃き掃除。俺も後の世には大將に生れて來べいと思ふが。どうであらうなア。されば。此本能寺を假殿にしてござる春長樣は。前生は鬼だといへば。奴が大將にならぬ事もあるまいわさ。地といへば傍から珍內が。詞ハテ扨二人ながら何をいふぞい。死んでの先は片便り。奴から大將に生きながらなられた眞柴殿。それを知りつゝ。ほんにやれ〳〵。來芝の事は由男にして。山村程今をためく里虹者ぢやといはるゝ市紅が肝心だと。地どつと笑ひの。フシ折こそあれ。アヽコリヤ〳〵あれに見ゆる御先供。南無三春忠樣の御入りだと。地猫に鼠の奴ども。フシ己が部屋へと逃げて入る。地程なく近付く鋲乘物。數多の武士が前後を圍ひ。築地御門に舁据ゆれば。斯くと知らせに森の蘭丸。禮儀正しく出で向ひ。詞阿野の御局御苦勞に存じ奉ると。地詞の內に乘物の。戶を開かせて阿野の局。三法師君を抱きまゐらせ。しづ〳〵と立出で。詞春忠樣の御名代と此若の御入り故。祖父君春長公より御迎ひとして。自らが守りまして參りしに。殊なう御機嫌もよろしく。お嬉しう存じ地まするると。フシのたまひければ。詞ホヽそれは一段さぞ祖父君にもお待ちかね。地いざさせ給へと蘭丸が。案內につれて付き〳〵も門內さして三重へ入りにけり

詞同音鹿の音蟲の音もかれ〳〵の契り。あらよしなや。形見の扇より〳〵。猶裏表あるものは。人心なりけるぞや。あふぎとは空言やあはでぞ戀はそふものを〳〵。ナホス詞局が一曲出來た〳〵。倅春忠が名代孫殿へ御馳走に。何と面白いか。サヽつげ。地つげと大盃。はつと心得しのぶがお酌。詞蘭丸へさす所なれども。阿野の局が舞の一手。勞を謝する共爲に局へ盃さし申す。是は〳〵不束なる一奏。地御意に叶うて此上もなき身の冥加と。いひつゝ局は御盃。少し引受け差置けば。春長公笑壺に入り。詞ナニ蘭丸局が間を仕れと。地重き御諚も諂ひなく。詞コハ仰せに候へども。一滴も及ばぬ某。此儀は偏に御高免を。ハテサテ飲まぬ所を飲ますが興。肴は汝が望み次第。すりや御肴を下されうとな。ホヽ六十餘州を手に握る此春長。サヽ何なりとも望め望

め。ハア然らば何とぞ此蘭丸に。軍勢を四五千ばかり下し給はらば有難からんと相述ぶれば。ム、心得ぬ汝が望みもし軍勢を與へなば。さん候丹州龜山へ押寄せ。只一戰に光秀が首討取つて。君の災ひを避け申さん。成程尤もなる願ひなれども。いらざる心配無用々々。左様な事に骨折らずと。早く一盞を傾けて。暑さを凌ぐが身の養生。歌飛び立つばかり有明の。夜晝となき樂しみの。ナホス詞榮花にも榮耀にも此春長には及ばぬ〳〵。我が君の御諚には候へども。安土の無念を散ぜんと一度は謀反の旗を上げ。窮鼠却て御身の大事。アさすがは若氣。北國には柴田勝家。西國には眞柴久吉。龍に翼の尾田春長。君の御諚はさる事ながら。蘭丸殿の詞の如く油斷大敵。ハテサテ局迄が同し様に。いらざる此場の長詮議。御客人がさぞふら〳〵眠り。身もほつと退屈。地イデ一睡の夢の間の。契りはいざと戯れて。フシカヽリ座を立ち給へば阿野の局。若君誘ひしづ〳〵と。フシ帳臺。深く入り給ふ。地色跡にうつとり蘭丸が。心一つに取つ置いつ。地思ひは同じ女氣の人目しのぶが寄添ひて。詞申し蘭丸様。もう何時でござりませうなア。これはしのぶ殿。そもじはまだ奥へ行かずか。アイ。ハテさてそれは不埒千萬。御用もあらん早や奥へと。地いふ顔じつと打詠め。詞ほんにまあ女の心と男とは。それ程迄違ふものか。兄齋藤藏之助殿にお頼み申して。春長様の奥勤めも。あなたのお傍に居たいばつかり。今更いふもフシ恥かしながら。地去年の初春洛東の。地主の。お庭の花盛り。腰元どもに誘はれ。願ひかけまく初戀の。色も香もある殿御ぶり。觀音様のお仲立ち。互ひの胸の下帶も。とけて嬉しい新枕。變るまいそのお詞が直ぐに心の誓紙ぞと。片時忘れぬ女房が。お傍に居るがお厭ならいつそ手にかけ給はれと。ぴんと拗木の絲櫻。フシ花も亂るゝ風情なり。地さしもに猛き蘭丸も。心の外の曲者に。取挫がれて背撫でさすり。詞イヤもう何事なう申せしがお氣に障らば眞平々々。百萬の强敵にもびくともせぬ某が。フシ斯くの通りと手をつけば。詞エ、又人を術ながらすのかいなア、春長様も大方に。班女が閨のお睦言。地お局様の取楫で出船の相伴。サアござんせと手を取れば。詞ハテサテたしなみや。人目を忍ぶ二人が中。殊に今宵は君の宿直。地又の首尾をと振切るを無理に。引立て奥の間へ。入るやいるさの月影に。しのぶの亂れみだれあふ。わりなき夢や。フシ結ぶらん。地早や更け渡る。夏の夜の。そよ吹く風も物凄く。寢られぬ儘に御大將。手づから障

子押開き。何心なく茂みの方。見やり給へばさわ／＼と驚き騒ぐ塒の鳥。詞ハテ訝かしや。まだ明けやらぬ夏の夜に。庭木を離れ騒ぐ群鳥、地合點行かじときつと目を付け。怪み給ふ時しもあれ。遠音に響く鐘太鼓、春長つゝ立ち耳そばだて。詞アレ／＼次第に近付く人馬の物音。宿直の者はあらざるか。急ぎ物見を仕れと。地仰せの下より阿野の局。長刀搔い込み走り出で。詞君の大事に候ぞや。蘭丸殿は何所にある。早く物見を致されよ。地妾も倶にと表の方。フシ呼はり／＼駈け行く。地色聞くに蘭丸一間より。飛んで出づれば春長聲かけヤアヤア蘭丸。詞反逆ありと覺えたり。急ぎ物見を仕れと。地上意にはつと蘭丸は。オクリ振返り見る廊下の高欄。これ幸ひの物見ぞといふより早く駈上り。地四方をきつと打見やり。詞ノリ物の黒白はわからねど。この本能寺を志し押寄するは。察する所武智光秀。ナホスリヤ光秀が反逆とな。今こそ後悔汝が諫め。聞入れざるも傾く運命。只此上は防ぎの用意。ハア委細承知仕る。がたとへ。一致に防ぐとも院内僅か三百餘人。思へば／＼主君と倶に。蘭丸我が君樣。地チエ、口惜しやと主従が。怒りの齒がみ逆立つ髪。スヱ無念涙の　フシ折からに。地色表の方より森の力丸。廣庭に大息つぎ。詞ノリ御油斷あるな兄者人。武智光秀我が君に。多年の恨みを散ぜんと。地手勢選つて四千餘騎。左馬五郎を始めとし。或は齋藤藏之助築地間近く押寄せて候と。いふ間もあらず蘭丸は。其儘　フシひらりと。飛下りて。詞我が君には恐れながら防ぎ矢の御用意あつて然るべし。地イデ某が彼處に向ひ。一當あてゝ眠りを覺さん。力丸來れと兄弟は。フシ飛ぶが如くに駈り行く。地色跡打見やり春長公。此上は防ぎの一矢。まづ差當つて一大事は三法師。詞ヤア／＼宗祇。若を誘ひ早く／＼。地御諚の。道具屋カヽリ下にかひ／＼しく。ナホス しのぶ諸共茶道の宗祇。若君抱き參らせて。フシカヽリ足もわな／＼胴震ひ。しのぶも倶に。フシうろつく所へ。地多勢切拔け阿野の局。其身は數ヶ所の痛手ながら。血に染む長刀かい込んで心も強に立戻り。詞申し／＼我が君樣。最早敵は込入つて候へば。君に代つて一軍。御身を遁れ下さるべしと。地口にはいへど御名殘り。フシ涙彌増すばかりなり。詞ヤア愚か／＼。なまなか身を遁れんと却つて名もなき奴原に。首を渡さば死後の恥辱。汝は我に成りかはり宗祇引連れ三法師を。何とぞ守護し落ち延びて。此旗諸共久吉が手に渡し。我が存念を晴させよ。地猶豫は却つて不忠の至りと。仰せ

にわつと泣崩をれ。たとへ不忠になるとても。君の御最期よそになし。何と此儘落ちられう。此儀はお赦し下さりませ。これを思へば自らが宵の酒宴の其時に班女が閨の託ち言。其一さしの扇とは。別れを告げし知らせかと。思ひ廻せばいとゞ猶。悲しいわいのと。どうと伏し歎き沈めばお道理と。心を汲んで諸袖を。絞るしのぶが倶涙。フシ泣く音を添ゆるばかりなり。地色数多の斬首片手に提げ庭先へ。立歸つたる森の蘭丸。それと見るより春長公。詞ホヽ今に始めぬ汝が働き。シテシテ様子は如何に〳〵。されば候。二條の御所へは武智光安立向ひ。當手の寄せ手は左馬五郎光俊。采配取つて嚴しき下知。なれども味方は必死勇者。御覽の如く首討取り。一泡吹かせ候へども。始終の勝利は。成程々々。只此上は潔よく。死出の三途も主從倶に。サア今聞く通り我が覺悟。早く此場を落延びぬか。但し三世の緣切らうや。サア其儀はなア。緣切るが悲しくば。一時も早く落延びよコレサお局。君の先途を見屆くるは此蘭丸。片時急ぎ裏門より。宗祇坊は何をうつかり。ヲツト合點。イヤもう最前から落ちたうて〳〵氣は上つり。コレ〳〵しのぶ殿もお供の用意と。地いへどさすがに忍び夫。云ひたい事も面伏萎れ。泣く〳〵フシ立上れば。地蘭丸聲かけ。詞しのぶは君の御供叶はぬと。地聞いて恟り驚くしのぶ。詞エヽそりや何故。ホヽ汝にお咎めなけれども。そちが兄齋藤藏之助光秀に一味の反逆。敵の末は根を斷つて葉を枯す。命を助け其儘歸すは是迄。サア是まで君への宮仕へと。地明けていはねど妹と脊の。中を隔ての垣となる。しのぶが憂き身詮方も。涙ながらに用意の懐劍。咽にがばと突立つれば。コハ何故と驚く人々。大將春長感じ給ひ。ホヽ女ながらも遖れの生害。兄と一つでない潔白。今日只今春長が仲人し蘭丸が宿の妻。心殘さず成佛せよと。仰せに手負蘭丸も。はつとばかりに有難涙顔に紅葉のからくれなゐ血汐に染まる兩の手を。合すも二世の名殘ぞと物いひたげに夫の方。御大將を伏拜み。笑顔を娑婆の置土産。フシあへなく息は絶えにけり。地色歎きをよそに御大將。勇を付けんとヤアヤア蘭丸。詞我はこれにて討手を引受け。此場を去らず討死せん。汝はこれより馳せ向ひ。敵の奴原一泡吹かせ。名を萬天に輝かせよと。フシ勇め給へば。詞ハアハアハヽヽヽ仰せにや及ぶべき。たとへ光秀。何萬騎にて寄するとも。片端撫で切り捲り立て。君の御供仕らん早やおさらばと　フシ立上れば。地色涙を拭ひ宗祇坊。局を。フシ諫め勸むれば。地是非も

涙に袖の浪。漂ひ。ながら若君を。宗祇が背にしつかりと。これぞあふぎの憂き別れ見かへる。名殘見送る名殘、又立戻るを蘭丸が。中を隔つる鯨波。早や亂れ入る諸軍勢。切立て薙立て女武者。其名も。高く假名書の。筆にとゞめて末の世の美談と。こそは 三重 へなりにける。地 寺中は合戰眞最中。力丸蘭丸一同に一進一退離散して。或は討たれ或は討ち。續く新手もあらばこそ。堅甲利兵の大軍を防ぎ戰ひ。流るゝ汗と湧出る血汐。唐紅に水くゞる。龍田の川に楓葉の。フシ 落ちて流るゝ如くなり。地色 寄手の從將安田作兵衞。春長を討取らんと。塀際にさし寄れど。味方の勢に隔てられたやすく內へ寄付かれず。得たりと鑓を力杖。えいと一はね高塀に。飛上りたる早業さそく目覺しかりける へ次第なり。地 さしも名高き靈場も修羅の巷と鳴る鐘の。天地にひゞく陣太鼓。フシ 亂聲に打立て〳〵。地色 先に進みし田島の頭。手勢引具し一同に喚き叫んで攻めかくれば。春長公一越調。詞 反逆光秀は何所にある。主に背く天罰思ひ知らせてくれんずと。地 弓杖ついて罵る大音。さしも勇ある武智勢。恐れて思はず進みかねたじろく隙に差詰め引詰め。射給ふ矢先に先手の軍兵。はた〳〵〳〵と射斃され。フシ 仇矢は更になかりける。地色 此虚に乘つて坊丸力丸。鑓を捻つて八方へ突立て薙立て阿修羅の如く廣庭。さしてへ追うて行く。地 客殿には春長主從。膝を竝べてどつかと坐し。力丸無念の齒がみをなし。詞 エ、口惜しや。往昔天文年中より。今天正十年迄。四海の內に横行して。武威を以て天下の兵亂を切りしづめ。民の塗炭の中に救ひ。四方の敵國君の英名を。鬼神の如く恐れふるひ。正二位右大臣に昇進し。大業既に成就せしに。逆臣惟任が爲に空しくならせ給ふとは。地 天魔の所爲か口惜しやと。血汐に注ぐ。血の涙。フシ 止めかねたるばかりなり。地 春長一言の詞もなく。御佩刀を脇腹へ。がばと突立て引廻す。倶に冥途の御供と。力丸坊丸殉死の切腹無慙といふも餘りある御身の。果てぞ。三重 へ哀れなり

同　三日の段

地 董卓は漢室を燒捨て伯知は水を以て趙を浸す。例をこゝに眞柴が軍師名に高松の城廓も。水死の合戰強勇も フシ 手に汗。握るばかりなり。地色 武家の家でも姦しき。腰元どもは寄擧り。詞 何とあげは。每日々々降る雨で水の増さるが癪の種。是といふも尾田勢の皆仕業。中でも憎いは眞柴とやら松葉とやら。突きさが

してやりたいわいなう。ヲ、コレ〳〵その突き序にお痛はしいは。妹御の玉露様。浦邊山三郎様にきつい惚れ様。大方埒のあく時分になつて。山三郎様の爺御杢之進様。アノ林丈左衞門めにお討たれなされた故。此程はふら〳〵と戀煩ひ。ヲ、左様かいなう。此方も覺えのある事。どうぞ首尾して上げましたいと。地さすが優しき女の情。フシ打連れ一間へ入りにける。地色思ひ内にあれば。其色眼中にすゝむとかや。父の最期に亂れ髮。無念の仇を。角額。浦邊山三郎利氏は。主の。留守を窺うて。林を一太刀恨みんと。屋敷へ入込む。フシ生死の境。斯くと白歯の。玉露が。出合ひ頭に見合す顔。はつと驚き引返す。袂に縋りコレ待つて給へ浦邊様。詞お前は深いお望みが。あつてのお越しと。見たは違はぬ姿かたち。地其お姿に戀ひこがれ。送る千束の返事さへ。ないは無情いお心ぞ。せめて一夜の添臥を。赦して給へと取付いて。じつと。締めたる手の内に心。フシ餘つて見えにける。詞コレ〳〵聲が高い。推量の上は包むに及ばず。匿まひ置かるゝ敵丈左衞門。何とぞ今日中に手引きして。勝負を遂げさせ下さらば。こなたの心も無足にせじ。サ、、何とと。地急いたる面色。玉露も胸を据ゑ。詞成程成程。わたしが爲にも舅御の敵。折を見合せアノ垣越しに。ナ御案内申しましよ。ホ、其詞に違ひなくば。まだ云ひ聞かす仔細もあり。此方の部屋へ。地そんならかうと手を取つて。顔は上氣にちる花の。玉露姫は情の露。濡れに フシ彼所へ入りにける。地折もこそあれ立歸る。館の主清水長左衞門宗治。智勇を兼ねしその骨柄。フシ跡に。從ふ。女房はまだ。十九二十二つ三つ。雪の白粉やり梅が紅花色添ふ。嬰子を。抱きいたはり立フシ歸る。地宗治は眉をしわめ。詞ヤイやり梅。晩春の末より三家へ人質。倅諸共遣はせし處。いまだ合戰の勝利も決せず。敵に圍まれたる此城中へ。歸されしは仔細があらう。何と〳〵。ハア、尤ものお尋ね。此度三家御加勢に向ひ給ふといへども。手を空しくして日を送り。水の手一つ切る事叶はず無念さはそれとても同じ事。もし討死致されては大事となる。手段を以て一時の合戰は遠からじ。それ迄は英氣を養ひ置かるゝ様。憂を晴すはコレ此若。隨分〻〻やり梅も。心を付けよとはげしき御諚。此子の顔も。見せたさ。地見たさと醫に愛持つやり梅が。フシ色ぞ籠りて。見えにける。義に張詰めし宗治は。指折りて日を算へ今日は早や六月三日皐月の末より敵方に大變ある凶星を見極め置きつるに。土俵を突上げ優

長なる仕方。間者を以て敵方の様子。聞出さんと思へども。これぞといふ謀なく。空しく入水する時は後々諸人の物笑ひ降参するは家名の恥辱是まで度々の合戦に不覺をとらぬ宗治が。猿冠者如きの計略。かく口惜しき籠城も天より我を責め給ふか。何とせんかとせんと。名に秀でたる武士も。傾く運と歎く息も。スヱテ天を睨んで。居たりける。地慌しく庭先へ。士卒一人駈け來り。詞何か談ずる筋ありと郡家よりの使として。安徳寺和尚只今本陣へ參著せり。殿にも早く御越しと。フシ云捨て家來は引返す。詞ム、汝が歸城の上安徳寺の使の様子聞捨て難し。これより諸士に對面致し。事の仔細を申し聞かん。其方は郡より預りある丈左衞門。四人同然なれば。萬事心を付けよ。サ行け〳〵。地心得ましたと立上り奥と。表へ引別れ　フシ二の丸さして出でて行く。地雨吹拂ふ松風の。夏山こめし。蟲の音を。オクリしるべに。漂ふ浦傳ひ振も。小褄もかひ〳〵しく。夫を導く健氣の玉露。花も木草も落花狼藉。互に切合ふ穗先と穗先　フシ汗に浸するばかりなり。地いらつて切込む太刀先を。しつかと受止め丈左衞門。詞ヤア小賢しい浦邊山三。おのれが親の杢之進。評議の席にて某に惡口吐きし入耳蟲。討つて棄てたを恨みに思ひ。刄向立は及ばぬ事。ヤアぬかしたり丈左衞門。さいふおのれは。冠山の落城をよそに見て。當城へ逃込みし人畜生。父の仇方々の恨み。思ひ知れよとはねかへす刄尖き雙方が受けつ。流しつ烈しき爭ひ。見る玉露は心も空。山三が念力通じけん林は刀打落され。逃げんとするを切伏せ〳〵。父の敵覺えよと。フシ乘つ懸つてとゞめの刀。地色首引切つて大地に打付け。詞ハヽア嬉しや〳〵コレ玉露殿禮は未來でおさらばと。地腹掻切らんとする所。戻りかゝりし長左衞門。フシやり梅諸共走り出で。詞ヤレ死ぬるとは狼狽者。赦しもなき敵を討ちし言譯の切腹ならば。某が計ひを用ひ。まさかの時の討死こそ武士の道。城外の水を潜り。久吉の陣所へ馳せ込み。僞りならざる次第を頼み。匿まひ貰ふが術の第一。敵の空虚變の次第。相圖を以て知らされよ。地折もあらば眞柴を討取り。名を末代に殘されよ。サヽヽ一時も早く〳〵と急き立つ清水。ハアヽコハ有難し。武士の數にも入るべき大功。命を的に仕果せて　フシ立歸らんと駈出す。ヤレ山三様お待ちなされ玉露様とのわりなき中。最前ちらりと。アイヤ申し宗治様。お妹御と浦邊様との二世の御緣。ホヽ好き合うた二人が中。門出を祝する。地扇も時の島臺土器。松は元來

常磐木の。繪にはあらざる松竹梅。オクリ末廣。びろと。フシ夫婦の固め。詞ハア、重々の御恵み。玉露殿も隨分無事で。お前もお怪我のない樣にと。地立派にいへどなまなかに。タヽキ馴れし枕のもつれ髪離れ。難なき兩人を。わざと制する宗治夫婦。扇屛風やあふぎの別れ。心定めて城外へ飛ぶが如くに。三重へ駈けり行く。地嚢沙背水の謀を廻らし。見ぬ唐土の元帥も。舌を卷くべき稀代の軍術。オクリ水嵩增さる大河の流れ。堰止めたる土俵岩石。大木。運ぶ地車の。木やり音頭も跛馬。揃はぬ肩も降參の。フシ空腹武士知られける。地加藤は土手の高みに上り。詞ヤア者ども。汝等は悉く降參の者どもなるに。此度の勤功。大將始め某まで滿足せり。此合戰終りなば。急度御扶持あるべきぞよ。ソレ兵粮を遣ひ終らば。暫時は休息致すべしと。地下知を傳ふる其

内に。向うに何か騷ぎし人聲。正淸きつと打詠め。詞ハテ合點の行かぬ。高松の城外に怪しき取合ひ。何にもせよ心得ずと。地瞬もせず見渡す向うに。我組止めんと數多の軍兵。小船に打乘り。右往左往に。コハリ追廻せば。山三郎は水中を。潜つつ拔けつ働けば。鵜よりも早き フシ水練水魚。地そこよこゝよと組子ども。フシうろつく中に。舳先を持ち。えいやうんと打返せば。水は漫々小船の組子浪の藻屑となりにける。此有樣に殘りの兵船。進みかねてぞ。三重へ見えにけり。地此方の岸には正淸が。何者なるぞ心得ずと。手ぐすね引いて待つ所へ。血氣の浦邊は拔手を切り。忠孝二つを額に當て。飛鳥の如く遙かの堤。一聲諸共 フシ飛上れば。地何者なるぞと取卷く雜兵目もかけず。加藤が前に兩手を突き。詞某は郡家の家臣浦邊山三郎利氏と

申す者。高松の城内に於て。親の敵を討取り。立退かんとせし所。城中より討手かゝり手詰めの難儀何卒武士のお情に。御匿まひ下さらば生々世々の御厚恩と。スヱ敬ひ入つてぞ願ひける。地加藤正淸聲を荒らげヤア紛はしき願ひの筋まこと親の敵を討つは武門の譽れと。郡家より恩賞もあるべき筈却つて搦め捕らんとする高松勢。紛はしき御邊の僞り。眞直ぐに申されよと。疑ふ詞に。詞ハヽア御尤もなる御仰せ。某が討取りし親の敵と申すは。冠の城を拔出でし。林丈左衞門と申す者。我が父杢之進と聊かの論により。父を欺し討ちに討つたる事。其無念止む事を得ず。何とぞ仇を報ぜんと主人へ敵討を願へども。軍中とて取あへなく。剩へ敵丈左衞門は淸水宗治殿に預けとなれば心に任せず。空しく月日を送る内。此度の合戰に付き。久吉公の計略にて。一

城諸共鎚の如く。水底の藻屑とならんは治定。然れば父の鬱憤を散ぜん時節なしと。隙を窺ひ本望は達したれども。御赦しなき敵討。いかなる咎めあらんも知れず。惜しむべき命にはあらねども。亡き兩親の跡をも營み。其上にて切腹致す我が存念。地暫しが程の御惠み。御聞き届け下さらば。忘れ置かじと手を摺つて。頼めば正清につこと笑ひ。詞ホヽ事明白なる汝が願ひ。尤も其理なきにはあらねども。敵々たる此時節。諸卒の疑念も如何なり。萬事は主人の賢慮にあらん。日も早や西に傾けば。イザ同道と。地正清が深き心の計ひや。士卒來れと夕映の。下知の詞に。ハヽはつと。立上れども内心は。久吉討たん血氣の若者毒蛇の口の。水筋を。ハズミフシ伴ひてこそ行過ぐる。フシ向う遙かに。漕ぎ渡る主は誰とも白浪を。振と衣の戀無常。急ぐ船路や行く空も浮世。なりける 三重 へ次第なり

同　四日の段

地東魚來つて四海を呑む。西鳥來つて東魚をくらひ。四海既に穏かならざる。戰場の地の利を窺ふ山傳ひ。近習召連れ隆景は。フシしづ／＼谷間に立休らひ。詞ヤア／＼方々。此度の合戰誠に武門の晴れ軍。郡の枝城尾田がために悉く落城に及びし上。軍慮に賢しき清水が城郭。久吉が謀に乘ぜられ。入水となりたる高松の味方を助けん其爲に。地遙々此土に陣を取れども。敵の要害強くして。味方を救はん術なく。三家の心もまち／＼たるに。三澤久代が非道の企て。隆景が見察違はず白狀の上。國元へぼつ返し禁籠申付けし上は。敵方へ裏切りなさん妨げなければ。先づ此山の頂に塞を結ひ敵陣を見づもり。明日中には攻めかゝり。敵の勇氣を試みんはサア／＼いかに／＼。ハヽヽ仰せ迄も候はず。我々どもは先手を乞ひ請け雌雄の合戰。一命は風前の塵義は金鐵。千變萬化とかけ破り。さしも名を得し久吉が。頭を取らんな瞬く内。御心安く思召せと。フシ實に勇しく見えにける。地色遙か向うに人音は何者なるかと見やる内。現世未來を一寺に納め。大地の僧都安德寺。清水が妹玉露姫。フシ伴ひ歩む一木の影。地それと見るより手をつかへ。詞ハア隆景公には御健勝の體恐悦至極。拙僧今日清水長左衞門樣へ御陣見舞に參りし處。妹御玉露樣を以て何か密談の御使。味方の諸士にも心置く籠城。幸ひなる安德寺誘ひくれよとの御頼み。委しき仔細は存ぜねども。これまで同道仕ると。地申上ぐれば玉露も。面はゆげなる顔を上げ。詞女のあられぬ事ながら。敵の陣所へ使の役。隆

兄様の御賢慮を。伺ひました其上と。兄上の指圖ゆゑ。安徳寺様諸共にお見舞かたぐ\〜参りしと。地差出す文箱小梅川。手に取上げて讀み下し。詞ム丶一旦和議を相調ひ。事を計らん計略あれと。先達て申遣はせし所。此使に恵瓊老。清水が妹玉露を差越さんとは面白し。さりながら大地の住職。敵陣への使者とは憚りあれど。他聞を恐れる密事の大役。足下ならでは叶ひ難し。地先づ\〜陣屋へ入らせられ。暫時の休息あるべしと。地詞の折もこなたなる。茂みの枝に飛違ふ數多の鳩が。争ふ餌ばみ。隆景きつと打詠め。詞ハア丶あれ見よ。只今鳥類の餌ばみの争ひ。思ひ合はすは昨夜の夢。我が陣中へ飛來る村鳥。色めきたる草葉を啣へ。塵塚山をなしたると見えて夢散ぜしに。目前人を恐れず餌による鳩の嘴先にて。責めつゝきたるアレあの蔓物。瓜は春長の紋所。三つ五つは五體を表し。其身を包む衣服こそ敵の城廓。鳩は源家の臣鳥。我は清和の末孫たり。此蔓物の瓜によりし。尾田春長を一戰に討取るべき神の告げか。但しは敵に變ある告げか。地ハテ怪しやと明慮の大將。尾田を討つたる光秀が。京都の大變神鳩の不思議は。フシ後にぞ知られたり。地安徳寺進み出で。詞ハア丶智人の仰せ至極せり。唐土周の世に當つて。赤色の烏武王の陣に泊る。人々怪しみ迷ふと雖も。大公望これを吉なりと悦す。果してその詞に違はず。周武の正に天下となる。君にまつ其如く。今陣前に鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞。愚僧もそぐはぬ戰場の。役目もやはり此姿。赤色ならざる此衣の頭ごかしに取入つて。强氣の尾田方取挫ぐも。國家の御爲天下の爲。玉露様にも御油斷あるな。ホ丶丶御念に及ばぬお僧様。わたしも名に負ふ清水が妹。見馴れ聞きなれ軍學軍術。夫に迫り力を合せ。味方の怒り兄様の。無念を晴らすは敵の大將久吉が。首討取つて立歸らん。地やはか仕損じ申すべきと。詞凉しき玉露が怯める色なき武家育ち。フシさも勇しく見えにける。地色かゝる所へ味方の郎等片山藤太。水に浸せる惣身の。汗諸共に抑拭ひ。詞仰せの如く水中を潜つて敵の陣所に近付き。事の樣子を窺ふ處。地猶も流るゝ水筋を。堰き切る手當の石櫓。詞或は土俵蛇籠の用意。これを支ゆる清水が郎等。詞忍び入つて水筋を。切らんとあせれど敵陣の。備へは名に負ふ加藤正清近寄る軍兵事ともせず。詞右と左に薙立て追立て切伏せられ。地水の哀れと流れ行く清水が勢の敗軍は。目も當てられぬ無慚の有樣。斯くて空しく時日と送らば底の水屑となり行く城兵。御賢慮あ

つて然るべしと。フシ息繼ぎあへず訴ふれば。地隆景は打點頭き。詞かく迄敵に取切られ。拔駈けして高名せんとは。自殺を招く清水が城兵。只此上は惠瓊老宗治と申し談ぜし如く。玉露諸共久吉が陣所へ立越え。兩家和睦の計略こそ肝要ならんと　地隆景が。詞にはつと頭を下げ。詞修羅の巷へ出家の身の。入るべき筈はなけれども。地危急を救ふも敎への道。玉露樣には御用意あれと。勇み進めば神妙々々。詞兩將へも此趣具に某言上せん。地イザ兩人も本陣へ同道申さん來られよと。物に馴れたる小梅川。その名芳し武士の。刃切れ尖き直燒双。鍛ひに鍛ふ隆景が譽れは。世々に。三重へ顯はせり

同　五日の段

地聞麟山揮一同して風雨烈しき中國の。物騒がしき蛙が鼻。久吉公の陣館。亂杭高垣幕結ひ廻し。兵具犇しと竝べしは。フシ事嚴重に見えにける。地太郎兵衛治郎兵衛と呼び集め。落葉枯枝をかき寄せて。フシ濕氣を拂ふ雜兵ども。一つ所に寄り集り。詞何とかうした所は。かんしやうゆうの煙と出かけた。ヲ、サ〳〵今にも合戰というたら戰場の切合ひ。集錢出しの飲み喰ひ。軍場の小商人の手目上げさせてやらうもの。何をいうても長の籠城。我が身で我が身の儘ならぬと。地重き口から。空ぞめき。ちんぷん勘六智慧あり顏。へ、、、尤もなり。フシ勇しし。地某とても戰場に出で立ちなば。かの唐士のあほす東六が奇計を以て。鎗先尖き餅田樂。串さしながら摑み喰ひ。鬼殺しと見るならば。あたり次第に飲乾して。代物といふ大敵には。喰逃げ。飲迯げ。早いが勝ちと總々が。咄しの耳を。フシ突拔く鐘。詞スリヤこそ軍が始まると。地達者なものは口ばかり。足も。フシしどろに立つて行く。地スハ事こそと加藤正淸。一間を出づる庭先へ雜兵一人駈來り。詞只今遠見いたせし處。怪しの兩人陣中さして參るよし。引捉へて詮議に及び候處。郡高松兩城より使者として。女一人僧一人。通しませうやと伺へば。ホ、使者とあれば捨てても置かれず。案内致せと追立てやり。地待つ間程なく取次に。フシ從ひ來る葉月の。兵地使者は二八の品形。振の袂に名香の。尊き寺僧諸共に　フシ使者の座にこそ。著きにける。地正淸威儀を繕ひて。詞これは〳〵郡高松兩城よりの使とあつて珍事の御兩人。お使者の趣承はり。加藤取次仕らん。地樣子いかゞと正淸が。尋ねに愛持つ玉露が。詞ハア、正淸樣とやらお取次の段御苦勞に存じます。自らは高松の城將淸水宗治

が使玉露と申す者。清水申越さるゝ趣は。此方の家中浦邊山三郎と申すお若衆様サア其山三郎不慮に城内を抜出でたる不忠者。御匿まひの由承はり。早々使者を以て所望に及ぶと雖も。御歸し下されざる段我々ども不審晴れず。もしや使の不念無骨なる事ばしあつて。武士の意地を立てぬき御歸し下されんも計り難し。此度は汝參つて御機嫌の伺ひ。同道して立歸れとある使の口上。御前宜しく御披露と。地 詞のあやも玉露が。フシ 詳かに相述ぶる。地 安德寺詞を正し。詞 玉露の申さるゝ通り。浦邊山三郎は邪の家人同然故。此方よりも使を立つると雖も御承引なきによつて。頭役に愚僧が使。地 兎にも角にも貴所の御執成偏へに頼み存ずると。頭を下ぐれば加藤正淸。詞 何事かと存ぜしに。浦邊について咋日といひ今日といひ。何か事もありさうなる三家の胸中。軍は脇へ取置いて。福原梶田の勇將等馬を出さるゝは。この虎之助一切合點參らねども。女儀の使出家たる御方を。追。返すも大人げなし。取次は致し申さんが暫時隙いる事もあらん。あれなる一間に相待たれよ。地 然らば後刻と式禮目禮。玉露引連れ安德寺 オクリ 左右へへこそは別れ行く。地 朱明の空も一面の。雲かけ隔つ浮草の。浪に。漂ふ山三郎。又降る雨に足音の紛れ出づるもしめ〳〵と。フシ いとゞ憂さをや重ぬらん。地色 後の此方に玉露が。物音窺ひ立出づる襖もそつと人目の關。盡きぬ緣の顏と顏。なうなつかしの山三様御身にお怪我はなかりしかと。縋り付いたる振袖の泣ぶ翼や連理の緣。妹脊。フシ わりなく見えにける。詞 これは思ひがけもなき玉露殿。何故爰へは來られしな。サイナ此城中へ入込みしも兄様の深き御思案。お前に逢うて力を合せ。眞柴を討てとくれぐれの仰せ。首尾よく仕果せ立歸らば。誰憚らぬ夫婦中。地 手柄を見せて下さんせと。夫頼みの女氣は。フシ 胸に遺瀨ぞなかりける。詞 ホヽ我もやたけとはやれども。一かたならぬ名大將。猿冠者の猿智慧と聞きしに違ふ眞柴久吉。此軍配に我我しきが及ばんや。所詮すご〳〵高松へは歸られず。清水殿への申譯。只今腹切り相果つる。其方は立歸り此通り傳へて給べ。地 さらばとばかりに柄に手を。かくる夫に縋り付き。詞 マア待つて下さんせ。姫御前の身で敵城へ。お使者に來るも何故ぞ。お前に逢ひたさ顏見たさ。地 死なば一所と語らひしわたしを振捨て死なうとは。聞えぬわいな胴欲な。わたしを先へ手にかけて殺してやいの我が夫と。命惜まぬ武家育ち。涙色めく婉戀の袂は。フシ 戀の淵ならん。地色 涙隠して

山三郎。詞ヤアいらざる繰言嗜まれよ。敵へ漏れては互の恥辱。地そこ放されよと突き退くる。イヤ／＼／＼。わたしも倶にと爭ふ後。ヤレ早まるなと聲をかけ。立出づる眞柴筑前ノ守久吉。詞高松より使者に來りし玉露へ。山三郎を返し與ふる。又浦邊へは此書面。久吉が心をこめし清水殿への贈り物。この役目仕果せなば拔群の高名手柄。はや／＼小船にて歸城せよと。地差出し給ふ情の賜物。其文章は知らねども。一先づ城へ立歸り其上生死を決せんと。心定めておし戴き足早にこそ馳出づれば。夫の跡に引添うて命の親の久吉樣と。悦び足も地に付かず。フシ飛ぶが如くに立歸る。地色又も聞ゆる陣鐘につれて馳來る女武者。金石ならねど湯王鐐萬葉を亂し都より。夜を日に繼いだる阿野の局。詞久吉公に御見參と。地支ゆる組子事ともせず。フシ廣

庭傳ひ歩みくる。ヤア者ども某に逢はんとある女武者。曲者なりとも何程の事やあらん。對面して取らせんず。者ども引けと。地御下知の。聲聞取つて阿野の局。ヤア久吉殿かといふを押へて傍を見廻し。詞音高し／＼。御自分の形相一方ならず。一大事の注進ならば。敵へ漏れては味方の非運。心を付けて物語られよ。地腹帶しつかと。フシ卽座の氣付け。詞サヽヽ樣子は如何。何と／＼。ハアヽされば候春長公には安土を出立まし／＼て。都本能寺に入らせ給ひ。中國加勢の御手配り諸軍を催す時こそあれ。地逆臣武智が夜討の企て。詞フウ何光秀が謀叛とや。シテ／＼勝利は如何に如何に。ハアヽ。明くれば二日子の下刻。地水さへ音なき眞の闇。早や洛陽に亂れ入り夢驚かす俄かの戰場。詞太刀よ具足も乏しき寺内。數萬の敵は甲冑に身を固め

たる小手臑當。地味方は薄衣綾錦。濃紅の玉襷。詞自ら始め蘭丸兄弟。死地に入つたる働きに庫裏方丈も忽ちに。血汐隈どる修羅道の。巷に迷ふ築山かげ。射つつ射られつ切つつ切られつ劍の山。八寒地獄となる鏑は五臟を射抜く君の弓勢。先手の軍兵一筋の。骲につらなる三人五人恐れをなして引退く。詞シテ／＼君には御安泰にてましますか。氣を付けられよ阿野の局。ハツア。君には御安泰にてましますか。心許なしいかに／＼。ハツア。申すも便なき事ながら。運の盡きとて蘭丸殿。田島が手鎗に無念の最期。地勝に乘つたる光秀方。味方は殘らず討死し。詞春長公にて御腹召され。シテ三法師君は。若君樣は細川殿へ落し參らせ。二條の御所も一時に亡び火中の煙と失せ給ふ。地是ぞ筐のお家の御旗。此上は久吉殿の智略にて。武智を討取り亡き我が

君の亡魂に。手向けて給べや眞柴殿と。死ぬる今端の際迄も。君を大事と張詰めし心の花もがつくりと折れて散り行く貞心貞死。フシ義女の鑑を殘しける。地色始終の大變聞く久吉。身體忽ち壞敗に苦しめ。スヱテ途方に暮れて居たりしが。つゝ立ち上り大音聲。詞ヤア〳〵方々。我を謀る女が不敵。只今某切捨てたりと。地諸軍の心まよはさぬさすが智人の名大將。先立つ主君亡き人の生死はおなじ梓弓。オクリ弔ひに。フシこそ入りにける。地フシ無常に傾く。夕陽は。坊主頭も伸び欠び。時刻移ると安德寺。エヘン。惠瓊は咳拂ひしづ〳〵歩み獨言。詞ハレヤレこの永の日中待せて置き。返答もせぬ上に。鷹爪はまだな事。猿屑一服志さへなき大將。主腹ばかり肥やすと見ゆる。餘りな釣付け樣佛の顔も三家の使。歸つて此由。地申上げんと行かんとす。詞ヤアヤア安德寺惠瓊和尚。何所へござる久吉對面仕らんと聲かけられ。ハヽヽいやはや愚僧は生れ付いたる近飢。餘りの隙いりに甚だ腹中窮困にせまり。一鉢の御芳志に預り度く。勝手へ參るといふを打消し。ハテさて久吉が志の供養ある事を。眼前見捨てゝ歸られるお僧の心底訝かし。そこ動くなと地眞柴久吉。障子をさつと押開き。上段に飾り置いたる金鴨の。煙も薫ずる。フシ手向草。地色心憎しと尻目にかけ。詞ヤア大將の詞とも覺えず。出家たる我を訝り動くなとは。物を知らざる今の一言。ヤアいふな惠瓊。都の大變立聞きして。郡へ注進せんず心底隱しても隱されまじ。軍勢を引入れ。修羅を導く惡僧。寺領が望みか知行が望みか。返答聞かんと。地未前の眞柴屈せぬ惠瓊。大口開いて高笑ひ。詞ハヽヽヤアぬかしたり猿冠者。愚僧を捉へ惡僧とは何の癡言。おのれが主たる春長は。伊吹山の鬼の再來。諸寺諸山まで責め苦しめ。佛敵遁れず本能寺の庭に於て野仆れ死したる尾田の幕下。主に劣らぬ暴れ者。五畿七道で喰ひ足らず。この中國まで攻下り民家を苦しめ人種を絶やさんとする魔王の根元。亡ぼし絶やすが佛の役希代の名劍請取れと。地はつしと打てば確乎と止め。詞ハヽヽ出家に似合はぬよき嗜み。童劣りの坊主が惡口。久吉が耳には入らぬ。まと相手になりたくば。天地の道理成佛の明らかなる事を悟りし上。相手になつて取らせんと。地飽く迄嚴しき嘲弄に。奥齒碎くる無念の眼中。つか〳〵と立寄り。眼尻逆立て息をつぎ。詞ヤア威勢に募り人もなげなる今の惡言。當時安德寺の大寺を踏へる此惠瓊。童劣りとは何をいふや久吉。ホヽたとへ大寺の名僧たりとも。心中に六道

の迷ひあつては。成佛の道思ひも寄らず。汝が目より魔王と見抜きし某が。天地の道理を知らせんずと。地惠瓊を目がけ打掛け給ふ以前の蓮花衣。これは如何にとためつすがめつ見て恟り。覺えの袈裟は矢作の橋にて。天下を得ると見付け置いたる奴殿かと。フシ呆れ果てたるばかりなり。地久吉につこと笑はせ給ひ。詞いかに惠瓊老。其時は臺無しの一文奴。算木書物も當てにはならぬと貴僧の詞。後の證と共時に申請けたるソレ其袈裟。矢作の橋にて我が相面見付けし貴僧の天眼通。此久吉が望む出世にあらねども。天より生ずる惠みなれば。惡しくな思ひそ惠瓊殿。詞此上は尾田と郡の和を結ばるゝが出家の役。よもや違變はあるまじと。地明智の詞に安德寺。頭を摺付け摺付けて。詞ハア、理非明白たる御仰せ。訓狐といへる物は。夜は微塵の虫をも見れども。晝は大山さへ見る事能はず。此坊主もまつ其如く。御身黑どんたる日陰の其時はよく奇相を見分くれど今天下に名を得。武威白晝に輝く時は相見あたはず見損ぜし訓狐に等しき此坊主に和議の御諚は冥加至極仰せに從ひ和談整へ奉らんホヽ早速の會得はさすがの名僧。一刻も早く急がれよと。地仁者の詞にハヽはつと。天より照らす久吉の威勢に恐れ引きかへす。道は道なり明らかな。フシ心照らして立歸る。地色跡見送つて久吉公。心を凝す軍慮の庭先。見越の松が枝はつしと射たる。矢文はいかにと立寄つてかなぐり開けば返書の實名。淸水が自筆一紙の血判つら〱と讀み終つて表に向ひ。詞ホヽ高松の城主淸水氏。眞柴久吉が一書の胸中。射抜きしは適れ適れ。此上は三流を切落し諸人を助け與ふべし。いざ〱是へに地淸水長左衞門宗治。豫て期したる討死の。弓矢打捨て庭上にどつかと坐し。詞エヽ天運強き久吉殿。只今射込みし矢文の返書。いよいよ御承知下さる上は。味方の助命賴み入ると。地鎧脫ぎ捨て腹一文字にフシ引切る苦痛。地色夫の跡を慕ひ來る。妻は手負ひと見るよりも。なう痛はしや悲しやな。斯うした御最期させまいため郡一家の人々より。わたしを以ての御教訓無になすのみかいたいけな。此子は可愛うないかいなと夫に縋り伏轉び。フシ前後もわかず泣き居たる宗治苦しき目を見開き。詞ヤア愚や女房何繰言。郡三家の人々は某が胸中をよく御存知そち達親子に今生の。暇乞ひをさせんず爲の御情。ハア、冥加なや。フシ有難や。地色一歳の時よりも喰ひ込んだる大祿の。恩義はいつか謝すべきぞ。詞それに引きかへ小知の銘々主恩に命を捨つる。數萬人の最期を

ば助けん爲の此切腹。玉露山三が密書の使心をこめし久吉の書中。味方に取つては盲龜の浮木悦べ女房何吠える。氣を張詰めて忰をばよき武士に仕立て上げ。主君に忠義を怠るなと。地高松一の良將も。子故にくらむ深手の苦痛。見るに付けてもいや增る夫の最期稚兒の行末思ひやり梅は女の淺い心から。太守の仰せ誠ぞと斯うした別れ知らずしてお跡を慕ひ來たものを暇乞ひさへろく／＼にいひたい事の數々を。いつの世いつの添ひぶしに語らうものぞ情なや。アレ／＼／＼何にも知らぬ稚兒さへ。虫が教へる寢覺めの愛てうち／＼は父上の。今はを拜む合掌ぞやと抱きしめ／＼伏轉びたる女氣を。不便と察する久吉公堪へこたゆる宗治が恩愛一度に保ちかね淸水。涌き來るはら／＼涙血水川邊に浪越えて土砂吹飛ばす如くなり哀れを見捨てゝ眞柴久吉彼所を

屹度打見やり。詞アレ／＼／＼見られよ兩人相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく。切つて落せばあり／＼と平地とをさまり城外へ。地遁れ出でたる老若の悦びの聲鯨波。コレ見物あれと大將の。敎にはつと心付き。詞エヽ幸ひなるかなこれに物見と。地オクリ蹌ぼひ／＼腹帶しつかと白布の。高見を傳ひ　コハリ攀登り。見開く瞼に高笑ひ。ハヽヽヽ女房悦べ。死後の思ひ出此上なし。浮世の夢も今日限り。地昨日の敵は群れゐる白鷗。鯨波と覺えしは。謡浦風とこそ。フシ聞えけり。地色我は朝の露と消え淸水流るゝ柳かげ。しばしが程の世の中に心殘さぬおさらばと。白布解かんと。フシする所へ。詞ヤア／＼宗治暫し／＼。小梅川隆景。安德寺が理解によつて。尾田家一體水魚の因。見屆けて成佛あれと。地聲諸共に大將隆景。衣紋改めしづ／＼と入來る跡

に安德寺。手に捧げたる白臺は。神文とこそ見えにけり。互に和議を取納め。惠瓊は神文押戴き。詞ハアヽ目出度く和談整ふ上は拙僧はお先へ歸り。久吉公の御神文兩家へさし上げ奉らんと。地禮儀も足も勇み立ち。フシ衣しぼつて歸らるる。地久吉は詞を改め。地兩家和順に及ぶ上は何をか包まん。主君尾田殿都本能寺に於て。武智が爲に御落命と。地聲搔曇る一雫。萬里にみちて。袖しぼる。地色驚く人々制する眞柴。弛みを見せじとつつ立ち上り。詞主人の敵武智光秀。都に上り弔ひ軍三家の助力あるや如何にと。地聞くより隆景につこと笑ひ。詞ホヽ軍の備へありながら手を空しくせし味方の若者。地研ぎたて置いたる弓矢の手前。願うてもなき後詰めの加勢。詞隆景釆をなし申さん。ホヽヽ頼もしし／＼。早や上京の用意をなさん。者ども早くと御

下知に。地加藤正清始めとし人馬狹しと フシ居ならんだり。地憂ひに沈むやり梅を諫め宥めて隆景公。詞父に劣らぬ武士と小梅川が成人させん。詞心殘さず旅立ちと。籠る情につこと笑ふが暇乞ひ。此世の念も宗治が。忠義の家名稚兒をもうり育つる仁者の道。雲きれ空も青靑と。天王山の晴れいくさ。名をとる射とる弓矢とる。天下を鳥の聲につれ。いさや武智を討たんずと勇む正清兩將も。都をさして ユリ 三重 へ出でてゆく

同 六日の段

地扨も逆賊武智光秀。多年の恨み一戰に春長父子を討ち奉り。妙心寺に砦を構へ勝ち誇つたる諸軍の勢ひ。倶に威風を顯はして。ヲロシ備へ。フシ嚴しく守りゐる。地中央には光秀の母皐月。褥の上に座をしめて。イヤナウ四王天。詞何事も見ざる聞かざる云はさるに。咄があらば嫁女庚申待。ゆるりと聞かうドリヤ。地奥へ行つて夢でも見ましよと。立つを引止め田島頭。詞後室樣の御立腹。其理なきにはあらねどもそれは一途の思召し。幕下となつて春長へ。身を寄せ給ひし御大將。地時を得て其機に臨むは。天の時を知るといふ。何とぞ御機嫌直されて光秀公に御對顏。偏に賴み奉ると。願へば倶に嫁操。只幾重にもと手をついて。願ふ心の夫思ひ。スヱテ道理にも亦殊勝なり。地皐月は少し面を和らげ。詞それ程に迄皆の衆が。賴みを聞かぬも年寄の片意地。そんなら息子殿の歸り次第奥へ知らしや。コリヤ女子どもは來て腰を打て。ヤアエイと 地老の立居も重々と。嫁が介抱四王天。フシ引添うてこそ入りにける。地斯くたる世にも花開く。色香もしるき初菊が。奥の透間を立ち出でて。詞ほんにマア此十次郎樣は。辛氣なお方ではあるわいなア。こちの思ふ樣にもない。間がな透がな軍學とやら。色の道には疎いので。一倍心を痛めると。地女心の物思ひ後に立聞く十次郎。初菊殿これにかと。いふ聲聞いて。詞ヤア十次郞樣か。エヽ聞えぬわいなと 地ばかりにて跡はえいはぬ。おぼこさは。赤らむ顏に顯はせり。詞これは又嗜みやいのう。又しても〳〵。顏さへ見れば恨みのたらたら。親々の許しを受け。コレ未來永々變らぬ女夫。少しも隔てはないわいの。アヽイエ〳〵づんともうアタ辛氣な。永永とやら未來とやら。地其先の世は。知らねども。緣を。結ぶの神樣が。御苦勞なされ髫髮子の。振分け髮の其中から。あれと是との結び合ひ。親の赦しもあるのを。つひに一度の逢ふ瀨さへ無いは。餘り胴欲な。お情ないと娘氣の。胸のあ

りたけかき口説き恨み。フシ卿つぞ道理なり。地思ひは同じ十次郎。詞ハテもう今迄は不調法。以後は急度嗜む程に。コレ赦してたも〱。そんなら願ひを。ハテ誰憚らぬ許嫁。世間廣う遠慮はいらぬ。エヽ忝なや嬉しやと。地ひつたり抱付く妹と脊に。わりなく見えし フシ縁なり。地折から轟く轡の音。光秀公のお歸りと。知らせに悔り飛退く二人。所體繕ふこなたより。妻の操も出で迎へ。フシ待つ間程なく立歸る。武智十兵衞光秀。武威轟かす强將の常に變りし フシ屈託顏。地席を改め詞を正し。詞ホヽ、三人とも出迎ひ大儀。シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか。サアイナア先程も田島頭と自らがわつつ口說いつ。どうやら斯うやらお口が和らぎ。母公樣とも睦じう。ムヽホそれは重疊出かいた〱。さあらば直ぐ樣御對面。イヽヤそれには及ばぬ。母が直々參らんと 地聲うちかけを引きかへて。木綿布子に風呂敷包み。脊にちよつこり賤の女の。姿見るより驚く人々。操は傍に摺寄つて。詞系圖正しき武智の御家。殊更四海の武將とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公樣ともいはるゝ御身が淺ましきお姿は。もしやお心違ひしかと。地尋ねにつこと打笑ひ。詞ホヽ、忝くも淸和源氏の嫡流たる武智の系圖。元より武勇の家柄なれば。誰に恥づべき謂れなし。老いは寄れども心は鐵石。渴しても盜泉の水を飲まずとは。お身達もよう知つてゐやる筈。地心穢れた我が子の傍。片時も座を同じうせんは我が。日本の神明へ。恐れあり〱。伯夷叔齊を習ひ只。雲水に從うて出で行く母。これが此世の別れぞと。義强き母も恩愛の淚紛らす有樣は。フシいとゞ。哀れぞ增りける。地光秀は默然とさし俯いてゐたりしが。詞操の方は淚ながら。詞コレ申し我が夫。母樣の只お一人。いづくを當てと長の旅。なぜお止めなされませぬぞ。ホヽ、不忠不孝との御輕蔑み。今更申す詫もなく。せめては母のお心に逆はぬが寸志の孝。四海の內は此光秀が掌にある、お止め申すな其儘々々。ヲヽ、さすがは惡人程あつて根强い魂、地チエヽいはん方なき人外めと。睨む目元にはらはらと淚かくして立出づる。心の張弓强弓の引きぞ。煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が。これなう申し祖母樣と控へる手先。振拂ひ。フシ見返りもせず出でて行く。地わつと泣出す人々を。制し止めて。詞ヤア〱者ども。母人の御行方いづく迄も見屆けよ。御手道具の用意々々と光秀が。地鶴の一聲許多の軍卒。簞笥長持挾箱。其外雜具鋲乘物。御母公樣のお姿を。見失ふなと足早に跡を。フシ慕うて

急ぎ行く。地影見送りて光秀は。何か心に打ちうなづき。詞奥操悴十次郎。嫁初菊もろとも次へ立ちやれ。用事あらば手を鳴すと。地心ありげな詞の端。アイとはいへど立ち兼ぬる。ヤアぐづ〳〵と何を猶豫。早く立てよときめ付けられ。心は跡に殘れども親子三人打連れて。相の山カヽリ是非なく。次へ入相の。フシ鐘が無常を。告げ渡る。本フシ實に物凄き庭の面。地忍び出でたる四王天。主君の様子如何ぞと。身を潜めてぞ窺ひゐる。それとは知らぬ光秀が、有合ふ硯引寄せて。フシ筆喰ひしめし。唐紙の。表に何やらさら〳〵〳〵。小オクリかくと。見るより十次郎瞬きもせず物陰に。守りゐるとも。白書院。只一心に。フシ書き認め。地筆投捨てゝむんずと坐し。諸肌くつろげ差添を。抜くや玉散る氷の刄。やゝ打詠め兩眼に。はら〳〵涙くひしばり。既に斯うよと見えければ。主従小陰を走り出で。ヤレ早まり給ふな父上と。取付く十次郎四王天。鏡の如き兩眼を。くわつと見開き聲震はし。詞コレ我が君。コリヤこなた狂氣召されたの。今朝より始終の様子。心得がたく思ふ故。萬事心を付くる某。物陰より窺へば。出かし顔に辭世の一句。順逆二門なし。大道心源に徹す。五十五年の夢覺め來つて。一元に歸すとは何の譫言。君臣見る事塵芥の如くせば。臣君を見る事怨敵の如しと。春長猛威に増長して。神社佛閣を燒失し萬民の苦しむる暴惡、神明これを誅するに。光秀の御手を以て討たし給ふ。天の與ふるを取らざれば。災ひ其身に歸す。左程の事を申さずとも。よく御合點のこなた様。切腹とは馬鹿々々しい。人は知らずこの四王天田島頭。殺す事罷りならぬと フシ居丈高。詞ヲ、さうぢや〳〵父の命は我我始め萬卒に至る迄。御一身に及ぶ御命。臣義を守るとも。君これを補助せざるは。それ將とは申されず。地只生害は止まり給ひ。下萬民の苦しみを救ひ給へと右左。フシ涙と共に諫めの詞。地光秀はたと横手を打ちハ、誤つたり〳〵。詞一天の君の御爲には。惜しからざりし此命。暫しは永らへ事を計らん。地先づは綸旨を乞ひ請けて。猶も背かん者どもを悉く誅戮せん。詞急ぎこれより我は參内。汝等二人は久吉が。都へ上るを半途に待受け。一戰にぼつ返せよ。イデ裝束をと立上れば。地近習小姓が心得て。オクリ運ぶ。大紋立烏帽子。立派に著なす骨柄はあたり輝く其粧ひ。早や引出す栗毛の駒。フシ光秀ゆらりと打乗つて。地ヤア〳〵十次郎。詞田島頭諸共に西國へ馳せ向ひ。必ずともに油斷なく軍功を顯はせよと。地詞にはつと四王天ハ、、、、

君。御出陣には及ばずとも。詞某かの地に向ひなば。猿冠者めが素頭を討取るは手裏にあり。アイヤ／＼彼もしれ者。定めて遠き計略あらん。コハ親人の詞とも覺えず。父に代つて某が。地軍配取つて一戰に。敵の首を實檢に備へんコレ。氣遣ひあるなと。勇み進みし。フシ我が子の骨柄。ホヽ地天晴れ／＼潔よし。我も跡より出陣と。手綱かいくりしと／＼。乘出す駿足馬上の達者。轡の音は秋の野の虫にはあらでリン／＼／＼。綸旨をやがて頭に戴き刄向ふ奴原打立て。追立て切散し。追付け四海に羽を伸さん。いそふれやつと逸散に大内山へと 三重 へ急ぎ行く

同　七日の段

地攝化隨緣眞實に無量の惠み洩れざれども。佛敵猛威の春長に世を狹められ鑓重成。無念ながらも杉の森砦を構へゆゝしくも。寄手を防ぐ唯一心。矢叫びの音聞の聲天地に。フシ滿ちて動搖せり。地かかる險しき其中に。媚き集ふ腰元ども軍に馴れて氣は張弓襷。鉢巻腰刀さすがゆゆしき身の備へ。フシ中に小笹が才發顏。詞イヤなう浪江。なんとマア騷がしい世界ではないかいの。切つた／＼と切つつはつつを世渡りにまだ仕足らいで春長殿。慶覺樣を相人に取り憎てらしい軍事。サイノウ追付け如來樣の罰が當り。首がころりと飛ぶであろと。地いへば兵卒口々に。詞ヲヽサ飛ぶとも／＼。一向一心に固まつたる我々。殊更御主人喜多の頭樣の軍配。石山に於ても度々の勝軍。ヤモ負ける事はけんによもない事。殘り多いは王樣の御挨拶。頭の役でおとなしく丸う納めて慶覺樣が。石山の砦を引拂ひ此杉の森へ御陣がへ。性懲もなく又寄せかけた尾田の大軍。どつと寄せても不可思議光如來のお力にや叶ひませぬぢやないかいな。あいなアあいな。ヲツト待つたり。叶はぬ序においとしいは若旦那孫市樣。尾田と和睦が破れたばつかりに。御使の越度ぢやと爺樣の御勘當。なんと可內。御詫びの願ひを一統に。して見る心はないかいやいと。地文彌おろおろ涙惣々が。啜上げたる水涕も。忠義のはしと。フシ殊勝なり。地かくと漏れ聞く一間より。孫市が妻の雪の谷。我が子の手を引きしとやかに。出づる姿もおのづから。思ひある身の打萎れほんに主なり家來なりと。思うて優しい其方達が志。聞く嬉しさにいとゞ猶。悲しき夫のお身の末。どうなる事と自らが。心の内を推量して給やいのうとありければ。腰元はじめ士卒ども。フシ顏見合せて詞なし。地娘松代は母の顏。打詠め／＼。

詞コレ申し母様。おまへは何をむづかるぞ。同じ様に皆迄も何を泣きやる。早う父様や弟の重若を呼びまして來てくれやい。此間の清書をお目にかけて。譽めて貰ひたいわいのう。ヲヽ譽めて貰ひたからう。そなたよりこの母が逢ひたさは山山。暫しが間も母の傍。得離れぬあの重若。地定めて泣いてばつかりゐるであろ。可愛いの者やと喰ひしばり。泣く音を包む雪の谷が スエテ心の内ぞ。せつなけれ。襖の彼方に重成が高らかに咳拂ひ。扨は舅君のお出でなるぞと。いふに心得腰元が。席を下れば雜兵ども。フシ地に鼻つけてかつ跪ひ。地待つ間程なく悠然と。立出づる醋喜多の頭。不興氣に邊りを見廻し。詞ヤイ女ばら。此所に用事はない次へ立て。軍卒どもも何をうつかり。要害を賴みに搦め手の守り怠るは一大事。早く罷つて心を付けよ。サヽ行け。地行けと追立てやり 詞イヤナニ嫁女。そなたにも云ひ聞かし。悦ばす事があるてや。アノ私に悦ばす事があると御意遊ばすは。ムヽ夫孫市殿の。ハテさて。又しても不吉者の悴が事。左樣の事でをりない。當月二日の曉に天文の考みし所。東に當つて白氣自然と立昇る。これ則ち敵の大將。春長が腹心と賴む勇者の内に變心の者あつて。事を破るの前表。今日迄口外せざれども數日の籠城。お身も定めて心勞と思ふから。安堵させんため申し聞かす。見よ／＼追付け世を廣う。足利の正統たる慶覺君の御代となさん。何と此上もなき悦びではをりないかと。地未然の察す明智の眼力。こなたは一途に夫思ひよき折からと。フシ摺寄りて。詞イヤもうお嬉しい段ぢやござりませぬ。ガどうぞならう事なら。其白氣とやらが立ちましたが。孫市殿の御掛當が赦りますといふ知らせなら。ほんにどの様に嬉しう存じませうぞ。憚りながら慶覺様と御一所に。どうぞ世に出られます様に。地親御のお慈悲お情でと。いふを打消しアレまだしつこい。詞かゝる目出たき折からに。よしなき癡言聞きたくない。お身も孫を連れて部屋へ行きやれ。エヽ何をぐづ／＼。地早く立ちやれと嚙付けられ。何とせん方投首し娘松代を伴ひて。フシしを／＼立つて入りにける。地跡に重成只一人立上つて通路の鈴。引き鳴らせば一間の御簾。さつと小姓がかかぐれば念誦他事なき慶覺君。重成が晉づれ何事かあるやらんと。仰せにはつと頭を上げ。詞今朝より御機嫌を伺ひ奉らんと存ずれども。敵の朝駈け短兵急に寄せたれば軍配に暇なく。一泡吹せ味方の勝利。攻口を退き候へば。地一息の間と漸う只今御前へ伺候。不禮の段は御高免

と敬ひ。フシ深く述べければ。地誠忠俊父の一人時に合はねば。此程よりの心勞推察せり。詞兄義輝君は三好松永が爲に亡び給ひ。今又我は春長が爲に斯くのごとし。地よしなき命永らへて。萬民塗炭の苦しみといひ。諸卒の命を失はんより。早く我が命を斷ち。表具萬死を救ひ得させよと。御目を閉ぢて稱名を。唱へ給へば重成も君の惠みの有がた涙。胸に押へて氣色を變へ。詞チエヽいひ甲斐なき御仰せ。それ軍は和にあつて衆にあらず。馬洗厩養に等しき尾田の弱兵。何程の事やあらん。地凱歌を上ぐるは瞬く内。君にも知し召す如く。國大なるといへども戰を好めば必ず亡ぶと。詞近くは武田勝頼。父信玄まで其威隣國に。並ぶ者なく猛虎の如く。諸侯も恐れ候へども。地勇に誇り。武に慢じたる太郎勝頼。詞累代の武名も一時に朽ちぬ。春長

とてもまつ其如く。地御心弱くて叶はじと諫め申せば慶覺法師。打頷かせ給ひつつ。重成來れと御座をば立せ給へる其所へ。大息ついで鷺森八郎。御注進と手をつけば。人々いかにと仰せの下。ノリされば候軍は味方の勝利なれども。力責めには叶はじと。數千の車に焼草を積載せて櫓々の其下へ。山の如くに積み重ね。たゞ焼打ちにとナホス云はせも立てず。地喜多頭はつたと睨め付け。詞ヤア馬鹿馬鹿しい。何の寢言。其刈柴こそ身が申付けたる一つの計策。御大將の御前なるぞ。鹿忽の注進。早く立て。地とわざと怒りの一言も知らで鷺森八郎は。拍子拔け。フシ拔け引きかへせば。地いざ御入りと八方に。心を配る重成が。底意を汲みて慶覺君奥殿さして。三重へ入り給ふ。地夏の日の。フシ永きも我を。恨むなる。物思へとや夕暮の。空を。待ちけ

り孫市が。肩にしつかり鎧櫃。オクリ人目を忍ぶ陣笠の。歩にやつしたる俤は。昔に變るスヱカヽリ掛當の。身は猶更に心の隔て。何とせんかた切戸口。ハズミ佇む。フシこなたの茂みより。地色忍び出でたる大の男。あたりうそ〳〵窺ひ足。奥を目がけて忍び行く。後の方より孫市が。曲者やらぬと弱腰を。むんずと組んで引き戻す。詞シヤ猪口才すなと振り解き。地直ぐに拔討ち刄の光。かい潜つて拔合はし。手練の切先はつし〳〵。打合ふ刄音何事と。手燭片手に立出る雪の谷。火影を覆ひ物陰に息を詰めてぞ守り居る庭には二人が上段下段。飛鳥の働き孫市が。難なく曲者斬り倒し。乘懸つて。フシとゞめの刀。地色血おし拭ひ刀を鞘。納める丈夫死骸の懐中。探る手先に取出す一書。さてはと月に透し見て。詞ムヽスリヤ當月二日に春長父子。光秀

が爲に亡びしとな。地チエ、心地よや嬉しやと悦び勇む後には。紛ふ方なき夫の聲。飛立つばかり走寄り。逢ひたかつたと縋りつき フシ嬉し涙ぞ先立てり。地色夫もさすが夫婦の愛情。やゝ打潤む目をしばたゝき。詞誠や飽かぬ夫婦が銘々に。悴を連れて思はぬ離別。父の勘氣を蒙りしも。暴惡非道の尾田春長。約を變ぜし故なれば。何卒彼奴が首討ち取り。親人の實檢に備へなば。勘當詫びの綱にもと。心はやたけにはやれども。地悴重若召連れては。足手纏ひと未練にも。子に引かされて送る月日。鐵砲疵にて臑さへも。思ふに任せぬ不具者。詞武運に盡きし我が身の上。せめて御主君親人のお役に立つて死なんものと。覺悟極まる今日只今。死後に賴むは二人の子供。地心得たるかと夫の詞。聞くに女房が泣出す。そのロ押へて。詞コリヤ親人のお耳に入らば却つて妨げ。イデ悴を手渡しと。地かたへに直せし鎧櫃。蓋取除くれば重若が。母様なうと走出で縋り歎けば母親も。胸に涙の滿潮の引くや血筋と奥よりも。姉の 詞松代が聲聞きつけ。詞お父様のお歸りか。重若も戻つてか嬉しい〳〵。早う遊ぼと 地手を叩き悦ぶ姉弟雪の谷が。膝に引き寄せ聲くもらせ。詞ヲヽ嬉しかろ〳〵。何ぼう其樣に悦びやつてもの。久しぶりでお目にかゝつた父樣は。腹を切らねばならぬといのう。コレ孫市殿。これを見てかいのう。何にも知らぬ二人の子供。お前は可愛うござんせぬか。地此姉弟をふり向けて。死ぬる覺悟を極めたとは。餘り氣强い胴欲な。武士が立つても廢つても。死なさぬ〳〵死なさぬと。かき口說くのも。忍び音にフシ奥へ。憚るうき涙。道理と知れど聲に角立て。詞ヤア未練至極の其吠頰。弓矢取る身の切腹は此身の本懷。今計らずも寄手の大將。是角六郎を討つて捨て。懐中の一書を見れば。都本能寺に於て春長父子。光秀が爲に討死と。春孝よりの報知の密書。地此騷動に寄手の奴原。一旦圍みは開くとも。再び寄せんは必定たり。危急を救ふはこの孫市。君と父との命にかはり。首を則ち久吉が陣所に送り和を乞はゞ。元より寛仁大度の眞柴。よもや違背は致すまじ。詞使は悴重若丸。豫て認め置いたる一書。斯くまで思ひ込んだる某。妨げなす不所存者。コリヤ〳〵二人の子供爰へ來よ。姉弟ともに父が子か又母が子か。云うて聞かさば賢い者と。地撫でつさすりつ尋ぬるも。胸に無量の思ひある。心は知らで弟の重若。詞コレ父樣。私はお前の子でござるわいの。何ぢや父が子ぢや。ヲヽよくいつた出かしたなア。サヽ姉の松代はどうぢや

どうぢやと。地問へど年だけうぢ〳〵とフシ母に氣兼の云兼ぬれば。詞ム、返事のないは母が子か。我が子でなくば出てうせうと。地叱り付けられ泣く〳〵も。詞何の母様の子ぢやござりませぬ。と、様の子でござります。スリヤ其方も我が子とな。ヲヽよく云つた出かしたなア。父が子ならば。身が云ひ付ける事背きはせまい。アノ親の云ふ事聞かぬ者は不孝者ぢやと母様が常々からのお叱り。どんな事でも聞きまするなら重若。そなたもいふ事聞きやるかや。アイよう云ふ事を聞くわいのう。ヲヽ扨々うい奴。然らば申付ける役目がある。今父が此短刀を腹へ突立てたらばな。コヽ此刀と脇差にて身が首を引切り。此一書を添へて久吉殿へ持參せば。此上もなき孝行者。合點がいたかと　地細やかに。云ひ教ゆれば驚く母。睨付けられくひしばる親の心は知らぬ子の。譯も七つ子重若丸。詞そんなら父様の首を此脇差で切ると。孝行になりますかや。ヲヽなるとも〳〵。日本一の大孝心。コレ姉様も合點かや。サア早う腹切つて下されと　地いふに堪らず母様が。我が子引退け。詞エヽ忌はしい子供ではあるわいのう。コレ孫市殿。いかに望みが立てたいとて。何辨へない此子供に。親を殺せと教へる人が。又と世界にあらうかいのう。地夫や我が子を安穏に置きたいばつかりに兎や角と。心を盡す女房を思はぬ仕方情ない。親の別れも身の科も辨へ知らぬ佛様。鬼にせうとは胴欲なせめて此子が生先を。見屆ける迄生きて居て下さりますが親の慈悲。賴むわいのとばかりにて譯も。詞も涙川膝に漲る風情なり。詞ヤア益なき繰言聞きたくない。三千世界に子を思はぬ。親があらうか白癡者。左程悴に此首を討たし難く思ひなば。子供に代つて介錯せよ。サアそれは。得心なくば緣切らうか。ぢやというて是がマア。ヤア未練至極の其吠え頰所詮介錯思ひも寄らず。見下げ果てたる女めと。地取つて引寄せ提緖の早繩。庭木の杉にしつかりと　フシ結ぶ妹脊の亂れ口。文彌こがるゝ其身は梢の猿。腸を斷つ憂き　ナホス思ひ。タヽキ母の有様見るよりも。二人の子供はおろ〳〵顏。詞コレ〳〵松代。重若も父様の兩の手に取付いて居やや。必ず放して給るなと。地あせれど夢か。フシ現なき。地夫は今を最期ぞと。諸肌脫げば弟の重若。詞父様もうかや。ヲヽサ今が親への孝行時と。地云ひつゝ短刀我が腹へぐつと立てゝはつと散る。唐紅に目も眩み心も消ゆる雪の谷が。闇路を辿る思ひにて。フシ正體。もなく伏沈む。地歎きの折も一間より。詞ヤレ悴其刀引廻すな。云ふ事あり

と父重成。地しづ／＼と立出で。詞ホヽ、適れ忠臣よくしたり。今こそ勘當赦してくれる。是を此世の思出に。心靜に最期をとげよ。とは云ひながら二人の孫。親の死別も夢現。さぞ成人の其後は。歎くであらう悔み居らうと。思へば不便彌増して。地我は老木の末近く。便りとするは母の親。むごい祖父ぢやとコリヤ恨んでばしくれるなよ。詞我とても骨肉の悴を見殺す胸の内。どの樣にあらうと思ふぞいやい。地チエ、是非もなき次第やと。胸に湯玉の涌返る。親の思ひの有難涙見上げ。見おろす フシ一世の別れ。地手負ひは涙押止め。詞ハヽ、有難き父の惠み。忠孝全く望みは足りぬ。サア重若松代。最前父が申付けたる役目は只今。サ早く。早く／＼。コレ／＼必ず切るまい。切つたらば母が灸を据ゆるぞやと 地脅せばさすが子心に。控ゆる手先。詞ヤア

詞背くと子でないぞ。エヽ、父樣の御用を聞くと母樣が呵らつしやる。その母樣はあの樣に縛られて居やつしやる。コレ重若。かゝ樣のアノ繩を解いて上げてたもいのう。サアそれでもあの樣に白眼しやるもの。ヲヽ、何ぼう呵らしやつても大事ない。この繩解いて給いのう。コレ申し舅御樣。同じ樣に脇見せずとなぜ止めて下さりませぬぞ。現在孫を親殺しにするが情か慈悲かいのう。地此繩といて下されと。賴む嫁より賴まるゝ。舅が胸の苦しさを。堪ゆる辛さ澁面は。涙に フシ増る思ひなり。地色斯くては果てじと孫市は。我が子の腕先持添へて。しつかと當つれば頑是なく。ともに力身で。詞とゝ樣斯うかや。ヲヽ、さうぢや出かす。地出かすも一世の別れ。二世の名殘と雪の谷が。消ゆる間を待つ夫の命。神も佛もない事かと。亂るゝ心亂れ髮血汐爭ふ血の

涙。上には父が稱名の。聲諸共に。鈴の音。慶覺君は他念なく。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛の回向の。恩德廣大。不思議にて往相回向の利益には還相回向に回入せり。聲は如來の迎ひぞと。えい／＼／＼と孫市が。フシカヽり首は前にぞ落ちにけり。わつと恐れて飛退く子供。母は其儘打倒れ。スヱテ前後不覺に。泣き叫ぶ。地始終見屆け重成が。目に持つ涙押拭ひ。詞ハヽ、生者必滅の理今目の前に見るも夢。せめて夫の切首に。地暇乞ひをと立上り。フシ繩解きほどけば雪の谷は。其儘首にしがみ付き。詞覺悟故とは云ひながら。いとし可愛の姉弟に。嘸や心が殘るであろ。魂魄去らずば今一度。物云うてたべ孫市殿。地我が夫ならうと押動かし。盡きぬ名殘の百千行。聲を限りに泣き叫べば。詞ヲヽ、其歎きは理ながら。主君へ忠死の悴が功。

出かしをつたと譽めそやす。親が心を推量せよ。地不便とばかり詞數。いはぬ心のせつなさを。思ひやつたる雪の谷が。正體涙の聲を上げ。詞家を忘れ身を忘れ討死するは武士の。習ひと覺悟しながらも。得諦めぬは女だけお赦しなされて下さりませ。地永い別れと知らぬ子の常の遊びか何ぞの樣に。親の首をばむごらしい。詞切るが手柄になるといふ敎へは外に情ない。地如何なる宿世の報いぞと口說き立てたる恩愛の。心は一つ重成も。瞬き繁くはら／＼／＼。涙は雨か夕立の。フシ車軸を。飛ばす如くなり。地色折しも吹來る風に連れ響く。貝鐘攻鼓。又も敵や寄するかと。驚く雪の谷騷がぬ老人。思ひがけなく彼所より。詞足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲。中川淸秀參上せりと 地呼はり／＼。フシ入來る淸秀。地喜多の頭はくわつとせき立ち。詞ヤア和議を破りし無道の春長。其祿を喰む中川瀨平。納め過ぎたる上下衣服。御迎ひとは何の癡言。ホヽ一旦の憤りは尤も至極。此度の合戰は御舍弟春孝殿。事を計りし禮を亂す。さるによつて眞柴久吉。內意をもつて立越えしは。密に都へ供奉せん爲。地早や御用意といはせも立てず。詞逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子。知るまいと思ふかや。石山方に名を得たる鈴木喜多の頭重成。眼は日月。及ばぬ事をと フシきめつくれば。地淸秀猶も詞をつくし。詞成程推量の如く當月二日。都本能寺に於て主君の橫死。愁ひに沈む我々。僞りのあるべきや。とりわけ子息孫市殿。死を以て久吉殿へ願ひの一條。地今より一子重若丸父の忠義を頭に戴き。二代の鈴木孫市と名も改まる兩家の和睦。詞慶覺君の御本願照すも法の道廣く。やがて目出たき榮えをと 地情の詞に疑念も散じ。ハヽ誤つたり／＼。詞斯程厚志の眞柴中川。忰が願ひ我が君の。法の門出一時に開け。此上もなき我が悅び。コレ／＼嫁女。孫が手柄は二代の忠臣。歎きの中の悅びと。地舅の詞聞くにつけ。いとゞ涙に雪の谷が應答も フシ更に泣くばかり。地フシ早や御立ちの刻限と。追々警固の諸軍勢。コハリ見るより重成手を打つて。詞萬事に馴れし淸秀殿。イデ我が君へこの樣子申上げんと立上れば。イヽヤ聞く迄もなし。とくより慶覺これにありと 地しづ／＼と立出で給へば。はつと恐るゝ二人の勇士。慶覺君は御衣の袖絞り給ひていかに方々。詞孫市が忠死により萬死を出でしも佛の惠み。久吉が情の計ひ。又淸秀とやらんが志。地過分至極と宣へば。淸秀なほも敬ひ深く。詞コハ有難き君の御諚。此上は御心置きなく早や鷄鳴に程近し。いざ御發駕

と地勸めに君は。フシ下り立ち給へば。詞ヤレ暫く。御門出を壽ぎの孫めが一さし。御上覽に入れ奉らん。嫁女。常常敎へし扇の一手早く。早くと舅の詞。地フシ涙ながらに。タヽキ取上ぐる。鼓の調べ重若が。詞祖父樣。謠をうたうてやと。地扇をしやんと。身の備へ。舞あら目出たや末廣の。君の榮えは。謠萬々歲と祝しけり。拍子につれて稚子の奏で。祝する末廣の。其一曲は末の世に。名を止めたる鱸が踊り。フシ因緣斯くと知られたり。地いざ御立ちと淸秀が。詞に。ふり出す。行列の。おさへは二代の鱸孫市。武士の鑑となる鐘の音諸共にあけて行く。夜もしら／＼と白鷺の森を離れて。飛び交ふも。君の榮えを白鳥の。神の擁護と勇み立ち都の。空へと 三重へ供奉しけり

同　八日の段

地憫むべし。英雄の武將刄の霜と消えて行く。內大臣春長公今日一七日の大法事と。老若男女別ちなく。フシ參詣群集を當てにして見せ物。輕業力持ち戰國の世も下々の。フシ身過ぎに變りなかりける。地所の百姓引連れてのさ／＼來る陣張甚助。茶屋が床几に腰打ちかけ。詞ヤレ庄屋太郎作とやら。此度尾田春長の法事は。主人武智左馬之介樣の御指圖。情を以て萬事御宥免あれば。付上がりのした百姓ども。誰が赦して。輕業ぢやの。イヤ曲持のと。仰々しい振舞ひ。外は格別。當村は此陣張甚助が支配。立てうと伏せうと身ども次第。小家掛け茶屋に至る迄。今日中に取拂へと。地主の威光に肩臂張り。フシさも橫柄に罵れば。地庄や太郎作頭を搔き。詞其お腹立は御尤もでござりますれど。又しても／＼。エイエイわあで村々は亂が騷ぎ。此頃武智光秀樣。將軍とやらにお成りなされ。少しこゝら近邊は穩か。其悅びの參詣群集。せめて四五日御用捨をと。地いひつゝ腰の早道より。取出す小錢茶碗にうつし。マアお一つと差出せば。手に取上げて悔りし。睨んだ眼は何所へやら。ぐわらりと フシ變る機關的。詞へ、、、、ハ、、、、イヤなに庄屋。ソリヤ何かいやい主人光秀公が天下を知し召す。其御悅びとあれば苦しうない／＼。輕業なりと。唐の芝居なりと勝手次第。拙者元來茶が好きだが。大服にして換へてくれる氣はないかと。地肩からはえた。爪長代官。百姓どもは口揃へ。地何がさて／＼。何杯なりと御遠慮なしに。お換へなされて下さりませ。然らばどうぞ今一ぱい。所望所望と差出され。地めい／＼紙入れ巾著

を淩へて漸う八分目。フシ些少ながらと差出せば。詞これは〳〵重々の御馳走。いやもう此お茶さへ下さらば。少々は拙者の頭で。土佐踊りなされても苦しからず。用事あらば承らん。必ず心置かれなと。地慾に目のないにこ〳〵笑顏。サアしてやつたと百姓ども。庄屋を先に立上り。詞又もや御意の變らぬ內。代官樣へ差上ぐる。地出端の錢を儲けうと。挨拶フシそこ〳〵。立歸る。地あとに甚助只一人 オクリ燻らす。煙草の煙より胸に。思ひの フシカヽリ絶間なき。タヽキおこぶは後にもぢ〳〵うぢ〳〵。ドリヤまからうと立上り。歩みかゝればこらへ兼ね。申し〳〵と呼びかくれば。甚助あたりを見廻して。詞ハテ心得ぬ。柳の小陰より申し〳〵と呼びかけるは。夜鷹さんかいな。アイナ。あいなと走り出で。地恥かしさうに縋付き。いはんと フシすれど

赤らむ顏。地甚助はためつすがめつ。おこぶが姿を眺め入り。詞見れば本肉の仕事盛り。身どもに取付きこだれるは。仔細ぞあらん物語れ。つひに見えぬ衒妻殿と。地いはれて漸う顏を上げ。詞エヽつひに見ぬとは聞えませぬ。地去年の五月の夕まぐれ。道頓堀の奈良茶屋で。思ひ初めたが緣のはし。丸寢の。盃屋は丸清の二階。千年も萬年も。變らぬ契り龜竹の節々までが萎る程。半仲快かつた床の海。音はぎし。〳〵。岸本や人の噂に鳴戶屋を。ほんに嬉しの森新で。私や悅んでゐるものを。それにお前は揚物屋の荷箱か大正の鰻の樣に。ぬらくらとしたぬめた樣。ナホス忘れゐるとは餘りな。聞えぬわいなと取りついて恨みのたけを口說き立て。吸上げたる有樣は。達磨の畫像に野良猫の フシそばへかゝりし。ごとくなり。地甚助道理と背撫でさすり。詞一々

心に覺えの合ひ紋。顏見忘れたは惡かつた。幸ひおれも徒然の砌。アノ水茶屋へサアおぢやと。地いはれておこぶもぞつく〳〵。渡りに船と帆柱を。かゝへて戀の港入り。フシ打ちつれ立つて歩み行く。地フシ流るゝ水の。音さへも。物騷がしき戰國に。行儀亂さぬ生立は。武智が一子十次郎人目を忍ぶ深編笠。フシ松原傳ひに步み來て。地有合ふ床几に腰打掛け。詞ハアヽ思ひ廻せば恐ろしき世の亂れ。地昨日の君臣は今日の怨敵。親は子を討ち子は親に。刄を合す修羅の巷。是非もなき世のスヱテ有樣と暫し思ひに惱みけり。地漸う心取直し。父光秀が刄にかかり空しくならせ給うたる。春長公の靈前へ。御許容なくとも後世の爲。フシイデ拜せんとさしかゝる。地道を遮る陣張甚助。家來引具し大音聲。詞ヤア主殺しの武智が悴そこ動くな。汝が家來と僞り

し某こそ眞柴方。久吉樣への奉公始め腕を廻せと犇めければ。ハヽヽ久吉方へ裏切りの二股武士の甚助め。腕立して怪我まくるなと。股立　フシ取つて身構へたり。詞ヤア猪口才な小童め。物な言はせず討取れと。地いふより早く一同に切つてかゝりし刄の稻妻。フシ暫し時をぞ移しける。地いらつて切込む甚助が刄物からりと打落し。付入るさそく十次郎。フシ切伏せ〱とゞめの刄。地相手なければこれ迄と衣紋。繕ひ刄を鞘。納める不敵の十次郎。是より直ぐに婆樣の。御隱居所へ發足し。此身の出陣お願ひ申し。敵の奴原駈立て。薙立て寄手を悩まし。屍は修羅の巷に曝し。武士の本意を達せんと勇み立つたる若木の花。タヽキあたら盛りの春も見ず憂きを。都の假住居跡に見なして　三重

同　九日の段

地德は咎徹に勝ち仁は凶邪を除くとかや。されば眞柴久吉中國の大敵を攻め討たんと。水を以て手をぬらさず忽ち和睦相調ひ。大物の浦に　フシ著陣ある武名の。程ぞ類ひなき。地加藤正清進み出で。詞信長といふ鬼の再來と。怯ぢ恐れし春長公を討取つたる逆賊の武智光秀。一時も早く都に攻入り。捻り殺すが君へ追善。地早や御用意とせり立つれば。久吉莞爾と打笑ひ。詞今に始めぬ淸正が勇言ヲヽ心地よし〱。さりながら此久吉中國に發向せば。都に足を入れぬ内伏勢を以て討取らんと。武智が結構顯然たり。迂潤に上京なす時は過つて死地に入らん。必ず油斷致すなと。地軍慮に敏き久吉が詞にあつと諸軍勢。フシ英智を感ずるばかりなり。地色折節ひよか〱濱づたひ。

フシ藁畚片手に百姓長兵衛。旅僧一人引連れて　フシ咄し交くら行過ぐる。地軍兵どもは聲をかけ。詞ヤイ〱土民蛸坊主。眞柴筑前守久吉樣の御前とも憚らずのさばり歩く横道者。控へをらうと咎められ。ア、そんなら久吉樣はそこにござるか。お坊爰ぢやとやい。ヤレ〱嬉しや〱。マア一服しませうと藁畚どつさり　フシ高胡坐。詞ヤイ〱まだぞんざいな蛆虫めら。アヽコレ〱〱其樣にけん〱いはんすな。久吉樣のお目に掛つたら。さつぱり譯が分るものぢや。ナウお坊。成程左樣。大坂今里村の長兵衛。江州の觀音寺の僧顯穴が參りましたと。おつしやつて下さりませ。ヤア長兵衛でもけれん穴でも。對面なさる用事はない。きりきり立てと爭ふ軍卒。地眞柴久吉御聲かけ。詞某に對面せんとは仔細ぞあらん。地これへ通せと御仰せ。ハツト恐れて雨

人を。フシ君の御前に誘へば。地久吉二人を見下し給ひ。フシ終に見馴れぬ其方達。仔細如何にとありければ。ハ、、、。テモ扨も物覺えの悪いお人。わたしを見違へてござるかいの。ソレア、いつやらの事であつた。今川とやら庭訓とやらいふ大将に負けさつしやつて。春長様と二人連でこちの内へ逃込ましやつたを。お世話申した今里の長兵衞でござりますわいの。ハイ／＼愚僧は前方江州の山寺觀音寺の住職致し居りました時。岸田村の百姓の息子。岸田太吉といふ者を私が小姓にして置きました時にあなたがお立寄り遊ばしまし。其小姓に御茶を汲ましたらお目にとまり。綺麗な小姓ぢや。此方へおこせとおつしやる故。二言となしに若衆を獻じた獻穴と申す者。様子あつて只今は今里村に侘住居。あんまりお懐しいやら又はお願ひの筋もあり。わざ／＼これなる長兵衞殿と同道で參りしと。地高座馴れたるしら聲張上げ。フシ汗押拭ひ語りける。地久吉は打頷き。詞成程聞けば一々覺えのある事。兩人とも無事で重疊。シテ汝達が願ひの筋は。アイヤ外でもござりませぬ。知つての通り本能寺で春長様をころりといはした武智光秀。昨日から俺が在所へ陣を取り先手の衆は京街道に出張してお前様を殺すとの謀。憎さも憎し。お馴染みのお前様。武智に討たすは殘念なとこのお坊との咄合ひ。そこで俺が一生にない智慧を振ひ出し。お前様をそつとおらが在所へ連れて往んで。思ひがけなう光秀めをころりといはしてこまさうと。わざ／＼迎ひに來ましてござんす。サア／＼／＼一時も早う用意して。武智を討取る魂膽さしやませ。ほんに又忘れた事があるわい。久しぶりでお目にかゝつた。地土産はこれと藁苞よりこて／＼取出す瓜二つ。詞コレこれは俺が空地に出來た眞桑瓜。切つて食つて下さりませと。地自慢らしげに差出せば。詞ヲ、あけ地に出來しを切つて喰へとは幸先よし滿足々々。殊更汝が光秀を手引きして討たせんとは天晴れ忠臣出かした／＼。恩賞褒美は兩人とも。望みに任せ得さすべしと　地仰せに悦ぶ兩人より。勝色見する味方のどよみ。フシ皆勢ひを添へにける。地かゝる折しもかたへに竝ぶ稻村より。鬨を作つて武智の軍卒。久吉やらぬと切つてかゝれば。加藤正淸。詞シャ猪口才な虻蠅ども。地目に物見せんと大太刀拔いて切りかくるを。受けつ流しつ亂軍の。互に鎬を削り合ひ。フシ濱手の方へ戰ひ行く。地兩人は立つて居つ。詞こりやえらい大騷動。怪我のない内久吉様。サア／＼ござれと先に立ち。地歩む兩人明智の久吉出で行く

僧を引戻し。ぐつと一締めかたへに投退け。詞百姓長兵衛とは僞り。誠は武智光秀の舊臣四王天田島の頭。止れやつと聲掛けられ。地頭巾掻ぐりぐつと詰掛け。詞さすがの久吉よく察した。汝を僞り誘き寄せ討取らんと計りしに。見顯はされて殘念至極と　地いふより早く藁苞に。隱せし業物抜放し。久吉目がけ切付くれば。ソリヤ遁すなと軍兵ども。群り寄つて突つかゝる。鑓の穗先は篠薄。薙立て〳〵切結ぶ。勇猛不敵の四王天。乾達婆王の荒れたる如く突伏せ切伏せ駈上れば。あしらひ兼ねたる眞柴方。フシ度を失うて見えにける。地久吉も心を配り味方の勝利覺束なしと。有合ふ僧の袈裟衣手早やに取つて我が身に著し。馬にひらりと飛乗つて。濱手の方へ只一騎駈出す向うへ四王天。それと見るより繰出す穗先。得たりとかはし逸散に駒を早めて駈け行く。ヤア汚し返せ猿冠者めと跡を。慕うて。三重へ追うて行く。地田畑畔道嫌ひなく追驅け追詰め四王天。額に無念の息煙立ち勢ひ込んで駈け廻る。遙かにそれと加藤正淸躍り上つて田島の頭。觀念せよと切込む太刀。心得たりと　コハリ渡り合ひ。雙方劣らぬ勇猛力火花を散らして戰ひしが。ナホスいらつて打込む正淸が凡人ならぬ希代の切先。あしらひ兼ねて四王天漂ふ所を切伏せ〳〵。主人の安否氣遣ひと跡に。三重カヽリ見なして　フシ走り行く。地さしも勇氣の田島の頭。數ケ所の深手に蹌ひ〳〵。チエヽ殘念や。斯く迄手に入る眞柴久吉討洩らし。それのみならずむざ〳〵と。名ある勇者の首をも取らず。討死するか口惜しやな。思ひ廻せば廻す程。運の強き猿冠者め。此土をはづれいつか又彼奴を討取る期やあらん。地無念々々といひ死に。こゝに名のみを殘したる。田島の頭が身の果ての哀れなりける　三重

同　十日の段

詞南無妙法蓮華經〳〵〳〵。地フシ御法の聲も媚きし尼が崎の片邊り。誰が住む家とゆふ顏も。おのが儘なる軒のつま。あたり近所の百姓ども。茶碗片手に。フシ高咄。詞なう婆樣。こな樣も見たところが。上方で歷々のお衆さうなが。何の爲に面白うもない此在所へはござつたぞいの。アヽコレ〳〵甚作そりや言やんな。京の町は武智といふ惡人が。春長樣を殺して大騷動。大かた又下へ下つてゐやしやる久吉殿が戾つて來て。武智と是非に一合戰なけりや濟まぬわいのう。そんなら年寄はうか〳〵京の町には居られぬ兎角危げのない樣にこんな在所へ來てゐるが大出來〳〵。時に近付きがてら妙見講

を勧めるとはよい手廻し。大きな馳走に逢ひました。これから随分お互にお心安う致しませう。地サア〳〵往なうと口々に。いひたい事をたくしかけ。フシ喋り廻つて歸りける。地老母はつど〳〵門送り小オクリ庭の千草に打つ水も ハズミたもつ葉毎に。風かをる。軒を目當てに。來る人は武智が閨に咲く花の操の前は家來を遠ざけ。嫁の初菊伴うて窺ふ切戸の庭先に。フシ花に心を。養ふ老女。地それと見るより手をつかへ。詞後室。様の見舞として。只今參上致せしと。地慇懃に相述ぶる。詞に老女は打笑み。詞ヲヽ珍らしい嫁女孫嫁。遙々の道ようこそ〳〵。さりながら悴光秀。當月二日本能寺にて。主君を害せし無法者。同じ館に膝並ぶるも。先祖の恥辱身の穢れと。地館を捨てて此在所へ身退きし此婆を。詞見舞とはをこがましい。善にもせよ惡にもせよ。

夫に付くが女の道。操の前は武智十兵衛光秀が妻。そなたは又孫の十次郎光義が嫁でないか。生死わからぬ戰場へ。地赴く夫を打捨てて浮世を捨てた姑に。孝行盡すは道が違ふ。詞妻城に留まつて。留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦暮しの樂しみには。夕顔棚の下涼み。地捨つべき物は弓矢ぞと。いひ放したる老女の一徹。フシ跡は詞もなかりけり。地常の氣質と逆らはず。詞いかさま後室様の仰やる通り。此様に只お一人でござつたら。何もかも氣散じで。マア第一はお身の養生。地今から私も初菊も後室様のお傍に居て。飯も焚いたり茶も沸し。お宮仕へをせうぞいのと。有合ふ前垂れ打掛の上に引締め茶釜の傍。端香の籠る姑の。しぶ〳〵機嫌を取兼ねる娘心に初菊も。マどう濟む事か濁り井の。深き奇緣の釣瓶縄。フシ水汲み上げんと立寄れ

ば。詞コレ〳〵嫁達。シテ孫十次郎は。城に殘つて居めさるかされぱでござります。十次郎が願ひには。どうぞけふの軍に。高名手柄が顯はしたいと。父上迄は願ひしかど。婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし。母に取次してくれと。くれ〴〵の願ひ故。地餘り健氣さ祖母様に御機嫌の程いかゞぞと。伺ひに參りましたと語る內。老母は涙をはら〳〵と流し。詞ヲヽ煩さの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の 邪 非道の軍の評定。聞くが厭さの此住居。ガ又孫を譽めるではなけれども。非道な悴光秀が子に。十次郎といふ武士が。生れて來るとは是も因緣悔んで返らず。戰場の事聞きたうない。アいや〳〵情なの浮世やと。地無量の思ひ百八の。フシ數珠爪繰つて居たりける。地色折節表へ草鞋がけ。風呂敷背に息せき蛙飛込む道の邊の オクリ清水。掬ばん夏

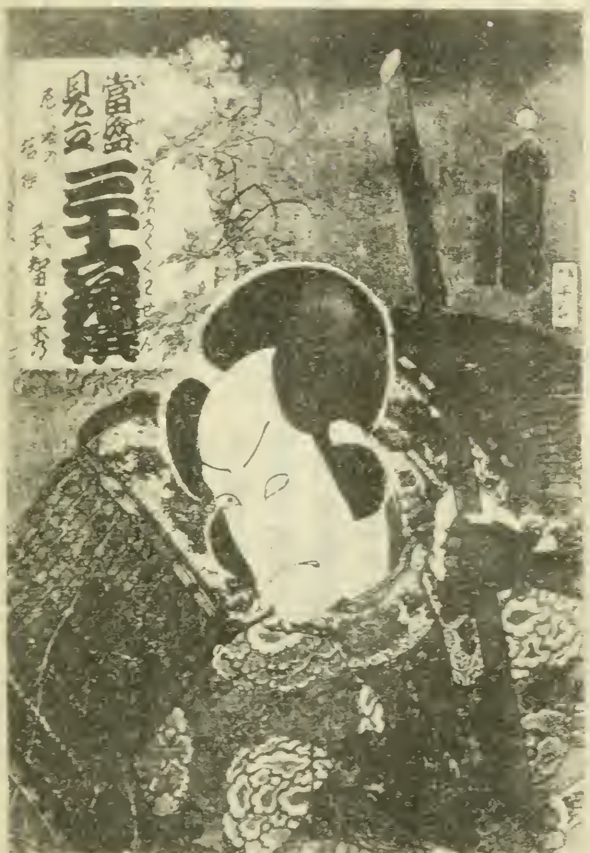
の旅。西行もどきの僧一人　フシ門口に立ち休らひ。詞諸國修業の一人旅。近頃申し兼ねたれど御宿の報謝に預りたし。地押付けながらといひ入れる聲を老母が聞取つて。詞見苦しうござりますれど。お心置きなう御一宿。それは千萬忝ない。左様ならば御遠慮なしに御免。地御免とあがり口腰打ちかくれば二人の女。草鞋の。フシ紐を解きかくれば。詞アヽ勿體ない〳〵。構うて下さりますな。旅しつけた坊主の氣散じ。木納屋の隅でもついころり。蚊帳も蒲團もいりませぬ。お心遣ひ御無用と。地詞半へ表口。人目を忍び只一騎。窺ひ立聞く武智光秀。心得がたき旅僧と。生垣押分け差覗き。思はず見合す母の顏。老母は何か心に點頭き。詞ヲヽわしとした事が心の付かぬ。コレ御出家様。此板圍ひが則ち風呂場。水は幸ひ汲んであり。ついぼや〳〵と燃して。暑い時分ぢや行水して休んで下さりませ。婆も跡で相伴しませう。アヽイヤそれには及びませねど。相伴とあれば沸しませう。そんなら御免なされませと。地包み提げ氣散じに。フシ湯殿をさして入りにける。地味方の軍卒兩手をつき。詞御子息十次郎光義様。後室様に御願ひの筋ありと。只今是へ御越しと。地いふ間程なく靜々と。家來に持たせし鎧櫃。フシ舁入れさせて打通り。詞コリヤ〳〵者ども其方達に用事はない。陣所へ早くと追つ立てやり。地威儀を正して兩手をつき。詞母様を以て御願ひ申せし出陣。御聞屆け下されなば。地武士の本意と十次郎思ひ　フシ込んでぞ願ひける。地老母は見るより機嫌顏。詞ヲヽ珍らしい十次郎。出陣の願ひとな。悴を見限り此所へ。身退きしに叮嚀な願ひの筋。最前嫁女に詳しう聞きました。とても出陣しやるなら。祖母が願ひはこの初菊。今宵この家で祝言の。盃してから門出しや。何と嫁女嬉しいか。地と老の詞に初菊は。飛立つばかり氣もいそ〳〵。心の悦び穗に出づる。顏は上氣の夏楓色も媚めくばかりなり。地色只默然と十次郎。今日初陣に討死と。覺悟極めし此體。お暇乞ひに參りしと。知らせ給はぬ悲しやと　本フシ涙。呑込み忍び泣き。地色操の前も立上り。祖母様の御機嫌の變らぬうちに固めの盃。詞ヲヽそれ。孫も大かた心せき操は九獻の用意しや。十次郎が初陣の。鎧の役はすぐに花嫁。地三國一の悲しみと。知らぬ白歯の孫嫁が。手を引連れて。三人は　オクリ奥の一間へ入りにけり。地殘る莟の花一つ。水上げかねし風情にて思案。投首萎るゝばかり　フシ漸う。涙押止め。詞母様にも祖母様にも。これ今生の暇乞ひ。此身の願ひ叶うたれば。思ひ置

く事更になし。地十八年が其間御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思召し分けられて。さき立つ不孝は赦して給べ。詞二つには又初菊殿。まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ。わしが事は思ひ切り。他家へ縁付きして下されと。孝と戀との思ひの海隔つ一間に初菊が。立聞く涙轉出でスヱテわつとばかりに。泣出せば。地はつと驚き口に手を當て。詞ア、コレ〳〵聲が高い初菊殿。扨は様子を。アイ。殘らず聞いて居りました。地夫の討死遊ばすを妻が知らいで何とせう。二世も三世も女夫ぢやと思うてゐるに情ない盃せぬが仕合せとは。聞えぬ光義様。祝言さへも濟まぬ内討死とは曲がない。わしや何ぼうでも殺しはせぬ。思ひ止つて給はれと縋り歎けば。詞ア、コレ此方も武士の娘ぢやないか。

十次郎が討死は豫ての覺悟。祖母様に泣顔見せ。もし悟られたら未來永々縁切るぞや。エヽ。サアとかういふ内時刻が延びる。其鎧櫃こゝへ。〳〵。アイ。アイ。サア早う。時延びる程不覺の元。聞分けないと呵られて。地いとしい夫が討死の。首途の物具付けるのがどう急がるゝものぞいのと。タヽキ泣く〳〵取出す緋縅の。鎧の袖に降りかゝる。雨か涙の母親は。白木に土器白髪の姿。長地長柄の銚子蝶花形首途を祝ふ熨斗昆布オクリ結ぶは。親と小手臑當。六具固むる三々九度。此世の縁や割小札。猪首に著なす鍬形の。あたり眩ゆき出立は。爽かなりし。フシ其骨柄。詞ヲヽ適れ武者振り勇ましし。高名手柄を見る様な。祝言と出陣を一所の盃。サア〳〵早う。目出たい〳〵嫁御寮と。地悦ぶ程猶いや増す名殘。こんな殿御を持ちながらこれが別れの盃かと。

悲しさ隠す笑ひ顔隨分お手柄高名して。せめて今宵は凱陣をと。跡は得いはず喰ひしばる。胸は八千代の玉椿散りて。はかなきフシ心根を。地色察しやつたる十次郎包む涙の忍びの緒フシしぼり。かねたるばかりなり。フシ哀れを。こゝに吹送る。風が持てくる攻太鼓。氣を取直し突立ち上り。いづれもさらばといひ捨て。地思ひ切つたる鎧の袖ハズミフシ行方知らずなりにけり。地ナウ悲しやと泣入る初菊。母も操も顔見合せ。詞ばゝ様嫁ン女。可愛いやあつたら武士を。むざ〳〵殺しにやりました。ナウ初菊。十次郎が討死の出陣とは知りながら。なま中止めて主殺しの憂き死耻を曝さうより。健氣な討死させん爲。地祝言によそへて盃をさしたのは。暇乞ひやら二つには心殘りのないやうと。思ひ餘つた三々九度。ばゝが心のせつなさを推量しやとばかりに

て。始めて明かす老母の節義。聞く初菊も母親も一度にどうど。伏しまろび。フシ前後。不覺に泣き叫ぶ。地色襖押明け何氣なうつか〳〵出づる以前の旅僧。詞コレ〳〵かみ様。風呂の湯が沸きました。どなたぞおはひりなされませと。地いふに此方は泣顔隱し。詞ヲ、それは御苦勞ながら。年寄に新湯は毒。跡は若い女子ども。マアお先へ御出家から。いかさま湯の辭儀は水とやら。左様ならば御遠慮なし。お先へ參ると 地立上れば。三人は涙押包み 本フシ奥の佛間と湯殿口入るや。月漏る片庇。爰にかり取る眞柴垣。夕顔棚の此方より。顯はれ出でたる武智光秀。必定久吉此内に忍び居るこそ究竟一。只一討ちと氣は張弓。心は矢竹藪垣の。見越しの竹を引つそぎ鑓。小田の蛙の啼く音をば止めて敵に悟られじと。差足拔足。フシ窺ひ寄り。聞ゆる物音心得たりと突込む手練の鑓先に。わつと玉ぎる女の泣聲。合點行かずと引出す手負ひ。眞柴にあらで眞實の。母のさつきが七轉八倒。詞ヤアこは母人かしなしたり。地殘念至極とばかりにて。さすがの武智も仰天し フシたゞ忙然たるばかりなり。地色聲聞付けて駈け出る操初菊諸共走り出で。ナウ母様か情ない。此有様は何事と縋り歎けば目を見開き。詞歎くまい歎くまい。内大臣春長といふ。主君を



害せし武智が一類。かく成果つるは理の當然。系圖正しき我が家を。逆賊非道の名に穢す。不孝者とも惡人とも。譬へがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲。地主君を討つて高名顏。天子將軍になつたとて。野末の小家の非人にも。劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ。仁義忠孝の道さへ立てば。物相飯の切米も。百萬石に。フシ優るぞや。地おのれが心只一つで驗は目前これを見よ。武士の命を斷つ。刄も多いに此樣な。引つそぎ竹の猪突鑓。主を殺したる天罰の報いは親にも此通りと。鑓の穗先に手をかけて扶り苦しむ氣丈の手負。妻は涙に咽せ返り。詞コレ見給へ光秀殿。地軍の首途にくれ〳〵もお諫め申した共時に。思ひ止つて給はらば斯うした歎きはあるまいに。知らぬ事とはいひながら現在母御を手にかけて。殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に善心に立歸ると。たつた一言聞かして給べ。拜むわいのと手を合し諫めつ泣いつ一筋に夫を思ふ恨み泣き。操の鏡曇りなき涙に　フシ誠あらはせり。地色光秀は聲あらゝげ。詞ヤア猪口才な諫言だて。無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる尾田春長。勿論三代相恩の主君でなく。我が諫めを用ひずして神社佛閣を破却し。惡逆日々に增長すれば。武門のならひ天下の爲。討取つたるは我が器量。武王は殷の紂王を討ち。北條義時は帝を流し奉る。和漢倶に無道の君を弑するは。民を安むる英傑の志。女童の知る事ならず。地退り居らうと光秀が。一心變ぜぬ勇氣の眼色。取付く。フシ島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓。耳をつらぬく金鼓の響あはやと見やる表ロ。數ケ所の手疵に血は瀧津瀨。刀を杖に蹌ぼひ〳〵。立歸つたる武智が一子。庭先に大息つぎ。詞親人これにおはするやと。地いふも苦しき斷末魔。見るに驚く母親より。娘は傍に走寄りなう痛はしや十次郎樣。ばゝ樣といひお前迄この有樣は情ない。お心慥かに持つて給べやいの〳〵と取付いて　スヱテ介抱如才。泣くばかり。地光秀わざと聲荒らげ。詞ヤア不覺なり十次郎。仔細は何と。樣子はいかに。具に語れと呼はれば。詞はつと心を取直し。詞親人の指圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎。濱手の方に陣所をかため。今や歸國と相待つ所に。地敵はそれとも白浪の。櫓を押切つて陸地に漕付け。詞追ひ〳〵都へ馳せ上る。眞柴の軍勢ござんなれと。地關をつくつて味方の軍兵縱橫無盡になぎ立つれば。不意を打たれて敵は敗亡。狼狽へ騷ぐを追立て。追詰め。こゝを先途と戰ふ内。後の方より大音上げ。眞柴筑前守久吉の家臣加藤

正清これにあり。逆賊武智が小童ども目に物見せてくれんずと。いふより早く太刀抜きかざし。四角八面に切立てられ。瞬く間に味方の軍卒。殘らず討死仕り。無念ながらも只一騎立歸つて候と フシ息繼ぎ。あへず物語れば。地光秀怒りの髪逆立ち。詞ヤア云ひがひなき味方の奴ばら。シテ四王天田島の頭は。さん候四王天は。目ざすは久吉一人と。昨朝よりの一騎がけ。亂軍なれば生死の程も。慥かにそれと承はらず。親人の御身の上心にかゝり候故。未練にも敵を切抜け。是迄落延び歸りしぞや。此所に御座あつては危ふし〳〵。一時も早く本國へ。引取り給へサ早く。〳〵と。地深手を屈せず爺親を。氣遣ふ孫の孝行心。聞くに老母はせきかねてアレあれを聞きや嫁女。其身の手疵は苦にもせず。極惡人の悴めを。大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀。子は不便にないか。可愛いとは思はぬかやい。おのれが只一つで。地いとし可愛いの初孫を忠と義心に健氣なる。討死でもさす事か。逆賊無道の名を穢し。殺すは何の因果ぞとせぐり苦しき老の身の。聲聞き付けて十次郎。詞ヤアそんなら祖母樣には。御生害遊ばしたか。今生のお暇乞。今一度お顏が見たけれど。もう目が見えぬ父上母樣初菊殿。地名殘惜しやと手を取つて。妹脊の別れ愛著の道に引かるゝいぢらしさ。母は涙に正體なく。討死するも武士の習ひといへど情ない。詞十八年の春秋を刄の中に人と成り。いつ樂しみの隙もなう弓矢の道に日をゆだね。今朝の首途の其時にも母樣今日の初陣に。適れ。高名手柄して。父上や祖母樣に譽めらるゝのが樂しみと。地につと笑うた其顏がわしや幻にちらついて得忘れぬと口說き立て。口說き立つれば初菊も。ほんに思へば此身程はかない者が世にあらうか。とけて逢ふ夜のきぬ〳〵も永き名殘の許嫁。二世を結ぶの枕さへ。かはす間もなう此樣な。悲しい別れをする事はマどうした罪か情ない。わたしも一所に殺してたべ死にたいわいなと身を悶え。互に手を取りかはし名殘り涙の暇乞。見るに目もくれ心消え母も老母も聲を上げわつとばかりに取亂せば。さすが勇氣の光秀も親の慈悲心子ゆゑの闇。輪廻の繩に締めつけられ堪へかねてはら〳〵〳〵雨か涙の。汐境 フシ浪立ち。騷ぐ如くなり。地色又も聞ゆる人馬の物音。矢叫びの聲喧く。オクリ手に取る。フシへ如く聞ゆれば。地色光秀聞くより突立ち上り。詞アノ物音は敵か味方か。勝利如何にと庭先の。詞すね木の松が枝踏みしめ〳〵よぢ登り。眼下の村手をきつと見下し。詞和田の岬の左手より追々つゞ

く數多の兵船。間近く立つたる魚鱗の備へ。千生瓢の馬印は。疑ひもなき眞柴久吉。風をくらつて此家を迯げ延び。手勢引具し光秀を討取る術と覺えたりと。地いふより早く。フシひらりと飛び下り。ソ地色草履摑みの猿面冠者。いで一挫ぎと身繕ひ。フシ勢ひ込んでかけ出せば。詞ヤア〱武智光秀暫く待て。眞柴筑前守久吉對面せんと呼はつて。地三衣に代る陣羽織。江戸小手臑當も優美の骨柄。フシ悠然として立出づれば。地光秀見るより仰天し。駈戻つてはつたと睨み。詞ヤア珍らしし眞柴久吉。武智十兵衛光秀が。此世の引導渡してくれん。觀念せよと。地詰寄る光秀。中を隔つる老鳥の。子故に手疵屈せぬ老女。なう久吉樣。詞我が子に代る此母も。天命遁れぬ引つそぎ鎗。作りし罪の萬分一亡ぶる事もあらうかと。思ひ餘つた此最期。武智が母は逆磔に。かゝつて無慙の死を遂げしと。末世の記錄に殘して給べ。地それもやつぱり悴めが。可愛さ故の罪亡し。詞うるさの娑婆に殘らんより。孫と一緒に死出三途。ハアわたしもお供致しまする。いづれもさらば。おさらばと。地未練殘さぬ武士の。花も實もある此世の別れ。フシ今ぞ果なくなりにけり。操の前も初菊も更に詞も出でばこそ。あへなき骸を押動かし天にあこがれ地に伏して歎く。心ぞいぢらしき。地色哀れを餘所に眞柴久吉。光秀に打向ひ。詞倶に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍。今此所で討取つては義あつて勇を失ふ道理。諸國の武士に久吉が軍功を知らさん爲。時日を移さず山崎にて。勝負の雌雄を決すべし ガいかにいかに。ヲヽ流石の久吉よくいうたり。我も惟任將軍と勅許を請けし身の本懷。一先づ都に立歸り京洛中の者どもへ。地子を赦すも母への追善。互の運は天王山。洞が峠に陣所を構へ。只一戰にかけ崩さん。首を洗つて觀念せよ。ホヽヽヽ何さ〱。たとへ項羽が勇ありとも。我又孫呉が祕術をふるひ。地千變萬化にかけ惱まし。勝鬨上ぐるは瞬く內と久吉が。詞は搖がぬ大磐石。忽ち廻り小栗栖の。土に哀れを殘すとは知らず知られぬ敵味方。睨み別るゝ コハリ 二人の勇者。ナホス 二世をかための別れの淚。かゝれとてしも タヽキカヽリ 烏羽玉の。其黑髮をあへなくも。切拂うたる尼が崎。菩提の種と夕顏の軒にきらめく千生瓢簞。駒の嘶き迎ひの軍卒見渡す。沖は中國より追ひ追ひ入來る數萬の兵船。威風凛々凛然たる。眞柴が武名假名書に。うつす繪本の太功記と末の。世までも ユリ三重 へ殘しけり

同　十一日の段

詞家來どもやい。彌〻明日は山崎にて晴軍。時に拔目ないは久吉殿。敵方の間者。又怪しき曲者もあらんかと。此赤山與三兵衛へ密々の申付け。汝等もゆかりなく。もしや怪しき者もあらば。男女に限らず搦め取つて。本陣へ差出せよ。褒美はきつと後日に御沙汰。必ずぬかるな合點かと。地牒し合せて主従は。フシハズミ左右へこそは別れ行く。地フシ身は世を忍ぶ。簑笠に。やつす姿も柵が。夫の詞守立し。主君の胤の音壽丸。いたはり傅き參らせて。心ならずも夜の道。オクリ流れに。傳ふ淀堤。フシ並木の陰に。立ち休らひ。詞ナウ和子。遙かの西に旗の手の。月に映じてきらめくは。山崎の御本陣。父上の御座所。地妾が夫政道殿も主君の御供。翌は早々光秀様に御對面。お嬉しうござりますかえ。詞ヲヽ嬉しい嬉しい。早うお父様に逢ひたいけれど。どうやら眠たい／＼と。地詞のうちに。フシふら／＼眠り。詞ヲヽお道理でござります。大切の密事を受けた俄の旅立ち。もしや敵の間者に出合ひ。御身の御難儀ありもやせんと。心は千々に誰あらう。地江州丹州兩國の御主。今では四海の御大將。惟任將軍の御公達。あまたの従者引きかへて。従ふ者はこの柵。杖柱とも思召す。御心根がおいとしほい。是といふのも父上の道に背きし御企て。たとへ望みは叶うても。勿體ない御主君の。春長様に刄を合し。主殺しの大罪と。世の口の端に情ない。それに連れたる我が夫も。倶に汚名を下すかと。思へば悲しい悲しいと人目なければ聲上げて。わつとばかりに伏沈む心ぞ。思ひやられたり立戻りたる赤山がそれと見るより相圖の呼子。友呼ぶ千鳥ばら／＼と。顯はれ出でし以前の組子。詞女め遣らぬと追つ取巻く。地驚きながらさすがの柵。音壽を圍うてすつくと立ち。詞ヤア心得ぬ人々の擧動。何者なるぞと咎むれば。赤山は大口あきヤア何者とは舌長し。主殺しの光秀が一子音壽丸。軍の幸先久吉公へ差出す。早く渡せと罵つたり。ホヽヽ、事可笑しや　光秀公の御内にて。人も知つたる松田太郎左衛門が女房柵。主なしの久吉殿。それに隨ふそち達が。及ばぬ事をと言はせも立てず。ソレ者どもと赤山が。下知に従ひ一度に。切つてかゝるを事ともせず。右と左に　三重へ薙立つれば。地口程にもなき雜人原むら／＼ばつと逃散つたり。隙を窺ひ後より。切込む赤山さそくの柵。ひらりとかはせば赤山が。首は前にぞ　フシ落ちにけり。サア／＼／＼此隙に音壽様。此場を早うと。

かひ〴〵しく忠義一途の女氣に。主君の若を伴ひて。定めなく〳〵短夜に。心。せかれて 三重 へ辿り行く

同　十二日の段

誰を戀ふ。フシカヽリ 鳴くや梢に。唐衣ほつてふ蟬の音を友と。地 世を厭うたる浪人の風雅を好む一構へ。フシ 谷の流れも水無月の。ヲクリ 空半ばなる フシ 夕暮れ時遠寺の鐘のかう〳〵と。豫ての願ひあり礒海。長地 深き思ひに柵が緣に寄邊の舅の住家そこ爰と辿りくる〳〵長齡稚子連れて夜の道。漸う尋ねあたりにも。家居なければ爰ならんと。フシ 柴の軒端に佇みて。詞 イヤなう音壽樣。夫松田太郎左衛門殿の指圖を請けて來事は來ても。つひに是迄音信もせぬ親御の所。どうやら敷居が高うなり。入りにくう思ひますと。地 いへば音壽が打ち點頭き。詞 そなたが得入らずば俺から先へ入つてやらうと。地 何の頑是も フシ 上り口。アヽコレ申しを機にして。はひる物音。何やらんと。納戸を出づる妻の眞弓。顔見合はして柵が手をもぢ〳〵と。詞 ホヽヽヽヽほんに私とした事が。いかに舅君の所ぢやとて案内なしに不作法千萬。お赦しなされて下さりませと。地 いへど此方は不審顔。詞 夜に入つて若い女中の子供をつれ。舅の所へ來たとは。此母は覺えはござらぬ。成程々々委細の譯を申さねば。さう思し召すも理りながら。私事は十三の時家出致されました。御子息宗太郎殿の女房柵と申す者。夫も今は歷きとした侍。名も改めて松田太郎左衛門と申しまして。それは〳〵適れの武士。どうぞこれ迄の事は川へ流し。元の親子に。ヲヽそりや云はしやれいでも知れた事。元より氣に違うて家出したと云ふでもなし。生れ付いて力强。草深い住居をきらひ。我と我が手に家出した宗太郎。わしは明暮れ焦れて居ます。そして連れてわせたは夫婦の中に出來た子か。地 マア〳〵此方へと嬉しさの。子には目のない母親が。フシカヽリ 悅ぶ中へ宗左衛門。刀片手に步み出で。詞 お婆何をべり〳〵お言やるぞ。親を見捨てた不孝の忰。それに連添ふ此女郎嫁なんぞとは穢らはしい。地 早や立ち歸れとつかうどに。いふを押へて。詞 アヽコレそれは一途な思ひ樣。每日々々壁訴訟。願ひの折も幸ひと。地 始めて逢うた嫁の手前。どうぞ了簡し中直りして下されと。フシ いふも淚の種ならん。詞 エヽ又しても〳〵役に立たぬ忰が訴訟。聞きたくないぞ。よい年をして女房去るも世間の笑ひ。暇の代りぢや向後物は言はんずく。早く奧へお行きやれと。地 常の氣質の情剛に。詞はなくてしを〳〵と

心。オクリ へ殘して立つて入る。地色 柵は氣の毒の中に願ひも言兼ねて。俄に作る。フシ 輕薄笑ひ。詞 ホヽヽほんにまあよしない事から御夫婦のお諍ひ。もうお腹立ちは重々の御尤もぢやがどうぞ夫の願ひ。則ち此子は主人と仰ぐ光秀公の御公達音壽丸樣。地 それに付いての御訴訟と何か樣子は白紙に。書き認めし願ひの一書。フシ 舅の前にさし置けば。地色 さすが骨肉同胞の我が子の手跡と澁々ながら。手に取上げて押開けば。樣子いかゞと氣遣ふ嫁。舅は猶も眉を顰めつぶ〲讀むも口の中。巻納めてにつこと笑ひ。詞 何事ならんと思ひしに。少しばかりは侍臭い所もあり出かす〲。そんなら夫のお願ひと申しますは。成程大切の密事。其方は知るまい〲。悴が我への願ひといふはコヽ此小兒。光秀此度當山崎に於て。合戰の挑むといへども無名の軍。元より主殺しといふ大罪。天何ぞこれを救さん然らば十が九つ負軍と推量つたる悴太郎。さるによつて。光秀が一子音壽丸我に養育を頼み。成長の後は出家ともなしくれよとの願書また柵事は敵方森尾茂助が妹に候へばこれも親が手より返し遣しくれよとある悴が文面と聞いて恟り柵は膝摺寄つて。詞 ムヽスリヤ主君の若殿お預け申さん其爲にお詫びの使一つには私が身の上兄樣へ返してくれとは何の事。さういふ事とは露知らず舅御樣へお詫びして。嫁よ如何せい斯うせいのお詞受けて歸りなば。夫の悦び此身の手柄と悦んでゐるものを科もない身を去らうとは。聞えぬ夫の心やと。スヱテ 口說き歎くぞ道理なり。詞 ハテさて何も歎くにや及ばぬ此宗左衛門も元は武士。亂れたる世を遁れ。心を澄す茶道の樂しみ。折々は久吉殿の招きに預り咄の伽。弓も引き方眞柴へ心通はす某。大惡無道の光秀が種とあれば願うてもないよき得物。首打放し久吉公へ獻ずるならばさぞ悦び。ハテ飛んで火に入る夏の虫とは是ならんと。地 舅の一言柵が聞くより又も二度恟り。詞 ほんに〲親子とて餘りな情知らず獵人さへ懷へ入る鳥は助けるものたとへ此身は去られても。夫に立つる心の潔白女でこそあれ松田が女房。主人の若殿滅多にお首は得渡さぬ。斯ういふ内に片時も置きます事はなりませぬ。申し若殿樣。地 いざさせ給へと立寄るを。突退け〲音壽丸小脇に引抱きはつたと睨み。詞 ヤア龍の腮にかゝりし小悴。連歸らんとは叶はぬ事。惡く妨げひろぐや否や。身の爲にならぬがや。ヲヽ元より夫に去られし此身。生きて詮なき我が命。ちつとも厭はぬ〲と。地 又立掛かるをシヤ面倒なと眞の當て吭と倒るゝ其隙に奧の間さ

して　フシ駈け入つたり。跡には一人栅が苦痛堪へて起直り。詞チエ、胴欲とも惨いとも何に譬へん舅君。地何辨へも七つ子のお首を敵に渡さうとは。心は鬼か蛇かいのう。たとへ此身はひし〳〵ほに成るとても。取返さいで置くべきかと。心を配る緣先に。落散る一書は夫の手跡。詞栅殿へ光高より。スリヤ最前の文の中に封じ込めたる此一書心ならずと封押切り。詞書殘す一書の事。ヤア〳〵そんなら夫太郎左衛門殿は討死の覺悟であつたか。ハア。何にもせよと又取上げ。ナニナニ今度の合戰主君光秀公主殺しといふ惡名。其罪遁るゝ事あるまじく覺え候故其方を賴み親人へ若殿の儀くれ〴〵相賴む事に候。又々明朝の戰ひに向ひ候敵は其方が兄森尾茂助春久に候よし。元より討死の覺悟に候へば。我等が首は春久へ遣はし候。なれ共妹の緣につれ。用捨も候はゞ武門の中恥づべき事に候へば是非なく暇遣はし候段。必ず恨みあるまじく候と。地讀みも終らず立上り。詞こりや斯うしては居られぬわいのう。夫の最期は此曉。若殿の御身の上奧へ踏込み取返さうかイヤ〳〵〳〵。あれ〳〵あの鐘は八つの鐘。天王山へは一里の餘。夫の命も助けたし。地こりやマアどうせう〳〵と。主と夫の身の上を。我が身一人に栅が。立つたり居たり詮方も。涙ながらに氣を取直し。詞何にもせよこれより直に天王山へ駈付けて夫に一言さうぢや〳〵と。帶引締め。常には弱き女氣も夫に立つる貞心の。曇らぬ鏡照る月に照らす道筋逸散にこけつ轉びつ。三重へ慕ひ行く。地山は血汐の唐紅。敵も味方も入亂れ。戰ひ挑む其中に。森尾松田が雌雄の爭ひ。人混もせずはつし〳〵。切結びたる電光の。刄の光飛鳥のごとく。フシ鎬を削る共折しも。夫の生死いかゞぞと。氣は張弓の女房栅。武家の育ちの甲斐々々しく。夫を思ふ一心に。木の根岩角厭ひなく登る。嶮岨も力草。足踏みしめて難なくも。此方の岡に攀登り。それと見るより分入つて。マア〳〵待つても身を惜まず。支ゆる女房突退けて。猶も付入る太郎左衛門。互に劣らぬ勇將猛將。中にうろ〳〵詮方も。渚の小舟栅が。フシ浪に漂ふ其風情。地色心も切に有合ふ楯。切結びたる白刄のしづ。しつかととゞめ。詞マア〳〵待つて下さんせ。コレ兄樣茂介殿。必ず早まつて下さんすな。もとより知れた敵味方。討ち討たるゝは武士の。身の常とは知つて居ますれど。地相手も多いに姻同士。切つつはつつの爭ひを。何と見捨て置かれうぞ。思ひ止つて〳〵と。歎き喞つを耳にもかけず。詞ヤア義晴何を猶豫。內證の緣は

緣。親子兄弟敵々と。鎬を削るは武門の常。早く勝負を決せよと。地云はせも果てずにつこと笑ひ。詞死人同然の政道わが相手には不足なり。光秀が先途を見屆け死ぬるとも遲かるまじ。妹が止むるを幸ひ。此場を早く退けと。地聞くよりくわつと急立ち。詞ヤア奇怪なる一言。弓矢取つては誰に恥づべき事やあらん。女房が兄とはいはさぬ。首討ち取つては修羅の奴となしくれんに。死人同然とは案外なりと居丈高。イヤモ如何樣に陳ずるとも。死色を顯はす汝が骨格。我に討たれん心の覺悟。死人といひしが誤りかと。地明察違はぬ一言は。胸に盤石現とも。心は闇の柵が。聲も涙に掻曇り。兄樣のあの心ならどの樣に思はしやんしても。所詮死なれぬお前の命。どうぞ死なずに濟む事なら。千年も。萬年も長生きして。二人の中の。サア二人が中に預かつた。地主人のお胤音壽樣の。行末も御無事な樣に思案して下さりませコレ申し。夫婦となつて以來に願ひといふは是一つ聞屆けて給べ我が夫と。妹が歎きさすがにも。血脈の糸の亂れ口。涙呑込む義晴が フシ心の内ぞ切なけれ。詞何思ひけん太郎左衛門。鎧脱ぎ捨てどつかと坐し。詞實にや名將の下に弱兵なしと。適れ眼力森尾義晴。主家の無道を見限りて。死出三途の先陣と。覺悟極めし心は鐵石。死後に賴むは此女。地色又これ迄音信せざれども。實父松田利休殿へ。預け置いたるかの若殿。詞心を添へてよき樣に。賴み置くは貴殿一人。最早浮世に望なし急ぎ首討ち我が存心。立てさしくるゝも武士の情。猶豫は却て恨むぞと。地いふより早く持つたる刀腹にがはと突立つれば。なう悲しやと取縋り。歎く女房を取つて引据ゑ。詞サア森尾。名もなき士卒の手に掛けんより。武士の情に我が首を。受取りくれよと差付くれば。ハヽ世の有樣とは言ひながら。地かばかり惜しき弓取も。主家の惡事は其身の不幸。殘念至極と義晴が。是非も涙に立廻れば。ヤア愚か〳〵。死に臨むは勇者の本義。骸は廣野に曝すとも。名は千歲に留まるこそ。死しての悅び此上なし早く。地早くと唱名の。聲は此世の別れかと。身をもむ妻を動かさず。膝に引敷く强氣の手負ひ。義晴いざと潔き。勇者の最期あへなくも フシ首は前にぞ落ちにけり。地色わつとばかりに柵は。其儘死骸にいだき付き聲も惜まず泣き叫ぶ。心を察し諸袖を絞るも血筋恩愛の フシ涙に。變りなかりける。地義晴は涙を拂ひ。詞ヤア〳〵妹。歎いて返らぬ松田が最期。遺言守るは音壽が身の上。又この首はそち持歸り。佛事もよきにと 地詞の中。麓の方にえい

えい聲。響き靡ける雨陣の。フシ入亂れたる鬨の聲。地身にぞこたゆる柵が涙ながらに亡夫の。タヽキしるしの筐上帶に。包むも涙雨やさめ。ふり行く末の末までも。思ひつゞけし敵味方。兄の忠臣妹が。貞心くもり泣く／＼も麓の。方へ。三重へたどり行く。短夜の。風吹拂ふ庭の面隈なき月もあはれ添へ。涙の露かいたいけに。無慚なるかや稚子の。目は泣きはらし。袖摺の。其松が枝に。フシ絡まるゝ。地妻の眞弓は差寄つて。詞ナウ利休殿尤も武智光秀といふ。逆賊の子とはいひながら。我が子の爲にはお主の若殿。手にかけうとは胴欲な。地どうぞお命助ける樣。思案しかへて下さりませとスエカヽリいへども。更に答なく。おのが好めるフシ薄茶の手前。地稚子は座をしめて。詞おりや侍の子ぢやによつて何ともない。早う殺して下されと。地いひ放したる健氣さを。聞くに眞弓は堪へかねて。詞アヽさすがは武士の育てがら。聞分けよい程尙不便な。コレいぢらしうはござらぬか敵と味方と分登る道は二つにかはれども。同じ雲井に。照る月の分隔なき恩愛と。情の道を辨へてどうぞ命を助けるやう。思案して給べ我が夫と。詞を盡し理をせめてフシ涙ながらに泣き詫ぶる地色山手は修羅の攻鼓時しも遙かに谺して。松田太郎左衞門政道を森尾義晴討取つたりと。聞くより思はずすつくと立ち。スリヤ悴宗太郎は早や討死を遂げしとな。此上は生け置いて詮なき音壽。此世の暇取らせんと。地解く縛め悅んでフシ手そゝぶりする有樣を。地見るに心は弱れども。四海の怨敵。根を斷つて枯らす枝葉と拔放す。なう痛はしやと支ゆる眞弓。寄るを寄せじと引戻しフシ爭ふ折も柵が。背に夫の切首を結ぶ妹脊の別れ道脛もあらはにフシかけ戻り。地此體見るより稚子を後に圍ひマア待つてと。言はせも立てず聲荒らげ。詞ヤア此期に及び聞く事ない。悴討死せし上は天王山を取切られ。光秀が敗軍も目下妨げせずとそこ退けと。地尖き刄振翳す。其手に取付き聲震はし。詞コレ親父殿。慈悲も情も辨へながら。始めて逢うた嫁の思はく。生きとし生ける身ではなし。地先立つ老木若木の咎。どうぞ助けて進ぜてと。涙に誠姑が。情の詞身に餘り有難涙柵が。夫の首を抱き上げ。亡き我が夫も諸共に命のお詫とさし付けられ。さすが剛氣の利休も。親子の輪廻に引かされて。撓む心を取直し。じりゝ／＼と付廻す。地獄の呵責三惡道。シヤ面倒なと突退け蹴退け。エイと一聲稚首水もたまらず打落せば。二人はわつと泣き倒れスヱテ正體。もなく伏沈む。詞主殺しの大

罪。報いも早き此死様。いで久吉の本陣へと。地駈出す裾を止むる嫁。はつたと蹴飛ばし駈行く向うへ許多の軍卒。高提灯に威風を照らし。靜々入來る眞柴久吉。あたり輝く陣装束。思ひ寄らねば宗左衛門フシ遙か退つて平伏し。詞コハぞんじ寄らざる公の御入來。只今陣所へ推參の所。願うてもなき對顔と。敬ひ深く相述ぶれば。地久吉莞爾と打笑みて。詞逆賊光秀が一子音壽丸。足下扶助致さる由。家臣森尾が密事の注進。急ぎ討手と申すも餘り仰々しく。久吉密かに向うたり。いかに／＼と嚴然たる。地詞に猶も恐れ入り。詞ハヽ、討らず手に入る武智が悴。討取つたるは某が。信義を忘れぬ豫ての交り。イザ御改め下さるべしと。地血汐を淸め差し出せば。久吉とつくと實檢あり。詞父光秀も此如く。やがて討取る主君の怨敵。とは云ふものの稚き者。不便の

最期遂げたるよな。イヤナニ宗左衛門。云はば小兒の此切首。梟木にさらすにも及ぶまじ。由緣の方へサ葬り召され。御邊への恩賞は。風雅を好める別業へ。思ひ寄つたる寸志の一品。それ／＼者ども早やこれへと。地仰せの下に雜兵ども。フシ庭にどつさり一つの居石。詞何と宗左見られしか。亡君春長公の御自服とも思されて。お請けあらば拙者が悦び。スリヤ其石を某へ。いかにも。小袖代りの小袖石。菖蒲にも。あらぬ眞菰を引きかけし。かりの淀野の忘られぬかな。ヲヽさらば。地／＼と一禮し。從者引連れ久吉はオクリカヽリ本陣さしてフシ歸らるゝ。地色跡見送つて宗左衛門ほつと吐く息も突詰めし女心の柵は何思ひけん妻の方。駈出す戸口立切る利休ヤレ待て女。詞音壽丸が身代りに二人が中の悴を殺し。それが最期の忠義も立ち。さぞ本望であらうな

と。地聞いて悔り。詞ムウそんなら此子を初めから。あなたの孫といふ事を。ヲヲ十六年が其間。對面せざる我が悴。たとへ幾年經るとても。骨肉分けし此親が。見忘れてよいものか。音壽丸に出立たせ。連れ來りし稚子の。面ざし目元鼻筋まで。悴に其儘生寫し。地その時孫とは。フシ知つたるぞや。地とは云ひながら。現在の祖父が手にかけ一刀の。下に消え行く不便さを。こらゆる心の四苦八苦。コリヤ。推量せよと大聲上げ。取亂したる溜涙。眠れる如き死首を。右と左に打守り。詞コリヤ悴。久々にてよく來たなア。十六年が夢の內。忠孝全き親子が最期。地ヲヽ出かしをつたと一言が。夫子の爲の經陀羅尼と。有がた涙柵が。袖に露置く嘆言。詞さうしたあなたのお心と知らで恨みし不孝の罪。お赦しなされて下さりませ。アヽその詫言は此母が。

云はねばならぬ此場の時宜。地孫と我が子の死ぬるのを。それと白髪の身の因果。惨い者ぢやとさげしんで。たもるなやいのと姑が。詫ぶるも涙聞く涙。詞ア勿體ない事おつしやつて下さりますな。地嫁と名ばかり是迄にお宮仕へもする事か。逆様事を見せまする。不孝の罪が恐しい。とはいふものゝ味氣ない。二世と契りし我が夫の。最期の場所に居ながらも止める事さへ情ない。いとし可愛いの千石迄人も多いに祖父様の。お手にかけうと親の身で連れて來事は何事ぞと。歎けばさすが利休も。恩愛死別の憂き涙二つの首を見つ見せつ。取亂したる三人が。涙の雨に水嵩のいとゞ増さりて淀川の堤も。崩るゝ。フシ如くなり。地利休漸う涙を押へ。詞悴が忠義を立てさせんと信義を失ふ我が計ひ。天地を見抜く久吉殿。賜物もあるべきに。小袖にかへて遣はす

と心得ぬ庭の居石。其上猶も不審なるは。金葉集に載せられし相模が詠歌。菖蒲にも。あらぬ眞菰を引きかけしと。引きぞ煩ふ賴政が深意を取れば千石が。最期を花によそへし謎。悴が子袖千石と。心を込めし我への賜物。今こそ思ひ當つたりと 地悟るもさすが久吉の。フシ明智を感ずるばかりなり。地柵は膝摺寄せ。詞スリヤ身代りといふ事を。そんなら孫の千石が。身代りに立てたのも。水の泡になりますかいのう。ヤアかねがね。敵を惠む寛仁大度。猶も願ひを立てんと思はゞ。此利休が皺腹一つ。必ず止めなと 地差添を。既に拔かんとする所。フシ放せ〳〵と爭ひの。地色折もこそあれ一間より。詞ヤア〳〵松田宗左衛門利休殿。狼狽への犬死なるか 地早まられなと聲をかけ。障子をさつと眞柴久吉。しづし

づと立出づれば。思ひ寄らねど騷がぬ利休。詞ヤア犬死とは事をかしや。誠眞の失せし某が既に報ふ此切腹。ホヽさすがは老體。斯くもあらんと察せし故。陣所へ歸る體に見せ。とくより忍び窺ひ聞く。西國の探題たる眞柴久吉。實檢遂げし光秀が一子。天地廣しといへども今一人とあるべきか。主君を弑せし武智光秀。それに引きかへ子息政道。討死遂げしは適れ勇者。地せめては死したる人々の菩提の爲に此所へ。庵を結び利休殿。詞好める道の茶を以て。往來の人に施さば。死するにまさる節義ならんと 地情の一句は則ち悟道。死をとゞまつて松田利休。詞ハヽ惠みも厚き御仰せ。敎への心は卽菩提。心の濁り墨染の。衣がはりはコレ此居士衣。地くもりを拂ふ誓ひぞと 髻ふつゝと押切つて。詞姿心も變る世に我は茶道の道廣く。孫が其名の一字

を取り。利休を其儘に千の利休と改名し。地浮世の塵に交はるとも只本覺の佛性たらん。詞ホヽヽヽ天性備はる千の利休。今よりは久吉が則ち茶道の師と賴まんと。地約束かたき小袖石。庭に哀れは稚子の。涙の種か袖すり松古跡となりて末の世に。殘る其名の因緣は。フシ此時よりと知られたり。地色かゝる折しも眞柴の郎等。庭上に大息つぎ。フシ御注進と呼はれば。詞ホヽ堀本義太夫。味方の勝利はなんと〳〵。ハア。仰せの如く備へを立て。兩陣互に鎬を削り。爰を先途と戰ふ中。地敵の勇將蟹江才藏。陣頭に躍り出で。詞味方の諸軍を手玉の如く打付け。地投付け駈廻る。其勢ひに怯ぢ恐れ。少したゆみて見えたる所に。詞福島の陣中より。至つて小兵の桂市兵衛。斯くと見るより飛びかゝり。地互に組み合ふ金剛力者。六尺豊かの才藏を。難なく生捕り古今の手柄。勝つ色見する間もなく。川を隔てし筒井順慶。時分はよしと光秀が陣所を目がけ無二無三。一手になつて攻めかくれば。敵は敗亡狼狽へ騷ぎ。崩れ立つたる其虛に乘つて。追つ立てぼつ詰め攻付くれば。是迄なりと光秀も馬を飛ばして只一騎。小栗栖さして落延びしを追々駈行く味方の勝利。御歸陣あつて然るべしと。フシ悦び勇み訴ふれば。詞ヲ潔し〳〵。イザ小栗栖へ後詰めせん。地かた〴〵用意と久吉の。詞にはつと迎ひの軍兵 フシいざ御歸陣と引居ゆる。駒にゆらりと法の緣。結ぶ一世と二世の緣。切つて捨てたる亡魂の。しるしを直ぐに野邊送り。又思ひ出す。女氣に涙の袖や鎧の袖。旭に映じきら〳〵〳〵。綺羅一天に刈取る眞柴。仁德なりや風雅の德。忠孝全き其德を世々に。傳へて三重へ美嘆せり

同　十三日段

地神力勇者に勝たずと雖も。天逆にこれを罰す。されば武智十兵衞光秀。筒井順慶が裏切りによつて山崎の一戰破れ。漸う遁れ小栗栖の フシ藪陰近くさしかゝれば。地追ひ〳〵駈來る眞柴方。ソリヤ落人よ遁すなと。喚き叫んで切りかゝれば。詞シヤ猪口才な蛆虫ども。冥途の導きしてくれんと。地振りかざしたる刀の稻妻。閃く内に先手の軍兵。十二三騎切つて落せし勇猛力。叶はぬ赦せと一同に。嵐に誘ふ端武者ども。フシむら〳〵ばつと迯失せたり。地相人なければ光秀は太刀のいきりを冷さんと。藪の小陰に手綱を控へ。傾く運の口惜し涙。鎧の袖にはら〳〵〳〵。降りかゝりたる夕立の フシ空も哀れや添へぬらん。地折ふし藪の此方より。たゆみ佇む光秀が鎧の

透間を見極めて。ぐつと突込む猪突鑓。驚きながら切拂ふ。間もなく突出す竹鑓の。穂先は風の篠薄。なぎ立て突立て切拂ひ暫し時をぞ移しける。地梢にすだく蟬の經。手向となりし武智光秀。小手定まらぬ竹鑓を。身の毛の如く刺通され。流るゝ血汐に夏草を花と染めなす紅の。田畑畔道刀を杖。蹌ぽひ蹌ぽふ無慙の有樣。ほつと一息撞出す鐘寂滅爲樂。コハリ攻太鼓。修羅の迎ひの百姓ども。集り寄つたる一むら雀又。突きかゝる上段下段。一世の瀬戸と受流し。爰を。先途と切防ぐ。地手練の鉾先百姓ども。叶はぬ赦せと我先に ハズミフシ跡をも見ずして迯げ散つたり。地遁さじものと駈出し。心は彌猛とはやれども身體勞れどつかと坐し。拳貫く無念の歯がみ弱る心を取直し。詞一元に歸す此世の暇。地刀逆手に我が腹へがはと突立て。フシ引廻す。地程なく來たる眞柴久吉。萬里に羽うつ大鵬の。威勢は旭の昇るが如く。悠々然と歩み寄り。詞いかに光秀主を討つたる天罰の報いを思ひ知つたるかと。地太刀抜放し光秀が首をはつしと打落し諸軍に向ひ聲高く。詞ヤア〳〵者ども。此虚に乘つて敵の殘黨左馬之助光俊。齋藤內藏之助が備へを暫時に攻め崩し。名に近江路の湖へ一騎も殘らず追ひ沈めん。方々來れと先に立ち。勇み進んで凱歌の聲。箙を叩き凱陣の。其悦びを今爰に。うつすも勸善懲惡の端ともなれとまさな言書き納めたる君が代の。萬々歳の壽は中々申すも愚かなれ

寛政十一年未七月十二日

當豊竹 東竹田 兩座兼帶

作者　近松やなぎ
近松湖水軒
近松千葉軒

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月四日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第七卷
淨瑠璃名作集　下
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿九卷 書目豫定一覽

附錄 枯尾花○芭蕉翁行狀記○全傳○芭蕉翁繪詞傳○年譜

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

○好色一代男○好色二代男○好色三代男○好色一代女○好色五人女○男色大鑑○武道傳來記○武家義理物語○新可笑記○西鶴諸國咄○懷硯○近代艶隱者○日本永代藏○世間胸算用○織留○本朝二十不孝○本朝櫻陰比事○西鶴置土產○萬の文反古○名殘の友○俗つれづれ○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

正篇 ○俳句集 芭蕉句選・句選拾遺・補遺 ○連句集 江戸兩吟集・江戸三吟・次韻・俳諧集・補遺 ○俳文集 文集・補遺 ○評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・初懷紙評註・續の原 ○紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更級紀行・奧の細道・嵯峨日記 ○書簡集 消息集・眞蹟集・補遺 ○語錄集 葛の松原・去來抄・三冊子・山中問答

外篇 ○虛栗○冬の日○蛙合○春の日○鶴の步○曠野○其袋○瓢○猿簑○深川集○炭俵○別座敷○笈日記○續猿簑○韻塞○小文庫

第四卷 第五卷 近松名作集 上（第二回配本濟） 下（第六回配本濟）

○上卷二十六篇・下卷二十四篇

第六卷 第七卷 淨瑠璃名作集 上（第十四回配本濟） 下（第廿三回配本濟）

○上卷二十二篇・下卷十九篇

第八卷 歌舞伎脚本集（第十九回配本濟）

○十二篇

第九卷 浮世草子集（第十六回配本濟）

○十篇

第十卷 怪談名作集（第十二回配本濟）

○十一篇

第十一巻 **黄表紙廿五種**（第一回配本濟）

第十二巻 **洒落本集**

○百花評林○異素六帖○聖遊廓○月花餘情○遊子方言○辰巳之園○當世氣どり草○妓子呼子鳥○婦美車紫鹿○深川新話○道中粋語錄○大通多名於呂志○愚人贅漢居續雁金○狂訓彙軌本紀○和唐珍解○令子洞房○通言總籬○田舍芝居○傾城買二筋道○田舍談義○女郎買棣味噌汁○娼妓絹籭○錦の裏○仕懸文庫○辰巳婦言○讃極史○籬の花○廓宇久爲壽○河東方言箱まくら○色深狭睡夢○新潟後の月見○金鄉春夕榮○和歌始衣抄○古契三娼

第十三巻 **讀本集**（第七回配本濟）

○七篇

第十四巻 **滑稽本集**（第三回配本濟）

○二十五篇

第十五巻 **人情本集**（第廿一回配本濟）

○七篇

第十六巻 **南總里見八犬傳** 上（第四回配本濟）
第十七巻 中（第九回配本濟）
第十八巻 下（第十七回配本濟）

第十九巻 **狂文狂歌集**

○曉月坊酒百首○世の中百首○雄長老狂歌集○貞德狂歌百首○吾吟我集○古今夷曲集○後巽夷曲集○狂歌うた合○卜養狂歌集○狂歌鳩の枝○貞柳全集○明和十五番狂歌合○狂歌若葉集○狂歌万載集○德和歌後万載集○狂歌才藏集○四方の留槽○吾妻なまり

第廿巻 **偐紫田舍源氏** 上（第五回配本濟）
第廿一巻 下（第十五回配本濟）

第廿二巻 **膝栗毛其他** 上（第十回配本濟）
第廿三巻 下（第十一回配本濟）

○五篇

第廿四巻 **和文和歌集** 上（第十三回配本濟）
第廿五巻 下（第二十回配本濟）

○二十一篇

第廿六巻 **川柳雜俳集**（第八回配本濟）

○四篇

第廿七巻 **俳文俳句集**（第廿二回配本濟）

○三十三篇

第廿八巻　歌謡音曲集

義太夫（近松名作集及浄瑠璃名作集と重複するものは之に採らず）○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の巻 酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻 鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻 帯屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻 新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目 揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目 志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中砦の段）○蝶花形名歌島臺（八の切 小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切 道春館の段）○八陣守護城（八の切 正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切 小四郎切腹の段）○鎌倉三代記（七の切 三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切 草履打の段）○太平記忠臣講譯（七つ目 喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切 碁立の段）

河東節　○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○ぬれ扇○炎すゑ嚴の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○亂髮夜編笠○助六所縁江戸櫻○常陸帶花柵○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

一中節　○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○壘繪の鳥臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鶏合

常磐津節　○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦○積戀雪關扉○四天王大江山入○兩顔月姿繪○戻駕色相肩○帶文桂川水○倭假名色七文字○壽靱猿○松色操高砂○再夕暮雨の鉢木○寄罠娼釣髭○後之月酒宴島臺○恩愛瞳關守○願絲織苧環○忍寄戀曲者○花舞臺霞猿曳○薪負雪間の市川○乘合船惠方萬歳○其扇屋浮名戀風○景清○勢獅子劇花籠○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章○大森彥七

富本節　○年朝嘉例壽○四十八手戀所譯○百夜菊色の世中　○夫婦酒替ぬ中仲　○其俤淺間嶽○道行戀飛脚○[illegible]連理橋○新曲高尾懺悔○花川戸身替の段○春夜障子梅○新曲かぐら獅子○徒髮戀曲物○茂懺悔睦言○道行念玉蔓○幾菊蝶初道行○拙筆力七以呂波○草枕露の音玉歌和○奈須野○御代榮益穂富種○高砂女夫

清元節　○梅の春○榮能春延壽○北州千歳壽○四季三葉草○其小唄夢廓○絲の五月雨○深山櫻及兼樹振○御名殘押繪交張○月雪花名殘文臺○詠梅松清元○色山彩深川○大和い手向五字○色彩間苅豆○法花姿色同○月花茲友鳥○筐花手向橋○復新三組盞○道行浮塒鷗○道行旅路の嫁入○六歌僊容彩○彌生の花淺草祭○おどけ

俄煮珠取○道行旅路の花聟○再春菘種蒔○初霞淺間嶽○メ能色相圖○造鈥菊睦言○菊嬉閏睦言○倭假名色七文字○重褄閏の小夜衣○明烏花濡衣○梅柳中宵月○日月星晝夜の織分○初櫓噂高島○貸浴衣汗雷○忍逢春雪解○色増艶夕映○花雲助相肩○青海波○助六曲輪菊

新内節 ○二重衣戀占○若木仇名草○千日寺名殘鐘○眞夢血染抱柏○歸咲名殘の命毛○傾城音羽瀧○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪○明烏後眞夢○累身賣の段

薗八節 ○道行相合巨燵○桂川戀の柵○鳥邊山○花街の色糸○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿○道行緣花房○口舌八景○小春治兵衞巨燵の段○夕霧

江戸長唄(めりやす大薩摩を含む) ○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子○二人椀久○英獅子亂曲○百千鳥娘道成寺○高尾さんげの段○天人羽衣京鹿子娘道成寺○英執着獅子○風流妹脊の杜建○門出京人形○亂菊枕慈童○鐘入解脫衣○劒烏帽子照葉盞○柳雛諸鳥囀○初吹法樂舞○ねこのつま○乘掛情の夏小立○鞭櫻字佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町○春調娘七種○童子戯面被○衣かづき思破車○童獅子○敎草吉原雀○相生獅子○嫐染分紅葉○隈取安宅松○御代松子日初戀○其容形七枚起請○關東小六後雛形○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形○三重霞嬉敷顏鳥○舞扇蘭生梅○濱松風戀歌○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪○遲櫻手爾葉七字○戀男調松風○再春菘種蒔○戀罠奇掛台○四季詠寄三大字○閏玆姿八景○正札附根元草摺○寄三津再十二支○其九繪彩四季櫻○新獅子○三升猿曲舞○石橋○老松○不動○七所御攝初鐵漿○大和い手向五字○外記猿○復新三組盞○廓三番叟○歌へす〲餘大津畫○月雪花蒔繩の戹○拙筆力七以呂波○八重霞賤機帶○後の月酒宴島臺○御歳玉海老手遊○吾妻八けい○六歌仙容彩○姿花後雛形○初子日○俄獅子○外記の傀儡師○初しぐれ○巽八景○花翫曆色所八景○勸進張○花兄弟十二月所作○島臺○軒端松○士農工商○秋色種○舞鶴三番叟○花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴龜○五色の絲○今樣小鍜冶○柳糸引御攝○壽○鞍馬山○翁千歳三番叟○廓丹前○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅子○時雨西行

歌澤 寅派、芝派の歌詞を全部收める。

小唄・端唄・雜曲集 江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷 謠曲三百五十番集（第十八回配本濟）

（終）



